えっ、その種って……おいしいの？

綺羅鷺肇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
えっ、その種って……おいしいの？

【Ｎコード】
Ｎ９８５０Ｊ

【作者名】
綺羅鷺肇

【あらすじ】
主人公が気がついたら、赤ん坊になって天井を見上げていた。
そんな風に訳もわからず、唐突にはじまった新たな現世を、唐突に終わった前世に未練を残しつつ、主人公は健気（？）に歩み始める。
だが、その生き行く先には、世界を巻き込む動乱の時代が待ち受けていたのだった。

01　転生？∪憑依？　困惑＋羞恥（C．E．47年）（前書き）

この小説は機動戦士ガンダムＳＥＥＤの二次創作です。
ファンフィクションを認めない方、原作こそが神である方、他人の妄想に付き合いたくない方は御注意ください。

01　転生？∪憑依？　困惑＋羞恥（C．E．47年）

OK、とりあえず、少し落ち着こう。

……うん、この際だから、まずは目に見えることだけを受け入れよう。

とりあえず、知らない天井がそこにあるんだから、言う事は一つだけだ。

「あばばぶぶぶぶぶぅ（知らない天井だ）」

凹（おう）、言葉が……。

……。

残念なことに、お約束は果たせなかったが、現状を認識する切欠とはなったな、うん。

まず、先程のお約束の言葉どおりに、今、俺の視野に入る天井は俺の知るもの、つまりは自宅のものではない。

ついでに言うと、状況の確認をするためにもっとも手っ取り早い手段である、視覚情報はほぼ、天井で固定化されている。

……だって、首、動かないんだもん。

う、うへぇ、自分でもなんだが、だもん、って……。

キモチワルイ。

……。

と、とにかく、何でかはわからんが、身体は自分の思い通りに動かないし、声もさっきやった通り、上手く発声できない。

っていうか、今の声って、どう考えても、アレ、だよなぁ。

うんうん、おかしいなって思ったんだよなぁ。

……。

だぁぁぁぁぁぁぁ！

いったい、これはどういうことだっ！？

昨日っ！

俺はっ！

確かにっ！

何時もと同じようにっ！

倒れ込むようにっ！

自室の布団でっ！

眠りについたはずだっ！

そう、深夜遅くというか日を跨ぐ連勤が、”えっ、労働基準法？何それ、オイシイの？”ってぐらいに続いて、同じく苦闘する中間管理職たる上司との激烈なやり取りの末、やっとのことでもぎ取った、そう！　やっとのことで奪い取ったっ！　久しぶりの休暇を明日に控え、喜びを胸に噛み締めながらっ！　そうっ！　喜びを噛み締めながら！　眠りについたはずだ！

なのにっ！

この状況は何だぁぁぁっ！？

「ふぎゃ、ふぎゃ、ふぎゃやややぁぁぁ！！」

後で、アレこそが魂の叫びと呼ばれるものだと思ったね。

まぁ、俺の大声を聞いたのか、血相を変えた女性……それがまた結構な美人で外人なお姉さんだった……が視界に飛び込んできて、いきなり、その大きな胸を露出して、目の前に差し出されたのには、非常に驚いた。

どれくらいかというと魂の叫びが途切れる位に……。

自然、俺の目は、新雪のような肌の、その形良い男の夢が詰め込まれた乳房と、ちょこんと自己主張をする桜色の乳首に目を奪われてしまう。

ふっ、俺は健全な男だっ！

この反応のどこが悪いっ！

「ほら、アイン、もう、大丈夫だよぉ。ほら、ごはん……お乳だよぉ」

だ、だけど、これから先の展開は、少し、否、かなり、キツイ。

……。

よ、要するに、大の男が、風俗でもないのにっ！

そう、風俗でもないのにっ！

その気もないのに、非情な羞恥プレイを強要されるんだぞ？

これ程の羞恥プレイがって、むぐぅっっ！？

――しばらくお待ちください――

新たな世界を切り開かんとする羞恥プレイ、もとい、三大欲求の一つである食欲を満たされた後、綺麗なお姉さんに抱っこされ、優しく背中を叩かれている俺は、満足げにゲップをしている。

べ、別にとっても暖かくて柔らかかったとか、つい、悪戯心を起こして、歯はないけど甘噛みしてしまい、色っぽい声をあげさせたとか、そんな展開はなかったからな、ほ、ほんとだぞっ！

というか、脳内で言い訳なんて、今の状況ではそんな馬鹿げたことを考えてる余裕はないはずなんだが……、何故か、この大いなる安心感に包まれていると、馬鹿なことを考えてしまう。

……本当に、この安心感は何だろう？

まるで、昔、幼稚園にもならない頃に、怖い夢を見て、母の布団に潜り込んだ時のような安心感は……。

……。

……母？

……。

いや、しかし……。

……だが。

ま、まさかなぁ、そんな冗談は……。

……。

そう、冗談だよな、うん、そうだよ、冗談は人間関係における重要な潤滑油だが、こういう場合は、ほどほどにしとかないとな。

まぁ、恐ろしい考察は破棄して封印。

でもって、綺麗なお姉さん、うん、ここ重要非常に重要、に抱き上げられて少し広がった視野は、やはり、俺の知っている自室とは大違いだった。

くっ、どうやら、ここが俺の知る場所ではないことは認めざるをえないようだ。

だが、俺が何故、こんな形で羞恥プレイを強要されているかの説明にはならない。

そもそも、大の男が何故にこの小さな器に収まってしまっているのか！

まったくもって、訳がわからないっ！

「ふぎぇ、（本当に）ふぎぁぇ、（説明をっ）ふげやぁぁぁぁぁ！！（要求するぅぅぅぅ）」

だが、俺の二度目の魂の叫びは、俺を抱いたお姉さんには通用しなかった。

「んふぅ。……あら、あらあら、今度はおトイレかしらねぇ」

ちょぉ、まっ……。

――しばらくお待ちください――

……。

一言で言うとな、換えられてしまった。

ついでに添えるとな、綺麗なお姉さんの艶やかな手で秘部を護る布が剥がされて、大事な所を曝され、ゆっくりじっくりまじまじと、見られてしまった。

しかも……。

「ぷふっ、……あらあら、まだまだ、ちっちゃくて、かわいいもの

なのねぇ。うふふ」

凹(おう)！　じーざす！

かみは、いずこっ！

なんて、いうか、じょう、きょう、を、はあく、する、まえ、に、こ、こ、ろ、が、お、れ、る。

……もう、だめ、ぽ。

きょ、うは、もう、ね、る。

「あら？　うふふ、おやすみなさい。……わたしのかわいい、アイン」

01　転生？∪憑依？　困惑＋羞恥（C．E．47年）（後書き）

１０／０２／２４　サブタイトル表記を少し変更。
１０／０８／３１　サブタイトル表記を変更及び内容の加筆修正。
１１／０２／１４　表記修正。
１１／０２／２７　表記修正。

０２　疑問×現実＝認識＋整理＋躁鬱（Ｃ．Ｅ．５０年）

あの、羞恥塗れのファーストインパクトから、既に三年。
数多の衝撃と混乱を乗り越えた俺は、しかたなく現状を認めることにした。
簡単に言えば、ここが今まで生きていた世界ではない、ということを認めたのだ。

「あら、アイン、お外に興味があるの？　でも、アインは、まだ、あそこには行けないから、我慢してね？」

なぜなら、俺が見つめる”外の世界”には漆黒の闇と煌く星々が輝く宇宙が広がっているのだから……。

……。

俺に普段から羞恥プレイを強要している綺麗なお姉さん、もとい、若奥様然とした女性が俺の手を引いてやってきたのは、宇宙港……宇宙船が発着する大規模な港近くの展望室兼ロビーだ。
いや、本当に、宇宙港って何、って感じだけど、事実として、大小様々な宇宙船が目前の内部に浮かんでいたり、行ったり来たりしてる港だ。

何度見ても信じられないことだがな……。

……。

まぁ、そんでもって、ここは場所が場所だけに重力というものがほとんど存在せず、無重力に近い。その所為か体がやたらとふわふわして、上手く身体を目的地に持っていくことが出来ない。

いや、流石に、フリーホールなんてアトラクションでほんの数秒ぐらい、しかも、物凄い勢いで落下してたものしか、無重力なんて体験したことなかったから、仕方がないことだろう。

「ほら、アイン、ゆっくり、お母さんの方においで」

そんなわけで、今も俺に呼びかけてくれるお姉さん、いや、はっきりと言ってしまえば、この新しい肉体の”母”に無重力に慣らしてもらっているのだ。っていうか、それは俺の考えであって、ほんとは、「アイン、もうすぐ、お父さんが帰ってくるからね」というわけである。

……。

おふくろとおやじ、元気にしてるかな。

……。

……俺、元に戻れるのかな？

「……アイン、どうしたの？　泣きそうな顔して……どこか痛いの？」

”母”の問いかけに、俺は首を横に振る。

これは……今抱いているこの思いは、あくまで、以前より続く”俺”という存在の問題であり、この世界の、アインと呼ばれる”俺”の問題ではないはずだ。

だから、この”母”の前では決して、見せてはいけない顔だ。

だが、……割り切れない。

「……アイン？」

……割り切れないのだ。

……。

いかん、何か、目から……。

顔を隠すために、俺は無言で、”母”の暖かい胸に飛び込む。

……。

……本当に最低だよな、俺。

寂しさを紛らわすために、目前の”母”を利用するなんてさ。

……。

……。

……。

……デモ、コノフクヨカナヤワラカサトヌクモリハ、ナニモノニモカエガタイノデス。

「んふぅ。……もう、アインは甘えん坊さんねぇ」

……。

ふうっ、少し落ち着いた。

……。

……女性の胸が大きいのは、優しさが目一杯詰まってるからだってのは……ほんとかもな。

……。

まぁ、とりあえずは落ち着いたし、状況を整理しよう。

まず第一に、さっきから軽く触れているが、”俺”という断続的に自我を有する存在は、以前、しがない会社勤めのサラリーマンであった肉体をどういう理由でかはわからないが失い、今、”アイン”という新しい肉体を得て、赤ん坊からやり直すという言葉が合うのかはこれまたわからないが、とにかく、えすえふ、或いは、ふぁんたじー、的な経験をしながら、現在進行形で生活をしている。

第二に、今、俺が住まう場所についてだが、地球一月系のラグラ

ンジュポイント……ラグランジュポイントってのは、地球と月が作る重力場と遠心力がつり合う位置のことで、スペースコロニーを建設することができるそうだ……5に浮かぶスペースコロニー群でプラントと呼ばれている所らしい。

いや、ほんとに、そういう話しを聞くに連れて、ここがほんとに、えすえふの世界だと実感させられる。まったく、宇宙なんてテレビの映像でしか見たことがないのに実際の肉眼で確認するなんて、ねぇ。正直、今でも信じられない気分が残ってる。

初めて、宇宙空間を見たときなんて、思わず、

「えええぇぇぇっっ！」

って、自分でも吃驚するぐらいに、赤ん坊だったにも関わらず、はっきりと驚きの声に出たよ。

それはもう、一緒にいた両親がもっと驚いて、病院に連れて行かれたぐらいに……。

まぁ、結果は勿論、はっきりとした発声なんて出来るわけがないという診断だった。要するに、両親の聞き違いや空耳ということに落ち着いたってことだ。

……しかし、何で、あの時はあんなにはっきりと発音できたんだろう？

謎だ。

話を戻すとして、第三に、俺は何でも、こーでぃねいたーと呼ばれる存在らしいことだ。簡潔に言うと、受精卵を弄るとかして、遺伝子を都合のいいように弄った遺伝子改変人間と言いますか、はい。

そんでもって、俺の両親は、なちゅらるって呼ばれる俺の世界の人間とまったく変わらない普通人らしい。

……正直に言うと、遺伝子を弄ってるって聞いたとき、思わず泣き出した位に、かなり気持ちが悪くなった。

この遺伝子を弄ると言う行為はさ、確かに、子どもに苦労をしないように育って欲しいって親心もあるだろうさ。でも、それ以上に、自分の子どもはこうあって欲しい、なんていう、親の願望、ぶっちゃけ、エゴを子どもに押し付けてるんじゃないか、ってな。

でだ、この世界の両親が、なんで、俺をこーでぃねいたーにしたかというとだな。

うむ。

……両親の会話を盗み聞きして集めた情報をまとめると、何でも両親共に遺伝子疾患を抱えているらしく、子どもを作るのは絶望的だったらしい。

それでも、どうしても、二人の愛の結晶たる、子どもが欲しい。だったら、どんなに低い可能性でもいいから、方法を探そう、ということにしたらしい。

そして、辿り着いたのが人工授精と遺伝子コーディネイトだったらしい。そんでもって、両親は自分たちの遺伝子疾患を遺伝させないように治療（？）して、最低限の免疫強化といったことだけをコーディネイトしたらしい。そんでもって、受精卵を”母”の胎内に入れて、育み、出産したらしい。ついでに付け加えれば、俺を産む

ためにすんごい借金をしたらしい。

……なんていうか、気持ち悪いと思った自分が恥ずかしくなったと言うか、そういう可能性もあったんだなっていうのが正直なところ。

だから、俺の出生に係る話を聞いて以降は、この遺伝子コーディネイトに対する是非は保留したままだ。

……ほんと、この問題って難しいなぁ。

「あっ、ほら、アイン、お父さんが帰ってきたよ」

むっ、そうこう考えてるうちに、デブリ……宇宙ゴミのことだ…清掃業を営む”父”が乗る作業艇が帰ってきたようだ。

危険な仕事をこなして、家を支えてくれている”父”を喜ばせるためにも、俺も”母”と共にお出迎えに行くとしよう。

02　疑問×現実＝認識＋整理＋躁鬱（C．E．５０年）（後書き）

１０／０２／２４　サブタイトル表記を少し変更。
１０／０８／３１　サブタイトル表記を変更及び内容の加筆修正。

03　敗北＋屈辱⇒執念×（不屈＋努力）（C．E．53年）

こーでぃねいたーとなちゅらるの関係を軽く甘く見ていたな。
もう、日常でさえ、羨望と嫉妬、侮蔑と傲慢、憎悪と増長の連鎖連鎖連鎖。
当然、俺もその渦中の真っ只中だ。

「やめろよな、ナチュラルや出来そこないのお前が、俺達に勝てるわけないだろぅ」

とりあえず、このくそったれな、こーでぃねいたーのガキの、その傲慢ちきな顔をぶっとばしたるっ！

……。

今だっ！

「っ！　できそこないがっ！」

ぐべっ！

「大人しくっ！」

ぷぎゃっ！

「這いつくばってればっ！」

あばべっ！

「いいんだよっ！」

ぎゃふんっ！

……身体のあちらこちらを殴られ蹴られ叩かれて、地面に倒れ込んだ。

「ふんっ、出来そこないとナチュラルなんかに負けるかよ」

くそっ、不覚だ！

一発も殴れんまま、なちゅらるの友達の仇も取れんままっ、ぼこぼこにされてしまった。

何とか、顔をあげて、今の台詞を吐いた奴を睨みつける。

「っ！　ふ、ふん。おいっ、行くぞ！」

一瞬だけ、ビビッたようだが、すぐに優越に満ちた見下した目をして、ニヤニヤと笑いやがると仲間を連れて去っていった。

くそっ！

ほんとうにクソッたれた奴らだっ！

だいたい、あの反応といい、力といい、ほんとにあれで六歳か？

絶対に信じられんっ！

なんだ、あの反応は！

なんだ、あの力は！

確かに、こーでぃねいたーは遺伝子を改変することで肉体や頭脳といった能力を大幅に伸ばすことが出来るということは、現状を把握するための情報収集で知っていたが、現実にその差を見せ付けられると、なんというか、理不尽すぎる！

こんなふざけた事が、ゆる……いや……まてよ？

そういえば、こーでぃねいたーは十三ないし十四くらいで成人だったよな？

ってことは……単純に考えて、こーでぃねいたーの六歳はなちゅらるの十歳前後に相当するんじゃないか？

だったら、改造六歳児（実質十歳児）と純粋六歳児の喧嘩ってことになるよな。

……はっ。

ははっ、負けて当然じゃねェか！

は、ははは、そうかそうか。当然だわな。

はは、ははははは……。

……。

……だが……な。

そう、だが……だが、しかしだっ！

例え、負けて当然だろうが、能力の差があろうが、負けて、はい、もう歯向かいません、なんて殊勝な考えなんぞを持てるわけがない！

つーか、負けたままでいられるかっ！

……この敗北……この屈辱……生涯、忘れんぞっ！

必ず……必ず……奴らを、全ての面で、越えてみせるっ！！

くそっ、くそくそくそくそっ、くっそっったれめぇぇぇっ！！！

……。

……ぐっ。

……。

……。

……ふぅ。

内心で未だに滾る憤怒と荒れ狂う激情を、何とか、心底に押さえ

込み、砂に塗れた身体を起こす。

……って、そういえば、パーシィとベティは無事か？

なんせ、二人は俺と違って本当の意味での六歳児だからな。

……。

……いかん、本当に伸びてる。

とりあえず、俺の大切な二人の友人、暢気なパーシィと勝気なベティ、をひどい怪我をしていないか確かめるために介抱する。

……くそっ、たかが遊び場一つで、どうしてこんなことになるんだっ！？

先程、封じ込めた怒りが再び、鎌首をもたげそうになる。

そして、同時に、大事な友であるパーシィとベティをこんな目に合わせてしまった自身のあまりの不甲斐なさに情けなくなる。

己の無力さと護れなかった悔しさを耐えるために歯を食いしばりながら、二人の涙に塗れ、口惜しさが表に出た幼い顔を見る。

せめて、涙に濡れた顔だけでも綺麗にしようとポケットからハンカチを取り出して、二人の顔をそっと拭っていると、自然、彼等と付き合うようになった理由を思い出してくる。

……俺の身体は最低限のコーディネイトしか為されていない。

だから、ほとんど、なちゅらると差がないこーでぃねいたーだ。

それが理由なのかはわからないが、俺と同世代の他のこーでぃねいたーは俺のことを出来そこないって、言いやがる。俺から言わせれば、そいつ等は図体とオツムばかりが育った、人としての精神が未熟な幼稚な餓鬼としか見えんがな。

……それはともかく、このあまりにも人格構築に大きなマイナス影響を与えそうな不健全な人間関係を気にかけた”母”が、なんとか俺に普通の人間関係を構築させようと考えたのだ。その結果が、このこーでぃねいたーの牙城であるプラントで非常に希少なななちゅらるの子ども達との交流だった。

これは俺の両親はなちゅらるだから、その関係上、こーでぃねいたーよりもなちゅらるの友人や仕事仲間が多いという条件があったから、上手くできたのだ。

それにしても、いい歳になって、子どもと一緒に遊ぶことになんて……。

しかも、ほんとに、本気になって一緒に遊んでしまうことになんて……。

凹(おう)、俺の精神は、我が相棒と同じで幼児並みということなのだろうか？

……いやいや、ここは身体に精神も引っ張られたのだと信じた方

がいいよな？

とにかく、気を取り直して……気の置けないという表現はまだまだ早いが、二人の大切な友人とこのプラントという社会で過ごしてきたことで気がついたことがある。

なちゅらるとこーでぃねいたーの負のデス・スパイラルは当然として、こーでぃねいたーという存在の歪さだ。

人という存在は、成長するにあたり、何事でも失敗経験というものを繰り返していく。仕事であれ、人間関係であれ、運動であれ、とにかく何であれ、幾度も失敗し、幾度も挫折を味わい、それでも再び立ち上がり、もう一度挑戦する。この連続を繰り返しながら、成功へと……まぁ、辿り着くかはわからないが……向かっていく。

俺は、それが人の成長する過程だと思うのだ。

まぁ、それでだ、そういった過程を生得的な能力でほとんどすっ飛ばせるこーでぃねいたーという存在が挫折に物凄く弱いモノと考えられないだろうか？

色々なことで成功してきた所謂勝ち組みって奴が、一度の失敗で大コケした以降は立ち直れずにボロボロになった、なんて話は”前の世界”で生きてきた中でもあったことだしな。

簡単に言うと、もしも、自分の能力を超える存在や状況が現れた時、こーでぃねいたーのほとんどは心が折られてしまうのではないだろうか？

曰く、こんなことはありえない。

曰く、自分達以上の存在はありえない。

ってな具合に、な。

……。

でも、あんな人の弱みを感じ取れないような奴等のことなんぞ、心配する義理も必要もないか。

いいや、ほっとこう。

あっ、パーシィとベティが気がつきそうだな。

とりあえず、二人を何とか連れて帰るとするか。

……ほんと、今日の出来事で二人の今後に影響がなければ良いけど。

03　敗北＋屈辱⇒執念×（不屈＋努力）（C．E．53年）（後書き）

１０／０２／２４　サブタイトル表記を少し変更。
１０／０９／０１　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。
１１／０２／１４　表記修正。

０４　母親＋夭折＝後悔＋懺悔（Ｃ．Ｅ．５４年）

……”母”が死んだ。

Ｓ２型と呼ばれるインフルエンザを発症し、それのワクチンの完成を待たずして……。

ただ、俺が無事であることを喜んで、満足して、恨み言一つ言わずに……逝った。

「……アイン、泣かないの、あなたが元気で生きていてくれるだけで、私は幸せよ」

俺の居場所を作ってくれた”母”に、俺は何一つ報いることができなかった。

……そう、何一つ。

……。

”父”と二人、”母”が葬られた墓の前に、ぼぉっと並んで立っている。

……涙はまだでない。

”母”の葬式は、周囲から慕われた人柄に反して、寂しいものだった。

だが、それも仕方がないことだった。

プラントに在住するナチュラルはＳ２型インフルエンザに感染する危険を避けるために外出を控えているためだ。Ｓ２型がナチュラルに対して猛威を振るっている以上、明日は我が身かもしれないという恐怖を抱くのも無理はないし、参列者が少なかったことも仕方のないことだ。

誰だって、愛する家族を持っているのだ。

それを失う恐怖に曝されているのだ。

一体、誰が非難できようか？

それに、”母”が可愛がっていたパーシィとベティは、通信画面越しに”母”の死を伝えた時、ずっと泣いてくれていた。

それだけでも、”母”の価値が、存在が、世界に認められた気がした。

……でも、俺の目から、涙は、まだ、でてこない。

誰か、教えて欲しい。

何故、”母”はこの若さで死ななければならなかったのか？

……まだ、三十にも満たない美しく綺麗な人だった。

生き生きと、本当に楽しそうに、俺の世話を焼く、優しい人だった。

時に、生意気に大人ぶった俺に、悪戯を仕掛けて、歳相応の反応を引き出す、楽しい人だった。

俺が”過去”を思い出し、静かに独り、嘆き悲しんでいる時に、すぐに見つけて、抱き締め包み込んでくれる、暖かい人だった。

……。

ああ、ああ、わかってるとも……。

今、この瞬間にも不幸が他者に訪れていることくらい、知っているとも……。

地球では、もっと無残な死を迎えている者がいることも知っているとも……。

だが、無関係の死と我が身内の死と比べられるものか？

「……アイン」

誰か、教えて欲しい。

本当に、”母”は幸せだったのか？

教えて欲しい。

誰か……誰でもいいから……教えて欲しい。

”俺”は、母が言った幸せを本当にもたらすことができたのか？

……教えて欲しい。

”俺”と言う存在が、本来の”アイン”という存在を殺したのかもしれないのに……。

”俺”という存在が存在することが本当に許されるのか、教えて欲しい。

……誰か、……誰か、……誰か、教えて欲しい。

「アイン、お前の母さんは幸せだったよ」

静かに紡がれた言葉に俺は顔をあげるが、”父”は俺の方を見ず、”母”の墓標に顔を向けたままだった。俺は無言で”父”に続きを、その理由を促すべく、”父”を見続ける。

「……アイン、目を閉じて、母さんを思い浮かべてみるんだ」

……今はただ、”父”の言われた通りに、する。

「どうだ？　母さんの顔は浮かぶか？」

頷く。

卵形の形いい輪郭、透けるような白磁の肌、少々垂れ目な、だけど、柔和な眦とそれに上手く連動する、よく手入れされた眉根、一直線にすらりとした鼻梁、肉厚が薄めな唇の両端からの延長線上にある笑窪。

「母さんは……綺麗か？」

頷く。

コーディネイターの、どこか作りもののめいた美ではなく、生命の躍動が持つ美がそこにはあった。

「母さんは、笑ってるか？」

頷く。

そうだ、〝母〟はどんな時でも、暖かく柔らかな笑みを絶やさぬ人だった。

「それが、証拠だ」

父の言葉に目を開ける。

「あいつが笑みを絶やさなかったのはお前がいたからこそだ。お前がいたからこそ、得られた笑みであり、幸せだったんだ。……アイン、それだけは、絶対に、間違いないからな」

そう言って、〝父〟は俺の頭に手を置いて、一撫でした後、背を向けた。

……ああ。

……ああ、ああ。

……〝父〟よ。

……〝母〟よ。

今の言葉、俺は受け入れてもいいのだろうか？

あなた達が望み、生まれてきた我が子を、あなた達の〝アイン〟を、殺したかもしれない〝俺〟という存在が、未だに、〝前の世界〟の両親を想っている〝俺〟がその言葉を受け入れていいのだろうか？

〝俺〟は、俺で、アインで、いることが許されるのか？

……。

――アイン、あなたがたとえ、どんなそんざいであったとしても、あなたはわたしのこども。

！！？！？？！！？！！！？

――アイン、いとしいこ、あなたがいてくれて、わたしはしあわせだった。

な、に……！？？！？

――ほんとうは、もっと、もっと、いっしょにいたかったけど、これもうんめい。

か、かあさん？

――げんきで、アイン、いつでもみまもってるわ。

……い、まの、こえ、は、かあ、さん？

……。

……えっ？

……。

……あ、れ？　なんで、まわ、りが、くら、い？

……そ、れに、、なんで、お、れ、たお、れ、てる？

……。

……。

……ゆめ、か？

……。

……あ、れ、さ、っきか、ら、なにか、おか、しい、な。

……。

……むね、がか、ってに、しゃ、くり、あげる。

……ほ、ほが、あつ、い。

……あ、ああ。

……なみ、だ、が、あふ、れて、と、まら……な……ぃ。

恥ずかしい話だが、俺の記憶が残ってるのはここまでだ……。

後になって聞いたところ、俺が墓地から出てくるのを待っていた”父”が、墓地中に響き渡った大きな泣声に気付いて、慌てて俺を保護しに走ったらしい。

いや、記憶にございません。

しかも、盛大に泣いて泣いて、家に帰ってから”母”の部屋に一直線に駆け込んで、そこで一晩そのまま泣き通しだったらしい。

え～、ん～、記憶にございません。

そして、何やら声と涙が枯れるまで泣いたら、”母”のベッドに盛大にぶっ倒れて、すやすや眠りについたらしい。

あ～、ほんとに記憶にございません。

ついでにいうと、俺が泣いている間中、”父”は何やら”母”のお叱りらしき声が聞こえ続けていたような気がするとも言っている。

……。

……いや、”母”よ、頼りなく情けない”父子”で、すまんです。

０４　母親＋夭折＝後悔＋懺悔（Ｃ．Ｅ．５４年）（後書き）

１０／０２／２４　サブタイトル表記を少し変更。
１０／０９／０１　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

05　機械＋趣味＝父親＋交流（C．E．55年　前）

”母”が逝き、”父”と二人暮しになったわけだが……。
周囲の暖かい有形無形の協力を得て、なんとか生きている。
っていうか、不器用ながらも優しい”父”と、意外な程、上手くやっている。

「むっ、アイン、ここはこうした方が効率が良くなるぞ」

今も、俺と”父”は自分の欲望の赴くまま、機械弄りに精を出している。

機械油で手が黒くなろうが、ボールベアリングを鼻に吸い込みかけようが、額から汗が吹き出て周りに飛び散ろうが、まったく気にならない。

”前の世界”では、機械なんて殆ど触る事もなかったのに……不思議なモノだ。

そんな思いを抱きながら、”父”と二人して、宇宙港の片隅にある”父”の会社の格納庫兼倉庫で、俺が提案したある機械を製作中だ。

「いや、そこは違う、こうだ」
「……こう？」
「ああ、それでいい」

てな具合で、大小二人で励んでいる。

……。

どうしてこんなことをしているかというと、何というか、俺の精神の未熟さ故に、家に引き篭もってしまったのが切欠だった。

自分では成熟していると思っていた精神の未熟さが露呈した原因。

最も大きなものとして、昨年の母の死があげられるだろう。

……やはり、あれは、堪えた。

母が死んだという大きな精神的ショックは、時を一日、また一日と経るに連れて、本当に少しずつだが、小さくなりつつはあった。だが、やはり心に穿たれた穴は大きく、ぽっかりと開いた空洞が完全に塞がるには程遠い状況だったのだ。

そんな不安定な状況に加えて、今年、入学した幼年学校が……酷かった。

並み居るコーディネイターの子ども達の幼い精神性を元にした、歪んだ優越感に満ち溢れた、あまりにも悲惨すぎる幼年学校の内情は、俺を絶望させるには十分だった。

本当に、お前はあれができない、これができない、おまえなんて、俺のほうが、等々って具合に云々云々、うるさいことうるさいこと。

あれ、絶対、通ってる人間の性格が歪むわ。

まぁ、そんなわけで常の元気を失ってしまい、家に引き篭もっていた俺を、”父”が、気を紛らわせさせようとでも考えたのか、本人に聞いていないのでわからないが、”父”が経営している会社の格納庫兼倉庫に連れてきたのだ。

そして、それが今に至る始めの一歩だった。

何ていうか、”父”が開いた扉を抜けると、そこはジャ……げふんげふん、”父”が清掃作業で回収してきた宝の山がそこに存在したのだ！

もう、それを見た瞬間、俺は稲妻に打たれたかのように、こう、ビビビッと、天啓或いは毒電波を受けてしまい、それまでの鬱が一気に吹き飛んでしまった。

……たぶん、あれは、俺のごーすとが、アレツクルベシ、って、囁いたんだと思う。

そんなわけで、俺は”父”に頼み込んで、幼年学校を退校し、自宅学習に切り替えた上で、俺が考案というか、前世の記憶から勝手に浮かんできたモノの設計及び製作を手伝ってもらうことにした。

そして、本当にそれからというもの、親子二人で作業に、時に寝食を忘れかける程に没頭している。

もっとも、何分、親子共に初めての製作作業ということもあり、様々な問題が多々生じてきたのだが、それはそれで、こう、解決を目指す時に、なんというか、こう、胸の内に燃え上がるものが自然と生まれてきたんだよ。

ああ、ほんとに、困難は人を成長させるのだと、これほど実感したことはなかった。

もう、頭の中には、常に、エンドレスで、ドッドッドンドッドッンと、某上の星が流れていたさ。

いや、ほんとに、乗り越えようとする意思が、挫けぬ意志が、ある限り！

そぉーーーぅぅぅさ、やって出来ぬことなどないのさ！

……。

……いや、そらね、専門的な技術話についていけなくなって頭がパンクして、何度も何度も不貞寝もしたさ。

でも、そのたびに、メタラヤタラ機械関係に強くなったパーシィが手伝ってくれたからいいだろっ！

生来の不器用な手先のためか、細かい作業がうまくできなかったら、べ、べつにあんたのためじゃないわよ、おじさまのためだからねっ、かんちがいしないでよねっ、ってベティが助けてくれたよっ！

ふっ、いいじゃないか、やはり、持つべきものは友達ということだろう！

……だいたいだな、この世の中に、全て何でもできる超人なんて、存在するわけないだろう？

そもそも、人間ってのは、人の間と書いて人間なんだぞ？

そう、人間は人と人と間に関係があってこそ、社会と言うものがあってこそ、人間足りうるのだっ！

それこそ、超・人、なんて字の如く、人を超えるんだから、人じゃないんだよっ！

そんな奴ぁ、あれだね、本当に化物になるか、社会に適応できない不適応者になるか、或いはその両方かになるに間違いない。

……なんてね。

まぁ、超人云々なんて、どうでもいいことさ。

それよりも今は、我がＲＳＣ（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｃｌｅａｎｉｎｇ）の未来を決めるかもしれない開発に勤しむべきだろう。完成すれば、少しは宇宙での”父”の作業も危険性が減じるはずだからな。

あっ、そういえば、最近になって近所に地球から人が上がってきて住み始める人が増え始めた。

家の隣に引っ越してきたキャンベル家の御夫婦と父の会話を聞いていると、地球では、去年のＳ２型インフルエンザの流行に関して、コーディネイターがナチュラルを抹殺するためにうんぬん、ナチュラルがコーディネイターをかんぬん、ってな感じの噂が流れて、ごたごたしてるらしい。

正直、知ったこっちゃない、って言いたいところだけども、一昨年のあの世界初のコーディネイターとして有名なジョージ・グレン暗殺から、最近の、確か、テレビのニュースで見た……トリノ議定書だったかな、に至るまでの社会情勢を考えると、結構、ナチュラルとコーディネイターの関係は悪い方向に流れているのかもしれない。

今の生活を、結構、気に入り始めている俺にとっては、その生活を壊すかもしれない、この流れは歓迎できないものだ。

前世が唐突に終わってしまった我が身にとって、切実な思いである。

いや、本当にこのまま無事平穏に、何事もなく、一生を終えたいもんだな。

05　機械＋趣味＝父親＋交流（C．E．55年　前）（後書き）

10／09／02　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

06　（機械＋趣味）×情熱＝球体＋作業（C．E．55年　後）

ニヤニヤと口元に笑みを浮かべながら、ついに完成したモノを見上げる。

今日、この日……ついに……遂にっ、完成したのだ！

見よ、この勇姿！　見よ、この機能美！

「むぅ、アインの言う通りに本当にできてしまったな」

ふふふ、これで我が社はあと半世紀は戦える。

「……アイン、嬉しいのはわかるが、もっと、子どもらしく喜べ」

……むぐっ。

”父”よ、それは俺が子どもらしくないということなのかな？

「……」

あ、明後日の方向を向きやがった。

……まぁ、いいや。

今日は実に素晴らしく記念すべき日だから、俺も機嫌がいいのだっ！

……。

それにしても、本当にできるかなぁ、と実は半信半疑で作っていたのだが、本当に出来るとはなぁ。

まったくもって、実質的な作り手である”父”や親友達に感謝だな！

俺が見上げるモノ……５ｍちょっとの大きさの球体をしたそいつは、まさに、前世において、あの有名ＳＦアニメに出てきた、宇宙空間の片隅でチョロチョロして、その世界に臨場感を見た者達に与えた、あの、球体の渋い裏方とも呼べる存在を、スケールダウンかつちょっと手を加えたものだと言える！

もっとも、天頂部の大砲はないけどなっ！

……ふ、ふふ、今のこの感動、どう伝えようか？

……。

簡単に言えば、……うん、アレだ。

ヘッドライトとテールライトを交互に点灯させているようなイメージだっ！

……。

……うっ、ううっ、自然と涙が……。

――しばらくお待ちください――

はいはい、チーン、っと。

いや、〝父〟よ、見苦しいところを見せしました。

……。

では、気を取り直して、俺の前に鎮座する球体について、簡単に説明することにしよう。

……んんっ。

この渋い球体を見て、まず、目に付くのは、機体前部に取り付けられた五本指マニュピレイター付の二本の作業用アームだろう。こいつが宇宙空間で、どんな細かな作業もＯＫ、どんとこいな、万能性を持たせている。さらに、安定して溶接や接合等の作業を行うための、普段はコンパクトに折りたたまれ収納されている、機体固定用アームを前面上下部に各二本の計四本、用意している。この固定アームの先には、電磁石と三本指の簡易マニュピレイターが搭載されて、状況に応じて使い分けることができる。先に述べた使い道以

外にも、物を運ぶ時に旨く重心バランスを取るのにも使える。次に、球体の各所に配されている姿勢制御用の小型スラスター。こいつらを旨くバランスよく配置し、父やその仕事仲間達の経験則を元に作られた連動システムを介することで、宇宙空間３６０度、自由な動きが取れるようにしている。球体内に納められているスラスター用燃料は一応父の見立てでは１０時間分の確保を見越しているが、活動時間を延ばすために、またまた、故障の危険性も考慮し、外付けタンクも大小、装備できるようにハードポイントを四箇所左右側部にそれぞれ準備している。また、もしも、急な移動や無理な機動でバランスを崩したり、何らかの外力が加わってスピンが発生したりして、姿勢制御が困難になった場合に、すぐに元の安定した姿勢に戻れるようにオートバランサーが常時、機体姿勢を監視している。いざ、事が起こった時には、すみやかに球体内部にて回転方向とは逆向きにバランサー帯が回転して、球体にかかった力をニュートラルに戻すのだ。そして、球体を形作る外殻。この外殻はスペースデブリや宇宙放射線から搭乗者を守るに十分な二重の装甲を持ち、装甲同士の隙間にエネルギー系統で使われる水を流動させることで放射線を確実に遠ざけ、更なる安全を生む。しかも、搭乗者を確実に守るための操縦席を収めた内殻を持つという徹底振りだ。その上にプラント脅威の技術力とも言うべき、放射線遮断塗料が塗りたくられているから安心だ。ちなみに、先程のバランサー帯は外殻と内殻の間に配されている。さらに続けて、宇宙で作業する上で重要な操縦席。頑丈な殻に強固に守られた内側にある操縦席も閉鎖空間を少しでも快適にするために直径３ｍという余裕の造りにしてある。加えて、周辺状況を即座に把握できるよう、死角がないように装備されたカメラからメインモニターと二つのサブモニターに映像が供給され、もしもの場合でも正面に備えられた外窓のシャッターを開けることで、前方の目視が可能になる。操縦系統は、機体制御用の操縦装置の他に、先のメインマニュピレイター用に篭手型操作装置も搭載している。なぜ、脅威の技術力を有するプラントがミストラル

なる簡易なマニュピレイターしか持たない代物で満足しているのか、俺にはわからないがっ、たぶん、きっと、偉い人いうか、頭のいい人というか、きっと現場を知らん人には、わからんのですよっ！

……有能なプラントの技術者の皆様への揶……提言はさておき、機体そのものの主なエネルギー源としては燃料電池を搭載し、予備電源として太陽光発電パネルを展開できるようにしている。水素と酸素で水と電気を生産し、太陽光で発電した電気で水を分解して、また、水素と酸素を生産するという、閉鎖されている宇宙という環境に加え、無限のエネルギー源たる太陽が存在するからこその荒業！

そして、こんな荒業を可能にするのが、またも登場プラント脅威の技術力！　もう、この辺のプラント技術は、俺の理解では及ばないので、説明のしようもない！　そしてそして、最後に非常時の備えだ。もしも、事故や故障で非常事態が発生した時のために、操縦席バックパッカーに危地作業用宇宙服を備え付け、それに加え、八時間分の宇宙服用酸素を装備。これに加え、球体自体にもメインの酸素供給装置に二十四時間分、別に二系統の酸素供給装置を装備、一つの系統だけで最低でも八時間の生存を約束している。忘れていたが、放熱板も当然搭載されていて、溜まった熱も外へと放出できる。後、作業で必要になる主要な工具類も併せてに様々に創ったから充実している！　そして、何よりも驚くべきことは、これらをすべて廃材を合わせて作ったから実質作業代だけで、たったの一万＄ぽっきり！

……はぁはぁ、ふぅふぅ。

……嗚呼、すばらしい！

称えよ、ボゥル！
ビバッ・ボゥル！

称えよ、ジャンク！
ビバッ・ジャンク！

これで”父”やその仲間達の作業が格段に安全になる！

……にしても、よく、こんだけ、いろんな使えるジャンクがあったもんだ。

まったく、物を大切にしないと、そのうち、もったいないお化けが出るぞ。

もっとも、俺は見たことないがなっ！

んんっ、それでは、さてさて、こいつの正式名は何としましょうかな。

父よ、父よ、何か案はありませんか？

「ふむ、やはりこの形状からいえば、ボー「それは駄目だという世界神の啓示がっ！」そうか？」

いや、俺は神なんて見たことないけどね。たぶんだけど、なんと

なくだけど、発禁コードを色々と使うような助平な神様のような気がする。

……まぁ、神様だろうが、別に助平でもいいと思いますよ？

俺も男ですから、その気持ち、わかりますし？

「ならば、お前が、今さっき叫んでいた、【ＢＯｕＲＵ】でいいんじゃないか？」

「はい、Ｂｕｉｌｄｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　ｕｓｅｄ　Ｒｅｆｉｎｅｄ　Ｕｎｉｔ（建造作業で使用される洗練されたユニット※注：適当訳）です」

「……俺が言ったボー「ああ、母さんが世話してたサボテンの花が咲いている」……変わらん気がするがなぁ」

変わらなくても、認めるのと認めないのとでは大違いなのですよ、父上。

さて、いまからでも試験運転して、駄目なところの洗い出しをしませんか。

あっ、そういえば、これって、初めて宇宙に出られることになるんじゃなかな？

……うん、何だか、より一層楽しみになってきたぞ！

えっ、父よ、何ですか？

はやく、準備をして宇宙に向かいましょう！

宇宙が、俺を待っているん……で……。

……。

なん……だと……。

ただ単に宇宙連絡船等に乗るならともかく、宇宙に出て自身で動かしたりする作業艇に乗るには、最低四十時間の講習と実地訓練を受けないと許可されないし、そもそも、相乗りを許可されるには年齢が足りていない。ああ、もちろん、私も乗せることはしないし、勝手に乗り込んだ場合は叩き出す……だと……？

こ……ここまできて、せ、殺生すぎる。

……ち、父よ、慈悲をっ！　何とか……何とか、慈悲をっ！

……えっ、恨むなら、己の生まれた年を呪うがいい、ですとっ？

……何という迷妄言っ！

今の歳に合わせて俺を母に仕込んだ本人が言う言葉ではないぞっ！

ちょっ、逃げるなっ！　乗るなっ！

……何、早く退避しろだとっ！

お、おのれぃ！

……。

結局、俺はＢＯｕＲＵの初乗りができなかった。

そして、ＢＯｕＲＵを操縦する父があげる感嘆の声と隠し切れない歓声を倉庫で聞く度に、俺の内で嫉妬と羨望の嵐が吹き荒れた。

その後、上機嫌にＢＯｕＲＵから降りてきた親父に殴りかかって、はじめての大規模ラインブルグ親子大戦（喧嘩）を仕掛けた俺は悪くないと思う。

くくく、金的攻撃は親子喧嘩における、子どもの特権ですよ。

まぁ、その分、やり返されたけどね。

06　（機械＋趣味）×情熱＝球体＋作業（C．E．55年　後）（後書き）

10／09／02　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

07　球体×受注⇒好機＋転機（C．E．58年）

ＢＯｕＲＵを趣味で作ったのは、三年前。
ＢＯｕＲＵの噂が広がったのは、二年前。
ＢＯｕＲＵの生産を始めたのは、一年前。

「是非とも、そのＢＯｕＲＵをうちで生産させてほしい」

まさか、こんなことになるなんて、想像もしてなかった。

……本当に、何が人生に影響してくるなんて、わからないもんだよねぇ。

そんなことを考えながら、俺と父親の前に座ってにこやかに笑っている、バーコード頭の中年のおっ、げふんげふん……綺麗に髪を横に流して整えたナイスミドルは、オーブ首長国だかの……確か……モゲルンレーテ……だったかなぁ……とりあえず、オーブでは有名な会社の役員を務めているらしい。

んで、このスズキと名乗ったナイスミドル曰く、今度オーブで軌道エレベータを造ることになったので、ＢＯｕＲＵを作業機械として使いたいから、ＢＯｕＲＵのパテントを売ってくだされ、ということらしい。

パテント、ねぇ……。

俺としては売らないで保有し続けて欲しいのだが……流石に未成

年で、かつ、ＲＳＣの社員でも役員でもない以上、口を出すことは出来ない。なので、隣に座る父がどういう答えを出すのかと、ちらりと横目で伺ってみるが、まだ、瞑目して語らず。

……なら、俺も親父が返答するまでの間、親父の真似をして……そうだな、ＢＯｕＲＵについてでも考えてみようか。

今、デブリ清掃業者や宇宙建設関係者の間で話題沸騰の【ＢＯｕＲＵ】は一般に普及しているミストラルに負けずとも劣らない性能を発揮している。

その来歴を語ると……元々、このＢＯｕＲＵは趣味で作り始めたモノだから、生産して売り出そうなんて考えていなかった。だから、ただ、ＢＯｕＲＵとだけ呼んでいたのだが、流石に、小規模ながら工場を作り、受注生産を始めるにあたって、一応は商品化したんだから、ということで型番が設定されることになった。

その型番は【ＢＷ－００】で、通称は御存知の【ＢＯｕＲＵ】である。

この型番について説明すると、頭のＢＷとは【Ｂｕｉｌｄｉｎｇ Ｗｏｒｋｅｒ】の略語であり、後ろの数字、００は機体のコードナンバーを表している。場合によって、そのコードナンバーの後ろにアルファベットをＡから順に付け替えていくことで、初期型からどれくらい設計改修したかを示すことにしてある。例えば、現在の量産型ＢＯｕＲＵの型番はＣ型だから、【ＢＷ－００Ｃ】となり、量産を始めてから三回の設計改修を施したことを表している。

ちなみに、俺と親父が初めて作った記念すべき試作機には、ＢＷの前に試作機を示すＹがついて、ＹＢＷ－００である。

……なんか話が逸れたような気がするが、まぁ、いいか。

ではでは、ＢＯｕＲＵの良い所を列挙して行くことにしよう。

まず一番のセールスポイントを挙げると、ミストラルよりもかなり低コストということだろう。

これは言うまでもなくジャンクからでも作れたんだから当然と言った所だ。もっとも、製品化するのだから、ちゃんと構成部品も新規生産品を使用することになったために予定よりも少し高くなったが、ほとんど全てのパーツが既製品である上、量産による部品調達コスト削減で、まだ安くできる可能性は残っている。

次の売りは……頑丈さかな？

ＢＯｕＲＵの頑丈さは、ただ俺の一存で”漢”の一品足ろうと、頑丈にただ頑丈に、と求めた結果だ。現在の量産型は外殻もジャンクではなくなって品質が向上したから、まぁ、流石に大気圏に突入して無事というにはいかないが、競合相手のミストラルと物理的に正面衝突したとしても、相手だけがクラッシュすることになるとの分析結果は出ている。

更には、そんな頑丈さに附随して付いてきた安全性も挙げられる。

単純に頑丈さ故に高い安全性が勝手について来た形だ。そこにプラスアルファとして、当時は気がつかなかったが、俺が家族を失う恐怖に怯えていたためか、病的なまでに非常時への備えが為されており、かなり高い生存性を実現している。

そして、建機として重要な汎用性と作業性も良好だ。

最もわかりやすく実例を挙げるならば、本来、我が社従来のお仕事であったデブリの除去だけでなく、コーディネイターに混じって、ナチュラルの父が、普通に、そう、普通に！　コロニー建設作業にも参加できるようになったことからも、すごいということがわかるだろう。

後、これは受注生産を開始してから判明したことなのだが、構造が簡単で非常に作りやすいうえに、運用する上でもとても整備しやすいことも長所だ。

機械音痴の俺でも、なんとか整備ができるというくらいである。量産性や整備性など考慮していなかったはずなのにどうしてこうなったのか、親父と二人頭をひねっても出なかった答えは、我が友たるパーシィがいつの間にか描き直していた設計図にあった。

「えっ？　だって、機械は簡単な作りの方がいいじゃないか。僕はコーディネイターじゃないんだから、難しいの作っても弄るのが大変なだけだからね。だから、できるだけ、機能を落とさずに、簡単に、シンプルイズベストを目指したんだけど？　……もしかして、何かまずかった？」

量産型ＢＯｕＲＵの前で、こんなんだったっけ、と親父と二人、首を傾げていた俺に、いつの間にか当たり前のようにＢＯｕＲＵ生産に関わっている、我が友パーシィが何気なく言った言葉である。

いやはや、実はパーシィ、機械関係の天才なのではなかろうか？

と、いう閑話は置いておくとして、とにかく、ＢＯｕＲＵは宇宙用建機としては優れていると自画自賛できる出来だろう。

一人納得して、うんうんと頷いていたら、隣の親父が遂に口を開いた。

「ＢＯｕＲＵを生産される件は了解いたしましょう。ですが、パテントを売ることはできません」

「……そうですか。……それは、まぁ、仕方ありませんね」

「……ですが、こちらからつける条件に了解していただければ、パテント使用料をお安くすることはできます」

「……ふむ、その条件、お伺いしましょう」

この後に父が話した条件は二つだった。

一つは、軌道エレベータを建造するにあたり、建設拠点として造られる簡易ステーション内に我が社の支店を立ち上げさせて欲しいという事と、もう一つは、オーブに移住を希望する知り合いのナチュラル達を受け入れて欲しいという事であった。

一つ目は、簡単な話、オーブ系の会社だけじゃなくて、うちの会社にも仕事を得る機会をくれ、ということを暗に言っているのだろう。意外や意外、父も会社経営を頑張っているということだな。

そして二つ目だが、これは父の交友関係から来ている。ナチュラルである父は当然、プラントに居住するナチュラルの人脈が広い。……これは俺の推測なのだが、三年前のＳ２型インフルエンザ騒動以降、ナチュラルとコーディネイターの対立が深まっていることもあり、その人脈からコーディネイターに害されるかもしれないという不安の声が聞こえるのだろう。たぶん、父は、その不安を根本から解消するために条件に加えたのだろう。

「一つ目の条件に関しては、私どももそれなりに影響力を持っておりますから、良い返事ができそうなのですが、……二つ目に関して

は、流石に私の職権の及ぶところではありません。ですので、私からは然るべき筋に話をしてみるということしか、お答えできません」
「……それで、かまいません」
「わかりました。一度、本国に連絡を取ってみます。この返答は後日ということで、よろしいですかな？」
「ええ」

それで、どうやら、ある程度、話がまとまったようで、中年二人の間に若干弛緩した空気が流れ始めた。特にスズキ氏の方からは目に見えてわかるほど、安堵の色が漏れ出ている。

なにせ、バーコードの下が、一気に血色よくなって、艶を帯び始めていたからな！

……いや、うん、自重しろ、俺。

ここは大切な場面だから、大人しくしておくんだ。

そんな具合に俺が、じっと、色々と我慢していると、突然、えらく抽象的な言葉が客人から零れ落ちた。

「……いったい、いつからこんな世の中になったのでしょうね」

その言葉に思うことがあったのか、父も応えた。

「……いつからということはないと思います。昔から、こんな世の中だったのでしょう」

俺には何となくわかるようで、何となくわからない深さがあった。

「いや、失礼。この歳になると少し、感傷的になってしまいまして……」

「……わかります」

いや、二人して俺の方を見ながら、そんなに通じ合わないで欲しい。

「今日は有意義な話ができました。数日のうちに返事ができると思います」

「ええ、良い返事を期待させていただきます」

これで交渉は終わりのようで立ち上がった二人は握手している。

そんな二人につられて立ち上がって、ふと思う。

……あれ、なんで、俺、こんな重要な場にいたんだろう？

……。

どうせ我が父の事だから特に理由もなさそうだし、スズキ氏が俺を値踏みしているように見えたのは気の所為に違いない！

……うん、あまり深く考えないようにしよう。

07　球体×受注⇒好機＋転機（C．E．58年）（後書き）

10／09／03　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

08　成長＋別離＝自立＋苦悩（C．E．59年）

いつの間にか、この世界に生まれて12年。
昔ほど、前の世界のことを思い返すことはなくなった。
……だからといって、まったくないというわけではない。

「アイン、しっかりやれよ。お前なら大丈夫だと思うが……元気でな」

たぶん、きっと、いつまでたっても、いくつになっても、きっとなくならないと思う。

……。

俺は今、宇宙港の展望デッキで、独り、宇宙を眺めている。
漆黒の中、青く輝く地球と遠方で燃え盛る太陽、地球上では考えられないくらいに輝きを見せ付ける星々が、この世界が、地球と変わらないように感じてしまうほどの環境が、宇宙に存在していることを直視させる。

それが、まさに……いや、一人でプラントに残ることになって、少し感傷的になっているんだろう。

再び、虚空を見つめ、父が乗った宇宙連絡船の航行灯である赤い

点滅とスラスターの瞬く青白い煌きが少しずつが小さくなっていくのをじっと見つめる。

そう、俺は今日、オーブへと移住する父を見送りに来ていたのだ。

母を失ってから、ずっと励ましあって共に生活してきた父は【アメノミハシラ】と呼ばれることとなったオーブの軌道エレベータ…近くの建設用拠点である簡易ステーションに移住することになったのだ。プラントで続けていたＲＳＣを発展的解消し、先のＢＯｕＲＵ生産で生まれたオーブ連合首長国の名目上は半官半民らしいが実質上国営企業であるモルゲンレーテとの繋がりを利用して、オーブで機械製作を主業務に変更した、新たな会社ＲＳＦ（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｆａｃｔｏｒｙ）を立ち上げたのだ。

元より、プラントにおけるナチュラルの立場は反コーディネイター組織がテロを起こすたびに悪化していく一方だったし、ＢＯｕＲＵ生産にあわせて増えていったナチュラル系社員を護るためには、良い方法だった。少なくともオーブならば、プラント程には対立から生じる危険性は少ないだろう。

そして、俺の少ない友人だったパーシィとベティもＲＳＦの社員となった家族と共にアメノミハシラやオーブ本国へと移っていった。別に今生の別れでもないのだが、涙もろいパーシィはすでに話すこともできないでいたし、もう一人のベティもいつもならばツンツンしている態度が鳴りを潜め、悄然とした顔を見せていた。

そのことが、不謹慎なことだが、俺には嬉しかった。

だが、プラントに残るという我侭を主張する俺を受け入れ、一人で残ることを認めてくれた父はいつも通りだった。あまりにいつも

通りだったので、一人で残すことに不安を感じないかと、自分で残ると言っておきながら、聞いてしまった。

その答えはこうだった。

「別にお前と家族でなくなるわけではないし、連絡もとろうと思えばとれる。それに、私が思っている以上にお前はしっかりしているだろうからな。不安に思うこともそうない。……それに、あいつの墓もあるから、守るために残ると言い出すかもしれないと予想もしていた」

いや、それはちょっと過大評価が過ぎると、気恥ずかしい思いをしたものだ。

父の評価を思い出して、また面映い思いをして……、

「……あ、れ？」

……気がついたら、母の墓標の前に立っていた。

なんで、母の墓の前にいるのかわからないまま、腕時計を見ると……見送った時間から三時間も経っていた。

どうやら、俺も己でも気がつかないうちに、心を占拠する寂しさを散らすため、安らぎと甘えを求めていたらしい。正直な己の足に苦笑しながら、母の墓に、これもまた気付かぬうちに購入していたらしい生花を供えた。

そして、また、何とも言えず、笑えてくる。

……己の行動ではなく、心の内でくすぶり続ける未練にだ。

どれだけ、取り繕っても、母の前では、俺の心は丸裸にされてしまうらしい。なにせ、俺が何者であったとしても、俺を俺として、受け入れてくれた懐深く無限に等しい優しさを抱えた母である。

これも当然の帰結なのかもしれない。

そう、母の墓標を見つめた瞬間に、今日、別れの時に無意識に感じてしまった前世への郷愁、哀愁を悔いに、そして、己が抱えている業への許しを求めにここにやって来たことを、はっきりと認識させられたのだ。

……今、俺が生きているのはこの世界だ。

しかも、この世に生まれて、すでにもう十年以上経つ。

俺はこの世界で、”アイン・ラインブルグ”として生き続けているのだ。

なのに、前の世界を思う等、あまりにも、今の生を……今で生きてきた時間を、今まで築き上げてきた関係を……侮辱している。

だが、それでもなお、己の死を認識できずに、別れを告げられずに、唐突に絶たれた前世を、未だに思ってしまう心を、今生の土台に根付いた執着を、抑えようとも留められないのだ。

「ほんと、前の人生の記憶なんて……」

なければいいと……やっぱり思えなかった。

どうしようもない自分の惰弱な心を再認識してしまい、とぼとぼと肩を落として、家に帰ってくると、なぜか、我が家から光が漏れていた。

電気を消し忘れた覚えもなく、また、泥棒が堂々と飯を食ってるとは思えない。いや、居直り強盗ならばありえるが、俺が家の中にいて、かつ襲われなければ強盗にならんし、って、まてまて、俺は何をわけのわからないことを考えているんだ。

若干の混乱を引き摺りつつも、とにかく、警戒しながら我が家に

近づき、様子を伺う。

……。

うむ、隣の家の幼女の歌声が聞こえてくる。

……どうやら、俺の取り越し苦労らしかった。

……。

んんっ、さて……年下の、しかも、オムツを替えたこともある女の子に情けない姿を見られるのは、成人間近の男としては甚だ決まりが悪い。

ならば、ここは空元気でもいいから、元気に玄関を開けるべきだろう。

よしっ。

「ただいま、ミーア！」

「あっ、おかえり！　おにいちゃん！」

……不覚にも涙が出そうになった。

帰る場所で応えがあるというのは、何気に幸せなことだということが、よくわかった一日だった。

08　成長＋別離＝自立＋苦悩（C．E．59年）（後書き）

10／09／03　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

09　成人×（借金＋返済）＝就職×公務（C．E．60年）

今年、プラント籍コーディネイターの俺は成人となった。
家族は遠くに離れて暮らしているけれど、近くにも祝ってくれる人はいた。
そんなことに幸福感を味わうのって、結構、贅沢なことだと気付いた。

「アイン・ラインブルクさんですね。あなた名義の借財の返済期限が迫っております」

えっ？　……いや、いきなり、そんな話は初耳なのですが？

……。

セプテンベル市の行政職員であると正式な身分証……穴を開けてしまおうかと思う程、確認した……を提示して見せた借金取立人に、自分名義の借金と返済に関して色々と聞いた俺は、この借金が何の目的で為されたものなのかを知るために、アメノミハシラにいる父へと連絡をいれた。
俺からセプテンベル市からの借金について聞かれた父曰く、借金は何らやましいものではなく、元々の来歴は俺を生み出すために母名義で借りられた金であるということ、名義に関しては、母がなくなり、父もオーブへと移住する予定であったために俺名義に変更していたということ、更に返済に関してだが、旧会社の発展的解消に

加えて、新会社の発足等とドタバタしている内に、返済が頭から抜けて、口座に入金するのを忘れていたらしい。

いや、だったら、せめてそういうモノがあるということを伝えておいてほしいと思ったのは、いきなり借金があると聞かされ、混乱して馬鹿なこと……いつの間に俺は詐欺にはまったんだとか、クレジットカードなんて作った憶えもなければ使ってもいないぞとか……を口走って大恥を掻いた俺の自分勝手な願望とは言わないだろう。

だが、……うむ。

これも天の導き、或いは母の導き、に違いない。

通信画面の向こう側で、すぐに返済金を送ると言っている父を止めて、俺は自分の考えを話す。

先に我が家にやってきた借金返済要請の使者殿の話には続きがあったのだ。

……。

「借財の返済期限が迫っておりますが、もしも、その期限に返済が間に合わない、もしくは返済能力がない場合はラインブルクさんにはセプテンベル市の行政局にて、働いていただくことになります」

「……それは要するに、金ないなら、うちで働いて返せや、ごらぁ、

ということですか？」
「……いや、ごらぁ、というのは言い過ぎですが、率直に言えば、そういうことになります」
俺の物言いが少し受けたのか、口元に苦笑を浮かべる使者殿は頷いてみせる。
「……もしも、その、働く場合……生存権は保障されてるのでしょうか？　例えば、タコ部屋労働をさせられるとか？」
「た、タコ部屋労働ですか？　……さ、流石にそういったことはありませんよ。普通の生活は保障されてます。給料に関しても、一部が返済に充てられるために他よりも少ないですが、ちゃんと出ますし、雇用も返済が終わった後も継続いたしますし、その場合、給料も通常と同等のモノになります」
「……そうですか」
なら、考慮に値するだろう。
……いや、むしろ、ウェルカムではなかろうか？
なにしろ、これ以上、非常にレベルが高い就職活動をしなくていいからなっ！！
いや、冗談じゃないんだよ、これが。
俺みたいな、ほぼ無改造クラスのコーディネイターには、なかなか、ねぇ、現実は厳しいんだよ。

だいたい、特技は何ですか、と聞かれたら、自信を持って答えられるのは、生殖能力が他のコーディネイターよりも絶対的に優れてます（キリッ）、ってくらいしかないんだよ！　ってか、普通は言えねぇよ、これっ！

そもそも、人間なんて、最低限の生活さえできれば、どこかに幸せを見つけ出すように、どんな仕事でもやりがいってモノを見つけ出して、最初は上手く仕事できなくても最後には上手くできるようになるはず、はず、はず、なんだよっ！

だから、俺にもチャンスをくれよっ！

……って、うん、思い通りに事が進んでなくてイライラが爆発してしまった。

はぁ、とにかく、今の俺の能力では他のコーディネイターに比べたら、著しく低いとはいわないが、劣っているという現実を否応なくわからされたのだ。まぁ、結果的に、我が父が何気にコーディネイターを相手に互して仕事していた、凄い存在だったんだと、父に対する認識を新たにしている今日この頃である。

気を取り直して、使者殿に聞くべき事を聞く。

「働く場合の返事は今すぐ必要ですか？」

「いえ、返事は返済期限が来る来月までで結構ですよ。もちろん、お金を返していただいてもかまいません」

「……わかりました」

という、経緯があって、俺はお金の返済を自身で行いつつ、職を確保するつもりであることを我が父に説明して見せた。

「なるほどな、確かにプラントでは住民の苦情処理係的な行政サービスが低く見られている所がある。なり手が少ない上に、ストレスから精神的に耐え切れずにやめていく者も多いとも聞いたこともある。だから、恐らくお前が聞いた先の話も人材確保を狙っている面があるんだろう。だが、そこはな……」

「うん」

「……コーディネイターは気位が高いから、きっと、お前が考えている以上に辛い所だぞ？」

「わかってるよ。でも、これはきっと母さんが与えてくれたチャンスだと思うんだ。それに独り立ちするチャンスだとも思えるし」

「……そうか」

俺の言葉に父は少し翳があるけど、嬉しそうな笑顔を見せた。

「まったく、子は知らぬうちに大人になっていくのだな」

「……まぁ、ね」

いや、前世も含めたらもう、いい歳なんですが？

……色々と、複雑な評価だ。

「いや、お前が職を探しきれない場合はうちの会社にでも放り込もうかと考えていたのだ」

「うん、それは、とてもありがたい話だけどね……それは、本当に一番最後の方法だと俺は思ってるんだ」

いや、実はアメノミハシラでＲＳＣは順調に成長してるんだな、これが。

大体、ＢＯｕＲＵの生産だけじゃなくて、いつの間にか小型とはいえ、造船にまで手を出し始めているなんて、誰が考え付くだろうか？

まぁ、それは後々、時間がある時に詳しく父から聞きだすことにして……。

「父さん、俺、大丈夫だよ。隣のキャンベルさんにも色々と助けてもらってるからさ」

「……わかっている。だから、お前には頑張れとはいわない。ただ……元気でいろよ。……それと困ったことがあれば、必ず相談するように、な」

「うん、わかったよ。……それじゃ」

「ああ、また、な」

通信が切れ、再び遠く離れた父の、俺への信頼をうれしく思いながら、俺は新しい職場に連絡を入れようと端末に手を伸ばした。

「はい、毎度、御贔屓にぃ！　雷々亭ですっ！」

……いや、ごめん間違えた。

09　成人×（借金＋返済）＝就職×公務（C．E．60年）（後書き）

10／09／05　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

１０　少女＋援助＝淫行＝逢引＋散財＋恐怖（Ｃ．Ｅ．６３年）（前書き）

注意：今回の話には少し残酷な表現が含まれております。ご注意ください。

１０　少女＋援助＝淫行＝逢引＋散財＋恐怖（Ｃ．Ｅ．６３年）

セプテンベル市の行政局員になって、はや三年。
かなりストレスの溜まる仕事を毎日毎日ヒィヒィ言いながら、頑張っている。
こんな俺にも心の清涼剤足るものがないものだろうか？

「おにいちゃん、私とデートに行こう！」

……できれば、チェンジでお願いしたいのですが？

「チェンジで」
「む、むぅ。……こんな可愛い女の子とデートできるのに断るなんて、男じゃないわ！」
「後、せめて……十年位か？　経ったら考えるよ」

俺がだらけているベッドを覗き込んで、むぅむぅ、と唸っている可愛い珍獣、もとい、おしゃまな少女にもわかり易いように大きくバッテンを出すが、まったく通用しないようで、より大きい、むぅむぅ、が返ってきた。
根競べでは確実に負けるのがわかっているので、大人しく起き出すことにする。確かに、折角の休みなんだから、だらけ続けるのも如何なものか、ということだ。
妹のような少女、ミーアは俺が起きたのを見て、何を奢らせようかとギラギラと得物を狙うかのように輝く瞳、もとい、楽しいデートを期待するキラキラとした純真無垢な瞳で俺を見つめてくるが、気がつかない振りをして、朝食兼昼食の準備しようとした。

「……」

いや、その歳で上目遣いと涙目をマスターするのは、お兄さん的には反則だと思うんだけど？

結局、いつものようにミーアの懇願、またの名を脅迫、に負けてしまった俺は、薄給の身でありながら、贅沢にも外食するという選択をする羽目になってしまった。

……とはいっても、外食する先は、どこにでもあるファーストフード店である。

「この前も同じ店だったような気がするんだけど？」

「……いや、その……な」

「はぁ、お兄ちゃん、もう少し女の子をエスコートする時には、色々とコースを考えるべきだと思うわ」

ふぐっ、なんということだろう。ダブルスコアを越える歳の差なのに、ミーアから向けられる憐憫と蔑みの視線がとても痛い！

しかも周囲からの暖かいようで生暖かい、物珍しそうで面白そうな視線や俺が見事にやり込められるのが面白いのかクスクスと漏れてくる女の失笑に加えて、一部からはハァハァと生々しく荒い息や幼女充モゲロとか、物騒なモノまで聞こえてくるしっ！

なんとか、ここは反撃をっ！

「ため息をつくと幸せが逃げるというぞ」

「幸せが逃げるから、ため息をつくのよ」

……誰か、この子を何とかしてください。

「青きぃ！　清浄なるぅぅぅっ！！　世界のためにっいいいい！！！」

その言葉を聴いた瞬間にミーアを床に押し倒せたのは、僥倖以外なにものでもなかった。

己の身体の内側にミーアをしっかりと抱きしめるのと同じくして、轟音と共に凄まじい振動を身体に感じた。胸のうちでミーアが悲鳴をあげているのが自身の身体を通して伝わってくるが、それにかまっている暇はない。暴れないようにきつくきつく抱きしめる。次の瞬間、ガラスの破片らしき固いモノや様々なモノが背に降りかかり、さらに粉塵や砂塵を伴った熱風が押し寄せてくる。

「ッぁ！」

背中のあちらこちらが痛い。
肌が焼けるように熱い。
心臓の鼓動が速い。
汗が止らない。
音がない。

恐怖と焦燥でパニックになりかけるが、胸の内にある温かい存在が、俺よりも弱い存在が、それを蹴飛ばしてくれる。

冷静に……、そう、冷静に……。

冷たさを感じると同時に上から水らしきものが降りかかってきた。

肌に降りかかる冷たさが痛みをもたらす。
頭に降りかかる冷たさが平静をもたらす。

……どうやら、この冷たいものはスプリンクラーの水のようだ。

ゆっくりと涙と水滴に濡れた目を開け、生きていることを再確認するために軽く息を吸う。目と気管系をやられない様にしっかり覆ったり、閉じておいて正解だった。

もっとも、それが、必ずしも良い方向に進むとは限らないが……。

目を開けると飛び込んでくる、赤と黒の世界。店内の一部で広がっている炎と店内を漂う黒煙と雨のように降り注ぐ水、壁や床に飛び散っている赤いナニカ、そして、非常事態を知らせる赤色灯。
鼻に入るのは嗅覚を刺激する、燻り煙られた匂いと未だに漂う粉塵の匂い、降り注ぐ水の匂い、鉄錆びた匂い、そして、それらに混じるナニカが焼ける匂い。

あまり想像したくない匂いに、胃液がこみ上げてくる。

だが、ここは我慢だ。

近くから助けを求める甲高い悲鳴や苦痛にあえぐ呻き、痛みに泣き叫ぶ声、我を忘れた怒号が、少しずつ耳に入ってくる。
ミーアを抱きしめたまま、ゆっくりと上半身を起こし、何とか近くの植え込みにもたれかかる。ミーアにはこの惨状をできるだけ見せないように、聞かせないように、鼻が覚えないように、顔全体と

耳を覆ってやる。

胸元で嗚咽が漏れている。

落ち着かせるために背中を軽く、優しく、リズム良く、ポンポンといたわる様に叩き続けて宥める。

そして、俺も今の状況を把握するために頭を巡らせる。

スプリンクラーが作動している以上、すぐさま炎は延焼する危険はないと判断できる。

また、身体が動く以上、ミーアを最優先するにしても、周囲の者も助けられる範囲で助けるべきだろう。

救助の手は、後どれくらいで到着するだろうか？

もう、この場に危険はないだろうか？

とまで、考えたところで、まだまだ麻痺していて聞こえ辛い耳に微かに入る、連続して聞こえる乾いた破裂音。

……おそらく銃声だろう。

この場は、まだ、危険の排除が為されておらず、安全とはいえないようだ。

そして、危険の排除が為されていないということは、救助の手も遠いということに繋がる。

……まったく、なんでこんなことに、と思わざる得ない。

ついでに、あの標語を叫ぶ以上、このテロの実行者、或いは達なのかはわからないが、あの反コーディネイター組織というか狂信者的集団というか、とにかく【ブルーコスモス】の構成員だと推測できる。

前々から恐ろしい集団だとは職場で聞いていたが、この身でそのテロを味わうと想像以上に恐ろしい集団だと云わざるをえない。本当に、今現在、重い怪我がなく命があるのは奇跡としかいいようがない。

……。

ミーアが落ち着いたためか、情報を遮断するためかはわからないが、眠りに落ちたようだ。

……正直、そうしてもらえると俺も助かる。

パニックは容易に伝染してしまうから、な。

ミーアを起こさぬように植え込みの陰に横たえようとして、ミーアの手がしっかりと俺のジャケットを掴んでいる事に気がついた。言い表せないほどに罪悪感を感じながら、その手をゆっくり、優しく解して、離させる。そして、ミーアをできる限り優しく床に横たえ、その上に被せるようにテーブルを置いて水除け代わりにし、ぼろぼろになったジャケットと、幸い少し血がついているが破れていないシャツを被せて少しでも体を冷やさないようにする。

……テロ現場で上半身裸って、変かな？

なんて、場違いな思いを抱くが……埒もないことなので振り払う。

とりあえず、せめて、まだ使えそうな比較的濡れてない紙ナプキンを手に店内を回って、負傷者を介抱するべきだろう。

というか、しようとしたのだ。

その時に偶然、店の前で自動小銃らしきものを通りに向けて、嬉々と乱射しているテロリストの姿が目に入ってくるまでは……。

「それで、思わず、カッとなって、近くに落ちていた椅子を全力で投げつけて、その後、直接、ぶん殴りに行ったと？」

「……はい」

「あまりにも無謀な行いだな、それは……」

……いや、確かに、今、考えたら、無謀すぎると思うよ。

でも、その時は冷静さとか恐怖とかさ、どっかに飛んで行ったんだよ。

とにかく、よくもこんな危ない目にあわせやがって、目には目をっ！　歯には歯をっ！　って具合にな。

「英雄願望かね？」
「まさか。俺は身の程を知っていますよ」
「そうか。……言葉だけかもしれないが、最近の若い者にしては珍しい」
「はぁ」

俺も珍獣認定ですか？

「しかし、幸運だったな」
「ええ、それは間違いなく、そう思います」

俺のぶん投げた椅子が見事なまでの放物線を描き、見事なまでにテロリストの頭部に命中して、見事なまでの一撃でノックダウンさせたのは、ただただ、偶然が、幸運が、積み重なった結果だとしかいいようがない。

「話はわかった。我々保安局としては、市民の協力はありがたい、と一応言っておこう」
「……」
「だが、己の安全を顧みずに、行う行為ではない。……今後、こういうことは二度としないように」
「わかりました」
「……ああ、そういえば、君の妹さんがすぐそこの救護所で待っている。ショックも受けているだろう。早く行ってあげなさい」

俺は無言でテロ現場で指揮を取るセプテンベル市の保安局員に頭を下げる。

そして、ミーアを迎えに行くべく現場を後にした。

恐らく、自分のすぐ傍で踊り狂った死神のダンスに恐怖して、気がついたら一人で見知らぬ場所に取り残されていて、心細くて泣いているだろう少女を思い、申し訳ないことをしたと猛省しながら……。

それにしても、俺、英雄願望なんて、持ってないはず……持ってないつもりなんだけどなぁ。

……本当に馬鹿なことをしたもんだ。

１０　少女＋援助＝淫行＝逢引＋散財＋恐怖（Ｃ．Ｅ．６３年）（後書き）

１０／０９／０５　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

11　殺人＝覚悟＝罪咎÷（犯罪＝断罪）（C．E．66年）

63年にテロの恐怖を体感してすぐに職場の配置換えがあった。
行政局から保安局へ。
何でこんなことにと思いながらも、日々の勤めを果たす。

「お前は近頃のガキにしては見所があったからな」

できれば、チェンジ、お願いした……え、だめ？

……そうですか、だめですか。

うぅ、悲しい宮仕えに加え、まだ少し借金が残る身である以上、上司の命令に逆らうことができず、泣く泣く移ってきた保安局で俺を待ち受けていたのは、テロの時に俺を説教した父と歳近い中年のおっさんだった。

いや、俺も通算……いやな言い方だ……したら、精神的にはおっさんになっているが、身体に引っ張られているせいか、そんなに精神は老成していない。あのテロの時の、無謀な暴走こそがそれを証明している。

何が言いたいかというと、……何が言いたいんだろう？

ともかく、俺はあれから二年間、保安局での訓練を受けながら、時に青秋桜の土の手入れ、時に迷子の保護、時に他の花の成長を阻

害しそうな青秋桜の葉の除去、時に交通事故の現場検証、時に地植えだった青秋桜の鉢植えへの植え替え、時に酒場での乱闘の仲裁、時に青秋桜の華の鑑賞、時にご近所の井戸端会議での情報収集、時に青秋桜の華が散った後の後始末、時に要人と呼ばれる偉い人の警護、時に青秋桜の種が飛ばないようにするための収集、時に地域の安全を守るための巡察、時に飛んできた青秋桜の種の回収、といった具合に頑張ってきたのだ。

幸いなことにあのテロ以来、テロらしいテロはセプテンベル市では起きていない。

……いや、どちらかといえば、俺の所属している保安局が奮闘した成果なんだけどな。

で、その奮闘に参加したがために、俺は、俺の人生を凄まじく揺るがす経験をすることとなった。

俺は人を殺したのだ。

職場のデスクに着いて、ぼんやりと当時のことを回想していると俺の直接の上司たる、俺を保安局に引き込んだあの時のおっさん、もとい、危機管理課長が声をかけてきた。

「おい、ラインベルグ」
「いや、課長、俺はラインブルグですよ」
「おお、すまんな、ラインベルグ」

いや、もう、このおっさんさ、パワハラで訴えられないかな？

「冗談だ、そんな人事に怒鳴り込みに行きそうな目で見るな」
「……はぁ」
「……それと上司に面と向かって、ため息をつくな」

いいでしょうが、あんたも俺もどうせ確信犯だよっ！

「それで、なんか用ですか？」
「いや、なに……いや、何でもないさ」
「なんですか、それ、はっきり言ってくださいよ、気持ち悪い」
「そうか？　……ならば、前からお前に尋ねたいと思っていたことがある」

口ではつまらない冗談を飛ばす我が上司たる課長は、残念ながら顔に愛嬌のないため、厳かな顔をするとしゃれ抜きで威圧感が凄まじいものになる。当然、俺も条件反射的に、思わず背筋が伸びる。同じオフィスにいた連中も不意に引き締まった空気に驚き、こちらに注視している。

課長の言葉を待つうちに、ふと、初めて人を殺した後の事が思い浮かんだ。

……人として、禁忌を犯した俺は、しばらく、精神を病んだ。

まぁ、簡単に言えば、心の均衡を崩してしまったのだ。

俺が引金を引くことで放たれた銃弾に全身を貫かれて死んでいく相手が、夥しい血を撒き散らしつつ、憎悪と苦悶と断末が混じりあった聞くに堪えない絶叫をあげながら、突如として背中に冷水を浴びせられたような感覚を覚える程の、凄まじい形相と血走った眼光で俺を射抜きながら沈む。

その光景が、何度も夢の中で繰り返された結果、睡眠障害を患った。それに加えて、拒食と過食を繰り返す摂食障害も併発した。

その時のことは、絶対に思い返したくない程なのだが、醜態をさらした恥の意識があるためか、それが頭から抜けることがない。ましてや、その記憶には我が妹分であるミーアも関わっているのだ。

いきなりその時のことが頭の中で過ぎったりした時は、もう、全身で身悶えして、死ね、とりあえず当時の俺は死んでしまえと、職務質問されて当然だろうと思わせる程に挙動不審な男を演じる羽目になる位に、悲惨である。

……なんて今は嘯いているが、本当にミーアには言い尽くせないほどに迷惑をかけた。不安定な精神状態に陥り、言葉の暴力である罵詈雑言をミーアに飛ばし、時には本当の暴力を振るいかけた俺に相対し、ミーアは真っ向からそれを受け止めた上で、塞ぎ込む俺の尻や背中を平手でひっぱたき、暴れ出したら俺の顎や鳩尾といった

急所を拳骨で打ち抜き、涙を流しながら何者かに許しを請う俺の蒙を共に涙を流しながら啓き、虚脱状態に至れば、膨らみ始めた胸で俺の頭を掻き抱き、生の鼓動と人の温もりで、俺の心の傷を癒してくれた。

そんなミーアの助けの元、自身の罪業と向き合い、受け入れ、新しい確固たる支柱を精神に再建し、ようやく症状が快方にむかった時には、もはやミーアに頭が上がらなくなっていた。

いや、本当に、可愛い妹分に大いに助けてもらうなんて、情けない兄貴分だよ。

視界に色が戻るのと同時に、課長の声が耳に響いた。

「以前、お前はテロリスト制圧の際、犯人を撃ち殺した。そして、その後、精神のバランスを崩したな？」

「……はい」

「克服できたのか？」

「……妹分の手を借りて、何とか、克服できたと思います」

課長の何物をも見通しそうな峻厳たる眼差しに負けまいと俺は睨み返す。

「ならば、聞く。……お前は再び、人を殺すことができるか？」

「できます。それが法に則り、後ろに自分が守るべき者が、守るべ

き存在があるならば」

「……人殺しの罪咎を背負うことができるか？」

「できます。この身が朽ちるまで、人殺しの罪咎は私のみが背負います。ですが、その罪咎も場合によっては重荷になることもなく、感じることもないでしょう」

「……人を守るために人を殺す矛盾にどう答える？」

「元より人にとって人は等価値な存在ではなく、ましてや、自身の大事な者、存在に勝るものはないでしょう。そんな矛盾は人類皆平等を信じられる豊かで幸せな者の世迷い言とも言えます。私にとって、その矛盾は知らずに蹴飛ばしてしまう路傍の石の如く無意味です」

「……人の尊厳を踏み躙り、人を殺すことに喜悦を得て、その血に酔うことはないか？」

「……所詮、人は動物。自らのエゴに生き、エゴに死ぬ存在。人は理性や社会といった様々なもので本能を抑えますが、やはり抑えきれるものではないでしょう。そして、野蛮な本能を満たす。ならば、私は私にとって大事な者を守るために、本能が暴走したり激発して制御ができなくなる前に、自らの意思で、理性の箍を一部外して本能を制御し、目的を達成させます。本能ではなく理性によって人殺しや暴力を制御できれば、必要以上に尊厳を傷つけたり、殺しに喜悦を得ることも、血に酔うこともないでしょう」

「……ふん、暴論だが、お前のその意気を認めよう。今、自分が言った言葉を忘れるんじゃないぞ」

俺の答えに満足したのか、課長はニヤリと口元を歪めてみせる。俺達のやり取りを見ていた他の連中も、どことなくだが、呆れているように見える。

そこに終業のベルが鳴った。

……今日はこれであがりだ。

「ラインブルグ。家で、お前を男にした少女が待ってるんだろう？　とっとと帰って、機嫌でも伺え」

非常に意味が紛らわしい課長の言葉に激しく反応するものがあったのか、何故かオフィス中から一斉に、リア充モゲロとか、とりあえず氏ねとか、本日の嫉妬団の会合の内容変更とか、淫行撲滅とか、ＹｅｓロリータＮｏタッチとか、母ちゃんカムバックとか、シスター愛してるとか、色々と聞こえてくるが、俺は気にしない。

いや、気にしたら負けだと思うんだよ。

そもそも、ミーアとは男と女の関係ではないぞ？　いやいや、それ以前に、コーディネイターの恋愛や結婚事情はいつの間にこんな無妻男や未恋男達を大量生産したのだろうか？　それともこの職場が変なのだろうか？

オフィス内の無妻男達や未恋男達と心温まる肉体言語での交流をこなしながら、帰り支度を済ませ、オフィスを出ようとしたら、また、課長が声をかけてきた。

「最後に一つ、聞きたい。……もしも、法が自分が守るべき者に牙を向けた時、どうする？」

「……法が狂ってるならば、法に牙を剥き、守るべき者が狂ってるならば、正気に戻して見せますよ」

「法の執行者が法に従わずに牙を剥くか？　はぁ、まったく、正直な奴だ」

俺は肩を竦めてそれに答え、ミーアがいつの間にか鍵を複製し、占拠し始めている自宅へと歩き出した。

今日の晩飯は何だろうかと想像しながら……。

11　殺人＝覚悟＝罪咎÷（犯罪＝断罪）（C．E．66年）（後書き）

10／09／05　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。
11／02／14　誤記修正。

12　加速×（社会＋不穏）⇒建軍＋入隊（C．E．68年　1）

生きることとは儘ならないことだとはわかってはいた。
それでも開き直り、生きていくのが人生だと思っていた。
それに以前、課長に大見得を切って、精神的にすこし図太くなって生き易くなった気もしていた。

「我が【Z．A．F．T】は諸君らの入隊を歓迎するっ！」

でも、流石に、人生で、いきなり、軍事組織に放り込まれるなんて、普通、想像できないと思う。

……。

いや、ほんとに、なんで、俺、こんなところにいるんだろう？

目前の壇上で堂々たる体躯の持ち主で、ザフト、うん、Z．A．F．T（Ｚｏｄｉａｃ　Ａｌｌｉａｎｃｅ　ｏｆ　Ｆｒｅｅｄｏｍ　Ｔｒｅａｔｙ）っていう軍事的組織の指導者的人物で……えーっと……パトリック・ズラ……だったか、が熱を込めて訓示をたれている。

で、それに熱狂的に応える俺より前に立ってる人達。

おかしいな、俺、保安特殊訓練校に来たはずなんだけどな、なん

て現実逃避しながら、過日、渡された辞令を思い出す。

―セプテンベル・スリー保安局員　アイン・ラインブルグ。
―マイウス・ファイブ保安特殊訓練校にて、三ヶ月間の研修を命ずる。

って、感じのことが書かれていたんだよな。

で、ミーアに、三ヶ月間の研修に出かけるから自宅を好きに使っていいってことと管理を頼むってことを伝えたり、職場の連中との送別会、というよりも帰って来るんだから、あれは激励会というべきか、を賑やかにやって、ミーアに休暇ができたら一度位は帰ってきて欲しいって言われたり、課長からは真面目な顔で、何があっても死ぬなよ、絶対に帰って来い、って、かあぁちょぉーーー、これのこと、知ってたんなら、はっきりと教えておいてくれよっ！

まさか、えっ、俺って、もしかして、仕事にかまけていたら、社会の流れを把握することを疎かにしてしまい、気がついたら、とんでもない社会の濁流に巻き込まれた存在って役所なのか？

いや、た、確かに、プラント評議会とプラント宗主国である理事国が自治獲得や貿易自主権、最近ではアンデルブロー号事件でごたごたしてるって、話では聞いていけど、いきなり、軍事組織に参加さ……せ……まさか、プラントの保安局がザフトに吸収されたのか？

恐らく、正解であろう答えに辿り着いてしまった俺は、平穏な生活が確実に、そう、保安局員をやっていた時以上に遠ざかったことを確信し、思い切り、肩を落とす。

しかも、この場に来てしまった以上は、いまさら辞めると言ったとしても拘束されるか、下手すりゃ、私刑にあった上に殺されるかもしれない。となれば、残る選択肢は参加するの一択のみであり、最早脱出は不可能だ。……後は流れに身を任せて、仕事だと割り切るしかない。

しかし、なんという罠！

……前世由来の平和ボケ感覚がどっかにあったのかもしれない。

こんなことなら、しっかりと井戸端情報や局内情報を仕入れたり、ケチらずにニュースペーパー購読しておくべきだった。

そうしたら、予防線、張れたはずなのに……。

だいたい、うちの保安局にはもっと、戦意旺盛、喧嘩上等、な阿呆はたくさんいるだろうに、何で俺なんだよっ！

やってらんねぇー！

これが、俺の、今の、心境っ！

自然、大きいため息をついて、左右の奴らから厳しい目で見られた。

慌てて、表情を取り繕って、殷懃に見えるようにする。

むむっ、厳しいプラント社会で鍛え上げた社会人必須スキルを舐めるなよっ。

……。

ふぅ、なんとか流せたようだ。

……。

「然るに、昨今のナチュラル共の増長は目に余る！　アンデルブロー号事件がそれを証明していよう！　我がザフトはあの悲劇を経て、もはや一刻の猶予も存在しないと確信し、二度とあの悲劇を起こさせぬよう行動を始めたのだ！」

どうやらズラ氏の訓話はクライマックスを迎えたようで、ズラ氏の口調にも熱どころか、気炎陶酔重圧沸騰高熱が宿っている。それにつられてか、顔を高潮させて壇上のズラ氏を見つめる奴やなにやら訓示内容に燃えるものがあったのか拳を握り締めて震わせている奴、レッツ劇画印ッ、やってやろうぜっ、て感じに隣の奴と拳をゴツンさせている奴と、ズラ氏の訓示に対する反応は様々だが、一様に肯定的なようだ。

「ここに集った諸君は、我ら新たなる種であるコーディネイターに対する、古き種に過ぎぬナチュラルからの謂れなき差別から、同胞を、そして、このプラントを守るための剣となるのだっ！」

……で、俺なんだが、うん、どう考えても、うん、浮いてる。

場の熱狂にどうにも馴染めず、仕方がないから、他に浮いてる人間がいないか、居並ぶ人々をチラリチラリと観察してみる。

……。

……。

……。

なんか、仮面つけた人と目があった気がした。

どうやら、その人もこの熱狂に乗れていないらしい。

……よかった、俺だけじゃなかった。

なんて、俺が安心していると、壇上のズラ氏の訓示が終わったらしい。

で、最後に一言。

「ザフトのためにっ！」

「「「ザフトのためにっ！！」」」

そんで、その場にいた、ほぼ全員が応えて唱和した。

でも残念、全員ではない。

この場の”のり”から滑り落ちてた俺に、そんな標語を叫べといわれても難易度が高すぎる。

いや、一応、クチパクで対応しておいたけどな。

まさに空気が読める男、アイン・ラインブルグ、である。

……はぁ。

今から鬱になる。

なに、この標語？

せめて、【ジーク・ナオン！】とか見たいにさ、【ジーク・ザフト！】って感じに、語呂良くしてくれよ。

まったく、もう……。

ズラ氏のスンバらしい訓示が終わった後、ザフトの新規訓練生達は、あらかじめ向かうべき場所を把握していたのか、バラバラと散っていく。

本当に、無駄に元気のいい人たちである。

……一体、何が、彼らをそこまで駆り立てるのだろうか？

「……君は行かないのかね？」

一人周囲の喧騒から取り残されていた俺に、なかなかの美声で声をかけてきたのは、さっき、目が合ったと思った、男にしては綺麗な金髪を伸ばしている仮面の人だった。

「……いや、俺はどこにいけばいいんだ？」

なんだろう、この、思い切り滑ったような沈黙は？

本当にわからないことを聞いて、何か悪かったんだろうか？

「……君は何を……いや、失礼、私の名はラウ・ル・クルーゼという」

「俺はアイン・ラインブルクだ。で、クルーゼさん、申し訳ないが、俺がどこに行けばいいか知らないか？」

「……面白いことを言うな、君は。初対面の私が君の行く先を知っていると思うかね？」

「ああ、確かに。……すまない、場違いな所に来たせいか、動揺していているみたいだ」

なんだろう、この、珍しい答を聞いたって反応は？

本当に鬱になる展開に動揺して、何か悪かったんだろうか？

「場違いなど……あまり、そのようなことをここで言わない方が良いと忠告しておこう」

「忠告、感謝するよ。……でもなぁ、実際の所さ、今からでも前の職場に戻して欲しいってのが俺の本音でな」

「……栄光あるプラントの剣であるザフトに……それもザフト訓練校の第一期生に選ばれておいて、そのようなことを言うとは……まったく……信じらんな」

「いや、選ばれておいてなんだけど、俺、ここに来るの自分から望んでないのよ。そもそも、俺の信条は万事平穏無事なんだ。だというのに、どうしてこうなったっ！　としか言いようがない強制参加だぞ？　他の連中ならともかく、俺にとってはまったくもって迷惑千万なだけであって、ありがたがるなんてとんでもない！」

なんだろう、この、嘘、信じられないって表情は？

普通に思い感じたことを答えて、何か悪かったんだろうか？

「……ならば、君は先程の演説を聞いて、何も感じなかったと言うのかね？」

「あっ、あれね。……あんなのただのコーディネイター至上主義者のコーディネイター優越演説だろ。んなもんは普段の生活で、たっぷりと聞いてるんだから、もうお腹一杯だよ」

「で、では、コーディネイターの権利が阻害されている、今の状況をなんとかしようとは思わないと？」

「うーん……義務を果たしている以上、権利を求めるのは別に悪い

ことじゃないから、何とかしないといけないな、とは思うけど、主張する権利が大いに阻害されてるってことはさ、それだけ、コーディネイターがナチュラルの嫉妬と怨恨を大人買いし過ぎた面もあるんじゃないか？　コーディネイターから見れば謂れがなくても、ナチュラルからすれば大いにある場合もあるだろうしさ」

「……コーディネイターの言葉とは思えんな」

「……最低限のコーディネイトしかされてない俺には、プラントの環境は生き辛かったからな。たぶん、それで世界を斜めに見てるんだろうさ」

俺のその答えが気に入ったのかはわからないが、何故か仮面の男は口元を歪めた。

「周囲を見返してやろうという欲はないのかね？」

「……そういう欲は、当然、あるにはあるが、程々でいいや、って思ってる」

「君は……本当に珍しいことを言う」

「そうかな？　ただ、人間、すぐに際限をなくすから、節度を無くさないように程々にしておこう、って自戒しているだけなんだけど？　それに、俺、大人だからさ、能力を比較して俺の方が優れてるなんて悦に浸るような程度の低い連中の戯言なんて、適当にあしらえるし、軽く流せるさ」

俺の言葉に何か感じるものでもあったのか、仮面の……面倒だから、クルーゼでいいや、クルーゼは口元の笑みを消した。

そして、再び、問い掛けてきた。

「……君は生まれについて……自身のコーディネイトに不満や怒りを持ったりしたことはないのか？」

「うん？　……そういえば、……生まれのコーディネイトには……特にこれといって、別に不満はもたなかったし、親にも文句を言ったことはなかったな」

急に、クルーゼの持つ雰囲気が鋭くなった。

……何故か、俺はこういう雰囲気を察することができる。

これは俺を鍛えた課長のおかげなんだろうか？

……まぁ、今はそんなことはどうでもいいか。

とりあえず、俺はクルーゼが口を開くのを待ってみる。

「……それは何故かね？」

その口から発せられたのは、疑問であった。

……語調から真剣な色が伺えたので、真面目に考えてみたら、その答えらしきものがすぐに浮かんできたので、そのまま答える。

「たぶん、生まれてきただけで祝福してくれた両親が、俺を俺として認めて受け入れてくれたからだろうな」

「っ！　……そうか。……長々と話してすまなかったな」

何故、そんなことを聞くのかという俺が疑問を口に出そうとした瞬間に、そう言うと、クルーゼは素早く踵を返して、俺の前から去っていった。

……俺、何か、怒らせること言ったかな？

何というか、凄まじいくらいに雰囲気が荒れてるというか、黒いというか、もう、瘴気が発生しているといってもいいくらいに何者かへの憎悪や絶望感を感じるのだが？

……それに、立ち去るクルーゼの握りこぶしから血が垂れてたようにも見えた。

……で、結局、俺はいったい、どこに行けばいいんだろう？

１２　加速×（社会＋不穏）⇒建軍＋入隊（Ｃ．Ｅ．６８年　１）（後書き）

１０／０９／０５　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

13　情熱ー冷静　熱血×迷惑（C．E．68年　2）

望まぬうちに参加させられたザフトの訓練施設にて、俺は今日も頑張っている。
だが、周りの連中は情熱炎上、戦意過多。
本当にこんな奴らが人類の新種なんだろうか？

「アイン・ラインブルグ！　お前は、今、プラントが置かれている状況に何も思わないのかっ！」

熱く語るのは結構だが、今はもう消灯時間寸前であって、あまりにも迷惑過ぎるんだよなぁ。

「いや、もう、夜も遅いから勘弁してくれ。何も言わないが、寝ているラウもきっと迷惑してるぞ？」
「む？　クルーゼは既に寝ていたのか。さらば仕方がない、今日はここまでにしておこう。……だがっ！　ラインブルグ！　少しはザフトの隊員に選ばれた意味を真面目に考えるんだぞっ！」
「はいはい」
「ッ！　……まだまだ話足りんが、今日はここまでにしておく！」

……はぁ、やれやれ、やっと帰ったか。

つい先程まで、俺に対して、自身が燃え上がりそうな程に熱血して語っていたのは、俺が所属することになったパイロット養成課程で、パイロット候補生の取りまとめ役をしているレイ・ユウキだ。
どうも俺の無気力振りが目に余るらしく、こうして夜な夜なやっ

て来ては一席ぶって帰っていくのだ。いや、ユウキの野郎が女だったら、もう少し真面目に聞く気になるが、所詮は男だし……ねぇ。

馬鹿なことを多々やらかす俺も、流石に、なんて非・建設的なっ、だなんて、ある嗜好を持つ人達が喜びそうなことをする気も起きないし、やる気もない。

……あれ、俺、何を馬鹿なことを考えてんだ？

「ふっ、毎晩、大変だな、アイン」

「なら、助け舟の一つぐらい寄こしてほしいな、ラウよ」

「何を世迷い言を、君が自分で蒔いた種ではないか。しっかりと刈り取るといい」

「……いや、お前が蒔いた分も、確実に俺の方に来ている気がするんだが？」

寝たふりをして、ユウキの演説講談を旨く回避したのは、同室となったラウ・ル・クルーゼだ。

こいつは俺と違って、普通以上に優秀な成績を収めているのだが、どうにも、他者との馴れ合いを嫌う質らしい。で、当然の如くというか、ラウもユウキの攻略対象……本当に、なんて非・建設的な表現だろう……になったらしく、共にプラントを守るためには仲間との協調が云々云々と一席ぶっていく。

いや、ユウキが言っていることは正しい事だと思うし、現実に正しいだろう。けれども、この訓練所で訓練している奴等も子供じゃないんだから、必要以上に馴れ合ったり、常に同じ意見を共有したりする程、仲良し子良しじゃなくてもいいような気がするんだよ。

そもそも、信頼なんてものは、すぐにできるものじゃなくて、少しずつ育まれていくものじゃないのか？　一方的な考えの押し付けからは信頼が生まれるとは思えないぞ。

……少なくとも、俺はな。

「アインよ、何を言っている。我らが候補生代表殿は君の素行だけでなく、低空飛行な成績も心配しているのだろう」

「いや、それこそ、ほっとけって言いたいぞ、俺は」

そうなのだ、この訓練校での俺の訓練成績は順調といってよいほどに低空飛行を続けている。なにせ、こちとら底辺コーディネイターだ。パイロット候補生として、パイロットに必要な技能を修めるにしても、その一つ一つをこなすだけで、もう、大変なのだ。プラント生活で後天的に会得した、不撓の努力と不屈の精神がなければ、今頃、とっくに逃げ出していただろう。

ああ、そうそう、ちなみに俺が何のパイロット候補生をしているかというと、何と、驚くことなかれ、某ＳＦアニメに出てきたような巨大ロボットだ。しかもしかも、そのロボットの名称は某ＳＦアニメと同じモビルスーツなのだっ！

いや、驚いたこと驚いたこと。もちろん、ロボットの名称が一緒なのも驚いたが、まさか自分が巨大ロボットの操縦をすることになるとは、想像もしてなかった。それに、俺も何だかんだと言ったってオノコだから、前世でもこういったものに憧れていた、はず、だし……。

……流石に……記憶が、薄れて……来てる、な。

……。

気を取り直して、だ。

今現在を生きている俺にしても、あのＢＯｕＲＵを作った身である。当然、こういったものは好きである。というか、大好きである。本当に巨大ロボットを自由自在に乗り回すという、漢の夢が実現できるなんて、なぁ。ここの訓練施設にやってきて初めて、良かったと思ったよ。

……話がそれた。

「俺は俺のペースでやるしか、出来のいい皆様には追いつけんのですよ、成績優良者殿」

「ふん、その口がよく言う。基礎ならば、私以上に習得しているのではないか？」

「所詮、愚直な底辺コーディの足掻きですよ」

「ならば、私は君に足元をすくわれないよう、注意しておこう」

こんな感じで普段から俺とラウはやりあっている。

いや、いいなぁ、こういう言葉の掛け合いって……。

ほんと、ザフト万歳、ザフト最強と刷り込んでくる洗脳施設のような場所でマトモな神経を保っていられるのは、これが清涼剤になってるからだ。

でも、長く生きている”俺”という存在と話が合いやすいなんて、精神的に成熟してると思うよ、ラウは。

いや、別に、俺とラウが世の中を斜に見ているからではないとは思う。

……たぶん。

で、万事がこんな具合だから、なんとなく互いに気兼ねをしなくなって、お互いをファーストネームで呼び合う様になったのだ。

まぁ、こんな感じでザフト精神に侵されていないせいか、或いは、一般的なプラント産コーディネイターとは精神的な土壌が違うせいなのかはわからないが、俺とラウはこの訓練校で浮いた存在になりつつある。

また、この浮いた存在という言葉には、先の一般的なザフト訓練生と異なる精神性といった意味合いとは別に、他にももう一つ、パイロット養成課程の成績面も意味合いとして含められるだろう。もっとも、ラウは高値の花的な存在、俺は路傍の石的な存在としてだがな。

そう、路傍の石的存在の俺をまともに俺という個として認めているのは、目の前にいるラウと暑苦しい奴だがユウキだけだ。

一般的なコーディネイターだと、路傍の石には興味がないか、優越感の元にするかのどちらかだろう。

現に、今までも優越感に浸りたい奴等から様々なハラスメント……はっきり言って、鼻で笑い飛ばせるレベルだったが……を受けた

りすることがあった。
　それに俺だって、幼少時に同年代のコーディネイターにボコボコにやられて以来、肉体言語を勉強してきたのだ。当然、相応に上手になったから、こういった”言葉”をかけられても相手に”言い返して”やれるようになったし、負けたとしても、かつてのような一方的敗戦は起こらない。
　そもそも、そういう詰まらない”ちょっかい”を出してくる奴らに限って、直情的で単純な奴等ばかりだから、面白い位に心理戦で動揺したり、こちらが望む状況を構築するための誘導に引っかかったりしてくれるから、逆に精神的な充実感すら覚える時がある。
　ついでに言うと、言葉の揶揄なんてものは最早慣れ過ぎており、屁の河童である。言いたい奴には、好きに言わせておけばいいし、そんな奴等の相手をするだけ、自分の品位を貶めるだけだからな。

　……俺の現状はさて置き、何の因果か、はぶられた者同士が同室のルームメイトになった為、一部例外がいるものの、他のコーディネイターの出入りがない部屋となっている。おかげで、訓練時以外は非常に気楽な生活を送らせてもらっている。

「さて、明日も辛い辛い一日がまた始まるからな。俺はもう、寝るよ」
「何を言う、君にとっては、楽しい一日がまた巡ってくるの間違いではないのか？」
「そっちこそ、言ってろ。……ふぁぁぁぁあ、んじゃ、寝る、おやすみ、ラウ」
「……ああ、私も眠ることにするよ」

ラウに眠りの挨拶をした後、ベッドに横たわり、瞳を閉じる。

確かに儘ならぬのが人生だが、前向いて生きていったら、そうそう捨てたものじゃないとないと思うんだよな。

……。

では、本日のアイン・ラインブルグ個人商店は、これにて営業終了である。

……おやすみなさい。

しかし、ラウも寝る時まで仮面をつけたままだなんて、変な奴だよなぁ。

なにか、理由でもあるのかねぇ？

まぁ、機会があれば、聞くことにしよう。

13　情熱ー冷静　熱血×迷惑（C．E．68年　2）（後書き）

10／09／07　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

１４　操縦×習熟☆基礎＋整備（Ｃ．Ｅ．６８年　３）

この訓練校で訓練を受けている俺が一番楽しんでいること。
それは言うまでもなく、モビルスーツの操縦だ。
これほど、男のロマンを充実させてくれるものはないだろう。

「ラインブルグ候補生！　早くハンガーに戻って来い！　そのような曲芸を行う必要はない！」

別にいいだろ、三回転半ジャンプをするぐらいさ。

……。

実機演習の後、指導官室でＭＳ操縦指導官から浴びせられる凄まじいまでの罵詈雑言を右から左に、左から右にと受け流して、毎度毎度の説教時間をやり過ごした俺は、ＭＳが並べられているハンガーに戻ってきた。２０ｍを超える鋼鉄の巨人達が並んでいる光景はいつ見ても壮観である。

「まったく、アインよ、さっきの機動はいったい何かね？」

飽きずにＭＳを何分も見ていたら、何やら整備員を話をしていたラウがこちらにやって来て声をかけてきた。

「いや、三回転半ジャンプ」

「……何故、君はいつも余計なことや馬鹿なことをする？」
「当然、それがロマンだからだよ」
「……ふぅ、理解不能だな」

ふぅ、これだから優等生は……。

「いいよいいよ、理解不能でさ。馬鹿の思考は秀才君にはわかりません。……だいたいだな、あんな機動あんな機動って皆して言うけどな、ああいう機動も、もしかしたら、ＭＳの可能性を探ることにつながるかもしれないんだぞ？」
「……それで、本音は？」
「だから、少しぐらい変わった機動をして、遊んでもいいだろう？」
「まぁ、それが君の考えなら、それを固持するのもいいだろう」
「うんうん、そうだろうそうだろう」
「……だが、それは君の考えであって、他人に通用するとは限らんぞ？」
「ふ、ふふ、侮るなよ、ラウ。このアイン・ラインブルグ、我が言い分の一つや二つ、他者にも通用させて見せよう！」
「ならば、君の後ろにいる人物にもそう言ってみるがいい」
「……えっ？」

俺が後ろを振り向いたら、整備員候補生のおっさんが腕を組んで、仁王立ちしていた。

しかも、額には＃に見えるほどに血管を浮き立たせながらだ。

そして、俺はラウの何気ない誘導による謀りを悟る。

「お、おのれぇいい、ラウ、謀ったなぁぁぁっ！」

「ふふ、せいぜい、君が今のした軽率な発言と昨日のアレを私に食わせたことを悔やむがいい」

な、前者ならともかく、後者の納豆をお前が食った件は自己責任だろう！

「ま、待て、ラウッ！」
「待てと言われて待つような輩はおらぬよ」
「くあっ、正論だっ！」

……よし、馬鹿なことを言って、後のおっさんの気が逸れた今のうがっ！

……。

うぅ、掴まれた肩がミシミシと音をたててイタイデス。

「……さて、ラインブルグ候補生殿？　先程の機動について、整備の方からすこーしＯＨＡＮＡＳＩしたいんだが？　ああ、もちろん、その道で有名なＮＯＨＡＮＡ式を源流に持つ、ザフト整備員候補生式の肉体言語でだがな」

の、ノォォォおおおおっ！！

……。

ザフト整備員候補生達との、訓練校史に残ってもおかしくない程に激烈な肉体言語での会話の後、俺は機付き整備員であるマッド・エイブスと俺がついさっきまで訓練に使用していたＭＳ【ＹＭＦ－０１Ｂ】、通称プロトタイプ・ジンの点検整備を行っている。

エイブス曰く、お前も整備員の苦労を味わえば、二度と馬鹿なことをすることはあるまい、ということらしいが、残念、俺は全然懲りないぞ。

っていうかぁ（→）、このプラント脅威の技術力の結晶である機械をぉ（←）、弄る機会が発生するってことだしぃ（→）、むしろ小躍りしてやるって感じぃ（→）？

……今、何か、頭ん中が変になってたな

さっきの話し合いの影響か？

まぁ、気にしたら負けだから、気にせずにいこう。

話を戻して、俺がＭＳを整備するとはいっても、本職じゃないから、簡単な場所を誰かの監督下でしかさせてもらえない。今もエイブスの監督の下、回転した際に生じた力が機体にどのような影響を与えているかを調べるべく、センサーの類を背負いながら、上下左右に機体の周りを動き回っているくらいである。

「まったく、お前さんも機体を整備する整備員の立場になって動い

てくれよ」
「おいおい、何言ってんだよ。エイブスが俺に、お前の操縦は教本や基本通りになりすぎて機体の消耗が普通すぎる。もっと、整備の練習になるようにしろ、って言ったから、機会を作ってるだけじゃないか」
「……半月前のあの時、お前に言質を与えるような馬鹿なことを言った自分をぶん殴ってやりてぇ」

ふふふ、あの時のエイブスの言葉はありがたかった。丁度、その頃には機体制御に関して、基本動作を習熟し終わっていたからな、様々な可能性を試すいい機会だったのだ。

「だが、まぁ、馬鹿なことをやっている割には、お前の操縦が機体に与える影響は、意外と少ないな。あれだけ派手な動きをしたのに、間接の磨耗や油圧系への負担とかも、他の奴らよりも少ないくらいだしな」
「……いや、一応、これでもＢＯｕＲＵの開発に参加した身だからな？　どう動けば、機体への負担が軽減するかぐらい、計れるって」

機体の特性を理解せずに、ただただ、自分の思い通りに動かすために、無理矢理といって良いほどの荒い動かし方をする、他の連中と同じにしないで欲しい。確かに武人の蛮用に耐えるのが良い兵器の条件だが、使用者がそこに甘えてしまうのは、また違うことだと思うのだ。

そんなことを考えていると、センサーに表示される数値を確かめていたエイブスがまた話し出した。

「おお、そうらしいな。……しかし、ＢＯｕＲＵか」
「エイブスもＢＯｕＲＵを弄ったことあるのか？」

「ああ、俺も一度、ＢＯｕＲＵを弄る機会があった。……あれには魅せられたな」

どこかうっとりしたように、しまりのない顔を浮かべる中年初期型のおっさん。普通ならば、色気があったり美人だったり、スタイルのいい女のことを、見たり考えたりした時に浮かべる表情なのだろうが、彼が考え、思い浮かべているのは球体の作業機械である。ほんとうにありがとうございました。

……いや、でも確かに、ＢＯｕＲＵの丸みってのは、実は、こう、中々に女性的なんですよ？

こう男の夢が一杯詰まった御乳のような……。

延々と、撫で回したくなる御腰のような……。

思わず、顔を埋めたくなる御尻のような……。

……むぅ、俺程度では、あの曲線美は形容しがたいな。実はＢＯｕＲＵって、こう、球体といっても、完璧な球体じゃなくて、どちらかと言えば、楕円で、その曲線が女性のウエストからバストに至る曲線に、こう、に……はっ！

いかん、俺までエイブスワールドに引き込まれていた！

って……あ、ああぁ。

たまたま、通りかかったそこの情報管制過程の美女な人、お願いだから目を逸らさないでくれぇ！

あぅあぅあぅ、航法管制過程の可愛い女の子にすんごい気の毒そうな目で見られたっ！

しかも、何気にラウがキャットウォークからこちらを見下ろしながら、ニヤリって笑ってやがるっ！

「よし、ラインブルグ！　今日は整備候補生の有志連中と一緒にＢＯｕＲＵの可憐で美しい曲線について語り合うから、お前も付き合えっ！」
「いいっ」
「ふふふふふ、久しぶりに燃えてきたぞっ！」

そんな訳で、俺は整備候補生の会合に強制参加させられた。

……何気に楽しかったのは、俺が機械フェチの気があるからだろうか？

少し気になった。

ついでに、毎晩恒例の独演会にやってくるユウキも、言葉巧みに

会合の場に誘い出して、巻き込んでやった。

くくく、これで奴も機械フェチの道を歩き出したに違いない。

……。

しかし、ラウを誘き出すことはできなかった。

やはり、奴の危機回避能力は侮れない。

それらを上回るだけの策が必要だ。

……そうだな。

……。

よし、奴への反撃……げふんげふん……ルームメイトの健康のために奴が愛飲しているグリーンティの袋に、乾燥蒼汁でも混ぜ込んでおくとしよう。

14　操縦×習熟⇔基礎＋整備（C．E．68年　3）（後書き）

10／09／06　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

15　（指導＋無視）×怨恨⇒模擬＋戦闘（C．E．68年　4）

訓練所にやって来た時と今を比べて、俺も少しはザフトに染められたんだろうか？

……自分では、あまり変わっていないように感じる。

ああ、でも、少しは自分でも変わったと言える所があるにはあるか。

「本日の搭乗が最終試験となる。諸君の実力をみせてもらうぞ。……ザフトのためにっ！」

この、なんとも恥ずかしい標語を、素面で叫べるようになったことかさ。

……自慢にならねぇなぁ、おい。

だいたい、何故にこんな標語なのか？

いい加減、ジーク・ザフトッ！　に直そうぜ、頼むからさ。

そんなことを考えながら、いつも以上に意気軒昂な指導官に、こちらも初っ端から最高潮なパイロット候補生全員と一緒にいつもの標語を叫んで応えたら、ふと、何で、俺、こんなのに参加してるんだろうと思ってしまった。

そしたら、もう、何だか、無性に自分自身が可哀想に思え始め、少しはあったテンションが急転直下、どん底へと真っ逆様である。

がっくりと肩を落とした俺を見て、俺がこの試験に自信がないとでも思ったのか、幾人かが嘲笑や軽侮の言葉を投げかけてくるが、それは見当違いである。

いい加減、膝が床へと落ちそうになった時に、ラウが声を掛けて来た。

「……アイン、まだ、慣れないのかね？」

「いや慣れていたつもりだったんだが、ふと、な、正気に戻ってしまってな……」

「それは恐らく、人として正しいのだろう。……だが、この場では間違いだな」

「わかっちゃいるんだが……」

「ならば、割り切ることだ」

流石、パイロット養成課程の秀才ラウ・ル・クルーゼ！

羞恥すらも、その澄ました顔で克己したというのか！

どのような時でも沈着冷静、あな恐るべし、ザフト所属、素性不明の謎めいた仮面の男！

「何を考えているか、大体は想像できるが、その通りだと言っておこう」

ぬぅ、短い付き合いなのに、何故にこうも簡単に心中を読まれてしまうのか？

どんな時でも明察看破、あｎ（略。

「……君の顔があまりにも雄弁過ぎるだけだ。馬鹿なことを言っていないで行くぞ」

おれ、しゃべってないよ？

なんて具合に、ラウとのやりとりで少しだけ癒された俺は、テンションが少しだけ上がった。

うん、これが終われば、ようやく娑婆に戻れるんだから、出来る限り、頑張ろう。

なんてことを考えていた時代が、俺にもありました。

「ちょっ、なんで俺の競争相手がパイロット課程主席のユウキなんだよっ！」

「……私から自ら志願したのだ。……君の減らず口と曲がった根性、それに目に余る程の怠惰で無気力な精神を叩きなおし、ザフトの栄光をその身に焼き付けるためにっ！」

「いや、いやいや、んなもん焼き付ける必要ないから！　つか、試験は別にＭＳ同士で格闘したり、撃ち合ったりするんじゃないんだからな？　動目標や標的に向かって突撃機銃を撃ったり、得物をぶん回したり、機動制御の確実性をみたりするだけだから、な。落ち着け、そして、相手をラウに変更しろって」

「クルーゼは立派にザフトの一員としての自覚を持っている。だから、大丈夫だ。……だが、君は……きみは……きみわぁ……」

うわぁぁ、通信画面越しで見るユウキの顔が、クリアな画面越しだと絶対に細かいところまで見えるはずなのに、何故か、顔半分が翳に隠れて、表情が読み取れん！

しかも、ブツブツぶつぶつブツぶつぶっちキルってぶつぶつ、ってぼそぼそと洩らすもんだから、最早、ホラーの領域だぁっ！

「お、落ち着け、ドゥ、ドゥドゥ！」

「ふ、ふふっ、何をいっていルんダ、ラインブルグ？　ボクハとて

モ堕血ツイテ、ソゥ、コンナニスベテノモノがオソクミエルＣＲＹには乙チテイルゾ？」

アドレナリンが分泌しすぎて、言語野が逝かれてるぅぅ！

こ、ここは何とかして、この危地から離脱する方法を考え出さねばっ！

……あっ。

……な、なんてこった。

すでに、俺はＭＳには搭乗してしまっている！

くっ、これでは逃げ道が限られすぎている。

だ、だが、俺はあきらめない！

俺がプラント社会で鍛えたこの口八丁よ、出番だぞ！

「ユウキ……主席のお前……あまりにも優秀すぎて雲上人の如き、お前とな、地べたを這いずって、必死で生きてきた俺とをなんて、比べる必要なんて別にないだろう？　ただでさえ、常日頃から底辺にいて凹んでるというのに、こんな最終試験なんて重要な場で比べたられたら、余計に俺が立ち直れなくなるかもしれない位には凹む

可能性が少しはあるだけだから、な。……俺を社会的にじゃなくて、物理的に抹殺するための公開処刑なんてやめて、な？　真っ当な道、お前がいつも言う輝かしいザフト正義の道に戻ろうぜ、な？　ほら、例え、ダークサイドに落ちたじゃなくて、落ちかけたとしても、今からならまだまだ輝きを取り戻せるし、絶対に立ち直れるから、な？　まだまだ遅くはないから、な？　……指導官、黙ってないで、こんな結果がわかりきっていることをさせないで、ユウキの奴を何とか止めてくださいよっ！」

「……ラインブルグ候補生。この最終試験では、お前たちだけに特別に、そうっ、特別にっ！　通常試験終了後にＭＳ同士の模擬戦闘を行うことになっている」

な、なん……だと……！！

「ラインブルグ候補生、この最終試験では、規格外品である君を評価するために、予想外の事が大好きな君が大喜びするであろう曲芸が大いに出来るように、私の方で、プログラムを工夫したのだよ。そういう訳で、今回のユウキ候補生の志願は、本当に、渡りに船であったよ。……この私の、そう、この私のっ！　素晴らしく解り易い指導を毎回毎回、ヘラヘラヘラヘラ、右に左に、左に右に、と素通しさせて避けてくれた君が、このような公の場で、見苦しい苦悶と聞き苦しい悲鳴とを衆目に晒すのを特等席で見聞きできるという喜悦に浸れるのだからな」

いや、あんたっ、指導官っ！

その表情や口調から察するに、それ絶対、あんたの私怨が多分に入ってるって！

つか、後半で本音がダダ漏れになってるぞ！

どうする、俺！

俺、どうすんのぉぉぉぉ！

はっ、そうか。

これはゆめだっ！

わるいゆめなんだっ！

お、俺の体よ、はやく、この悪夢から覚めてくれぇぇぇぇ！！

「では、これより試験を開始する。二人の健闘を期待する」

……現実は非情だった。

こうして俺は、最終試験において、課程主席であるユウキとＭＳ同士のガチバトルをする羽目になってしまった。

15　（指導＋無視）×怨恨⇒模擬＋戦闘（C．E．68年　4）（後書き）

10／09／09　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

16　試験×闘争＝（回避＋機動）×賞賛（C．E．68年　5）

確かにこの騒動は自らが蒔いた種から芽吹いたものではある。
けど、毎晩毎晩、人の迷惑を考えずに押しかけてきた同期とかさ……。
画一的で、教える者の性質にあった指導が出来ない指導官とかさ……。

「逃げるな！　戦え！　ラインブルグ！」

全てが全て、俺が悪いとはいえないと思うんだけどなぁ。

……。

どうしてこうなった！　なんて内心で踊りだしたくなる位に、我が身に降りかかった不幸の原因を探る思索に耽りながら、俺は【ＹＭＦ－０１Ｂ】プロトタイプジン……面倒だから略してプロトジンを操縦している。

操縦のために両手両足をフルに使い、目はメインモニターに集中させ、耳は各種警報音がでていないか、注意する。

「っ！」

ユウキが重突撃機銃を構えたので、すぐさま機体側面の姿勢制御

バーニアを噴射し、回避軌道をとる。

「避けるなっ！　ラインブルグゥゥうっ！」

いや、普通は避けるだろ、常識的に考えて……。

「避けるなと言われて、避けない奴がいるかっ！」

「なら、避けろっ！」

……ほ、本当に大丈夫なのか、ユウキの奴？

サブモニター越しで、ユウキが普段の姿からはとても考えられない言動をする姿を見るに、実は今までの生活でストレスが溜まり過ぎていて、今日、この時が切欠になって、一気に噴出してしまったのではないかと疑ってしまうぞ。

でも、まぁ、このまま逆上していってくれれば、付け入るチャンスくらいは生まれるかもしれない。

「避けるなっ、底辺！」

「そうだそうだっ！」

「ははっ、臆病者に相応しい姿だな！」

それにしても、先程から何やら通信系から外野が試験中にも関わらずキャンキャンと吼えてくれているが、相手をするほどの内容ではないのでっ、……俺は気にしない。

「っ、ぁっと」

はい、今も、こちらに撃ち込まれた重突撃機銃のペイント弾を、

全弾回避しました。

ふふん、動体目標を撃つ時みたいな上手な予測射撃をしたとしても、こちとら意思がある標的で、しかも、人と同じような動きができるんだぜ？

そんなんじゃ、ちょっと回避行動にフェイントを取り入れただけで当たらなくなるさ。

ははは、中らなければ、どうってことないのだよ！

中らない銃弾など、デブリ以下だっ！

なんて、俺格好良い、なんてことを考えていますが、実は身体にかかる負担が、すごいことに……。

……いやね。

こっちはユウキのプロトジンが構えてる機銃の向きと腕の予備動作で弾道を予測して、弾が当たらないように必死に心臓をバクバクいわせながら、急加速と急停止を繰り返してるんだよ？　前後左右上下、すべての方向から圧し掛かってくるＧだけでさ、身体中のあちらこちらから悲鳴が上がってるのよ。

一つ一つの動きに神経使って、相手の動きとその周辺環境に目を配って、何が使えて使えないか判断して、相手はどうするか予測して、予測が外れても動揺しないように、幾つも対応パターンをとっさに出せるように心構えしておいてさ、もう、体内のエネルギー消費は凄いことになっているに違いない！　ＭＳのパイロットやってるうちは、糖尿病になることはないだろうな。やめた後はわからんが……。

「……ふぅっぅっ！」

おっと、まだ甘いな。

こちとら、伊達に遊んできたわけじゃないんだ。

回避機動パターンの研究もやってきたんだぜ？

とはいえ、こちらの攻撃が上手くいくとはいうことではない。

……といいますか、まだ、こちらから手を出せないのだ。

なにせ、攻撃を機動に取り入れられなかったからな！

……流石に、三ヶ月という時間は、俺にとって、短すぎたのだ。

でも、機体制御の習熟だけでも精一杯頑張ったんだよ？　普通、底辺コーディネイターが、訓練開始当初はダントツで最下位だった存在が、初めてＭＳに乗った時にジャパニーズＤＯＧＥＺＡを披露した存在が、御立派なコーディネイターで、しかもパイロット課程主席の存在と、なんとか舞踏を踊ってるんだぜ。

純粋に、凄いと思わないか？

……ほら、こいつを見てくれよ、どう思う、この機動？

……すごく、お……いかん、疲れてきたせいか、思考回路がおかしくなってる。

とにかく、何が言いたいかというとだな。

誰か、俺を誉めてくれよ！

「ラインブルグ！　てめぇにはタマがねぇのか！」
「逃げてばかりなんて、臆病者で能無しな、できそこないにはぴったりだな」
「……ラインブルグ候補生、君には敢闘精神が足りないようだな」

るせぇぇぇ！　外野は黙ってろ！

くそっ！

さっきもそうだが、今、返事をしな……できなかったのも、ほんとは相手の言葉に返事するような余裕がないんだよっ！

つか、外野がうるさくて、こっちの集中が乱される！

……むぅ。

……なにか、ナニカ、ホウホウハナイモノカ。

……。

……。

ユリイカッ！

……この角度。

……このライン。

……対象との射線軸に相手を挟み込んで。

……相手が給弾する瞬間を待って。

……ッ！

……。

……クぁ！

……チャンスっ！

デブリの一つに着地して、姿勢を低く、腰をしっかりと据えて、構えて……うしっ。

てめぇら、こいつを喰らいやがれぇぇぇぇ！！！

何てことは表に出せないので内心で叫びながら、無言で、断続的に突撃機銃のトリガーを引く。

ついでに、まるで射撃の反動を計算してないかの如く、腕をぶらせつかせる。

……よし、これでいかにも射撃したらとしたら重突撃機銃の反動を上手く捌けなかったように、無様に失敗したように見えるはずだ。

後は、結果をご覧じろ、だ。

……。

……外野が微かなノイズを残して沈黙した。

素晴らしい、これぞ、俺の怒りと執念が生み出した、必殺の一撃！

上手く、外野が陣取っていたＭＳ訓練艦の管制塔のどこかに見事に命中したようだ。

……いや、真面目に仕事していた皆様、ごめんなさい。

でもね、こっちも真面目にやっていて、起きた出来事なんだ。

だから、許してほしい。

本当に、事故とは恐ろしいものだな。

……ふふふ。

「ついにやる気を出したか！　ラインブルグ！」

で、残りは目の前で俺の一連の行動を勘違いして受け止めた我らが主席殿だ。

何か、今の射撃で、いい具合にヒートアップしたね。

だが、しかぁあしっ！

「おぉぅうとぉぉっっ！」

まだ、中らん！　中らんよっ！

――主人公が己の限界に挑戦中のため、しばらくおまちください
――

……はふぅ、よ、ようやく、ユウキの銃が弾切れた。

身体がガタガタだし、機体情報にも幾つか警告が出ている。

流石に、機体にも身体にも、無茶をさせすぎたな。

「くそっ、弾切れか！　だが、まだ、サーベルが残ってる！　行くぞっ！」

「……勝手に、どこぞに、でも、行けば、いいさ」

……さて、ここからが本当の意味での本番だ。

なにせ、機動に攻撃を混ぜ合わせるのは、俺にとっては初めてのことだからな。

……とはいえ、元より失敗して当然なことなのだ。

ならば、思いっきり、いろいろと工夫してしてみたり、試したいことを試してみよう。

……では、この茶番の終わりを始めよう。

「ここからは、ずっと、俺の、ターンだっ！」

……えっ？

……あっれぇっ？

なんで、ＭＳが割っては入るの？

「ユウキ候補生とラインブルグ候補生の両名に告げる！　先程、ラインブルグ候補生が撃ったペイント弾が流れ弾となり、そのうちの一発が訓練艦の管制塔に命中したことで管制機能に支障が生じた！　そのため、以降の試験内容を試験官がモニターできなくなったため、試験は終了されることとなった！」

えっ？

嘘、マジですか？

こ、これから、やっと、おれの、俺の時代が来ると……。

「よって、両名はＭＳを速やかに訓練艦のハンガーに移動させ、以後の指示を待つように」

……はぁ。

「……ここからは私見だ。今のＭＳ同士の模擬戦闘は、ＭＳ開発当初から関わってきた私にとっては、非常に興味深く、また、心躍らせるものだった。今日、この日、この訓練艦に来ることができた幸運を私をここに寄こした設計主任と運命の神に感謝したいほどだ。君達が模擬戦闘で見せた一つ一つの細やかな動きや一連の流れるよ

うな動作を、今後のＭＳ開発やＭＳ戦術機動へと役立たせることを約束しよう」

……はぁ、そうですか。

「ふふ、ラインブルグ候補生。それほどまでに君達の機動は素晴らしいものだったのだよ。ユウキ候補生の機動射撃、ラインブルグ候補生の回避機動、両者共に実に合理的でＭＳの特性を引き出していた。これは他の候補生には見受けられなかったものだ。……あぁ、もちろん、全員ではなくて、君たちと同じぐらいに見所のある者は当然いたがな。だが、見所があると言われて慢心されては困る。これからも油断なく腕を磨くようにな。……これからの両名の活躍を期待しているぞ。……以上だ、さぁ、行動に移りたまえ」

促されて、ＭＳを訓練艦へと向かわせる。

なんか、ユウキが言っているが耳に届かなかった。

……。

うん、実は、今、とても、嬉しいのですよ。

訓練所で、こう、まともに認められて、初めて褒められたんだから、仕方がないよな、うん。

……。

……なんか、最後の最後で、思いもよらない、いい思い出ができたよ。

16　試験×闘争＝（回避＋機動）×賞賛（C．E．68年　5）（後書き）

10／09／09　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

17　課程＋修了⇒制服＋帰宅（C．E．68年　6）

本当に色々と大変だった訓練所生活。
それでも、終わってしまえば、懐かしさすら感じてしまう。
そんな具合で迎えた訓練所の修了式。

「修了成績上位十名に成績優良の証である赤を与える。名を呼ばれた者は壇上に上がるように」

いや、俺には縁遠い世界だなぁ、あの壇上は……。

……本当に。

なんて考えていたんだが、ところがどっこい、縁遠い世界のはずなのにすぐ近くに縁があった。それはもちろん、パイロット課程主席のレイ・ユウキと課程三位のラウ・ル・クルーゼの両名である。

「赤色はジャケットの裾が長いようだな」
「……ふむ、だが、これといって動きを阻害するわけではなさそうだが？」

訓練課程が修了して、兵士として部隊に配属される場合、普通の軍隊ならば階級章でも受け取るものだろうが、あくまで軍事的組織、義勇兵組織であるとするザフトでは、ザフトの制服を受け取ることがザフト流の修了証明になるようだった。

で、その訓練成績で優良だった十名に派手で鮮やかな赤色の制服が与えられ、他の残りは上位の引き立て役の如く地味な緑が与えられる。当然ながら、俺は前者の二名と違い、緑色の制服である。……まぁ、簡単に、ザフトでは、緑が平、で赤がエリートって覚えたらいいだろう。

とにかく、ザフトでの配属先が修了式後に発表されると、招集日までの帰宅が許可された。久しぶりに帰る我が家に心躍りながら、踏ん反り返ったお偉いさんから赤服を賜った二人に別れの挨拶をしようとしたら、両名共、何故か、御宅拝見とばかりについてくることになり、現在に至る。

「いや、なんで二人とも付いてくるんだ？　俺の家なんて、どこにでもある普通の家だぞ？」
「なに、友と呼べる存在の家を見てみるのも悪くないと思っただけにすぎんよ」
「……訓練所を出所もとい自由になった君が大いに羽目を外して、ザフトに泥を塗るような行動をしないかと、心配しての行動だよ」

……どちらがどちらだなんて、言わなくてもわかるよな？

そんな奇妙な道連れ二人と共に、プラントの各コロニー間を結ぶ定期連絡船に乗り込み、ザフトの秘匿訓練所があったマイウス・フアイブと呼ばれるコロニーを離れ、俺の家があるセプテンベル・スリーへと向かった。

コロニー間を移動中、連絡船の内からはずらりと並んだプラントの天秤型コロニー群が見えた。宇宙港がある中心を軸に回転している姿が整然と並んでいるのは、少し滑稽なものがある。だが、自然

に挑み続ける人という生物の凄さを、改めて認識させられる壮観であることに変わりはない。

そのプラントのコロニー群だが、現在稼動して人が居住しているものが８８基存在している。予定では全部で１２０基のコロニーを建設するらしいから、まだまだ建設途上といったところだ。

ちなみにプラントでは、この整然と並んでいるコロニー群を一列１０基で一纏めの行政区分としており、その区分一つで一つの市を構成している。そして、建設予定も含めたプラントのコロニー全１２０基を行政区分の基数である１０で割ると、１２の区分つまりは１２の市がプラントに存在しているということになるのだ。

もっとも、定数である１０基全てがそろっているのは、アプリリウス市ぐらいで、他は多少増減する程度でほぼ同じぐらいだ。

……あっ、でも、確か、農業系分野を得意とするユニウス市は、ほぼ全てのコロニーが完成しているんだけど、内部に建設する農業関連施設でプラント理事国とプラント評議会が色々と揉めているらしく、正式稼動が延期されているから、数が少なく見積もられているんだったな。

うーん、宗主国である理事国は、生産拠点であり植民地でもあるプラントの自給自足を恐れてるのかなぁ。

……。

まぁ、難しいことは置いておくとしてだな。

……。

……やっぱり、ここのコロニーって、天秤って言うよりも、砂時計だよなぁ。

◇　◇　◇

さて、帰ってきました、懐かしの我が家。

おお、おお、前庭や庭木、いつの間にかできている花壇が、ちゃんと綺麗に手入れされてますよ。

「ハウスキーパーでも雇っているのかね？」

「そんな金はないよ。懇意にしている隣家の人に管理をお願いしておいたんだ」

「ら、ラインブルグがまともな社会生活をしていたなんて……」

……ユウキとはＮＯＨＡＮＡ式で話し合う必要があるかもしれない。

くっ、俺の左腕がっ、ユウキの血を求めて、疼きやがる！

……。

……左腕を押さえつけている姿を想像するだけで、結構、いや、かなり痛いな。

……はぁ、馬鹿なこと考えてないで、さっさと家に入ろう。

なんせ、久しぶりの我が家なんだからなっ！

では、気を取り直して、玄関のドアの鍵をぶふっ！

いだだだだだっ、衝撃にドアがいきなり走って頭蓋が開いて撃破されたっ！

「えっ？　あ、アイン兄さん？」

うぐっぐぐぅ、そ、その声は、み、ミーアか？

……な、何というバットタイミング、ミーアがたまたま開けたドアが俺の鼻頭を直撃したっ！

さ、流石は、ミーア・キャンベル。

俺の隙を付くなど、普段の少々抜けたところからは想像も付かない荒業だ。

……で、おい、後ろのお二人さんよ。我慢しているようだが、こ

っちにも聞こえるぐらい笑いが漏れてるぞ？

何とか痛む顔面を押さえながら、立ち上がり、目を見開いて、俺を見ているミーアに帰宅の挨拶を送る。

「た、ただいま、ミーア」

「……お帰り、アイン兄さん」

うん、いいなぁ。

潤いがない殺伐とした生活を送ってきた身にとって、ミーアの存在と交わす挨拶は、とっても癒される一瞬だよ。

「わ、わわっ、兄さん、変な仮面をつけた変態さんとその手下の頼りなさそうな人がいるよっ！」

なんて油断していたところに、な、なんという暴言！

お、お兄ちゃんはそんな風にミーアを育てた覚えはありませんよっ！

「……彼女は間違いなく、アイン、君の妹さんだな」

「て、手下の上に頼りない、だと……」

い、いや、ミーアは妹じゃなくて妹分だってって……。

ふ、二人とも落ち着け、まだ、子供が言った戯れ言じゃないか。

ってか、こ、声と雰囲気になんか、鬼気あふれて、すごいことに

って、げぶぅうぼぉぁぁぁーーーーーー！

その日、俺は、星になった。

いや、自分で言っておいて、なんだが、これは冗談だからな？

無茶しやがってとか、後ろにつけ加えるなよ？

これからザフトで間違いなく危険に関わるんだから、な？

……いや、でも、ほんとに星になったら、洒落にならないなぁ。

再度、気を取り直して、玄関前にて白昼堂々と行われた赤服の二人による理不尽な暴力から何とか立ち直った俺は、ラインブルグ家に二人を招きいれた。

その場に俺以外の人間が三人いて、招くのが二人というのは、ミーアを数に入れていないからである。ミーアは当然、招き入れる側なのだ。数に含めていないのは当たり前のことさ。もちろん、自慢の妹分を二人に紹介することも忘れていない。

「アイン兄さん、お茶はどうする？」

「……あ～、別にやす「ふむ、最高級品をお願いするよ、可愛いお嬢さん」」

「あははっ、可愛いだなんて……お世辞でもうれしいです。うん、わかりました。最高級品ですね」

くっ、ラウめ。俺の言葉を遮った、その先読み、流石だと褒めておこう。

……だが、こちらにニヤリと笑ってみせる様は確かに変態っぽいぞ？

俺とラウが目線で会話をしている間に、ラウのよいしょに機嫌を良くしたミーアがリビングからキッチンへと向かった。その慣れた動きに、この家で過ごしている時間の長さが透けて見えた。

母さんがいれば、娘みたいだって、喜んだかもなぁ。

……。

って、いかんいかん、今はそんなことを想像する時間ではない。

「……どうかしたかね？」

「いや、何、自慢の妹分を褒められてうれしいだけさ」

「ふっ、そうか」

二人して苦笑していると、黙って周囲を観察していたらしいユウキが口を開いた。

「しかし、本当に、ごく普通の家なんだな」

「いや、そんなことは、当たり前だろうが」

「いや、ラインブルグのあの姿を見ていたから、もっと、普通ではないと考えていた」

「お前は俺をなんだと……」

ユウキよ、やはり、お前との会話は、今からでもＮＯＨＡＮＡ式に切り替えるべきなのか？

……だが、運が良かったな。今は見逃してやる。

それよりも今は、ミーアが抉じ開けてくれた突破口に飛び込むべき好機なのだ。

「……なぁ、ところでラウよ。……実は、前々から聞こうと思っていて機会が見つけられなくて聞けないでいたんだが……何故、仮面をつけているんだ？」

「……」

「いや、何らかの理由でつけているんだろうから、当然、言いたくないということはわかっている。……だが、なぁ……なんというか、その、な……さっき、み、ミーアが言ったように、な……」
「……アインよ……君も私のこの仮面が……変態っぽいとでも言うのかね？」
「ま、まぁ、ぶっちゃけると……、あっ、お、俺だけの意見でなんなら、ほら、ユウキにも聞いてみろよ」
「ちょっ、ここで私に振るというのかっ、ラインブルグ！」
「……その反応、つまりはユウキもアインと同じように感じていると？」
「……まぁ、実は出会った当初から少しだけ、いや、本当に少しだけだぞ？」

……ユウキよ、誤魔化すときは堂々としないと、間違いなく、逆の意になるぞ。

「……そうか、そのように感じていたか」

ほらな。

「……」
「……」
「……」

空気が重いです。

ぬぅ、空気が読めない男に話を振ったのは失敗だったか……。

ならば、仕方がないここは再び、俺、空気が読める男、アイン・ラインブルグの出番だなっ！

「なぁ、ラ「アイン兄さん、お茶、淹れたよ」のわぁぁっ！！」
「わきゃぁぁ！！」
「なっ、うぬぅあぁっ！」
「うわっ、あつっあつっ！」

――叫喚地獄が現界しました。しばらくお待ちください――

熱湯を客人に振り撒くという思いもよらぬ失態兼大事故がようやく収集し、我が家のリビングが元の状態に戻った。

……戻ったんだが、少々、先程と配置が変わっている。

しょんぼりして、ソファで俯いているミーア。

仮面を外して、氷嚢を素顔に当てているラウ。

俺の前で獄卒の如く仁王立ちしているユウキ。

そして、床でC．E５８年版皇辞苑を膝に乗せられて、正座させられている俺。

えっ、なんで俺、正座？

「……ラインブルグ、君がすべての元凶だからに決まっているだろう！」

「……はい、その通りです」

はい、俺が間抜けにもミーアに背後から声をかけられて、驚きすぎたのが原因です。

いや、でも、しょうがないじゃないか、それだけラウに仮面をつけている理由を聞こうとするのに緊張してたんだよっ！

……仮面？

……。

……んんっ？

……。

……。

……はて？

……うん？

……。

……ぐぅ。

「ラインブルグ、幸いにして君の家には辞書の類や年鑑等が多数取り揃えてあるようだな。……それでどれが望みだ？　私としてはＣ．Ｅ５９年版大辞凛がお勧めだが？」

「い、いや、今のは冗談だからっ！　あくまで、場を和ませるだけのジョークだからっ！　それよりもっ！　アレを見ろ！」

俺が指差した方、そこには仮面を外している、そう、仮面を外している、もう一度述べると、仮面を外している、大事だからもう一度、仮面を外している、もう一つおまけに、仮面を外している、最後の一つ、仮面を外している、ラウの姿があった。

……仮面に関わることを尋ねるという目的がほぼ達成されたことも加えて、多少、サービス込みで多めに強調してみた。

……いや、ごめん、ちょっと動揺している。

ラウの仮面の下の素顔は、通常、ラウの歳では考えられないくらいに、皺が広がっていたからだ。

……うん、察するに、ラウは今まで生活に苦労してきたんだろうな、きっと。

17　課程＋修了⇒制服＋帰宅（C．E．６８年　６）（後書き）

１０／０９／１２　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

18　（災難＋友人）－仮面⇒憎悪÷少女（C．E．68年　7）

訓練所で出会った中々に気の会う友人、ラウ・ル・クルーゼ。
成績優秀なのは確かなのだが、謎めいた仮面から近寄りがたい人物と周囲から受け留められていた。
俺も流石に自重して、仮面について不躾に問うことはせず、それなりに気を使っていた。

「……まさか、このようなことで君達の前で仮面を外すことになるとはな」

けれど、まさか、仮面の下に、あんな素顔を隠していたとは思いもしなった。

……驚いた。

「驚いただろう、私のこの顔に……」

ラウの正面に座る俺はラウの自嘲が含まれた言葉に対し、正直に頷くことで応えた。俺の前に立っていたユウキはラウの方を見たまま、固まってしまっている。また、ミーアも自分が引き起こした災難が客人の秘密を暴いてしまったことに動揺してしまったのか、すでに涙目である。

「ふ、ふふ、自分でも鏡を見る度に、粉々に砕きたくなることがある」

そう言って再び嘲笑を浮かべたラウの顔は、若者と言われる年齢では、通常、考えられないくらいに、皺が刻み込まれていたのだ。

そして、息を呑む俺達を前にラウは自分の生い立ちを語りだした。

……けど、長くなったから、省略するな。

「……私はナチュラルの狂った社会とそれを容認する世界を正したいのだよ」

長々と語り終えたラウは、自分の胸中に渦巻いている、己の出生の苦しみを、生み出した存在への憎しみを、それを許容する世界への怨みを、吐き出していた。

簡単に要約すれば、ただ、己の欲のために自分のようなクローンを生み出しておいて、不具があるからといって簡単に捨てるような奴らがムカツクでござるっ！　そして、自分みたいな存在を生み出すことを許容しているナチュラルの社会と世界に頭にキテイルでござるっ！　で、いいかな？

……いや、ラウ、それは八つ当たりではないだろうか？

怨んで怒りをぶつけるべきなのはお前を失敗作として扱った連中だろ？

まったく簡単に一般化しすぎだぞ、馬鹿者め……。

「駄目ですっっ！」

はいっ、早速、我が妹分であるミーアさんから駄目出しが出ましたっ！

「そんな考え方じゃ駄目ですっ！　そもそも、クルーゼさんは失敗作なんかじゃありませんっ！」
「……だが、私の身体を構成する遺伝子は、私を生み出した存在と同じだ。それに欠陥があって、失敗作ではないと、何故、言えるのかね？」
「なんで、なんでっ、自分が失敗作だと、そんな馬鹿なことを自分で認めるてしまうんですかっ！　たとえ、身体を構成する遺伝子があなたを生み出した存在と同じだとしてもっ！　あなたは誰かの失敗作なんて存在じゃないっ！　……あなたが今まで抱えてきた、自身の出生に苦しみ、自身の不遇に悩み、生まれてきた理由を探してきた意識と思索がっ、あなたを生み出した存在に自身が抱いた怒りをぶつけようとした意志と望みこそがっ！　あなたがあなたである、あなたがあなたを生み出した存在と、まったく違う存在であるという証ですっ！　……だから、あなたは失敗作なんかじゃない、身体に悪い所があるだけの、一人の立派な人格を持ったヒトなんですっ！」
「……」
「お、おい、み、みーあ、お「アイン兄さんは黙ってなさいっ！」」
……はい」

Ｏｈ！　シャーラップッ、ブラザー！

ミーアさん、反抗期ですかっ！

「……クルーゼさんが不遇な身体を抱えていて、他人よりも短命だとしても、今、ここに、あなたはあなたとして、存在しているんですよ？　何度も言いますよ、あなたはあなた、ラウ・ル・クルーゼ

さんです。他の誰でもありません。ラウ・ル・クルーゼさんというヒトとして、生きてます」

「……」

「以前、アイン兄さんが言ってました。生は変化と可能性の世界だって。生きていく限り、そこには変化と可能性がある以上は、遺伝子だけで全てが決まってしまうほど、世界は狭量じゃないはずだって……」

「……」

「なのに、なぜ、幾つもある可能性の中から、ただ怨みを晴らすことだけを望むんですか？　どうして、短いとわかっている命を大切に使わないんですか？」

「……ああ、君の言う通り、私は生きてはいる。だが、それだけでは、ヒトは人足りえぬのだよ。この身に、この心に焼き付けられた失敗作という烙印が消えぬ限り、私は人にはなれぬのだ。そして、その刻印を消すために必要なのが、この身を生み出したモノへの復讐なのだよ」

「……」

「……私は、君の……ミーア嬢の言葉で例えるなら、生の可能性の中から怨みを晴らす道を選んだのだ。何故なら、私には、人よりも早く朽ちていく我が身の苦しみよりも、我が心を蝕み焼く怨みや怒りの方が苦しいからだ」

「……クルーゼさんに救いはないのですか？」

「私にとっての救いは怨みを晴らし、私を生み出したモノへ復讐を為すことなのだよ、ミーア嬢」

はい、妹分のミーアが言葉を紡げず、俯きました。

どうやら、ミーアのターンは終了したようです。

というわけで、今度こそ、兄貴分の俺の出番でしょう。

「……んじゃ、今度は俺からだ、ラウ」

「……」

「……お前、自分を哀れみすぎてないか？」

「……アイン、何を言っている？」

「いや、何か、お前の話を聞いていたら、そう、感じたんだよな」

「……」

「確かにお前の生まれと育ちは悲惨だ。ああ、認めるよ。お前の話を聞いたらほとんどの奴がそう思うだろうよ。だが、それだけだろ？」

「なん……だと……？」

「お前が今まで感じてきて、これからも抱き続ける苦しみや悩みや憎悪はお前だけのもの。これは間違いない。だが、そういったものを抱いて生きているのはお前だけじゃない。そもそも、お前が抱いたような感情は、実際にはそれぞれ違うだろうが、お前以外の他人でも同じヒトなんだからさ、抱えたことがないわけがないだろう？」

「……」

「だいたい、究極の不幸は何かといえば、単純に死だ。世界には、生まれてすぐに死ぬ奴もいれば、生まれる前に死ぬ奴もいる。自分が何者なのかをわからずに、何かを為すこともできずに死んでいく奴もいる。それらの不幸と比べたら……まぁ、本来、比べるもので

はないかもしれんが……お前は幸福だ。なぜなら、さっきもミーアが言ってたが、お前は生きている。それだけで死んだ奴らよりも幸福なのさ」

「……」

「お前は話すことが出来れば、見ることも、聞くことも、話すことも、食べることも、嗅ぐことも、触ることも、歩くことも、できる。たったこれだけのことが、そう俺たちから見れば、これだけ、のことを出来ない奴も当然いるよな。だったら、お前はそれが出来るだけ、可能性があって、幸福だと思わないか？」

「……」

「とは言っても、幸福自慢は上見りゃピンが見えないし、逆に、不幸自慢は下見りゃキリがない。幸不幸自体を比べることは、受け止める側の影響が大きいから、あんまり意味がないかもしれないだろうが……生と死の差は大いにあるはずだ。……だいたいだな、俺から言わせりゃな、全てのことで俺を余裕しゃくしゃくであしらえる位に実力をもっておいて、生まれは不幸かもしれんが、ちゃんと今は生きてんだろっ、色んな能力が凄く高いくせに贅沢言うなっ！　はいはい、リア充乙ね、って感じだな。そもそも、不幸な奴というのはだな、俺みたいな奴のことをいうんだよ？　生まれた瞬間から、プラント社会ですごく大変な思いを、どれだけ苦労してきたか、お前はわかってない！　そもそも、全ての始まりは、意識が芽生えた瞬間に母親にオムツを変えられて、オノコの証を見られて、プッて笑われたことだぞ。お前にはわかるか！　自分のいｔ「兄さん不潔」を笑われた瞬間を今、思い返して、その意味を理解して、凄まじく凹む悲惨さを……。おい、ユウキなんだ、その顔は？」

「……すまん、ラインブルグ、話の要点がつかめんのだが？」

「だから……何が言いたいんだろうか？」

「……兄さんがクルーゼさんに自分を哀れみすぎてないかって、最初に言ったのよ」

あ、ああ、そうだったね。

……。

あぅあぅ、わかってるから、い、今のはただのお茶目なんだから……だから、ミーアさん、そんな呆れた目で兄貴分を見ないで下さいお願いしますからっ。

「ラウは自身の生まれや育ちに憎しみや恨みを持っているかもしれないけどさ、少なくとも、ラウ以上に不幸な奴が社会や世界には多くいるってことを忘れて欲しくないんだよ。……まぁ、自身と他人とを比べたら、他人のことだし、どうでもいいっていわれれば、それまでだけどさ」

「……」

「……」

「……」

……後は余計だったか？

「……んんっ。育ってきた環境は、ラウに憎しみと恨みと苦しみしか与えなかったかもしれない。けど、んなものは、所詮、小さな社会、小さな世界だよ。そんな小さな世界で作られた小さな秤で、世界全てを量るな。そんな秤で全てが量れるほど、世界は小さくも軽くもないよ」

「……」

「……小さな社会を見て、それが世界の全てだと思ったら、駄目なんだよ、ラウ」

ラウは、何も語らず、黙ったままだった。

その後は、気分と空気を入れ替えるために、わざと明るく、ユウキも”のってくる”であろう話題、ＢＯｕＲＵについて、大いに語ってみた。

だが、とっておきの『ＢＯｕＲＵ開発秘話－機体の外殻ライン編－』に大いに喰らいついてきたのは、意外や意外、『ＢＯｕＲＵの曲線を愛でる会』の会員であるユウキではなく、ミーアだった。

「あの曲線は全女性の敵よっ！　はんそくだわっ！」

とのことらしい。

……っていうか、ＢＯｕＲＵに嫉妬すんなっ！

いや、たぶん、ミーアのことだから、たぶん、少しでも場を明る

くしようとしてくれたんだと思う、たぶん。

「知ってる？　最近、プラントの男の人の間でね、ＢＯｕＲＵ燃え派とＢＯｕＲＵ萌え派が対立してるのを！」

「……そのような話、聞いたことがないのだが？」

「アイン兄さん達は一般的な社会情報を遮られていたから助かったのよ」

「そ、そうだったのか」

「それでね、そんな風にＢＯｕＲＵ好きの派閥争いを煽ってるのは、それを利用して、プラントの内部分裂を図った、青秋桜の陰謀だったのよっ！」

「「「な、なんだってぇ！！！」」」

と、まぁ、そんな具合に、馬鹿話で盛り上がっている内に、時間は流れ、別れの時が来た。

宇宙港へと繋がるエレベータ前まで送ってきた俺とミーアに、ラウが静かに話しかけてきた。

「……アイン、今日は見苦しいことを見せたな」

「んなこと、気にするなよ、俺は気にしない」

「ユウキもできれば、今日のことは秘密にしてもらえると助かるのだが……？」

「わかっている。クルーゼよ、このレイ・ユウキ、今日のことは誰にも洩らさず、墓にまで持っていく」

「ふっ、約束一つで大げさな奴だ。……それとミーア嬢」
「は、はいっ！」
「君の言葉は、私を覆っていた奴の妄念を少し吹き払ってくれた気がする」
「……」
「……しかし、私は、己の出生に、己をこのように作り出した存在に、己のような存在を生み出すことを是とする世界に、怒りと怨みを向け続けることをやめることはできぬだろう」
「……そう、ですか」
「だが、必ずしも世界が醜い欲に染まりきっている訳ではないという事はわかった」
「……？」
「ふふ、ミーア嬢のように我欲に関係なく、他者を見、他者に関わる者がいるがわかったのだよ」

そう言って、ラウは微かに穏やかな笑みをこぼして見せた後、ユウキと共に去っていった。

「アイン兄さん。……クルーゼさんに救いがあると思う？」
「……さて、な。これから、どうなるかなんて、正直、わからないよ」
「……そう」
「ただ……」
「ただ？」
「……ただ、俺が言えることは、ラウが道を外さなければ、自身が懐いている想いに、どんな決着をつけても構わないってことだけだよ」
「……」

本当に、ラウにとって、今日のことが良いこと……災いが転じて福となす、になればいいんだがな。

「さて、ミーアさん。折角、今日はここまで来たんだから、どっかで飯でも食って帰るか？」

「……うーん、ファーストフード以外だったら考えてあげる」

「ならば、可愛いお嬢様、無知な私めに良いお店をお教えいただけませんか？」

「あはは、何それ、全然、似合ってないよ。そんな馬鹿なことしてないで、あそこのお店に行こうよっ！」

……凹（おう）、なんということでしょう。

格好つけてみたけど、笑われたっ！

しかも、似合ってないに加えて、馬鹿までつけられたっ！

けっ、どうせ、俺は三枚目な役所ですよっ！

今日は自棄だっ！

財布を空っぽにしてやるよっ！

……それにしても、あの二人、途中まで一緒に帰るにしても、道中、何を話すんだろうかね？

18　（災難＋友人）－仮面⇒憎悪÷少女（C．E．68年　7）（後書き）

10／09／12　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。
11／02／14　表記修正。

19　艦隊＋威嚇⇒ＭＳ＋初陣（Ｃ．Ｅ．６９年　１）

６９年になって、ますます、時代の流れは不穏な方向へと加速している。

プラントの指導部である評議会がプラントのユニウス市で食糧生産を開始させたのだ。

この動きに対し、宗主国であるプラント理事国はＬ５の駐留艦隊を動かし、武力を背景に威嚇行動を見せつつある。

「ザフトの精鋭である諸君らの活躍を期待する！　……ザフトのためにっ！」

そんな一触即発の雰囲気の中、俺にも初陣の時がやってきた。

まったく望んでもいないのに関わらず……。

……後、一時間もしないうちに、殺し合いが許容される狂った空間、戦場に放り出される。

その間際になっても、軍人として社会に許容されて人を殺す、という行為にどうしても拒否感を覚えている自分がいる。

いや、一応は、国……というか、今現在、住んでいる場所を、生きている社会を守るために戦うという意識は持っているのだが……今回の武力行使に関しては、本当に必要なのだろうかと疑問に思っているのも、少なからず影響しているのかもしれない。

それに、相手が犯罪者ならば、法と罪と罰の考えが根底にあるから殺人は認めるけど、軍人として戦争で殺しあう相手は犯罪者でもない普通の市民なんだから殺人を認めるのはちょっと、と考える意識もあるみたいだ。

……なんて、どうしても同じ殺人に差別化を図ってしまう自分を自己分析してみるが、結局は、犯罪者相手だろうが、非犯罪者の軍人だろうが、人を殺すということには変わりはない。

まったく、平和ボケしていた前世では想像もできない悩みだ。

ほんとに、平和ボケ万歳、万歳、万々歳ってなもんだな。

それにしても、各々の機体とリンクしている通信系から、各パイロットの戦意と興奮に満ちた声が伝わってくるのを聞くにつれ、疑問に思うことがある。

これから戦場に立ち、殺し、殺される時間が始まるというのに……何が彼らを燃え上がらせるんだろうか？

俺にはまったく理解できない。

たとえ、相手を殺し、或いは、相手に殺される可能性を覚悟していたとしても、それは楽しいものではないし、ましてや楽しんでよいものではない。

……いや、それは俺の穿ち過ぎか。

うん、そうだよな、彼らが楽しんでいるっていうのは言いすぎだよな。ただ単に、自分が今から行うことへの恐怖と不安を覆い隠す

ために、自身を鼓舞するために、ああしているんだろう。

よし、ここは一つ、俺も彼らを真似て、自分を鼓舞するために、今の心境を表してみよう。

……。

……うん、これだな。

私はあなた達とは違うんです！

自分を客観的に見ることが出来るんです！

って言いながら、颯爽と、ビシィッ、って効果音が出るぐらいの勢いで、相手を指差すんだ。

……。

……こういう時って、意外とずれた方向に望んでいない馬鹿げた映像が浮かぶもんだなぁ。

「……不安かね、アイン」

あまりにあまりな想像に、戦意を高めるどころか、目を虚ろにしてしまった俺に、通信画面越しに声をかけてきたのは、ラウだった。

俺は、何とか目に意識を送り込んで焦点を合わし、心配してくれた友に応えるために軽く肩を竦めて、どうってことないと、余裕があるようにアピールして見せた。

……実際、体調や精神は普段とあまり変わらない。

「他の者達と違って、戦意旺盛とは言えぬようだが？」

「まぁ、な。やる気はそれなりにあるんだが……ただ、なんとなく、この場にいることが、悲しいだけだよ」

「……そうか」

我が家に初めてやって来て、色々と語ったあの日以来、ラウは少し変わった。素顔を隠していた仮面を外し、代わりにサングラスをつけるようになったのだ。

本人が言うには、堂々と素顔を晒すのもまた一興、ということらしいが、実はミーアに変態扱いされたのが堪えたのではないか、というのが俺の勝手な見解だ。

……まぁ、仮面を外した真意がどこにあれ、ラウの中で、何かが少しぐらい変わったことに間違いはないだろう。

でもって、今もＭＳに搭乗するために、普段つけているサングラスを外し、ヘルメット越しに素顔を晒していたりする。同年代よりも少々の小皺が見えるが、俺から言わせれば、それだけのことで、非常に整った容姿なのは言うまでもない。

いいなぁ、俺も三枚目じゃなくて二枚目な役所になりたいなぁ。

ラウを見ながら、そんなことを考えていたら、先の俺の発言を戦場に立つ心構えができていないとでも感じたのか、ラウが珍しく苦言を呈してきた。

「アイン、君の想い……わからぬでもないが……これから我らが立

つのは自らの生と死を賭した戦場だ。例え、機体特性でこちらが有利にあるとはいえ、絶対はない。……場にそぐわぬ、過ぎた感情は己を滅ぼすぞ」

「……ああ、そうだな」

……非常に、耳が痛い言葉だった。

だが、道理だとも感じ、一時瞑目し、ラウに言われたとおり、己が抱いている過ぎた感情を整理する。

「……うん、無事に生きて、無傷で帰らないと、な」

「ふっ、怪我をしたら、ミーア嬢に泣かれるか？」

「まぁ、そういうことだ」

……。

さて、覚悟はできた。

以前、死が最大の不幸なんてラウに偉そうに語っていたのに、その死を他人に与えるなんて、まったくふざけ過ぎていて笑えない立場だが、こちらも死を賜る可能性がある立場なのだ。

そう……今からこの場に立つのは、お互いに己の命をチップとする対等の相手なのだっ！

これから俺が殺す奴等には、文句は言わせないし、当然、怨み言も受け付けないっ！

「各員、当初の予定の通り、敵モビルアーマーを駆逐し、敵艦隊を排除せよ。繰り返す、当初の予定の通り、敵モビルアーマーを駆逐し、敵艦隊を排除せよ。……各員の戦果を期待する。以上だ。……ザフトのためにっ！」

「いくぞ、アイン」

「おうさ」

ザフトのモビルスーツ隊に配属されて以来ずっと乗り回してきた、プロトジンの正式量産型【ＺＧＭＦ－１０１７】ジンは俺の操縦に応え、ザフトの宇宙港近くに設けられたＭＳ専用ゲートから飛び出した。

そんな俺のジンを、いつもと変わらぬ漆黒のソラは、いつもと同じように迎え入れてくれた。

◇　◇　◇

今回、俺が参加する迎撃作戦は、軍事的組織ザフトとしての初めての作戦行動となる。

そして、俺が乗っているジンを擁するＭＳ部隊は、この作戦で最も重要な、Ｌ５に駐留する理事国側の戦力を排除するという役割を担うことになっているのだ。

と、いかにも凄い役割を果たすように見えるＭＳ部隊だが、実は曲者で、部隊運用方法がまだ定まりきっていなかったりする。

わかりやすく言えば、一番の基本であるＭＳを運用するための最小単位において、意見が割れているのだ。

現在のところ、ＭＳ隊内で最小単位として考えられているのは、三機小隊編成と二機分隊編成の二案である。

俺としては、二機分隊編成を基本にするべきだと考えているのだが、現在の潮流は完全に三機小隊編成の方向に流れてしまっており、このまま決定してしまいそうな勢いである。何でも、ザフトでも古参になるフク何とかって偉いさんが三機小隊編成が望ましいとしきりに主張して、後押しした結果らしい。

うう、悔しいのぅ、悔しいのうぅ。

……冗談はさておき、俺の考えでは二機分隊を基本編成にして、これを二組揃えて、四機一小隊編成にする方がいいと思うのだ。連携は三機よりもに二機の方が、習得も早いし熟練しやすいからな。

で、今回の作戦行動では三機小隊編成と二機分隊編成の両方が採用されていて、どちらがより良いかを最終的に判断することにしたらしい。

……こう言っておいて何だが、えらい余裕だなザフト上層部。

おっと、また余計な思索に耽ってしまった。

けれども、大丈夫！

俺の手足と視聴覚はしっかりと作動しているし、判断を必要としない行動はしっかりと身体が覚えていて、全自動で動くのだ。

すごいだろう？

……。

うん、そうなんだ。

それだけ、俺が日常的に血尿を出すぐらいに頑張ったっていう証拠なんだよ。

語り口調になっていた思考を通常に戻し、機体に故障等がないか情報を確認する。

うん、予め定められた宙域へと向かっている今の機動で、使用されている推進剤の消費は想定の範囲内で収まっている。

何が起こるかわからない宇宙空間で、ましてや人が想像できないようなことが発生するのが戦場である。酸素と並んで大事な命綱である推進剤は貴重なのだ。

……。

しかし、ほんとに、なんとも健気な身体だよな。

無意識のうちにスラスターの使用を少量にして、可能な限り、ＡＭＢＡＣ（Ａｃｔｉｖｅ　Ｍａｓｓ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ａｕｔｏ　Ｃｏｎｔｒｏｌ）で効率の良い移動を心掛けているんだからな。

……。

うん、そうなんだ。

それだけ、お（ｒｙ。

「水平十一時方向、仰角二時方向にモビルアーマーの第一群を確認した。各機、戦闘準備！　ＭＳの力をナチュラルどもに見せ付けてやれっ！　……ザフトのためにっ！」

「「「ザフトのためにっ！！！」」」

……おい、なんで、ここにナチュラルなんて言葉が出てくるんだよ？

まったく、始まる前から厭な感じがするもんだ。

19　艦隊＋威嚇⇒ＭＳ＋初陣（Ｃ．Ｅ．６９年　１）（後書き）

１０／０９／１３　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

20　戦場＋宇宙⇒無常×火球（C．E．69年　2）

俺が放った重突撃機銃の火線が扇状に広がり、敵モビルアーマーの行く手を遮る。
もっとも、相手も中々のもので、銃弾の網をするりと抜けて、尚、こちらに向かって加速してくる。
だが、勇敢なる者よ、非常に残念なお知らせがある。

「……そこかっ！」

その行動を選んだ時点で、君の人生はチェックメイトされたのだよ。

……なんて具合に、俺が心中で独語しているうちに、気合の声と共にラウが放った重突撃機銃の弾丸は、敵モビルアーマー【メビウス】を、そのリニアガンの射線が俺のジンを捉える前に、精確に撃ち抜いた。
それと同時に、メビウスは推進剤や弾薬に引火したのだろう、大きな火球に変じるが、その火球も瞬時に消える。後に残るのは、バラバラになった元メビウスという名のデブリだけである。

……今のは簡単な話、俺が囮役となって敵を誘い込み、猟師役となったラウが撃ち落したのだ。

「よし、ラウ機の、敵ＭＡ一機の撃墜を確認」
「……アイン、他人の撃墜確認とは余裕ではないか」

「そんなに余裕があるからっていう訳でもないんだが、まぁ、現状把握って奴さ」
「ふっ、君も律儀な奴だ」

いつもと変わらぬ調子で会話をしていたら、俺の機体近くを連続して……おそらくは味方機が撃った重突撃機銃弾だと思われる流れ弾が走った。

……正直、味方撃ちが発生しかねない状況は洒落にならない問題だと思う。

「……ったく、味方からの後弾も気をつけないといけないなんて、ゆっくり会話もできねぇな」
「ふっ、このような戦場で余計な話をしている我々が異常なのだよ」
「……自分も含めるあたり、自身の異常性がわかってるんだな」
「……君も、私の言葉を否定せぬところを見ると自覚しているようだが？」

素早く周辺状況を把握しながら、会話を続ける。

「一瞬が、生死に関わる熱狂の場だからこそ、常に冷徹な思考が必要だと考えて、延々と沸き起こってくる恐怖や焦燥を必死に制御してるんだよ」
「ふむ、そうは見えぬが？」
「それは、まぁ、年の功ということにしておいてくれ」
「……同世代というのに、面白いことを言う」

俺の意識は、かれこれ、四十年以上は続いていますから、それなりに様々な経験を蓄積しているさ。多少のことでは動揺しない、と、思いたい。っていうか、思わせておいてくれよ、頼むから。

「そろそろ、敵さん、退いてくれるとありがたいんだがな」
「それなりに削ったのだ、おそらくっ！　……来るぞ、アイン。水平三時方向だ」
「……確認した。メビウスが四機……小隊規模だな」

……よし。

「俺が突っ込んで編隊を崩すから、フォローを頼む」
「了解した。アイン、後ろは気にせずに行け」
「頼んだ」

……では。

アイン・ラインブルグ、吶喊するっっ！

「がっし！ぼかっ！」メビウス達は散った。戦いは男の領分（笑）

はい、今のは冗談ですが、メビウスが殲滅されたのは冗談ではありません。

うん、冗談を言うことで、少しは気分を入れ替えたいんだよ。

……。

……よし。

……んんっ、さて、さっきのメビウス小隊……なんか凄く強そうな小隊だな……いや、話を戻して、メビウス”の”小隊との対戦において、俺が二機、ラウが二機、撃墜した。

簡単な流れを語ると、まず、俺がメビウスの射線に重ならないよう、上方……仰角から敵小隊に被さるように、重突撃機銃を乱射しながら吶喊する。当然、メビウスは回避行動に移り、編隊が乱れ始める。

ここで編隊をブレイクするなり、ラウの方に向かうなりすると思っていたのだが、敵さんは何を思ったか、編隊を崩さず、機首を俺のジンに向けるために軌道修正を図ろうとした。

その結果、後方のラウに腹を見せることになり、ラウの射撃が入って、一機撃墜である。でもって、味方機の撃墜で動揺したらしい相手が、次の行動を迷って無駄な直進をした瞬間に、俺の牽制射撃が当たって、一機撃墜。

……牽制も無駄ではないことを知ったよ。

話を続けて……敵小隊残存二機は増速して俺とラウの攻撃範囲から一旦離脱して、全速旋回をした後、俺を目標と定めて帰ってきた。しかも、今度は二機に時間差をつけて、速度全開一直線にリニアガンを撃ちながら、再び向かってきたのだ。

それは、まさに優速を生かした一撃離脱戦法らしい動きで、俺の牽制射撃を物ともせずに、乱数回避らしき細やかな回避機動付きでの突撃だった。

……正直、最初の四機編隊の時よりも手強く感じて、なんかベテランがいた、俺やばいかも、って感じたよ。なにせ、戦場に立つ前、ラウやユウキとＭＡの戦術を検討していた時に、上手く連携されて、

時間差をつけてリニアガンをぶっ放されたら、つまり、避けた先に弾を置くようなことをされていたら、流石のジンも危ないと結論が出ていたのだ。

二機目のメビウスが器用に弾を置いてないことを祈りながら、一機目のメビウスの射撃と猪突を避け、避けた先で、もう一度、回避行動をとる。……攻撃されてないのに回避行動していたから、傍から見たら間抜けだったかもしれない。でも、あの時は冷や汗ものだったのだ。

まぁ、幸いなことに憂慮していた連携は、俺にとって本当に幸いなことに、なかった。大いに安堵しながら二機目の攻撃を避けて見送った後、そのスラスターをめがけて射撃を開始、今度は見事に命中した。その間にラウも、一機目のメビウスが再び旋回軌道に入ったところを予測射撃で撃墜していた。

と、まぁ、先の戦闘はこんな具合だった。

基本的にＭＡであるメビウスは、その強力な推進系の性として急激な針路変更が不可能な上、方向転換をメインスラスターで行っているために、小回りに旋回しようとするには速度を落さないと中の人が加重に耐え切れず、耐え切れる加重で全速旋回しようとすると自然と大回りになってしまう、といった旋回能力の低さが欠点に挙げられる。

また、武装面でも、ジンを一撃で行動不能に出来るほどのダメージを与えられるのが機体中央に備えたリニアガンぐらいしか存在しないのも致命的だ。

なんとなれば、リニアガンはメビウスの推進方向と同軸であるから、射線が簡単に読める。闘牛士の如く、メビウスの射撃と突進を避け、背後から機銃で狙えば、それで落せるのだ。これはジンの融

通の利く運動性の賜物である。
……もっとも、先に言っていたように、右に左にと複数機で連携されたり、小型ミサイルを装備していたり、一撃離脱戦法を組織だってされていたら、話は別だったのが……どうやら今回は杞憂だったようだ。

「ラウ、異常はないか？」
「私は大丈夫だ。……敵が引くか」
「ああ、理事国の艦隊が撤退し始めているのが確認されたようだ。これにも追撃しようとしている奴もいるみたいだけど、エアーや推進剤の問題もあるし、恐らくは追い付けないと思う」
「そうか。……とりあえずは、我らの勝ちといったところだな」

見ると、Ｌ５宙域を彩っていた瞬く火球、まるで人の命が悠久の時の中で一瞬で燃えあがり尽きていく姿を暗示するかの如く、一瞬で現れて消えていく、〝命の炎〟というべきそれらは、既に姿を消していた。

「……」
「……」

うん、俺は初陣を生き残った。

しかも、勝利という形で、である。

けれど、どうしても通信系から流れ出る凱歌と嘲笑と侮蔑に満ちた叫びに同調することができない。

何故、そう簡単にナチュラルというだけで、死者の今まで生きた道を貶められるのだろうか？

何故、そう簡単にナチュラルというだけで、生者に訪れた理不尽な死を貶められるだろうか？

それに、あの儚く瞬いた炎に何も思うことはなかったのか？

あの、あまりにも呆気なく燃えて消えていった命の炎に何も……。

……。

「……ラウ、戻ろう」

「……ああ」

ラウに声をかけ、ＭＳをコロニーに設けられている基地へと向かわせる。

……。

所詮、さっきの感慨は生者の傲慢。

いや、偽善の戯言か罪業への懺悔だな。

或いは罪の意識を軽減するための防衛本能なのかもしれない。

少なくとも、殺した奴が言えることじゃないよな。

あの火球に自分がなる瞬間までは、な……。

こうして、俺の、宇宙に生まれる命の炎の儚さを知った初陣は終わりを告げた。

20　戦場＋宇宙⇒無常×火球（C．E．69年　2）（後書き）

10／09／13　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

21　宇宙×（戦闘＋艦船）＝所属＋部隊（C．E．69年　3）

ザフトは先の【L5宙域事変（仮）】で理事国の艦隊を排除することに成功した。
結果、L5宙域は事実上、プラント最高評議会及びザフトが実効支配することになる。
それに伴ない、俺も配置換えと相成り、新しい部隊へ転属することになった。

「【FFM－113】エルステッドへようこそ。……俺が、この艦の艦長になるオーリン・ゴートンだ」

……しかし、先の作戦に参加した身だから言わせてもらうが、後ろの（仮）ってのはないだろう？

先の戦い、L5宙域事変（仮）において、ザフトはL5から理事国の艦隊を叩き出し、同時に理事国の息がかかった者達を退去させることでプラント理事国の影響力を排除した。
これらをもって、L5宙域を確保したと考えたらしいザフトの上位組織であるプラント評議会は、L5の新型コロニー群をプラント（P．L．A．N．T．：Peoples Liberation Acting Nation of Technology）と名付け、国家組織の形成に乗り出した。
でも、この国名、天秤型コロニーの形式名称であるプラント（P．L．A．N．T．：Production Location Ally on Nexas Technology）と同じなので、

ややこしいと感じるのは俺だけだろうか？

……まぁ、誰も口にしないので黙っているが、紛らわしいことこの上ない。

それはそれとして棚上げしておいて、Ｌ５を実効支配することになったザフトもまた、ＭＳ部隊含めた実動部隊を発展的解消させ、プラント防衛隊と宇宙での機動艦艇戦力となる宇宙機動艦隊へと改編させることにしたようだ。

これに付随して発生した人員不足は、新たに訓練所……じゃなかった士官学校を卒業したザフトの隊員が新規配属されることになっている。

つまり、ザフトの組織拡充が進んだのだ。

……にしても、軍事的組織ザフトは義勇兵組織というか、民兵組織にあたるはずなのに、何故に士官学校なのかとは聞いたら駄目なんだろうか？

「それはたぶん、プラントが一つの主権国家として認められたら、ザフトを今のような評議会の私兵……民兵組織から移行させて、プラントの国軍へと仕立てるつもりだからだろうねぇ」

「ありゃ、ゴートン艦長？　何故、俺の疑問に答えを？」

「……口に出てたよ」

ふむ、無意識のうちに、考えが口に出て、独り言になっていたみたいだ。

「ついでに言うとさぁ、……こんな宇宙港みたいな人気が少ない所で、独りでブツブツと呟いていたらさ、何かを怪しい電波を受信し

て返事してる、危ない人扱いされるよ？」
「いいっ、そりゃ勘弁ですよ。お願いしますから、今のは、ただの独り言ってことで流しておいてください」
「ははっ、わかったよ。……それで、どうだい、こいつを見て、どう思う？」
「……すごく、大きいですねぇ」

さすがは、ザフトというか、プラント脅威の技術力によって造られたローラシア級主力宇宙戦闘艦だ。

……？

何故に、艦長の後ろに控えた女の子は顔を紅くしているんだろうか？

……いや、別段、気にする必要もないか。

「だが、残念、君が言う程、こいつはそんなに大きくはないんだ。これでも戦闘艦としては小さい方なのさ」
「へぇ、そうなんですか？」

うーん、１７０ｍ程もあって、まだ小さい方なのか。あんまり船には詳しくないから、よくわからんが……。

「……しかし、いつの間に作ったんです。こんな大きなもの？」
「俺もその辺の事情はあんまり詳しくないんだよねぇ。……ベルナール君は知っているかい？」
「は、はいっ、私が聞いたところでは、艦体を胴体と左右舷の推進ユニット、下部のＭＳ格納庫の四つにモジュール化することで理事国側に何を造っているのか察知されないように生産したそうです」

「へぇへぇ、そうなんだ。……ところで、君は？」
「はいっ！　エルステッドでＭＳ管制官を務めます、サリア・ベルナールです！　よろしくお願いします！」
「ああ、これは御丁寧にどうも……。俺はエルステッドのモビルスーツ隊に所属することになるアイン・ラインブルグだよ。……ＭＳ管制官ってことは、ＭＳ隊と艦を繋ぐ重要な役割だから、とっても大変だと思うけど、よろしく頼むよ」
「はいっ！」

なんとまぁ、ビックリすぐらい初々しいこと初々しいこと。

山吹色のショートカットやキラキラと輝く蒼い瞳、あどけなさがまだ残っている顔に幼さを感じるにつけ、恐らくは今期のザフト士官学校の卒業生なんだろうなぁ、なんてことを考えてたら、黒服着用のゴートン艦長がしきりに頷きながら、口を開いた。

……俺もユウキから変人だと言われているが、なんとなく、この人も変人臭いんだよなぁ。

「うんうん、顔見せは無事に済んだね。じゃあ今から、ベルナール君には艦橋で通信系のチェックをお願いするよ」
「はいっ、わかりました！」

艦長の指示に対して元気に敬礼して応えると、ベルナールは文字通り”跳んで”、エルステッドの搭乗口に向かったようだ。

「……あの活きの良さ……士官学校の今期卒業組ですか？」
「うん、彼女は今期卒業生だよ。まったく、こちらが恥ずかしくな

るくらいに純粋な眼をしてるじゃないの」
「ええ、俺には絶対にできない眼ですよ」
「俺にも絶対にできないさ」

と、俺の言葉に同意して、肩を竦めて見せるゴートン艦長は、コーディネイターとしてはあまり美男とはいえず、むしろ、外見、撫で上げて手入れされた黒髪を持つ位しか特徴がない、冴えない中年のようにしか見えない。けれども、心底を露呈させないかのように半分閉じられた黒目と茫洋と韜晦した表情が、逆に油断ならない老獪さを俺に感じさせる。

こんな艦長のようなタイプは、基本的に直情的なタイプが多いザフトでは非常に珍しいだろう。

そして、ザフトでは珍しいとなると、是即ち……。

「……艦長は他職からの徴集組ですか？」
「そういう君も徴集組だろう？」

ということになる。

「わかりますか？」
「ああ、わかるもんだよ、同類は」

……なんか、その言葉に、ほろりとした。

「……艦長も、苦労……してきたんですねぇ」
「……そして、これからもきっと苦労するんだろうねぇ」

俺の言葉に、しみじみと、けれど、頻りに頷いているゴートン艦

長。

……ああ、この人とは凄く気が合いそうだ。

そんな好感触を心に留めつつ、俺が一番気になっていることを聞いておく。

「それでゴートン艦長……俺以外の、モビルスーツ隊の他の連中は着任済みなんですか？」

「うん、出来立てほやほやの新米パイロットが四人と先任パイロットが一人、着任済み。今はその先任が新任パイロット達を集めて、色々と話しているみたいだよ」

「……ザフト精神を抽入してやるっ、とかじゃないといいなぁ」

「ぷっ、ザフト精神を抽入か、言い得て妙だねぇ」

いや、実際、精神抽入棒なる代物が指導教官室に飾ってあったから……俺にとっては笑えない冗談の一つだ。

「笑い事じゃないですよ、艦長。そんなことされたら、組織戦なんて、絶対無理ですからね」

「……それは先の戦闘で得た教訓かい？」

「そういうわけじゃないですけど、ザフト万歳っ、ザフト最強っ、なんて精神論や、新種コーディネイターと旧種ナチュラルとの差は絶大だーーーっ、なんて優劣論で勝てるほど、戦いは甘くないって考えてるだけですよ」

「なるほど、ねぇ。でも、それは杞憂じゃないかなぁ。……実際、先の戦いでも大勝したじゃないの」

「基本、戦いは数ですよ？　１：５や１：１０では勝てても、流石

に１：１００じゃ、まず勝てないでしょう？」

勝てたら、あれだ、１００人切りや無双を名乗ってもいいよ。

「……勝てないねぇ」

「ええ。……だから、もしも……総力戦というか消耗戦になってしまったら、人口が少ないプラントは間違いなく全てを磨り減らしていって、滅びの道を行くことになるはずです」

俺のこの予測は、一般的なザフトの隊員が聞けば、貴様には敢闘精神が足りないっ、そのような精神でなんとするっ、なんて具合に憤慨して激怒しそうなものなのだが、艦長は面白そうに口を歪めるに止めている。

「……では、それを回避するためにはどうすればいい？」

「なんとか、全面衝突する前に交渉で、ある程度の妥協と譲歩で持って、決着をつけることですかね」

「うん、俺もそう思うよ。戦わずにことを収めるのが、一番いいだろうねぇ」

先程の俺の勘は当たったようで、艦長もやはり”ザフトでの”変人に分類されるらしい。このような避戦を口にするのは、今のザフトではほとんど存在しないだろうからね。

「けれども、昨今の社会情勢がそんな楽観を許さないから、我々は備えを万全にしておかなければならない」

「ええ、飼っていた金の卵を生み出す鶏にちょっと突かれたぐらいで尻餅をついたような、無様な醜態を晒したままにしておく程、理事国……大国が甘いとも思えませんしね」

「ははっ、うまいことを言うねぇ。……うん」

うんうん、癖のように頷いていた艦長は、緩ませていた表情を引き締め、俺を見据えて、宣した。

「……アイン・ラインブルグ君、今後は大いに頼りにさせてもらうよ」

そう言って、俺に笑いかけた艦長の目には、さっきまでの茫洋とした色を感じさせない位に、怜悧な理性の光が宿っていた。

「……こちらも頼りにさせてもらいますよ、オーリン・ゴートン艦長」

俺と艦長は、どちらからともなく、力強く握手していた。

うん、ザフトって、コーディネイターはナチュラルより優れてるなんて考えを信奉する、どう考えても精神的に瞑目して逝っちゃってる人達ばかりだと思ってたけど、意外や意外、マトモな人っていたんだね。

本当によかったよ、こういう人が艦長を務める艦に配属されてさ。

後は、自分が死なないように、我が家ともなる艦を沈められないように、腕を磨かないとな。

戦力化のための慣熟航行も直に始まるって聞いてるし、……うん、心機一転して、頑張ろう。

21　宇宙×（戦闘＋艦船）＝所属＋部隊（C．E．69年　3）（後書き）

10／09／16　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

22　新人＋職場＝紹介＋後輩＋軋轢（C．E．69年　4）

ゴートン艦長との出会いを経て、頑張ろうと決心し、同僚となるエルステッドのクルーに挨拶をする。
あの艦長の下にいるだけあって、中々に捌けた人が多かったのが印象的だった。
で、肝心のモビルスーツ隊にも期待していたのだが……。

「はんっ、大方、前の戦闘じゃ、出来損ないらしく、クルーゼのおこぼれにでも与ったんだろう」

はぁぁぁ、艦長……悪いですが、この艦の機動戦力……ＭＳ隊は先行きが暗そうですよ。

俺は内心の嘆きを隠しながら、ブリーフィングルームの天井を見上げる。

……心なしか、いつもより、ライトが暗く感じたよ。

初顔合わせとなる新人四人の前で、俺に対して堂々と侮蔑発言をかましてくれたのは、俺と共にモビルスーツ隊の先任となるムラン・アシムだ。先任と言うからには、一応、俺と同期になる……のかなぁ、ＭＳ隊っていってもいくつかに分かれてたし、あんまり顔を覚えていないんだよなぁ。
あっ、そう言えば……ラウやユウキの奴、元気でやってるかねぇ。

確か、ラウは俺と同じで宇宙機動艦隊、ユウキは防衛隊に配属だったよな。

「……聞いてンのか！　ラインブルグ！」

「はいはい、聞いてる聞いてる。俺の撃墜数は、お前が言う通り、ラウのおこぼれをもらったんだよ。それにお前さんの撃墜数が俺よりも少ないのは、たまたま調子が悪かったからなんだよな、うん、わかってるわかってる」

先の戦闘で、俺が撃墜したメビウスの数は5機なのだが、これはＭＳ隊でも多い方らしかった。そのことを戦闘終了後、ＭＳ隊で褒められたのだが、正直に言えば、撃墜数が多いことを褒められても、うれしく感じることはなかった。

まぁ、俺の感慨は置いておくとして、参考に友人二人の戦果を並べておくと、ラウは１３機、ユウキは１０機、メビウスを撃墜している。当然、この戦果はＭＳ隊でもトップクラスになるだが、いや、赤服を着ているのは伊達じゃないってことがよくわかるよ。

そんなことを考えながらアシムの独演を聞き流していたら、どうやら俺の先程の言葉と殊勝な態度に満足したようで、話を切り上げそうだ。

「……ふんっ、わかってんなら、せいぜい、俺の足をひっぱんナよ！　行くぞっ、ガイル、エリオット！」

おや、すでに自分の小隊メンバーを選択済みですか、そうですか。

……いや、アシムの話を聞いただけで、あからさまに嘲笑を表に出して、見下すように俺を見た奴らなんて、いくら俺の人格ができていても、自分から面倒見る気にはならんけどな。

でも、せめて、自己紹介くらいはしていって欲しいもんだなぁ。

心中で重く大きい溜息をつくが、自分の後輩になる二人の前で気分を落し過ぎる訳にもいかない。

よって、普段と変わらない調子で、残る二人に問い掛ける。

「そんで、君らが、俺の小隊に所属することになるんだな？　よろしく頼むよ」

「……」

「……」

えっ、俺、なんか、滑った？

「あの、ラインブルグさん？」

「ああ、今日、エルステッドＭＳ隊に配属された、アイン・ラインブルグだ。これから君等と小隊を組み、また指導することにもなるんだが……まぁ、よろしく」

「……」

「……」

え、えっ？

……何、さっきから、挨拶しても返ってこないし、ついでに、意味ありげな沈黙が続いているんですけど？

本当に、何なんだろうか？

……。

むむっ、これはもしや、あれじゃないか？

ザフト士官学校教育の弊害が出たんではなかろうか？

能力だけに注目してしまって、人格形成を無視している教育が悪い方に働いたんだよ。

確かに個人能力も必要なんだけど、組織なんだから人格も重要になるはず……。

……なのに、あの性根が歪むこと間違いない能力偏重教育！

その結果が、マトモな挨拶もできない、さっきの連中みたいな奴らなんだ。

まったく、士官学校の教育課程は絶対に一度根本から見直すべきだと思うよ。

……無理だろうけどさ。

なんて感じで、一人、外面では無表情を保ったまま、内面で今後のザフトに諦観を持って待っていたら、残った二人のうち、非常に珍しい女のｋ、げふんげふん、女性パイロットが恐る恐るといった感じで、口を開いた。

「え……えっと、その、イメージが合わないというか？」

「へっ？　イメージ？」

その言葉に、思わず目が点になった。

俺って、他人様に知られるほど、有名じゃないよ？

なのに、俺のイメージって、これ如何に？

「ああ、士官学校で見た、ラインブルグさんの機動と、本人のイメージがあわないんだよな」

「そう、そうなのよっ！」

二人で勝手に通じ合わないで欲しいな、お兄さんは……。

……？

士官学校で見た？

ラインブルグさんの機動？

えっ、なにそれ、俺、初耳だよ？

「ザフトレッドのユウキさんとの模擬戦の映像っす」

「はいっ、ＭＳであんな動きができるんだって、すごっく驚きました！」

いや、お嬢さん、興奮しないで、ね？

そちらの坊ちゃんも、あれはいいものだった、って一人頷かない！

ああ、もう、話が進まないッ！

「わかったわかった。要するに、お前さん達が見たすっごい映像に出てた機動にとても憧れた？」
「……うす」
「……はい」
「士官学校を卒業して、この艦に配属されて、その機動をした俺がここに配属されると知った？」
「……うす」
「……はい」
「で、凄い機動をしていた人だったから、その人もきっと凄い人に違いないと期待していたと？」
「……うす」
「……はい」
「で、期待していた分、へこへこしている姿を見て、抱いていたイメージとあまりに合わなさ過ぎて、ガッカリ感が半端ではないと？」
「……うす」
「……はい」

ガッカリって、おぅいっ！

本人の前で肯定するなっ！

こいつら正直すぎるぞっ！

つか、勝手にイメージ作って、勝手に落胆するなっ！

それは肖像権の侵害なのかは知らんが甚だ迷惑だっ！

……だが、俺は、大人、大人なんだっ！

理不尽な評価には負けないっ！

理不尽な失望にも挫けないッ！

「お前らの期待を裏切って、申し訳ないが、これが俺だ。ちゃんとイメージを修正するように」

「……うす」

「……はい」

……なに、これ、罰ゲームか何かか？

だが、この重苦しい空気を換えるのも年長者たる俺の責任っ！

「じゃあ、二人とも、自己紹介してくれ」

「……」

「……」

沈黙の中で何らかのやり取りが二人の間で行われた後、鮮やかな青髪を短いポニーテールにした色白の女の子が先に自己紹介を始めた。一つ一つの所作が洗練されていることを考えると、中流以上の育ちなのだろう。

二重目蓋の下の、まだ穢れを知らないエメラルドのような瞳が、しっかりと俺の目を捉えて、見上げてくる。また、その顔立ちもティーンエイジ特有の童顔と美顔の間を行き来している雰囲気が強いのだが、もう少し歳を取れば、美人さんの方に傾きそうかなと感じられる。

もっとも、バストに関しては、まだまだ未発達のようだが……。

「ヘレーナ・ラヴィネンです。……気軽に、レナと呼んでください。これから、よろしくお願いします」
「うん、よろしく、レナ。俺の呼び名は苗字でも名前でも好きな方でいいよ」
「では、アインさん……いえ、先輩だから、アイン先輩と呼ばせてもらいます」

頷くことで答えて、もう一人のサッパリとした緑色の短髪と少し浅黒い肌をもった少年に目を向ける。
こちらは精悍さの中に愛嬌を感じさせるという印象的な暗黒色の目を持っているが、少し、その色に翳りがある。とはいえ、体格は良いほうだし、これまでの言動にも傲慢さや尊大さは微塵も見えない。一般的に言えば、少し影はあるが気の良さそうな好青少年って感じだろうか？

「うす、俺はフィデル・デファンっす。……ハーフっす」
「ふーん、珍しいな、ハーフ・コーディネイターは……。まぁ、よろしく。……デファンでいいか？」
「……はい。よろしくっす、ラインブルグ先輩」

フィデルにも頷いて答える。

しかし、まさか、先輩なんて言葉が聞けるとは……。

……。

後輩か……。

……。

……いや、今は今だ。

新しい俺の後輩達を、俺流に歓迎してやろうじゃないか。

「よし、俺達三人でこれから小隊を組むことになるが、まず、最初にやることがあるっ！」

「はいっ！」

「うっす！」

おおっ、威勢のいい声だ。

いいねぇ、若い者はそれくらい元気じゃないとな。

「小隊結成を祝って、三人で飯食うぞっ！　どうせ出航してしまえば食べるものが限られるんだ、外に美味いもんを食いに行くっ！」

……ああ、そうそう、金の心配なんて無粋な心配はするなよ？　ゴートン艦長が艦の運営経費として上手く落してくれるそうだ。だから、今度、艦長に会った時には、しっかりと、元気に、はきはきと、心を込めて、ゴチになりましたっ！　って具合に、気持ち好く礼を言っておくようにっ！」

えっ、何？　二人とも、そのとても脱力した間抜け面は？

「く、訓練は？」

「えっ？　訓練？」

「……俺たち、士官学校での成績が悪かったっすよ。だから……」

「いや、別にそんなに慌てる必要はないだろうよ。今日ぐらいは、まぁ、楽しもうや」
「でも……」
「そうっすよ。少しでも……」
真面目過ぎるなぁ。
ならば……。
「……安心しろ。どうせ、後で、いっそ殺してくれって、自分から望んでしまうぐらいに地獄を……ごほっ、天国が遠ざかるぐらいに、しごいてやるから、な？」
おうおう、二人とも、俺の言葉に思いっきり反応してるよ。
ああ、でも失敗したかな？
今から、こんなに緊張させたら駄目だよなぁ。
申し訳ない、今は反省している。
でもな、休むべきときは休むってことは、遊ぶときは遊ぶってことは、重要なことだぞ？
「……うう、今感じた怖気……見誤ってたっす」
「こ、殺されるかと思った。……うぅ、少し、もら「ほら、外出届を出しに行くぞ」」

レナの名誉のために、恥辱は遮ってやる。

何を？

そんなこと、言うわけがないだろ。

俺は紳士だからな。

ああ、注意しておくが、紳士は紳士でも、紳士と言う名の変態ではないからな？

……んんっ、さて、冗談はこれくらいにしてだな。

まぁ、後輩達よ、安心しろ。

俺が、しっかりと、死なないように、とことん、身体も精神も、鍛えてやるから、な。

ふふふふふ。

「うぅ、さっきから、鳥肌が止らないっす」

「……あっ。……わ、ワタシ、ちょ、ちょっと、着替えてきますっ！」

今のレナの着替え発言から連想して、少し興奮を感じてしまった俺は、紳士と言う名の変態なのかもしれない。

……。

い、いや、今のは嘘だからな？

……さ、さて、美味しいとミーアから聞いた店に予約でも入れておくか。

22　新人＋職場＝紹介＋後輩＋軋轢（C．E．69年　4）（後書き）

10／09／16　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

23　新設＋部隊＝（訓練＋軋轢）×苦労（C．E．69年　5）

続々と進宙するザフトの主力宇宙戦闘艦【ＦＦＭ】、通称ローラシア級。

俺が乗り組むエルステッドも戦力化するために慣熟航海中であり、ＭＳ組も、日々是訓練、である。

とはいっても、それが順調に進んでいるというわけではない。

「嘘だっ！　俺が、この俺がっ、出来損ないのお前に負けるわけないだろっ！」

主に、今、暴言を吐いた阿呆のおかげでな……。

思わず出そうになった溜息を抑えながら、ＭＳシミュレーターの成績が納得がいかなかったらしい暴言の主を見れば、血走った目でこちらを睨みつけている。

「……」

「……」

だが、これが厳然たる結果である以上、こちらからは何も言うことはない。

すると、エルステッド艦載ＭＳ隊の同僚……と言い切れないのが憂慮すべきことなのだが……で、ＭＳ隊に二つある小隊の一つを担当しているムラン・アシムは俺を睨み付けるのをやめると、一人、肩を怒らせて、シミュレータールームを出て行った。

その後姿と俺とを交互に見ていたアシム小隊に所属している二人の新米も、不安そうに互いに顔を見合わせた後、アシムを追うように素早く出入り口を抜けて行った。

「あ、アイン先輩。……アシムさん達、行っちゃいましたよ？」
「……んなこと言われてもなぁ。アシムの奴が、あんなに荒れてるんじゃ、正直、放っとくしかないだろう？」
「でも……」
「少なくとも、俺が行ったところで余計に逆上するだけだ。いいから、お前らも放っておけ」

出て行った同期二人の不安が伝染したのか、俺が面倒を見ている残り二人の新米、ザフトでも非常に珍しい女性パイロットであるレーナ・ラヴィネン、愛称レナは当惑するような、もう一方のどこか翳を持っているフィデル・デファンは困惑したような顔で俺を見つめてくる。
本当なら、十八にもなっていない、こいつらの不安を取り除いてやりたい所なのだが、何分、アシムとの問題は、俺の方からこれ以上は折れる余地がないため、どうすることもできない。

よって、この二人の不安を忘れさせるために、どうすればいいかというと……。

「それにしても、お前ら、人の心配ができるとは余裕だねぇ」
「えっ、いえ、私、そんなに余裕ってわけでは……」
「……俺はまだまだ余裕っすよ」

俺の言葉に、それぞれ反応する若い二人。

「おうおう、デファンは威勢がいいが、レナはもう、お疲れと見え

る。……女だからか？」
「女っていうのは関係ありませんっ！　私だって、まだまだ余裕ですっ！」
「ほうほう、なら、その言葉、実証して見せてもらおうか。幸いにして、シミュレーターは独占できそうだからな」
できるだけ、酷薄に見えるように、それでいて、相手を挑発するような……うん、ラウのあのニヤリ笑いを意識して……ニヤリ。
「！」
いいねぇ、いいねぇ、レナの、その反骨の闘志に満ちた力のある目。
そんな目が出来るってことは、伊達にパイロットを選んだわけじゃないってことだな。
「うし、二人ともシミュレーターに搭乗しろ。徹底的にしごいてやるよ」
「「はいっ」」
……なんて、先輩風吹かしてるけどさ。
俺も、こいつらに、逆にしごかれるようなことにならないようにしないとなぁ。
……。
それにしても、問題なのはアシムだ。

まったく、いい歳した大人が、立場ある人間が、自分の感情を抑えられないとは、信じられないな、もう。

何だって、あんな奴が同僚なのか……。

……はぁ。

あっ……いかんなぁ、また、幸せが逃げていった。

自然、逃げていってしまった幸福を惜しみつつ、俺もシミュレーターに搭乗して、同じ小隊を組む事となる二人が、何があっても生き残れるようにするため、指導を開始する。

「そこぉぉぉ！　なにやってんのっ！　左の確認が甘いよっ！」

◇　◇　◇

さて、ＭＳパイロットの訓練と一言で言っても、いつでも、どこでも、常に、実機を動かして行っているわけではない。

先程もやっていたシミュレーターでの操縦訓練や小隊連携の確認、習得を行えば、座学で理事国が使っているＭＡメビウスや艦隊を構成している艦艇について学んだり、敵の戦術や味方の戦術について、小隊員は当然として、ＭＳ担当の管制官に加えて、ＣＩＣ（Ｃｏｍｂａｔ　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒ）の情報分析担当や管理官、時々、艦長や航法担当、火器担当も交えて検討したり、

整備班に混じって整備作業に参加して、ＭＳの機械上の特性を実地で研修させてもらったりと、色々と、そう、色々としているのだ。

あっ、もちろん、肉体の維持強化や生存技術の向上といったパイロット本人の能力強化も行っている。

……で、それらの小隊訓練計画を立てているが俺だったりする。

小隊員一人一人の健康状態を把握し、時に軍医に相談したりして訓練計画を調整する。そうやって、いつどのような時と場合でも即応できるように、より良いコンディションを維持するのだ。

ちなみに、自分の分は軍医にチェックしてもらっている。なんとなれば、自分で自分の管理をすると、どうしても、良くも悪くも甘くなるからだ。

過労死は絶対に、そう、絶対に、御免こうむるっ！

……。

うん、魂の叫びは置いておいて、話を続ける。

……。

……ええっと、何の話……ああ、そうだ、訓練計画の話だった。

訓練において、シミュレーターや座学、それにＭＳの機体研修と

かは、どれも艦内で手軽にできるものだから、煩雑な手続きは必要としないし、話を通せば関係部署も多少の融通を利かせてくれる。

けれど、実機になると話は別だ。

……とにかく、うん、大変なのだ。

実機訓練をするためには、何故、実機を動かすのか、どういう目的でＭＳを使用するのかといった、訓練目的や内容を記した訓練計画書に加え、訓練で使用する物品に関する多数の申請書類を提出すると共に、艦長に訓練概要を説明して、訓練許可をもらう必要があるのだ。

もちろん、その時までに訓練場所や訓練内容を設定し、使用する武装や模擬弾、スラスターの推進剤といった消耗品の分量を見定めて、策定しておかないといけない。

で、訓練許可が下りたら、今度は訓練に関わってくる整備班や通信管制班、ＣＩＣといった部署の責任者を集めて、訓練目的を訓練計画書と共に説明して、訓練に関する諸々の打ち合わせを行う。

あっ、もちろん、その間にも他の訓練は続いている。

で、実機訓練を迎えたら、訓練前に各担当者を集めて、ブリーフィング。

ここで小隊員二人や関連部署の担当者に訓練目的をしっかりと認識させるのだ。じゃないと、訓練をする意味がない。

これ、とっても重要だよ？

で、ブリーフィングが終わったら、いざ、実機訓練。

溜まったストレスを解消するかの如く、或いは、逆に解消する以上にストレスを溜め込むかの如く、色々とやって、訓練終了。

帰艦したら、機付整備員に簡単な機体状態の報告を行って、機体整備を任せた後、思いっきり磨り減った心身と共に、再び各担当者を集めての、今度はデブリーフィング。

小隊員各々の主観的訓練評価と、外から客観的に計測した訓練データやそれぞれの部署からの評価とをすり合わせ、現状の評価や今後の課題を浮き立たせるのだ。

一応のまとめができたら、小隊員には訓練レポートを、それぞれの担当者には訓練評価書を提出してもらえるように依頼して、解散。

でも、俺の仕事はここで終わらない。

小隊を束ねる者として、各小隊員の能力と小隊としての戦力とを評価して書類にまとめ、管制やＣＩＣとの連携を評価して書類にまとめ、もちろん、俺自身の訓練レポートも当然、書く。

それぞれの部署から報告書が届いたら、それを各々読んで、訓練総評として報告書にまとめる。他に、こういった訓練に関する評価書類とは別に、訓練で使用した物品に関しても書類を書く。

例えば、訓練で使用した消耗品の場合、各小隊員のレポートから計算された残量をチェックしてまとめ、整備班から報告される実際量との差がないかを確かめる。もしも、差が発生している場合は原

因を究明して対策を考えたり、今後の注意点として、それらを報告書にまとめるのだ。また、差が発生していない場合でもその旨を記して、これまた、報告書を作成する。

でもって、各部署や小隊員から届けられる訓練評価や、消耗品等の使用報告書を全てまとめて、訓練総評を完成させたら、艦長に提出すると共に訓練結果を報告する。

その際に報告書では書き切れない感覚的なものや、書くのに憚れるものといったことを口頭で伝えたりもする。

それらを終えて、艦長から訓練評価をもらって、ようやく実機訓練終了である。

……いや、本当はね、民兵組織らしく、実機訓練に関しても、ここまで細かく訓練計画を立てたり、報告書を書かなくてもいいらしいんだけどさ、保安局時代にはこういうことをするのが当たり前だったから、つい、手が書類や計画を書いちゃうんだよなぁ。

でもまぁ、俺が苦心してまとめている訓練評価や小隊の戦力評価、関連部署との連携評価についての報告書は、艦長が気を利かせて、ＭＳ隊に関わる関連部署に回してくれているらしく、訓練でも関連部署との連携がスムーズに運ぶといった具合に好影響を及ぼしている。

当然、それに伴なって、小隊の訓練成果もしっかりと上がってきているから辞める気も起きないのだ。

とはいえ、自分の小隊分だけとはいえ、書類作成が大変なのは確

かなんだよ。

どっかで聞いた覚えがあるんだが、N教導官なる人物は、これを毎日、当たり前のようにこなしてるらしい。

……N教導官、なんて、恐ろしい子！

はい、人生の潤滑油で気分がほぐれた所で、残っている書類作成を頑張るとしよう。

……。

後、残りのもう一つの小隊に関しては、冷たいようだが、どうなってるのかなんて、わからない。

アシムも自分の小隊の現状をわざわざ俺に話さないし、俺も、普段から馬鹿にされていて、それでも自分から面倒を見るほど、人間ができてないからな。

それに、自分と自分の小隊だけで精一杯である以上、他所様のことなんて、かまっている余裕なんてないというのが本音だ。

本当は同じ艦の仲間なんだから、こんな状態じゃ、駄目なんだろうけどな。

……はぁ、もう、憂鬱になるよ。

……。

ああっ、もう、他所のことなんて考えるのは、やめやめっ！

俺は、自分と自分の小隊のことを、しっかり面倒見ないといけないんだっ！

だからっ！

……もう一頑張り、書類作りに勤しむとしますか。

23　新設＋部隊＝（訓練＋軋轢）×苦労（C．E．69年　5）（後書き）

10／09／19　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

24　緊張＋激化⇒（未来＋展望）×悲観（C．E．69年　6）

各乗組員も艦務に慣れ、戦力化が成ったエルステッド。
それを待っていたかのように、世界の緊張は激しくなってきている。
それが何を意味しているのか、皆は理解しているのだろうか？

「世界の状況は急速に悪化、このままでは嵐となり、激しい暴風と雷雨に見舞われるでしょう、かねぇ」

……ええ、このままでは、間違いなく、そうなるでしょうね、艦長。

現状、任務についているエルステッドには第二種警戒態勢が発令されており、当直ＭＳ小隊にあたる俺の小隊はスクランブル待機中のだが、俺はゴートン艦長に呼ばれて艦橋に上がっていたりする。
スクランブル要員として、最近になってメキメキと腕を上げているレナとデファンを残しているから、よほど突発的な事態が起きない限り、大丈夫だと信じよう。
それに、二人にもたまには俺がいない時間を作ってやらないと、常にうるさい先輩がいるような状況だと、息抜きができないだろうからな。
今頃、整備班休憩室兼スクランブル要員控え室で休憩中の整備班員達と、俺の地獄のような訓練でも俎上に載せて、大いに不満をブチマケテ、盛大に駄弁っているはずだ。

で、俺はというと、艦体前部に位置する艦橋にて艦長シートに傍らに立ち、ゴートン艦長と艦載ＭＳ隊の戦力について話をしていたりする。

「本当に、アシム君の所と違って、君ン所の二人は順調に育っているようだねぇ」

独り者の性なのか、それとも船乗りの常なのかはわからないが、チョロチョロと存在を主張する不精鬚をなでながら、ゴートン艦長が聞いてきた。

「ええ、順調に伸びすぎていて、こっちは抜かれないように裏で必死ですよ」

「水面下の白鳥の如くだねぇ」

「俺はそんな綺麗な存在じゃないですけどね」

ふふん、どちらかというと、俺は……身上を考えれば、不死鳥とかが、似合うんじゃないかな？

……。

やっぱり色んな意味で、鷺になるのかなぁ……。

「ところで、艦長。アシムの小隊はうまくいっていないんですか？」

「うーん、彼も頑張ってるみたいだけど、新米がヤンチャみたいでねぇ。あんまり上手くいってるとは言えないね。……ラインブルグ君、アシム君に助言してる？」

「それが助言しようにも、アシムが避けてるみたいで……どうしようもないです」

「……そうかい」

苦渋の表情を浮かべるゴートン艦長が何を思ってるのか、ある程度想像は付くが実際にはわからない。とりあえず、言えることは非常に悩ましい問題だってことだけはわかる。

けれども、曇り顔の艦長を見ているのは、俺も本意ではない。

だから、ここは空気を換えた方がいいだろう。

「しかし、若いってのはいいですね。俺も、まだまだ、自分をのばせるとは思ってるんですけど、二人と成長速度が明らかに違うんですよ。ほんとに若さって奴は……いいですね」

「ああ、うん、そうだねぇ。ほんと、若さって……いいよねぇ」

しみじみと、二人して黄昏ながら頷いたのが面白かったのか、当直として艦橋に詰めていたベルナールが噴き出した。

「ふふ、艦長はともかく、ラインブルグさんはまだ若いですよ」

「……ですって、艦長」

「まぁ、なんとも容赦のない切捨てだこと。……部下の心無い一言に、俺の繊細な心が引き裂かれるよ」

「普段の艦長を見ていたら、繊細だなんて、信じられません」

「……ぷっ」

「やれやれ、部下の非情な評価に何とか形を保っていた心は粉々だよ。後、ラインブルグ君や他の皆も笑わないように……。だいたい、今の俺が抱いている心境は、君等も必ず通ることになるんだよ？ベルナール君も、後数年もすれば、今日、噴出したことを大いに後悔するよぉ？」

艦長はベルナールの言葉に乗るように、道化の如く大いに肩を竦めて見せた後、呪いを吐き出すように先の発言をして、ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべた。

「うーん、でも私、今の艦長の歳になるまで、後、二十年以上は必要だから……正直、想像できません」

「……ラインブルグ君、俺、彼女の若さに、大いに嫉妬していいよね？」

「今のベルナールの言葉も、いつか通ってきた心境じゃないんですか？　艦長」

「おおぅ、これは一本取られたな」

再び、艦長が顎鬚をなでて、ニヤニヤ笑いを苦笑いへと変えると、艦橋は今度こそ、笑いに包まれた。

各々が少しリラックスした所で、艦長が、食堂の主計班に簡単に摘まめる軽食とそれぞれのドリンクを持ってきてもらえるように依頼する。

流石は艦長、小さなことでも、人身掌握に抜け目がありませんな。

なんて風に感心しつつ、俺は艦橋のサブモニターに表示されているレーダーに目を移す。

……特に異常は見られない。

理事国側の艦艇群が遠巻きにこちらを警戒して、遊弋している状

態が異常と言わないならば、だが……。

エルステッドが今現在いるのは、Ｌ５とＬ１とを最短で結ぶ国際設定航路のＬ５寄りの場所だ。

理事国側の艦隊が存在するＬ１のスペースコロニー【世界樹】と月、それに理事国の本国が存在する地球からの侵攻を警戒するために、こうやってパトロールしているのだ。

対する理事国側も考えていることはこちらと同じらしく、小艦隊規模に相当する艦艇がそれぞれの航路で、警戒の網を張っているようである。

「今のところは、理事国側に変わった動きはありませんね」

「艦長の俺としては、変わった動きなんて、ない方がいいなぁ」

「……警戒と訓練しているだけで、タダ飯と給料もらえますもんねぇ」

「まったくだよ。実際にドンパチするよりも、市民の皆様から給料泥棒呼ばわりされている方がましさ」

艦長は露悪的に笑ってみせる。

……だが、目は笑っていない。

「……プラント理事会での、プラントへの対応を決める話し合いは、まとまらないようですね」

「うん、プラント理事会を形成している理事国って言ってもさ、それぞれ違う考えを持っているからねぇ。……プラントの自治、自主貿易等々の権利を一切合財、絶対に認めないとする国があれば、総督府による直接統治を行って、プラント運営に関して主導権を握り続けようと考えている国もあるし、貿易に関してはある程度譲歩す

るが、自治は絶対に認めないと主張する国もある」
「でも、どの理事国もプラント評議会の自治を認めていないのは一緒ですよね。やっぱり、コロニーを理事国の資産として見ているからですか？」
「……たぶんねぇ。Ｌ５コロニー群は、建設に投資した理事国政府や企業がプラント運営会議を形成して、管理運営していたんだから、そう考えるのは自然だと思う。でも、現実には、プラントへの移民者や居住者にコロニー内部の土地を貸与するんじゃなくて切り売り……所有権を売って居住や起業を認めたから、ややこしいことになっちゃたんだよねぇ」

コロニー内部の土地は住人に売り出されたモノで、コロニー自体はプラント運営会議が管理運営してるから、理事国のモノになる。

……あれ？

なら、コロニーの所有権は住民のもの、それとも運営会議というか理事国のもの？

少なくとも、俺はコロニーの所有権に関する法律は、聞いた事がないぞ？

……。

む、難しいこと、ワタシワカリマセーン。

「……あれですね、コロニーを造った時に、しっかりとコロニー所有権に関しての法整備もしておくべきでしたね」
「……だよねぇ。コロニーを自分達の土地として捉えている居住者と、あくまでもコロニーは自国の資産だと考えている理事国とじゃ、

話が食い違うし、対立も発生するよ。そこに加えて、空気税や関税の税率決定権を握っている運営会議が、それらを好き勝手に引き上げて、居住者から金を搾り取ってるんだよ？　居住者全体の感情も自治を要求する方に、自然と流れるさ」

空気税とは、コロニー居住者が吸う空気に支払う金に掛けられる税金のことだ。

地球じゃ考えられないことだろうけど、元から空気が存在しない宇宙というかコロニーでは、空気は製造及び維持管理する必要があるので、有料扱いなのだ。

宇宙にあるコロニーの空気を製造、維持管理するがただじゃないのは当然だし、空気代が水道光熱費と同列の存在だということはわかるけど、これに掛けられる税金が、明らかに、ぼったくってるのよ。

だって、空気税固定分だけで、４００％だよ？

その上に、経費が予定よりも多く掛かった、空気循環設備の新規更新のため、新設コロニー設備投資費、云々云々なんて具合に、適当な理由を付けて、変動分を所得に比例させて空気税に加えるんだよ？

そりゃ、給料明細を見るたびに、思わず溶け出しそうにもなるさ。

ついでに言えば、評議会が実質権限を握った現在は、固定税のみで１００％で抑えられている。高いことは高いけど、まだ、以前より遥かにマシだから、不満の声もほとんど聞こえてこない。

後の関税に関しても言わずもがなだな。

だからこそ、プラントは食料を自分達で生産しようとしているのだ。

「……話を戻すけど、理事国と一言でいっても、プラントに対するスタンスが異なるし、理事国同士でも色々と問題を抱えてたりするから、話し合いをしたら、当然、揉めもするさ。しかも、そこに、完全自治、対等貿易権を求めるプラントの要求が加われるんだ。簡単にはまとまらないよ」

「でも、評議会は回答が中々得られないって、業を煮やして、来年までに回答がなかったら、理事国への輸出を停止するなんて言って、脅し、もとい、圧力をかけてますよ？」

「……それが短絡的だと思うんだよねぇ。難しい話し合いなんだからさ、もう少し気を長く持たないと……。もしも、輸出の停止だなんて実際にやったら、理事国どころか、下手したら地球全体の対プラント感情が悪化して、碌な事にならないよ。……とはいえ、もう、こちらから手を出してしまっているから、今更、遅いのかもしれないけどねぇ」

ぼやきに近い艦長の言葉を掻き消すかのように、艦橋と廊下を繋ぐ扉が開き、主計班員が注文の品を届けに来た。

各々に軽食とドリンクが配られ、艦橋自体に、再び穏やかな空気が流れる。

「よし、みんな、ちゃんと自分の分を確保したかい？　……うん、大丈夫みたいだな。じゃあ、みんな、当直終了まではまだ幾らか時間があるけど、もう少し励んでもらいたい。……けれども、気を抜

き過ぎないように、また、入れ込み過ぎないように、適度な状態を維持するように、ね」

「はい！」

「わかりました」

うん、やっぱり、何事も緊張ばかりしていたら、駄目だということだね。

……だから、プラント評議会や理事国も、少しは緊張を解いてくれた方がいいんだけどなぁ。

でも、理事国の代表もプラントの代表も、押すことしか知らない人が多いようだから、……たぶん、叶わない望みなんだろうなぁ。

……はぁぁぁぁ。

24　緊張＋激化⇒（未来＋展望）×悲観（C．E．69年　6）（後書き）

10／09／19　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

25　父親＋沙汰⇒（会社＋成長）＋贈物（C．E．69年　7）

久しぶりにまとまった休暇が与えられ、久しぶりに我が家へと帰宅した。

当たり前のように迎えてくれたミーアに感謝しつつ、溜まったメールや郵便物を始末する。

そして、その中には父親からのモノも含まれていた。

「おじさん、前に連絡くれた時、アイン兄さんのことをすごく心配してたよ？」

あっ、忙しさに感けて連絡を忘れ……反省してますから、そんな目で見ないで下さい。

む、昔から言うじゃないか、便りがないのは元気な証拠ってさ。

……まぁ、今の世の中じゃ、便りがないのは失踪或いは孤独死、なんて場合もありそうだけど、俺には当てはまらない、と思う。

内心で独り暮らしではないことを感謝しつつ、ミーアからジト目を浴びせられて、精神に甚大なダメージを受けながらも、父親からの便りに目を通す。

そこに書かれていたのは……少し恥ずかしいのであんまり言いたくないのだが、ザフトに参加した……させられた俺の身を案じる言

葉と、俺が以前、弱った時に助けてやれなかったという後悔と謝罪、弱った俺を救い、立ち直らせてくれたミーアは非常に得難い子だから、どんな時でも大切にしなさいという助言、そして、もしも、世界の色々なことに耐え切れなくなったら、こっちに帰ってくればいいという、家族だけが持つ、とても暖かくて優しく、思い遣りに満ちた言葉だった。

……。

うん、ちょっと、泣いてもいいかな？

って、ミーアさん、男の涙は安くはないので、できれば見ないで欲しいのですが？

「本物の女の涙も安くないよ？　……それに、男の涙なんて気取ったこと言ってるけど、アイン兄さんに関してだけは、今更だと思う。……私はアイン兄さんが泣き虫なんだって……知っているんだから、ね？」

うぼぉぁーーー！

そ、そうだった！

す、すでに俺はミーアの前で散々に泣いていたんだったっ！

……う、うぐぅ。

は、恥ずかしい過去が俺をお、追い詰めるぅぅぅ！

だ、だが、ここは何とか、大人として、漢としての尊厳をっ！

「……兄さん、無理しなくても、いいよ？」

ふぐうっ！

……み、ミーアの優しい声に頷きそうになってしまった。

が、頑張れ、俺！

年長者としての意地を！

「前みたいに胸を貸すよ？」

ぐふうっ！

……け、結構、魅惑的で魅力的なお誘いのように感じられない事もない今日この頃なんですが、ミーアの胸のサイズ的にっ！

だ、だが、待て、俺！

ここで尊厳をっ！　をこれまで担ってきた”兄”としての尊厳を捨てていいのかっ！

「……遠慮しなくていいよ？」

……い、いいか……はっ！

ダメダッだめだだめだだめだっ、駄目だっ！

あ”ぅっ！

く、くぅ、何だ！　この、は、ハラワタが絶たれたような苦しさはっ！

……は、歯を食いしばれ、俺！

これしきの誘惑に負けるなっ！

「兄さん、私がいたら、駄目なの？」

……うっ！

「……駄目なの？」

……。

「……」

いや、駄目ってわけじゃなくてな……その、なんだ……。

……いや、そんな捨てられた仔猫のような目で、見ないで欲しい。

……。

まぁ、いいか。

……ミーア。

「うん」

……少し……泣く。

――感動、感謝、感激による嗚咽と落涙中のため、しばらく、お待ちください――

あ～、今回もまた、お見苦しいところを……あっ、どうも、んっ、チーンっと。

……はぁ、まったく、ミーアとはどちらが年上なのかわからなくなる今日この頃である。

……。

あ～、でも、なんか、すっごく身体も心も軽いわぁ～。

やっぱり、実際に戦闘に参加して死の恐怖を体感したり、相手を撃墜して殺したりして、自覚がなかっただけで、色々とストレスが溜まりに溜まってたんだろうなぁ。

まったく、高ストレス社会であるプラント社会や保安局の鬼訓練で鍛えられてなかったらと思うと、ぞっとするなぁ、って……。

……手紙に、続きがあるな。

え～と、何々、今度、会社を改編して……？

長くなるから要約すると、順調に発展していたＲＳＦ（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｓｐａｃｅ Ｆａｃｔｏｒｙ）なんだが、俺がザフトに参加したのを機に、事業の見直しと再編成を行おうと考えたらしい。

何故に、俺のザフト参加が機になったのかというと、いつでも俺がザフトを辞められるように……辞められるものなのかは知らないが……俺の居場所を作っておこうと考えた父の親馬鹿が発端らしい。

でも、それが何気に不穏な世の中と事業内容の変更が合致しており、スムーズに事が運んだようだ。

で、再編内容だが、新たに持株会社を作成して、その下にラインブルグ・グループなるものを形成することにしたらしい。

その持株会社の名はラインブルグ・ホールディングス（ＲＨＤ）。

……うん、そのままやね。

で、その持株会社の株主に、何故か、俺の名前が加わっていた。
なんでも、以前から両親が俺名義で貯めていた金に加えて、俺の分のＢＯｕＲＵパテント料、俺が自分で返すことにしたために浮いてしまった借金返還金、さらに、いつの間にか所有していることになっていたＲＳＦの株式との交換で、所有第二位の大株主になってしまったらしい。

……いや、俺、そんな金があること自体知らなかったよ。

ちなみに筆頭株主は親父、二位の俺、三位にオーブ連合首長国の国営企業であり、取引相手でもあるモルゲンレーテ社が来て、四位がミハシラバンクっていう、アメノミハシラに本店を構える民間系銀行、五位がサハク家っていうオーブの支配層に当たる氏族であり、アメノミハシラの責任者が持っているらしい。で、この五者で全株を保有することになるとか。

そして、肝心のＲＨＤの傘下で子会社化する事業は、ＲＳＦの主要業務だった三つ、機械製作部門をより拡張した形のラインブルグ宇宙工業（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｓｐａｃｅ Ｉｎｄｕｓｔｒｙ）、成長株だった造船部門をラインブルグ宇宙造船（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｓｐａｃｅ Ｓｈｉｐｂｕｉｌｄｉｎｇ）、縁の下の力持ち的な技術開発部門をラインブルグ技術研究所（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｔｅｃｈｎｉｃａｌ Ｌａｂｏｒａｔｏｒｉｅｓ）として立ち上げた。

そこに加えて、現在もアメノミハシラ建設に関わって頑張っている建設業のラインブルグ宇宙建設（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｓｐａｃｅ Ｃｏｎｓｔｒｕｃｔｉｏｎ）、本来の家業だったデブリ清掃業で復活することになるラインブルグ宇宙清掃（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｓｐａｃｅ Ｃｌｅａｎｉｎｇ）、新規部門として、宇宙での作

業中に上手い飯が食いたいがためのラインブルグ宇宙食品（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｆｏｏｄ）、モルゲンレーテが熱心に薦めたという発電と蓄電に関わる分野でラインブルグ宇宙発電（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｐｏｗｅｒ　Ｇｅｎｅｒａｔｉｏｎ）とラインブルグ宇宙電気（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｅｌｅｃｔｒｉｃ）、ミハシラバンクが推し進めたラインブルグ宇宙保険（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｉｎｓｕｒａｎｃｅ）、サハク家が立ち上げ要請をしたらしいラインブルグ宇宙商船（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ　Ｍｅｒｃｈａｎｔ　Ｖｅｓｓｅｌ）となっている。

……一言、言わせてもらえるなら、何でもラインブルグと宇宙ってつけたら良いわけじゃないと思うんだ。

まぁ、妙な感慨は程々にして、なんか、うちの会社がいつの間にか、小さな頃からは想像できないくらいに大規模に拡張しているんだけど……。

いや、ほんとに、プラントにあった時はとっても小さな個人商店的な企業だったんだが……どうして、こんなに？　オーブの水が会社に合ったんだろうか？

非常に興味がそそられるが、流石に気楽に行ける距離でも状況でもないので、今後の大いなる楽しみにしておこう。

それで、最後の方に、それらの会社を立ち上げたから、今後は忙しくなるので連絡は取れないだろうと書かれてあった。また、何か新しいアイデアや面白いそうなことを考えたら、どんなものでもいいから、まとめて、こちらに送ってくれとも追記されていた。

うーん、ならば、近況報告がてら、色々と、手紙に書いて送ることにしよう。

「兄さん、手紙、読み終わった？」
「ああ、うん、終わったよ。……他に何かあるのか？」
「え、えーと、私からは、なんとも……」

ミーアにしては珍しく、えらく歯切れが悪いが、何なのだろうか？

「その、ね、宇宙港におじさんが兄さんに送った荷物が置いたままなの」
「えっ？　下まで届けてくれなかったのか？」
「……届けられないと思う、あれは」

……何かはわからんが、とりあえず、行ってみるか。

◇　◇　◇

それで、久しぶりの外で食道楽を経て、ミーアと二人、やってきました宇宙港。

「……」
「……」

デデン、と倉庫に鎮座したるは、艶消しされた黒で塗装された、

ブラックなＢＯｕＲＵ。

……親父、これを、俺に、どうしろと？

「早く引き取ってくださいよ、場所だって有限なんですから」

いや、引き取れったって、あんた……。

「……どこに？」

多分、有難い好意なんだろうけど、迷惑な行為にしかなっていない件について、一時間ほど、親父と語り合いたいと思った。

しかし、今の社会情勢で……よく届いたよなぁ。

でも、本当に、こいつ、どうしよう？

25　父親＋沙汰⇒（会社＋成長）＋贈物（C．E．69年　7）（後書き）

10／09／20　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

26　破局＋直前＜（整備＋球体）×祭典（C．E．69年　8）

年の終わりまで、後一ヶ月程。
プラントと理事国との緊張は最早限界ぎりぎりで、否が応でも、破局が近いと感じてしまう。
この先に訪れる破局を思い、だからこそ、皆、その現実を見たくないのだ。

「このブラックBOuRUこそが！　我ら善良たるエルステッドMS整備班に、機械仕立ての神から与えられた恩寵であるっ！」

MS整備班員の前で、喜々として演説を行っているMS整備班長を見ると、特にそう思ってしまう。

エルステッドMS整備班長シグルド・ティーバ。

本人が主張する魂の名はシグルドではなく、【シゲ】らしい。で、このシゲ……年長だからシゲさんだな、俺が出会った整備畑の人間でも、あのマッド・エイブスに並ぶ位の、トップクラスの変人である。
なにせ、本人が言うには整備の戦闘着であるツナギをどんな場でも四六時中着用し、新たに搬入された新品のジンの装甲に頬擦りしてキスし、プラント脅威の技術力について一席設けて大いに語って周囲を洗脳し、プラントでは何気に珍品である眼鏡をかけている。
前にその眼鏡はファッションなのかとシゲさんに聞いたところ、答えは本物の眼鏡とのことだった。彼曰く、度のキツイ眼鏡は機械

弄りを生業とする者の必須アイテムらしい。

……非常にうそ臭いが。

以前、何かと世話になっている軍医と小隊員の健康管理について話し合っていた時に、ふと、シゲさんの眼鏡のことを思い出し、シゲさんの視力は本当に悪いのかと、一度、尋ねたことがある。

その答えは呆れながらの肯定であった。なんでも、視力低下の原因は、回復能力を上回る程の慢性的な眼精疲労が主因で、他に副因として寝食を忘れることで発生する寝不足と栄養失調等々が挙げられるらしい。

正直、そこまで熱中できるものがあるのって、幸せなことだと思う、なんて、無趣味な俺としては、思わざる得ない。

「このブラックＢＯｕＲＵは！　我々エルステッドＭＳ整備班を新たなる整備の境地へと導き、必ずや大いなる発展をもたらすであろう！　ジークっ、ＢＯｕＲＵっ！」

「「「ジークッ、ＢＯｕＲＵっ！」」」
「「「ジークッ、ＢＯｕＲＵッ！！」」」
「「「ジークッ、ＢＯｕＲＵッっ！！！」」」

おっ、どうやら、シゲさんの演説が終わりそうである。

……しかし、乗りがいいなぁ、整備班の連中。

◇　◇　◇

俺の留守中、親父から俺宛に届いたブラックな特別仕様ＢＯｕＲＵ。

流石に売却するなんてことは、明らかに父の好意を無にするわけだからするわけにいかず、清掃業者やジャンク屋に貸与するのも、これまた、何か、駄目な気がした。

結局、始末に困って途方にくれた所、ミーアが信頼できる人に相談したらどうか、との助言をくれた。父以外に信頼できる筋は、ラウやユウキ、それにゴートン艦長といった面々である。

でもって、この中でもっとも、ＢＯｕＲＵの有意な使い道を考えてくれそうなのは、艦長だと判断し、相談することにした。

ちなみに、ラウとユウキには悩んだ末、連絡しなかった。燃え派と萌え派として、対立している二人に火種を放り込むわけにはいかないのだ。

……どちらがどちらなのかはだいたい想像できると思う。

でもって、艦長に相談した結果は、

「うちで使って、皆で幸せになろうよ」

とのことだった。

その後、煩雑な手続きは全て艦長に任せ、俺はブラックＢＯｕＲＵをザフト機動艦隊が間借りしている宇宙港に停泊するエルステッドに運び込む。ついでに、ミーアにも、本当は駄目なのだが、職場案内をした。その時、ミーアが真剣な顔で艦内や格納庫を見学して

いたのが印象的だった。
で、そんなことをしたり、ミーアと美味い店を食べ歩いたり、父への感謝と自身の近況報告や何となく浮かんだアイデア、ＭＳに乗るようになってから考えていたことを色々と、メールじゃ味気ないので紙に書き綴って書簡で送ったり、ラウやユウキに宛てて近況メールを送ったり、以前の職場で世話になった課長と酒を飲んだり、と色々していたら、いつの間にか休暇は終わり、再びミーアに我が家の管理を託し、エルステッドに乗り込んで、現在に至る。

◇　◇　◇

「いやー、アインちゃんよぉ、よくぞまぁ、ＢＯｕＲＵなんて粋な物を寄付してくれたもんだよなぁ。しかも艶消しのブラックな塗装っていうのが、カスタムぽくって、もう、漢心をくすぐるんだよこれが！　しかも、何気に頭頂部にハードポイントが二箇所増設されてるし、これはもう、俺達整備班に好きにしていいよ、好きに弄ってくださいってＢＯｕＲＵが訴えているに違いないんだよっ！　く～～～、いったい、何をつけようかなぁ、いま、整備班の連中であんけーとを取ってんだけどよ！　もう、全員が全員鼻息荒くってもぉぉーー、あなた達、萌えに燃え上がってる？　って色っぽいＢＯｕＲＵに聞かれてるような感じなのよぉぉっ、もぅぅぅっ！」」
「し、シゲさん、落ち着けって」
……うん、俺、整備班の連中に、ＢＯｕＲＵ萌え燃え派って名付ける事にするわ。
まぁ、それは置いといて、早く用事を済ませてしまおう。

「あー、シゲさん。ＢＯｕＲＵのことは全て任せるから、よろしく頼むね。それでね、こいつの愛称なんだけど……【ＢＷ－００Ｅ－８４１ＰＳ】の機体番号からヤヨイって、俺の独断と偏見でつけたから」

「！　お、おぉぉぅぅふぅぅ！　や、ヤヨイ、あ、嗚呼、そ、その名前のなんと、ふ、美しくて、まっこと愛らしい、トーヨー的で神秘的な響きっ！　は、班員シュウゴーーーーーッ！！！」

「なんすか、班長？　俺、ＢＯｕＲＵの装備のことで頭一杯何すけど」

「んっ、そうですよ、俺のＢＯｕＲＵちゃんには……へへへ」

「てめぇ、夢見てんじゃねぇよ、ＢＯｕＲＵさまは俺の女王様だぞ」

「ばっか、おまえこその夢見てんじゃねぇよ！　俺んだぞっ！」

「か～、おまえらこそ、馬鹿だなぁ、ＢＯｕＲＵさんは俺の嫁だって」

「なんだとぉ！」

「おぅ、かかってくるか！」

「やるってのかぁ、この俺と！」

「くっ、ここで引いたら負けだっ！　あーーーー！」

「そうくるかっ！　ならば、これならどうだっ！」

「くはぅっ！　だ、だが、ここで負けるわけにはっ！」

「だーーーー！　おまぃらっ！　しずまれぇぃぃぃぃ！」

事の成り行きについていけない俺の前で、興奮したシゲさんの手から連続してスパナが乱れ飛ぶ、飛ぶっ、飛ぶっッ！

「あっ！」

「べっ！」

「かっ！」

「わっ！」
「もちっ！」

連続ヒットっ！

断末魔を残して、沈む整備員Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ！

……ああ、今、馬鹿な表示が脳内に浮かんだ気がする。

「さぁ、馬鹿者どもは散った！　それよりも賢者達に重大な発表がある！　そう、あれは俺がまだ整備員としての心構えを弁えていない、幼い頃だった……」
「前置きはいいから、早く言ってくださいよ！」
「そうですよ、俺、今すぐに図面を引きたいんですよ！」
「班長さんの前置きは流すには長すぎるっす！」
「だ、誰がうまいことを言えといったっぁぁ！」

……さっさと、話を進めて欲しいなぁ。

そんな俺の願いが通じたのだろう、シゲさんがようやく本題を切り出した。

「え～、おほん。……皆、心して聞けぇい！　唐突に思うかもしれないがっ！　今、我らが姫の名前が発覚した！」

「「「お、おぉぉぉぉ～～～～」」」

「ふふふ、知りたいかね？」

「「「是非とも知りたいっ！」」」

「ん～～～、どうしよっかなぁあ～～」

「班長さん、焦らすのは反則っす！」

「早く言ってください！」

「一人だけ知って、悦に浸るなんて、何てうらやましい！」

「よろしい、では、皆、耳をカッポじって聞けぃ！」

……シゲさん、生き生きして……すっごく楽しそうだなぁ。

「我らが姫の名は……」

「「「……名は？」」」

「その名は……」

「これ以上、焦らしたら鬼畜ッすね」

「ああ、鬼畜認定出してやろうぜ」

「そして、ますます無妻男になるわけだわかります」

シゲさんを見つめる整備員の連中の目は非常に危ない色を帯びている。例えるなら、青い眼が赤い眼になった感じだ。

「な、名は……ヤヨイである！　アルファベットで、Y、A、Y、O、Iであるっ！」

「「「おおぉぉ～～～～」」」

「繰り返すっ！　ヤヨイでＹＡＹＯＩであるっ！」

「「「Y、A、Y、O、Iで、ヤヨイっ！」」」

「よろしいっ！　……皆、しっかりと覚えたな？」
「当然っす！」
「記憶野に焼き付けましたぜ！」
「ヤヨイ……いい響きだ」

……。

「よろしい！　非常によろしいっ！　では、我らが姫を称えようっ！」
「「「称えようっ！」」」
「称えよ！　ヤヨイっ！」
「「「ビバッ、ヤヨイっ！！」」」
「称えよ！　ＢＯｕＲＵっ！」
「「「ビバッ、ＢＯｕＲＵっ！！！」」」

……整備班の連中見ていたら、なにか、急に、色々な物事がどうでもよくなった気がしてきた。

なんとなく、幸せになった気がして、目の前の狂騒を見つめる。

……ああ、なんか、和む。

……。

……。

……。

……って！

あんなの見て、和んだら駄目だろ、俺っ！

「アイン先輩っ！　こ、これは何の騒ぎですかっ！？」
「……レナ、世の中には知らない方がいいことがたくさんあるんだ」
「えっ？　えっ？」
「さぁ、控え室に戻ろう。彼らは放っておけば、自然に元に戻る」
「は、はぁ」
「……ところで、デファンの奴はどうしたんだ？　姿が見えないが」
「さっき、整備と話してくるって、出て行ってから、それっきりですけど？」
「……そうか」

あの中に混じってたのかも知れないな。

……デファンが変になったら、俺の所為になるんだろうか？

うぅ、すまない、モえてる連中に格好の燃料を投下するなんて、馬鹿なことをした俺を許してくれ。

結局、その日一日、整備班どころか格納庫のお祭り騒ぎに驚いた他の部署の仕事までは滞り、騒動の原因となったと周囲から認定されてしまった俺は艦長からやんわりと叱責と罰を受ける羽目になった。

曰く、モえ上がっている整備班には絶対に燃料を注入しては駄目、とのことらしい。

……すんません、まさか、あんなことになるなんて、思わなかったんです。

はい、今は、とても反省してます。

だから、この整備班製ＢＯｕＲＵ型ヘルメットを外させてください、お願いします。

26　破局＋直前＜（整備＋球体）×祭典（C．E．69年　8）（後書き）

10／09／20　サブタイトル表記を変更及び加筆修正。

外　登場人物　1　（～26）

判りやすい（？）これまでの登場人物一覧　（～26：C．E．69年　8　現在）

☆アイン・ラインブルグ　（C）　男
転生（？）主人公。
ザフトの緑服で、ローラシア級13番艦エルステッド艦載MS隊ラインブルグ小隊リーダー。
主人公なのに、外見に関する描写が一切ないという不思議な人物。

☆アインの父　（N）　男
ラインブルグ・グループ会長。
オーブ連合首長国のアメノミハシラに在住して、ラインブルグ・グループを運営している。

☆アインの母　（N）　女
故人。
アインの良き理解者だった。

☆パーシィ　（N）　男
アインの幼馴染。
ラインブルグ技術研究所の主任研究員で、アインが送ってきたアイデアメモで出来るものがないかを検証中。

☆ベティ　（N）　女
アインの幼馴染。
ラインブルグ宇宙食品の製品開発員で、新たな味を生み出すべく

苦闘の日々を送っている。

☆ミーア・キャンベル　（C）　女
アインの妹分な隣家の少女。
アインからラインブルグ家の鍵と管理費及びお小遣い（生活費）のキャッシュカードを渡されており、普段からラインブルグ家で寝泊りしている。

☆スズキ　（N）　男
モルゲンレーテ社アメノミハシラ支社取締役。
順調に出世しており、次期アメノミハシラ支社長に最有力視されている。

☆課長　（C）　男
セプテンベル・スリー保安局警備部危機管理課長。
何気に使えたアインが抜けて、非常に大変な思いをしている。

☆パトリック・ザラ　（C）　男
ザフトの指導者。
プラント最高評議会議員であり、国防委員長を務めている。

☆ラウ・ル・クルーゼ　（C?）　男
ザフトの赤服。
たまに、ＢＯｕＲＵ燃え派の会合に出席して、溜まった怨恨を緩和させるために熱血していたりする。

☆レイ・ユウキ　（C）　男
ザフトの赤服。
よく、ＢＯｕＲＵ萌え派の会合に出席して、常日頃のストレスを解消している。

☆マッド・エイブス　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
プラント防衛隊で整備員をしていて、周囲の整備員に機械と整備の素晴らしさを説いている。

☆オーリン・ゴートン　（Ｃ）　男
ザフトの黒服。
ローラシア級１３番艦エルステッドの艦長。

☆サリア・ベルナール　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ローラシア級１３番艦エルステッドのＭＳ管制官。

☆ムラン・アシム　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊アシム小隊リーダー。

☆ガイル　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊アシム小隊所属。

☆エリオット　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊アシム小隊所属。

☆ヘレーナ・ラヴィネン　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊ラインブルグ小隊

所属。

☆フィデル・デファン　（H）　男
ザフトの緑服。
ローラシア級13番艦エルステッド艦載MS隊ラインブルグ小隊所属。

☆シグルド・ティーバ　（C）　男
ザフトの緑服。
ローラシア級13番艦エルステッド艦載MS整備班長。

カッコ内のアルファベットの意味
（C）＝コーディネイター
（N）＝ナチュラル
（H）＝ハーフ・コーディネイター

外　登場人物　1　（～26）（後書き）

10／10／27　サブタイトル表記を少し変更。

序　戦争前夜

C．E．７０年1月1日。

プラントがプラント理事国に突きつけた完全自治権と自主貿易権に関する回答期限日において、俺も詳しい内容を知らないが、理事国からの回答はプラントにとって芳しいものではなかったらしく、先の宣言通りに理事国への輸出が停止された。

その影響は甚大で、僅か一ヶ月の間で、地球各地では物資不足による社会生活への影響が出始めているらしい。

この政府間交渉の不始末で、最も被害を受ける市民の不満の矛先を避けるために、各国政府や企業、ブルーコスモスといった団体が、プラントこそが、現在、市民が置かれている苦境の全ての原因である、とするプロパガンダを大々的に行っている。

それらの影響力は大きく、地球各地で反プラント、反コーディネイターが声高に叫ばれているそうだ。

本当に、マスメディアと結びついた権力の恐ろしさを実感できる出来事だ。

翌月、2月5日。

プラントと理事国の緊張を緩和するために努力を続けていた国際連合が必死に呼びかけて実現した、月面都市コペルニクスでの理事国とプラントの直接交渉は、始まる前に爆弾テロによって、全てが吹き飛ばされてしまった。

しかも、このテロで、国連事務総長どころか、国連運営に関わる

首脳陣が全滅してしまったとのこと。

そのため、このテロ以後、国連は世界の指導調停役としての機能を喪失してしまい、対プラント強硬派の大西洋連邦が主導して設立した【地球連合】という名の国際組織の成立と共に、崩壊することになってしまった。

もう少し、国連という組織が危機管理をしっかりとしていれば、国連の首脳陣を全員集めるなんて馬鹿なことをせず、結果、国連が崩壊することもなかっただろうが、非常に残念なことに、全ては終わってしまっている。

2月11日。

ここに至って、プラント理事国が中心となって構成された地球連合とプラントとの緊張は限界点を突破し、地球連合からプラントへの宣戦布告という形になって破られた。

……事態は俺が全く望んでいない方向へと転がり落ちていく。

◇　◇　◇

地球連合からの宣戦布告を受けて、Ｌ５近隣宙域で訓練していたエルステッドにも、ザフト機動艦隊から訓練中止と艦隊集結の命令が届いた。

その集結座標を目指しての航行中、小隊の訓練を縮小して、ブリーフィングルームで小隊員の二人と簡単な小隊行動の確認を行っていた時に、少し話したいと言うゴートン艦長から呼び出しを受けた。

当然、艦体後部にあるブリーフィングルームから艦体前部にある艦橋に向かうために、艦内を横断することになるのだが、初実戦のためか、普段と異なる緊張感に満ちた空気が漂っていた。
途中、幾人かの主計班員や保安班員と擦れ違う際に簡単な言葉を交わしたが、どの声音には硬いものが混じっていたことからも、俺が感じたそれは間違いではないだろう。

……いくら普段、威勢のいいことを言ってたって、自身の命が懸かってるからなぁ。

なんてことを考えながら、艦橋に繋がる扉を抜けて、キャプテンシートに腰掛けているエルステッドの艦長、オーリン・ゴートンに声をかける。

「艦長」
「ああ、来たか、ラインブルグ君。……艦内の様子はどうだい？」
「宣戦布告の話を聞いて、皆、緊張しているみたいです」

空気がね、こう、ピリピリしているとでも言えばいいのかな？

「そうかい。やはり、いざ実戦となると変わるものだねぇ」
「そりゃそうですよ。命のやり取りをするとなると、当然、緊張もします」
「はは、流石は実戦経験者だね。言葉に余裕があるよ」

いや、そんなことはないはずだけどなぁ。

自身ではよくわからないが、人から見たら俺は余裕があるように見えるみたいだ。

まぁ、それはいいとして……。

「途中で聞いたんですけど、月方面からの侵攻は間違いないんですか？」

「……うん、月方面に偵察に出ていた艦が、先の地球連合の宣戦布告後、月のプトレマイオス基地から多数の熱源を観測しているんだわ。ザフト上層部は、その動きを連合軍の宇宙艦隊が出動して、プラントへの侵攻を開始したと判断しているみたいでねぇ。休暇中だった艦にも召集と出撃命令が下っているよ」

「……この連合の動き、物見遊山ってことは、ないですよね？」

「そりゃぁね、流石に宣戦布告しておいて、遊びに出かけるような馬鹿な奴はいないさ」

艦長が軽く帽子を弄って位置を直すと艦橋スタッフに指示を出し、メインスクリーンに連合軍の宇宙艦隊の予想進路とザフトの迎撃予定地点を出してくれた。

「とりあえずは、Ｌ５と月の最短ルートに主力部隊を置いておいて、別ルートからの侵攻にも警戒部隊を当てる、ですか？」

「とはいっても、随時偵察情報が入ってきて、その都度、情報が更新されるから……最終的には、正面から大戦力同士がぶつかる決戦に近いような感じになると思うよ」

決戦か……。

「連合は艦隊戦を仕掛けてきますかね？」

「ん～。相手さん、建軍してから長いから、錬度は高いだろうと考えられるけど……先のＬ５での戦闘結果もあるから、及び腰になっている場合もあるなぁ」

「……前回の部隊機動から察するに、ＭＡ部隊による敵機動戦力の排除及び艦隊への対艦攻撃、その後に艦隊戦を行って撃滅する、って、いうのが、連合軍宇宙艦隊の戦術ドクトリンのように感じますね」

「王道パターンだね」

「うちの艦隊が艦隊を襲う時も同じようになると思いますよ？　王道これ確実ですから」

でも、前回の戦闘で連合軍もＭＳの脅威がわかったはずだから、今回は艦艇からミサイルや艦砲を撃ち込んで来ると予想できる。

これには気をつけないといけないな。

「うん。……それで呼び出した用件なんだけど、俺も初の実戦だからね。作戦前だと緊張と忙しさで忘れそうだろうから、今のうちにオーダーを伝えておこうと思ったんだ」

「ああ、なるほど。それで、艦長のオーダーは？」

「俺から君の小隊へのオーダーは、敵ＭＡに艦隊の影すら踏ませるな、だな」

「了解、艦長」

「そうそう、会敵予想は１３日から１４日だから、一種警戒発令までは、しっかり英気を養っといてくれよ」

ひらひらと帽子を振ってみせる艦長に軽く敬礼して、艦橋を後にした。

もちろん、ザフトのために、なんて野暮な言葉は要らないのだ。

艦橋を出た俺はその足でブリーフィングルームに戻り、待機して

いるように言っておいた二人の後輩、レナとデファンに、明日か明後日に予想される会敵を教え、戦闘終了後までは通常訓練を控えることを告げた。

「今のうちにたくさん緊張しておけよ。当日になって、いざって時に緊張して駄目でしたじゃあ、話にならないからな」

「……うっす」

「は、はは、い」

「と、脅してはいるが、まぁ、初陣なんだ、色々と考えてしまうさ。……俺もできるだけフォローするから、訓練でやったことをそのまま出すことを意識すればいいよ」

下げて上げてみた。

すると、二人はこれまでの訓練を反芻するように、声に出して注意点を確認し始めた。

「……ええっと、単機で動かず、小隊としての連携を常に意識すること」

「……攻めるときは、必ず誰かがフォローに入ること」

「目前の敵に集中しても、視野を狭めず広く見通すこと」

「攻められたら、慌てず騒がず、味方の掩護がしやすい場所に逃げること」

「そもそも、ＭＡの射線には絶対に入らないこと」

「そもそも、どんな敵でも、侮ってはならないこと」

「戦場では、驕らず、自身を保って判断すること」

「戦場では、過信せず、常に疑って予測すること」

おお、結構、覚えてるね。

「うん、俺の訓練についてこれたんだ。少なくとも、生き残ることだけは保障しとくよ」
「うっす」
「はいっ」
「あっ、それと一応は加えておくけど、って……まぁ、二人には普段から口を酸っぱくして言ってきたから大丈夫だとは思うが、ナチュラルだからって理由で油断するなんてことは、言語道断だからな？」
「うっす。わかってるっす」
「はいっ！」

二人の目を見て意識が浸透しているか確認した後、作戦のブリーフィングまでは気を落ち着かせているようにと言い渡して、解散する。年相応の顔に不釣合いなほどの、しっかりとした敬礼をする二人に、俺も敬礼を返した。

……。

二人を死なせず、ここに連れ帰るのが、面倒を見てきた俺の最低限の責任だと思った。

残る不安は……エルステッドのもう一つの小隊、アシム小隊なのだが……俺の言うことを聞くような奴じゃない上、その部下も驕り高ぶり過ぎている。
艦長も頭を痛めていたようだが、俺では、もう、どうすることもできない。そもそも、通常任務中は交代で直を行っているから、接点がどうしても生まれないのだ。

こういう状況になった以上は、ただ、奴らが生きて帰ってこれる

ことを祈ってやるだけだ。

もっとも、俺の祈りなんていらないって言うだろうから、祈る必要はないかもしれないが……。

だけど、今度は、以前の衝突とは違い、本格的な戦争状態だ。

正直、何が起きるかわからない。

俺も気を引き締めて、行かないとな……。

翌日、ザフト宇宙機動艦隊は第一種警戒態勢を発令した。

地球連合、元は旧理事国との二度目の軍事衝突、俺にとっても二度目の実戦が迫ってきていた。

序　戦争前夜（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。
１１／０２／１４　表記修正。

01　バレンタイン狂騒曲　1

２月１４日、聖バレンタインディ。
前世ならば、世の男達はお義理でチョコレートをもらって、翌月のお返しに頭を悩ませる日だった今日、Ｌ５宙域外縁部にて、地球連合軍宇宙艦隊との戦闘が始まる。
俺達ＭＳ部隊も第一種戦闘配置の発令と共に、艦隊の脅威となる敵機動戦力の殲滅を目的に出撃することになった。

そんな訳で、俺は自機である【ＺＧＭＦ－１０１７】ジンに搭乗済みであり、出撃直前である。

すでにＭＳ格納庫の内扉、外扉は共に開放されており、目前で大きく口を開けた格納庫前面開口部からリニアカタパルトが延び出て、ソラへと続く道をつくり上げている。
出撃予定時刻も間近に迫っているため、俺も機体情報に異常が出ていないか、素早くチェックして、さらに後輩二人の様子を伺っている。

……ヘルメット越しなので詳しくはわからないが、緊張で体の動きが少し鈍いようだ。

けれども、それは仕方がないことだろう。

未知の領域に踏み込む時は、誰だってそうなる。

となると、一度はその領域に足を踏み入れた事がある俺としては、その緊張を解き解すための努力をしなければならないと思うんだ。

「二人とも、緊張し過ぎるなよ？　……まぁ、お前らの尻は、しっかりと、俺が持ってやるから、安心して、思いっきり、やればいいさ」

「それ、何気にセクハラッすよ、先輩」

「そ、そそそ、そうです、私のお尻は高いですよっ！」

……ふむ、レナが緊張のあまり混乱しているみたいだから、ちょっと、からかってガス抜きするか。

「お前ら、慣用句って知ってるか？　っていうか、レナの尻は金を払えば持てるのか？」

「そ、それはっ！　そ、そう、こ、言葉のあやですっ！」

「……いや、わかってるって、今のは冗談だよ」

露悪的に、ニヤリとバイザー越しでも見えるように、と……。

「……確信犯的な悪質さっすね」

「もうっ、アイン先輩！　セクハラで艦長に訴えますよっ！」

うん、二人とも、馬鹿なことを言っているうちにいつもの調子が戻ってきたようだな。

ちょっと、レナが興奮気味だが……まぁ、いいだろうさ。

その時、モニター越しに、ノーマルスーツを着込んだ整備員がハンドシグナルで目視による機体異常なし、出撃準備完了と伝えてき

た。それに応えるために軽く重突撃機銃を持った右腕を軽く振ってみせる。
前方を確認すると、先に出撃するアシム小隊のジンがリニアカタパルトで射出されて、青白いスラスターを吹かしながら、ソラへと飛び出していった。

「アシム小隊の出撃完了しました！　……進路、クリア！　続いて、ラインブルグ小隊、出撃、どうぞっ！」

ベルナールの出撃管制に従い、ジンをリニアカタパルトへと進ませる。

「了解。ほら、お前ら行くぞ」
「了解っす」
「う～、わかりました」

リニアカタパルト手前脇の待避所から、カタパルト担当の整備班員が外を指差し、ＧＯサインを送ってくると同時に、艦体下部に付けられている発進シグナルが青になった。

「……ラインブルグ、ジン、１１３４、出るぞ！」

音も無く、機体が急加速され、俺はソラに放り出された。

◇　◇　◇

小隊がワントップ・ツーバックのトライアングル編隊を組んで戦域に到着した頃には、既に戦端は開かれていた。

限定された宙域に敵味方が集ったために、過密状態というほどではないが密集しており、早くも乱戦状態になりつつある。
また、ＭＡとは別に、連合軍艦隊からミサイルや航宙魚雷が飛んできているようだが、ザフト艦隊からのミサイルやビーム砲とＭＳの射撃で上手く迎撃されているようだ。敵のビーム砲に関しては、まだ射程圏内に到達していないのか、砲撃してきていない。

……これなら、なんとかなるか？

そんな感触を懐いていると、宇宙に瞬いている命の炎が目に入る。
その炎の美しさと儚さに、一瞬、自失しかけるが、今は後輩を持つ身である以上は、呆けてはいられない。

「二人とも、常に周囲に目を配れよ。後、流れ弾に気をつけろ」
「うっす」
「はいっ」

コックピットのサブモニターに映される戦域情報図には、敵味方が入り乱れている様子が映し出されている。
時折、通信系に紛れ込む、罵声や嘲笑、悲鳴や断末魔が戦場が狂気の場であることを、再認識させてくれる。

「基本、三機で連携して、メビウスと交戦する。……ジンの装甲なら、リニアガン以外は防げるから、落ち着いて動け」
「「了解」」

そう指示を出している間に、小隊規模の敵がこちらに向かってきているのをレーダーで捉えた。同時に、管制官のベルナールから連絡が入る。

「ラインブルグ小隊、こちらエルステッド。水平一時方向より小隊規模のメビウスが接近しています。至急、迎撃に当たってください」
「了解、エルステッド」
「……ご武運を」
「ありがとよ、ベルナール。……よし、二人とも聞いていたな？俺が前に出て、囮になる。奴さん達が俺に攻撃を仕掛ける時に、少しでも隙を見せたら、落せ。主攻はデファン、サポートはレナだ。絶対に、連携を忘れるなよ？」
「了解っ」
「はいっ」
「よし、水平一時方向、来るぞっ！」

だが、俺の声に反応したかの如く、メビウスの小隊は編隊をブレイクし、前に出ていた俺を無視して、水平、垂直方向へと各機ばらけていく。

……どうする？

「二人ともまずは狙いを一機に絞る！　水平三時方向の敵をまずは落とせ！　後方は俺がフォローする！」
「りょ、了解」
「う、う、わ、わかりましたっ！」

まずは、機体上方に向かった二機のメビウスに牽制射撃を加えて、大きく旋回させることで敵の意図する機動を阻止する。
同時に二人の後ろを取ろうとする、水平九時方向のもう一機にも射線を取らせないように、如何にも狙っているぞというような重突撃機銃を持つ手の動きと機動で牽制を入れる。

……。

よし、回避旋回した！

後は、潜り込んだ一機だが……って、おおぅ、危ない危ない、危うく俺が射線に入るところだった。

「……あっ」
「や、やった！　落としたっす！」

デファンの喜びの声が聞こえたと思ったら、二人に狙わせたメビウスだった火球がちょうど消えていく所だった。

「二人とも油断するなっ！」
「う、うわっ」
「きゃっ」

仰角方向で大きく旋回していた二機のメビウスが二機を射線に入れかけたのだろう、突進しながらリニアガンをぶっ放し、それが二機の至近を通ったのだ。

……だが、その突進行動を奴らの命取りにできる。

「二人とも、訓練でやったとおりだ……メビウスの突進をかわして、後を取れ！」
「は、はいっ」
「う、っす」

その間に、俺は他の二機の動きをって、クロスファイアーかっ！

牽制って、くっ、回避が上手い！

「あっ、や、やりましたっ！」
「俺も、もう一機！」
「デファン！　左へ回避ぃぃぃっ！！」
「ッ！　あああああっつぅあああああっったっ！！！！！」
「えっ？　で、デファンッ！？」

くそっ、デファン機の右足をもぎ取られた！

「レナッ！　まだ終わってない！　俯角に逃げた敵の進路上に、ぶっ放せッ！」
「……え」
「俯角！　敵！　撃てぇぇっ！」
「は、はいいいいいっっ！」

デファンの様子が気にかかるが、まずは敵の排除だ！

一機はレナに任せて……いた、全速旋回中か。

「あっ、当たった！」
「よしっ、よくやった！　……後は俺がやるから、レナはデファン機の被害確認と掩護をしろ」
「は、はいっ！」

残るは一機だが……あ～、こりゃ、体当たりを仕掛けてきそうな勢いだな。

しかも、俺が逃げたら、デファンを狙いそうだし……受けて立たないと駄目か。

……来たな。

……。

ッ！

……はふぅ。

最後の一機をすれ違いざまの一連射で落したんだけど……あ～、もう、リニアガンの弾が掠っていく一騎打ちなんて恐ろしい事は二度としないぞ。

……それにしても、疲れた。

完全に気が抜けてしまいそうになるのを我慢して、周辺を確認する。

……周囲には少し大きめなデブリが幾つか流れているが、敵影は

ない。

遠方でいくつもの爆発光が見えることから考えるに、どうやら、小隊同士でぶつかり合っている間に、主戦場となってる乱戦宙域から流れてしまったようだ。

けれど、今の状況では逆にありがたい。

フラフラと覚束ない動きを見せている、右足を失ったデファン機と、その周囲で頻繁に頭を動かして警戒しているレナ機の姿を見ると、そう思わざるを得ない。

もしも乱戦宙域だったら、落とされていただろうデファン機に近寄って、損傷箇所を軽く観察する。

損傷箇所で電光が走っているように見えるが、運が良いことに、スラスター推進剤が入った部分は吹き飛んでしまっている。これなら、急に爆発を起こすようなことは無いだろう。

そのことに安堵しつつ、今度は二人の様子を伺う。

「……うぅ」

「はぁはぁはぁ」

呻いているのはデファン、息が荒いのはレナだな。

二人とも、どうやら初めての実戦を潜り抜けたためか、かなり消耗してしまっている。やはり、生と死の狭間なんて極限状態に置かれたのが、相当の負担になったようだ。

だが、初陣である以上は、仕方がないことだろう。

更に付け加えれば、相手も悪かった。

俺が推測するに、Ｌ５宙域事変（仮）で最後にやりあった二機のメビウスよりも、更に上の力量を持った小隊だった。

二機連携によるクロスファイアーで、以前から俺が憂慮していた、例の”避ける先に弾を置く”なんて器用なことをやりやがったくらいだからな。

……コックピットがある胴体に命中しなかったり、推進剤が詰まった部分が残って引火しなかったのは、本当に幸運としか言いようがない。

そんなことを思いながら、二人に注意と現状報告を促す。

「レナ、息が荒すぎる。エアー残量をチェックして報告しろ。デファン、無事か？　無事なら、右足の損傷具合を機体情報で把握して、報告しろ」

「はぁはぁはぁ」

「……ぅ」

「聞こえていたら、しっかりと返事をしろっ！！」

「「はいっっっ！」」

俺の怒声で正気を取り戻したらしい二人が、大慌てで報告を入れてくる。

「え、エアー残量は規定値内ですが、予定していた残量値よりも減っていて、少し心許ないです」

「俺は……ちょっと口を切ったくらいで済んでるっす。機体の方は、右足が大腿中程からもぎ取られてるみたいっす」
「わかった。レナは少し落ち着けば、なんとでもなるし、いざとなったら、俺の機からエアーを分けるから安心しろ。それと、デファンは右足に送っているエネルギーを全てカットしろ。もしも、動かなくなったことで、機体バランスが崩れる過ぎるようなら、左足のエネルギーもカットする」
「わ、わかりました」
「了解っす」

さて、これからどうする？

……ふむ、まずは情報だな。

エルステッドから戦域の全体情報を仕入れるか。

「エルステッド、こちら、ラインブルグだ。……戦域全体の戦況はどうか？」
「あ、はい、こちらエルステッド。戦況はこちらが優勢です」
「……戦力は必要か？」
「いえ、予備戦力も存在していますから、戦力には余裕があります」

……となれば、引き揚げてもいいかな？

デファンもレナも初陣で命を賭けることを初めて体験したし、デファン機が損傷したことへの動揺もあるだろう。それに、ベルナールの話からも、ザフトが優勢なのは明らかだし、無理をする必要もないな。

うん、エルステッドに引き揚げることにしようか。

「ベルナール、デファン機が戦闘で損傷した」
「えっ、だ、大丈夫なんですかっ！？」
「ああ、幸い、怪我は無い」
「そ、そうですか、良かったです」
「まぁ、そんな訳で、エルステッドに戻るから、受け入れ準備を頼む」
「了解です。整備班に伝えます」
「ああ、よろしく頼む」

ベルナールとの通信を切って、俺に言われなくても、しっかりと周辺の警戒をしていた二人に声をかける。

「よし、二人ともエルステッドに引き揚げるぞ。……戦況はこちらが優勢だからな、後のことは友軍に任せればいい。少なくとも、給料分の働きしただろうさ。それと、デファン機、レナ機、共に二機、メビウスの撃墜を確認している。……敵を倒した上に生き残ったんだ、胸を張れ」
「……はい」
「……うっす」

……正直、人を殺して胸を張れって言うの、辛いよなぁ。

「さて……」

もう一度、周囲を見渡して、戻るぞ、と続けようとしたら……。

何か、違和感が、頭の隅を、過ぎった。

「どうかしたんですか？」

何だ、この違和感は……この感覚の源は何だ？

「先輩、どうしたっすか？」

……うん？

「先輩？」

……。

「先輩っ！」

……あっ、さっき、見たデブリ……なのか？

確か、以前、親父に聞いたことがある。

プラント付近の宙域はコロニー建設のために、神経質なまでにデブリ除去が進んでいて、他所の宙域よりも綺麗であると……。

なら、なんで、あんなに目立つような大きなデブリが幾つもあった？

戦場で破壊されたモノか？

……それにしては、形状が……綺麗過ぎたような気がする。

……。

いや、俺の考えすぎで、多分、何かの拍子で、たまたま、ここら辺に流されてきたデブリだったんだろう。

……。

……だが、気になる。

「レナ、俺達の座標から、水平六時俯角三時方向のデブリ群は、どこに向かって流れてる？」

「えっ、水平六時俯角三時方向ですか？　……デブリ群なんて、どこにもありませんよ？」

な、に？

……基本的に、デブリは地球の重力に引かれつつ、一定方向に流れているはずだから、何らかの力が加わらないと急激な……針路変

更は、ないは……ず？

ッ！

まさかっ！

「エルステッドッ！　エルステッドッ！　聞こえるか、ベルナール！」

「！　は、はいっ！　なんですか、ラインブルグさん？」

「俺達がいる周辺に、デブリ群が存在しているはずだ、それを大至急、捕捉して欲しい！」

「わ、わかりました！」

何も聞かないで、すぐに行動してくれることが今の状況では、とてもありがたい。現場から上がってくる情報にはすぐに対処するように、管制官を教育しているゴートン艦長に感謝だ。

「……あっ、はい、捕捉しました。大きいのが……五つありますね」

「……流れている方向は？」

「待ってください。……この方向は……プラントのコロニー群に向かってます」

……これは、可能性があるな。

「艦長に伝えてくれ、そのデブリ群が敵の擬態かもしれないって」

「……敵の擬態、ですか？」

「ああ、とりあえず、そう伝えてくれ」

「了解しました」

通信が途切れる。

……ここから、デブリ群に、追い着けるだろうか？

……。

……可能性があるなら、やらないより、やった方がいいよな。

01　バレンタイン狂騒曲　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

02　バレンタイン狂騒曲　2

「先輩、本当にやるんですか？」
「ああ、やるよ」
「……先輩が感じた違和感、ただの気のせいかもしれないっすよ？」
「それだったら、俺が馬鹿なことをしたって、笑われればいいだけのことさ。それよりも、お前らはちゃんと、エルステッドに戻るんだぞ？」
「わかってるっす。ちゃんと大人しく戻るッす」
「レナ、デファンをしっかりとエスコートしろよ？」
「はい、わかりました」

……伝えることは、こんなもんかね。

「よし、レナ、頼む」
「……じゃあ、先輩、行きますよ？」
「ああ、こっちはいつでも合わせられるぞ！」
「行きますっ！」

スラスターを全速噴射したレナのジンの肩に、俺のジンの足をのおぉせってぇぇっ！

き、きつぅっ！

ど、どうか、こ、壊れませんようにぃぃっ！

くっっつっぁぁぁあっ、いいいいくぅぅぅぞっぉおおおお！！

足でレナの機体を思いっきり蹴っってぇぇぇうっ、さ、さらにいい、お、俺のジッジ、ジンのぉ、全力噴射ぁぁぁぁぁ！！！

「うきゃぁぁぁぁぁぁぁぁ」

……先の怪しいデブリ群を追うためとはいえ、我ながら無茶をしていると、体全体を通常以上のGで押し付けられながら、思った。

ついで、土台担当のレナよ、すまんかった。

訓練校……じゃなかった士官学校で受けた加重耐久訓練以上の加重に耐えながら、通常の倍以上の速度で飛んで、例のデブリ群に近づいていく。

わずかな間で、こんな馬鹿なことをしないと追いつけない程に距離が離れたということは、明らかに、そのデブリ群の速度が尋常ではないということだ。

噴射しているスラスターの耐久値と機体の廃熱状況を確認しながら、自身の限界に挑戦していると、エルステッドからゴートン艦長が通信を入れてきた。

「……ラインブルグ君、デブリ群に敵の擬態の疑いがあるだって？　っていうか、なにやってるの？　何か、君のジンが普通じゃ考えられない勢いでデブリ群を追ってるのがレーダーに映ってるんだけど？」

「ふぅぅぉぅ、かんちょおおおおーーー、すぅんませぇんんんーー

ー！　いまぁはぁぁーーーーー！」
「ああ、うん、もう少し減速したのを確認してから連絡入れるよ」
よしっ、この辺りでいいか。
後は、スラスター噴射をオフにして、姿勢を制御して、足を前にしてぇっ！！
さぁいふんしゃゃぁぁーーーーー！
ふんぬぅぅぅぅぅぅおぉぉぉぉぉぉぉぅぅぅぅおぉぅぅーーーー！！！！！
……。
ふ、ふぅ……な、何とか生きてるな、俺。
内心で自分の頑丈さというか日々の日課であるトレーニングに感謝しながら、速度をほぼ同期させたデブリ群にロックオンした後、機体情報を確認する。
あー、俺は大丈夫だったけど、ジンは機体耐久値、特に間接系に幾つかイエローが出てるなぁ。
騙し騙しやるしかないかなぁ、とか、シゲさんに怒られるかなぁ、なんて考えていたら、エルステッドから再び通信がつながった。
「あー、ラインブルグ君、もう、大丈夫かね？」
「えー、はい、かなり消耗してますが、なんとか、大丈夫です」

「……それで、さっきの話なんだけどさぁ、今、君が接近しているデブリ群が、敵の擬態かもしれないって？」

俺に問いかけた艦長の言葉は、軽い調子なのに、自分でも矛盾していると思うのだが、何故か、重みを感じさせる。

「ええ、何となくですが、さっき捕捉した時に異常を感じまして……」

「異常を感じたか……それは君の勘かい？」

「どちらかといえば、違和感の方が合っているかもしれません。まぁ、もしも、俺の予想が外れていたら、俺が笑い者になればいいだけですよ」

「……うん、なら、俺は君が笑い者になるように期待しているよ」

「ええ、期待していてください。……では、攻撃を仕掛けます」

「うん」

そんな訳で、早速、五つあるデブリの一つを目標にして、重突撃機銃を構えて、撃つ！

うおおぁっっ！！

デブリが大爆発したっ！

しかも、爆発と同時に残った四つのデブリから、メビウスが飛び出しやがったっ！

「艦長！　デブリが敵の擬態であることを確認したっ！　この方向

は……やっぱり、プラントのコロニー群に進路を向けているんじゃないかっ！？　そちらでの確認を頼むっ！　後、機体下部に対艦ミサイルよりも大きい、大型ミサイルを二つ確認した！　爆装しているぞっ！　繰り返す、目標は爆装をしている！　……うしっ、もう一機落したっ！」

「了解、ラインブルグ君は引き続き、残りを掃討してくれ。俺は艦隊と防衛隊に連絡を入れて、大至急、コロニー周辺に防衛ラインを形成するように頼むよ」

「了解！　よし、捉えたっ！　……残り二機！」

メビウスが加速に入れないように、進路に向けて、牽制射撃をして距離を詰める。

だが、残った二機は相当に熟練なのだろう、上手い具合に機体をロールさせて、こちらの弾丸を回避しながら、機体を加速させていく。

手強いな。

……。

よし、ここだっ！

って、くそっ、外された！

本当に、さっき戦った奴ら同様に、上手い！

相手の神憑り的な操縦を内心で罵っているうちに、通信機からゴ

ートン艦長の声がまた入ってくる。

「ラインブルグ君……残念ながら、防衛隊はあんまり期待できなさそうだわ」

「ちょっ、なんすかっ、それはっ！」

「いや、なんかね、防衛隊は一部を残して、この会戦に参加しているだってさ。……本来の仕事をほっぽり出して、何を考えてるんだろうねぇ」

その言葉の意味を理解した瞬間に、頭の中が真っ白になってしまった。

「ふ、フザケすぎでしょうっ！　それはっ！」

「……ああ、フザケてるよねぇ」

っ！　殺ったっ！

「よしっ！　って、なっ……まさか、自分を犠牲にして、仲間を加速させたっていうのかよっ！！」

「……非常に忙しいところ、申し訳ないが、ラインブルグ君は他に擬態している敵がいると思うかい？」

「間違いなく、いますよっ。現に今、迎撃しているのが、俺だけしかいないじゃないですかっ！　こちらの行動を読んで、裏をかいた連中に、出し抜かれたんですよ、俺達はっ！」

俺が見事なまでに奇策を成功させた連中への驚嘆を込めて喚いていると、エルステッドでもなにやらやっているようで、つなげっ放しの通信から、微かに艦長の声が聞こえてくる。

「……ああ、そうだ。今すぐに、コロニーの全市庁に直接連絡して、

避難命令を出すんだよ。うん？　責任？　ああ、責任は取るよぉ。
うん、だから、早く全土に避難命令出して、うん、うん、わかった。
……へぇ、そうかい」

俄かに艦長の声が大きくなった。

「喜べ、ラインブルグ君。防衛隊の援軍がそちらに行くそうだ」
「なら、早いところ寄こしてください、って言っておいてくださいっ！」

こちとら、もう、機体情報が黄色と赤色とで彩られ始めているんですよっ！

しかも、全力でスラスター噴射をしているから、推進剤の残量も厳しいことになってきてる上、廃熱が追いついていないから、スラスター自体の耐久値が拙いことになりつつある。

加速力は相手の方が上だっていうのに……スラスターに不安があるなんて、無茶苦茶な状況だよっ！

って、……落ち着け。

クールになって、状況を確認するんだ。

……。

うん、幸いにして、重突撃機銃の残弾には余裕がある。

となれば、相手の進路を予測射撃で塞ぐなりして、援軍が到着するまでの時間を稼ぐのが最良手だ。

「っ！　また、避けられたっ！　タイミングを読まれてるっていうのかよっ！」

最良手なのだが……この相手には……このメビウスには、そんな甘いことでは絶対に逃げ切られる気がする。

ここは絶対に落とすつもりでいかないと……。

……。

よし、今度は扇状に射線を広げて……回避進路も出来るだけ塞ぐか。

……。

落ちろっ！

……くっ！

こっちは背後の死角から射撃したってのに、射線を読み切って、全弾避けやがった！

「くそったれ！　なんて奴だよ！　回避が上手すぎる！」

自然、漏れ出た自分の罵声が自分の耳朶を震わせる。

遠方に見えていたプラントのコロニー群が、徐々に、近づいてく

る。

……って、おい。

おいおい、待てよ、コロニー群がいつの間にこんなに近くなってるんだよ。

いくらなんでも、これは拙すぎるだろう。

……だ、だいたい、あそこにはっ。

あそこには、ミーアがいるんだぞっ！

……くっ。

駄目だ、落ち着け、俺。

頭に血が昇りすぎているぞ。

……ッ！

くそっ！

冷静さが取り戻せないっ！

「後、一機、残り一機なんだぞっ！」

……あれから、５分以上は、全力で追い掛け回しているはずなのだが、一向にメビウスを射線に捉えられない。

当然の如く、重突撃機銃の残弾も後、少し。

さらには、機体情報の悉くが警報の赤色で染められている。

しかも、コロニー群は、既に目と鼻の先といえる距離だ。

自棄になった思考がこう主張する。

もう、だめぽ……。

疲労と焦燥とが合わさってしまい、思考がまともに働かない上に、まとまらなくなっている俺の目の前で、メビウスが大型ミサイルを切り離した。

その切り離された二発のミサイルが、目前に迫ったコロニーへと向かって、悠々と加速していく。

せめて、そのミサイルを撃ち落とそうと、俺は条件反射的に機銃を向けて引き金を引くが、機銃からは頼りになる銃弾が出てこない。

自然、表情が自身の迂闊さを嘲るように歪むのが自覚できた。

……弾切れだ。

「ちくしょう！　……もう、無理なのかっ！」

俺が大型ミサイルがコロニーを破壊するという最悪の事態を想像して、絶望の言葉を上げようとした瞬間、メビウスの放ったミサイルが相次いで飛来した銃弾に貫かれたかと思うと、ミサイルを撃ったメビウス自体も爆散した。

そして、銃弾が放たれた方向を見ると、ジンが三機、こちらに向かってくるところだった。

援軍の防衛隊が間に合ったのか等と、朦朧としている頭で考えていたら、そのうちの一機から通信がつながり、サブモニターに見知った顔、ユウキの顔が映し出された。

「よく頑張ったな、ラインブルグ、後の警戒は任せておけ」

「おお、ユウキか。……本当に、助かったよ。後は任せ……」

……その時……眩い大きな光が……コロニーの一つを……覆った。

02　バレンタイン狂騒曲　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

03　バレンタイン狂騒曲　3

巨大な光球に飲み込まれた後、構造体中央部から二つに折れて、崩壊していくコロニー。

……それはまさに、一つの世界が崩壊する姿だった。

粉々に分解していく採光窓や外壁、形を保ったままのコロニーの両端部……陸地部分が、擬似重力を発生させるために回転していた力によって、そのままＬ５宙域から外れるように、回転の名残を残しながら離れていく。

その失われた大地の後を追うように、大小、様々なものが、プラントへの未練を表すかのように、連なっている。

……。

かつて、俺はこれほどの衝撃を味わったことがあっただろうか？

……。

いや、前世も含めても、絶対に無いだろう。

……。

落ち着け、俺。

そして、気をしっかり持て、今、自失している暇などない。

ゴートン艦長が噛み付いて、攻撃を受ける前にコロニー全市に避難命令が下ったはずだから……きっと、生存者が……救難艇に避難した者がいるはずなのだ。

その可能性があるならば、すぐにでも捜索を開始して、救助の手を差し伸べる必要がある。

……そうだ、今は、行動をしなければならない時だ。

感情は……激しく揺らいでいる感情の波は……凍らせるんだ。

保安局時代にテロリストのアジトに突入した時と同じように、戦場で相手と対峙する時と同じように、全てを冷徹に、どこまでも冷徹に物事を見据えるように、意識するんだ。

「ユウキ」
「……」
「ユウキっ！」
「……こ、ころにー、が……」

……。

「レイ・ユウキッ！！」
「！」
「ボサッとしている暇があるならっ！　さっさと防衛隊にコロニー全体を守るように防衛線を再構築するように連絡を入れろっ！　それとコロニーには避難命令が出されていたはずだから、必ず、コロニーから脱出できた救難艇があるはずだっ！　大至急に、捜索、救難部隊を組織するように進言するんだっ！　平の俺よりも赤服のお前の方が、話が早くて済む！　慌てず、急げぇぇ！！」
「ッア！　ああ、わかった！　……それと、すまない」

……世界が一つ崩壊するのを見てしまったら、誰でも、自失するさ。

「……仕方がないさ。けど、俺達にはできることがある。なら、それをしよう。俺も所属艦に連絡を入れる」
「……」

サブモニター越しに、小さく頷いたユウキが防衛隊に連絡を入れるのを見て、俺もエルステッドへと通信をつなげた。

◇　◇　◇

一度、帰艦しろとのゴートン艦長のお達しに素直に従って、俺はエルステッドに帰ってきた。

ユウキは崩壊したコロニー周辺に向かい、本格的な救難・救助体制が整うまで、一時的に救難指揮を取るとのことだった。

……。

艦長からエルステッドに帰ってこいと言われた時に、地獄を見ないで済んだと、ほっとしてしまった俺の心は醜いのだろうか？

……いや、どうせ、自分を慰めるために、トラジックに酔いたがっているだけだ、よそう。

エルステッドに着艦後、コロニーの崩壊を知って動揺著しい小隊員二人に軍医の所へと赴くように指示を出してから、艦内を軽く観察しつつ、帰艦報告を入れるために艦橋にあがった。

艦橋は、唐突に訪れた死が訪れた人を悼む通夜のように、悲しい静けさに包まれていた。

ＭＳ管制官であるベルナールを含めた数人の艦橋スタッフの姿が見えないことから察するに、コロニー崩壊を知って、精神的に打撃を受けた者を任務から外したのだろう。

そして、その断を下したであろうゴートン艦長は、帽子を目深に被って、キャプテンシートに身を預けていた。

俺は、艦長の隣に立って、静かに小隊全機が帰艦したことを告げる。

「……艦長、ラインブルグ小隊、全機、帰艦しました」

「ああ、ラインブルグ君か。……ご苦労さんだった」

帽子を軽く押し上げ、視線を向けてくる。

帽子の下に隠されていたのは、コロニー崩壊で犠牲になった者達への鎮魂を願うかのように、昏い瞳だった。

「……やられたねぇ」

「……やられました」

……おそらく、俺も似たような眼をしていると思う。

互いの瞳の色を確認した後、長く続いた沈黙を破ったのは、艦長の、淡々とした、乾ききった声だった。

「……被害にあったのは、運用が開始されたばかりの農業用コロニー【ユニウス・セブン】。現在、防衛隊と機動艦隊双方から救難救助隊が組織されて、脱出に成功した救難艇の回収が行われている。……が、避難命令の遅れから、脱出できた救難艇の数は少なく、犠牲者の数は相当数に上ると考えられているよ」

「……地球連合との戦争に突入して、しかも、Ｌ５宙域近くでの本格的な衝突なのに、何故、避難命令が出てなかったんですか？」

「戦闘前に避難命令を出し渋ったザフト上層部やプラント防衛隊の詰まらん見栄の結果さ。今頃、上層部の連中や防衛隊の幹部は自分達の甘い予測が生んだ悲劇に、顔を真っ青にさせてるだろうさ」

いつも韜晦していて、自身の内心を表に出さない艦長が侮蔑の色を隠さず、明け透けに語った。

そのことが、艦長のより深刻な怒りを感じさせる。

「そういえば、戦闘はどうなったんですか？　連合軍艦隊は？」

「戦域の敵機動戦力はＭＳ隊によって殲滅されたが、敵の攻撃によるコロニー崩壊が起きたことで、ザフト全軍に発生した混乱の影響で追撃は不可能になり、連合の艦隊にはまんまと逃げられたよ。それと、ラインブルグ君からの報告の後、敵艦隊からコロニー群を結ぶ線を中心にして急いで網を張ったら、怪しいデブリ……擬態していた三個小隊規模の敵が発見されて、その全てを殲滅したそうだ」

やはり、他にもいたのか。

んっ？　擬態していた敵が殲滅されたのなら、いったい、誰が、どうやって、コロニーへの攻撃を成功させたんだ？

その疑問を艦長にぶつけると、一つ首を振って、答えてくれた。

「我々に殲滅された、デブリに擬態していた敵は囮だったんだろう。……直線ルートを大きく迂回する形で別方向から、目立たない暗色のデブリに擬態したメビウスが一機、コロニー群近くで飛び出し、ユニウスセブンに突っ込んできていたことが、防衛隊の観測衛星で確認されている」

「えっ？　た、たった、一機、ですか？」

「うん、たった一機のメビウスだよ、あのコロニー崩壊をもたらしたのは……。そのメビウスを発見した観測衛星が、大型ミサイルを一発、撃ち出す姿も捉えていた」

……大型で、それも一発でコロニーが崩壊が引き起こせる程の破壊力と、俺が見た、あの眩い巨大な光。

「……もしかして、核、ですか？」

「うん。核だったと判断されている」

「そう、ですか」

前世の影響もあるだろうが、やはり、核兵器には絶対的な拒絶がある。

……。

何故、大量破壊兵器が予告も無く、使われるのだろうか？

……。

いや、こういったものが、普通に使われることこそが……。

「……戦争、なんですね」

「ああ、これが、戦争というもの、なんだろうね」

でも、それだけでは済ませられないものが、核攻撃にはあると思う。

「それで、核を撃ったメビウスは？」

「爆発の影響で、あれだけ激しくコロニーの破片が散らばったんだから、それらに衝突して、デブリに仲間入りしたんじゃないかな、たぶん」

詳細は不明だが、高確率で死んでいるだろうってことか。

……。

俺の疑問はこれぐらいだし、後は、今後の予定を聞いておくか。

「では艦長、俺達のこれからの行動は？」

「うん。……1両日はＬ５宙域外縁を回って警戒線を引いた後、帰港することになっている」

「わかりました。……けれど、皆、大丈夫なんですか？」

艦内の沈みようは、正直言って、半端ではない。

「そういう君こそ、大丈夫なのかい？」

……まだ、大丈夫、かな？

「おそらくは大丈夫じゃないんでしょうけど、俺は、それなりに、感情を凍らせられますから」

「……その感情は後でちゃんと溶かしておいてよ？」

「まぁ、一応、当てはありますから……大丈夫です」

俺の言葉を聞くと、艦長はちょっと驚いたような顔をした後、ニヤニヤといつものような軽い笑みを見せた。

「ほほぅ、ラインブルグ君は中々にやり手の様だね。何とまぁ、うらやましい……」

「ははっ、その子には散々に弱みを見せてきたから、今回もお願いするだけですよ」

「おうおう、それがうらやましいっていうことだよ。……うん、じ

ゃあ、君も色々と疲れたろうから休んでいいよ。敵の動きはそれこそ、面子が潰れた防衛隊の面々がしっかりと、血走った目を精一杯見開いて、調べてくれるだろうしね。後、今日の報告書は余裕がある時でいいから、まとめておいて頂戴さ」

「アイアイ、艦長」

できるだけ意識して、軽い敬礼を艦長にして、艦橋を後にした。

かといって、艦長の好意に甘えて、すぐに休むというわけにはいかなかった。帰艦した時に、格納庫内に、ＭＳがうちの小隊分しかなかったから、少し、気になったのだ。

……いくら気に食わない奴等で、冷戦状態にあるとはいえ、仲間は仲間だからな。

そんなわけで、俺は再びＭＳ格納庫へ降りてきた。

ＭＳ格納庫の内扉が閉められているため、気密が確保されており、庫内は喧騒に満ちている。

その中から、ＭＳ整備班の責任者であるシゲさんを探し出し、周りの騒音に負けないように大声をあげて呼びかけた。

「シゲさんっ！」

「んっ？　おお、アインちゃんじゃないの。……さっきは、大変だったなぁ。今、アインちゃんの機体を見ているけど、何とか再出撃可能な状態まで持っていけそうだから、安心していいよ。とはいえ、コンディションレッドが多かったから、ちょっと時間がかかりそうだけどね。だから、次に乗る時は、あんまり機体をいじめないでや

ってくれよ？」
「ああ、わかってるよ。……でも、今回はどうしようもなかったんだ」
「まぁ、ねぇ。あの状況だと、ああでもしないと、確かに追いつけないねぇ」
うんうんと頷いてみせるシゲさんに気になることを聞いておく。
「レナとデファンの機体は？」
「レナちゃんの機体は肩の間接部をちょっと弄っただけでいつもどおりだよ。デファンの機体は予備パーツとの交換で対処するけど、違和感が出るだろうから、デファンに余裕が出来たら、慣らすように伝えておいてね」
「ああ、わかったよ。……後、アシム達は？」
「……元気一杯に外を飛び回ってるよ。コロニーを壊した奴はどいつだーってね」
「そう、か」
……少し、安心した。
「……艦内の雰囲気はどうだい？」
「いや、俺よりも、シゲさんの方が詳しいでしょうに」
「いやぁ、俺も流石に動揺しちまってねぇ。……ＭＳの整備に逃避しちまったんだよ。それに、整備の連中は皆、似たり寄ったりで、現実を直視したくないから、忙しそうに動いているだけさ」
「……そうか」
……なら、ここは、現状を認識してもらうために、一手打つか。
それに、シゲさんなら、きっと、俺が何を必要としているか、気

がつくはずだ。

「シゲさん、エルステッドは後二日、警戒任務に当たっていて、戻れないみたいなんだよ」

「……二次攻撃の警戒かい？」

「その意味合いもあるだろうけど、どちらかというと、市民の不安や動揺を収めるためのパフォーマンス的な面が大きいと思う」

「なるほどねぇ」

「で……その時に恐らく、必要になるモノがあるだろうから、それをつくっておいてもらいたいんだ。……整備班の皆には、とても苦い作業になるだろうけど、ね」

俺の言葉を聞いて、なんとなく、言いたい事がわかったらしく、シゲさんは一つ頷いた。

「……うん、なんとなく、わかったよ。うん、確かに必要だろうな。……用意、しておくよ」

「頼むよ、シゲさん」

「いや、こちらこそ悪いね、気を使わせてよ、アインちゃん」

申し訳なさそうなシゲさんに首を振ることで応えた後、俺は小隊員二人の様子を見るために医務室へと足を向けた。

帰港するまで、艦内のこの陰鬱な雰囲気は晴れることはないだろうな、と思いながら……。

０３　バレンタイン狂騒曲　３（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

04　バレンタイン狂騒曲　4

2月16日。
あのユニウス・セブンへの核攻撃から二日経った今日、エルステッドは母港へと帰港することになっている。
とはいっても、それで警戒を怠る理由にはならず、俺は自身の小隊に所属している二人の新人……初陣を無事に潜り抜けて生き残ったんだから、もう、この言い方は失礼だな……一人前になったレナとデファンを連れて、ユニウス・セブンが崩壊した際に発生したデブリを一つ一つチェックしながら、パトロールを行っている。

「……」
「……」

だが、俺と比べれば遥かに年若い二人である。
いくら核攻撃直後の動揺や衝撃から立ち直りつつあるとはいえ、こうも生々しい大破壊の爪跡を見せ付けられると、沈黙してしまうのも無理はなかった。

それに、このパトロールには敵への警戒の他にも、もう一つ、重要な仕事が含められている。

「……あっ」
「レナ、どうした？」
「……先輩、犠牲者の……方です」

そう、ユニウス・セブンの犠牲者の収容も合わせてやっているのだ。

俺はレナの言葉に応えて、重斬刀の代わりに多数持ってきたシートを一枚広げて、犠牲者の亡骸を覆い包む。そして、デファンに指示を出して、遺体収容用に整備班に頼んで用意してもらった、中を人間大の大きさで仕切りで幾つにも区切られた収容カーゴに収めた。

……核の熱線や爆風にやられ、生身のままで真空に放り出された、凄惨な遺体を直視しなければならない、ひどく、神経を苛む作業だ。

「……先輩、収容完了したっす」
「ああ、確認した。よし、次は、あのデブリ群に行くぞ」
「うっす」
「……はい」

けれど、誰かがこれをしなければ、犠牲者を永遠に遺族の元に還してあげられないのだ。

「レナ、デファン、辛いだろうが、ここは耐えてくれ」
「……わかってるっす」
「はい。……せめて、御遺族の元に還してあげたいです」

二人は沈鬱な面持ちでも、今、俺達が行っている作業の重要性を認識してくれていた。

……本当に、いい子達だと思う。

「さて、ここ……は？」
「先輩、どうしたっすか？」
「あ、……救難艇。デファン、救難艇よ。……先輩！　救難艇ですよっ！」

救難シグナルが消えているが、デブリに紛れて、確かに救難艇が一隻漂っていた。

俺もそれが意味することを理解して、急いでエルステッドに連絡をとった。

「ベルナール、救難艇を発見した！　救難艇を回収を優先するためにパトロールを中断したいっ！」
「えっ？　す、すいません、ラインブルグさん、もう一度お願いします」

……信じられない気持ちはわかるが、事実なのだ。

「……繰り返すぞ、ベルナール。救難艇を発見した。通信は……デファン」
「つながらないっすけど、シグナルが消えていることから、故障の可能性が大きいっす。それにこうやって漂っていることを考えると、推進系も故障していると考えた方がいいっすよ」
「……通信はつながらないし、推進系も故障していると考えられるが、中には生存者がいる可能性は残っている。よって、パトロールを中断し、救難艇を回収して帰艦したい」
「え、エルステッド、了解！　艦長！」
「はいはい、聞いてましたよぉ。……こちらゴートンだ。現状において、プラント市民の皆様の不安を収め、かつ、ザフト全体に燻っ

ている罪悪感を解消するためには、パトロールを中止するという選択は、悪いが存在しない。よって、三機のうち、一機に救難艇を持たせて帰艦させ、残りの二機にはパトロールを続行して欲しい」

うん、妥当な判断だよな。

では、どちらを戻すかだが……現在、レナとデファンの二人のうち、核攻撃とコロニー崩壊を知ってから、精神的に不安定なのはレナだろう。

だったら、レナに救難艇を持って帰らせて、ユニウス・セブンにも生存者が存在するという事実と対面させて、少しでも精神の安定を図るべきなのだが……もしもの場合もある。

もしも、生存者がいなければ？

もしも、救難艇の故障が生命維持系にまで及んでいて、中の生存者が犠牲者になっていたら？

もしも、生存していたとしても、レナに死に接した恐怖と怒りの感情をぶつけられたら？

……むぅ、リスクが大きいように感じられるな。

沈思していると、機体同士の接触回線……秘匿回線でデファンが小さな声で提案してきた。

「先輩、レナに持って帰らせましょう。あいつ、この二日、碌に飯

も食べてないんっすよ。それにベルナールの奴が言ってたんすけど、どうも魘されてゆっくり眠る事もできないようだって……」

……。

これは俺の経験から来る勝手な推測だが、レナが精神的に不安定な原因は、さっきの理由の他にも、コロニーを守りきれなかったことに過度の責任を感じているか、コロニーが簡単に破壊されるという現実に恐怖したか、先の一連の戦闘で自身の生死を賭したストレスか、殺人という禁忌を犯したことへの良心の呵責か、或いは、それらが全て絡み合っているか、といったことが思い浮かぶ。

……とにかく、感受性が強そうなレナなら、こうなってもおかしくはなかった。

はぁ、まったく、自分のことばかりに気を取られすぎて、周囲を疎かにするなんて……大失敗だ。

戦闘後のメンタルケアに関して、軍医からもっとしっかりとレクチャーを受けないと駄目だな。

……。

いや、俺自身の反省や今後の対策を考えるのは後でいいや。

今はこれからどうするかだ。

……。

どのみち、デファンからの情報から考えると、今のままでもレナ

の状態は悪い方向に流れているし、快方に向かう可能性があるならば、デファンの意見に賭けてみるのも手かな？

「わかった、レナに持って帰らせる」

「うっす」

デファンの意見を取り入れて、俺はエルステッドに再び連絡を入れる。

「艦長、レナに救難艇を持って帰らせます。救難艇の受け入れ準備、よろしくお願いします」

「はいはい、よろしくされましたよ」

「レナ、聞いての通りだ、中に生存者がいると予想されるから、極力、救難艇にGをかけないために、加速をかけずに、それでも急いで戻れ」

「へぅっ！　そ、それって無茶苦茶言ってますよ！」

うん、少し、声に張りが出てきたな。

「無茶苦茶でもやれ。是即先輩命令。だから、ほれ、さっさと行け」

「ひどっ！　先輩の私への扱いが初めて会った時よりも杜撰です！　待遇の改善を要求しますっ！」

「あ～～ん？　聞こえんナぁ～～～」

「先輩の鬼っ！　悪魔ッ！　甲斐性なしぃぃっ！」

「あーーー、もう、さっさと行けぇぇぇ！！」

未だにブーブー言いながらも、レナは慎重に救難艇を抱えるとエルステッドがいる座標位置に向かって、進み始めた。

……。

ようやく行ったか。

まったく、はしゃいじゃって、まぁ……。

……。

「行ったっすね」

「ああ。……それで、デファン、お前は大丈夫なのか？」

「……俺はハーフっすよ？　他のコーディより、精神はかなり頑強にできてるっすよ。そもそも、これぐらいのことで挫けていたら、プラントでは生きてこられなかったっす」

なんとまぁ、これまた、デファンの苦労してきたであろう生い立ちが透けて見える物言いだよ。

「わかった。その言葉、信じるぞ？」

「うっす」

「さて、俺達はパトロールに戻るぞ」

サブモニターに映る後方には、レナのジンのスラスター光が遥か遠くで輝く星に紛れて瞬いていた。

◇　◇　◇

で、後の陰鬱な任務にも我慢して耐え、希望を持って、デファンと一緒に帰ってきましたエルステッドへ。

任務から開放されたことに加え、あらかじめ任務終了報告の際に、救難艇に生存者がいることも聞いているから、自然と口も軽くなるというものだ。

「デファンもハーフってだけで、大概、苦労してきたんだな」
「まぁ、仕方がないっすよ。プラントじゃ、コーディとナチュラルの夫婦なんて、ほとんど異端扱いっすからね。その子どもも異端扱いってわけっすよ」
「……ほんと、狂ってるよな、プラントってさ」
「……俺は、先輩がそう言ってくれるのが嬉しいっすよ」

デファンの言葉を照れ臭く感じながら、レーダーに目を移す。

そろそろ、エルステッドが見えてくるはずだ、って、言ってる傍から見えたよ。

「しかし、救難艇に生存者がいて、良かったよ」
「ほんとっすね。……ところで先輩、救難艇の収容は終わってるっすよね？」
「うん？　……そうだとは思うんだが……一応、聞いておくか」

俺はエルステッドと通信をつなげて、ベルナールに着艦要請を入れてみた。

「ベルナール、直にエルステッドに到着するので、着艦したいんだが、可能か？」
「あ、ラインブルグさん、もう少し待ってください。……はい、わかりました、そう伝えます」
「あ～、もしかして、まだ、さっきの救難艇の要救助者を受け入れ切れていないのか？」

「はい、救難艇に乗っていた人数が予想以上に多くて、艦内への収容に手間取っています」

……ふむ、収容に手間取るか。

「救難艇にはどれくらい、乗ってたんだ？」

「定員６０名のところを無理無理に乗って、１００名近くです」

「……なんとまぁ」

それは少し、心配になる情報だ。

救難艇には余裕を持って一週間程度の酸素が備えられているが、規定人数以上に人が乗った場合は、酸欠が発生する恐れがある。

なにせ、宇宙においては、酸素は有限なのだから……。

そのことを指摘すると、ベルナールから答えが返っていた。

「いえ、幸いなことに救難艇内で酸欠は発生しなかったのですが、定数以上に人を押し込んだ影響で救難艇が非常に狭くなった上に、脱出の際に何かに衝突されたようなんです。そのために、通信系や推進系の他にも、空調系の故障で蒸し風呂状態になってしまったようで、体調を崩している人が多いんです。また、衝突の衝撃で怪我をされた人もいます」

「……例え、体調を崩していたり、怪我人が出ていたとしても、酸素供給系が故障しなかったことを、俺は祝福するよ」

「……先輩、不謹慎っすね」

「他にどう言えと？」

嘯いて見せたが、正直に言えば、良かったと安堵している。

これはおそらく、酸素供給系が独立系統か予備電源を備えていたお陰で、助かったんだろうな。

「え、えっと、続けていいですか？」
「ああ、すまん。それで、格納庫は野戦病院さながらな状態になっているんだな？」
「はい。順次、艦内の食堂や会議室、空き倉庫といった場所に収容しているのですが、軍医と衛生班だけでは、どうしても診察が進まなくて……」
「……簡単なことは他の班の連中にやらせてるのか？」
「艦長もそう指示を出しているんですが、やはり、皆、慣れないらしくて……」

なら、仕方がないことだな。

「オーケー、わかった。幸い、エアーやバッテリーの残量には余裕がある。気長に待つことにするよ」
「……すいません」
「いや、ベルナールが謝る必要は無いさ。それよりも、こっちのエアーかバッテリーの残量が危険域になったら、非常手段としてＭＳ格納庫下部にジンを接舷させて固定する。そんで、パイロットだけでも艦内に入るようにするから、艦長の許可をもらっておいてくれ」
「はい、わかりました」

ベルナールの返答と共に通信が切れた。

「聞いたな、デファン」
「しばらくは、待ちぼうけってことっすね」
「まぁ、これくらいは、救難艇に乗っていた要救助者が置かれてい

た状況に比べれば、どうってことないだろう。……だが、エアーとバッテリー残量のチェックは必ず行っておけよ？」

「そうっすね、わかりました」

デファンの返答に頷き返した後、俺はエルステッドの速度にジンの速度を同期させると、少し緊張を解いた。

ついで、モニターでＬ５から遠く離れたユニウス・セブンの大地を拡大させる。

……。

あれは、俺達が守れなかった世界だ。

……これから生きていく上で、決して、忘れてはいけないものなんだと、そう、思った。

０４　バレンタイン狂騒曲　４（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

05　バレンタイン狂騒曲　5

救難艇から救助された人達の艦内への収容が、俺達のジンのエアー残量危険域ギリギリで何とか終わり、大急ぎで格納庫に入った。

出撃した時よりも明るい顔で出迎えてくれたシゲさん達整備班に、機体と犠牲者の遺体を収容したカーゴを預けた後、デファンにレナの様子を見てこいと指示を出してから、ゴートン艦長に任務完了の報告をするために艦橋へと向かう。

格納庫から艦橋へ向かう途上、艦内が慌ただしい雰囲気に包まれているのがよくわかった。とはいっても、それはどちらかといえば、陽性の慌ただしさだ。

沈鬱だったこの二日間を思えば、絶対的にマシだといえよう。

「あの……」

そして、俺も艦内の雰囲気にあてられた上に、過酷な任務を終えた反動も手伝ってか、何となく気分が良くなって、艦橋へと続くメインパッセージを軽やか……重力が無いから当たり前か……、と、とにかく、浮つきながら移動していたら、歳若い御婦人に声をかけられた。

艦内では見たことがない顔だけに、おそらく救助された人だろうと察し、何か不都合でもあったのかと考えて、御婦人の元へと向かう。

……けっして、藍色の髪が綺麗な上に御立派な母性をお持ちの年上のお姉さんっぽい美人だったから、引き寄せられるように釣られた訳ではないことを、誰にでもいいから、俺は強く主張したい。

繰り返すが、決して釣られてなどいない！

真面目に考えた上での決断だ！

当たり前のことを、当たり前にするだけのことなのだっ！

そんなわけで、できるだけ丁寧な声で、鼻の下が伸びないように注意しながら……。

「何か？」

「……」

……あれ？

「……」

え、えーと、なんで、私をマジマジと見つめられるのでしょうか？

「……」

いや、その？

「……」

えーと？

「……」

……。

「……」

……き、気まずいんですが？

「な、何か御用ですか？」

「……あっ、すいません。あの、この船の船長さんは、どちらに？」

「あ～、え～と、何か不都合でしたら、私の方でまずお伺いしますが？」

「いえ、一言、お礼がしたくて……」

おおおっ、お礼をするんですか？

どんな、お礼でせう？

……。

俺は、何を馬鹿なことを考えていたのだろうか？

……。

うん、はしゃいでないで、落ち着いて、ちゃんと対応しないとな。

「やはり、連れて行っては頂けませんか？」

「あ、いえ、別に構いません。ですが、お体の方は大丈夫なのですか？」
「はい。幸い、私は医師の方にも、大丈夫だと診断して頂きました」
「そうですか、それは良かったです。……それでは案内しますので、付いて来て頂けますか？」
「はい、よろしくお願いしますね。アイン君」

……。

……あれ？

「お……私、今、名前をお教えしましたっけ？」
「いえ、教えていただいておりませんよ？」
「……ええっと、それなら、どこかで？」
「……憶えていてくれなかったのね」

え、ええっ！

ちょ、そんな、いきなりの超展開っ！

しかも、ちょっと！

その悲しげな雰囲気は大反則っ！

はぐわっ、俺の繊細すぎる良心が……粉々にブレイクしてしまうぅぅぅ。

っていうか、これくらいの美人さんなら憶えている筈だっ！

思い出せッ！　俺の記憶野ッ！

思い出せっ！　俺の脳細胞ッ！

思い出すんだっ！　俺の魂っっ！

……駄目でした。

「すいません。どうしても、憶えが……」

「……仕方がないのかもしれませんね。お会いしたのは、アイン君のお母さんのお葬式に、一度だけですから」

うん、流石にそれはちょっと……。

いくら俺でも、あの葬式の時は母の死の衝撃が大きすぎて、一見さんを憶えていられなったと思うよ。

でも、一度しか会っていないのに、何故にアイン君なんて、そん

なに親しげ？

「アイン君のお母さん、リナさんとは昔からの付き合いで、よく連絡を取り合っていたの」

「……そうだったんですかぁ」

「ええ、それで、アイン君の写真や映像を見せられて、よく自慢されたわ」

「え、ええっと、その……母が大変、御迷惑を……」

俺を具にした母親の恥ずかしい実態を教えられ、もう、悶絶しそうですよ。

「いいえ、あの時のリナさんの幸せそうな顔が逆に羨ましいくらいで……思わず、夫を襲いました」

「……は？」

夫を、襲う？

……。

つまりは、この人、既婚者？

いや、それよりも、襲う？

「はい、あの幸せそうな家庭の雰囲気に憧れて……夫を襲いました」

「……お、襲ったんですか」

「あ、あらまぁ、私ったら、恥ずかしい話を……」

いやいや、その表情や桃色雰囲気から考えると、十分に惚気に分

類されるのでは？

とか何とか思いながら、艦長の元に向かう道中も旦那さんとの、熱々で愛に満ち満ちた日常生活を、それも夜の営みも含めて、赤裸々に開陳されてしまった。

……こんな綺麗なお姉さん系の人を嫁にした旦那に、思いっきり嫉妬した。

◇　◇　◇

「艦長、戻りました」
「はいはい、ご苦労さん」

いつもの如く艦長シートに腰掛けたゴートン艦長だったが、声の調子から見るに、少し機嫌が良さそうだった。

やはり、救難艇を救助できたのが嬉しかったのだろう。

「えっと、報告の前に一つ、……艦長に会いたいという方を連れてきたのですが」
「会いたいってことは、救難艇の？」
「はい」

艦長は常の緩い表情を引き締めると立ち上がって、俺に頷いて見せた。

「……わかった。お連れして」
「はい。……えっと、名前、まだ聞いてなかった」
「おや、珍しいポカだねぇ」
「……道中、色々とあったんですよ」
「……そうかい。何やら大変だったみたいだね……」

艦長に気を使われてしまうぐらいに、ナニカが表情に出てしまったらしい。

……いかん、気をつけないと。

でも艦長、その沈痛な表情で察するに、たぶん、あなたは勘違いしていると思います。

「どうぞ、ミズ。ここはハンドベルトが無いのでお手を……」
「あら、ありがとう。アイン君」

柔らかい手……というには、少し硬いような気がするが、とにかく手を握って誘導する。

人妻とはいえ美人である。

うん、これも役得というモノですよ？

「……」

おや、まぁ、艦長、少し、赤くなってませんか？

「……艦長」
「！　……んんっ、失礼。私が当艦エルステッドの艦長、オーリン・

ゴートンです。……この度、我々の不手際によって、お住まいだったコロニーを失われ、また、命の危機に晒されたことを深く謝罪します。それと、ご生還されたことを、心からお喜び申し上げます」

「……その謝罪と祝福をお受けしますわ、ゴートン艦長。そして、私達の救難艇を救助して頂いた事を感謝します」

美人さんが真剣な表情になると、迫力があるね。

「コロニーは……ユニウス・セブンは……破壊されしまったのですね」

「はい、ミズの言われたとおりです。……ユニウス・セブンは核ミサイルによる攻撃をコロニー構造体中央部に受け、宇宙港と中心基部が破壊された結果、居住空間である構造体両端部が分離しました。そして、コロニー両端部はそれぞれ、Ｌ５宙域から離れるということが判明しております」

「……そう」

「……」

「……犠牲者の、数は？」

「おおよそ、２０万は超えるかと……」

２０万を超える、か。

……多い、な。

暗鬱な気持ちで２０万以上の悲劇に思いを馳せそうになったら、御婦人の声で現実に引き戻された。

「……ゴートン艦長、なぜ、こんなことが起きたのでしょう？　私達は、ただ、普通の暮らしを、普通に望んだだけだというのに……」

「これが戦争だからと言ってしまえば、全ての理由になるのでしょ

う」

理由になっていない理由なのだが、一番、説得力がある。

だが、艦長は、それだけで終わらせず、語を紡いだ。

「……これは私見なのですが、今回、発生した惨劇の根本には、コーディネイターとナチュラルとの間に横たわる蔑視や嫉妬といった感情の軋轢を基とした、相互の不理解が、……互いが互いを人として認めていないことが、あるではないかと考えています。少なくとも、コーディネイターだろうとナチュラルだろうと、同じ人として認識していれば、例え、戦争状態に入ったとしても、核のような大量破壊兵器が、恫喝も通告もなく、使われるような暴挙は為されなかったはずです」

「……そう、ですか」

「……はい」

「……人から生まれ、必ず死を迎える以上は、コーディネイターもナチュラルも同じ人であることに、変わりはありませんのに……悲しいことですね」

「ええ、仰るとおり、悲しいことです」

二人の会話を聞いて、過去に感じた想いが脳裏に甦ってくる。

それは幼年時代に、子供同士の喧嘩に負けて、見返してやろうと躍起になって、我武者羅に自身の心身を鍛えていた時のことだ。

ある日、突然、俺はふと気が付いたのだ。

例え、身体や頭脳が優れたとしても、それはただ、それだけのことに過ぎない、と。

例え、他人を見返した時に充実感を感じたとしても、それは俺を見下した奴らと同じなのだ、と。

本当に重要なのは、人としての精神性であり、人としての在り方であり、魂とも呼べるものではないか、と。

コーディネイターとナチュラルの関係もこれに類していないだろうか？

両者を隔てるモノに、能力の優劣が大きく存在しているが……それはそんなに重要なものなのだろうか？

本当に大切なものは、能力の優劣ではなく、人が持つ精神性こそが最も重要ではないのか？

そして、そこにはナチュラルもコーディネイターの区別は存在しないはずだ。

それとも、俺の考え方は、何事にも優劣を見出す社会の……現実の前では、ただの奇麗事になってしまうのだろうか？

「……」
「……」
「……」

それぞれが、それぞれの沈黙を抱えたまま、エルステッドは母港へと戻る航路を進み続けた。

05　バレンタイン狂騒曲　5（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

06　鎮魂と、独立と

『先の2月14日。聖バレンタインディに、地球連合軍によって為された非道な核攻撃で、我々はユニウス・セブンと23万5638人の同胞を失いました。……プラントの皆さん、まず、この攻撃の犠牲者である同胞達の鎮魂を願い、冥福の祈りをささげましょう』

俺は今、自宅のソファにだらしなく凭れながら、酒を飲みつつ、テレビに映るユニウス・セブンの犠牲者の国葬……追悼式典を見ている。

式典会場に並んだ喪服の黒が整然と並んでいるのを見るのは、正直に言えば、かなり気が滅入るのだが、これもコロニーを守りきれなかった己に課せられた一つの義務なのだと自身に言い聞かせながら……。

まぁ、それでも素面では……酒を飲まないと見ていられないんだがな。

……。

うん、普段とは違い、異常に早いペースで飲酒を続けているせいか、身体が変に燃えてる上に、頭もいつも以上に熱が篭っている感じがする。

……。

でも、こんな風に飲むなんてことは滅多に無いことなんだから、たまにはいいだろうさ。

そんな言い訳を自身にしつつ、プラント最高評議会の最高評議会議長……同時にザフトの偉いさんでもある、しげるなんとか……面倒だな、髭のおっさんでいいや……髭のおっさんを酔った目で眺めながら、二日前のことを思い返す。

１６日に、ザフト機動艦隊が母港として、アプリリウス市のコロニー群から間借りしている宇宙港の一つに帰港したエルステッドは、機動艦隊司令部から１９日までの休暇を与えられた。

俺も、戦闘を乗り越えてプラントに無事に生還できた喜びとプラントを守りきれなかった悔いとが複雑に入り混じった気持ちでその休暇のことを聞いたことを憶えている。

それと、宇宙港で下船する前に、プラント政府関係者がユニウス・セブンの犠牲者を引き取りに来た時に、乗組員総出で敬礼して見送ったことも、脳裏に刻み込まれている。

後に、救難艇から救助された人達の犠牲者達を見つめる、何とも言えない目があったから、正直、辛かった。

……はぁ。

生と死を分けたのは、一体、なんなんだろうな。

……。

あっ、見送りで思い出したが、あの綺麗な人妻お姉さんの名前を聞くことができないままだった。

うん、ほんとに綺麗な人だったよなぁ。

何か、久しぶりに我が母の在りし日の姿を思い出したよ。

それに、なにより、立派な母性をお持ちだったし。

是非とも、あの胸ではｓ……あ～、俺、結構、酔ってきてるかなぁ？

一瞬、素面に戻って考えるものの、頭の片隅で残業していた理性が、今日だけはまぁ、見逃してやるとわざとらしくソッポをむいてくれたので、安物のウイスキーを新たにグラスへと注ぐ。

琥珀色の液体をグラスに注いだのだが……水がない。

あ～、う～、どうにも、水がない。

……。

ん～、けど、氷の山がすぐ傍にある。

……。

ならば、ロックで……。

「あっ、アイン兄さん！　もう、これ以上は、無茶な飲み方をしたら駄目だよっ！」

……俺の行為を見咎めたらしいミーアにグラスを取り上げられた。

「……飲みたいと思うけど、駄目だよ」

う～、う～。

「……」

……いえ、なんでもありません、すいませんでした。

だから、そんな目で俺を見るのは止めてください。

こう、自分が悪いことをしているみたいで、良心がざっくりと切られちゃうから……。

「でも、兄さんが無茶な呑み方をするから……」

うん、それはごめんとしか、言えない。

……けどね、ミーア。

今日はね、もう少し、酔いたい気分なんですよ。

ほんとに、ミーアには見苦しいかもしれないけど、ほんとに、飲んで酔いたい気分なんです。

「……なら、水割りで、後、少しだけね」

おおっ、感謝します、ミーア大明神様ぁ。

「待っててね、水を入れてくるから……」

……うん。

……いつも思うけど、本当に、どちらが年上か、わからなくなるよ。

「はい」

どうも、って、ミーアさん、いきなり、なにを……、って、いたた、狭いんですけど？

「……むぅ」

ちょっ、無理無理、これ、一人用だからっ！

「……」

狭いんだって、って……どうした、ミーア？

「……兄さん」

んっ？

「怖かった」

……。

「避難警報が鳴って、避難所に向かってたら、急に、空に凄く大きな光が見えて……」

……縋りつくように俺の横に収まったミーアを、ぎゅっと、片手で抱きしめてやる。

それから、いつかみたいに、背中をポンポンと軽く、リズムよく、断続的に叩いてやる。

……。

心地よい生の鼓動がミーアの胸から伝ってくるのが、よくわかる。

……。

「……あの光で、いっぱい、人が、死んじゃったんだよね？」

……うん、そうだよ。

「……何故？」

戦争だから……。

「……何故、戦争をするの？」

きっと色んな理由があって、複雑に絡んでいるんだろうけど、たぶん、根本には、それぞれが、互いが互いを解り合えないと考えていることがあるんだろうな。

「……それって……悲しいことだよね」

うん……悲しいことだよ。

そんなやり取りをミーアとしていたら、偉いおっさんの演説が佳境に入ったのか、弁舌に熱が篭ってきた。

『……我々は決して、このような暴虐を行った地球連合に決して屈しないことを、先の攻撃で散って逝った我々の同胞達に誓いましょう！　そして、我々が住まうプラントが他の何者のものでもなく！　ここに、このプラントに住まう我々のものであることを世界に知らしめることこそが、犠牲になった彼らへの何よりの追悼となるでしょう！』

……んなもん、死人に口無し、だよなぁ。

『今日、私、プラント最高評議会議長シーゲル・クラインはっ！
ここに、地球連合への徹底抗戦を宣言しっ！　また、我々プラントの、独立をっ、宣言いたしますっ！』

……独立か。

他人にはとても甘く響いているだろうその言葉が、俺にはひどく苦く感じられる。

虐げられてきた者が自立を求めて立ち上がった。

それも大きな悲劇を経ただけに、より美しくより甘い話になっているはずなのに……。

何故だろうか？

コーディネイターとナチュラルの間にある深い溝を感じるためなのだろうか？

互いが互いを人を人と思わない現状に、殺戮が横行するかもしれないことに恐怖を覚えたのか？

結局は殺し合いに過ぎない戦争の現実が美辞麗句で隠れてしまうことに腹を立てているのか？

急に喉の渇きを覚え、ミーアが作ってくれた水割りを乾す。

……おいしくない。

結構、酒を入れたはずなのに？

でも、アルコールのキツサはかわってなかったし……。

……。

……これは、気分的なもんかな？

首を捻りながら、テーブルにグラスを置いて、テレビを消す。

消える寸前のテレビから、なにやら、ミーアの声に似た歌声が聞こえた気がしたが、まぁ、いいや。

こんな鎮魂の場を国威高揚の場に変えるような式典で歌うような人間だ、碌な奴じゃないだろうさ。

それにしても、独立か……。

……。

そもそも、なぜ、独立を……。

けど、話し合いは殴り合いが……。

なら、誰だって現実でもって……。

いや、虐げられれば……。

……。

あ～、いかん、思考が変にトンデきてる。

……。

「……ん～」

見れば、ミーアは俺の胸にしっかりとしがみ付いて、寝入ってしまってる。

「おい、ミーア、寝るなら自分の部屋で……」

「ん～、や～」

……なんか、より一層、強い力でしがみ付いてきた。

苦笑しながら、空いた手でパープルグレーの髪を梳いてやる。

「んぅ～～」

ミーアの口元が気持ち良さそうに弛んでいる。

……。

あ～、もうなんか、この顔見てたら、起こすのめんどくさくなってきたなぁ。

……。

今日は、俺も、このまま、寝るかな。

……ふあぁぁぁぁぁあ。

ねむ……。

……。

……懐に温かなぬくもりを感じながら、俺は瞳を閉ざし、いつしか、眠りに落ちていった。

06　鎮魂と、独立と（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

07　世界樹の落葉　1

２月１４日のユニウス・セブンへの核攻撃は、あまりにも一般市民の犠牲者が多いことから【血のバレンタイン】という公称が与えられた。

しかし、この公称には、犠牲者を追悼する想いがあまり感じられず、どちらかというと、地球連合が核……大量破壊兵器を使用したという暴虐性を強調し、プラントの市民に団結と徹底抗戦を訴えるプロパガンダ色の方が強く感じられる。

いや、市民が当たり前のようにこの公称を受け入れているところを見ると、俺の感性がプラント社会とずれているだけなのか……。

……。

気を取り直して、血のバレンタイン後の情勢を考える。

俺が酒に酔っ払ってミーアと一緒にソファで眠った日、独立を宣言したプラントは、積極的中立勧告を地球上の全国家に向けて行った。

積極的中立勧告ってことは、積極的中立を勧めるってことだから、単純に言えば、プラントは別にあなたの国のイデオロギーや政治信条、形態に関してはとやかく口出ししませんから、中立を維持して地球連合に加わわらずに戦争に参加しないで下さい、っていう意味合いなのかなぁ？

……正直、よくわからない。

で、このプラントの積極的中立勧告を受け入れた国があった。

旧オーストラリアといったオセアニア地域の大洋州連合と旧ブラジルとかを含む中南米地域の南アメリカ合衆国の二カ国だ。

両国共にプラント理事国であった三大国……大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国とは距離を置いていたことを考えると、三大国の影響力が大きい地球連合を嫌ったのだろうか？

とにかく、この二国は中立という道を選択したのだ。

……したのだが、一夜で状況は一変する。

翌日の１９日に、大西洋連邦が南アメリカ合衆国に侵攻して、パナマにある宇宙港に存在する、マスドライバー……宇宙へとモノを放り上げる、打ち上げ施設を制圧したのだ。

っていうか、大西洋連邦は南アメリカ合衆国の併合を宣言したぐらいだ。

うん、この流石とも言うべき横暴ぶりは、前世で超大国だった頃を思い起こさせるよ。

でも、ちょっと、南アメリカ合衆国も簡単に制圧されすぎという

か、もっと抗戦してもいいんじゃないかな、とも思わないでもない。

この地球連合というか、大西洋連邦の動きに対して、積極的中立勧告を受諾したもう一国である大洋州連合は、地球連合の南アメリカ合衆国侵攻及び制圧を、明日は我が身かもしれないというわけだから、思いっきり批難した上でプラントを食糧面で支援するとの声明を出した。

それに対する地球連合の答えは、宣戦布告。

なんというか、どんなことでも、プラントの味方をする奴は絶対許せねぇっていう、連合側の考えが透けて見えるよ。

でも、こうなる可能性も予測できたはずなのに……何故、南アメリカ合衆国と大洋州連合はプラントの勧告を受け入れたんだ？

「それは非連合加盟国にプラントから物資を供給する、っていう飴のためだよ」

「ああ、ゴートン艦長」

「元より裕福でない非プラント理事国だったんだから、これが好機とばかりに優先貿易という権益を獲得しようとしたんだろうねぇ」

なんとまぁ。

「あ～、なるほど、欲に目が暗んだ結果の亡国と苦境というわけですか」

「それもあるだろうけど、どちらかと言えば、現在の物資不足の社会状況で、物資を供与するなんて利益をちらつかせたクライン議長や評議会の面々が悪辣なんだと思うよ」
「……確かに、なんとなく、今の議長って、陰湿なやり方を好みそうな顔をしてますからね」
二人して、腕組みをしながら、頷きあう。
……ついでに聞いておく。
「そういえば、艦長。なんで、俺が考えていたことがわかったんですか？」
「……気付いてなかったの？」
「何をですか？」
「独り言。……以前にも言った気がするけど、あんまり、ブツブツ言わないほうがいいと思うよぉ？」
……うん、絶対に、意識して直そう。
「まぁ、俺はいいんだけどね、面白いからさ。……でも、副長がねぇ」
そう言われて艦長の背後を見ると、エルステッドの副長でＣＩＣ管理官を兼務する、ウラディミル・フォルシウスが厳つい強面に呆れた表情を浮かべて俺を見ていた。
いや、正確には、俺と艦長とを、だな。
「まったく二人とも、ここが余人の目が入らないエルステッドだからといって、好き放題言い過ぎです。そんなことをしていると、他

所でボロを出して上層部批判扱いされかねません。本当に、下手すれば、熱狂的な愛国者やザフト信奉者にコレされますよ？」

そう重低音な声音で言うなり、俺と艦長に、首を掻き切るジェスチャーをして見せるフォルシウス副長。

……いや、この人も大概だと思う。

なんて思いつつ、俺は二人に声をかけた用件を尋ねる。

「それで、艦長と副長、お揃いで何か用ですか？」

「何を言ってるんだ、お前は……。時間を見ろ、ラインブルグ。作戦会議の5分前だろう？」

「えっ？　あれっ、ほんとだ。……もう、そんな時間だったんですか？」

「……艦長、声をかけて正解でしたね」

「ああ、そうだねぇ」

苦笑未満といった顔で二人が俺を見つめてくる。

「ラインブルグ、先の戦闘で、ああいうことがあった後だ。お前が呆けるのもわかるが……」

「そうだねぇ。戦闘の前に腑抜けすぎると……下手すりゃ、死んじゃうよ？」

「……それに、お前はＭＳ小隊のリーダーなのだ。お前の状態一つで小隊全体が危機に晒されることもある。だから、しっかりしてもらいたい」

どうやら、俺が目に余る呆けっぷりを見せていたため、二人に心配をかけてしまったようだ。

「すいません。ちょっと、休みボケが取れてなかったみたいです。……すぐに元に戻します」

「……うん。その言葉、信じるよ。……では、副長、ラインブルグ君、会議室に行こうか」

「はっ」

「はい」

直に、ザフト宇宙機動艦隊による、Ｌ１宙域にある地球連合のコロニー【世界樹】の制圧作戦が行われる。

この制圧作戦の目的は、駐留戦力を撃破することでプラントの安全を確保するため、地球連合に対する抗戦の意志を見せ付けるため、ザフトが宇宙での行動の自由を獲得するため、地球圏に睨みが効く有力な駐留拠点を手に入れるため、そして、月と地球との連絡線を断つための五つだ。

そして、今から行われる会議で、司令部から通達された今回の制圧作戦についての概要が説明されるのだ。

すでに、Ｌ１宙域は近い。

作戦開始まで二日も無いのだ。

……気を引き締めないとな。

そんな決心をしつつ、俺は展望休憩室を後にして、二人を追いかけた。

◇　◇　◇

到着したエルステッドの作戦会議室には、エルステッドの戦闘部門の責任者が顔を揃えていた。

艦長、副長、航法通信管制班長、ＣＩＣ火器情報管制班長、ＭＳ小隊のリーダーである俺とアシムも含まれて、計六人だ。

早速、全員で艦長に敬礼した後、着席して艦長の話を聞く。

「さて、皆に集まってもらったのは、これから行われるＬ１宙域制圧作戦についての概要を説明するためなんだが……」

「……？」

「ぶっちゃけると、作戦なんてもんはない」

「へっ？」

思わず、疑問の声を上げた俺は変だろうか？

「機動艦隊司令部は、二度にわたる戦闘の結果、ＭＡに対してＭＳは絶対的な有利を持っていると確信したそうで、正面からの力押しで十分に勝てると考えているそうだ。真正面からぶつかって、圧倒的な実力で敵戦力を排除した後に、Ｌ１宙域を確実に制圧する、とのことだよ」

ん、んな、アホな……。

「当然の判断ですよ、艦長！　俺達コーディネイターで構成されたザフトが、ナチュラルどもに負けるわけがない！　作戦なんて、惰弱なナチュラルの、核攻撃をするような卑劣な作戦しか考えられない愚かなナチュラルの考えることであって、絶対的な能力を持つ我々ならば、作戦などに頼らずともいいのですっ！　作戦などっ、不要なのですっ！　どんな小細工だろうと我々ザフトはナチュラルどもを粉砕して、Ｌ１を……【世界樹】を制圧して見せましょう！」

「……アシム君、イイこというねぇ。……まぁ、そういうわけだから、各々、戦闘開始まで英気を養っておいてね」

「起立、敬礼！」

副長の言葉に合わせて立ち上がり、敬礼を施す。

……が、俺は納得がいかない！

作戦がないなんて馬鹿なことに、納得がいかない！

鼻息荒くアシムが勇んで出て行ったが、俺は絶対に作戦が無いなんて、納得できないっ！

……。

良かった。

会議室には納得がいかなかった人がちゃんと他にもいたよ。

航法通信管制班長に火器情報管制班長って、アシム以外は残ってるよ……。

いや、でも、流石に、当然……だよねぇ？

「はいはい、どうやらご不満な人たちが残っているようだよ、副長？」

「……あの説明で一人出て行ったことに、私は非常に強い不安を感じるのですが、艦長？」

「あのいかにもザフトの勇者に成り切っている様子じゃ、ねぇ」

「戯言ですよ、艦長。予測できていたことです」

……何気にひどいことを言っているよ。

「……さて、ここに残った以上はそれぞれに作戦に不満があると考えるけど、それでいいかい？」

「あまりに作戦……と呼べるものとは思いませんが……作戦が楽観的すぎることを考えると、不満を感じるのが当然の反応だと思いますが？」

残った三人で目を見合わせた後、代表して、航法通信管制班長のリュウ・ミンリンが答えてくれた。

「うんうん、その言葉を聞けると艦を預かる身としてはとても頼りになるねぇ」

「……」

「よろしい。ラインブルグ君、鍵閉めて」

艦長に言われたとおりに会議室の扉をロックする。

「はい、作戦開始まで時間も少ないから、本艦の作戦会議をすぐに始めるよ」

うるさいというか、話が通りにくい奴とはいえ、仲間を締め出して、本命の会議を行うこの人が、酷い人というか悪い人だと感じたのは俺だけじゃないと思う。

……もっとも、同じだけ、頼りになるなぁ、とも感じたがな。

◇　◇　◇

「じゃあ、副長。改めて、まずは現状の説明をよろしく頼むよ」
「はっ」

ゴートン艦長に委ねられたフォルシウス副長が何やら卓上端末を操作すると、会議室中央に固定されている会議卓に状況展開図が表示された。

それを立ったまま上から覗き込むと、どうやらＬ１宙域周辺を示したもののようで、緑色をした三角の群がＬ１と表示された方向へと向かっているのがわかる。

いつも何をするにしてもブリーフィングルームばかりを使っていたから、会議室の机にこんな機能があったなんて、知らなかったよ。

……今度、小隊の図上戦術演習にでも使わせてもらおうかなぁ。

って、今は、話に集中しないと。

そう思った瞬間に、副長が状況を説明し始めた。

「今現在、我々がいる場所は、ここ……緑色の光点で示す通り、Ｌ５とＬ１を結ぶ国際設定航路上をＬ１に向けて航行している。我々の戦力はＦＦＭ（ローラシア級）を主力とする宇宙機動艦隊で、前衛部隊と本隊を併せてＦＦＭが１４隻、艦載ＭＳであるＺＧＭＦ－１０１７（ジン）が定数限界である８４機だ。また、後衛部隊であるＦＦＭ４隻と艦載ＭＳ２４機は予備戦力となる。……対する地球連合軍だが、Ｌ１に存在する地球一月間の中継コロニー【世界樹】に駐留する二個艦隊に加え、月に根拠地をもつ一個艦隊が増援として向かっていることが確認されている。このことから、三個艦隊が防衛戦力になると予測できるだろう」

「……敵の一個艦隊の戦力はどれぐらいになるのでしょうか？」

ＣＩＣ火器情報管制班の班長であるミハイル・ガンドルフィが、渋いバリトンボイスで連合軍艦隊の一個分の戦力について質問する。

すると、副長は一つ頷き、卓上の展開図脇に、地球連合軍が使用している三種類の宇宙艦艇のモデルを表示させながら、説明を続ける。

「敵一個艦隊の戦力は、以前からの情報と偵察衛星による観測情報を元に推測すると、旗艦空母……３００ｍ級１を中心にして、戦艦クラス……２５０ｍ級が４、護衛艦クラス……１５０ｍ級が２０で

構成されると予想される。また、機動戦力も、３００ｍ級及び２５０ｍ級に艦載されているＭＡが、少なくとも、８０から１００は存在すると考えた方がいいだろう。……それぞれの艦隊によって、数の増減が多少はあるだろうが、大凡はこれに近い数になると思われる」

「となると、敵戦力は少なく見積もっても、艦艇が３００ｍ級が３、２５０ｍ級が１２、１５０ｍ級が６０、それに加えて、機動戦力であるＭＡが少なくても、２４０から３００は存在するということになりますね。……これは……大戦力です」

ほんとに、どう考えても、艦艇と機動戦力に、数の差がありすぎるよね。

「うむ、リュウ班長が今言ったように、確かに大戦力だ。……なのだが、どうにも司令部は、先に行われた二度の機動戦力同士の戦闘で完勝していることから、連合軍の実力を甘く見ているか、己の実力を過信しているのではないかと、私と艦長は危惧している。……もっとも、作戦らしい作戦がないことについては、今の司令部は、先のユニウス・セブンの件で、どうも思考が熱くなってしまっているようでな」

「……先のユニウス・セブンの事を考えて、復讐を考えてしまうのは仕方がないとはいえ、もう少し司令部は作戦を練った方が良くはありませんか？」

司令部の無策ぶりに憂慮を示したリュウ班長が切れ長の黒眼をより鋭くさせて声をあげる。

それに応えたのは、半目の中の瞳に憂いを内包させたゴートン艦長だった。

「いや、俺もね、司令部にそう言ったんだけどさぁ、誰も彼も、ナ

チュラルに目にものを見せてやるって、鼻息が荒くってねぇ。俺の意見をマトモに取り合ってくれなかったよ」

「……それ程にユニウス・セブンの件が大きいということですか？」

「そういうことだよ。……俺は独り身で、しかも知り合いもユニウス・セブンにいなかった。その上、不幸中の幸い的な何かで、乗組員にもそういう立場の者がいなかったから、犠牲者や愁嘆場が遠くて……どうしても心理的に一線を引いちゃってねぇ。そんな心境だからさ、大切な人を亡くした者と感情の温度差ができてしまってさ、話が噛み合わないんだ。……ついさっきまで、司令部相手に頑張ってたんだけど、やっぱり、どうしても話が通らなかったんだよねぇ」

「それに加えて、先のクライン議長による独立宣言に含まれていた扇動も効いている」

副長の補足に、俺もあの独立宣言を思い出し、口を挟む。

「確かに、徹底的に戦い抜き、独立を勝ち取ることこそが、犠牲者への追悼である、ってな意味合いでしたね」

「うん、そういう内容だったよね。まぁ、あれはそれぞれが独立したコロニーの集団であるプラントというものを国家としてまとめるには、とても効果的だったと思う。……でも、その扇動が効き過ぎているんだよ」

「効き過ぎている、ですか？」

俺が艦長の言葉を反復すると、艦長は一つ頷いて答えてくれた。

「そうなんだ、ラインブルグ君。あの扇動が効き過ぎている。……現に司令部は煽られた影響で思考停止になってるだろう？」

「……確かに」

俺は納得のあまりにうんうんと頷いてしまうが、その間にも艦長

の話は続く。

「あんまりこういう言葉は使いたくないけどさ。今の現状って、悲しいけど戦争なんだよねぇ。どんなに恐ろしいことでも普通に起こる非常事態なのよ。……実際、ユニウス・セブンの犠牲者や遺族には申し訳ないけど、昔からさ、戦争での大量虐殺とかは、軍民問わず、割と普通のことなんだよ」

「……艦長……今の言葉、ユニウス・セブンで犠牲になった者や、その遺族には、絶対に聞かせられんですな」

艦長の物言いに顔を顰めたガンドルフィ班長が、眉間に皺を大いに寄せて、苦言を呈した。

「うん、聞かせられないよ。この場に犠牲者に関わる人がいないって、わかってるから言ったんだよ。……で、話を戻すけど、今の司令部……戦争を指揮する立場にある者が、大量虐殺ぐらいのことで頭が熱くなり過ぎて、しかも、味方の扇動に乗せられちゃって、冷静さを失って思考停止になるようじゃ、駄目だと思うんだよねぇ」

「……ですが、それは先の悲劇を所詮は他人事だと捉えているから、言えることではありませんか？」

艦長は天井を見上げて、しばらく黙考した後、答えた。

「そうだねぇ、本当にリュウ班長の言う通りだと思うよ。……所詮は他人事だから、こんなこと言えるんだと、自分でもそう思う。……もしも、身内が犠牲者になっていたら、落ち着いて冷静に考えろだなんて、他人から言われたりしたら、張り倒してるだろうさ」

……俺も張り倒しているだろうな。

「でも、そういう立場にならなかった以上は、どれだけ相手の不興を買おうとも、例え感情的になった相手に張り倒されたとしても、言わなきゃならんだろう？　作戦には、知り合いっていうか、部下の……仲間の命が懸かっているんだからさ」

艦長の言葉を……思いを聞いて、俺達三人が何も言えなくなる中、副長が再び話し始める。

「今、艦長が言われたように、司令部が熱くなり過ぎて、意見具申が通らなくなっている以上は、作戦全体の変更は最早不可能だろう。また、たとえ、作戦の変更が認められたとしても、作戦開始まで時間の猶予がないのも事実だ。……ならば、次善として、比較的冷静な者達に現状を認識させて、それぞれが最善の行動を考えられるように、また取れるようにと、艦長は考えられたのだ」

「うん、おそらく、この作戦ではザフト全軍に復讐の熱狂が渦巻くだろうねぇ。そして、いい具合に血が上ったら、先のユニウス・セブンの時のように、また、相手に付け入られる隙が生まれるかもしれない。……ならば、我々が為すべきことは、熱狂して暴走する友軍に必ず生まれるであろう隙を潰す事と味方の昂ぶる士気を崩されないように地味に裏方で支える事だ」

「……我々に、できますか？」

「ガンドルフィ班長、できません、じゃあ、すませられないんだよ。それこそ、上手いこと立ち回らないといけないんだ」

いつか見た怜悧な光が艦長の目に宿っている。

自然、その目に射られた班長二人と俺は背筋が伸びた。

「で、俺からのオーダーなんだけど、ガンドルフィ火器情報管制班長は、戦場全域を見据えると共に敵味方の動きを常に把握して、常に最新の情報に更新し続けて欲しい。また、敵の攻撃基点を察知したら、艦砲やミサイルでもって牽制妨害し、余裕があれば、敵艦隊の弱点を探し出してこちらから攻撃を仕掛けること。……もちろん、敵艦艇を沈められるようなら沈めてもかまわないよ」

「はっ」

ガンドルフィ班長が、背筋を正して敬礼した。

「リュウ航法通信管制班長は、常に味方艦との連携距離を維持し、味方との通信リンクを絶対に確保し続けること。また、索敵管制や情報管制、ＭＳ管制と連携して、ＭＳ小隊に戦域の最新情報を提供してサポートするように」

「わかりました」

リュウ班長は、しっかりと頷き返した。

「そして、ラインブルク君の小隊は、敵への攻撃はアシム小隊や他のＭＳ部隊に任せればいいから、前線から一歩引いて前線宙域を把握し、味方の突出で穴が開いたら埋め、連携の乱れで隙が出来たら潰し、味方がやられそうなら援護支援して、攻撃の基点になりそうな凄腕がいれば、嫌がらせでもして気を引いて拘束、もしくは撃破する、っていう具合に、徹底的に前線が崩されないよう掩護に回って欲しい」

「了解です」

俺も、意識して、砕けた敬礼を返す。

ガンドルフィ班長、リュウ班長、俺と続けて、オーダーを受け入れたのを見て、ゴートン艦長は満足そうに頷いて見せた。

「……よろしい。皆、大変だろうけど、よろしく頼むよ」

「敬礼！」

副長の号令にあわせ、俺達は艦長に再び敬礼した。

07　世界樹の落葉　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記変更及び内容を圧縮。
11／09／11　誤字修正。

08　世界樹の落葉　2

2月22日となり、L1から迎撃に出てきた地球連合軍の二個艦隊とザフト宇宙機動艦隊の先鋒部隊が、戦端を開いた。

エルステッドが所属する本隊のMS隊にも出撃命令が出たため、俺達も直に発進することになる。

「ラインブルグさん、現在の戦況は一進一退です。L1宙域より進出した敵艦隊は二手に分かれ、本艦から見て水平左右舷方向に展開しており、艦砲及び小型ミサイルや航宙魚雷、爆雷による十字砲火が形成されています。そのため、MSによる敵艦隊への突入はこの火線網に阻まれる可能性が高く、現状においては、難しいと思われます。実際、前衛部隊所属のMS隊は敵MA部隊によって、敵艦隊前面にて拘束されており、MAの一撃離脱戦法や敵艦隊との連携により、相当数が撃破されているようです」

「……なるほど、MSは塹壕戦の歩兵の如しって奴だな」

メビウスの役所としては、差し詰め、突撃を阻止する鉄条網役あたりだろう。

「それと、敵MA部隊には敵主力機であるメビウスの他に、メビウス・ゼロが確認されています」

「メビウス・ゼロってことは、エース級かベテランが出てきてるってことだな？」

「はい」

できれば、噂に聞くメビウス・ゼロとはやり合いたくないもんだ。

「了解した。情報提供に感謝するよ、ベルナール。……ああっと、そう言えばな、デファンの奴が、この作戦が終わってプラントに帰ったら、ベルナールを頑張って食事に誘うっす、って言っていたよ」

「ちょっ、そんなこといってｎ……」

「デファンに、あんまり美味しい料理は期待できなさそうなので、遠慮しておきますね」

「確かに、先輩と違って、デファンは美味しいお店を知らなさそうね」

「……」

おお、デファンの奴、ベルナールとレナからダブルパンチを食らって、凹んでる凹んでる。

「うぅ、ひどいっす。あまりの暴言で、俺のピュアなハートには無数の皹が……」

「毛が生えてそうなハートなのに？」

「ぐっ。……お、俺よりも小さいｍ……もとい、小柄なのに、大きい心臓が入ってそうなレナに言われたくないっす」

「……今、ナニが小さいって、言いかけたのカナァ？」

サブモニター越しにやり合うレナとデファンの様子を確認している間に、先行するアシム小隊が戦場に向けて、飛び出していったようだ。

「……アシム小隊の出撃が完了しました。……進路、クリア。次、ラインブルグ小隊、どうぞ！」

「了解。レナ、デファン、そこまでにしておけ。……俺達がやることは、先のブリーフィングで話した通りだ。今回、俺達は裏方に徹

するぞ。余分な功名心なんてものは、エルステッドに置いていくようにな」
「わかりました」
「……了解っす」

二人ともいい感じに力が抜けているようだ。

これなら大丈夫だろう。

「よし、ラインブルグ小隊、出撃する！　ジン、１１３４、出るぞ！」

整備班が示す出撃準備完了のハンドサインに軽く応えると、俺のジンはリニアカタパルトで勢いよく戦域へと向かって射出された。

……。

戦域に入る前に、自身の思考を冷たくする。

周囲の連中は熱狂で沸いているが、俺には必要ない。

熱狂するのはテレビでスポーツを見る時だけで充分だ。

……。

そもそも、これから向かうのは、一瞬の判断ミスが命取りになり、どんなことでも起こりうる戦場なのだ。

だからこそ、どのような時でも、どのような状態でも、どのよう

なことが起きても、対応と対処ができるように、思索と沈着を、諧謔と余裕を失ってはいけない。

前の戦闘で、余裕や冷静さをなくすとどうなるか、十分、わからされたからな。

しっかりと肝に銘じておかないと……。

……。

メビウス部隊とジンが殴り合いを行っている前線から一歩引いて、前線全体を見渡す。

……全体的に見て、戦況はほぼ互角だ。

基本、火球が生まれるたびにメビウスが散っているのだが、時折、敵の後方から走るビームやミサイルの類によってジンが貫かれて、爆散している。

「……これはまた、うまいこと、十字砲火帯に引きずり込まれているな」

「そうですね。一撃離脱するメビウス隊に対応していたら、いつの間にか、敵艦隊のクロス・ファイアーポイントに誘導されている、なんて具合です」

「ということは、それだけ、ＭＡ部隊と艦隊の連携が出来てるってことっすね」

「ああ、そういうことだ。だから、俺達も引きずり込まれないように、十分に注意するぞ？」

「はい」

「うっす」

……よし。

「Ｈ－３宙域の味方が突出しているな、後詰に入る」

「「了解」」

◇　◇　◇

戦域は生死を賭けることで狂騒の坩堝となっている。

連合軍艦隊から向かって来る輝く艦砲の光やすぐ近くで爆発するミサイルや爆雷の類に、普通なら怯みそうなものだが、俺が思っている以上にザフト兵は戦意と狂気に満ちているようで、お構い無しに突っ込んで行っている。

その天井知らずの熱狂ぶりを示す証拠が、前線をサポートし続ける間にも、様々な生々しい感情が篭った復讐と怨嗟と侮蔑の言葉として、通信リンクから聞こえてくるのだ。

「ユニウスの……親父の仇だっ！」

「下等なナチュラルがっ！　よくもユニウスをっ！」

「はんっ、てめぇらナチュラルの弾なんざ、中るかよ！」

そんな言葉と共にザフト兵はメビウスを落していく。

時に、オーバーキルと言えるぐらいに銃弾を撃ち込んだりする姿が見受けられた。

時に、メビウスに跨って、いたぶる様に重斬刀を叩きつけもしていた。

けれど、そんな熱狂と鏖殺の場において、異なる色を見せるジンがあった。

見覚えがある機動に、おそらくラウだろうと見当を付けたが……あいかわらず、凄い。

無駄な動きをほとんどせず、最小限の動きでクールに次々にメビウスを落していく姿は圧巻の一言だ。

しかも、時々、背後や側面の死角から撃たれたリニアガンの弾すら避けて見せた。

……ラウって、あれか、νタイプなのか？

そんな感触を懐いていたら、近くの宙域にいたジンに敵の艦砲が掠って推進剤が誘爆してしまい、損傷してしまった。

また、その損傷したジンに狙いをつけたのだろう、二機のＭＡが、しかもメビウス・ゼロらしいシルエットが、こちらに急速接近してくる。

「ラインブルグ小隊、敵ＭＡが急速接近中です！　警戒してください！」

「了解、エルステッド。……デファン、レナ、どうやら敵さんはこ

ちらに目をつけたようだ。レナは損傷したジンを後方の安全宙域までエスコートしろ。デファンは俺とレナが戻ってくるまで敵を引きつけて、時間を稼ぐ」

「了解です。それで、えーっと……先輩、男を待たせるのは、女の特権ですよね？」

何とビックリ、真面目なレナが、冗談を言い出した。

「……確かに、と言いたいところだが、待つのは根性無しの情けない男達だ。待ちぼうけは勘弁して欲しいから、はやく戻ってきてくれよ？」

「ふふ、はい、わかりました。……すぐに戻ってきますから、二人とも落ちたら駄目ですよ」

「……そんな心配をするなら、はやく戻ってきて欲しいっす」

デファンのボヤキに似た返事に笑顔で舌を出すと、レナは損傷機を後方へと牽引して行った。

……まったく、レナの奴、いったい誰の影響なんだ？

こんな戦場で冗談を飛ばすなんて……艦長の影響か？

なんてことを考えていたら、メビウス・ゼロのコンビが突っ込んできた。

聞きしに勝る加速力と速度に慄く。

「デファン、今は無理に落そうとするな。……いや、こちらが落さ

れないように常に連携と牽制を維持するぞ！」
「了解っす！」

付かず離れずの距離を維持し連携を続けることで、敵のコンビが俺達のどちらか片方に狙いを定めれば、それを妨害するために、もう一方がメビウス・ゼロの機動進路に予測射撃をして牽制する、といった具合に共同で対処できる。
また、牽制射撃はメビウス・ゼロの機体特性である補助バーニアを使った急旋回や急停止を多用させることに繋がるはずだから、敵パイロットの疲労が誘えて、無駄ではない……はずなのだ。
後は、こちらも常にＡＭＢＡＣやこまめなスラスター噴射で回避機動をし続けることで、メビウス・ゼロお得意の急旋回によって生まれる射線に入り込まないように意識するだけだ。

というわけで、俄かに我慢比べになってしまった。

ジリジリとしながら、レナの戻りを待つ。

視界の隅に入る戦況図から、徐々にザフトが押し始めているのがわかる。

どうやら、このベテランらしいメビウス・ゼロを俺達が引き受けたことに効果と意味があったようだ、なんて自負してみる。

……いや、正直に言えば、本当に関係しているかなんてわからない。

「う～、きついっす」
「……我慢比べだ、我慢比べ。奴さん達が根負けして退くか、俺達に落されるかのどちらかしかないからな」

「うひーーー、人使いが荒いって、人事に訴えてやるっす！」

……こいつもいったい、誰の影響なんだ？

こんなに壊れたのは、シゲさんの影響か？

……。

しかし、なんで、メビウス・ゼロはガンバレルを使用しない？

「ラインブルグさん！　レナがあと少しで戻ります！　もう少し耐えてください！」

「了解。……ベルナール、メビウス・ゼロがっ、と危ない……メビウス・ゼロがガンバレルを使用しないのっと、……使用しないんだが、何故だと思う？」

「……事前情報から判断しますと、おそらくですが、ガンバレルは元より制御が難しいため、一対一ならともかく、今のラインブルグさん達がやってるような複数機による連携を伴なった激しい機動戦では使用しにくいのかもしれません。それにガンバレルが有線式であることを考えますと、二機同時に使用した場合は、連絡線が絡まったりする可能性があるかもしれませんから、余計に使用しにくいのではないでしょうか？」

「なるほど、な。つまり、連携を欠かさずに機動戦に徹すれば、少なくとも時間は、っと……稼げそうだな」

……流石に、ガンバレルの推進剤切れってのはないか。

「デファン、もう少しこのままの状態を維持する。……耐えろよ」
「……う～っす」

……うーん。

二対二で膠着状態を維持できるんだから、レナが戻ったら、優勢に持ち込める可能性もあるかもしれない。

できれば、この凄腕達は落としておきたいが、どうしたものかなぁ。

……。

まぁ、レナが戻ったら、決めればいいか。

そんなことを考えつつ、デファンと一緒に、メビウス・ゼロのコンビと千日手な戦闘を続けていると、敵二機の機動に、少しだけなのだが、荒さが混じりだした。

どうやら、俺達に行動を拘束されていることに気が付いて、焦り始めたようだ。

然もあらん、戦域の旗色がザフトに傾きだしている以上は、早く、味方の掩護に行きたいだろう。

とはいうものの、俺達が付け入れるような隙を見つけようとして

も、熟練しているメビウス・ゼロの機動に荒さがほんの少し混じったぐらいでは、全然、見えてこない。
逆に、こちらが付け入れられる隙を見せないように、鋭意、努力しないといけない程だ。

「うひゃー、あ、あぶねぇ！　せ、先輩、連中、強いっすね！」
「ああ、隙が、全、然、ない、なーーーとっ！」

見事なまでの二機連携で、それぞれの死角をカバーしている上、補助バーニアを利用した急旋回でリニアガンの射線をあわせてくるのが厄介すぎる。

「出てきてる、メビウス、ゼロが、少数で、済んで、いるのが、幸いっす！」
「まったくだっ！」

デファンと共にボヤキあっていると、

「先輩、戻りました！」

とのレナの声が通信で届いた。

それと同時に、レナが重突撃機銃でメビウス・ゼロに７６ｍｍ弾を撃ち込みながら、こちらに近づいてくるのをサブモニターで確認した。
メビウス・ゼロのコンビは、レナからの攻撃を避けるために素早く散開したかと思うと再び編隊を組みなおし、レナを狙いそうな動きを見せたので、こちらからも牽制弾を撃ち込んで動きを妨害してやる。

その間にレナが小隊連携の輪に入った。

……。

これで、状況は三対二になったが……どうする？

勝負をかける？

それとも色気を出さず、時間稼ぎに徹する？

……。

正直、時間稼ぎが一番いいんだが……ここで凄腕を逃してしまうと、後で戦線を立て直されそうな不安が残るんだよなぁ。

……よし。

「レナ、デファン、小隊を二つに分けるぞ。レナとデファンは二機連携で、俺が一方を抑えている間に、もう片方を絶対に戦闘不……いや、撃墜して見せろ」

きっと、変な色気は出さずに、相手が引くのを待つ方がきっと無難なのだろうが、この二機はやはり無傷のままでは逃せない。

けれど、三対二となったとはいえ、相手の連携が俺達の小隊以上に熟練していることが、これまでの動きで感じ取れたから、おそらくは崩しきれないだろう。

ならば、敵の連携を分断して、どちらかを確実に落す方針に変えた方がいい。

そして、この方法……小隊を二つに分けて戦闘を行うのならば、

搭乗時間の長さから考えて、俺が一対一で一機を抑えている間に、レナとデファンに協同させて、もう一機を落とさせる他はないだろう。

……本当なら、俺の方にも、もう一機欲しいところなのだが……ないもの強請りだ。

「先輩は、大丈夫なんすか？」
「これでも搭乗時間や機体制御じゃ、まだ、お前らに負けてないから、大丈夫さ」
「……でも、小隊を二つに割るって事は……もしもの場合を考えると……とても危ない賭けになりますよ？」
「よくわかってるな、レナ。だが、凄腕だけに、ここで落とさないと戦線を立て直される可能性がある」
「でも、先輩一人じゃ……」

レナの不安を取り除くために、できるだけ不敵に見えるように、口元を片方だけ上げて笑ってみせる。

「何、俺を信じろ。相手がそちらに行かないようにしつつ、落されないように逃げ回るだけさ」
「……先輩、その顔と言ってる事が全然噛み合ってないッす」
「……ええっと、ここは、お前らが落す前に俺一人でも落してやるさ、とか何とか言わないと、凄くかっこ悪いですよ？」

うん、お前ら、いつから、こんな状況でも突っ込めるようになったんだ？

「はいはい、なら、こんな情けないことを言う先輩を助けるために、早いところ相手を落して掩護してくれ」
「うっす、早く始末をつけて、情けない先輩を助けてやるっす」
「そうね、情けない先輩が落ちる前に、早いところ、助けてあげないとね」

……まぁ、それだけ減らず口を叩ければ、大丈夫だろうさ。

「……よし、次の交錯で二機の間に割って入る。その後、お前達は二機連携で、後方の奴を狙って、絶対に落せ」
「「了解」」

さて、以前やった模擬戦での一対一と違って、今度は生死を賭けた戦闘だ。

気張っていかないと。

……で、やりあって、すぐに後悔した。

ベルナールの予想は当たっていたようで、一対一の状況になった途端に、敵のメビウス・ゼロがガンバレルを展開しやがりました。

通信から聞こえてくるレナとデファンの奮起の罵声と緊迫の悲鳴から推測するに、向こうも同じような状況なのだろう。

だが、二人には頑張ってもらわないと……こちらが困る。

「うウッ！」

おっと、危ないっ！

思いっきり、右腕を内側に振ることで機体を回転させて、機体上方のガンバレルから放たれた弾を避ける。

……。

おそらく、ガンバレルの弾にはジンを一撃で葬り去るような恐ろしい威力はないだろう。だが、大打撃を与える威力がないだけであって、下手に間接部にあたれば、間違いなく持っていかれるだけの威力はある。

それにだ……もし仮に、一発でもガンバレルの弾を喰らえば、撃墜されるのは目に見えている。

なんとなれば、ガンバレルからの攻撃を一撃でももらって、ジンの姿勢を大きく崩されてしまうと、機体制御を取り戻して、崩れた

姿勢から体勢を立て直すまでの間に、メビウス・ゼロから五月雨式にガンバレルの弾を撃ち込まれた後、止めにリニアガンをぶっ放されて、お星様にされるからだ。

本当に、リアルに死を感じさせてくれる、非常に恐ろしい相手だ。

……って、らしくないよなぁ、落とされる想像をするなんてさ。

自身が落とされるという嫌な想像を振り払うために、メビウス・ゼロに牽制弾を撃ち込んで、すぐに回避機動をとる。

うん、そうだ、自分が落ちる想像なんて縁起の悪いもんは放棄してしまえばいいんだ。

だいたい、こっちだって、ただ、ボーっと浮いてるだけじゃないんだ。

ガンバレルの動きを把握するために、常に頭部カメラを動かしているし、小刻みに姿勢制御用バーニアを吹かして、捕捉されないように常に動き回ってるんだ。

そう簡単には、中たりませんよぉぉぉぉぉぉぉっと！

こう、ピキーンっとか、かんじられっとぉぉぉぉっと！

らくぅぅぅぅなんだけぇぇどぉぉぉぉって！

おいおい、あぶねぇじゃあねぇかっって、ふぬぅぅぅぅっと！

……ふぅ、やっぱ、回避行動って、身体にきついわぁ。

しかし、見えない一撃ってものは、流石に恐ろしいものがあるよなぁ。

けど、恐ろしいものであっても、回避だけに努めていると、意外と何となったりするもんだ。

そもそも、ガンバレルをメビウス・ゼロ本体から切り離すのは、敵の死角に潜り込ませて、予期せぬ方向から一撃を加えるためのものだ。つまり、逆に考えれば、死角から撃ってくると予測できるということだ。

ならば、その予測と小刻みな機動とを組み合わせることでっと、こっちも回避が可能になったりするんだよぉなあぁぁぁぁぁぁっと、……い、今のは危なかったな。

タイミングを読めるようにするために、制御可能な程度にわざとふらつかせてみせたり、こちらからメビウス・ゼロ本体に攻撃を仕掛けたりすると、何とか、撃ってくるタイミングが計れるんだよっうっっっと。

まぁ、命をベットするなんて、非常にリスクが高い、無謀なことだけどな。

しかし、ガンバレルを展開されるだけでこんなにやり辛いとはっ、っと、とっ！

メビウス・ゼロとやりあう時は、絶対に、一対一にっ、なったらっ、駄目、なのがっっと、わかったぁぁーっと……。

ほんとにぃぃい、去年のうちにぃぃぃぃ、ラウとタップリやったったっと、模擬戦闘にぃぃぃ、か、感謝だなぁっと、とっ！。

……はふぅぅぅぅ。

そうじゃないと、こんなに回避が成功することは、なかったろうなぁって、……敵の動きが変化した？

「先輩！　落しました！」

なるほど、レナ達が上手くやってくれたか。

「……そうか、よくやったなぁぁぁ、っと」

「すぐに行くっすよ！」

……よし、増援が来るなら、こちらから、仕掛けるか。

いい加減、やられっぱなしも、業腹だしなっ！

ヤルと決断し、一気にメビウス・ゼロに向かって加速しながら、重突撃機銃を撃つ。

対峙するメビウス・ゼロが、補助バーニアを使って、こちらが撃つ弾を回避しながらリニアガンを向けようとする瞬間に、左足のスラスターだけを一気に全力噴射！

左足を前後左右に動かすことで流れながら機体を回転させて、俺を周囲で取り囲むガンバレルに向けて重突撃機銃を乱射する。

同時に、回避行動のために右背部スラスターを噴射する。

……ガンバレルに向けて撃った重突撃機銃の弾が、一発掠り、二発がそれぞれ見事命中した。

やった、と思った瞬間、激しい振動が俺の体を襲う。

「ぐふぅぅぅうっっ！」

「先輩っ！」

あえて錐揉みする機体を立て直おさず、ランダムに制御バーニアを噴かして回避行動しながら、更なる衝撃に備えつつ、素早く機体情報を確認する。

……左腕がアウト、左背部スラスター破損だ。

うん、もう少し早く、右背部スラスターを噴射しないといけなさそうだって……もしかして、してなかったら、胴体に命中していた

か？

……今更ながら、自分が危ない橋を嬉々と渡ったことに気付き、血の気が引く。

だ、だが、ガンバレルを二つ落したんだ、お釣りが来るだろう。

なんて具合に損得勘定で動揺を押さえ込み、周辺状況を把握してみれば、デファンが突出しながらメビウス・ゼロに牽制射撃を加えていて、レナも俺のすぐ傍で援護射撃を行っていた。

「……レナ、デファン、後は任せたぞ」

「今のは無謀っすよ、先輩！　……でも、まぁ、後は任せるっす」

「まったくですよっ！　先輩、無茶しないで下さい！」

「い、いや、少しは先輩らしいところを見せｙ……」

「別に無理をする必要の無い所で無茶をした馬鹿な先輩には、帰ったら、絶対にＳＥＫＫＹＯＵしますっっ！！」

ううぅ、少しでも後輩の負担を減らそうと頑張ったのに……。

……。

しかし、冷静に考えてみれば……三対一になるんだから、こんなことする必要はなかったんだよな。

……。

どうやら、自分でも気がつかないうちに頭に血が昇って、熱くな

っていたみたいだ。

……。

あれだけ、冷静になれ、冷静になれ、頭を冷やせ、って念じてきたのに、この体たらく。

……。

気負い、過ぎてたのかな？

なんて、俺が自身の無謀というべき行動と冷静でいられなかった心理状態を責めつつ、後輩からの心の篭った諫言に涙していいのか、喜んでいいのか等と考えている間に、俺が苦戦していたのが嘘のように、二人はメビウス・ゼロを撃墜したのだった。

お、俺の苦闘は……いったい……。

08　世界樹の落葉　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更及び内容を圧縮。

09　世界樹の落葉　3

「いいですか、先輩っ！　エルステッドに帰艦したらっ、さっきの無謀な行動に関してっ、始末書を書いてっ、艦長に提出してくださいっ！」

いやいや、レナよ、実戦なんだから、多少の無理は当然であって、流石に始末書はないんで……はい、わかりましたから……目を見せないでうつむき加減に、少し……ＯＨＡＮＡＳＩしようか、なんて言わないで下さい。

そのスタイルを見せられると、せ、戦慄というか、背中に怖気が走るんだよ！

「レナ、何やってるっすか、先輩の機体が損傷してるんだから、はやく戻るっすよ」

おおっ、ナイスな助け舟だ、デファン！

「でも……」

「物足りないかもしれないっすけど、説教は後回しっす。今はエルステッドに連絡を入れる方が先っすよ」

「うんうん、そうだよな」

「う～」

……レナ、ハイティーンなんだからさ、そんな風に唸るなって。

まぁ、突っ込んだら、確実に再噴火するだろうから、突っ込まないけどな。

それよりも、前線が落ち着いているうちに、エルステッドに連絡を入れよう。

「エルステッド、エルステッド……？」

あれ、繋がらないな……被弾による故障か？

「すまん。どうも、機体の通信系が壊れたみたいでな、デファンかレナ、どちらでもいいから、連絡を入れてくれ」

「……わかりました。んんっ、エルステッド、エルステッド、……サリア？　聞こえないの、サリア？」

「あれ？　レナの通信も、つながらないっすか？」

おかしい。

……何か、起きているのか？

「とりあえず、後方……艦隊に引き揚げよう。悪いがデファン、俺の機をエスコートしてくれ。レナは周囲の警戒を頼む」

「了解っす」

「わかりました」

最悪の想定は、エルステッドが沈んだって事だが、前衛部隊ならともかく、流石に本隊に属しているエルステッドが沈むとは考えにくい。

前線を見ると……連合のメビウス部隊は撤退を開始しているし、

こっちのジンも、追撃に出ているのは一部だけで、大部分は引き揚げ始めている。

後は……ん、んん？

連合軍の艦隊……３００ｍ級や２５０ｍ級あたりの艦列が乱れてる？

「……ルグ小隊！　ああ、やっ……繋がっ……。　ラインブ……さん、……域に我々……新兵器が投……れたそうです」

唐突に通信系からベルナールの声が、途切れ途切れに聞こえてきた。

通信が入ってきたことを考えると、どうやら、俺の機体の通信系は壊れていなかったようだ。

「ベルナール、何が……あ、いや、今はいい。……俺の機が被弾した。小隊も補給も兼ねて帰艦するから、整備班の受け入れ準備をよろしく頼む」

「……傷ですね。わかりました。……、整備班の……受け入れ準備を開始します」

少し、明瞭になった気がするが、ほんとになんなんだ？

「そういえば、レーダーの調子も悪いっすね」

「あっ、本当だ」

レーダーの調子が悪い。

……通信も機能低下。

……。

……これに近いような症状を……どこかで……あっ！

あれだ、ＭＩＮＯ粉だ！

……って、これって、ＭＩＮＯ粉なのか？

◇　◇　◇

三人揃って、通信やレーダーの機能低下という不可解な事象に混乱したまま、しばらくして回復した通信によってエルステッドの座標を把握し、ベルナールの誘導で帰艦した。

格納庫に入ってすぐに、ジンを修理区画へと運んでもらい、懸架台に固定した所でコックピット・ハッチを開放させる。

ハッチを開放する時にいつも感じることだが、密閉空間が開放されるというのは気持ちがいい。

それはそうとして、整備班に機体の整備と……装備の換装も依頼しておくか。

格納庫の壁面にある、格納庫内の気密状態を示すランプがグリーンであることを確認して、バイザーを開ける。艦内も当然、ジンと同じく循環空気なのだが……ジンのものに比べれば、美味く感じる。

一時の開放感の後、俺はハッチから身を乗り出して、大声を張り上げる。

「シゲさん！　悪いがこいつの修理を早く頼む！　……後、三機とも、Ｍ６８系のＤ装と無反動砲に換装してくれ！」

「あいよぉ！」

作業機械の動作音や整備班のやり取りといった様々な喧騒の中、俺はシゲさんの返事が聞こえた方向へと身を投げる。

シゲさんもまた、俺が近づいてくるのに気が付いたのだろう、こちらを向いて苦笑に似た表情を見せた。

「アインちゃん、こりゃまた、結構、やられてるねぇ」

「……ごめん。かなり無謀なことをさせちゃったよ」

「いや、アインちゃんが全力を尽くしているのはわかってるから、別に責めてるわけじゃないんだ。ただ、コレを見たら、しっかりしてるアインちゃんでも、こういうことになるんだなぁ、って感じちゃったんだよ」

……シゲさん、どうかしたんだろうか？

「そもそもさ……」

「？」

「そもそも、俺達、整備班はさ……ここから送り出した奴が生きて帰って来るだけで……それだけで、十分に嬉しいんだよ」

そう言いながら、シゲさんが視線でジンが並ぶ一角を示す。

……数が一機分足りていなかった。

「……エリオットが落ちたよ」
「……そうか」

顔を合わせたり、話をした仲とは、あまり言えないが、同じ艦のクルーである。

俺は、しばらく目をつぶり、エリオットの冥福を祈る。

それに付き合ってくれたシゲさんも、独り言のように、俺に囁くのがわかった。

「……二十歳にもならない、若い奴が死ぬってのは、堪えるもんだねぇ」
「……ああ、そうだね」

人は必ず死ぬ存在だが、戦争で死ぬのは、本当に悲しいことだと思う。

……まぁ、俺が言えた義理じゃないけどね。

「いやいや、ごめんよ、アインちゃん。今は、感傷に浸ってる場合じゃないわな。……機体の修理と装備の換装は二時間以内にやるから、少しでも休んできなよ」
「うん、後は頼むよ、シゲさん」

俺はシゲさんに軽く頭を下げ、デファンとレナに、特にレナは念入りに宥めてから、スクランブル待機室で適当に休憩するように言い置いて、帰艦報告と戦況確認、そして、先程の奇妙な状態を生み出した新兵器について知るために、一度、艦橋にあがってみること

にした。

「やあ、早速あがってきたね、ラインブルグ君」
「……えと、艦長、今、大丈夫なんですか？」
「うちの新兵器なるものが投入されて、相手さんの動きがかなり制限されているみたいだからねぇ。この場を離れない限り、大丈夫だよ」

シートに腰掛けているゴートン艦長が、リュウ班長に敵の動きに、十分注意を払うようにと伝えるとこちらに顔を向けた。

「では、お言葉に甘えて……。うちの小隊は俺の機が損傷した以外は無傷で、機体の修理自体は二時間程度で終わるそうです。また、小隊による敵撃墜数は、ゼロ型が二、通常型が五でした」
「うん、少しやられたとはいえ、全員が戻ってきて、かつ、ゼロを退治したんだから、お釣りがきてるよ。……アシム小隊のことは？」
「……エリオットが落されたと聞きました」
「……この艦初の戦死者だよ。いつかはこうなるだろうと覚悟はしていたけど……堪えるねぇ」

艦長はそう言うと帽子をとって、髪を撫で上げ、再び帽子を被る。

……その時、艦長の眉間に、以前には存在していなかった、縦皺が刻まれているのがわかった。

艦長として、八十人近く存在するエルステッドのクルーに対して責任を負うということは、大変なことなのだと悟らざるを得ない。

なるべく、艦長の負担を減らすように動かないといけない、なんてことを考えながら、一名欠けたアシム小隊について尋ねる。

「今後のアシム小隊は？」

「この作戦が終わるまでは、二人で頑張ってもらうよ。ここでの補充は、流石に無理だしね」

確かに。

……後は、ＭＩＮＯ粉らしき、新兵器についても聞いておかないとな。

「後、さっきの新兵器ってのは、なんですか？」

「あれかい？　実は、突然のことだったから、俺も詳しくは知らないんだよねぇ。さっきも、これより新兵器を起動させる、なんて司令部から一方的な通告だけさ」

それは……なんと、まぁ……。

「その通告の後、突然、通信がつながり難くなっちゃってさぁ。ほんとにいきなり過ぎて、まいったよ。……秘密主義も機密確保に必要なことなんだろうけどさぁ、もう少し、末端にも情報を入れておいてほしいよねぇ」

俺も、艦長の意見に同意する。

いや、ほんと、切実に、ちょっとした隙が命取りになる戦場で、味方が混乱するようなやり方はやめて欲しいと思う。

……。

にしても、新兵器の使用は、作戦らしい作戦ではなかった作戦に折込済みだったのか？

「艦長、司令部が作戦らしい作戦を策定しなかったは、この新兵器の使用を想定していたからだと思いますか？」

「うーん……もしも、あらかじめ、使用することを想定していたなら、普通、真っ先に投入すると思わないかい？」

「それは……確かに」

「上の連中が考えていることなんて、場末……じゃなかった、現場にいる俺らじゃあ、きっと想像も出来ないだろうさ」

とは言っているものの、艦長の口元は皮肉げに歪んでいる。

「まぁ、上層部の考えはともかく、戦況がこちらに傾いているのは間違いない。よって、ラインブルグ君達にはもう一働きしてもらう必要があるんだわ」

「Ｌ１宙域からの敵戦力の排除、ですね」

「うん。この戦域に進出していた敵艦隊は、今日の戦闘でかなり機動戦力をすり減らして、Ｌ１宙域に撤退中だけど、世界樹で留守番していた、もう一個艦隊はまだまだ健在だから、それなりの戦力は維持していると予測できる。……とはいえ、阻止戦力であるＭＡの数は大幅に減っていることには違いないから、ＭＳ隊の任務は艦隊への対艦攻撃が主になることは間違いないだろうね」

うん、やっぱり、そうなるだろうな。

「そのつもりで、整備班には準備してもらってます」

「うん、それなら、再出撃するにしても、少し間があるだろうから、しっかりと休んで欲しい。……即応待機状態でだけどね」

「アイ、艦長」

報告と知りたいことを知った俺は、これ以上、艦長の仕事の邪魔をしないため、敬礼後、待機室に撤収することにした。

で、ＭＳ格納庫傍のスクランブル待機兼整備班休憩室に入ったら、レナに説教を喰らった。

延々と切れ目無く、如何に俺が先の戦闘で無謀なことをしたかということから始まり、途中で最近の俺のレナに対する取扱いが非常に粗雑だという文句が入り、俺が課す訓練の影響からかご飯が美味しすぎて、食べ過ぎていた所、最近、横に伸びたね、なんてベルナールに指摘されて涙したとか、何故か、直接関係無いことまでをこんこんと……タップリ、正座をさせられた上で喰らいました。

……とはいいつつも、実は正座はあくまで形だけなんだけどね。

休憩室に休憩に入ってくる整備班の連中はニヤニヤと、同じ小隊のデファンはデファンで、携帯食を齧りながら、こればっかりは仕方がねぇっすよと、知らん顔である。同室していたアシム小隊の二人は、苦々しげにレナの説教を見ていたが、何も言わなかった。

……いや、お前ら、少なくとも、仲間が落されたんだからさ……この場合はアシム小隊の二人の反応が正しいだろう？

なんて思いながら、助けを求める意味合いも含めて、横目で周囲を見回すとアシムと目が合った、

「おい、ラインブルグ！　エリオットが死んじまったのは、ラヴィネンが言っている無謀を、メビウスと艦砲の網を強引に抜けようとした無謀の所為だった！　……てめぇも小隊のリーダーならよ、ゼロ型と一対一なんて、無謀で馬鹿なことはするんじゃねぇよ！」

……俺は夢でも見てるんだろうか？

あ、あのアシムが、俺を心配してるよ……。

案の定、アシムは室内にいた全員から一斉に注目を浴びて、居心地が悪そうだ。

「……」
「……」
「……」

だが同時に、アシムの口から死んだパイロット、エリオットの名が出たことで、部屋の中が暗く、重苦しくなってしまった。

レナもエンドレス説教をやめて椅子に座り込み、俯いてしまった。

見れば、皆、沈鬱な表情を浮かべて、肩を落としている。

……皆、空元気だったんだな。

……。

……でも、どうしようか、この空気。

……。

……。

……誰か、なんとか、してくれないかな？

……。

……。

……。

結局、艦長から、パイロット搭乗の命が下るまで、部屋の雰囲気は暗いままだった。

……なんだか、気分的に足が痺れたような気がするよ。

09　世界樹の落葉　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／27　若干の内容修正。

１０　世界樹の落葉　４

緒戦を制したザフト宇宙機動艦隊は簡単な再編の後、Ｌ１宙域へ侵入を開始した。その結果、明けて２３日深夜、Ｌ１宙域外縁部で、ザフトの侵入を阻止すべく立ちふさがった地球連合軍の艦隊群と、再度、ぶつかる事になった。

連合軍にとってはもう後がないだけに、今回は最初から全力出撃らしく、Ｌ１に引っ込んでいた無傷の一個艦隊を含めた三個艦隊に加え、コロニー【世界樹】自体の防衛隊も加わっているようだ。エルステッドのレーダーに映し出された光点の数は、先の戦闘よりも上回っている。

とはいえ、機動戦力はひどく消耗しているはずだから、ＭＳ部隊の艦隊突入を阻止する能力は弱まっているだろう。

対するこちら、ザフト宇宙機動艦隊は先の戦闘において、ＭＳが、俺のような損傷機を外して、３２機が撃墜された。

……実に、参加ＭＳの１／３超が落ちたのだ。

この事実を知り、やはり、戦いは数だと実感した。

艦艇に関しては、本格的な艦隊戦に移行しなかったことから、酷い損害は出ていない。だが、どの艦までかは聞いていないが、損傷機の着艦ミスで小破した艦が出たということを整備班から聞いた。ありうる事だと、こちらも自分の機体を損傷させた身であるから、そういう場合には大いに注意しようと脳裏に刻み込んだ。

で、先の戦闘で生き残った艦隊とＭＳに、合流した後続部隊、ＦＭ４隻と搭載ＭＳ２４機がＬ１に攻め込むザフトの陣容である。

艦艇数では圧倒的に負けているが、ＭＡに対するＭＳの優位性、艦艇の搭載艦砲能力、先の新兵器の効果……シゲさんから、ザフト整備班のネットワークで回ってきた情報を内緒で教えてもらったが、司令部が置かれている艦に例の新兵器が搭載されているらしく、その装置がどういう原理かは分からないが作動することによって、自由中性子運動を抑えるらしい。その結果、核分裂を抑制するのだが、実は電波の伝達を阻害する副作用もあって、それの影響で先の通信異常やレーダー不順が起きたとか。まぁ、その装置自体の仕組みについては流石に情報もなく、よくわからなかったが、とにかく、その装置が作動したら、単純に核分裂を利用する原子力発電が使用不可能になり、電波を使うレーダーや通信は近距離なら比較的使用できるが、遠距離では格段に性能が落ちるって、俺は憶えた……等々を鑑みて戦力を対比すれば、ザフト優勢といったところだろう。

そして、エルステッドのＭＳ隊は、これから敵の艦隊に突入し、敵戦力を排除……言葉を誤魔化さずにいえば、敵艦を沈めるために出撃する。

「ラインブルグさん、新兵器が展開されました。この影響で本艦や艦隊から一定以上離れた場合、通信がつながりにくくなりますので注意してください。また、レーダーの性能も落ちますので、光学での索敵は十分に行ってください」

「了解。……ベルナール、敵に何か変わった動きはあるか？」

「光学による観測では……全ての艦隊で艦列が乱れていますね」

「長距離レーダーが使えなくて混乱していると考えるのが道理か？」

「はい。その他にも、３００ｍ級や２５０ｍ級が動力源に原子力を

使っている事も挙げられると思います」

ああ、なるほど……原子力が使えなくなって、予備電源を使用しているから、本来の性能を十全に発揮できないってことか。

「……はい、わかりました、伝えます。……ラインブルグさん、司令部より出撃命令が出ました。本艦ＭＳ隊の先行出撃はラインブルグ小隊になります」

「了解した。ラインブルグ小隊が先行出撃する。レナ、デファン、聞いていたな。俺達が先に出るぞ」

「わかりました」

「了解っす」

整備員の誘導に従って、機体を射出位置につける。……やはり、今回はＤ装だけあって、感覚的なモノだと思うのだが、少し動きが重たく感じられる。

「……進路クリアです！　ラインブルグ小隊、発進どうぞ！」

「了解。……ラインブルグ、ジン、１１３４、出るぞ！」

射出時の瞬間的なＧが俺の体を押さえつけるが、もう、この重圧にも慣れてしまった。人間、どんなことでも慣れてしまうものだな、などと考えながら周囲と後続に注意を払う。

周囲では、友軍艦から俺達と同じように射出されたジンの小隊が、それぞれ陣形を組み、加速していく。また、後方をサブモニターで確認するとしっかりと二人が連携距離を意識しながら、しっかりと付いてきている。

……。

大丈夫だと思うが、一声かけておくか……。

「二人とも……同期が落されて辛く感じているだろうが、これからしばらくは忘れろよ？」

「……言われなくても分かってます」

「そうっす。俺はそれよりも、また、先輩が馬鹿なことをしないかの方が気になるっす」

「うぐっ」

見事に切り返された。

「ほんとですよ、先輩」

「カッコなんてつけなくてもいい、確実に生き残れって、俺達に言ってたのは先輩っすよ？」

「ああ……そうだったな」

「なのに……あんな馬鹿なことを！」

「れ、レナ、落ちつくっすよ。……先輩も人間なんだから、失敗することもあるっすよ」

……逆にフォローまでされてしまった。

「でも、レナが言っていることには俺も同意してるっす。だから、先輩も頼みますから、もう馬鹿なことはしないでほしいっす」

「……ああ、わかった。馬鹿なことはしない」

とはいえ、絶対しないと確約ができないのが、俺の現状だ。

……どうも、死にたくないと常々に思いつつ、自ら死にそうな選

択をしてしまうという矛盾が、俺の内にあるように感じられるのだ。

先の無謀も、選択ミスと言ってしまえばそれまでなのだが、よくよく考えれば、死の危険が非常に高い選択肢が思い浮かぶこと自体がおかしい。

……。

これは俺の心底に隠された英雄願望、或いは破滅願望が表に出た結果なのだろうか？

それとも、誰しもが持つ、一種の自己顕示欲が発現しただけなのか？

……。

まぁ、実際はそんな難しいことではなく、ただ単純に熱くなって、後先考えずに暴走したとも考えられない事もない。

……って、俺、昔と、あんまり、変わってないのかなぁ。

……。

ああ、もう、いかんな。

今はこんなことを考えている時じゃないのに……。

頭を軽く振って、意識を周辺状況の把握に振り向ける。

敵艦隊を見れば、艦艇群からメビウスのものらしきスラスター光が見受けられ始めた。同時に、２５０ｍ級からと思われるビームや１５０ｍ級の小型ミサイルの群がこちらに撃たれ始めている。

ＭＳ部隊の先陣も既にＭＡ部隊との殴り合いを開始しているが……今回の目的は、ＭＡの母艦となる艦隊の排除だ。以前のように、逃げられてしまっては、態勢を立て直されたり、戦力を回復されてしまうだろう。

だが、このまま、激しい砲火が予想される真正面から突っ込むのは、下の下であり、あまりにも危険で馬鹿らしい。

というわけで、一計を案じてみる。

「……よし、推進方向を俯角三時に変針して、主戦場を回避する。立ちふさがる敵以外は目をくれるな。俺達は敵艦隊下部に潜り込んで、下から突き上げる」

「「了解」」

……。

瞬間、遠く敵艦隊の後方に世界樹と呼ばれるコロニーが見えた気がした。

ＭＳ先鋒部隊とＭＡ部隊との殴り合いが激化し始めた頃、こちらは敵艦隊の下部に潜り込むために一気に加速をかける。どうやら俺と同じようなことを考えた奴がいたようで、近くに二つの小隊が俺達と同様、敵艦隊に向かって加速し始めている。

実は、以前、連合軍の知恵者がやったようにデブリに隠れて忍び寄ることも考えたのだが、現在、戦闘の流れがこちらに傾いていることから、下手に時間をかけてしまえば時機を逃すかもしれないと思って、今回は見送っている。

……あの戦法は奇襲や待伏せに使う方が良さそうだ。

……。

うーん、戦法について考え事をするぐらいに余裕があるというか……阻止砲撃やＭＡが前に立ち塞がらないところを見ると、敵艦隊の対応能力は限界に来ているのかもしれない、って、レーダーがおぼろげに敵の艦影を捉え始めたな。

……。

むぅ、どうやら、連合軍艦隊は旗艦と思しき３００ｍ級を中心とした、典型的な球体陣形を組んでいるようだ。

どうするべきか。

……。

俺達が狙うべきモノは旗艦であり、球の中心に位置する３００ｍ級なのだが……ここは堅実に外縁の近接防御系が主体の護衛艦から削った方がいいだろう。

無謀は駄目、絶対駄目って後輩達に叱られたばかりだしな。

「よし、敵艦隊の外縁部にいる１５０ｍ級を削る。憶えているだろうが、あのクラスは近接防御火器がメインだから、あまり迂闊に近寄りすぎるな。それと、近距離になると、ある程度ミサイルの誘導が効くから、ランチャーの動きに注意するように」

「了解っす」

「先輩こそ、油断しないで下さいね」

「わかった、肝に銘じておく。……狙いは艦隊の最下部でボックスを組んでる四隻。初めて実際に敵艦を攻撃するんだ。オーバーキルでいいから、パルデュス全弾をロックして、確実に沈めるぞ」

たぶん、これでいけるはずだ。

「狙いは艦体から突き出たミサイルランチャーあたりか……」

「……後部の推進部でしたね」

「ああ、誘爆を誘えたら御の字だからな、無理に艦橋を狙う必要はないぞ。……各機、各艦に一発ずつ割り振って、残りは好きなのを狙え」

目標の四隻がこちらに気が付いたのだろう、真下に潜りこませないように連携して、盛んに艦体下部の艦砲を撃ってくるが……その弾幕は薄い。それに、ロックオン警報が鳴らないところをみると、先の戦闘でのミサイル攻撃で、ミサイルを使い切ったのかもしれない。

もちろん油断は出来ないが、今のところはミサイルが来ないんだ、ラッキーだと思うことにしよう。

「……よし、発射しろ！」

光学とレーダー両方で目標をロックし、脚部ハードポイントから

熱源探知式有線ミサイルを次々と発射する。同時に空になった発射筒をパージする。

……。

四発ほどが迎撃されたが、残りの十四発がそれぞれの目標に突き刺さった。

「……っ」

「当たったっす」

「……うん、沈んだわ」

自分達がやったこととはいえ、あまりにも呆気ない最後だった。

推進部に命中した一艦は推進剤に誘爆したらしく、一発で轟沈。また、ミサイルランチャー付近に命中した三艦は、やはりミサイルは使い果たしていたのだろう、弾薬類に誘爆を引き起すことはなかったが、次々とミサイルが命中した結果、艦体全体に火球が次々と広がっていき、爆散した。

……。

そして、俺達の小隊が開けた穴から、別の小隊が艦隊内部へと突入して行く。

「……先輩、これからどうするっすか？」

「あ、ああ……俺達も艦隊内部に突入して、無反動砲の弾がなくなるまで、食い散らすぞ」

「……わかりました」

艦隊内部に突入しながら、一つ疑問に思う。

……あんなにも簡単に軍艦は沈むものなのか？

その後、俺達が攻撃を仕掛け、突入した敵艦隊は、突入に成功した他のＭＳによって旗艦が沈められた事で壊走状態に陥った。

そこに付け込んで、ザフトも追撃をかけようとしたのだが、後方や側面に位置していた別艦隊からの激しい支援砲撃やＭＡ部隊の捨て身ともいえる献身によって、断念せざるをえなかった。

通信状態が悪く、劣勢の中でも、艦隊同士や艦艇と機動部隊との相互連携とそれぞれの役割を為して見せた地球連合軍は、やはり強敵だということがよく分かった一戦だった。

１０　世界樹の落葉　４（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

11　世界樹の落葉　5

突然だが、【世界樹】とは地球と月との平衡点であるＬ１に存在する、旧国連が管理運営していた国際スペースコロニーのことだ。

このコロニー、当初は月やＬ４、Ｌ５といった宇宙開発の足がかりとして建設されたのだが、月面都市やＬ４、Ｌ５にスペースコロニーが増えつつある現在では、地球一月……地球圏経済における物流や交通の一大拠点を担っている。

なんとなれば、Ｌ１という場所を考えたら明快だろう。

そして、このＬ１という地球圏における重要な地理的用件から、旧国連は宇宙艦隊を駐留させていた。

大元に帰れば、国際設定宇宙航路の保安、つまりは海賊やならず者等から航路を行き来する商船を守るための警備隊だったり、宇宙船が事故等で破損した時に救助する救難隊だったのだが、時代が下って、コーディネイターとナチュラルとの対立が深まるに連れて、反コーディネイター色を強めた大国の意向もあり、徐々に外征用に増強されてきたという経緯がある。

当初の警備隊や救難隊だけで十分なのに……。

まぁ、国連も大国の影響力は無視できなかったということだろうな。

……はぁ。

気を取りなおして、世界樹には、物流及び交通、軍事拠点としてのニーズに応える為に、五つの宇宙港と労働者や旅行者、滞在者、軍人のための居住区画が四つ存在している。

で、五つの宇宙港がある場所なのだが、直交座標系で説明するならば、地球と月を直線で結ぶラインをｚ軸、月の公転軌道面に平行してｚ軸に直交するラインをｘ軸、そして、ｚ軸、ｘ軸のそれぞれに直交するラインをｙ軸とすると、中心点（０．０．０）の位置に一つ、また、（１．０．０）、（－１．０．０）、（０．１．０）、（０．－１．０）の位置にそれぞれ一つずつ存在している。

その中で、一番大規模なのが、中心点に位置する地球一月ラインを結ぶ直線上に存在する中央総合宇宙港で、他の四つは、軍港や貨物港としての役割を主に担っているが、ほぼ同じ規模となっている。

これらの宇宙港は、中央総合宇宙港の管制室で制御されたリニアモーターレールによって連結されており、物資や人をそれぞれの目的に会った港に運ぶことが可能だ。

例えば、月からのコンテナをどこかに運ぶケースで説明すると、月のマスドライバーで打ち上げられた物資コンテナが、Ｌ１宙域外縁のキャッチャー群で受け取られて、運搬船で運ばれて来る。それが五つの中のどこかの港で降ろされると、目的地や荷主の指定に合った貨物船に割り振るために、リニアモーターレールに放り込まれて、別の宇宙港でコンテナを待つ貨物船へと届けられるのだ。

そして、当然のことながら、それらの宇宙港で働く労働者や駐留艦隊の軍人、旅行者の一時滞在、それらの人々に様々なサービスを提供する者達の居住空間が必要になってくる。

そのため、世界樹の居住区画は、先に挙げた中央総合宇宙港と他の宇宙港とを結ぶリニアモーターレールを中心軸とする密閉シリンダー型コロニーを計四つ、線対称でそれぞれ逆方向に回すことで歳

差運動を抑え込みつつ、地球に近い擬似重力空間を生み出している。
俺自身は世界樹に行ったことがないので詳しくは知らないのだが、居住区画は密閉式であることを忘れさせる程に上手く運営されているそうで、宇宙を往来する船乗り達の貴重な憩いの場になっているとか。

後、世界樹の名の由来なのだが、公には宇宙に進出する人類の総合的な発展を願った思いも込められていると伝えられているが、俗には（１．１．０）や（－１．－１．０）といった方向に木の枝葉のように伸びた太陽光パネルや放熱パネルにあると言われているらしい。

……正直、雪の結晶の方があってるんじゃないかなぁ、なんて思ったが、建設当時の先人たちの想いと、世界樹での憩いについて、懐かしそうに説明してくれていたゴートン艦長に水を差すのは悪いと思って、言わないでおいた。

……。

……で、だ。

……。

今、その世界樹が……崩壊していっている。

……。

正直、ユニウス・セブン以来、こういう光景は、もう二度と見たくないと思っていた。

……。

思ってたんだけどなぁ。

「……先輩」

「宇宙に住んでいる者として、これほど……嫌なことは無いよな」

スペースコロニー【世界樹】はザフトに制圧される前に、世界樹の失陥を恐れた連合軍の手によって、構造体の要となっていた中央宇宙港の要所を破壊され、崩壊させられたのだ。

月方面へと撤退していく、連合軍艦隊の光点が憎らしい。

「……すまん、ちょっと感傷に浸ってしまった。これ以上、ここにいても無駄だから、帰艦する」

「「……了解」」

……艦長、沈んでるだろうなぁ。

◇　◇　◇

２３日の昼過ぎに終わった先のＬ１宙域外縁での戦闘で、二個艦隊に大打撃を受けた連合軍は、駐留地である世界樹に戻らず、月の根拠地、おそらくはプトレマイオス基地へと航路を取った。

一方のザフトも、いくら頑強なコーディネイターとはいえ、短期間に激戦を二度行ったことで疲労が著しい。

そのため、逃げ出した残存艦隊への追撃は断念して、世界樹の制圧に乗り出したのだが……その行動を読んでいたかのように、中央総合宇宙港付近で複数回の大規模な爆発が確認され、世界樹の崩壊が始まってしまった。

コロニー構造体の要を破壊された以上は、もはや手遅れであり、世界樹の崩壊を止めることは出来なかった。

そして、制圧のために世界樹へと接近していた俺達の小隊は……俺は、再び一つの世界が崩壊する姿を目前で見る羽目になった。

やりきれない思いを抱えたまま、帰艦する。

コロニー、それも通常型コロニーよりも更に大型である世界樹が崩壊してしまった以上は、大量のデブリが発生するだろうから、敵艦隊への追撃は、とてもじゃないが、不可能だろう。

今後、出撃はしばらくはないだろうな、なんてことを考えながら、機付整備員に機体を委ねて、身体を艦本体へと繋がる通路方面へと流す。

「お疲れさん」

「……ああ、シゲさん」

気が付かなかった。

……コロニー崩壊の衝撃で疲労しきった精神が、周囲への注意を疎かにしてしまったんだろう。

通路出入口付近で班員に指示を出していたシゲさんが機体情報レポートを片手に声をかけてきた。

「……いやになるよ」

「……そうだねぇ」

宇宙という人が住めない場所で、住処となってくれる存在をどうして簡単に破壊できるのだろうか？

正直、俺には理解できないし、したくもない。

「シゲさん、俺、艦長に帰艦報告をしに行くから、デファンとレナに待機室で待ってろ、って伝えてくれないか？」

「うん、わかったよ。後、整備の方はいつでも機体を出せるようにだけしておくよ」

「ああ、頼むよ」

シゲさんに後を任せて、俺は艦橋へと向かった。

艦橋に入ると常では考えられないぐらいに酷く重苦しい雰囲気が漂っていた。

ドアのスライドで生まれた圧搾空気で気が付いたのだろう、ベルナールがこちらを振り返った。

……その顔色は優れない上に曇ってる。

そして、俺に何か言おうとして……やめた。

何となく俺はそんな顔の原因を思い当たり、艦長シートに近づく。

「……」

「……」

艦橋を重苦しくしているのはゴートン艦長、その人だった。

艦長はじっとメインモニターを見詰めたまま、シートに沈み込んで、むっつりと黙り込んでいた。

俺は、なんとなく、その隣に立ってメインモニターに映し出されている世界樹の散っていく様を共に眺める。

非常に不謹慎なことだが、朽ち折れた木の枝のように、ゆっくりと様々なものを剥離させながら分離していく居住ブロックや、枝葉から落葉するように、太陽光を反射する太陽光発電パネルがキラキラ散っていく光景は幽愁の美しさを感じさせた。

「あの世界樹には、初めて宇宙に出た時から、つい最近まで、随分とお世話になっていたよ」

「……」

「ほんと、貨物船で宇宙を行き来してる時でさ、唯一気が抜ける場所だったんだよ」
「……」
「まったく、なんで、あんなにいいものを壊しちゃうんだろう」

艦長はそういって帽子を中空に置くと、オールバックにした髪をクシャクシャと掻き乱す。その下に見える目は無くしてしまった場所を想ってか、寂寥の色が強い。

「……今日のことも、この戦争で起きた数ある悲劇の一つってことになるんだろうな」
「……」
「……ああ、ごめんごめん。ちょっと愚痴りたくなったよ」
「艦長にそう言ってもらえるとは……、とても光栄なことだと思っておきますよ」
「あははは、まぁ、そういうことにしておいてくれるぅ」

どうやら、いつもの艦長”らしさ”を取り戻し始めたようだ。

ゴートン艦長は心配げにこちらを見ていたリュウ班長に軽く頷いて見せると口を開いた。

「皆、このデブリだ、追撃戦は恐らく行われないだろう。本作戦の目標であったＬ１拠点、世界樹の制圧、確保には失敗したが、敵戦力の排除ということには成功している。……まぁ、今回の作戦はこれで終了だろうって事さ。直に、戦闘配置が解除されるはずだから、その時まで、今しばらく、頑張って欲しい」
「「「……」」」

艦橋スタッフが艦長に対して無言で敬礼すると、珍しいことに、

艦長も立ち上がって答礼を返した。

……うん、如何に艦長が、皆の心を掴んでいるか、わかる光景だよね。

……。

あれ、何か、俺、最後になって空気になってない？

11　世界樹の落葉　5（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

１２　男達の休日

世界樹を巡っての攻防戦を終えてプラントへと帰ってきたら、驚きのニュースが待っていた。

我が友、ラウ・ル・クルーゼの白服への昇進（？）と、著しい功績をあげた者に与えられるネビュラ勲章の受賞である。

なんでも、先の攻防戦で、モビルアーマーを４２機撃墜、艦艇も１５０ｍ級２隻、２５０ｍ級４隻、３００ｍ級１隻撃沈と、これまた、常人では為しえない、堂々たる戦果を挙げたとか……。

つか、このスコアを一人で挙げるなんて、ありえねぇよっ！

ってな具合に、ラウの戦果を聞いた瞬間に、叫んでしまいそうになったほどだ。

だって、モビルアーマーが４２機ってさ、連合軍の宇宙母艦、３００ｍ級が搭載しているだろう数の半分以上だよ？　それに加えて、１５０ｍ級２隻ならともかく、頑丈な２５０ｍ級や３００ｍ級を、計５隻もどうやって落したんだ？　座学で勉強してたんだけど、あいつらって結構、タフだったはずだよ？

そんな俺の疑問に答えてもらうため、家に呼んでみました世界樹の英雄殿を……。

まぁ、そんなもんは建前であって、ほんとはただ単に休暇が上手い具合に重なったから、家で飲まないか、って誘っただけなんだけどね。

ああ、それと、もちろん、プラント防衛隊に所属しているユウキの奴は強制参加である。

上手い事やって時間を作ってこい、出席拒否は認めない、っていう通信を送った後、ユウキからの通信は着信拒否にしてやった。律儀なあいつのことだから、通信が繋がらないことへの文句と俺の非常識さを非難しに、有休でもとってやってくるだろう。

生真面目なユウキの性格を逆手に取った嫌がら……げふんげふん、親交を深めようとする、俺の熱き意思を自画自賛しつつ、一人ニヤニヤと悦に浸ってると呼鈴が鳴った。

出迎えに向かおうとすると、俺の締まらない顔を呆れた顔で見ていたミーアが代わりに玄関へと客人を迎えに行ってくれた。

そして、ドアを開ける音が聞こえたかと思ったら、バタバタと激しい足音が近づいてきて……、

「ラインブルグっ！　お前って奴わぁぁぁぁっっ！！！！」

「うぼべあああぁぁぁぁぁぁ！！」

ユウキに殴り飛ばされた。

……殴られた勢いを殺しきれず、床でバウンドした瞬間に、因果応報という言葉を思い出した。

「お前は、今、プラント防衛隊がっ！　どれほど防衛網の構築にっ！　心血を注いでいると思ってるんだっ！」
「いや、暇な防衛隊で、そこまで休暇を取るのが大変だったとは思いもしなかったんだよ」
「防衛隊は一般に言われるほど暇ではないっ！　幼子の手でもいいから、手伝いが欲しいくらいだっ！」

ユウキに正座を命じられて、防衛隊の現状という講義を受けていたら、ミーアがラウを連れてきた。

「何をやっているのだね、君達は……」
「えーと、防衛隊の現状に関する認識のすりあわせと熱い友情の確認？」
「違う！　プラント防衛隊苦闘の日々と一般常識を忘れた馬鹿者の躾だ」

ユウキの奴も良い具合に壊れてきていると思う今日この頃である。

「アイン兄さんはそのままにしておいていいですから、クルーゼさん、ユウキさん、どうぞソファに座ってください。私はお茶を入れてきますから」
「ああ、お言葉に甘えるよ」
「ありがとう、ミーア嬢」
「……兄さんは、しばらく、そのままね」

くすん……ミーアが冷たい。

「さて、馬鹿者の所為で醜態を晒してしまったが……んんっ、クルーゼ、ネビュラ勲章受賞と白服への昇格、おめでとう」
「……ああ、祝福を感謝する」
「こんな格好だが、俺からも祝福するよ、ラウ」
「……ああ、ありがとう」

何気にサングラス姿が渋いラウは、少し、ぎこちなく微笑んだ。

……照れてるんだろうか？

まぁ、じっと観察するのも趣味が悪いし、ユウキに前から聞きたかったことがあったから、それで話を逸らすか。

「でだ、少し話が変わるが……ユウキよ、ラウが今度から着ることになる白服って、実際、どれぐらいの権限があるんだ？」
「知らないのか、ラインブルグ」
「ああ。他の色は……緑が一般卒業のザフト隊員、赤はトップガンっていうか成績優良卒業者でエリートの証だろ、そして、黒はＦＦＭとかの責任者、艦長が着るっては知ってる」

だから、ザフト隊員は、所属している班によって、若干の形状の違いはあるものの、基本、緑を基調にした制服ばかりなのだ。

「ああ、大体はそうだが、黒服は白服の補佐官的な役割も担う」
「そうなのか。……なら、その白は？　隊長格ってのはわかるんだけどな……」
「む、確かにそれで十分通じるが、詳しくは知らないみたいだな。……うん、あの、ラインブルグが知りたいと言っているのだから、教えておこう」
「お願いします、ユウキ先生」

おや、何だか、ユウキの奴、照れてやがる。

「……わ、私が所属している防衛隊で言うならば、ＭＳ４小隊１２機の長である中隊長クラス以上の指揮官だな。君達が所属している宇宙機動艦隊では、二、三隻の艦艇で構成される戦隊の司令以上、つまり、今言った戦隊司令、四から九隻で構成される分艦隊司令、十隻以上で構成される艦隊司令等が該当する。あ、後、旗艦艦長も該当するな」

「ふーん、そうなのか。……あれ？　でも、防衛隊はともかくとしてさ、宇宙機動艦隊は分かりにくくないか？　同じ白服同士でさ、指揮系統に問題が生じるんじゃないのか？」

「……いや、白服は責任階級ではないんだ。白服というのは、例えば、宇宙機動艦隊だと、複数の艦艇を率いるだけの能力を有しているという資格を示すものと考えた方がいいだろう。権限や指揮権は、それぞれが就いている役職によって、変化するのが基本だ」

と、なると、戦闘に参加する白服が複数存在する場合は、絶対に、戦闘前に、それぞれの権限を確認しておかないと、駄目ってことだな。

「……なるほど。服の色は資格なのか、って、うん？」

「また、何か疑問がでてきたのか？」

「いや、ラウってさ、ＭＳのパイロットだろ？　なのにいきなり戦隊司令を務めるって、ちょっとおかしいような？」

「ラインブルグ、そこに士官学校での成績が出てくるんだよ。赤服ならば、総合的に高い能力を持つと、あらかじめわかっているだろう」

「おお、なるほどな。だったら、おかしくないな」

……うん？

……。

いや、ラウさんよ、あんた、なるほどなって感じで頷いてなかったか、今。

じっとラウの顔を見ていると、サングラス越しでわかりにくいが、つい、と視線を外したような気がした。

「……」

「……」

「……どうした、ラインブルグ？」

どうやらユウキは気がつかなかった模様だが……まぁ、ラウの名誉のために黙っておこう。

貸し一つだぜ、なんてラウにアイコンタクトをしてみたが、サングラスで上手いこと無視されてしまって、どうしてくれようかと考えていたら、ミーアがお茶を持ってきてくれた。

もちろん、今度はこぼさないように慎重にだ。

「お茶が入りましたよ」

「ああ、ありがとう」

「感謝する、ミーア嬢」

「あんがと」

四人で、ゆったりとお茶をすする。

……ふぅ、お茶って、おいしいよねぇ。

「……そういえば、ユウキ。先程、プラント防衛網の構築と言っていたが？」

「ああ、さっき、ラインブルグにしていた話だな？」

ふっ、最近、何故か、正座に慣れてきたから、普通にお茶を味わいながら、優雅に飲めるようになったんだ。

「そうだ。……どのくらい構築できたのかね？」

「……何とか七割がたは完成させたが、どうしても月方面からの圧力が強いために、防衛隊では、引き受けきれないという予測が出てきて、困っているところだ」

ふふん、正座しても足が痺れない俺って、実はすごい奴だと思う。

「月のプトレマイオスを根拠地にしている艦隊が原因というわけか」

「ああ、いくらＭＳの優位性があっても、大戦力でかかられると、先の……ユニウス・セブンのようなことは起きかねない。だから、何とかしたいのだが……」

「なら、資源衛星でも小惑星でも使うなりして、要塞でも作ってさ、航路を塞げばいいじゃんか」

あ～～、このお茶、いつもより、美味いわぁ～。

「……」

「……」

「……あっ、ミーア、お茶、お代わりお願いって、どうかしたか？俺の顔に何か付いているか？」

そんなにマジマジと見られると照れちゃいますよぅ、なんて内心でかわいこぶってみる。表に出すのは、出した瞬間にユウキに、心身どちらかの病院へ送られそうだから、自重した。

「いや、馬鹿と賢者は紙一重なのだと、君を見ていて思ってしまっただけだ」

「……いや、それってさ、喧嘩売ってないか？」

「アイン、今のユウキの言葉は褒め言葉だ」

ラウの言葉に首を捻る。

なんで、褒め言葉？

それにユウキだ。

よくわからないが、えらくユウキの顔が晴れやかなのだ。

「いや、ラインブルグ、今日は休んで正解だった」

あ、そうですか。

……。

ユウキが機嫌良いと、逆に違和感を感じてしまう俺はきっと駄目な奴なんだと思う。

その後はミーアも話の輪に加わり、しばらくの間、和やかなムードで歓談する。

プラント内部の最新情報を一般市民の視線からミーアが、評議会やザフト中央の動向をユウキが、宇宙の状況や艦隊での真面目な話をラウが、ザフトの様々なネットーワークから馬鹿話を俺が、といった具合に中々に話が弾む。

ちょっと、ザフトというか、軍務に関わる話題が多いのは、俺達三人がザフトにいる影響だろう。とはいえ、ミーアが話すプラントの情報は多岐に渡っており、情報量としては軍と民で五分五分である。

でだ……。

このまま雑談を続けるのも十分に楽しいのだが、俺には是非にもラウに聞きたいことがある。

そう、先の戦闘で、２５０m級と３００m級をどうやって落したかだ。

「さて、一般市民にも、急速に名前が広がりつつあるラウさんよ」

「……何かね、防衛隊で変人の代名詞になりつつあるアインよ」

ぐ、ぐはっ、な、なんという切り返し！

だ、だが、俺は大人なんだ！

変な仇名を防衛隊内に広めたユウキへの報復は後回しにして、今は会話を続けるんだ！

「……お、お前さん、どうやって、２５０m級と３００m級を落し

たんだ？」
「ふむ、それは私も興味があったんだ。聞いてみたいな、エース殿」
「……」
ラウは内容が内容だけにミーアを窺っ……て、ああっ、しまったな。
「……じゃあ、私は晩御飯の準備をするね」
「ああ、頼むよ、ミーア。悲しい独身鰥夫三人組に美味い家庭料理を是非に頼むっ！」
「はぁ、また兄さんは馬鹿なことを言って、もう。……二人とも、あまり期待しないで下さいね？」
「いや、防衛隊での食事は食事と言える代物ではないから、楽しみにさせてもらうよ」
「そうだな、ミーア嬢、期待させてもらう」
「もう、お二人まで……」
ミーアは俺達の期待に、照れ笑いと苦笑いを混ぜ合わせた表情を見せながら、夕食の準備に取り掛かってくれた。
……気を使わせて、そして、気が利かなくて、すまん、ミーア。
「……さて、ミーア嬢が気を利かせてくれたようなので答えるが……２５０ｍ級と３００ｍ級をどうやって落としたか、だったな？」
「ああ、２５０ｍ級と３００ｍ級といえば、連合軍の主力艦ともいうべきクラスだろう？　私もそれらをどうやって落したのか、興味があったのだ」
「そうだよなぁ。俺も小隊の連中と検討したんだが、小隊の連携で、

ようやく一隻を落せるかな、って所で落ち着いたんだよ。そこを一機で落すって、どんだけ～、って思ったぞ」

「……ふむ、そんなに難しいことではないのだが？」

いや、ラウさんよ。

お前の難しくないは、一般のというか、コーディネイターの普通でも基準じゃないと思ったりするんだが？

そんなことを思いながら、ラウの口が続きを語るのを待つ。

「君達も連合軍の大型宇宙艦艇がＭＡの母艦を兼ねていることは知っているだろう」

「ああ、知っている」

「……私は、そのＭＡを出撃させる射出口付近を狙ってみたのだよ」

……なるほど。

「……メビウスに搭載される爆発物を誘爆させたのか？」

「そうだ。君達も検討しただろうが……あれらの大型艦艇は流石に戦艦と名乗るだけあって、装甲が厚く、また、近接火器での防備もあって、守りも堅い。比較的柔らかい部分として、推進部と艦橋部があるが、それは向こうも織り込み済みだろう。推進部を狙ったとしても機動力を落すことは出来るだろうが、統一された指揮の下にある継戦能力が失われるわけではない。また、艦橋部は周囲を火器で厳重に守られていることを考えれば、攻撃するリスクが大きい上に、必ずしも艦の継戦能力を喪失させるわけではない」

「そうだな。ザフトの艦艇でもＣＩＣが備わっているんだから、指揮の引継ぎをして戦闘を続行するわなぁ」

「そういうことだ。さっきアインが言ったように、小隊ならば、艦

の全ての機能を潰して、確実に沈めることが出来るだろうし、私もそうしていたのだろう。……だが、あの時、私の小隊は艦隊の防衛砲火に引っかかってしまい、あいにくと損傷機が出てしまってな。二機とも艦へ返したのだ」

「……それで、一人で、単独行動を取ったのか？」

「ああ、危険だが、一人でやってみる価値があると思ったのだ」

さ、さすがはトップガン！

言うこととやることが、他人とは違う！

ザフトの赤服は伊達じゃないっ！

緑とは違うのだよ、緑とはっ、て感じがしたッ！

「す、すげぇなぁ」

「私にはできないな、きっと……」

「……続けるぞ？」

「ああ、うん、頼む」

「……一機で攻撃を艦艇にし掛ける以上は、出来るだけ一撃で艦艇を行動不能にさせるほどの打撃を与えたかった。そのために、どの場所を狙えばいいかを私は考えたのだ。一番に浮かんだのは、推進剤を狙って誘爆を誘うやり方だったが、大型艦艇は１５０ｍ級と違い、推進剤は頑丈に守られているために難しい」

うん、俺達の小隊が１５０ｍ級を落した方法だ。

「次に浮かんだのは、艦砲や外付けのランチャーや魚雷管を狙うことだったのだが、これらも外部に取り付けられていて誘爆させても、装甲の厚さによって効果が薄い」

これまた、俺達が１５０ｍ級を沈めるために使った方法だ。

「そして、最後に浮かんだのがＭＡの射出口や出入り口だ。これらも頑強に守られているだろうが、開閉させる構造上、他の場所よりも構造の剛性や耐久性が低い可能性があると、そう考えた。そして、その内側には推進剤や弾薬といった可燃物や爆発物が大量にあるとも、な。それで、実際に無反動砲やミサイルを立て続けに撃ち込んだみたのだ。……その結果が先の戦果だ」

なるほどなぁ。

これなら、うまくやれれば、一機でも２５０ｍ級や３００ｍ級を落せるな。

「つまり、艦艇の構造上の弱みを突いたということだな？」

「そうなるな」

「まぁ、複数ならともかく一機できるのはラウだけだろうな」

「……そうだろうか？」

「いや、近接防御砲火を掻い潜って、目標地点に複数弾、当てるって、すごく難しいぞ？」

「ああ、やれと言われたとしても、単機では少なくともやりたくはないことだ」

ほら、同じ赤のユウキですらそういってるじゃないか。

……。

いや、ラウさん、なんか照れてません？

「んんっ、すまないが、お茶のお代わりを……」
「ああ、俺が淹れて来るよ」
……うーん、そうだなぁ。
せっかくだから、本格純粋搾りたて生鮮蒼汁でも……。
「……アイン、蒼汁は要らぬからな？」
ちっ、読まれたか……。
で、その後は先のような取り止めのない会話を三人や四人でして、夕食にミーアが作ってくれたアイントプフや【農夫の朝食】を皆で食した後は、人間の古くからの親友である酒類を取りながら夜が更けるまで歓談して過ごした。
最後の方で酒がいい感じに酔ってしまったミーアに、大いに暴れられて手を焼いたが……まぁ、これも一興だ。
と、こんな具合で、大いにリラックスできた一日は終わった。
ほんと、先の戦闘でささくれ立っていた神経も休まった、いい休日だった。
……やはり、余暇というものは大切なものなのだと、つくづく、実感できたよ。

１２　男達の休日（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更及び内容を圧縮。

13　円環の蛇、黄昏の蛇　1

3月に入って、ザフトは地球への降下作戦を発動した。

目標はアフリカ、南アフリカ統一機構領内にあるマス・ドライバーを擁するビクトリア宇宙港だ。上層部は、ここの打ち上げ施設を確保することで、敵……地球連合軍の地球への封じ込めを図り、また、プラントへの水、食料の安定供給線を構築するつもりらしい。

……敵戦力の封じ込めなんてかっこいいこと言ってるけど、実際は、後者の目的が主なんだよなぁ。

簡単な話、農業生産コロニーであったユニウス・セブンが核攻撃で崩壊してしまって、食料自給率が計画当初の予想よりも大幅に下がってしまったがために、この作戦が発動されたわけなのだ。

上層部に受けがいいユウキがそう言っていたから、間違いないだろう。

そして、実際に降下するのは新たに編成されたザフト地上軍なのだが……俺は正直、この作戦に不安を懐いている。

なにしろ、今回の作戦は、遥かな過去となってしまった第二次世界大戦での、クレタ島空挺作戦やマーケット・ガーデン作戦、それにインドシナ戦争のディエンビエンフーを思い起こさせるのだ。

しかも、地上には、降下部隊を支援する友軍は存在しない。

そんなわけで、なんか始まる前から、絶対に失敗しそうな匂いがプンプンとしているのだ。

まぁ、他人には、言ってないけどね……。

で、俺が所属している宇宙機動艦隊は、この地上軍が地球に降下するまで護衛することになっていて、先の戦闘で損失が非常に軽微だったエルステッドも参加することになった。

◇　◇　◇

第一種警戒態勢が発令済みのため、俺達ＭＳパイロットはいつもの如く、スクランブル待機兼整備員休憩所で屯している。先の戦闘以来、アシム達とも話すようになっており、今日もパイロット連中と休憩している整備員で駄弁っている状況だ。

「最近、難しい顔をしているな、アシム」

「ラインブルグか。……ふん、補充で入ってきた新入りが言うことを聞かんのだ。今もここで待機していろと言ったんだが、まったく聞かずに、コックピットに篭ってる」

なるほど、言うことを聞かない新入りに腹を立てているというか、手を焼いているってところか。

「いや、アシムさん、あいつ、何とかしてくださいよ」

「整備の邪魔になるんだってばよ」
「俺なんて、夜直の時に、無人だと思ってたコックピットからいきなりあいつが出てきて、腰抜かしたこともあるんだぜ」
「むぅぅぅぅぅぅぅぅ」
整備員からも困惑と迷惑の声が上がって、さらにアシムが唸る唸る。
そこに、デファンが重々しい声で、切り出してきた。
「……俺、同期に聞いたッすけど、あの新入り、リーは……親をユニウス・セブンで亡くしてるそうっす」
「……」
「……」
「……」
なんとも……それは……。
「でも、今からそんなに力入れすぎてたら……」
「ああ、使いもんにならないだろうな」
レナの言葉に同意したのはアシム小隊のもう一人、緑暗色の短髪を持つガイル・マクスウェルだ。こいつも仲間が目の前で死んでしまってから、少し変わった。傲慢さが少し弱まり、どこか謙虚さが見え始めたのだ。
「むぅぅぅぅぅ」
「難しいっすね」
「どうすれば……」
「……気持ちはわかるがな」

パイロット連中が揃って同じ問題に真剣に悩んでいる姿は……グエン・リーには悪いが……良い傾向だと思う。共同で何かを為す時、人には必ず仲間意識が生まれてくるからだ。もちろん、派閥といったこともマイナス面もあるが、無視しあっていた関係よりもよっぽど健全だ。

……無論、以前、大人気なく無関心でいた俺も反省すべきだろう。

「……」
「……」
「……」
「……」

気が付いたら、何故か、パイロット連中から視線を集めていた。

「……」
「……」
「……」

しかも、整備員の連中も何故か、俺を見ている。

「な、なんだ？」
「……アイン先輩、何とか出来ませんか？」
「えっ？」
「ラインブルグさん、俺、もう、同僚を死なせたくないんですよ。アシムさんもそう考えてますよ」
「……む、むむぅ、まぁ、な」

アシムがデレタっ！

……。

ごめん、自重する。

なんか皆から期待されたから、前から考えていた生意気な野郎や復讐鬼への対処方法を開陳してみる。

「一番原始的な方法、とりあえず、一時でもいいから、死んだ家族のことを忘れさせるってのはどうだろうか？」

「……どうやるっすか？」

「そうだなぁ……普段、俺達の小隊がやっている訓練メニューの……三、いや五倍あたりをやらせるとか？」

うん、この方法、絶対にいいと思うんだが、如何なものか？

「そそそそれはっ、し、ししししししｓ、死んじゃいますよぅ！」

「そそそそそそ、そうっす、ししししし、死んじまいますって！」

「いやいや、人間、そう簡単には死なないようにできているさ。特にコーディネイターなら、なおさらな……」

フフフフッ、全ては泥臭い訓練こそが精神を頑強に鍛え、肉体の血肉になり、その者を生き残らせるのだよ。

俺が過去から現在まで、自分の肉体と精神を鍛えるために、どれだけ、生と死の狭間を漂いながら、己の限界に挑み続けていることか……。

「ぬぅぅぅうぅおぅぅぅう、何だ、この怖気はっ！」

「うわっ、と、鳥肌が勝手に！」

「うわっととっ、ああっ、１／１００ＢＯｕＲＵの部品がっ！」
「ああっ！　ＭＳ用武装のアイデアを書き溜めてきたメモが破れたっ！」
「……へ、へへ、よせって、こんなところで、皆が見てるだろう？」
何か、変なのが一人？
っていうか、皆、どうしたんだ？
何故に、俺から目を逸らす？
……まぁ、いいか。
「とにかく、グエンをとことん訓練で追い詰めてさ、何にも考えられなくしてやろうよ。あいつも、途中からきっと気持ちよくなってきて、ヘブン状態になって少しは気が楽になるだろうからさ」
俺が提案すると、皆してブンブンと盛大に首を縦に振ってくれる。
いやぁ、皆、仲間想いだなぁ。
そう思って感動していたら、壁掛の艦内通信機が呼び出し音を上げたので、通信に出る。
「あっ、ラインブルグ君かい？　ちょっと艦橋にあがってくれないかな？」
「アイ、艦長。今から行きますよ」
「うん、お願い」
そんなわけでこの場をアシムに任せて、艦橋に上がることにした。

「お、俺は、あ、あんな化け物に……喧嘩を売ってたのか？」

なんて、後ろから聞こえた気がしたが……気のせいだろう。

◇　◇　◇

「艦長、入りますよ」

「はいはい」

艦橋に入ってから、俺が言った言葉に軽く返事した艦長の傍まで跳ぶ。青い光を下から浴びて照らし出されてたザフトの艦艇群が艦橋から見える。

いやいや、今日は敵の艦隊が出てきてない上に、それなりに数が揃ってるから、のんびりかつ安心してられるよ。

「ねぇ、班長。さっき、ラインブルグさん、入りますって言った時にはもう入ってましたよね」

「……ベルナール、余計なことを気にする必要は無いわ。それよりも、しっかりと周囲との通信ラインを確保していなさい」

「は～い」

ほら、艦橋の管制官にも余裕があるよ。

そんな俺の感慨に気が付いたのだろう、艦長も苦笑を浮かべた。

「何にもないって、いいよねぇ」

「ほんとですよ。ドンパチは出来るだけ避けてもらいたいですよ」
「……まったくだよ」

シートに腰掛けている艦長が見ているのは……ザフト地上軍のＭＳ部隊が搭載されている降下カプセルを艦体下部に吊るした輸送艦だ。

それが降下する地上軍のために２隻用意され、計８４機のジンが搭載されており、これが降下第一陣を構成する。他に支援部隊や歩兵部隊が搭載されたものがもう１隻用意されているのだが、これは降下第二陣で、降下第一陣のＭＳ部隊が目標となるビクトリア宇宙港周辺を確保してからの降下となっている。

「今回の作戦……ラインブルグ君はどう思う？」
「……ここで言ってもいいんですか？」
「なるほど……リュウ班長、ちょっと、艦長室で話をするわ」
「わかりました。何かありましたら、連絡します」
「うん、お願い」

艦長に随って、艦橋を出てすぐにある艦長室に移動する。

……特にこれといった私物が置かれていない殺風景な部屋だった。

「ああ、殺風景だろう？」
「……はい」
「持込が面倒だから、全部支給品で賄っていてね。私物は全部、宇宙港に預けてあるんだ」
「……」

……宇宙港？

……。

そういえば、艦長の普段って知らないよなぁ。

……って、おいおい、それはプライベートだろうが、俺！

深入りしたら失礼だろう！

「さて、ラインブルグ君、今回の作戦についてなんだけど……」

「あっ、はい。……私見ですが、おそらく今回の降下作戦は失敗するでしょうね」

「……君もそう思うか」

その反応は、他の人にも聞いたのか？

「んっ？　ああ、君以外に副長と二人の班長、ガンドルフィ君とリュウ君に聞いたんだよ」

「……三人はなんと？」

「それなりの打撃を与えることはできるだろうが、援軍が見込めない上に、補給もままならないことから、施設を制圧するには至らないだろう、とのことだ」

「そうでしょうね。しかも、相手は周囲からの援軍が期待出来ますしね」

「うーん、やっぱり、そうかぁ」

艦長は帽子を取ると髪を撫で上げた。そして、手にした帽子をくるくると弄んでいる。

回転する帽子の動きを眺めながら、俺はさらに意見を連ねてみる。

「……降下作戦といいますか、こういう空挺作戦は類すれば奇襲に属するものです。それこそ大量の物資と共に大軍を丸ごと落すなら話は別ですが、今回の作戦だと、１００機にも満たないＭＳだけですからね。一時は敵を混乱させられるでしょうが……所詮は寡兵であり、最初から孤立している降下部隊は敵に取り囲まれては、文字通り全滅するしかないでしょう」

「……」

「もしも、この作戦を成功させたいのなら、絶対に、攻撃の主軸となる地上軍が他に必要だと思いますよ、俺は」

断固たる意志というか、自分達の能力に自信があるのもいいが……もっと、現実を見た方がいいと思う。

「……つまり、今回は無駄な犠牲が出て失敗に終わるってことだね」

「おそらく。……実際、俺が知ることができたように、過去に似たような前例があるんですから、もう少し、ザフト上層部は作戦を練って練って練りまくらないと……命を賭けてる現場は堪ったもんじゃありませんよ」

「……ほんとだよねぇ」

そう言った艦長の顔は憂いの色を見せていたが、帽子を被ると、いつもの飄々とした表情に戻っていた。

「ラインブルグ君、今回は出撃がないと思うから、まぁ、ゆっくりしといてね」

「……そうさせてもらいますよ、艦長」

「うん。……後、話は参考になったよ、感謝する」

「光栄ですよ、艦長」

そう言って、俺は艦長に敬礼して、艦長室を後にした。

待機室でリー用の特別訓練メニューでも作るか、なんて考えることで、これから発生する無駄な戦闘と付随する犠牲者達から、目を逸らしながら……。

後に、【第一次ビクトリア攻防戦】と呼ばれることになる第一次降下作戦は、ザフト降下ＭＳ部隊が孤軍奮闘するも、各個撃破されていき、最終的には全機が撃破されて全滅するという結果となり、ザフトの敗北で終わった。

13　円環の蛇、黄昏の蛇　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

１４　円環の蛇、黄昏の蛇　２

先の降下作戦の失敗を受けて、プラント及びザフト指導部は親プラント国である大洋州連合にザフト地上軍の基地建設のための土地の提供を依頼したそうだ。

このプラントの要請を受けた大洋州連合も、地球連合から受ける有形無形の圧力に抗するため、また、国防上の観点から、受け入れることを決断したようで、カーペンタリア湾の島を一つを提供することにしたらしい。

これもユウキからの情報だから、信頼できるだろう。

その結果、先の作戦から約二週間後、エルステッドは再び降下部隊の護衛任務にあたることになった。

エルステッド首脳陣から各班責任者へのブリーフィングによると、降下地は先にあったように大洋州連合から島を提供されたカーペンタリア湾で、降下カプセルで地上軍の基地施設及び建設部隊、それに護衛ＭＳ部隊を一緒に降ろして、一気に展開させるというのが、今回の作戦の概要だった。

このことを聞かされた時、前の失敗から二週間も経てずに良く基地施設を作りましたね、なんてことを言ったら、元々はビクトリア宇宙港の制圧後、ザフトの基地として使う予定だったものを少し仕様を変更して用意したものらしい。

なるほど、大元があった上での仕様変更くらいなら、確かに短期間で用意が出来るな、なんて思ったもんだよ。

◇　◇　◇

現在、ザフト宇宙機動艦隊は降下部隊を護衛しながら、連合軍の宇宙艦隊が不穏な動きを見せているＬ４方面の動きを気にしつつ、地球軌道上の降下ポイントへとやってきていた。

とはいっても、護衛のために宇宙機動艦隊の半分を集めたが故の安心感から、エルステッド艦内は今回の降下作戦の内容や過日に公表されたザフトの新型ＭＳの性能評価、降下するカーペンタリア湾周辺の特産品は何か、降下した連中は海鮮チゲが食べられるのか、地球連合軍太平洋艦隊が迎撃に出てくるのか、Ｌ４から地球連合軍が攻撃してくるのか、等々の様々な話題で満ちている。

当然の事ながら、俺も含めたスクランブル待機組……アシム小隊がＭＳで周辺哨戒に出てしまっているが……休憩に入った整備班員達に混じって、雑談と言うか、新型ＭＳの品評に参加していたりする。

……しかし、新型ＭＳ、ねぇ。

皆はあまり気にしていないようだが、何故、発表された新型ＭＳの中に”地上用”のＭＳが存在するのだろうか？

ジンの後継機であるシグーはともかく、”地上用”を開発するには、いくらプラントの技術が優れているとしても、開戦後、僅か一ヶ月でというのは、あまりにも開発期間が短い……短過ぎるのだ。

しかも、四機種も同時に開発できるだろうか？

普通に考えれば、否であり不可能だ。

ならば、開戦前から開発が……去年のＬ５宙域事変（仮）あたりから始まっていたと考えるのが妥当か。

……。

だが、それだと、地上用ＭＳが開発されていた理由にはならない。

……。

或いは、去年の段階から、ザフトは……プラント評議会は、地球侵攻も視野に入れていた？

……だとすれば……話は噛み合うが……いや、仮にも自分が所属する組織だ、これ以上、思考を進めるのは止めておこう。

詰めていた息をそっと吐き出し、和気藹々としている整備班を見やる。

「発表された新型ＭＳ、ちゃんとチェックしたか？」

「当然だろ、シグーにディン、バクゥにザウート、それにグーン」

「で、どう思った？」

「どいつもこいつもかわいこちゃん過ぎて、困っちまうよなぁ」

「そう思うよなぁ。……俺、実際に、整備することになったら……オッキしちまうかも」

「お前もそうなるよなっ！　あのシルエットに興奮しない奴なんて、整備班員じゃないよなっ！」

「おうおう、どうやら、お前らも、整備班たる者が、わかってきた

みたいじゃねぇかっ！」
「は、班長」
「ＭＳ整備員たる者、ＭＳに惚れずして、整備などできない、いや、してはいけないのだっ！　覚えておけよ、てめぇら！」
「「「うっす」」」
かなり、整備班の感性にはついていけないが……。
俺と共に引いた目で整備班を見ていたレナが、藁にも縋るように、声をかけてきた。
「せ、先輩、……ち、地上軍に配備される新型ＭＳって、どれも少し、変わってますよね？」
「まあな。……ジンの後継になるはずの新型……シグーはジンをシェイプしてスッキリした感があっていいと思うけど、確かに後のはなぁ。……ディンはどう見ても鳥人間だし、バクゥはまるっきり犬っころだし、ザウードは男のロマンの体現だし、グーンにいたっては、あの色からして、見るからに不味そうなイカだ」
「異議有りっっすっ！」
「……整備班長として異議を認めよう。デファン、整備班を代表して、アインちゃんに反論して、レナちゃんの蒙を啓いてやれっ！」
いや、シゲさん、デファンは整備班違う、パイロット……だよな？

「先輩！　先輩はザウードの評価以外、間違ってるっすよ！」
「……ザウードの評価はあってるんだ」

レナ、そりゃ、当然の認識だぞ？

たくさんの大口径の大砲っていうのは、そして、別の形から人型へ変形するというのは、昔からの男のロマンなのだよ。

「ディンはＭＳでも空を飛べるって実証して見せた偉大なＭＳっすよ！　鳥人間、大いにいいじゃないっすか！　空力を考え、知恵を絞りに絞って考えて付けられたあの六枚の翼は、昔から人が大空に挑み続けてきた歴史を受け継ぐ立派な代物っす！　そして、何よりも空を制するものは地上を制するっていうっすよ！」
「！」
「バクゥは確かに見かけは犬っころかもしれないっすけど、ただの犬っころじゃないっす！　四足は機体の安定性と不整地を踏破する力を与え、足の裏についたキャタピラが機動性を確保するっす！　しかも、人型のＭＳに比べれば遥かに低い全高は敵の攻撃をかわしやすくしているっすよっ！　つまり、この犬っころは、そこらの犬っころではなく、敵を追い詰めて狩り出す、鋭い牙を持った猟犬っすよ！」
「！！」
「そして、最後のグーンっすけどね。……俺は、あの形にこそ、設計者の想いを感じるっすよ！　例え、人にイカみたいだなんて言われて笑われようとも、水の抵抗を減らし、かつ、水中でもＭＳの特性を失わないように工夫を凝らしたのが、俺にはわかるんっすよ！」
　このＭＳはきっと、水中の王者として君臨して海を制するっすよ！」
「！！！」

お、俺は……なんということを……言ってしまったんだ。

「……すまん、デファン。俺が……俺が、間違っていた」

「いや、先輩……人間、誰しもが、見た目に騙されて、気付かぬうちに、間違いを犯すってことはよくあることっす。だから、そんな間違いを犯すことがあるってことを前提に、ＭＳを見ていけば、外見だけに判断されずに、しっかりとその特性を見抜いてやれるっす」

「で、デファン……」

「どんなＭＳにだって、……たとえ、他人から駄作と言われようが……きっと、そう、きっと、いいところがあるはずなんっすよ。……俺は、それを信じて、今までＭＳを愛してきたっす。そして、これからも、そうしていくっすよ」

俺はデファンのＭＳを想う気持ちに、ＭＳに対する愛に心を打たれ、自然と拍手してしまった。周りの整備班連中も、俺に感化されてしまったのだろう、同じく拍手を始めた。

「ありがとう！　みな、ありがとう！　ありがとうっす！」

「……なんでだろう、すごくいいことをデファンが言ってた気がするのに、どうしても、素直に感心できない」

レナの言葉は聞こえなかったことにした。

◇　◇　◇

少しして、部屋を包んでいた大いなる感動が落ち着いて、整備班長を先頭に整備員達と、何故かデファンが休憩室から整備班の戦場へと去った後、さっきまでの”のり”を冷めた目で見ていたレナが疑問を口にした。

「そういえば、護衛する私達の艦隊や降下部隊の輸送艦とは別に船が何隻かありますよね？　あれ、何ですか？」

「うん？　……いや、俺も知らないな。まぁ、これは推測だが、降下支援用の爆弾でも積んでいるんじゃないか？」

「爆弾、ですか？」

「ああ、軌道上から大気圏で燃え尽きないように爆弾を落してやれば、……恐ろしいだろう？」

人は、これを軌道爆撃という……はず。

「……た、確かに、例え自由落下でも、宇宙からなら凄い速度になりそうです」

「だろう？　……極端な話、地球連合を構成する国に、首都や都市に爆弾を大量に落すぞ、なんて脅しをかけたり、軍事基地や生産施設を狙って爆撃したらいいんだよ。そうすりゃ、連合に所属する国から降伏する……ってのは難しいかもしれないが、面従腹背する国も出てくるんじゃないかねぇ」

後、爆撃するにしても、前もって予告したり、通牒を出すなり、市民への避難勧告を出すなりして、地球連合が事前通告無しで核攻撃したのとは、対称的な行動で理知的な面を見せ付けて、かつ、自身の行いの正当性……いや、主張というか論陣でもって、大規模な反地球連合のキャンペーンを展開させて、反プラントに傾いている市民感情を引き戻したい所だな。

そんなことを考えていたら、レナが緑色の目を丸くしながら、俺を見つめていた。

「どうした？」

「……時々、先輩のことがわからなくなります」

「んっ？」

「……いえ、いいんです。気にしないで下さい」

気にするなといわれて、気にしないということは無いのですよ。

だから、何がわからないのかを聞き出そう、かと、思ったんだけど……けたたましい警報音が邪魔をしてくれた。

「このアラートは、え、えっと、第二種戦闘配置ですよね？」

「ああ。……Ｌ４か月から長距離ミサイルでも飛んできたかな。とにかく、俺達はＭＳに搭乗して待機するぞ」

「はいっ」

……いったい、何が起きたんだろうか？

１４　円環の蛇、黄昏の蛇　２（後書き）

１０／１０／０３　加筆修正。
１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。
１１／０２／２７　誤字修正。

15　円環の蛇、黄昏の蛇　3

……誤報だった。

なんでも、防衛陣の外縁で警戒に当たっていたＦＦＭの一隻が、自身に大型デブリが衝突して発生した爆発をミサイルかなんかの攻撃を受けたと勘違いしたらしい。

何というか、外縁部で警戒する重要な役割に就いていたんだから、もっとしっかりしてもらいたい。

そんな趣旨の愚痴を、現状の情報収集に忙しいベルナールに代わって、状況を教えてくれたゴートン艦長へこぼしたら、窘められた。

「それは、どこか気が抜けていた、俺達にも返ってくることだと思うよ？」

……確かに。

「ラインブルグ君、もっと、プラス思考でいこうよ。今回、俺達は運が良かったんだ。……実際にミサイルだったら、艦隊も降下部隊も、目も当てられないことになっていたはずだよ？」

「……ええ、そうですね」

うぅ、言われてみれば、自身も気を抜いていたのに、傲然と他人を批判するなんて、何様のつもりなんだというか……自分で言った事ながら、恥ずかしいな。

俺の羞恥を悟ったのだろう、ゴートン艦長もこれ以上は追及せず、話を進めてくれた。

「それにさ、今回の騒動、危機管理の演習としては、上等の部類だと思わないかい？」

「……はい、気が抜けてたところにいきなりでしたからね」

自身もそうだけど、危機対応の訓練は、真剣みがないとやっても意味がほとんどないからな。

「まぁ、それでも、今回の騒動が今後の糧に出来るか、出来ないかは、俺達自身の意識の持ちようだねぇ」

「そうですね」

今回の失敗を教訓に、俺も少しは成長できたら……いや、成長しないとな。

「……さて、じきに二種配置も解除する予定だけど、ＭＳ隊にはもう少し、コックピット内で待機しておいてほしい。以前のユニウスのようなことは、流石にそうあることじゃないとは思うけどさ、念のためにね」

「了解」

「それにしてもさ、自由な行動が制限される、こういう任務はやりたくないもんだよねぇ」

「本当ですよ。降下地点への突入タイミングまでは、ひたすらに待ちですからね。その間、艦隊は降下部隊が降下終了するまでは、盾

になり続けないと駄目ですしね」
「だねぇ。……うん、それじゃ、もうしばらく頼むよ」
「アイ、艦長」

艦橋との通信を切り、艦長との会話を思い返して、己自身が持っていた慢心を再度、自戒する。

……とはいうものの、流石にハッチぐらいは開けていてもいいだろう。

格納庫内の空気が抜かれている状況とはいえ、閉鎖された空間で待つよりも遥かにマシだ。

「先輩、ハッチ、開けてもいいですか？」
「いいぞ。俺ももう開けた」

レナに了承を出し、ついでにデファンの機体を見てみれば、ハッチが開いた所だった。

そして、当のデファンからも小隊通信系を通じて声が届いた。

「……でも、先輩、今回の二種配置、間抜けな話っすよね」
「いや、俺としては間抜けな話でよかったよ」

本当に、ね。

「こんなところで戦闘になってみろ、下手すりゃ、地球っていう重力の井戸に引きずり込まれるんだぞ？　落ちたら最後、機体が途中

で燃え尽きるか、推進剤が爆発するかして、後は綺麗な流れ星だぞ？」
「……な、流れ星」
「……た、確かに怖いっすね」
「だろ？　なら、誤報で良かったって、思えて……ん？」
シゲさんがハッチから中を覗き込んでいる。
どうやら、何か用があるらしい。
「先輩？」
「ああ、すまん。ちょっとシゲさんと話をするから、通信から抜けるぞ？」
「わかったっす」
ヘルメット内臓ヘッドセットにリンクしているコックピットの通信機をオフにして、シゲさん達が使う艦内共通回線にヘルメット内蔵ヘッドセットの回線を合わせるが……つながらない。首をかしげてシゲさんを見ると、指で回線番号を示し始めた。
内密の話か、などと考えながら、提示された回線を合わせる。
「ああ、つながったみたいだね、アインちゃん」
「うん、大丈夫、つながったよ。……でも、どうしたの？　別回線でなんて穏やかじゃないね」
「ああ、穏やかでない情報が俺らのネットワークに入った」
「……？」
「前にアインちゃんに教えた新兵器、ニュートロンジャマーってあったろう？」
「ああ、あったね」

「……この作戦で、ついさっきね、地球全土にばら撒かれたらしいんだわ」
「へっ？」

ニュートロンジャマーを、地球に、ばら撒く？

「どうやって？」
「ニュートロンジャマーを発生させる装置にドリルをつけて、地中深くに埋め込むらしい」
「なんで？」
「……俺もその意味がわかんねぇんだわ」
「……えっ、何それって……？」

……えっ？

「……い、いや、ちょ、ちょっと待ってくれ……ニュートロンジャマーてあれ……だったよな。確か、核分裂を阻害したり、電波の類を妨害するんだよな」
「そうだよ」
「……そんなことしたら、地球全土で原子力発電所が止ってさ、大部分の電気が……エネルギーがなくなるし、日常で使ってる通信も繋がらなくなって、一般市民の生活がままならなくなって……」
「……ああ」
「え、ちょ、マジで？　そんなバカナコトしたらさ、ち、地球上のさ……しゃ、社会基盤が……根底から……崩壊するんだよ？」
「……」
「う、嘘でしょ？　シゲさん、今日がエイプリルフールだからって、俺のことをかついでるんでしょ？」
「……残念ながら、本当なんだよ」

シゲさんが真剣な表情がバイザー越しに見え、その表情こそがその情報が本当であることを肯定する。

俺は、それが、現実なのだと認識できた。

瞬間……目の前が、真っ暗になった。

自然、息が……荒く、苦しくなる。

「お、おいっ！　アインちゃん！　大丈夫か！　しっかりしろっ！」

シゲさんが何か言ってるが、よくわからない。

「平静を保つんだよっ！」

……平静などでいられるものか。

「気を、気をしっかり持つんだ！」

……気なんて失ってしまいたい。

……。

……嘘だろ？

……エネルギーの大部分を原子力に頼ってる地球に、ニュートロンジャマーなんて代物を無差別に撒き散らしたら……どれだけの人が死ぬと思ってるんだ？

……しかも、真っ先に死ぬのは……死ぬ人のほとんどが……プラントの権益や……プラントの独立なんてことは別世界の出来事な、まったく無関係な……明日を生きていくことすら大変な……弱者……なんだぞ？

……。

……これって、どう考えても、大量虐殺以外のナニモノでもないぞ？

……つまり、プラントは……ユニウス・セブンと同じ事を、いや、犠牲者の数や人類社会全体への影響を考えたら、それ以上のことをしようとしているんだぞ？

……いったい、なにを考えている、ザフトは？

……いったい、なにを狂っている、プラントは？

……。

「アインちゃんっ！」

……。

「……シゲさん」

「えっ？」

「なぁ、シゲさん……今日の……あまりに馬鹿げた暴挙……俺達がしたことなんだぜ？」

「……あ、アインちゃん？」

「く、くくくっ、あははははっ！」

「おい、おいっ！　アインちゃん!!」

「……ふ、ふふふ、シゲさん……あまりにもブザマで……あまりにもフザケてるよ」

「フザケすぎてるよっっっっっ!!!!!!!!」

ああ、頭の中はこんなにも寒いのに、身体の底で溶鉱炉が生まれたように、煮えたぎっている。

全身の血流が冷たく沸騰している感じだ。

「なぁ、シゲさん……この戦争はさ……プラントの独立を達成するためにするんだろ？　なら、ならなんでこんな馬鹿げたことするんだろ？」

「……アインちゃん」

「なにか？　プラントの上層部は、ザフト上層部は、地球市民……

いや、この場合はナチュラルを相手にしているつもりだろうから、ナチュラルか……そのナチュラルとコーディネイター、どちらかが根絶やしになるまで戦い続ける、殲滅戦がお望みなのか？」

……あまりにも思慮が足りない。

「シゲさん……俺さ、別に望んでザフトに入ったわけじゃないんだよ。……状況が、俺にそれを強いたんだ」

……。

「望んでもいない場所に来て、ナチュラルへの侮蔑を隠さない連中ばかりに囲まれてさ、俺の感性がおかしいんじゃないかって思ったこともあったよ」

……ラウがいなければ、ザフト最強思想なんてものに、洗脳されていたかもしれない。

「……でも、そんな中でもモビルスーツに乗るのは楽しかったし、友と呼べる存在が出来た。ここに配属されてからも尊敬できる上司に出会えたし、可愛い後輩もできたし、整備班みたいな楽しい連中とも仲良くなれた」

……。

「これなら何とかやっていけるって思ったら、戦争が起きて、……バレンタインの悲劇が目の前で起きた」

……。

「その時、思ったんだよ。コロニーの崩壊って、一つの世界が崩壊するってことと変わらないんだって……。宇宙に住んでる人間にとって……いや、住んでいる世界が崩壊するのって、人間にとって、一番、恐ろしくて怖いことだってさ」

だからこそ……。

「だったら、そんな悲劇を起こさせないように、少しでも戦争が早く終わるようにさ、全体で見れば、本当に微々たる力だろうけどさ、プラントを……いや、プラントに住む人を守るために、独立して戦争を終わらせるためにも、ザフトで頑張ろうって気にもなったんだよ」

……それなのに。

「なのに、今、俺が所属しているザフトが、プラントを独立させるために戦っているはずのザフトが、何故か、世界を破壊して、相手……地球から憎悪を引き出している」

……本末転倒だよ、これじゃ。

「なぁ、プラントじゃ、コーディネイターである自分達のことを進化した新種だ、人類の新種だってよく言って、ナチュラルのことを見下しているけどさ、なんのことはない、やってることは、まったく同じじゃないかっ！　核を撃ち込んだ奴等とまったく同じことをしているじゃないかっ！！」

……何が、新種だ。

「この暴挙のどこにっ！　どこにっ！！　ヒトの新種らしさが、どこにあるっていうんだよっっっ！！！」

……ほんとにさ、あまりにも、フザケすぎてるよ。

15　円環の蛇、黄昏の蛇　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

16　円環の蛇、黄昏の蛇　4

シゲさんに醜態を晒したことでようやく落ち着いた俺は、シゲさんからの無言の労わりに感謝しつつ、独り、コックピットに篭ってる。

レナやデファンには、二種配置が解除された後、コックピットで調整があると伝えておいた。二人とも何となく、俺に何かがあったということは察してくれたようで、黙って従ってくれたようだった。

そして、俺は……まったく、取り乱すとは、いい大人がらしくないことをしたものだ、等と、格好をつけながら、コックピット内で一人、さっき見せてしまった自身の醜態に身悶えしている。

……。

ま、まぁ、そこは俺も人間ということで、そういうこともあるということだ。

……あんまりすぐに出たら、かっこ悪いからちょっと時機を待っているだけなのは、ここだけの内緒である。

……。

うん、もう、今回の被害は……もう、矢が放たれてしまった以上は、どうすることもできないんだ。

これから、俺は、大量虐殺の実行者として、罪咎を背負っていかないといけない。

……ほんとに、背負いたくもない重荷が突然降ってきて、一気に体に圧し掛かってきたって感じがするよ。

もし、この作戦の立案者や、こんなことを俺達にさせた責任者に会ったら、絶対にぶん殴ってやる。

……。

……まだ、さっきの衝撃や憤激の残滓はまだ残っているようだが、直にこういったものも過ぎ去っていくだろう。

俺が考えるに、本当に大切なのはさっきみたいな一時の激情の後に絶対的に残るもの……胸の裡に燻ったり、残っているものをどうするか、なのだと思う。

今、俺の胸の裡には、今回の暴挙に対して、何もすることが出来なかったという悔いが大きく残っている。だが、これは最早、起こってしまったことであり、時間でも遡らないことには、どうしようもないことなのだ。

ならば、今回の失敗を次に起きるかもしれない同じような事で繰り返さなければいい、と割り切るほういいだろう。

高ストレス社会であるプラントで生きてきて、俺が最も実感してきた経験則に則り、ここでグズグズと引き摺らずに割り切らなければならないのだ。

そう、今、現在こそ、開き直る時なのだ！

そうさ、人間、お天道様に顔向けできないことさえしなければ、堂々として、何事にも、基本、あん、それがどうしたってんだ？

俺は俺だ！

そんな精神でいけばいいのだ！

……。

お前、お天道様に顔向けできないことに加担しただろって、突っ込まれると苦しいというか、そんなことされたら、本当に心が折れる以上に、きっと、砕けるだろうなぁ。

って、……俺は何を熱く考え込んでいるんだろうか？

と、とにかく、今回みたいな馬鹿なことは二度と、俺の前では起こさせない。

もしも、そんなことが目の前で起きそうならば、持てる力を振り絞り、何とかして見せてやる。

キリッ！

……。

……こういう決意って、俺には似合わないなぁ。

……。

まぁ、こんな事は人に言うもんじゃない、自分だけがわかって持っていればいいことさ。

さて、腹も空いたし……外に出るとしよう。

◇　◇　◇

で、外に出たのはいいのだが、シゲさんの進言なのだろう、艦長から直々にちょっと休むようにと言われてしまい、スクランブル待機から外されてしまった。

さすがにアレだけ取り乱したのだから、仕方がないのかもしれない。

そんなわけで、俺は艦内の展望休憩室から地球を眺めている。

太陽の光を反射して、明るく青く輝く昼の地球。

人工の光を灯して、人の営みを感じる夜の地球。

前に、ここに来た時は、そんな光景がここにはあった。

けれど、今は……。

「寂しいねぇ」

「……艦長」

「艦橋をリュウ班長にしばらく任せたんだよ。……俺も少し落ち着きたくてね」

そう言うと艦長が、俺の隣に立った。

「今回の事……艦長は御存知だったんですか？」

「いや、俺も、投下後に届いた通達で知ったよ。……相変わらずの秘密主義って奴さ」

「……なるほど、あの使途不明な艦艇群が馬鹿の巣窟ですか。今からでも無反動砲を撃ち込んでやろうかな」

「おやおや、過激なこと言うねぇ」

「もちろん、冗談ですよ」

心情的には、特火重粒子砲なり、キャニスの大型ミサイルなりで

も撃ち込んでやりたい気分だけどね……。

「……落ち着いてるね、ラインブルグ君」

「ええ、実のところ、コックピット内で散々に取り乱しましたから、今は、もう、ほとんど落ち着いてますよ」

「おや、まぁ。なんとも頑強な精神だこと」

目を丸くする艦長なんて、珍しいものを見た。

まぁ、こちとらそこらの若者とは、生まれというか、毛色というか、スタートラインが違うからなぁ。

「それで、艦内に変化はありましたか？」

「……一部で非常に取り乱す者が出た他は、どちらかと言えば、平穏だねぇ」

……俺のことですね。

「いや、ラインブルグ君だけじゃないよ。副長は卒倒しかけたし、リュウ班長は眩暈を起こしてスラスターをオンにしかけたし、ガンドルフィ班長なんて、ＣＩＣの計器類にコーヒーを噴出して、今頃はチェック中だよ」

だ、大丈夫なのか、エルステッドは？

「ああ、大丈夫大丈夫、全員、一時のことだから」

「……」

「……」

「……三人とも、これからのことを考えて？」

「おそらく、そうだろうねぇ」

今日のこの行動は、戦争を終結させる道を、プラントの選択肢を大いに狭めたのだ。

「ザフト上層部は、今日のことをユニウスの仇だと、しきりに吹聴しているよ」

「なんと、まぁ、情熱と戦意に満ちていることで……」

自然、皮肉が漏れ出てしまうよ。

「わざわざ、相手の土俵に乗る必要なんてないのになぁ」

「俺も、そう思うよ。……先の核攻撃とは対照的な行動をこちらが取れば、和平への切欠が出来ると思ってたんだけどねぇ」

「……そうでしょうね。少々の脅しと逃げ道を用意すれば良かったんですよ」

「……けれど、それは為されず……自らを貶めた、か」

艦長と二人揃って、ため息をついてしまった。

「きっと俺達みたいな考えは、プラントやザフトでは少数派なんだろうね」

「でしょうね」

「まったく、こんな時はタバコでも吸って、気分を落ち着けたいもんだよ」

「それは何とも贅沢な悪癖ですね。……宇宙では空気は有限です、それを汚すタバコは厳禁です……なんて言われませんでしたか、艦長？」

「そうなんだよねぇ。地球上じゃ、マナーを守れば、そこまで気にしなくても良かったんだけどねぇ」

どうやら、艦長は地球に住んでいたことがあるようだ。

「真面目な話、ラインブルグ君は、これから、どうするの？　……ザフトを抜けるのかい？」

「……退役も戦争が終わるまではするつもりはないですし、当然、脱走なんてこともしませんよ。俺には、既に、後輩への責任がありますからね」

……後、殺した相手への責任もな。

「そうかい。少なくとも戦争が終わるまではいてくれるみたいだから、俺としても助かるよ」

「そうですか？」

「うん、考え方があう貴重な人材だし、頼りにもなるからね」

面と向って評価をされることは、プラントでは少なかったために、照れてしまう。

「……さて、どうやら、ラインブルグ君は大丈夫なようだし、直に戻ってもらおうかね」

「アイ、艦長」

「もうすぐ、降下部隊がカーペンタリアへの降下を開始する予定だから、ラインブルグ君の小隊には厳重警戒のために哨戒に出てもらうつもりだ。よろしく頼むよ」

「わかりました」

艦橋へと戻って行く艦長を見送った後、俺はもう一度、夜の地球を眺める。

そこは、文明の灯りがほとんど存在していない、寂しく暗い世界だった。

その暗さから連想される、今現在の混乱と、これから起きるだろう地上の惨劇を想像しかけるが、頭を振ることで振り払い、ＭＳ格納庫へと足を向けた。

この後、行われた降下作戦は恙無く成功し、ザフトは地球上に拠点を得ることになった。

地球市民の憎悪と共に……。

16　円環の蛇、黄昏の蛇　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記修正。

17　ヤキン・ドゥーエ防衛線　1

俺にとっては大きな衝撃があった先の第二次地球降下作戦によって、ザフトは地上拠点としてカーペンタリアを確保した。また同時に、降下部隊を迎え撃った地球連合軍の太平洋艦隊に大打撃を与えたことで、大洋州連合への圧力を減退させ、また、カーペンタリア周辺地域での行動の自由も獲得することになった。

ちなみに、カーペンタリア沖での戦闘では、新型ＭＳのディンが空中で華やかに活躍したそうである。今回、実戦投入を見送られてしまったという地味男なグーンの、伊達男なディンへの嫉妬の声が聞こえてきそうな話だ。

さて、俺が乗組むエルステッドであるが、ゆっくりと休む間もなく、今度は月方面からの敵艦隊の侵攻に対処することになった。

侵攻中の敵艦隊の戦力は、衛星で観測された推進機関等の熱源や光学からの情報……ニュートロンジャマーが効いている現状で、どれほどの精度なのかはわからないが、まぁ、ここはプラント脅威の技術力を信じよう……を信じるならば、先の世界樹で戦った艦隊よりも、かなり、増強されている。

この点を加味すれば、自ずと今回の戦闘が、世界樹攻防戦よりも酷いものになると予想された。

◇　◇　◇

４月１６日。
ザフト宇宙機動艦隊がプラントへと至る航路に網を張り終え、いつの間にかアプリリウス市からヤキン・ドゥーエと呼ばれる資源小惑星に司令部を移していたプラント防衛隊もまた、プラントを守るための傘を構築中である。
エルステッドを含む宇宙機動艦隊の本隊は、月－Ｌ５を結ぶ航路上、月から見ればプラントの前面に位置して、連合軍の艦隊を待ち受けている。
防衛ラインを構成するエルステッドでは、前と同じく、戦闘部門責任者による現状把握と迎撃作戦の概要及び本艦の作戦についての説明会議が行われようとしている。もちろん、今回はアシムもしっかり参加している。

「はいはい。時間は限られてるから有効に使おうよ」

との艦長の言葉に従って、敬礼を解いた俺達は、それぞれが会議卓を見下ろせるように取り囲む。お誕生日席もとい上座とも呼べる会議卓の最奥に立った艦長は隣に立つ副長に一つ頷くと口を開いた。

「今回の戦力を見ると、奴さん達、かなり気張ってきてるみたいだねぇ。……副長、説明をお願いするよ」
「はっ」

いつかと同じように副長が端末を操作すると、Ｌ５周辺宙域の状況展開図が映し出された。
後方のコロニー群を守るように緑色の三角が一列に並び、また、幾つかの戦隊規模と思われる同色の三角もさらにその前に出ている形になっていた。そして、月と書かれた方向からは大きな赤い三角がこちらに向かってきていることを矢印で示している。

「現在、ザフト宇宙機動艦隊は第一種警戒態勢を発令しており、敵の攻撃に対する即応体制が完了している。プラントを守るために構築された防衛ラインは四つで、第一線は積極的防衛に出る五個戦隊ＦＦＭ１０隻と搭載ＭＳ６０機が、第二線には司令部直属本隊を構成するＦＦＭ１６隻と搭載ＭＳ９６機が、第三線は後衛の四個戦隊ＦＦＭ８隻と搭載ＭＳ４８機が、第四線……つまり最終ラインには、資源小惑星ヤキン・ドゥーエを根拠地とするプラント防衛隊の四個ＭＳ中隊４８機が、それぞれに配置されて敵戦力の迎撃にあたることになっている。また、予備戦力として、同じくヤキン・ドゥーエに艦隊のＦＦＭが４隻と搭載ＭＳ２４機、防衛隊の二個中隊２４機が存在しているが、こちらは別方向からの突発的な侵攻の警戒や二月のような失態を避けるための保険的役割も持つ以上、出来うる限り動かしたくない」

「……副長、別方向からの侵攻があるのですか？」

「あくまで可能性だ。だが、可能性は潰した方が安心して戦えるだろう？」

それは確かに……。

「……それで、本艦だが……このプラント防衛ラインを構成する第二線の……ここに配置されている」

副長が指し示したのは四つある線の中で、外から二番目にある線を構成している一つの三角だ。

「次に敵戦力についてだが、偵察情報から大凡二個ないし三個艦隊程度だと推測されている。実数で示すなら、３００ｍ級が３ないし５、２５０ｍ級が２０から３０、１５０ｍ級が８０から１００といった艦艇群と、これらが搭載していると予想される機動戦力が４５

0から600程度である。この有力な敵艦隊が国際設定航路上を月からL5のプラントへと侵攻しつつあるのが現状だ」

なんか、連合軍艦隊の構成数が、以前より物凄く増えてるんですが……。

「積極的防衛に出る第一線の会敵予想日は明日、我々の第二線も敵の進行速度が落ちなかった場合、明日の午後遅くか明後日深夜に会敵すると予想されている。司令部からの命令では敵機動戦力の迎撃を第一とし、敵艦隊への突入は戦況に余裕ができてからということになっている。新兵器であるニュートロンジャマーは核攻撃を完全阻止するため、プラントでの常時稼動分の他に艦隊及びヤキン・ドゥーエの装置も起動される」

……敵の数が増える、敵の数が多い、敵大量、大軍。

「では、こちらもレーダーが大幅に制限されるということですか？」
「そういうことになるな、リュウ班長。もっとも、悪いことだけではないぞ」
「確かに、敵のレーダーや強力な誘導兵器も無効化できますね」

……レーダーはどちらも無効、誘導兵器も無効。

「ならば、ミサイル攻撃の危険は少ないということになりますか」
「いや、ガンドルフィ班長、俺達MS隊にはちょっとした脅威だ。あまり油断は出来ん」
「ああ、確かに。世界樹の時は凄まじかったな」

……ミサイル攻撃は危険で脅威。

「そうね。あの時はＭＡとの連携が驚くほど精緻にできてました」
「……ああ、あの火砲の網は酷かった」
「……すいません、アシム。あなたの気持ちを考えもせずに」
「いや、リュウ班長、気にしなくていい」

……。

「……以前のユニウスの時のように、デブリに紛れるようなことはないだろうか？」
「ありえるかもしれませんが、防衛隊が一定以上の大きさを持つデブリを監視して、徹底的に排除していますから、可能性自体は低いのでは？」
「……俺達ザフトは、二度とユニウスのような悲劇を起こせさせるわけにはいかんからな」

……デブリは排除、ユニウスの悲劇……コロニーへの攻撃……。

「……」

うーん、単語を聞いていたら、保安局時代に鍛えられた脳内最悪状況想定機能が勝手に働いてしまう。

「……」
「……ラインブルグ君、何か、気になることでもあるのかい？」
「……えっ？」
「いや、さっきから黙りっぱなしじゃないか」

……どうも、長いこと考え事をしてしまったようだ。

「いや、なんとなく、最悪っていうか、危機想定が浮かんできたん

ですけど……」
「ふむ……ちょっと、話してみてよ」
「……」

他の四人を見ると、こちらを見ていて全員が頷いて見せた。

「……ザフトというか、プラントにとって最悪の想定って、コロニーが破壊されることですよね？」
「うん、そうだね。俺達の住処であり、生きている世界を破壊されるのが一番恐ろしい」
「なら、もしも、この連合の艦隊がコロニーを破壊するために行動するなら、どのようなことをするでしょうか？」
「そりゃあ、ラインブルグ、手っ取り早く、装備しているビームや艦砲、ミサイルを何発も撃ち……こん……で……」
「そうなんだよ、アシム。別に核じゃなくても艦艇が装備している装備……艦砲や大型ミサイル、対宙魚雷なら……」
「一発では不可能でも複数発なら、コロニーは破壊できる、ということね」

リュウ班長の言葉に俺は頷く。

それに対して、彼女の反対側に立っていたガンドルフィ班長が疑問を呈する。

「だが、プラントを自国の資産と見ている理事国がそのようなことを許すか？」
「既に二月の戦闘で、擬態した敵がコロニーに攻撃を仕掛けたり、実際にコロニーへの核攻撃が為されています。その上に、先の地上へのこちらの新兵器……ニュートロンジャマーを使った無差別攻撃の件もありますから」

「しかし……」
「そういったことを踏まえて、地球上を無茶苦茶にした復讐を兼ねて、返ってこないならば破壊してしまえ、なんて癇癪を爆発させる可能性は考えられませんか？　……それにコロニーを破壊するといっても全てを破壊する必要はないんですよ。一部を破壊するだけでも、十分に、効果があるはずです。コロニーへの攻撃自体がプラントへの相応の圧力になりますし、市民に生命の危険を味あわせることで、コロニーを守れなかったザフトや戦争を指導するプラント最高評議会とプラント市民との間に、世界規模のネットワークを利用したり、市民レベルでの噂を流したりするような宣伝工作戦で、楔を打ち込んで乖離させられます。例え、最高評議会が徹底抗戦を叫んでいて、社会がそれを認めていても……攻撃に晒されれば、命の方が大切と思う人間が出てきてもおかしくないでしょう？」
「……」
ガンドルフィ班長が黙り込んだら、今度は副長が口を開いた。
「だが、ニュートロンジャマーが効いている以上はミサイルの誘導など、出来んはずだぞ？」
「下手な鉄砲、数撃ちゃ当たる、的な発想ならどうですか？　コロニーの位置はわかってる上に、動きは少ないですから大きな的になります。別に誘導なんかが効かなくても一直線に撃ったら、直撃コースから外れることはないと思いませんか？」
「……物量によって、コロニーへ飽和攻撃を仕掛けるということか？」
「というような想定が一番最悪じゃないかなって思い浮かんだんですよ」
「……なるほどねぇ。あれだけ大量の艦艇と、以前と大きく違う社会状況ならば……ありえるねぇ」
「はい、それにこちらがミサイルといったものの迎撃に忙殺されて

いる間にＭＡや艦隊が突入してくる可能性も……」

……連想と思いつきでの発言だったんだが、何となく、自分でもありえそうだと思えてきた。

「こちらの艦隊はビーム砲やミサイルでひたすら弾幕を張ってミサイルや艦砲弾を撃墜して、ＭＡにはＭＳが対処して、味方艦隊への突入を阻止。ミサイルや艦砲弾の撃ち洩らしは防衛隊に委ねる、か。……だが、敵艦隊が突撃してきた場合はどうする？」

艦長は瞑目して腕を組むと、独り言のように呟く。

あまりに真剣だから、一応、一言は断っておこう。

「あの、艦長、今のは俺が言ったことはあくまで最悪を想定した想像というか、可能性ですからね？」

「……最悪に備えたら、大概のことはなんとかなるんだからさ、対処を考えるのは無駄じゃないよ。それに現実は往々にして、最悪をというか、想定の斜め上を突き進んで行くからね」

そう俺に答えた艦長が、俺達を見据えて指示を出し始める。

「副長とガンドルフィ班長はＣＩＣで敵の飽和攻撃に対処する本艦の行動計画を至急作成して欲しい。リュウ班長は索敵と敵艦隊の動向観測をより密に、そして、何か動きがあったらすぐに知らせて欲しい。また、ＭＳ小隊長の二人は、いざという時のために各々の小隊員に最悪の想定を話しておくように」

「はっ、了解です」

「大至急に取り掛かります」

「わかりました」

「了解です」
「了解です、艦長」

艦長は俺達の返事に一つ頷いてから、急にうんざりしたような表情に変えて、ぼやく。

「俺は……防衛隊と艦隊のエライさんに、この攻撃の可能性と危険性を講義するよ」

……きっと、分からず屋な教え子になると思いますが、頑張ってください、艦長。

ほんと、涙無くしては語れない艦長の姿だった。

17　ヤキン・ドゥーエ防衛線　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

18　ヤキン・ドゥーエ防衛線　2

4月17日。
突出したザフトの前衛部隊が連合軍の艦隊へ攻撃を仕掛けた。
かなりの激戦になっており、双方共に機動戦力の消耗が著しいとは、現在の戦況を教えてくれるMS管制官のベルナールからの情報だ。

現在の所、先に俺が示した懸念は……外れている。

先の懸念、艦長が宇宙機動艦隊と防衛隊の双方に伝えたのだが、それぞれの反応は非常に対称的だった。

俺達が属している宇宙機動艦隊司令部は、そのようなことは迎撃作戦に織り込み済みだと豪語したそうだ。
艦長が、その場合の対処はどうすればよいのかと尋ねたら、個々の能力が高い我々ならば、飛んでくるミサイルや砲弾をビーム砲で薙ぎ払いつつ、MA如きは撃墜できて当然だ、と答えたらしい。
……本当に考えていたのか、対策を練っているのか、非常に怪しい答えだ。

一方のプラント防衛隊は、その懸念が非常に現実的だと判断したらしい。

この時に初めて知ったのだが、ヤキン・ドゥーエ内部で要塞化工事をしている、ザウードのベースとなった作業用ＭＳに急遽、余り物であったバルルス改特火重粒子砲……エネルギー切れの不安を解消するために外付けカートリッジの代わりに充電ケーブルつなげた……を据え付けて、ミサイル迎撃機としてヤキン・ドゥーエの各所に取り付けたり、普段からプラントの各コロニーを行き来する連絡船や小型ランチにパルディス三連ミサイルポッドを取り付けて、迎撃ミサイルベースにしたりと、必死の努力を今も続けているそうだ。

願わくば……後で、無駄なことさせやがって、って怒られる方がいいなぁ。

「ラインブルグさん、第一防衛ラインが後退を始めました。これに伴ない、第二防衛ラインに所属している全艦に対して、ＭＳ隊の出撃命令が出ました」
「了解。……先発は？」
「先発はアシム小隊となります」

その言葉通り、見ると既にアシムの小隊が動き出し、次々とリニアカタパルトへと向かっていく。俺も機体周囲の整備員に離れるように指示を出して、その後に続く。

「聞いたな、レナ、デファン。アシム小隊に続いて出るぞ」
「わかりました」
「了解っす」

二人の頼もしい返事を心強く思いながら続ける。

「今回もいつも通り、連携を崩さないことを意識しろよ？」
「先輩こそ、意識してくださいね」
「一対一はできるだけ避けるっすよ」

先発組が順次射出されていき、次は俺達の番だ。

カタパルト担当整備員が出す異常なしのサインにジンの腕を振って応え、射出位置につく。

「……進路、クリアです。ラインブルグ小隊、発進どうぞ！　……皆、ちゃんと帰ってきてね」
「了解。……ラインブルグ、ジン、１１３４、出るぞ！」

エルステッドから射出されてから周囲の宙域を見ると、同じく本隊から射出されたＭＳの姿が確認できた。中には新型のシグーの姿が散見され、機体の更新が行われていることが伺える。

……新型かぁ、いいなぁ。

なんて思ったのが悪かったのか、ジンの背部スラスターが急に咳き込んだ。

「先輩、今、スラスター……変じゃなかったすか？」
「……いや、機体情報に異常はないな」
「私が目視しますね」

俺がスラスター噴射を一時止めて、レナとデファンに追い着かせる。

「……どうだ？」
「特に、異常は目視できません」
「ありがとう、レナ。なら、大丈夫だろうさ。……しかし、宇宙にもグレムリンが出るのかなぁ」
「……なんすか、それ？」
「何、今のは戯言だから気にするな」

とは言うものの、本当に存在するなら、一度、いたずらをしている姿を拝見してみたいものだ。

……やはり、宇宙服を着ているのだろうか？

……。

瞬間、緊張していた神経を落ち着かせるために、わざと馬鹿なことを考えてみた。

決して、素で考えたわけではない。

「よし、まずは第一防衛ラインの連中の後退を掩護する。調子の乗って突っかかってくるＭＡを追い散らかすぞ」
「「了解！」」

右舷推進ユニットに敵の艦砲を喰らったと思われるＦＭの前に陣取って、味方の艦艇や損傷機が速やかに後退できるように、防衛ラインを突破しようと突入してきているメビウスの推進方向に牽制射撃を始める。

メビウスも慌てて旋回して、回避行動をとった結果、後退中のＦＭの弾幕に突っ込んで散っていった。

「よし……しばらくはこの艦近くに陣取って、後退の掩護と周辺ラインを破られないように行動する。攻撃は別の連中が挙って頑張ってくれるだろうから、心配しなくていい」
「しばらくということは……本隊のＭＳ隊が防衛ラインを押しあげるまでですね」
「ああ、血気盛んな奴らには、まぁ、頑張ってもらおう」
「先輩って……あくどいッすよね」
「褒め言葉と思っておくよ」

その時、掩護しているＦＦＭから通信が入った。

「こちらＦＦＭ－１３４ハミルトンだ。そこのＭＳ小隊、後退支援と掩護を感謝する」
「やって当然のことを気にしなくていいさ。それで……前線の圧力は酷いのか？」
「……ああ、うちのＭＳ隊は……全滅したよ」
「……そうか」
「あいつらのっ！　……仇をとって欲しい」
「……ああ、できるだけ頑張るよ」
「……」
「とにかく、今は後方に戻ることに集中しなよ。その様子じゃ、満足に動けないだろ？」
「……わかった」

苦渋の混じった返事と共に通信が切れた。

仇……か。

「仇を取れと言われても、俺達も殺している以上は仇だろうからなぁ」

「……先輩」
「ああ、すまん。……つまらん感傷さ」

レナの心配する声を聞き、意識を現実に引き戻す。

そして、敵が展開している前方を見ると……何となく先程まで持っていた雰囲気と少し変わっているように感じられた。

「レナ、デファン」
「何ですか？」
「なんっすか？」
「……敵の雰囲気が変わったように感じる。何か起きるかもしれないから、周辺に注意しろ」
「へっ、なんすか、それ？」
「……デファン、今は先輩に従いなさい」

デファンの不審の声をレナが抑えてくれているが、雰囲気が変わった原因を探すのに忙しくて気にして入られない。

……。

……。

……？

「……あれか？　デファン、敵艦隊の俯角方向に何かないか見てくれ。レナは引き続き、周囲の警戒を頼む」
「わかりました」
「了解っす。……俯角方向っすね」

何気に俺達の小隊でデファンが一番目がいいのだ。

「……んんっ？」

「１５０ｍ級らしき艦艇が集まってないか？」

「うっす、集まってるみたいッすね。……船の色が宇宙にうまく溶け込んでいるから、数がはっきりと数えられないっすけど」

「いや、数の把握は難しいだろうから、そこまではいい」

確か、１５０ｍ級は脆いが、機動性が良かったはずだな。

……。

一気に加速して、防衛ラインへの強行突入して、突破でもするつもりなのか？

「……もしかして、出撃前に先輩が言ってたみたいに、突っ込んでくるつもりでしょうか？」

「わからない。一種の欺瞞行動かもしれないが……エルステッドに連絡だけは入れておこう」

こちらからエルステッドに通信を送ろうとしたら、向こうから通信が入った。

「こちら、エルステッド。……ラインブルグさん、聞こえますか？」

「ああ、聞こえてるよ、ベルナール」

「先程、艦の光学観測で敵艦隊に不穏な動きを観測しました」

「俯角方向に１５０ｍ級が集結中、だろ？」

「はい、引き続き、エルステッドでは警戒を続けていますが……艦長が、そちらも注意するようにと……」

……こいつは……来るかも。

「……い、嫌な想像が当たったかもしれない」

「……？　とにかく、っ！　ら、ラインブルグさんっ！　て、敵艦隊より多数の熱源を探知！　艦載ミサイルが発射されたと思われます！　同じく、敵ＭＡの動きにも大きな変化が見られます！　敵ＭＡの動きに警戒してください！」

「先輩っ！　例の艦艇群が動き始めたっす！　スラスター光の数から大体で３０っす！」

「先輩！　前線のＭＳ隊を置き去りにして、メビウスが一斉に……小隊規模で艦隊への突入を開始しました！」

次々に入ってくる情報に焦る頭を必死に冷やす。

だが、浮かぶ思考は一つだけだ。

「……おいおい、連中、刺し違えるつもりかよ」

自艦隊の防御を放ってまで突入してくるとは……連合軍の連中の覚悟を見誤っていた。

◇　◇　◇

……まいった。

これが予期せぬ敵の攻撃を喰らった俺の感想であるが、現実は容赦してくれない。

「デファン、右だっ！　落せ！」
「決めるッす！」
「先輩、直上から、二機来ますっ！」
「おぅぅぅっとっ！」
「先輩っ！　すぐに掩護します！」
「一機撃破っ！　っと、先輩、敵ＭＡ小隊！　下から突き上げてくるっすよ！」
「デファン、突っかかれ！　レナ！」
「は、はいっ！」
「これくらいなら対応できる！　それよりもデファンの後をカバーしてやれ！」
「了解！」

第二防衛ラインを形成している味方艦隊近くまで損傷していたＦＭを後退支援した後、再び、前面の戦闘宙域へと赴いたのだが……引っ切り無しに襲い掛かってくるメビウスの大群の対処に忙殺され、状況の把握が難しい。

わかることは、自分の小隊の状況と周辺の敵の数、後、前線を押し上げていたＭＳが戻ってきてしまったということだけだ。

お前ら、何で戻ってくるのっ！？

戻ってくる暇があったら、敵の艦隊戦力を落して来い！

この引っ切り無しに飛んでくるミサイルの大元を叩いてこいよっ！

って、思わず言いたくなった。

なにしろ味方艦隊がビーム砲を休まず撃って、飛んでくるミサイルを迎撃しているのだが……切れ目がないのだ。

しかも、何気に懸念していた先程の１５０ｍ級の艦艇群が一団となって、こちらの防衛線への突入を開始して、後退し切れなかった第一防衛ラインのＦＦＭ数隻と壮絶な撃ち合いを展開した後、これらを撃沈し、更に迫ってきている。

艦艇同士の殴り合いで数をかなり減らしたとはいえ、その戦力はコロニーにとって、一級の脅威だ。

こんな敵の攻勢への対処できりきり舞いになっている状況で、もしも、敵艦隊の本隊がこぞって突入を開始したら……なんて想像して、胆を冷やして背中から冷や汗をだらだらと流しても、いいと思うんだ。

まったく、攻撃は最大の防御とはよく言ったものだ、と感じざるをえない現況である。

「おっと！　……まったく、どれだけいるんだよ、メビウスはっ！　この数はっ、冗談にしても笑えないぞ！」
「で、でも、メビウス・ゼロが、いないだけっ、マシっすね！」
「それは、た、確かになぁぁっとっ、そこかっ！　落ちろッ！！」
「せ、先輩、敵艦の突入はわわっ、と、どうするんですかっ！」
「……それって、俺達の仕事かなぁ」

俺のボヤキに応じてくれたのは、レナやデファンではなく、俺達に通信してきたゴートン艦長だった。

「……いやぁ、ラインブルグ君、それ、君達の仕事になりそうだわ」
「ちょっ、この状況でですか？　っ！　デファンっ！　仰角三時から三機、来るぞっ！」
「了解、任せるっす！」
「レナ、デファンの掩護をっ！」
「了解！」

二人が前面のメビウスに対処している間、俺は二人の側面や背後を取られないように周辺に目を配りつつ、時に牽制射撃や欺瞞襲撃をしながら、艦長の言葉の意味を考える。

……。

艦隊の迎撃能力が限界なのか？

「艦隊の迎撃態勢……厳しいんですか？」
「うん、第三防衛ラインの後衛部隊も迎撃に参加しているけど、厳しい状況だよ。うちもミサイルの迎撃だけで対応限界ギリギリでさ

ぁ。今頃、ＣＩＣで副長とガンドルフィ班長が班員に檄を飛ばしてるだろうね」

強面な二人に檄を飛ばされる火器情報管制班員に同情してしまうよ。

とはいえ、俺達にも同情して欲しいというか……同情するなら、援軍くれっ、って、誰にでもいいから言いたい。

「まぁ、実際の所ねぇ、艦隊も今の状況じゃ、敵艦艇の相手するより、ＭＡを相手した方が対処できるんだわ」

「……ああ、なるほど、ビームもミサイルも全てミサイルや艦砲弾の迎撃に使ってますからね」

「そういうことだよ。近接火器はそれなりに余裕があるから、近くの同僚艦とボックスでも組んで対処するさ」

なるほど、納得した。

納得したが、現実的に、今の武装、重突撃機銃や重斬刀だけでは難しい所だな。

「しかし、艦長、俺達の小隊は打撃面で不安があります」

「うん、だから、後衛部隊からも爆装したＭＳ小隊を出してもらうことにしたよ」

なら、その小隊と協同できれば、何とかできるかもしれないな。

「……了解、何とかしてみますよ」

「よろしく頼む。……皆の帰りをエルステッドで待ってるよ」

その言葉を最後に、ゴートン艦長との通信は切れた。

それと同じく、レナとデファンも順当にメビウスを落して、周辺を警戒しつつ戻ってきた。

「二人とも一応は耳に入っていただろうが、敵突入艦隊への対処を、俺達がすることになった」

「……人使いが荒いっすね」

「そう言うな。俺達の他にも貧乏くじを引かされた奴等がいるんだからな」

「ですが、私達、通常装備ですよ？　どうやって、対艦攻撃……敵艦に対処するんですか？」

むむ、通常装備、つまりは、重突撃機銃と重斬刀でどう、対処するか、か……。

「とりあえず……定石通りに重突撃機銃でランチャーや推進剤タンクを狙って、誘爆を狙う？」

「それって、重突撃機銃でなんとかなるっすか？」

「試してみなきゃわからないし、それ以外にどうしようもないだろう？」

「それはそうですけど……一度、帰艦してD装に換えた方がいいんじゃ？」

「確かにレナの言う通り、帰艦できれば換装もできるけどさ、向こうに着艦作業ができるような余裕がないんだわ」

二人から途方に暮れたような沈黙が帰ってきたので、あえて楽観論を述べてみる。

「いや、そもそも、爆装した小隊が来る予定だから、そこまで気に

する必要はないさ」
「けど、最悪を考えて行動しないと……」
「そうっす、万一を、援軍が来ない場合も考えないと駄目っす」
後輩から駄目だしを喰らった。
……。
いや、確かに、困難だとしても、成し遂げないことにはいかん任務だからなぁ。
むぅ、だが、現在の装備で、俺が思い浮かぶ攻撃策は精々……。
「なら、少々危険だが、重斬刀で艦橋なり推進ユニットを叩き潰すしかないな」
「……うへぇ」
「そ、それは……あまり、気が進まないですね」
「はいはい、なら、他の方法を考えておいてくれ。今は時間に余裕もないし、贅沢言ってられる状況でもないからな」
もう、後は臨機応変でいくしかないな。
「この宙域は他の連中に任せて、俺達は指定された座標へ急ぐぞ」
「「了解」」
◇　◇　◇
戦域の端を移動して、目標地点に着くまでの間に、多くの破壊さ

れた敵味方の機体残骸が宙域を漂っていることに気付かされる。
　それらが味方艦隊が撃つビーム光とミサイルが破壊されて発生する爆光に照らし出される度に、何やら怨み言を言い出しそうで不気味だ。

「……」
「よし、そろそろ、敵突入艦隊の進路近く……指定座標に着くな。デファン、共同する小隊を探してくれ」
「うっす」
「後、レナ。……今は必要以上に気にしすぎるな」
「へっ？　な、何のことですか？」
「……破壊された機体……残骸が気にかかったんじゃないのか？」
「……はい」
「厳しいことを言うが、今は気にするな。そんな気持ちを抱えて戦闘に入ったら、死者に足を引っ張られるぞ？」
「……はい」
「死者を悼むのは後でいい。今は生き残ることを第一にしろ。……わかったな？」
「……はい」

　もっとも、俺も人のことを言えたことじゃないけどな……。

「先輩、共同部隊らしき小隊を見つけたっす」

　そんな俺の感慨をデファンの報告が強制的に断ち切った。そして、急いで、共同部隊の指揮官と通信をつなげる。急場で即席の連携になるだろうが、打ち合わせは絶対に必要だ。

「こちら、本隊所属エルステッドのラインブルグ小隊だ」
「……こちらは後衛所属クルーゼ隊のラウ・ル・クルーゼだ」

ラウだった。

「あらまぁ、戦場では久しぶりになるな、ラウ」
「君はいつもの様に余裕そうだな、アイン」
「いやいや、今日はそんな余裕はないって」
「その口でよく言うものだ」

どんな口？

「……それで、ここに来たと言う事は例の突入艦隊の対処だな？」
「ああ、アレをなんとかしないと、戦域全体に余裕が出来ないからな」
「ふむ……だが、君達は爆装していないようだが？」
「こっちは前線からの緊急派遣だよ。……つか、何気にラウ達だけでも、十分にやれたんじゃないのか？」
「……確かに可能かも知れぬが、無用な危険は避けたい」
「了解。そういうことなら、ご一緒しましょうか」

うーん。

軽装の俺達が敵前で襲撃を仕掛けることで囮になり、敵が囮である俺達に気を取られた隙を突いて、本命のラウ達の小隊が仕掛ける、ってところかな。

「アイン……、君達には少々、危険な橋を渡ってもらうぞ？」
「今の場合なら、それが一番だな」
「……君は話が早くて助かる」
「お互い……、苦労しているからなぁ」

互いに口元だけで笑みを浮かべ、それぞれの小隊員に行動を説明する。

「うちの小隊は派手な襲撃機動を行って囮役を担う。敵の注意を、護衛のＭＡ隊や近接火砲を引き受ければ、上等だ」

「ミゲル、オロール、我々は本命だ。敵艦の弱点を狙い初撃で、全艦を落すつもりでいく」

「「「「了解！」」」」

いやはや、世界樹の英雄殿との協同作戦になるとわかったら、急に元気になった気がするよ。

……我ながら、現金なものだ。

18　ヤキン・ドゥーエ防衛線　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更及び内容を圧縮。

19　ヤキン・ドゥーエ防衛線　3

幸いなことと言うか、突入艦隊の周囲にＭＡの姿は存在しなかった。

おそらく、ここに至るまでの戦闘で消耗しきったのだろう、等と考えながら、後輩二人に指示を出す。

「ＭＡは確認できないから、１５０ｍ級にだけ集中する。真ん中の四隻は俺、前の三隻はレナ、後の三隻はデファンが担当する。意見は？」

「ありません」

「ないっす」

二人の返事に一つ頷いて、仕掛ける時の注意点も伝える。

「よし。これから仕掛けるが、レナ、デファン、襲撃機動中は絶対に止るなよ？」

「はいっ！　こまめな回避機動も忘れない、でしたね」

「うっす、それに、時に鋭角に針路を変更することも加えれば、尚のこといい、だったっすね」

「よし、よく憶えていた。後、誘導が効き難くてもミサイルを撃ってくる場合もあるから、これにも注意が必要だからな？　……二人とも気張れよ」

「「了解！」」

ラウ達の小隊との協同作戦は簡略に、俺達の囮小隊が突入艦隊の左舷仰角方向から右舷俯角方向へ、一撃離脱的な動きで目立つように襲撃をかける。この時、少しでも指揮系統を動揺させて対応能力を落すために、敵艦の艦橋付近を重突撃機銃で集中的に狙う。

一方のラウ達の本命小隊は、俺達が襲撃を突入してから一瞬置いて、左舷俯角方向から右舷仰角方向へと突き上げる形で、対艦攻撃を仕掛ける。こちらは１５０ｍ級の弱点である、推進部付近とミサイルランチャーを狙って、パルデュスや無反動砲を発射し、一撃での撃沈を目指す。

急場で作戦をし立てたが、ラウがいるんだから、きっと上手くいくはずだ。

今日、破壊されたと思しきＭＳやＭＡのデブリに紛れて、１５０ｍ級で構成された小艦隊が接近してくるのを待ち……一呼吸して……ＭＳの重突撃機銃を持っていない方の手でカウントダウンを示す。

４……３……２……１。

ゼロになった瞬間、小隊全機で一斉に飛び出し、重突撃機銃を乱射しながら、一気に敵艦に向けて加速して、自分達の存在を誇示する。

……くっ、さすがに、ここまで突入してきただけあって、反応が早いっ！

突入艦隊の残存である十隻程の１５０ｍ級が、組織的にかつ断続的に、近接砲火を撃ち放して弾幕を形成してくる。

しかも、以前とは異なり、１５０ｍ級に搭載されている火砲の量が多い上、こちらの進路を塞ぐように計算されたかのような火線網に、恐怖心も自然、懐いてしまう。

だが、ここで立ち止まれば、本当に、ただの的だ。

ひたすらに回避行動を伴ないながら加速し、担当する四隻の艦橋付近を目掛けて重突撃銃をぶっ放す。

更に、さっきＭＳの残骸に隠れた時に拾っておいた重突撃機銃のマガジンを一つ取り出し、手近の１５０ｍ級の艦橋に投げつけた。

そして、艦隊の中央部を突っ切り、遠ざかる。

「……きゃぁぁうぁっ！！」

後追いの弾幕の中、突き抜けた、と思った瞬間、レナの悲鳴が通信系に響き、一気に頭から血の気が引いた。

「デファン！　ラウ達の戦果確認と支援は任せるぞっ！」
「了解！」

咄嗟にデファンにラウ達の戦果確認と支援を任せて、近接火砲が被弾したのだろう、破壊された背部メイン・スラスター付近がスパークしているレナ機の元へと急ぐ。
その間にも、レナ機や俺の機への、１５０ｍ級からの更なる追い撃ちが来るかと冷や汗を流したが、そこはデファンの反転やラウ達の強襲が間に合ったらしく、敵艦隊はそちらへの対応を優先したようだった。

「レナッ！　スラスターがまずい！　早く脱出しろ！」
「……ぅ」
「レナッ！　しっかりしろっ！！」

通信からはレナの辛そうな呻き声だけが聞こえてくる。

背部メイン・スラスター付近に被弾している以上、いつ推進剤に引火してもおかしくない。

ならばと、目に付いた大型デブリ、主戦場から破壊されて流されてきたらしいメビウスの影に、１５０ｍ級から見えないように、慎重に減速させたレナ機を引っ張りこんで……躊躇する。

何故、俺はここまでするのだろう？

……本当に、何故だろうか？

自分が生き残りたいなら、見殺しにしたらいい。

……その方がきっと楽だろう。

自分が死ぬ危険性があって、他人を救うために危地に飛び込むのか？

……本当に、重い天秤だ。

……。

だが、救える可能性があるなら、見殺しになんて、できるものかっ！

「デファン、レナが負傷していて、脱出できないようだ！　救助のために外に出るから、余裕があればでいい、周辺の警戒も頼むぞ！」

「っく！　了解！　先輩！　人間、やってやれないことはないっす

よっ！！」

デファンの自身への、あるいは俺への鼓舞を耳にしつつ、コックピットハッチを開放する。

……ああ、まったく、ビーム粒子やデブリが飛び交う中、宇宙遊泳する羽目になるとは思いもしなかったよ。

なんてことを考えながら、あえて恐怖を飼い慣らすために口元に笑みを形作り、ワイヤーガンをレナ機のコックピットハッチ付近に撃ち込む。

そして、自身の身体を飛び出させると同時に、ワイヤーを巻き上げた。

……。

……ふ、ふぅうぅうぅ、じゅ、寿命が縮むわぁ。

って、い、急いでハッチを開放させないと……。

……よし、開いた。

……。

はぁ、もう一回、今の恐怖を味あわないといけないって考えると……鬱になるなぁ。

と、どこか冷静に物事を見据える自分がいて、さっきとは別種の笑み、苦笑を浮かべてしまう。

こういう非常時に、保安局時代に叩き込まれた心得や動作が生きてくるあたり、人生の面白さがあるみたいだな、なんて、シートにもたれてぐったりとしているレナのシートベルトを非常用ナイフで切り裂きながら思う。

「レナ！」

「……ぅ」

返事がないことに危機感を覚えつつ、レナの様子を探るべく、ヘルメット越しに覗き込む。

……口元から血が出ている。

骨折か何かで、内臓か肺を傷つけたかと推測し、気付く。

もしかしたら、血が滞留して、気管を塞いでいるのではと……。

吐き出す力があればいいが、意識を失いかけている今のレナには不可能なようだ。

瞬間、胸部を圧迫させて血を吐かせることが思い浮かんだが、胸部を強く圧迫されているとわかる以上は、できるだけ身体に負担をかけたくない。

つまり、窒息を回避するためには、早急に滞留している血の固まりを吸い出す必要がある。

……だが、今すぐ爆発してもおかしくないレナ機の状況ではのんびりとしてはいられない。

レナの治療をするためにも、また、危地から脱するためにも、早急に自機へと戻らなければならない。

よって、俺は、大きく深呼吸してから、再びワイヤーガンを自機の開放したままのコックピットハッチ付近に撃ち込む。

そして、レナを後生大事に抱きかかえて、虚空へと飛び出した。

……っ！！！

……えっぐっ、と、突然、横から脇腹に何かゴスッて、いたぁぁあって、体が……回転して、め、目が……回って……脇がえぐれてって、ＭＳが迫ってっ、ぬぅぅう、せ、せめて、レナだけはっ！

……ごふっっふぇへぇぇぇっっ！！！！

いたたたっ、いたすぎっ、背中というか、全身を、ジン頭部のト

サカに叩きつけられた！

トサカの癖に、何という優しくない固さだっ！

まったく、トサカにくるぞっ！

……。

なんだか、色々な意味で、かなり、いたすぎるが、さっきのデブリらしきものがって……。

……。

……おお、脇腹、あるよ！

パイロットスーツ、破れてないよっ！

さ、流石は、プラント脅威の技術力っ！！

それに、よくよく考えたら、今のが、ビーム粒子じゃなかっただけ、マシ……なのか？

等と様々に考えながら、九死に一生を得た心持で、何とかワイヤーを巻いてコックピットに潜り込み、ハッチを閉鎖する。

これでようやく、一安心だが、背中と脇腹が非常に痛い上にまだ目が回ってる。

……って、それよりも今はレナだった！！

コックピットに気密が確保されたのを確認して、自身のヘルメットとレナのヘルメットを急いで取る。

ヘルメット内に溜まっていた血の塊が俺の頬にぶつかるが、気にしてはいられない。

「……ぅ」

レナの呻きから察するに、さっきの衝撃で少し血を吐き出したようだが……。

「……すまん、レナ」

一言謝罪して、レナの気道を確保した後、己の唇とレナの唇を合わせた。

そして、気管に溜まっていた血を大きく吸い出しては、エアクリーナー付近に吐き出す。

「……」

「……ぅ、……すぅ」

味覚に鉄の味を感じながら、二度、三度と、吸い出すとレナの口に自然な呼気が戻った。

だが、依然として顔色が悪い。

「……ぅ、う、ぐっ、うぅぅ、……あ、……せ、んぱ、い？」

「ああ、レナ、もう大丈夫だ」

「う、あ……？」

「落ち着け、もう大丈夫だから、安心しろ」

意識が混濁している状態のレナに安心するように言い置いてから、そっと背面から抱きかかえて、ラウやデファンとの通信を開いて状況を聞く。

「ラウ、デファン、状況は？」

「アインか、宙域の敵艦は全て排除した。……状況は聞いている。彼女は無事かね？」

「……流石に容態は詳しくはわからんが、血を吐いている」

「ふむ……ならば、早急に母艦に戻るべきだな」

「ああ、そうするよ、ラウ。……それと、すまなかったな、あまり掩護ができなかった」

「いや、君の小隊の残り一人……デファンと言ったか、彼が上手く機を作ってくれた。……私の隊に欲しいくらいの腕だよ、アレは」

こんな状況だが、育ててきた後輩が褒められて、うれしく感じる。

「アイン、今は時間が惜しかろう。早く行け」

「ああ、感謝する、ラウ。……落されるなよ」

「当然だ」

ラウが不敵な笑みを浮かべるが……俺と違って、すんごい似合うわぁ。

「先輩！　今なら、宙域の状況が落ち着いてるっすよ。今のうちにっ！」

「ということらしいから、行くわ」

「ああ、また、プラントで会おう」

「ああ、プラントで」

プラントでの再会を約束して、ラウとの通信を切った。モニターに映ったラウのジンが軽く”無事を祈る”とのハンドサインを出したので、こちらも”幸運を”とのハンドサインを返す。

すると、ラウ機が自身の小隊を連れて、戦域へと去っていくのがわかった。

さて、こちらもエルステッドに戻ろう。

「デファン、エスコートを頼むぞ」

「了解っす！　後、エルステッドにも連絡を入れておいたっすよ！」

「おお、流石だな、デファン」

ゆっくりと、出来るだけ負傷しているレナの負担にならないように機体を進ませ始める。

……背後で、俺達が離れるのを待っていたかのように、レナのジ

ンが、破損したスラスターのスパークが遂に推進剤に引火したのだろう、爆発して散っていった。

19　ヤキン・ドゥーエ防衛線　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／07／18　誤字修正。

20　ヤキン・ドゥーエ防衛線　4

艦隊へと絶え間なく攻撃を仕掛けてきていたメビウスは姿を消し、戦闘宙域には飛来するミサイル群を迎撃する、ザフト艦隊のビームやミサイル、ＭＳによる迎撃射撃だけが、尚も盛んに撃ち放たれている。

そんな中、ベルナールの誘導の下、俺は全身を強打したことで痛み始めた身体を酷使して、なんとか、エルステッドに着艦することができた。

そして、格納庫内へのエアー急速充填後、出来る限り、周囲に悟られないよう、苦悶の表情が表に出ないように、冷や汗を流しつつ、歯を食いしばりながら、受け入れ準備をしていた衛生班にレナを預けた。

で、俺の後で降りたデファンやシゲさん達整備班と共に、レナが担架台に載せられて去っていくのを見送って、やれやれ、これで一安心と思って、つい気を抜いてしまったら、背中と脇腹の痛みが一気に襲い掛かってきてしまい、悶絶して倒れてしまった。

……急にふわふわと中空に浮かび上がる、顔を血塗れにした俺。

どう考えてもレナより重傷に見えたそうで、整備班とデファンには無駄に大騒ぎをさせてしまった。

いや、申し訳ない。

今は、反省している。

とにかく、俺もまた整備班員達によって、医務室へと文字通り担ぎ込まれてしまった。

で、医務室に詰めている軍医による非情な触診とレントゲン診察の結果……内臓損傷なしの単純打撲で全治五日だった。

デブリの衝突を受けた後、二人分の質量を引き受けて鋼鉄に叩きつけられたというのに、無駄に頑丈な身体である。

……いや、この場合は日頃の訓練とデブリを受けても破れる事もしなかったプラント脅威の技術力の体現であるパイロットスーツを褒めるべきだろう。

一方のレナだが、強烈なシートベルトの圧迫によって肋骨を数本折った上に心肺や内臓へのダメージが大きかったらしく、少なくとも全治三週間程度との簡易診察によって診断が出たが、まだ詳細な検査が終わっていないため、確定とはいえないらしい。

もっとも、俺から言わせれば、簡単な診察による診断とはいえ、骨折数本と内臓器への大ダメージだというのに、三週間で完治するとは驚きに値することだと思う。

いやはや、本当に、コーディネイターの回復力の凄さには驚くばかりである。

さて、何時の世も変わらぬ打撲治療剤の湿布（無臭）を患部に…
…というか全身に貼られた後、レナの詳細な検査を行うということ
で、女の園もとい医務室から追い出された俺は、とにかく、まずは
戦況を知るために艦橋へと向かうことにした。

この際、背中や脇腹の痛みは我慢してみせるしかないだろう。

男とは何時の時代でも、少々のやせ我慢ぐらいは、見栄で、でき
ないといけないのだ！

……なんてね。

はぁ、でも、正直、痛いなぁ。

患部が痛まないように、ギクシャクとした動きをしながら、一路、
艦橋を目指すが……いつも通る道が封鎖されていたため、遠回りす
る羽目になった。

途上で擦れ違った見知りの主計班員に聞くと、どうやら、被弾し
た影響らしかった。

ついでに応急対応班に、怪我人が出たらしいことも聞いた。

……でも、医務室には、怪我人らしき姿はいなかったような？

そのことを不思議に思いながらも、迂回ルートを進み続け、艦橋へとたどり着いた。

邪魔になりそうだったら、すぐに引き揚げなければ、なんて考えつつ、艦橋へとつながる扉を開き、中を伺う。

案の定、艦橋は、まだ出撃中のアシム小隊と連絡を取っているらしいベルナールや索敵レーダー手と一緒にレーダーと睨めっこしているリュウ班長、操舵士に指示を出すゴートン艦長といった具合に、とっても忙しそうだった。

……これは間違いなく邪魔になりそうだった。

そんなわけで、ここは大人しく引き揚げようとしたら、扉の圧搾音でこちらに気が付いたらしいゴートン艦長に呼び止められてしまった。

忙しい時に、余計な手間を掛けさせしまうことを申し訳なく思いながら、艦長の隣に立つ。

「ラインブルグ君、医務室じゃなかったの？」

「レナ……ラヴィネンの治療があると言われて放り出されました。エヴァ先生によると、俺の診断結果は全治五日ですが、多少の無理をさせればＭＳへの搭乗は可能、とのことです。後、ラヴィネンですが、骨折と内臓のダメージが酷くて、軽く診察した結果は少なくとも全治三週間で、これ以上の出撃は無理だそうです」

「……戦死されるより遥かにマシさ。それにしても……負傷者を放り出すなんて、相変わらず、男には厳しいねぇ、エヴァ先生は……」

「そうですかね？」

俺的には、衛生班の女の子に近づきたいがために仮病になってやってくる整備班員が尻を蹴り飛ばされたり、下剤を投与されるのは許容範囲だと思うのだが？

……話がそれ始めてるな、修正修正。

「それで艦長……今の戦況は？」

「うん、何とか、こちらの粘り勝ち、といったところかな？」

今現在も、ミサイル迎撃のために艦隊からビーム砲が絶え間なく撃たれているのが艦橋から見えるのだが、帰艦した頃に比べれば、その本数は減っている。付け加えれば、あれだけいたＭＡの姿も、本当に、跡形もなく消えてしまっている。

「敵艦隊は撤退を開始しているよ。今のミサイル攻撃は在庫一掃ないし、こちらの追撃阻止を狙ったものみたいだ。で、今現在、判明しているだけで、出撃してきた敵ＭＡの３／４程度を撃墜し、特攻を図った小艦隊……ラインブルグ君達が対応した１５０ｍ級群も全て撃沈している。……どうやら、先の特攻艦隊が全艦撃沈されたことで、敵は撤退を決断したようだよ」

それが今回の攻撃での本命だった、ということかな？

……。

いや、それよりもだ……。

「プラントへの……コロニーへの被害は？」
「迎撃で発生したデブリが幾つか衝突したけど、直接的な被弾による被害は出てないよ」
「……艦隊の迎撃態勢は限界に近かったみたいですけど？」
「いや、防衛隊がかなり頑張ってくれたんだよ。特にヤキン・ドゥーエに据えられた作業用ＭＳ砲台群は大活躍さ」

……なら、あの最悪の想定は役に立ったということだな。

「もっとも、艦隊はかなりやられたけどね」
「……どれくらいですか？」
「概算で、第一防衛ラインを担った部隊の八割が損失、第二防衛ラインの本隊も二隻が沈んで、八隻が大破ないし中破しているし、小破判定はほぼ全艦。それに、第三防衛ラインでも二隻が、コロニーへの直撃コースに入ったミサイル群からコロニーを守るために、盾代わりになって被弾して、大破判定を受けているよ。当然、ＭＳの損失も……それ相応の数が落ちたよ」

……それ相応、か。

一つ、頭を振り、話を進める。

「着艦する時にも気が付いたんですが……エルステッドも被弾したんですね」
「うん。流石にミサイル迎撃とＭＡの相手を同時にするには骨が折れたからね。ちょっとした隙を突かれて、艦本体推進部付近にＭＡのレールガンを喰らって小破、左舷推進ユニットには、これもＭＡの対艦ミサイルが入って大破、後、飛来したミサイルの迎撃に失敗して、近距離で敵艦載ミサイルが爆発した影響で、ビーム砲一門とレールガン一門が中破。……まぁ、幸いにも、全てのケースで、エ

ネルギーカットや応急対応班が間に合って、爆発することはなかったよ。怪我人も、応急対応班から少し出ただけですんだしね」
「そう、ですか」
かなり、危ない橋を渡っていたようだ。
「まぁ、うちも艦隊も、受けた被害は大きかったけど、敵の侵攻を食い止めたという点では、防衛作戦は成功したと考えてもいいんじゃないかな」
「プラント防衛に成功した、ということですか」
「ああ、そう言ってもいいね」
少し、肩から力が抜けた気がした。
「そんなわけで、損傷したうちは追撃戦に加わらないからさ、ゆっくり身体を休めてよ」
「……わかりました。お言葉に甘えますよ、艦長」
「うん、それだけのことをしたんだよ、君達はさ」
艦長の褒め言葉に軽く笑みを返した後、俺は敬礼して、これ以上の指揮の邪魔にならないように医務室に戻ることにした。
その医務室へと戻る道中に少し考える。
今回のレナ機の被弾とそれ以降のことで、前々から感じていたことが確信に変わった。

パイロットを保護する機能……特に脱出装置がないジンは……異常な機体だ。

皆は、ＭＡへの優位性ばかりに気を取られているが、パイロットの生存性が、あまりにお粗末すぎる。

設計者は機体が危険になれば、コックピットハッチを開放して、デブリやビーム粒子が飛び交う中に飛び出せとでも言うつもりなのだろうか？

……まったく、実際にやった身から言わせてもらえば、冗談ではない、の一言だ。

一度、自分でやってみろってんだ！

ほんと……生存性から言えば、傑作機どころか欠陥機だよ。

……よし、このことはシゲさんに相談しよう。

整備員として情熱と誇りを持っているシゲさんなら、俺が言いたいことがわかってくれるはずだ。

そう結論付けた所で、医務室に到着した。

……思考をまとめるのと目的地に到着するのを同期させるなんて、

我ながら、なかなかにうまく出来ている身体だと思う。

まぁ、自画自賛は程々にしておいて、とりあえず、医務室のインターフォンを押して、中に入っていいかのお伺いだ。

「誰だ？」

「ラインブルグです。エヴァ先生、入っていいですか？」

「……入るがいい」

相も変らぬ愛想も素気もないドライな返事である。

まぁ、それがいいって奴が整備班にはちらほらといるのだがな……。

エヴァ先生の下僕になりたい奴らの顔を、二、三、思い浮かべながら中に入ると、燃えるような赤髪を背中まで伸ばした、背が低くければ母性も小さいという、白衣を着たエヴァ先生が椅子から立ち上がって、こちらを振り向いたところだった。

先生の怜悧なアイスブルーの瞳が俺を射抜く。

それはもう、マが付く人ならば、喜んで全てを奉げそうなほどのものである。

とはいえ、俺にはその気はないので、気にするほどのものではない。

後、当然ながら、そんな鋭い目を持つ以上は、カエル顔でもない。

「エヴァ先生、レナの様子はどうですか？」

「……ああ、ラヴィネンの具合だが、幸い、折れた骨は内臓を傷つけてはいなかった。それに、綺麗な折れ方だったから、下手に触らず、そのままにして、コルセットで固定するだけにした。後、吐血……いや、喀血だが、被弾の際の激しい衝撃と急激な加重によって、肺の肺胞が圧迫されて発生した出血からだった。今は出血を抑える薬とカルシウム増強剤を投与してあるし、経過もしっかりと観察しているから、安心しろ」
「そう、ですかぁ」

これで、本当に安心である。

「しかし、貴様は頑丈というか、悪運が強いな、ラインブルグ」
「はい？」
「……貴様が私に話した状況では、単純打撲ですまないはずなのだ」

そりゃ、アレだけ激しく叩きつけられたもんなぁ。

「そりゃ、あれですよ、プラント脅威の技術力の恩恵を与ったということでいいんじゃないですか？」
「ふん、そういうことにしておいてやろう」

いやいや、そんな、それ以外ないって……。

「で、レナの様子……見てもいいですか？」
「ああ、好きにしろ。ただし、私の管理する部屋で、患者に悪戯でもしてみろ……切り落とすからな？」
「……な、ナニヲデセウ？」
「ナニに決まっておろう」

……この人、怖すぎ。

背後の気配に、戦々恐々としながらも、衛生班員に挨拶しながら、レナの様子を伺うため、ベッドが並ぶ方向へと向かう。

ベッドの一つに横たわるレナは、どこか虚ろな……生気が薄くなった目でぼんやりと中空を見つめていた。

……。

普通で、いいか。

「よ、気がついたみたいだな」

「……あ……せ、んぱ、い？」

「ああ、そうだ、レナ」

たぶん、今のレナは、自分がどういう状況に陥り、どんな状態になったのかを把握し始めているのだろう。

そして、現状を把握するに伴なって……死の恐怖も、ぶり返してきているはずだ。

「大丈夫だぞ、レナ。お前はちゃんと生きている。何、ちょっとだけ、怪我をしただけさ」

「……え、ぅ……」

レナの瞳に生気が戻るにつれて、その身体が震え始めた。

俺は、傍らに立ち、そっと、レナの手を握ってやる。

「……わ、わた……し……も、もう、すこ……し、で……」

恐らくは様々な感情、圧倒的な死への恐怖、今、生きている喜び、落とされた悔しさ、みたいなものが、飽和したのだろう、レナの滲み出した瞳から涙が次々と零れ始め、宙を漂い始める。

「……先生、何か拭くもんないですか？」

「……き、貴様という奴は……まったく……ほれ」

「ありがとうございます」

いや、だってさ、自分のハンカチ、顔に付いた血をふき取ったりした時に使ったから、もう……ねぇ。

なんて、内心で言い訳をしつつ、エヴァ先生から受け取ったガーゼ……この人もさ、人のこと、言えなくない？

でも、ナニを切り落とされるかもしれない危険を回避するために、口には出さない。

「ほれ……レナ、今は存分に泣け」

「うぅぁ、う……ぅぁぅぅうぅ……」

「……ベッドに固定されて、思うように手が動かんようだから、拭いてやるよ」

ついでに、昔、ミーアにしてやったように、頭を撫でてやる。

「……うう、ぅぁぅうぅぅ……」

……掌に伝わる髪の感触と、ガーゼに滲みる暖かい涙、それに生きていることを証明する、止まる事のない嗚咽に……助けられてよかったと、つくづく実感できた一時だった。

４月１９日。
ザフトは月へと撤退する連合軍の艦隊への追撃を断念する。
これにより、連合軍の侵攻から始まったプラント巡る一連の防衛戦は終わりを告げた。

２０　ヤキン・ドゥーエ防衛線　４（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。
１１／０２／１４　誤記修正。

21　午後には優雅にお茶会を　1

突然だが、俺は今、二週間の長期休暇を満喫している。

いや、正確にはエルステッドの乗組員全員だから、俺達になるかな？

とにかく、二月から戦い尽くめで、碌な休暇がなかったエルステッド乗組員へのザフトからの粋な報奨である。

……というのは表向けであり、実際は、単に先の激戦で損傷してしまったエルステッドの修理とニュートロンジャマー発生装置を取り付けるのが長引きそうだったために、暇を出されただけである。

なにせ、連合の猛攻によって損傷艦が多数発生したため、先月完成したばかりのアプリリウス軍事衛星港の修理用ドックは満杯であり、中破判定を受けたエルステッドは後回しにされているのだ。

まぁ、現在の情勢を踏まえれば、稼働戦力を増やすために損傷が軽微な艦を先に修理するのが正しいことは間違いないだろう。

それに、俺も、この休暇で、心と身体のリフレッシュが出来るからなっ！

そんなわけで、最早日課になっている体力維持、増強のためのトレーニングをこなす他は、家でゴロゴロとしたり、ミーアと食べ歩

きに出かけたり、休暇期間を入院して過ごす羽目になっているレナをからか……もとい見舞いに行ったり、平積みしていた書籍の類を消化したり、先月に士官学校の教官になったユウキの愚痴を通信で聞いてやったり、最寄の保安局訓練施設で射撃や格闘の訓練をしたり、ラウと酒を飲んだりと、まぁ、楽しくさせてもらっている。

で、今日なのだが……。

「おい、ラインブルグ。……ここ、なのか？」
「ああ、教えてもらった住所はここなんだけど……どうかしたか？
あっ、ミーア、呼び鈴鳴らして」
「うん、わかった」
「ちょっ……まっ……」

何だか、ユウキが慌てているが、どうしたんだろう？

「……はい、どちら様ですか？」
「あっ、どうも、こんにちは、ミズ。……本日、お招きに与りましたラインブルグと他二名です」
「ああ、アイン君ね。今、門扉を開けるから、少し、待ってちょうだいね？」

とまぁ、以前、二月のユニウス・セブンの件でエルステッドが救助した救難艇に乗っていたご婦人、母の友人であるミズ……自宅に連絡をもらった時に、失礼を承知で名前を聞いたのだが、直接会うまで内緒なのも楽しいじゃないの、なんて何やら悪戯を目論む俺の母に似た顔で言われてしまい、教えてくれなかった……から、救助の礼と母の昔話がしたいと招待を受けたのだ。

まぁ、救助の礼だけならば、あの時に救助に関わったは俺だけじゃないので行かなかったのだが、母の昔話が加わっている以上は、まぁ、行ってもいいかなと考えた。

それならば、ついでにと、あの時、防衛隊で心身を磨り減らして事後対応をこなしたユウキにも、生の感謝の声を聞かせてやるのも良いかと思い、また、妹分ミーアにも、俺や家族には言えない悩みを聞いてくれそうな頼りになる大人の女性として引き合わせたいとも思って、図々しくも同行者二人を伴ないたいとお願いしたのだ。

あっ、もちろん、ユウキは事後承諾である。

もちろん、例の如く、かなり文句を言われたが、何だかんだと言いつつ、有休を取って来てくれた。

やはり、こいつは生真面目でいい奴だ。

で、本日、ミズの自宅があるというアプリリウス・ワンまでやってきたのだが……。

「アイン兄さん、大きい家ね」
「……ああ、ほんとになぁ」

いやぁ、とても大きい家、いや、凄い邸宅だねぇ。

目の前で門扉が開いていくのを見ると、ああ、自分が小市民なんだなぁとつくづく実感してしまうよ。

「……」
「……」
「……」

で、三人とも何となく無言になったまま、玄関まで向かっていき、こちらは古風なノッカーだったので、代表してトントンと叩いてみる。

ガチャリと重い音をたてて開いた扉から出てきたのは、ミズ……。

「君達かね？　レノアが招いたという客人は？」

……ではなく、プラント最高評議会の議員であり、俺達が属するザフトの親玉でもある、親愛なる国防委員長殿だった。

「ず、ズラ委員長！　……ざ、ザフトのためにっっっ！！」

「……」

「……」

「……」

……。

「……君、今、何と言ったかね？」

……はっ！

し、しまった！

つい、いつもの癖で！

こ、ここここの危機的状況を乗り切る手は……っ！

「し、失礼、噛みまみた」

「……」

「……」

「……」

「まぁ、いい。……三人とも入りたまえ」

あ、ありがとう！

ありがとうっ、助かったよ、徘徊怪異幼女！

……それにしても今の眼光は……なかなかの猛者だな、委員長は。

俺達三人は、ズラ……いや、これはしっかりと直さないといかんな、ザラ委員長の後ろについて行き、通されたのは日当たりのいい居間だった。そこで、以前にエルステッドでお会いしたご婦人、ミ

ズ・ザラが待っていた。

そして、開口一番。

「あら、どうしたの皆さん、顔色が変よ？」

すいません、それ、俺の所為です。

「ふふふ、アイン君が何かやらかしたのね」

……何故にばれるのか？

「……おい、レノア」

「ああ、あなた、ごめんなさいね。まずは自己紹介をしましょう。……私の名前はレノア・ザラ。そして、隣が夫のパトリックよ。三人とも、今日は来てくれて、ありがとう」

「いえ、本日はお招きに与り光栄です、ミズ・ザラ。改めて、自己紹介させていただきます。お……私はザフト宇宙機動艦隊所属のアイン・ラインブルグです。こちらがザフト訓練校での同期で、今は士官学校で教官をしているレイ・ユウキ、そして、私の妹分でミーア・キャンベルです」

「……お、お初にお目にかかります、ミズ・ザラ」

「ほ、本日は……お招きいただき、ありがとうございます」

何だか、固い動作でユウキとミーアが挨拶をする。

「ほら、あなた、そんな、無駄に威圧感を出してないで、お客様を席に案内して下さいな。私はお茶の準備をしますから」

「む。……ああ、わかったよ、レノア」

……むむむっ、今のやり取りで、だいたいの夫婦間の力関係が見えた気がするぞ？

「こっちだ。……三人ともかけなさい」

「では、失礼して……」

「……」

「……」

……？

「どうしたんだ、二人とも？　なんか緊張しすぎてないか？」

「……」

「……」

えっ、何ですか、二人ともその恨めしい目は？

「……君はラインブルグ君と言ったかね？」

「あ、はい、そうです」

「初めて来た家だ、緊張するのも無理なかろう」

「ああ、なるほど、そういうことですか」

俺が緊張しなさすぎだって見方もあるが、さっき、あれだけ思いっきり殺気を中てられたんだ、もう、いまさらいまさら。

そんな言い訳を考えつつ、一目で高価だとわかる応接ソファに、皆そろって腰を据える。

「んんっ、まずはレノアの夫として、妻を助けてくれたことに感謝する」

「……いえ、我々は当然の責務を全うしただけですから、本当なら

コロニーへの攻撃を許した段階で感謝されるわけにはいかないのです」
「……そうか」
「はい」
ザラ委員長の表情は形容しがたい色で染まってしまった。
……まぁ、私人としてとはいえ、軍事の責任者が部下に言う言葉じゃないもんなぁ。
「……」
「……」
「……」
「……」
会話の種が見つからないよぅ、なんて考えてたら、ザラ委員長が再び口を開いた。
「……ユウキ君のことは士官学校時代からよく知っているのだが……すまないが、ラインブルグ君、君のことは名前だけしか憶えていないのだよ」
「いえ、トップガンであり、主席だったユウキならともかく、緑の俺を知らないのは当然ですよ」
つか、できれば、名前も憶えていて欲しくなかったよ。
「ふむ、……君は、宇宙機動艦隊に所属していると聞いたが……ナチュラル共の軍と戦った感想はどうかね？」
「一言で言えば、強いですね」
「ほう、……精鋭であるザフトの一員でありながら、そう言うのか

ね？」
「ええ、言いますとも……あの物量は何よりの脅威です」
「……ふん、物量に頼る時点でナチュラルの劣等種たる所以が見えてこよう」
「い、いや……いやいや、委員長。戦いは基本的に数ですよ？　消耗戦になったら、プラントは絶対に勝てませんって」
「優良種たるコーディネイターならば、数の劣勢ぐらい、なんとでもできよう」

おうっ！

おうおうおうっ！

おっさん、あんまり無茶言うなやっ！

おっさんは後ろにいて、あんまりわからんだろうが、苦労するのはいつも現場だってのっ！

「では、委員長はこのままの状態で、プラントが地球連合に勝てると考えているのですか？」
「我々コーディネイターで構成された国であるプラントが、ナチュラル共の寄り合いに過ぎない連合に勝つなど、当然のことだろう。……君はそう思わないのかね？」
「……思えません。と言いますか、このままだと、間違いなく、プラントは負けますよ」
「お、おいっ！　ラインブルグ！　なんてことをっ！」

今まで黙っていたユウキが制止の声を上げるが、俺は断固として無視するぞ。

「ふ、ふふ、この私に面と向かって……面白いことを言うではないか……若造」
「……い、委員長こそ、ほんとに考えていやがるんでございますか？　実は何も考えてねぇんじゃないんですか？」
視界の片隅に、ミーアの不安そうな顔が見えた。
……。
ごめんな、ミーア。
でもね、ちょっと、ここは引き下がれないんだよ。
「委員長、無礼を承知で言いますが、ちょっと考えればわかることでしょう？　コーディネイターは確かに、単体としての生命体として見れば優秀です。ナチュラルと対比してみれば、間違いなく優れているでしょう。ですが、その出生数の少なさ故に、あまりに数が……あまりにも少ない。対するナチュラルは単体としてならば、一般的なコーディネイターよりも生命体として能力面で劣るでしょう。ですが、それを補うだけの数が、出生率の高さによる数量が存在します。単体能力差でコーディネイター優勢として、ナチュラルとの消耗比を１：１００で考えたとしても、地球の１／５００しか人口がいないプラントが先に磨り減って、滅ぶのは道理でしょう？」
「それぐらいのことは考えている。だからこそ、私はシーゲルが提示した案を、ニュートロンジャマーによる地球上の核エネルギー供給源の根絶を容認したのだ」
……まさか。
「そ、それは元より原油や石炭といった化石燃料資源が枯渇しつつ

ある地球で、原子力が社会を支えるエネルギーの大部分となっていたことを承知の上で、ニュートロンジャマーを落とした、ってことですか？」

「そうだ。社会を支えるエネルギー源を奪ってしまえば、自然、ナチュラル共の数も労せず大きく減ると、我々とナチュラルとの人口比の差が縮まるだろうと考えたからこそ、私は、核による報復案を押し通さなかったのだ」

「なん……だと？」

驚愕の事実が今、発覚したっ！

「ふん、若造、もう一度、言ってやろう。……ニュートロンジャマーは、旧種であるナチュラルを効率的に減らすために、最も簡単で有効だからこそ落したのだ」

「……お、おいおい、委員長さんよ……ナチュラルを効率的に減らすために、だと？　そんなことで……そんなことが目的で、地球にニュートロンジャマーを落したってのか！」

「その通りだ！　全てはナチュラルを効率的に減らすためっ！　奴らを滅ぼさんがためだっ！」

「……えっ？　……ナチュラルを……滅ぼす？」

「そうだっ！」

滅ぼすって、おっさん、マジで言ってんのか？

思わず立ち上がって、おっさんを睨みつけ、今まで以上の大声で問い詰める。

「おい、おっさん！　この戦争はプラントが独立するために始めたんじゃないのかよっ！！」

「……若造がなにを甘いことをっ！　この戦争の目的はプラント独

立以上に、旧種であるナチュラルを滅ぼし、新種であるコーディネイターが新たな世界を構築するために決まっているだろうっ！！」

おっさんも吼えると、立ち上がって、俺を睨みつけてきた。

「おっさんこそ、フザケたことをほざくんじゃねぇぞっ！！　あのニュートロンジャマーの散布で死ぬのは、プラントとはまったく無関係で、富や財とは無縁な、弱者だろうがっ！　しかも、全土に散布するなんて、何考えてんだ！？　この戦争に関与していなかった、中立国まで巻き込むなんて、どう考えても、自分で自分の首を絞めたとしか思えない、おかしいことだぞっ！」

「ふんっ！　それがどうしたというのだっ！　どの道、滅ぼすのだ、地球に住む劣等種たるナチュラルが幾ら死のうが、知ったことではないわっ！」

「んだとっ！　ナチュラル、ナチュラルって、全てを一括りにするんじゃねぇ！　それにだっ！　自分達がやったことぐらい、どんなことか、どういうことなのか、考えたら、わかるだろうっ！」

「考える必要もないっ！」

「考えるつもりがないなら、俺達が為したことから目を逸らすつもりなら、教えてやるよっ！」

ひたと、こちらを睨むおっさんを見据えて、後を続ける。

「簡単なことさっ！　あんたが黙認してやったことは、旧種旧種って侮蔑しているナチュラルが、ユニウス・セブンにやったことと、武器も持たないプラント市民を殺したってことと、社会を、世界を破壊したってことと、まったく同じことをやったんだよっ！！！　そんなことをしておいて、どこが旧種と違うっ！　どこに旧種との違いがあるっ！！　どこに人類の新種らしさがあるってんだっ！！！」

「っ！　新種が旧種を殺して、淘汰して、何が悪いっと言っているっ！」
「悪いに決まってるだろうっ！　新種だろうが旧種だろうが、同じ人間だろうがっ！」
……何となく、閃くものがあった。
「……はんっ、あんたこそ、どうせ、若い時にでも受けた差別に、コーディネイターだからって受けた差別に、コーディネイターは新種だ、って縁にすがって、ただナチュラルに反発したいだけなんだろうっ！？」
「っ！」
「いい大人なら、何時までも小さいことを引き摺って、穴の孔が小さいところを見せるんじゃねぇよっ！」
「っぐっ！！　ほざいたなっ、若造っっ！！！！　どれほどの労苦の末に！　我々コーディネイターがっ！　このコロニーをっ！　このプラントを建設したか、貴様にはわかるまいっ！　そして、我々が全身全霊をかけて造り上げた、このコロニー群でっ！　理事国にっ！　ナチュラル共にっ！　どれだけ好き勝手されてきたかをっ！　多くの同胞がただコーディネイターであると言うだけで傷つけられっ！　殺されたかをっ！　それに対抗しようにもっ！　絶え間ない監視の目と無慈悲な暴力から、護る為の手段を縛られてっ！　どれほどの屈辱を味わってきたのかをっ！！！」
……確かに、俺達、若い奴が知らない、苦難の歴史があったのかもしれないさ。
だがっ！
「だからといって、ナチュラルだからって理由だけで、滅ぼそうと

して良いのかってんだっ！！」
「良いに決まっているっ！　自分達で優れた存在としてのコーディネイターを生み出しておいて、後になれば、勝手に我々を羨望し、妬み、そして、憎むようなナチュラルなどっ、滅ぼしてしまえばよいのだっ！」
「そういうコーディネイターもっ！　能力が低いからってだけで、ナチュラルを見下してきたんじゃないのかっ！」
「それだけの権利が、我々にはあるということだっ！！」
「そんな決定をする権利が、あんたにあるのかよっ！！」

がるるるるるるるるるるっ！

「……これ以上の問答は不要だッ！！」
「おう、上等だっ！　おっさんっ！　表に出ろっっ！！」
「っ！　その言葉、後悔するなよっ！　若造っ！」
「はんっ！　おっさんこそっ、後悔すんなよっ！」

「お、おいっ　ラインブルグッ！」
「兄さんっ！」
「あの人ったら……」

……俺、茶会に来たはずなのに……何してるのかなぁ。

21　午後には優雅にお茶会を　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記及び表記修正。

22　午後には優雅にお茶会を　2

……まずは、ＮＯＨＡＮＡ式の”話し合い”の結果から述べようと思う。

”話し合い”開始、第八ラウンドにおいて、ザラ委員長が放った、渾身のストレートを喰らいながらも、俺が打ち返したクロスカウンターが見事に決まったのだが、両者共にそこで力尽きてしまい、パンチを放った、もとい、喰らった姿勢のまま崩れ落ちてのダブルダウンと相成った。

そして、いつのまにかレフリーをしていたユウキのテン・カウントにも両者立ち上がれず、ダブル・ノックアウト宣告を受けて、拳による”話し合い”はドローとなってしまた。

く、くそぅ、年齢差を考えれば、勝てるはずなのに……。

流石に、プラント独立闘争の闘士は、伊達ではないということかっ！

で、お偉いさんとの馬鹿なＯＨＡＮＡＳＩをしたことで、四月の一件以来、心の底に淀んでいた思いも少しは汲み出す事ができ、すっきりした気分で、再び、茶会の会場である居間に戻ってきた。

殴られた顔面がかなり熱かったり、ボディブローの影響で胃がムカムカしていたり、足が小鹿の如くプルプルと震えたりしているが、全て、想定……許容の範囲内だ。

ああ、顔に当てられた氷嚢が気持ちいいわぁ。

「まったく、アイン兄さん、無茶しすぎ」

「う、うぐぅ」

患部に氷嚢を当ててくれているミーアに怒った顔を向けられて、つい、目を逸らしてしまう。これを見ていたらしい、同じくザラ夫人に氷嚢を当てられていたザラ委員長が、さり気に、揶揄めいた笑みを浮かべやがった。

「ふん、様がないな、若造」

「あ・な・た」

「む、むぅ」

くくく、そういう委員長も様がないねぇ。

「……」

で、一人、呆けているのは、ユウキだ。

……いや、まぁ……その、呆けたくなる気持ち……わからないでもない。

なんせ、強引に休日を取らされた上に、お茶会に招かれたと思えば、実は偉いさんの家で、緊張していたところに連れがその偉いさん本人と殴り合いという”話し合い”をし始め、自分はそのレフリーをしていた、なんてことになったんだから、なぁ。

きっと、俺でも呆けるだろうさ。

それに、他人に話しても、絶対に信じてもらえないことは間違いないだろうしな。

……。

とはいえ、流石にこんな馬鹿なことをしでかした以上は、留まり続けるわけにはいかないだろうな。

でも、まぁ、以前、あの作戦で感じたモヤモヤは偉いさんを殴ったおかげで、少し解消させてもらえたから、良かったかな？

……って、それ以上に厄介なことを聞いたことを考えると、良くないか。

うーん、でも、どうしよう？

流石に、殲滅戦争に参加する気にはならない。

……。

そうだな、オーブにいる親父の所へ夜逃げする準備をするべきか？

いや、もう、いっそのこと、今日ここでザラ委員長を誘拐でもして、エヴァ先生に洗脳をお願いして、戦争終結に……いやいや、一人だけじゃ不味いな、せめて、主戦派の親玉全員を拉致して、社会的に抹殺……。

……あれ？

何か途中から物凄く、妄想に分類されるような考えに変わってしまったような？

なんて、反問していたら、ザラ夫人が一人考え込んでいる俺を見かねたのか、声をかけてくれた。

「アイン君、さっきのことなら、別に気にする必要はないわよ」

「へっ？」

「……お、おい、レノア」

「この人はね、昔から強面のくせに繊細なのよ。特に今日は、アイン君に痛い所を突かれてしまって、剥きになっちゃったのよ」

うりうりと委員長のコブを容赦なく突く夫人。

……惚気られているように見えるが、同じ男から見たら、思わず同情してしまう光景だ。

「ですが、おば様。今日の場合はアイン兄さんも悪いのでは？」
「そうかもしれない。……けどね、年長者が年少者の挑発に簡単に乗ってしまうなんて、醜態をさらしたのはこの人よ」
「……」
夫人の生暖かい視線に耐えかねたのだろう、ザラ委員長は大いに目を逸らした。
……同じ馬鹿をした男として、ちょっとフォローを入れることにする。
「……いえ、今の委員長との殴りあいは、男同士の”語らい”に近いものだったので、そういったことを気にしていたのではないのです」
「あら、そうなの。……では、何を気にしていたの？」
「……ミズ・ザラ。……プラント独立のためならばともかく、ナチュラルを根絶するために戦争を行うことに、私は価値を見出せません。私の父と母は両方ともナチュラルですし、友人にもナチュラルがおりますので」
おい、阿呆な妄言を吐きやがった、そこの委員長さん、あんたに言ってんだよ。
「……そうね。私もナチュラルの根絶なんてものに、何の価値も見出せないわ」
「……レノア」
くくく、委員長、何とも、情けない顔ですなぁ。

嘲うために、ニヤリとしてやったら、容赦なく、ミーアにコブを叩かれた。

……ぬ、ぬぉぉぉぉぉ！

◇　◇　◇

仕切りなおして、今度こそ、お茶会が始まった。

どうにか再起動を果たしたユウキも席についている。

「まったく、ラインブルグ、お前と言う奴は……」

「いやな、ユウキ。いくら、やる気のない俺でもさ、あのユニウス・セブンの悲劇を直接、目の当たりにしてさ……ああ、こういうことを許したら駄目だ、こういうことを絶対にさせない為のプラント独立なら、頑張ってもいいかなってさ、思ってたんだよ。それを……その思いを木っ端微塵にしてくれたのが、あのニュートロンジャマーの地球全土への無差別散布だったんだよ。そして、それを指示したというか、容認した人が目の前にいて、加えて、とんでもないことを言い出したから、どうしても我慢できなくなったんだ」

「……そうか」

そう答えたユウキも先程の委員長と俺のやり取りに何か感じるものがあったのだろう、それ以上は突っ込んでこなかった。

一方のザラ委員長も先程から、何やらずっと黙り込んでいる。

「……」
「ほら、あなた、そんなにムッツリしていたら、失礼よ」
「む、むぅぅぅ」

まぁ、持論に真っ向から反論した相手が目の前でのんびりとお茶していたら、ねぇ。

旦那さんの様子に処置なしといった感じでザラ夫人は肩を竦めて見せた後、俺に言った。

「アイン君。……今日、あそこまで夫の本音を引き出してくれたことに、本当に、感謝するわ」
「……い、いえ、それは感謝されることではないと思うのですが？」
「いえ、この人は、強がりで頑固だから……自分の本音を上手く隠すタイプなのよ。まったく、結婚する時に隠し事はなしって約束したのにねぇ」

再び、横目で旦那様を見やる夫人だが、今度の目は……ガクガクブルブル。

「兄さん、おば様の目……」
「ミーア……ああなったら、だ……」
「……いいかも」

……お、俺は何も聞かなかった。

「まぁ、今日、この人が口走った馬鹿な考えは、私が責任を持って、全力で、絶対に修正するわ」
「は、はぁ」

「ほんとに……以前から、私の交友関係によく口出しをすると思っていたら、あんな馬鹿なことを考えていただなんて……信じられないわ」
「そ、それはだな……。わ、私は、レノア、お前の身を心配してだな」
……豪腕と言われる国防委員長殿も家の中じゃ、普通の旦那さんだねぇ。
そんなことを考えていたら、俺は、それを証明する光景を目の当たりにしてしまう。
「あなたっ！！！」
「っ！　な、何だ！？」
「私の交友関係にああだこうだと口出しする前に、プラントという一つの国を指導する立場にある、あなたがっっっ！！！！　旧種だの、新種だの、理屈をつけて、ナチュラルを滅ぼすだなんて、あまりにも馬鹿げた考えをさっさと捨てなさいっっっっっっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
お、おおおおうっ、う、生まれて此の方、初めて経験する、さ、

最大級の雷が……ザラ委員長に……落ちた。

ユウキは……椅子ごと引っくり返っている。

ミーアは……目をキラキラさせてザラ夫人を見つめている。

委員長は……ああ、あの人は、もう……手遅れかもしれない。

俺は……少し、ちびってしまった。

……。

いや、今のはな、あくまで、受けた衝撃を逃すための逃避であって、って、ああ、委員長が崩れ落ちた！

気を、気を確かに！

「いいのよ、アイン君、そんな馬鹿な人はしばらく放っておいていいわ」

「えっと……それはさすがに……？」

「しばらく、反省させるわ」

「そ、ソウデスカ」

……さ、逆らったら、ヤラレテシマウ！

「……んんっ、それにしても、アイン君達には、少し見苦しいところ見せてしまったわね」

「イ、イエ、ドコノカテイデモアルコトダトオモイマス」

ほ、他にどう言えと？

誰にとも知れぬ言い訳が頭に浮かぶが、これも現実逃避の一つなのだろうと結論付けた。

「それで、アイン君。今後、私達は、プラントは、どうすればいいのかしら？」

「……え、えっと、どう、と言いますと？」

「あなたは、プラントが独立を達成するために、どうすればいいと思う？」

ええっ、それを俺に聞きますか？

「俺は、頭のいい、お偉い専門家じゃないんですけど？」

「私は、真剣に、今の状況を憂いている人の意見を聞きたいのよ」

「……適当なこと言いますけど、本当にいいですか？」

「ええ、構わないわ。それに、アイン君の考えは私の考えと近いみたいだから、どう考えているのか、参考に教えて欲しいということもあるのよ」

……ならば、お答えします。

「正直、今の状況になってしまってからでは……プラント独立の実現は、かなり困難だと思います」

「……難しいの？」

「はい。……まだ、こちらがユニウス・セブンへの核攻撃を受けての被害者のままだったら、地球圏全体へと地球連合の非道を訴えることで、市民の中にプラントの立場に同情的な民衆を生み出し、独立を容認する国際世論を形成することができたでしょうし、また、その世論を背景とした外交交渉によって、プラント独立支持国を得

る事も可能だったはずです。そして、それを足がかりに、連合から無形有形を問わずに行われる、数々の妨害を排除し続けていれば、独立実現へと、確実に進むことができていたと思います」

「……今、その方法は？」

「不可能でしょうね。最早、プラントからの復讐の矢は放たれ、地球では、今現在も、被害が発生し続けています。……地球社会が安定を取り戻すまでに、それこそ、何千万、下手をすれば、何億もの死者が間違いなく出るでしょう。結果、地球市民の憎悪と復讐の念は間違いなく、プラント市民や地球に住むコーディネイターへと向かい、プラントに同情的な国際世論の形勢どころか、反コーディネイターの勢力が伸張し、世論もそちらに傾くのは間違いありません。それに、中立国も含めて、無差別攻撃を仕掛けたこともあって、国家としての信用も暴落し、国際的に……外交の場でも、苦しい立場へと追いやられてしまいますしね」

「……」

「正直、あの無差別攻撃がなされた時、非常に取り乱しましたよ。プラントは独立をするつもりがあるのか、何故に、殲滅戦なんて馬鹿なことを仕掛けるのか、ってね」

「……そう」

そう応えて、ザラ夫人は俯いてしまった。

すると、今度は椅子を元に戻して、ようやく落ち着いた様子のユウキが問いかけてきた。

「……だが、ラインブルグ、今、我々は勝っているぞ？」

「確かに、今、プラントは、ザフトは勝っている状況だよ？　でも、国力に勝る地球連合が今の負けっぱなしの状態でプラントと講和するなんてことは、まず考えられないだろう？　……ましてや、地球全土へ無差別攻撃を仕掛けた後だ、市民感情が連合に講和を許さな

いよ。そもそもさ、今までのように、ずっと、こちらが勝ち続けさせてくれるほど……このまま無策で戦い続ける程、連合が甘い組織だとは思えない」

「……そう、だろうか？」

「ああ。……うーん、そうだな……例えば、今のザフト優位な状況を作り出したのがＭＳにあるとするのなら、きっと、連合もまた、ＭＳを開発して対抗手段にしてくるだろうさ」

戦争状態で新しい兵器が出てきた時、相手も対抗手段を生み出すのは、何時の時代も同じだ。

「ＭＳの開発か……お前はそうなると思うのか、ラインブルグ？」

「間違いなく、な。……たぶん、急場で仕上げるだろうから、こちらのものに比べて性能で劣るかもしれない」

いや、後発になるから、案外。

「……或いは、時間をかけて、より高性能なものを作り上げてくるかもしれないな。……とにかく、ＭＳを開発するのは、間違いないだろうさ。そして、同じ土俵に立たれたら、今度は国力の差、つまりは、数の差で、プラントは必ず負かされる」

「ＭＳの性能やパイロットの能力で、こちらが圧倒したとしてもか？」

「言っただろう？　戦いは数だと……。数で囲まれれば、いくら無双を誇っても、いつかは必ず落とされる」

「……ならば、どうすればいいのだ、ラインブルグ」

「……地道に連合との仲介役か交渉役を探して、見つけた後は、プラントの独立を最低限ラインに設定して、ただひたすらに地道な交渉を重ねて、落とし所を探すしかないさ」

辛く、長い道だよ、本当にさ。

「そして、交渉で落とし所が見つかるまで、俺達、ザフトはプラントを守らなければならないんだ」

「……守りきれなければ？」

「負け。……独立という希望は泡沫の夢と化し、コーディネイターの国家なんてものは夢のまた夢。それどころか、下手すりゃ、プラント市民全員が、皆殺しになる可能性もあるさ」

「……そうか」

……俺、茶会に来たはずなのに……何を語ってるんだろう？

22　午後には優雅にお茶会を　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

23　午後には優雅にお茶会を　3

初夏の穏やかな日差しが降り注ぐ環境は、ここがスペースコロニーであることを疑わせる程に素晴らしいものがある。
本来ならば、この贅沢な環境の中で、優雅にお茶会を楽しんでいるはずが……ザラ夫人は俯いたまま何か考え込んでいるし、その旦那さんは床とお友達だし、ユウキも腕を組んで考え込んでいるし、ミーアは曇った顔でお茶飲んでるし……。

いや、もうね、全然、雰囲気が優雅なお茶会って感じじゃないよ。

……とはいえ、ねぇ。

現在のプラントを取巻く厳しい社会状況を鑑みると、こうなってしまうのも仕方がないよなぁ。

でも、ザフトに所属している俺が戦争終結のためにできることなんて、せいぜい、プラントを攻撃から守ることぐらいだしねぇ。

「……」

ちらりとザラ委員長を伺ってみる。

相変わらず、顔面蒼白で倒れたままだ。

まったく、このおっさん達が、もう少しマトモだったら、この戦争も目的……プラントの独立を達成して、かつ、早期終結が叶ったはずなのになぁ。

なんて考えた後、よくよく考えたら、お茶会に来たはずなのに、まだお茶を一口も飲んでいなかったを思い出した。国防委員長という役職に加え、これだけの家に住んでいるのだから、きっと上質の茶葉を使っているに違いないと想像しながら、お茶を飲もうと手を伸ばしたら、ユウキが再び問いかけてきた。

えーと、これは地味な嫌がらせですか？

「ラインブルグ、ザフトは今後どう動くべきだと考える？」

「それは今後のザフトが採る方策か？」

「うむ、やはり、ザフトが一番に行うべきことはプラントへの脅威を排除することか？」

「そうだな。ユウキの言う通り、プラントに攻撃をしかけてくる戦力の排除を一番の目標にすべきだな。プラントの安全を確保するためにも、月とＬ４にまだ残っている、連合軍の艦隊戦力を特に何とかしないといけない」

それにしても、連合軍の艦隊戦力、三度に渡る大規模な戦闘で、結構、叩いたはずなのに、まだまだ戦力が残っているなんて、凄いよね。

「……ふむ、それなら、艦隊戦力の他にも、拠点、特に大規模な月のプトレマイオスも排除しなければならないか」

「ああ、大規模な艦艇生産ドックを備えていて、物資補給や艦隊編

成ができる拠点は、潰せるなら潰してしまいたい。それに先の防衛戦でもコロニーが狙われただろ？　なら、今度は月のマスドライバーを使った戦略攻撃があるかもしれない」
「それに関しては、防衛隊でも以前より常に警戒していた」
「うん。……まぁ、それらを何とかするために、ラウ達がさ、昨日、出撃していったよ」
「クルーゼが？」
「ああ、三日程前、一緒に酒を飲んだら教えてくれてね。だから、入院している後輩の見舞いついでに、軍事衛星港に寄って見送ってきた」
「そうか……奴は元気だったか？」
「元気だったよ」

ラウの奴……最近、サングラス姿が良く似合うようになってきて、その上、少々の若皺がアクセントになって、同世代では魅せられない渋さが出ていたよ。

ほんと、美男はこれだから……って、嫉妬する位なら、自分を磨くことにエネルギーを使った方がいいや。

うん、話題転換。

「そういうお前はどうなんだ？　アカデミーの教官として、今の候補生はどうなんだ？」
「む、私が担当している者達は、筋がいいというか、能力は非常に高いのだが……」
「高いのだが？」
「生意気だ」
「……そうか、お前も苦労してるって言ってたもんなぁ」
「ああ、特に……」

ユウキは、ちらりと、ザラ委員長を見やる。その視線で、何となく、ユウキが自分に言いたいことがあることを察したのだろう、委員長はようやく崩れ落ちていた床から立ち上がって、のろのろと椅子に腰掛けた。

そして、今更のような気がするのだが、机の上で両手を組んで頬杖をつくと、偉そうにして見せた。

もう、威厳なんて……ないような？

「……かまわん。ユウキ君、言いなさい」

「では……評議会議員のご子息達は飛びぬけて優秀なのですが……それ故に、どうしても、天狗になってしまうのです」

「……」

「あ、いえ、アスラン君にはそういう面はないのですが……」

「……そうか。君には苦労をかけるな、ユウキ君」

委員長に向かって出た固有名を聞くに、ザラ夫婦の息子さんはアスランというらしい。

でも、生意気に天狗って……。

「うーん、ユウキ、そのゴシソク達は、あれか……挫折を知らない世代？」

「む、そういう考え方もできるか」

「……でも、優秀すぎるってのも、考え物だと思うけどねぇ。……いざ、心が折れた時、あまりにも脆いだろうからな」

「心が折れた時に脆い、か……」

「ああ。それに比べて俺なんて、挫折挫折の連続で、どれだけ苦闘

してきたことか……」

ほんと、どれだけ血と汗と涙を呑んできたことか……。

まぁ、そのお陰で泥臭く努力することを厭わなくなったけどさ。

……。

……さて、ザラ委員長が復活したな。

……。

うん、もう一度、しっかり、この戦争の目的を聞かせてもらおう。

それで、その答えで、今後、俺が取るべき道、脱走するか、現状維持するかも、見えてくるだろうからな。

そう考え、俺は、ザラ委員長に面と向って対峙する。

対する委員長も、俺を、俺の目を油断なく見据えてくる。

「……委員長、若造が、また生意気なことを言わせてもらいますが、俺達、ザフトが戦う目的は、プラントの独立ですか、それとも、ナチュラルの殲滅ですか？」

「……」

「戦争する以上は……目的だけは、これだけは、絶対に、はっきりとさせて貰いたいんですよ」

……嘘は、絶対に、許さない。

瞳に力を入れて、睨むように委員長の返事を待っていると、ザラ委員長は視線を逸らさずに、答えではなく、質問を返して来た。

「貴様は……」

ザラ委員長の眼光もきつく、それでいて、鋭い。

「貴様は……何故、能力に劣るナチュラルと共存できると考えられる？」

「……そうですね。……それぞれが持つ能力に優劣差が存在していたとも、ナチュラルもコーディネイターも同じ人だと考えているからでしょう」

「では、何故、……我々コーディネイターを奴らと同じ人だと考える？」

「……単純に考えれば、ナチュラルもコーディネイターも共に、人として同じく様々な感情を、同じように喜怒哀楽を表現するからでしょうか？　……両者共に、人として持つ精神性に差異はなく、人としての本質に変わりはないと思うんですよ」

「……そうか」

俺の答えを聞いたザラ委員長が目を閉ざした。

……。

でも、これで、戦争の目的は、ナチュラルの殲滅だー、なんて答えられたら……どうしようかなぁ。

……とりあえず、ザフトを脱走して、アメノミハシラにでも逃げるとするか。

だが、ナチュラルを殲滅するなんて、非常な大事はどうすればいいのか？

……。

ああ、だ、誰か！　か、神さまっ！　私を、悩める私を助けて下さいっ！

……。

なんて、助けを求めても、機械仕掛けの神様は光臨しないだろうし……。

むぅぅぅ。

俺が、委員長からの最悪の衝撃に備えていたら、委員長が答えを告げた。

「……私人としての私は、ナチュラルを滅ぼすべきだと考えている」

「あなたっ！　まだ……」

「ミズ・ザラ……今は委員長の答えを聞かせて欲しい」
「……アイン君」
ザラ夫人が思わずと言う感じで、委員長に詰め寄ろうとしたので止めた。
……私人としてといったのだから、公人としての答えがあるのだろう。
「……だが、公人として……プラント最高評議会の国防委員長としては……プラントの独立が第一であると答えよう」
なるほど、そうきたか。
……。
「それは……先のニュートロンジャマー散布のようなことを、二度としないと約束する、ってことですか？」
「……確約などできん。もしも、ザフトの指導者、プラントの指導者として……プラント独立達成のために、ニュートロンジャマーを地球に落とすようなことが必要であると判断すれば、私は決断することに躊躇しないだろう。……だが、その決断に私人としての感情を入れることは二度とするまい」
……。

この答え、どう取る？

戦時指導者に必要なのは、目的達成、つまりは勝利のために、それこそ、自身も含めて敵味方を問わず、犠牲を厭わずに貫徹する冷徹な意志だということはわかっている。

けれども、その犠牲には……非武装の市民が含まれる可能性もある。

どこからか、市民の犠牲が出ない戦争などない、戦争なのだから犠牲が出るのは当たり前だ、と囁く声が聞こえてくる。

その声を受け入れながら、さらに考える。

ならば、無辜の犠牲を出したくないという理想を懐くことは駄目なことだろうか？

囁き声の主、理性が……現実の中で理想は常に輝いているが、理想は理想だけに現実の中で叶うことはないだろう、と教えてくれる。

ならば、それを、理想を追い求め、努力することは虚しいことだろうか？

否である、と再び答えがあった。

……。

そうだよな。

確かに、戦争での犠牲は少ない方がいいって、ずっと考え続けて

きたからこそ、運が非常に多分にあったとはいえ、現に今、ただの平軍人が一国の指導者に無駄な犠牲を減らせだなんて、生意気でかつ傲慢な直訴ができる僥倖を得ているしね。

それにだ。

委員長の立場を考えれば、さっきの答え以上の答えを望めるだろうか？

……それこそ、否だろう。

ならば、ここが自身の感情と理性との折り合いを付ける所、ここが俺にとっても落し所なのだろう。

後は、委員長の今の言葉……私人としての考えを公人としての考えに反映させないっていう言葉を信じるか、信じないかだが……疑えばキリがないんだし……ここは、信じるしかないよなぁ。

「……そこが妥協点なのですね、委員長？」

「……ああ、今のが私人としても、公人としても、限界点だ」

「確かに……委員長の立場を考えれば、それがギリギリですもんね。……なら、後は、プラント独立という目的を達成するために、極力、無駄な犠牲を出さないように、頑張って政戦両方から上手いこと筋道を立ててくださいよ？　俺も一兵卒として、精々、頑張らせてもらいますから」

「ふんっ！　貴様のような生意気な若造にっ！　言われるまでもないわっ！」

お、おおっ、ザラ委員長にさっきまでは感じなかった威厳が復活したぞっ。

くっ、これが一国を率いる者のカリスマなのかっ！

だ、だが、このまま屈するアイン・ラインブルグではない！

「後は……ミズ・ザラにしっかりと説教してもらって、私人としての考えを改めてくださいね」

「……むっ」

ほんとに、ザラ夫人のＳＥＫＫＹＯＵは、さぞ、見ものなんだろうなぁ。

……。

ああ、いかん思わず、ニヤニヤと笑ってしまったよ。

「ええ、アイン君、それが私の為すべきことなのでしょうね。しっかりと請け負うわ」

「ミズ・ザラ、期待させてもらいますよ」

「……む、むぅ」

ふふふ、ザラ委員長、しっかりとした奥様で良かったですねぇ。

これであんたも真人間になること、間違いなしですよ。

……ああ、何か、楽しくなってきたよ、俺。

「ぐっ、き、貴様、何だ、その気持ちの悪い笑みはっ！」
「いいえぇ～、べつにぃ～、なんでもありませんよぉ～」
「ならば、その気持ちの悪い笑みをやめろっ！」

いやですよ、お偉いさんをからかえる機会なんて、もう、二度とないに違いないんだからさ。

くくく、ここは大いに楽しませてもらおうか。

「いやいや、ザラ委員長が奥様に愛されていることがよくわかって、男冥利に尽きていることを寿ぎたいだけですよ」
「あら、やだ、恥ずかしいことを、アイン君ったら」
「それに聞きましたよぅ、委員長。……ご子息を作る時の話……」
「な、なっ、れ、レノア！　なんということを話しているんだ！」
「い、いいじゃないですか。私達がどれほどの熱愛の末に、アスランを生むに至ったかを知ってもらいたかったんです」

おうおう、二人して真っ赤になっちゃて、もう熱々ですね、お二人さん。

「に、兄さん！」
「えっ、どうかしたか、ミーア」
「あ、あの、その、そういう話は……」

……もっとも、ザラ夫人が照れと羞恥の赤で、委員長のは怒りと羞恥の赤なんだけどね。

「いやいや、ミーアも後学のために是非とも夫人に話を聞かせても

らえよ。ねぇ、構いませんよね、ミズ」
「え、ええ、そうね。……ミーアちゃんも女の子なんだから、こういうことを知っておくほうが良いわね。私がしっかりと教えてあげるわ」
「こ、こらっ！　レノアッ！　な、何を……」
委員長がザラ夫人を遮ろうとするが、それを許すアイン・ラインブルグではない！
「ふふふ、俺、聞いたんですよ、委員長。……ご子息のご懐妊が判明するまでに、委員長の体重、２０キロ近くも落ちたそうですね」
「なっ、なにぃっ！　……ら、ラインブルグ……それは……本当、なのか？」
おや、ユウキが口を挟むとは、意外な所から食い付いてきたな。
「ああ、御本人から聞いたんだ。それはもう、毎晩毎晩、凄く、激しかったらしいぞ。……いやぁ、男としては、本当に羨ましいよなぁ」
「……そ、それは確かに……う、羨ましいな」
男馬鹿二人で、ザラ委員長と夫人を交互に注視してやる。
「こ、こらっ！！　貴様ら、人の妻に向かって、なんて目をっ！」
「あらまぁ、あなたったら」
おほほほほ、なんて、笑いながらザラ委員長を、しかも俺が殴った箇所をはたく夫人。
悶絶する委員長を他所に、夫人は何度もはたき続ける。

ついでに、ミーアも、俺の言葉から何を想像したのか真っ赤である。

「いいじゃないですか、若い人達とこういう話をするのも楽しいじゃないの」

「ぐぬぅっ、だ、だがっ！」

「人と人が、愛し合うのは自然のことじゃないですか」

「む、むぐぅぅぅ、そ、それは……そうだがっ！」

「だったら、聞かせてあげましょうよ。私達の目くるめいた愛の日々をっ！」

ああっ、ザラ夫人が暴走をはじめたっ！

おおおおっ、なんてことだっ！

もっとやれっ！

「うふふ、そうね、まずは……私とこの人の出会いから……」

と、まぁ、その後は暴走を始めたザラ夫人による”愛”についての独演会となった。

様々な意味で、非常に勉強になったと言っておこう。

俺達がザラ邸を辞する時には、今にも襲い掛かりそうだったのが非常に印象的だった。

……どちらがどちらというのは……だいたい想像できると思う。

……。

……ザラ夫人、旦那さんがこれ以上、馬鹿な暴走をしないように、監視と教育をしっかりお願いします。

本当に、頼みますよ？

23　午後には優雅にお茶会を　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／27　誤字修正。

２４　新星、煌めく時　１

四月馬鹿に関わる話で衝撃を受け、拳での語り合いをし、今後の戦争の行方についても考えさせられた、ザラ邸での茶会があった５月。

俺が所属しているエルステッドは、休暇と訓練とで過ごしていたが、世界はその間も激しく動き続けていた。

まずは地球である。

５月下旬、大洋州連合から供与されたカーペンタリア湾の小島に建設されていたザフト地上軍の根拠地となる基地が完成した。これと併せて、プラントから地球への戦力降下が順調に進んだこともあり、ザフト上層部は地上軍の態勢が整ったと判断して、本格的な攻勢、地上軍によるアフリカ侵攻作戦が開始された。

この侵攻作戦は、地上軍の大目的である連合軍戦力の地球封じ込めのため、先の降下作戦で敗北した南アフリカ統一機構領内にあるビクトリア宇宙港を制圧することを目標としているそうだ。

で、伝え聞く限りでは、事は順調に進んでいるようで、アフリカ上陸前に地中海の制海権を巡って発生した、カサブランカ沖の海戦において、例の地味男君ことグーンが実戦投入されて地味に活躍したらしく、ザフト潜水空母艦隊が連合軍地中海艦隊を撃破したとのこと。

また、地中海と大西洋及びイベリア半島と北アフリカを連絡する要衝、ジブラルタルに基地を建設することが決まったそうだ。

この基地をもって、アフリカ侵攻軍の拠点とする他に、地球連合三大構成国の一つ、ユーラシア連邦への睨みと駐留海洋戦力による大西洋方面への牽制とするのだろう。

こんな具合に地中海の海洋戦力を排除し、拠点を確保したアフリカ侵攻軍は、今度は陸上へと戦力投入を開始し、北アフリカ制圧を行ったらしい。

……って、地上軍の連中というか、ザフトは何を考えているんだ？

アフリカ共同体は、確か、地球連合に参加していないはずだ。

なのに、何故に制圧に動いたのか、いまいちわからないのだが？

……。

いや、アフリカ共同体領内で、連合の地上戦力と激戦を繰り広げていることを考えると、これも非力な中立国の性なのかもしれない。

でも、無闇矢鱈と敵を作るのは、正直、頂けないんだがなぁ。

……。

とにかく、北アフリカの制圧を目指したアフリカ侵攻軍はスエズ近郊で連合地上軍と激しい戦闘を行い、これを退けたそうだ。

なんでも、この戦闘でアンドリュー・バルトフェルドっていう指揮官が率いるバクゥ部隊が連合軍のリニアガンタンク部隊を相手に大きな戦果を挙げたそうで、プラントではバルドフェルドに【砂漠

の虎】なんて異名が付けられ、連日、マスコミによる戦勝報道と一緒に流されている。市民の間でも、砂漠の虎の異名にあやかって虎柄が流行る……かはわからないが、そんなことがありえそうな位には持て囃されている。

……どうでもいいことなので、話を戻す。

今後、地上軍、というかアフリカ侵攻軍は北アフリカの占領地域に一定の安定が生まれたら、当初の目標通り、ビクトリアを目指して南下を開始することになっている。

次に宇宙。

先のプラントへの連合軍の侵攻を受けたザフト宇宙機動艦隊は、プラントへの軍事的圧力を減じさせるために、連合軍の大規模月面基地であるプトレマイオスの攻略を目指して、月方面への侵攻を開始した。5月初めに、ラウの部隊が出撃したのもこの作戦である。

月裏側のローレンツ・クレーターに橋頭堡となる前線基地を建設したザフトは、プトレマイオスから迎撃に出た連合軍と月の各所で戦闘を繰り返したらしい。特に、グリマルディ・クレーターでの戦闘は激しかったらしく、決着が付かないまま、膠着状態に陥ったそうだ。以後、グリマルディ・クレーターを基点として経線方向に一周するラインを境界として、月面を二分する状態になっていた。

そう、なっていたんだが……今月、6月に入ってすぐに、膠着ラインを越えて行われた、エンデュミオン・クレーター確保を目標としたザフトの攻勢において、敗勢になった防衛側の連合軍がエンデュミオン・クレーターの基地を自爆させたことで状況が大きく変わってしまったのだ。

伝手からこの情報を仕入れたシゲさんによると、この連合軍の自爆は、サイクロプスなるマイクロ波を利用した採掘用融解装置を暴走させてのものだったらしい。単純に、暴走して制御が効かなくなった電子レンジの中に放り込まれたとでも考えたらいいよ、という何ともわかりやすいシゲさんの話であった。で、その影響範囲にいた敵味方全てが強制的に身体の水分を沸騰させられて……恐ろしいな。

……とにかく、自爆に巻き込まれた連合軍の部隊も大きなダメージを受けたが、ザフトの侵攻部隊もまた多大なるダメージを受けてしまった。

結果、ザフト宇宙機動艦隊はプトレマイオスの攻略を断念し、月戦線を放棄、撤退することになったらしい。もっとも、Ｌ５に戦略攻撃が可能だったマスドライバーの破壊には成功しているから、完全に敗退したとはいえないかもしれない。

……でも、正直、ここで退いたらプラントは負けだと思うんだけどねぇ。

まぁ、常に敢闘精神と言うか戦意旺盛のザフト指導部をして、撤退を決意させるほどの被害だったんだろうな。

でだ、この月攻略軍による、連合軍月根拠地プトレマイオス攻略作戦の失敗を受けて、新たに立案されたのが、Ｌ４に存在する東アジア共和国の資源衛星【新星】の制圧作戦である。

連合側の資源衛星を制圧することで、連合の鉱物資源ひいては継戦力や経済力を奪い、自陣の鉱物資源を強化するという、何とも後々になって地味に効いてくる、非常に味がある作戦だと思う。

そして、この作戦には、俺の乗艦であるエルステッドも参戦することになっていた。

◇　◇　◇

6月11日。

現在、L5のプラントから地球－月ラインの線対称地点に存在するL4に直接向かうため、地球の引力を利用した加速を行っている。宇宙では推進剤切れが最も恐ろしいがための推進剤の節約方法だ。もっとも、俺にはやっていることの仕組みはなんとなくわかるが、実際にどの航路を使っているとかはわからなかったりする。

それはそれとして、直から外れた俺はシゲさんにお願いしておいた、ジンに脱出装置が付けられないかという要望への返答を聞きにMS格納庫へと降りてきた。

「おーい、シゲさんっ！」

「？　……ああ、アインちゃんに……レナちゃんにデファンか」

「えっ？」

シゲさんの言葉に驚いて振り向いたら、レナとデファンが当たり前の如く付いて来ていた。

「お前ら、直から外れてたんだから、ちゃんと休んでおけよ」

「いや、俺は趣味っす！」

「わ、私は……その、なんとなくです」

……デファンはともかく、以前、死に掛けたレナは、まだちょっと精神的に不安定なのかもしれないな。

「まぁ、お前らも自分の体調管理がしっかりとできてるならいいが、無理は駄目だぞ？」

「当然っすよ」

「も、もちろんです」

「ならいいんだ。で、シゲさん、例のお願いした件なんだけど……」

「うん？　ああ、それなら、班長室で話そうか」

ひゃっほーーーー、なんて嬌声をあげて、ブラックＢＯｕＲＵへと跳んで逝ったデファンは放っておくとして、所在なさげなレナに視線で付いて来るかと問いかける。

返答は小さな首肯だった。

そんなわけで、俺とレナはシゲさんの城である、格納庫近くの整備班長室にお邪魔することになった。

「まぁ、散らかってるけど、そこらへんにスペースを作ってよ」

「ああ、んじゃ、お言葉に甘えて……」

「こ、ここに……？」

レナは何やら、恐ろしいものを見たと言わんばかりに、様々なモノで溢れ返って身の置き場がない班長室を見渡している。

「おいおい、そんなに驚くなって、男の部屋はこれ位は当たり前だって」

「せ、先輩も……ですか？」

「俺？　いや、俺はミーアがいつの間にか片付けてくれてるから、

ここまでじゃないよ」
「……ミーアちゃん……ですか」

な、何か、レナの半目が、何、年頃の女の子を自分の部屋に平気で入れてんだっ、このロリコンの性犯罪者がっ、って感じのことを言っていた気がする。

「あ、ああ、前に一緒に見舞いに行っただろ？」
「……ええ、ええ、しっかりとミーアちゃんのことは憶えてますよ。とーーーっても、〝いい〟子でしたよ。先輩が席を外した時に、〝いろいろ〟とお話しましたから……ね」

……な、何を話したんだよっ！

「れ、レナ、その時に、な、何か、ミーアが、その、気に触ることでも言ったのか？」
「……いえ、あれは女同士の話でしたから……先輩は気にしなくて良いです」
「いや、その顔は何も言ってないなんて顔じゃ……」
「先輩はっ、気にしなくてもいいことですっ！」
「あ～、お二人さん、お取り込み中の所、申し訳ないが……話をしてもいいかい？」

た、助かった！

非常にナイスな介入だっ、シゲさん！

「あ、ああ、シゲさん。……それで、前にお願いしたことなんだけど、どうかな、できそうかな？」
「むーー、アインちゃんに頼りにしてもらっておいてなんだけどさ、

ジンじゃ、本格的な脱出装置は付けられないよ」
「……そうか」

ガッカリ感に頭を押さえつけられた気分だ。

そんな俺の隣になんとかスペースを確保したレナは首を傾げている。

「……脱出装置、ですか？」
「ああ、そうなんだよ、レナちゃん。前にレナちゃんが被弾した時さ、かなり、やばい状況だったろ？　あの後、アインちゃんから、ジンに脱出装置を取り付けられないかって、聞かれてさ、色々と調べたり、考えたりしていたのよ」
「……先輩」
「い、いや、ジンのバイタルエリア……特にパイロットを保護する機能が弱いって、以前から感じていたんだよ。そこにレナが被弾して、かなり危ない橋を渡っただろ？　それで、シゲさんにお願いしたんだよ」
「……」

い、いや、そんなに熱い目で見ないで下さい。

いくらなんでも、そんな目で見られたら、流石の俺も恥ずかしいのですよ。

「んんっ、それで……シゲさん、やっぱりジンには脱出機構を装備できるような余裕はなかったのか？」
「ああ、アインちゃん、ジンの設計に余裕は、一応、あるこたぁあるんだけどね……コックピット周りには、あんまりなかったよ」
「そうか」

「……まぁ、これはプラント製品全般に言えることなんだけどね、どうにも必要以上に、複雑に作りすぎなんだよねぇ。性能は確かにいいかもしれないけど、これ見よがしにさ、技術を見せびらかすような作り方なんだよなぁ」
「あっ、そういえば、通常整備も大変だって、シゲ班長、いつも言ってますもんね」
「いや、弄ってる時は楽しいんだけどね？　どうしても、作業単位が長くなっちゃって、効率的とは……ねぇ」
「ああ、それでいつもツナギ姿だったんですね」
「……」

いや、レナよ……シゲさんがいつもツナギ姿なのは……絶対に趣味だ。

「まぁ、そんなわけでよ、俺達整備班で出来たのは、ハッチが開かなくなった時に、強制的にハッチをパージする機能を取り付けるぐらいだったよ」
「……いや、それだけでも、かなりマシになるよ。いざ、脱出って時にハッチが開きませんでしたじゃ、死んでも死に切れないよ」
「……そう言ってくれるなら、俺達も少しは気が楽になるよ」
「いや、こちらこそ、ありがとうって言いたいよ、シゲさん」
「ええ、先輩の言うとおりです！　ありがとうございますっ！　シゲ班長！」
「い、いやぁぁぁ、そんなに感謝されっと、……うれしいねぇぇ」

相好を崩すシゲさんを見ていると、こちらも自然と笑みが浮かぶ。

「さて、シゲさん、聞きたいことも聞いたし、俺達は少し休むことにするよ。……デファンも適当な時間になったら、休憩室の椅子にでも縛り付けて強制的に休ませておいて」

「ああ、了解了解」
「じゃ、上がるわ」
「失礼しますね、シゲ班長！」
「うんうん、ゆっくり休みなよ～」

シゲさんの言葉に見送られて、班長室を出た。

いつもと変わらず様々な喧騒で満ちている格納庫内を二人連れ立って進んでいく。隣を歩くレナも、さっきの話を聞いて、少し元気が戻ったようだった。

でも、まぁ、一応、本人に大丈夫なのか、聞いておこうか。

「レナ、あと二日もすれば、また戦闘になる」
「はい」
「……怖く、ないか？」
「……正直に言えば……怖い、とても、怖い、です」
「……そうか」

……死にかけたんだ、当然だな。

「でも、怖いのは、別に今回だけのことじゃなくて、いつものことなんです」
「……」
「だから、何とかできますっ！　今までちゃんと、恐怖を乗り越えてきたんですから、今回だって乗り越えて見せます！　整備班の人達や先輩が、少しでも生き残れるように工夫したり努力してくれているんですから、私も絶対に生き残ってみせます！　……だから、先輩、私は大丈夫です」
「……そうか」

……強いなぁ。

「……レナは強いなぁ」

「先輩のお陰で強くなったんですよ、きっと」

「ははっ、違う違う、レナが努力したからだよ」

「そんなことないです！」

剥きになって、俺に食って掛かって来る後輩がとても可愛くて、思わず、ポンポンと頭を軽く叩いてしまった。

それから、首を竦めて、俺を見上げているレナに言う。

「……生き残ろうな」

「……はい」

そして、二日後の６月１３日。

エルステッドを含めたザフト新星攻略艦隊は、光学観測で新星及びＬ４コロニー群を捕捉。同時に、新星付近に展開している連合軍艦隊を確認することとなった。

２４　新星、煌めく時　１（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

25　新星、煌めく時　2

ザフト新星攻略艦隊がＬ４宙域に入りかける頃合に、防衛側の連合軍艦隊の一部、２５０ｍ級２と１５０ｍ級１６が進出してきて、進入阻止の構えを見せた。そんなわけで、まずは緒戦である。

攻略艦隊の戦力は、アプリリウス軍事衛星港に駐留する機動艦隊主力から抽出された本隊一個艦隊ＦＦＭ１２隻と艦載ＭＳ７２機、前後衛それぞれ二個戦隊、合わせて四個戦隊ＦＦＭ８隻と艦載ＭＳ４８機で構成されていて、戦況次第でプラントから増援や占領部隊が送られることになっている。

今回の緒戦では、このうちの前衛部隊である二個戦隊から、艦載ＭＳ２４機をまず出撃させて、敵の出方を伺うというか、露払いさせることにしたようだ。

俺達が所属している本隊にも第二種戦闘配置が発令されており、所属パイロットもいつでも出撃可能な状態でＭＳのコックピットで待機している。

出撃命令が即伝わるようにと、艦橋と繋げっ放しにしている通信ラインからは、戦況を把握するために、通信や索敵を担当する管制官達が奮闘している様子が、彼らが話す静かな声音から伝わってくる。

「先輩、戦況はどうなんでしょうか？」

「うーん、進出してきた部隊が少ないからなぁ、俺達は出なくてもいいかもしれない」

「でも、なんで小艦隊だけで出てきたっすかね？」

「そうだなぁ」

色々と考えられるな。

……。

折角だから、相手の動きについて考えてみるのも、今の無聊を慰める意味でもいいかもしれない。

「時間潰しに少し、皆で今日の連合軍の動きについて、考えてみるか？」

「おおっ、そういうのも面白そうっすね！」

「確かに、今の所は出撃命令が来そうな気配もありませんから、やってみましょうか」

と、どうやら二人も退屈だったらしく、いつもなら、慎重な意見を述べることが多いレナからも賛同を得たので、皆で議論しながら考えてみる。

「デファン、この進出してきた敵小艦隊の目的を推測したら、何が真っ先に浮かぶ？」

「普通なら、阻止戦闘っすね」

「だが、それだと、戦力があまりにも少なすぎるように感じるぞ？」

現実として、最近の機動戦力消耗比であるＭＳ１：ＭＡ５で考えても、一個艦隊規模では俺達の侵入を阻止するのは困難なはずなのだ。ましてや、今日、前面に展開している敵の数はそれ以下だから、なおさらだ。

「だったら、威力偵察とかも考えられるっすけど……これも、やっ

ぱり、戦力比で考えたら、打たれ弱すぎるっすよね」
「でも、敵の指揮官が杓子定規に物事を考えたり、進めていたりする可能性もあるんじゃないかな？」
「ああ、そういうこともあるかもねぇ」

何事も教本通りなんてことも、硬直化した組織ではありそうなことだ。

「けど、これだけあちこちで戦闘を繰り返しているなら、そういう定規があったとしても長さが変わってくると思えないっすか？」
「その辺は、指揮官の資質が大きく影響するだろうからなぁ。とりあえず、これは置いておこうか。……じゃ、レナ、阻止戦闘や威力偵察以外でなにかないか？」
「うーん、それ以外でしたら、援軍が到着するまでの時間稼ぎ？」
「……あるかもしれないが、ヤキン・ドゥーエの艦隊が月を狙うような動きを見せて、牽制に動いている事もあるから、月からの援軍が来る望みは薄いはずだ」
「そっすね、それに連合も今月の戦闘でかなり消耗しているはずっすから、動きは鈍いはずっす」

だが、援軍に関しては、巨大な国力を誇る地球連合の回復力を侮らない方がいいだろうから、心の片隅にでも留意しておく必要はあるな。

「レナ、他には？」
「後は、罠、ですか？」
「……そうか、罠か。もし、そうだとしたら、どんな罠をしかける？」
「え、えっと、そうですね……ＭＳが艦隊を攻撃するために進入してくるコースにデブリに模した機雷を仕掛けているとかどうですか

？」

ああ、結構、できるかもしれない……いい線だな。

「でも、ニュートロンジャマーが効いてるっすから、接近を感知する電波が使えないっすよ？」

「あっ、そういえばそうだったわね」

「……でも、なんらかの方法で起爆させることはできるかもしれないな」

「なんらかって、どんなっすか？」

「有線とかどうだ？」

「簡単にばれるっす」

まぁ、そら、有線がピーンと艦艇からデブリまで繋がっていたら、間抜けだよなぁ。

「時限式ではどうだろう？」

「……時間が合わなければ、間抜けな上に資源の無駄遣いですよ？」

「そうだよなぁ」

……機雷だから、感知方法を考えれば上手くいくのか？

「なら、ジンのシルエットなり大きな人型を記録しておいて、そういったものが近くに映ったら起爆するってのはどうだ？」

「……それなら、できそうっすね」

「でも、そんなの短期間で作れるでしょうか？」

「いやいや、人間、やろうと思えば、できなくはないような？」

あれだ、技術者達に、不眠不休で血涙と努力と根性を強いて、締め切り前に仕上げさせるんだよ、きっと。

「あ、熱源感知式なら、どうですか？」
「なるほど、それなら、うまく行く可能性が高いな」
「うっす、技術的にも可能性はあるっすね」
「なら、この線はあり得るってことにして、他に何かないか？」
俺が重ねて聞くと、二人も更に頭を回転させ始めたようだ。
いやはや、最初に会った時や初陣でガチガチになっていた時からは想像できない姿だな。
一人で当時を思い返していると、デファンが何やら思いついたようで、声を上げた。
「あれじゃないっすかね。囮っていうか、疑似餌ッすよ」
「疑似餌？」
「そうっすよ、レナ。以前、Ｌ１での戦闘で、連合が大規模な十字砲火を使ったじゃないっすか。あれを大々的にやるために、それなりに大きな囮を準備して、火線収束点にうちらを引きずり込むっすよ」
「おおっ、デファン！　それ、あるかもしれない！」
「へへっ、少しは俺も、勉強してるっすよ！」
「でも、敵の本隊に動きはないですよ？」
「……」
「……」
なんかレナからバッサリと、クールに切り捨てられた感じがした。
男二人、少女の無情な切り捨てに思わず項垂れて、沈黙してしまったよ。

と、そこに艦橋にいるゴートン艦長の声が、俺達の通信系に入り込んできた。

「ラインブルグ君、何やら面白いことやってるじゃないの」

「いえ、艦長、これはただの時間潰しですよ。……それで、何か状況に変化が？」

「いや、今の所は、いつものように機動戦力同士が小競り合いしている所だよ」

「そうですか」

「もっとも、向こうさんは以前やった戦法に一工夫加えて、掩護に撃ちこんで来るミサイルを長大な有線式にして、シーカーがＭＳを追尾できる距離まで誘導しているみたいだ」

ミサイル用の長大な有線……って、そんなの準備するっていうか用意するなんて、凄い、のか？

「で、そのミサイルもＭＳに直撃できなくても、すぐ近くで爆発するみたいでさ、前衛のＭＳ部隊はスラスターや間接とかにミサイルの破片……デブリを結構喰らっていて、無視できない損害が出ているみたいだよ」

「……なるほど、ＭＳの機動力や運動性を落とすことを主眼に置いているってことですか」

「うん。どうやら、今日の敵さんは、この戦法がＭＳに通用するかどうか、武装の評価も兼ねて試しているって感じがするよ」

「……向こうも色々と考えてきますね」

「それだけ必死ってことさ」

ならば、俺達も出撃した方がいいような気がするな。

「……艦長、ここは一気に勝負を決めた方がいいのでは？」
「いや、俺も司令部に聞いたけど、今回の戦闘では、本隊ＭＳ隊の出撃は見送って、戦力を温存するってさ」
「はぁ、そうですか」

確かに、敵本隊が出てきていない以上は、それも正しいのかもしれない。

でも、大戦力で一気に叩ける物は叩いた方がいいとも思うのだが……。

「とりあえず、前衛部隊のＭＳ隊が敵ＭＡを排除するなり、撤退させるな……あ～、敵さん、余力がある内にＭＡを引き揚げさせるみたいだ。艦隊も撤退を開始してるよ」
「……ＭＳ隊か前衛部隊での追撃は？」
「展開しているＭＳ隊は機動力を落とされているし、敵さんも、これでもかって位に盛大に阻止砲撃してるからねぇ。ちょっと厳しいかもしれないな」
「なら、俺達が出て、追撃を仕掛けるべきでは？　今後を考えると、少しでも戦力を削れる時は削っておく必要があると思いますが？」
「……した方がいいかもしれないねぇ。上に掛け合ってみるよ」

……小粋な細工を試して、しかも撤退判断が早いことを考えると、今回の相手は正面からの力業では来ないかもしれない。

「ＭＳへの対処方法を探る、か……」
「ＭＳの弱い所を狙ってきているあたり、向こうも研究しているっすね」
「でも、どうやって、ＭＳの研究をしてるんでしょうか？」
「３月のビクトリア戦で、鹵獲したジンがあるんだろう」

「あ、なるほど」

なんてことを皆で話していたら、再び通信系に入ってきたゴートン艦長から司令部の答えを聞かされた。

「ラインブルグ君、前衛、本隊共に、追撃はなしだってさ」
「……月での敗戦といいますか、受けた損害が司令部を慎重にさせてるんですかね？」
「あり得るね。……とりあえず、後、少ししたら一種警戒に落とすから、もう少しその場で我慢しておいてちょうだな」
「アイ、艦長」

そんなわけで、少し緊張を解いて、一息である。

「二人とも、少し、気を楽にしていいぞ」
「もう、出撃がないって聞いた所から、かなり気を抜いたっすよ」
「実は、私も皆で話し始めてから、あまり緊張していません」
「……図太いなぁ、お前ら」
「……先輩ほどじゃないっす」
「……先輩に言われたくないです」

すわっ！　お前ら、反抗期かっ！

「まったく、誰の影響を受けて、そんな風になんてしまったんだ。最初の頃はあんなに初々しかったのに……」
「……」
「……」

えっ、なによ、その沈黙は？

「自覚がないっすよ、レナ」
「ええ、そうね、デファン。私達に一番影響を与えた人が、その自覚を持っていないだなんて……少し腹が立つわね」
「そうっすね。……腹、立つっすね」
「おいおい、何を言っているんだね、君達は……。君達がそんな風に育ったのは、あくまでも、君達が自分で自分をそのように育てただけではないか」

ハハハハハッ、って、似非外国人笑……あっ、そういえば、俺って外国人？

「……レナ、後で何かやってやるっすよ」
「……あれよ、先輩の携帯食にマスタードをタップリ隠し味に入れておくとか、どう？」
「甘いっすよ。先輩のインナーに塗り込んでおく方がきっと効果的っす」
「えっ？　先輩の……インナー……？」
「ん、どうしたっすか、レナ？」
「……インナー……どんな匂い……するのかなぁ」
「……」
「……」

さて、俺は何も聞かなかった。

「あ、あ～、今日も循環空気が美味いッすねぇ」
「そ、そうだなぁ」
「っ！　わ、わたし、な、なんにも、いいいい、いってないですよ？」
「あっ、先輩、二種配置が解除されたみたいっすよ」
「……ああ、じゃ、じゃあ、俺、先に上がるわ」

「うっす。お先にどうぞっす」
「ちょっ……聞いてください！」

さて、二種配置が解除とはいえ、まだ一種警戒だから待機所に向かうとしようか。

そう考え、俺はエアー充填中を示すイエローランプを眺めつつ、機付整備員に後を任せて、身体を待機室がある方向へと投げ出した。

「……レナ……人の趣味はそれぞれっすけどね……できるだけ人の道は外れないように気をつけるっすよ？」
「で、デファンっ！」

なんてやり取りが微かにヘッドセットから聞こえた気がしたけど、俺は忘れることにした。

……だって、インナーの数が減ったら、怖いことを想像してしまうだろ？

25　新星、煌めく時　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

26　新星、煌めく時　3

「先輩、今回の敵、かなりしぶといっすね」
「ああ、よく粘るとしか、言いようがないな」
「……こちらが新星に近づけば距離を保って攻撃してきますし、その攻撃を加えてくる部隊をこちらが追いかければ、今度は別方向から別働隊が砲撃を加えてくる。ほんと、通信状況が悪いのに、よくこれだけ連動させられますね」

7月11日。
俺達の小隊は、今、哨戒パトロールに出ている。

先月から始まった、新星を巡る一連の攻防は、現在の所、イタチゴッコになってしまっている。さっきレナが言ったように、敵艦隊は幾つかの小艦隊に分かれて、それぞれが連携、連動する形で動いており、ザフト艦隊はそれに引きずり回されている形だ。
俺達も何度か交戦しているのだが、何というか、以前と異なり、やり辛いのだ。ＭＡと艦砲射撃の連携は当然として、件のミサイル攻撃は常套手段になってきてるし、時にはわざと防御火線に穴を作って、ＭＳを誘い込んで近接火砲による飽和攻撃で落としてみせたり、ザフト艦隊側面にあるデブリの影に爆雷を仕掛けておいて、戦闘中に突然爆発させて艦隊を混乱させたりと、とにかく、あの手この手で対抗してくるのだ。
ニュートロンジャマー影響下において、ＭＡや艦船にアドバンテージがあるＭＳを擁しているザフトと言えども、苦戦しているのが現状である。

「俺達を引っ掻き回してくれている敵は、たしか……連合軍第八宇宙艦隊だったか」
「情報によると、そうらしいですね」
「まったく、数の有利を生かした、厭らしくて上手い攻撃をしてくれる厄介な敵だよ」
「でも、そろそろ、敵も厳しくなっているはずっすよ」
「……確かにな」

攻撃を受けて反撃に出たり、艦隊への攻撃を仕掛けてくるＭＳを阻止する役目を担っているＭＡの損耗は、絶対に尋常な数字ではないはずなのだ。いくら連合にプラントでは真似できない巨大な回復力があったとしても、２月以来、大規模な戦闘が多かったのだ、そうそう、あちらこちらの艦隊にＭＡの補充が行えるほどの余裕があるとは思えない。特に今は、先の月面での戦闘で、決して無視できない程の大きな被害を受けているだろうだけに尚更だ。

故に、今の敵第八艦隊の策がＭＡを磨り潰すことで成り立っている以上は、そろそろ戦力に息切れをおこしてもおかしいことではない……はずなのだ。

この一連の戦闘の終わりが何時なのかを推測していると、レナが声をあげる。

「先輩、変針座標です」
「……よし、当初の予定通り、変針する」
「了解っす」
「大型のデブリ群を突っ切るからな、当たらないように注意しろよ」
「……はい」
「うっす」

今日の哨戒コースには、コロニーの採光ミラーの一部や割れた太陽発電パネル、不発ミサイル、剥離した宇宙船の外装、何かのタンク、メビウスの残骸、得体のしれない細々とした破片群、コロニーの外壁ユニットといった具合に、大小、様々なデブリが漂っている。

……。

実のところ、これらは全て、ここ最近に発生したもので、新星を巡る一連の戦闘で発生した流れ弾や外れたビーム、ミサイルといったものが、Ｌ４のコロニー群に大きな被害を与えているためだ。

幸いなことに、ユニウス・セブンや世界樹のような完全崩壊は免れているが、それでも酷い損傷が出ているコロニーが多数出ていて、放棄が検討されているものがあっても、おかしい状況ではない。

俺も宇宙に住む者だけに、自身がそのような被害を与える立場に関わっていることを考えると、非常に心苦しく、辛い光景だ。

「早く、ここでの戦闘が終わって欲しいです」

「……根競べになっているからな、どちらが早く諦めるかだよ」

けれども、艦隊上層部や一般的なザフト隊員の間では、どうせナチュラルが多数住んでいるコロニーなのだから、少々壊れても構わないだろう、この際、いっそのこと破壊してしまえばスッキリする、だなんて暴論が広がっているのだから、信じられない。

実際、そのような発言が艦隊上層部から出た時、ゴートン艦長が、そのようなことをすれば連合軍の徹底抗戦を招くだけだとか、現状の戦力でそんなことをしている余裕はないとか、同胞であるコーデ

ィネイターも住んでいるのにその考え方は如何なものかとか、盛んに文句を言い立てたらしい。

このゴートン艦長の意見は、２月や４月のプラント防衛戦で実績を残していることも相まって、僚艦の艦長達に重く受け止められたようで、その意見への賛同者が相次ぎ、何とか、その馬鹿げた方向へ動くことが阻止できたのだ。

もしも、ゴートン艦長が噛み付かなければ、間違いなく、Ｌ４コロニー群を破壊する方向で動いたことだろう。

……本当に、ゴートン艦長様様って感じだよ。

もっとも、このゴートン艦長の理性的で素晴らしい働きは、以前から様々に意見してくる生意気な態度を疎ましく感じていたらしい機動艦隊上層部、というか攻略艦隊司令部の機嫌を損ねてしまったらしく、様々な雑用的な仕事……今、俺達がやっている哨戒パトロール等を押し付けられることになったんだけどね。

それでもエルステッドのクルーが、誰一人として艦長に文句や陰口の一つも言わないあたり、他所とは違う所だと思う。

……。

それにしても、今回の一連の騒動でも思ったことなのだが、プラントに染み付いてしまっているナチュラル蔑視というかコーディネイター選民思想だが、どうしてこんなものが生まれてしまったのだろうか？

選民思想や他者への謂れなき蔑視なんてものは、精神の成長を阻

害するというか、現実を見据える事ができなくなる、傍迷惑な思想だと思うのだ。

絶対に、この選民思想は、間違っている。

……まったく、何時から、こんな風になってしまったのか？

俺がブチブチと内心でやり場のない怒りを溜め込んでいたら、今度はデファンの声が耳に入ってくる。

「先輩っ！　連合の艦隊らしき艦影と動きを見かけたっす！」
「ッ！　方向は？」
「水平四時、仰角三時っす！」
「……ああ、これは……間違いないな。……レナ、エルステッドに連絡を」
「はいっ！」
「デファンは数を頼む」
「了解っすよ」

見事なまでに整然とした艦列で移動している連合軍艦隊の周辺を伺うと、哨戒機……ＭＡが数機出ているようだった。

だが、こちらにはまだ、気付いていないようだった。

「先輩、おおよそっすけど、３００ｍ級１、２５０ｍ級８、１５０ｍ級４８っす」
「レナ」
「はい、伝えます」

確かに、一個艦隊規模だな。

それにしても、この推進コースは……。

「この方向は……月、か？」

「うっす。……でも、この方向にはうちらの艦隊もあるっすよ」

「先輩、艦長が戻って来いとのことです」

……確かに、哨戒機を落としたりならともかく、いくらなんでも艦隊をどうこうできないよな。

「……わかった。二人とも、敵に見つかる前に引き揚げるぞ」

「「了解」」

月への撤退か艦隊への決戦を仕掛けるのか、或いはその両方か、か……。

◇　◇　◇

俺達がエルステッドに帰艦した頃には、艦隊全体に第一種戦闘配置が発令済みだった。

着艦前に通信機越しで聞いたベルナールの話ではアシム小隊はD装での出撃を選択したらしい。俺もD装と通常装のどちらにするかを推進剤の補給を受けながら考えるが……。

「シゲさん、俺達は通常装備でいいよ」

「そうかい？」

「……多分、他は皆、D装で出ているだろうから、俺達まで装備す

る必要はないだろうさ」
「なら、このままでいいってことだね」
「ああ」

ＭＡがまったく出てこないなんて、考えられないからな。対艦攻撃は他の奴らに任せて、俺達はこちらに対艦攻撃を仕掛けるＭＡの阻止を考えておこう。

「アインちゃん！　推進剤の補給終了したよ！」
「了解。シゲさん、整備班に下がるように言ってくれ」
「あいよぅ！」

さて、補給も終わったし発進するかなんて思いながら、機体を動かそうとしたら、突然、ベルナールが通信画面に現れた。

しかも、なにやら切迫している様子だ。

「ら、ラインブルグさん！　至急、発艦してください！」
「な、なんだ、何があった、ベルナール？」
「敵艦隊が本艦隊に向け、加速を開始しました！　また、爆装をしたＭＡが周囲に確認されていますので、大至急、これらの迎撃に当たってください！」
「……わかった。デファン、レナ、行くぞ！」
「了解っす」
「はいっ」

このベルナールの慌てように、何かあるのかという疑問を抱くが、取り敢えずは指示に従うことにする。

「ベルナール！　ラインブルグ小隊、出るぞっ！」

「進路……大丈夫ですっ！　急いでくださいっ！」
「了解了解。……落ち着け、ベルナール。お前が慌てると、俺達も慌ててしまうから、な？」
「あっ！　……すいません」
「いいさ。……ラインブルグ、ジン、１１３４、出るぞ！」

本当に、そんな基本的なことは心得ているはずのベルナールが慌てるなんてなぁ。

……そんなに慌てるような事態なのか？

……とても慌てるような事態だった。

「ラインブルグさん、前衛部隊全艦と通信が途絶しました！　壊滅ですっ！」

俺達がエルステッドから射出され、編隊を組んだ時には、３００ｍ級を中心とする連合軍第八艦隊が全艦艇による捨て身の突撃、所謂、艦隊特攻を仕掛けていて、見事な紡錘陣……防御力のある２５０ｍ級を先頭に、１５０ｍ級がその後方と周囲を緊密に固めることで凄まじい近接火砲の網を形成していた……で前衛部隊を食い破った所だった。

こちらのＭＳも敵艦隊へと攻撃しようとしているのだが、相手が加速しているために攻撃チャンスが少なく、また防御砲火も多くて迂闊に近づけないのだ。

当然ながら、ザフトの艦隊から断続的に放たれている艦砲で、敵艦隊に多数の損害が出ているから、多少は怯みそうなものなのだが……相手はこちらを上回る勢いで撃ち返し、かつ、それ以上に恐ろしく勢いがある、半ば狂気をも感じさせる突撃を仕掛けてきていた。

……正直、これはね、もう、避けた方がいいよ。

内心でそう呟きつつ、俺達も仕事をすべく、小隊に指示を出す。

「……敵艦隊への攻撃は艦隊や他の連中に任せておけっ！　俺達は爆装したメビウスの艦隊への攻撃を阻止する！　味方艦に取り付けさせるなっ！」

「うっす！」

「はい！」

とは言ったものの……接近なんて、できねぇよ、これっ！

つか、退避しないと、俺達も危ない！

「くっ！　駄目だな、これは……。小隊は天頂方向に退避する！」

「了解っす！」

「は、はいっ！」

小隊全機でスラスターを盛んに吹かせて、敵艦隊の突撃ルートから外れるように機動する。

移動する途中、せめてもの掩護と、敵艦隊前方に展開していたＭＡに攻撃を仕掛けて、何機かを撃墜する事ができた。

できたが、俺達ができたのはそこまでだった。

俯瞰して見ると、敵の全艦艇から伸びるスラスター光の大きさか

ら、依然として、最大加速しているのが容易にわかる。

「ああっ！　先輩！　敵艦隊がまだ……まだ、加速していますっ！」

「ああ、もうっ、くそったれっ！　エルステッドは回避行動をとってるのかっ！？」

「……う、上手く敵艦と敵艦の隙間に入ろうとしてるっすよ！」

「え？　えええええっ！　そそ、それで、え、エルステッドは大丈夫なんですかっ！？」

「ッ！　……艦長とクルーの腕を信じよう。にしても……こりゃ、奴さん達、自分達の損害も度外視してるな」

ほんとに、前の時もそうだったけど、艦隊特攻なんて、危ないことはやめてちょうだい、と声を大にして叫びたいよっ！

そんな思いを懐いている俺の目前で、艦隊同士の交差が始まった。

「あ、ああ、か、艦同士がぶつかっちゃいました」

「……す、すげぇっす」

「ああ、ここまでやるとは……な」

一番先頭を行っていた連合の２５０ｍ級と本隊所属のＦＦＭが真正面から衝突した。

大きさの差からか、ＦＦＭが力負けしたようで引きちぎれて、弾薬や推進剤に誘爆したのだろう、大きな火球を生み出し、盛大にデブリを撒き散らしながら沈んだ。

当然、相手の２５０ｍ級も艦首部分から中央部分までが大きく抉

り取られたし、艦体のあちらこちらで小さな爆発が起きているから、激しい損傷を受けたのは間違いないだろう。

……だが、２５０ｍ級は沈まずに、まだ加速し続けている。

ほぼ静止状態だったザフト艦と加速がついている連合艦だから、あれか、運動エネルギーの差でもってザフト艦が沈んだのか？

……いや、それなら、反作用で同等の衝撃を受けているはずだから……ただ単に頑丈さと質量差で沈んだんだろう。

……。

つまり、質量が大きければ大きいだけ、頑丈ならば頑丈なだけ、宇宙では強力な武器になるってことか。

……。

ああ、いかんいかん、あまりに衝撃的な光景にまったく関係ないことを考えてしまった。

とりあえず、俺達に何かできることは……この状況では、ないよなぁ。

艦隊全体の通信系からも母艦の安否を問う声や指示を請う声がひっきりなしに聞こえて来る。

「……先輩」

「どうするっすか？」

「いや、もう、ね。……今はどうしようもないわ」

とりあえず、敵さんはさっさと通り過ぎて、月にでもどこにでも、行ってくれって感じだよ。

まぁ、調子に乗って減速なんてしたら、それこそ復讐に猛ったMS隊の餌食になるんだから、さっさと逃げるだろうけどね。

はぁ、それにしても、エルステッドは無事なんだろうか？

さっきから、通信が途絶えてるんですけど……。

26　新星、煌めく時　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

27　新星、煌めく時　4

エルステッドは……なんとか無事だった。

とはいっても、左舷推進ユニットを抉り取られた上、あちらこちらに被弾痕が残っているの見ると、ギリギリ、沈まなかったと言うべきだろうか。

エルステッドの状態が表す通り、先の敵第八艦隊の中央突破で受けた被害は甚大なものになっている。

最前列に展開していて、約１０倍の敵から集中砲火を浴びた前衛部隊は文字通りに壊滅し、構成していた四隻全部が撃沈されると言う憂き目にあった。本隊も無傷な艦は存在せず、司令部が存在していた一隻を含め三隻が沈められている。幸いなのは後衛部隊の回避が間にあって、損傷が軽微で済んだことだろう。

もっとも、この攻撃……艦隊特攻を仕掛けた敵第八艦隊もただでは済んでいない。俺達が単純に確認しただけでも、２５０m級６と１５０m級４０が沈んでいることがわかっている。

これらが沈んだ要因は、ザフト艦隊との砲戦やＭＳの攻撃で沈められたり、突破中に艦同士が衝突したことによる相打ちや衝突して進路が変わってしまった味方艦を回避しきれなくて道連れを喰らったり、沈んだ艦の爆発に巻き込まれて外付けのランチャーが誘爆したりと、様々なようだった。

……。

普通、あのような攻撃というか捨て身の突撃は……命惜しさもあって、そう簡単に実行できないというか、選択肢に考えられないはずなのだ。

けれど、連合軍は、艦隊特攻を選択肢に含め、現実にやってみせた。

……あの突撃時に感じた、狂気にも似た強烈な意志を考えると……それだけザフトは、いや、プラントは、連合の、地球市民の怨みを買ってしまっているのかもしれない。

……。

きっと、その原因は、あの四月馬鹿なんだろうなぁ。

はぁ、よく憎悪が憎悪を生むと言うけど、本当のことだと思わざるを得ない。これを断ち切るなんて、よっぽどの荒行としか言いようがないよ。

この問題を解決するには、結局、地道に相互理解に努めて行くしかないんだろうな。……本当に、難しいことだよ。

……。

とにかく、連合軍の艦隊特攻で受けた被害の詳細な確認が進む中、後衛部隊から偵察に出されたＭＳ小隊によって、日が替わる頃には、新星周辺に連合軍の残存戦力は存在しないことが確認された。

また、Ｌ４の諸コロニーも無防備地区宣言を出したことから、連合軍が新星を放棄し、Ｌ４宙域から撤退したと判断され、Ｌ４はザフトが実効支配することになった。

◇　◇　◇

連合軍が撤退したとの判断が下されるまでの間、消耗が少なかった俺達の小隊は沈められた艦に閉じ込められたり、宇宙へと放り出された生存者の捜索救助を行っていたのだが、専門の救助艇による救助態勢が整ったので、ようやくエルステッドに戻れることになった。

で、戻ったエルステッドの艦内も沈められた艦から救出された負傷者で満ちていた。こういう状況故に、俺達も休む気にはならず、何事か少しでも手伝えることがないかと聞いたのだが、艦長から、休むように言われてしまった。曰く、パイロットは休むことも仕事らしい。

そんなわけで、鉄錆びやアルコールの匂いが比較的少ないロッカールームで小隊の三人揃って休ませてもらっている。現状を考えると、かなり心苦しいんだけどね……。

……。

実のところ、エルステッドの被害は艦の損傷だけで済んだというわけではない。例の如く、被弾対応に奮闘した応急対応班に、命に関わる重傷者が少数とはいえ出ているし……パイロットも……１１３１のムラン・アシムが落ちている。

あいつが落ちた原因は、チャージをかける２５０ｍ級の前に出て、攻撃を仕掛けるなんて無謀をしたグエン・リーを庇ってのことだったらしい。

……まったく……やっと、あいつとは小隊の訓練や戦術について、まともに話せるようになってきたって言うのに……本当に……無茶しやがって……洒落にもならないぞ、馬鹿野郎め。

……。

にしても、拳が痛むな。

無意識に右手を閉じたり開いたりしているのに気付き、拳を作った後、軽く撫でた。

そんな俺の様子に気がついたのか、デファンとレナが少し心配そうにこちらを見ている。

「先輩、手……大丈夫なんすか？」
「……少し、痛いように感じるかな」
「医務室には？」
「いや、これ位は大丈夫さ。慣れてるからわかるよ」

この痛みは、気分的なものだろうからな。

「……リーは大丈夫でしょうか？」

レナの不安そうな声に応えたのは、少し語調が強くなったデファンだ。

「アシムさんを死なせて、先輩の手も煩わせたんっすから、少しは変わってもらわないと困るっすよ」
「落ち着け、デファン、お前の気持ちはわかった」

「……うっす」
「……まぁ、確かに、あれでまだ、変わらなかったら……どうするかなぁ」

実は、先程、グエン・リーを”修正”したのだ。

◇　◇　◇

「リーっ！　この、大馬鹿野郎がっ！」

靴裏の電磁石が踏み込んだ足をしっかりと床に食い止め、足の踏ん張りで生じたエネルギーと腰の回転で生じたエネルギーとが合わさり、最終的には肩の捻りからのエネルギーと共に振りぬいた拳に集約されて、グエン・リーを中空へと殴り飛ばした。

自分でやったことだが、見事なまでに明日へとよく飛んだ。

そのリーがジンの脚部にぶつかり、大いに跳ね返ったのを見るに、我ながら、中々のエネルギー伝達率だと思う。

「……いや、アインちゃん、飛ばしすぎだよ」

俺の隣にいたシゲさんの冷静な突っ込みは無視して、自身の行動の結果も省みず、馬鹿な妄言を吐いたリーを修正するために声を張り上げる。

「今、リーッ！　お前、何て言ったっ！　自分は死んでも良かった、だとっ！　死んだら家族に会えたのになんで邪魔をしたんだ、だと

っ！」
「……」
「おいっ！　リーをもう一度ッ！　ここに連れて来いっ！」
「う、うっす！」

他人の命を代償に、命を助けてもらっておいて、そんな妄言を吐くようじゃ、一発だけじゃ足りんだろうさ。

最寄の整備員二人によって、捕獲された灰色宇宙人のように、俺の前に連れてこられたリーを睨みつけながら、まずはアシムが死んだ原因を認識させるために、質す。

「おい、リー、答えろ。アシムは何故死んだ？」
「……お、俺を、庇ったから、です」
「ああ、そうだっ！　お前を庇って死んだっ！　何故だっ？」
「……お、俺が、ナチュラルの戦艦を攻撃しようと……したから」
「そうだっっ！　お前が、突撃をかける戦艦に正面から攻撃を仕掛けるだなんて、無謀なことをしたからだっ！」

……実のところ、無謀云々に関しては人のことを言えない立場なんだが、まぁ、今はいいだろうさ。

「……何故、あんな馬鹿な無謀をした」
「や、奴らを、俺の家族を、殺して！　奪った！　ナチュラルの奴らを殺したかったっっっ！！！」
「……」
「それにっ！　どうせっ、俺一人だけが生き残ったんだっ！　だから、せめてっ、死んでもいいからっ！」
「仇をとりたかった、か？」

「……そうだよっ！　それのどこがっ！　どこが悪いって言うんだっ！」

身内をユニウス・セブンで亡くしているから、そういう感情を持つことは仕方がないかもしれないが……戦場に立つ以上は、どれだけ難易度が高くても、それを制御してもらいたいんだよ。

知り合いや身内に犠牲者がいないからこそ言えることなのだろうが、同じ戦場ではこっちも生死がかかってくるんだ、主張だけはさせてもらいたい。

「悪いだろうさ」

「何だとっっ！」

「現に今、感情に身を任せて、仇を取るためにお前がした行動で、アシムを殺している」

「……誰もっ！　誰も庇ってくれなんて言っていないっ！」

……よっっと。

おお、自分でやっておいてなんだが、本当によく人一人飛ばせるよなぁ。

気を利かせて、再び面前まで連れてきてくれた整備班員達に目で感謝しつつ、声を張り上げる。

「ああ、別に死にたがりなんてな！　別に庇う必要なんてなかったさ！」

「……」

「だが、アシムは庇った！　……後輩であり、仲間であるお前を殺させないために、な」

「……」

「その思いを……アシムの意思を、無駄にすることは、俺が許さん。……憶えておけ」

リーは俺の言葉に応えず、そっぽを向いたまま、逃げるように格納庫から出て行った。

それを見届けたシゲさんが、格納庫中央で作業再開の号令を出したことで格納庫内が通常に戻り始めた。

……俺も柄じゃないことをしたからか、肩が凝るわぁ。

肩を回して、凝りを解す俺の隣に戻ってきたシゲさんが問いかけてくる。

「……リーの奴、大丈夫かねぇ？」

「さて、こればかりは、ね」

「……」

「……シゲさん、正直に言うとね。……俺は、今からでもリーの奴を生身のままで宇宙に放り出してやりたい気分なんだよ。他人に生かしてもらっておいて、まだ、死んでもいいだなんて阿呆をぬかす馬鹿者にかける情けを、俺は持ってないからな」

「……」

「それにさ、そんな性根じゃ、この先、生きていても、それだけで……仲間に死を振りまくだろうしね」

「……」

「でも、それだとさ……アシムの思いを……奴の遺志を無駄にしてしまうことになるから、なぁ」

「そうだねぇ」

シゲさんは、何ともいえない顔をしながら、眼鏡の位置を直して、

ただ頷いてくれた。

◇　◇　◇

リーのことは、時間をかけて注意して見ていくしかないし、俺も、いつまでも拘っているわけにもいかない。早いところ気分を入れ替えよう。

現実、終わったことは、時間が不可逆である以上、もう取り返せない。故に、反省をした後は、前を向いて生きた方が健全だろう。

そもそも、人間なんて、いつ何時、死ぬかわからないんだ。特に、今みたいな戦争状態だったら、尚更だ。

だったら、後悔しないように、精一杯、やりたいことやできることを、他人様の迷惑にならない限り、すればいいんだ。

それにだ……同じ後悔でも、やらずにする後悔よりも、やってする後悔の方が、まだ……マシ……なんだろうか？

……。

いや、きっとマシなんだろう。

「先輩……さっきから静かに考え込んでますけど……本当に大丈夫ですか？」

「そうっすよ。生真面目な沈黙は先輩には似合わないっすよ？」

……デファンよ、それはどういう意味なのかなぁ？

「それは……確かに似合わないかも」

「やっぱりレナもそう思うっすか？」

「ええ、先輩はやっぱり、こう、少し抜けているぐらいがちょうどいいと思うのよ」

「うんうん、わかるっすよ」

ほぅほぅ、俺は抜けているのが相応しいって言いたいんだね、君達は……。

「普通に絶妙な天然ボケか巧妙な計算ボケなのか、わからない大ボケを見せたりするしね」

「ああ、あるっすねぇ。……それに加えて、本当に馬鹿なこともしてるっすよ？」

「あら、その馬鹿なことが面白いじゃないの」

「あはは、それは言えてるっす」

「それに普段そういう風に抜けているからこそ、訓練の時とギャップがあって……ねぇ」

「……でも俺は、時々、そのギャップが怖い時があるっすけどねぇ」

……。

「あっ、でも私たちってね、意外と恵まれてると思うわよ」

「そうなんっすか？」

「ええ、前に、私が入院していた時に同期が見舞いに来てくれて、色々と話したけど……」

「話したけど？」

「うん、その子の小隊の先輩は、ＭＳ訓練の時、傲慢な上に、上から目線で、何故そうするのかっていう説明や解説もしないで、あれ

やれこれやれってだけ言うだけだったり、自分よりも操縦が上手いと矢鱈と嫉妬したりするから、大変だぜ、って、言ってたわ」

「……ああ、そういえば、俺達はそういうのには、無縁っすね」

そら、お前らの命を背負ってるんだから、そんな事をしている暇があったら、次の目標を立てて、訓練を計画するさ。

「まぁ、それでも、ちょっと、訓練は厳しすぎるような気がするっすけどねぇ」

「そうよねぇ」

「初めて先輩の訓練を受けた時、思ったもんっすよ、このひとは昔、悪鬼羅刹だったに違いないって」

「ふふふ、私もあの時は先輩のことを、昔、童話で読んだ地獄の極卒かと思ったもの」

「……二人とも、人が黙っていたら、人のことをえらく好き放題に言ってくれているようだねぇ」

「「！」」

……うーん、ここはＮ教導官に倣おうか。

「……二人とも……少し、俺達の間でずれているらしい認識の摺り合わせと相互理解を深めるために……ＯＨＡＮＡＳＩをしようじゃないか？」

悲鳴をあげる後輩二人とじゃれ合いながら、この二人を死なせないように、俺もまた、後輩を庇わなくてはならないような事態にならないように、より一層厳しく訓練して、心身を鍛えていこうと、そう思った。

27　新星、煌めく時　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

28　一夜城作戦　1

新星攻略戦における最後の激戦で大破判定を受けたエルステッドは、占領部隊を伴なった増援と交代する形でプラントへと帰って来た。乗艦を失った者や負傷者達もついでとばかりに乗せられたため、空間的に非常に狭かった上に雰囲気も重苦しいという、今までで一番辛かった航行だったと言っておきたい。

いや、もう、ほんとに、母艦や乗艦を沈められたＭＳパイロットや乗組員、負傷者の怨嗟と憎悪の声が凄かったのよ。

だから、俺も快く部屋を負傷者に譲り渡して、ＭＳ格納庫脇にある休憩待機室で寝泊りさせてもらった。俺の他にも、ハーフというだけで負傷者の憎悪の捌け口になりそうだったデファンや艦内の重苦しく刺々しい雰囲気を嫌ったレナやマクスウェルといった面々が同じようにしていた。ちなみに、問題児認定のリーは部屋に閉じこもったまま、一度も出てこなかったりする。

……。

とにかく、母港であるアプリリウス軍事衛星港に到着して、負傷者が搬出された後、とてもほっとしたことを憶えている。

それで、司令部から今後の新しい指示が来るまで待機する間、一時的に下船許可が出されたから、お茶でも飲もうと思ったんだ。

……うん、そう思って、降りたはずなんだ。

「……待たせたな、若造」

なのに、プラント最高評議会の傘下にあって、非常に重要な一部門である国防委員会、その委員長室の執務机の前に、何故か、立っていたりする。

……あれぇ？　なんでだろう？

おかしいな……俺は確かに、エルステッドを一時下船して、エルステッドが収容されたブロック近くのラウンジで一息入れようと思ってたはずなのに……気付いたら、黒服のお兄さんやおじさん達に取り囲まれて、何事かと呆けているうちに黒塗りの連絡船に放り込まれた後、色々と黒塗りの乗り物を乗り継いで行って……何とか正気に戻ったら、目の前にザラ国防委員長が座っていたりする。

いや、ほんとにおかしくない？

なんで、俺、こんなに場違いな場所に連れてこられるの？

「俺、なんで、ここに、いるんです？」

「私が貴様を呼んだからに決まってるだろう」

「え、えーと、な、何故、黒服さん達に？」

「……貴様は私が呼んだとしても、気がつかなかった振りなり、伝達不良を言い訳にでもして、来なさそうだからな」

「い、いや、いくら俺でも、そこまでは……」

「ほう、しないか？」

ザラ委員長の追求から、目を逸らしてしまう俺がいた。

「ふん、自分でも信じられんことを言うな、若造」

「ぐっ。……で、ですが、俺は赤でも白でも黒でもない、ただの緑、言わばペーペーなんですよ？　普通は国防委員長のような偉い人の前に来るなんて事ないでしょう？　たとえ、用件があったとしても、白なり黒なりに連絡が行って、そこから伝わるのが自然なはずです」

「……来る来ないも、その方法を決めるのも、貴様ではなく、上司である私だ。だいたい、私にアレほど生意気なことを言って平然としていた貴様が、ただのペー……一般隊員とは思えんが？」

いえ、それは過大評価だと思われます。

……つか、ここは無礼な態度で委員長を怒らせて、追い出すように仕向けてみよう。

「では、ザフトのお偉いさんである国防委員長様が、俺如き、ただの平隊員を、直接、迎えを寄こしてまで呼び出すなんて真似までして、一体、何の御用なのでございましょうか？」

「ふむ。……その前に貴様に聞きたいことがある」

生意気な態度を少し取ってみたんだけど、軽く流された。

何かこの人、前より手強くなってないか？

……仕方がない、言うことを聞くか。

「はぁ、それでは、もう、何でも聞いてください」

「……先の月での戦闘で、我々の月攻略軍が敗退したことは知っているな？」

「……はい、何でもサイクロプスなる施設を暴走させた連合の自爆攻撃によって、多数の損害が出たことが主たる原因だとは聞いています」

「ふん、耳聡いではないか」

「それはまぁ、ザフト内にも様々なネットワークがありますからね」

俺の場合は主に、艦長ネットワークと整備班ネットワーク、軍医ネットワーク、パイロットネットワーク、それに懇意にしている同期友人の二人から、情報を得ていたりする。

「それでだが……我々が月から撤退した後、地球連合が月根拠地の

プトレマイオスを強化しつつあるとの情報を得ている」
「……Ｌ１の有力な駐留地だった世界樹を失い、Ｌ４が失われた現在では、宇宙で唯一残っている使える拠点ですからね。地球連合にとっては、当然の選択でしょう」
「そうだ。……この強化によって、プトレマイオスが元より持っている兵器生産力と資源採掘力が更に大きくなると考えれば、プラントにとって国防上の大きな脅威になるだろう」
「……そうですね」

もし、茶会の時の仕返しで単独でプトレマイオスを落としてこい、なんてことを言われたら、俺、ザフト、脱走するわ。

「……貴様なら、月拠点に対して、どう手を打つ？」

おっ！

おおっ、まともな質問だった！

って、おい、まともな質問なんだから、真面目に考えろよっ、俺っ！

ええっと、ザラ委員長が言っているのは、現状において、プラントに圧力をかける月拠点に対して、どう対応するか、ってことだな。

……。

プラントにとっての最良は、月拠点の無力化させること……つまり、連合の月拠点を使えなくするか、戦えなくするかで、次善としては、敵戦力を弱体化させることだな。

……むぅ、考えがまとまらないな。

……。

ここは古典に倣おう。

脳内イメージで座禅を組んで……いざっ！

……ぽく、ぽく、ぽく、ぽく、ぽく、ぽく、ぽく、ぽく……ちーん。

……うん、これでいってみよう。

「……そうですね。現在、地球に戦力を吸い取られている上に、月攻略軍が損害から回復できていないことを換算すれば、月への直接侵攻による根拠地制圧は現実的ではありません」

「うむ」

「となれば、考えられる方策は簡単に三つ。一つは、プトレマイオスに対し、大質量を使った攻撃をし掛けて、根拠地自体の無力化を図る」

「……ほう、月に隕石でも落とすとでも言うのか？」

「やろうと思えばできるでしょう。……例えば、Ｌ４の新星を落とすとか」

「……できるな」

でも、連合も必死になって阻止しようとするはずだから、これまで以上にえらい騒ぎになるだろう。

それこそ、今までにない大規模な戦闘が発生するはずだ。

「……ですが、他の中立系月面都市に、環境面や政治面で与える影響があまりに大きいので、使いたくない手です。先だっての戦闘で、Ｌ５を直接攻撃できるマスドライバーの破壊に成功している以上は、言い訳も立ちませんしね」

「……」

委員長は考え込むように瞳を閉ざし、眉間に皺を寄せている。

……。

これは俺の勝手な想像だが……脳内で夫人に、あなたっ、また馬鹿なことを考えてっ、てな感じで、叱られているのかもしれない。

「……次は？」

「正直、大質量攻撃以外での拠点無力化が難しいので、戦力の弱体化を狙いまして……私掠船……海賊を使った、地球－月航路を往来する商船への攻撃で、補給線を脅かす方法です」

「……む、具体的には？」

「アウトロ……げふんげふん……傭兵やジャンク屋に、中古のジンや武器を供給して海賊化し、連合系の商船を襲撃させて、通商の停滞を狙います。メリットとしては、武器の供給以外は自前の戦力を投入しないで済むことですね」

けど、私掠船が活躍していた大昔とは違うから、そのことも考えないとねぇ。

「この方法を使用する際には、物資供給は正規のルートを通じてで

はなく、いかにも、ザフト内の一部の馬鹿が横流しした、とでも見せかけないといけません。まぁ、ばれなければ、それはそれでいいですが、もしも、事が公になった場合は、プラントやザフトのイメージ悪化を最低限に抑えるために、公式に遺憾の意なり、今後の対応を約束するとでも表明する必要がありますからね。実際に調べれば、馬鹿なことをしている奴が絶対にいますから、そいつらを処刑するなりして、”このような件には、我々は断固とした対応を取る”とでもアピールするば、イメージの悪化を更に抑えられます。……やるならば、証拠を残さぬように、慎重に、です」

って、おっさん、呆れた顔をするなよ。

「……貴様も悪辣だな」

「こういうのって、相手の嫌がることをする事が重要かと思うんですが、まぁ、いいや。ちなみに、この方法にも、当然、デメリットがあります」

「海賊が必ずしもこちらの言うことを聞くとは限らない、か？」

「ええ、中立国の商船も狙われるのは確実でしょう。それにばれた時のイメージの悪化は必至ですから、今後の市民感情にも影響を及ぼすでしょう」

まぁ、これは今更かもしれんが……。

……。

気を取りなおして、話を続ける。

「また、戦後のことも考えると……」

「海賊の勢力が増大して、地球圏全体の治安悪化の要因になりかねない、ということか？」

「はい。よって、これはあまり良い方法とは言えないです」

ザラ委員長は、一つ頷くと、再び先を促してきた。

「最後は？」

「これも拠点の無力化ではなく、弱体化を狙う地味な奴です。先程の私掠船による商船攻撃を発展させまして、ザフトを使い、地球－月の航路を組織的に遮断して、連合軍補給艦及び連合船籍の商船を沈める方法……通商破壊作戦です。これで双方が行っている物資のやり取りを出来る限り阻止します」

「……通商破壊作戦か」

委員長は顎に手をやると、鋭い視線で俺を見た。

「若造、確か、地球から月へは食料が、月から地球へは精錬された資源物資が送られているそうだな？」

「ええ、地球と月、それぞれが足りない所を補い合う相互依存関係になっています。よって、これを遮断することで双方の物流を滞らせ、地球に良質の資源物資を送れないようにして地上軍への間接支援とし、また、月に対しては、その生産力の一部を食料生産に振り向けさせることで、少しは資源採掘能力や兵器生産能力を削ぐことができるでしょう。それに、もしも、連合が通商破壊に対抗して、航路防衛に艦隊戦力を貼り付けさせたとしても、それだけでプラントへの圧力を少しは減らせるはずです。……何よりも、この方法なら、特に大きなデメリットもないと思います」

俺の意見を聞き終えた委員長は、再び瞑目して左手で頬杖をつき、もう一方の空いた手は人差し指で机を頻りに打っている。

……どうやら、脳内会議をしておられるご様子。

あれだね、三人以上のザラ委員長が、喧々諤々の議論を繰り返してるんだよ、きっと。

……。

……か、かなり、怖いな。

「ふむ……貴様が言った航路遮断……通商破壊を効率的に行うには？」

「そうですね。……Ｌ１宙域のデブリ地帯に拠点を設けるなんてどうでしょう？　敵の目につき難い上に、敵の主力機動戦力であるＭＡが思い通りに活動できない環境ですからね。それに、地球－月の最短航路上に存在していることを考えると動きやすいですし、Ｌ４方面を経由する迂回航路にも手が出せます」

「使用する戦力は？」

「機動艦隊の正規艦隊は……月のプトレマイオスに睨みを利かせる必要がありますから出来るだけ動かさず、独立戦隊を多数利用するのがベストだと思いますね」

「……よろしい」

……何が？

委員長の言葉を不思議に思って首を捻っていたら、委員長が卓上の端末をいじっている。

「……まったく、レノアの目には驚かされる」

「はぁ、奥様自慢ですか？」

「そうだ」

……けっ、堂々と開き直ってやがる。

あれだけ、茶会の時は、突っ込まれては恥ずかしさで悶絶していたくせによっ。

「ふんっ、……まぁ、貴様にはレノア程の嫁は来ぬだろうな」

「ぐ、ぐっはあぁぁぁっっっ！！！」

な、なんという凄まじい精神攻撃っ！

キィィーーーーーーーー！！

その勝ち誇った顔がっ！

とーーーーっても憎たらしいっ！

「……ぬぬぬ」

「……ふふふ」

睨む俺を余裕の笑みで流すザラ委員長。

くっ、この俺が力負けしているだとっ！

だ、だが、起死回生の手は、俺にあるっ！

「……ざ、ザラ委員長？」

「！」

ふふふ、秘書さんが近づいていることに気付かぬ委員長が悪いの

です。

ニヤリと笑ってやると、ザラ委員長は憮然とした顔を見せて、秘書さんに何やら指示を出した。

「ん、んんっ！　それをこの馬鹿者に渡してやれ」

「は、はいっ」

いや、秘書さん、馬鹿者って言葉に頷かないでよって、おおっ、これはこれは、なかなか結構な母性をお持ちで、って、えっ……何、この……白い服。

「アイン・ラインブルグ、貴様を白服に任命する」

「はっ？」

「……もう一度言ってやろう、若造。貴様を白服に任命する、と言ったのだ」

「な、なんでですかっ！」

俺、緑の方が気楽でいいよっ！

ってか、なんで、赤でもない緑の俺がっ！

「国防委員会では、月での敗退後、連合の月根拠地からのプラントへの圧力を減らすために、新星攻略以外にも、何らかのアクションが必要だと判断していたのだ」

「……」

「その一環として、貴様には、今、貴様が自分で言った最後の案、地球－月航路を遮断する、通商破壊任務を与える」

な、なんてこった。

得意になって、ペラペラ話していたら……とんでもない責任を与えられたっ！

「若造、聞こえているか？」
「ッ！　……な、なんとか、聞こえてます」
「……続けるぞ」
「は、はい」

俺、きっと、顔、今、引き攣ってるよ。

「貴様が指揮するのは独立戦隊規模艦隊。与える任務は先に通りであり、その前に貴様が話したＬ１での拠点構築もしてもらう。戦隊についての詳しいことは後で事務局で聞け。もしも、そこで分からぬことがあれば、貴様が乗組んでいる乗艦の艦長に相談して対応しろ。拠点構築に必要な資材や他に何か要望があれば、これも事務局に言うがいい。……貴様の活躍、期待させてもらう」
「ご、ご期待に添えるかはわかりませんが、任務は了解しました」
「……よろしい、では、下がりたまえ」
「はっ、失礼します」

……俺、初めて、委員長にまともに敬礼したような気がするよ。

にしても、マジなのか、おっさん？

俺に白服着せるってさ……。

28　一夜城作戦　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記修正。

29　一夜城作戦　2

白服に任命されて、俺が隊長を務める戦隊を作り上げることになった。

戦隊の戦力化まで与えられた時間は一ヶ月。

これが短いのか長いのかは俺にはわからないが、為さなければならない以上、自身の全力を尽くすのみである。

……なんて格好いいことを当初は考えていたが、ゴートン艦長や他の皆の助けを借りて、やっとこなす事ができたのが現実だったりする。

いや、ほんとに、自身の限界というものを直視させられたよ。

まぁ、俺自身の反省は置いておいて、とりあえず、今までやって

きたことの概要を話すと……ザラ委員長の計らいなのかはわからないが、指揮する戦隊に配属されることになったエルステッドをドックへと修理に出すのが最初の仕事だった。大破していたエルステッドだったが、大きな修繕箇所はモジュール交換で対応することになったため、全治三週間超との診断が出された。

それと時を同じくして、エルステッドと共に戦隊を構成する艦も、現在の状況において他所から引っ張ってこれる程、現場の戦力に余裕がないため、一から新しく戦力化するようにとの通達が委員長名であった。また、事務局からも新造艦と装備品は一週間後には引き渡せるとの連絡も、同時に受け取った。

これらを念頭に、引き続きエルステッドの艦長職を務めながら、俺の補佐役を兼ねることになったゴートン艦長と相談した結果、エルステッド乗組員には一週間の臨時休暇を与えるように事務局に頼んでおいた。

とはいっても、隊長なんて管理職になってしまった俺には、休暇という社会人の至福は存在せず、乗組員の休暇が終わるまでの一週間の間に、戦隊を立ち上げるための準備室として、アプリリウス軍事衛星港内の倉庫を一つを一ヶ月間借りあげて、準備を進めることになった。

最初の一週間にまずやったことは、同じく管理職組ということで居残ったゴートン艦長とフォルシウス副長と協議して、国防事務局から装備品の補充予定一覧と共に受け取った新規配属人員リストと現在のエルステッド乗組員名簿から、戦隊のそれぞれの艦の役職や配置を決めることだった。

ちなみに事務局から受け取ったリスト……補充装備品のはともかく、新規配属人員のはアカデミーの卒業前とあってか、前部隊で素行に問題があるとして放り出された奴や、士官学校を卒業はしたが

一定の能力に達していない判断されて更なる訓練を課せられていた、所謂、落ちこぼれと呼ばれる者達ばかりだったのが印象的だった。

まぁ、赤ではなく緑からの白服抜擢である以上、事務局も優秀な人材を委ねたくないという意思が働いたんだろう。

けど、人間なんて、遺伝子だけで全てが決まるなんてことは絶対にないんだから、こちらで相応に鍛えて、育てればいいだけの話だ。

別段、気にすることでもない。

……で、一週間後、新規配属人員を合わせた乗組員が再召集されると直に、全員に戦隊が新規編成されることと各員の役職と配置を告げ、戦隊に用意された新造艦【ＦＦＭ－１６１】ハンゼンを受領し、前エルステッド副長ウラディミル・フォルシウスを艦長に、前エルステッド火器情報管制班長ミハイル・ガンドルフィを副長に据えて、狭い艦内だが、既存乗組員と新規配属組とを全員放り込んで、二週間の予定で慣熟航海へと出した。

また、ハンゼンには、エルステッドに艦載されていたジン４機と装備品として新たに受領した、ジンの機動性を向上させた改良型である【ＺＧＭＦ－１０１７Ｍ】ジン・ハイマニューバを２機載せておいた。六人の新任ＭＳパイロットと彼らの小隊長を務めさせることにしたデファン、マクスウェル、リーに小隊訓練をさせるためだ。

そのために、三人にはラインブルグ小隊の名物【初心者の君もこれで一人前のＭＳ小隊員！　ようこそ地獄から天国へ至る集中特別訓練コース】を全てこなしてくるようにと、消化する訓練内容を渡しておいた。

それと同時に小隊長になる三人には、ジンＭ型への機種転換訓練を別にこなすようにと言いつけることも忘れてはいない。三人揃って青い顔をしていたが、そんなものは当然無視である。

フォルシウス副……艦長のことだ、ハンゼンの帰港予定日まで毎日、乗組んだ全員が休む間もなく、訓練漬けにしていることだろう。

けど、ここは自身が成長するための経験、生命を失わないための代償ということで、割り切って我慢してもらおうと思う。

で、ハンゼンに加わらずにプラントに残っている俺本人なのだが、別に遊んでいたわけではない。

間借りしている軍事衛星港の戦隊立上げ準備室で、ＭＳ隊副官兼隊長秘書を担当させるために残したレナに、地球連合が使用している地球一月航路に関する情報や遮断するために必要になりそうな情報、現在のＬ１宙域の情報をかき集めさせて、ゴートン艦長や前エルステッド航法通信管制班長で現エルステッド副長となったリュウ・ミンリンと、どのように月にある連合軍の目を騙しながらＬ１宙域に入り、デブリ帯のどこに、どのような拠点を置き、拠点構築のためにどんな物資がどれ程必要かを考え、また、間違いなく遭遇すると予想されるジャンク屋にどう対応するかも検討し、地球一月間を行き来する輸送船団や商船にどのような攻撃を仕掛け、もしも護衛部隊が存在した場合はどのように翻弄するか、といった具体的な作戦全体像を構築したり、四人で物資申請書類を沢山書いて事務局に大量に提出して、戦隊で使用しそうな物資を多く確保しよう画策したり、ゴートン艦長から白服としての、指揮官としての心得を伝授してもらったり、新たに俺の乗機になることになった【ＺＧＭＦ－５１５】シグーの機種転換訓練を同じくジン・ハイマニューバに機種転換するレナと行ったりと、まぁ、色々と忙しかったのだ。

ほんとに、あまりの忙しさに体重が５ｋｇ痩せたくらいだよ？

どうせなら、勝ち組のザラ委員長みたいに、おんにゃ……げふんげふん……って、あっ、シグーへの機種転換で思い出した。

俺が新たに搭乗することになったＭＳ、シグーは、ジンと操縦系が若干異なる仕様だったために機種転換でかなり梃子摺らせられた。とは言ったものの操縦系に慣れたら、どちらかというと機体形状に丸みを帯びているジンよりも、よりシャープになっている外見が格好良くみえたりするから、我ながら現金なモノだと思う。

でも実際、性能面でも、スラスターや姿勢制御バーニアの改良により機動力や運動性も上がっていることから、案外、いい機体だな、という感触を抱いている。

だが……。

……。

だが……機体の色が……色が……黄色なのだ。

何故に、黄色なのか？

それはもう、見事なまでにカラフルなイエローである。

本当、目が痛くなる程に、色鮮やかなイエローである。

宇宙の闇色の中でも、太陽の輝きを受けて燦々と目立ってしまう、イエローである。

戦隊モノでいうと、色々とイロモノに位置づけされることが多い、イエローである。

あまりにあまりな色なので、すぐに事務局に文句の連絡を入れたよ。

……そしたら、苦情に対応した事務員が何て言ったと思う？

委員長の指示です、だぞ？

悲しいかな、いくら白服になった俺でも、最高指揮者からの公の指示を覆せる権限はないため、泣く泣く受け入れるしかなかった。

……これはあれか、俺を戦場で亡き者にするための、委員長の遠回しな陰謀なのだろうか？

まったく、茶会の一件での仕返しにしては、あまりにも幼稚でかつ洒落にならない仕返しとは思わないか？

いや、確かに、俺が目立つことで、他の連中が目立たなくなる利点もあるから、一概に悪いとは言わないけどさ。

……とりあえず、何らかの方法で、こちらもやり返してやろうとは考えている。

んんっ、そんなこんなで、日々を忙しく過ごしてきて……もう明日は、ハンゼンの帰港日である。

二艦分の人員を一艦に押し込んだのだから、当然、かなり狭苦しい思いをしただろう。

でも、だからこそ、色々な所で自身の好悪に関係なく、様々な意思の疎通や妥協を嫌でもしなければならなかったはずだ。

それに、フォルシウス艦長を初めとする副長や各科班長、ＭＳ小隊長といった幹部達には、もしも乗組員に殺しきれない不満が発生したら、不満の矛先を俺に向けるよう、それとなく誘導するようにとも言っておいたから、俺を共通の敵にして、少しは協調性も生まれているだろうしね。

よくもこんな劣悪な環境に放り込みやがって、何様のつもりだ、あの野郎！　っていう感じで、俺は大いに怨まれるだろうがな……。

◇　◇　◇

８月２８日。

宇宙機動艦隊から一定の権限を与えられた独立戦隊規模艦隊、公称【ラインブルグ隊】が正式に発足することになった。

戦隊の戦力構成は【ＦＦＭ－１１３】エルステッドと【ＦＦＭ－１６１】ハンゼンの二艦と艦載ＭＳの【ＺＧＭＦ－５１５】シグーが１機、【ＺＧＭＦ－１０１７Ｍ】ジン・ハイマニューバが４機、【ＺＧＭＦ－１０１７】ジンが６機で計１１機となっている。

ちなみに艦載ＭＳが二艦のＭＳ艦載限界数である１２機ではなく１１機なのは、別に俺が手配し忘れたわけではない。

任務が任務だけに、【ＺＧＭＦ－ＬＲＲ７０４Ｂ】長距離強行偵察複座型ジン……いわば索敵に特化した特殊機を準備して欲しいと、任務を言い渡されて、委員長室を出たその足で国防事務局にお願いしに行っておいたのだが、どうも手続き中に手違いが起きたらしく、パイロットとＭＳが別の隊……確か、ユン・ロー隊だったかな、その隊に配属されてしまったらしいのだ。

渡された確定装備品リストに含まれておらず、また、一向に補充に関する連絡がないことを不思議に思って連絡すると、何やら向こうがドタバタし始め、平謝りの謝罪と共に手違いがあったと告げられ、至急、人員とＭＳを準備しますと言い出したもんだから、あの堅実無比な国防事務局でも失敗があるんだなって、その時は驚いたものだよ。

そんな具合に事務局が約束してくれた補充なのだが、新星……今は改名されて【ボアズ】をＬ５に運ぶミッションで受けた被害を埋めたり、うちとは別に新しい戦隊が戦力化されたり、地球への戦力

投入が続いていたりしている現状では難しいことが予想されるため、恐らく、士官学校の卒業が終わる9月以降になってしまうだろう。

……現実、間に合っていないしね。

まぁ、ちょっとした齟齬があったとはいえ、ラインブルグ隊は概ね戦力化が成ったのだ。

まさに、この一ヶ月間の苦労……ゴートン艦長やフォルシウス副長と共に、古の伝説にあるジャパニーズＢＩＺＩＮＥＳＵＭＡＮの如く、不眠不休で７２時間戦いながら、艦の人員配置と役職について悩みながら決めていったり、地球－月航路遮断作戦の全体像を作り上げるのに、宇宙港に残った四人で目の下に隈を作りつつ、様々な情報を収集し、唸りながら一つずつ可能性を検証して、案に積み上げていくという、精神と頭脳を消耗させる地味な作業を延々と続けたり、ジャンク屋への対応で、建設作業が終わるまで身柄を拘束するか、逆に強引にでも契約を結んで建設作業に参加させるかで対立したり、機種転換訓練では新しい操縦系に慣れるために全身の感覚を機体に合うようになるまで、意識を失いかける寸前まで訓練宙域を飛び回ったり、ハンゼンが帰港した後、ＭＳ隊の後輩や主要幹部、新しい面子と元からいた連中から、様々な苦労や要望、愚痴とも取れる報告を我慢して聞いたり読んだり、事務局に物資申請の要望が大多数却下されてしまって大いに凹んだり……が報われた瞬間である。

ほんと、よく、俺、やり遂げられたよなぁ。

……。

いや、この自惚れが駄目なんだよな。

これは皆の協力があってこその目標達成だ。

俺の独力じゃ、絶対に出来なかったことなんだ。

うん、本当に、皆には感謝しないといけないな。

……。

さて、苦労話はここまでにして、ついさっき、宇宙機動艦隊司令部から、正式にＬ１での拠点構築と連合の地球一月航路遮断の作戦任務書を受け取った。

三日間の休暇の後、９月１日には出港して、最低３ヶ月間の任務に取り掛かる。

正直、どういう結果になるかはわからないが、できる限り、戦隊の人員に被害が出ないようにだけはしたい。

うん。

気が抜けず、胃と頭が痛くなるような日々が始まるが、何とか乗り切っていこうと思う。

にしても、公式な隊名に、自分の苗字がつくなんてさぁ。

……正直、勘弁してくださいって感じだよなぁ。

29　一夜城作戦　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

30　一夜城作戦　3

9月2日。

当初の予定よりも一日遅れて、地球に展開している地上軍への補給物資や補充兵を輸送する輸送船団に混じり、俺達の戦隊もアプリリウス軍事衛星港を出港した。

もっとも、俺達の戦隊が目指すのは輸送船団と違い、Ｌ１宙域のデブリ密集地帯になる。

その向う先であるＬ１だが、地球一月を最短で結ぶ線上にある最も重要でかつ便利な場所だ。当然、月の連合軍拠点からの監視も厳しいだろう。いわんや、プラントから直接向かおうものなら、大いに警戒されてしまうはずだ。

ならばということで、俺達の目的を少しでも連合に悟られないためにＬ１へは直接向かわず、敵の目を誤魔化す欺瞞行動として、地球行きの輸送船団に混じって出港することにしたのだ。

そして、地球一月間に幾つか存在するデブリベルト……ここ半年に起きた一連の戦闘の名残やラグランジュポイントから外れてしまったユニウス・セブン、世界樹崩壊で生まれた大型デブリ、コロニー建設時や宇宙船の航行中に発生した事故等で撒き散らされた資材や破片、宇宙船の通常運航で常時発生する剥がれた塗料や不完全燃焼した推進剤の残り滓、不心得な廃棄業者が捨てた廃棄物等々で構成された大量のデブリが地球の引力に引かれて地球と月の間を周回しており、それらが幾つかの大きな帯になっている……の中の一つ、Ｌ１に繋がるデブリベルトで輸送船団と分離し、ベルト内を通って、デブリの巣というか、暗礁宙域になりつつあるＬ１宙域へと向かう

予定である。
後、ついでに述べれば、国防事務局を通して、ヤキン・ドゥーエの艦隊に月への威嚇や牽制も含めた訓練として、Ｌ２方面……月の裏側を狙うような動きをしてもらうよう、ザラ委員長にお願いしているので、地球方面への監視の目も少なくなっているはずだ。

まぁ、それでも、デブリの中を行くという非常に危険な航行であることには変わりない。けれど、、艦の運航や運営に関して、とても信頼できる艦長が二人もいるのだ、全て委ねれば、万事上手くいくだろう。

そんなわけで、俺は艦の航行や運営には口を出さず、ＭＳ隊の訓練時以外は基本的に自室兼隊長執務室で各艦から上がってくる日々の報告書を読んだり、隊員からの要望メールを決裁している。

ちなみに、今現在も、次のシミュレーター訓練まで時間に余裕があるので、一つずつ丁寧に読んでいたりする。

えーと、何々、ハンゼンの食堂の飯がエルステッドよりも不味いから何とかしてくれ？

……むぅ、これは主計班員が単に料理下手なのか、それとも経験不足なのか？

一応は、ハンゼンの主計班長にこの意見を回しておくべきだな。

至急、具体的な対策を講じるように、と書き添えて……ハンゼン主計班長宛で、送信と……。

次は……おおっ、両艦の整備班長からだな……むむ、整備の効率化の面から弾薬の共通化が望ましいと来たか。

……。

シグーのシールドバルカン……一体化しているから取り回しが悪くて、逆に使いづらい面があるから、外してもらってもいいなぁ。

後、M型の新型突撃機銃と従来型突撃機銃の銃弾規格があわないのか……。

……。

これはまず、新型突撃機銃の使い勝手を聞いて見るか。

「レナ」

「はい？　何か間違いでもありましたか？」

「いや、それは大丈夫だよ。少し、聞きたいことがある」

同じ部屋で要望メールや報告書類の仕分け整理をしていた、ＭＳ隊副官というよりも、隊長秘書と先に呼んだ方がいいのではないかと思うくらいに事務作業をこなしてくれているレナに、先の疑問を問いかけてみる。

「うーん、新型の使い勝手自体は以前と変わりはないですよ」

「そうなのか？」

「はい。ただ、装弾数が増えているので気が楽ですね」

「……むぅ、それは確かに有難いな」

以前、弾切れを起こして困った事態を経験したことがあるだけに

考えさせられる。

「なら、いっその事、ジンの突撃機銃を新型に更新してしまうのも手だな」

「でも、反動の関係もありますよ？」

「……うっ、確かに、射撃時の機体バランスにも関係してくるか」

……一応、整備班で対応できないか、聞いてみてもいいな。

「よし、俺は両整備班長にジンに新型を装備できないか聞いてみるから、レナはパイロット連中にこの件に関する意見を上げるように各小隊長に連絡を入れてくれ」

「わかりました」

レナに指示を出した後、二人のＭＳ整備班長に共用回線で連絡を取り、全機の武装を新型突撃機銃に更新できないかを聞くと、その場で両整備班長による技術面に関する話し合いが諤々と為されることになった。

「シゲ班長、ジンだと、ＪＤＰ２－ＭＭＸ２２の反動は厳しいんじゃないですか？」

「まぁ、おめぇの言うとおり、小口径化に対応するために装薬が強化されてるし、厳しいだろうなぁ」

「なら、どちらかといえば、ＭＭＩ－Ｍ８Ａ３に統一した方がいいんじゃないでしょうか？」

「だが、それだと、折角伸びた継戦能力が短くなっちまう」

「うーん、なら、その反動をコントロールできるように、ＯＳから調整した方がいいですね」

「それでも、機体に係る負荷が大きくなるから、ある程度強化案を出すべきだろうな」

「……でも、ジンの重突撃機銃じゃ、ＢＯｕＲＵ様の装甲を破れなかったりするんですよねぇ」
「あたぼうよっ！　我らがＢＯｕＲＵの傾斜は実に理想的なんだぞっ！　それに、正面から当たっても二、三発じゃあ、まずは破れないだろうよ」
「ですよねぇ。……本当に、あの生身の女にはない、あの理想的な曲線は……はぁはぁ……」
「ふっ、後で、ＢＯｕＲＵの調子を見に行こー」
「くっ、シゲ班長！　あなたって人はっ！」
「くくく、悔しかろう悔しかろう」
「く、悔しい……でも、負けない！　いつか、ハンゼンにだって！」
「何時になるだろうねぇ」
「う、うぅぅぅ、隊長！　何でハンゼンにはＢＯｕＲＵが配備されていないんだっ！」

……途中から、如何にＢＯｕＲＵが素晴らしいかというシゲさんの演説に変化していったのは御愛嬌だ。

結局、新型突撃機銃の更新に関する話を伴ったＢＯｕＲＵ談義……じゃなくて、新型突撃機銃の更新に関する話は、後日、改めてパイロット連中の意見を集約してから、ということになった。

ＢＯｕＲＵ導入を求め、しつこく食い下がるハンゼンの整備班長を何とかなだめて通信を切り、ふと、時計を見ると既に一時間近く画面にずっと向かっていたことに気がついた。なので、ここらでちょっと一息でも入れようかとシートから立ち上がろうとしたら、レナが俺に質問してきた。

「アイン先輩、Ｌ１で拠点を構築するって言っていましたけど……具体的にはどこに作るんですか？」
「そうだな……実際に、行って見ないことにはわからないが……」
「……わからないが？」
「……秘密」

うわっ、もったいぶるなんて鬼畜です、なんてレナの抗議を流しながら、固まった関節を解すため、靴裏の吸着レベルを最大にして背筋を伸ばしたり、肩を回したり、腰を捻ったり、足を軽く振ったりする。

……ああ、気持ちいいなぁ。

俺が韜晦して答えないとわかったのだろう、不承不承とした感じで話題を変えて、今度は揶揄するような目をしながら、話しかけてきた。

「……でも、先輩も無理しますよね」
「何が？」
「輸送艦のことですよ」
「ん？　ああ、あれか……。あれは最終的には返すつもりだから、そんなに無理なことは言ったつもりはないよ」

当初の予定では所属艦二隻にコンテナでも引っ張らせて拠点構築資材を運ぼうと考えていたのだが、先のＭＳ補充に関する失敗を突いて、事務局から余っている輸送艦を一隻分捕ろうと考え直したのだ。

しかし、残念なことながら、通常型輸送艦がちょうど出払ってしまっており、仕方なく余り物の降下カプセル輸送艦を借り出して、そのカプセル内に資材を放り込んだ。

流石に余り物だっただけに人員の確保ができなかったから、二隻から航法と機関要員を集め、エルステッドの新しい航法通信管制班長アーサー・トラインに臨時艦長を勤めさせている。

「本当ですか、先輩？」
「ああ、もちろんだよ」

……とは言ったものの、受領手続きの時、ちょんぼした事務員が影で半分泣いていたからなぁ。

行政局時代の俺を髣髴とさせる姿だっただけにちゃんと返してやりたいもんだ。

……。

うん、ちょっとは、気分転換が出来た……かな？

「さて、もう一頑張りしないとな。……まったく、一向に減らない要望メールを決裁していると、よくこれだけ、要望が出てくるなって驚かされるよ」
「ほんとですよねぇ」
「とはいえ、レナが今みたいにメールの作成や送信処理をしてくれたり、要望や報告書を振るい分けて整理してくれたりしてくれるから、こっちは助かるよ」
「ふふ、そう言って貰えると私も頑張る甲斐がありますね」
「ああ、ほんと、助かってます。だから、今度プラントに戻ったら、何か美味いものを食いに連れて行くよ」
「えっ、本当ですか！　だったら、前みたいに美味しいところを是非、お願いしますね！」

レナもティーンエイジの後半に差し掛かりつつあるとはいえ、こういった反応をするあたりは、まだまだ、子どもらしさを感じさせる。

……そういう風に感じるってことは、俺も歳をとったってことだよなぁ。

「？　先輩、どうかしたんですか？」

「いや、なんでもないよ」

ポニーテールを揺らしながら、不思議そうに首を傾げるレナの姿は、どこか小動物を思わせる、愛らしいものがあった。

◇　◇　◇

デブリの川を極力推力を用いずに慎重に進んでいくという難しい航行は、中型デブリの衝突による軽微な損傷といったアクシデントを伴なったが、立案当初に予想していたよりは順調に進み、三隻とも無事にＬ１宙域へと入った。

前が見えないほどということはないが、かなりの量のデブリが放りっぱなしで漂っているため、視界が悪くなっている。だが、これならば、レーダーが効く状況であっても早々に発見されることはないだろう。もっとも、それだけ、隠れ場所が多いということでもあるので、索敵なりを頻繁に行うか、監視衛星なりを随所に配置しなければならない。

とりあえず今は、連合軍が監視のための戦力を置いている可能性もあるので、第一種警戒態勢を発令し、デブリ帯での実機訓練も兼

ねて、ハンゼンのＭＳ隊に索敵を行わせている。

俺も艦橋にあがって、いつもの如く艦長席の隣に立ち、ＭＳ隊から入る報告を待っている。その間、ずっと艦橋からデブリ群を見ているのだが、どうしても、計画段階では”ない”と結論付けた危惧を再び懐いてしまう。

「……このデブリ、擬態された監視衛星を置かれていたらやっかいだな」

「確かに、ここに監視衛星を紛れ込ませるような智恵者がいたらやっかいだけど、プラントの観測衛星では世界樹攻防戦以降は月からＬ１には、連合軍が入った様子はなかったじゃないの。艦隊戦力も新星……ボアズを奪還するための攻撃で忙しそうだったし、地球へ向かう連合の輸送船団はＬ１の暗礁地帯を避けるために、宙域外縁を通ってるしね」

「まぁ、そうなんですけどね」

呟いた独り言をゴートン艦長にやんわりと窘められてしまった。

……むぅ、どうも、神経が過敏になっているみたいだな。

「まぁ、ラインブルグ君も隊長って役職についたから、そう過敏になるのも仕方がないだろうけどさ、もう少しリラックスした方がいいよ」

「……いや、普段はリラックスさせてもらってますからね。こんな時くらいは、過敏になってますよ」

「ふふっ、そうかい？　……まぁ、程々にね」

これも若人を見守る年長者の役目といわんばかりの艦長の様子に、

気恥ずかしさを感じつつ、意識して話を逸らす。

「そういえば、輸送艦っていうか、アーサーの調子はどうですか？」

「定時連絡では青白い顔をしつつも、頑張って気丈な振りをしているから、いい経験してるんじゃないかな？」

「……俺と同じように胃を痛めてるんだろうなぁ、きっと」

「まぁ、責任のある立場になったら、誰だって最初はそうさ」

……はい、俺のことを言っているんですね、わかります。

なんて、被害妄想のような考えを頭の中で弄んでいたら、索敵に出ていたＭＳ隊から連絡が入った。

「デファン小隊、月方面に敵影を確認せずっす！」

「マクスウェル小隊もＬ４方面に敵を発見できませんでした」

「……こちら、ラインブルグ、了解した。両小隊とも、今度は前もって指示した通り、Ｔ７宙域に先行して、そこにある大型デブリ周辺をよく調べて欲しい」

「「了解」」

両ＭＳ小隊長からの通信を切って、ゴートン艦長を見やる。俺の視線を受けた艦長は心得たように、艦橋スタッフに指示を出し始めた。

「航法はＴ７宙域に艦を進めて。索敵は敵影なしの報告があったからって気を抜かずに周囲を警戒してよ。通信はハンゼンと輸送艦にＴ７宙域に進出する旨を伝えてちょうだい」

「「「アイ、艦長」」」

……いつの間にか、スタッフの躾がしっかりとできてますねぇ。

「さて、これから本格的な任務開始になるんだけど……」
「ええ、ボチボチと息切れしないように頑張りましょうか」
まずは、ここに拠点を構築しないことには、任務は……短期ならできないことはないけど、長期的には無理だしね。
……でも、拠点構築、何気に結構な建設プロジェクトになってるんだよなぁ。
上手く出来たらいいけど……。

３０　一夜城作戦　３（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

31　一夜城作戦　4

今回の通商破壊任務に先駆けて、Ｌ１に拠点を構築することになり、気を使ったことが二つある。

それは、拠点の隠蔽と安全だ。

拠点の隠蔽とは、簡単にいえば、連合軍から拠点を分からなくする、あるいは見落とさせるために行う擬態のことだ。とはいえ、Ｌ１という場所が月から目と鼻の先にあるだけに、月にある連合軍の目も厳しいだろう。そのため、この隠蔽は重要でかつ難しい問題となっていた。

これを何とか解決するために、デブリ帯の中に拠点を構築するなんて荒業に出たのだが、今度は構築する拠点にデブリが衝突する危険が常に付きまとう事になってしまった。そこで、拠点の安全を何とかするために目をつけたのが、Ｔ７宙域にある大型デブリなのだ。

艦載観測機器で捕捉され、メインスクリーンに映し出された件の大型デブリを見ていたら、二人の小隊長から再び通信が入った。両者共に報告する声には、困惑の色が若干混じっている。

「Ｔ７宙域に到達したっすけど……」

「これは……コロニーですか？」

「ああ、マクスウェルが言った通り、旧世界樹コロニーの居住区画

だ。両小隊は、そいつの周辺及び内部が安全かどうか、調べて欲しい」
「了解っす。……マクスウェル、うちは内部に行くっすよ？」
「ＯＫ、俺の小隊は外を回るよ」

二人のやり取りが通信系から聞こえてくる。小隊長としてハンゼンに移した二人の間で、上手く意思疎通が出来ていることが確認でき、ほっと息をついてしまう。そんな具合に安堵していたら、じっとメインスクリーンを見ていた艦長が独り言のように問い掛けてきた。

「中……どうなっているかねぇ」
「……連合軍が世界樹のザフト拠点化を嫌って、コロニーを爆破したとしても、いくら何でも、住人の避難は絶対にさせるはずです。流石に、犠牲者が浮かんでいるなんてことはないでしょう」
「……うん、普通はそうだよねぇ」

ザフトに参加する以前、貨物船の船長をしていたらしいゴートン艦長にとって、【世界樹】は思い出深いものだろうから、それだけに、今の変わり果てた姿をモニター越しとはいえ見てしまうと、色々と考えてしまうのかもしれない。

けれども、そんな自身の思いを、沸きあがって来るであろう様々な感情を上手く韜晦して隠すあたり、ゴートン艦長のすごいところだと思う。

「索敵、月方面に動きがないか、特に注意してね」
「アイ、艦長」

現に今も、先の感慨以上のものは表に出さず、艦橋スタッフへ通

常と変わりなく指示を出している。

……大丈夫だと、暗に示している以上、艦長の心情にはもう触れない方がいいだろう。

そう結論付けて、再び目を正面のスクリーンへと移す。

映し出されているのは、世界樹の居住区画であった円柱シリンダー型の閉鎖コロニー……円周直径３ｋｍ、長さ１０ｋｍを持つが、一般的に島三号と呼ばれるシリンダー型コロニーの半分程度だ……を見つめる。

どうやら、世界樹攻防戦時に連合軍によって爆破された際に大きなブレーキがかかったらしく、遠心力で内部に擬似重力を生み出す回転をほぼ失ってしまっている。また、原型を残しているものの、大きな破損があちこちに見られることから、間違いなく中の空気は抜けてしまっているだろう。

何よりも、姿勢制御が不可能な状態になっている以上は、この旧居住区画もいつまでもこの場に留まり続けることが出来ないはずだ。

しかし、これだけの大型デブリというか、お宝というか、資源というか……とにかく、このままデブリとして放ったままにして、資源を無駄にするなんて勿体ないことは、性格的にも、心情的にも、経済的にも、俺にできることではなく、拠点構築のために有効利用させてももらうことにしたのだ。

そう、俺は、このコロニーを隠蔽とデブリ避けの外殻として使おうと考えている。

まったく、こんな”たからもの”をそのまま放棄するなんて、勿体無いないお化けが出るぞぉ、むしろ、俺が勿体無いお化けになってやるぞぉ、なんてことを考えていたら、また、ＭＳ隊から連絡が入った。

「区画内部は回転にブレーキがかかった際に大きな力を受けたらしく、無茶苦茶に壊れてる上にデブリになってあふれてるっす」
「コロニー外壁は多数の穴が開いているため、下手に衝撃を与えると分解する可能性もありそうです」

……ふむ、内部はデブリで溢れている上に、外部は分解する恐れね。

「わかった。後、宇宙港がどちらかの先端にあるはずだ、最後にそこを見てくれ」
「了解」
「隊長になっても、先輩は相変わらず人使いが荒いっすよねぇ」
「……んん、何か言ったか、デファン？」
「い、いや、ちゃんと了解したって言ったすよ！」

減らず口を叩くデファンに苦笑しながら、艦長に相談してみる。

「外殻の分解はまぁ、大丈夫なものと交換なり、他のデブリで補強なりすれば何とかなると思いますが、内部のデブリはどうしたらいいと思います？」
「……そうだねぇ。何にも気にしないでいいならビーム撃って、消し飛ばすんだけどねぇ」
「それをすると、月の連合軍にバレてしまう可能性がありますからね」

……そうだな。

取り敢えずは、使える場所を確保すればいいんだし……そこらへんに浮いている外れた外壁をＭＳに持たせて、ドーザーブレード代わりにしてデブリを除去させてみるかな。

後、構造体の中心軸で延びているリニアモーターレールも一定の長さで切り離したら、別の何かに使えるかもしれない。

「まぁ、ＭＳが使えるんだし、楽観的に考えて、上手いことやろうよ」

「そうですね」

うん、宇宙では万能建機でもあるからね、ＭＳは……。

「……取り敢えずは、欲しい部分に目星をつけて、後はさっさと切り離した方がいいですかね？」

「いやいや……それは拠点になる簡易コロニーを作ってからでもいいんでないかい？」

「……なら、先にデブリ除去とスペース確保を済ませて、簡易コロニー建設終了後、ってところですね」

「うん。それがいいと思うよ」

拠点として使う簡易コロニー……なんて、いかにも凄い物なんだぞ、って感じで言っているが、実のところ、ただ、長い棒の先に箱をつけた代物である。これをブンブンと円軌道で回して、遠心力でもって箱の内部に擬似重力を発生させるのだ。

……。

Ｌ１に拠点を構築するために用意した資材を具体的に述べれば、遠心力で擬似重力を生み出す為の回転軸機構と宇宙艦船が二隻分くらいは収容できる簡易宇宙港の一部、常用と予備で二つの循環空気用大型エアクリーナー、同じく二つの酸素発生装置、空気作成用大型液体窒素タンク、様々な用途に使う大型水タンクを満タンにして十個、大型ラジエター、ＦＦＭでも使っている燃料電池システム、大量の非常用バッテリー、四つの箱型居住ブロック、居住ブロックと回転軸に繋ぐ長さ１０００ｍの支柱兼エレベーターシャフトを作るためのリニアモーターレールとその外壁板が沢山、シャフトと居住ブロックの連結を補強する骨格材、居住ブロック用の救難艇、姿勢制御用モーメンタムホイールが幾つか、太陽光発電ミラー、放熱パネル、他諸々といったものだ。

これらのパーツをそれぞれつなげて、観覧車みたいな簡易コロニーを作り上げるのだ。

……むむ。

あ～、あれだね、昔のレシプロ飛行機で例えれば、プロペラ部に四枚あるブレード部分がエレベーターシャフトで、その先に居住区画がくっ付いている。んで、プロペラを回す回転軸につながるエンジン部分に生命維持関連の装置や宇宙港があるって、いえばわかるだろうか。

……わかりにくいか。

とにかく、この四つの居住区画を毎分一周半超ぐらいで回すことで、地球の三分の一程度の重力を発生させて、長期滞在というか少しでも重力空間で休めるようにするつもりである。

で、これら簡易コロニーを宇宙放射線やデブリの衝突、外からの観測から守るために、大型デブリ、もとい、旧世界樹コロニーの居住区画の外壁を外殻として使って、周囲を覆うつもりなのだ。そして、その外壁というか建設する拠点の外殻部分には、居住区画外縁側宇宙港付近を使おうと考えている。

旧世界樹コロニーの宇宙港施設の損傷が手に負えないようなら断念するが、手に負えるようならば、大いに修理と改造を施すつもりだ。大きい宇宙港があれば、それだけ拠点の艦船収容能力が大きく増えるしね。

宇宙港について考えていたら、その宇宙港を見に行かせた二つの小隊から連絡が入った。

「先輩、こちら、デファンっす。ざっと見た感じ、宇宙港付近はちょっと損傷している程度っすね」

「こちらマクスウェル。内部のリニアレールはそれほど損傷していない様子です」

「……了解した。これから戦隊を宇宙港に入港させる。ガイドビーコンや誘導ビームがない入港だからな、お前達に内部への誘導をしてもらいたい」

「了解っす」

「わかりました」

ということで、後は艦長にお任せするだけである。

「皆、ラインブルグ隊長の話を聞いてたよね？　……航法、特に大

変だろうけど、君の腕を信頼しているから全て任せるよ。通信、ハンゼンと輸送艦に今の指示を伝えてちょうだい、後、ＭＳ隊とは連絡を密にするんだよ？」

「アイ」

「了解」

いつもの気の抜けた調子での艦長の指示なのだが、艦橋スタッフはすぐにキビキビと返答して行動に移る。

……いや、ほんと、いつの間にこんなに仕込んだんだろうか？

不思議そうな顔でスタッフを眺めていたことに気がついたのだろう、艦長が俺の疑問の答えを教えてくれた。

「すべては完熟航海で受けたフォルシウス艦長の薫陶のお陰だよ」

「……フォルシウス艦長なら、薫陶って言うよりも、鋼鉄の規律の方が合うんじゃないですか？　鬼の副長ならぬ鬼艦長って感じで」

「はは、もしも、そう部下に言われているなら、彼はきっと本望に思うだろうよ」

「……そうでしょうね」

……厳しい訓練が実戦で命を助ける、ってことだよな。

確かに、それで艦が沈まないで済むなら、死なないで済むなら、安いもんだろう。

……。

……メインスクリーンに宇宙港が映し出された。

……。

これから、たぶん、某計画Xに取り上げられるてもおかしくない、拠点建設に苦闘する日々が始まるだろう。

戦隊の皆にはきっと苦労をかけるだろうが……今後のために、為さねばならないことなのだ。

そう、たとえ、何を犠牲にしたとしても！

うん、実はそうなんだ、犠牲になるのは、他人じゃなくて、俺の胃や頭髪なんだ。

……ううん、何か問題が起こるたびに、きっと胃を痛くしたり、頭を掻き毟るんだろうなぁ。

31　一夜城作戦　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

32　一夜城作戦　5

１０月１５日。
戦隊員の驚異的な頑張りによって、Ｌ１の拠点構築は完了した。

その名も、ザフトＬ１宇宙拠点【世界樹の種（Ｓｅｅｄ　ｏｆ　Ｗｏｒｌｄ　Ｔｒｅｅ）】だ。

拠点を監視の目やデブリ等から守るために旧世界樹の外壁を再利用して外殻として使っていることから、世界樹から落ちた種に見立ててみた。また、同時に、世界樹コロニーが再建されるようにとの願いも名前に込めているので、その願いが是非叶って欲しいと思う。

というわけで、拠点完成を祝って、稼動した簡易コロニー内で完成祝賀会を人員交代しながらやっていたりする。一ヶ月以上、碌な休みもなく、心身共に苦楽を共にして作業に携わってきただけあって、皆、とても嬉しそうであり楽しそうだ。

まぁ、それもわかるというものだ。

いくら重力ポテンシャルでこちらが優位にあり、デブリ帯の中、それも旧世界樹の中での建設作業であるため、外からは比較的隠蔽されている状態になっているとはいえ、目と鼻の先に敵の一大根拠地があると落ち着かないのだ。

……まぁ、実際には今も状況は変わっていないのだが、建設作業中と通常業務中とではあまりにも置かれている状況が異なるからな。

それに、Ｌ１付近というかデブリ帯外縁部が航路として使われているため、地球と月を往復している連合の護送船団や通常の輸送船団、商船を光学観測で捕捉することが多々あったりする。

その度に、内部での建設作業を中断して息を潜めて、熱や通信が外に漏れないように気を使ったり、外で作業しているＭＳ隊に近くにデブリに退避させたりしていた。外殻に太陽光発電ミラーを取り付けていた時なんて、船団を発見するのが遅かったため、作業していたＭＳにデブリに擬態させたりもした。あの時は、いつ気付かれるかと、冷や汗が止らなかった。

それに、建設作業も大変だった。

まず、デブリの除去が大変だった。本当にどれだけ除去に励んでも、減らないこと減らないこと。しかも、大小様々なものが浮いていて視界が悪く、運悪く間接部カバーを破ったデブリが間接部に詰まる事故も起きたりした。

……急に間接が動かなくなった時は、何事かと思ったよ。

単調でかつ終わりが見えにくいデブリ除去をうんざりしながらも何とか片付けて、ある程度目処が付いたと思ったら、今度は構造体中央のリニアモーターレールの排除に時間がかかった。流石に、構造体の要でもあったため、分厚く、硬かったのだ。

あまりの頑丈さに剥きになって重斬刀でぶっ叩いていたら、建設現場の監督を務めるシゲさんに何をしているのかと呆れた顔されながら連結部分を締め解くためのツールを渡されて、その作業をしていたＭＳパイロット全員で大いに凹んだ。

……俺も、剥きになって、馬鹿なことしたもんだよ。

で、簡易宇宙港と旧来既存の宇宙港とを連結する作業では危うく新任の乗るＭＳが挟み込まれそうになったし、酸素発生装置を取り付けて、さぁ、いざ運転って時に、つけっ放しにした電熱溶接機を持った阿呆が近づいてきたこともあったし、液体窒素タンクを運搬中に補強骨格材が突き刺さって、タンクが破裂しかけた事もあった。

……よく、死人が出なかったもんだ。

コロニーを回すための支柱兼シャフトのリニアモーターレールを連結する時なんて、上手くレールが接合できなかったり、完璧に接合できたとしてもレールが何気に歪んでいたりして、試運転でカゴを動かしてみたら、勢いよくレールから離陸して宙を飛んでいき、外殻に衝突したこともあった。

その結果、カゴが大破したため、コロニー居住区画の一つは現在も運営休止中である。

……カゴが離陸した時は、思わず噴いてしまったよ。

また、ジャンク屋がＬ１にジャンクを漁りに来ていて、偶然にも、作業する俺達を発見してしまい、慌てて逃げ出そうとした所を、苦労して……いや、本当に大捕り物の末に……とっ捕まえて、二日間に及ぶ長い説得と契約交渉の果てに、建設作業に参加する契約をもらい、完成寸前まで一緒に働いたこともあった。

……まったくもって、逃げ回る三機の改造ミストラルと交渉役の女性は、本当に手強かった。

他にも、作業開始終了時の点呼で隊員の数が定数より増えたり減

ったりしたこともあったし、胃薬の消費量が増えたってエヴァ先生に怒られたし、エアクリーナーの片方の浄化層にカビが生えていたりして大至急に洗浄したりしたし、睡眠から覚めて枕を見たら付いてる抜け毛が増えたし、既存宇宙港と電源をつなごうとしたら規格が合わなかったりしたし、鏡を見たら白髪が増えたし……本当に、もう、大変だったよ。

いやはや、某計画×なりザフト広報局なりが密着取材に来なかったのが非常に残念だ。

独り、苦労を思い返して、しみじみとしていると、飲み物を二つ手に持ったレナが声をかけてきた。

「先輩、飲み物どうぞ」
「おぅ、サンキューです」

レナに手渡された物を手に取り、一口ストローを啜る。

……んっ、これは……ＩＴＩＧＯオレ？

久しぶりに飲む好物だけに頬が自然と緩むのが自覚できる。何がうれしいのか、レナもニコニコと俺を見上げて、嬉しそうに話し出す。

「無事に完成して良かったですね」
「ああ、ほんと、肩の荷が一つおりるよ」
「……でも、これからが本当の任務なんですよね？」
「そうだよ。これからは昔の海賊のように、お宝を運ぶ船を襲うん

だ」

……うーん、あれだな、襲撃作戦に、こう、悪質なジョークを織り交ぜるのも面白そうだな。

「……また、何か、悪巧みしてませんか？」

「い、いいえぇ、そんなことないですよぉ？」

「また、馬鹿なことを考えていたんですね？」

い、いかん、最近、シリアスな状況が多かったから、表情と口が上手く動かなくて、全然、誤魔化せなかった！

仕方がない……ここはマトモな答えを返そう。

「いや、船って言ったら、半月前にプラントに送り出したアーサーやリー達を思い出してな。今頃は、こっちに向かって航行しているはずだから、大丈夫かなってな」

……何ですか、その、仕方がない、ここは先輩の顔を立てて、追及しないであげるわ、って顔は？

「そういえばあの時、先輩、トライン班長に幾つか記録媒体を渡してましたね。あれ、何なんだったんですか？」

「ん、あれか？　あれは国防委員会と事務局宛の拠点の構築状況と終了予測を纏めた報告書と拠点を管理する援軍の要請、後は【世界樹の種】の詳細なデータに、ここの座標位置と来るまでの航路、それと国防委員長宛の拠点の拡張強化及び恒常化提案書だ」

「……先輩、ザラ委員長にまで直接出したんですか？」

「ああ。ここの機能を強化して、Ｌ１を確実に押さえませんか、っていう提案だよ」

「……でも、それだとここが目立つことになりませんか？」
「すぐと言うわけじゃない。少なくとも、ここに一個艦隊以上が常駐する位にならないと、意味がないからな」

少なくとも戦闘艦が１０隻位、常にいつでも動ける状態にしておかないと、要衝であるだけに確保が難しいだろう。欲を言えば、駐留機動戦力の他に、防衛戦力として最低3個ＭＳ中隊は欲しい。

「まぁ、どうせ駄目元さ。俺は提案したけど、それを取るか取らないかはお偉いさんが決めること。ただ、ここを押さえたら、今後のプラント防衛がやり易くなるのは事実だ」
「……ええ、ここは地球圏の要衝ですからね」
「そういうこと」

とはいえ、多勢に無勢って言葉があるように、圧倒的な数で来られると持ち堪えることはできないだろう。そうならないために、デブリ帯に機雷源を構築するなり、対艦ミサイルなりを紛れ込ませるなりして、罠を仕掛けるか。

……。

いや、実際に戦うだけが能じゃないはずだ。ここの拠点の戦力と連合軍の艦隊戦力を一つ二つを睨み合いさせて拘束できたら、プラントへの圧力も少しは減じるだろうしな。
けど、これだと、兵力が少ないザフトにも遊兵ができるということになってしまうか。睨み合いをさせるのが理想的だと思ったんだが、こちらは兵力で劣っているからなぁ。……むぅ、やはり戦いは数ということか。

……。

しかし、睨み合い膠着案を放棄するのはあまりにも勿体無い。対費用効果で考えれば、より少ない戦力でより多くの敵戦力を拘束できれば、一番だ。そして、攻められないまま、その戦力を確実に拘束するためには、戦力が少なくなったら、すぐにでも噛み殺すぞ、なんて強さと怖さが必要になるだろう。

だが、どうやって、そんな無理難題をこなせばいい？　ここの拠点を一度、こちらを攻めさせて、相手よりもかなりの小戦力で無傷に打ち破ってみせて、侮りがたしなんて印象を持たせる？　いや、そんな博打的な要素は排除したい。

……。

……うう、排除したいのに、これぐらいしか思い浮かばない。まったく、自分で考えておいてなんだが、何て無理難題だよ。圧倒的少数で圧倒的多数を打ち破るなんてさ。

……。

うん？　よくよく考えたら、まだ、連合軍はＭＳを配備していない。……運動性が高いＭＳは機動性が高いＭＡよりもデブリが漂うこの地帯では間違いなく有利だな。だったら、態と敵に深追いさせて、機動力を削いで始末してしまうか？　でも、ＭＳが配備されていない状況だけでしか通用しない手だな……。

「……」

気付いたら、レナがこちらをポーと見ていた。心なしか、頬が赤

い上に目が潤んでる。

……酒でも飲んだのか、こいつは？

「おい、レナ。アルコールの類は禁止だぞ？」

「へっ？　そ、そそそ、そんなものは飲んでませんよっ！」

「本当か？」

慌てて否定するのが余計に怪しく、レナの手にあった飲み物を素早く取り上げて、一口啜ってみる。

「あっ」

……ＭＡＴＴＹＡオレだった。

「うーん、別に普通にノンアルコールだな。……ほれ、疑って悪かったな」

「……」

何故か、レナは真剣な顔でＭＡＴＴＹＡオレが入った容器を見つめておる。

……もしかしたら、ＭＡＴＴＹＡオレが好物だったのかもしれない。

それを勝手に奪って飲むなんて、ちょっと悪いことをしてしまったかな。

「レナ、俺が新しいＭＡＴＴＹＡオレを持ってきてやるから、機嫌を直せ」

「……い、いいいえ、別にそんな機嫌が悪くないなんていうか悪くなんてなってませんよっ！」
「……そ、そうか？」

レナの不審な言動を不思議に思いつつ、会場を見回すと、エヴァ先生と目が合った。

……相変わらず、衛生班員にちょっかいを出した整備員を踏みつけている辺り、女王様気質だよなぁ、なんて考えていたら、睨まれてしまった。当方としては、なんら疚しいことを考えていないつもりなので、アピールすべく、目を見つめ返そうと思ったら、勝手に目が逸れていった。

……俺の身体はアレか？

邪気眼系の何かでも備えてるんだろうか？

かなり憂慮すべき問題に頭を抱えていたら、小柄の女王様もとい女医様がこちらにやって来てしまった。

「ラインブルグ。何やら、面白い目を持っているようではないか」
「……い、イエ、ソンナオモシロオカシイメナンテモノ、モッテマセンヨ？」
「ふ、ふふっ、その秘密を暴くために解剖してやるから、今度、医務室に来るように……な」

大いに首を横に振らせていただきます。

「まぁ、冗談は抜きにして、貴様の身体は一度、精密に検査してみたいものだ」

「いや、俺なんて、最低限のコーディネイトしかされてませんよ？」
「最低限のコーディネイトなのは、出生時記録やＤＮＡ鑑定の記録からわかっている。……だが、それにしては、貴様の能力は高すぎる」

えっ、そうなの？

「ふむ、その様子ならば、本当に心当たりはないか」
「そりゃ、ないですよ」
「……やはり、一度、解剖を……」

ちょ、そんな理由で、解剖は勘弁！

「え、エヴァ先生、先輩はそんなに異常なんですか？」
「ラヴィネンか。……ああ、異常だな」
「……どのへんが異常なんですか？」
「全てが異常だな」

……正常な人間を異常、異常と連呼しないで欲しい。

「身体能力で言えば、全てのレベルで平均的なコーディネイターの1．2倍はあるな」
「へっ？」
「エヴァ先生、それって、凄いんですか？」
「いや、トップクラスのコーディネイターに比べれば、低いだろう。だが、ラインブルグのコーディネイトレベルではありえない数字だ」

へぇへぇ、これはつまり、あれですね！

実は俺の中に、皆が驚くような隠された能力が……。

「弛まぬ鍛錬が生んだ奇跡と言うべきものだろうな」

へんっ！　どうせ、俺にはそんな設定なんて、ないですよっ！

「だが、その鍛錬を為し遂げる奇跡を生み出した原動力には興味がある」

「……原動力ですか？」

「んなもん、ありゃしません。ただ、周囲や自身からのプレッシャーに負けずに鍛えてきただけですよ」

「……かもしれんが、案外、お前はＳＥＥＤを持っているのかもしれん」

はっ？

……ＳＥＥＤって、種のことだよな？

「ふん、今後も観察は続けさせてもらうぞ、ラインブルグ」

「はぁ、どうぞお好きなように」

ニタリと愛嬌と威圧と優美と怖気を感じさせるという混沌とした笑みを見せた後、エヴァ先生は悠然とエレベーターへ向かって去っていった。

「あっ、私達、交代の時間ですよ」

「……そうだなっていうか、俺達もエヴァ先生と同じ直だろう」

「そ、そうでしたね」

苦笑を浮かべたレナに誘われて俺も苦笑いを浮かべながら、賑やかさを増す会場を去るべくエレベーターへと向かうことにした。

「レナ、飲み物持ったままだぞ」
「い、いえ、これはお持ち帰りです」
なんて、やりとりをしながら……。

しかし、ＳＥＥＤねぇ。

エヴァ先生が口にする位なんだから、きっと意味があるんだろうなぁ。

……。

今度、時間がある時にでも、調べてみてもいいかな？

32　一夜城作戦　5（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

33　群狼の雄叫び　1

１０月２５日。

過日、【世界樹の種】にプラントからの増援部隊が到着したことに伴なって、プラントへ降下カプセル輸送艦の返却に行かせたアーサー達や護衛戦力のリー小隊も帰還し、戦隊構成人員が全員揃ったため、拠点の整備と周辺宙域の防衛、デブリ帯に侵入してきた連合軍を嵌める罠の構築といったことを増援部隊というか、今後、拠点の責任者を勤める初老の指揮官に引継ぎして、俺達の戦隊は本格的に次の任務を遂行すべく行動を開始した。

ちなみに、到着した増援部隊には、今後とも拠点に駐留する分艦隊と防衛隊の一部の他に、拠点拡張を担当する建設専門部隊……単純にいえば、工兵隊と拠点の拡張整備用資材が満載された通常型輸送艦二隻が加わっていた。そのことから、ザラ委員長は、どの程度なのかはわからないが、俺の意見を取り上げてくれたようだった。

まぁ、拠点に関する後の事は、大きな傷痕が残る顔と厳つい身体と相まって、その筋の者めいた怖い雰囲気を持っていたが、話してみれば非常に気さくだった新しい指揮官に任せて、俺は俺の任務をこなそうと思う。

◇　◇　◇

出撃から数日後、Ｌ１宙域外縁部のデブリ帯に進出した戦隊は、現在、デブリに紛れながら連合の輸送船団や連合籍の商船を待伏せ

している。そのため、輸送船発見の報に即応できるように第一種警戒態勢を発令しており、俺もいつでも出撃できるようパイロットスーツを着用して、艦橋に上がっていたりする。

そして、そこにはプラントへ降下カプセル輸送艦を戻す際に、再び、臨時で輸送艦の通信管制官を務めたベルナールや臨時艦長を務めた航法通信管制班長のアーサー・トラインの姿があったりするのだが……。

「うんうん、ベルナール君の声を聞くのも久しぶりだねぇ」
「そうですね、私も久しぶりにゴートン艦長の声を聞いたら、ああ、エルステッドに帰ってきたんだって実感できてホッとしました」
「それって、ほんとぉ？　俺に気を使って、嘘なんて別につかなくてもいいんだよ？」
「いえ、ほんとですよ。……こう、何ていうか、艦長の声には、トライン班長にはない、……そう、聞く人に安心感を与える深みがあるんですよねぇ」
「い、いやぁ、うれしいこといってくれるじゃないの」

ゴートン艦長とベルナールとの会話が進むたびに、アーサーの帽子の下に収まった灰色の髪が艶を失っていき、少しずつ両肩が落ちていくのだ。

もう、それが切なくて切なくて……。

「……アーサー、その、なんだ……あんまり落ち込むなよ？」
「……いえ、ラインブルグ隊長。……ああいう風にベルナールに言われちゃうのも、僕が力不足だったんでしょうね」

そう答えて、アーサーはさらに肩を落としてしまう。もう、その

気の毒になるくらいの肩の落ち方と煤け様は、まるで真昼間からブランコを漕ぎながら空を見上げている背広姿の親父さんみたいだ。

「アーサー……とりあえず、空元気でいいから、元気を出すんだ」

「……はぁ」

これはいかん、覇気が抜け過ぎている。

……むぅ、ここは同じ男として、ここは少しは発破をかけないと駄目か？

「おい、いいか、アーサー、よく聞けよ？」

「……はい？」

「ここが……この初めての戦闘任務こそがお前が頼り甲斐のある男になれるか、なれないかの、瀬戸際というか、正念場というか、分かれ道だぞ？」

「……えっ？」

「もっと簡単に言えば、女にモテル男になるかモテナイ男になるかの境界線上にいるということだ」

「えええぇぇぇっ！」

おおっ、ナイスなリアクションだ！

ほんと、この素晴らしいアーサーのリアクションに、艦橋中のスタッフが何事かとこちらを振り返った程だ。

けれど、声の主がアーサーであることを確認したら、あぁ、トライン班長なら仕方がないなぁ、なんて苦笑と共に業務に戻ってしまったけどね。

……いや、それじゃ、駄目じゃないのか？

……。

まぁ、これもアーサーの良い所だろうから、いいのか？

とりあえず、話を続けよう。

「これから、俺達は連合の輸送船団や商船を潰すために戦闘を行うことになるだろう？」

「え、ええ」

「まぁ、これは戦闘に限らず、どんな場合でもいえることだろうけど、とにかく、戦闘時に班長が果たす役割ってのはとても大きい。艦長が様々な決断を下すための材料を提供するのは当然として、艦長の手を必要以上に煩わせないように、自身で判断できることを判断して行動できることも大切なんだ」

これは以前から艦橋に来る度に、班長をしていた時のリュウ副長の動きを見ていて、俺が感じたことなんだけどね。

「そ、そうですよね。その判断が各々でできるように、僕達、ザフトには階級がないのですからね」

「そうだ。……だが、それができるか？」

「うっ」

む、アーサーが固まってしまった。

……でも、この様子だと、どうやら痛い所というか自身の弱点…判断を下せるだけの胆力がないということを理解できているみたいだから、これ以上の言及は不要だろう。

「いや、気にしすぎる必要はないよ。すぐにその判断ができるようになるなんて、本来なら、まず無理だろうからさ。だいたい、こういうのは経験がものをいうことでもあるしね」
「はぁ」
「でも、経験がなくても、できることはあると思うんだ」
「……それは？」
「そうだな……班員の目や耳を意識することかな？」
「……目と耳を意識」
「ああ。……今のアーサーの立場、班長なんて責任ある立場にいる以上は、常に班員の目と耳を意識しておく必要があるんだ。だって、そうだろう？　班員が困った時に仰ぎ見たり、判断を求めたりするのは、まず、班長なんだからさ。……もしも、班員が困った時に班長を頼って仰ぎ見たら呆けましたとか、どうすればわからなくなって班長に指示を仰いだら取り乱しましたじゃ、班員はどうすればいいかわからなくなって、冷静さを失ってしまったり、パニックが広がってしまうからな」
「そう、ですね」
「だから、班長は非常時において、どんなに内心で困ったり慌てていたとしても、外見では毅然と、泰然と、敢然としていないといけない」
「……」
「とは言ってもさ、実際、そんな風に常に気を張り続けることが難しいことだってわかってる。だから、普段はどれだけ抜けていても、それは愛嬌ってことで別に構わないよ。でも、逆を言えば、いざ、事が起これば……抜けたままでは絶対に許されないということだ。……一つの判断に、艦の、乗組員の、命が懸かってくるからな」
……実はこれ、俺にも言えることなんですよ。

自身への再確認を兼ねて、アーサーに語ってみましたが……。

「隊長やかんｔ「月方面からの熱源を探知っ！　数は推定で１２です！」って、えええぇぇっっっ！！」

いやいや、いつかは来るってのがわかってる事なんだからさ、そこまで驚くようなことじゃないだろ？

なんて、アーサーへの突っ込みは心の中にだけ留めておいて、俺は艦長の元へ赴く。

アーサーが、俺が語った内容とは正反対に、テンパりながら大慌てで班員に指示を出しているのを苦笑しながら見ていた艦長は、近づいてくる俺に目を向けると不意に真剣な顔をみせた。

「……皆殺しの殲滅かい？」

「……いえ、相手が降伏したら、そんなことはしませんよ。抵抗されれば、流れでそうなってしまう可能性はありますが、基本的にそこまでする気はないです。まぁ、船に関しては、一隻残らず沈めるつもりですけどね」

「その場合、乗組員はどうするの？」

「乗組員を捕虜に取ると行動が制限されますから取るつもりはありません。だから、この場所なら救難艇でも月に届きますから、乗組員を詰め込んで、月にお戻りしてもらうなり、月近くまでお送りなりしますよ」

これは無駄な人殺しを避けるなんて、今更な感もある偽善的な目的もあるが、月の水と食料を消費する人口を増やそうだなんて打算もある。

とは言っても、その程度の数なんて微々たるものに過ぎないし、

所詮は、俺が無駄な殺しを回避したいがための表向きの説明に過ぎない。

それに、実の所、この方針の裏には、降伏した敵を捕虜とせず解放すると、再び武器を手に戻ってきて味方を殺す、という現実が存在しているのだ。

俺も、この現実を前に、かなり長くの時を、かなり深く自分なりに悩んだのだが……結局、開き直った。

存亡を賭けた戦争で、手を必要以上に汚したくないと思うなんて、甘いだろうことなんだろう。

けど、そんなことをしていたら、俺の精神がまず死んでしまうわっ！

例え、この甘さの結果、味方が死のうが、俺が死ぬことになろうが、知ったことか！

俺が今後も生きて行く上で、俺の精神が壊れない事が一番大切なんだ、文句あるかっ！

という具合である。

……この内心を他人に、特に味方に知られれば、利敵行為をするコーディネイターの風上にも置けない最低野郎呼ばわりされるだろうが、その時は甘んじて受けるつもりである。

もちろん、他人になんて絶対に言わないけどね……なんて心中で嘯きながら、艦長に応える。

「……降伏云々を無視して有無を言わさず全員殺してしまえば、戦力を永遠に削ぐ事ができるんでしょうけど、俺には降伏した相手を殺すなんてことは、とても出来ませんし、ましてや捕虜を連れて歩けないからといって、即虐殺するなんて……反吐が出ます」

「……うん、そうだよねぇ」

「戦争にも守るルールがないと、際限がなくなります。だいたい、戦隊の目的は人殺しじゃなくて、通商の破壊、航路の遮断による月戦力の弱体化とプラントへの圧力の減退ですから、それで十分でしょう」

「でも、相手はどうかな？　ルールを守るかな？」

「……降伏後にもしも撃ってきたらば、その時は、命で贖ってもらいましょう」

これはこれ、それはそれっていうことで……。

敵への対応について、艦長と相談していたら、少し落ち着いた様子のアーサーが敵輸送船団の詳細を伝えに来た。

「……艦長、敵輸送船団の陣容が分かりました。敵船団は輸送艦八隻と１５０m級四隻で構成される護送船団と判明、二列に並んだ輸送艦群を中心に前後に二隻ずつ１５０m級が固めています。予想進路は……あちらのモニターに映し出されているラインが最有力でして、現在の戦隊位置に最接近するのは一時間後でしょう」

「……だそうですが、どうします、ラインブルグ隊長」

戦隊の存在をすぐに知られるのは面白くないな。

「戦隊艦艇はここで待機してもらって、俺達ＭＳ隊だけで仕掛けることにしましょう。よって、戦隊に第一種戦闘配置を発令します」
「了解。……総員、第一種戦闘配置！　ハンゼンにも伝達」
「アイ、艦長！　総員、第一種戦闘配置！　ハンゼンに伝達しますっ！」

艦長の命令を復唱して、アーサーが第一種戦闘配置を伝えるレッドアラートを出すと、立て続けに班員に指示を出している。その後姿はリュウ班長に比べれば、まだまだ頼りなさが残っているが、意外と様になっている部分も垣間見える。
アーサーもやればできるじゃんなんてことを考えながら、その動きを見ていたら、艦長席近くのサブ・モニターにリュウ副長が映し出された。

「艦長、ＣＩＣオープンしました」
「はい、了解」

リュウ副長のはっきりした声にゴートン艦長が了解を返してすぐに、アーサーも声を上げる。

「艦長、エルステッド各班の配置が完了しました！」
「うん」

最後に、ハンゼンのフォルシウス艦長の厳つい顔が、リュウ班長が映るサブ・モニターに並んで映し出されて、報告を入れてきた。

「ハンゼン、一種配置完了しました」
「了解。……隊長、戦隊の戦闘準備、完了しました」

戦隊主要幹部からの報告に一つ頷いて、簡単に作戦概略を話す。

「これより戦隊は敵輸送船団に対して、ＭＳ隊による襲撃を仕掛けます。エルステッド、ハンゼンの両艦はこの場で待機し、ニュートロンジャマーをＭＳ隊の出撃直前に稼動、以後は索敵を密にして敵の援軍を警戒して下さい。出撃するＭＳ隊はデファン小隊とリー小隊、俺とレナの二機組です。ＭＳ隊出撃後は、戦隊の全体指揮をゴートン艦長に委任します。また、残るマクスウェル小隊に関しては、全体状況に変化があった場合の予備戦力兼戦隊の護衛として残しますので、これの指揮も併せてお願いします。……まぁ、俺達の戦隊なら、いつも通りにやれば、どうとでもできます。犠牲なく、スマートにやりましょう」

「「「了解」」」

三人の敬礼に俺も答礼する。

幾度の戦闘を乗り越えてきた信頼できる面々だけに、後は安心してお任せである。

そんなわけで、俺もＭＳに搭乗して出撃すべく、ＭＳ格納庫へ向かうことにした。

……艦橋からＭＳ格納庫まで、遠いんだよなぁ。

33　群狼の雄叫び　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

34　群狼の雄叫び　2

第一種戦闘配置中のため、誰にも遭遇することなく通路を進んでいき、船体下部のMS格納庫エリアに入ると、格納庫へ続く通路に格納庫内のエアーが抜かれていることを示すレッドランプが点っていた。すぐにスーツのヘルメットを被って、エアー供給が為されているかを確認し、最後にバイザーを降ろしながら、格納庫につながる三重扉を順次通り抜けて、広大な格納庫に入る。

エアーが抜かれた格納庫内はすでに真空状態のため、音がない空間になっている。そのため、周囲の動きや警告灯、ヘッドセットから漏れる声に特に注意しつつ、そのまま自機であるシグーのコックピットハッチへ向かって跳んだ。

……嫌でも目に入るシグーの眩い黄色に悲しくなるが、ここは我慢だ。

意識して色のことを忘れるためにも居並ぶリー小隊のジンやM型を見ると、モノアイには既に光が点っており、いつでも出撃できるようだった。一応、レナ機の様子も伺うと丁度搭乗する所だったようで、こちらに気が付いたのだろうレナが手を振ってきた。俺もそれに応えて手を振り返した所で、コックピットハッチに到着した。

ハッチ前には、ノーマルスーツ姿のシゲさんが待っていた。

「アインちゃん、準備万端、いつでも動かせるよ」

「ありがとう、シゲさん」
「エルステッドは全機出撃でいいんだよね？」
「ああ、後、発進誘導の方も頼むよ」
「任せときなって」

シゲさんはしっかりと請け負ってくれると、後は無言のまま、ハンドサインで”無事を祈る”とサインを出した。俺も”感謝を”というサインを送り返し、ハッチを閉ざす。そして、すぐに艦橋と通信ラインを開き、シートベルトを装着しながら、現状をベルナールに尋ねた。

「ベルナール、敵船団に動きは？」
「あっ、ラインブルグ隊長。……敵船団に目立った変化は見られません」
「出撃するＭＳ隊の準備状況は？」
「はい、エルステッド、ハンゼン共に、出撃するＭＳ小隊各機の出撃準備は整っています」
「よし、全小隊長とレナに共用回線を開いてくれ」
「わかりました」

ベルナールのキビキビとした返事からは、新任時代では感じられなかった頼り甲斐が感じられる。そんな感慨を懐きながら、起動シークエンスを進めていく。

生命維持系……グリーン。
バッテリー残量……メイン１００％、サブ１００％
センサー系……グリーン。
操縦システム……グリーン。
通信システム……グリーン。
排熱システム……グリーン。

推進システム……グリーン。
推進剤残量……１００％。
各部姿勢制御用バーニア……グリーン。
機体各部情報……オールグリーン。
武装……Ｍ７Ｓ重突撃機銃とＭ４重斬刀、Ｍ７０７０Ｒエルステッド整備班改造デブリ製クロー付攻防盾。
Ｍ７Ｓ残弾……１００％。

よし、オーケーだ。

機体の確認が終わった所で、ベルナールがタイミング良く通信画面に現れた。

「隊長、通信つなげます」
「うん、頼む」

俺の返事と共に、馴染の見知った面々がサブモニターに並ぶと、早速、副官のレナが口を開いた。

「先輩、ＭＳ隊全機、何時でも出れます」
「了解」
「それで今回は、ＭＳ隊だけで攻撃を仕掛けるんですよね？」
「そうだ、レナ。今から、ＭＳ隊は敵輸送船団に襲撃を仕掛ける。……もう、皆も聞いているだろうが、出撃するのはデファン小隊とリー小隊だ。マクスウェル小隊は戦隊の護衛として、また、状況の変化に対応するための予備戦力として艦に残す」
「マクスウェル、了解」

ガイル・マクスウェルは自分の役割に納得したようで、落ち着いた調子のままですんなりと頷いた。それと対照的な様子なのがグエ

ン・リーだった。

「隊長ッ！　奴らへの襲撃方法はっ！？」

「……逸るな、リー、今から言う」

リーの奴、入れ込みすぎている気がするけど、本当に大丈夫なのか？

ちょっとした不安を胸に、説明を続ける。

「作戦は今までも訓練してきたように、始めに護衛戦力の１５０ｍ級を叩き、その後で輸送船を残らず潰す。……それぞれの担当は、俺とレナが敵船団へ正面から向かっていき、敵の攻撃を誘引する囮役を、残るデファン、リーの両小隊は敵艦へ攻撃だ。敵艦の近接火砲が少ない俯角から突き上げる形で、デファン小隊は後の二隻、リー小隊は前の二隻を狙い、確実に落とせ。……とはいえ、攻撃方法に関しては実際の状況に応じて、変更しても構わない。その時の方法はお前達に任せるから、臨機応変に頼むぞ」

「わかりました」

「了解っす」

「了解！」

三人の返事に頷いて見せると、デファンがどこか心得たように質問してきた。

「先輩……もしも、白旗を出すなり、発光信号を出すなりして、敵が降伏した場合はどうするっすか？」

「……捕虜を取ると行動に制限が生まれるから取らないつもりだ」

「……えっと、それって、皆殺しにするってことっすか？」

「いや、そこまではしない。乗組員全員を救難艇に放り込み、月に

落ちるように放り出す予定だ。まぁ、残った艦は接収するなり、破壊するなりする」

「そんなっ！　甘い対応をナチュラルの連中にする必要なんてっ！」

確かに甘い対応なんだろうけど、もう、決めたことだ。

「……もう一度言うぞ、リー。敵が降伏した後は、絶対に、手を出すな。もちろん、放り出す救難艇も同様だからな？　……これは最低限のルールだ」

「ですがっ！」

「くどいぞっ！　グエン・リーッ！」

「っ！」

まだ、私情を引き摺っているのか？

……。

いや、それも仕方がないことなんだろう。

けれど……小隊長になって、部下も出来たんだから、もう少し冷静に物事を捉えて欲しい。

「リー、俺の決定が不服ならば、機を降りろ。今回は特別に認めてやる。……だが、降りた場合は、二度とＭＳに乗れると思うな」

今後の様子次第では、リーを他隊に移した方がいいかもしれない、なんて思いを懐きながら、返事を待つ。

「……いえ、決定に従います」

「ああ、その言葉に嘘はないな？」

「……はい」

……むぅ、やはり、この間が不安だなぁ。

後で、リーの動きに注意しておくよう、レナに言っておくか。

「よし、これから出撃シークエンスに入る。各小隊、それまでに小隊員の様子を見るなり、作戦を説明するなりしておくように」

「了解っす」

「了解」

「……了解」

……さて、小隊に関しては、全て、各小隊長にまかせて、ベルナールに出撃シークエンスを開始させよう。

「ベルナール、出撃シークエンスを開始してくれ。まずは、俺とレナが先行して出撃する。その後、出撃する両小隊を出してくれ」

「了解、整備班とハンゼンにそう伝えます」

「頼む」

では、行くとしようか。

「……よし、ＭＳ隊、出撃する！」

◇　◇　◇

リニアカタパルトでエルステッドから射出された後は、レナを右斜め後方に占位させて二機編隊を組み、敵輸送船団まで一直線に飛

ぶ。その敵船団の防衛圏に到着するまでの時間を使って、先程の懸念を解消すべく、レナに指示を出しておく。

「……レナ」
「あっ、はい、何ですか？」
「リーの動きに注意してくれ」
「……まさか、先輩の命令を無視する可能性が？」
「いや、あるかもしれないって、レベルなんだがな」
「……わかりました」
「嫌な役目だろうが、頼む」

出したくもない指示に精神が削られるが、これもお仕事である以上は、我慢しなければならない。

……とはいえ、なぁ。

最近、抜け毛もだけど、それ以上に胃が荒れているのは事実だしなぁ……。

……。

まったく……俺がこんなに苦労をするのは、全て、俺を白服にしたザラ委員長が悪いっ！

そうだよ、あのおっさんが全て悪いんだっ！

よし、決めたッ！

おれ、プラントに帰ったら、いいんｔｙ……って、だめだっ、俺っ！

い、今のは死亡フラグだっ！

……はぁ、馬鹿なこと考えたら、少しは頭が解れたかな？

錯覚かもしれないが、少しだけリラックスできたような気がして、上向いた気分でメインモニターを見ると……。

「先輩」
「……ああ」

船団が、はっきりと見えてきた。

……前衛に位置する二隻の１５０ｍ級が姿勢を制御して、こちらに艦首を向け始めている。

「どうやら、向こうさんもこちらを確認できているらしいな。……レナ、まずはミサイルを撃ってくるはずだ。気をつけろよ？」
「大丈夫です。Ｍ型の機動性だったら、上手く避けられます」
「……過信は禁物だぞ？」
「これは自信です」
「おーおー、なら、その腕を見せてもらうぞ？」
「先輩こそ、私の機動に見惚れて、落とされないで下さいね？」

……本当に口が達者になったなぁ。

「よし、ロックオン警報だ、って……思いっきりがいいなぁ」
「え、全弾発射ですか……」

１５０m級の四つあるランチャーから、小型ミサイルの飽和攻撃と来た。しかも、前衛二隻分に加えて、後衛の二隻分もある。

「……レナ、後衛のミサイルとの時間差がある、気をつけろよ？」
「当然！」
「よし、ブレイクっ！」

こちらに向かってくる、二機のＭＳに向けるには、絶対に必要ない量のミサイル。

まさに大漁！

機会があったら、背中あたりに大漁旗でも上げてやろうかなんて、馬鹿なことを、考えてって……うん、上手い具合に二つに割れたな、とはいっても、まだ、後衛分は届いていないから、注意しないと……。

……。

「ッァ！」

しっかりと追尾してくるミサイルを急旋回でやり過ごすが、まだ一部が付いてくる。こんな所をみると、新星攻略戦時よりも、敵のミサイルの追尾能力が上がっていることがわかる。

でも、やはり、多くのミサイルに追われるってのは気分が良くないわけで……。

「レナ！　クロス！」
「了解！」

レナ機と軌道を交差させて、追尾してくるミサイル同士をぶつけて誘爆させてみる。これも乱戦状況ではない、余裕がある状況だからこそできる芸当だ。

「うしっ！　成功した！」

景気良く連続して広がっていく爆光に、思わず、叫ぶ！

「よっ、玉屋～～～～～～～～～～ッ！！」
「せ、先輩！　何を馬鹿なことを言ってるんですかっ！　次が着ますよっ！」
「はいはい、折角の高価な花火だってのに」

機動を止めてしまったら、ただの的に過ぎないので、基本、追尾してくるミサイルが追尾しきれない程の急速旋回を繰り返しながら、前衛の１５０ｍ級に近づいていく。

流石の１５０ｍ級もこの距離なら魚雷はって、爆雷！

「レナっ！　爆雷！　注意！」
「……もう、やりたい、放題、です、ねぇ」

レナの声も切れ切れなところを聞くと、かなり急な旋回を行って

いるのだろう。

……いや、俺もだけどね。

「リー小隊！　攻撃を開始するっ！」

「先輩！　俯角より、リー小隊が、攻撃を！」

「了解した！」

一応、フォローに入るために、ミサイルを引き連れたまま、周辺に放出された爆雷との衝突コースを避けながら、１５０ｍ級に仰角から急速接近する。

上甲板に備えられた近接火砲がこちらを狙ってくるが……遅い！

「っ」

突撃機銃で火砲を狙い撃ちしつつ、艦橋の前でわざと速度を落とした後、再び急加速して逃げてみる。

「……おお、無駄だと思ってたが、上手くいったって、まだ追ってくるのかよ」

「先輩、人気者、ですね」

ＩＦＦ（Ｉｄｅｎｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ，Ｆｒｉｅｎｄ　ｏｒ　Ｆｏｅ：敵味方識別装置）が上手く働かなかったのか、単純に故障したのかはわからないが、艦橋付近に数発のミサイルが命中したのだが……残りはまだ、追いかけてくる。

「まったく、しつこい、男と、ミサイルは、嫌われる、よっと」

サブモニターで後方を見れば、爆発が続く１５０ｍ級にリー小隊がパルデュスでの攻撃を仕掛けたところだった。

「先輩！　前衛への、攻撃、が、成功、二隻撃沈！　デファンの、小隊も、二隻とも、落しました！」

「よしっ！　次は輸送船だっ！」

「えっ！　先輩、輸送船にも近接火砲がっ？」

レナの声を受けて、リー小隊を見てみると、一機のジンが輸送船に向けて無反動砲を発射しようとしたが、位置取りが悪いために、左腕に被弾したようだった。でも、すぐにリーが助けに動いたようだから、大丈夫だろう。

まぁ、それでも……。

「早いところ、俺達のミサイルを、何とかして、フォローに、入ってやらないとな」

「……私がミサイル、撃ち落としましょうか？」

「えっ？　レナのは、もう、ないの？」

「途中から、全部、先輩の方に行きましたけど……」

えっ、なにそれ、えっ、俺、ミサイルに惚れられてる？

「これはもう、機体の色でしょうね」

「ちょっ、それは洒落にならない！」

た、助けて、ニュートロンジャマー！

「やっぱり、近距離だとっ、よしっ！　……向こうも改良している

のか、ミサイルの誘導がっ、効きますねぇ」
「……ほんと、だよ、なぁ」

せめて、近接防御用の火器が欲しい！

「先輩も、なんで、んっ、当たった……盾に付いていたバルカン砲を外したんですか？」
「取り回しが！　悪い！」

あんなんブンブン振り回せるかっ！

「先輩、あと少しですから、頑張ってください」
「……あぁ、もう……つかれたよ、パトリック……」
「えっ？　せ、先輩、何を言って！　って、先輩、しっかりして！　先輩！」
「うぅ、……もう……だめぽ」
「せ、せんぱいっ！」
「いや、冗談」
「……じょ、冗談じゃ、済まないですよっ！」
「……わ、悪い、悪乗りしすぎた」
「先輩ッ！　幾らなんでも、やって良い事と悪い事がありますっ！　絶対にっ、帰ったらお説教ですからねっ！」
「そ、それは勘弁。……おお、レナの驚異的な頑張りで追っかけのミサイルもなくなった！」
「……まさか、それが目的で？　……絶対にＳＥＫＫＹＯしてやる」

さ、さて、どうやら、追っかけてくるミサイルも、レナが全部落としてくれたようだし……。

「先輩！　残存している敵輸送船より発光信号を確認したっす。我

が艦は降伏する、寛大な措置を望む、とのことっす」
「デファン、受諾すると伝えてくれ。……レナ、説教は受けるから、今は……頼むぞ？」
「……わかりました」
さて、やっと、終わったって……。
「先輩っ！　リーが！」
レナの呼びかけを受けて見てみれば、残った輸送船に向けて、リーのM型が無反動砲を構えていた。
……言った傍からこれかよ……まったく、リーの奴……何を考えている。
「リー、敵は降伏して、戦闘は終わった。だから、その無反動砲を降ろせ」
「……」
「もう一度、言うぞ？　……降ろせ、リー」
「……」
次の警告を無視したら、いっそのこと……落とすか？
……。
あ～、いかんなぁ。

今日は久しぶりの実戦のせいか、どうもテンションが上がりすぎて、普段ならやらないことをやっちまったりして……戦場の狂気に引き摺られてるぞ、俺。

「……ぜ……なぜ……何故！　隊長は、そんなに冷静でいられるんですっ！」

「お前みたいに身内がユニウスや戦争で死んでいないからだよ」

「っ！」

おうおう、サブモニターに映し出されたリーの顔が恐ろしいこと恐ろしいこと。

「なら、邪魔をするなっ！」

「……」

「あんたには、俺を止める権利なんてないだろうっ！！」

「……権利ねぇ」

確かにないんだけどね……。

「確かに私人としては止める権利なんてないんだけどね、この部隊を預かる責任者なんだよ、俺はさ」

「それがっ、どうしたっ！」

「そんでもって、責任者である以上は、部下の行動に責任を負わないといけないのよ」

「だから、それがどうしっ」

「いいから黙れっっっ！！　小僧ッッ！！！！！」

……まったく、こっちが隊員の命を守るために、一つ決断下すのに、頭を痛めて、胃を痛めて、神経すり減らしているってのに……。

「リー、そんなに家族の復讐がしたいならな、今すぐ、ザフトをやめろっ！」

「なっ」

「ザフトは紛い成りにもプラントの軍隊だ。そして、プラントの軍隊である以上は、プラントを守るために存在するのであって、別にお前のために、お前に復讐を果たさせるためにあるんじゃないっ！」

「くっ！」

「そして、ザフトが組織である以上は必ず責任者がいる！　今、その責任者がお前にやめろっていっているんだ、やめるのが筋だろう！　それでも言うことを聞きたくないのなら、さっさとザフトから出て行け！　別に止めはしない！　……外に出た後なら、お前が何をしようが、それはお前の勝手だ、俺が関知することじゃない。だが、ザフトで、俺の部隊にいる以上は、勝手は許さんっ！！」

「ぐっ！！！」

……ふぅ、落ち着け、俺。

「レナ、リーの武器を取り上げろ」

「……わかりました」

レナの了解を受けた後、俺は後始末に取り掛かるために、機を輸送船へと進ませていく。

最近、少し収まっていた胃痛を、再び感じながら……。

３４　群狼の雄叫び　２（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

35　群狼の雄叫び　3

地球一月航路での通商破壊作戦を開始して、一ヶ月。戦隊単独で、すでに二つの輸送船団と二隻の商船を潰していることから、作戦は比較的順調に推移していると言えるだろう。

また、他に二つ程の独立戦隊が出張ってきているから、たとえ逃したとしても再補足して潰す事ができ、効率も格段に上がっている。

とはいえ、戦隊もずっと戦闘や待伏せをするために外縁部のデブリ帯に待機しているという訳ではなく、Ｌ１の新拠点、世界樹の種に戻って休んだりしている。……というか、そのために拠点を作ったのだから、使わないと意味がない。だからこそ、一ヶ月を越える長期間の任務が遂行できるのだ。

その新拠点である世界樹の種も、俺達の戦隊がＬ１外縁部近辺で通商破壊に精を出している間に、建設を担当する専属の工兵部隊によって着々と拡張と整備が進められている。結果、拠点としての機能は一日一日、より充実したものになっていっているのだが……一概に、それが良いと言うわけでもない。

これだけ急速な拡張を行えば、当然、資材の消費量も多くなるし、その分、プラントからの物資輸送等で輸送艦の出入りが激しくなる。それに加えて、別の問題……Ｌ１にジャンクを漁りに来たジャンク屋の連中が寄港拠点として使用したいとの圧力を掛けて来ているなんてこともある。

これだけ激しい出入りや人口に膾炙されているだけに、もう間違いなく、この拠点のことは連合軍に気付かれているはずだ。だから、いつ何時、連合軍が攻めてくるのか、なんて具合にヤキモキしていたものだが、幸いなことに月の連合軍に、目立った動きは見られな

かった。

……まぁ、今は拠点防衛隊も組織されたし、ちゃんと早期警戒システムも立ち上がったらしいから、必要以上の心配は無用となっている。

◇　◇　◇

Ｌ１を押さえる拠点として確実に根付きつつある世界樹の種にて、今現在、戦隊は休息しており、俺もまた、重力居住区画のラウンジでＩＴＩＧＯオレ片手に休んでいる。久しぶりに職務から解放されたからか、非常に心と身体が休まる時間だ。

つい先日、プラントからの通信と言う形で、とある問題が降って湧いてさえこなければ……。

本当に、頭の痛い問題とは勝手にやって来るものだと言わざるを得ない。

その問題とは……俺のパーソナルマークについてだ。

パーソナルマーク。

至極簡単に言えば、特定個人を示す印、と言えばいいだろうか。

……通常の日常生活では、普通、お目にかかれない代物だと思う。

けれども、このパーソナルマークなるもの、パーソナルカラーと同じで、戦場では……特に有視界戦闘が増えつつある現状では、価値が出てきたりしている。

例えば、ザフトのＭＳ隊では、パーソナルマークはパーソナルカラーと同じく、敵の撃墜数が多いエースがこれを付ける事を許可されている。そうすることで、敵味方にエースの存在を誇示し、味方の士気を上げ、敵の戦意を挫くなんてことをしているのだ。もちろん、そのエースが落とされた時、味方に動揺が起きるなんてデメリットもあるのだが、それはそれ、何事も表と裏が存在する以上、仕方がないことだと言える。

で、そのパーソナルマークを、俺にも付けろという、プラントのお偉いさん……具体的に言えば、両肘を机につき、ニヤリと笑う国防委員長からのお達しが……。

いや、ほんと、なんで、パーソナルマークなんてもんをつけないと駄目なんだ？

「……あれ、先輩？　どうかしたんですか？」

俺って、エースなんて存在じゃないっていうか、そもそも、エースってのは撃墜王のことを表す言葉であって、ラウみたい奴のことを言うはずなんだよね。つまり、普通、俺みたいなのは、エースなんて呼ばれないと思うんだ。

それなのに、何故だ？

ただでさえ、もう、パーソナルカラーの黄色でお腹一杯だってのに！

……。

いや、これもあれか？

ザラ委員長の俺を亡き者にするための陰謀の一環なのか？

……まったく、委員長もそんなに持論にケチをつけた若造が気に食わないんだろうか？

「先輩ッ！」
「はいっ！」

……ビックリした。

目を瞬かせて大声が聞こえた方向、つまりは自身の頭よりも下方を見やると、こちらを見上げる明るい緑色の瞳と眉根を寄せた顔の持ち主、レナがそこにいた。

軽く観察すると、その手に飲料パックが二つ握られている所から、どうやらラウンジの飲料コーナーにドリンクを取りに来たらしい。

「先輩、調子が悪いんですか？」
「いや、いつも通り、胃が少し痛むくらいだが？」
「……うん、なら、いつも通りですね」

今の答えで納得されるのも悲しかったりするが、それが今現在の俺を知る皆の共通認識なのかもしれない。

「レナは飲み物か？」
「はい、サリアと部屋で喋っていたら、喉が渇きまして……」
「ふーん、隊の他の連中は？」
「デファンはＭＳ隊の有志を連れて、無重力ブロックで整備班と何かしているみたいです」
「いらんこと、してないと、いいなぁ」
「あはは、たぶん、無理ですよ」

現実は、俺の胃に優しくないです。

「それと、マクスウェルが残った隊員全員を連れて、レクリエーションルームで遊んでるみたいですよ」
「はぁ、どうせ賭け事なんて悪徳をしてるんだろうさ」
「それを広めた大元が何を他人事のように……」

えー、ちょっとした賭け位は楽しいスパイスになっていいでしょうよ。一応、主計班と図って賭けで賭けられるのは日給の一割までっていう規定を設けている上に、一番儲けた奴はその場の全員に有料の飯や酒を奢るってルールもあるんだからさ。

「後、リーは……」
「ああ、あいつはエルステッドに残って、シミュレーター訓練だろ？」
「……はい」
「まぁ、しばらくは放っておいてやってくれ」

初めての襲撃でリーが命令違反した後、二日程営倉に放り込んだんだが……一層、うちに篭るようになったというか、その考えや思いを硬化させてしまったようなのだ。

本当は、営倉の中で冷静になって自分の行動を反省して、小隊長としての役割をこなして欲しい所だったのだが、復讐の念に囚われている以上は無理だったようだ。

だからというか、俺が許せる範囲内では、リーを自由にさせている。

今のシミュレーター訓練にしても、あいつは、そうやってしか、やり場を失った怒りを発散させるすべがないだろうから許可を出した。

……それに。

……。

もしも、ミーアがあの核攻撃で死んでいたりしたら、きっと、アレが俺の姿だったろうとの思いもあるのだ。

……。

……あ～、ミーアを失うだなんて、嫌な想像は破棄してしまうのが一番だな。

よし、ここは一つ、楽しい話題に変えよう！

「あっ、そういえば、先輩。パーソナルマークはどんなデザインにするんですか？」

うぅ、どうせなら、もっと楽しい話題を出してくれよっ！

「ぱ、パーソナルマークか？」
「はい」
「……それって、絶対につけないと駄目か？」
自分ながら、どこか懇願の色が多分に含んだ声が出てしまった。
「うーん、正式なルートで届いた委員長印が押された命令書を、隊長である先輩が無視してしまうと周りに示しがつきませんから、流石に駄目だと思いますよ？」
「うぐっ」
「それに、もう、今更だと思いますよ？　既にあんなに派手なパーソナルカラーに塗装した機体に乗っているんですから……」
「ぐふっ」
レナの無情でかつ的確なお答えに、反論できない！
「……い、いや、俺、そういうデザインなんてできないっていうか、絵心がないんだよ。いや、そもそも、こういうのって自分で決めるものなのか？」
「どうなんでしょう？　自分で考えてつける場合もあれば、他称をデザイン化するなんてことは知っていますけど」
「むむっ、そうなのか？」
俺には他称なんてないから、自分で考えないといけないのか。
……。
あ～、もう、なんか、ますます面倒になってきた。
「もう、いっそのこと戦隊から公募して、その中から選ぶか」

「……適当ですね、先輩」
「いや、俺、パーソナルマークなんて欲しくなかったから、自分で考える気が起きないんだよ」

パーソナルマークにメリットがあることは認めてるんだけど、自分がいざつけるとなると、尻込みしてしまうっていうのかな。
いや、確かにパーソナルカラーに塗装された機体を使っているから、今更なんだろうけど、あれは強制された形だったしねぇ。まったく、俺の羞恥心を刺激する嫌らしい手を使ってくるよな、委員長は……。ほんとに、あのおっさんメェ、ドオシテクレヨウカ……。

なんて具合に、考えが委員長への仕返し方法の思索へと進み始めたら、レナが声をあげて止めてくれた。

「先輩！　公募するくらいなら、私がデザインしてもいいですか？」
「へっ？」
「い、いえ……先輩が面倒なら、私がしてもいいかなぁ、って思ったんですけど……」

……別にマークに拘りなんてないし、いいか。

「なら頼もうか。レナなら、変なデザインとかしないだろうから、安心できるし」
「なら、早速、デザインをシゲ班長に渡しておきますね！」
「……えっ？」

えーと、デザインって今から考えるんじゃないのか？

「……デザインを渡すってことは、もう、できてるのか？」
「えっ？」

「いや、デザインって、もう、描けてるのか？」
「……あっ、い、いいいい、いえ、いえ、描けてはいるんですがっ、いえ、その、これはそのっ！」

いや、別にどうこう言うわけじゃないのに、何をそんなに慌てる？

「レナ、落ち着け。ただ、疑問に思ったから聞いただけだって」
「……は、はい」
「んで、俺のパーソナルマークのデザイン、できてるのか？」
「……はい」

レナに、頼んだのは今なんですが？

「えーと、何故にと聞いても？」
「うっ、……じ、実は」
「実は？」
「しゅ、趣味、なんです」
「趣味？　パーソナルマークを考えるのが？」
「……うぅ、ぱ、パーソナルマークだけじゃないんですけど、何かを題材にしてデザインしたりするのが、好きなんです」

……へぇ、レナってそんな趣味、持ってたんだなぁ。

いや、別にそれでレナの人格云々ってわけじゃないんだが……。

「なら、いいのが期待できそうだな。うん、よろしく頼むよ」
「は……はい！　で、では、早速、デザインを準備しに……」

どこか挙動が不審になってしまったレナは、足早にエレベーターがある方へと去っていった。

「……って、おい、レナ！　ベルナールはどうするんだ！」

大声で呼び止めたら、恥ずかしそうに笑いながら戻ってきた。

「あ、あはは、サリアのこと、忘れてました」

「いや、それは流石に酷いんじゃないか？」

「えーと、それは大丈夫です。サリアは小さなことで怒りませんから、今の場合はむしろ、応援する？」

「何を？」

「……いえ、今のは忘れてください。んんっ、一度部屋に戻ります。その後、シゲ班長の所に行って、先輩用にデザインしておいたパーソナルマークを機体にプリントしてもらいますから、楽しみにしていてくださいね！」

勢い込むレナについていけず、少し腰が引いてしまうが、実際にどんなマークなのか楽しみなのも事実だし……ここは頷いておこう。

「あ、ああ、うん、楽しみにしてるよ」

「じゃあ、行きますけど、先輩は呼ぶまで格納庫に来たら駄目ですよ？」

「はいはい、後の楽しみにさせてもらいます」

「ええ、それでは先輩、また後で！」

おお、元気に走っていった。

うん、あれだけやる気を出してくれているんだ、頼んでよかったよ。

「あっ、きゃぅぶっ！　……うぅ、転んじゃった」

……頼んでよかったよね？

35　群狼の雄叫び　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

36　群狼の雄叫び　4

１２月１３日。

俺達の戦隊は捕捉した地球からの輸送船団に、今回の任務では最後となる七回目の襲撃を仕掛けるべく、出撃準備をしている。

この襲撃を最後にする理由、それは9月の任務開始より三ヶ月以上が経過していることから、乗組員に里心がつくと言うか、見た目よりもストレスが溜まってきているためだ。

たかが三ヶ月位の任務で軟弱な奴等だ、なんて嫌味を機動艦隊司令部から言われるかもしれないが、幾ら休憩する場所があり、休む時間も設けているとはいっても、戦闘やそれに順ずる待機状態が多いとなると、不満が溜まるのも仕方がないことだろう。

実際、自身の体験でも、戦闘で生死の境目に立つ……死の恐怖に直面する程、ストレスになることはないのは確かだ。

よって、今回の襲撃後、任務を一時中断して、プラントに帰還することにしたのだ。

後、付け加えれば、隊長の責務から来るストレスもあって、俺の胃がやばいことになっていることも、帰還を決めた一因だったりする。

……無重力状態によって、筋力や骨が弱体化するのを抑える薬が胃に優しくないのがいかんのです。

なんて、俺の愚痴は置いておくとして……。

ザフトによる度重なる連合船籍の商船や輸送船団への襲撃を受けて、連合軍はこちらが通商破壊を行っていることに気が付いたらしく、船団に付ける護衛戦力が徐々に大きくなり始めている。

具体的に言えば、どんな小さな船団でも、強力な火砲と堅固な防御力、それに機動戦力となるＭＡを有して、防衛の要となる２５０ｍ級が一隻以上、ミサイルの改良で手強くなった１５０ｍ級も四隻以上、必ず……そう、必ず、張り付くようになったのだ。

まったくもって、数を揃える事ができるからこその業である。

こうして数の利を活かした連合軍が本腰を入れて護送船団方式へと切り替え始めた以上、これを潰す労力は並大抵のことではなくなってしまった。

実際、戦隊の幹部会議や世界樹の種での白服……戦隊長会議でも、今以上に通商破壊にあたる部隊を投入し、かつ、それらの部隊の連携が密にならなければ、通商破壊の効果は薄くなるだろうとの意見……というよりも結論が出ている。

まぁ、プトレマイオス基地から艦隊戦力を引き摺り出した……つまりはプラントへの圧力を少しは減じることが出来たという点においては、評価できると思う。

で、今回、俺達の襲撃目標である輸送船団なのだが……。

双胴型輸送艦が１６、２５０ｍ級が１、１５０ｍ級が１２、機動戦力としてＭＡが最低でも１０という、中々に豪華な面子が雁首を揃えている。

正直に言えば、こちらのＭＳ隊が全力出撃しても敵輸送船団の方が戦力的に優勢なことに加えて、他の戦隊が世界樹の種に補給に戻っており、波状攻撃を形成できないため、見送ってもいいかなとも思ってはいた。

けれども、こちらが本気で通商破壊を狙っているんだぞ、ちょっとした戦力でも積極的に仕掛けてくるんだぞ、なんてことをアピールするためには必要なことだと割り切り、取り逃しが出てもいいから、攻撃を仕掛けることにしたのだ。

これもまた先に挙げたように、航路防衛のために月の連合軍一大拠点であるプトレマイオスからより一層の艦隊戦力を抽出させて、少しでも月からプラントにかかる圧力を減らすためだ。多少の危険は我慢しないといけないだろう。

そんな訳で、今回の襲撃では、戦力的にも厳しい事もあり、ＭＳ隊は予備戦力を残さず、最初から全力出撃する予定だ。

その際のＭＳ隊の編成だが、ＭＳ隊を迎撃に出てくる機動戦力の排除及び拘束、対艦攻撃隊の援護を担当する護衛隊……俺とレナ、デファン小隊と、無反動砲とパルデュスで爆装し、対艦攻撃を仕掛ける攻撃隊……マクスウェル小隊とリー小隊とに、役割を分担することにした。

で、作戦概略はこうだ。

護衛隊が敵迎撃隊を拘束している間に、攻撃隊は敵護衛艦艇への対艦攻撃を行う。

護衛隊は敵迎撃隊を撃破に成功した場合、攻撃隊を援護する。
敵護衛戦力を排除したら、じっくりと輸送艦を始末する。

本当に、何ともわかり易いと自画自賛できる作戦だと思うが、……単純化し過ぎている気がしないでもない。

まぁ、実際には作戦通りに行く保証はないため、その場その場で臨機応変に対応していくしかないだろう。

……。

実は、先の方法以上に楽な方法もあるにはある。

他の大きな戦力……２５０m級にも匹敵する強力な艦砲を持つエルステッドやハンゼンを攻撃に参加させるのだ。

もしも、この二隻を攻撃に組み込めば、強力な支援攻撃を期待できるし、強力な一撃でもって敵艦艇の排除もやりやすいのは明らかだ。

だが、艦艇を攻撃に参加させれば、万が一と言う言葉があるように、アンラッキーというか、敵艦艇の錬度が高かった場合、こちら側が沈められるという可能性も出てくる。

元より人が生きる生存環境ではない宇宙では、母艦をやられるのが一番怖いという考えが俺にはあるため、到底、許容する事が出来

ず、攻撃への参加は見送っている。

この旨を戦隊の幹部会議でも話して、全乗組員にも通達しているんだが、それでも納得がいかないのか、中には俺達も戦闘に参加させろなんて直訴メールを送ってくる血気盛んな連中がいたりする。

……気持ちは汲むが、その際のリスクを低減させる方法もちゃんと考えて書き送ってください、というのが、俺の本音だ。

◇　◇　◇

「よし、ＭＳ隊、出撃する」

「了解しました。……戦隊ＭＳ隊の出撃シークエンスを開始します。隊長、発進位置にどうぞ」

ゆっくりと慎重に、発進位置へシグーを進ませる。

「隊長、敵船団の動き、依然として変化はありません。どうか、ご武運を……」

「ありがとさん、ベルナール。その綺麗な声で、皆にもそう言って励ましてやってくれ」

「ふふ、了解です。……進路クリアです、出撃どうぞ！」

「了解！　ラインブルグ、シグー、ＩＳ（Ｉｎｄｅｐｅｎｄｅｎｃｅ　Ｓｑｕａｄｒｏｎ：独立戦隊）１３０１、出るぞ！」

いつもと同じく、リニアカタパルトによる急加速でもって射出されると、すぐさま進路を敵輸送船団に向ける。遠望した感じ、ベルナールが言った通り、まだこちらに気が付いていないのだろう、動

きに変化は見られない。

「先輩、編隊位置につきました」
「了解。……レナ、今回は数が多い、油断するなよ」
「先輩こそ、油断大敵ですよ？」
「……こちら、デファンっす。お二人さんこそ、油断しないで欲しいッすよ」
「言ってろ、デファン。……それで、お前の所の連中の様子はどうだ？」
「実戦の空気に確実に慣れてきてるっすから、以前より、機動にメリハリがあるっす」
「そうか。しっかりと面倒を見てやれよ」
「了解っす」

うん、そのデファン小隊の後方に六つのスラスター光が見えるから、全機、無事発進できたってことだな。

それで、敵さんの様子はっと、……こちらに気付いたようだな。

「先輩、２５０ｍ級より敵ＭＡの発進を確認！　……現状、五！」
「デファン、聞いたな？　だが、メビウスはこれだけではないはずだ、増えるつもりでいるように小隊員に伝えておけ」
「了解！」

しっかりとした返事と共に、デファンからの通信が切れた。

「よし、レナ、一気に加速して、敵の編隊に圧力をかける」
「デファン小隊のやり易いようにですか？」
「ああ、俺達は二機とも高機動を持つ機体に乗っているんだ、これ位はしてやらんとな」

「ふふ、了解です」

二機編隊を組んだまま、編隊を組みつつあるメビウスの仰角方向に機位を進ませる。そうすることでメビウスからの射線を避け、また、心理的にも圧力をかけるためだ。

「メビウスの前衛、編隊が乱れました！　あっ、後方に新たなスラスター光を確認！」
「数は……四か。よし、俺達は後ろのを狙う」
「了解！」

ついでに、どちらを狙うか一瞬迷ったメビウスの前衛編隊に牽制射撃を加えて、動きを制限しておいてやる。後は、デファンに任せよう。

「よし、レナ、このまま敵艦隊への突進を続けて、メビウスの動きを制限する！」
「……先輩、また、無茶を言いますね」
「おや？　レナが嫌がるのは、ミサイルや近接火器が怖いからですか？」
「はいはい、そんな安い挑発には乗りませんよ」
「……大人になったなぁ」

昔は少し挑発するだけで剥きになって食って掛かって来たっていうのに……。

「私はもう十分に大人な女です。……それで、突進する意味はあるんですか？」
「流石に敵さんも味方撃ちはしないだろう」
「あんまり接近されたら、自棄になってすると思いますよ？」

うん、今の案は却下しよう。

「……レナの懸念は正しいだろうからやめとくわ」

「何でそんな拗ねた感じなんですか、って、先輩！　敵ＭＡが来ます！」

「仕方がない、いつも通りに一撃離脱させないように対応する」

「了解！」

「後、２５０ｍ級のビームには十分に気をつけて、常に射線を意識しておけよ？　それと、メビウスとの連携を仕掛ける場合もあるってことも忘れるな」

「はい！」

……とはいえ、メビウスの機動を見るに……錬度は、以前とは比べ物にならないほどに落ちているな。

「レナ、メビウスの動き、下手になってきてないか？」

「ええ、動きが稚拙です。……そこっ！」

「お見事！　……ッ！」

レナが見事なまでの予測射撃でもって一機のメビウスを落とすのを賞賛する。

と同時に、味方機との連携もせず、安易にリニアガンを撃ちながら突進してきた別のメビウスを、擦れ違う瞬間を狙って攻防盾の先に取り付けた三本クロー……Ｌ１に浮いていた重斬刀を加工した再利用品……で引き裂く。

「くッァ！」

だが、その際の衝撃で機体が回転してしまった。

「こりゃ、クローを使うのも考えモノだな」

自然、ボヤめいた独語をしながら姿勢を立て直すと、正面に、こちらに攻撃を仕掛けるために旋回をしているメビウスを捉えた。小まめな回避機動も組み込まない、あまりのも下手な旋回をしていたため、これ幸いとばかりに、進路を予測して射撃を加えてみる。

……あっけなく、落ちた。

「……やっぱり脆いな」

「う、うわぁ、さっきの攻撃……まさに先輩のパーソナルマークを体現する攻撃でしたね」

「いや、そのマークを作ったのはレナだろう？」

「あ、あはは」

レナに頼んだ俺のパーソナルマークは、名前のアインの頭文字Ａを筆記体の大文字αにして、その中で狼が雄叫びを上げる姿に仕上がったんだが、細かい所……牙や足の爪の部分が強調されて描かれている。で、レナは今の攻防盾のクロー攻撃をマークの狼の爪に譬えて揶揄したのだ。

「……いや、そんな話をしている場合じゃなかったな、後の一機をって、来たか、デファン」

「二人とも！　何をのんびりしてるっすか！　もう、メビウスは全機落したっすよ！　次は、ほら！　ミサイルが来るっす！」

「おおぅ！」

見れば、ほぼ全ての１５０m級から、これもいつもと同じく、四つのランチャーから小型ミサイルが断続的に放たれている。

それに伴なって、ロックオン警報が鳴り響き、アラートランプに赤色光が点る。

……あ～、対艦攻撃を仕掛けるマクスウェルとリーの小隊を掩護するためには、あれの目標にならにゃいかんなぁ。

「デファン、お前の小隊で対艦攻撃をする二小隊がミサイルに食われないよう、サポートに入れ」

「了解っす！」

で、残った俺達だけど……。

「……また、ですね」

「ああ、いつものように、たくさんのストーカーを連れての追いかけっこだ」

「まぁ、いいですけどね、ダイエット代わりになってますし」

「ほぅほぅ、レナさんは最近、お痩せになってますか」

「……え、えーと」

「以前と変わらんように感じるがなぁ」

「先輩、何処を見て言ってやがりますか？」

もちろん、男が皆大好きな母性さ！

って、レナさん？

その顔の翳に何やら恐ろしい気配が感じられるのですが？

「さ、さて、来るぞ、レナ！」
「……いつか刺してやる」

怖ッ！

「ぶ、ブレイク！　さっきも言ったが、２５０ｍ級のビームに気をつけろよっ！」
「わかりました！　ほんとにもう！　帰ったら、絶対に！　文句言ってやるんだからっ！」

うん、まぁ、それ位の意気があれば、これぐらいのミサイルは捌けるだろ。

んんっ？

……あっれぇ？

……。

俺の目、おかしいのかな？

……。

なんで、ミサイルの大部分が俺を追ってくるのかなぁ？

「レナ、なんか、俺の方に、えらい、量の、ミサイルが、来てるんだが、おかしく、ない？」
「知りま、せんっ！」

……そうか。

あれか？

いつもと、おなじで、黄色が、悪いんだ、きっと……。

「これで、どうだっ！　……っ！」

何度か急旋回でやり過ごしているんだが、今回は、以前よりも増して、しつこく追いかけて来てくれる。

「って、危ない、なぁ」

しかも、２５０ｍ級からビームまで時々飛んでくる始末だ。

「これは、あれか、ミサイルの、改良は、い、っそう、進んで、いる、ってこと、かっ！」

「そう、みたい、ですね、……先輩、一度、交差、しますか？」

「ああ、そう、しよう」

で、高速を保ったまま交差して、ミサイル群同士をぶつけることで誘爆させて、大幅に減らしてみる。これで少しは楽になるかと思った。

「先輩！　ミサイルの、第二派を、確認！」

思ったんだが……現実はいつも厳しい。

つか、対艦攻撃はどうした？

「……レナ、対艦、攻撃が、難しい、のか？」

「そうかも、しれません」

……。

「なら、ちょっと、前みたいに、ミサイルを、利用して、みるか」

「それはっ！　危険！　です！」

「これも、お仕事……危険は、当然」

「ですがっ！」

「つか、この量、結構、厳しいわ」

「……もう、少し、我慢、できま、せんか？」

サブモニターで、対艦攻撃を仕掛けている小隊の様子を伺ってみる。

……近接火砲が効果的に形成されているな。

こちらに、気を引かせるためには……。

「うぉぉお！」

って、２５０ｍ級のビームかっ！

危なかったな、今のは……。

「先輩ッ！　ミサイルが！」

「っ！」

なっ、しまった！

これが狙いかっ！

背後から追ってきていたミサイルが急速に近づいてくる。

……。

……くっ……これは……当たるッ！！

「ぬ、ぬぉぉぉぉーーーーーーーーーー！！」

「せ、せんぱいっ！」

……レナの悲鳴が耳に残った。

36　群狼の雄叫び　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

37　群狼の雄叫び　5

大量のミサイルが至近距離で一気に爆発したため、凄まじい衝撃が機体を大きく揺さぶり、同時にその破片が各所の装甲を傷つける感触を覚える。

だが、呆けていれらない。

馴染んだ動きで、脚部の姿勢制御バーニアを噴射させ、ミサイルの射線上から機体をずらす。

……先程まで機体があった空間を、爆発に巻き込まれなかった複数のミサイルが通り過ぎていった。

少しほっとして機体情報に目をやれば、幾つもの警告のレッドや注意のイエローが点っていた。

……それでも、俺は生きているし、機体もまだ動く。

それに、今の爆発なら、相手も俺が落ちたと思ったかもしれない。

このチャンスは生かすっ！

「……せん、ぱい？」
「なんだっ、レナ！　呆けるなら後にしろよ！　お前の後にもミサイルが近づいているぞ！」
「は、はいっ！」

……しかし、危なかった。

咄嗟に攻防盾を切り離して、思いっきりミサイルにぶつけなかったら、あの世に旅立ってたな、間違いなく……。

だが、これで邪魔なミサイルは吹き飛ばしたっ！

今度はこちらが攻める番だ、ちくしょうめっ！

「レナ！　お前を追いかけてくるミサイル、しばらくは何とかできるな？」
「え、え？」
「どうした、しっかりしろ！」
「は、え、せ、先輩、今の爆発を、ど、どうやって？」
「それは後で説明する！　俺は今からミサイルの元というか司令塔を叩く！　もうしばらく、我慢できるか？」
「で、できます！」
「よし、いい子だ。すぐに戻るからな」
「あっ……」

新しいミサイルを撃たれる前に、相手を動揺させないと……。

なんて考えながら、開いた左手に重斬刀を装備させて、通信を開

き、現状を各小隊長に問う。

「デファン！　マクスウェル！　リー！　状況はどうかっ！」
「艦同士の連携が上手いっす！」
「隊長！　戦艦の火器とビームが邪魔です！」
「あれがなきゃ、すでに落としてます！」
「よし、わかった！」

……ならば、この俺の、怒りの一太刀を、喰らいやがれぇぇッ！！

「って、えええぇぇ！　先輩、何してるっすか！」
「重斬刀を……」
「……投げた」

左腕を大きく引いて、突くように投げつけた重斬刀の目標は、もちろん、狙いは２５０ｍ級の艦橋だっ！

「お前ら！　何をボケッとしてる！　隙が出来てるぞっ、１５０ｍ級を落とせッ！」
「はっ、はいっ！」
「了解！」

対艦攻撃を指揮する二人に発破を掛けた後、２５０ｍ級の動きに注意しながら、近接火器目掛けて、重突撃機銃を乱射する。

……。

おうおう、恐怖の質量兵器を落とすために、全艦艇がビームやら

近接火砲やら、必死の防御火線を形成してますねぇ。

だけど、何故か、こういう時って、悪魔が嘲笑っているのか、天使がソッポを向いているのか、とにかく、当たらないんだよねぇ。

これ、俺がラウと度重ねた模擬戦で得た、貴重な経験則の一つよ。

「……相変わらず、やることが奇抜すっねぇ」

「ふん、こちとら危うく殺されかけたんだ、遠慮はしない。それよりも、デファン、しっかり、攻撃隊のサポートしておけ」

「了解っす」

さて、俺はレナを……。

「先輩！」

「ん？　レナ、ミサイルは大丈夫なのか？」

「はい！　ミサイル全弾、振り切りました！」

……この短時間で……何気に、レナって凄いんじゃないだろうか？

「どうかしましたか？」

「いや、レナの技能に驚いただけさ」

「？　って、先輩こそっ、ミサイルのダメージはっ！　身体は大丈夫なんですか！」

「ああ、機体にレッドやイエローが幾つか出ているが、まだ動かせるし、俺も大丈夫だ。……ちょっと危なかったがな」

嘘です！　本当はとっても怖かったですっ！

でも、隊長だから、表に出さないのですっ！

それにだ……、いつの世でも、痩せ我慢をしてみせるのは、男の特権なのですよっ！！

表面で強がりながら、後でスーツ内の小便袋、見つからないように捨てとかないとなぁ、なんて考えていたら、爆発光を相次いで確認した。数が二十近いってことは……。

「よし、どうやら１５０ｍ級は上手く落とせたようだな」

「はい、そうですね。……あ、あれ？」

レナがあげた疑問の響きに、どうしたのかを問おうとしたら、対艦攻撃を仕掛けた小隊長達から相次いで、通信が入った。

「マクスウェルです。引き続き、輸送艦を狙います！」

「こちら、リー。輸送艦への攻撃を開始する！」

「了解。２５０ｍ級がまだ残っているし、輸送艦とはいえ、武装もしているから、十分に注意しろ。……無理はするな、させるな」

「「了解」」

この船団の肝である輸送艦群は前後を戦闘艦に挟まれていたために、逃げるに逃げ出せなかったって感じである。

船団護衛というのも、難しいものだなと考えていたら、レナが恐る恐るといった感じで、俺に声を掛けてきた。

「え、えーと、先輩？　２５０ｍ級の艦橋の脇に、何か刺さってるんですが……」

そっちは、意識して見なかったのに……。

「……あれって、重斬刀、ですか？」

「……ああ」

いや、どうやら俺が投げた重斬刀……２５０ｍ級が本当に迎撃に失敗してしまったみたいで、それが、艦橋脇に深々と突き刺さってしまったようなのだ。

でもって、それが刺さって以降、戦艦の火砲は沈黙していたりする。

ふっ、俺も怒りで暴走するなんて、若いよなぁ。

……あっ、なるほど、これが若さ故の過ちってやつですねわかります。

過去の前世での名言を思い出しながら、全体状況を俯瞰し、そろそろ援護に動くかなんて思ったら、相手が先に動いたようだ。

「……先輩、敵２５０ｍ級より発光信号を確認。我が艦隊は降伏す

る。乗員の安全を保障されたし、です」
「よし、受諾する」
「了解しました。受諾信号を送ると同時に戦闘停止の信号弾を上げます」
「ああ、頼む」

レナ機から受諾信号が発されるのと同時に、戦闘行動停止の信号弾が……弾ける。

……さて、リーは大丈夫か？

「……ＭＳ隊の戦闘行動、停止しました」
「うん、確認した」

はぁ、良かった。

……リーも落ち着いてきているということかな。

懸念は懸念のまま終わり、安堵すると共にＭＳ隊の共用回線を開く。

「皆が見た通り、敵が降伏した。戦闘は終了だ。……各小隊長は被害報告を頼む」

隊全体を確認したが、幸いにも、数は減っていない。

「デファン小隊、モーリス機の左腕損傷っす」
「マクスウェル小隊はさっきの対艦攻撃で、コリン機が頭部をもぎ取られました。本人も少し負傷していますが戦闘に支障はありません」

「リー小隊、１５０m級が沈む寸前に撃った弾が当たって、ルッツ機の右背部スラスターが損傷しています。ですが、幸い、推進剤への誘爆は免れました」

この被害……やはり、今までで一番酷いな……。

「……よし、モーリス、コリン、ルッツの三機は艦へ戻す。機に余裕があるモーリスが他の二機の面倒を見ろ。残りは二機編成を組んで対応するように。……後、どんなことがあっても即応できるようにしておけよ」

「「了解」」

さて、後始末だ。

レナに背中を任せて、ゆるゆると２５０m級の艦橋付近に機を進ませる。

……間近で見ると、デカイ。

通信回線を宇宙船の運航で使われる国際共通回線にあわせ、相手と直接会話するためにサブモニターも開く。

モニターに映ったのは、連合軍の白い制服を着た中年の口髭を生やしたおっさんだった。

「ザフト宇宙機動艦隊のアイン・ラインブルグだ。……貴艦隊の勇戦と貴官の英断を称えよう」

「本艦隊を預かる地球連合軍第四宇宙艦隊大佐のバーナード・ベン

サムだ。……降伏するに辺り、乗員の安全を保障してもらいたい」
「ああ、もちろん保障しよう。だが……」
「……艦を降りて、放棄しろと言うのだろう？」
「ああ、そうだが……」

……なんで知ってる？

「……黄色の派手な塗装をしたＭＳが出たら、戦わずに逃げるか、降伏するように同僚から言われていたのだ」
「ああ、なるほどね」
「まったく様がない……ＭＳが何するものぞと豪語していて……これでは、死んだ部下に顔向けできん……」

それは、俺の関与すべきことじゃない。

「さて、こちらからはｓ「くたばれっ、宇宙の化け物！　親父のっ！　お袋のっ！　皆の仇だっぁぁっっっ！！！」」

突然、罵声が聞こえたと思ったら、右側面から突然、凄まじい衝撃を受けて、頭を内部機材に強打する。

「ぐッっ！！」

衝撃と共に頭と頬に感じた痛みに、自然、口から苦悶の声が漏れるが、我慢だ！

「「先輩！」」

「「隊長！」」

通信系から皆の声が聞こえるが、応えてはいられない。

まずは……機体ダメージの確認！

……右腕、右脚がなくなった？

右背部スラスターもって……推進剤のカット！

……。

……誘爆……しないか……助かった。

後、エアー漏れも……ないな。

……。

……だが、よく助かったな、俺。

……。

……ああ、なるほど、腕と突撃機銃がクッションになったのか…
…俺、悪運強いな。

「先輩！　先輩！　大丈夫なんですか！　返事を！　返事をしてください！」
「……大丈夫だ、レナ」
「あ……よかった」

……バイザーが割れてるな。

とりあえず、ヘルメットを脱ぎながら、右の手足が無くなり、難しくなった機体バランスを何とか取りつつ、一端、２５０ｍ級から距離を置く。

こうなった原因の元を探すと、２５０ｍ級の左舷近接火砲が破壊され、火を噴いていた。

どうやら、レナが対処してくれたらしい。

「レナ、助かった」
「いえ。……それよりも先輩、血が……」

言われて始めて頬から出血していることに気付き、また、少量の血がコックピット内を漂うのを見て、エアクリーナーをオンにする。

ついで、周辺状況を把握してみれば……、今にもリーが今にも輸送艦に向けて無反動砲をぶっ放しそうだったので、慌てて制止する。

「……リー、まだ撃つな」
「ですがっ！」
「わかっている。いつでも落とせるように、全機、各艦の艦橋に照準を合わせておけ。……まだ、相手の言い分を聞いてからでも遅くはない」
「……了解」

しかし……今のは……騙まし討ちか？

だが、そんなことをしても、余計な怒りを買って、確実に殲滅されるだけだし、今後の同じような降伏交渉にも支障が出るだろうし……何のメリットがない。先のおっさんの雰囲気からしても、そんな馬鹿なことをしないように見えた。

となれば……一部の暴走か。

「……向こうとの通信は……まだ生きているか」

見れば、モニターの向こうでも何やら騒動が起こっているらしいが……あの罵声から考えるに、青秋桜の狂信者か現状も把握できない阿呆か……復讐に狂った鬼だろう。

事をどう収めるか悩みつつ、通信画面に誰かが現れるのを待っていると、艦隊司令のおっさんが姿を現した。

あ～、顔、真っ青だね。

「……さて、ベンサム大佐……今のはあんたの指示でやった騙まし討ちか？」

「ち、違う！　今のはっ、部下のっ！　そ、そう、ブルーコスモス派の部下の暴走だっ！」
「……ならば、あんたの責任は余計に重いだろうな。ブルーコスモスだろうが、なんだろうが、そこにどんな理由であったとしても、部下が暴走するって事は、きちんと部下の掌握が出来てないってことだからな」
「くっ！」

……ザラ委員長みたいな強い者いじめなら、大いに張り切るんだが、弱い者いじめはカッコ悪い上に、俺の趣味じゃない。

「まぁ、そんなことはどうでもいい。……しかし、俺もたいがい悪運が強くて助かったが……あんた達も運が良かったな。もしも、俺が落ちていたら、俺の部下が復讐に狂って、この場にいる全員一人残らず皆殺しにしただろう。当然、攻撃されたのが俺ではなく部下だったら、俺はあんたらを一人残らず殺すように命じていたしな」
「……」
「とはいえ、降伏後に攻撃が為された事実は覆らない。よって、降伏は認められないことになるが……」
「そ、それは……」

今の状況で落し所なんて、少なくとも、馬鹿をやらかした側の立場じゃ、見つからないわな。

……。

まぁ、俺だって人間だから、無駄な殺生はできれば避けたい。

だから、こちらから譲歩してやろうじゃないか。

「……そうだな、一つ条件を加える事で、降伏を認めよう」
「ど、どのような条件だ！」
「……誇りある軍人にこんなことを言うのは失礼かもしれんが、ここは古来の海賊の如く、掠破りには死をもって報いるのはどうだろうか？　……事の元凶を、ノーマルスーツで宇宙に放り出し、酸欠か放射線で焼かれて死に至るまで、死の恐怖と共に苦しめさせる。これを降伏条件に付け加える。……それで手打ちだ」
「なっ」
「……最低限のルールを破った以上は、あんた達も皆殺しされても文句が言えないだろう？　それを避けるには、これぐらい惨たらしい条件がないと、俺の部下に示しがつかないし、俺も納得しない。それに、今みたいな結果を考えずに馬鹿を仕出かす奴は下手に生かしたら調子に乗って、また周囲に災いを振り撒くだろうからな。……相応の報いを与えた方が双方のためにいいだろう。……これ以上、俺からの慈悲を期待するな」

俺って、殺されかけたのに、これだけで済ますなんて、優しい……よな？

「隊長！　攻撃許可を！　ユニウスを攻撃した奴らにそんな慈悲はいらないですよっ！」
「言うな、リー。……それと、お前が言ったその理屈は、もう使うな」
「な、何故ですか！？」
「ユニウスを破壊された怒りと憎しみと怨みは、ニュートロンジャマーが地球に叩きつけられたことで晴らされている」
「けどっ！」
「……聞け、リー」
「っ！」

今、俺が殺せと言った相手は、恐らく、四月の、ザフトの……プラントのニュートロンジャマー無差別散布で家族を失っているんだろう。

だが、それは、自身が仕出かした事の原因にはなったとしても、結果への言い訳にはならない。

「俺達は今、戦争中で、連合軍と殺し殺される関係だが、そこにも最低限のルールが必要なんだよ。ただでさえ、コーディネイターだのナチュラルだのと、くだらない理由で感情的になって、そのルールが容易く破られる現状なら、特にな……」

「で、ですが、隊長！　今、隊長はそのルールを破られて、殺され掛けたんですよ？　なのに、なぜ、そんな慈悲を……」

確かに、リーの言う事も真理なんだろうな。

「……それはたぶん、自らの精神を簡単に貶めないように、一度ぐらいは過ちを許そうと心掛けているからだろうさ」

「……」

「とはいえ、それも俺に関わることだけに適用させることであって、それ以外には適用させるつもりはない。さっきも言ったが、お前達の誰かが攻撃されていたら、俺は全艦を容赦なく落としていた。心情的にも、隊の責任者としても、それだけは絶対に見逃せないからな」

……もしかしたら、俺の考えは矛盾しているかもしれない。

だが、俺は元より不完全な人間という存在である以上は、必要以上に気にする事の程でもない。

「さて、大佐、返答や如何に？」
「……わかった。今の条件を、私の責において……飲む。……コスギ大尉、バジルール少尉、その馬鹿をＭＡ格納庫に連行して、速やかに処置しろ」
「「……はっ」」

やれやれ、自分が出した条件とはいえ、後味の悪い終わり方だよ。

「マクスウェル、デファン、リー、艦隊の監視を任せる」
「……了解です、隊長」
「……了解っす」
「……了解」
「レナ、戦隊に連絡を入れてくれ。どうせ最後なんだ、輸送艦も接収しよう」
「……わかりました」

……後、多分、言って良いことではないかもしれないし、今更のことなのかもしれないが、とんでもない現実だけは、向こうにちゃんと伝えておこう。

「大佐、最後に一つ、忠告をしておきたい。……今のプラント軍……ザフトでは、コーディネイター優越主義が蔓延っていて、ナチュラルっていうだけで格下、酷い時には人とは見ず、虫けらのように見る連中が、悲しいことだが……多い。だから、降伏を申し出ても……自分で言うのも嫌になる、とんでもない話だが、認めない可能性もあるかもしれない。そういうことも起こりうるということを、よく覚えておいて欲しい」
「……わかった、忠告を感謝する」

大佐が意外な程、見事な敬礼を見せたので、こちらも礼儀で、答

礼を返した。

あ～、もう、こんな殺伐とした日常を送ってると、無性にミーアの顔が見たくなるなぁ。

……はぁ、早く家に帰りたいよ。

37　群狼の雄叫び　5（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

38　年末年始の骨休め　1

12月24日。

戦隊は最後の襲撃の際に拿捕した輸送艦を伴なってプラントに帰還した。

以前と同じく、輸送艦の臨時艦長及び運航スタッフはエルステッドとハンゼンの両航法通信管制班、つまりはアーサー達から抽出している。彼らも、ザフトと連合軍の規格違いがあるだけに使い慣れない機器が多くて大変だっただろうが、これも成長するための一つの試練ということで耐えてもらった。

そうやって、わざわざプラントまで持って帰ってきた二隻の輸送艦には、連合が月へ送る予定だった食料品や酒、無煙たばこ等の嗜好品やらが大量に積まれている。

なんとなれば、現在の世界全体の食料及び経済事情を考えると積荷は貴重な代物だったから、積載量限界まで詰め込んで頂いて来たのだ。

まぁ、ぶっちゃけると、戦利品という奴だ。

で、これらのお宝もとい食料品等満載の輸送艦を当初は四隻拿捕して、世界樹の種へと引き揚げてきたのだが、賃貸料……というのは冗談として、お裾分けに二隻を残してきたりする。

拠点の司令や建設及び運営スタッフ、防衛隊に駐留艦隊、俺達と同じように通商破壊任務に従事する他の独立戦隊の連中も、プラント優先の食料供給のため、あまりよろしくない食事環境が続いていただけあって、非常に喜んでくれた。俺達の戦隊がプラントに帰還

する時には、わざわざ見送りに来てくれたくらいだ。

本当に、残した甲斐があったというものだ。

ちなみに、エルステッドやハンゼン内部にも、撃沈予定の輸送艦から拿捕予定の艦へとブラックＢＯｕＲＵやＭＳを使って積荷を移し替えた際に、積めるだけ詰め込んでおり、下船時に乗組員全員に全て分配していたりする。

……こうやって考えてみると、やっていることは海賊そのものだが、戦隊は三ヶ月以上に及ぶ長期任務をこなしたのだ、これくらいの役得は臨時の報奨ということで、上からもお見逃しをいただいた。

もっとも、賄賂代わりに国防委員長室と国防事務局、宇宙機動艦隊司令部に貴重な珍味や高級酒の類を任務報告書と一緒に送りつけたのも効いているんだろうけどね……。

げふんげふん。

……とにかく、戦隊にはザフト宇宙機動艦隊からの通達で一ヶ月の休暇が与えられることになった。

◇　◇　◇

俺も戦隊の幹部達と一緒に、手配しておいた配送サービスに持ちきれない土産品を嬉々として預けた戦隊員が全員下船するのを見送った後、エルステッドとハンゼンの両艦をメンテナンスドックに預けて、家に帰ろうとしたのだが……。

「先輩、約束のご飯！」

宇宙港のラウンジで待伏せしていたレナに、飯の催促をされてしまった。

「あ～、そういえば、レナとは約束があったな」

「はいっ！　今日、この日が来るのを待ちわびてました！」

おおっ、出会ってから此の方、見た事がないくらいに、レナの目がキラキラしている！

こ、これは、先輩として、男として、応えてやらないとっ！

「んで、レナは何が食べたいんだ？」

「ん～、何でもいいですから、おいしいのが食べたいです」

「むぅ、何でもいいと来たか……」

そうだなぁ。艦での食事は搭載量の関係でどうしても制限された内容になってしまって、飽きていたからなぁ。俺も、何か新鮮な物が食べたい気分ではある。

となれば……むむむっ。

「そうだな、寿司なんてどうだ？」

「えっ、あの、ＳＵＳＨＩですか？」

「……レナが言うのが、どの寿司なのかわからないが、昔、日本で食べられていた寿司だ」

現在は、東アジア共和国になってしまった、前世の祖国を代表す

る食だ。

「……食べてみたいです」

「よし、んじゃ、行くか」

その前に財布の中身を確認っと。

……。

うん、回らない寿司じゃなくても大丈夫そうだって、プラントには回る寿司屋なんてないんだよなぁ。

「よし、寿司屋があるのはユニウス・フォーだから……こっちの連絡船乗り場だな」

「はいっ！　御供しますっ！」

……ん？

「どうかしましたか、先輩」

「いや、こう、誰かに見られていたような？」

「へっ？」

俺の言葉を受けて、レナがキョロキョロとラウンジを見回すが……。

「誰もいませんよ？」

「いや、あの植え込みの影で何かがこちらを伺っていたように感じたんだが……」

「私、見てきましょうか？」

「……いいよ。気のせいだろう。そろそろ、連絡船が来るだろうか

ら、行くか」
「はいっ！」

山吹色と緑色の髪が見えた気がしたんだが……気のせいだろうさ。

◇　◇　◇

でもって、やって来ましたユニウス・フォー。

宇宙港でそれぞれ抱えていた荷物を預けた後、居住区に降りてきた。その降りる間に垣間見えたんだが、ここの湖……というか海は居住区の大半を占めていて、かなり大きかった。

「先輩、ここの海、大きいですね」
「ああ、通常の倍以上はあるな」

このコロニーに本格的な寿司屋があることを教えてくれたザラ夫人によれば、ユニウス・フォーは魚介系の養殖を専門に扱っており、外洋魚の養殖にも成功しているらしい。もっとも、流石にプラント全体の需要を満たせるほどの供給はできないとのことらしいが……宇宙で外洋魚を養殖すること自体がすごいと思うよ。

ちなみに、このコロニー、本来はリゾート地だったそうで、今現在も海水浴場等があったりする。

「場所は知らないって、先輩は言ってましたけど、お店は案内に出てるんですか？」
「たぶん、出してないだろうけど……店の場所と連絡先を情報端末

に控えておいたから、大丈夫だよ」

そんなわけで情報端末を頼りに、レンガ造りを模した建物が並び、潮の香りがする港街を右に左に彷徨うこと１０分ほど……目的の店が見つかった。

路地裏に近い細い街路に面していたその店は、幸いなことに、営業中だった。

「さて、……とりあえず、入るか」

「あ、はい」

タッチ式の自動ドアを開けて、中に入ると、酢の香りが鼻に入ってきた。

……懐かしい匂いだった。

懐旧のあまりに心奪われかけると、店の中から声を掛けられた。

「らっしゃい」

「……あ、どうも、二人なんだけど、席、空いてる？」

「空いてますよ」

黒髪の寿司職人の返事を聞き、レナを伴なって中に入る。店内には、カウンターとテーブル席が三つ程あり、客が二人ほどカウンターに座っていた。

「レナ、カウンターとテーブル席があるみたいだけど、どっちがい

い？」
「……テーブル席がいいです」
というわけで、テーブル席に二人向かい合って座ってみる。
「え、えーと、先輩？」
「はいはい、お品書きはっと」
お茶とお絞りと一緒に届いたお品書きにざっと、目を通す。
……ここは三ヶ月以上、命を張って、頑張ってきたことに加えて、後輩にも奢るのだから、食料物価が高くなりつつある影響でかなり高いお値段であったとしても、松セットを選ぶのが最もいいでしょう、と脳内会議で満場一致で決議されたので、ここは素直に従って注文することにする。
「松を二つ、お願い」
「はい、わかりました」
愛想のいい店員さんに注文して、後は、出来上がりを待つばかりである。とりあえずは、お絞りで手を拭いて、お茶を飲んで……ああ、これ、久しぶりで美味いわぁ。
レナも俺の真似をしながら手を拭いたりしていたが、しばらくすると、俺を見つめたまま、不思議そうに首を傾げた。
「……先輩、なんか、馴染んでません？」
「んっ？」
「いえ、妙に、こう、雰囲気に溶け込んでいるというか、リラックスしているっていうか……」
「ああ、たぶん、血の所為もしれない」

「血、ですか？」
「ああ、俺の母方がな、東アジア系……特に寿司の生まれ故郷である旧日本の血が入ってる家系なんだよ」

母本人の姿形や容姿からはそんなに日系らしさをまったく感じなかったけど、生活習慣は意外と和風な面があった。

「へぇ、そうなんですかぁ。あ、だから、この店も？」
「いや、ここは母の知り合いが教えてくれたんだ」

ちなみに、母の知り合いとはザラ夫人のことで、その夫人も俺の母に教えてもらったとか。

「ふーん、その知り合いって、どんな人なんですか？」
「ザラ国防委員長の奥さん」
「ブ、ゲホっ」

……いや、そんなに驚くなよ。ああ、ほらほら、こぼれてるこぼれてる。

レナの胸にかかってしまったお茶をお絞りで……って、俺、セクハラは駄目絶対駄目！

俄かに現れた煩悩と葛藤を封じ込め、レナに手拭を渡してやる。
それで口元と制服を拭いたレナが恨めしそうな目で俺を見る。

「先輩、驚かさないで下さい」
「いや、そこまで驚くことか？」
「……そう言われてみれば？」

交友関係なんて、どこでどうつながっているか、わからないもんだよ。

「そういえば、レナ、実家に連絡は入れたのか？」

「はい、プラントに帰ってきたって連絡はちゃんと入れましたよ」

「そうか、家族は皆、元気だったか？」

「ええ、それはもう、生まれたばかりの妹の声を聞かされる位に……」

……いや、それって、めでたいことのはずなのに、何で、そんなにブラックな雰囲気に？

「いい歳して、子どもを作ったくせに、私に孫を催促する両親がうるさくて……」

「孫？」

「……そうなんですよっ！　早く孫の顔を見せろ、ってうるさいんですよっ！　もう、ほんとに、放っておいて欲しいです！」

「お、落ち着け、レナ、周りに迷惑だ」

あ、いや、カウンターのお客さん、けっ、痴話喧嘩なんてしやがって、独り身の俺に対するあてつけか、ごらぁ、なんて目で見ないで下さい。それは勘違いですからっ！

「た、確か、レナの実家は……マティウス市だったよな」

「……はい、私とサリア……ベルナールは同じマティウス・ツーの出身ですよ」

よ、よし、ここから、話を変えていくぞ！

「ああ、それで……ベルナールはローラシア級について詳しかった

のか」
「いえ、たぶん、サリアがそれに詳しかったのは、情報集めが趣味だからですよ、きっと」
「情報集めが趣味？」
「ええ、好奇心が強いですから、サリアは……」
レナは自身の親友を思い浮かべたのか、ブラックな空気がなくなり、表情に柔らかいものが戻った。
……。
うん、初めて会った時よりも雰囲気に落ち着きがあるから、子どもらしさが抜けて、いい表情になっているよ。
「お待たせしましたぁ、松二人前です」
「はい、どうも……ほら、レナ」
「あ、ありがとうございます」
さっきの店員さんがレナの前に寿司が乗ったゲタを置いた後、俺の前にもゲタが置い……ああ、目の前に、色鮮やかな握り寿司が……。
「これが寿司、ですか？」
「ああ、これが寿司だ」
ああ、嗚呼、懐かしき、握り寿司っ！
カリフォルニア巻じゃない、伝統の握り寿司っ！
「さて、食べるか」

「は、はい」

心浮き立たせながら、割り箸を割り、醤油を小皿にたらし……寿司を一貫……トロ……ああ、脂身が、トロケテ、う、う、美味いぞおぉぉーー！

「え、えーと」

俺の魂が！　寿司の味を！　しっかりと！　覚えていたぞぉー！

「あれ」

ああ、嗚呼、例えネタが養殖だろうと、美味いもんは美味いぃぃぃっ！！

「う、うぅ、うまく、持てません」

あまりに悲痛な声が聞こえ、何事かとレナを見れば、箸の持ち方が滅茶苦茶だった。

「ああ、箸は、こう、持つんだ」
「……こう、ですか？」
「違う違う、こう」
「……むずかしいです」

ならば、昔、前世でも、現世でも、母にやってもらった方法で教えようか。

ちょっと、立って、素早くレナの後に移動して、覆いかぶさるようにして、箸を持つ手に手を添える。

「え、えっ、ええっ、ちょ、えっと、先輩？」
「いや、箸の持ち方は、こうだよ」
「……あっ、……こ、こう、です、か？」
「うん、そうそう、うまいうまい」

早くも上手くいきそうなので、再び、元の席に戻って、寿司をもう一貫……ブリ……ああ、美味い！

「あ、持てた」
「そう、それに醤油をちょっとつけて、食べる」
「……ぁむ」

……？

「……お、美味しいです！」
「そうか、なら連れて来て良かったよ」
「はい！　今度、サリアや家族に自慢してやろうっと」

そう言うと、レナはご機嫌なお子様のようにニコニコと満面の笑みを浮かべる。

……うん、さっき感じた女らしさは勘違いかもしれない。

まだまだ、レナは子どもだ。

その後、レナとお喋りしながら、寿司を全て平らげ、お土産用の寿司も握ってもらい、それぞれ、お持ち帰りすることにした。

……少し多めに、ね。

財布をほぼ空にして寿司屋を出た後、折角来たのだからということで、港情緒が溢れている市内をしばらく散策した後、再び宇宙港へつながるエレベータ前に戻ってきた。

隣を歩くレナが青い髪の尻尾を揺らせて、まだまだ元気一杯な様子を見るにつけ、自分の歳を感じてしまう今日この頃です。とは言いつつも、ニコニコと笑顔が絶えないレナを見ていると、こっちも嬉しい気分になる。

「先輩っ！　今日は、ご馳走様でしたっっ！！」
「はいはい、で、どうだった、本格的な寿司は？」
「ええ、とっても美味しかったです！」

うんうん、そんなに喜んでもらえると、お兄さん、嬉しいよ。

なんてことを思いながら、エレベータ施設の出入り口付近で周囲を見回してみる。

「……どうかしましたか？」
「んっ？」
「いえ、さっきから周りを見渡してますけど」
「ああ、ここに知り合いがいるはずなんだよ」
「知り合い？」

……いた。

二人して、エレベータホールのベンチでグッタリとしている。

「あっ、サリアにデファン！」

目を丸くして、二人に駆け寄るレナ。俺もその後をゆっくり付いて行く。

「二人とも、こんな所で何してるの？」
「い、いや、俺はサリアに無理矢理連れてこられたっす」
「わ、私は、その、レナが大丈夫か、心配で……」
「後を付けてきたんだろ？」
「先輩、き、気が付いてたっすか？」
「当然、ザフトに入る前の俺の前歴は保安局員だぞ？」
「えっ？　そ、それは知らなかった」

ガックリと肩を落とすベルナールに思わず、苦笑が漏れてしまう。

「ほれ、二人に残念賞兼敢闘賞だ」

二人に小さい寿司折りをそれぞれ渡してやる。

三ヶ月以上、頑張った分、特別のご褒美だ。

「な、なんすか、これ」
「寿司」
「……ああ、隊長に後光が」
「そんな大袈裟な。……それよりも、そろそろ、連絡船が来る時間だ。お前達、家に帰ったら、ゆっくり休んで、ちゃんと疲れを取れよ？」
「「「はい、わかりました」」」

……うん、大変よろしい。

いや、可愛いもんだよ、後輩ってさ。

……。

さて、俺も我が家に帰ったら、寿司折りで妹分の機嫌を取らないと……。

なんせ、前から、今日行った寿司屋に連れてけ連れてけ、って催促していたらからなぁ。

ああ、なんか、今から、ミーアの拗ねた顔が目に浮かぶよ。

けど、まぁ、それもまた、可愛いからいいんだけどね……。

さて、これから一ヶ月、ゆっくり、休ませてもらおうか。

38　年末年始の骨休め　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

39　年末年始の骨休め　2

「あ～～～～、え～～～～～感じ～～～～～～」
「もう、アイン兄さん、ちょっと弛み過ぎ。少しは外で運動してきたら？」
「いえいえ、毎日の日課はしっかりと終わっていますので、今日はずっとこのままなのです」

現在、私とアイン・ラインブルグは、作務衣の上にドテラを着込み、我が家の装備品の一つである掘り炬燵に、我が妹分であるミーアと共に、足を突っ込んでゆったりとしています。また、当然のお約束として、テーブル上には蜜柑が山と盛られたカゴが載っかっていたりもする。

……スペースコロニーに住んでいて炬燵というのは何だか違和感を感じるかもしれないが、スペースコロニーには四季が存在しているから、別におかしいことではなかったりする。

一般的にスペースコロニーには四季がないだなんて思われがちだが、逆に地球よりも太陽からの採光や温度調節がしやすいため、気候を操作しやすいのだ。

なんとなれば、コロニーという閉鎖された空間で日常生活を送る以上は、環境になんらかの変化をつけて、住む人を飽きさせず、また、生活に多少の弾みを持たせる、なんてことが重要になってくるためだ。

人は変化のまったくない生活を延々と続けることもできるだろうが、それだと思考回路が硬直してしまって、精神にゆとりや柔軟性

が無くなってしまうこともあるのだ。

だというのに、コーディネイターが自身を優良種であるだなんて思考硬直を起こしているのは、たぶん、ジョージ・グレンの言葉を自分達の都合の良いように捻じ曲げた選民思想の所為だろう。

いや、基本、どんな主義主張をしてもいいとは思うのだが、一つの考え方に固執して、他者の意見や自身に都合の悪い情報を遮断したり、自身が信奉する対象を一段上に見せるために周囲を貶めたりするのは、逆に、その思想や考え、信奉対象の品位を貶めるというか、それ以上の発展や成長が望めないというか、とにかく、残念なことだと思うよ。

……む、考えが変に逸れた。

軸を戻して、我が家があるセプテンベル市でも四季変化……北半球の気候が採用されているため、1月である今は冬ということになり、コロニー内の気温は下がり、炬燵の出番というわけなのだ。

……ああ、ぬくぬく。

それはそうと、ミーアに言われっぱなしなのも何なので、反論してみる。

「そう言うミーアも飯時ぐらいしか、炬燵から出ないじゃないか」

「うっ、それを言われちゃうと反論できない」

俺の的確な突っ込みを受けたミーアは返答に詰まってしまい、あはは、なんて乾いた笑みを浮かべながら、視線を逸らして誤魔化し

ている。こちらもさらに追及するように、まじまじと見つめてやる。

……今、気付いたが、よく見ると、ミーアはほんのりと口紅を差しているみたいだ。

ああ、この子も化粧に興味を持ち始めるなんて、成長したもんだなぁ。

そんな感慨と共に、今度は見方を変えて、さらにミーアを見てみる。

正直、コーディネイターとしては、極普通としか言えない容姿なのだが、紫がかったパールグレイの髪は十分艶やかで綺麗だし、白いセーターの下に隠された母性も標準よりも十二分以上に順調に育ってるみたいだし、何よりも表情の一つ一つが豊かで、その言動は生気に満ち満ちている。

「な、何？　じっと見ているけど……」

「いや、ミーアも成長したんだなぁ、って思ったんだよ」

「……私、成長、してる？」

「ああ、もちろんだよ」

……本当に極稀にだけど、仕草に女を感じて、ドキッっとさせられるぐらいには、ね。

「なら、兄さんに手を出させるほど、悩殺できる？」

「うーん、それには、まだ、後、最低四年は必要？」

……俺が手を出す相手は最低でも１８歳以上じゃないと、色々と問題があるのです。

いや、別にプラントでは、１４歳からでも構わないんですけどね、これは俺の倫理観の問題なのですよ。

「むぅ、中々に手強い」

「はは、俺から言わせれば、まだまだ、ミーアは子どもだよ」

「むぅむぅ」

ああ、もう、こうやって、むぅむぅ唸ると、ほんとに、妹みたいで可愛いなぁ。

「むぅ、その目が納得いかない」

「そうか？」

温かい目で見ているつもりなんだが？

「見てなさい。絶対に、アイン兄さんが手を出したくなるような、いい女になってやるから」

「はいはい、期待してますよ」

「むぅぅぅ」

こっちはさ、赤ん坊の時にオムツ替えてるんだよ？

簡単に、そういう対象には見れないよ。

「ほれ、蜜柑の皮、剥いたけど、食べるか？」

「……食べる」

蜜柑を半分に割って、片方をミーアに渡す。受け取ったミーアは一房もぎり、口に運んだ。

「甘いね」

「ああ、流石は天然物だよな」

実は、これ、先の任務で強奪した戦利品だったりする。こんな素敵で美味い物が口に入るとは、本当に頑張った甲斐があったってもんだ。

苦労の対価である蜜柑の甘酸っぱさをしみじみと堪能していたら、ミーアがまた、口を開いた。

「……兄さん、戦争はいつ、終わるのかな」

「さて、俺も早く終わって欲しいんだけど、中々ね……」

停戦交渉の”て”や講和の”こ”の字も聞かない以上は、まだ続くんだろう。

「兄さん、そっちに、行ってもいい？」

「……んっ？」

甘えたいのかな？

……。

まぁ、拒否する理由はないし、いいか。

「ああ、いいよ、おいで」
「……」

斜め向かいに座っていたミーアが炬燵から抜けると、一秒でも出ていたくないといわんばかりの速さで、俺の足の間って、おいおい。

「んふふっ、ここが背中も暖かいの」
「はぁ、俺はドテラ扱いか？」
「うん」

身も蓋もないミーアの物言いに俺が涙している間にも、ミーアはぐりぐりと背中を俺の身体に押し付けながら、もぞもぞとデニムパンツに包まれたお尻の置き場を捜すと、いいポジションを見つけたのだろう、ストンと落ち着けた。

「ん～、暖かい」
「……それは結構なことで」

……まぁ、俺も懐に暖かい懐炉があると思えば……いいか。

そんな思いを懐きつつ、ミーアが寒くないように、覆いかぶさる。

……。

ああ、ミーアの髪から立ち上る甘い匂いと懐の丁度いい温もりに癒されるわぁ、って、女の子の匂いに癒される俺って、実は某彗星でサングラスで総帥な人についての噂みたいにＨＥＮＴＡＩだったのか？

……いやいやいや、馬鹿な想像は打ち切りっ！

それよりも、ミーアに帰ってきてからずっと気になっていたことを尋ねよう。

「ミーア、俺が帰ってきてから、ずっと、こっちで寝泊りしてるけど……何かあったのか？」

「……ううん、ここで寝泊りしているのは兄さんが帰ってきてからじゃないよ？」

「……へっ？　……俺がいない間もずっとなのか？」

「うん」

そんなに長い間、こっちで寝泊りしてたってことは……家のこと……家族のことで何かあったんだろうか？

「家族と何かあったのか？」

「……ん」

……ということは、あれかな？

「弟のことか？」

キャンベル家には三年前にミーアの弟、長男が生まれている。そのことに関してかなと思って尋ねたのだが……。

「……うぅん、どっちか言うと、父さんと母さん」

「な……に？」

……その言葉に、何故か、突然、休暇で弛緩していた頭を、ガツンと思いっきり殴られた気がした。

「兄さん。……父さんも母さんも、プラントの技術で、自分達の思い通りに生まれた弟に夢中みたいなの」

「そ、そう、なの、か？」

「ん。……それで……思い通りに生まれなかった私のことは、もう、ずっと、見てくれてないの」

「……なっ！」

た、確かに前々から、ミーアからはキャンベル夫婦が長男を非常に溺愛しているとは聞いていたが、まさかの告白だ。

……というか、今、ミーアが話していた内容の重さと話した口調の重さが、まったく、釣り合っていないっ！？

そのことに気付いて動揺してしまい、俄かに波立った心を平常に戻すべく必死に押さえ込みながら、今までのキャンベル夫婦との付き合いを考えてみる。

……。

確かに、ここ、二年程、おかしい。

長女であるミーアが年頃になったというのに、古くから付き合い

がある知り合いとはいえ、男の家に入り浸っていることに対して、俺にもミーアにも、なんら注意をしてこないし……、先だって、挨拶に行った時にも極々普通の対応で、ミーアが何日も泊まっていることへの言及も何もなかった。

いや、そのことには多少の違和感を感じていたが……まさか、そんなことになっていたとは……。

俺が過去を振り返り、これまでの……今までと変わらぬ、ありふれた日常が、実はミーアの我慢の賜物だったことに、何故、気付けなかったと猛省していると、ミーアがポツリ呟く小さな声が聞こえた。

「……父さんも母さんも……あの子だけ、いればいいのよ。だから……ワタシナンテ、モウ、イラナインダトオモウ」

ミーアから発せられたその声が……あまりにも平坦過ぎて……。

その声に含まれている心の色が……あまりにも空虚過ぎて……。

「ミーア」

自身の心に感じた切なさと遣る瀬無さを潰したくて……。

家族同然の少女が抱える寂しさと孤独を癒したくて……。

「……ん」

……胸のうちの大切な存在を力一杯に、しっかりと抱きしめた。

「……」
「……」

少しでも、ミーアの冷えてしまった心が温まるように願いながら、ミーアがきつく感じる位に、互いの心音がよく聞こえる程に、抱きしめる。

「……」
「……」

俺には、妹分の苦境に気付けなかった間抜けな俺には、これぐらいしか……人の温もりを思い出させるぐらいしか、できない。

「……」
「……」

どれだけ、時間が経ったんだろうか……。

胸の内のミーアが身じろぎして、そっと、俺の手に自身の手を重ね触れてきた。

「……ん、ありがとう、兄さん。でも、ちょっと、苦しい」

「それだけ、俺がミーアを大切にしているの……だから、我慢しなさい」

「ふふ。……うん、なら、我慢できるよ」

くすぐったそうに笑うミーアに、先程のがらんどうな雰囲気は見られない。

そのことに安堵しながら、言うべきことは言っておく。

「ミーア、家に居たくないならな、今まで通り、この家を使えばいいからな」

「うん」

少しだけ、腕に込めていた力を緩め、ミーアの身体を俺に凭れさせる。

「これだと、苦しくないだろ？」

「ん。……ねぇ、兄さん」

「なんだ？」

「……もし、この家がなかったら……私、どうなってたかな？」

「そんな馬鹿な想像はするな！　……すまん、でも、そんなことは考える必要なんてないんだよ」

どう考えても、ミーアがとんでもない目にあう、怖い想像になり

そうだからな。

……。

それにしても、ミーアと家族がそんな状態になっていただなんて、確かに、放任にしては……なんてことは思ってはいたが……いや、これも情けない言い訳だな。

……。

うーん、せめて、何かで埋め合わせをしたいんだが、なぁ。

「……ほんとなら、一緒に居てやりたいんだけどなぁ」

「うん、わかってる」

とは言いつつも、ミーアは無意識の中にだろう、俺のドテラの袖をギュッと握り締めている。それが何ともいじらしくて、傍に居てやれないことが申し訳なくて、ミーアの肩に顎を寄せ、頬と頬を合わせて、謝罪の言葉を紡いだ。

「ごめんな、ミーアが寂しい時にいてやれなくてさ」

「……うん、独りは寂しいから、ほんとは、一緒にいて欲しい」

……久しぶりに聞いた、ミーアの本音かもしれない。

「そんな簡単な望みを叶えてやれないなんて、本当に駄目な兄貴分だよ、俺は……」

「……それなら、わがまま言ってる私も、十分に駄目な妹分だよ？」

「はは、これ位のわがままは言ってもいいんだよ。むしろ、昔みたいに、ミーアのわがままを普段から引き出せない俺の方が悪いんだ」

「……そうなの？」
「うん、そういうものなんだ」
結論を出した後、頬を離し、今度はミーアの頭に顎を乗せてみる。
「……重いよ」
「ふふふ、これは後に座る者の特権なのだよ、ミーア君」
「むぅ、私も今度、絶対にしてやる」
少し、調子が戻ってきたか？
そう感じたので、顎を下ろし、今度は揺ら揺らと左右に揺れてみる。
「……ねぇ、アイン兄さん」
「ん？　何だ？」
「兄さんは戦争が終わったら、どうするの？」
「……終わったらか？」
「うん」
戦争が終わったらか……。
……。
あんまり、考えたこと、ないんだよなぁ。

……。

借金も去年で返済し終わったし……親孝行でもしようかなぁ。

「兄さん？」

「んっ、ああ、そうだな……ザフトは辞めるつもりだ」

「……そうなんだ」

「ああ」

危険な仕事は、もう、ノーサンキューなのですが……辞められるんだろうか？

……。

義勇兵組織だから、多分、大丈夫だろう、多分。

「辞めた後は、また保安局？」

「……いや、それも辞めるよ。そろそろ、オーブにいる親父の所で働かせてもらうかなぁ、って思った」

「……そう、なんだ」

あらら、沈んじゃった。

俺も好きな子にいぢわるする性質だから、自然と言葉が足りなかったりするのよねぇ。

だから、ちゃんと話を続けないとな。

「ミーアも一緒に行くか？」
「……えっ？」
「だから、ミーアも俺と一緒に、オーブに行くか？」
「……いいの？」
「ああ、親父もミーアを気に入ってるし、大丈夫だろう」
「なら、行く。一緒に行きたいっ！」
「それなら、ミーアもそのつもりでいるようにな」
「うん」

これでミーアも、少しは元気が出るだろう。

……。

さて、そろそろ、昼飯の時間だが……。

「ミーア、今日の昼飯、どこかに食べに行くか？」
「今日はもう食べなくていい。……ずっと、このままがいい」
「……え、えーと、ミーアさん？」
「今日は、寝るまで、ずっと、このままで過ごすのっ！」

わ、わがままを言っていいなんて、カッコいいこと言った手前、拒否できない！

「わ、わかったよ」
「うん、兄さん、今日はずっとこのままだからね、絶対だよ？」
「……はいはい」

……まぁ、ミーアがそれでいいなら、いいか。

でも、まさか蜜柑で寝るまで食いつなぐ破目になるとは、思ってもみなかった。

……うぅ、今晩は空腹で寝れないか、頻繁にトイレに立たないといけなくなるかもしれん。

39　年末年始の骨休め　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

４０　年末年始の骨休め　３

１月も中頃を過ぎ、戦隊再召集……任務再開に向けて身体を鍛え直す日々を続けていたら、親父名義でまた物が届いた。

今度も大物の上、数が複数だったりするのだが……どうやって、この戦争なんて非常の時に、何事もなく無事に届けているんだろうか？

大いに興味をそそられてしまう事象だから、一度、調べてみてもいいかもしれない。

まぁ、戦時における宇宙運輸事情の考察は後回しにして……。

俺は今、セプテンベル・スリーの宇宙港に上がって、緑とクリームの二色で塗装された船体にデフォルメした黒犬をマーキングした２００ｍ程の貨物船から積荷が降ろされるのを確認しながら、受領証にサインしている。

届いた代物、まずは、誰の趣味なのかは知らないが、赤色……よりも更に濃い深紅に塗装されているＢＯｕＲＵ……シンクなＢＯｕＲＵが一機。

こいつもまた、以前のブラックＢＯｕＲＵと同じく、型番である【ＢＷ－００Ｆ－９３７ＰＳ】から、クサナ……少し捻ってクシャナと名付けて、ハンゼンのＭＳ格納庫に放り込み、ＭＳ整備班に運用を委ねるつもりだ。

なにせ、ハンゼンＭＳ整備班の連中はエルステッドＭＳ整備班が弄り倒しているブラックＢＯｕＲＵを、以前から、事ある度に、非常に羨ましそうに見つめていたからなぁ。

これでＢＯｕＲＵ導入を求めるハンゼンＭＳ整備班員達から大量に送られてくる、熱過ぎる要望メールもなくなってくれるはずだ。

で、もう一つというか、もう一種類は……まな板……じゃない、シャックリ……でもないな、……ゲッターッ！　でもなかった、……グゥル？　って、ザフト地上軍が使ってるＭＳ輸送支援飛行機だから……、えーと、あーと、うーと、た、確か……そう！　サブフライトシステム！　……だったような？

……。

と、とにかく、それらしいものが二つ届いたのだ。

……でもねぇ。

いや、確かにね、一昨年に、前世の記憶と今現在の実践とを併せて、ＭＳを運用する時にこういうものがあったら便利じゃね、なんて感じで構想を書いて送ったけどさ、いざ、モノが実物になって届くと扱いに困ってしまうもんだよ。

とはいえ、一応、このサブフライトシステム（仮）の設計及び開発を担当したパーシィが書いた説明書を読んでみた。

それによると、正式名称は、【ＲＳＳ－０２１】長距離侵攻補助推進システム（Ｌｏｎｇ　Ｄｉｓｔａｎｃｅ　Ｉｎｖａｓｉｏｎ　Ａｓｓｉｓｔａｎｃｅ　Ｔｈｒｕｓｔｅｒ　Ｓｙｓｔｅｍ）で、呼

略称はロジアッツ（Ｌｏｄｉａｔｓ）になるとのこと。そして、俺の所に届けた二機のロジアッツは、ＭＳでの実機運用試験用の試作型【ＲＳＳ－０２１（Ｘ）】に相当するそうだ。

丁寧にもロジアッツの開発来歴を書いてくれているので読み進めると、このロジアッツなるもの、元々はラインブルグ宇宙造船（ＲＳＳ）が造っている【ＲＳＳ－０２Ｃ型】という、建設資材やＢＯｕＲＵを建設現場に運ぶのに使用している上下両面使用型カーゴ付小型運搬船をベースにしたものらしい。

この小型運搬船に改装と改造……荷台部分にあるデブリ避けのカーゴを上下面ともに取り払って、ＭＳが正座ないし両膝立ちして搭乗するスペースを確保し、また、取り払ったカーゴ部を、追加放熱板やＭＳの足掛り、ＭＳのマニピュレーターを使用して固定するための取っ手等々に再利用、再加工して取り付ける等の作業を加えて、ロジアッツの土台に仕立てあげたそうだ。

中立国オーブにいる一技術者に過ぎないはずのパーシィが、何故、ＭＳのサイズを知っているのかと考えてみたら……第一次ビクトリア降下作戦で連合軍にジンが鹵獲されているだろうし、宇宙、地球を問わず、各所での大小規模の戦闘が起きている以上、当然、戦闘で多数の損傷機や破壊された機が戦場に遺棄されているだろうから、そのあたりから情報を手に入れたんだろうとあたりを付けた。

話を戻して、ロジアッツの推進システムにも燃料効率や継戦能力の観点から少し改造を加えて、より少ない推進剤でこれまでと同等の運用を可能にし、同時に、より細やかな姿勢制御を実現させて柔軟な運動性を確保するために、改造前から使われていた姿勢制御用バーニアの出力増強に加えて、新しく幾つかの小型バーニアを取り付け、総合姿勢制御システムもＭＳの重量や形状に対応できるように組み直してみた、とも書かれていた。

……ＢＯｕＲＵの時と同じく、相変わらずの改良ぶりである。

付け加えて、より遠くへより早くという元のコンセプトから、強力な機動力を手に入れるために、本来は使い捨てにされている安物の打ち上げ用ブースターを上下面の左右舷に一本ずつ配置にして、計四本取り付けたともあった。これによって、瞬間的な推力を大幅にアップさせ、宇宙での移動距離と速度を稼ぐとのことだ。

しかしながら、ロジアッツを使用することでより遠くへ足を延ばせたとしても、今度はＭＳ側のバッテリーやエアーが不足するなんて問題が出てくることになる。

そこで、ロジアッツ船体内部に元からある大型のバッテリーとエアータンクから接続ケーブルでもって、ＭＳと連結することでこの問題をクリアするとあった。

けれども、これも進む時だけの時間稼ぎにしかならないから、運用方法で何らかの対策、或いはＭＳ側の改良が必要ではないか、との提言も書かれていた。

……うーん、パーシィの提言通り、このあたりは運用側で解決策を考えないと駄目だろう。

そして、最後に、ロジアッツを運用するために必要な操縦系は、無線あるいは有線による接続によって、ＭＳからの操縦できるようにザフトで使用している規格に合わせているが、ＭＳ側の操縦系がそれに対応できるようにするのは、そちらで何とかして欲しいと書かれていた。

まぁ、このあたりはシゲさんに頼んで、何とかしてもらおう。シゲさんというか、うちの整備班の連中なら、こういう問題を嬉々として解決しそうな感じがするし、楽しんでやってくれるだろう。そ

れに、パーシィの設計なら絶対に余裕を持って作っているはずだし、少々の改造や装置の増設なら可能なはずだしな。

他にも操縦席部分を残しているから有人での運航も可能、って書いてあるし、もしもＭＳで運用できなくても、元の用途や、別の用途があるかもしれない。

……あれ、何か、こうやって考えてみたら、これ、使えるかもしれないような気がしてきたぞ？

とりあえず、戦隊の再召集日までは、ここの宇宙港の倉庫に預けておいて、召集後に引き取りに来るか。

そんなことを考えつつ、これらの物品を預ける手続きのために港湾事務所へ向かおうとしたら、聞き覚えのある声が耳に入ってきた。

「ふむ、このＢＯｕＲＵの赤は……人の精神を熱く沸き立たせるものがあるな」

「ん、あれ？　ラウか？」

「ああ、久しぶりだな、アイン」

「おお、こうやって直接会うのは久しぶりだ、うん、その顔を見るに、元気にやってるみたいだな」

……えっ、あれ？

俺、ラウと会う約束なんてしたかな？

なんて疑問が顔に出てしまったのか、白服姿のラウはニヤっと小さく口元を歪めると理由を話してくれた。

「なに、私が乗っていた連絡船がここに寄航した際に、この赤いＢＯｕＲＵがちらりと見えてな、思わず降りてしまったのだ」

さ、流石は、燃え派だっ！　と声を大にして言わざるを得ない。

「ふっ、ふふふっ、この血潮が熱く滾り、魂が燃え上がるような赤ぁ！　実に、ＢＯｕＲＵの野性味や凶暴性をよく引き出していて、素晴らしい出来ではないかっ！」

「そ、そうか」

お、俺にはあんまりわからん世界だっ、ていうわけでもないが、……なんか、今日のラウは、今にも、大きく口を開けて……。

Ａー、ＨＡッＨＡッＨＡッ！！！

……ってな感じに、笑い出しそうな勢いがあるぞ？

「……ラウ、何か、良いことでもあったのか？」

「ふ、ふふ、アイン、わかるかね」

「ああ、今にも鼻歌を歌いだしそうな雰囲気だ」

「……流石に鼻歌は歌わぬが、確かに機嫌は良いな」

うん、やっぱり、ラウの奴、珍しい事に心浮き立ってるようだ。

「この素晴らしく燃えるＢＯｕＲＵと出会えたこともあるが……」

「あるが？」

「アイン、月のグリマディで、忌むべき血筋……私と同じ血を引く

者と、敵として再会できたのだよ」
「！　そりゃ驚いた……そんなことがあるんだな。……って、どうやってそんなこと、わかったんだ？」
「……感覚だ」
「……感覚ですか？」

え、それほんとに？

「勘違いって事はないのか？」
「いや、絶対に勘違いではないだろう。……私が奴に気付いたように、確かに、奴もまた、私に気付いていた」
「……戦闘中に、ラウも向こうも互いが互いだって、気が付いたってことか？」
「ああ、そうなのだよ、アイン」

おいおい、それが本当なら、凄いことだぞ。

「まるでテレパシーみたいだな」
「……どうやら私と奴に流れる血によって、感覚が吸い寄せられるらしいな」
「それって、もしかして、魂レベルで引き合うというか繋がっている、ってことじゃないか？」
「……ふむ、魂か……案外、そのような表現も熱くて良いかもしれぬな」

ラウが真剣な顔で思案し掛けたが、構わずに話を続ける。

「……それにしても、難儀な感覚だよな、互いの存在がわかるってさ」
「ふっ、だが、その感覚は、私にとっては都合が良いな」

ああ、もう、ラウめ、その相手に恋焦がれているみたいに、本当に嬉しそうだ。

……って、都合が良い？

「そいつ……落としたんじゃないのか？」

「いや、落とせずに痛み分けたよ」

な、なにぃぃぃっ！

「う、嘘だろ？　ラウが落とせなかったってのか？」

「……ああ、ゼロ型に乗った奴は、私と戦いつつ、私の目の前でジンを五機、立て続けに撃ち落として魅せたよ」

「ご、五機ぃぃぃっ！？」

ラウと戦いながら、立て続けにって、おぅい！

ゼロ型に乗っているとはいえ、そりゃ凄腕じゃすまんだろ！

エース・オブ・エースを名乗れんぞ、そいつ！

「はぁ、そりゃ、ラウの好敵手って奴だな」

「……そうだな、奴は私にとって、自らの手で倒すべき好敵手だ」

な、何か、ラウの背後でメラメラと小宇宙のようなオーラが燃え上がって見える気がするよ。

……というか、ラウって、こんなに……ここまで熱い奴だったっけ？

「偶然だろうが必然だろうが、神でも悪魔でも、運命の悪戯でも構わぬ……ただ、奴と戦場で引き合わせてくれたことには感謝したいものだ」

は～、そうですかぁ。

「すまぬな、長々と話してしまった」

「いや、別にいいさ。ただ……」

「……ただ？」

「そいつを他の誰かに落とされないように、気をつけろよ？」

「ふっ、奴はこの私以外には落とせんよ」

お、おふぅ、こ、これは、まさに己が世界の主役である、世界は我のもの、なんてレベルの発言だっ！

し、しかも、それがまた、サングラスの影響か、クールさが前面に出て、二枚目の魅力溢れるラウに似合ってるじゃないかっ、ちくしょうめっ！

対して、我が身を省みるに……ふ、ふふ、最早、嫉妬どころか虚ろに笑うしかないよなぁ。

「……なら、頼むから、俺とそいつが当たる前に落としてくれよ？」

「さて、それはわからぬな」

って、おいおい、ニヤリと笑うなよ、こっちは切実だっての……。

久しぶりに見たラウのニヤリ笑いにどう突っ込もうかと考えていたら、宇宙港の人の流れが、俄かに慌ただしくなった。

「ふむ、そろそろ、連絡船が出る時間か」
「ああ、そうみたいだな」
……思いがけない再会だったが、中々楽しめた。
「……ではな、アイン。また、会おう」
「ああ、またな、ラウ」
軽く手を挙げたラウに対して、俺は軽く手を振って見送る。
……。
なんか、訓練校で初めて会った時からは想像できないくらいに、ラウの奴、変わったよなぁ。
そのうち、”沈着冷静”じゃなくて、”情熱に溢れる熱血”になってしまうかもしれん。
むむ、これはこれで……似合いそうで似合わないような、似合わないようで似合いそうな？
……。
馬鹿考えてないで、今日は保安局時代の上司と飲む約束もあるし、さっさと倉庫に荷物を預けよう。

休暇も残り一週間だし……しっかりと身体を鍛え直して、精神を休めとかないとな。

４０　年末年始の骨休め　３（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

外　登場人物　２　（～４０）

不必要かもしれない、これまでの登場人物一覧　（～４５：C.E.７１年１月現在）

以下、登場順に掲載（のはず）

☆アイン・ラインブルグ　（C）　男

転生（？）主人公。

ザフトの緑服から白服に昇格。

第１３独立戦隊規模艦隊、公称、ラインブルグ隊隊長兼艦載ＭＳ隊長。

ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊ラインブルグ小隊リーダー。

主人公なのに、外見に関する描写が影すらないという不憫な人物。

☆オーリン・ゴートン　（C）　男

ザフトの黒服。

ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦長兼隊長補佐。

戦隊艦艇の運用や隊長不在時の指揮を担う、戦隊を支える土台基礎。

艦長室には、無煙タバコが詰まった箱が山と積まれているとの噂がある。

☆ヘレーナ・ラヴィネン　（C）　女

ザフトの緑服。

ラインブルグ隊所属ＭＳ隊副官兼隊長秘書。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊ラインブルグ小隊隊員。
愛称はレナで、通常時は隊長事務の補助を、戦闘時はアインの僚機を務める。

☆フィデル・デファン　（Ｈ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン艦載ＭＳ隊デファン小隊リーダー。
ハンゼンＭＳ隊の小隊長を務める機械フェチ。
現在は、ハンゼンＭＳ整備班と共にシンクＢＯｕＲＵに夢中。

☆サリア・ベルナール　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッドのＭＳ管制官。
情報集めが趣味で好奇心が強い。
最近は、直属の上司をそれとなく”いぢる”日々を楽しんで送っている。

☆レイ・ユウキ　（Ｃ）　男
ザフトの赤服から白服に昇格。
アカデミー教官を経て、プラント防衛隊所属アプリリウス防衛ＭＳ中隊隊長に就任。
地味だが、着実に出世しているアインの同期主席。
実は、同期であるアインやクルーゼとの絡みで、最も被害にあっている人だったりする。

☆シグルド・ティーバ　（Ｃ）　男

ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ整備班長。
通称はシゲで、年中無休でツナギを着ている整備命、機械弄り命の漢。
新しいおもちゃ、もとい、ロジアッツを与えられて、狂喜乱舞している。

☆ミーア・キャンベル　（Ｃ）　女
アインの妹分な少女。
家族とは不仲のため、アインに養ってもらいながら、ラインブルグ家に住み着いている。
とある頼りになる年上女性の指導で、様々な面で能力が向上しているらしい。
現在、人工知能工学をメインに自宅学習する日々を送っている。

☆髭のおっさん（シーゲル・クライン）　（Ｃ）　男
プラント最高評議会議長。
上記の人物表記は作中におけるアインの表現であり、括弧内が正式名である。
４月１日のエイプリルフールにおいて、地球へのニュートロンジャマー無差別投下を主導した。
泥沼化した戦争の出口を見出せず、最高評議会及びザフトで指導力が落ちつつある。

☆ミーアの声に似た歌声の人物（ラクス・クライン）　（Ｃ）　女
プラントの歌姫。
上記の人物表記は作中におけるアインの表現であり、括弧内が正式名である。
ユニウス・セブンの犠牲者追悼式典で歌ってから、【プラントの

歌姫】と呼ばれるようになった。
ザフトには正式に所属していないが、父であるシーゲル・クラインの手伝いをしている。

☆ウラディミル・フォルシウス　（Ｃ）　男
ザフトの黒服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン艦長。
元はエルステッドの副長で、ラインブルグ隊結成と同時に現職に異動した。
緩い所があるラインブルグ隊を引き締める鋼鉄の規律を司り、戦隊を支える屋台骨。

☆ムラン・アシム　（Ｃ）　男
ザフトの緑服で故人。
ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊アシム小隊リーダー。
新星攻略戦末期の戦闘で部下を庇い、戦死した。

☆リュウ・ミンリン　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド副長。
元はエルステッドの航法通信管制班長で、ラインブルグ隊結成と同時に現職に異動した。
新しいＣＩＣスタッフが女性で占められているためか、整備班に”ＣＩＣの女王”だなんて呼ばれている。

☆ミハイル・ガンドルフィ　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン副長。
元はエルステッドの火器情報管制班長で、ラインブルグ隊結成と

同時に現職に異動した。
ハンゼンに配属された不心得者達を熱く説き伏せていることから、艦内で”熱血鬼”なんて呼ばれている。

☆エリオット・ドラン　（C）　男
ザフトの緑服で故人。
ローラシア級13番艦エルステッド艦載MS隊アシム小隊所属。
世界樹攻防戦において、戦死した。

☆ラウ・ル・クルーゼ　（C?）　男
ザフトの赤服から白服に昇格。
ザフト内で精鋭部隊、特務部隊的な扱いを受ける【クルーゼ隊】の隊長。
ネビュラ章を持つ、ザフトMS隊で最も有名なエースパイロットである。
私生活は謎に包まれていると思われがちだが、実は単に出不精なだけだったりする。

☆ガイル・マクスウェル　（C）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級61番艦ハンゼン艦載MS隊マクスウェル小隊リーダー。
ハンゼン艦載MS隊のまとめ役を担う。
最近、アインの地獄訓練の意味に気付いたらしく、自らの小隊に自分も含めて同様に課すようになった。

☆グエン・リー　（C）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級13番艦エルステッド艦載MS隊リー小隊リーダー。

家族をユニウス・セブンへの核攻撃（ユニウスの悲劇）で亡くしている。
アインの言う事を理解しつつも、内の復讐心を抑える事ができず、思い悩む日々を送っている。

☆エヴァ先生（エヴァンジェリン・ローズ）　（C）　女
ザフトの軍医。
ラインブルグ隊所属ローラシア級13番艦エルステッドの軍医兼衛生班長。
上記の人物表記は作中におけるアインの呼び方であり、括弧内が正式名である。
その腕は確かだが、仮病には容赦しないS（と皆が噂する）の人。

☆パトリック・ザラ　（C）　男
ザフトの指導者。
プラント最高評議会議員であり、軍事責任者である国防委員長を務めている。
シーゲル・クラインの影響力が落ちるに伴ない、影響力が増大している。
ここ最近の私生活では、奥様の尻に魅かれる日々を送っている。

☆レノア・ザラ　（C）　女
パトリック・ザラの妻。
当初、夫婦仲は冷えていたのだが、ユニウス・セブンで九死に一生を得たことを経て、再燃した。
どうすれば戦争が終わるか、自分なりに考える日々を送っている。
また、毎晩行う愛の確認作業等で、夫であるパトリックの思想改造を目論む。

☆アスラン・ザラ　（C）　男

ザフトの赤服。
パトリックとレノアの息子で、ＭＳのパイロットをしており、現在はクルーゼ隊に所属している。
母を失いかけた経験とその時に感じた思いから、プラントを守るべくザフト・アカデミーに入学した。
教官を務めたレイ・ユウキ曰く、”優秀”らしい。

☆アンドリュー・バルトフェルド　（Ｃ）　男
ザフト地上軍所属アフリカ侵攻軍の一指揮官から北アフリカ駐留軍司令に昇格。
劣勢の中、スエズ近郊で地球連合軍地上部隊を打ち破ったことで有名。
”砂漠の虎”という異名を持つ一方で、また、コーヒー狂徒であるとの噂も同時に流れている。
地上の凄惨な状況を目の当たりにして、戦争とは何かと考えている。

☆アーサー・トライン　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド航法通信管制班長。
そのキャラクターからか、班員から生暖かい目で見守られている新米班長。
ゴートン艦長のさり気ない指導を受けながら、日々、成長している。

☆バーナード・ベンサム　（Ｎ）　男
地球連合軍第四宇宙艦隊大佐。
大西洋連邦出身の連合軍士官で護送船団の護衛部隊司令を務めていた。

任務失敗での全ての責を被ったが、実戦及び敗戦経験を買われて、訓練部隊へ回されている。
尚、当時の部下に関しては、大部分が再建中の第八宇宙艦隊に吸収されている。

☆パーシィ　（Ｎ）　男
ラインブルグ技術研究所第五開発部開発部長兼開発主任兼研究員。
幼馴染であるアインからのアイデア書簡を元に研究及び技術開発中。
第五開発部はパーシィが自由に研究できるように作られたものであるため、在籍者は彼一人だけである。
近頃、もう一人の幼馴染と、いい雰囲気になりつつあるらしい。

カッコ内のアルファベットの意味
（Ｃ）＝コーディネイター
（Ｎ）＝ナチュラル
（Ｈ）＝ハーフ・コーディネイター

以上、人物紹介は終わり。

下記は、設定という名のおまけ

第１３独立戦隊規模艦隊ラインブルグ隊所属ＭＳ隊
機体番号及び隊員名簿

★エルステッド艦載ＭＳ隊

○ラインブルグ小隊（二機編成）
ＩＳ１３０１　アイン・ラインブルグ
ＩＳ１３０５　ヘレーナ・ラヴィネン

○リー小隊
ＩＳ１３０４　グエン・リー
ＩＳ１３０８　ヴォルター・ルッツ
ＩＳ１３１１　エイドリアン・リベラ

★ハンゼン艦載ＭＳ隊

○マクスウェル小隊
ＩＳ１３０２　ガイル・マクスウェル
ＩＳ１３０６　トマス・コリン
ＩＳ１３０９　ブルーノ・ボッカ

○デファン小隊
ＩＳ１３０３　フィデル・デファン
ＩＳ１３０７　アントン・モーリス
ＩＳ１３１０　ジュリアン・ジョンソン

・解説と言う名の俺得な言い訳
作中には表記されていない、もとい、筆者の落ち度で表記が忘れられているが、戦隊に所属する各ＭＳには左肩に機体番号が振られ、マーキングされている。
ＩＳに関しては作中にあるように、【Ｉｎｄｅｐｅｎｄｅｎｃｅ Ｓｑｕａｄｒｏｎ】で独立戦隊を意味し、後ろの四桁番号は前半二桁が戦隊ナンバー、後半二桁がＭＳ隊内での認識番号及び指揮序列だったりする。
もっとも、指揮序列に関しては、ザフトには階級が存在しないこ

とになっているため、戦隊ＭＳ隊員内々の暗黙の了解ということになっている。

ちなみに、ラインブルグ隊が第１３独立戦隊規模艦隊であるという表記は、後づげふん……筆者のミスにより、作中においてすっかりと忘れ去られております。

これらも今後の改訂で直す予定ですので、今しばらく、お見逃しの程、よろしくお願いします。

外　登場人物　２　（～４０）（後書き）

１０／１０／２７　サブタイトル表記を少し変更。
１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

41　訓練は愛情を込めて　1

C．E．71年1月。
宇宙で動きがあった。

L1宙域付近を通る地球一月航路がザフトによって組織的に遮断されていることを察知したらしい月の連合軍が、地球との航路を確実に確保するため、また、月を囲む四つのラグランジュポイントのうち三つを押さえられている状況を打破するためにだろう、L4宙域に二個艦隊規模の戦力を急派し、これを奪還してみせたのだ。

これを許した原因として挙げられるのは、マスドライバーを大いに活用した連合軍艦隊の展開及び侵攻速度が非常に早かったことと、ザフトや宇宙機動艦隊司令部が対応にまごついたことだろう。それに加えて、L4に駐留していたザフトの戦力が一個艦隊にも満たなかった上に、連合軍が150m級等で使用している小型ミサイルの改良が進んだ影響もあるかもしれない。

話を聞く限りでは、当初はザフトMS隊が数に勝るMA隊に対して優位に立っていたが、MAの群れを抜けて、連合軍艦艇に攻撃を仕掛けようにも、徹底的な集団防衛戦闘によって崩し切れなかったらしい。

それどころか、迂回してきたMAの一群に艦隊への横撃を許してしまい、数隻が撃沈され、また、ほぼ全ての艦艇が損傷を受けてしまい、散々な状態で逃げ出す……いや、より正確に言えば、叩き出されてしまったそうだ。

その時にＬ４宙域失陥の責を恐れた艦隊司令が殿を買って出て、玉砕したなんてこともあったらしいが、これに関してはザフト内部のネットワークでの噂レベルだから本当なのかは、定かではない。

とはいえ、Ｌ４失陥に関する情報は、士官学校の教官から古巣である防衛隊に戻り、白服に任命されたユウキからの情報だから、まず、間違いないだろう。

……。

連合軍が、Ｌ１の【世界樹の種】ではなくＬ４を連合軍が狙ったのは、まだ、ザフトの新しいＬ１拠点の存在を連合側が把握していないのか、はたまた、存在も座標も把握しているが大規模な艦隊行動やＭＡの機動が制限されるＬ１宙域内の暗礁地帯を連合軍上層部が嫌ったからなのか、その理由はわからない。

だが、連合軍が地球圏の要衝であるＬ１を狙わないはずがないのだから、今回はたまたま狙われなかっただけと考えて、連合軍の今後の動きを十分に警戒した方がいいだろう。

とにかく、これで連合は地球と月とを繋ぐ、Ｌ４を経由した迂回航路を確保したことになり、再び、地球と月の相互補完関係が復活したことになる。

当然、連合軍も安定した通商ルートを確保するために、航路防衛用の艦隊戦力を貼り付けるだろうから、以降の通商破壊任務は難しいものになるだろう。

つまり、これからが俺に与えられている任務にとって、本番になるというわけだ。

◇　◇　◇

１月２５日。

戦隊の再召集が為され、戦隊結成時から求めていた【ＺＧＭＦ－ＬＲＲ７０４Ｂ】長距離強行偵察複座型ジンと新任パイロット二人もまた新たに配属されることになった。

……なったのだが、これがまた珍しいことにパイロットが二人とも女の子だったりする。

再召集前に国防事務局から新任パイロットについての連絡を受けた際に、この珍しい人事に何か意味でもあるのかと不思議に思って、連絡をくれた事務局員に詳しく聞いてみた所、何でも去年の九月に士官学校を卒業した二人をＭＳパイロットの補充要員として地球へ送ろうとしたら、ただ女というだけで断固拒否されてしまったそうだ。

仕方なく、その後は配属先が決まるまで宇宙機動艦隊の補充要員として訓練所でずっと訓練をさせていたのだが、約三ヶ月間、受け入れ先が現れなかったらしい。

この長期に渡る待命が二人の士気に大きく影響し始めて、拙いことになったと悩んでいた所、丁度、土産の品を頂き、それを配ったうちの隊がＭＳの補充を求めていたことと、女性パイロットが一線で活躍していることを思い出し、配属を決めたそうだ。

本当にいい子達なんです！　なんとか……、なんとか受け入れをお願いします！　という事務局員の必死のお願いを苦笑しながら受け入れたのだが……、実のところ、一人の男として、拒否したくなる気持ちはわかったりする。

……これは男というバカな生き物の身勝手な願いや考えなんだろうけど、命を生み出す存在である女性には、死を賭す凄惨な戦場に、特に前線には出て来て欲しくないのだ。

案外、地球の部隊が補充を断った理由も、地球での戦闘があまりにも過酷で凄惨過ぎるから、なんてことかもしれない。

しかしながら、まぁ、その子達も覚悟を決めて戦場に出ようとしている以上は、同じ扱いにしてやらないと駄目だとも思うし、ここで配属を拒否するということは、レナという存在も拒否するのと同義なので、絶対に拒否はできない。

……。

んんっ、感慨や想像は程々にしておいて……。

新たに二人の新米をＭＳ隊に加え、戦隊は鈍った身体と心を鍛え直すために、Ｌ５の訓練宙域で二週間の予定で絶賛再訓練中である。

そして、今も、シミュレータールームで新米二人の操縦訓練をレナの指導の下で行っていたりする。ちなみに、俺は客観的な評価を出すために、外部からシミュレーター内の三人の様子とシミュレーション内の仮想空間をモニターで観察している。

……そういえば、このシミュレータールームも変わったよなぁ。

当初はジン用のシミュレーターが三つだけあったのだが、戦隊結成時にはジン用のを一つ撤去してＭ型用のが入り、シグー用は床面に場所がないから天井面に取り付けられた。

今回も、メンテナンスドックに預けている間に工事が為されたようで、新しく複座型のものがシグー用のものの隣に据え付けられて

いる。

っと、終了時間を少し過ぎてしまった。

ほんと、今日は思考が脱線しまくってるな。

「……よし、訓練終了だ。三人とも上がっていいぞ」

「了解」

「……は、あい」

「りょう……かい」

むむ、レナがいつもと変わらぬ動きで出てきたのに対し、新米二人はすでにフラフラで、体捌きが若干怪しい。これは目前の新人二人、ロベルタ・フェスタとビアンカ・スタンフォードの鍛え方がまだまだ足りていない明確な証拠だと言えよう。

「レナ、まず、訓練評価の前に一つ」

「はい」

「二人の体力……いや、身体能力自体が全然足りていない。身体能力向上プログラムの作成を任せるから、エヴァ先生とよく相談して、二人の身体を徹底的に鍛え上げてくれ」

「わかりました」

レナが頷いたのを確認して、ようやく俺の前にやって来た二人に評価を告げる。

「とりあえず、二人とも鍛え方が足りないようだから、レナに、よーく、鍛えてもらうように」

「は……い」

「……そ、んな……わた、し……しん、じゃう……かも」

「んな大袈裟な」

俺の言葉に対して、戦隊着任の挨拶で非常に愛嬌のある笑顔を見せたフェスタは、若干垂れた金色の瞳を潤ませて、肩で切りそろえた金髪をフルフルと弱々しく横に振らせる。

「あのな、フェスタ……あらかじめ言っておくが、実戦で本当に死ぬよりも、訓練で死に掛ける方が、遥かに、マシ、だからな？」

「……はい」

俺の言葉を聞いて、新米の二人は揃って青い顔を更に青くしたが、首を小さく縦に振った所を見るに、どうやら納得いただけた様子である。

では、ＭＳの操縦についての評価をするか。

「さて、二人の操縦に関する評価なんだが、機体制御や機動は教本にある通りで、本当に士官学校で頑張ってきたのだと、十分に評価できる」

「……あり、がとう、ございま、す」

「こう、えい、です」

「けれど、その分だけ、機動や制御の見栄えが良過ぎる」

「見栄え、ですか？」

息を整え始めたスタンフォードに頷いて応える。流石に複座型のメインパイロットを務める予定だけあって、回復が早いみたいだ。ピンと伸びている背筋と銀色の短髪、スラリと通る鼻梁にリュウ班長のような切れ長の目が相まって、そこらの男よりも男前に見える。

「ああ、ＭＳ挙動一つ一つ、全ての動きが本当に見応えがある。…

…けど、それが逆に機体の機動から余裕を奪っているな」
「余裕、ですか？」
「そう、余裕。……パレードやデモンストレーション、閲兵式なんかに参加したりするなら、今さっき、二人がやった機動でいいんだけど……俺達がするのは、何があるかわからない戦場での命を賭けた殺し合いだ」
おっ、ちゃんとこちらを注視して、傾聴しているみたいだ。
うん、これは好感が持てる姿勢だよね。
「当然、相手だって強い意思を持ち、決死の覚悟でこちらに向かってくる。だから、こちらが予測や予想しないことだって普通にしてくるし、それに伴なって、思いもかけないアクシデントだって発生する。だから、そういったことに対応できるようにするためにも、機動に余裕が必要なんだ」
教本通りに動かすと効率がいい……なんてことはまったくないけれど、とにかく、一つ一つの動きの何かポーズめいていて、見栄えが良いのだ。けれど、そこには当然、余計な動きも含まれているために、”遊び”というものもなくなっているから、動きに余裕が全然なかったりする。
戦場では、咄嗟の判断が必要な時もあるから、機動には余裕が欲しい。俺も戦場では、意識して、普段より若干の余力を残して動くようにしているぐらいだ。
「よって、二人にはまず、機体の限界というものをしっかりと自身の身体で把握して欲しい。その後、機体制御技術の向上を目標に、ＭＳの動きが自身の思考とリンクできるようになるくらいに、徹底的に身体に覚えこませるんだ」

「はい」
「わかり……ました」
「だから、レナがさっきやったみたいな余裕の持ち方……上手い手の抜き方は、その後だな」
「……私、手なんて抜いてませんよ？」
嘘をつくんじゃないの。
さっきも要所要所だけしかスラスターやバーニアを噴かしてないだろう？
まったく、あれだけでよく新米と同じ動きをしたもんだ。
「んん、まぁ、そういうことは、おいおい指導していくよ、レナが……」
「えっ、私、担当するって聞いてませんよ？」
「今、決めた」
「……」
「……」
「……」
……なんか、三人の視線が、痛い。
いや、今、決めたってのは冗談なのだが、訓練を担当させるのは冗談ではなかったりする。
レナも女性パイロットとして色々と苦労をしてきたんだから、二人がする苦労もきっとわかるはず、と考えたのだ。
しれっとした顔で痛い視線を我慢して無視し、レナの返事を待っ

ていると、俺が上位権限者ということで折れてくれたのか、レナは頷いてくれた。

「……わかりました。私が担当しますね」

もっとも、今度は目を逸らしたくなるようなジト目を向けられたが……。

「ああ、よろしく。……さて、今日の所は、二人の訓練はここまでにしておこう。何分、初めて尽くし緊張したろうしな」

「はい」

「実は……」

うんうん、不安一杯の転校生気分だったろうさ。

「だから、これで今日の訓練はおしまいだ。二人とも今日はしっかりと休むように」

「了解しました」

「はい、ありがとうございました」

二人のまだ型崩れしていない教科書通りの綺麗な敬礼に、こちらは普段通りに崩れた答礼を返して、二人をロッカールームへと送り出す。二人とも時折ふらつきながら進んでいるが、まぁ、無重力なんだ、転ぶことはないだろう。

「さて、俺も少し乗ってくかなぁ」

「……先輩、お話が終わっていませんが？」

「えっ、何の？」

「私が二人を担当する件です」

「ああ、それか。……さっき決めたって言ったのはあくまで冗談だ

よ。あの二人が戦隊に来るって決まった時から、基本的に、同性のレナに面倒を見させようと考えていたんだ」

レナの奴、ちょっと怒った顔をしていたんだが、俺の言葉を聞いたら普通の顔に戻ったよ。

「それならいいです。……でも、私、複座型のことなんて、何も知りませんよ？」

「俺も知らんよ？」

複座型なんて、レアな代物ですから。

「なら、私は何をするんですか？」

「そりゃ、まずは身体能力向上プログラムだろうな。あの鍛え方のままじゃ、戦場で一線に立ったら、まず生き残れない」

「ですが、複座型の機体の特性から考えて、二人は前線に出ないのでは？」

「どんな場所にいようと、戦場に絶対はないよ」

「……そうでしたね。わかりました」

レナは真剣な眼差しを俺に向けて、しっかりと頷いて見せた。その凛々しい顔と緑色の瞳に浮かぶ光の強さに安堵しながら、話を続ける。

「うん、頼むよ。……後は、二人の座学と機体特性の研修、それに、シミュレーター訓練も面倒を見てやって欲しいな」

「リュウ副長やシゲ班長、アヤセ班長にトライン班長、それにサリアにも、手伝ってもらっていいですか？」

「もちろん、一人で全部する必要なんてないさ。実機訓練に関しては、俺とレナが訓練する時に一緒にすればいい」

「はい。……ところで、先輩からの助言は？」
「ない」
「うぇっ！　言ってることとしている事が違うっ！」
「冗談だ」

おっと、本当に冗談なんだから、そんなに睨むなよ。

「んんっ、俺からの助言か……今日やったシミュレーター訓練に関することでいいか？」
「……嘘や冗談じゃないなら、なんでもいいです」

み、自らが招いたこととはいえ、手厳しいお言葉ですなぁ。

「げふげふっ。……シミュレーター訓練では、まず最初にジンの操縦訓練をメインパイロットもコパイロットも関係無しに徹底的にさせて、その後で複座型に徐々に慣らしていけば、上達が早いはずだ」
「あ、なるほど、複座型もジンからの派生だから操縦系はほぼ同じでしたね」
「ああ、そういうこと」

操縦経験があると、機体の機動でどんなGが、どのタイミングで、どれだけの強さで掛かってくるかが分かるようになって、自然、意識と身体が対応できるようになるからな。

……。

「後、これもレナには一応言っておくか」
「はい？」
「いやな、俺はあの二人……というか複座型に、偵察、索敵任務の他にも、前線での情報収集や母艦との通信中継、それに艦砲弾の弾

着観測なんてものも与えようかなと考えてるんだ」
「偵察や索敵、情報収集はわかりますが、通信中継、弾着観測ですか？」
「ああ、ニュートロンジャマーが効いている状況だと、母艦……エルステッドとの通信が繋がりにくくなるだろう？」
それ、指揮官としては困るのです。

「ええ、そうですね」
「そうなると、頼る物はＭＳの観測機器ということになるんだが、元より艦載の物に比べればたいした代物じゃないし、動力源がバッテリーの関係上、レーザー通信の出力も弱い。だから、入ってくる情報は少なくなってしまうし、母艦からの支援も期待できないから、戦域の状況なんてほんの一部しか把握できなくなる。……当然のことだが、母艦を前面に出すなんて危険なことはするわけにもいかんだろう？」
「……確かに」
「けど、複座型なら、ＭＳということで運用に柔軟性はある上に、観測機器は艦載の物に少し劣るだけだし、レーザー通信の出力も艦載の物に近い強さだ。ならば、これを使って、戦域を動き回って色々な情報を集めたり、エルステッドとの通信中継基地にしたり、艦艇とＭＳ隊との連携に利用したい」

でもって、最終的には艦載ミサイルの誘導が可能になれば、楽に……げふん、最高だと思うんだよなっ！

「はぁ、よく考えますねぇ」
「はは、いや、先走りすぎたな。まぁ、とりあえず、今の構想が上手くいかなくても、エルステッドとの中継役には絶対になるから、それだけでも十分さ」

情報通信ラインが切れないのは、それだけで、十分に心強いのですよ。

……こんなもんかな。

では、そろそろ、おしゃべりはおしまいにして……。

「……よし、レナ、今度こそ始めるぞ」

「ええ、先輩、私がタップリと扱いてあげますから、楽しみにしてくださいね」

「うぬぅ、年長者としては、まだまだ、負けるわけにはいかんよ」

最近、レナの腕が本当に上達していて、機動射撃や狙撃だともうすぐ追い付かれそうな気配が、ひしひしと感じられる今日この頃である。

けど、こんな俺でも先輩としての意地があるのです！

まだ、後輩達に追い抜かれるわけにはいかんのです！

それに、この一年で戦争が終わる可能性もあるかもしれないからな、気合入れていくぞっ！

……とかカッコいいこと考えてるけど、休暇期間中にかなり食っちゃ寝してたから、身体の感覚が鈍ってないといいんだけどなぁ。

41　訓練は愛情を込めて　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記修正。

42　訓練は愛情を込めて　2

「アインちゃんも、大概、変わりもんだよねぇ」
「そうかな？」
「ああ。……本当は先見の明があるって言った方がいいんだろうけどさ……、やっぱり、こんなことを考えるなんてさ、変わりもんだよ」

訓練期間も半分を過ぎ、戦隊の訓練が深化していく最中、俺はレナが訓練監督による不在が多くなったため、かなり煩雑になった隊長としての日常業務を何とかこなした後、ＭＳ格納庫に降りて、ロジアッツの改造状況の把握と運用方法について、シゲさんと二人で話し合っていたりする。

でもって、先の会話は、俺が話したロジアッツの実戦用改造案と運用方法に対するシゲさんの評である。

「ははっ、正直だね、シゲさん。まぁ、俺は元より変わり者扱いされてるし、今更だけどな」
「そう言うってわかってるから言ったんだよ。アインちゃんとも長い付き合いだから、変に遠慮するのも嫌だしね」
「違いない」

くつくつと二人で一頻り笑いあった後、もう一度ロジアッツの運用法を確認することにする。

「とりあえず、普段、ＭＳキャリアーとして使わない時は、資材運

搬ランチとして使えるよね？」
「そうだねぇ。まぁ、置き場所に気をつければ使えると思う。正直、こっちから宇宙港にＭＳの部品を取りにいけるってのは、整備班としても魅力的だよ」

基本的に、ＭＳの部品や食品、日用品等の補充補給品と艦内から出た様々な廃棄物との積み降ろしは、最寄の軍港に寄港した時に行われる。

だが、大規模戦闘の後だったり、地球へ向かう大きな輸送船団が構成されていたり、資源や食料を積んだ輸送船団が戻ってきたりして、軍事衛星港やコロニーの宇宙港に余剰スペースがなくなってしまい、順番待ちする時があったりする。

そんな時に、小型運搬ランチ代わりにもなるロジアッツがあれば、隙間を縫って、物を運んだり取りにいくことが出来て便利だと思うのだ。

……宇宙港の港湾事務所は、不平等は駄目ということで、ランチを中々貸してくれないからね。

「で、戦闘になれば、ＭＳを速やかに戦域に運んで機先を制し、尚且つ、敵に打ち当てて使い捨て前提で使う」
「質量弾代わりだね」
「うん、それに、敵のミサイル攻撃の盾に使えそうなんだ。……ロジアッツ一機でキャニス六発分位だから、ちょっと高いかもしれないけど、ＭＳが落とされることを考えれば、経済的にも許容されると思う」
「うーん、確かにちょっと高いけど、ＭＳが落とされて、パイロットも戦死する可能性があることに比べれば、必要経費と割り切れる範囲だね」

ちなみに、パルデュスだと十四パック分位に相当する。

「とりあえず、ここにある分のロジアッツは、使った時の実戦データさえ取れれば、壊しても良いって、手紙にも書いてあったからさ、戦闘では基本的に今言った方向で使おうって考えてるんだ」

「わかったよ。データ収集をどうするか以外は、整備の側からは特に問題はないね。……元々装備品に含まれてないものだからさ」

何気に、俺というかＭＳ隊の皆は、俺の実家が作った試作品の実験台なのです。

「ああ、そうそう、アインちゃん、ＭＳ側からの操縦が出来るようにシステムに変更を加えたからさ、こっちからも人を出すんで、試してみてよ。ついでにロジアッツのバッテリーとエアータンクをＭＳに連結できるようにしてみたから、それも大丈夫かのチェックもね」

「うん、了解」

「後、さっき言ってた武装は、アインちゃんが試乗している間に、もう一機を使って調べてみるよ、って、いけねぇ、班員が呼んでるな。アインちゃん、悪いけど、ちょっと行って来るわ」

「うん、そっちを優先して、俺も着替えてくるから」

「すまないね」

シゲさんが大声で班長と呼ぶ班員の元へ跳んでいくのを見送った後、俺は一人、戦闘でロジアッツを使ったケースを想像しながら、格納庫傍の更衣室でパイロットスーツに手早く着替える。

そして、この白いパイロットスーツにも慣れてきたなぁ、なんて感慨を抱きつつ、再び、ロジアッツの上面に降り立って、何やら班員に指示を出しているシゲさんを待つ。

……。

うん、このロジアッツがうまく使えれば、こちらの母艦がどこに存在しているのかを判別させにくくできるし、加速力があるから、敵の機先を制することも可能だろう。

それに、性能が良くなってきている小型ミサイルへの対応も、初弾に関してはロジアッツを盾に使えば、楽になるかもしれない。加えて、武装も施せればって、ちょっと焦り過ぎか……まずは使えるかの試用だな。

ロジアッツを上手く扱うようになるために、どんな訓練をすればいいかと考えを展開させ始めたら、見覚えのある青い髪の尻尾が下に見えた。

「レナか？」

「あれ、先輩？」

ロジアッツの上面にいる俺を振り仰ぐと、レナはこちらに向かって跳んで来た。ちょっとオーバーしそうだから、その腕を掴んで止めて、隣に降ろしてやる。

「ありがとうございます」

「気にするな。……それで何かあったのか？　今は確か、新米二人の身体能力向上訓練だったろ？」

「いえ、訓練でビアンカとロベルタがダウンしたので、回復するまでの時間を使って、シゲ班長にお願いしていた複座型の機体研修の打ち合わせに来たんです」

「ああ、なるほど、二人の機体研修の打ち合わせか。……で、その二人の調子はどうなんだ？」

「訓練はとても苦しそうですけど、倒れるまでと倒れてからの時間

も少しずつ短くなってきてますから、確実に成長してます」

うん、二人とも頑張ってるみたいだね。

「なら、艦に馴染めているか？」

「ええ、二人とも素直な性格ですから、整備班や主計班の人達からとても可愛がられてますし、大丈夫ですよ」

「……肝心のＭＳ隊の連中はどうなんだ？」

「……何か、男性陣が、相手が女の子ってだけで照れたり、緊張したりしているみたいで、上手く話せないみたいです」

おいおい……照れて話せないって……ここは、思春期が多い幼年学校か？

……。

つか、冗談じゃなくて、本当に？

「でも、連中、レナや他班員の女性には普通に接しているんだろ？」

「ええ、そうなんですよねぇ、本当に不思議です」

うーん、何故だろうか？

なんて考えていると、ふと、目の端に自身のパイロットスーツが目に入った。

……案外、パイロットスーツが原因なのかもしれない。

これって、ノーマルスーツと違って、身体にフィットする関係上、スタイルが諸に出るから、歳の割りには身体が発達しているフェス

タとスタンフォードを意識してしまっているというわけだ。

でもって、レナに関しては、母性が小さいから、男と勘違いされてるとか？

「……先輩、何か私が怒りそうなこと、考えてません？」
「い、イエソンナメッソウモナイコトナンテナニモカンガエテナイコトモナイデスヨ？」
「……片言になるのがとても怪しい、っていうか、考えてるじゃないですかっ！？」
「あはは、この俺が、レナの母性が小さいから、男と勘違いって、いたいたいたいっ！」

ちょ、やめっ、その方向にぃたたた、間接はっぁっ……！

「うふふふふふふふふ、私、今ほど、無性に格闘訓練がしたくなったことはありません」
「ちょ、待って、いたたっ、それ以上は、おれ、折れるぅぅ！」

だ、誰かっ！　た、助けてっ！

「うぅ、あれは女っ気のない俺達整備班へのあてつけか？」
「ラヴィネンをからかった罰だろ？」
「やー、でも、あんなにレナちゃんに密着されるなら……」
「まあ、あれだけレナちゃんに密着されるなら……」
「し、しっかりしろよ、お前ら、あれは公開処刑だぞ？」
「いいよ、あれなら、俺も公開処刑されてみたい」
「なぁ、俺もあれなら、公開処刑されてもいい」

ちょ、この痛さを味わえば、そんなことをって、いたいたいっ！

「ぎぶ、ぎぶ！」
「もう、私の身体について、失礼なこと言ったり、考えたりしませんか？」
「……」
さ、流石に考えることに保証なんてできない！
「……」
「いだだだだっ！　間接ががががっ！！」
このままだとっ！　りょ、両方向に折れるようになってしまうっ！
「あ～、お二人さん？」
「シゲさん！　お願い！　早く止めて！」
「……レナちゃん、気持ちはよ～くわかるけど、そろそろ勘弁してやってよ。じゃないと、アインちゃんの人体構造が進化しちまうよ」
「……正直、人がとても気にしていることを突っつく人を懲らしめるには、まだまだ足りませんが……シゲ班長に言われるなら、仕方がありません」
か、解放されたっ！
「うぅ、折れるかと思った」
「先輩、私に言う事がありませんか？」
……はい、あります。
「……す、すまんかった。レナがまさか、そこまで気にしているなんて、ちっとも思ってなかった」

「ほんとですよ、もう。女の子はデリケートなんですから、ちょっとのことでも傷つくんですからね！」
「はい、とても反省してます」
「なら、今回は……美味しい御飯二回で手を打ってあげます」
「……はい、了解しました」

恐る恐るレナの顔をうかが……って、あれ？

何か、レナの奴、怒ってた割には、ケロッとしてない？

「アインちゃんもまだまだだねぇ」
「はい？」
「いや、こっちのことだよ」

シゲさんが苦笑しているが、何が可笑し……もしかして、俺、レナに嵌められたか？

「んんっ、それで、先輩は今から、実機訓練ですか？」

何か、誤魔化すようにレナは咳払いをしているが、……確かに言ったことは酷いことだし、ここは大人しく制裁を受けておきましょう。

「まぁ、そうなんだけど、こいつをＭＳから上手く動かせるかどうかの試験がメインだ」
「そんなこと、出来るんですか？」
「ああ、シゲさんに出来るようにしてもらったんだよ」
「へぇ、凄いですね、シゲ班長」
「い、いやぁぁ。まぁ、これくらいの事、俺の手に掛かれば、どうってことないよ」

女性に褒められて、デレデレしてしまうのは悲しい男の性だよね。

「くそっ、班長め、まるで一人でやった風に言ってやがる」

「やましさには眼をつぶるんですねわかります」

「しかし、現実、班長の力は大きいし……」

「いいなぁ。……俺、戦争が終わるまでに班長になるんだ」

「なことよりも、お前、来週から応急当番だからな、忘れんなよ」

外野は相変わらずの賑やかさだが、これがあってこその整備班だ。

「んじゃ、シゲさん、発進準備を頼む」

「了解。おっし、おめぇら、準備にかかれぃ！」

「「「うーーっす！」」」

でもって、パイロットスーツやノーマルスーツを着ていないレナには待避所に行ってもらわないと……。

「レナ、ちょっと職権濫用して出てくるから……」

「ああ、ちょ、ちょっと待ってください。それなら、あの、私や二人も一緒に実機で出たいです」

おいおい、訓練計画もなしでは駄目だろう。

「……んー、それは駄目」

「な、なんでですか？」

「俺が出るのは、あくまでも、ロジアッツの操縦で不具合がでないかのチェックを兼ねた試用だからだよ。あの二人が実機に乗るのは、もっと機体の特性をしっかりと学んで、何を目的とするかしっかりと訓練計画を綿密に立ててからだ。そうじゃないと実機を動かす意

味が少ない」
「……あっ、……はい」
「まぁ、実際に乗るＭＳに二人を乗せてやりたいレナの気持ちはわかるよ。……そうだな、後二日ぐらいしたら、実機訓練に入ろう。……だから、レナ、それまでに、二人にしっかりと機体特性を掴ませておくようにな」
「……はい、わかりました。それと、何も考えずに、馬鹿なお願いして……すいませんでした」

いや、何も、そんな、泣きそうな顔になるぐらいに、シュンとしなくてもいいのに……。

「んー、レナ、そんなに気にするなって。小隊長している他の三人と違って、レナはこういう訓練を受け持つのは初めてのことなんだからさ。……何事も経験、次に生かせばいいさ」
「……はい」

あらら、まだ、落ち込んだままだなぁ。

……。

んんっ、これは……ある意味、チャンスではないだろうか？

「よし、レナ、そんなに反省したいなら、俺からの罰として、さっき言ってた御飯を一回減らすことで手を打とう」
「……それとこれとは話は別ですよ、先輩」
「えー、今の引き算は駄目なのか？」
「駄目です。……今日の反省はしっかりと胸に刻んで次に絶対生かしますから、そんな引き算は必要ないです」
「残念だ」

……本当に、残念！

「ふふ、すいませんでした。先輩、もう大丈夫ですからね」
「うん、そうみたいだな」

あらら、鳴いたカラスが……って奴だな。

「さて、レナ、そろそろ準備が出来そうだから、ここも直にエアーが抜ける。早く待避所に向かうようにな」
「了解です。……無茶したら駄目ですよ、先輩も」
「ああ、了解。また、前みたいに、レナから叱られたくないからな」
「もう！　……あっ、今度、先輩が無茶をしたら、私に御飯を……」
「ああ、薮蛇だった。って、ほらほら、エアーが抜け始めた。早く行け」
「まだ、全部言ってないのに……」
「ほれ、急げ」
「うぅ、わかりました」

レナが不承不承に去ったのを確認して、俺も自機のコックピットへと跳ぶ。

女って、歳に関係なく、実に強いというか強かな生き物だよなぁ、なんてことを思いながら……。

42　訓練は愛情を込めて　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

43　冬の艦隊流星群　1

俺達の戦隊が二十四時間態勢で訓練を行っている間、幾つかの情報がプラントから入ってきた。

一つ目は、プラント防衛隊にいるユウキから得た情報で、Ｌ３に存在するオーブ連合首長国のスペースコロニー【ヘリオポリス】で、地球連合軍がＭＳの開発を行っており、そこをラウの隊……クルーゼ隊が強襲して、連合製のＭＳを複数機奪取したというものだ。

中立国であるオーブが地球連合のＭＳ開発に場所を提供した、或いは協力したということは、オーブ元首であるアスハが宣言した『他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない』っていうオーブの”理念”に反する行いだ。

である以上、外交担当者には、精々、派手に突っついてもらい、貿易での何らかの譲歩……オーブから輸入している食料や資源関連で有利な条件をもぎ取るべきだろう、なんて考えていたら、後で付け加えられた情報で思いっきり噴いた。

クルーゼ隊が連合製ＭＳを奪取した際に発生した一連の戦闘で、連合軍がコロニー内に新型戦艦を持ち込み、艦砲をぶっ放すなんて無茶をやって、コロニーが崩壊したというのだ。

コロニー内に戦艦を持ち込んで、さらに艦砲を撃つなんて、普通ありえないっていうか、無茶しすぎ！

そら、コロニーも崩壊するに決まってるよ。

しかも、それを為した戦艦はクルーゼ隊の追撃を振り切って逃亡し、行方知れずなんていう、とんでもない事態だ。

……。

最も、今回のコロニー崩壊で犠牲になった者には悪いが、世界樹や新星攻略戦で被害を受けたＬ４コロニー群とはケースが異なるため、”攻める”側のこちらだけが一概に悪いわけではない。

なんとなれば、コロニー崩壊……直接的な原因というか、真実や真相がどこにあるのかはわからないが、この崩壊の責任は、”攻める”ことになったこちら側だけではなく、”攻められる”要因を作った側、つまりは連合軍とオーブにも等しく責任があるからだ。

特に、オーブに関しては、先の国家元首が行った宣言と相反する行いをしている以上、自身の不誠実さが生み出した自業自得なのだ。

似たような立場に、非武装中立を宣言して、連合とプラント、双方に資源等を輸出している月面都市群のような存在だってあるのだから、不用意過ぎる行いとしか言いようがない。

……自己弁護ならぬ友人を弁護するための理論武装はこれ位にしておいて、とにかく情報戦で、中立国の破約と地球連合が行った非道なんて具合に、頑張って宣伝して印象付けないと駄目だと思う。

もしも、逆をやられてしまったら、ただでさえ、悪いプラントの印象がさらに悪くなってしまうからだ。

……とはいっても、仕事をしないので有名なプラ……ザフト広報局だから、おそらく、悲観的な予想、つまりはコロニー崩壊の責任は全てプラントにある、なんてことになるのは間違いないだろうな。

でもって、情報戦で負けた後、オーブに上手いこと利用されて、コロニー崩壊の原因はプラントにあるんだから、その責任を取れなんていわれて、連合へのＭＳ開発協力を有耶無耶にされてしまうんだろうさ。

……。

広報局ぅーっ！

給料もらってんだから、その分の仕事くらいしろよっ！！

それとっ！　親玉のフク何とかってお偉いさんをさっさと更迭しろーーっ！！

……ふぅ、魂の叫びは置いておいて、通信で連合製ＭＳについて概要だけ聞いたけど……結構、凄いみたいだ。

奪取できたのは開発されていた五機のうち四機で、それぞれ、汎用機、砲撃支援機、特殊戦機、ＭＡ可変機に位置づけられるらしく、それぞれに、なんと艦砲並の小型ビーム兵器が標準装備されているらしい。

まぁ、機体情報の詳しい所はプラントに帰ってから、ユウキに直接教えてもらうつもりだが、いやはや、連合軍がＭＳの開発に成功したということは、何とも、恐れていた事態が迫ってきているようだ。

だから、何とか、早い所、停戦に持ち込んで欲しいなぁ。

……今の状況じゃ、無理だろうけど。

で、次の二つ目、マスコミと国防事務局から得た情報なんだが……デブリベルトで安定軌道に乗ったユニウス・セブンの残骸で、追悼慰霊が可能かどうかの調査に出ていた非武装船舶が何者かに襲われ、同行していたクライン最高評議会議長の娘で、プラントでは”歌姫”と持て囃されているラクス・クラインが行方知れずになったということだ。

……とりあえず、俺はこの調査船を出すことを推し進めた奴と認めた奴に、大きな声で言いたい。

考える頭はないのかっ！　どう考えても、馬鹿な事じゃないかっ!?

追悼慰霊という目的のためというは確かに立派だとは思う。

だが、何もこんな戦争状態である現状で送るもんじゃないだろう？　そもそも、これを決定した奴は、今が戦争状態であることを本当に認識しているのか？

しかも、デブリベルトって言っても、静止軌道上にある地球連合の【アルテミス要塞】が影響力をそれなりに持つ上に……敵の勢力圏でもある地球に近い危険地帯だぞ？

それに上手い匂いを嗅ぎつけたら、不心得なジャンク屋なんて一瞬で海賊に転じるだろうし、連合軍に遭遇したら、こちらが通商破壊をしているように、プラント船籍を持つ以上は非武装だろうがなんだろうが関係なく撃たれるのは当たり前だろう？

要は、ちゃんと護衛ぐらいは連れて行けってことと、そもそも、議長の娘だろうが歌姫だろうが知らんが、重要人物なら、戦争中にのこのこと前線なんて危険地帯に出て行くなってこと！

現場で苦労する立場ということで、声を大にして言わせてもらいたいっ！

……ふぅ。

戦争は人の理性が弱まる異常な状態なんだ。

もう少しそのことを換算してくれよ、頼むから……。

んんっ、気を取りなおして、最後の三つ目は、訓練終了直後に宇宙機動艦隊司令部へ報告に行った際に聞いた、連合軍の月根拠地プトレマイオスから一個艦隊規模の艦隊が出撃したというものだ。

先のＬ４失陥に続いての出撃だっただけに、プラント防衛隊や宇宙機動艦隊は俄かに色めき立ったのだが、打ち上げられた方向や予測された航行軌道からプラントへの侵攻ではなく、Ｌ４への移動だと判断されたため、急速に萎んでいったのには、不謹慎だが、笑ってしまったものだ。

だが、翌日に届いた、月を出撃した連合軍艦隊の目的は我々が追撃している新型戦艦との合流かもしれない、とのクルーゼ隊からの

報告によって、事態は再び動き出すことになった。

宇宙機動艦隊司令部が、Ｌ５宙域の地球方面を守る要衝として配置された旧新星……ボアズ要塞に駐留している艦隊に出撃準備命令を下したのだ。

その新型戦艦に、艦隊を動かして迎えに行く程の価値があるのかはわからない。けれども、現実に動いている以上は、何か意味があるのかもしれない。でも、それも確実とはいえないし……。だったら、ちょっと様子を見ようではないか。

そんな上層部の考えが透けて見える中途半端な命令だと思う。

……。

以上の三つが訓練をしていた二週間ちょっとの内に入ってきた大きな情報なのだが、そのうちの二つが連合のＭＳ開発に関わることだっただけに、戦争の行方に関わる事態が進んでいることを感じさせた。

◇　◇　◇

２月１２日。

戦隊は、訓練終了後に与えられた二日間の休暇を終えて、任務である地球一月航路の遮断作戦を再開するためにプラントを出撃した。

まずは、Ｌ１拠点【世界樹の種】に向かい、現状の確認と最近の敵

の動きを知るつもりだ。

いつもと変わらず、隊長としての日常業務を終えた後、艦橋に顔を出して、艦運営の邪魔にならない程度に、ゴートン艦長とＬ４の連合軍艦隊や連合製ＭＳについて話したり、アーサーにあることないこと吹き込んだり、航法、索敵、通信の各担当管制官から現状に対する要望を聞いたり、ちょっと脱線して雑談等をしたりしている。

でもって、今は、ＭＳ管制官のベルナールと会話している。

「ベルナール、複座型からの通信状況はどうだ？」

「はい、通信ラインはしっかりと確保されていますよ。何か、レナや二人と話しますか？」

「いや、いいよ。予定だと、複座型が退避逃亡訓練をしているだろうからな。レナはともかく、二人に余計な通信に応える余裕は、まだないだろうさ」

「うふふ、レナが鬼になっての鬼ごっこですね」

「ああ、複座型の二人が、偵察任務中に敵に追い回される恐怖を少しでも味わってくれればいいんだけどな」

偵察機は情報収集するのがお仕事であって、敵に狙われたら、速やかに逃げてくるのが重要なんだよね。

「怖い鬼ですからね、きっとひっし……何、レナ？」

……何か、あったか？

ベルナールは、俺や艦長にも聞かせるためだろう、スピーカーを個人から艦橋全体に聞こえるように切り替えてくれた。

「サリア、先輩か艦長に、複座型が味方の援軍要請信号を捉えたって伝えてちょうだい」
「他に詳しいことは？」
「それはまだ……ええ、方向は地球方面で……発信元は……クルーゼ隊ね？」
……地球方面でラウの隊、ってことは……新型戦艦絡みか？
「ベルナール、レナに了解したと伝えてくれ。……後、訓練でエアーや推進剤の残量が心許なくなっているだろうから、訓練は一旦中止して、艦に戻ってくるようにとも」
「了解です」
ベルナールが通信に取りかかったのを受けて、俺もゴートン艦長の元へ跳ぶ。
「……艦長、どう思います？」
「情報が足りないね。他に何か情報がないか、プラントにも連絡を入れてみようか」
「そうですね。まだ、ここら辺なら通信中継衛星がありますから通信が届くでしょう」
「うん。……トライン班長、プラントの司令部に確認を」
「了解です、艦長」
しかし、あのラウが援軍要請ねぇ。
「クルーゼ隊が援軍要請を出すということは、それだけ手に負えない相手ってことですかね？」
「だとすれば、例のＬ４に入った艦隊が出張ってきたと考えられるね。……流石のクルーゼ隊も一個戦隊じゃ、一個艦隊を相手するの

は不可能だろうからねぇ」
「ですよね。……それに、鹵獲できなかったＭＳがかなり手強いとも聞いています」

何しろ、あのクルーゼ隊に所属する歴戦のパイロットが、鹵獲できなかった新型ＭＳに相次いで撃墜されたんだからな。

無精髭を撫でる艦長が中空に視線を彷徨わせるのを見ながら、出撃前の休暇に時間を作って、鹵獲ＭＳの調査に参加したユウキに講義してもらった連合製ＭＳの性能を思い返す。

連合製ＭＳが装備していた強力な携帯型ビーム兵装も厄介だが、それよりも更に厄介なのがＰＳ（Ｐｈａｓｅ　Ｓｈｉｆｔ）装甲なる代物だ。本当に、電気エネルギーを消費して装甲を相転移させて、物理衝撃を無効化するなんて、インチキめいたものなのだから笑えない。

ついでにいえば、なんとなく、前世で見た某有名ＳＦロボットアニメに出ていたＭＳに似ているし……って、俺の個人的な意見は関係ないか。

「……ふむ、さっき話していた時にも言ってたね。そんなに手強いのかい？」
「物理攻撃を無効化する特殊な装甲を持っていて、実体弾が主体のジンではまず歯が立たないかと……」
「それはまた……頭が痛くなるねぇ」
「ええ。……もし、ジンでそのＭＳを倒そうとするなら、ひたすらこちらの攻撃を機体に当てて、その特殊な装甲に使うエネルギーを使い切らせてから落とすか、特火重粒子砲を至近距離で中てるぐらいしか、現状では方法はないみたいです。それに付け加えて、相手

側はジンを一撃で落とせるビーム兵装ですよ？」
「へぇ、それはまた、相手にしたら、重労働だね」
「俺が管理職じゃなかったら、上役に文句言ってますよ」

おい、ふざけたこと抜かすなっ、仕事して欲しけりゃ、もっと使える武器を寄こしやがれっ、てね。

「でも、よくそんな機密になってそうな装甲に関する情報が手に入ったね」
「教えてもらった奴が呆れながら言ってましたけど、鹵獲した全てのＭＳのコックピット内に、どういう訳か本当にわからないんですが、御丁寧にも、ＭＳの仕様書や操作説明書、それに整備マニュアル一式までもが入っていたそうですよ」
「……それは……また……何て言ったらいいかな？」
「この”大間抜け”め、でいいんじゃないですか？」

情報管理はしっかりやりましょう、っていうことを教えてくれる好例だよ。

「はは、言うねぇ。……そういえば、鹵獲したＭＳはクルーゼ隊が使ってるんだよね？」
「はい、機体に関する情報は”敵失（エラー）”で全て手に入りましたから、データ収集のために、実機を使ってるみたいです」
「その機体は使えるの？」
「四機で残った一機すら落とせないという結果でみれば、正直、微妙かもしれません」
「確かに四機と一機じゃ……ねぇ」

でも、だからと言って、ＭＳの性能が悪いとは一概には言えない。

「まぁ、その四機に搭乗しているパイロットが”下手くそ”だったとも考えられもしますが……乗っている全員が赤服らしいですから、ここは”ない”と考えましょう」
「と、すれば……敵パイロットが上手だったと考えた方がいい、ということだね」
「ええ」

ほんと、一人で四人と戦って退けるなんて、凄いことだよ。

そんなことを考えていたら、アーサーがこちらに跳んで来た。

「……艦長、ラインブルグ隊長も、よろしいですか？」
「ん、ああ。トライン班長、何かわかったかい？」
「ええ、司令部に確認したところ、向こうが把握している情報では、Ｌ４に留まっていた艦隊が例の新造戦艦と合流した後、地球軌道に進出したそうです。この動きから、新造戦艦が地球への降下を行うのではないかと考えたクルーゼ隊は、睨み合いによって行動を牽制して、膠着状態を維持しつつ援軍を要請してきたとのことです」

……それはまた、無茶なことしてるね、ラウの奴。

まさか、熱血が昂じてるんじゃないだろうな？

「アーサー、司令部はどう対応するって言ってる？」
「ボアズ要塞に駐留している一個艦隊に出撃命令を下したそうです。今日中には出撃できる予定、だそうです」

援軍の当てはあるか。

……。

「隊長、うちはどうします？」
「……俺としては、参戦するべきだと考えます」
「その理由は？」
「頑丈な家に篭っていた艦隊が、わざわざ地球軌道なんて危険地帯まで出張ってくれた以上は、……生かして返したくないですから」
「なるほど。……ですが、別にうちの隊が任務を離れてまで行く必要もないとも考えますが？」
「戦いは本来、数がモノをいう世界ですから、たとえ少数であったとしても、数の追加は必要だと思います」
「……了解です。では、基本、クルーゼ隊との合流を目指し、参戦するという方向でいきますか」
「ええ。後、もうすぐレナ達が帰艦するはずですから、その後、戦隊の戦闘部門会議を開いて、今後の動きについて通達しましょう」
「了解。トライン班長、ハンゼンや副長にそのことを伝えてちょうだいな。それと地球への針路変更もね」
「アイ、艦長」

うーん、会議前に、ラウにどういう状況なのかを直接聞いておきたいな。

「アーサー、クルーゼ隊に通信は繋がるか？」
「……何とかやってみせます」
「頼む。……繋がったら、会議室に回してくれ」
「了解です、隊長」

アーサーの力強い返事を頼もしく感じつつ、俺は艦長に一言声をかけ、先に会議室に向かうことにした。

４３　冬の艦隊流星群　１（後書き）

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ、放送開始でございまする。
※以下は修正履歴等
１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。
１１／０９／１３　誤記修正。

44　冬の艦隊流星群　2

「隊長、クルーゼ隊と通信が繋がりました」

会議室の端末の前で通信が来るのを待っていると、艦橋のアーサーから待望の連絡が入った。

「ありがとう、アーサー。こちらに回してくれ」

「了解です」

アーサーの顔がモニターから消え、見慣れたラウのサングラス姿が映し出された。

相変わらず、カッコいいねぇ、じゃなくて、とりあえず、俺がまず言いたいのは……。

「また今回も無茶な事をしているな、ラウ。ヘリオポリスでの騒動から始まって、アルテミス要塞の攻略、敵の手に落ちていた”お姫様”の救出、で、今は連合の正規艦隊と睨み合い。……よくぞまぁ、二週間程でこれだけのことをしたもんだ」

「些か不本意な部分もあったが、概ねその通りだ。だが、これも止むを得ぬ理由があっての事だ」

「理由？」

俺の揶揄と訝しげな声に気を悪くする事もなく、苦笑に近い表情を浮かべたラウは続ける。

「連合にＭＳの実戦データとＯＳを持ち帰られたくないのだ」
「む、実戦データはわかるが、ＯＳって、どういうことだ？」

実戦データは今後のＭＳ開発に生かされてしまうからわかるが、ＯＳなんてもんは鹵獲されたジンにも入ってたんだから、とっくに開発されてるだろう？

「それがな……当初、連合がＭＳに入れていたＯＳは、使い物にならぬ不良品だったのだよ」
「不良品？　ユウキからはそんなことを聞いてないが？」
「ユウキは言うまでもないと判断したのだろう。とにかく、当初、機体に入っていたＯＳは、奪取に参加した者からの聞き取りや仕様書を軽く読んだ限りでは、コーディネイターでも動かせぬ不良品だった。まったく、アレではなんのためのＯＳなのか、わからん代物だよ」

……あれか、図体だけは立派で、中身がスカスカって奴か？

「けど、そんなＯＳを持ち帰え……まさか、誰かが不良品のＯＳを使えるように書き換えたのか？」
「その通りだよ、アイン。しかも、短時間で、ＭＳのＯＳについて教育を受けた赤服に劣らぬ速さでな」
「……嘘じゃないの？」
「私もこのことを聞いた時、耳を疑った。だが、現実として、これまでにこちらが仕掛けた幾度かの攻撃を、全て退けられている以上は、使えるＯＳを使用しているのは間違いない」

それはまた、誰がしたのかはわからないが……凄いな。

「なるほど、何度かの実戦を経て生き残っている以上は、そのＯＳ

も相当に信頼が置ける代物になっているということか。……確かに、そいつを持ち帰られたら、連合のＭＳ開発に弾みがつく上、今後のＯＳの基礎になる可能性も高い。となると、やっかいなことになるな」

「そういうことだ。……それとな、アイン」

「ん？」

「一つだけ言わせてもらえるなら、本来ならば、敵艦隊との合流前に足つきを叩ける所だったのだ。……救出した”お姫様”が要らぬ口出しをしてくれなければな」

「ああ、そうなんだ。……案外、その”お姫様”って、実は疫病神だったりしてな」

実際、上からの命令で”お姫様”の捜索に当たっていた、同じ独立戦隊組であるユン・ロー隊なんて、敵に出くわしたらしい複座型を落とされて、犠牲者を出している。

同じく複座型を運用する身としては、他人事とは思えなかった。

「ふっ、アインよ。その”お姫様”には熱狂的なファンが多い故、公の場では、今のように”迂闊”なことは言わぬ方が身のためだぞ？」

「……”お姫様”自身が権力者ってわけでもないのに、怖い話だな」

「確かに怖い話だが、プラント内で大きな影響力があるのは事実だよ」

っと、話が脱線したな。

「じゃあ、新造艦だけは必ず落したい、ということだな？」

「いや、新造艦……足つきだけでなく、この場に出てきている艦隊にも情報は渡っているだろう。よって、こちらも叩いてしまいたい」

……情報の伝達か。

「でも、普通に考えたら、その情報って、通信で送られているんじゃないのか？」

「いや、ヘリオポリスで開発されていたＭＳは、大西洋連邦が独自開発していたものらしい」

「……む、地球連合内での主導権争いやＭＳ開発の利権が絡んでいるから、傍受や情報漏れの危険がある通信は避けている、って所か？」

「おそらくな。……今、私の目の前に展開している艦隊も大西洋連邦系のはずだ」

「なら、今の状況は、連中が情報を自身の拠点に持ち帰る可能性をより増やすために生まれたって訳か。しかし、それだったら、さっさと月に引き揚げた方がより確実だと思うんだが？」

俺の疑問に対して、ラウは肩を竦めて見せると、応えを返す。

「さて、流石にそこまでは……、そもそも、今までの話も大部分は推測に過ぎぬ。実際、相手がどのような事を考えて動いているかまではわからぬよ。だが、もしも、あの艦隊が月に引き揚げるのならば、Ｌ１に駐留している戦力が阻止に動くだろう」

「……そうか。Ｌ１の戦力が、引き揚げる艦隊を一日、二日拘束すれば、プラントから援軍が到着して、挟み撃ちできるな」

「ああ、私ならば、そうする」

あれ、また、話が逸れたような？

……修正修正。

「うん、事情はわかったよ。そっちでも聞いていると思うが、援軍に一個艦隊が動く予定だ。それまで「それでは時間がないのだよ、アイン」……何？」

ラウが俺の言葉を遮ってまで述べた内容に思わず、疑問の声をあげる。

「時間がないって？」

「ああ、足つきが降下すると予想されるのは、アラスカ或いは北米だ」

「アラスカ、北米……連合軍の総司令部か大西洋連邦の本拠地に、直接降下すると？」

「この場合、妥当だろう？」

「確かに……」

そして、時間がないということは、つまり……。

「降下タイミングが近い？」

「突入位置から考えれば、明日の昼前になる」

「……だとしたら、Ｌ５からの増援は、間に合うか合わないかのギリギリのラインだな。他に、どれだけ援軍が来れるかは聞いているのか？」

「現在の所、独立戦隊が二個、直に到着する予定だが、残りの増援は、明日の昼過ぎになる」

確かに、うちの戦隊も、ついさっき針路を変更したばかりだし、到着できるのは昼過ぎぐらいだ。

……デブリベルトが邪魔しなければ、もう少し、早く行けるんだけどなぁ。

「となると、確実に揃うのは三個戦隊か……。敵艦隊の戦力は？」
「３００ｍ級が一、２５０ｍ級が九、１５０ｍ級が四十六だ」
これらの艦艇数に見合うだけのＭＡが、最低でも百二十機は超える数があるだろう。
対して、こちら側は戦隊構成艦艇基数の二に三を掛けて六隻、ＭＳは一隻につき六機を艦載するから、三十六機になる。
「かなり、戦力的にはきついな」
「ああ」
「……でも、仕掛けるんだろう？」
「無論だ」
「明日の朝か？」
「ああ、太陽を背に仕掛ける」
……。
「了解。その時間までに、うちも少数のＭＳだけになるけど、届けるよ」
「……届くのか？」
「届かせてみせますよ。でも、バッテリーやエアーに不安が出てくるから、戦闘後、うちの戦隊が間に合わない場合は、ラウの隊で拾って欲しい。……まぁ、そっちに近づいたら、また、連絡するよ」
「……わかった。待っているぞ、アイン」
「おうさ」
最後には軽い調子でラウとの話を終えて通信を切り、端末から顔を上げて見ると、各々座席に座ったエルステッドの、壁掛けモニタ

ーに映し出されたハンゼンの、各戦闘部門の幹部達が揃って俺を見ていた。

「……ゴートン艦長、皆、揃ったんですか？」

「ああ、偵察に出ていたラヴィネン君も戻ってきたよ」

見れば、パイロットスーツのままでレナも席に座っている。俺の視線に気付いたらしく、少しだけ笑みを浮かべて見せたが、すぐに表情を引き締めた。

「……とりあえず、ゴートン艦長にフォルシウス艦長、時間的に厳しいらしいですから、デブリベルトでの脅威や減速等も含めた上で、叶う限り早く到着できるように艦を進めて下さい」

「了解」

「了解した」

二人が艦橋に連絡を入れている間に、揃った戦闘部門幹部の面々を見渡してみる。

エルステッドはリュウ副長、航法通信管制班長のアーサー、アヤセ火器情報管制班長、ＭＳ小隊長のリー、ＭＳ隊副官のレナだ。ハンゼンはガンドルフィ副長、エンリケ航法通信管制班長、ジェルマン火器情報管制班長、ＭＳ小隊長のマクスウェルとデファンである。

誰もが雑談一つせず、会議が始まるのを待っているようだ。

「……隊長、戦隊の増速を開始しました」

「ありがとうございます」

ゴートン艦長の言葉を受けて、意識と表情を公のものに改めてか

ら、全員に戦隊の基本方針を話し始める。

「さて、皆も聞いた通り、戦隊は通商破壊任務を一時中断して、クルーゼ隊の増援に向かう。とはいえ、今、戦隊がいる座標位置から地球に向かったとしても、おそらく、明朝の戦闘には間に合わないだろう。だから、一部のＭＳだけでも先に向かうことを考えている。……何か質問や意見は？」

「……まず、隊長が、この増援を決めた理由を教えてもらいたい」

”戦隊一の色男”なんて自称している、目つきと口調がわる……鋭い、藍髪のジェルマン班長が口火を切った。

「理由はさっきラウ……クルーゼ隊長と話していた内容にあった通りだ」

「本当にそれだけですか？　ただのお友達の友情からじゃないんですか？」

心底から馬鹿にしたように嘲りの色を顔に浮かべて、ジェルマンが揶揄してくる。さり気なく他の面々を確認すると、表情も変えず、淡々と答えを待っているようだ。

……それにしても、増援の決定理由が友情ねぇ。

「そうだな、それもあるかもしれないな」

「……それ以外に何があるってんです、隊長さん？」

なんか、えらい攻撃的だね、ジェルマン。

俺のことを嫌っているのはわかるけど、コーディネイターで二十歳を越えているんだから、もう少し年齢に見合った大人になれよ、

と言いたい。

まぁ、質問にはちゃんと答えるけど。

「今回、無理にでも増援を送るのは、連合軍の艦隊戦力を削り取れるチャンスだからだ」

「チャンス？」

「……地球軌道だなんて地球の大引力が大いに影響する、身動きが取りにくい危険地帯で、以前、俺達が地上降下部隊を援護した様に、突入タイミングまで敵艦隊は突入艦を守る盾になるんだぞ？　これをチャンスと捉えないでどうする？　それに、ここで艦隊戦力を少しでも削っておけば、俺達の任務もより楽になるんだぞ？」

班長の任についているなら、それぐらいのことは考えて欲しいね。

なんてことを考えながら、俺が反論すると、周囲の賛同するような、強調して言えば、こいつは何を当然の事を言ってるんだ的な視線もあってか、ジェルマンはばつが悪そうに黙り込んだ。

沈黙したジェルマンに代わって口を開けたのは、同じく”戦隊一の伊達男”を自称するエンリケ班長だ。

「しかし、ＭＳを送ると言いましたが、どうやってＭＳを届かせるんです？」

「ああ、一度位は見たと思うが、ＭＳ用の補助推進機を使う」

「……あれ、使えるんですか？」

「一応、ＭＳ隊では訓練している。……まぁ、今回が初めての実戦での使用だから、確実に使える、とは言い切れないがな」

俺の返事に、よく手入れされているらしい黄金色の長髪を撫で上

げながら、露骨に呆れた表情を浮かべて、エンリケは続ける。

「迷子になったり、航路を間違ったりしませんか？」

「今回の目標地点は地球だ。あの大きい的を目指せばいいだけだから、何とかなるだろう」

「……それもそうですね。なら、これ以上、私からはありません」

他に何かないかと見渡すと、リュウ副長がすっと手を挙げた。

「戦隊は選抜ＭＳ隊の発進後、どのような行動を？」

「さっきの指示にもあったように、全力で戦域へ向かって欲しい。プラントから一個艦隊が援軍に来る予定に加えて、他にも増援部隊が少なからず集って来るだろうから、孤立することはないはずだ」

「……そうね」

ふと、黙ったままの二人の艦長をチラリと伺ってみると、揃ってニヤニヤと口元に笑みを浮かべている。

……若者の成長を生温かく見守っているんですねわかります。

妙な感慨を懐いていたら、今度はＭＳ小隊長のマクスウェルが質問してきた。

「隊長、ロジアッツで出撃する数は？」

「ロジアッツ二機の上下面、全てを使って四機だ」

俺の答えを聞いたデファンが、マクスウェルに代わって語を続ける。

「全隊から適当に選抜するっすか？」

「いや、低軌道上は地球の引力が強いからな、より推進力があるM型に乗っているお前達の中から、三人選ぶ」
「なるほど、わかったっす」

そして、来ました熱血君じゃなかった、リーが大きな声で俺に質してくる。

「隊長！　誰をっ！　誰を選ぶんですかっ！」
「……留守番はお前だ、リー」
「なっ！」
「俺が帰ってくるまで、戦隊ＭＳ隊の指揮をお前に委ねるからな……頼むぞ」

リーがもう少し冷静なら連れて行くんだが……、今回は残して、戦隊ＭＳ隊の隊長代理を務めてさせて、戦隊を守る責任の重さを覚えさせるつもりだ。

「……了解しました」
「よし。後、レナ」
「はい」
「選抜隊の出撃前に、複座型を先行して出して、情報収集とクルーゼ隊との通信中継、それに道中の航路誘導をさせたいが……二人に出来るか？」
「……できます」
「わかった。二人に、その旨を伝えて欲しい」
「わかりました」
「後、他に何かないか？」

俺はレナが頷いたのを確認した後、他に意見がないか探るために全員の顔を再び見渡す。

……。

どうやらないようだ。

「よし、これより戦隊はクルーゼ隊の増援に向かい、共同で連合軍の敵艦隊に攻撃を仕掛け、これを撃破する。両艦長は艦内各班に作戦を通達し、第一種警戒態勢を発令。各班責任者もそれぞれ作戦に付随して発生する問題に対処して欲しい。ＭＳ隊は複座型を翌未明に、その後、選抜隊……俺とマクスウェル、デファン、レナを出す。残るリーには戦隊ＭＳ隊の総括を任せる。出撃後の戦隊指揮に関しては、ゴートン艦長に委任する。……以上だが、後方には味方の援軍が存在しているんだ。必要以上に緊張する必要はないさ。いつも通り動けば、それで十分だ」

「……起立っ！　敬礼っ！」

滅多に聞けないゴートン艦長の張りのある声に合わせて、皆がした敬礼に俺も答礼する。

初のＭＳのみでの長距離侵攻だ、上手くいけばいいだが……じゃなくて、上手くいくようにするんだ。

だから、作戦開始まで、様々な想定を考えておくとしよう。

４４　冬の艦隊流星群　２（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

45　冬の艦隊流星群　3

１２日から１３日に日付が移行する時分、戦隊は、連合軍艦隊に関する情報収集と選抜隊の航路誘導、そして、クルーゼ隊と通信をリンクさせることを目的に、エアーとバッテリーを脚部ハードポイントに追加させて、大幅に活動時間を伸ばした複座型を射出した。

この複座型が収集して送ってくる情報はＣＩＣや索敵に回され、管制官達の分析や解析を経て、戦隊が様々なことを判断するための重要な材料となるのだ。

……なんて、したり顔で考えているが、俺は判断以外には特に関与せず、他のお仕事は全て、艦長や副長、各班長にお任せしているのが現実である。

げふげふ。

さて、俺は今、選抜隊として、後少しで出撃する他の三人と共にＭＳに搭乗して、待機している。機体の周囲をノーマルスーツを着用した整備班員が上下左右に行ったり来たりして、機体やロジアッツに不備がないか、最終確認をしてくれている。

こういう縁の下の力持ちがいるからこそ、ＭＳなんて整備が面倒で運用が難しいものを動かせるのだ。だからこそ、ＭＳ乗りは整備班員達に、普段から、感謝と敬意をもって接しなくてはいけない。

……話が逸れた。

今回の出撃に使うロジアッツは二機ともエルステッドに搭載されているため、俺とレナがそれぞれに乗って射出されることになる。射出された後は、マクスウェルとデファンのハンゼン組と速度を同期させて、それぞれを裏面に拾っていく予定だ。

今後について頭の中で確認していたら、ベルナールの顔がサブモニターに表示されて、状況を伝えてきた。

「隊長、発進予定時刻一分前です。ハンゼンの二機も出撃準備が完了しています」

「了解」

では、そろそろ、動くか。

見れば、周囲にいた整備員は、待避所に入ったのか、姿を消していた。

……流石はシゲさん、班員の安全管理がしっかりしている。

なんてことを思っていたら、ブラックＢＯｕＲＵがロジアッツを射出位置に機位を移動させて、カタパルトに接続、ロックしてくれた。礼のためにハンドサインで”感謝を”と示すと、ブラックＢＯｕＲＵも手を振り返して、器用にも”幸運を”と示して見せた。

小さな事だが、こんなやり取りが嬉しくて、口元が緩んでしまう。

「レナ、あんまり噴かして、整備の連中に迷惑をかけるなよ？」

「ふふ、先輩こそ、噴かし過ぎないように注意してくださいね」

「言ってくれるねぇ。……よし、射出位置に付いた。ベルナール、いつでも行けるぞ」

ベルナールに呼びかけると、すぐに応答があった。

「了解です。……進路、クリアです。……予定時刻になりました。出撃、どうぞ！」

「よし、ラインブルグ、シグー、ＩＳ１３０１、出るぞ！」

ロックが外され、いつも感じるＧと共にロジアッツが一気に射出された。

◇　◇　◇

予定通り、俺の裏にデファン、レナの裏にマクスウェルを拾った後、一路、半面を青く輝かせる地球を目指す。当然、目的地に向かう間も暢気に寝ているわけではない。

身体に負担がかからない様に、また減速で大量に使用する分も考えて、ロジアッツのメインスラスターや側面の補助ブースター、姿勢制御バーニアを少しずつ噴かして加速しているし、機体情報やロジアッツに異常がないかとか、ロジアッツ搭載のエアーとバッテリーと機体を繋ぐケーブルが正常作動しているかとか、予定している航路からずれていないかとか、複座型が収集して送ってくる敵の情報に変化がないかとか、航路上に大きなデブリが存在していないかとか、色々とチェックすることがあるのだ。

今も定期チェックをしていたのだが、自身のチェックが終わって暇なのか、デファンが声をかけてきた。

「そういえば、久しぶりっすね。こうして先輩と一緒の行動するのって」
「ああ、そうだな。お前が小隊長になってからは、組んでなかったな」
「そうっすね。先輩の小隊にいた時は、確かに身体はシンドイ事が多かったっすけど、実は気楽だったんだなぁ、って、最近、つくづく思うっす」
「だろうな」

役に付かない平隊員は、身体的には辛いものがあるかもしれないが、実は気楽にやれる部分が多いのだ。

「ほんと、責任者って精神的に疲れるッす。……俺、小隊長になってから、体重が3kg減ったっすよ？」
「はは。まぁ、お前はまだ、それで済んでるからいいけど、俺なんて戦隊長だぞ？　もう、普段から胃がしくしくと痛くて痛くて、胃薬を手を離した日はないぞ」

だから、せめて、後少し位は給料を上げて欲しい。

幾ら、建前では義勇軍だからって、命を張るには安過ぎる給料だ。

「……今なら先輩の苦労が、よ～く、わかるっすよ」
「はは、なら、その苦労を軽減するために、ロジアッツの武装チェック、頼むぞ」
「うへっ、しまったっす」

なんてデファンは言っているが、こいつは何気に真面目だから、しっかりこなすだろう。

……。

そろそろ、先行している複座型から受信している情報だと、複座型にも接近してきているし、そろそろ通信が入ってもおかしくないが……もう少し、先か？

「うし、チェック、終わったっす。両側面のキャニス発射システム及び、前両面のパルデュス四パックの発射システム、全て正常に動いてるっす」

「了解。……レナ、マクスウェル、そっちはどうだ？　何か異常はないか？」

俺達の斜め後方を付いてきているレナ達にも聞いてみる。

「ロジアッツと機体共に正常です」

「マクスウェルです。……パルデュスが一パック、システム不良です」

「ありゃ、接続にミスでもあったかな」

「いえ、どちらかというと、さっきのデブリベルトを通過した際に、小型デブリにぶつかった衝撃で狂った線が強いです」

一応、このミサイルパックは少々のデブリに当たっても大丈夫なよう、頑丈に出来てるんだけど、今回は設計想定以上の高速で移動しているからなぁ。

……爆発しなかっただけマシと考えよう。

でも……。

「速度、もう少し、落とした方がいいかなぁ？」

「先輩、少し落しましょう。……正直、こうもミサイルに囲まれていると怖いです」
「そうっすよねぇ」
「隊長、キャニスにデブリが衝突したら、マジでやばいと思うんですが？」
「ま、まぁ、ここはプラント驚異の技術力を信じようじゃないか！」

お、俺は驚異の技術力を信じてるぞっ！

「……先輩、俺、まだ星になりたくないから、操縦をしっかり頼むっす」
「……ラヴィネン、一度当たってるんだから、今度はそんなことがないように頼む」

ちょ、そんなプレッシャーかけんなっ！

「ううぅ、そんなことを言われると、ぷ、プレッシャーが……」
「れ、レナ、落ち着け！　お前はやれば出来る子だっ！」

作戦前から、ドカンっ！　……彼らは夜空を彩るお星様の一つになったのだ、では困る！

何か、気を逸らすものはないものか、と考えていたら、通信を求める信号音が鳴り始めた。

「……あっ、味方機……複座型からの通信信号を確認したっす」
「こっちでも確認した。俺が出るから、操縦は任すぞ、デファン。ユー・ハブ」
「アイ・ハブ。任せるっす」

デファンに命を委ね、俺は複座型との通信を繋げてみる。

「……あっ、ビアンカ、大丈夫みたい。向こうからも通信が繋がったよ」

「そうみたいね。……こちらスタンフォードです、聞こえますか？」

フェスタとスタンフォードがサブモニターに顔を出した。

「ああ、聞こえている。こちら、ラインブルグだ。スタンフォードにフェスタ、情報はちゃんと受信できているからな。……初めての実戦任務なのに、これだけできるなんて、よく頑張ってる。偉いぞ、二人とも。この後もこの調子でやればいいからな」

「えへへ、隊長に褒められた」

「……ロベルタ、嬉しいのはわかるけど、今は報告しなきゃ」

「あっ、そうだった」

なんか、えへへ、なんて笑うフェスタの幼い声を聞いていると、和むわぁ。

「んんっ、隊長、現状では敵艦隊に動きはありません。味方のクルーゼ隊ですが、増援の二個独立戦隊が到着したようで、現在ＤＤＭＨが一、ＦＦＭが五、確認できています」

ＤＤＭＨってことは、きっと、クルーゼ隊の旗艦の【ナスカ級高速戦闘艦】ヴェサリウスのことだな。

「了解、通信リンクは？」

「戦隊とクルーゼ隊、共に通信リンクを維持していますので、いつでも通信可能です」

「……了解した。二人には、後少し進出してもらって、情報収集と

通信ライン維持の傍ら、俺達の航路誘導をして欲しい。大変だろうけど、頼む。それと、常に周囲への警戒を怠るなよ？」

「「了解」」

さて、エルステッドに通信を入れて、何か情報がないか聞いてみるか。

「エルステッド、こちら、ラインブルグだ。先行していた複座型と通信が繋がった」

「あっ、こちらベルナール、了解です」

「何か新しい情報はあるか？」

「はい、一つだけ、隊長にお伝えしたい事が……」

……こういう尻切れ言葉の時は、悪い情報が多いんだよね。

「何か、あったのか？」

「機動艦隊司令部から新しい情報が入りまして、予定されているプラントからの援軍が遅れそうなんです」

「援軍が遅れる？」

「はい、ボアズの宇宙港で大規模な爆弾テロが発生したそうです。出撃のために出港中だった多数の艦がそれに巻き込まれて被害を受けており、また、港湾開口部が半壊して閉鎖されています」

おいおい、何もこんな時に……。

「犯人は？」

「はっきりとはわかっていませんが、港湾工事を受注していた工事関係者の線が疑われています」

確かに、件の青秋桜系なのかまではわからないが、工事関係者に

化けた反プラント、反コーディネイターのテロリスト或いは地球連合系の工作員が工事用船舶に爆弾を隠して持ち込んで、起爆させたって線が、可能性としては一番高いな。

でも、軍事施設で爆弾テロって……普通はなぁ……。

……。

これはやはり、プラント保安局の防諜能力が落ちているってことかな？

年始に、保安局セプテンベル・スリー支部に所属していた時に世話になった上司……現在は、課長から大出世して、セプテンベル支部の支部長になっていた……と酒を飲んだ時に言ってたのだが、ザフトの地球侵攻後、保安局員がザフトの保安要員として支配地域に吸い取られてしまい、仕事がままならないそうだ。

他にも色々と気になる情報を聞いたのだが、とにかく、どれもプラントの保安状況が悪化の一途を辿っていることを示すものばかりだった。

猫の手でもいいから借りたいとは、支部長が保安局の現状を話し終えた時にこぼしたボヤキだ。

……。

いや、今は援軍の話だな。

「それで、どれぐらい遅れる？」

「被害を受けた艦隊に代わって、ヤキン・ドゥーエ駐留艦隊に出撃命令が出ていますが、テロへの警戒も行われているため……おそら

く当初予定より半日は確実に遅れるかと」

後詰めがいなくなるってことは、より厳しい状況になるってことだが……今更、作戦を変更する気というか、賽は投げられている以上、やめることはできない。

「了解した。戦隊は予定通り、クルーゼ隊との合流を目指して欲しい、と艦長に伝えてくれ。俺達も予定を変更せずに攻撃を仕掛ける」

「了解しました」

ベルナールの真剣な表情がサブモニターから消え、再びフェスタの顔が映る。

……さて、後は、ラウだな。

「フェスタ、今度はクルーゼ隊と通信をつなげてくれ」

「わかりました」

……。

「隊長、つなぎます」

「了解」

サブモニターにパイロットスーツのラウが現れた。

その姿に過去の情景が一瞬頭を過ぎる。

実は、以前……まだＬ５宙域事変（仮）の時分だったか、ラウの奴が制服のまま、宇宙に出ようとしたので、口を酸っぱくして説教したことがあったのだ。

いや、デブリ回収業を営んでいた父を持つ身なので、宇宙空間の危険性を十分に見聞きしているから、どうしても見過ごせなかったのだ。ほんとに、宇宙なんて危険地帯に出る時は、必ずパイロットスーツやノーマルスーツを着用するのは、常識……当たり前のことだ。

「おや、ラウさんや、もう出撃準備完了かい？」
「ふっ、奴があの艦隊……あの足つきにいるのでな……気が逸るのだ」
「……なんとまあ……俺は、ラウがそいつとぶつかる前に、自分とあたらないことを祈るよ」

さて、戯言は終了。

「プラント……ボアズでのテロは聞いたか？」
「ああ、聞いている。……そうそう、都合良くいかぬのが現実だな」
「そうだな。俺も何でこんなことしてるんだろうって、よく思うよ」

ほんとにねぇって、違う、今は真面目な話！

「俺達も順調にそちらに向っているが、搭載している通信機出力の関係上、途中で通信ラインが切れる。だから、そちらと上手く攻撃を同期させられる保証が出来ない」
「……ふむ。それはこちらが上手く合わせよう」
「すまんな」
「何、気にするな。では、頼むぞ」
「了解。また、後でな」
「ああ」

ラウがサブモニターから消えて、複座の二人が映し出される。そ

の二人の顔をバイザー越しに見て、ふと、自身の考えを一つ試してみることにした。

「フェスタ」
「はい？」
「複座型でロジアッツの航路誘導ができるなら、ロジアッツのミサイルも誘導できないか？」
「うーん……ジン用のミサイルは、外部誘導しようにもミサイル側にレーザー受信装置がありませんし、ロジアッツみたいに隊長達が制御できるわけでもないので、不可能です」
「……そうか」

元々がＭＳ用……有視界戦用に作られたものだから、仕方がないか……。

「あっ、でも、ミサイルの航路設定というか、前もって、どの位置から発射すれば、どこに行くかとかなら、計算できますよ？」
「なら、連合軍艦隊が位置する所を、全弾がほぼ同時に到達するように、狙えるのか？」
「はい、ロジアッツの速度と艦隊の速度が一定なら、計算できます」

元々、ロジアッツの武装は側面攻撃を仕掛ける直前に大凡の位置で撃つつもりだったけど、仮に超長距離攻撃ができるかもしれないなら、面し……やってみてもいいかもしれない。

……ここは駄目元で頼んでみるか？

いや、でも、命が懸かることでも、そもそもずっと艦隊があのままで……。

……。

妥協案でいくか？

「フェスタ、加えて、万が一にも地球へ突き抜けないように傾斜角を深くとる必要もあるが？」

「はい、それも含めてです」

「……発射までの時間的猶予は軌道変更に入るまでになるが、それでも？」

「任せてください！」

ここはフェスタを信じて、やってみようか。

「なら、頼む」

「はい、ミサイルの航路……発射座標位置を出し次第、通信で送ります！」

「……あ、それと、旗艦と新造艦をキャニスで狙いたいが……これもできるか？」

「う……、わ、わかりました、できるだけ、やってみます」

「はは、今のは冗談だよ、気にするな。……では、任せるぞ、フェスタ」

「は、はいっ！」

「後、スタンフォード」

「はい」

「俺達にミサイルの座標位置と俺達の予定航路を送った後も、引き続き、通信リンクの維持に務めてくれ。だが、戦隊が進出してきたり、エアーやバッテリーに不安を感じた場合は引き揚げても構わない」

「了解しました」

うんうん、二人ともしっかりしていて、大変よろしい。

……。

さて、予定地まで、後少しだ。

そろそろ、頭の中を切り替えていくか……。

45　冬の艦隊流星群　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

46　冬の艦隊流星群　4

蒼さが眩しい地球がメインモニター背景の大部分を占めるようになった頃合に、複座型からミサイル発射位置に関する一連の情報が届いた。

よって、超長距離攻撃を、正直、伸るか反るかの博打的要素が満載なのだが、実行に移すことにする。

「よし、送られてきた情報に合わせて、ミサイル発射座標を通る軌道に入り、指定された方向へミサイルを発射するぞ」
「了解です。ラヴィネン、発射を担当してくれ」
「了解」

どうやら、向こうはマクスウェルが操縦を、レナが発射を担当するようだ。

「デファン、こちらも発射座標を通るように調整してくれ」
「わかったっす」

表示されている座標位置を通るように、ロジアッツの機体制御バーニアが何度か細かく噴かされ、発射座標を経由する予定軌道上に乗った。

「よし、ミサイル発射は俺が担当するから、更に細かな修正を頼む」
「了解っす」

……実は、後一分もしないうちに発射座標に到達したりする。

正直、もう少し時間的に余裕が欲しかったのだが、これも新米のフェスタが精一杯に頑張った結果なのだから、ここは先任として、しっかりと応えてやらないとな……。

細やかなバーニア噴射による制御が行われ、発射軸が整えられていく。

「発射座標まで三十秒」
「調整終了っす！」

安全装置解除……ロック・オン対象はなしで……発射座標まで後十五秒……十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、発射！

「……よし、パルデュス全弾発射」
「全弾の射出を確認したっす」

前面から発射された有線小型ミサイルが、ロジアッツの速度に自身の推進力を上乗せする形で加速していく。

「有線、切断」
「全弾の切断を確認っす」

パルデュス自体が小型だけに推進剤は間違いなく途中で切れるだろうが、その時にはもう、早々、簡単には捉えられない速さに到達しているはずだ。もしも、一発でも敵艦に当たったとすれば、大物でも大打撃……いや、撃沈は間違いないだろう。

「次、キャニス発射の座標位置を通るよう、調整を開始したっす」

「おお、仕事が早いな、デファン」
「いや、褒めるのは後でいいっすから、まずは発射準備を」
「はいよ」

パルデュスの時と同じく、ロジアッツが発射座標位置を通るよう、再び、細かく制御バーニアが吹かされる。

「よし、軌道、軸、両方とも乗ったっす」
「よくやった。発射まで一分だ」

安全措置を外して、ロック・オンなし……座標位置まで後二十秒……十五……十……五、四、三、二、一、発射！

「キャニス、大、小共に、全弾発射した」
「大、小、各四発の発射を確認っす」

流石に大型に関しては、拠点攻撃用だけあって、噴出する推進力というか、迫力そのものが違うな。

「……こちら、レナです。ミサイル全弾の発射が終了しました。不良品のパルデュスも乗せておくのは怖いので、ハードポイントからパックを取り外して、地球に落ちるように投げておきました」
「わかった。……一応、そいつに関しては、俺達が当たらないように予定コースを出して送ってくれ」
「わかりました」

さて、当たるも八卦当たらぬも八卦、ってわけではないが……どうなるかは、結果をご覧じろ、だな。

「当たるっすかね？」

「うーん、全弾外れってことの方が可能性が高いし、当たればいいかな、って気持ちの方がガッカリしなくていいと思うぞ、俺は」
「そうっすね、運が良ければって……一、三、四、六……、七、九って……なんか九発も爆発したっすよ？」
「あちゃー、こりゃ、デブリにでも当たったかな？」
これは気付かれたかも……いや、ここは楽観で行こう。
さっきも考えたけど、ここまで来たんだし、今更、後戻りもできないしな。
「……まぁ、こういうこともあるさ。それよりも、こっちの減速や軌道変更、他にもロジアッツとの接続ケーブルを外すこともあるからな、しっかり頼むぞ？」
「当然っすよ。ケーブルを接続したまま、あの世まで引き摺られていく趣味はないっす」
「俺にもないさ」
……敵艦隊に動きは見られず、か。
「敵に動きがないところを見ると、気が付いていないみたいだな」
「そうみたいっすね。……これは俺の推測っすけど、地球に大量に散布されたニュートロンジャマーで観測機器の能力が大幅に低下しているんじゃないっすかね。ついでに言えば、対峙しての睨み合いの真っ最中で、神経は正面のクルーゼ隊とかにいっているはずっすから」
うん、その可能性はあるな。
ついでに言えば、俺達は双方の艦隊の上方、仰角方向から攻撃を

仕掛けている面も影響しているはずだ。

それでも、連合軍艦隊がこちらに注意を向けないかとドキドキしてしまうのは仕方がないことだと思う。

その後は、この辺りで一番の重力源もとい地球への激突コースから、地球の大気に弾かれる角度で連合軍艦隊側面へ突入できるようにするべく、大きな螺旋を描くよう、大幅に軌道修正するために、姿勢制御バーニアでロジアッツの推進方向を様々な方向に回転させ、メインやサブのスラスターを噴射させることによって加減速を繰り返す。

この軌道変更と減速の際に、スラスターやバーニアの噴射タイミングには辟易とさせられたが、何とか、旋回が完了し、突入軌道に入る事が出来た。

だが、ホッとしたのも束の間で、その時にはモニターで米粒ぐらいの大きさに敵味方双方の艦艇が判別できるようになっており、同時にミサイルが到達する時が迫っていた。

第一陣が到達する時間かな、なんて考えていた所に、レナから通信が入った。

「先輩、味方部隊よりスラスター光を確認しました。ＭＳ隊の出撃ではないでしょうか？」

事前情報で確認していたのと変わらない位置に存在していたクルーゼ隊や他の戦隊の艦艇から、青白い光が幾つか散見できた。それに応える形で連合軍艦隊からも、ＭＡのスラスター光らしき光が見

え始める。

「……ああ、そのようだな、双方の出撃を確認した」

むぅ、このタイミング、ミサイルが到達するであろう時間に、結構合っていると感じるが……って、あれか？

ミサイルがデブリに衝突して発生した爆発光でタイミングを計ったか……或いは、複座型の二人が気を利かせたか、だな。

……まぁ、別にどちらでもいいけど、結構、上手いタイミングだとは思う。

「隊長、そろそろ、パルデュスの到達予定時刻です」

「よし、ここは単純に爆発光の数で確認しよう」

はっきりと見えないんだ、大体でいいよ、もう。

「……先輩、爆発光を複数確認しました」

モニター内で、球状の爆光が五つ程、断続的に発生しては消えていった。その直後から、艦が破壊された際に生じたデブリや破壊された船体が地球の引力によって落ちていくのか、夜の地球を背景に赤い輝きが幾つも見え始める。

「爆発光は全部で五、確認できたっす」

「二十一発撃って、六発がデブリでアウト。残り十五発のうち、五発も命中したなら、十分過ぎるだろう」

超長距離から撃って、誘導がまったく効かないのに命中率が２０

%を越えるなんて、こりゃ、コース計算したロベルタを大いに褒めてやらないと……。

「隊長、続いて、キャニス、十三発が到達します」

「ああ、さっきと同じように確認する」

……む？

二つ程、大小の光が立て続けに発生した後、更に二つ、大きな爆光が確認できた。

「キャニスは、迎撃されたのか？」

「いや、四発のうち、迎撃されたのは一発だけっす。迎撃の火砲が偶然、当たったみたいっすね。で、最初の一発は１５０ｍ級に命中、残りの大型二発は、２５０ｍ級二隻に命中したっす」

……ほんの一瞬の事なのによく判別できたなと、デファンを感心するしかない。

「いや、本当なら、この二発は……足つきと３００ｍ級への直撃コースだったんっすけどね。……沈んだ２５０ｍ級がパルデュスの弾着からキャニスの弾着までの僅かな間で、即座に反応して遮ってるあたり、錬度、高いっす」

「……嘘だろ？　自分の艦が沈むかもしれないのに……庇ったっていうのか？」

「まぁ、俺の憶測っすけど、二隻も同時に動くとなると、多分、それが正解だと思うっす」

マクスウェルが呆然と呟いた言葉にデファンが応えたので、俺も口を挟む。

「マクスウェル、今のを見たら、ナチュラルってだけでは侮る理由にはならないって、俺が普段から言ってる理由がわかるだろ？」
「……ええ、今の行動を見て、初めて隊長が言っていた意味がわかりました」
まぁ、あそこまで、実際に行動できるのは、相当に珍しいと思うけどね。
味方を守って散って逝った敵に、その勇気と献身に、自然と敬意の念が浮かんでくるが、自らが為した事でもあるし、これから横腹に突入して、更にかき乱すのだから、今は不要と心底に押し込める。
それよりも、状況の把握が先だ。
「先輩、味方のＭＳ隊が迎撃に出たＭＡを排除したようです」
「……どうやら、ＭＡはそんなに出せなかったようだな」
ミサイルによる突発的な奇襲を受けたために指揮系統に混乱が生じたか、はたまた、デブリが撒き散らされたために危険と判断したか、或いは、更なる攻撃を警戒してのことなのかはわからないが、連合軍艦隊がＭＡの射出が中断したようなのだ。
本当に、このタイミングで出撃の断を下したラウを賞賛するべきだろう。
あの決断力を俺にも分けて欲しいなぁ、なんて考えていたら、我を取り戻したらしいマクスウェルがしっかりとした声で俺に告げる。
「隊長、ロジアッツのケーブルを切り離す時間です」

「ああ、ケーブルの接続を解除する。それと、さっきの旋回中にも話したが、地球の引力に足を捉まれないように、機体高度や座標のチェックを忘れるなよ？」
「「了解」」

さて、長らくお世話になったロジアッツとも、これでお別れだ。

「デファン、ぶつける目標の選定は済ませたか？」
「とりあえずは、２５０ｍ級にしたっす」
「わかった。……同じタイミングで跳び立たないと、コースがずれるからな、気をつけろよ？」
「先輩……俺のことよりも先輩自身が上手く出来るか、気にして欲しいっすよ」
「……お前、最近、口が達者になってね？」
「いい見本がいたっすからねぇ、たぶん、その人に似たっすよ」

誰だっ、その口が達者な奴は！

余計なことをデファンに吹き込みやがって！

「さて、カウントに入るぞ」
「……見本が誰なのかに関しては無視っすか？」

当然っ！

「速度を生かして、無反動砲を撃ってから、敵艦隊を突っ切るぞ！敵艦と衝突なんて、下手をうつなよ？」
「「「了解！」」」

三人の返事を聞いて頷いている間にも、敵艦隊が晒している横腹

がモニター内で、あっ、という間もなく大きくなる。

「3、2、1、行くぞっ！」

「了解っ！」

ほぼ同じタイミングで俺とデファンはＭＳをロジアッツから跳びたたせる。右斜め後方に占位していたレナとマクスウェルもまた、うまく跳びたてたようだ。

劇的なまでに急速接近してくる２５０ｍ級や１５０ｍ級の群に向けて、立て続けに無反動砲をぶっ放し、ついでに弾が切れた無反動自体も適当にあたりをつけて、放ってみる。

「撃ってきたっ！」

「ミサイルを、撃って来ないだけ、マシと思えっ！」

誰の声かと判別する余裕がないまま言い返し、大小の艦艇群と僅かに撃ち放たれた近接火砲、加えて、地球に落下しつつあるデブリの間を、突き抜けた。

……。

後追いの砲弾が飛んでこないところを見ると、こちらに構う余裕はないようだ。

息が抜けると同時に、艦隊を突き抜けた際に、よくぞ何モノにも衝突しなかったものだとも感じて、どっと冷や汗が流れ出てきた。

「皆、生きてるか？」

「マクスウェル、なんとか無事です」

「私も大丈夫です」
「こちらデファンっすけど、先輩……生きてるかはないっす」
俺なんて心臓が今更、バクバクと音をたてているのに……、余裕があるな、デファン。
「よし、皆無事だな。今から、推進方向を仰角に変更して……」
「隊長、この速度なら一周した方が早くないですか？」
むっ、それ、いいかも……。
「マクスウェルの意見を採用、といいたいんだが、戦闘はまだ継続しているし、引き返すぞ。……正直、地球観光しながら一周回っていうのも、魅力的なんだがなぁ」
去年の4月と比べても、夜側に人工の光が見え始めてるから、見てみたいんだけどさ。
「……いえ、隊長の言う通り、確かに戦闘中でした。ここは単純に反転して戻りましょう」
「なら早くしないと駄目っすよ。……結構、離れたっすから、急がないと」
「ああ、そうだな。全機、推進方向を制御して高度を稼ぎ、その後、機体を反転させる」
「「「了解」」」
……なんて言ったけど、正直に言うとね、俺の中では、戦闘はもう終わってるのよ。
機先を制して混乱させたし、ザフト屈指のエースであるラウがい

るんだから、確実に勝ってる筈だしね。

……。

地球を足元に十分に高度を取ってから機体を反転させると、遥か遠方の戦闘宙域がメインモニターに映った。

爆発光がまだ確認できるが、それも数が少ない。

それよりも、戦闘宙域下部で発生している赤い輝き……数多の赤い光が軌跡を描いて、断続的に地球に降り注いでいることに、気を取られてしまった。

……おそらく、戦闘で発生した残骸や破片が、大量に大気圏に落下しているのだろう。

不謹慎だと自身でも思うのだが、俺には、それがまるで、夜空を彩る流星群のように見えた。

「よし、クルーゼ隊との合流を目指すぞ」

「……了解です」

「……はい」

「……わかったっす」

……俺以外の三人も、あの流れる赤い輝きに何かを感じたのかも

しれない。

そんなことを思いながら、ＭＳを戦闘宙域へと向かわせた。

４６　冬の艦隊流星群　４（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

47　精神を砕くもの　1

２月１４日。
今日で、あのユニウス・セブンへの核攻撃が行われてから、一年になる。プラントでは、追悼式典がしめやかに行われているだろうが、先日の戦闘の後始末をしている俺達には犠牲者を悼んでいる余裕もない。

１３日の昼過ぎに到着したエルステッドとハンゼンに、一時収容してもらっていたクルーゼ隊の旗艦ヴェサリウスから戻ると、できるだけ低軌道にデブリを残さないために、ＭＳ隊に大きい物を大気圏に落とさせたり、小さい物を艦載ビーム砲で焼き払ったりしている。

これも、地球から打ち上げられたり、地球に降りて行ったりする宇宙船を守るために必要なことなのだ。

で、こういうことをする原因になった昨日の戦闘についてだが……。

昨日、１３日の戦闘は、側面からの横撃に成功した俺達が再び戦域に戻った頃には既に終了しており、連合軍艦隊は１５０ｍ級を数隻残して、ほぼ殲滅されていた。
合流したラウが言うには、足つきの大気圏突入が成功するまで、連合軍艦隊は狂的なまでに援護を続け、一部を残し、旗艦を含めた全ての艦艇が沈んでいったらしい。
その気合というか、恐ろしいまでの覚悟に驚きと慄きを感じつつ、

敵についての詳しい情報を聞くと、去年の新星攻防戦でザフトを散々に苦しめた、ハルバートン率いる連合軍第八艦隊とのことだった。

その名前と艦隊ナンバーを聞いて、狂気めいた奮戦振りにも納得してしまったよ。

世間というかザフトではハルバートンは智将だなんて言われているが、今回の戦闘の件と以前の艦隊特攻の件を考えれば、俺の中では、どちらかというと烈将というイメージが強い。

……いや、これはどうでもことだな。

降伏した残存艦の連合軍将兵に関しては、戦闘を主導したラウに図って、脱出用シャトルに全員を放り込んで地球に降下させる事にしてもらった。宇宙で捕虜を取って、わざわざ連れて帰るのが面倒だからなんて物臭な理由を表向きにしたが、本当は死戦での敢闘を称えてという温情が大半だ。

実は、この投降将兵の処遇をその場にいた白服連中で決める時に、捕虜は解放する必要なんてない、丁度、今日で一年になるし、ユニウスの仇を取る為に全員処刑すべきだ、なんて馬鹿げた意見が出たりしている。

だから、反論として、劣勢な戦力でも一個艦隊を叩き潰したザフトの精強さを伝えるスピーカー代わりに使えるとか、殺すために使う武器弾薬が勿体無いとか、皆殺しをしてしまうと敵の敵愾心と復讐心を煽る上、今後の戦闘でも徹底抗戦されて余計に損害が増えるとか、一理もない殺しを主張するお前の血の色は何色だとか、今後の事も考えず、感情に任せて行動を決めるなんて、プラント、否、コーディネイターの品位を疑わせる事になるとか、とにかく色々と適当に、あることないことをペラペラと一時間程捲くし立て、言い

包めておいた。
後でラウから、俺の延々と続く反論を受けていた意見者が途中から辟易していたと苦笑と共に告げられたことを考えると、半分ぐらいの時間で良かったかもしれないと、今は少しだけ反省している。

ホントダヨ？

バカナコトヲホザクヤカラニイシュナンテナイヨ？

……。

俺、ストレス、溜まってるんだなぁ……。

話を戻して、先の戦闘におけるザフトの被害は、鹵獲ＭＳが大活躍したおかげで、ＭＳが五機撃墜されるだけで済んでいる。あの大きな旗艦、３００ｍ級を落としたのも鹵獲ＭＳの強力なビーム兵装だと聞いているから、ＭＳが強力なビーム兵器を装備すれば、それだけで脅威なのだということがよくわかった。

でもって、その鹵獲ＭＳを生で見ようと思っていたんだが、実際に見れたのは、残念なことにＭＡ可変機と特殊戦機の二機のみだった。わざわざ案内をしてくれた特殊戦機を担当する赤服の子によれば、なんでも、残りの二機は足つきを追うことに夢中だったために帰艦することができず、そのまま大気圏に突入してしまったとか……。

幸いにして、鹵獲ＭＳは大気圏突破機能があったらしく途中で燃え尽きる事はなかったそうだ。

犠牲者も出ていないようなので、大気圏突入後の戦闘について、

さらに詳しく聞いてみれば、その二機のうちの一機は、大気圏突入後も足つきの艦載機であるＭＳとの戦闘を繰り広げていたらしいのだが、何処からともなく、凄い勢いで飛んで来た中身の詰まったパルデュス・ミサイルポットの直撃を受けて、戦闘どころか、危うく大気圏突入に失敗する所だったらしい。

……何か、そのミサイルポッドの来歴に覚えがあるような？

……。

ま、まぁ、幸いにしてＰＳ装甲のお陰で落ちなかったんだから、うん、よかった！

い、いやぁ、事故と言うのは怖いねぇ、うん。

……。

黙ってれば、わからないよな？

◇　◇　◇

ほぼ一日かかった後始末が終了し、作業に出していたＭＳの撤収が進む中、俺はエルステッドの艦橋でゴートン艦長と先の戦闘や今後の展望について話しながら、一息入れている。

「本当に、昨日はうまくいって良かったですよ」

「確かに、うまくいくか心配だったけど、結果は上々だからね、良かったよ」
「ええ、しかも一個艦隊を潰せましたから、月やＬ４にも、それなりの圧力になるはずです」
昨日の戦闘の結果、月とＬ４の連合軍艦隊に掛かった圧力の大きさを量りながら、手に持ったドリンクを一口、口に含む。
はぁ、青く美しく輝く地球を見ながら飲むＩＴＩＧＯオレは格別に美味しい……。
ＩＴＩＧＯと甘味料とミルクで合成された陳腐な甘味で、脳を癒しながら艦長との話を続ける。
「これで俺達の任務も楽になればいいんですが、どう思います？」
「……昨日、得た情報から考えると、一時は楽になるだろうけど、あんまり期待しない方がよさそうだねぇ」
「やっぱり、艦長もそう思いますか？」
「うん、連合の艦隊戦力は順調に再建されているみたいだからさ」
昨日、鹵獲した１５０ｍ級から月の戦力に関する情報も少しだけ奪取できたのだが、それがまた、頭が痛くなる内容だったのだ。
と、その内容の説明をする前に、簡単に地球連合の宇宙戦力について軽く触れておきたい。
地球連合とは去年に結成されたばかりで、来歴一年と非常に若く、出来立てほやほやの組織だ。

しかしながら、地球連合には長年、国際社会をリードしてきた国際連合という下地が存在しており、意思決定機関が国連首脳部から連合構成国首脳部に変わっただけで、他は国際連合とさほど変わりがないのだ。簡単な事例を挙げれば、地球連合軍で使用されている制服も、元は国連軍の制服を流用したものだったりする。

でもって、地球連合が保有する宇宙戦力なのだが、連合軍艦隊なんて言っているが、実はプラント理事国である大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国の三大国の艦隊がそのまま名前を変えた存在に過ぎない。それらに加えて、旧国連軍艦隊……国際スペースコロニー【世界樹】や月、Ｌ４、Ｌ５に駐留していた艦隊が加わるのだ。

もっとも、国連軍艦隊も元々はプラント理事国の艦隊が主体になって構成されたものなので、理事国に好き勝手に使われていたのが現実だったりする。

まぁ、今も昔も国際社会では大国が好き勝手できるほどに強いということを認識しておけば十分だろう。

……話が変に曲がったので、元に戻す。

地球連合軍の宇宙戦力は、要となる機動艦隊が理事国軍と旧国連軍とを合わせて、第一艦隊から第九艦隊までの九つ存在していて、第一、第二、第四、第八、第九は旧国連軍、第三、第五、第六、第七は各理事国それぞれの艦隊が転用されている。

ちなみに、第四だけは国際連合時代から構成国全てが艦艇や人員を供出して形成された各国混成型であり、真の意味での連合軍艦隊と言える存在かもしれない。

この九つの艦隊に加えて新設されたらしい一個艦隊がザフト宇宙機動艦隊、引いてはザフト宇宙軍にとっての敵となる。

……十個艦隊を常備できるだけの国力は本当に恐ろしく、頭の痛いことだ。

ＩＴＩＧＯオレの甘さで、ぶり返してしまった頭の痛みを和らげながら、艦長に敵の現況を、自身への確認も含めて述べてみる。

「今現在、連合宇宙軍の機動戦力は、Ｌ４に出張っている第四艦隊、月のプトレマイオスで健在なのが第七艦隊で……直に再建完了なのが第一、第三、第五、第六艦隊の四個艦隊で、新設されたのが第十でしたね？」

「うん、それらの艦隊自体も艦艇数を増やすだろうし、以前より強化されることは間違いなしだよ」

ちなみに、番号が挙がらなかった、第二は世界樹攻防戦で、第八は昨日の戦闘で壊滅しており、また、第九もＬ５宙域事変（仮）で叩き出された艦隊に相当するのだが、これは世界樹攻防戦で消耗した第一に吸収されている。これら三つの艦隊は、今現在において書類上の存在になっているそうだが、それもいつまでのことか……。

「まったく、月なんて巨大な資源庫だから、幾らでも作り出しそうで怖いよねぇ」

「ほんとですよ」

この艦隊再建とＭＳの開発と併せて考えると、俺が以前から恐れている消耗戦が開始される前兆だと感じさせてくれるのだ。

そら、自然と頭も痛くなってくるよ。

「やれやれ、連合の本格的な反攻が始まる前に、戦争、終わりませんかね？」
「うーん、まだ決め手が足りないねぇ」
「決め手、ですか？」
「うん、決め手」
決め手か……。
「えーと、ラインブルグ隊長、よろしいですか？」
どんなことが戦争終結の決め手になるかを考えていたら、アーサーが恐る恐るといった感じで、俺に声をかけてきた。
「うん？　どうかしたのか、アーサー」
「はい、プラントの総司令部から、ラインブルグ戦隊は任務を中断し帰還せよ、との命令が届きました」
……任務外の行動をしたことへのお叱りか？
いや、うちは独立した権限をある程度持っている戦隊だから、それはないか……。
「詳しくは？」
「いえ、ただ、帰還せよとの命令が……少し粘って聞いてみたんですけど、どうも、上の方から命令が出たみたいです」
「……上？」
上と聞くと、シャッチョ椅子に座ったザラ委員長が、両手で頬杖をついて不敵に笑う姿が脳裏に浮かぶんだが……。

「うわぁ……きっと、碌なことじゃないだろうなぁ」
「ですが、隊長、上からの命令であると仄めかされた以上、無視するわけには……」
「ああ、うん、わかってるよ。……艦長？」
「くぅぅぅ、こういうのって、宮仕えの悲しいところだねぇ、ラインブルグ君」

いや、ゴートン艦長……泣きまねして目元を手で覆っても、口元が笑ってるのが見えてますよ、もう。

「はぁ。……艦長、どうも、お上がお呼びのようですから、プラントに戻りましょう」
「はいはい、トライン班長、ハンゼンと艦内各班に通達を出してちょうだいな」
「アイ、艦長」

ゴートン艦長の命令を受けて、アーサーがすぐさま行動に移る。

……何か、アーサーの奴、いつもにまして、キビキビしてないか？

そんな俺の疑問に答えてくれたのは、隣で同じくアーサーの動きを見ていたゴートン艦長だった。

「少し変わっただろ？」
「ええ、動きが機敏ですね」
「ああ、トライン君も今回の作戦で思う事があったみたいなんだ」
「へぇ、そうなんですかぁ」
「ふふ、人が成長する姿を見るのはさ、いつ見てもいいもんだよ」

……俺もその対象ですね、わかります。

少し被害妄想染みた考えが浮かぶが、それを振り払って、艦長に伝える事を伝えておく。

「帰還前に、一応、クルーゼ隊に声を掛けておきますよ」
「うん、それがいいね」
「では……。アーサー、クルーゼ隊長と話がしたいから、ヴェサリウスに通信を繋いでくれ」
「了解です」

待つこと少し……メインモニターにラウの姿が映った。

「いいタイミングだったな。ちょうど、こちらから連絡を入れようとした所だった」
「……あ～、もしかして、あれか？　帰還命令か？」
「そうだ。どうやら昨日の会戦に参加した部隊全てに出ているようだな」
「そうか。なら、話が早いな。うちの戦隊にも帰還しろって来たから、撤収しようと思うんだが、そっちはどうする？」
「ふむ、そうだな、少し待ってくれ。……アデス、足つきとイザーク、ディアッカ両名について、カーペンタリアとジブラルタルへの連絡は済んでいるか？」

どうやら、ラウは足つきに関する情報伝達や地球に降下した部下についての確認をしているようだ。

……にしても、待っている間、ラウが見せている、顎に手を当てて考え込むようなスタイルって、何気にかっこいいよね。

ベルナールの奴なんか、作業の手を止めて、じぃーーっとラウの奴に見惚れてるもんなぁ。

ここは俺も一つ、真似してみようかな？

……。

想像してみたけど、悲しいことに、似合わんわぁ。

「……アイン、我々も撤収することにするよ」

「そうか。なら、さっさと引き上げよう。低軌道は危険地帯だからな、必要以上の長居は無用だ」

「そうだな。後、他の戦隊にはこちらから連絡しておく」

「うん、頼むよ」

「……では、また後で会おう」

「ああ、また、プラントでな」

ラウの姿がメインモニターから消える。と、同時にベルナールの溜息が……。

艦長と揃ってその溜息に苦笑していると、それに気が付いたのか、ベルナールが口を尖らせた後、イーっとした顔をしてから舌を出して見せた。

そして、そんなベルナールの歳相応の表情に見惚れているアーサーの惚けた顔にも、また笑えてくる。

……うん、笑ったら、少しリラックスできたな。

……。

さて、今から帰ることになるプラントで、上層部から無理難題を課せられないように、今から、そうだな……我が母にでも祈ってみるか……。

47　精神を砕くもの　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

48　精神を砕くもの　2

2月16日。

プラントに帰還すると、先の低軌道での戦闘に参加した全部隊の指揮官に、宇宙機動艦隊司令部への報告書の提出が求められた。一応、そんなことがあるかもしれないと予想して書いておいたモノを、到着してすぐに司令部に提出すると、戦隊には、なんと、一週間もの特別休暇が与えられた。

……まぁ、本当の所は、デブリ帯を横断する際に許容限界速度を超過させて航行させたエルステッドとハンゼンの点検整備が、地球への定期補給船団の出発前点検に重なって後回しにされたなんて事情と、一種の報奨金代わりの休暇が重なっただけなんだけどね。

最近、休み過ぎじゃないかなと思いつつも、休暇というものが非常に有難いものであるのは確かなので、遠慮なく頂くことにした。

戦隊の皆も降って湧いたご褒美に喜びながら、艦を下船していったよ。

もっとも、俺に関しては、すぐさま休暇を満喫する、というわけにはいかないようで……いつかの如く、黒服のお兄さんやおじさん達に連れられて、アプリリウス・ワンのプラント政庁内にある国防委員長室に連行もとい出向くことになった。

政庁内で厳つい黒服さん達から大きく形良い御胸の秘書さんに引

き継がれた案内で、国防委員長室の主であるザラ委員長の前に立つが……とりあえず一言だけは言わせてもらいたい。

「委員長、あの黒服さん達を迎えに寄こすの、やめません？」

「……貴様は形式美というものを知らんのか？」

「ちょ、形式美って、何それっ！」

「ふん、冗談だ。真に受けるな、馬鹿者め」

いや、おっさん、あんた、真顔で冗談を言われてもさ……対応に困るっていうかさ、何か、先制パンチを食らった気分だよっ、てっ！

むぁっ！！

俺の反応を見て満足したのか、引っ掛ける事が出来て楽しいのかは知らんが、ニヤリと笑っていやがりますよ、このおっさんっ！

くそっ、以前よりも更に余裕を持ってやがるな、おっさんっ！

……はっ！

ま、まさか……これは、円満な夫婦仲から来る余裕なのかっ！

ぬぬぬぅっ、う、羨ましくなんてっ、ないからなっ！

思わず歯軋りしそうになるのを、強靭な意思と顎の筋力でもって強引に抑え込み、俺は努めて、そう、努めて冷静に、委員長に召喚した理由を尋ねることにする。

「で……今日はいったい何の御用があるんでいやがりますか？」

「む、後二人程、人を呼んでいるのだ。秘書が案内してくるまで待

て」
「……二人？」
訝しむ俺の声には応えず、委員長は伝説のＧＥＮＤＯＵスタイルで瞑目してしまった。
……くっ、威厳がっ！
以前にはなかった、威厳がっ！
だ、だが、俺はこれ位では屈しないっ！
「ザラ委員長、何か、前にお会いした時よりも、痩せてませんか？」
「……」
あっ、今、片頬がピクリと動いたぞ。
「もしかして、アレですか？」
「……」
何を思い出しているのかはわからないが、委員長の顔から冷や汗がだらだらと……。
「委員長……腎虚にならないといいですねぇ、っていうか、もう、すでに手遅れですか？」
「……貴様が、貴様がっ、レノアをあの茶会で焚きつけたのがいかんのだっ！！」
おおぅ、なんか、委員長の顔色が青と赤を交互に行き来して、オモロイワァ。

「あの茶会の日から毎晩毎晩……レノアに干乾びそうになるまで搾り取られて、最近、腰が……」
「……あ、あの、……ザラ委員長？」
「ぬっ！　……謀ったな、若造」
「えー、何のことですかー？」

ふふん、ドアが開く音に気が付かない委員長が悪いのです。

……いや、実際は、俺が委員長の視線を遮って秘書さんの存在を隠したり、声を出してドアが開く音を聞こえなくしていてたりするんだな、これが。

あー、委員長のあの射殺すような目……ゾクゾクしてタノシイワぁ。

ふふふふん、これで少しはやり返せたかな？

まぁ、委員長、円満な夫婦仲が秘書さんにばれる事ぐらいは大したことじゃないでしょう。

逆に、周囲に、夫婦仲がとーっても熱々なことを知らしめるチャンスだと思っていただかないとねぇ。

「くっ、その顔、碌なことを考えておるまい」
「いえいえ、そんなこと、ないですよぅ。ほらほら、秘書さんがお待ちですよ？」
「……えーと、委員長、その……よろしいのですか？」
「むむむ、……構わない、それで何事かね？」

いや、自分で仕事を言いつけておいて、そらないだろ？

つか、動揺し過ぎだろう、おっさん。

「いえ、委員長がお呼びになったお二人を案内してきたのですが……」

ほら、秘書さんも困った顔してるだろうが。

「あ、ああ、通しなさい」

「はい」

で、つい、目で追ってしまう、けしからん胸の秘書さんに通されてやってきたのは……。

「ラインブルグ、お前、まさか、また、ザラ委員長に迷惑をかけているのか？」

「……いや、ユウキよ。ここは、それでこそ、アインだと言うべきだろう」

「む、言われてみれば、確かにクルーゼの言う通りかもしれんな」

ちょいと、お二人さん……本人の前で、とんでも評価をしないでくれませんかね？

◇　◇　◇

雰囲気がグダグダになりかけたので仕切りなおし、委員長室の応接ソファに移動する。四人揃って座った所で秘書さんがお茶を持っ

てきてくれた。
その秘書さんがお茶を置くために前屈みになった時、視線が素晴らしき桃源郷に向かうのは、助平を生涯の友とする男として、極々、自然な反応だと思うんだ。

あっ、今、目があった時に、めっ、って感じで秘書さんに柔らかな微笑で窘められてしまった。

……すいません。

しかしながら、これも男の性なのです、今後、露骨な視線は避けますので、どうか勘弁してください。

俺の無言の懇願が通じたのか、秘書さんは俺に苦笑を一つ残して、部屋を去っていった。そんな心の広い秘書さんの均整のとれた背中から拝みたくなる御尻までラインを名残惜しげに見送った後、視線を元に戻したら、他の三人からの視線を向けられていることに気が付いた。

「……えーと、何か？」
「ラインブルグ、気持ちはわかるがな、場所をわきまえろ。……見るならば、こっそりとだ」
「ユウキよ、それもどうかと思うが？　やはり、男は漢らしく堂々と見るのが正しい姿だ」
「……貴様ら、私はそろそろ、真面目に話がしたいのだが？」

えー、だって、ねぇ。

「いや、でもね、委員長。委員長は普段から有難いモノを拝んでるから、特に反応をする必要はないんでしょうけど、こっちはそうそ

う拝めんのです。少し位はいいじゃないですか」

俺の反論に、ラウもユウキも同意するように、うんうんと頷いてくれた。

うん、流石は俺の親友達だっ！

「……もういい、まったく、助平な奴らめ」

「……」

「……」

「……」

俺達にそんな助平心を抱かせるような秘書さんを選んでいる上に、今でも熱愛中の綺麗な奥さんを持ってる、あんたが、そんなことを言いやがりますか？

「なんだ、貴様ら、その目は？」

「いえ……」

「特になにも……」

「ええ、なーんにもありませんよ」

先から順に、ラウ、ユウキ、俺である。

「……ふぅ、まったく、若造共め、疲れさせてくれる」

それは、おっさんが歳をとったか、毎晩の苦ぎょ……楽園の所為だと思う。

「それで、ザラ委員長。我々三人を同時に呼んで、いったい何事ですか？」

「ほんとだよねぇ、白服が三人も同時に呼ばれるなんて穏やかじゃないですよ」
「……ユウキ、アイン、まずはザラ委員長の話を聞こうではないか」
ラウがうまいこと話を誘導してくれたので、ここは大人しくしておくか……。
委員長の真面目に話を聞くべく、ちゃらけモードから頭を切り替え、腰を据える。場の変化を感じ取ったのか、委員長も呆れた表情を改めると話を切り出した。
「貴様らも知っているだろうが、先日、ザフト地上軍がビクトリア宇宙港を落とすことに成功した」
そのことを聞いた瞬間に、眉間に皺が寄るのを自覚する。
実はビクトリア宇宙港を落とした時に、投降した連合軍の捕虜をザフト兵が虐殺したという話があちこちから伝わってきているのだ。なんでも、追悼式典に合わせて、銃殺することでユニウスの仇をとったとか……。
やっていることがあまりにも低レベル過ぎて呆れるというか、ザフトには先を考えないというか、短絡的な大馬鹿が多くて困るというか、まったくもって頭が痛くなってくる話だ。
虐殺なんてしたら、自分達も同じような立場になった時にやり返されることが、そんな簡単な、当たり前の道理がわからないのだろうか？
……いや、戦場の狂気、戦争の悲劇と呼んでしまえば、それまでのことになるのかもしれない。

けれども、俺は、ナチュラルだからというだけで簡単に人を殺せる蛮性……人間としての理性の箍が簡単に外れるプラント生まれのコーディネイターの精神性が恐ろしいし、また、今後のプラントの事を、未来を考えると後々にまでナチュラルとの関係に禍根が残っていまう、恥ずべき汚点だと思う。

一応、これに関する苦情というか、捕虜の取り扱いに関する要望書は、後で正式に書類として国防委員会に提出しておくつもりだが、ザフトには自身の主義主張を絶対のものとして、人の意見に耳を傾けない輩や逆に難癖を付けて主張を強要してくる輩が多いから、……悲しむべき事に、きっと効果はないだろう。

っと、今はザラ委員長の話を聞くのが先だな。

「これを受けて、国防委員会ではこの戦争に終止符を打つべく、オペレーション・ウロボロスを見直し、地球連合への致命打を与える作戦を新たに立案した」

へぇ、委員長も真面目にお仕事してるんだね。

「その名はオペレーション・スピットブレイク」

……Ｓｐｉｔ（痰唾を吐く）　Ｂｒｅａｋ（破壊する）　だなんて、き、汚ねぇ作戦名だな、おい。

「それで委員長、その作戦の目的と概要は？」

もう少し、マシな作戦名はないものかと考えていると、ユウキが作戦について尋ねてくれたようだ。

「うむ、アラスカにある地球連合軍最高司令部へ降下強襲をかけて制圧することがこの作戦の目的だ」
「……降下強襲による制圧」
「そうだ。概要としては、アフリカ侵攻軍から抽出した戦力をビクトリアのマスドライバーで軌道上に打ち上げ、カーペンタリア及びジブラルタルの海洋部隊の支援の下で降下し、アラスカの制圧を行う予定だ」

へぇ、地球連合軍最高司令部への強襲制圧作戦か。

……確かに、上手くいけば、戦争終結の道標にはなるな。

「本気ですか、委員長。アフリカ侵攻軍……地上軍の大部分を使うとなると、賭けになりかねませんよ？」
「この戦争に終止符を……、我々が勝ったまま終わらせるには、これぐらいの大攻勢をかけなければ不可能だろう。違うかね、ユウキ君？」
「それは認めます。……では、その勝算は？　委員会では、どれぐらいだと判断しているのですか？」
「委員会……作戦を立案した文官が弾き出した予測では、七割方、成功するとのことだ」

ユウキの意見に委員長が応えるが……そんな賭けの様な作戦で七割はちょっと、楽観過ぎでないかい？

……。

良くて、三割、くらいじゃないかな？

「……委員長、その勝算、おそらく希望的観測が入り過ぎているでしょう」
「む、そう思うか、クルーゼ？」
「はい、楽観は極力排除するのがよろしいかと」
ラウが作戦成功率に的確な突込みを入れてくれたようだ。
……ふむ、なるほどな、と頷いているザラ委員長を見るにつけ、今日、俺達をここに呼んだのは、どうやらこの作戦について、意見を聞きたかったからみたいだな。
……。
でもね、俺は、その作戦云々を語る前に、委員長に話しておきたい事があるんだ。
だから、ちょっと、口を出させてもらおうかね。
「あの、委員長」
「なんだ、若造」
……ユウキはユウキ君で、ラウはクルーゼで、俺だけ若造とは、これ如何に？
「……先日、ボアズ要塞で爆弾テロがありましたよね？」
「ああ、忌々しいことだがな。しかし、それがどうしたというのだ

？　今話した作戦に何か関わるというのか？」

委員長、もう、いい歳なんだから、そう、カリカリしなさんなって。

「とりあえず、話を聞いてくださいよ」

「……むっ、……わかった、話せ」

「では……、先日にボアズ要塞で起きたテロなんですが、以前なら、俺が保安局に勤めていた二年程前なら、軍事施設というか重要な施設や拠点で、そんなテロリストの侵入を許すような失態は絶対に犯さなかったはずです」

「……それで、何が言いたい？」

まぁ、簡単に言えばね。

「委員長……プラント保安局の人員不足が深刻化しており、プラントの防諜体制がかなり弱体化しています。現在の体制では、市民生活を守るだけで、恐らく手一杯でしょう」

俺の言葉を理解したのか、委員長の顔からイライラが消えて、訝しげな表情に切り替わった。

「そのような話、私は初耳だが？」

「そりゃ、上役にあがる情報なんて、基本的に耳さわりが良いのに決まってますからね。今頃、保安局の上層部は必死に上辺を取り繕いながら、隠しているでしょう。ちなみに、この情報は現場の人間から聞いた後、しっかりと裏を取りましたから、間違いないです」

前の休暇で防諜体制についての話を聞いた後、伝手を使用して色々と調べてみたら、諜報員やテロリストの検挙率が、戦争中であるから、連合側の諜報員や工作員やらが何らかの方法で新しく入り込んでいることを予想して、それらの数字を差し引いても、明らかに落ちていた。

普通ならば、早く上に話を通して何とか増員してもらおう、って話で終わるんだけど、プラント……特にザフトの系列じゃ、これ位のことすらできんのか、この無能め、って感じになるのが一般的だから、取り繕って隠してしまったんだろうなぁ。

っと、衝撃的な話はまだあるんだった。

「……しかもですね、これはまだ保安局でも、現場の者が怪しいと踏んでいるレベルなんですけど、どうも、プラントの……ザフトの上層部から、情報が漏れているみたいなんですよ」

これも保安局時代に何度も行った研修で、仲良くなったプラント各市の保安局員に提供してもらった情報だから、まず、間違いないだろう。

これも一種の情報漏洩かもしれないけど、あえて、俺は情報提供と強弁する！

凄惨かつ夢のない現場で、非情な現実と向き合ってきた者同士、現状を何とかしたいという相通じるものがあるからこそ、皆、情報を提供してくれたのだ！

そう、これは情報漏洩ではなく、未来をつくる為の情報提供なのだとっ！

……きっと、情報漏洩している奴らの中にも、こんな風に考えている奴がいるんだろうなぁ。

そんな事を考えながら、自分が為したことは必要悪だと嘯き、都合良く目を瞑って、話を進める。

「疑いはあっても相手の権限が大きいために、上層部が尻込みして調査を進められず、でも、プラントの安全を担う保安局に所属する者としては放置できない、なんてジレンマを抱えて、現場は悶々としてますよ」

「若造、その情報漏洩の話はどれ位のレベルなのだ？」

「今現在の段階でわかっているのは、最高評議会直下の各委員会レベルです」

「っ！」

「本当かっ、ラインブルグっ！」

驚く委員長とユウキの二人とは対照的にラウは落ち着いたままだ。

「……有り得る話だな、アイン」

「うん、俺も保安局時代に少し勉強してきたけど、漏洩のパターンにも色んなのがあるからな。例えば、金や物で情報を売る、自身の主義信条から外に流す、ハニートラップに引っ掛かって情報を強請られる、本人が気付かないうちに内容を家族に話していて、そこから外部に流れる、といった所かな？　もちろん、諜報する側も漏洩されるのを口をあけて待っているだけじゃなくて、代表的な手段である盗聴や盗撮を仕掛けたり、要人の使用人レベルや組織の人員、出入り業者として入り込んで密やかに情報を収集したり、噂レベル

に含まれる微々たる情報を地道に組み立てて推論したり、実際の人や物の動きを見て探り出す、といったことをしてくる」

逆に言えば、公務では基本、身元がはっきりしている人物が働く政庁で黒服に囲まれて過ごし、家庭では、警備体制が整った邸宅があり、しっかりとした奥さんとの夫婦仲が非常に円満で、ハウスキーパー等を雇ったりしていないザラ委員長なんかは結構、安心できる人物だったりする。

俺の言葉を受け止めて消化したらしいザラ委員長が、目に一国の指導者に相応しい、強い意志の光を宿しながら、俺に問い掛けてくる。

「つまり、若造、作戦の前に、まずは身内を疑えと言うわけだな？」
「ええ、以前なら心配する必要なんてなかったんですけど、現状ではそれ位の慎重さが必要になります」
「しかし、ラインブルグ、一々、そのようなことをすれば、進む話も進まなくなるぞ？」

うん、ユウキの指摘は尤もなことだ。

「ああ、わかってるよ。それに加えて、保安局の人員が足りないという根本要因の解決には時間が掛かる以上、今現在においては事を進める上で、もう、情報が漏れるのは仕方がないと諦めるしかない。……だけど、せめて上層部に関してだけは、どこから情報が漏れているかを調べて、塞いだ方がいい」

上層部が触れる情報は確度と機密レベルが高いものが多いから、それが漏れると国家や組織の存亡に関わりかねないので、とても危険なのだ。

「それをどうやって調べる？」
「防諜に詳しい保安局員を抽出して、内々に動かすしかないな」
……その影響で、現場の人間が超過勤務に泣く破目になるだろうけどね。
「だが、怪しい人物を突き止めても、証拠を掴めぬ限りは手出しが出来ぬのではないか？」
「ああ、ラウの言う通りさ。……怪しい人物の内偵中に証拠を掴めたら、それはそれでいいんだが、掴めなかった場合は、何らかの強権を発動させて逮捕するしかない。本当なら、こんな無様な方法は、後々まで影響が残るし、内部分裂を引き起こす可能性があって危険だから、できるだけ避けたいよ。それでも、背に腹は変えられない時は、やるしかないだろうな」
ザラ委員長は無言で俺達の会話を聞きながら、考え込んでいるようだ。
さて、委員長が俺の意見に関して、何かを話し出すまで、お茶で喉を潤しておきましょうか。
……ぅぐっ。
秘書さん、お茶淹れるの下手なのね……。

48　精神を砕くもの　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記修正。

49　精神を砕くもの　3

残念な味のお茶を飲みながら、ザラ委員長が何らかのアクションを起こすのを待っている間、先のプラント保安局の防諜体制に関連した会話を続ける。

「ラインブルグ、まさかプラントの防諜体制がそこまで悪化していたとは、まったく知らなかったぞ」

「そら、保安局は市民生活の保全と保護を最優先に動いているからね。普通に生活をしていれば、まず、わからないことだよ」

プラント保安局は、市民生活と社会基盤を守るために、目に見えない影……陰惨な世界で血に塗れた努力をしているのだ。

「そういえば、ザフトにも防諜組織があると聞いた覚えがあるんだが、それらは動いてないのか？」

「そこの連中は元々は保安局出身者で、皆、地球に降りて占領地の治安維持に当たってるよ。ついでに言えば、ザフトが一から作った防諜組織なんて、まだ存在していないはずだ」

……俺も保安局出身なのに、何故かＭＳに乗っているから、不思議だよねぇ。

「なるほど、若い組織であるが故の宿命だな」

「おっ、ラウ、上手いこと言うね」

でも、ザフトって組織もまだ若いはずだし、弾力に富んでいるは

ずなんだけど……既に硬直化している気がする。

……いや、待てよ？

ザフトの前身である黄道同盟時代から考えると、それなりに経っているから、仕方がないことなのかもしれない。

とはいえ、自らが所属している組織の歪さに変わりはなく、憂慮すべきことだと内心で嘆いていたら、沈黙していたザラ委員長が口を開いた。

「……若造」

「……はい？」

「貴様ならば、どう動く？」

……むぅ、どう動くか、か。

「まずは、情報が漏洩していると思われるラインを調べることから始めますね。ある程度絞り込めたら、欺瞞情報を流して諜報員を洗い出す。後、洗い出した諜報員は全てを摘発せずに一部を残しておいて、今回のボアズでのテロ被害を受けた結果の一斉摘発程度に思わせて、相手の油断を誘い、これらを逆用するのも手ですね。……とにかく、上層部に近い位置にいる諜報員を全て見つけ出して、保安局の管理下に置いてから、先の作戦を最高評議会に説明しても遅くはないはずです」

「ふむ。……では、貴様に信頼できる筋はあるか？」

「あります。信頼できる人間が保安局に数人いますから、紹介し……国防委員長が保安局の人間と直接会うのは拙いですね」

ザフト隊員でもない保安局員が、急に国防委員長室に出入りする

と悪目立ちするからな。

「それは、私も監視されている可能性があるということか？」

「ええ、それは大いにあると思われます。何せ、委員長は最高評議会の重鎮で、国防委員会やザフトの親玉です。普段から黒服に囲まれているから直接的に手を出せなくても、出入りする人間を確認するだけで、何らかの意図が動いていることを察することはできますからね」

……出入りか。

「委員長、ユウキを連絡役にするのはどうでしょうか？」

「なっ、わ、私がか？」

「確かに、アプリリウス防衛隊のユウキ君には、私も普段からよく頼みごとをしているから……」

「ええ、今までも普通に出入りしているユウキなら、これからも同じように出入りしても、それほど、おかしくはないでしょう」

重要なのは自然さというか、普段と変わらぬ日常を演出すること。

「後、ザラ委員長か誰かに一筆というか、捜査命令書みたいなものを書いていただかないと、権限がないことには現場が動きたくても動けません」

「それは大丈夫だ。保安局の上位組織は国防委員会になる。つまり、私に権限があるからな」

「なら、ザフト及びプラント上層部の周辺を内々に調査し、諜報員を摘発するようにとの命令書をお願いします」

委員長は、俺の意見にしっかりと頷いてくれた。

「……でも、委員長、諜報員を摘発できたからと言って、安心はしないで下さいよ。情報なんてものは、必ず漏れるものなんですから」
「無論だ」

うん、なら、後はユウキと俺の元上司である保安局セプテンベル支部の支部長を引き合わせて……。

「では、若造。……今回の作戦については、何かないか？」
「作戦名が汚すぎます」

あっ、口が滑った。

って、おい、こいつ、言っちまいやがった、なんて目で見るなよ、ラウにユウキ！

「言っちゃ駄目でした？」
「……いや、構わん」
「なら、作戦名を変えません？　正直、俺だったら、ヤル気なくなりますよ？」
「確かに、下品で萌えてこない」
「ああ、熱くなる名ではないな」

……普通の感性なら、そうだよねぇ。

「ならば、貴様は何と名付ける？」
「……うーん、連合軍の戦意を砕く意味を込めて、スピリットブレイク【Ｓｐｉｒｉｔ（精神）　Ｂｒｅａｋ（破壊する）】？」

立案者は、本当はこう言いたかったと思うんだけど、どうだろう？

「おい、ラインブルグ、二文字増えただけではないのか？」

ユウキっ！　そんな無粋な突っ込み、今はいらんよっ！

「意味が大いに違う！」

「……まぁ、貴様の意を汲んで、名前ぐらいは変えてやろう」

「あざーすっ！」

良かった、変な作戦名にならなくて……。

「……他にはないか？」

「そうですね。博打的な要素が強すぎる点が気になります」

「先程、ユウキ君にも言ったが、これぐらいの賭けは必要だろう」

「ええ、必要です。ですが、次善の策も用意すべきです」

「ほう、どのような策だ？」

……いえ、まだ、考えてないです！

「ユウキ！　ラウ！　ちょっと考えるから、繋ぎに何か意見を言ってくれっ！」

「ちょっ！　ラインブルグっ！」

「……まったく、見得を切っておいて、世話がやける奴だ」

あーあー、今から集中して考えるので、文句や会話は聞こえませーん！

外界からの情報を遮断して、いざっ！

……。

今回の作戦の目的は、戦争の終結させるため、地球連合の構成国、……特に三大国の継戦意志を砕くことにある。そのために、オペレーション・ウロボロスを見直して、乾坤一擲と言える連合軍総司令部への大部隊による降下強襲制圧作戦が立案されたと言えるだろう。

けれど、この作戦は先に言っていたように乾坤一擲と呼ぶに値する程に、賭けの要素があまりにも強い。もしも、仮に作戦が失敗して、戦力を喪失した場合はどうなる？

ザフト地上軍の戦力が失われるということは、それまで地上で地上軍と対峙していた連合軍の地上戦力が宇宙へと上がってくることに繋がるだろう。つまり、作戦の失敗は即ち、宇宙への、プラントへの圧力が増大することを意味する。

……。

ならば、次善の策としては、こちらの戦力が回復するまで連合軍の地上戦力を宇宙に上げないようにするために、宇宙への出口……各地のマスドライバーを制圧、もしくは破壊する事が最も効果的な策として考えられるだろう。

まぁ、他の案として、生産力を落とすために生産拠点や発電施設を軌道上から爆撃する、宇宙への道を塞いでしまうために低軌道上でケスラーシンドロームを起こす、相手を威嚇するために三大国の首都へ花火でも撃ち込む、なんて事もぱっと思い浮ぶには浮かんだのだが……。

軌道上からの爆撃は生産拠点が都市部に近いことを考えるとあまりにも政治的リスクが大きいし、発電施設への実施なんて、これ以

上、反プラント、反コーディネイターの世論が盛り上がってしまうとかなり拙いことになるので、論外だ。そもそも、地球各地に点在する拠点全てへの攻撃となると、比例して大量の爆弾や部隊が必要となるため、経済的にも、戦力的にも、プラントには不可能だしな。

後のケスラーシンドロームに関しても、地球圏全体に与える影響があまりにも大き過ぎるから却下だし、理事国の首都に花火を撃ち込むのは、本来、去年のエイプリルフールにやるべき、いつでもこっちは攻撃できるんだぞ、ごらぁ、的なブラックジョーク混じりの政治的、外交的威嚇だし、今更意味がないことだ。

よって、純軍事的な要素が強い、マスドライバーを制圧ないし破壊する案で考えることにしたのだ。

で、この策の対象となる、現状において残っているマスドライバーは、東アジア共和国のカオシュンのものが今年一月の攻勢で破壊されているから、大西洋連邦のパナマと中立国オーブ連合首長国の……どこにあるかは忘れたがここのものと、ザフトが占領しているビクトリアの三つになる。

この三つのうち、中立国と自軍の分を抜くと、自然、大西洋連邦のパナマが標的となる。そして、パナマと大西洋連邦本国との距離を考えると制圧は現実的ではないから、破壊が最も有効だと考えられるだろう。

……。

うん、次善策としては、パナマのマスドライバーの破壊が最も有効、つまり、オペレーション・ウロボロスをそのまま継続することが一番だな。

……。

俺が考えをまとめて目を開くと、ザラ委員長は気持ち良さげに舟を漕ぎ、ユウキは壁に向かって逆立ちし、ラウが淡々と作戦資料に目を通していた。

……えーと、ラウさんや、どういう状況ですか？

目線で問うと、ラウは何でもない様に答えてくれた。

「ふむ、委員長は日頃の疲れが出たのだろう、少し休んでおられる。ユウキは……己に苦行を課すことで、何か閃きを得られると考えたそうでな、五分ほど、あのままだ」

「……ユウキも初めて会った時から、本当に変わったよなぁ」

「ふっ、その原因は、間違いなく君だよ、アイン」

いや、勝手に影響を受けたのはユウキだから、ユウキの自己責任だと思うなぁ。

「それで、考えはまとまったのかね？」

「ああ、一応はね。……ラウ、今読んでた、その資料に何か面白いこと、書いてないか？」

「ふむ、この資料……オペレーション・ウロボロス関連の資料なのだがな、地球へのニュートロンジャマー散布に関して、面白いことが書かれていた」

「……あのニュートロンジャマー発生装置を一万発を落としたってやつか？」

あの時、どれほど、ハラワタが煮えくり返ったことかっ！

まったくもって、一万発なんて、馬鹿げた数を落しやがって、ほんとに忌々しいっ！

「いや、この資料によると……実際に落とされたニュートロンジャマーは、２０発に過ぎないそうだ」

「……はっ？」

嘘？　でも、一万発落としたって……俺、騙されてた？

「どうやら、得心がいったようだな。これに書かれていることによれば、本命の２０発以外は、ニュートロンジャマー発生装置を外見だけ模したデコイが９８０発、後の残りは全て、簡単に形状を模して整形したデブリだったそうだ」

「……あー、何となく読めてきた、あの一万発ってのは、一種の宣伝……欺瞞工作なんだな？」

「そういうことだろう」

……よくよく考えたら、開戦から短期間で高価と思われるニュートロンジャマー発生装置を一万発も用意できるわけないよなぁ。

そんでもって、この欺瞞に、地球連合も騙された……ってことは、連合の情報収集能力的にはないだろうな。

初期の大混乱段階ならばともかく、調査がある程度進んだ後ならば、連合もプラント側の広報は欺瞞だと、気が付いていたはずだ。

それを訂正しなかったということは、多分、こちら側の非道をより喧伝するために、地球市民というか世論を確実に反プラント、反コーディネイターにまとめるために、あえて、その欺瞞を鵜呑みに

して見せたということだろうか？

本当のところはわからないが、あってもおかしいことではないはずだ。

「……ラウ、他に、何かないか？」

「そうだな。……他には、このグングニールなる代物が面白い」

「へぇ、どんなモノ？」

「強力なＥＭＰ（Ｅｌｅｃｔｏ　Ｍａｇｎｅｔｉｃ　Ｐｕｌｓｅ）……強力な電磁パルスを発生させて、周囲の精密機器を破壊することを目的としているモノのようだ」

「……結構、使えそうだな」

「ああ、現代において、精密機器を使わぬものは少ないからな」

そら、精密機器がないからって、人力というか珠算で計算して動かす範囲を決めたり、某船長のロボットみたいにレバー二本でＭＳを動かすなんて、想像したく……いや、レバー二本で操縦できるのは逆に凄いか。

……。

しかし、グングニール……対精密機器兵器がオペレーション・ウロボロス関連の資料にあったことを考えると、元々、マスドライバー破壊のために考案されていたみたいだな。

……なら、これも使えるな。

「おい、ユウキ」

「……」

「ユウキっ！」

「……むむっ、きたぞっ！　なにかがっ！　こみあげてきたぁぁっ！」

……それ、鼻血じゃないか？

いやいや、突っ込みは置いておいて、俺はソファから立ち上がって逆立ちしているユウキの元へ赴き、片方だけ脇腹を突く。

「ぬぉうっふぅっ！！」

ユウキは変な声をあげると、バランスを崩して盛大に倒れた。

「な、なにをするかっ、ラインブルグっ！　もう少しで……、もう少しでっ、あの華麗な扉が開くところだったというのにっ！」

どこの扉だよ……。

「いや、そんなことよりも、ユウキに聞きたいことがあってな」

「……なんだ？」

「プラント防衛隊は、キャニス……Ｍ６６のミサイルをどれぐらい抱えている？」

「Ｄ装に関しては、基本的に我々は使わないからな、かなりの在庫があるだろう」

「それ、処分する気はないか？」

「む、何か思いついたのか？」

「ああ、思いついた」

起き上がるユウキに手を貸しながら、答える。

採用されるかはわからんが、言うだけ言ってみてもいいだろうさ。

……さて、幸せな悩みでお疲れの委員長を起こして、俺の考えを聞いてもらいしょう。

49　精神を砕くもの　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記修正。

50　精神を砕くもの　4

小さく鼾を立てて眠っていたザラ委員長を揺すり起こして、再び話し合いの態勢に戻ると、早速、俺が考えた次善の策を披露する運びとなった。

「さて、聞かせてもらおうか、若造」
「ええ、ある程度はまとめたので、使えるかどうかを判断してください」

俺の言葉に委員長は一つ頷いて見せたので、語を繋ぐ。

「では、俺が考えた次善の策……といいますか、オペレーション・スピリットブレイクのリスク低減のために、これまでのオペレーション・ウロボロスを付け加えたいのです」
「……詳しく話せ」

委員長の言葉に従い、一つ息継ぎをして、更に話を進める。

「地球連合軍総司令部があるアラスカに強襲制圧を仕掛けるという今回の作戦は、戦力として地上軍の大部分を使うことから、自然と大きな賭けになります。もちろん、成功すればそれはそれでいいですが、戦力を喪失して失敗した場合は、間違いなく、ザフト地上軍は各地で連合軍に巻き返されてしまいます。結果、発生した連合軍の余剰戦力が宇宙に回されてしまい、現在の宇宙勢力図もザフト……プラント不利へと傾き始めていくでしょう。加えて、これまでザフトのアドバンテージだったＭＳに関しても、連合が既に開発に成

功している以上は量産されるのも時間の問題ですし、最早、ザフト有利の根拠も帳消しにされたも同然です。そして、戦争というものが、多少の質の差は数で補えるという非情な理で成り立っている以上、人員が少ないザフト……人口が少ないプラントの負けは必至です」

委員長は気難しい顔をしているが、何も言わない所を見ると、どうやら、このことに関しては冷静に認識しているようだ。

「なので、次善策の目的は、地上の形勢が即、宇宙の情勢に反映されないようにするため、また、戦力回復及び防衛体制の立て直しを図るための時間稼ぎに主眼を置きます。となりますと、これまで通り、オペレーション・ウロボロスにあるように、マスドライバーの破壊、或いは、制圧による地球への戦力封じ込めが最も有効であると考えます」

説明を終え、再度、一息を入れて、最後の作戦案を口にする。

「よって、先の作戦に本命と次善との組み合わせを行い、アラスカ及びパナマへの同時強襲降下を提案します」

「アラスカとパナマを同時攻略か……」

「ええ、どうせやるなら、徹底的にやりましょう」

ザラ委員長は腕組みをすると、眉間の皺を深くして口を開く。

「若造……、興味深くはあるが、それを為すだけの戦力はないぞ？」

「その戦力不足を補うために、軌道上から両拠点に対する大規模な爆撃を行い、強襲降下を支援したいと考えます」

「む……できるのか？」

「……あれだけの数のニュートロンジャマー発生装置を地球に落と

せたんですから、軌道爆撃ぐらいは実施できるはずです」

突入する位置と角度を計算すれば、どこから撃てばいいかを絞り込むぐらいは簡単だろう。

「それらが迎撃される可能性があるはずだが？」

「一回当たりの投下量を多くして断続的に行えば、迎撃対処能力なんてものは簡単に飽和するもんですよ。ついでに言えば、軌道上からの観測によって、どこに迎撃ベースがあるかの判別もできますから、あらかじめ海洋部隊に先に進出させておいて、迎撃ベースの座標位置を軌道上から送ったり、レーザー誘導でもって、巡航ミサイルで攻撃させるのも手です。そうやって対空砲火を地道に潰していけば、自然、降下部隊の支援にもなります」

「……なるほどな」

委員長が考え込んだのを受けて、今度はユウキが口を開いた。

「先にＭ６６の在庫があるかを聞いたのは、それが理由か」

「ああ、拠点攻撃用のＭ６６なんて殆ど使い所がない代物なんだからさ、一掃するつもりで撃ち込めばいいんだよ。あれは爆弾と違って、加速するから、一層、迎撃が難しくなるだろうしな」

「確かに、な」

「後は……降下用カプセルに爆弾をタップリ載せておいて、わざと迎撃させて、カプセルを破壊させて爆弾を広範囲に撒き散らせるなんて方法も面白いと思わないか？」

「アイン、それだと迎撃を受けた際に、中の爆弾も爆発する可能性も高いと思うが？」

「そこは……プラント驚異の技術力というか、技術陣に、なんとか頑張って考えてもらおうよ」

いやいや、ラウさん、呆れた顔をしないでよ。

「広範囲に撒き散らすのも手だと思うんだけどなぁ」

「確かに、できればよいが……」

「うーん、衝撃を感じた瞬間に、カプセルを分解させるとか？」

「それでは、下手をすれば、大気圏で爆発する」

むむむ、ナニカホウホウハナイモノカ？

いかに上手く、爆弾を撒き散らせるかについて考えていたら、ザラ委員長が黙考やめて、顔を上げた。

「若造」

「はい？」

「戦力はどのように分ける？」

うーん、戦力の分配か。

「降下する戦力は……六百機を越えるのか、……なら、アラスカに八割、パナマに二割、ですかね？」

「……その戦力で、要塞化が進んでいるパナマが落ちるのか？」

「さっき聞いた関連資料にあったグングニールなるものが、スペック通りの性能を発揮すれば、これで十分のはずです」

「……グングニールか。確かに、あれが期待通りの効果を発揮すれば、マスドライバーを破壊できるだろうが……、貴様はパナマの制圧を考えていないのだな？」

「ええ、パナマの地理的要件……大西洋連邦本国から近いことを考えると制圧して確保しても、維持するのが難しいですからね。なので、パナマに降下する部隊はグングニールの降下地点及び起動までの確保を主目的とします。後は、本命のアラスカ降下を支援する位

の気持ちで囮役……他の拠点を狙うような動きを見せて、敵の注意を少しでも向けさせるのが役割と心得させた方がいいでしょう。……要するに、パナマに関しては、通り魔的に刺して、さっさと逃げ出すのが一番ということです」

あれだ、前世で読んだ某漫画に出ていた主人公的な助平野郎がやっていたように、蝶のように舞い、蜂のように刺し、Ｇのように逃げるんだ。

「で、このパナマ攻撃作戦を作戦内容的に、ブリッツブレイク【Ｂｌｉｔｚ（電撃）　Ｂｒｅａｋ（破壊する）】とでも名付ければ、俺が幸せになります」

俺の物言いに委員長が珍しく苦笑を浮かべ、ラウとユウキも失笑気味だ。

べ、別に、命名することに味を占めたわけじゃないからな！

勘違いするなよっ！

……。

はい、息を抜くための冗談的思考もほどほどにして……。

「……表立っては、オペレーション・ウロボロスを強化するとでも銘打ち、このブリッツブレイクをスピリットブレイクとして周知させ、本来のスピリットブレイク……アラスカへの強襲作戦はギリギリまで秘匿して、情報漏洩を少しでも防ぎます。それと、作戦開始前に目標変更すると混乱が発生するのが普通ですから、予め、パナマからアラスカへの突入軌道の変更期間も作戦に組み込んでおきましょう。作戦を指揮するザフト上層部には、直前の変更は作戦を秘

匿するための欺瞞工作だと伝えておけば、混乱は最小限に押さえ込めるはずです。また、この欺瞞工作は情報漏洩の防止以外にも、連合軍の地上戦力を引き摺り回せるなんて、利点も考えられます。何しろ、地球の重力の大きさが異なる地上と宇宙とでは部隊を移動させる時間の掛かりようが違いますから、連合軍がこちらの軌道変更を知って、降下強襲に備えて集結させた部隊を、パナマからアラスカへと移動させて再配置させるにしても、かなりの時間が掛かるはずです」

実際には、軌道上に部隊が残っているから、部隊を移動させるかはわからないがな……。

「ふむ、相手を引き摺り回すことができれば最良だな……。では、軌道爆撃の実施に関しては？」

「アラスカの基地は地下にあるために、主要施設への直接的な破壊効果はあまり期待できませんが、広範囲に広がっている対空迎撃ベースを潰すことは可能です。よって、それらを炙り出して始末するために数を、パナマは目標であるマスドライバーが見えていますから集中的に狙うために質を、それぞれ重視して実施すればいいと思います。……本当は、アラスカへの爆撃をパナマ降下の支援のためのハラスメント攻撃とで……んんっ？」

ハラスメント攻撃に見せかけるってことなら、こんな方法はどうだろうか？

「どうした？」

「いえ、どうせなら、作戦実施に至るまでの期間中、アラスカに定期的な軌道爆撃を行えばいいかな、と思いまして……」

「……その利点は？」

「地球連合軍に対する政治的な圧力」

「本拠地……総司令部への攻撃を許すとなると、地球連合軍が弱体化しているように、理事国の政治家や世論が考える、というわけか？」

「はい。広報や外交を上手く使えば、連合構成国の結束や市民と軍の協力関係に少しは皹が入るかもしれませんし、軍事的にも作戦立案のための、アラスカ基地の防空能力の確認や対空迎撃ベースの破壊や位置確認もできるでしょう。それに、後の作戦前に行う本格的な爆撃で必要になる、大量の大気圏突破用の断熱材と爆弾やミサイルといったものをフル稼働で生産する理由付けにもできますから、防諜面でも大作戦の予兆を隠せる良い隠れ蓑になると思います」

「ふむ、なるほどな」

これを先にするだけで、作戦時の軌道爆撃や地上……海上支援で強襲降下するよりも、降下部隊の被害が抑えられるはずだ。

「定期的な爆撃の期間は？」

「出来うる限り早く開始して、定期的に行われる爆撃が、一種のパフォーマンス的な攻撃である事を連合に誤認させるために、一定のリズムでやりましょう。三日に一度、或いは、四日に一度、という具合に」

「ふむ。では、本格的な爆撃の実施は？」

「……アラスカには定期爆撃状態を作戦発動ぎりぎりまで維持しつつ、その後はそれまでに判明した迎撃ベースを狙うつもりで仕掛けましょう。パナマに対しては、スピリットブレイクの開始一週間前から始めて、徹底的に、地表を更地にする位のつもりで叩きましょう。上手くマスドライバーに命中すれば、降下する必要もなくなる可能性も出てきますから」

「なるほどな。……む、そういえば、機動艦隊に爆撃用の艦艇はあるのか？」

「そこは降下カプセル輸送艦なり通常型輸送艦なりを流用したらい

いのでは？　ミサイルや爆弾の投下ベースとするためのミサイル発射管や爆弾投下用リニアレールぐらいなら、簡単な改装で付けられるはずです」
「……評議会やザフト司令部への作戦の説明時期は？」
「諜報員の摘発が終わってからがいいですね。それで情報漏洩の危険も減ります」

……うーん、こんなもんかね？

「これが貴様が考える作戦か？」
「ええ、今言ったのが、今ある情報で考え付いた作戦の概要です。実際に可能かどうかは検証してみないとわかりませんがね」
「いや、中々に興味深い作戦だと感じた。検討させてみよう」

えっ、ほんと？

なら、採用されたらボーナスくださいっ！

なんて言いたい所だけど、ザラ委員長の持つ雰囲気が真剣だから、流石に言えないっ！

「まぁ、俺が言ったのはあくまで概要ですから、実際の作戦立案については、俺よりも、もっと頭の良い奴に……例えば、ユウキなんかにやらせれば、より洗練された、良いものができるはずですよ」
「……ラインブルグ、お前は私を過労死させるつもりか？」

ふふふ、頑強に出来ているコーディネイターはそう簡単に過労死なんてしないさ。

「えー、だってー、俺はこれから三ヶ月位はー、通商破壊任務に出

るしー、ラウはラウでー、足つきの追撃任務があるだろうしー、ここにいる三人でー、一番ー、手が空いているのはー、ユウキぐらいしかいないじゃんかー」

「ぐぅっ、わ、私は、今、この時ほど、防衛隊に所属していた事が恨めしいと思ったことはないっ！」

「ふふん、重要拠点の防衛隊に配属された自らの優秀さを呪うがいいさ」

アプリリウス市の防衛ＭＳ隊長なんて、エリート中のエリートですよ？

「さて、委員長、今日の用件はこれでお終いですか？」

「ああ、こちらの用件は終わりだ」

「では、解散ということで？」

「よろしい、今日は三人共、ご苦労だったな」

「いえいえ、今後、何か重要な用件がある時は、全て、ユウキに申し付けてくださいな」

ここは、一層、ユウキをザラ委員長に売り込むチャンスだ。

流石に、これ以上、黒服さん達にれん……げふげふ……わざわざ、宇宙港まで御足労を頂くのも心苦しいからな。

「何しろ、ユウキは俺達の同期主席ですから、非常に優秀な奴だということは証明済みですので、委員長のご期待に応えることは間違い無しです」

うん？

ラウさんや、何をこっそり笑っているのかな？

「……ラインブルグ」
「何だ、ユウキ？　今、お前の売り込みで忙しいから、後にしてくれ」
「……確か、お前は今日から、一週間の特別休暇だったな？」
「えっ？　そうだけど、それが何か、って？」

えっ？

ユウキ君、なに、俺の服の襟首を持ってんの？

「私は、使えるものは何でも使うべきだということを、とある人物の行動を見て学んでいる」
「えーと？」
「……ラインブルグ、手伝ってもらうぞ？」

な、なにーーーーーー！

「ちょ、ちょっと待て、俺、休暇！」
「ラインブルグ……私は君の戦隊が少し、休み過ぎだと思うのだが？」
「そ、それは関係ないだろう！　今回はご褒美！」

あっ、待て、引っ張るなっ！

「仮に褒美だとしても、管理職に休暇は存在しない」
「うそっ！　そんなこと、あるわけないぞっ！」
「現に私には、これカラキュウカガナイデハナイカ」

ぎゃーっ！　いつか見た憶えがある暗黒神がっ、降臨なされてい

るっ！

「た、助けてくれ、ラウ」

「……すまぬが、今回の休暇、私も少々、親類……知り合いに用があってな」

「い、委員長っ！」

「ふんっ、過労で倒れたら、慰労金ぐらいは出してやる」

ちょっ！

み、味方はいないのかっ！

ひ、秘書さんって、ああ、露骨に目を逸らされたっ！

黒服さん達はっ、不自然なまでに明後日の方向に視線を向けているっ！

ああ、……嗚呼っ！

だ、誰かっ！

き、機械仕掛けの神様っ、ヘルーーーーープっ！

……。

「……サッサトアルケ、ラインブルグ」

……現実って、いっつも、非情だよねぇ。

「キリキリト、ハタラカセルカラ、カクゴシテオケ」

凹（おう）、グッバイ、マイ休暇っ！

うぅ、折角、溜まっていた平積みを崩そうと思ってたのに……。

50　精神を砕くもの　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　表記修正。

51　暗礁宙域の魔物　1

2月23日。

特別休暇を終えた戦隊は、今度こそ本来の任務を遂行するために、L1の恒常拠点である世界樹の種を目指して、アプリリウス軍事衛星港を出港した。一週間振りに顔を合わせた皆の顔色は、休暇を大いに満喫して心身のリフレッシュをしたらしく、とても良い色艶をしているが、俺は逆にやつれ疲れ果てて、顔色も土気色をしていると思う。

何しろ休暇の大半を、諜報員摘発に関わる保安局の面子とユウキとの会合設定から始まって、オペレーション・スピリットブレイクの立案に必要な各種資料や最新情報を収集するためにデータベースと睨めっこしたり、投下する爆弾やミサイル、海洋部隊が使う巡航ミサイル等の種類の策定、軌道爆撃における一日の基本投下量の設定及び爆撃投下全体量の計算、定期軌道爆撃の概要やプラント防衛隊の在庫ミサイル輸送計画の原案作成、大気圏突破用断熱材やミサイル及び爆弾の生産量調整及び備蓄計画の立案と散々に、そう散々に、ユウキの野郎に扱き使われたのだ。

ほんとに、俺が休暇だろうと遠慮無しに……。

まったく……ユウキは酷い奴だ、鬼だ、悪魔だ、にげられない暗黒神だっ！

……はぁ、俺も以前、因果応報ってことを、学んだはずなのに、

ほんとに、引き際を誤ったもんだよ。

とにかく、ユウキの手伝いの為に臨時休暇のほとんどが潰れてしまい、ミーアのご機嫌取りが大変だったことを言っておきたい。

本当に、地球から入ってくる食料が減って、食品価格が高騰し始めている中、お菓子だなんて贅沢品を大量に献上するために、どれだけ財布が軽くなったことか……。

まぁ、それで、休暇が終わって送り出してくれる時には機嫌を直して、……寂しさと不安からか、無理をしているのがわかる”ぎこちない”ものだったけど、笑顔で送り出してくれたから、いいんだけどね。

◇　◇　◇

「それはまた、今の状況だと、財布に大打撃だねぇ」

「いえ、根は素直で良い子ですから、多少の我が侭を叶えるぐらいは、かまわないんですよ」

「はは、そうなのかい？」

「ええ、それに、普段から独りで寂しい思いをしているのに、しっかりと留守番をしてくれてますからね、それのご褒美も兼ねてます。……本人には、言ってませんけどね」

「……ラインブルグ君、ずるい大人、してるじゃないの」

エルステッドの艦橋で艦長シートの脇に立った俺は、ゴートン艦長と先の休暇中の災難について、詳細をぼかしながら、話をしている。

まぁ、こうやって戦隊の責任者が揃ってのんびりと世間話をしていられる程に、Ｌ１に向かう行程は順調そのもので、最大の脅威がある月方面にも怪しい動きは見られないということだ。
なので、艦橋も通常態勢で運営されており、アーサーやベルナールといった面々も非直で休んでいる状態だったりする。

……休める時は休んでおかないと、今の俺みたいになっちゃうからねぇ。

そんな愚痴はさておいて、ゴートン艦長が再び口を開いたので、会話を続けることにする。

「今の話でも実感できたけど、近頃の食料関連の物価高は憂慮すべきことだね。低所得層は、かなり生活が苦しくなってるはずだよ」
「ええ、本当に。……ここ最近の急激な悪化は、当初予定よりも地球から食糧を確保できなくて、食糧備蓄量の調整に失敗したのが原因だそうです」

パンが手に入り辛いなら、代わりのお菓子はもっと手に入り辛いのが、今のプラントの現状。

いや、まぁ、実際のところ、ある所にはあるという話らしいが……、どうせ、外からの来訪者にプラントはこんなに素晴らしい所なんデスヨ、なんて具合に見せるだけの表立(胡散臭い)った場所に集めていたり、四重顎になる位に丸々と肥太った豚……じゃなかった、”働かない”ザフト上層部や高所得層の腹に収まっているんだろうさ。

「でも、食糧プラントは全力で稼動している状況なんだよね？」
「ええ、全力で稼動しているようですが、実際生産量は完全配給制に移行して、ようやくプラント全人口が飢えそうで飢えない、ギリ

ギリのラインだそうです。無論、戦時体制じゃなくて、通常体制での話です。……ユニウス・セブンが破壊された影響は意外と大きいみたいですよ」

ちなみに、昨今のプラント食糧事情は、日頃からミーアがお世話になっているザラ夫人に、通信で御礼の挨拶をした時の世間話の一つとして、教えてもらいました。

「やっぱり、地球での食糧確保失敗は、ニュートロンジャマーの影響で地球の農業生産量が大きく落ちたのと、全世界規模で運輸と流通が麻痺したのが響いてるってことかねぇ」

「ええ、そうでしょうね。それに、連合側メディアが流している情報からプロパガンダ分を割り引いても、地球では億単位の餓死者や凍死者が出ている計算になります」

今、俺が言ったのは希望的観測で、恐らく報道されている数字、今現在で七億という数字は、本当の数字である可能性が高い。

そして、まだ増えて行く可能性も……。

人類史に間違いなく残るであろう、重大な戦争犯罪に加担した事実が、俺の両肩に重く圧し掛かってくるが、これは背負うべき業なのだと考え直して、表情には出さないように注意する。

「……この原因を為したプラントへの怨みは、地球市民の空腹や悲哀と一緒に、一生記憶されますよ」

「その上、自分達が引き起こした災禍の影響で自分の所の市民も空腹になるんだから、まったく、様がないよね」

「ほんとですよ」

肩を竦めて見せた艦長に同意を示すべく頷いた後、更に思考を進める。

コーディネイターって、一般には頭が良いって言われているけど、どう考えても、プラントのコーディネイターは、無謀なフリーフォールと呼べる第一次ビクトリア攻略作戦や後先考えてないニュートロンジャマー発生装置の無差別散布、未遂に終わったがL4コロニー群への攻撃計画、野蛮としか言いようがないビクトリアでの捕虜虐殺、と、色々と考えなしに、動き過ぎだと思う。

……。

むぅ、改めて、こう、考えてみると、所詮、コーディネイターってのは、ちょっと潜在能力が引き出し易いだけの、ただの人間に過ぎないということが、嫌でも、よくわかるな。

コーディネイターとはナチュラルの……人類の新種ではなく、突然変異的な亜種に過ぎない、なんてプラントのコーディネイター優越主義者が憤慨しそうなことを考えていたら、艦長が話を振ってきた。

「……話は変わるけど、地球に降りた新型戦艦……例の足つきの話は聞いたかい？」

「”砂漠の虎”なんて不可思議な生物の渾名を持つエースが、足つき相手に奮闘しているって話ですか？」

「ぷっ、……ラインブルグ君、そんな失礼なこと、他所で言っちゃ駄目だよ？」

「……噴出した艦長も結構、失礼だと思いますが？」

でも、砂漠に虎はいなかったはず、だよなぁ？

「やれやれ、同じ歳だと言うのに、トライン君と違って、ラインブルグ君は手強いねぇ」
「アーサーは素直ですから、あれはあれでいいと思いますけど？」
「違いない。……俺達みたいに捻じ曲がったら、えらいことだよ」
「へそ曲がりのアーサーなんて、想像できませんよ。今でも十分に個性的なんですから、それを潰すなんてもったいないです」
「うん、このまま育ってくれると、面白いんだけどねぇ」

なんか、二人してアーサーを馬鹿にしているみたいに聞こえるかもしれないが、これは親愛表現であって、実際のアーサーは初めて会った時に比べれば、段違いにしっかりしてきている。

「いや、脱線してしまったな。……足つきが運用している連合のMS、地上戦に特化したバクゥからなる部隊を退けたって話を聞いているんだけど、これは、相当に手強くなっているってことかい？」
「おそらくは、パイロットと足つきの指揮官が経験を積んだ結果でしょうね。もちろん、バクゥが装備している武器とPS装甲の相性もあるでしょうが、パイロット自身やそれを支えるベースが凄腕でないと、単機で複数機を破るなんてことは、まずは不可能です」
「やれやれ、やっかいな相手だね」
「ええ、足つきの追撃任務を受けているクルーゼ隊が落としてくれることを祈りますよ、俺は……」

本当に、頼むぞ、ラウ。

「しかし、連合のMSか……直に出てくるんだろうね、戦場に」
「それは間違いなく」
「はぁ、その時に備えて、戦術の再検討をしないと駄目だねぇ」
「特に艦が狙われた場合、どうするかを考えないと……」

ＭＳ隊から戦隊の直掩に一小隊は最低でも回さないと、死角をカバーできないだろうなぁ。

「それは、まぁ、おいおい、担当者を集めて、皆で考えて行こうよ」

「ええ、苦労は分かち合うべきですから、そうしましょう」

ふと艦橋のメインモニターを見ると、世界樹の種が隠されている、Ｌ１宙域の暗礁ともいえるデブリの吹き溜まり地帯を捉えていた。

「そろそろ、Ｌ１も連合に狙われますかね？」

「うーん、流石に連合も、ザフトの艦艇がＬ１に多数出入りしていることを確認しているだろうし、そろそろ、何らかの形でちょっかいを出してきても、不思議じゃないね」

「……ドンパチは、できるだけ避けたいなぁ」

そんな俺の願いを嘲笑うかのように、当直管制官が、こちらを振り仰いで大声をあげた。

「艦長っ！　月軌道に多数の熱源を探知っ！　数は、徐々に増えて、直に２０を超えますっ！」

「……だってさ」

「……俺、呪われてるんかなぁ」

……まぁ、ダース単位以上で人を殺しているから、呪われていても仕方がないな。

「艦長、とりあえず、戦隊に第一種警戒態勢を発令してください」

「了解。……総員、第一種警戒態勢を発令。後、ハンゼンにも発令を伝えて」

「アイ、サー、第一種警戒態勢を発令します！」
「ハンゼンへ一種警戒の発令、伝えました！」

艦内に当直員の返事を上回る音で、第一種警戒態勢を知らせるアラートが鳴り響き、その耳障りな音が、ますます、俺の気分を滅入らせてくれる。艦長シートの背凭れに片手を置いて項垂れながら落ち込んでいると、非直の連中が次々に艦橋に入ってきた。

「艦長、何がっ！」
「はいはい、トライン班長、落ち着いて、ちゃんと説明するから」
「……すいません」

艦長に窘められるアーサーを横目に、ベルナールが自分の席に滑り込んで、機器を次々に弄って状況の確認をしている。

うん、ベルナールの動きは、もう、明らかにベテランだよねぇ。

そんな感慨を持って、俄かに慌ただしくなった艦橋を眺めていると、アーサーと艦長の会話が耳に届いた。

「……月軌道上に、多数の熱源ですか？」
「ああ、おそらく、数から考えて、艦隊規模の出撃だろうね」
「世界樹の種やプラントは、このことに気付いているでしょうか？」
「……君はどう思う？」
「気付いていてもいなくても、連合軍艦隊出撃の報は送るべきだと思います」
「うん。そうだね」

艦長がこちらに目配せしたので頷いておく。俺もアーサーの意見と同意見だ。

「なら、トライン班長、世界樹の種とプラントに連合軍艦隊出撃との信号を送ってちょうだいな」
「アイ、艦長」
アーサーが信号を送るために、通信管制官の元に跳ぶのを見届けると、艦長が呟く。
「地球と月のやり取りを妨害している部隊とそれを支えるＬ１の拠点が、いい加減、目障りになって、連合軍も重い腰をあげたのかねぇ」
「でも、それにしては、数が少ないです」
現状、ザフトの一個艦隊規模を確実に潰すのに、連合軍艦隊は最低でも三個は必要なはずだ。
「なら、威力偵察か……」
「あるいは、こっちの拠点には少数の戦力しかいないとでも考えて、侮っているか、ですね」
……さらに深く読めば、ＭＳの運用を開始した、なんてことも考えられるな。
「艦長。考えたくはないですが、連合がＭＳの運用を開始した事も視野に入れて動いた方がいいかもしれません」
「……うん、可能性に入れておこうか」
「とはいっても、敵艦隊の目的地がわからないと、対応のしようが……」
ないと続けようとしたら、索敵担当やＣＩＣとの直通回線で話を

していたらしいアーサーが声をあげた。

「艦長、敵艦隊の予想航路が出ました」
「早いね。それで、どこが最有力だって？」
「はい、最有力はＬ１、次点候補にＬ４です」

ふむ、ここはＬ１に進撃してくると考えて動いた方がいいか。俺の思考を読んだのかはわからないが、艦長が決断を促してくる。

「……隊長、どうします？」
「Ｌ１の暗礁宙域に入った後、戦隊の存在を隠蔽、世界樹の種防衛隊や駐留艦隊と連絡をとりあって、連携しましょう」
「了解。戦隊はこれよりＬ１の暗礁宙域に移動する。トライン班長、ハンゼンにも」
「アイ、サー」

この戦い、できれば、こちらが一方的に叩くような展開に持っていって、戦争終了までは連合に、Ｌ１へ手出しさせないようにしたいものだな。

さて、世界樹の種と連絡を取って、罠の構築状況の確認とどういう作戦で動くか検討するとしようか。

51　暗礁宙域の魔物　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

52　暗礁宙域の魔物　2

世界樹の種に連合軍艦隊発見の信号を送ったら、折り返しで援軍要請と共に通信を求める信号が届いた。信号に応えて俺が通信に出ると、相手は顔馴染でもある世界樹の種の防衛隊長兼務司令だった。

その小柄だが厳の如き身体をしている司令の話では、暗礁宙域外縁で訓練を行っていた駐留艦隊が、Ｌ１外縁部で敵を迎え撃つために既に進出しているとのことだった。付け加えれば、敵に関する情報収集と援軍の到着を待つべきだと主張する司令の帰還要請を振り切っての迎撃行動らしい。

……とりあえず、一言、言わせてもらいたい。

「連中は、なんで、そんなにヤル気満々なんだよっ！」

何をとち狂ってやがるっ、駐留艦隊の連中はっ！

大量のトラップが構築してあって、かつ、地の利もある暗礁宙域に引き摺り込まずに、しかも、援軍も期待できる状況なのに単独で攻撃を仕掛けるだなんて、馬鹿げている！

分艦隊規模で連合軍の一個艦隊とぶつかれば、勝っても負けても、こちらが受ける被害が大きくなるに決まっているだろう！

こっちの戦力は連合と違って、早々に回復できるもんじゃないん

だぞっ！

味方の向こう見ずな行動に低く唸ってしまうが、黙って俺と司令のやり取りを見ていたゴートン艦長に、視線と咳払いで窘められてしまった。

……ああ、しまったな。

ここは皆の目がある艦橋である上、まだ通信中だった。

「……申し訳ない、リューベック司令。少し、取り乱しました」

「いや、ラインブルグ隊長が怒るのも無理はない。彼らは自らの有利を放棄しているんだからな」

通信相手である、世界樹の種司令、ロベルト・リューベックが実年齢以上に皺が刻まれた顔に柔和な表情を浮かべて、俺の謝罪を受け止めてくれた。

リューベック司令はザラ委員長と同じ世代の人物で、何気にザフトの前身である、黄道同盟時代から参加している古株だそうだ。若くて血気盛んだった頃は、ザラ委員長とコーディネイターの権利獲得までの方法論で対立し、よくＮＯＨＡＮＡ式の話し合いをした仲らしい。

先の任務期間の合間にも世界樹の種で休んだ時には、現在に至るまでの様々な話……闘争初期の内部での軋轢や武器や物資の密輸話に表立たない裏で行われていた闘争での苦労話、現状における海賊と殆ど変わらない傍若無人なジャンク屋への対応での苦慮、思わず吐気を催すような洒落にならないプラントの現実、”一族”や”ターミナル”だなんてフィクションに出てきそうな謎めいた組織のこ

と、ジョージ・グレンが目指した理想からコーディネイター選民思想を生み出してしまった自分達の功罪、といった具合に実に色々な話を聞かせてもらったものだ。

それでも現在に至るまで、正面から世界の悲しい現実と自分達の罪業を見据えても、尚、瞳の輝きを失わない本当に精神が強い人であり、俺もこんな風に歳を取りたい、なんて思わせてくれる人物の一人だ。

……その人物の前で、流石に、これ以上の醜態は晒せないよなぁ。

「司令、駐留艦隊と連合軍艦隊の衝突は、すぐにでも始まりそうですか？」

「連合軍はマスドライバーを使用して月軌道に上がったようだから、直に始まる可能性が高いだろう」

どう対応する？

そんな俺の迷いを見透かしたように、リューベック司令が言葉を続けた。

「今からでは恐らく戦闘に間に合わないだろう。よって、ラインブルグ戦隊には駐留艦隊の後詰に入って欲しい」

「……構いませんが、地の利を考えると暗礁から出たくないですね」

「それでも構わない。ただ、最悪の事態に備えるべきだと、私は考えている」

「確かに……」

司令が言う最悪の事態に備えるとは、分艦隊が大いに敗れて壊走した時に被害を最小限に抑えたい、ということだろう。

「了解です。戦隊は暗礁帯外縁部に移動し、戦闘の推移を見て、相応に行動します」
「よろしく頼む。防衛隊は、何時でも罠を起動させられるようにしておく」
「わかりました。もしもの時は、合図します」
「ああ、了解した。後、君等が罠に引っ掛からないように、最新の分布図も送っておく」
「助かります」

俺と司令は互いに敬礼を施し、通信を切った。

「艦長、命令変更です。戦隊を暗礁帯の月寄り外縁部に移動させてください」
「了解です」

ゴートン艦長が戦隊を件の場所に移動させるようにアーサーに指示を出すと、再び艦橋内が慌ただしくなった。

……俺もパイロットスーツに着替えるか。

なんてことを考えていたら、艦長が苦笑しながら囁いてきた。

「いやはや、今回の駐留艦隊の行動は、まさにザフト精神を溢れんばかりに体現しているよね」
「無駄に溢れすぎですよ、本当に。……無駄な犠牲が出るだけです」
「……士官学校で、何を教えてるんだろうね？」
「詳しくは知りませんが、ザフト万歳の精神主義でも横行しているんじゃないですか？」

あっ、でも、白服は俺と同じ第一期生か、それ以前からザフトに所属している奴がなってるはずだよな？

でも、一期生で白服になった奴は、まだ少ないって聞いているし……となると、きっと、あれだな。

以前からザフトに所属している奴で、広報局の親玉と同じような輩が、駐留艦隊の司令をしているんだろう。

「……艦長、俺、パイロットスーツに着替えてきますから、戻ってくるまで任せます」

「了解」

ザフトって、能力主義を標榜している割には、政治結社時代のザフトから所属している奴が優遇されているみたいなんだよなぁ。

いや、リューベック司令みたいな人なら白服を纏っていても当然だと思えるんだけど、今日の駐留艦隊の司令や広報局のフク何とか局長みたいなのが白服だとは、普通、考えられないと思うんだ。

所詮、ザフトは国軍ではなく民兵組織であり、評議会を牛耳る独裁党の私兵に過ぎない、ということかなぁ。

そして、自身がその一員であるという事実に口元を歪めながら、俺はパイロットスーツに着替えるために隊長室へ向かうべく、艦橋を後に抜け出ていった。

◇　◇　◇

俺達が暗礁帯外縁部に到着した時には、世界樹の種駐留艦隊と連合艦隊との戦闘は終了していた。しかも、予想していた中でも最悪の方向、駐留艦隊の大敗という結果でだ。

その敗因となったのは、不幸中の幸いと言うべきか、量産されたＭＳではなく、現状の主力ＭＡであるメビウスが新しく機体下部に装備した小型ミサイルパック……パック一つに四発で左右の二パックずつで計十六発……の所為だった。

例え、精密誘導がほとんど効かなくても、一撃でＭＳを破壊できる火力を持つミサイルは恐ろしい兵器である。これとメビウスの数が合わさえれば、より手強い相手になるのも当然だと言えよう。

なんとなれば、昔からある通り、下手な鉄砲も数撃てば当たるもんだからな……。

現実に駐留艦隊は散々に叩かれたようで、所属していたＦＦＭ八隻の中、五隻が沈められており、ＭＳ隊も数を大きく減らしている。

とはいえ、外縁部に先行して進出し、偵察活動を行っていた複座型によると、連合軍艦隊も駐留艦隊との交戦でそれなりの打撃を受けており、追撃はＭＡに任せて、再編作業を行っているとのことだった。

よって、必死の抵抗を続けながら暗礁帯へと撤退してくる残存三艦と、それにハゲワシの如く群がっているメビウスを何とかすれば、仕切り直せると言えるだろう。

「ＭＳ隊は、味方艦の撤退を掩護する！　あくまでも撤退掩護だからな、敵は追い散らすだけでいい！　深追いは厳禁っ！　後、敵ＭＡは小型ミサイルを搭載しているらしいからな、今までと同じと考えるなよ！」

「マクスウェル小隊、了解しました！」
「デファン小隊、了解っす！」
「リー小隊、了解！」
「よしっ、全小隊、交戦を許可する！　行動に移れ！」
「「「了解！」」」

勝利して調子に乗っているであろう連合軍ＭＡ隊に不意打ちを仕掛けるべく、三つの小隊がそれぞれ編隊を組んで、デブリ帯から飛び出して行く。俺も、それを見届けた後、コンビを組んでいるレナに声をかけて、機を進ませる。

「レナ、複座型の様子はどうだ？」
「敵艦隊の座標位置の特定が終わって、今、戦隊に送ったそうです」
「そうか。なら、直に攻撃を仕掛けるな」

暗礁を構成するデブリに紛れたエルステッドとハンゼンはレールガンとミサイルでもって、敵艦隊の再編成を妨害するために、ハラスメント攻撃を仕掛けるのだ。多少遠くても、宇宙だと物を投げれば、基本、どこまでも初速のまま飛んで行くからな。

……まぁ、実際は色んな重力圏が影響して、一概には、そうだとは言えないんだけどね。

「うちの連中と撤退中の艦に進路に入らないように連絡は？」
「それは複座型とエルステッドが入れます」
「そうか。できれば、はや……」

急かそうと思ったら、砲弾とミサイルの予定進路が複座型から届いたよ。

あの二人も日々成長しているってことかぁ。

「よし、確認した。レナ、俺達は最後方で他の二隻を掩護しているＦＦＭを掩護するぞ」

「了解です」

背部のメインスラスターの推力を上げて一気に加速し、戦闘宙域に飛び込む。

「……爆装しているのが多いな」

「ええ、小型ミサイルを搭載しているのは少ないみたっ！　先輩、仰角三時方向っ！　例の小型ミサイル搭載型が三機接近中！」

「確認した。……これは、俺狙いかなぁ」

「その色、目立ちますもんねぇ」

なんせ、太陽光を受けると、燦然と輝いてしまう黄色ですから……。

「とりあえず、牽制射撃を入れた後、相手の射線に重ならないように突っ込んでみるか。レナ、掩護を頼むぞ」

「わかりました。先輩に当たるミサイルは全て撃ち落します」

「頼む」

実は、レナの射撃の腕は、既に俺を越えているんだよね……。

後輩に技量を抜かれたことを、嬉しく思えばいいのか、それとも悔しく思えばいいのか、そんな贅沢な悩みを懐きつつ、敵の推進方向へと牽制射撃を加えながら、接近を図る。

この俺の行動に対して、メビウスの小隊は編隊を崩さずに、回避

行動と機体備え付けの機銃を撃ち返して来る。

「レナ、ミサイルが来るぞ。お前も気をつけろよ？」

「きっと、先輩の方に、全弾、行きますよ」

オナゴならうれしいですが、ミサイルはちょっと……。

内心で馬鹿なことを考えていたら、三機から件の小型ミサイルが計２４発、俺を目掛けて発射された。

「まだ、これ位なら、対応できる数だな」

「油断大敵です。以前、先輩は、もう少しでミサイルの直撃を受けて死ぬ所だったんですよ？」

「……違いない。だから、レナ、本当に、頼りにしてるぞ？」

接近してくるミサイルと敵の射線を考えながら、また、周辺状況も確認しつつ、回避機動に入った。その間にも、行動の自由を確保するために、対応できる範囲でミサイルを機銃掃射する。また、後方のレナから的確な掩護射撃が入るから、それ程の脅威には感じない。

もっとも、これが小隊規模以上によるミサイル一斉射撃や、時間差を付けての断続的な射撃なら話は別だろうがな……。

ミサイルへの対応が終了すると動揺したのか、三機の中の一機が不用意な直進をした。そこにレナの射撃が入って落とされると、目に見えて他の二機の動きが逃げ腰に変化したのがわかった。

「……連中の動き、明らかに甘いよな」

「確かに、去年初めと比べれば、全然違います」

更にレナが射撃で二機を上手く追い詰めていくと、耐え切れなくなったのか、俄かに編隊が崩れた。片方の一機が旋回に入るのを見て、見越し射撃を加えると、そのメビウスは俺が張った弾幕に飛び込む形になり、一瞬で瞬く火球と化した。

それを待っていたかのようにレナの声も入ってきた。

「先輩、残りの一機も落しました」

「了解。ちょっと時間を食ったな、すぐに掩護に向かうぞ」

「了解」

戦域からどこかへと流れて行くメビウスの残骸をサブモニターの隅に認めながら、俺は殿を務めているＦＭの近くに陣取り、メビウスの動きを制限する。

ＦＭの側面を取ろうとする奴には牽制射撃を入れ、仰角から突入しようとする奴にはわざと機体を射線に飛び込ませることで気を逸らし、俯角方向から侵入しようとする奴には整備班が手慰みに作ったクラッカーをぶち当てて驚かし、俺に無謀な突進を仕掛けてくる奴には擦れ違い様に攻防盾のクローで推進部を切り裂いてみせる。

それでも中々撤退しないＭＡ隊にウンザリし始めた頃、連合軍艦隊が展開してる宙域付近で、突如として大きな火の玉が発生した。

理由に思い当たり、思わず口から考えが漏れてしまう。

「……もしかして、ハラスメントが命中したのか？」

そんな俺の独り言にも、レナが律儀に答えてくれた。

「先輩、複座型からの情報だと、ハンゼンの艦砲射撃が２５０ｍ級に命中して撃沈させたようです」
「おー、やるねぇ、ハンゼンの連中」

この一撃が契機になったのか、だいぶ撃ち減らしたＭＡ隊が引き揚げ始めた。こちらは追撃するつもりはないが、偽装撤退を警戒する必要があるので、去り行くスラスターを狙って一応の射撃を加えておく。

……うん、必死の回避を見るに、どうやら本当に撤退するようだな。

「先輩、敵ＭＡ部隊の撤退を確認しました。複座型から報告では、第二派は存在しないとのことです」
「了解。マクスウェル、デファン、リー、追撃は不要だ。それぞれの小隊の損害を報告しろ」
「マクスウェル小隊、ジョンソンが左手をやられました」
「こちらデファン小隊、損傷なしっす」
「……リー小隊、ルッツが右腕を、俺も左背部スラスターをやられました」

……むぅ、リー小隊には特別訓練を課す必要があるかもしれないな。

「わかった。リー、ルッツ、ジョンソンは先に艦に戻って修理を受けろ。リー小隊残りのリベラは、一時的にマクスウェル小隊に編入する」
「了解です」
「……了解」

リー小隊の二機とマクスウェル小隊の一機が、後方のデブリ帯へと下がって行く。残りの八機で、撤退する三艦をエスコートすることになるが、艦隊のＭＳも少数とはいえ存在しているし、何とかなるだろう。

「よし、マクスウェル小隊は周辺の警戒、デファン小隊は殿に付け。二次攻撃の可能性は低いが警戒に越したことはないからな」
「了解」
「絶対、先輩は人使いが荒いっすよ」
「……そうか、デファンは単独斥候が望みか」
「じょ、冗談っす！　デファン小隊、了解っす！」

常と変わらぬデファンの愚痴に、自然と口元に笑みが浮かぶ。

ああいうデファンの減らず口もといムードメイクも得がたい能力だと思いながら、状況の把握に努めていると、殿に位置するＦＭから連絡が入った。サブモニターに映ったのは、黒服を着た俺よりも少し年長だと思われる短髪の女性だった。

「【ＦＭ－１６７】ライプニッツの艦長タリア・グラディスです。ラインブルグ隊の撤退掩護、感謝します」
「いや、困った時はお互い様。殿はうちが務めますから、まずは撤退を完了させてください。二次攻撃は今の所ないと判断していますが、必ずしも、とは言い切れませんからね」
「……ラインブルグ隊長は、まだ、戦闘が続くとお考えで？」
「数に頼ったとはいえ、Ｌ４での戦闘以来の勝利です。勢いがあるうちに突っ掛かって来る可能性もあります」

俺の考えを瞬間吟味したのか、グラディス艦長は少し沈黙した後、

頷いた。

「わかりました。ですが、当艦以外の、損傷が酷い艦を戻したいのですが、よろしいですか？」

「いえ、三艦とも一度、世界樹の種に戻って、すぐに修理と補給を受けてください」

「ですが、それでは現状の戦力に不安が出るのでは？」

「その差を埋めるための暗礁帯と罠ですよ。それに、損傷したまま下手に戦闘に参加すると、不運な一撃を一発でも喰らえば、簡単に沈められてしまいます。今は、損傷艦に頼るほど追い詰められているとは考えていませんから、これ以上、無駄な犠牲を出す必要はありません」

確かにと頷いて見せたグラディス艦長は、酷い撤退戦の後だというのに、依然として冷静な判断力を保っているようだった。

……後は……一応の儀礼として、聞いておくか。

「……グラディス艦長、駐留艦隊の司令は？」

「……戦闘開始直後、先頭に位置していた旗艦に敵ＭＡの対艦ミサイルが殺到し、艦橋への直撃を受けて、戦死されました」

それはなんとも、無責任かつ派手な散り方だこと……。

「そうですか。なら、以後は、防衛隊のリューベック司令の指示に従ってください」

「了解しました」

グラディス艦長が敬礼と共にサブモニターから消えたのを受け、俺も残った連中に声をかける。

「よし、撤退完了まで後一息だ。もう少し、気を抜くなよ？」
「「「了解」」」

これで連中が満足して撤退してくれたら、楽なんだけどなぁ。
けど、勝利で勢いに乗っているであろう今の状況だと、ありえないか。

……。

まぁ、あちらが調子に乗って暗礁帯にまで突っ込んできたら、それならそれで、誠心誠意でもって、こちらもお持て成しさせてもらうだけだ。

二度とここに手を出したくないと、思う程にな……。

52　暗礁宙域の魔物　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

53　暗礁宙域の魔物　3

俺達が損傷艦を伴なって暗礁宙域内の世界樹の種に引きあげた後、案の定というか、連合軍艦隊がそろそろと前進し始めた。その宇宙艦艇として非常に遅い前進は、先の戦闘での終盤に逆撃を受けて被害を受けたことから、こちらからの襲撃を過度に警戒してのことだろう。

その連合軍艦隊の内実だが、定点観測衛星や偵察衛星から送られてくる情報から、増援が到着して増強艦隊規模……旗艦級である３００m級一を中心に、２５０m級が十、１５０m級が五十二に、再編された事が判明している。

おそらくは、月の連合軍司令部が勢いに乗っている今こそが攻め時とでも判断しての増強だろうが、この結果、Ｌ１における戦力比は、比較的、連合軍が有利な方向へと傾いている。

……けれども、そんなことは元から、戦争が本格的になる前から予想していたことであり、今更なことだ。

今の俺としては、艦艇増加によって開いた戦力差よりも、連合軍艦隊が暗礁帯内部まで侵入してくるか否か、侵入の際にどのような方法で入ってくるかに、注視している。

もしも、連合軍艦隊が暗礁帯に侵入せず、外縁部で包囲するような形で展開するならば、味方の援軍を待ってから攻撃を仕掛けようと考えている。

援軍到着までの待ち時間、俺達は連合軍艦隊を丸裸にするつもりで、艦艇の位置座標や数、その行動に関する情報を収集しておく。また、仮に連合軍が援軍を察知したりして、撤退をしようとしたり、援軍への迎撃を行おうとするならば、援軍が到着するまで様々な嫌がらせを行って、行動を妨害し、引き止めるつもりだ。

そして、援軍が到着したら、連合艦隊を暗礁帯に押し付ける形で逆包囲を仕掛けてもらう。この動きに対して、連合軍艦隊が反転してこちらの援軍に攻撃を仕掛けるようとするなら内側から大々的に攻撃を仕掛ければいいし、逆もまた然りだ。

後この時に、援軍側の包囲線にわざと隙間を作っておけば、連合軍の行動を誘導できる可能性もあるだろう。その脱出回廊に火線収束点を儲けることで、確実な撃破が望めるだろうから、上手く嵌れば、一方的な殲滅戦が展開できるはずだ。

逆に、暗礁帯内部に侵入しようとするならば、デブリに満ちた地の利を、ＭＳの優位性を生かして襲撃を仕掛けたり、世界樹の種防衛隊が真心を込めて構築した”お持て成しの精神”でもって、大いにお持て成ししたりして、自分達の勇敢な……もとい軽率な行動の対価として、後悔と恐怖をタップリと味わってもらい、最終的にはお命を代価に頂こうと考えている。

もっとも、先の二案はあくまでも連合軍が何も考えず、普通に侵入してきた場合だ。

別の可能性、……デブリを排除しながら侵入してきた場合、こちらは最大の危機を迎えるだろう。

何故なら、ビーム砲等でデブリが排除されるということは、こちらの罠も排除されるということにつながり、同時に、ＭＳの優位性である融通の利く運動性を活かせる環境が破壊されるということで

もあるからだ。

……少しでもこちらが苦労しなくていいように、できれば、連合軍艦隊の提督様には常識に囚われてもらって、極々普通に侵入してきて欲しいものだ。

◇　◇　◇

世界樹の種宇宙港のすぐ近くに設けられている防衛隊司令部で、うちの戦隊から、俺と半分以上は数合わせの意味合いでゴートン、フォルシウスの両艦長が、防衛隊から、リューベック司令とＭＳ隊の中隊長三人が顔をあわせ、今後の方策について話し合っている。

「では、ラインブルグ隊長は敵の行動に応じて、こちらも相応に動くべきだと考えるのだね？」

「はい、リューベック司令。現状、攻めるにしてもこちらの機動戦力が足りませんし、最新の情報では連合軍艦隊には増援が行われているようですから、先程、述べたように、ここは相手の出方を見て動くべきかと思います。作戦の細部は動きを見て、臨機応変に決めて行くしかないでしょう」

「ふむ、それならば、予想される敵の動きに合わせて、我々防衛隊が研究している迎撃パターンをベースに、幾つかの作戦を組み立てておくか。それらが出来上がり次第、そちらにも伝えよう」

「ええ、それはいいですね。是非、お願いします」

俺の賛同に一つ頷いたリューベック司令が、眉間に刻まれた皺を更に深く寄せて、司令部備え付けのモニターの一つを睨む。

そこに映し出されているのは、世界樹の種宇宙港と併設された簡易ドックの様子だった。

宇宙港内を修理資材や補給物資を運ぶランチが頻繁に行き来し、簡易ドックでは、ドック員らしきノーマルスーツやドックの備品であるプロトジンが損傷艦の周りを飛び回っていることから、先の戦闘で損傷した三艦が急ピッチで修理されていることが伺える。

こんな具合に、うちがちまちまと損傷艦を修理しているのに比べて、連合軍は凄いの一言だ。何しろ、月軌道上に先の戦闘で損失した分以上の補充艦艇を次々に打ち上げたんだからな。

……本当に、連合の強大な建艦能力と無限に思えてくる回復力って、恐ろしいよ。

まぁ、とはいえ……。

「……連合軍に増援が行われたとはいえ、実際に接近しつつある戦力が一個艦隊よりも少し多い規模で済んでいるのは幸いでした」

「そうだな。これも、ヤキン・ドゥーエの艦隊が全力出撃して、月方面を扼すように動くことで、月の連合軍に心理的な圧力と牽制を入れてくれているおかげだ」

「本当に、粋な支援ですよ。……これで援軍が到着すれば、言うこと無しです」

しかしながら、月に睨みを効かせている機動艦隊からの支援というか援軍は、これ以上、期待できないだろう。リューベック司令も俺と同じことを考えていたのか、こちらに来ることになった援軍について、話し始めた。

「機動艦隊が月を牽制している以上、そこからの援軍は期待できないだろうが、独立戦隊が、地球－Ｌ４間で通商破壊に動いていた二つとプラントから三つで、計五個が来てくれるから、ほぼ一個艦隊の戦力が増援に来ることになっている」

独立戦隊の方が、各要塞に駐留している正規艦隊よりも実戦の空気に馴染んでいるから、こちらも連携しやすいから助かる。

……にしても、連合軍の戦力再編が終了するのはもう少し先だと思っていたんだけどなぁ。

「しかし、連合軍も先の戦闘で一個艦隊を消耗しているはずなのに、こんなすぐに、よく出てくる気になりましたね」

「いや、だからこその攻勢だろう」

「……政治サイドからの圧力が掛かった？」

「私の推測だがな。……実際、連合の指導部から見れば、先の低軌道での大敗は、ビクトリア失陥と同じ位に気に食わないことだろう。小さなものでも良いから、市民に連合軍が健在だと示す、何らかの成果を上げるように、連合軍に相当の圧力を掛けたはずだ」

だが、と一旦言葉を切った、リューベック司令は更に言葉を続ける。

「そのような理由があったと仮定しても、私としては、今回の攻勢が通商破壊にあたる戦隊の交代時期と重なったのが気に掛かる」

「ここの情報が漏れていると？」

「その可能性が高い。……ここを利用しているジャンク屋あたりがうちの隊員から上手く聞き出して連合軍に売りつけたか、連合軍自身が観測と予測でもって周期を割り出したか、それとも、その他の要因があるのか……。とにかく、これへの対応も今後、考えていく

必要があるな」

拠点司令って仕事も大変だなぁ、なんてことを考えながらも、これだけのことを即座に考える事ができる人なのに、何故、中央にいないのか、不思議に思う。

以前、リューベック司令に関する情報をザフト内に広がっている様々な情報網から引き出してみたことがあるのだが、ここの司令に着任する以前は、ザフトでは驚く程に軽視されている後方支援関連……兵站部に回されていたらしく、少ない人員で効率的に兵站が機能するよう、ロジスティックスを構築していたそうだ。

そのことをそれとなく話題に出した時は、曰く、上に噛み付きすぎて後方で干されていたんだよ、って冗談めかして笑っていたが、……やっぱり、考え方が、プラント万歳！　ザフト最強！　コーディネイター最高！　って、能天気なお題目を信奉している、ザフト内の主流派から外れているってこともあるんだろうなぁ。

……だが、前線に立っていた俺達は、リューベック司令が後方に回されていたことを、ザフト上層部ではなく、悪戯な運命の女神と腐ることなく職務を果たしていた司令に感謝するべきだろう。

なんとなれば、俺よりも何気にザフトの内情に詳しいゴートン艦長がしてくれた補足によると、ザフトが戦争開始直後から、思い通りに、立て続けに、作戦を遂行できたのは、また、作戦中に部隊が飢える事も物資の欠乏にも悩まされることもなかったのは、リューベック司令が必要な所に必要なモノを必要な分だけ、途切らせることなく送り届け続けてくれたからだそうだ。

その、寝る前に必要なモノを注文しておいたら、起きた頃には届

いていた、だなんて、あまりにも水際立ったシステムを構築し、運用していたことから、兵站の大切さを知る有志……黒服連中が敬意を込めて、リューベック司令に渾名を付けたそうだ。

その名も、プラントの妖せ……げふげふん。

……司令は何とも自身のイメージに合わない可愛らしい渾名が嫌いだそうだから、取り合えずは、兵站王（仮）とでも言っておこうか。

と、とにかく、初期の攻勢を裏方で支え続けてくれた、最大の功労者なのだ。

……。

でも、もしも、この人が……お上にも臆することなく噛み付けるような、この人が、裏方ではなく中央に……上層部にいたら、クライン議長やザラ委員長を牽制して、四月馬鹿は起きなかったんじゃないだろうか？

……。

仮定の話は、考えれば考えるだけ、虚しくなってしまうだけなので、話を元に戻すべく口を開く。

「まぁ、リューベック司令、今後の対応については、後程……」

「おっと、そうだったな。……とにかく、今回に関しては援軍の目処は立った」

「ええ、後は、連合軍の動きがどう変化していくか、ですね。……できれば、援軍到着まで動きがない方がこちらとしては助かります」

そんな俺の考え方が気に食わなかったのか、或いは、防衛隊ではない余所者に会議の主導権を握られたのが嫌だったのか、ＭＳ中隊長の一人、大柄な東洋系の人物が語勢を荒げて食って掛ってきた。

「貴様っ！　そんな考え方でどうするっ！　例え、数で負けていようが、我々ザフトがナチュラル如きに負けることなどありえないっ！　だいたい、攻めずには戦いに勝てるわけがないだろう！」

……こいつは今までの話を聞いていたんだろうか？

そもそも、俺達が話し合っていたのは、どう動くべきかという作戦についてであって、そんな精神論は必要としていない。

何とかして欲しいと、リューベック司令に軽く目配せしてみる。

「では、スン隊長。君はどのようにするべきだと、考えるのだ？」

「もちろん、拠点戦力の全力でもって出撃し、ナチュラル共の艦隊を蹴散らすのですっ！」

いや、そんな自信満々に言わなくてもわかってるから、……どうやって？

まるで俺の意を汲んだかのようなタイミングで、リューベック司令がスンと言う名の中隊長に先を促した。

「……どのように？」

「我ら優良種たるコーディネイターによって構成されているザフトの前に敵はおりませんっ！　真正面からぶつかっても余裕で粉砕することができるでしょう！」

……なら、さっきの戦闘はどうなる？

「そんな当然のことさえも為しえない、先の駐留艦隊の、劣等種たるナチュラルに負けた、あの体たらくはっ、ほとほと情けないっ！　私が！　このスンが出ていればっ！　あのようなことには、決してならなかったでしょう！」

……あぁ、何か、頭痛がしてきた。

そんな、あんた一人が出て行っただけで、簡単に勝てるならさ、今頃、プラントは戦争に勝ってるよ。

そもそも、少数で多数を破るなんて考え方は、名声や賞賛を得たい夢想家や現実を知らない馬鹿が追い求めるもの、或いは、追い詰められた鼠が猫に噛み付くように、ある種、一か八かのような末期的なもの、……飾らずにいえば邪道であり、本来は、敵よりも多い数を揃えて叩き潰すことが基本なのだ。

今まで、戦力的に劣っているザフトが優勢だったのは、ニュートロンジャマーによる撹乱とそれの状況下で力を発揮できるＭＳというアドバンテージがあっただけのことであり、連合にＭＳの影が見られる以上は、今後、それも失われていくだろう。

そして、優位を失ったプラントは、地球連合の数の力の前に、確実に敗北する。

だからこそ、何とか”悲惨な結果”を迎える前に講和して、停戦か終戦に持ち込みたいのだ。

……なのに、こんな阿呆な了見を持った奴が白服を、……中隊長を務めている、だと？

ザフトというか、プラントのコーディネイターは、絶対に戦争を舐めてるよ。

「よろしい。ならば、スン隊長の部隊には、戦闘が発生した際には先陣を切ってもらう。……それでいいか？」

「はっ！　ありがとうございますっ！　このスンが見事に先陣を切り開いて見せましょう！」

おーおー、嬉しそうな顔をしちゃって、お前は先陣を切ることを喜ぶなんて、いつの時代の人間なんだ？

まったく、プラント社会というか行政局や保安局で鍛えられたポーカーフェイスがこれほどまでに役に立つとは思わなかったよ。そうじゃなかったら、今頃、何ともいえない表情に歪んでいたはずだ。

ちらりと隣に立つ二人の両艦長を見てみると、ゴートン艦長はいつもの茫洋とした表情を浮かべているし、フォルシウス艦長もいつも以上に慇懃な態度で感情を隠している。

うーん、ここらは流石は年の功といったところか……。

「ホワイト隊長とヴィレール隊長は、何かないかね？」

「俺もそれで良いと思う」

「ええ、私も特にありません」

……なんというか、リューベック司令の問いかけに対する残りの中隊長……俺と同年齢位の二人が返した投げやりな答えから、早く話を打ち切りたいって雰囲気が伝わってくるんだけど？

「では、基本的に、我々は援軍が到着するまで敵の動きに応ずる形で動くことにする。また、作戦の原案については、司令部で作成し、追って知らせる」
「ラインブルグ戦隊、了解しました」
「スン中隊、了解しましたっ！」
「ホワイト中隊、了解」
「ヴィレール中隊、了解です」

後は、ザフトお決まりの決め台詞を唱和して終わりだ。

一番声が大きかったのは、誰かはわかると思う。

……。

結局、例の大声が目立つ……ソン、だったかな？　……とにかく、あの中隊長はまともな作戦案を出すことはなかったし、どうやら、俺に反論したのは、注目を浴びたい、自己顕示がしたいだけだったようだな。

……はぁ、良い意見が出るかもしれない、だなんて、何気に期待していた俺が馬鹿だった。

53　暗礁宙域の魔物　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

５４　暗礁宙域の魔物　４

２月２４日。

デブリ帯外縁部までそろそろと動いていた連合軍艦隊が、覚悟を決めたように、これまでの動きとは一線を画する動きで暗礁宙域に侵入し始めた。

おそらくは、こちらに援軍が接近していることに気が付いて、進むか引くかの決断を……尻に火をつけられたか、或いは、Ｌ５外縁部で月を狙うような動きを見せているザフト艦隊が煩わしくなった月の司令部あたりから、政治サイドに言い訳が立つくらいに一当たりして、何らかの成果を出すように、また、こちらの戦力を測る生贄もとい威力偵察を実行しろとでも、命令が出たのだろう。

まぁ、その決断に至る時間が、僅か一日未満とはいえあったから、こちらの準備もそれなりにすることができた。

後、付け加えれば、連合軍艦隊が通常の侵入方法を取ったとわかった時、一つ、憂慮していた事がなくなって、ホッとしたものだ。

とはいえ、侵入してくるのは、３００ｍ級一、２５０ｍ級十、１５０ｍ級五十二からなる六十隻以上の艦艇を、一級の打撃力を有する艦隊であり、機動戦力であるＭＡも、先の逆撃の際に四十近くを落としたとはいえ、補充が為されている以上は、定数まで揃っていると考えた方が無難だろう。

侮ることができない戦力なのは確かだ。

対するこちらには、援軍の三個独立戦隊が到着しており、それぞ

れが、暗礁帯内に存在している大型デブリの陰に隠れて出番を待ち受けている。また、当然ながら、俺達の戦隊もまたデブリに紛れ込んで、作戦開始の時を待っている。

そして、肝心の作戦だが、連合軍艦隊の暗礁帯への侵入が確認されたため、防衛隊司令部が用意していた四つの作戦パターンの中からC案が採用された。

C案とは、敵艦隊がトラップゾーンの中程まで到達したら、対艦ミサイルや爆雷からなる罠を大々的に作動させて連合軍艦隊を混乱状態に陥れ、そこを正面から防衛隊のMS隊が、側面から駐留艦隊が艦砲とMS隊でもって攻撃を仕掛けるというものだった。

しかしながら、今回は駐留艦隊が消耗しているため、側面からの攻撃は、援軍の独立戦隊が一個戦隊ずつ、射線が重ならないようにしつつ、連合軍艦隊の仰俯角及び左右舷方向を担当することになっている。

というわけで、戦隊MS隊も出撃しており、連合軍艦隊がトラップゾーンに入るのを、今か今かと気忙しく待ちながら、デブリの陰に隠れて待機している。

無論、俺もいつものようにMS隊の隊長として乗機であるシグーで出張っているのだが……、色が色だけに目立つと不味いだろうということで、シゲさん達整備班が工夫して、着脱可能なカモフラージュ、デブリによる偽装を全身に貼り付けられている。

そんなカモフラージュ後の機体を見た戦隊員達からは、まるでデブリの塊が生き物のように蠢いて見えると非常に好評（？）だったのが、少し悲しかった。しかも、あまりの物珍しさからか、記念撮影をしていた主計班員に、隊長も一緒に写りませんか、後でお渡ししますよ、だなんてことを言われたくらいである。

蠢く謎の物体（笑）と化したシグーの中、その時の事を思い出し、所詮、俺はイロモノさだなんて、少々やさぐれた気分で、サブモニターに映った複座型の二人から連合軍艦隊の動向を聞いている。

「隊長、敵艦隊の先頭、１５０m級とMA部隊がトラップゾーンに入りました」

「他の戦隊や防衛隊への連絡は？」

「今、ロベルタが入れました」

「了解。……スタンフォード、フェスタ、今後もお前達が送る位置情報が頼りになるからな、しっかりと頼むぞ」

「わかりました」

「隊長、任せてください！」

相変わらず、スタンフォードはクールだし、フェスタは元気がいいねぇ。

そんなことを考えていたら、不意にフェスタが真剣な表情になって、世界樹の種で作戦を統括しているリューベック司令から俺宛に緊急で通信が入っていることを告げてきた。

「リューベック司令が緊急通信？」

「はい、至急とのことなので、すぐにリンクさせたいのですが、いいですか？」

「ああ、うん、いいよ」

フェスタの顔が消えて、リューベック司令の苦渋に満ちた、眉間の縦皺がこれでもかというくらいに深く刻まれた顔がサブモニターに現れた。その顔を見た瞬間、マズイ事態が起きていることを瞬時に悟らせてくれる。

「……すまない、ラインブルグ隊長」
「ちょ、……内容もなしに、いきなり謝罪ですか？」
「スンの中隊が勝手に持ち場を離れて、敵艦隊に向かっておる」
……はぁ？
「え、と、冗談、ですよね？」
「冗談ではないのだ、これが……、直情馬鹿だとはわかっていたが、ここまで考えなしだとは思ってもいなかった」
「も、もしかして、あれですか？　先陣を任せたって言われたから、勝手に先陣の意味を解釈して動いているってことですか？」
「……おそらくな」
えーと、こんなとき、どうすればいいか、わからないよ。
……とりあえず、笑えばいいのか？
……。
いやいや、笑えない冗談を考えている余裕はないって、俺っ！
「えー、あー、リューベック司令、……どうしましょう？」
「それを相談したいのだ」
「こちらの呼びかけには応答しないのですか？」
「返ってくるのは、奴の自信に満ちた勝手な言い分による自己正当化と高笑いだけだ」
なん……だと……？

自分が勝手に動くことで、作戦全体を破綻させ、味方を危険に晒す事を認識しないどころか、自己正当化をして、高笑いをしている、だと？

……。

いや、まぁ、俺の熱くなった感情は一時棚上げしてだな、この暴走は下手をすれば、今回の作戦で重要になる連携とタイミングに影響して、他の部隊にいらない被害が出てしまうぞ？

……。

でも、待てよ？

逆に考えると、味方との連携もなく単独で、何の考えもなく突撃して行くとなると、こちらが我慢さえすれば、当然、罠やこちらの動きを警戒しているであろう連合軍の油断を誘えるんではないだろうか？

つまりは、周辺への警戒を薄める良い餌に、囮になるかもしれない。

……。

馬鹿の中隊に所属している連中には悪いが、ここは冷徹に切り捨てて、捨て駒にした方がいいかもしれないな。

「リューベック司令、その連中を囮に使って、連合軍の油断を誘い、可能なら誘引させましょう。連合軍が件の中隊を包囲殲滅に、仕留めに掛かった所で予定位置よりもずれていても構わないから、罠を

発動させる。そこを、……連合軍が混乱した所を、一気に叩きませんか？」

「……最早、それしかないのか？」

「作戦開始までの後僅かな時間では他に考えつきませんし、もしも、ここで作戦を中止すれば、世界樹の種自体が危険にさらされます」

「そうか。……まさか、このような独断専行を許すことになるとは、やはり、これも階級制度がないことが原因なのだろうか？」

「殆どは、独断で動いた馬鹿が原因ですが、司令が言われたとおり、階級制度がないことが、それを助長させている面もあると思います」

前々から思っていたんだけど、ザフトの制服制度というか、階級制度がないのって、デメリットの方が多いと思うんだよね。

訓練所、……士官学校では、ザフトに階級制度がないことの理由として、コーディネイターである個々人が、それぞれ高度な判断力を持っているから大丈夫なんだ、なんて偉そうに説明していたけど、それは全員が全員、共通した認識を持っていて、かつ、それが徹底的に浸透していればの話だ。

そんなことを、気位の高くて自分こそが最高だなんてことを思っているのが多いコーディネイターが、できると思うか？

今みたいに、個々人の勝手な判断や暴走を許すに決まっているさ。

それにだ、そもそも、個々人が判断して為したことへの責任の所在が曖昧になり易いことも非常に問題だ。俺は、機会があれば、地上軍の連中に、ビクトリアでの捕虜虐殺の責任を誰が取るのか、是非とも聞いてみたい。

まぁ、実際に聞いたら、どうせ、碌な答えが返ってこないだろうがな……。

とにかく、俺は、絶対に、制服制度を廃止して、階級制度を導入すべきだと思う。

……。

いや、こんなことを考えている場合ではなかったな。

「リューベック司令、……このような無様な意見しか出せず、申し訳ありません」

「いや、スンの行動を、自制心の無さと自尊心の強さを読み切れなかった、私の責任だ。ラインブルグ隊長は気にする必要はない。……作戦の基本に変更はない。敵艦隊が”囮”を包囲殲滅或いは類する行動に出た際に、罠を発動させてから攻撃を仕掛けると、他の戦隊や中隊からの問い合わせがきた場合、伝えることにするよ」

見殺しにしろって非情な進言をしておいてなんだけどさ、その決断を下した責任を、切り捨てた命が散る責任を背負わなければならない、リューベック司令の苦悩に満ちる顔を見ていられないよ。

……本当に、居た堪れない。

そんな俺の苦境を救ってくれたのは、僚機として常時通信が接続されているレナからの悲鳴に似た報告だった。

「先輩っ！　ぼ、防衛隊が罠の作動前に攻撃を仕掛けましたっ！」

「わかった。……では、リューベック司令、罠の発動タイミングはお任せします」

「ああ、その後は君達に任せる」

「了解です」

リューベック司令との通信が切れて、サブモニターには、再びフェスタの顔が浮かび上がった。

「フェスタ」
「はい、隊長」
「他戦隊と、エルステッドとハンゼン、それに各ＭＳ小隊長に罠が発動するまでは、絶対に動くなと伝えてくれないか？　何が起きても、何を聞いても、どんなに動きたくなっても、罠が発動するまでは絶対に動くな、一部隊が仕掛けたのは相手の油断を誘う罠の一環、自ら志願しての”囮”だと、ラインブルグが言っている、ってな」
「……はい」
「頼む」

サブモニターの画面からフェスタ達が消えると、残りはレナだけだ。

「レナ」
「はい」
「今回は大物を狙う」
「……旗艦ですか？」
「ああ」

連合軍艦隊の要である旗艦を落して、指揮系統を更なる混乱に追い込む事が、味方の犠牲を減らすのに最も効果的だろう。

「わかりました。お供します」
「すまんな」
「いえ、先輩とコンビを組むんですから、それぐらいのことは簡単にこなしてみせますよ」

「ははっ、言うねぇ」

……さて、過ぎ去った時間は戻らないし、悔やむことは後でも出来る。

ここは為すべきことを為すことに、集中すべきだろう。

どのみち、暴走した輩は己が命で、作戦に参加した部隊を危険に晒した代償を払うんだからな。

「さぁ、同士達よっ！　今こそ、攻撃の時だっ！　私に続けっ！」

……その馬鹿が、通信系で咆えてやがる。

しかも、自己陶酔の極みと言っても良い位の興奮と充実感に満ちた声音だから、余計に、怒りがこみ上げてくる。

何が攻撃の時だ、何が私に続けだ、馬鹿野郎め……。

「さぁ、早くっ！　攻撃をっ！」

もしも、共用回線でなくオープン回線でほざいてやがったら、俺が直接引導を渡しているところだぞ。

「ど、どうしたのだっ！　何故、続かないっ！　同士達よっ！　私と共に敵を倒すのだっ！」

扇動染みた声に、もう一度、念のために、戦隊の通信系に命令を伝達しておく。

「各機、まだ、動くなよ。動くのは、罠が発動した後だ」
「で、ですが、隊長。味方が……、このままだと味方がやられます！　なのに、どうして、動かないんですかっ！」
「いいか、リー、あれは”囮”だ。ここで下手をすれば、作戦全体が崩れる。だから、……我慢しろ」
「しかしっ、あの勢いを利用すればっ！　流れはこちらに傾きますっ！　ここは臨機応変にっ！」
「そして、本来は無用の、必要以上の犠牲を生むのか？」
「ッ！　ど、どうして、隊長は……、そんなに……」

その後に、リーがどう続けようとしたのかはわからないが、おそらくは、俺を非難する内容だろうな。

……。

まぁ、何の因果か、部下の思いを封殺するのも仕事だし、仕方がない。

そんな言い訳を胸に、モニター内で繰り広げられる戦闘を見つめ続けた。

５４　暗礁宙域の魔物　４（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

55　暗礁宙域の魔物　5

「先輩、敵艦隊に突入した防衛隊が包囲されつつあります」
「ああ、それなりの規模のＭＳを一方的に叩ける滅多にないチャンスだからな、連中も気張るってもんだろうさ」

複座型が観測して、各々に配信してくれる戦場の映像には、十二機のＭＳが、ＭＡや１５０ｍ級から次々と放たれる小型ミサイルや２５０ｍ級のビーム砲、各艦の近接火砲に追い詰められていく姿が映し出されていた。

「レナ、辛いなら見なくてもいいぞ？」
「……いえ、確かに辛い光景ですが、敵の攻撃パターンや武装の確認ができますから見ますよ。それに、ここで目を逸らしたら、この映像を直視している複座型の二人に笑われます」
「そうか」

一機、また一機とＭＳが火線やミサイルに絡め取られて落とされるにつれて、通信系から援軍を求める悲鳴が増えてきている。

おそらく、この悲痛な声を聞いているのに手が出せない待機組は、さぞかし、気が滅入る、辛い思いをしていることだろう。

……。

だが、俺の心は、特に波立つ事もなく、平静そのものだ。

……どうやら俺は、人として、どこかが狂ってきているらしい。

以前からは考えられない程、人の死に無感動になりつつある自身に、一抹の不安と若干の恐怖を懐きながらも、一種の諦観を持って、所詮は見知らぬ他人の死だと嘯く理性の囁きに耳を傾けつつ、戦闘の推移と連合軍艦隊の動向を観察する。

「そろそろ、敵艦隊の位置がトラップゾーンの真ん中に入ります」

「ああ、頃合、だろうな」

……。

始まったか。

デブリに擬装されて、場に溶け込んでいた対艦ミサイルや爆雷が次々と起動され、暴走の果て、生餌と化していたＭＳ隊を追い詰めることに夢中になっていた連合軍艦隊に襲い掛かった。

罠で使用されている対艦ミサイルはＦＦＭに積まれているものと同じものだけに一撃の破壊力が大きく、１５０ｍ級に突き刺さると木っ端微塵に吹き飛ばした。また、爆雷も艦艇が接近すると起爆し、周辺に衝撃や破壊力のあるデブリを撒き散らして、大小、様々な被害を与えている。

見る間に連合軍艦隊の陣形が乱れ、混乱状態に陥っていくのが傍目にも良くわかった。

「よし、そろそろ罠もネタ切れだ。攻撃を開始するぞ」
「はい、複座型に伝えて、交戦開始を戦隊と各小隊に伝えます」
「頼む」

シグーが唯一装備できる対艦兵装であるＭ６８キャットゥス無反動砲を担ぎ、敵艦隊の中央に存在しているであろう、敵旗艦の位置を探る。

……捉えた。

艦隊を統括する立場上、陣形の内側にいただけあって、罠による直接的な被弾を免れているようだ。そのためか、敵の動きも旗艦周辺だけは、統制が取れているように見受けられる。

「先輩、戦隊と各小隊が交戦を開始しました。また、うち以外の全戦隊も攻撃に移るそうです」
「わかった、……俺達も仕掛けるぞ。目標は敵旗艦、狙う場所は以前にも話した通りだ」
「了解」

デブリの陰から飛び出させ、一路、敵艦隊へと向かって加速する。

メインモニター越しに戦域を見れば、敵艦隊外郭の艦艇は暗礁帯から、わらわらと沸いて出てきたＭＳや飛来する艦砲弾に対応できていない。
ＭＡも、暗礁帯というデブリが満ちている限定空間だけに機動を制限されており、ＭＳの突入を阻止できず、艦艇へ取り付かせることを許してしまっているようだ。

「敵が立ち直る前に、指揮系統に致命傷を与えたいもんだ」

「できますよ、先輩と私なら」
「おうおう、凄い自信だこと……。なら、そのレナの言葉を現実にしてみせないとな」

軽口でレナに応えた後、更に自機を加速させて、酷い混乱状態にある敵艦隊外郭部を突破し、比較的無傷の内郭部へと迫る。

途端に旗艦の護衛らしき一隻の２５０ｍ級と四隻の１５０ｍ級が、これ以上の侵入は許さないとばかりに突入コースを遮り、近接火砲やビーム砲を断続的に撃ってくる。

そうやって作られた時間に、敵旗艦は逆噴射を掛けながら、艦体を回転させて推進コースを暗礁帯から抜け出るように変更しつつあるようだった。

「やるな」
「はい、しっかりとした指揮系統ですね」
「ああ、それに中々の防御火線網だよ」

侵入が難しいからといって、こちらも手を拱いているままではいられない。

「レナ、目の前の２５０ｍ級の推進部を破壊できるか？」
「何とか、やってみせます」
「よし、なら、ある程度、こちらで敵の注意を……」
「先輩こそ、無茶をしすぎたら駄目ですよ？」

言い終わらないうちに当たり前のように反撃するんだから、レナもベテランだよねぇ。

「了解。俺はレナが攻撃に成功するまで、近接火砲でもちまちまと潰すさ」

レナと一端分かれて、敵艦橋を狙う素振りを見せつつ、近接防御砲の一つに無反動砲を撃ち込んで沈黙させる。

……。

えーと？

何か、おかしいな。

俺、えらい量の火砲に……、それこそ、別の２５０ｍ級や１５０ｍ級からも狙われているような気がするんだけど？

今回は派手な黄色を隠しているから、目立たってないはずなのに、不思議なこともあるもんだなぁ、と首を傾げながら、火線網に絡め取られないように細かく回避機動を行ったり、敵艦艇を背後にして仲間撃ちをさせようとしたりしていたら、レナから待望の連絡が入った。

「先輩、攻撃に成功しました。ついでに艦橋にも撃ち込んでおきましたよ」

「よくやった。……なぁ、レナ。なんか、俺、集中してっと、危ないなぁ、……俺、狙われてないか？」

「……そう言われてみれば、確かに、先輩を狙うように火線網が動いているような？」

俺の自意識過剰なら良かったのに……。

「なんで、こう、毎回毎回、狙われるんだ、俺？」
「えーと、たぶん、そのカモフラージュが悪いんじゃ？」

あれか、あの野郎、フザケタ格好をしやがって、俺達を舐めてるのか、って奴か？

「俺、泣いてもいいかな？」
「冗談を言ってる暇があったら、早く敵旗艦を狙いましょう」

うあっ、バッサリ切り捨てられた！

「はいはい、レナ様の言う通り、精々、働きますよ」
「何、やさぐれているんですか、もう。少しは真面目にやってください」
「いや、これぐらいの冗談は許してくれよ。……緊張しすぎると動きが直線的になるからさ」

何か、しっかり女房に言い訳している駄目亭主な気分だ。

「先輩はリラックスしすぎです」

そ、そんなことないよ？

一所懸命、文字通り、命が懸かっているんだから、冗談は口だけで、実際には真面目にやってるよ？

そんな趣旨を口に出そうとしたら、レナを狙うように、その背後へとするすると動いていた１５０ｍ級がいたので、ランチャー部に無反動砲を撃ち込んで誘爆を起こさせて、沈めておく。

「レナ、喋ってもいいけど、周囲の確認はしっかりしろよ？　油断駄目絶対駄目」
「う～、先輩がへらへら喋ってるから悪いんです」
はい、その通り。
「まぁ、その辺は、俺の僚機になった時点で諦めてくれ」
「……そうでした」
いや、そんなにすんなりと受け入れられるのもちょっと……。
そんな思いを胸に、二機して、ＭＳの背後に先程の攻撃で推進部を破壊した２５０ｍ級を背負うように動いて、敵からの攻撃を躊躇させつつ、周辺の敵目掛けて無反動砲を撃ち込む。結果、残る三隻の１５０ｍ級の中、一隻を沈め、二隻の推進部を破壊して航行不能にできたので、当面の脅威は去ったといえよう。
今度こそ、敵旗艦を狙いに動こうと考えていたら、レナの声が再び聞こえてきた。
「それで先輩、自分が集中的に狙われる可能性が高いのがわかっても……、それでも、まだ、旗艦を狙いに行くんですか？」
「ああ、もちろんだ」
戦闘が早く終われば、自然、犠牲も減るはずだからな。
「……をしなくても」
「どうした、レナ？」
「先輩、わざわざ危ない橋を渡らないで、他の人に任せませんか？」

……それは本当に、魅力的で誘惑に駆られる素敵な言葉だね。

「レナ」
「は、はい」
「そうしたいけどね、俺にも責任ってものがあるんだよ」

背負いたくなくても、背負わされたものでも、責任は責任。

「皆を危険な場所に引き込んでいる隊長がさ、一番の危険に飛び込まないで、誰が付いて来るんだ？」
「そ、そんな理屈っ！　さっき、高笑いしていた人と何ら変わらないじゃないですかっ！　それが通用するのは大昔のことでっ、今の時代には合わない、時代錯誤過ぎる考えですよっ！」

はは、さっきの高笑い野郎と変わらないか、これはまた、手厳しい。

けど、確かに、指揮官陣頭なんて、時代錯誤な上に馬鹿げているとは思う。

「レナ」
「……はい」
「俺はさ、一部隊を率いる隊長になったとはいえ、他のエリートさん達と違ってさ、所詮、元々が緑の、それも一介のＭＳ乗りの、三十にすら届かない若造だからな。自分の力を、自身の背中を、付いて来てくれる皆に見せないと駄目なんだよ」
「……先輩」

今、俺、格好いい事言ってる、だなんて、自分に酔っている気がしないでもないが……、これが偽りのない本心だ。

それに、これも感傷、……一種の自慰に過ぎないんだろうが、前線に立つ事で、自らの手が血に塗れていない等と言う幻想を懐く事もなくなるしな。

そういう意味では、時代錯誤は大いに結構なことだ。

……。

俺は他人を殺してでも自分が生き残りたい、ただの人に過ぎない。

でも、だからと言って、戦争だから仕方がない、という言葉を免罪符に、他人に死を強いた現実から目を背ける訳にもいかないし、その業罪は背負わないといけないものだろう。

そして、この背負うという言葉も言葉にするだけでは駄目で、俺が与えた死には……、俺が生き残った事に意味があったと、どんな小さな事でもいいから、何らかの行動を、何らかの足跡を残すように努力していかなければならないとも思う。

もっとも、その足跡を残す前に俺が死ぬことだってあるだろうし、それもまた、生命が次代へと紡がれていく中で、当然に起きる、一つの現実だとも言えるだろう。

……まぁ、所詮は、殺された側やその遺族から見れば、生者の傲慢や自己正当化以外の何物でもない考えだろうけどな。

「さて、レナ、こういう真面目な話はエルステッドに帰ってからでもできる。今は、為すべきことを為すぞ」

「……了解です」

「よし、行くぞ！」

「はいっ！」

２５０ｍ級の陰から飛び出して、旗艦直掩に当たる他の２５０ｍ級や１５０ｍ級の防御火線網を潜り抜けるべく、回避機動を取りながら転回を終え、加速し始めている３００ｍ級に向けて突入する。

敵の射線を絞らせないように、出来うる限り気紛れに動きを変化させるが、その度にかかるＧが身体を痛めつけてくれる。

「俺は、頭を、潰す！　レナは、射出口……いや、推進部を、狙えっ！」

「了解！」

いつの間にか射出口付近に増設されていた近接火砲群に無反動砲を撃ち込んで、少しでも自機の危険を減らしながら、できるかぎり旗艦に接近し、艦橋付近を目掛けて、無反動砲の残弾全てを撃ち尽くすまで砲撃を加える。

三発の中の一発が艦橋に命中して吹き飛ばし、合わせて周囲の敵の動きも俄かに乱れたっ！

「先輩、攻撃に成功しました！」

「先に離脱しろっ！　後方は俺が掩護する！」

「了解っ！」

レナの離脱支援のために、弾が無くなって用済みとなった無反動砲を至近の２５０ｍ級に投げつけて、また、カモフラージュ用のデブリを周辺へと撒き散らしながら脱装して、より目立つ機体色でもって、こちらに注意を引きつつ、腰部後方マウントに装備していた重突撃機銃に換装する。

瞬間、間があったが、ちゃんと擬装を解いた効果はあったようで、火砲群は離脱するレナを無視して、再び、俺を狙い始めた。

それらを回避しながら、今現在において、最も脅威である２５０m級ばかりに意識を向けていると、突然、足元の近接砲が旋回し始めたので、咄嗟に射撃を加えて沈黙させる。

残念な事に、どうやら、まだ旗艦は生きているようだ。

「あ～、艦橋を潰しただけじゃ、やっぱり、落しきれんか。……ここは、素直に逃げた方がいいな」

「先輩！　こっちはもう大丈夫ですっ！　支援しますから、早く離脱をっ！」

「了解、離脱する」

って、こりゃ、本格的に、落しにきてるな。

旗艦を攻撃した俺への復讐を果たすためか、火線が、最低でも十近くの艦艇の武装が俺を狙っている。しかも、確実に仕留められるようにか、わざわざ、御丁寧に逃げるべき穴まで用意してくれている位だ。

徐々に閉じつつある火線網を前に、取るべき道を考えてみる。

……。

ここは、天邪鬼的な行動で、翻弄するのが吉か？

「先輩っ！　何をっ！」

よって、気違い染みたように、最寄の２５０ｍ級の艦橋を掠めるような進路で逃げることにした。

俺の予想外な行動に戸惑ったのか、敵も後追い射撃になっているようなので、ついでに、こちらもお返しとして、艦橋付近を通過する際に機銃を撃ち込んでおく。

……でも、その２５０ｍ級を越えた先には、また、別の１５０ｍ級と２５０ｍ級が存在したりする。

こうも包囲されていると、結局は危ない状況が続いていることに変わりはないな。

「レナ、すまんが支援を頼む」
「先輩、あんな行動をとるなんて……、こっちは心臓が止るかと思いましたよ」

レナが無反動砲を、俺の進路近くの２５０ｍ級と１５０ｍ級に立て続けに撃って注意を引いてくれたので、こちらに向かう火線の量が大きく減り、その隙を突いて、機体を一気に加速させて内郭部から出ることができた。

……。

周囲にＭＳの姿が見え始めたことで危険地帯から遠ざかったと判断し、一息を入れながら、支援してくれたレナに感謝の言葉をかける。

「レナ、助かった、ありがとう」
「当然のことをしただけです。……けど、あんな機動はやめて下さ

い、本当に、心配したんですからね」

レナと言葉のやり取りをすることで心拍のクールダウンを行いながら、複座型から送られてくる情報……、把握しきれていない現状を確認するが、うちの戦隊から撃墜された奴は出ていないようだ。

「いや、いかにも逃げてくださいなんて、道を開けられると、明らかに何か狙ってるって疑わないか？」

「……普通の人なら、そんなことを考える余裕もなければ、断続的に撃ってくる敵に正面から突っ込むような度胸も、普通なら、そう、普通の人なら、絶対に、ありません」

がーん。

レナに、あんた、絶対に普通じゃないわ、変人よ、Ｈ・Ｅ・Ｎ・Ｚ・Ｉ・Ｎ、って言われた。

「……先輩？」

「うぅ、最初はあんなに愛くるしく、真っ白に素直だったレナが……、こんなにも黒く、人が悪くなるなんて……」

「そ、そんな風に私を染めたのはっ、誰の責任ですかっ！？」

誰だろう？

「もうっ！　いい加減、冗談はそれぐらいにしておいてくださいっ！　それよりも、複座型や戦隊からの情報だと、敵艦隊は撤退を開始しています」

「そりゃ、罠に嵌ったんだから、食い破るか逃げるかしかないだろうさ」

「……でも、こんなに一方的に叩ける展開に持っていけたのに、ど

うして、駐留艦隊は攻撃を仕掛けたんでしょうか？　最初からこうしておけば、かなり被害が少なくて済んだのに」

確かに、先の駐留艦隊がしたような正面から力と力のぶつかり合いは、一番最後の最終手段であって、そこに至るまでは、自分達が有利になるように知恵を、持てる能力の全てを尽くさないといけないと思う。

そもそも、俺達は知恵のある人なんだから、獣と同じような行動をしていたら、初めて道具を使用した、遠い御先祖に笑われるぞ。

「レナ、過ぎたことだ、割り切れ」
「ですが……」
「なら、今日の経験を糧にして、成長しよう。いかに犠牲を少なくするか、考え続けるんだ」

あ～、説教なんて、らしくないなぁ。

「とにかく今は、今後、敵が世界樹の種に手出しする気がなくなるように、叩けるだけ叩く」
「……そうですね、わかりました」
「よし。なら、味方の掩護に向かうぞ？」
「了解です」

後は、敵が、……連合軍が降伏するか壊滅するまで戦闘を続けるのみだが、勝敗が決まった以上、できれば早く終わって欲しいもんだ。

55　暗礁宙域の魔物　5（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

５６　加速する時、変化する潮　１

まずは、先のＬ１での戦闘の顛末だが……、司令系統に打撃を受けた連合軍艦隊は、指揮権の引継ぎを受けたらしい２５０ｍ級を中心に撤退を開始。当然、こちらも追撃を仕掛けたが、殿軍として残った３００ｍ級を中心とした前衛部隊と損傷艦が奮迅の働きともいえる組織的な抵抗を行い、結果、本隊の一部と後衛部隊の撤退を許すことになってしまった。

殿軍としてその場に留まった部隊は、俺達が出した二度の降伏勧告を拒否して全滅。残りの一艦になっても抗戦をやめないという、本当に、壮絶な最後だった。

この一連の戦闘で連合軍に与えた損害は、旗艦の３００ｍ級を始め、２５０ｍ級を六、１５０ｍ級を三十二を撃沈というかなりの戦果になった。からくも虎口から逃れることに成功した残存戦力は月のプトレマイオスへと撤退したことが確認されている。

一方、こちら側の被害であるが、最初に突っ掛かったＭＳ中隊が中隊長を含めて十機が撃墜されて壊滅した他は、防衛隊のＭＳが７機、独立戦隊のＭＳが５機程、落とされている。また、追撃に出た独立戦隊の艦艇がＭＡの逆撃を受けて、二隻のＦＭが中破ないし小破した位である。

うちの戦隊は追撃に参加しなかったので艦艇に被害は出なかったものの、リー小隊のリベラが胴体正面部に被弾し、本当に幸いなことに戦死こそ免れたが左腕を切断せざるを得ないという重傷を、同じ小隊のルッツもリベラを守るために機体に損傷を受けて、軽傷を負っている。

いつか、こういうことが起きると覚悟していたとはいえ、戦死していてもおかしくない大怪我だ、精神的に来るものがある。

……。

とにかく、連合軍艦隊の侵攻を退け、拠点である世界樹の種を守りきったザフトがＬ１宙域を維持することに成功した。

しばらくは、……駐留艦隊や防衛隊の戦力が回復するまでは、連合軍が手出ししてこないことを祈りたい。

◇　◇　◇

３月１日。

暗礁宙域の後始末をリューベック司令に、重傷者であるリベラをプラントに引き揚げる戦隊に委ね、俺達は本来の任務である通商破壊のために、地球－Ｌ４航路に出ることになった。

輸送船団か巡回艦隊が見つかるまで一種警戒態勢を発令しているのだが、どうにも動きを発見することができないので、隊長室で書類の決裁をしている。

それにしても、ここに至るまでに、なんだか、凄い遠回りをしてきた気がするのは気の所為だろか？

そんな疑問を同室で、秘書業務に当たってくれているレナに聞いてみたら、

「本来の任務以外に、ちょっかいを出してばかりいるからですよ」

という答えをもらった。

その、如何にも俺が悪いように聞こえる言い方に反論すべく、作成していたリベラやルッツの戦傷認定に関する書類や必要になるかもしれない除隊申請書を準備する手を休めて、口を動かす。

「いや、仕方がないだろう？　俺達が独立した権限を有した部隊である以上は、他と違って行動に融通が利くんだから、動かないといけない時に動かないと不味いだろう？」

「……はぁ、まるで私達って、便利屋ですよね」

「その通りだよ。独立戦隊なんてカッコいい名称が付いてるけど、俺達は態のいい便利屋さ」

苦笑と共に現実を話し、部隊責任者が記載しなければならない箇所に書き損じが無いか書類を見直してみる。

……うん、これでいいだろう。

後の怪我に関する詳細は、エヴァ先生にお願いして書いてもらって、と……、あ、そういえば、リベラが戦傷年金か何かもらえるかも調べておかないとな。

思い付いた勢いのまま、端末にザフトの福利厚生関連の情報を呼び出して調べようとしたら、レナが口を尖らせて珍しく不満を口にした。

「でも、何だか、ヤキンやボアズ、プラントの駐留艦隊と比べて、私達ばかり働いてませんか？」

「その分、長期休暇や特別休暇をもらってるだろう？」
「……実戦に参加した時の、危険の代償は？」
「実戦手当か特別危険手当がその都度、出ている……はず」
……でも、ちゃんと支払われているか、しっかりと給料明細を見ておかないとなぁ。

「レナ、お前、ちゃんと給料明細を見ているか？」
「見てますけど、その、納得がいかないというか……」
まぁ、確かに命の危険に晒される機会が他よりも多いかもしれない。

「だが、地上軍の連中に比べれば、テロや襲撃の危険がない、ゆっくりと休める安全な場所があるだけ、まだ、マシだろう？」
「……言われてみれば、そうですね。それに比べれば、まだマシですね」
ふふん、下には下がいることを認識させて、不満を逸らしてみました。

「……何か、先輩から邪まな気配が？」
「それは気の所為」
……女の勘って、時々、怖いよね。

「それで、リー小隊ですけど、補充はどうするんですか？」
「一応、補充に関する要望を国防事務局に入れておいたけど、おそらく、補充は次の長期休暇後だろうな」
「ああ、士官学校の卒業後ということですね？」

レナの答えに頷いて見せた後、話を続ける。

「そのあたりまでは、地上軍優先で補充が行われるだろうから、この任務中、リー小隊は二機連携で動かすしかない」

「私が入りましょうか？」

「それも考えたが、それだと、俺が単機になってしまって出撃ができなくなる。ついでに言うとな、俺はラウみたいなエースじゃないから、流石に、僚機もなしで戦場で生き残れるとは思わないよ」

最初は何とかなるかもしれないけど、乱戦になった途端に背後からズドンで終わりだよ。

「リー小隊の戦力が落ちる分はどうするんです？」

「相応の任務を与えればいいさ。通常なら複座型の護衛、戦闘なら遊撃あたりかな？　一応、リーの奴に二機連携の教本というか、昔、ラウやユウキと戦術の検討で使ったやつがあるから渡しておいた」

まったく、こんなことで二機連携の戦術研究が生きてくるとはねぇ。

「……先輩、そんなことをしてたんですか？」

「俺、普段はこんなんだけど、真面目にやるべきことはやってるつもりだよ？」

「いえ、普段からおちゃらけている先輩がさり気なく真面目なのは知っていましたが、ＭＳの戦術を検討しているとは思いませんでした」

「そりゃ、ＭＳが部隊運用され始めた黎明期から乗ってることになるからなぁ。教本には納得がいかない所が多かったから、自分達で色々と工夫をしていたんだよ」

あの頃は、……まだ戦争前で、Ｌ５宙域事変（仮）以前のＭＳ隊に所属していた頃は、結構、楽しかった。

本当に、ラウやユウキと一緒に、血と汗と涙に塗れながら、青春をやったもんだよなぁ。

主に俺が切欠を作って、ラウがそれに突っ込みを入れたり、騒ぎを煽ってみたりして、最後にユウキが俺への説教と事態の収拾及び責任を被る。

……あれ、俺やラウって、結構、酷い奴なのか？

己が為した過去の罪業を省みて、思わず、遠くを見つめてしまう。

「先輩？」

「……ん、あ、すまん。なんだ？」

「いえ、何か、口元が弛んでましたよ？」

おかしいな、俺、反省していたはずなのに……。

自身の思いと表情の不一致の原因を考えていたら、卓上端末から電子ブザー音が突然流れ出た。何事かと思って見てみると、執務室前の通路に面しているインターコム端末からの連絡だった。

「誰だ？」

「さぁ？」

とにかく出てみると、端末からリーの声が聞こえてくる。

「リー、どうした？」
「隊長、少し聞いていただきたいことが……」
……ふむ。
「わかった。ドアは開いているから、入れ」
「はい」
圧搾音と共にドアがスライドして、背中に自身の髪の毛の色に負けないくらいの黒い陰を背負い、顔色も優れないリーが入ってきた。
「先輩、私、飲み物を取ってきますね？」
「ああ、頼む」
気を利かせたレナが、俺に一言残すと主計班の牙城である食堂に赴くために、初めて会った時から少しだけ長くなったポニーを微かに揺らしながら、部屋を出て行った。
レナの後姿を見送り、ドアが再度スライドして閉まるのを確認して、俺は目前で直立するリーに問いかける。
「それで、聞いて欲しいことってのはなんだ？」
「俺を小隊長から外してください」
「……理由は？」
「俺は、マクスウェルやデファンと違って、小隊長みたいな役職は向いていません」
……向いていない、ね。
「リベラのことを気にしているのか？」

「それもあります。ですが、俺の小隊の被弾率が他の二つに比べて高いことを考えると……」
「まぁ、確かに被弾率が高いな」
「……はい」

どうしたものかなぁ。

「お前はリベラが重傷を負ったことを悔やんでいるのか？」
「……はい」
「その理由は？」
「それは……」

……まぁ、普通は即答できない、意地悪な質問だよ。

「色々とあるだろうな。その時の指揮や判断がどうだったか、通常時の訓練が適正で足りていたか、普段の意思疎通がちゃんとできていたか、一つ一つ挙げたらキリがないし、後から、あれができたかも、これができたかも、こうすれば、ああすれば、なんて考えるのが普通だと思う」
「……はい」
「後悔なんてもんは、万事を尽くしたと胸を張れない限り、……全てのできることをやり尽していない限り、生まれてくる。なら、リー、お前は後悔しないように、常に手を尽くしてきたと胸を張って、言えるか？」
「それは……」

俺、なんか、偉そうなことを言ってるけど、実際は、そうそう、後悔を持たないでいられるなんてことは、ないんだよなぁ。

まぁ、一応は、胸を張ってやり尽くしたって言えるように、常々、

努力しているつもりだけど、俺以上に努力している人から見れば、まだまだ全然足りてない！　だなんて、逆に説教を受けるだろう。

それでも、己の恥を忍んで追求するしかないあたり、嫌な仕事だよ。

「今の弱っているお前には酷かもしれんが、今までの結果とこれまでのお前の様子から考えると、お前が小隊に施してきた訓練は甘く、足りていなかったんだと思う」

「……はい」

「まぁ、それを放置していたというか、そのことに気が付けなかった俺も、ある意味、お前以上に、悪いんだけどな」

まったく、責任者の辛いところですよ、本当にね。

「とにかく、俺がお前に言いたいのは、今、懐いている後悔から、目を逸らして放置するようなことをせず、どれだけ苦しくても直視して、今後に活かしてみせろ、ってことだ。……ああ、それと、お前を小隊長から外すなんてことはできないからな」

「ですが……」

「実戦経験が豊富な奴を小隊長から外すなんて悠長なことを言っていられる程、戦力的にも国力的にも、ザフトやプラントに余裕は無いんだよ」

世の中はいつでも厳しいね。

「逃げるな、リー。リベラが重傷を負ったことから、自身の責任から逃げるな。逆に、今回のことを、今、お前が感じている後悔を糧として成長してみせろ。それが、リベラへの贖罪の一つになると思ってな」

「俺に……、平均よりも能力が下の俺に、成長なんて、できるんですか？」
「当然、できる。……お前は俺以上に、家族を失った悲しみや家族を殺した相手への憎しみを経験して、それを耐える辛さを、独り残った苦しみを、そして、それを耐えなければならない現実の理不尽さを知っているんだからな。多少の苦しみなんて屁でもないだろうし、後悔の重みを知った今なら、どんなことにでも立ち向かっていけるさ」

逆境はその人の精神が折れない限り、成長を促すからな。

「まぁ、悩んだら、エルステッドには俺以上に大人が、ゴートン艦長やシゲさんがいるんだから、相談すればいいよ」
「……はい」
「後、しっかりとルッツと、……どんなことでもいいから、話をしろよ？」
「はい。……隊長」
「ん？」
「今になって、俺を庇ってくれたアシムさんの気持ちが、……少しだけ、わかった気がします」

アシムの気持ち、か……。

「そうか。……なら、お前は、アシムのようにならないようにするんだぞ？　それが、生かしてもらったアシムへの感謝になると思え」
「……はい」

その後、リーは俺に一つ頭を下げると、執務室から去っていった。

……。

真面目な話って、特に説教染みたことだと、強烈に肩が凝るわぁ。

固まった筋肉を解すために立ち上がって背筋を伸ばしたり、肩や首を回していると、レナがドリンクパックを両手に持って帰ってきた。

「先輩、戻りました。これ、いつものです」

「ああ、ありがとう」

レナから、ＩＴＩＧＯオレのパックをもらい、一口、喉を潤す。

ああ、チープな甘味が……、いつものように、俺を癒してくれる。

「あれ、そういえば二つだけ？」

「はい？」

「いや、飲み物」

「ああ、途中でリーに会いましたから、リーの分は渡しておきました」

それはそれは、娘さん、しっかりしていらっしゃるのねぇ。

「リーの顔色、少し良くなってましたよ」

「その分、俺の顔色が悪くなってないか？」

「また……」

まぁ、冗談はほどほどにしておいて……。

「……あれ、なにか、少し、先輩の顔色、悪くなってるかも？」

「ちょっ、嘘だろ？」

「はい、嘘ですよ」

何やら、レナの奴、俺の反応を見て、とっても満足そうにしていますね。

お、おのれぃ、レナめ、やってくれるじゃないのっ！

「うぅ、あの初めて会った時の、何事にも素直で可愛らしかったレナは、いったい何処に……」

「……前も言いましたが、誰がこうしたと思っていやがりますか？」

えーと、レナさん、不穏な気配を出すのは閉鎖空間をより圧迫しますので、良くないと思うんですが？

「さ、さて、仕事仕事」

「……まったく、もう」

あれだ、後悔先に立たずだよ。

……。

でも、よくよく考えたら、戦時である以上は、俺達も何時、命を落としてもおかしくないんだよな。

……。

「レナ」

「……むぅ、何ですか？」

「プラントに帰ったら、また、飯でも食いに行くか？」

「……その前に、まだ、前の約束を果たしてもらってませんよ」

あっ、そういえば、そうだったな。

「はは、悪い悪い。次の休暇には連れて行くよ」

「……本当ですよ？」

「もちろん。……だから、お前もドジを踏むなよ？」

「あ、……せ、先輩こそ、無茶無謀は駄目ですからね」

「了解」

どうやら、俺の言葉の裏を読んで照れたのか、レナは俺に顔を見せないように１８０度回転するが、耳まで赤くなっているのがわかる。

そんな後輩の可愛い姿を堪能しつつ、戦隊で犠牲を出さないように、俺も持てる全てを使って努力していかないといけないな、なんてことを思った。

「じゃあ、先輩、次の食事には、前に食べた御寿司を三人前、お願いしますね」

「なん……だと……」

同時に、財布の中身も守る努力をしなければならなくなったのには、陰で泣くしかなかった。

５６　加速する時、変化する潮　１（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

57　加速する時、変化する潮　2

3月23日。
戦隊は二度目の出撃と連合軍輸送艦隊への攻撃を終えて、L1拠点、世界樹の種で休憩している。

この世界樹の種も運用が開始されて半年となり、拠点としての機能拡張が徐々に進んで、最初は四つの小さな箱型居住ブロックだけだった居住区画も直径三十メートルの円形チューブを一繋ぎにしたトーラス型コロニーになっている。
リューベック司令の話では、もう一つ同じサイズのトーラス型コロニーを建設し、今、稼動しているコロニーが回転している方向とは逆方向に回して、歳差運動を押さえ込む予定だとか、っていうか、既に建設が始まっているのが、宇宙港や居住区画の窓から見えたりする。

俺としては、稼動中のコロニーや生命維持関連装置が並ぶ中央基幹構造体に、建設資材等が衝突するだなんて致命的な重大事故が起きないよう、建設工事での安全管理をしっかりとやってくれさえすれば、特に言うことはないし、むしろ、この冷たい宇宙に人が住める空間が再び増えるという意味で、歓迎すべきことだと思う。

そんな訳で、現在における世界樹の種の構成は、旧世界樹時代の物を流用した、大型宇宙船舶が三十隻位は収容できる宇宙港と俺達がプラントから運んで来て組み立てた小型簡易港を改装した艦船修理用ドック、宇宙港の片隅に無法なジャンク屋を監視させるために設置されたジャンク屋ギルドの支部、居住区画となるコロニーの回

転軸と拠点全体の生命維持関連装置の収納スペースを兼ねた、宇宙港と居住区画とを連結する中央基幹構造体、回転させることで擬似重力を生み出す居住区画のトーラス型コロニーが一つ、同じく居住区画として建設中のトーラス型コロニーがもう一つということになる。

いや、拠点構築のために第一歩を踏み出した身としては、感慨深いよ。

……。

うん、初期段階だけとはいえ、コロニー建設に関わったからわかるけど、建造物というか物を創り出すのって、かなり長い時間と労力が掛かるんだよね。

けど、それを破壊するのは、ユニウス・セブンや世界樹崩壊の時からわかるように、一瞬で済んでしまう。

まぁ、何が言いたいかと言うと、物を創り上げるには時間と労力が掛かっているんだから、物を壊すことなんて簡単に出来てしまうんだから、もっと物を大切にしましょうってことだな。

いや、破壊者である軍人もどきの俺が言えた義理じゃないけどさ。

……。

にしても、創造と破壊の両方を担うなんて、俺も含めて、人間って、本当に矛盾した存在だよなぁ。

……いや、逆に、その破壊と創造の両方ができるから、ここまで

進化してきたのかもしれないか。

◇　◇　◇

居住区画の一角に滞在用の宿泊施設を用意してもらった俺達は、思い思いに一時の休息を楽しんでいる。

パイロット連中は趣味や賭け遊戯、自主訓練とそれぞれ自身がやりたいことをやっているし、艦の運営スタッフも気の抜けない役目から解放されて、大いにくつろいでいるようだ。

俺も重力がある居住区画での生活は、胃をゆっくりと休ませることができるだけに、ありがたい。

……いや、俺、基本的に胃が荒れていることが多いから、ほんとに助かるのよ。

なんとなれば、重力があるだけで、幾つかの薬、筋力低下や宇宙酔いを抑える薬を飲まないで済むから、かなり胃の負担が減るのだ。ついでに言えば、俺の健康を管理するエヴァ先生から説教を受けたり、不機嫌な顰め面を拝まなくて済むしねぇ……。

ああもう、ほんとに、この胃痛の日々から早く解放されたい。

そんな訳で、俺は少しでもリラックスするために、滞在者を心安らげる目的の他に、光合成で二酸化炭素から酸素を作り出す目的もある緑地区で、芝生の上に寝転がっている。

「いいんですよ、このラクス・クラインの歌～」

でもって、いつの間にか、フェスタが俺の傍で、ちょこんと座って自分の好きな歌手のセールスをしていたりもする。

「隊長～、もう、しっかりと聞いてくださいよ～」

「はいはい、フェスタはいい子だよなぁ～」

「えへへ……じゃなくて、もう、全然、聞いてないじゃないですか～」

んなこと言われてもなぁ。

「いや、フェスタには悪いがな、ぶっちゃけると、俺、そいつの歌、好きじゃないんだよ」

「えー、隊長、そいつとか、言っちゃ駄目だよ」

「いや、マジで。……何というか、ラクス・クラインの歌を聞いていたら、不思議と、こう、イラっ★、って、来るんだよ」

「う～、いい歌なのに……」

そんなことを言っても、元々、ザフトの広告塔なんてやってる時点で良いイメージを持っていないのに、聞けば聞くほど、何故かはわからないが、無性にこう、ムカムカっ、としてしまうから聞きたくないんだよなぁ。

「本当に、勧めてくれているフェスタには悪いが、それを聞いたことで、俺が不機嫌になって、八つ当たりされたら嫌だろう？」

「……隊長、そんなこと、しないもん」

「いやいや、俺も人間だから、不機嫌な時は、八つ当たりの一つや二つ……」

「あれ、先輩にロベルタ……、こんな所で何をしてるんですか？」

聞き慣れた声を聞いて、顔を上げるとレナとスタンフォードが立っていた。

「いや、俺は森林浴？」

「私は、たまたま隊長が芝生で寝転がっているのを見つけたから、お話でもしようと思って……」

「……はぁ、ロベルタ、隊長に迷惑をかけたら駄目よ」

「ぶー、ビアンカ、私は別に迷惑なんてかけてないよ～」

まぁ、確かにフェスタから発生する癒しな空気のお陰で気分は楽だけど、あの歌姫を勧めるのだけは勘弁だ。

「だって、隊長、ラクスの歌、好きじゃないって言うんだもん」

「えっ？　隊長、ラクス・クラインの歌、好きじゃないんですか？」

「……あ～、何ていうかな、歌を聞いていたら、こう、何故か、イライラしてくるんだよ」

「先輩、前から思ってましたが、ラクスの歌を嫌いだなんて、変わってますよね」

「うーん、皆がそうまで言うなら、そうなのかもしれないな」

つか、前から不思議に思ってたんだが、プラントでラクス・クラインの歌を嫌いな奴って、本当に少ないんだよ。

……。

まさか、洗脳ソングとかじゃないだろうな？

……って、ははっ、まさか、そんな荒唐無稽な、それこそフィクションみたいなこと、あるわけないよなぁ、うん。

「とにかく、フェスタ、ラクス・クラインの歌だけは勘弁してくれよ」
「う～、ほんとにいいのに……」
「ほらほら、ロベルタ、これ以上は迷惑をかけたら駄目」
「う～」

幼子のように拗ねた顔を見せるフェスタに癒しを感じていたら、アーサーがキョロキョロと誰かを探しながら、緑地区に入ってきた。

「おーい、アーサー、誰か探しているのか？」
「あっ、隊長。僕は隊長を探していたんですよ」
「……何か状況に変化か、誰かが問題でも起こしたのか？」
「あ、いえ、別に周辺状況や戦隊のことではないんです。ただ、隊長宛にプラント防衛隊のユウキ隊長から通信文が届きまして、それを届けに……」

……ユウキからの通信文か。

「それは今、何処に？」
「あ、これです」
「ああ、ありがとう。休みなのに、態々、こんな所まで済まなかったな、アーサー」
「いえ、かまいませんよ。では、僕はこれで……、失礼します」

何か用事でもあるのか、足早に去って行くアーサーを手を振って見送った後、通信文に目を通す。

『家に入り込んでいた害虫の駆除が終了したので、まずはその旨を報告する。以後の経過と効果の確認も継続して行っているから安心してほしい。後で、今後のスケジュールに関しての連絡を入れるが、関係者には、これから実施する計画も含めて、こちらで報告と説明をしておいた』

……は、ははははっ、ユウキの奴も、”遊び心”が出てきたねぇ。

「先輩の顔、あの時と同じ顔だ……」

「うわー、うわー、隊長って、こんな顔、するんだ」

「う、……な、なんだか、頬が熱くなってきた」

さて、これで、事が本格的に動き出すわけだが……、ここにいる俺には、何か協力出来るだろうか？

……。

例の作戦時の宇宙での戦力配置を想定してみると、月への牽制はプラントとヤキン・ドゥーエの艦隊が動けば成るはずだし、地球突入軌道の防衛と確保は、ボアズ駐留艦隊が四月から始める定期軌道爆撃の際にもやることになるだろうから、その頃には相当上手くなっているだろう。地球－Ｌ５の航路も、Ｌ１からの監視体制が整っている以上は、早期警戒態勢が確立していると言えるから何とでもなる。

となると、Ｌ４への牽制か？

……だが、俺が率いている戦力が戦隊規模である以上は、Ｌ４への牽制など不可能だ。差し詰め、地球－Ｌ４航路間に進出して、ミサイル攻撃を迎撃したり、Ｌ４駐留艦隊の動きを警戒する位が精一杯と言えるだろう。

でも、それだと、Ｌ４の艦隊が降下部隊に突入する可能性がなくならないよな。

……なら、リューベック司令にお願いして、駐留艦隊を動かしてもらう？

いや、ここが月に近い以上は、そう簡単に駐留艦隊を動かせないというか、動かそうとしても戦力回復も成っていないし、そもそも、ここを抜かれたら本末転倒だ。となると、独立戦隊同士で連携して、牽制するのが一番か？

……。

うちと同じく通商破壊任務に就いている独立戦隊は、任務体制の見直しを受けて、世界樹の種に休養や予備戦力として常駐する四個戦隊、航路に出て地球連合のスペースレーンに圧力を掛ける四個戦隊、プラントで長期休養や再編成、訓練している四個戦隊と、全部で十二個だ。

このうち、直接的に即応で動かせるのは、プラントにいる四個戦隊を除いた、八個戦隊って所か。

……ふむ、八個戦隊だと単純に戦力計算して、ＦＭが１６、ＭＳが９６、その半数でもＦＭが８、ＭＳが４８になるから、まぁ、

これだけあれば、十分、Ｌ４への早期警戒態勢を作れるだろう。

その際の全体指揮は、俺の胃のためにも、冷静な計算が出来る適当な誰か……、そうだな、一番の年長として、いつも独立戦隊群のまとめ役をしてくれている、ラブロフ隊長にでも押し付ければいいや。

……。

よし、俺もそれとなくリューベック司令にお願いしたりして、根回しに動いてみるか。

ふと、気がつくと、レナがフェスタの横に並んで座り込んでいた。

付け加えれば、スタンフォードも含めた三人共、若干顔が赤くなっているように見えなくもないが、……体調管理は大丈夫なんだろうか？

「三人とも、何だか熱そうに見えるけど、体調が悪かったり、発熱とかはしてないよな？」

「は、はい、大丈夫ですよ、ねぇ、ビアンカ？」

「え、ええ、私は、大丈夫です」

「は～、さっきまでの隊長の顔……、カッあいたっ！」

「ちょ、……レナか？」

一瞬過ぎて見えなかったが、レナがフェスタの頭を叩いたように見えた。

「う～、レナ先輩、急にひどいです」

「え、えと、何か、虫らしきものがいたから……」
「まぁ、緑地帯だから、居ても可笑しくは無いだろうが、ちょっと強く叩きすぎじゃないか？」

うんうん、と賛同するように頷くフェスタに、乾いた笑みを浮かべたレナが、ごめんねとの言葉と共に頭を下げて、落着である。

さて、もう少し休んでから、リューベック司令の所に行って、来るべき作戦のことを匂わせて、色々と協力をお願いするかな。

そんなことを考えていたら、スタンフォードが俺が持っている通信文を指差して、質問してきた。

「え、えーと、ラインブルグ隊長は、あのユウキ隊長とお知り合いなんですか？」
「ああ、どういう意味での、あの、なのかはわからんが、ユウキとは同期だぞ」
「ついでに言えば、クルーゼ隊長とも親しいですよね、先輩って……」
「えっ、そうなんですか？　隊長って、凄いんですね」

いや、知り合いが凄いだけで、俺も凄くなるという論理はおかしいと思う。

それを指摘しようと思ったら、フェスタも、じーっと、俺の手の中にある通信文と俺とを交互に見ながら、疑問を投げかけてきた。

「ん～、隊長、真剣に通信文を読んでましたけど、いったい何なんですか？」
「ん、これか？　ほれ、フェスタ、読んでみ」

「えっ、いいんですか？」
「ああ」

……まぁ、普通は読んでもわからんだろ。

「……害虫の駆除？」
「ああ、家の周囲に花壇がある関係かはわからんが、春になった所為か、我が家に地蟲が大量に沸いて出てきてなぁ。その駆除をユウキに頼んでおいたんだよ」
「でも、あんなに真剣に……」
「いや、家にはスタンフォード達よりも、三つぐらい年下の妹分が一人で留守番しているんで、大丈夫だったかな、ってちょっと気になったんだよ」
「……ああ、ミーアちゃんのことですねぇ」

えっ？　レナさんや、何故に、そんなに怖い雰囲気に？

「ん～？　後ろの関係者や今後の計画って言うのは？」
「それはご近所さんのことだよ。虫を駆除するって計画を前もって伝えておいたから、駆除の報告と、たぶん、虫の被害が広がっていないかを確かめるための、検査日の説明や打ち合わせってところだろう」
「あ、そういうことですか～」

そういうことにしておいてくださいな。

「でも、その花壇って、隊長が育ててるんですか？」
「あー、いや、死んだ母親が育てていたのを留守番してくれている妹分、ミーアって言うんだけど、この子が引き継いで育てているんだよ」

これは半分位は本当のことって、あらら、フェスタの奴、俺の母親が死んでいることを知ってしまって、落ち込んでしまったようだ。それに追い討ちをかけるようにスタンフォードがフェスタを叱責する。

「もう、ロベルタ。安易に人のプライベートに踏み込んだら駄目だって、前から言っておいたでしょう？」

「……うん。隊長、ごめんなさい」

「いい、気にするな、フェスタ。俺の母親が死んだのは、もう十年以上前のことだから、とっくに受け入れているよ」

つか、母が死んで、もう十五年位になるんだから、俺も歳も取るはずだよなぁ。

……って、空気が重くなったな。

「にしても、お前達さ、折角の休みだってのに、一人や二人ぐらい、遊びやデートに誘ってくれる男はいないのか？」

「先輩、それもプライベートなことですよ」

「いや、そう言われてもなぁ、こんだけ綺麗所が揃っているのに、声もかけられないのは、常識的に考えて、おかしいだろう？」

「あ、う、いえ、それはその……」

「えへへ、ビアンカ、私達、綺麗所だって！」

「う、うぅ、そんなこと、初めて男の人に言われた」

あ～、確かにスタンフォードは、どちらかというと、お姉様っ、なんて具合に、同性から言われて慕われそうなタイプだよなぁ。

で、レナは、何故に、身体を寒そうに摩っているのかな、かな？

「何でだろう、先輩に褒められたはずなのに、こう、鳥肌が立つのは……」

まったく、たまに褒めてやったって言うのに、失礼な反応なことで……。

「はいはい。で、それで、なんでなんだ？」

「え、えーとですね、実は、この前の特別休暇で艦を降りた直後に、ハンゼンのエンリケ班長とジェルマン班長が、私達三人に、あまりにもしつこく声をかけてきた上に、ロベルタに直接的にちょっかいを出そうとしたので……」

「レナ先輩とロベルタと私の三人でもって、手加減なしの打撃オンリーで……」

「はい！　立ち上がれないほどにのしました！」

「それ以来、我々にちょっかいを出すと言いますか、遊びに誘ってくれる男性隊員は……」

「うん、いないんだよねぇ」

「あはは、少し、やり過ぎてしまいました」

「……そうか、日頃の訓練が活きて、何よりだ」

やり過ぎのような気がしないでもないが、エンリケとジェルマンが男としてのマナー違反をしている以上は応報ってことかな？

「でも、もし隊長だったら、あんなことはしないで、遊びに行ったよね～、ビアンカ」

「そ、そうね、確かに、ラインブルグ隊長だったら、あんなことしないで、遊びに行ったわ」

えっ、そうなの？

……こ、これは、もしかして、で、伝説のモテ期が俺にもっ！！

「隊長って、お兄ちゃんって感じがして、ね～」

「ええ、私達、兄弟姉妹がいないから、憧れます」

うぅ、そうですか……。

「先輩、そんなに悲しい顔をしないで下さいよ。……居た堪れなくなります」

「でもさ、レナ、今の評価、女からすれば、どうなのよ？」

「さ、さて、私はサリアの所に行こうっと」

おぅい、俺の疑問は放置かよっ！

「あっ、私も行きます～」

「では、隊長、失礼します」

「あ、ああ、ゆっくり休めよ？」

フェスタが代表するように、元気良く返事をすると、三人揃って緑地区から去って行った。

はぁ、何だか、癒されたような傷ついたような、微妙な感覚だけが残ってるな。

……。

まぁ、こういう日もあるってことでいいか。

よし、俺ももう一休みした後、リューベック司令の所に行くとす

るかな。

以下、要らないかもしれないけど、ユウキからの通信文でのネタばれ？

・家＝最高評議会及び各委員会、又、それに属する議員や委員
・害虫＝諜報員等
・駆除＝摘発及び排除
・以後の経過と効果の確認＝監視下においた諜報員の動き
・スケジュール＝オペレーション・スピリットブレイク、ブリッ

ツブレイク関連の進捗状況
・関係者＝最高評議会議員
・これから実施する計画＝オペレーション・スピリットブレイク及びブリッツブレイク
・報告と説明＝諜報員の摘発と防諜強化及び機密保持の徹底

57　加速する時、変化する潮　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

58　加速する時、変化する潮　3

俺達の戦隊にというか、ザフト宇宙軍に存在する半数以上の独立戦隊に与えられている任務は、通商破壊、ひいては地球と月の航路を遮断することだ。

当初は、ザフトがＬ４宙域を確保していたから、連合軍は地球－月航路にＬ１宙域近くを通るものを使用していたため、輸送船団を潰すことも容易だった。

しかし、今年の一月の攻勢でＬ４宙域を連合軍に奪還されてしまい、地球－Ｌ４－月の迂回航路を確立されてしまった上に、Ｌ４宙域に船団護衛用の艦隊を貼り付けさせるという念の入れようのため、難しいものになりつつある。

地球侵攻によって占領地が拡大する以前ならば、ザフトの戦力にも余裕があったので、Ｌ４に駐留する連合の艦隊を追い払うこともできただろうが、地球に戦力を吸い取られている今の状況では、月と睨み合うことで連合軍の主力艦隊の動きを封じるのが精一杯であり、再制圧は不可能だろう。

よって、連合のスペースレーンに圧力をかけるために、また、今月四月になって開始された定期軌道爆撃への対処をさせないために、この地球－Ｌ４－月の航路に最低でも四個独立戦隊が常に進出して、輸送船団や巡回艦隊と鎬を削っているのが、最近の宇宙情勢だ。

もっとも、先にもあったように、地球とプラントを往還する輸送船団を一つ潰して新規編成された軌道爆撃艦隊がアラスカへの軌道

爆撃を始めたから、少しは情勢に変化が出てくるかもしれない。

まぁ、それを気にするのは後少し先のことだろう。

そんな状況の中、今、俺達の戦隊は、地球－Ｌ４間にあるデブリベルトの一つで連合軍輸送船団を待伏せしている。

◇　◇　◇

「先輩、複座型からの報告では、地球から上がってきたコンテナを収容した敵輸送船団が、Ｌ４宙域に向けて航行を開始したとのことです」

「了解した。……二人には絶対に無理をするなと伝えておいてくれ」

「はい」

戦隊から出撃したＭＳ隊は、毎度毎度、お世話になっているデブリの陰に隠れて、連合軍の情報を確認しながら、襲撃の時を待っている。

こんなことを可能にしてくれたのは、世界樹の種に展開したジャンク屋ギルドが一山幾らで売り出しているジャンクを相手に、シゲさん達整備班が努力と創意工夫を重ねた成果である、潜行パック（シゲさん命名）なる代物だ。

この潜行パックとは、以前、ロジアッツで使用した外部接続ケーブルを、デブリから作り出された大きなエアータンクとバッテリーをＭＳが携帯できるようにまとめて接続できるようにした、外付けタイプの生命維持装置だ。

これを小隊毎に一つずつ配布して、ＭＳ内部で長時間……、最高で一日間の待機を可能にしたのだ。

もっとも、中の人間は、閉塞空間で長時間過ごす破目になるから、大変だけどな。

それともう一つ、レナのジンＭ型に大出力レーザー通信装置が取り付けられたことだ。これが取り付けられたことで、複座型やエルステッド等との長距離通信ができるようになり、ニュートロンジャマー影響下でも相互連絡が可能になったのだ。

とはいえ、ＭＳに取り付けられる装置はまだまだ高価らしく品薄で、現場にも中々出回らない代物だから、とりあえず、確保できた一つをＭＳ隊副官であるレナの機体に取り付けることにしたのだ。

……本当は、俺のシグーに取り付ける予定だったのだが、設計に余剰が存在しないために無理だった。

もう少し、ジンみたいに余裕を持った設計をして、拡張性を持たせろと言いたいが、中々、そう上手くはいかないのが悲しいところだ。

現場の意見を取り入れてくれない設計局の秀才君達への不満を溜めつつ、複座型からレナの機体を経由して送られてくる情報に目を通す。

連合軍輸送船団の構成は双胴型輸送艦が二十、護衛部隊らしき２５０ｍ級が二と１５０ｍ級が十二となっているらしく、その数から船団護衛を担当しているのは分艦隊規模といった所だろう。

となると、機動戦力になるＭＡも最低でも二十機は見積もった方

が……、いや、待てよ？

もしも、輸送艦が仮装空母だったら？

……。

うん、一応、可能性があるから、調べた方がいいな。

「レナ、全ての輸送艦にコンテナが収容されたのか？」

「えーと、少し待ってくださいね」

「ああ」

もしもの話というか、可能性は低いと思うのだが、……見積もりに入っているか入っていないかでは、大きく数が変わるからな。

「先輩、全ての輸送艦にコンテナが収容されたそうです」

「それは双胴の両方にか？」

「はい、それぞれ片方に四つずつで、一艦につき八つです」

なら、大丈夫かな？

まさか、コンテナの中にＭＡを入れてるはずは無いだろうし……。

……んー。

「なぁ、レナ、コンテナの中にＭＡが入ると思うか？」

「……コンテナの中ですか？　少し待ってください」

「いや、手間をかけさせてすまん。……どうにも気になってな」

別に規格コンテナだからというわけではないが、外から見ても中

身がわからないからなぁ。

「……大きさ的には入らないと思いますけど、部品なら間違いなく入ります」

「となると、可能性は残るか……」

「もしかして、コンテナの中身を警戒しているんですか？」

「ああ、まあな。……完成品がそのまま入っているとは流石に思ってないけど、部品に分けて詰め込んでおいて、輸送艦の内部で組み立てているかもしれない、なんて考えている」

重力がある地上よりも、重力が少ない宇宙の方が組み立ては楽だしね。

「それは……、可能性はあるかもしれませんが、流石に、考えすぎじゃないですか？」

「そうかもしれないけど……、以前というか、俺達が通商破壊を開始した最初期なら、そんな心配なんてしないけど、今は連合軍も、ザフトが組織的に航路に圧力を掛けていることに気付いているだろうからな」

「……つまり、何らかの対策をしてくると？」

「人は木偶の坊じゃないなら、頭を働かせるさ」

あのＭＡが装備しだした新型小型ミサイルパックなんて、いい例だ。

「……各小隊に伝えておきますか？」

「そうだな。そういう可能性があるってことを伝えておいた方が、いざって時に慌てないで済むか」

「なら、敵艦隊の数と一緒に伝えておきますね」

「頼む」

警戒するのに越したことは無いし、その警戒も杞憂で済めば、それでいい。

最も恐れるべきことは、慢心によって敵を侮ることだ。

自身の慢心を戒めるために、常に肝に銘じていることを再確認していると、レナから連絡が入ってきた。

「先輩、エルステッドから通信が入りました。複座型と連携して、艦砲によって敵進行方向に観測砲撃を加えたいと」

エルステッドとハンゼンは極力廃熱を押さえながら、Ｌ１と地球－Ｌ４航路の中間で、宇宙に溶け込んでいるはずだ。その二艦から、砲撃を加えるとなると、ミサイルとレールガンを使うということか。

……うーん、勢子代わりになるかもしれないし、やってみてもいいか。

「許可する。周囲及び反撃に注意するようにと伝えてくれ、もちろん、複座型の二人にもな」

「了解です」

さて、これで少しは護衛戦力が削れれば、いいんだが……、さすがに、難しいかなぁ。

「エルステッド、ハンゼンが攻撃を開始します」

「ああ、複座型からも観測映像が届いている」

メインモニターにその映像を映し出して、注意深く、敵艦隊を観

察してみる。

地球の青さに浮かび上がる形で、輸送艦を中心に前後に２５０ｍ級を中心とした護衛部隊が展開しているのがわかる。

「弾着までは？」

「超長距離ですから、かなり時間がかかりますよ？」

……許可しておいてなんだが、前みたいに当たるかな？

「敵が攻撃を察知したりして、速度を変化させた場合や進路を変更した場合はどうするんだ？」

「……普通に考えたら、まずは当たらないでしょうけど、そういったことも計算に含めて、一連の砲撃を加えるはずです。サリアの話だと、流れ弾もできるだけ、地球の大気圏に落とすようにするみたいですし」

「そうなのか。まぁ、専門家に任せるよ」

戦隊の優秀なスタッフにお任せしましょう。

……にしても、相変わらず、地球の青さは、綺麗なもんだ。

この奇跡の星があったからこそ、人類は生まれる事ができたんだから、大切にしないといけないよな。

「綺麗、ですね」

「……ああ」

本当に、戦争をしているのが馬鹿らしくなる一時だよ。

しばらくの間、感慨深く、モニター越しに地球を見続けていると、レナが静かな声で問い掛けてきた。

「先輩……、戦争が終わったら、ザフトを辞めるって、本当ですか？」

「……あれ、俺、レナにそのこと、言ったことあったっけ？」

「いえ、私はミーアちゃんから聞きました」

……ミーアの奴、レナとも連絡を取っていたりするのか？

「そうなのか？」

「はい。……すいません、勝手に聞いた上に、今、こんな時に聞いてしまって」

「いや、どうせ、ミーアがレナに言ったんだろ？」

「……はい」

「なら、別にいいさ」

最近、ちょっと口が軽くなっているように感じるミーアには、何らかのお仕置きをするがな……。

「レナの言う通り、戦争が終わったら、俺はザフトを辞めるつもりだ」

「……そう、ですか」

「殺した相手やこの戦隊のことを考えると無責任かもしれないけど、俺は、オーブにいる親父の所に行って、何か、孝行がしたいな、って思ってる」

命というものが、あまりにも儚く散って逝くことを知ってしまった以上は、肉親を少しでも大切にしたい。

まぁ、この戦争が終わるまで、生き残れたらの話だけどな……。

「私も……」

「ん？」

「……いえ、今度、話します」

私も、か……。

……。

今度話すって言っているし、話すまで待つ方がいいかな？

「あっ、そろそろ、初弾の到達予定時刻です」

「わかった」

気を引き締め直してモニターに目を凝らすと、唐突に前方に位置していた１５０ｍ級の一隻と輸送艦二隻が大きな火球へと変じた。それと同時に、敵艦隊全体が回避のためだろう、思い思いの方向へと散り始めるのがわかった。

更に加えれば、護衛部隊は飛来する砲弾を捕捉し始めたようで、次々と迎撃ためのビーム砲やミサイル、近接砲火が放たれ始めた。

「対応が早いな」

「はい。動きに遅滞が見られないことを考えると、かなり訓練されていますね」

「……複座型を引き揚げさせよう。あの調子だと、確実に発見されそうだからな」

こんな所で、秀逸な情報収集や分析、誘導までできる貴重な人材を失いたくない。

……。

いや、ここは複座型の救援に行って、出撃してきたＭＡを叩き潰すのも有りかもしれん。護衛部隊の機動戦力を削れば、後々、対艦攻撃をするにしても、他の戦隊が攻撃を仕掛けるにしても、やりやすくなるだろうしな。

「あっ、これは……、複座型が発見されたかもしれません」

「確かに、２５０ｍ級からＭＡが発進し始めているな。……レナ、複座型の二人に、戦隊と俺達が今いる座標との中間……、Ｅ１２宙域に逃げるように伝えてくれ」

「了解です」

救援は、俺とレナ、それにリー小隊の四機でいいか。後は、待伏せを続行させて、このまま輸送船団に攻撃を仕掛けさせよう。

「後、小隊長連中に繋いでくれ」

「はい、……繋ぎます」

「ああ」

見知った小隊長の顔が三つとレナが、サブモニターに分割されて並ぶのを見て、挨拶抜きに話し始める。

「皆も情報を受け取っているから知っているだろうが、偵察活動をしていた複座型が敵に発見されたようだ。よって、この座標、Ｅ１２宙域に逃げてこさせる予定だ」

「となると、先輩、追撃してきたＭＡへの横撃っすか？」

「ああ、その心算だが……爆装しているマクスウェルとデファンの両小隊は、この場で待伏せを続行して、敵船団に攻撃を仕掛けても

らおうと考えてる」
「ですが、それだと、待ち伏せしていることも悟られているのでは？」
「……そうなんだよなぁ。なぁ、マクスウェル、何か、いいアイデアはないか？」
良かれと思って、艦砲攻撃を許可したけど、ちょっと失敗したかもしれん。

「大きく迂回して、攻撃を仕掛けるのはどうですか？」
「それが一番無難か？」
「隊長」
「リー、何か浮かんだか？」
「ここは敵船団への攻撃を見送って、確実に機動戦力を削る方がいいのでは？」

……いいねぇ、リーの奴、以前の猪突というか攻撃一辺倒な思考から脱皮して、考え方が柔軟になってる。

「確かに無理をせず、俺達はできることをして、次に委ねるのも手だな」
「ですが、先輩、私達の次に攻撃を仕掛ける戦隊は、到着が遅れていますよ？」
「あっ、それは、……頭から抜け落ちてたな」

これはいかんな、少し呆けてるみたいだ。

確かに、近隣宙域を担当する予定だった戦隊が、先のＬ１での戦闘で損傷した艦艇の修理が悪かったのか、推進機関の調子が悪くて到着が遅れるって、出撃前にベルナールが言ってたな。

……。

だとすると、複数の戦隊を使った波状攻撃を仕掛けることはできないか。

……。

ならば、ここは、割り切って動く方が良さそうだ。

「マクスウェルとリーの案を併せてみるか。……さっき、マクスウェルが言った通り、複座型が置かれた状況次第だが、迂回コースを取って待伏せ場所を隠蔽した後、敵ＭＡに対して、俺、レナ、リー小隊で攻撃を仕掛ける」

「となると、俺達ハンゼン組は敵艦隊への待伏せ攻撃っすね？」

「そうだ。だが、敵が予定ルートを通らなかったり、警戒態勢が厳しい場合は攻撃を仕掛ける必要はない。また、攻撃を行う場合でも、援護がいない状況である以上は、一撃した後は無理をせずに退くようにな」

「ですが隊長、それだと、敵艦隊への打撃が足りないのでは？」

「……構わない。正直に言えば、ここはまだ、そこまで命を賭けるような局面じゃないさ」

連合の機動戦力をこの地球－Ｌ４－月航路に貼り付けさせるだけで、プラントへの圧力が減じることにつながっているからな。

「この方針に、何か意見はないか？」

「ないっす」

「ありません」

「俺もないです」

「特にありません」

……うん。

「よし、すぐに動くぞ。レナ、Ｅ１２宙域までの迂回ルートを選定しろ。待伏せ部隊の指揮は、マクスウェルが取れ」

「すぐに始めます」

「了解」

「デファン、しっかりとマクスウェルを補佐しろよ？」

「うっす」

「リー、二機連携はまた、三機連携とは違うからな、十分に留意しろ」

「了解です」

こんなもんかね。

「先輩、迂回ルートの選定ができました」

「わかった。先導を頼む。……では、マクスウェル、デファン、ここは任せたぞ」

「「了解」」

「よし、リー小隊はレナの先導に続け」

「はい」

俺は自機のケーブルを潜行パックから切り離し、先導するために先頭を飛び始めたレナの後に続いて、デブリから飛び出させた。

俺も人間、失敗することもあるさ、なんて、心中で、誰へとも知れぬ言い訳をしながら……。

58　加速する時、変化する潮　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

59　加速する時、変化する潮　4

待伏せ場所を隠蔽するために、大きく迂回するルートを飛びながら、現状の確認を行う。

「レナ、やはり複座型は敵に発見されたのか？」
「はい、どうやら、気付かれたみたいです。さっきの連絡では、二十機程度のＭＡに追われているとのことです」
「二人に余裕は？」
「声から察するに、何とか冷静さを保っていますが、精神的にはかなりキツイはずです」

複座型も推力が強化されているとはいえ、加速性能ではＭＡの方が上だしな。ＭＳの運動性が活かせるデブリ帯に逃げ込めればいいが……。

「敵の武装は？」
「全機、小型ミサイルを装備しているとのこと」
「撃ってきてるか？」
「はい。最寄のデブリ帯に逃げ込めないように、牽制に使われているようですね」

……これは、早く行かないと、拙いな。

「よし、ここからは最短ルートで複座型と合流を図る」
「了解です。すぐに最短コースを送ります」

加速込みで、五分か。

「確認した。これより、最大推力で救援に向かう。全機、過重なんかに負けるなよっ！」

「「了解」」

三人に檄を飛ばした後、俺は推力を一気に最大まで上げて、機体を加速させ始めた。

……そして、四分後。

俺達は、複座型が撃墜される前に、何とか、合流することに成功した。

だが、複座型の状態は酷いものであり、致命的な部分への被弾は免れていたものの、レーダードームが破壊されていたり、左腕や右脚部が無くなっていたりと無視できない損傷を受けていた。

「リー、牽制を」

「了解です！」

リーの小隊に、俺達が来たことで複座型から距離を置いたＭＡへの牽制射撃を加えさせて、動きを制限させる間に、俺とレナは複座型に近づいて、二人の様子を確認する。

……二十対一の状況を耐えて、何とか生き残ったことを考えると、本当に、よく頑張ったとしか言えない。

「二人とも、怪我をしていないか？」
「うぅぅ、ひっく、……こ、こかったです、たい、ちょぅ」
「……わ、私もフェスタも何とか、怪我はしていません」
「ああ、本当に、よく頑張ったな、フェスタ、スタンフォード」
「……うん」
「……はい」

フェスタはもう泣いているし、スタンフォードもよく見れば目の周りが濡れている上に、声が震えている。それが、自身が下した判断ミスをより強く認識させてくれる。

「リー、敵の状況はどうか」
「敵の動きにあわせて、できるだけ牽制してますが、一斉に掛かられると拙いです！」
「わかった。……レナ、複座型を援護しろ。複座型に当たりそうなミサイルは全て落とせよ？」
「了解です！」

ああ、なんか久しぶりだな、このハラワタが熱く滾っているのに、頭が冷め切っているのって……。

「リー、俺は突出して敵の陣形を崩しながら、叩き潰す。お前の小隊は左右に展開し、十字砲火を形成して、敵を複座型に寄せ付けるな」
「そ、それだと、隊長が単機になりますが、大丈夫なんですか？」
「なら、リー、俺の援護も併せてできるか？」

「……やってみせます」
「いい返事だ。俺の背後を突こうとする奴を優先して落としてくれ。後、小隊同士の連携も忘れるなよ？」
「了解！」

……さて、これは手前勝手な責任転嫁でただの八つ当たりに過ぎないかもしれないが、うちの隊員を危ない目に会わせてくれた礼を、タップリとさせてもらおうか。

微かに息を吐き出した後、一気に機体を加速させて、一番前にいたメビウスの進路を遮るように機を移動させる。

当然、前方の敵群もリニアガンや小型ミサイルを次々に発射し始めるが、……遅い。

リニアガンの弾を僅かに機位をずらす事で交わし、逆に三点射で先頭のメビウスを撃ち抜く。そして、発生した流れる火球の脇を通ることで、他のメビウスから撃たれたミサイルの眼を誤魔化せるか試してみる。

「ウッ！」

背後で大量のミサイルがメビウスだった火球に次々に命中して爆発し、巨大な火の玉になっているのをサブモニターで確認しながら、今度は、推進方向を俯角へと鋭角に切り返す。
そうすることで、右側面から突撃を仕掛けてきた相手の虚をついて交わし、背後から重突撃機銃をぶっ放して、これも撃墜する。

……。

うん、立て続けに二機を落としたからか、敵が動揺し始めたらしい。

この動揺により付け込むために、モノアイを光らせて、メビウスの群れの中から得物を品定めをするかのように、わざとらしく一機一機に照準を合わせて動かしてみせる。

照準を合わせた全てのメビウスが、突撃機動から回避機動へと移り、及び腰になったのがわかった。

そんな敵の動揺を上手く突いて、リー小隊やレナからの弾幕射撃が入り、五機のメビウスが立て続けに爆散し、虚空に還って逝く。

残りは十三機だ。

睨みを効かせて、少しでも敵の動きを鈍くさせようと試みていたら、俄かに、俺を標的から外して、背後を狙いそうな機動を見せた。なので、複座型に敵の注意がいかないように、挑発を……、伝統の中指立てをＭＳでして見せて、かかってこんかいとばかりに、くいくいと手前に中指を曲げてみる。

……おお、こうかはぜつだいだ。

メビウスの機動が、さっきまでの動揺や逃げ腰が嘘のように、明らかに、俺を狙ってのものに切り替わり、残していたらしいミサイルも次々と放ち出した。

こちらも、それぞれのメビウスの機動から、リニアガンの射線やメビウスの進路を予測しつつ、直撃コースに入っているミサイルを

機銃で掃射する。

いやはや、目に見えた挑発がここまで効果的とは思わなかったが、これで、俺以外を狙う可能性も少しは減るだろう。その分、メビウスの機動が荒々しいというか、前より良くなってしまったけどな。

それにしても、さっきみたいな安易な挑発を見過ごせないとなると、差し詰め、敵さん、チキン野郎扱いされることでも嫌ったのかねぇ。

実際、ＭＡに乗るような連中はプライドが高い奴らが多そうだから、ありえそうな話なので笑えてくる。

なら、熱狂的なザフト隊員に対応するのと同じような心持ちでいいかもしれないと考えながら、一機一機、リニアガンの射線に入り込まないように細かく機動変更をして、牽制や射撃、回避で対応していく。

連中、動きは鋭くなったが、直線的な動きが明らかに多くなってるな、って、またミサイルを撃ってきたか。

……デコイやフレアみたいなのが欲しいなぁ。

無いもの強請りは情けないとはわかっているが、欲しいものは欲しい。

設計局の連中も現場の意見をもっと聞けばいいのになんて思いながら、前もって進路を読んでおいたメビウスと十字交差するように機動を切り返し、擦れ違い様に、Ｌ１宙域のデブリだった重斬刀を加工して、左手の盾に備え付けた、改良デブリクローで左推進部を

切り裂く。

「ぐっ！」

同時に左腕から機体全体へと衝撃が走り、機体バランスが崩れると共に機体情報に注意の黄色が点るが……、後、二回ぐらいは持つだろう。

推進部に損傷を負ったメビウスが推進剤に引火でもしたのか爆発したので、後から追尾してきていたミサイルがどうなるか、改めて確かめてみる。

ミサイルは、より大きな熱源に引かれたかのように、火球になったメビウスの近くで次々に爆発した。

……やはり、メビウスが装備しているミサイルは、１５０ｍ級のミサイルと同じものというか、熱源探知式みたいだ。

再び生み出された巨大な火球を視界の隅で確認しながら、次の敵に備える。

「先輩っ！　残り、八機です！」

レナの声が、現在の状況を簡潔に教えてくれる。俺が今落とした一機以外にも数が減っていることから、どうやら、レナ達も頑張ってくれているようだ。

「わかった！　絶対に、複座型に寄せ付けるなよっ！」

「はいっ！」

……にしても、連合の連中、過半を撃墜されたっていうのに、まだ、退かないのか？

俺なら、どれだけ頭にきていても、撤退を決断している損害なのだが、敵に退く素振りが見られない。

さっきの挑発が効き過ぎたのか？

……はぁ。

どうも、今日はやることやること、裏目に出ているような気がする。

でも、やってしまった以上は、敵が全滅するか後退するまでは、付き合うしかないだろうなんて、また湧いて出てきた小型ミサイルに追われながら、開き直ってみる。

連携もなく突っ込んできたメビウスを闘牛士の如く交わして、機体を流しながら背後から射撃で撃墜する。でも、ミサイルは相変わらず、俺の機動に付いて来て、しっかりとストーキングしてくれるから嫌になる。

ウンザリとしながら、周辺状況の把握に努めていると、機体が流れた先で、一機のメビウスと衝突コースになることがわかった。

「っし」

咄嗟に判断して、衝突を回避しようとするメビウスの中央胴体部を足場に足蹴して、推進方向を直角に変更し、メビウスがミサイルの標的になるか、試してみる。

……残念なことに、生きているメビウスには命中しないようだ。

メビウスの小型ミサイルは敵味方の識別もできるみたいだと判断しつつ、機銃掃射でミサイルと足蹴にしたメビウスを一掃する。

今度はどいつが相手だと、再び周囲を見回してみると、敵の動きが急に変化し、俺達の標的となっている輸送船団が今現在存在するらしい方向へと引き揚げ始めた。

「敵、撤退します！」

「ああ、確認している」

やれやれ、残存四機になって、ようやく退いたか……。

まったく、連合軍の連中、戦意旺盛と表現するしかないな。

「……何だか、今までより、随分、タフでしたね」

「ああ、手強かった」

ＭＳに対抗できる小型ミサイルが搭載された事が大きいのか？

いや、それだけでは、あの高い士気の説明としては、弱いな。

……考えられるとしたら、連合が作った足つきのＭＳがザフトのＭＳや部隊を立て続けに打ち破った事実に加えて、月の宇宙艦隊も再建されつつあるから、ザフトやコーディネイターに対する劣等感や苦手意識、敗北感が薄れてきた、ってあたりかな。

何にせよ、これからの戦闘では拙いことになるかもしれない、等と思いつつ、複座型の二人の状況をレナに尋ねる。

「レナ、二人は大丈夫か？」
「ええ、大丈夫ですよ。敵は皆、先輩に夢中でしたから、こっちにはもう、見向きもしませんでした」

そんな連中に夢中になられるのは嫌だけど、自機の色が目立つことを考えると妥当だろうな。

「……人気者は困るね」
「ふふ、本当ですね」
「さて、マクスウェルやデファン達は大丈夫かな？」
「それは流石に、戻ってみないことにはわかりません」

……。

「そういえば、複座型の通信系は健在なのか？」
「ええ、何とかエルステッドに繋がっているみたいです」

うぅ、これなら、レナを待伏せ組に置いてきた方が良かったかもしれないと考えそうになるが、それだと、俺が落とされる可能性が大幅に増えるし……、もう、今日は本当に、やる事なす事、全てが裏目か失敗だよ。

自嘲に歪みそうになる口元を何とか押さえながら、リーに指示を出す。

「リー、お前の小隊は複座型をエスコートして、エルステッドに戻れ。二人共、かなり精神を消耗しているはずだからな、気遣ってやれよ？」
「わかりました」

「フェスタ、スタンフォード」
「は、い」
「なんでしょう？」
「本当に、よく頑張ったな。……それと、もし、エルステッドに戻っても恐怖が抜けないようなら、エヴァ先生の所に行って、話を聞いてもらうんだぞ？」
「……うん」
「……了解しました」

後は、特に無いな。

「よし、俺とレナは待伏せ場所に戻る。リー、後は頼んだぞ」
「了解です！」

力強いリーの返事を聞いた後、レナに合図を送り、ＭＡが去った方向へと機体を進ませ始めた。

「レナ、エルステッドに、リー小隊と複座型を戻すことと損傷した複座型の受け入れ準備を頼むって、連絡しておいてくれ」
「はい」

リー達が行動に移るのをサブモニターで確認しつつ、レナへの指示にもう一つ、付け加える。

「後、待伏せ組の様子がどうなっているか、エルステッドが把握している範囲で教えて欲しいとも」
「わかりました」

うーん、ニュートロンジャマー影響下だと、部隊を二つに分けたりした時、連絡が取れないっていうのは、やり難いな。

いや、確かに、ニュートロンジャマー影響下だと、レーダーが効きにくくなるから、敵に動きを察知されにくくなるだなんて利点もあるけど、これは逆もまた真なことだから、一概にこちらが得をするとはいえないことだ、って、こんなことは今はどうでもいいか。

……でも、最低でも、小隊長機にぐらいは、大出力のレーザー通信装置が必要だよなぁ。

ぐだぐだと、ＭＳに取り付ける装備について考えを進めていたら、レナからさっきの指示に対する報告が返ってきた。

「先輩、エルステッドの光学観測によれば、両小隊とも例の輸送船団に対艦攻撃を仕掛けて、１５０ｍ級四隻と輸送艦三隻に撃沈ないし大破させる打撃を与えたそうです」

「……それで、こちらの被害は？」

「これといった被害は無く、全機無事に帰還中だそうです」

それは重畳というべきことだが……。

「敵の送り狼は？」

「二次攻撃を警戒しているのか、確認されていません」

「うん、ならいい。それで、待伏せ組と合流出来るか？」

「……サリアに誘導を頑張ってもらいましょう」

「それはまた、いい訓練になりそうだな」

もちろん、ベルナールのな……。

「よし、俺達もベルナールの管制に従って、待伏せ組との合流を目指す、とエルステッドに伝えてくれ」

「ふふ、了解です」

レナの笑いを含んだ声を聞きつつ、今日の戦闘をを思い返す。

……。

ほんと、とことん、無様だったよなぁ。

それに俺……、命が懸かってる状況で判断ミスをしたっていうのに、自身を擁護するための言い訳なんて考えて……、自身の判断というか決断に命が懸かっていることを、軽く見るようになっていたのかもしれない。

……本当に、犠牲が出なくて良かった。

そんなことを胸の内に抱きつつ、指揮官という立場の重みを再認識しながら、エルステッドから送られてきた指示に従って、俺は機体を反転させ、スラスターを噴射させた。

59　加速する時、変化する潮　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

60　加速する時、変化する潮　5

C．E．71年5月1日。

前もってユウキから届いていた連絡の通り、ビクトリア基地のマスドライバーによって、オペレーション・スピリットブレイクに参加するザフト地上軍の地球軌道への打ち上げが開始された。

これらの打ち上げを援護するために、ザフト宇宙軍は地球軌道にボアズ駐留艦隊を派遣し、静止軌道上にあるユーラシア連邦が保有するアルテミス要塞や中立とはいえ確固たる戦力を持つオーブ連合首長国のアメノミハシラへの牽制と、新たに打ち上げられていた連合軍の偵察衛星や観測衛星の撃破に取りかかっている。

また、月で戦力を蓄えている連合軍宇宙艦隊に対する牽制としては、ヤキン・ドゥーエの艦隊が出張っているのだが、もしも連合軍艦隊が出動する等して月に隙が生じれば、プトレマイオス基地への直接侵攻することも視野に入れているそうだ。

そして、Ｌ１の世界樹の種駐留艦隊は、月から地球軌道への連合軍艦隊の侵攻に対して、プラントに残る総予備の艦隊が到着するまでの間、防波堤の役目を担うため、暗礁宙域外縁部で厳戒態勢に入っている。

俺達のような独立戦隊も主たる任務である通商破壊を中断し、任務に当たっていた八個戦隊中、五個戦隊が連合して地球－Ｌ４間にまで進出してＬ４に駐留している連合軍艦隊に動きに備え、残りの三個戦隊については世界樹の種に残り、世界樹の種駐留艦隊と独立戦隊群の予備戦力として機能することになっている。

これで宇宙においては、ザフトと地球連合軍との睨み合いが構築されたことになり、連合軍も、地球軌道から再突入を図る強襲降下

部隊や支援爆撃を実施する軌道爆撃艦隊に対しては、容易には手出しができないだろう。

5月2日。

アラスカ及びパナマに対して、本格的な軌道爆撃が開始された。

独立戦隊群も軌道上の護衛艦隊や爆撃艦隊と通信リンクを確立させることに成功したので、爆撃実施状況や連合軍の反応について聞いたりしたのだが、アラスカ、パナマ共にかなりの対空迎撃が行われているそうだ。

アラスカへは定期的に軌道爆撃を実施しており、それなりの打撃を与えていたはずなのだが、一体、どこにこんな戦力を蓄えていたのだろうか？　もしも、何もしないままで強襲降下を行っていたら、相応の被害を被ったのは間違いないだろう。

でもって今は、これらの対空迎撃ベースを潰すために、地上での降下支援を行う海洋部隊から地形データ及び目的座標入力式の巡航ミサイルを順次発射して、攻撃を仕掛けているそうだ。

後、現状について聞いた時に、世間話の一つとして聞いたのだが、海洋部隊で運用されている主力潜水艦ボズゴロフ級はＭＳ運用を第一に考えて設計されたため、巡航ミサイルが装備されていなかったそうだ。

けれども、この作戦において、急遽、使用されることが決定されたため、ザフト上層部からの命令で、ボズゴロフ級のＶＬＳ（Ｖｅｒｔｉｃａｌ　Ｌａｕｎｃｈｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ：垂直発射装置）の一部を巡航ミサイルを発射できるように、カーペンタリア基地で改造したという話だ。更に加えれば、当初、使用が予定されていた巡航ミサイルの実際性能が想定性能に満たない……、話にもならない代物であったため、Ｍ６６キャニスの大型ミサイルをベースに新たに開発されたらしい。

短期間での開発を強いられた技術開発陣が濃い隈で縁取られた目を血走らせながら、こんなことを考えた奴はどいつだっ、なんて吼えていたのは、その筋では有名な話とのことだが……、確かに、限られた時間で難題をこなさないといけないんだから、大変だよねぇ。

5月3日。

黄金週間の始まり……ではなく、Ｌ４に駐留している連合軍艦隊からの嫌がらせ、ハラスメント攻撃だと思われる、ミサイルや航宙魚雷が、小大を問わず、大量に飛んできた。

これらの攻撃に、独立戦隊群から出撃したＭＳ部隊による第一次迎撃、戦隊群艦艇の火砲による第二次迎撃、降下部隊の直接掩護に当たっているボアズ駐留艦隊のＭＳ隊が第三次迎撃、ボアズ駐留艦隊の艦艇群が第四次迎撃というか最終防衛線を担って、対応した。

本当に半日以上、途切れることなくミサイル等の危険物が飛んできたため、少しも休む間もなく、それこそ猫の手を借りたい位に迎撃に忙殺された。

だが、その頑張りの甲斐もあって、降下部隊のカプセルに被弾は無く、護衛部隊は任務を全うしたといえるだろう。

それと、北米の大西洋連邦軍もとい地球連合軍だが、アラスカとパナマ、共に大規模な爆撃が実施されている影響で、どちらへの攻撃が本命なのか迷っているらしく、アラスカに近い部隊がパナマへ、パナマに近い部隊がアラスカへという具合に、部隊行動が乱れている事が観測されている。

5月4日。

Ｌ４の動きを警戒しつつ、地球の昼夜面を眺めながら、昨日の疲れを癒す。

夜面には、去年の四月に見た恐ろしいまでの闇は存在せず、プラントやザフト上層部にとっては、あまり嬉しいことではないだろうが、地球上のエネルギー問題が解決しつつある事がわかった。
俺に、その資格が無いとわかっていても、少しでも凍死者や餓死者の数が減ることを願わずにはいられなかった。

ちなみに、北米の連合軍陸上部隊だが、更なる混乱が発生している様子が見受けられ、統一された部隊移動が見られない状態が続いているようだった。

5月5日。
降下部隊に、当初より予定されていた、本当のオペレーション・スピリットブレイクの発動が告知される。
この、以前より説明されていた作戦の開始直前での変更で一部の部隊で混乱が生じたらしいが、事前から作戦変更の意義を教えられていた司令部のお陰で、最小限に食い止められたようだ。
作戦目的地の変更で広がっていた動揺が、変更された目的地が敵本拠地だとわかって、興奮に転じた後、アラスカへと降下する強襲降下部隊の八割が意気揚々と軌道を修正し、アラスカへの突入ポイントへと移動し始めている。
この動きに対する連合軍の反応だが、軌道上からの観測では、パナマを目指していた連合軍部隊の動きに大きな混乱が生じていることが判明している。

……ならば、この降下地の直前変更にも意味があったといえるかもしれない。

5月6日。

パナマ基地への軌道爆撃を実施していた艦隊が、太平洋と大西洋を結ぶパナマ運河の関門を多数破壊するという成果を出した。海洋部隊からの巡航ミサイル攻撃で、急激に対空迎撃能力を落しつつあった所に、キャニスでのピンポイント爆撃が成功したらしい。

パナマ運河は、俺が案を出した時点では含まれていなかった目標だから、おそらくはユウキが付け加えたのだろう。海洋交通の要衝であるパナマ運河も攻撃に含めるとは、中々に味のある手だと思う。

もっとも、肝心のマスドライバーへの攻撃に関しては、対空迎撃ベースがマスドライバー周辺に、想定していた以上に配置されていたため、また、迎撃ベースを破壊しても即座に補充されるため、命中弾は二発程度に留まっている。

この手際の良さは、事前に作戦情報が漏れていたのか、との疑念を抱きそうになったが、連合軍にとっては宇宙の生命線とも言える重要施設である事を考えれば、これも普通なのだろうと思い直した。

一方のアラスカ基地への攻撃だが、軌道爆撃艦隊による絨毯爆撃と精密爆撃、海洋部隊による巡航ミサイルを織り交ぜた攻撃によって、隠蔽されていた航空機射出口や対空迎撃ベースを露呈させて、かなりの数の破壊に成功している。

他にも、地上交通網や点在する滑走路をズタズタにして使い物にできなくしたり、始めから地上部に露出していた基地施設を更地に戻したりと、成果を十分にあげているといえよう。

両基地共に、対空迎撃能力が確実に低下しつつあるらしいから、この調子で降下予定日まで、攻撃を頑張ってもらいたいものだ。

後、北米大陸を北に南に動いている連合軍だが、大半が北を……、アラスカを目指し始めているが、どこか今までと違って、移動が遅いというか、鈍いように感じられた。

5月7日。

ハワイを根拠地とする地球連合軍太平洋艦隊に、アラスカ及びパナマへと向かう動きが見られた。おそらくは、アラスカ、パナマ両基地に攻撃を仕掛けているザフト海洋部隊へ圧力をかけるためだろう。

これは俺の想像なのだが、アラスカの総司令部当たりから、幾らなんでも自分達の庭で好き放題にされ過ぎだとでも、檄が飛んだのかもしれない。

まぁ、実際、北米大陸で右往左往していた陸上部隊に比べれば、幾らカーペンタリアへの抑えを担当しているとはいえ、海洋部隊の動きは鈍すぎるとしか言いようがないからなぁ。

……。

でも、昨日からの地上部隊といい今日の海洋部隊といい、地球連合軍というか大西洋連邦軍にしては、今までと違って、不思議に思う位に動きが鈍く感じられるんだが……、何か、あったんだろうか？

◇　◇　◇

5月8日。

突入部隊の大部分がアラスカへの突入ポイントに到着して、後はタイミングを待つだけの状況となり、突入部隊の士気は、アラスカの地球連合軍総司令部への直接攻撃とあって、鰻登りに上がっているそうだ。俺も正直に言えば、少し高揚しているかもしれない。

なぜなら、この作戦で、連合軍の一大拠点であるアラスカの制圧

ないし破壊に成功すれば、戦争終結への道が開けるかもしれないからだ。

……というか、戦争はもうお腹一杯だから、後生なので、茨の道でも抉じ開けて欲しい。

そんな願いを込めながら、俺は艦橋のサブモニターに映し出された降下カプセル群を見つめていると、ゴートン艦長が帽子を弄りながら、話し掛けてきた。

「本当に、戦争の行く末を決める大作戦だよねぇ」

「ええ、乾坤一擲の降下強襲です。……これに失敗すると、地上軍はガタガタになって、宇宙に叩き出されるか、殲滅されてしまいますから、是非とも、成功して欲しい所ですよ」

前半は普通の声で、後半は艦長に聞こえる位の囁き声で応える。

「それは、何とも恐ろしい未来なことで……。なら、俺も、自分達が忙しくならないように、この作戦が成功することを祈るとするよ」

「そうして下さい」

艦長の苦笑交じりの言葉につられて、俺も苦笑いを浮かべつつ、今度は、メインモニターに目を移す。

……俺達、独立戦隊群の正面に位置するＬ４方面に動きは見られない。

五日前みたいに、Ｌ４からミサイルや航宙魚雷でも撃ちこんで来

るかもしれないと思っていたが、どうやら、そのつもりもないようだ。

「これだけ連合の宇宙艦隊に動きがないと、逆に不安に感じますよ」

「まあねぇ。……実際にドンパチなんてしたくはないけど、こうも動きがないと、確かに心配にもなるね」

「今のところは、Ｌ４方面に進出している複座型からの偵察情報でも、特に動きは観測していないんですよね？」

「うん、動きはないみたいだ。ついでに言えば、静止軌道上のアルテミス要塞は、例の傘を展開して、しっかりと閉じこもってるよ。もちろん、ボアズ艦隊が見張ってるから手を出したくても出せないだろうけどね」

アルテミス要塞（※注）か……。

実はこの要塞、ラウが率いるクルーゼ隊が、足つきの追撃任務の際に、アルテミスの傘を破って攻略したのだが、本来の任務である足つき追撃を行うために、占領している余裕がなかったのだ。

その後、ラウからの連絡を受けた機動艦隊司令部は、プラントから占領部隊として独立戦隊を送ったそうだが、到着した頃には周辺宙域に武装したジャンク屋や海賊、傭兵といった連中がハイエナの様にうようよしていて、占領は不可能と判断したらしい。

聞いた話だと、横流し品か廃棄品の再生なのかはわからないが、ＭＳのジンやＭＡのメビウス、魔改造されたミストラルといったものとそれらの母艦が多数存在していたらしく、迂闊に手出しが出来なかったそうだ。

で、仕方がないから、ザフト宇宙軍は様子見をすることにしたのだが、いつの間にか海賊の手からユーラシアの手に戻っていたりする。

月に存在している正規軍が動く事もなければ、地球からの戦力打ち上げもなかったのに、どうやって奪回したのかと、タヌキに化かされた気分で首を捻っていたら、ザフト内部に存在するネットワークから、有名な傭兵を雇って占拠していた海賊連中を駆逐して奪回したとの情報が入ってきた。

傭兵も仕事だから仕方がないんだろうけど、今の俺達にとっては迷惑な話だよなぁ。

「……戦力にならなくても、アルテミスが静止軌道上にある関係上、軌道上での動きが筒抜けになりますからね、本当に頭が痛い話ですよ」

「こちらの情報を送られるだけでも、困りもんだからねぇ」

「ほんとですよ」

どうせなら、まったくと言って良い程に未開発なＬ３かＬ２にでも作ってくれていれば、ユーラシア連邦も自分の所のコロニーもない場所に要塞を造るなんて、最高の無駄遣いだよなぁ、って笑い話ができたのになぁ。

「あれがどうして戦略的な価値がないなんてことになっているのか、不思議だよ」

「……偉い人の単なる負け惜しみじゃないですか？」

「くっ、面子を気にする輩が多いザフト上層部だと、ありそうな話だねぇ」

ゴートン艦長と二人して、ニヤニヤと、少々品の無い、厭らしい笑みを浮かべてしまった。

あ、たまたま俺達の方を見たアーサーがギョッとした顔をして、

ひいている。

……でもまぁ、アーサーには、今更、取り繕う必要はないよな。

「お、そろそろ突入開始時刻になるね」

「……ええ、そのようです。戦隊も、一応の備えとして、降下部隊の突入が終わるまで、二種戦闘配置を発令します」

「了解、隊長。……トライン班長、二種戦闘配置の発令を頼むよ」

「アイ、サー」

返事をしたアーサーがキビキビと動き始めるのを見た後、再び、サブモニターに映っている降下部隊に目をやる。丁度、カプセルの一群が降下支援として軌道爆撃を行っている通常型輸送艦を改造した軌道爆撃艦の脇を降下していくところだった。

「軌道爆撃はかなり上手くいっているみたいだから、降下部隊も少しはマシなはずだよ」

「……ええ」

艦長の声に頷き返して、大気圏の摩擦で赤く染まりつつある降下カプセルを見送る。

本当に、この作戦が成功してくれると、戦争終結も現実的になるんだけどなぁ。

※注釈

原作ではアルテミス要塞の存在位置はＬ３らしいですが、本作では静止軌道上にあるとします。

当然のことながら、原作設定と乖離しますが、ここは何卒、御了承ください。

６０　加速する時、変化する潮　５（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

61　加速する時、変化する潮　6

オペレーション・スピリットブレイクが開始された裏で、パナマ基地への強襲降下作戦であるオペレーション・ブリッツブレイクもまた、一時間遅れで開始された。

この時間差をつけたブリッツブレイクの発動は、連合軍がアラスカ基地が現在置かれている状況、……ザフトによる連合軍総司令部への強襲降下に気を取られるのを待つための措置だ。というのも、パナマに降下する戦力が少ない以上は、降下中の被害を少しでも減らすために、小細工でもなんでも使わなければならなかったからだ。

もっとも、パナマ基地に対する事前の軌道爆撃によって、対空迎撃能力が大きく削り取られていたために、当初予想されていたよりも遥かに少ない被害で、強襲部隊は降下できた。

更に加えれば、北米大陸で右往左往していた陸上部隊の大部分が北を、アラスカを目指していることが判明しているため、この降下に対応して、援軍が派遣されるにしても少しは遅くなるはずだ。

今現在、通信リンクから得られた情報では、ディンを中心とする降下部隊のＭＳがマスドライバー周囲の対空陣地や防塁を順次破壊、制圧しており、直にグングニールの降下ポイントを確保できそうだった。

また、これに合わせるように、カーペンタリアの海洋部隊もパナマ近海に接近しており、降下したＭＳ部隊の退路を確保している。

一方のアラスカだが、こちらも事前の軌道爆撃によって、対空迎

撃ベースが多数破壊され、また、制空戦闘機部隊が出撃口や滑走路を封じられた影響で迎撃に上がってくる数も大幅に少なかったために、降下部隊の大部分が無事にアラスカの大地を踏むことに成功した。

現在は、ＭＳ部隊と地の利を持つ基地防衛隊とが、アラスカ基地の主要施設が存在している地下への侵入路を巡って、一進一退の攻防を繰り広げているらしい。それに、降下支援を行っていたジブラルタルの海洋部隊からもグーンが出撃しており、降下部隊のディンとの共同作戦で、連合の海上防衛艦隊の撃滅が図られている。

……うん、両作戦とも、本当に、上手くいってる。

「……でも、幾らなんでも、上手く行き過ぎなんだよなぁ」

「その心は？」

「俺達の相手である地球連合軍は、プラントやザフトの上層部が喧伝している程、無能ではないからですよ、ゴートン艦長」

ユニウス・セブンへの核攻撃や月戦線におけるエンデュミオン・クレーターのサイクロプスでの自爆、世界樹攻防戦や新星攻防戦、ヤキン・ドゥーエ防衛戦でも既存の兵器だけでもって散々に梃子摺らせてくれたし、最近になってからも、ＭＡに対ＭＳ兵装を装備させ始めている。

「……では、連合軍が何かやると？」

「ええ、おそらくは……」

どれだけ防諜に務めても、こちらの作戦情報が漏れている可能性だってあるはずだし、作戦開始から一週間近くもあれば、それなり

の対策を立てることだってできるはずだから、連合軍が何らかの反応を起こすと考えていた方が無難だろう。

と、そんな事を考えていたら、通信リンクから入ってくる情報を通信管制官と共に読み取っていたアーサーが、急にこちらを振り仰ぐと、多分に焦りを含んだ声で状況の新たな変化を告げた。

「艦長！　大変ですっ！　ジブラルタル基地が、連合軍の攻撃を受けていますっ！」

……やられた。

まさか、ジブラルタルを攻めるとは……、思ってもなかったよ。

思わず沈黙してしまった俺を尻目に、艦長がアーサーに詳しい状況を問いかけている。

「……トライン班長、詳しい情報は？」

「まだ詳しい情報は届いておりませんが、現在、ジブラルタル基地は敵航空戦力による激しい空爆を受けているとのことです！　また、ピレネー防衛ラインにも、リニアガンタンクを中心とした一個軍規模の敵陸上部隊の侵攻を確認されています！　加えて、地中海方面、イタリア半島からも艦隊規模の敵海上部隊が出撃し、ジブラルタル

を目指している模様です！」
「うん、わかった。続報が届いたら、また報告してちょうだいな」
「アイ、サー！」

おそらく、連合軍がジブラルタル基地やヨーロッパ方面の北限であるピレネー防衛ラインに攻撃を仕掛けてきたのは、この強襲降下作戦でアフリカやジブラルタルの防衛戦力や付近の駐留戦力が減っていることを見越してのことだろう。
降下部隊や軌道爆撃艦隊、それを援護する護衛艦隊が宇宙から地上を観測すると言っても、ほぼ全てがアラスカとパナマに振り向けられている以上、部隊行動の欺瞞も容易かったはずだしな。

そもそも、ジブラルタルが、地中海と大西洋、ヨーロッパとアフリカを結ぶ要衝であり、地球連合を構成する三大国の一つであるユーラシア連邦にとっては目と鼻の先にある以上、奪回を狙われる事も予想できたはずだ。

……。

結局は俺も、連合軍を甘く見ているつもりはなくても、甘く見ていたということか。

……。

それにしても、この連合軍によるジブラルタルへの反攻計画だが、これが立案されたのは事前に情報が漏れていたのが原因じゃないだろうか？
あくまでも何の確証もない俺の想像に過ぎないのだが、正直、そう考えないとおかしいと思う位に、大部隊が一斉に動くタイミングが合いすぎている。

それとも一週間もあれば、連合軍は作戦計画を立てて、必要な部隊を集結させて、必要な物資を揃えて、大部隊を連携させて動かす位はやってのけるのだろうか？

……うーん、どちらもありえそうだなぁ。

内面に次々に生まれてくる疑問を溜め込みつつ、外面では出来る限り平静を保つ努力をしていたら、艦長が周囲に聞こえない程度の声で問いかけてきた。

「ラインブルク君、この侵攻は退けられると思うかい？」

「……かなり厳しい戦闘を強いられるでしょうが、現状の戦力でも、全力での迎撃ならば、一度目は何とか退けられるでしょう。ですが、敵に二の矢があった場合、ピレネー防衛ラインは間違いなく破られて、ジブラルタル基地は拙い状況に陥ると思います。付け加えれば、連合軍が本格的にＭＳを運用するようならば、一度目の防衛も怪しい。……正直に言えば、このままでは、ジブラルタル基地の防衛は難しいでしょうね」

現実には、ジブラルタルの周囲……イベリア半島や北アフリカにも治安維持用のＭＳ部隊が幾つか存在しているが、戦力としては微々たる物であり、占領地の重石である以上は下手に動かせない。

また、ジブラルタル基地の支援を行えるような余裕を持つ基地はアフリカのビクトリア基地位しか存在しないが、ここにはマスドライバーがあるため、防衛戦力は絶対に削れない。

……アフリカで活躍していたバルトフェルド隊が足つきにやられた影響は、意外と大きいものだったな。

こうなれば、せめて、アラスカ強襲降下の支援のために北極海に出張ったジブラルタル所属の海洋部隊を戻さないことには、ジブラルタル防衛はままならないだろう。

俺の予想を聞いた艦長は、一つ頷き、アーサーに声をかけた。

「トライン班長、カーペンタリアに、敵の攻撃があったとは聞いてないかい？」

「現在のところ、そのような情報は入っていません」

カーペンタリア基地は、後背に大洋州連合という友好国があるから、何とかなるだろう。

仮に地球連合の三大国が動こうとしても、東アジア共和国は地理的には最も近いが、カオシュン攻防戦で遠征用の海上戦力が壊滅的な大打撃を受けているから侵攻する余裕はないはずだし、大西洋連邦はハワイの太平洋艦隊を攻撃を受けているアラスカとパナマに援軍として派遣しているし、ユーラシア連邦の海上部隊というか太平洋艦隊はアラスカ防衛にかかりきりだ。

そして、パナマ運河の破壊に成功している以上は、大西洋連邦やユーラシア連邦の大西洋艦隊が廻航して来るのにも時間がかかるから、周辺地域から援軍を呼んで備える事も可能だ。

って、逆を言えば、ジブラルタルへの圧力が強まるってことだろう！

……。

うむむ、宇宙軍が地上軍への支援をするなら、何ができるだろう？

軌道上からの観測情報の提供は今やり始めているだろうから……、軌道爆撃による支援か？

……。

うん、少なくとも攻め寄せてくる陸上部隊への軌道爆撃は、ピレネー防衛ラインへの大きな支援になるはずだ。

後は地中海の海洋部隊だが、海兵隊みたいな上陸部隊がいたら面倒な話になるけれど……、そこはジブラルタルの連中に頑張ってもらうしかないな。

軌道上にいる宇宙軍による地上軍への支援はそれぐらいだろう。

「艦長、軌道爆撃艦隊に動きはありますか？」

「アラスカを担当している軌道爆撃艦隊が一部、地中海からイベリア半島北部の軌道上に移動を始めているよ」

「……なら、何とかなりそうですね」

「そうだといいねぇ」

頷いた艦長が、Ｌ４方面への警戒を強めるようにアーサーとＣＩＣに指示を出すのを見ながら、ふと、気がついた。

よくよく考えたら、そもそも、本来の俺の仕事がＬ４の艦隊を警戒することである以上、所属違いなのに意見具申なんて具合に出しゃばることもできないから、実際にはどうのしようもないことだった。

自身の思い上がりを恥ずかしく感じて、悶絶しそうになる身体を、邪気眼を抑えるかの如く、全身の筋肉をフル稼働させて必死に耐えていたら、俄かにアーサーが不審な声をあげたので、それに便乗して忘却処理することにした。

「どうかしたのか、アーサー」

「あ、隊長。いえ、それが……、プラント方面から情報にないＭＳが一機飛来して、こちらの通信に応える事も無く、アラスカを目指して大気圏に単機で突入したらいんです。それで、この変なＭＳに関して、何か聞いていることはないかと、軌道爆撃艦隊司令部から各方面に問い合わせが来ているんですよ」

「いやいや、基本的に情報が集る司令部の知らないことは、普通、現場の人間も知らないと思うんだが？」

「……ですよねぇ」

アーサーが相槌を打ったので、俺も解決策を一つ提示してみる。

「どうせわからないなら、手っ取り早くプラントに問い合わせた方がいいんじゃないか？」

「ええ、僕もそう思いまして、司令部にもそう伝えたんですが、プラントでも、そのＭＳが何なのか把握していないそうなんですよ」

「へっ、何それ？　……まさか、ＭＳの亡霊が大気圏に突入でもしたって言うのか？」

んな馬鹿なこと、あるわけないだろうなぁ。

「さ、さすがに、それはないでしょう」

「だよなぁ。……ま、皆が皆、わからないことなんだからさ、あんまり、気にし過ぎない方がいいと思うぞ」

「いいんですか、それで？」
「俺達にできることは限られているし、司令部の連中がしっかりと把握に努めてくれるさ。とにかく俺達は、そんな情報があったことを、不確定要素の一つとして、頭の片隅に放り込んでおけばいいだろうよ。……じゃないと、胃が持たない」

いや、ほんとに。

「隊長、胃薬、手放しませんからね」
「……いつか、アーサーにもわかる時が来るさ」
「……それは、嫌だなぁ」

俺も知りたくなかったよ。

そんなことを思いながら、ついでに各戦域情報を眺める。

宇宙の各方面はそれぞれ動きなしで、地上は……、アラスカ侵攻部隊は地下基地への侵入路を押さえたようだし、パナマはグングニールの降下ポイントを確保が完了して、後はグングニールの投下するだけといった所だな。

で、ジブラルタルはと思って、情報を読み取ろうとしたら、口元を緩めながらも黙って俺達のやり取りを聞いていたゴートン艦長が口を挟んできた。

「トライン班長、ジブラルタルの様子はどうだい？」
「あ、はい、敵陸上部隊がピレネー防衛ラインへの攻撃を開始しました。これに対応する形で軌道爆撃艦隊の分派隊が、少々時間は掛かりますが、ピレネー防衛ラインへの支援のために軌道爆撃を実施するとのことです。また、海洋部隊は西地中海の、……えーと、バ

レアレス諸島方面を目指していることが確認されています」
「ジブラルタルを空爆した航空部隊は？」
「迎撃のためにディンが上がった頃には、逃げられたそうです」
「イベリア半島と北アフリカはこちらが押さえていたから、やっぱり、アゾレス諸島辺りを経由してきたのかねぇ。……それで、基地の被害は？」
「基地全体に被害が及んでおり、機能は半分にまで低下しています」
なるほど、と頷いたゴートン艦長は帽子を弄りながら、俺達に向かって話しかけてきた。
「海洋部隊の動きと基地への爆撃、……これはジブラルタル基地から、ピレネー防衛ラインへの援軍を出させないための牽制だと思うんだけど、どう思う？」
「……ありえますね」
「確かに、ジブラルタル基地は予備戦力を動かせない状況になっていますから、ピレネー防衛ラインに攻撃を仕掛ける部隊へのこれ以上ない支援になっていると、僕も思います」
とはいえ、必ずしも地上での戦闘は、地上軍だけでするわけじゃない。宇宙軍だって、軌道上からの支援爆撃ができるのだ。
「まぁ、軌道爆撃での支援がありますから、何とかなりますよ、今回は」
「だねぇ」
「え、えええっ！」
「え、ど、どうかしたのか、アーサー？」
「……あ、その、アラスカに降下した部隊から、宇宙から降下してきたＭＳが一機、敵味方関係なく暴れていると情報が入ってきまして……」

め、迷惑なＭＳだな、おい……。

「更に、えーと、アラスカ基地内部に侵入したクルーゼ隊長からの連絡で、アラスカ基地内部に……、えっ？　……さ、サイクロプスが……仕掛け、られており、起爆まで、……五分も、ない？」

なっ！

「く、クルーゼ隊長は、アラスカ地下基地中央部にサイクロプス関連の施設が存在しているため、起爆までの時間内では破壊が不可能と判断しており、司令部に即時撤退を進言したそうです」

「……まずいね、降下部隊の大部分はゲートに張り付いちゃってるよ。……トライン班長、降下部隊司令部はどうするって言ってる？」

「は、はい、降下部隊に対して、潜水艦隊への即時撤退を指示したみたいです。ですが、撤退の際に、敵防衛隊の逆撃にあっており、上手くいっていないようです」

おいおいおいおい。

「連合の連中は正気なのか？　基地のゲートを守ってるってことは自分達も巻き込まれるのは間違いな……まさか、敵の司令部は防衛部隊に、何も教えてないのか？」

「……かもしれないねぇ」

「……す、捨て駒、ですか？」

こちらの一大侵攻部隊を叩けるなら、防戦している基地防衛隊や基地施設ぐらいは惜しくないってわけか。

まぁ、確かに、効率的に兵を死なせるのがお仕事の司令部にとっては悪くない判断だろうさ。

……何も知らされていない、今、必死で戦っている末端にとっちゃ、溜まったもんじゃないがな。

「はぁ、……確かに有効な策戦だろうけどさぁ」

「ええ、艦長、まったくもって、反吐が出る程の外道故に、効率的で、効果的な策ですよ」

「信じられない。味方を巻き込んでまで……こんな……」

アーサーの呟きに、俺も同意したい。

「……あ、グングニールが投下されました」

パナマはもう、作戦終盤だけど、順調だし、放っておこう。

……。

しかし、アラスカに設置されていたサイクロプスだが、これぱかりは流石に一週間では用意できないはずだし、あまりにも準備が良すぎると言えるだろう。

そう考えると、やはり情報が……、こちらの情報が、それもかなり高い位置から、事前に漏れていたんだろう。

……。

いや、物事に完璧は存在しないということは、今まで生きてきて、十分にわかっている。わかっているのだが、今回は……、運不運で済ますには、受ける被害があまりにも大き過ぎる。何より、プラントが確実に拙い状況に追い込まれることを考えると、真面目な話、情報漏洩者を吊るし上げてやりたい。

今後の状況に思いを馳せて眉間に皺を寄せていたら、顔を青くさせたアーサーが艦長と俺の所へと報告に来たので、俺は思考を中断させて耳を傾ける。

「……報告します。パナマに降下させたグングニールは正常に起動し、マスドライバーの破壊に成功したそうです」
「うん、良かったよ。……で、トライン班長、パナマの降下部隊はちゃんと撤退してるかい？」
「いえ、一部部隊が撤退命令を無視して、周辺施設や降伏を希望する敵への攻撃を続けているようです」

……所詮、俺達ザフトは、民兵に過ぎないということか。

「はぁ、……始末は自分達の命でつけるだろうさ。それよりも、アーサー、アラスカはどうなってる？」
「それが、……いまだに敵の反攻が激しく、過半を超える部隊の撤退が上手くいっていません」
「トライン君、司令部は、敵にサイクロプスの情報を流してるのかい？」
「……その情報も、敵防衛隊は一種の欺瞞情報と判断しているようです」

……これはもう、どうしようもないということか。

「どうやら、詰んじゃったみたいだね」
「……ええ」

俺とゴートン艦長の間を、これから起きる惨事で犠牲になる哀れな者達を迎えに来た、天使の一群が通り過ぎて行く。

そんな沈黙を破ったのは、律儀にもサブモニターに映るアラスカを観察していたアーサーの言葉だった。

「あ、サイクロプスが、……起爆した、ようです」

アーサーが見ていた映像……、軌道上からの観測映像でも、アラスカで大規模な爆発が起きている事が確認できた。艦橋に詰めている管制官達も、呆然とした表情で、凍りついたように、その光景を見つめている。

「トライン班長、ジブラルタルに関する情報の仕入れと、Ｌ４への警戒態勢を強めるように」
「……あ、はい、了解です」

ゴートン艦長の指示で我に返ったアーサーが所定位置に戻り、管制官達に指示を出し始めたことで艦橋内の空気が再び動き出した。

「……かなりの損害、だろうねぇ」
「……でしょうね」

今の所、アラスカ侵攻部隊の損害はわからないが、その戦力にかなりの打撃を受けたのは間違いないことだ。

そして、ザフト地上軍の戦力が大幅に減ったということは、連合

がＭＳを作った事実を加味して考えると、地球からザフトが叩き出されるというのも時間の問題ということだろう。

……つまり、今日、つい先程、この戦争の潮の流れが変わったのだ。

だから、これからは地球連合と、何とか講和に持ち込む為に、如何にして、この戦争を痛み分けに持ち込むかを考えていかないといけない。

「いやはや、戦の女神は更なる流血を望み、相争う人の悲喜劇は続く、かねぇ」

「正直、これで戦争が終わってくれれば、良かったんですけど」

「……現実は、往々にして、非情だよ」

「確かに……」

艦長の言葉に頷き返した後、サブモニターに表示され続けている、軌道上から映したアラスカを見る。

連合軍の基地があったと考えられる辺りが、事前の軌道爆撃の影響もあるだろうが、大きく吹き飛んで、抉り取られている。

まったく、自然保護団体辺りが見たら、怒りの余り、卒倒しそうな光景だな。

……。

そういえば、ラウの奴、アラスカで基地内部に侵入なんて無茶をしていたみたいだけど、無事に逃げる事ができているといいが……、っていうか、よくよく考えたら、何故に、アラスカに、ラウがいるんだろう？

まさか、足つきに逃げ切られてしまったんだろうか？

……まぁ、そのことは、今度会った時にでも聞くことにしよう。

そんなことを考えながら、俺は、何らかの情報や命令が来るまでの間、大地に深く大きな傷跡を残したアラスカの大地を見つめ続けた。

61　加速する時、変化する潮　6（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

62　加速する時、変化する潮　7

5月8日。
戦争の潮目が変わったこの日、ザフト地上軍は勝利と敗北の両方を手にした。

まずは、勝利、……オペレーション・ブリッツブレイクの顛末。
この作戦の目標であるパナマ宇宙港のマスドライバーの破壊は、作戦の柱であるグングニールが見事なまでに正常に起動した結果、ＥＭＰによってマスドライバーの制御機構が暴走し、リニアレールが過負荷に耐え切れなくなって爆発し始め、最終的には施設全体を吹き飛ばしたことで成功に終わった。
降下した部隊も、命令を無視した一部の暴れ者を除き、カーペンタリアの海洋部隊に回収されて、無事に帰還している。なんでも、命令を無視して降伏を望む連合軍を相手に、散々に暴れ放題に暴れた狂け……げふげふ、自称、プラントの勇者達が殿になったお陰で撤収も楽だったという話だ。

……ちなみに、自らとザフトの野蛮さを世に誇示して見せた勇者達は、こちらが想定していた以上の速さで到来した、初登場となる連合製量産型ＭＳを含む強力な連合軍部隊の増援によって、当然のことながら、強制的に、冥府の門を潜らされている。

勇者が迎える最後としては、相応しいといえば相応しいのだが、できれば、その存在を誇示する前に、大人しく散っておいて欲しかったと思うのは、人として悪い事なんだろうか？

……。

はぁ、何にしても、人の死を望むなんてさ、最近、人として順調に壊れていっているのが、自覚できるよ。

次に、敗北、……オペレーション・スピリットブレイクの顛末。

アラスカ基地制圧のために宇宙から降下した部隊と海からの上陸に成功した部隊が、アラスカ基地と防衛隊を囮にしたサイクロプスによる自爆攻撃に巻き込まれ、全体参加戦力の七割を失った。

……これは概算だが、全地上軍の半数以上の戦力が一度に失われたことになる。

参加部隊の七割……、地上軍のＭＳ戦力を構成する半分の人命が永遠に失われたのは、人的資源が少ないプラントにとっては、地球連合軍の本拠地が破壊できたことを差し引いたとしても、大きく、痛すぎる損害だ。

更に付け加えれば、サイクロプスの影響外への撤退に成功した部隊も、回収に当たったボズゴロフ級の積載許容量の関係上、ＭＳの大半を海へ投棄しなければならなくなった。

これらＭＳの損失も、地上軍にとって、大きな痛手……、いや、これは考えようかな。

命は、人は一朝一夕にできるものではないが、物は、ＭＳは作ろうと思えば作れるのだから、それを考えたら、容認できる損失だろう。

現に、アラスカに従軍した部隊は、侵攻を受けているジブラルタルではなく、ザフト地上軍の最大根拠地であるカーペンタリアに引き揚げる事になり、そこで再戦力化が為される予定だそうだ。

これら二つの作戦によって、ザフトは連合軍の本拠地とマスドライバーという二大重要施設を破壊したことになるが、そのためのペイとして、地上軍戦力の半数以上が失われている。この時点だけの話ならば、収支的に釣り合いが取れなくもないが、今後の事を……、地球連合とプラントの国力差から生じる回復力の差を考えると、戦略的に敗北したと言うべきだろう。

また、例の如く、役立たずなザフト広報局は、いつものように宣伝戦で地球連合に負けており、アラスカ基地の壊滅はザフトの新兵器だという情報が全世界に流された結果、地球連合の継戦意志を砕くどころか、逆に強硬路線へと世論が傾き盛り上がり始めている。

まったくもって、こちらがこの作戦で望んだ事象と逆さの結果になってしまい、こちらのモラールが砕かれてしまいそうになるから、洒落にもならない。

5月9日。

ザフトが実行した二つの強襲降下作戦の裏で発生していた、連合軍によるピレネー防衛ラインへの攻勢に対応するため、地上軍大西洋・アフリカ方面ジブラルタル司令部は北アフリカ各地に点在していた警備部隊をイベリア半島に移動させて、連合軍海洋部隊の対応とピレネー防衛ラインの予備戦力とした。

結果、後方に新たな第二線が構築されたことで、翌日の10日に

ピレネー防衛隊は逆撃を行い、連合軍部隊に打撃を与え、攻勢を退けることに成功した。

……したのだが、事態は、より一層、拙いことになってしまった。

5月10日。

ピレネー防衛ラインへの攻撃を退け、それに伴なって海洋部隊も引き揚げたと思ったら、連合軍の二の矢が、北アフリカのスエズ……、地中海と紅海とを結ぶスエズ運河を挟むように両岸に展開している、中東方面の防衛ライン、スエズ防衛線に向けて放たれていたのだ。

しかも、御丁寧にも、パナマで初登場したばかりの量産型MSが、まだ少数ではあるが戦術単位として運用されてである。

この攻勢に対し、スエズ防衛隊は善戦こそしたものの、エーゲ海から進出してきた連合軍海上打撃艦隊や空を覆うほどの航空戦力の支援の中で実行された、連合軍MS部隊による防衛ラインの一点突破を許す事になる。

これの対応にMS部隊が忙殺された結果、物量を誇るリニアガンタンク部隊の渡海を許し、圧倒的な数の力で蹂躙されることになってしまった。

止むを得ずスエズ防衛線を放棄した防衛隊は遅滞行動を行いながら、ビクトリア基地へと撤退を開始したのだが、予備戦力がないことから逆撃もままならず、また、部隊を纏め上げるだけの核になれる指揮官が存在しなかったこともあり、追撃してくる連合軍の勢いは止まる所を知らない状態だったそうだ。

そんな悲惨な撤退戦を繰り広げるスエズ防衛隊からの、このままでは全滅する、という悲鳴のような支援要請が相次いだことで、プラントに引き揚げる予定だったザフト宇宙軍が作戦行動を一日延期して、軌道爆撃艦隊を構成する全艦による大規模な軌道爆撃支援が行われることになった。

この在庫一掃とも呼べそうな軌道爆撃によって、追撃部隊の後方支援部隊が存在していた一帯が悉く耕された事で、ようやく、連合軍の侵攻を停止させることができたのだが、時既に遅く、防衛隊は戦力の四分の三分を喪失するという凄惨な状態だった。

……。

もしも、北アフリカの警備部隊が存在していたのなら、ここまで手痛い敗北を喫するような事にはならなかっただろうが……、いや、ここは戦力配置をどうこう言うよりは、連合軍が一枚上手だったと思うことにしよう。

その方が、うじうじと仮定想定をするよりも健全だろう。

……。

とにかく、北アフリカの表玄関が開いてしまった以上は、北アフリカの占領地やビクトリア基地とジブラルタル基地との連絡、そして、両基地そのものが危ういことになってしまった。

一応は、カーペンタリアから両基地への増援が行われることになっているが、スエズ運河を押さえられたためにジブラルタル基地への増援は難しいし、また、連合軍の無尽蔵にも思えてくる回復力の前にビクトリア基地も、正直、いつまで持つものか……。

暗い話題しか見えてこないのが、これがオペレーション・スピリットブレイク後の地球の情勢だ。

◇　◇　◇

5月20日。

作戦を掩護するための特別任務が終わり、通常任務に戻った戦隊は例の如く、L4一月間で待伏せをしている。

とはいうものの、先の作戦から十日は経っているが、連合軍の地上の打ち上げ施設……、マスドライバーを潰したことが効いたみたいで、連合軍の定期運航便じゃなかった、輸送船団も月からの片道のみになり、その回数も、俺達、独立戦隊群による群狼の如き度重なる波状襲撃もあってか、大幅に数が減っている。

よって、空き時間が大幅に増えたため、俺も隊長としての日常業務に精を出す事が出来るというわけだ。

今もレナと共に隊長室で、オペレーション・スピリットブレイク及びブリッツブレイクの影響で滞ってしまっていた隊員からの要望や各班長から提案された案件の決裁、補給物資申請等々の書類を作成したりしている。

いやはや、どれだけ大きな作戦があろうとも、日常において発生する問題はなくなることはない。まぁ、これも隊を預かる責任者の仕事と割り切って、頑張って処理している。

だから、連合軍宇宙艦隊の動きが停滞している現状は、大変ありがたい。

……いや、本当に　熱く白熱している地球とは違い、宇宙に動きは見られないのだ。

「先輩、地球は大騒ぎなのに、宇宙は静かなものですね」
「俺としては、その方がいいさ。お陰でこんな事務仕事もできるし、地球への支援、……軌道爆撃も上手くいっているしな」
「でも、軌道爆撃だけでいいんでしょうか？　あれだけじゃ、連合軍の侵攻は止められないと思うのですが？」

うん、レナもよくわかってるね。

「確かに、爆撃だけでは連合軍の侵攻は止めることはできないだろう。けど、これ以上の支援というか、地球に援軍を送ろうにも、月の連合軍宇宙艦隊との睨み合いが仕事になってる宇宙軍からは、これぐらいしかできないのが事実だ」
「……確かにそうかもしれませんが」

……うーむ、レナにはぶっちゃけてみるか。

「レナ」
「はい？」
「お前は現実をしっかりと把握しているようだから言っておくが、……恐らく、プラントは負けるか、良くて引き分けるのが精一杯だろう」

この俺の意見は、十中八九、ザフトの一般隊員から、カッサンドラー扱いされるだろう。

「……先輩は、そう、予想しているんですか？」
「ああ。……元より地球連合とプラントでは、国力に差がありすぎた。純軍事的に見ても、例えコーディネイターがナチュラルよりも優秀だとしても、個々人の能力で相手を圧倒したとしても、数の力で押し潰されるのが関の山だしな」
「……回復力の差、ですか？」
「そう。こちらが……、プラントの人的資源が乏しいのに対して、地球連合の人的資源は無尽蔵、ってのは言い過ぎだけど、豊富なのは間違いない。現実に、ザフトは今までの一連の戦闘で消耗した戦力の回復に手間取っている。例えば、世界樹の種の駐留艦隊でいえば、今月になって、ようやく定数の半分を超えたくらいにしか、補充が進んでいない」

逆に、連合軍の宇宙艦隊は順調に再建が進んでいるはずで、そろそろ完了していると考えた方が無難だと思う。

「地球連合に比べれば、哀しくなる程に劣勢な国力で、かつ、微々たる回復力しか持っていないのに、この一年もの間、よくぞ優勢を保ったものだ、とプラントとザフトを褒めてもいいくらいさ」

なんて自画自賛（？）しているが、本当は、後先考えない自暴自棄が生み出した、一種の奇跡だろう。

「だから、あんな賭けみたいな作戦を？」
「ザフトの偉いさんは、連合軍が高性能なＭＳを開発した以上、いつまでもこの有利な状況は続かないと判断していた。……要するに、この戦争が長期化すれば、プラントは地球連合に追い詰められて、間違いなく、どん尻になるって解っていたのさ。だからこその、アラスカへの強襲降下作戦だった。……オペレーション・スピリット

ブレイクはプラントが有利な条件で講和するために実施した、乾坤一擲の賭けだったんだよ」

「……」

「そして、その賭けに負けた」

しかも、賭けに負けた要因が、身内の情報漏洩である可能性が大きいだなんて、救えない話だ。

「だから、これからは、如何にして、先の大博打での大負けをフォローして、いかに負けないように持っていくかに考え方をシフトさせないと駄目だろう。……というわけで、レナ、何か思い浮かばないか？」

「うっ、そ、そうですね、……プラントに直接的な圧力をかけてくる月の攻略を目指すのはどうでしょうか？」

「いいアイデアだとは思うが、スピリットブレイクで悪夢を見た以上は、尻込みするというか、計画はあっても、恐らく実施されないな」

流石のザフト上層部もスピリットブレイクの実質的失敗で人的損失が深刻なレベルに達しているから、新たな賭けをしようにも、早々、決断できないだろう。

「……こちらからの仕掛けるのは、やはり厳しいということですか？」

「悲しい事に、そういうことだな」

「ですが、今現在も、地球では連合軍の攻撃が激化していて、このままだとビクトリアが……」

「ああ、連合軍にビクトリアを……、マスドライバーを奪回されてしまったら、地球から大規模な戦力が上がってくるし、月の連合軍艦隊にも行動の自由を与える切欠になりかねない。まさに、万事休

すって奴だな」

仮にビクトリアを奪回されたとしても、せめて、マスドライバーを破壊することができれば、時間的な猶予が生まれるから、少しはプラントの防備を整えることができるはずだ。

もっとも、その時間は地球連合の味方だがな……。

「現状を認識すればするほど、鬱になるだろ？」

「ええ、できれば、見据えたくないことばかりです」

「……だが、民兵とはいえ、一応は軍人に類される俺達には、自分達にとって都合のいい現実だけを見るなんて贅沢は許されない。どれだけ悲惨な状況になったとしても、歯を食いしばりながら、しっかりと現実を見据え、どれだけ見っとも無くても、足掻いて足掻いて足掻き尽くさないといけない。そのためにも、今後、悪化していくだろう未来を想定して、対処できるだけの力を練りたい。……だから、レナも、どんなことでも、どんな些細なことでもいいから、何か今後に関わりそうなことが思い浮かんだら、話して欲しい」

「……はい、わかりました」

まっ、小難しい話はここまでにして、仕事を再開しようかね。

「さて、難しい鬱になる話はこれまでにしてだな、レナ、次に世界樹の種に寄港した時にする親睦会の日時や内容が幹事から上がってきたから、戦隊員全員にお知らせを入れておいてくれ」

「あ、上がってきたんですね。わかりました、全員に出しておきます」

レナが端末に向かうのを何となく見ながら、俺は、自身の胸の内で蠢く感覚を把握する。

……この置き場の無く、収まりどころが見つからない上に、掌握するには不確定な感覚は……不安だ。

この感覚が、先のオペレーション・スピリットブレイク後から、常に、俺の胸で揺蕩っている。

まったく、漠然とした不安ほど、扱いにくいものはない。

……はやく、この不安を解消したいものだ。

そんなことを思いつつ、俺もまたレナに倣い、自身の仕事……、これで三枚目となるパイロット補充申請書やＭＳ整備班とデファンの連名で上がってきた戦隊ＭＳ隊の新型ＭＳへの更新要望への返答といったことに取り掛かった。

62　加速する時、変化する潮　7（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／09／15　誤字修正。

63　潮流が生む瀬戸際　1

6月1日。
地球連合は、地球上の国家全体が地球連合の下で一つにまとまるべきだとする主張を、ワンアースという標語を使って大々的にアピールし始めた。
地球連合に参加していない国やプラント支援国である大洋州連合へ圧力をかけるためだろうが、ザフトがアラスカ基地を新型大量破壊兵器で吹き飛ばした、なんて虚偽報道や、去年のエイプリルフール同様、こんな恐ろしいことを平然と為すコーディネイター国家プラントは叩き潰すべきだ、とするプラント脅威論による世論誘導と抱き合わせで行うあたり、これを考えた奴は上手くやりやがったというか、悪辣だと言えるだろう。

もしも、この一連のワンアース運動を考えた奴がザフト広報局にいれば、プラントは宣伝戦や情報戦で勝っていたはずだろうから、もう、戦争は終わっていたかもしれない。

……まぁ、詮無きことか。

6月5日。
スエズを突破した連合軍部隊との間に新たに構築された北アフリカ戦線において、五月下旬から断続的に続いた連合軍の攻勢によって、遂にジブラルタル基地とビクトリア基地の連絡を絶たれてしまった。
カーペンタリアから増援部隊が到着したり、宇宙軍の軌道爆撃艦

隊からの支援爆撃もあったのだが、本格的に投入され始めた連合軍量産型ＭＳ部隊によって、元より少数の戦力で維持されていた戦線はズタズタに寸断されてしまったためだ。

やはり、先月のアラスカ強襲降下作戦の失敗でアフリカ駐留軍主力部隊を失った影響は大きい。

イベリア半島においても、ピレネー防衛ラインへの圧力も日に日に増しているし、大西洋や地中海においても、連合軍海洋部隊が制海権を握りつつある。

北アフリカが連合軍に制圧され始めている以上は、ジブラルタルの放棄も視野に入れて、動いた方がいいと思わざるを得ない。

６月１０日。

以前から懸念していた通り、連合軍はビクトリア奪回を目指して、ビクトリア基地への本格的な攻勢を開始した。しかも、御丁寧に数の有利を利用して、ジブラルタルへの抑えに一個軍規模の陸上戦力を、カーペンタリアからの援軍阻止のために二個洋上艦隊を用意するという贅沢振りだ。

まったく、その余剰戦力、こっちに分けてもらいたいくらいだ。

……。

いや、無理なのはわかってるけど、こうも戦力に差が出てくると、そう思いたくもなる。

はぁ、国力の差が切ない。

……で、北アフリカ戦線から敗走してきた部隊を吸収した基地防衛隊が必死の防衛戦を繰り広げ、軌道爆撃艦隊も支援爆撃を行っているが、軌道上からの観測で連合軍に大規模な予備戦力の存在が確認されている以上は、陥落は必至だろう。

後は、如何に陥落を先延ばしにするか……、或いは、ＭＳを失ったパイロットを宇宙に上げるか、だな。

６月１５日。
太平洋で動きがあった。

大西洋連邦の太平洋艦隊を主力とした地球連合軍が、中立国であるオーブ連合首長国に侵攻したのだ。

地球連合が中立国であるオーブに攻め込む理由は、先月のブリッツ・ブレイクでパナマのマスドライバーを破壊された為、オーブのマスドライバーを確保することで、一つもマスドライバーがない状況を打開したいからだろう。

無論、他に、先だって地球連合が突きつけた、マスドライバーを貸せという要求を、自勢力とは比べものにならない小国に蹴り飛ばされたなんて面子の問題もあるだろうが、やはり現実的に考えると、月との補給連絡線を絶たれている状態は頭が痛いだろうし、プラントの体制が立ち直る前に地球の戦力を速やかに宇宙に上げて、宇宙でも形勢を有利に持って行きたいなんて思惑も働いているはずだ。

でも、確か、ジャンク屋組合が所有権を主張するギガフロートなんて代物にもマスドライバーがあるらしいが、これはどうなってるんだろうか？

……噂にものぼらないから、とりあえずは放っておいてもいいか。

話を戻して、このオーブへの侵攻で、ＭＳ部隊を中心とする連合軍と国土防衛を図るオーブ軍とが、海上や水際、そして内陸で衝突したのだ。

ここで意外だったのは、小国であるオーブがＭＳを独自に開発して配備していたことだろう。

いやはや、ＭＳなんて開発に時間が掛かる代物をいつの間に開発していたのだろうか？

……けど、よくよく考えてみれば、中立条件を破って、地球連合と共同で秘密裏にＭＳを開発していたなんて前科があるんだから、こういう荒業もやろうと思えば、できるのかもしれない。

まぁ、とにかく、独自ＭＳなんて代物で抵抗したオーブ軍だったが、元より圧倒的な物量を誇る連合軍に比べれば戦力的には遥かに劣勢であったため、一日の戦闘で大勢は決まり、オーブは降伏することになる。

なんとも、今後のプラントを想起させてくれる戦いだ。

しかしながら、この降伏に至る前、オーブ首脳陣は本当に最後の抵抗として、自分達もろとも、マスドライバーや軍事施設、ラインブルグ・グループとも縁が深いモルゲンレーテの本社やその工場を自爆させたらしいのだ。

……いや、プラントの住民として、また、ザフトに籍を置く身と

しては、マスドライバーを破壊してもらえるのは、とってもありがたい間接支援みたいなものだけどさ、その、もう少し、先のことをっていうか、残される国民の未来のことを考慮して、後始末をした方がいいと、俺は思う。

きっと、うちの実家も影響受けるはずだろうし、大丈夫かぁ。

……。

まぁ、そんな俺の個人的な感慨は置いておくとして、この一連の戦闘で、アラスカ戦で乱入してきたＭＳや、同じく所属不明のＭＳがオーブ側に存在していたらしいとのことだが、連合側に量産型とは別に、新型が存在していたらしいから、それらと誤認した可能性もある為、未確認状態だ。

以上、これらが６月中旬までの地球情勢だ。

◇　◇　◇

６月２０日。

戦隊は約三ヶ月に渡る地球一月間の通商破壊任務を終えて、無事にプラントへと帰ってきた。

帰還前に任務報告書を機動艦隊司令部に送ったら、とりあえずは三週間の休暇が出るとのことなので、一安心といった所だ。なんとなれば、その間だけでも戦隊員の命を預かるという重い肩の荷を降ろせるから、俺の心身にとって非常に有難いことなのだ。

いやぁ、休暇って、ほんっとうに、いいもんですねぇ。

なんて具合に、俺が任務から解放されたことに酔っている間にも、いつもの如く、黒服さん達に乗せられた連絡艇がアプリリウス・ワン宇宙港に入港して、連絡艇用の搭乗口に近づいて行く。

「え、えっと先輩、この人達はいったい？　と言いますか、私達はどこに連れて行かれるんですか？」

「この人達は、ザラ委員長、じゃなかった、ザラ議長のお出迎えで、俺達は最高評議会議長の執務室に向かってる」

「え”？」

ついでに言えば、先に約束した飯を俺に食べさせてもらおうとしたレナも巻き添えを食らった。

「わ、私、できれば、遠慮したいといいますか……」

「レナ、人生においてはな、自分では、どうしようもないことも多々あるんだ」

「えっと、それはつまり？」

「今更遅い。……まぁ、あきらめろ」

「そ、そんなっ！」

別にレナにザラ議長と会えと言っているわけではないのだが、悲壮感溢れるレナの様子が面白く、そのことを黙っている。ついでに言えば、どうやら、黒服さん達もレナの反応が面白いらしく、だんまりを決め込み、無表情で笑みを堪えている様子だ。

いや、俺も保安局時代に身辺警護やったこともあるから、頬の筋肉の強張りとかで、何となくわかるんだよ。

俺も、警護対象の偉いさんのズラがずれているのを見て、これは……、これは突っ込み待ちなのかっ！　なんてことを思いながら、頬の筋肉を抑えつけて、噴出すのを堪えるなんて経験を何度かしたことあるからな。

そんな周囲の反応に気がつかないレナは、項垂れつつも俺の横について、連絡艇から降りるべく通路を進んで行く。

「うぅ、欲張ったのが失敗だった」
「今は反省している、ってか？」
「……いえ、それは全然」

……ほんと、レナの奴、逞しくなったよなぁ。

感慨深く、後輩の人間的成長或いは後天性の図太さを寿ぎながら宇宙港に降り立ち、靴の吸着レベルを最大にして背伸びをしていたら、丁度、俺達が接舷した搭乗口の向かい側でも同じく連絡艇が到着したようだった。

で、その連絡艇から先頭で出てきたのは、ラウだったりする。

「……おや、まぁ、ラウじゃないか」
「む、アインか？」
「いつ戻ったんだ？」
「今さっき、カーペンタリアから戻ったところだ」

俺の質問に答えながら、サングラスをかけたラウがこちらに近づいてくる。

「アラスカ戦に参加していたことは知っていたけど、無事だったん

だな。いや、ほんと、良かったよ」
「ああ、我ながら、しぶとく生き残った」
「……いや、正直、俺、ラウが落とされるのって、想像つかないんだが？」
「ふっ、そう言われても私も人間だ。……落ちる時は落ちるだろう」
そう答えた時、ラウの背後にいた緑服の赤毛の少女が、そっと、ラウの制服の袖を掴んだ。
……む、むむ？
これは、あれですか？
ラウにも春が来たってことでしょうか？
なんてことを考えてしまい、つい口元が弛みそうになるのを、保安局時代に鍛えた頬の制御能力で我慢する。
「……君が何を考えているか、おおよそ解るが……、彼女は、私の……副官だぞ？」
……今の間は、なーに？
「ん、んんっ、それよりも、アイン、君もザラ議長に呼び出されたのだろう？」
「ああ、例の如く、黒服さん達に御足労頂いたよ。まったく、おっさ……もとい、議長も毎回毎回、律儀に迎えをよこさなくてもいいのに」
いや、ほんと、仕事とはいえ、わざわざ、軍事衛星港まで来ても

らう黒服さん方に申し訳ないよ。

「それだけ、君が議長に信頼されているということだろう」

「呼び出しを無視して、逃げ出すだろうって方向にな」

ザラ議長の顰め面を思い浮かべて、ニヤリと笑うと、ラウも口元を歪めている。

「……で、ラウ、真面目な話、今回の呼び出しは先の作戦についてか？」

「さて、それは流石に、行ってみぬことにはわからぬよ」

肩を竦めたラウが移動し始めたので、それに倣う。

……。

ふと、後ろを見ると、レナの前に位置して付いてきているラウの副官の子の動きが、ちょっとぎこちないように感じる。

ついでに目もあったんだが、すぐに逸らされてしまった。

……。

あの目の逸らし方や表情の動きは……、照れよりも恐怖や怯えを感じた時の動きに近いような気がする。

それに……、ザフトの隊員にしては、無重力空間での移動の仕方が少々、下手だしなぁ。

……。

これは訳有り、ってことなのかなぁ。

「なぁ、ラウ、副官を連れて、議長に会ってもいいかな？」

「……む、それも面白そうだが……、おそらく我々と同じく呼び出されているはずのユウキが、女連れとは羨ま……けしからん、等と言って、切れるのは間違いないだろうから、辞めておいた方が無難だろう」

「はは、確かに、違いない」

なら、黒服さん達にお願いして、レナ達の待機室でも用意してもらうとするか。

「レナ、黒服さんにお願いして、待機室でも貸してもらって、俺達の用件が済むまで、その子と待っていてくれ」

「あ、はい、わかりました」

「後、その子さ、どうやら疲れているみたいだから、根掘り葉掘り、地球の状況を聞いたりして、面倒をかけるなよ？」

「もう、先輩……、私は、そんな注意を受けるような、子どもじゃありません！」

うへぇ、少々怒らせてしまったが……、釘を刺したから、大丈夫だろう。

「とりあえずは、これでいいだろう、ラウ？」

「……ああ、感謝する、アイン」

……まぁ、ラウに副官の子の細かい話を聞くのは後にして、とりあえずは、ザラ議長のご機嫌伺いのことを考えることにしようかね。

63　潮流が生む瀬戸際　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

64　潮流が生む瀬戸際　2

レナ達とはプラント政庁内途中で別れた後、ラウと現状について駄弁りつつも、いつもザラ議長に取り次いでくれる件の秘書さんの先導で移動し続けて、国防委員長室に案内された。

四月に行われた最高評議会の議長選挙では、僅差で、前評議会議長のシーゲル・クラインを破ったと聞いていたのだが、何故に議長室ではないのか？

この疑問、何故に案内先が国防委員長室なのかということを、すんばらしい御胸の秘書さんに聞いてみたら、ザラ議長が言うには、自分の本分は国防委員長であり、最高評議会議長を兼ねて務めるのは、あくまでもプラントの戦時体制時を整える為に政権運営の主導権を握る必要があったからであり、戦争終結の暁には議長職を辞するので部屋を変える必要はない、なんてことを言ったとか。

プラントの……、一国の最高権力を手にして、この無欲ぶり。

議長って、俺が想像していたよりも、遥かに淡白だよなぁ。

……。

あっ、もしかして、あれか？

夜の営みが充実し過ぎているから、精力が減退しているのか？

……。

今まで本人から聞き出した内容や以前の様子から考えるに……、ありえそうな話だなぁ、おい。

そんなわけで、御本人に直接聞いてみた。

「で、どうなんです、本当のところは？」

「……若造、来るなり、挨拶もなく、何を言っている？」

「これは失礼。ラウ・ル・クルーゼ、アイン・ラインブルグの両名、お召しとのことで参上しました。……それでですね、ザラ議長が戦争終結までしか議長職を務めないと聞きまして、これはやはり、夜のセイ活が充実し過ぎている所為なのかなと考えまして、是非とも、真偽を聞いてみたいと思いましてですね」

「……ノーコメントだ」

むぐ、意外な反応。

だけど、まぁ、前よりも更にヤツレ……精悍な顔で露骨に目を逸らされてしまった以上は、流石に追求できんはな。

ぶっちゃけ、その顔見たら、答えがわかったし……。

でも、男として羨ましいよなぁ。

なんてことを考えていたら、議長の背後に控えていたユウキが口を挟んできた。

「おい、ラインブルグ、このような公式の場ではな、そういうことはあまり聞かない方がいい」
「えー、でもよぅ、議長がこんなに枯れは、もとい、精悍になるんだぞ？　あの綺麗な奥さんを見ておいてさ、ユウキ、お前は羨ましく思わないのか？」
「む、それは当然、思うに決まっているだろう」
「だろ？」

ユウキの賛同を得られた所で、もう一人、別の人物……、ウェーブがかかった長い亜麻色の髪を持つ結構な美人が応接ソファに座っていることに気がついた。

どうやら目を丸くして、俺と議長のやり取りを見ているようだった。

「議長……、あんなにも素晴らしい奥様がいるというのに……、こんな昼間から女性を執務室に連れ込んだりして……、まったく……、このスケベ親父」
「なっ！　若造、貴様、人聞きの悪いことを言うな！　私はレノア一筋だっ！」
「あはは、冗談ですよぅ。いやぁ、それにしても残念だなぁ。今の言葉は奥様に聞かせてあげたかった」
「……ぐっ！」

こちらを思いっきり睨みつけてくるザラ議長の威圧を素知らぬ顔で受け流していると、自身の心に重たく沈み溜まりに溜まっていた負荷が軽くなっていくのがよくわかる。

ああ、一時の油断もできない時間から開放されるって、いいよね

ぇ。

気持ちよく、日頃のストレスを解消できたので、今更ながらだが、真面目な顔を取り繕って、用件を伺うことにする。

「それで議長、今日の用件は、先の作戦のことですか？」

「き、貴様と言う奴は……、散々、引っ掻き回しておいて……」

「いえいえ、部屋に入ったら、議長が、こーんな感じで、眉間に皺を寄せて、難しい顔をしているのがわかりましたからね。息が抜けない議長のことだから、執務中もずっと、そんな顔をし続けているに違いないと考えまして、流石にそれは、精神衛生上、如何なものかと思いましてですね、はい、小粋なジョーク（？）を飛ばしてみたんですよ」

「……ふぅ。まったく、貴様という奴は……、彼女はそのような存在ではない。とにかく、今は気にしなくていい」

議長の私生活を揶揄しておいて、上手いこと議長を丸め込んだためか、隣に立つラウが呆れている気配が伝わってくる。ついでに言えば、議長の後ろで立っているユウキは露骨に呆れた顔を見せている。

もっとも、俺は別に気にしないがなっ！

内心で嘯いていたら、ザラ議長が話を切り出したので、真面目に話を聞くことにする。

「今日、貴様らを呼んだのは、今、若造が言った通り、先の作戦の事もあるが……、実際に前線に立つ者に現在の状況を聞いてみたい

と思ったからだ」

おお、それは素晴らしいことだと思いますです。

「では、クルーゼから頼む」

「はい、では、現状における地上軍の状態に関してですが……」

ラウの話を物凄く簡単に略すると、各地で地球連合軍の反攻を受けているザフト地上軍は、先の降下作戦の失敗もあって、士気の低下が著しく、カーペンタリア以外は、もう持たないだろう、とのことだった。

また、話の途中、五月の作戦、オペレーション・スピリットブレイク及びブリッツブレイクの立案とプラント防諜体制の見直しが評価されて、新たに戦術統合即応本部、……一般にはフェイス（ＦＡＩＴＨ：Ｆａｓｔ　Ａｃｔｉｎｇ　Ｉｎｔｅｇｒａｔｅ　Ｔａｃｔｉｃａｌ　Ｈｅａｄｑｕａｒｔｅｒｓ）と呼ばれる特務隊の所属となったユウキから、ビクトリア基地の絶対防衛線が破られて、陥落寸前であるということ、現地の混乱からマスドライバーの破壊に失敗する可能性が高いということが補足された。

俺も宇宙の現状……月やＬ４の連合軍艦隊に動きがなく凪の状態が続いているが、それは嵐の前の静けさに過ぎないということと、今後の見通し……地上から回される戦力と量産型ＭＳやミサイル搭載型ＭＡ及び艦艇の新規建造によって、強化されるであろう連合軍艦隊によるプラントへの圧力増大について、話をした。

「プラントを取巻く状況は厳しさを増す一方だな。……やはり、先月の作戦失敗は大きいということか」

「ええ。ですが、正直に言わせてもらえば、まさか、地球連合軍の総司令部が存在する基地に、大量破壊兵器が……、サイクロプスが仕掛けられているとは、誰も思いませんよ」
「……私も実際に仕掛けられている装置を目にした時は驚きました。しかしながら、月でも危うく巻き込まれそうになった身から言わせてもらえば、あれほど効果的に戦域を破壊する兵器は存在しないでしょう」

俺の語をラウが引き継いでくれたので俺も、再びラウの後に続いて、発言する。

「ですが、以前、資料で見た限りでは、サイクロプスが大規模な装置であり、かつ、固定式である以上は、事前に用意しなければならないはずです。……議長、先の作戦、……上層部から漏れた可能性はありませんか？」

……ザラ議長は瞑目して語らず、代わりにユウキが沈痛な面持ちで答えてくれた。

「ラインブルグの疑念はもっともだと思う。実際、私もその線を疑い、オペレーション・スピリットブレイクが失敗に終った後、直に、評議会周辺の内偵を進めた」
「結果は？」
「……黒だった」
「……そうか」

最高評議会の議員に選ばれるくらいなんだから、最低限、あの作戦の目的、意味を解って欲しいと思うのはいけないことだろうか？

「誰からだ？」

「……プラント最高評議会議員であるシーゲル・クライン、……前最高評議会議長だ」
「ちょ、……え、おいおい、ユウキ……、それは、本当か？」
「ああ、保安局にいたラインブルグなら知っていると思うが、保安局の特別捜査部が、オペレーション・スピリットブレイクを評議会で説明した時にその場にいた全員を調査し、怪しい線を一ヶ月掛けて慎重にかつ集中的に内偵した結果だ」
……保安局特別捜査部が一ヶ月の内偵か、これは、もう、確定だな。
俺が絶句している横で、代わってラウがユウキに問いかけてくれる
「ユウキ、その情報漏れが前議長だと確定した糸口は？」
「ああ、今年四月にロールアウトした新型機、【ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａ】フリーダムが、オペレーション・スピリットブレイクの際に強奪された事件にラクス・クラインが大きく関わっていたことが判明したからだ」
「む、そのフリーダムとは？　型番から察するに、ＭＳのようだが？」
「……ニュートロンジャマーキャンセラーを搭載した、核動力機だ」
えっ、ニュートロンジャマーキャンセラー？
……。
文字通りで考えれば、ニュートロンジャマーを阻害する装置ってことか、って！
「おいおいおい、まさか、ニュートロンジャマーを無効化させ

る装置か？」
「ああ、そうだ」
「な、なんで、そんな物騒なもんをっ！　もしも、その情報が地球連合に流れたら、また、プラントが核攻撃を受ける可能性が出てくるぞっ！」
「……シーゲル・クライン前議長の指示だったそうだ」
「なっ、なn「奴は……」」

ユウキに更に食って掛かろうとしたところで、議長が改めて口を開いたので、俺も一旦、昂ぶりかけた気を何とか抑え込んで、耳を傾ける。

「シーゲルは……、去年の四月に自分が主導して行った、地球へのニュートロンジャマー散布を……、大量虐殺の引き金を引いてしまったと、常に悔いていた」

……。

「……元より、気が優しすぎる男だったからな。自身の罪の意識に耐えかねて、地球の窮状を裏から支援をしようとでも考えて、そのような指示を出したのだろう」

……。

「ニュートロンジャマーキャンセラーの開発という、シーゲルの指示を知った私は……、ニュートロンジャマーキャンセラーの情報が地球連合に流出し、再び、プラントが核攻撃を受けるかもしれないという最悪に備えるために、活動制限がより少ない核動力機を、核攻撃に対する迎撃機として、用意することにした。……それが、フリーダムだ」

……なるほど、そういう経緯か。

まぁ、確かに、ザラ議長みたいな鋼の如き精神を持つか、何らかの……、自爆テロを決意した青秋桜の狂信者ぐらいでないと、大量虐殺なんて、普通は耐えられない……、はずだよな？

一連の流れに、一応の得心をした所で、再度、ユウキが話し始めた。

「だが、さっきも言ったが、そのプラントを護る為のフリーダムが、オペレーション・スピリットブレイクの最中に、シーゲル・クラインの娘、ラクス・クラインの手引きによって、何者かに強奪された。その後、フリーダムは、アラスカでザフト及び地球連合軍を相手に大暴れした後、確たる行方が掴めていない」

つか、えと、マジですか？

な、なんなんだ、そのフリーダムの意味不明な行動は？

……。

そ、それにだ、もしも、何かの拍子で、強奪されたＭＳが…、…ニュートロンジャマーキャンセラーが地球連合に流れたら、いったい、どうするんだ？

唖然呆然とする、俺の代わって、またまた、ラウが聞いてくれた。

「……聞くが、ラクス・クラインが関与したという証拠は？」

「強奪までの一部始終において、強奪者を手引きするラクス・クラ

インの姿がはっきりと映った監視映像に加え、開発局からフリーダムの始動キーを得るためにラクスによって提出された偽造命令書も残っていた。それを保安局が指紋等の鑑定にかけた結果、本人と断定されている。後、駄目押しに生きた証人、警備兵の証言もある」
「ふむ……、では、フリーダムの行方は？」
「先程も言ったが、現在は、行方不明だ。一応は、プラント－地球軌道－アラスカ、そして、オーブまで確認しているが、それが最後だ」

はて、何故にオーブ？

「オーブ？」
「フリーダム追討の任を、これもニュートロンジャマーキャンセラー搭載の核動力機で新型の【ＺＧＭＦ－Ｘ０９Ａ】ジャスティスに出した。アラスカ戦後、オーブにフリーダムが存在したという情報は、そのジャスティスから届いた情報だ」
「ついでに聞くが、ジャスティスとは？」
「ああ、ジャスティスは、迎撃機であるフリーダムを護る為の護衛機的な存在だ。付け加えると、ジャスティスに追討命令を出したのは、フリーダムに対抗できるだけの性能を持つのがジャスティスだけだったからだ」

なるほど、核動力機には核動力機、ってわけか。

「そのジャスティスからの最後の通信で、フリーダムがオーブに存在していたことと六月のオーブ攻防戦に関わった事が把握できている」
「最後の通信……、ってことは、その、ジャスティスはフリーダムに撃破された？」

一瞬だけ、ユウキが議長を見た気がするが……、気のせいか？

「……不明だ。だが、オーブにいた諜報員からは撃破されたという情報は入ってきていない」

……鹵獲された可能性もあるということか？

それは、まずいな。

こうなったら、最悪を……、ニュートロンジャマーキャンセラーが完成した段階で、前議長が地球に情報を流している可能性もあるから、ニュートロンジャマーキャンセラーの情報が連合に流出していると考えた方がいいな。

そう考えながら、俺は事の元凶を呪……、もとい、封印すべく、その名と対策を口に出した。

「なぁ、ラクス・クラインってさ、前にも、色々と現場に迷惑と面倒を掛けてくれただろう？　逮捕するには……、プラント社会への影響が大きいな、とりあえず、自宅に軟禁でもした方がいいんじゃないか？」

俺が十割真剣にいった言葉に、ユウキや議長、それにソファの女の人まで、苦い顔をしている。

「え、えーと、その反応はいったい？」

「……ラインブルグ、フリーダム強奪に関わったラクス・クラインは、現在、行方知れずになっている」

「……へ？」

なにそれ？

「行方を追っている保安局も人手不足の中で頑張っているんだが、ラクス・クラインの仲間……、いや、言葉を誤魔化さずに言えば、クライン派が匿っているようで、見つからないのだ」

「本当ですか？」

「ああ、忌々しいことにな」

また、眉間に縦皺を刻み込んだ議長の肯定を受けてしまい、頭を掻き毟りたくなる。

「な、なら、ユウキ、前議長は？　情報が漏洩したラインは割れているのか？」

「それは大丈夫だ。前議長に関しては外部から二十四時間態勢で監視しているし、漏洩したラインも特別捜査部の綿密な調査の結果、実際に情報を外部へ洩らした者を割り出して拘束、保安局拘置衛星で拘禁状態に置いて、尋問を続けている」

うん、それは良かった。

「で、どういうラインだったんだ？」

「……あの時、オペレーション・スピリットブレイクを説明する最高評議会に出席していた評議会議員シーゲル・クラインからラクス・クラインへ、そして、クライン派の一部へと伝わり……」

「外に漏れて、地球連合に流れたってか？」

「ああ」

あー、もう、やってられんわぁ。

「その結果、アラスカに降りた連中は死んで、プラントは戦争を終

結させる為の大博打に負けたってか？」
「……アイン、言葉が過ぎるぞ」
「だがな、ラウよ。上に立つ人間の口が軽いってことは、ただ、それだけで、十分に罪だぞ？」
「それは、私もそう思うが……」

……ああ、もうっ、収まりがつかないっ！

「なぁ、こっちはさ、戦争を少しでもマシな状況で、上手い落着点を探って終わらせるために、後方が頑張ってくれていると信じて、命賭けて……、自身の死や、仲間の死を覚悟して、戦場に立ってるんだぞ？　それを……、それを……、簡単に、裏切ってくれるなよ」

……俺達の意志を、死んでいった奴等の遺志を、無駄にしてくれるなよ。

「……だいたい、アラスカで死んだ連中やその遺族に、なんて言えばいいんだ？　間抜けにも上層部が、それも議長を務めたような人間が情報を漏洩しました、その結果、あなた達やあなたの大切な人は天に召されました、とでも言えばいいのか？　いや、それよりも、クライン派はさ、そもそも、何を考えてるんだ？　この戦争を起こしたのは誰だよ？　プラントが独立を勝ち取る為って理由をつけて、自分達も一緒になって、戦争になるのがわかっていて、自分達から引き金を引いたんだろう？　なのに、今更、自分達の業から目を背ける様な訳のわからんことをしやがって！　本当に、自分達がしたことの意味が解ってるのか!?　もしも、戦争に負けたら、これまでの犠牲が無駄になるどころかっ、プラント自体の存続、いや、ここに住む住民が皆殺しにあう可能性だってあるんだぞっ!?　何のために！　何のためにっ！　何のためにっ!!　この戦争で、敵味

方関係なくっ！　多くの犠牲を出したんだっ！　もしも、この騒動の原因がっ！　ただ単に、クライン派が権力を持ちたいだなんて考え方ならっ！　今すぐっ！　俺がっ！！　連中にっ！！！　引導を渡しに行ってやるっっ！！！！」

「お、落ち着け、ラインブルグ！」

落ち着いてなんて、いられるか、ちくしょうめっ！

「若造」

「……何かっ！」

「貴様の気持ちはわかった。……だから、少し、落ち着け」

ザラ議長に、苦笑と一緒に、何か、大人の貫禄を見せ付けられてしまった。

むぐぅ、精神的には、俺も同じぐらいのはずなのに……。

64　潮流が生む瀬戸際　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

65　潮流が生む瀬戸際　3

「先程は、醜態を晒してしまい、申し訳ないです。……なんとか、頭も冷えました」

サルでもできる反省ポーズはしませんが、反省してます。

「かまわん。……人前で自身を抑えられなくなる事は、誰もが一度位は通る道だ」

本当に、ああ、あるある、なんて言ってもらえて、幸いです。

そんなこんなで気を取りなおし、話し合いを続けるために、ザフトの文官が着る青い制服を纏った女性がいる応接ソファに全員移動する。

そこで改めて議長から、美人さんの素性を教えられた。

「彼女は最高評議会議員で外交委員長を務める、アイリーン・カナーバだ」

「初めまして、アイリーン・カナーバです。金獅子と黄狼、お二方の活躍は聞いています」

はて？

金獅子ってのは、ラウのパーソナルマークだから間違いなくラウ

のことだろうけど、黄狼って、何？

何となく、嫌な予感しかしないが、一応、聞いてみる。

「あのー、金獅子はわかるんですが、黄狼って、もしかして、俺のことですか？」

「……ああ、失礼。その異名はプラントでは知られていませんでしたね」

異名って……、また、なにか香ばしそうな臭いが……。

「ラインブルグ隊長が地球連合軍内で畏怖と敬意から、気高き黄狼、と呼ばれていることは、外交筋では有名な話です」

予感的中ーーーーっ！

な、なんだよ、その過大評価と厨二ネームはっ！？

恥ずかしさで、悶絶しそうになるが、こ、ここは……、が、我慢だ。

……。

っていうか、俺がそんな大層な扱いされるのって、俺の周りにあまりにも考えなしな連中しかいないから、ただ単に目立っただけなんじゃないかな？

……。

うん、落ち着いて考えたら、絶対、そうだと思う。

「えと、俺の話は置いておいて……、外交委員長を務めているカナーバさんが、何故、ここに？」
「最高評議会が戦争を終結させる為にどのような方策を採るのか、また、地球連合……、プラント理事国と交渉するにあたり、落し所をどこにするべきか、交渉材料は何にするべきかといったことを、ザラ議長と話し合っていたのです」
ああ、なるほど。
ザラ議長の今の職務は国防委員長だけではなく、最高評議会の議長もあるんだよなぁって、議長議長って自分で呼んでおいて、当たり前のことを忘れるとは……、プラントに帰還して気が抜けていたり、感情を爆発させて我を忘れたりしているとはいえ、ちょっと呆けすぎだな、俺。
「……加えて、先程の話、……クライン派とクライン親子の処遇に関わる話もあります」
むむ、クライン派の処遇とな？
「この戦争の形勢が地球連合に傾きつつある中、指導部の一員である最高評議会議員が不祥事を起こしていたとなると、プラント社会全体が動揺してしまいますから……」
「なかったことに……、つまりは、隠蔽するということですか？」
「有り体に言えば、そうなります」
……自然、眉間に皺が寄るのが、自覚できた。
「ふん、勘違いするな、若造。何も、罰則なしというわけではない。

シーゲルには健康に不安があるとして、最高評議会議員を辞職させるし、今後は……、最低でも戦争終結までは、保安局の監視付きで軟禁状態に置く」

確かに、遺伝子操作され、身体を強化されているコーディネイターにとって、健康に不安があるとされることは、政治生命はもちろん社会的にも致命傷になるが……。

「では、ラクス・クラインも？」

「ラインブルグ、ラクス・クラインに関しても、発見次第、拘束し、同様の措置を取ることになっている」

「他のクライン派は？」

「……全てのクライン派、……いや、穏健派が、先の事件に関わっていたわけではない」

議長に代わって、ユウキが俺の疑問に答えた後、目線でカナーバ議員を示す。

……なるほど、カナーバ議員はクライン派だったのか。

でも、今現在、普通に職務を遂行しているところを見ると、シーゲル・クラインとは距離を置いていたのか？

俺が沈黙したのを受けて、カナーバ議員が自身の思いを再確認するかのように語り始めた。

「……私は、プラント最高評議会議員として、また、外交に携わる者として、コーディネイターとナチュラルとが、共に憎悪によって突き動かされている現状に……、互いの殲滅戦になりつつある、この戦争の在り方や行方を憂慮しています」

それは、……同意する。

「しかし、シーゲル・クラインには、自身が引き起こした災禍に気を取られる余り、今、置かれている現実から乖離した、理想論的な解決策しか、……提示できなかった」

その時のことを思い返したためなのか、カナーバ議員の表情に苦渋の色が透けて見えた気がした。

うーん、前議長が、どんな解決策を示したのかはわからないけど、シビアな現実の中で戦う外交官を担うカナーバ議員にとっては、納得がいかないものか、実現不可能だと判断せざるを得ないものだったんだろうなぁ。

……。

なんていうか、理想ってさ、現実で目指すべき目標として大切なものだけど、理想である以上は、やはり実現は難しいか、できない可能性が高いという認識がないと駄目なんだろうと思う。

それがわかった上で、あえて、そこを目指す意志や行為は尊ぶべきものなんだろうけど……、それだって、目指す理想によるだろうし、現実に置かれている状況や自身の力量を弁えているか、そこに至る過程や方法を考えているのか、周囲へと与える影響を把握しているか、理想を優先する余り現実を無視していないか、といった客観的な視点がないと、理想倒れ、掛声倒れというか、理想家じゃなくて夢想家に過ぎないじゃないかな、なんて思ったりもしてしまう。

……。

何だか、つらつらと考えてしまったが……、正直、こういうのを考えるのは、俺の柄じゃないよなぁ。

って、今はカナーバ議員の話を聞かないと。

「しかも、地球連合がＭＳを開発した以上は、これまでのプラントの有利を支えていたＭＳによる有利は失われ、元より国力で劣る現実を考えると……、劣勢を……、いえ、我々は負けることになるでしょう」

カナーバ議員の言葉に、ラウやユウキが静かに頷き、ザラ議長も反論せずに無言のままでいるところを見ると、そうなると冷静に予測できているってことかね。

「どうやって、この戦争を落着させればいいか、どうやればプラントが存続できるかを考えていた時、ザラ議長から戦争終結に向けて、協力を……、地球連合の切り崩しを要請されたのです」

へぇ、ザラ議長も政戦両方から、色々と考えていたんだな。

「先月の降下作戦……、ザラ議長が提案した、オペレーション・スピリットブレイクも、連合との交渉や構成国の切り崩しを進める上で、少しでも譲歩や進展を引き出すための重要な意味合いを持っていました。それが……、あろうことか、身内の不手際からあのような結果に終わってしまい……」

……。

「ふふ、私に……、クライン派の失態や暴走を許してしまった私には、過去を嘆く資格はありませんね」

「いえ、カナーバ議員、失敗は誰にでもあることです。それよりも、その経験を次に活かせるかが重要でしょう」

あらま、驚いたことに、ラウがフォローしてるよ。

「……ありがとうございます。優しいのですね、クルーゼ隊長は」

「……いえ、出すぎたことを言いました」

俺にはわかる、奴は照れていると……。

内心でニヤニヤしながら、ラウの様子を横目で伺いつつ、カナーバ議員が話した内容から、話を変える意味合いも込めて、気になった部分を聞いてみることにした。

「それで、地球連合の切り崩しは上手くいきそうなんですか？」

「……感触は掴んでいます」

ふーん、上手くいきそうなのか。

「御存知のように、地球連合とは大元に戻れば、国際連合です。当然、その時代からの軋轢は今も残っています。そして、連合を構成する主たる三大勢力でも、特に大西洋連邦は、表でも裏でも、他国と対立する面が多いですから」

「そこを衝くと？」

「ええ、現在の所、大西洋連邦以外の国家に、個別に交渉を持ちかけ、貿易面で優遇措置を取ることや、原子力に代わるエネルギー開発や対策等の条件で、流石に独立容認とまではいきませんが、それなりの譲歩を引き出せそうな感触を得ています」

でも、それだけじゃ、プラント独立には足りないし、連合の切り

崩しにまではなっていないな。

切り崩しに役立ちそうな情報か。

……。

そういえば、サイクロプスで壊滅した、連合軍のアラスカ防衛隊はユーラシアと東アジアがメインだったと、どこかのネットワークで小耳に挟んだような気がするが……、どうだったかな？

「ユウキ、アラスカを防衛していた戦力の主力は、大西洋連邦だったのか？」

「……いや、確か、事前に掴んでいた情報や戦闘記録の分析では、各国混成で……、主力はユーラシア連邦と東アジア共和国だった気がする」

……となると、あのアラスカ自爆作戦の主導は、おそらく、大西洋連邦あたりだろうな。

なんてことはない、今から考えてみると、あのアラスカの自爆で多数の味方を巻き込んだのは、ザフトの部隊を誘引する囮という餌の面もあったのだろうが、地球連合内部の主導権や勢力争い、或いは、戦後世界を睨んで、同盟国と言う名の潜在的敵国の戦力を削ぐ側面もあったのだろう。

俺に問われたユウキもそれに気がついたのだろう、俺に鋭い視線を向けてくる。

「……この件、利用できると思うか？」

「ああ、この件は有効に使えると思う。カナーバ議員に、分析した

戦闘記録や通信記録を渡して、外交で上手く使ってもらった方がいい」
「わかった」

カナーバ議員も俺達が話した内容に思い当たることがあったのか、口を挟んだ。

「お二人は、アラスカ戦における地球連合軍の戦力配置に、何らかの意図があったと考えているのですか？」
「ええ、俺は詳しい情報を見ていませんが、あの自爆で味方を多数巻き込んだのは、おそらく、大西洋連邦による、戦後を睨んだ、連合加盟国の戦力削ぎ落しでしょうね」
「ラインブルグの言う通りでしょう。当時、アラスカに駐留していた防衛戦力を、構成国の国力比率で見ても、大西洋連邦が提供していた戦力があまりにも少ないのです。無論、ユーラシアや東アジアも気がついているかもしれませんが、……これを切り崩しに利用できませんか？」
「それは……、大いに利用できると思います」
「では、直にアラスカ戦に関する情報をまとめて用意します」
「……外交委員長として、協力に感謝します」

いや、真面目にこの戦争の落とし所を探してくれている人には、是非にも協力したい。

それにだ、そもそも、笑顔で握手しながら、背中に短剣を隠し持つなんて、外交のお仕事は俺には不可能なことだしね。

おっと、そういえば、ザフトの情報を提供することについて、議長というか、国防委員長の承認を受けていなかったな。

「議長、今更ですが、国防部から外交部へのアラスカ戦に関する情報提供、構いませんよね？」
「ああ、正規の手続きはこちらでやらせておく」
話のわかる上司って、いいよねぇ。
……。
さて、カナーバ議員による地球連合の切り崩しは、今後の望み……、楽しみにしておいて、ザフトとして、今後の国防をどうするかだな。
そう考えて、話を転換させることにした。
「それで、議長、話を変えるというか戻しますが、今後のザフトの方針はどうするつもりなんですか？」
「これ以上の地球への派兵は、戦力を吸い上げられて終わると予測できる以上、見直す方針だ」
「具体的には？」
「宇宙軍の強化が第一となる」
そう俺の質問に答えた議長に代わり、再び説明役となったユウキが強化の内容、連合軍のＭＳが出て来た事で旧式化した主力ＭＳジンの新型主力機への更新、Ｌ１及びボアズの駐留戦力強化、独立戦隊を新設して多用途に使える戦力の増強、アカデミーの今期候補生を繰上げ卒業させて、地球で損失した兵力を補填すること、等々を説明してくれた。
「うーん、ＭＳの更新やＬ１とボアズの強化、それに独立戦隊の新設はいいと思うんですが、アカデミーの繰上げ卒業は拙くないです

か？」
「確かに、一定の技量に達していない以上は、実質的な戦力足りえない気がするのですが？」

俺とラウが、アカデミー候補生の繰上げ卒業に難色を示すと、ユウキが不本意そうな表情を見せながら、説明してくれた。

「わかってはいる。いるのだが……、どうしても、手が足りないのだ」
「……それほどまでに、ビクトリアやオーブが落とされたことが大きいということか？」
「ああ、クルーゼの言う通りだ」

実は、地球のカーペンタリアには、ジブラルタル基地やアラスカ、パナマから引き揚げてきたＭＳパイロットがそれなりの数、いたりする。

だが、現状において、彼らを宇宙に上げるための手段が限られてしまっているのだ。

……以前なら、ビクトリアや中立国であるオーブのマスドライバーで、簡単に上げる事ができたんだけどなぁ。

いや、終わったことをぐずぐず言ってる暇はないか。

「となると、使い道を限って使うしかないってことだな」
「ああ、私とて、技量不足の彼らを戦場に出したくはないから、彼らの大部分をプラント防衛隊で引き受けて、これまで防衛隊に所属していた者達を各艦隊や拠点防衛隊、独立戦隊へ充当する予定をしているが……」

「わかってる。プラント防衛隊が出張るようなことにならないよう、こっちも色々と努力はするつもりだ。……けどなぁ、正直に言わせてもらえば、精々、Ｌ５まで攻め込まれる時間を先延ばしにする位しかできんだろうさ。……だから、防衛隊で、生き残れるだけの技量が身に付くように、しっかりとしごいてやってくれ」

「ああ、当然だ」

やれやれ、本当に末期戦の兆しが見え始めてるよ。

暗くなりかける思考を無理に振り払って、ユウキに一応、尋ねておく。

「それで、ＭＳの更新は俺達、独立戦隊組にもあると考えていいのか？」

「独立戦隊に熟練兵が多いことを考えると、優先して更新する予定だ」

「それは助かるな」

確か、新しいＭＳは【ＺＧＭＦ－６００】ゲイツだったな。

シゲさんの話だと、プラントで初めてビーム兵装を本格的に装備した量産機だそうだから、期待しておこう。

……。

さて、後は、今後の任務について聞いて……。

そんなことを考えたていたら、ザラ議長が改まった様子で口を開いた。

「若造、クルーゼ、それにカナーバ」
「はい？」
「……何か？」
「何でしょうか？」
「貴様らに、話しておくことがある」

……な、なんか、ザラ議長から、周囲を圧するほどの存在感というか、威厳が出てるんだけど？

ま、まぁ、とりあえず、ザラ議長が話すことを大人しく聞くことにしよう。

65　潮流が生む瀬戸際　3（後書き）

11／01／03　誤字修正。
11／02／06　サブタイトル表記を変更。

66　潮流が生む瀬戸際　4

ザラ議長がユウキに一つ頷くと、ユウキは議長の執務机から資料らしき紙束を持ってきて、カナーバ議員、ラウ、俺と、それぞれに配布していく。

「……ユウキ、これは？」

「ラインブルグ、まずは読んでくれ」

ユウキに促されたので、これ以上の問答はせず、極秘と読了後焼却処分と判された資料に目を通すことにする。

……つか、極秘はともかく、読了後焼却処分とは穏やかではない。

まぁ、とにかく、目を……。

……。

表題に【Ｇａｍｍａ　Ｅｍｉｓｓｉｏｎ　ｂｙ　Ｎｕｃｌｅａｒ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｓｔｉｍｕｌａｔｅ　Ｉｎｄｕｃｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ】って、書いてあるけど、うーん、核爆発刺激を誘発するシステムによる、ガンマ放射（注：適当）ってところなのかねぇ。

で、長いから略して、【ジェネシス（Ｇｅｎｅｓｉｓ）】か。

ふーん、『創世』だなんて、ご大層な名前だとは思ったけど、単

純な話、核爆発を利用して発生させたガンマ線を使った高出力のレーザー砲、その砲台のことみたいだな。

ん、核爆発？

コロニー国家であるプラントに核の元になる原料は……って、よくよく考えたら、大洋州連合当たりから仕入れることはできるか。たぶん、カーペンタリアの戦力で大洋州連合を地球連合からの攻撃から守るとか言って、取引でもしたんだろう。

でも、素直に核ミサイルを作らないのは何でだろう？

……。

ユニウス・セブンの件があるから核ミサイルを使用するのを嫌ったか、ミサイルだと迎撃される可能性が高いと踏んだからかな？

……まぁ、そんなことはどうでもいいか。

これの構造は、と……、なになに、核爆発を起こすチェンバー部と大きな皿形をした二次反射ミラーからなる本体部と、錐形上の尖った一次反射ミラー部で構成されている、か。

んで、ガンマ線レーザーを発射するに至るまでの段階は、まず、本体後部のチェンバー部で核爆発を起こして、発生したガンマ線をレーザーに変換し、一次反射ミラーに照射する。その照射されたレーザーを一次反射ミラー内部で拡散、増幅させて、本体の大皿もとい二次反射ミラーに送り返す。最後に、二次反射ミラーで増幅されたレーザーの焦点というか照準を目標に合わせて照射する、というものらしい。

むぅ、本当に可能なのか、これで効果を発揮するのかはわからないが、プラント脅威の技術力で何とかするんだろう。

それよりも、レーザーにガンマ線を使用するって、何気に凶悪じゃないか？

確か、ガンマ線って、放射線の中でも透過性が高いし、電離作用でＤＮＡを損傷させたりするはずだ。それに、地球に大量に降り注いだ場合、オゾン層が破壊されたりして、生態系に大ダメージを与えるって、何かの本で読んだ気がする。

まったく、何とも、物騒な代物だな、おい。

だいたい、こんな大きなものをいつから、造……ああ、なるほど、元々は、外宇宙を探索する為の宇宙船加速装置になるはずだったものを、プラントを守る為の兵器として、転用することにした、って、御丁寧にも書いてあるわ。しかも、連合軍の観測から秘匿するために、核動力を使用して、ミラージュコロイド発生装置を取り付けて、外から隠すなんてことまで……。

それにしても、この資料を一読するだけでも、これの持つ破壊力と影響力の大きさが、核に匹敵する、あるいはそれ以上に強力な戦略兵器だとわかるな。

……。

こんな危険な……、下手すりゃ、人類どころか、地球圏全体が破滅の道を歩き出しそうな戦略兵器を造る狙いは何だ？

ナチュラルの殲滅、か？

……。

いや、……今の議長なら、そんなことをしないと考えたい。

そもそも、これで人類発祥の地である地球が破壊されるようなことにならないと信じたい。

では……、なんだ？

……人類というか、地球上の生命すら、根絶やしにしかねないこれを造る……、理由は、……抑止力？

「議長、これを、使う、おつもりですか？」

「……」

「議長！」

って、おおう、温厚そうに見えたカナーバ議員が立ち上がると、眉を大いに聳やかして、議長に詰め寄っている。

対するザラ議長は、動揺もせず、黙然と座っているっていうか、些か憮然としているようにも見えるな。

「……か、カナーバ議員、少し落ち着いて下さい」

「お、落ち着いてなど、いられません！」

ユウキの奴が、慌てた様子でカナーバ議員を抑えに入ってるが、ああ、なんか、カナーバ議員を見ていると、さっきの俺を見ている

ような気がするよって、……むむ？

……ユウキの野郎、何気にカナーバ議員の両胸、触ってないか？

必死にこちらへとヘルプを求めるユウキを役得への羨ましさからスルーしてラウを見ると、僅かに口元を歪めて資料に見入っている。

「よくぞ、この瀬戸際で……、思い切ったものだ。……しかし、世界を滅ぼしかねない、非常に危険な賭けだが、効果は確実にある、か……」

ラウの呟きを聞き、先の考えが確信に至る。

「議長、相互確証破壊による冷戦構造の構築、ですか？」

「……ふん、ようやく気付いたか」

うへぇ。

昔あった、っていうか、この世界にもきっとある、……はずの、世界終末時計を思い出すよ。

……はたして、今は、終末まで、何分前だろうか？

世界終末までの時間を測りつつ、少し、落ち着きを取り戻し始めたカナーバ議員に代わり、議長に質問する。

「つまり、議長は、連合の一方的な核攻撃を阻止する目的で、……見せ札として、これを？」

「……いや、実際に使う可能性は否定せん」
「……それは、連合によって核攻撃が行われた場合に、報復に使用する、ってことですよね？」
「無論だ」

ザラ議長に、こいつを先制使用する意志がないことさえ、確認できれば、話は少し楽になる。

「では、地球を照準に入れることは？」
「ブラフとしては、行うだろうな」
「……と、いうことだそうですよ、カナーバ議員」

俺の言葉を受けたからか、ユウキの奴に胸を触られていたことに気がついたからかはわからないが、ユウキに抑えられていたカナーバ議員の顔色が急速に紅くなり……。

「……議長も、お人が悪い」
「……もう少し、信頼してほしいものだな」
「いや、議長、それは無理でしょうよ」

あ、やべ、突っ込んじまった。

……でも、いいや、言っちゃえ。

「議長が示してきた、これまでの対ナチュラルへの姿勢、言動を鑑みれば、衆目は議長を対ナチュラル強硬派の領袖だと認識しているはずです。無論、カナーバ議員だって、それをよく知っているんですから、今の反応もおかしくはないです」
「む」

議長は俺の物言いに説得力を感じたらしい。けれども、理性では納得したが、面白くない感情が収まらないのだろう、顔を顰めたまま、ムッツリと黙り込んでしまった。

いい年したおっさんが、拗ねんなよ。

若干の呆れを含んだ視線で生暖かく議長を見やってると、それも嫌ったのか、議長は表情を改めると口を開いた。

「……貴様らには言っておくが、私は、これをもって、プラントの独立と安全を確保しようと考えている」

「世界終末を天秤にかけて、ですか？」

「仕方があるまい、元より人とは総じて……、ナチュラルもコーディネイターも区別なく……、愚かな存在であり、そのような愚かな存在である以上、本当の危地……、瀬戸際に立たなければ、理性的には……、賢明さが育まれることはないだろう」

……。

あ、あれ、俺、耳がおかしくなったのかな？

ザラ議長が、今、変なことを言ったような気が……。

「……」

「……」

「……」

見れば、俺以外の三人もそれぞれ、固まっている。

ユウキはしきりに耳をほじってるし、カナーバ議員は何か恐ろし

い物を見たって感じで議長を見ているし、ラウも、こちらが驚く位に、口を大きく開けているよ。

「な、何だ、貴様ら、その反応は？」

「い、いえ、……私も議長の見識に、……一部を除いて、賛同いたします」

カナーバ議員の素早い立ち直りを受けて、俺達三人もそれぞれに、再起動を果たす。

「ぎ、議長、素晴らしいお考えです」

「……か、感服しました」

「議長、頭でも打ちました？」

ユウキ、ラウに続き、俺も意見を述べたが……、また、本音が出てしまった。

「……若造、貴様は、もう少し本音を抑えるようにしろ」

ごめん、無理。

そんな思いが顔に出てしまったのか、議長が咎めるように鋭い視線で俺を射るが、自身もこれまで述べてきた意見と異なることを言っていることはわかっているらしく、口元を大きく歪めて見せた。

「若造、それほど、私が意見を変えたのが意外だったか？」

「ええ、そう易々と自論を変えるよう程、議長が軟弱だとは思えませんからね」

「ふん、ただの頑固者とでも言いたいんだろう」

「さて……、どうでしょうねぇ」

議長の追及を明後日の方向に視線を逸らすことで交わすが、実のところ、さっきのは褒め言葉です。

だってさ、世の中、都合が悪くなると、まぁ、俺も含めて、良きにせよ悪きにせよ、意見を翻す人って多いんだよ？

いや、ほんとにさ、議長みたいなタイプは、今時、結構、珍しいと思うよ、ほんとに……。

……。

でも、議長の考えが変化するようなことがあったんだろうか、なんてことを考えていたら、ふと、視界の隅に、ユウキがまた、沈鬱な表情を浮かべたのがわかった。

その表情から察するに、何か、あったらしい。

……だが、今、この場では聞くようなことじゃないな。

そう自身の中で結論付けた所で、議長が再び話し始めた。

「カナーバ」
「はい」
「今後の地球連合構成国との交渉で、ジェネシスの存在を仄めかすことを許可する」
「……よろしいのですか？」
「かまわん。停戦交渉の足掛かりくらいにはなろう」

相手の信頼を得るために、或いは、相手の強硬論を牽制するため

に、さり気ない警告として使えって奴だろうか？

あ、ついでに言えば、そういう恐ろしい存在をこちらは持っているんだぞ、と外交の場で仄めかしておきさえすれば、向こうがブラフだと判断して、攻撃を、特に核攻撃を仕掛けてきた場合、遠慮なく、反撃に使用する事ができるな。

だいたい、やられっぱなしのまま、報復もせずに放置してしまうと、国際社会じゃ、足元見られて、舐められるのが普通だからなぁ。殴られたら殴り返す、痛みには痛みを、それぐらいの意気込みがないと、厳しい現実は生きていけないはずなんだよ。

……でも、四月馬鹿の一件は、絶対に、やり過ぎだったと今でも思う。

「わかりました。その札、有効に利用させていただきます」
「うむ、……頼むぞ」

どうやら話はまとまった様だ。

……。

うーん、今度こそ、話は終わりかね？

一応、聞いてみるか。

「議長、これで呼び出した用件は終わりですか？」
「……いや、後もう一つだ」

なんだろう？

「今日、この場にシーゲルを呼び出し、奴の軟禁と最高評議会議員職の剥奪を宣告することになっている」

うぐ、また、ややこしい場につき合わされるのか……。

「そんなこと、行政局の執行官や保安局の特捜を前議長の住居に派遣すればいいじゃないですか」

「……ラインブルグ、お前は面倒臭くなると、急に頭が回らなくなるな」

「ひ、ひどい評価ですね、ユウキ隊長」

「あ、いえ、カナーバ議員、普段のラインブルグはこんな物臭な奴です」

ひどっ！

「アイン、この場に前議長を呼び出すというのは、真実の隠蔽、世間への体面の問題だ」

「あ、そういうことね、って、そういえば、さっき、議長も言ってたな」

形式上は健康に不安があり、議員を辞職する、ってシナリオだったもんな。

「そういうことだ、若造。……そろそろ、到着するだろう」

やれやれ、何でまた、髭のおっさんのむさい顔を見ないといけないのか。

「「「「「！」」」」」

大きな爆発音が室内に伝わり響き、部屋が大きく揺れた。

即座に、ユウキが議長の傍で警戒に入り、ラウもカナーバ議員の脇に寄り添っている。

俺も咄嗟に議長の机から文鎮やペン立てを手にとって、全身の力を適度に抜いて有事に備えていると、傍らの控え室から黒服達が飛び込んできた。

即座に身体が反応しそうになるが、意志の力で押さえ込みつつ、記憶にある顔と一致するか、パッと見で判断する。

……うん、全て知っている顔だ。

黒服達が素早くザラ議長とカナーバ議員の周囲に展開し、周囲、特に窓と正面扉に意識を向けながら、防弾シールドと自身の身体で壁を作り上げるのを見て、感嘆を禁じえない。

いやはや、黒服さん達、実に有能だね。

これでまずは一安心とほっと息をついていると、ユウキがリーダーらしき黒服の一人に次々と問い掛けを始めていた。

「何があった？」

「はっ、政庁、正面玄関にて、大規模な爆発か爆弾テロが発生した模様です。ですが、現状において、原因及び犯人はわかっておらず、政庁警備隊は非常事態体制に入っております」

「保安局や防衛隊、救助隊等に連絡は？」

「今、行っている所です」

なら、応援は来るって考えていいか。

「では、正面玄関の状況は？」

「混乱しており、正確な状況は把握できておりません。ただ、直前に、正面玄関に車両がこちらの警告を無視して、高速で接近してきているとの報告は受けておりました」
「対応は？」
「警備隊は要人保護を優先して動いており、現場への人員派遣は極限られているため、後手に回っております」
「今後、我々は？」
「今現在、シェルターまでの経路を確保中です。経路の安全が確認され次第、この事態が収拾されるまで、議長にはシェルターに移っていただく予定です」
「了解した」

うーん、現場を見に行くべきか、いかざるべきか。

……。

部外者がしゃしゃり出たら、現場の迷惑に、邪魔になりそうだから、やめた方がいいか。

……。

それにしても、さっきの爆発、他の施設よりもより一層、頑丈に造られている政庁自体が揺らいだことを考えると、かなりの規模の爆発だったはずだ。

それほどの爆発を引き起こす、爆薬というか、爆発物を、どこで手に入れたんだろう？

しかも、白昼に、プラントの政治中枢であるアプリリウス・ワン、しかも、その政庁を標的とするテロが起きるなんて、以前からは考

えられないな。

本当に、こんなことを許してしまうまでに、保安局の力は落ちているのか？

それとも、爆薬の件もそうだが、保安局を出し抜けるような、それこそ、何者かの手引きでもあったのだろうか？

……むぅ、流石に情報が不足している段階では、想像の範囲でしかないな。

つらつらと、さっきの爆発について考えていたら、俄かに、ユウキが大声をあげたので、意識をそちらに向ける。

「それは、本当なのだな！？」

「は、はい。先程の爆発に、シーゲル・クライン前議長が乗った車両が巻き込まれた模様です」

……え、えっと、マジですか？

このテロが、今後に与える影響を測りながら、できるだけさり気なく、ザラ議長とカナーバ議員を伺うと、議長はいつになく険しい表情を、カナーバ議員は顔色を無くして、目を見開いていた。

部屋の空気が固まったような時が流れる中、最初に口を開いたのは、ザラ議長だった。

「カナーバ」

「……は、い」

「クライン派に軽挙妄動を謹むように、至急、連絡を入れて欲しい」

「……わ、わかりました、今すぐにっ！」

軽挙妄動ってことは、つまり……。

「クライン派がこのテロを謀略と、ザラ議長がクライン前議長を謀殺したと見なすってことですか？」

「……私が奴らの力を削いでいるのは事実だからな、そのように考える可能性もあろう」

「では、議長はこの件に関与していないと？」

お、おぅぅ、ラウも、普通なら聞けそうにないことを真正面から聞くなんて、思いっきりがいいな。

「無論だ。……既にプラントの権力を手にしているというのに、わざわざ、危険を犯す必要はあるまい」

「愚問でした」

「構わんよ、クルーゼ。その程度の質問で動揺していては笑い者だ。それに、この一件でプラント社会が動揺し、指導部にも亀裂が入るのは間違いないからな。……しかし、何者かは知らぬが、やってくれる」

ぎりっ、と険しい表情で歯をかみ締める議長に対して、俺達はかける言葉を見つけることはできなかった。

６月２０日。

アプリリウス・ワンのプラント政庁前にて発生した大規模な爆弾

テロによって、シーゲル・クライン前議長の他、来庁していた民間人や職員、警備隊員を含む、五十名近くが死亡する惨事となった。

そして、この爆弾テロを現体制、つまりはザラ議長によるクライン前議長の謀殺と見なしたクライン派の一部は反体制を掲げ、地下に潜ることになる。

６６　潮流が生む瀬戸際　４（後書き）

１１／０２／０６　サブタイトル表記を変更。

67　嵐が来る前に　1

6月20日のテロ事件、マスコミが揃って名付けた【ブラディ・ジューン】は、ビクトリア基地陥落の情報が噂として広まるのと相まって、プラント社会に大きな動揺をもたらした。

その動揺に応えるように、プラント内のマスメディアは、連日、その時の様子や政府の事後対応、テロ実行犯の犯人像、動機の憶測、犠牲者遺族の嘆き、街の声といったことを繰り返し、センセーショナルに報道しており、正直言うと民衆を煽っているのか、事態の沈静化を図っているのか、よくわからない状況になっている。

また、一部のコロニーでは、地下に潜ったクライン派が、先のテロは現体制による和平推進派であった前議長の謀殺だ、なんて宣伝放送を流してくれるお陰で不穏な空気すら流れ始めている。

この状況に対し、最高評議会は市民の動揺を少しでも早く収めるために保安局に先のテロ事件の徹底究明を指示し、また、クライン派の宣伝に対しては、根拠のない悪質な噂だと断じる声明を出した後は、いちいち相手にしない方針で行くようだった。

もちろん、最高評議会からテロの実態解明するようにと指示を受けた保安局は必死になって頑張っているのだが、如何せん、地下に潜ったクライン派への対応や連続テロへの警戒、防諜体制の立て直しも必要とあって、元上司殿の話によると、冗談抜きで受付に猫の手を借りる位に深刻な人手不足に陥っており、上手く捜査は進んでいないらしい。

……元同僚として、保安局の連中が過労死しないことを祈ろう。

◇　◇　◇

「やれやれ、ようやくプラントに帰ってきたと思ったら、あの騒ぎ……、まったく、ゆっくり気も休ませられないよなぁ」
「ふふ、アイン、君は普段から気を休めているのではなかったか？」
「いや、白服に……、隊長職になってからは、休暇中位しか気を休めることができたことはないよ」

あのテロから三日後、我が家にて、先のテロに関する憶測が垂れ流されるテレビを眺めながら、俺はラウと話をしている。

「そういえば、ラウ、例の作戦に参加していたみたいだけど、足つきを追っていたんじゃなかったのか？」
「何、ユウキから先の作戦に向けて、地上軍全体の調整役を押し付けられてな。追撃は部下に委ねていたのだよ」

ラウはそう言って肩を竦めながら応えると、眉間に皺を寄せてみせた。

「お陰で奴との貴重な戦闘を逃すことになってしまった」
「まぁ、その機会はまた、巡ってくるさ」
「君の勘かね？」
「ああ、そういう巡り合わせは、意外と、最高の舞台を用意してくれるもんだよ」
「ならば、その時を楽しみにしておくことにするよ」

ちなみに、話し相手は”ラウ達”と、が正解になるのだが、実質

的に話をしているのは、俺とラウだけだったりする。

「あ、あ～、それで、お嬢さん？　こうやって俺と面と向って話すのが初めてな君が、俺を警戒するかのはわからんでもないが、もう少し、リラックスしたら？」

「……」

一応、リラックスするようにと、以前、ラウから副官として紹介された、フレイ・アルスターという赤毛の少女に声をかけるのだが、ミーアにも劣らない豊ま、げふんげふん、歳の割に大きな胸を両腕で隠しながら、恐れを多分に含んだ目でこちらを見るだけで、緊張を解く気配がない。

う、うーん、そんなに俺って、怖いというか、変質者にでも見えるんだろうか？

……。

実は、ザラ議長達がシェルターに避難して、その安全が確保された後でレナ達と合流したのだが、その際にラウから、ラウの副官とされているフレイ・アルスターについて相談したい事があるから、後日、訪ねてもいいかと聞かれたのだ。

俺の中に、友の相談に乗らないという選択肢は始めから存在しないから、すぐに了解を出した。

で、今日になって、二人が揃ってやって来たんだが、あいにく、会話の潤滑油的な存在になるミーアが席を外してしまい、話がつながりにくい状況が続いている。

「……」
「……」
「……」

うぅ、ミーア、早く帰ってきてくれ。

食料品の買出し……食料品の値段が高騰しているから、タイムサービスは逃せないのっ！　とは、奮起して出て行ったミーアの談……に出かけたミーアの帰りを待ちわびながら、お茶をすする。

「……」
「……」
「……」

き、気まずいなぁ。

……仕方がない、こちらから切り出すか。

「あ、あ～、ところでラウよ」
「何かね？」
「どうして、ナチュラルの子を、副官だなんて偽って、連れて歩いているんだ？」

ビクリッと大きく身体を震わせ、長い赤髪を揺らせた少女を見て、自身の推測が間違いがないと確信する。そのことに気がついたのかはわからないが、ラウが軽い笑いを洩らして、少女から発生した緊迫した空気を少し和らげてくれた。

「ふ、ふふ、君には隠し事ができないな」
「いやいや、それは買いかぶり。だいたい、今のはあくまで、誘導

だよ」
「では、間違っていた時はどうしていたのかね？」
「そこはそれ、笑って誤魔化していたさ」

要するに、言った者勝ちってことだ。

「しかし、アイン、いつから、彼女がナチュラルであることを察していたのだ？」
「いや、初めて顔を合わせた時の目の動きと表情、無重力空間でのザフト隊員にしてはギコチナイ挙動、加えて、副官とはいえ、自軍の本拠地で周囲へ過剰な警戒をするなんて、明らかにおかしかったからだよ」
「……なるほどな」
「まぁ、一応、これでも保安局に勤めていたからさ、その時の職業柄か、何気ない仕草に目がいっちゃうんでね」
「ふっ、だが、それだけのことを一瞬で見分け、察することが出来る者はそういないはずだが？」
「そこは、俺が保安局にいた頃に、努力と精進をした賜物だと思ってくれ」
「では、そういうことにしておこう」

いや、いやいや、それ以外ないって！

なんて感じで、苦笑いを浮かべていたら、ついに、件の少女が口を開いた。

「ど、どうして？」
「ん？」
「どうして、あなたは、私がナチュラルだってわかってたのに、何にもしなかったの？」

「……君はどうして、君がナチュラルってだけで、俺が何かすると思うの？」

質問に対して質問で返したためか、目に見えて困惑する少女を眺めつつ、これが……、今の質問が、今現在における、ナチュラルのコーディネイターに対する一般認識なのかと、暗然たる思いを抱いてしまった。

確かに、反コーディネイターを訴える地球連合のプロパガンダの影響もあるだろうが、正直、今のような質問をされるとは予想外だった。

そんなことを考えていたら、フレイ・アルスターの隣に座っているラウに苦言を呈された。

「アイン、その返しは卑怯ではないかね？」

「ん、すまん。ちょっと意地悪だったな」

「……あの様に返した君の気持ちもわからぬでもないが、まだ、彼女は二十歳にもなっていないのだ。周囲の影響を受けるのが普通ではないかね？」

「まぁ、そうだな」

とはいえ、なぁ。

いったい、何時から、ナチュラルとコーディネイターは、こんな相互に無理解というか、同じ人であるというのに、お互いがヒトではないかのような考えを持つようになってしまったんだろうか？

やはり、ナチュラル、コーディネイター共に、マスメディアや一部団体のプロパガンダで、社会的に一般化されてしまった、それぞれの相手方への見解や見識を当たり前のように受け入れてしまって

いて、その結果が互いへの差別や偏見に繋がってしまい、こんな風になってしまったんだろうか？

はぁ、ナチュラル、コーディネイター、それぞれの意識を根底からひっくり返さないと、双方の融和は不可能って当たりが、相当に業が深いというか、根深い問題だよなぁ、本当に……。

……。

……でも、こんな大きな問題、独りで解決なんて出来るわけないんだから、今は置いておいて、さっきの質問に答えることにしよう。

「えっと、さっきの質問に答えるとな、俺が君に何もしないのは、ラウが連れていたっていうこともあるけど、ナチュラルという総体に対して、特に偏見も憎悪も持っていないからだよ。そもそも、初対面の相手にナチュラルってだけで、マイナスの感情を持つなんて器用なこと、俺にはできないよ」

「……私、コーディネイターはナチュラルのことをナチュラルというだけで、侮蔑するって思っていたわ」

「いや、まぁ、実際、そういう手合いが多いのも事実だから、君がそういう考えを抱くのも無理はないというか、今の社会情勢じゃ、普通なことなんだろうな。けどね、ナチュラルもコーディネイターも同じ人間だよ？」

「……おなじ、にんげん」

んん？

「本当に、コーディネイターはナチュラルと同じ人間なの？　正常な遺伝子を持っていても、遺伝子を自分の思い通りに弄ったりするのに、同じ人間だというの？」

おぅ、中々に鋭い突込みだな。

「厳しい意見だね。でも、確かに君の言う通り、正常な遺伝子を弄るのは良くないと俺も思うよ。親と子の遺伝子が直接的に連続しないなんてのも生物として歪だしな。……それに」

「……それに？」

「うん、生まれてくる我が子にコーディネイトを施すってのも、見方を変えれば、親のエゴを子どもに押し付けているだけで、所詮は親馬鹿でしかない。……実際、子を自分の付属品や作品か何かのように考えているような連中もいるのは確かだし、ある人から聞いた話だけど、自分の思い通りに生まれなかったってだけで、平気で子どもを捨てるような連中も、実際にプラントにはいるからな」

「……」

「でも、それは親が負うべき責であって、生まれてくる子に……、コーディネイターとして生まれてくる子には、コーディネイターであることの責はないと思う」

「！」

む、何故だか知らないが、また動揺しているみたいだな。

……とにかく、話を続けるか。

「話が逸れたから元に戻すけど、最初の質問、コーディネイターとナチュラルは同じ人間なのか、っていう疑問の答えだが、コーディネイターだろうと、ナチュラルと同じように、喜びや哀しみ、怒りや楽しみを持ち、泣いたり笑ったりする存在である以上は、同じ人間だと、俺は思ってる。コーディネイターとナチュラルの差異は、これも俺の知り合いの言葉を借りて言えば、コーディネイターは、ナチュラルよりも少しだけ生物としての器が大きくなった位に過ぎ

ないらしいし、俺も潜在能力が引き出しやすくなっただけのヒトに過ぎないって思ってる」

……でも、この考え方、プラントじゃ、圧倒的に少数派なのが頭の痛いところなんだよね。

って、あれ、な、なんで、そんなに項垂れる程に落ち込むんだ？

「……ラ」

ん、んんん？

誰かの名前か？

「……」

「……」

「……」

ま、また、沈黙が……。

「な、なぁ、ラウ、俺、何か、拙いことでも言ったのか？」

「ふむ、恐らく、彼女自身の内面に関わることだろう。……今は、そっとして置く方がいい」

「……」

「む、なんだ、アイン、その目は？」

「い、いや、なんでもない」

……ラウの奴、何か、陰で密やかに、娘の精神的な成長を喜ぶ父親みたいな顔してたぞ。

そんな、愚にも付かないことを考えるが、とにかく、アルスターをネタに話をつなげていこうか。

「それで、ラウ、彼女はどこから掻っ攫って来たんだ？　カーペンタリアか、それとも、ジブラルタルか？」

「……アイン、私は君のように、ヘイアンヒカルゲンジのような趣味はないのだが？」

「ぶっ、げほっ！」

な、何気に人が気にしていることを……。

慌てて、テーブルに噴出した茶を布巾でふき取るが、事の原因は澄ました顔して、茶を飲んでやがりますよ。

「……俺に関わる、非常に不本意でかつ根拠のない悪意ある言葉は置いておいて、実際、彼女を連れてきた経緯はどういうもんなんだ？」

「……アラスカだよ、アイン」

「アラスカ？　……スピリットブレイク？」

「そうだ」

そういえば、ラウの奴、基地内部に侵入したって、話だったな。

って、おいおい、もしかして、その時か？

「まさか、アラスカ基地内部に侵入した時にか？」

「……ああ」

「はぁ、何とも、常人じゃしないことをするもんだな」

流石は、ザフトのエース・オブ・エースだねぇ。

「どんな状況で？」
「サイクロプスを発見し、退避する途上、偶然、彼女と鉢合わせした」
「それだけか？」
それだけで、連れてきた？
さ、流石に、それはないな。
「いや、その際に……呼びかけられてな」
「なんて？」
「……パパ、だ」
ちょっ、何それ！
幾らなんでも、そこまで歳は離れてないだろうし、いくら同年代よりも皺があるからって、なぁ。
「……アイン、笑ってくれるな」
「あれ、俺、笑ってる？」
「傍から見れば、不気味だぞ、その笑みは」
手を口元に当ててみると、確かに吊り上ってる。
慌てて、口元に当てた手で揉み解して、元に戻す。
「ん、すまん、失礼した。……でも、何でラウがパパなんだ？」
「……何でも、声が似ていたそうだ」
「へぇ、娘さんが聞き間違えるくらいに似ているのか」

一度、そのアルスターパパの声を聞いてみたいもんだ。

「それで、鉢合わせして、呼び止められて、ここは危険だとでも、説得したのか？」

「いや、時間が限られていたのでな、多少、乱暴だったが、……気絶させた」

「……何となく行動に犯罪の薫りがするが、まぁ、状況が状況だけに仕方がないか」

「元保安局員にそう言ってもらえると、安心だ」

ラウは露悪的にニヤリと笑っているが、サイクロプスっていう最悪な兵器の起動まで、カウントダウンが始まっていたことを考えると、好判断だろう。

……うん、アルスターを連れて出した場所と状況はわかった。

後は、ラウが連れ出そうとした動機なんだが……アルスターが横にいる状況じゃ、聞きづらいな。

うーん、ミーアが帰ってくるまで待つか、別の機会にするか、だな。

そんなことを考えていたら、ラウが改まった様子で、切り出してきた。

「アイン」

「何だ？」

「今日、ここに来た用件なんだが……」

「あ、そういえば、そうだったな。うん、聞こうか」

俺も姿勢を改めて、ラウの言葉の続きを待つ。

「……彼女を、フレイ・アルスターをここで預かって欲しい」

67　嵐が来る前に　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

68　嵐が来る前に　2

「……それが、彼女を家に預ける事が、今日の用件か？」
「ああ」
ラウに確認の意味を込めて尋ねるが、帰ってきたのは首肯付きの肯定だった。
このラウの言葉は、隣のアルスターも初耳だったらしく、驚いた様子で俯けていた顔を起こし、涙に濡れた目って、おぅい、泣いてたのかよ！
だ、だが、このシリアスな状況では、そちらへは突っ込めない！
できるだけ、アルスターの、涙のせいでブサイク……別に本当の意味で不細工と言う意味ではなく……になってしまっている顔を、紳士的に見ないよう意識しながら、ラウに理由を尋ねる。
「何故、と聞いてもいいか？」
「……君も承知していると思うが、私は足つき追討の任を受けている」
「まだ解かれてなかったのか？」
「ああ。……それに加えて、クライン派が強奪した新造艦の追討も任務に含められることになったよ」
実は、地下に潜んでいたラクス・クラインがザフト内に存在するクライン派の手引きで、新型艦を強奪して逃走したのだ。

それを聞いた瞬間、もう二度と帰ってくんなっ、って思ったのは、きっと、俺だけじゃないと思う。

「なんとまぁ。……クライン派はとにかく、とりあえず、足つきに関しては、伝え聞いた状況的に考えて、連合軍から脱走したみたいだし、もう放っておけばいいじゃないの？」

「確かにその考えもわかるにはわかるが、多くの隊を撃破してきた足つきを放っておくと、ザフト全体の士気に関わるのも事実なだけに、何らかの手を打たぬ訳にもいかぬ。……とはいえ、これも私から見れば、表向きだ」

……表向き、か。

「……裏は？」

「態のいい左遷だよ。何しろ、半年近くかけても、新造艦とはいえ一隻すら、まともに落とせぬ無能だからな、私は」

「それは気にし過ぎだろう。そもそも、ラウが無能なら、ザフトのほぼ全員が無能だろうさ」

これは偽りない俺の本音だ。

「ふふ、慰めなど要らぬよ」

「ラウ、俺に男を慰める趣味はないよ」

「くくっ、本当に君も言うものだな、アイン。……だが、私自身、幾度もあの艦を落とすべく、部隊を動かして攻撃を仕掛けてきたが、全てを退けられてしまったのが現実なのだよ」

幾人もの部下を失った上にな、という呟きは聞こえなかったことにした。

「そして、厄介なことに、足つきは戦闘を重ねる事に成長している。そこに加えて、強奪された核動力機、フリーダムが加わっている可能性も高い。……故に思うのだ、次に足つきと戦闘が発生すれば、下手をすれば、母艦すら、やられるやもしれぬとな」
「……それは、ラウの勘か？」
「ああ」

……ラウの勘か、それは信じるに値するもんだな。

けれど、それだけでは、アルスターを家に預けるには、理由として弱い気がする。

……。

一度、押してみるか。

「本当に、それだけなのか？」
「……む？」
「その他に、理由はないのか？」
「どういう意味かね？」
「ラウ、それだけでは、彼女を家に預ける理由としては弱い気がするんだが？　別に、ラウの家に置いておいてもかまわないだろ？」

俺の追求を受けると、ラウは再び口元に笑みを形作るが、その笑みは俺を悪戯な罠に嵌めた時に浮かべるモノに近い。

「この心荒むプラント社会に、世慣れぬ彼女を、独り残すのは不安なのでな」
「む、それは、確かに、……不安では、あるな」

理由としては上手く補強されてしまった気がするが……、むぅ、なんだ、この違和感は？

……。

じっと、ラウの表情を見るが……、うん？

なんとなく、顔色が優れないようだが？

「ラウ、体調が悪いのか？」

「いや、普段と変わらぬよ」

「そうか、なら、いいんだが……」

むぅ、本人から得られる情報が少ない以上は、他から探すしかないか。

そんなわけで、ラウの隣に座るアルスターを視界に収めてみるが……、ラウを見る彼女の表情に浮かぶのは……、不安や心配といった感じだな。

その表情の意味するところは……。

「アイン、無理ならいいのだが？」

更に思考を進めようとしたら、えらく上手いタイミングで、ラウから横槍が入った。

……仕方がないな、何か、ラウが隠しているとだけ、考えておけばいいか。

「いや、別に構わないよ、家も部屋が余ってるしね。それに、独りで留守番してくれているミーアの相手になってもらえると助かるからな」
「そうか、ミーア嬢には迷惑をかけるが……」
「そんなことはないさ」

ラウが微かに首を傾げて見せたので、後を続ける。

「実はな、ミーアの奴、学校とかにあんまり馴染めなかったから、友達が少ないっていうか、ほぼ、いない状態なんだよ。今現在も、自宅学習の日々さ」
「そうなのか？　意外だな、ミーア嬢の人となりを考えると、友は多そうに感じるが？」
「いや、それがな、ミーア曰く、何でも他人と比較して、優位に立ちたがるガキの相手なんてしたくもない、だそうだ」
「ふっ、ミーア嬢も言うものだ。……しかし、彼女がそうなったのは、恐らく、アイン、君の影響だろうな」
「そうかねぇ」

まぁ、確かに、ミーアに最も近く、長く一緒にいたのは、俺だとは思うが……。

って、話を進めないと。

「だから、これも良い機会だと思う。同年代の友っていうのも、色んな意味で大切だからな」

俺達の、ラウやユウキ、俺の関係を暗喩してみた。

「……そうだな。……本当に、大切なものだ」

うん、ラウの同意を得られた所で、今度はアルスターの意思を……、聞かなくてもいいか。

例え、彼女が嫌だと言っても、ラウのことだ、強引に押し通すだろうからな。

「よし、決まりだ。彼女は、家で預かるよ」

「……頼む」

「とは言っても、俺も任務があるし、ずっと家にいるわけじゃないから、実質、ミーアとの共同生活になるだろうけどな」

「わかっている。後で、ミーア嬢が帰ってきたら、私からも頼んでおく」

ついで、ラウは自身を不安そうに見上げているアルスターを認めて、更に続ける。

「無論、彼女にもしっかりと言い聞かせておく」

「うん、その方がいいよ。それで、何時からにする？」

おとがいに手をやったラウは、少し考えた後、軽く頷いて語をつむぐ。

「ふ、む……、明後日ぐらいで、どうだろうか？」

「わかった、それまでに部屋の用意はしておくよ。あっ、けど、流石に、生活用品というかは本人の趣味もあるだろうから、最初だけは自前で頼む」

「了解した」

軽く請け負っているが、プラントの物価は全体的に高くなっているからなぁ、ラウもきっと、散財するだろう。なにせ、お年頃の女の子はオサレのために、惜しみない努力をしますから、比例して、金も出て行くみたいだしな。

「あっ、そういえば、身分証はどうなってるんだ？」
「抜かりはない。カーペンタリアで正式なモノを、……大西洋連邦から命からがら大洋州連合まで逃げ出してきたという設定で発行させている」
「ほぅ、やるねぇ。で、検査はどうやってパスしたんだ？」
「ふっ、蛇の道は蛇、ということだよ」

それはそれは……。

「元保安局員として、興味のある話だな」
「必要悪だよ、アイン」
「わかってる。奇麗事だけで世の中が回るなんて、思っちゃいないさ」

だからこそ、清濁併せ呑むなんて言葉があるんだ。

「だが、必要悪もある程度は管理しておく方が、前のテロみたいなことも起きないんだよ」
「……わかった。だが、私からはルートだけだ」
「十分さ。保安局はテロリストの侵入さえ、防げればいいんだからな」
「では、不法移民には目を瞑ると？」
「ああ、実の所、それは以前からさ。……まぁ、四月馬鹿があったから、もう、テロリストか諜報員位しか、来ないだろうけどな」

プラントはコーディネイターにとっての理想の国、コーディネイターは同胞意識が強い、なんて言われていたのは過去の話で、今現在、地球に住んでいるコーディネイターから見れば、プラントやそこに住んでいるコーディネイターは侮蔑と憎悪の対象にしかならないだろうさ。

「しかし、四月馬鹿、エイプリル・フール・クライシスか……、連合も、上手く名付けたもんだよな。本当に、正気を疑うような、今からでも嘘にしたくなる位に、馬鹿げたことだよ。憎悪を全世界規模にまで、撒き散らしたんだからな」

「そして、憎悪は憎悪を生む。……我々が人である限りな」

「人である限り、か」

……人が人である限り、否、人であるからこそ、情、感情は切り捨てることはできない。

「この負の因果が断ち切れぬ限り、人は滅びへと進んで行くだろう」

「それもまた、道理か。……もっとも、俺は、そうはならないと信じているけどな」

「……ほう、何故かね？」

「人にはもう一つ、理性という特徴があるからさ。だいたい、過去にも幾度となく、いつ世界が滅亡してもおかしくないような危険な時期があった。それを乗り越えて、今までやってきた人類の理性を、俺は信じたい」

でも、感情は簡単に理性を振り切る事があるから、分が悪い賭けにもなりかねないんだよなぁ。

「……君は理想家だな」

「まさか、所詮、戦争で身内に犠牲が出ていないからこそ言える言

葉であり、奇麗事だとも思うよ。それに、俺は、儘にならない現実の中で必死に足掻く一人の人間に過ぎないからな。そう信じていないと心が折れて砕かれてしまいそうになるから、そう信じ込んでいるだけさ」

「……」

「ん、どうしかしたか？」

「アイン、一つ、君と賭けをしたい」

珍しいな、ラウがこんなことを言い出すなんて。

「……とりあえず、聞こうか」

「ああ、何、簡単なものだ。この戦争の行方……、人が滅びの道を歩むか否か、だよ」

「それは、また、何とも、大きな賭けだな」

俺のスケールには、合わない賭けとしか言いようがない。

「やめるかね、アイン？」

「いや、受けるよ。賭けの対象は？」

「私はC．E４６年のビンテージワイン」

「ちょ、その年って、近年最高の出来って謳われてる年だったよなっ！　どこにそんな極上の酒がっ！」

「ふふ、あるところにはあるのだよ」

な、なんということでしょう、欲しても手に入れられなかった親父殿、あるところにはあるらしいです。

「な、なら、俺は……」

「君が大切にしているC．E４７年のスコッチがいいな」

「……」

む、むぅ、何故、ラウがそのことを知っているんだろうか？

両親と言うか、親父が俺の誕生祝に購入したもので、いつか二人で飲む予定なのだが、居間のキャビネットに箱に入れてって、それでか。

「どうする、アイン？」

「……わかった、受けるよ。賭けの内容的にも、それだけの価値はあるからな」

「ふっ、では、どちらに賭けるかね？」

「人は滅びの道を進まず、この戦争も程なく終わる、だな」

「では、私は、その逆を……、この戦争で、人は滅びの道を進み始める方に賭けよう」

……いや、何とも、とんでもない内容の賭けだこと。

でも、まぁ……。

「この賭け、もらったぞ、ラウ」

「アイン、君は人の業というものの深さを忘れているのではないのかね？」

「その業を乗り越えてきたからこそ、今があるんだよ」

「ふふ、先のことはわからぬよ」

お互いにニヤリと口元に笑みを浮かべると、俺達の話を黙って聞いていたアルスターがまた、ビクッ、と大きく身体を震わせたのがわかった。

……。

ま、まぁ、大の男が二人して、向かい合ってゲンドウ笑いしたら、そういう反応するよなぁ。

しみじみと、俺もそういう顔が似合う歳になったのかと何となく悲しく思っていたら、急に玄関から慌ただしい音が聞こえてきた。

どうやらミーアが帰ってきたらしかった。

「兄さん！　荷物が多いから、すぐに取りに来てっ！」

何とも、今まで居間に漂っていた空気を吹き払うかのように、元気で且つ騒がしい声だ。

「まったく、ミーアの奴、きっと買い過ぎたな。……どれ、ちょっと行ってくるよ。悪いが、ラウ達は待っててくれ」

「ああ」

ラウに、そう言い残して、玄関に向ってみると、ミーアは何やら紙袋からごそごそと取り出すところだった。

「……ミーア、何してるんだ？」

「ん、これ、兄さんにと思って」

ニコニコと笑うミーアが取り出したのは、特売品との札が張られた、十枚組のTシャツのようだった。

「ミーア、これは？」

「ん、オーブ製のTシャツ、安かったから兄さんの普段着用に買ってきたの」

「そ、そうか、ありがとう」

とにかく、パッと表の一枚を見てみると……。

「義侠心？」

「え、兄さん、読めるの？」

「ん？　あ、ああ、まぁな」

何と、日本語なんて、また、懐かしい。

折角だから、他のもちょっとだけ見てみる。

「へぇ、道義心に不動心、清浄心、忠誠心、好奇心、平常……って、これ、どっかで見た事があるな」

「兄さん、それよりも荷物」

「あ、そうだったな、すまん」

ミーアに言われて、荷物を取りに出かける。

ついでに、さっき、ラウと話し合った内容もミーアに軽く言っておくことにする。

「そうそう、ミーア」

「ん～？」

「今日、ラウが連れてきていた子、なんだけどな」

「うん？」

「家で預かることになったからな」

俺の言葉を受けて、ミーアの動きが目に見えて鈍る。

「……うーん」
「もしかして、嫌なのか？」
「あ、そんなことはないよ？　ただ……」
「ただ？」
「ちゃんと、家事をシェアしてくれるかなぁ、って思っただけ」
……どうだろうなぁ。
「良い所の出かもしれないから、あんまり期待するなよ？」
「なら、ビシバシと仕込むだけよ」
「……そ、そうか」
俺は手に一杯の荷物を我が家に運び入れながら思う。
ミーアの、当然の如く、といった感じの男前な発言を聞くと、容易に、今後の我が家の生活が騒々しいものになると予想できるのは何故だろうか？
「まぁ、最初は……」
「駄目駄目、甘やかさないの！　昔から言うでしょ、働かざるもの、食うべからず！　って」
「はい、その通りです」
しかし、フレイ・アルスターに関しては、ミーアに任せておけば、問題ないと、何故か、確信が出来た。
そして、今の俺が為すべきことは、家族であるミーアを守ることだとも……。

だから、嵐が来る前に、俺も精一杯、準備をしておかないといけないなと考えて、今後、戦隊に課す訓練を頭に思い描いたのだった。

「あ、兄さん、まだまだあるから、お願いね」

「……へいへい」

妹分にこき使われながら……。

68　嵐が来る前に　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

69　嵐が来る前に　3

7月11日。
戦隊の再招集日なのだが、今日程、この時を待ち望んだ時はないと、断言できるだろう。

なんとなれば、我が家を支配する、我が妹分と新しい居候のお陰だ。

ラウと馬鹿な賭けをした二日後、約束通りにフレイ・アルスターを引き取ったのだが、一週間程で我が家は以前の三倍……いや、五倍は騒々しくなってしまった。

何故ならば、お年頃の少女二人が二人して細かな事で睨み合い、小さな事でも対立し、最終的には大いに騒いでくれたからだ。

もう、二人して、何故にそこまでぶつかり合うのかと、こちらが問いたくなる位に、事ある毎に、ぶつかる事ぶつかる事……。

なので一度だけ、居間で睨み合う二人に、一体、相手の何が気に食わないのかと聞いたのだが、その答えはこうだった。

フレイ・アルスター曰く、あんたの声と上から目線が気に食わない。

ミーア・キャンベル曰く、あんたの悲劇ぶった態度が気に食わない。

第三者である俺から見れば、どちらの言い分も……、まぁ、アルスターの言い分の一部を除いて、正当だとは思う。

思うのだが……、二人して、仲が悪そうに、ああだこうだと言い合いながらも、妙に連携というか息が合っていると思うのは、俺の気の所為だろうか？

……いや、気の所為ではないはずだ。

なぜならば、俺が実体験を持って、二人の息が合っていると証明できるからだ！

俺が日頃の疲れを癒す為にのんびりと居間で寛いでいたら、掃除をしていた二人に素晴らしい言葉の連携でもってして家から放り出され、体力維持トレーニングで疲れた身体を洗い流す為に我が家の自慢である日本式の風呂に入ろうと思えば、湯船は女の子専用でかつ水代を節約するために兄さんだけ三分間シャワーしか駄目と、これまた見事としか言いようがない連携技でもって取り決められたり、たまに自分で料理をしようと思ったら、可愛い女の子が手料理を作ってあげるから、或いは、兄さんが料理をすると食材を無駄にしたらいけないから、なんて具合に二人して言葉巧みに誘導されて、それならと調理してもらった結果、アルスターの”食えたもんじゃな

い”失敗作やミーアの”どこを食べるのかわからない”実験作を食わされたり、と……、まぁ、とにかく、酷い目にあわされたのだ。

おかげで、自分の家だというのに、貴重な休暇だというのにっ、……俺の肩身は非常に狭い上、胃がおかしくなってしまったよ！

本当に……、今回程……、ザフトというか、戦隊に戻ることを待ち望んだ日はないだろうなぁ。

前日までの一連の出来事を、悲しく辛いことが多い休暇だったなぁ、と一つ一つしみじみと思い返していたら、聞き知った声によって、現実に引き戻された。

「あの、隊長？」

「っと！　な、なんだ、マクスウェル？」

「いえ、ＭＳ全機の受領と返却の手続きが済んだみたいなので、それを伝えに来たんですが……」

実は、今月の頭に、あのクライン派の領袖であるっ！　ラクス・クラインがっ！　……クライン派の連中を引き連れて、新型戦艦を奪取してＬ３方面へ逃走して以来、兵器の受領関連手続きが非常に厳しくなったのだ。

その為、手続きの際の本人確認で、流石に穴の孔とまでとは言わないが、身体検査が加わり、受領に至るまでに書かなければならない書類の数が倍に増え、確認のためにサインしなければならない書類が三倍になった。

……おのれぇい、奴はプラント、否、俺にとっては、絶対に、疫病神に違いないっ！

なんてことを考えたものだが、よくよく考えたら、今までの警備がザルだったと……、いや、元上司殿の話だと、クライン派のシンパはあちらこちらに潜んでいるらしいから、警備が厳しくても、先の強奪に関してはどうしようもなかったのかもしれない。

「隊長？」

「む、すまん、手続きの件は了解した」

再び声をかけてきた、ＭＳ隊の副隊長として正式に任命したマクスウェルに、今更のような気もするが、一応、隊長として取り繕いながら返事をして、新しく受領した俺達の乗機となるＭＳ【ＺＧＭＦ－６００】ゲイツの先行量産型を見上げる。

ザフトの新しい汎用量産機であるゲイツを見るにつけ、ジンやシグーに比べると遥かに”野暮ったさ”が抜けて、より洗練されたフォルムになったのがよくわかるし、一般的な機体色が緑なのも宇宙での保護色としていいだろう。

でも何故か、残念なことに、今回も俺の機体の色はイエローだったりする。

もう、いい加減に勘弁して欲しいんだが、黄狼だなんて派手な異

名が連合軍に知れ渡っている以上、変更は絶対に不可らしい。

……はぁ、本当に、世の中は、ままにならないもんだよなぁ。

まぁ、気を取りなおして……、このゲイツの機体性能なのだが、スラスター関係はジン開発以来の度重なる改良で以前よりも燃料効率が良くなり、姿勢制御のバーニアも今までの蓄積データから配置換えが適度に為されたため、機動性、運動性共に底上げされている。また、機体のパワーというか、使用されているバッテリーも新規開発されたものに変更されていて、蓄電量がアップした為、継戦能力も以前よりも延びているらしい。

それに武装面でも、大出力レーザー通信用のアンテナがトサカに増設された頭部に近接防御用の機関砲が二門備えられており、ミサイルへの対処や近接戦闘等での対応能力が以前の二機に比べて、向上していると言えるだろう。

また、ビーム兵器へ対応するために、耐ビームコートが施されたシールドには二対のビームクローが装備されており、いちいち、重斬刀等に換装しなくて良くなったのは朗報だ。何しろ、連合軍が量産型ＭＳを出してきた以上、格闘戦が起こる可能性が高まったからな。

……でも、正直、盾との一体型なのは、格闘戦時の防御が弱くなるだろうから、あまり嬉しくないんだがなぁ。

それはそれとして、他にも隠し武器というか、何だったかな、……えーと、確か、え、エクステンショナル・アレスターだったかな、それが両腰部に取り付けられている。まぁ、単純に、アンカー型の刺突用ビームパイクというば、わかりやすいだろうか？　これもき

っと、近接戦闘や格闘戦で使えるだろうが……、範囲に制限があるから、かなり訓練しないと実戦で使用するのは難しいだろう。というか、実戦で使用するには射程距離が短過ぎるから、シゲさんに魔改造してもらって、射程距離を伸ばして貰うつもりだ。

後、本格的なビーム兵装であるビームライフルが装備されたのも良かったのだが……、その銃身が長いのがちょっと気になるところだ。何分、銃身が長いと取りまわしで苦労することはシグーのシールドバルカンで体験済みだからな。……けど、まぁ、これに関しては、流石のシゲさんも改造できないだろうから、改良型が出るまでは何とかやって行くしかないだろう。

ゲイツや装備している兵装、国防委員会から全所属ＭＳをゲイツへと更新させる条件として付けるように言われて、俺のパーソナルマークを描いた実績があるレナにデザインしてもらった部隊章【疾走する狼（ラン・ウルヴズ）】に目をやりつつ、今後の機種転換訓練や模擬戦の内容を考えていたら、隣に立ったマクスウェルが尋ねてきた。

「でも、隊長、よく新型を部隊全機分も確保できましたね」

実はマクスウェルの言う通り、本来ならば、戦隊ＭＳ隊全体（複座型を除く）の新型への機種更新は行われる予定ではなかったのだ。

だが、そこはごね……げふんげふん、ザラ議長という強力な伝手を使い、また、国防事務局にも、機体としての実戦運用はしているだろうが、部隊単位として実戦運用はしていないだろう、それに部隊として整備に関するデータは必要じゃないか、とか、予め、新型に熟練した部隊があれば、今後、仮想敵代わりにこき使えるぞ、だなんて色々と理由をつけて、先に挙げたような、ちょっとした軽い条件こそ出されたが、戦隊ＭＳ隊の全機を新しく更新させることができたのだ。

いやはや、権力を持つ伝手があると、本当に便利なものだね。

「それはな、以前、派手にやったバラマキで、国防事務局がうちの戦隊に好印象を抱いているという下地がある上に、良い伝手を使い、周囲が納得するだけの相応の理由を挙げたからだよ」

「つまりは、今回の新機種への更新は周到な根回しの結果？」

「いや、結局は権力を傘に来た濫用であることには違いないさ。だから、相応の成果も出さないといけない。頼りにしてるぞ、マクスウェル？」

「……その期待に応えて見せましょう」

確かな自信を持って答えた顔を見るにつけ、マクスウェルも慢心をなくし、成長しているなぁ、と実感させられる。

とはいえ、新型を体よく手に入れたことや後進の成長を喜んでばかりもいられない。

相応の成果というか、部隊運用での成果と改善点を出さないといけないし、実戦部隊ならではの視点から機体に関する意見を出さないと意味がないからな。

とはいえ、このゲイツは実戦証明が為されつつあるとはいえ、まだまだ、ジンとその派生機、発展機に比べれば信頼性は初期段階でしかないから、様々なトラブルに見舞われる危険も依然として存在しているし、操縦系にしても、ジンからシグーへと乗り換えた時と同じように色んな変化があるだろうから、機種転換で苦労するのは目に見えているとも言える。

要するに、大言を現実にする為には、まずもって、機体を乗りこなせるように猛特訓をして、短所の把握をしないといけないってことだな。

「よし、マクスウェル、運び込みの指揮は任せるぞ。……後は頼む」
「了解です」

敬礼するマクスウェルに答礼し、俺は一足先にエルステッドに戻ることにした。

◇　◇　◇

「いいなぁいいなぁ」
「ほら、ロベルタ、みっともないことを言わないの」
「でも、ビアンカ、私達以外、みーんな、新型になったんだよ？羨ましいと思わないの？」
「そ、それは……、じゃ、若干、思うわね」
「でしょでしょ？」

隊長室で簡単な仕事、戦隊に補給された物品リストや新たにリー小隊に配属された新任ディーノ・ベルディーニの士官学校での評価書、ゴートン、フォルシウス両艦長や各ＭＳ小隊長から提出された訓練計画書に目を通すといったことを終えて、自機の調整をしようとＭＳ格納庫に降りてきたら、出入り口近くに陣取った複座型担当の二人組がじーっと、ゲイツを見上げている後姿が目に入った。

見つかれば、間違いなくフェスタに絡まれると予想して、視界に入らないように迂回しようとしたのだが……。

「あれ、先輩、仕事は終わったんですか？」

二人組が見上げていたゲイツのコックピットハッチから、たまたま顔を覗かせたレナにより、妨害されてしまった。

「あっ！　隊長！　何で、私達にはレーダードームの更新だけでっ！　新型がないんですか！」

そして、危惧していた通り、フェスタに絡まれた。

「こ、こら、ロベルタ！」
「あ～、いい、いい。……あのな、フェスタ」
「う～」

あ、なんか、噛み付く寸前の小型犬のようなイメージが……。

「隊長達ばかり、ずるいですっ！」
「む、確かにずるをしたなぁ」
「先輩、何を言ってるんですか……」

どうやら見るに見かねたらしい、レナがこちらに跳んできてくれた。

「いや、実際、新型をこれだけ揃えたのは、今の所、うちやラ……クルーゼ隊の他は数隊位だろうからな」
「え、そうなのですか、隊長？」
「ああ、そうなんだよ、スタンフォード。今のところ、こいつはエース級や隊長格にしか、配備されてないんだ」

いつも冷静な顔しか見せないスタンフォードが、珍しく驚きを露わにしている。

「ど、どうやって、これだけの数を？」
「……んー……な・い・しょ」
「……先輩、キモイからやめてください」

ひどっ！

こんな具合に話を有耶無耶にしようとしたのだが、残念なことにフェスタには通用しなかったらしい。唸りながら、じっと、見上げてくる。

「うー！　うー！」
「ちょ、やめ！　涙目で見上げるのはやめて！　整備班の俺を見る目が！　目がっ！」

俺は精神破綻者じゃないので、そんな蔑みや嫉妬に満ちた目で見られても、興奮や優越感なんて感じないって！

動揺著しい俺を呆れた顔で見ていたレナが、仕方がないといった風情でロベルタの肩に手を置いた。

「ほら、ロベルタ、私の機に座らせてあげるから、先輩を困らせないの」
「……う～、でも、レナ先輩、操縦させてくれないでしょう？」
「ええ、それはさせてあげられない」

……む、レナの目が急に真剣になった。

「この機体に私は命を預けるから、そうそう、好きにはさせてあげられない」
「……ごめんなさい」

「うん、わかってくれたらいいの」

妹をあやす様に、レナはロベルタの頭を撫でる。

慈愛に満ちていると言うか、普段、お目にかかれない柔らかな表情に、無妻整備班の連中の目も釘付けになっているようだ。

だが、それもレナが俺を半目で睨み始めたことで消えてしまい、自然と周囲から溜息が聞こえてくるのがわかった。

「……それで、先輩、何かロベルタに言うことは？」

「何を言うんだ？」

「先輩のことだから、抜かりなく、ＭＳシミュレーターも新型のものに交換させたんでしょう？」

はい、その通りです。

明後日の方向を眺めながら、とりあえず、頷いておく。

「もう、別に機密でもないのに、何で教えてあげないんですか？」

「い、いやぁ、……なんとなく？」

「酷いです、隊長！」

ああ、しまった！　またフェスタの怒りがこちらに！

どうしようかと考えていたら、リーの奴が新任のベルディーニを連れて、待機休憩室に向うのが見えた。

「り、リー！」

「？　何ですか、隊長」

リーは上手く近くにあったゲイツの装甲を足場にして、こちらに針路変更してやってきた。残念ながら、新任君は咄嗟に反応できなかったようで、あたふたとしながら、こちらに進行方向を変えようとしているようだ。

「これから暇か？」

「ええ、まぁ、初期調整も終わりましたから、ベルディーニの奴に艦内を案内しようかと考えていたところです」

ん～、実に素晴らしいタイミングだっ！

「うん、それは都合がいいな」

「はぁ」

「実はＭＳシミュレーターをゲイツ用に交換したんだが……」

「え、本当ですか？」

フィッシュ！

……っていうか、こいつも機会に貪欲だよなぁ。

「ああ、今からそいつを使って訓練していいから、ついでに、フェスタとスタンフォードの面倒も見てやってくれ」

「……隊長、何か、俺に、厄介ごとを、押し付けようとしてませんか？」

リーの奴、中々、場の雰囲気を察する事ができるようになったじゃないか。

「リー、それは穿ち過ぎだぞ。お前の小隊には新任のベルディーニ

が入るからな、少しでも訓練時間を与えようという俺の隊長心さ」
「……わかりましたよ。フェスタ、スタンフォード、先に行って、MSシミュレーターを立ち上げておいてくれ、俺も他の二人を連れて行く」
「はいっ！」
「わかりました」

おやまぁ、フェスタの奴、ころっと機嫌良くなってるよ。

俺達に敬礼をしたフェスタとスタンフォードはすぐに踵を返すと、通路を跳弾のように跳んで行った。

……誰かに衝突しないことを祈ろう。

「では、隊長、俺もルッツを呼んで行きますので、これで」
「ああ、あの二人が満足するまで、面倒を見てやってくれ、頼む」
「……了解です」

リーは、露骨にやっぱりというような顔をして見せた後、苦笑しつつ砕けた敬礼をしてみせた。そして、ようやくこちらに到着しそうな、線が細くて”甘い”風貌の少年……ベルディーニを捕まえると、待機休憩室に向ったようだ。

その後姿を見送っていると、レナがふと、呟いた。

「……リーも変わりましたね」
「ああ、そうだな」

家族を失った悲しみは絶対に癒えるわけがないだろうが、少なくとも、自暴自棄な面が表に見えなくなっただけでも良かったと思う。

「さて、俺も自分の調整をしないとなぁ」
「これだけは、絶対に、サボれませんもんね」
「……レナ、いかにも、俺が普段サボっているように受け取れる言い方は勘弁してくれ」
「え、先輩のことなんて、一言も言ってませんよ？　もしかして、心当たりでもあるんですか？」
「まったく、何であんなに純真で可愛かったレナが、こんなに性格が意地悪になったんだろうなぁ」
「……誰の所為でしょうねぇ？」

げぇ、まずい！

大慌てで、床面を強く蹴って、自分の、……涙が出るほどに眩しい黄色で塗装された自機を目指す。

「じゃ、じゃあな、レナも時間があったらでいいから、シミュレータールームに行って様子を見てやってくれ」
「もう、先輩ったらっ！　わかりました！」
「よろしくなぁ」

レナにひらひらと軽く手を振った後、近づいてくる自機を見つめる。

【ＺＧＭＦ－６００】ゲイツ、……きっと連合の量産機に負けない、頼りがいのある機体だと思う。

同時に……。

……この色だけは、本当に、勘弁して欲しいとも思った。

69　嵐が来る前に　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

70　低軌道の嵐　1

7月。

うちの戦隊が休暇とL5宙域での訓練……MS隊の機種転換及び小隊連携訓練を皮切りに、対MS戦闘、遭遇戦、迎撃戦、遅滞防御戦、強襲戦、艦艇襲撃戦、撤退相互支援といったMS隊戦術訓練や戦隊母艦を構成する二艦の対MSを想定した迎撃や防御の手順構築及び訓練、MS隊と母艦の連携を主眼にした迎撃と撤退の戦術訓練、あまり想定したくはないが、小隊の誰かが落とされた後、その場での臨時再編訓練……に明け暮れていた時も、世界の情勢は、徐々に地球連合優勢、つまりはプラント劣勢に傾きつつあった。

特に地球ではその傾向が強く、ザフト地上軍、特にビクトリアを失い、主力戦力も失っていた北アフリカでは敗勢が続き、戦線はズタズタにされ、占領地も奪い返されている。

当然、ジブラルタル基地からは連日、悲鳴のような救援要請が出され、宇宙軍の軌道爆撃艦隊もボアズ駐留艦隊の掩護の元、戦線やその後方に展開されている前線基地への支援爆撃やビクトリア基地へのハラスメント攻撃を行っていたが、物量と士気で勝る連合軍はこれらを耐え凌ぎ、遂に軌道爆撃艦隊は補給が追いつかない状況に追い込まれてしまった。

空からの援護を失い、戦線に掛かる圧力が一気に増大した結果、士気が崩壊寸前までに落ちたジブラルタルに追い撃ちをかけたのが、7月19日にカサブランカ沖で発生した二回目の大規模海戦だ。

この海戦で連合軍は新たに水中用MSを投入し、その圧倒的な力を見せ付けることになり、ザフト潜水空母艦隊及び地味男君ことグ

ーンやグーンを不良化したような【ＵＭＦ－５】ゾノの部隊は連合軍水中用ＭＳ部隊に蹴散らされ、地中海及び東大西洋の制海権を失う結果となった。

ここに至り、ザフト上層部はジブラルタル基地の放棄を決定し、その戦力をカーペンタリアへと撤退させることになる。

……。

プラント市民やザフトの一般隊員には知らされていないが、このジブラルタルからカーペンタリアへの撤退戦、非常に凄惨なものだったらしい。

ジブラルタルからカーペンタリアへの撤退は、制海権が奪回されたことで海洋ルートでの往還は難しくなり、ヨーロッパ方面の殿軍以外、大部分の部隊が陸路で北アフリカの戦線を突破して東アフリカ沿岸まで向う横断ルートを取らざるを得なくなった。

補給がなった軌道爆撃艦隊の支援爆撃があって包囲戦線の突破はできたものの、危地の中、撤退する部隊全体を指揮できるような突出した存在がいなかった故に部隊間の連携は最悪になり、また、カーペンタリアからの補給ルートも存在しない為に必要な物資が不足した結果、組織戦を展開する所か保有戦力自体がガタガタに崩れていった。

そこにザフトを敵視する現地住民から有形無形の援助を受けた連合軍や現地の反プラント系や反コーディネイター系ゲリラから連日、追撃や襲撃を受けることになったのだから……、もう、目も当てられない。

もしも、東アフリカ沿岸まで迎えに来ていたカーペンタリアの部隊が、海上封鎖に当たっていた連合軍海洋部隊を相応の被害を受け

ながらも撃破して、ＭＳ隊が敵中を長躯侵入して撤退支援しなければ、ジブラルタルの部隊が全滅していたのは疑いないだろう。実際、東アフリカまで到達できた部隊は当初、ジブラルタルから脱出した部隊の二割程だったらしいからな。

もしも、四月馬鹿を起こさず、占領統治でも現地住民のことを慮っていれば、もう少しはマシになっていただろうが……、結局は、因果は巡る、ということが実証されたということだろう。

次に宇宙だが、日に日に目に見えて、月の連合軍宇宙艦隊の動きが活発になっている。特に、地上の余剰戦力を宇宙に上げるために、地球軌道を確保しようと色々と手を打ってきているようだ。

この動きを象徴するのが、月のプトレマイオスから一個艦隊がＬ４に進出して、展開している艦隊が二個に増えたことだろう。この戦力強化に伴なって、地球－Ｌ４－月の航路を巡回する戦力も増えたため、こちらの独立戦隊群も迂闊に手を出せない状況になってきている。

……というか、予定されていた独立戦隊の新規増設が、各駐留艦隊や各要塞防衛隊の増強を優先したいザフト上層部の意向により見送られてた影響で、独立戦隊という便利な駒が不足した為、通商破壊任務に当たっていた独立戦隊が別の任務に駆り出される事になってしまい、手を出せる戦力が半数まで減ってしまったのが一番の原因だったりする。

そんな独立戦隊群が地球－Ｌ４－月の航路で通商破壊を仕掛ける為の前線拠点であるＬ１の世界樹の種だが、連合軍は先だっての戦闘結果から、手を出すと痛い目を見るが月を狙うだけの力はないとでも判断したのか、警戒のため無人偵察衛星を外縁部近くに展開さ

せる位に止めている。

そして、係争の場になりつつある地球軌道だが、七月中旬にビクトリアから打ち上げられた小艦隊が静止軌道上のアルテミス要塞に入った影響で、ザフト及びプラント船籍船舶の行動が著しく制限されることになってしまった。

具体的に言えば、今までは単独でも可能だった地球からの輸送船等の打ち上げや降下が、戦闘部隊の援護や護衛なしに行えなくなったということだ。

結果、船団護衛や地球軌道への道を確保する為の巡回、地球軌道に進出しての示威行動が新たに独立戦隊群の任務として与えられ、通商破壊任務に当たっていた戦隊の半数が割り振られることになった。その為、先に挙げた通り、連合側への組織的な通商破壊が弱まり、月やＬ４の戦力増強を許すことに繋がっている。

……。

でも、まぁ、それも大洋州連合を中心に中立国から高値で輸入している食料品等の必需品が無くなった時に市民生活に与える影響の大きさや、ザフトの戦力及び戦線維持、継戦能力確保のために必要な物資を手に入れる為と考えれば仕方がないのだろう。

地球で磨り減らされてしまったザフトの戦力では、徐々に、そして、確実に、各所で増強される地球連合軍の戦力全てに対抗する事が難しいのだから、取捨選択するしかないのだ。

それにしても、いつかはこうなるとわかっていた事とはいえ、プラント自体の総人口が少ない故に戦力回復が難しいザフトと比して、地球連合の、次から次にキャベツ畑から勝手に生まれてくるんですよ、だなんて、ブラックジョークが作れそうな程の強大な回復力を見るにつけて、これが数の力の恐ろしさかと実感させられる日々で

ある。

◇　◇　◇

8月4日。

訓練を終えて、ボアズに駐留することになった戦隊は船団護衛任務……、地球のカーペンタリアから、マスドライバーと同じ原理なのだが、レール長が短い為に加速力が弱くて、補助ブースター代わりでしかない打ち上げ用加速レールで打ち上げられる輸送船団を地球軌道で援護し、合流した後はボアズ管制宙域まで護衛するという任務に当たっているのだが、これほど心身を磨耗させるものはない。

いつあるかもわからない襲撃に備えるために、常に気が抜けず、四方八方どころか上下水平の全方向に気を配らなければならないってのが、もう、ね、しんどいのよ。

いや、実質的にお仕事しているのは戦隊員だけど、いざ事が起きると、判断や決断して動かないと駄目だから、いつも以上に気が抜けないのだ。

……でも、うちはまだマシな方なんだろうなぁ。

「こちらＩＳ１３１２、周囲に敵影はありません。引き続き、警戒を続けます」

「エルステッド了解。よろしく頼むわね、ビアンカ、ロベルタ」

「了解です」

「任せてください！」

偵察に特化している複座型に護衛の一個小隊を付けて、輸送船団の周囲をぐるぐると大きく回ってもらっているのだ。

偵察機があると、本当に便利だよねぇ。

ベルナールが複座型と通信しているの聞きながら、俺がそんなことを考えている間も、何やら話が続いている。

「ＩＳ１３０３、……デファン、あんたもしっかりと二人を護りなさいよ？」

「わ、わかってるっすよ」

「あ、でも、二人に粉をかけたら駄目だからね」

「……俺、うちの班長連中みたいに飢えてないっす」

まぁ、確かに、ハンゼンに所属している二人の班長、エンリケとジェルマンの自称【ザフト最優のイケメンコンビ】は下半身及びそれに関連する所にしかコーディネイトしてないんじゃないかな、って疑う時があるくらいに、管制や主計、保安、衛生といった各班の女性隊員に声を掛け、未遂だったが、時には力ずくで手を出そうとしていたのだ。

その俺の前世ならば迷惑防止条例や刑法に引っ掛かりそうな二人の行動から、あまりにも女性隊員からの苦情が多かったので、五月に一度、二人を呼び出して注意をしたんだが、そんなことは個人の自由に関することだ、等と大いに嘯いてくれた。

そのまったく反省するつもりのない二人の態度に、普段から寛容でかつ温厚な俺も頭にきて、エヴァ先生やリュウ副長といった女性幹部と謀り、二人の食事や飲料に様々な調味料や下剤を混ぜる、二人が使用するシャワーに赤色の顔料を混ぜる、二人の洗濯物を洗わないでむしろ汚して返す、むさ苦しい男性保安班員と汗まみれの格闘訓練をさせ、シャワー室ではだかのげふんげふん、まぁ、要する

に、色々な嫌がらせ、もとい、策を弄して、二人がちょっかいを出した全員に、泣いて謝るまで懲らしめたのだ。

……。

まだ、あれから三ヶ月も経っていないというのに、なんだか、懐かしい話に感じられるというか、短い期間に色んな事が起きすぎて、時間の感覚が狂ってきているのかもしれない。

ちなみに、件の二人はあれだけのことをされてもまだ懲りずに、女性隊員に粉をかけて続けている。

まぁ、男としてのマナーを守るようにはなったので、見逃しているけどね。

……なんか、今の状況とまったく関係のないことを考えてしまったな。

でも、少しリラックスできたから良しとするかと心中で自己弁護していると、俄かにアーサーがこちらを振り仰いだ。

「艦長！　地球、ビクトリア基地からの打ち上げを確認しました！」

「……ですって、隊長、どうします？」

「まだ、護衛に当たる前ならちょっかいを出したかもしれませんが、今は護衛対象もありますから、任務である輸送船団の護衛を第一に動きます。よって、後方からの攻撃に備えて、厳に警戒をするに止めておきましょう。ＭＳ隊には二種戦闘配置を……、後はゴートン艦長の判断に任せます」

「了解です。トライン班長、ハンゼンにＭＳ隊の二種配置と前方に進出してアルテミスやデブリ帯を警戒するようにと通信を送ってちょうだい。うちはＭＳ隊の二種配置発令と合わせて、後方に下がって、地球とＬ４方面への警戒を担当するからね」
「アイ、艦長」

アーサーが艦長の指示に従って、各担当管制官に指示を出し始めるのを眺めているとゴートン艦長が話し掛けてきた。

「やはり、連合は宇宙戦力の強化に乗り出しているようだね」
「ええ、宇宙での攻勢準備が本格的になりつつあるんでしょう」
「……ビクトリアが無傷なのが、つくづく痛いねぇ」
「軌道爆撃も、地球軌道の安全確保が難しくなった今ではやりにくいですから」

今の状況で無理をして軌道爆撃をしようとしても、下手をすると、今年２月の低軌道会戦のようなことが、攻守逆転で起きうる可能性があるからなぁ。

戦力が磨り減っている状態で、かつ、回復が見込めない以上は、必要な無理であっても早々決断できない。

云わば、昔からある通りで、ない袖は振れない、って奴だよなぁ。

自陣営の厳しい懐事情に溜息をつきかけた時、再び、アーサーが大きな声を……、これまた大きな驚きの声と共にあげた。

「えぇぇぇっっ！　か、艦長！　Ｌ４より多数の熱源を探知！　艦隊規模の出動と思われます！　推進方向は……、地球ですっ！」

艦長が俺に目配せしたので頷いて、対応を委任する。

一応、戦隊の指揮系統を崩さず、対応を早める為の知恵だ。

「トライン班長、ボアズに大至急、Ｌ４方面に動きありって伝えて」

「はい！」

「それと、ハンゼン、輸送船団司令にも同様の内容を伝達、Ｌ４方面から攻撃があるかもしれないから、警戒を密にするようにも付け加えてちょうだい。ＭＳ隊は引き続き、二種配置で待機。偵察組には、Ｌ４方面を重点的に警戒するように連絡して」

「アイ、艦長！」

……でも、こうすると、俺って、いらないよなぁ。

目の前の大事を放って、自身の存在意義について考えていると、ゴートン艦長が顎の無精髭を撫でながら、小声で囁きかけてきた。

「奴さん達の目的は、何だと思う？」

「……おそらく、地球軌道の確保に本腰を入れた、って辺りでしょうね」

俺達のような小物を潰すために艦隊が動くなんてことは、まずあり得ないし、仮にそうだとしても、既に地球軌道を離れてＬ５に向っている以上は、今更遅いとしか言いようがないからな。

「ということは、地球からの宇宙への戦力移動を前にした、……軌道確保による打ち上げ支援かねぇ」

「……プラントへの本格的な攻勢を始めるための第一歩ということでしょう」

「うん、それに艦隊戦力に余剰ができたとも、こちらに対抗できる

だけの自信ができたとも、受け取れる」
「もしそうなら、その自信の源は、ＭＳを本格運用し始めたってあたりですね」

しかし、対ＭＳか、……対ＭＳ戦闘訓練はやったが、何分、実戦は初めての事だから、不安だ。

頭の中で、ああだこうだと、対ＭＳ戦術を思い返していたら、艦長が帽子の位置を調整しつつ、口を開いたので耳を傾ける。

「その連合軍のＭＳだけど、六月のビクトリア戦で量産型ＭＳの他に派生機や新型機を出してきたことは聞いてる？」
「ええ、ビクトリアからの撤退に成功した部隊が持ち帰った戦闘データや報告書を読んだ以外にも、シゲ……ティーバ班長からも話を聞きました。派生機に関しては、今年１月に、こちらが鹵獲した試作機や足つきの艦載機の技術を使った、砲撃戦仕様機と武装換装仕様機があるみたいですね」
「新型に関しては？」
「残念ながら……。ビクトリアでの情報は得られず、オーブで得られた概要のみで、詳細はわかりません」

新型に関しては、ビクトリアで直接戦闘した部隊がその戦闘で全滅したり、以後の度重なる撤退戦で落伍したりで、戦闘データの回収ができなかったのだ。だから、具体的な戦闘データや詳細情報がなく、オーブで諜報員が得た概要情報だけしか存在しない。
ちなみに新型だが、聞いている限りでは、火力が強力な支援機、防御力に優れた突撃機、機動力に優れるＭＡ可変機らしい。

「……俺達が戦う時に、出てこないことを祈ろうか」
「……ですね」

ゴートン艦長と二人して頷きあった時に、アーサーが報告にやってきた。

「艦長、隊長、ボアズからの返信です。ラインブルグ戦隊は当初の予定通り、輸送船団の護衛任務を全うせよ、だそうです」

「お前達は余計な気を使わなくっていいってさ」

「なら、お言葉に甘えましょう……、と言いたいところですが、情報はあっても困りませんし、複座型に連合軍艦隊の情報を集めさせましょう」

「複座型の護衛は？」

「リー小隊を出します。輸送船団周辺の哨戒パトロールにはマクスウェル小隊を、デファン小隊は補給後、予備に回しましょう」

「了解。トライン班長、その旨をハンゼンとＭＳ隊に連絡してちょうだい」

「了解です」

アーサーが俺達に敬礼して、自身の仕事場へと立ち去ると、艦長が独り言のように呟いた。

「きっと激しい戦闘になるんだろうねぇ」

「ええ、地球軌道が確保できるかできないかで、今後の状況も変化しますから……」

……。

それにしても、使える戦力が少ないって、やっぱり大変なことだよな。

その上、その戦力の回復すらも、ままならないときた。

戦争当初の有利条件だったＭＳも、相手が本格配備し始めている以上は格差がなくなりつつあるし……、はぁ、これから、きっと、厳しい状況が続くんだろうなぁ。

まったく、現実ってのは、手加減がないから、非情だよねぇ。

……あ、何か、胃と頭が痛くなってきた。

後で、エヴァ先生に薬をもらおう。

……。

うぅ、本当に、機械仕掛けの神様、どこかにいないかなぁ。

70　低軌道の嵐　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

71　低軌道の嵐　2

8月6日。

連合軍艦隊が大挙して出動するかのように、派手に大量の熱を撒き散らしている月のプトレマイオスとL5外縁部に進出したヤキン・ドゥーエ駐留艦隊との睨み合いが構築された状況の中、ボアズに駐留する艦隊が地球軌道に到達し、待ち受ける連合軍艦隊と対峙している。

それぞれの戦力は、ザフトのボアズ駐留艦隊がDDMHが四、FM十四と主にジン、シグーを中心とする艦載MS108機であるのに対し、連合軍艦隊は300m級一、250m級十二、150m級五十二及びそれらの艦載機だ。

うちの戦隊が事前に行っておいた情報収集の結果、250m級の半数と150m級の三割強に若干、改装されたものが発見されたため、これらがMS母艦ではないかとボアズ駐留艦隊司令部では判断している。

今回の会戦に際して、うちの戦隊というか、輸送船団の護衛や航路巡回の任務に当たっていた六個独立戦隊は遊撃を兼ねた予備戦力を担うことになっており、艦隊の後方で待機し、戦況や状況に応じて動くようにと艦隊司令部から通達が出されている。

とはいうものの、以前、俺達が二月にやったような奇襲を警戒する必要がある以上は、積極的に動きにくいというのが本音だ。このことに関しては他の五つの独立戦隊……、ラヴロフ隊、ムーア隊、シュタイナー隊、モンテルラン隊、セナ隊の隊長達とも話し合っており、独立戦隊組が積極的に動かなければならない場合でも、最低

一個戦隊分の戦力を残すべきだとの結論に達している。

……どの隊になるかはわからないが、うちが残る可能性が高いかもしれないだなんて、予想していたりする。

◇　◇　◇

8月6日夕方。

新任やMS隊の様子を見る為に降りていた格納庫から艦橋に戻って来たのだが、相変わらず、メインスクリーンには敵味方双方の艦艇による”当たったらラッキー”な艦砲や対艦ミサイルによるハラスメント攻撃が映し出されていた。

実は、昼過ぎから始まった戦闘は、艦艇での遠距離砲撃戦に終始しているのだ。

連合軍側が積極的に攻撃を仕掛けてこない思惑はともかく、ザフト側の動きが鈍いのは、艦隊司令部が連合軍のMSを警戒してるのだろうと、俺は勝手に推測している。

でも、この砲撃戦なんだが、艦砲弾はともかくとして、ミサイルは無駄遣いとしか言いようがない。

もちろん、ここ最近のミサイルがニュートロンジャマー影響下での使用を考えて、電波誘導式からレーザー誘導や熱源探知式へと主流が移りつつあるのは知っているが、対抗策が多いために牽制ぐらいにしか役に立たないのが実情なのだ。

「あのミサイル、一発、幾らするんだろうなぁ」
「……そりゃ、俺達がまともに働いても、まず、お目にかかれない金額だよ」

思わず出てしまった本音という名の独り言に、アーサーやＣＩＣに、流れ弾と奇襲の警戒をしてちょうだいな、との指示を出した以降は、肘掛に頬杖を付いてメインスクリーンを眺めていたゴートン艦長が答えを返してくれた。

「……お金って、ある所にはあるんですね」
「いや、プラントに関しては、国債の発行で凌いでいるだけさ」
「え、そんなもの発行してたんですか？」
「うん、実は発行しているんだよ。……何分、プラント市民はプライドが高くて、外聞を気にする人が多いからね。目に見える借金は見栄えが悪い上に、最高評議会も支持率を下げるからってことで、内向きには宣伝しないで、軍需企業を中心に買ってもらってるそうだよ」
「それは何とも、あほらしい理由ですね」
「まぁ、厳しい財政や苦しい戦況を市民に隠蔽する意図もあるんだろうさ。……あ、ちなみに、返済の財源は、戦後、適当な理由をつけて空気税を増税することで確保するみたい」
「へぇ……、って、増税、ですか？」
「うん、後、半年位したら、上げる予定らしいよ」

なんてこった、増税かよ。

……それまでに親父の所に行けたらいいんだけどなぁ、なんて狡賢いことを思い浮かべてしまうが、一般庶民なんてこんなものだ。

それよりも、ゴートン艦長と話を続けるために知っていることを

俎上に上げる。

「俺も、資源に関しては、資源衛星での採掘の他に中立の月面都市群からアメノミハシラ経由で、食料は地球の大洋州連合や占領地、中立国から、前はオーブやビクトリアのマスドライバー、今はカーペンタリアの加速レール経由で、それぞれ仕入れているとは聞いていたんですが、国債や増税は知りませんでしたよ」

「そうだろうねぇ。……俺もつい最近、知り合いから聞いて、初めて知ったぐらいだからね」

「でも、国内はとにかく、国外でプラントの国債を買う国なんて、あるんですか？」

「一番最近の発行は……、確か、去年の十二月だったかな、その時は、大洋州連合を始め、月面都市群やスカンジナビア王国の王族、赤道連合の一部企業、オーブの氏族なんかが挙って買っていたらしいよ」

「はぁ、よくもまぁ、独立が達成できるかどうかもわからない上に、自分達にとんでもない迷惑を振り撒いた国の国債をよく買う気になりますね」

「ふふ、ラインブルグ君も相変わらず言うねぇ」

しかし、大洋州連合はともかくとして、月面都市群やスカンジナビア王国、赤道連合、それにオーブがプラントの国債を買った？

いや、中立国だから、別におかしくはないが……、これはやっぱり……。

「中立国が買った理由は、戦後を睨んで、プラントへの影響力を確保する為？」

「……かもしれないけど、当初は攻められない為の担保代わりにでもしてたんじゃないかな？」

「あ、なるほど」
「まぁ、実際、利率がとても良いからって理由もあるんだろうね」
「……それだけリスクが高いってことでしょうに、まったく、よく買いますよ」
「くく、言えてる」

でも、確かに債権を握ってれば、外交面でも裏で大きな顔ができるし、さり気ない干渉もできる。それに、例え、踏み倒されたとしても債権を買った事実は残るから、踏み倒した事も含めて、借りを作れるって面もあるか。

あっ、だから、ヘリオポリスの件も有耶無耶になったのかもしれない。

……ふぅ、まったく、何時の世の中も、裏ではドロドロしてるってことだなぁ。

「あ……、隊長、戦闘に動きがあったみたいです」

ゴートン艦長が声色を変えて、注意を促すのを聞き、俺も意識を切り替えて、メインスクリーンに目を移す。

……。

連合軍艦隊から艦載機が出撃したようで、艦艇の周りに多数の出撃光が確認できた。これに応じる形で、ザフト艦隊からも、次々にＭＳが発進して行くのが艦橋から見える。

味方の健闘を祈る意味でも見送りたいが……、今は、連合軍がＭＳを出撃させてきているかを確認したい。

「トライン班長、敵艦隊周囲を拡大できる？」
「すぐに」
流石は艦長、心得ている。
……。
メインスクリーンの映像が拡大され、３００ｍ級や改装された２５０ｍ級と周囲の様子が映し出される。
３００ｍ級から出撃しているのは従来通りの主力ＭＡたるメビウスだったが、改装２５０ｍ級から出撃しているのは……。
「……人型、……ＭＳ、だねぇ」
「ええ、あの姿形……、連合軍の量産機【ストライクダガー】です」
生で初めて実際に見る連合軍の主力ＭＳ、その判明している機体データを思い出して、自然と溜息が漏れた。
「どうかしましたか、隊長？」
「いえ、あの量産機の武装がビーム兵装だったことを思い出しましてね……」
「……実体弾主体のザフトのＭＳは攻撃面で不利ということで？」
「相手は一撃でこちらを撃破できる破壊力を持つ武装に加えて、頑丈な盾まで持ってますから」
ビクトリア陥落以降の戦闘で持ち帰ることに成功した実戦データでは、ストライクダガーが装備している盾は、ジンの重突撃機銃の弾じゃ、破壊できないくらいに頑丈らしいからな。

「運用実績の差で、何とかできればいいんですけど……」
「まぁ、そこは、ボアズ艦隊の実力に期待しましょう」

ゴートン艦長の言葉に込められた期待と若干の毒……ボアズに駐留している艦隊は新星攻略戦とその運搬ミッションに参加していた艦艇が主であり、それ以降は実戦を経ずに訓練尽くめだった……を感じ取り、俺も頷く。

「そうですね、期待させてもらいましょう。……ですが、味方が崩れた時や突発的な事態を想定しておくに越したことはないです」
「……確かに。フォルシウス艦長とも話して、劣勢時の対応を確認しておきます」
「ええ、お願いします」

ゴートン艦長が艦長席備え付けの小型通信機を使った戦隊首脳用ホットラインで、ハンゼンのフォルシウス艦長に連絡を取るのを見届けた後、再び、視線を前方に移す。

メインスクリーンには機動戦力同士が激しくぶつかり合う前線の状況が、サブスクリーンには戦域全体を記号や数字で模式化した状況図が映し出されている。

そのメインスクリーンに目を向けてわかったのだが、前線では基本的に、ザフトのＭＳ隊がこれまでの経験を活かしてか、連合軍の機動部隊を翻弄しているようだった。けれども、ストライクダガーの防御力やメビウスが装備している対ＭＳ用小型ミサイルの制圧力の為、撃墜には至らないケースが目立つようにも感じられた。
それどころか、時には、逆にストライクダガーの攻撃を受けて、危うく落とされそうに、或いは、実際に落とされている場面が散見

されるくらいだ。

そんな前線の映像から受ける印象と戦域状況図から見取った情報から、戦況は均衡状態といったところだろう。本当に、去年までの戦闘からは考えられない光景であることは間違いない。

……こうやって使用している兵器に格差がなくなった以上、後は、数の差でこちらが磨り減らされるというわけか。

これはもう、カナーバ議員の外交交渉に期待するしかないなぁ。

まったくもって他力本願な事だが、自分の力には限界があるというか……、そんな自分一人で何もかもをしなければならないような、何もかもを背負っているかのような考え方自体が、傲慢でかつ不遜としか言いようがないよな。

この世界は誰のものでもなく、そもそも一人の力で世界が簡単に動くわけがないのだから……。

「……隊長」

「ッと！　何ですか、艦長？」

「いえ、アルテミス要塞に動きが見られます」

「……こちらへの攻撃ですか？」

「それに近いものですね」

艦長が目で指し示す先、メインスクリーンはこれまでの戦域映像が半分にされ、もう片半分には新たにアルテミス要塞方面が映し出されていた。

……。

アルテミスに駐留している小艦隊が外に出て、こちらを伺うような動きを見せている。

「他の戦隊は何か言ってきましたか？」

「ムーア隊とシュタイナー隊が”我が戦隊が対応する”と名乗りを上げてますよ」

「……その二戦隊に対応を任せてしまう方が早いですね」

「わかりました。うちの考えを他の戦隊に伝えておきます」

「ええ、お願いします」

これで、ある程度、アルテミスの動きを制する事ができるだろう。

後は、Ｌ４や月からの援軍が来ないかどうかだな。

「艦長、Ｌ４や月に動きは？」

「月に関しては毎度の如く、ヤキン・ドゥーエの艦隊が月方面へ牽制に動いている上に、Ｌ１にも監視の目がありますからね、大丈夫と考えても差し支えはないでしょう」

「では、Ｌ４は？」

「こちらは……、若干、探知される熱源が増えているようですが、表立っての動きは見えていないですね」

……だが、動く可能性はあるということか。

そんな俺の憂慮を見透かしたのか、艦長が事実に基づく楽観を述べてくれた。

「まぁ、流石に今から動いても、地球に落ちる危険を覚悟しない限り、届くことはないでしょう」

「……ですね」

なら、これで、懸念事項は、それこそ予期できない突発的なアクシデント以外は、ないと考えていいのだろうか？

「んん、また他の戦隊から通信が着たみたいですね」

「……戦域に突入して、流れを傾けるつもりかな？」

「今の状況なら、おそらく、その連絡でしょう」

自身の手で、自身の部隊で、会戦の行方を決められるならば、これ程の勲はない、って考えだったら、絶対に無理をしてしまうからやめた方がいいとは思うが……、ここに揃っている戦隊は、通商破壊任務で劣勢であっても強靭な精神力でもって対抗し続けた連合軍艦隊と鎬を削った隊ばかりだから、そんな考えは捨てているだろう。

アーサーから報告を受けた艦長が一つ頷いてみせると、俺にその内容を話し始めた。

「……どうやら、ラヴロフ隊は前線宙域の敵に横撃を、セナ隊は敵艦隊への攻撃を仕掛るつもりみたいです」

「ラヴロフ隊はともかく、セナ隊は大丈夫なのか？」

ラブロフ隊の隊長、イヴァン・ラヴロフは、若年が多いザフトでは貴重な３０代後半であり、ジンのテストパイロットを務め、訓練所の最終試験でユウキや俺を褒めてくれた人でもある。非常に温厚で沈着な人柄で、ナチュラルを色眼鏡で見ないという、ザフトでは希少な”良識派”といってもいい存在であり、独立戦隊群のまとめ役も担うこの人は戦闘経験も豊富だし、若輩の俺なんかが心配なんてする必要はない。

もう一方のセナ隊の隊長は俺と同世代であり、血気盛んな面があるのだが、白服を纏うだけ合って、それをコントロールできるだけの忍耐力を身につけている。それに俺達同様、通商破壊任務に長く従事していただけあって実戦経験は豊富だし、前の低軌道会戦にも参加していたこともあって、この環境下での戦闘経験があるのは心強い。

しかしながら、いくら実戦経験が豊富とはいえ、十二機だけで艦隊に攻撃を仕掛けるのは、前線を突き破る、所謂、敵中突破をしないといけないことを考えると、やはり無謀すぎる気がするんだが……。

「セナ隊はうちと同じで、ゲイツが主体らしいですから、自信があるってことでしょう」

「そうですか。……というか、そもそも、同格の相手を止める権限は俺達にはなかったですね」

「ですが、判断材料を提供することはできます」

判断材料か。

……。

「敵機動戦力の能力が以前よりも向上していることに加えて、今後の機動戦力保持を考えると、味方機の掩護に回って前線を優勢に持って行く方が得策だと思われる。また、敵艦隊への攻撃は、機動戦力を叩き潰してからの方が効率的ではないか、とセナ隊に伝えてください。それと、ラブロフ隊には、武運を祈ると」

「了解です」

後は、受け取り手のセナ隊長がどう受け止めるか、だな。

メインスクリーンから目を外し、窓越しに青く淡く輝く地球へ、戦場と化している宙域へと目を移す。

……。

時折、火球が瞬き、戦域を彩る。

そして、戦域下方では、地球の強力な力に引かれたのだろう残骸やデブリが以前と同じように赤い輝きを発しながら、重力の井戸へと堕ちて行く。

「隊長、セナ隊からの返信です。ラインブルグ隊長の意見は重々承知している。故に短期での決着を図るべく敵の大元を叩く、だそうです」

「……そうですか」

そういう考えで動いているんなら、協力した方がいいかもしれないな。

……なら、何ができる？

……。

うん、俺達が為すべきことは、セナ隊が連合軍艦隊への突入に集中できる環境を整えることだな。

「艦長、戦隊に第一種戦闘配置を発令。戦隊ＭＳ隊はセナ隊の艦隊突入を支援……、敵戦線に穴を開ける露払いに入ります。セナ隊と、他の戦隊や艦隊司令部にもそう伝えてください」

「了解です。……総員、第一種戦闘配置！　セナ隊に、〝我が隊が

戦線に穴を開け、突入を支援する”とも」
「アイ、艦長！　総員、第一種戦闘配置！　ハンゼンに一種配置を伝達！　セナ隊に”我が隊が戦線に穴を開け、突入を支援する”と伝えます！」

一気に活気付く艦橋を少し眺めてから、ゴートン艦長に声をかける。

「艦長、俺も出ますから、後の全体指揮を頼みます」
「はっ」

ゴートン艦長がキリッとした敬礼をしたので、こちらもできるだけ、綺麗に見えるように意識して返す。

すると艦長は普段のとぼけた顔つきに戻り、口を開いた。

「無理は駄目だよ、ラインブルグ君」
「ええ、ちゃんと、皆、連れて帰ってきますよ」
「うん、その言葉、信じるよ」

できるだけ不敵な笑みを浮かべて、艦長の念押しに応え、艦橋を後にした。

71　低軌道の嵐　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

72　低軌道の嵐　3

格納庫に入り自機に向って跳びながら、格納庫中央に陣取り、整備班に指示を出していたノーマルスーツ姿のシゲさんに改めてハンドサインで”全機出撃”と示した後、ゲイツのコックピットの潜り込む。

そして、ハッチを閉ざすことで外界から入ってくる情報を意識的に遮断して、何度も反復して覚えた動きで、自機の起動シークエンスを大急ぎで進める。

生命維持系……グリーン。
バッテリー残量……メイン、サブ共に１００％。
センサー系……グリーン。
機体制御システム……グリーン。
操縦システム……グリーン。
通信システム……グリーン。
排熱システム……グリーン。
推進システム……メイン、サブ、共にグリーン。
推進剤残量……メイン、サブ、各部バーニア、１００％。
機体各部情報……オールグリーン。
装着兵装……ＭＡ－Ｍ２１Ｇ、ＭＡ－ＭＶ０３、ＭＭＩ－ＧＡＵ２、ＥＥＱ７Ｒ。
ＭＡ－Ｍ２１Ｇ用バッテリー残量……１００％。
ＭＡ－ＭＶ０３用バッテリー残量……１００％。
ＭＭＩ－ＧＡＵ２残弾……１００％。
ＥＥＱ７Ｒ用バッテリー残量……１００％。

起動に伴なっての機体状態の確認を終えて通信系をオンにすると、すぐにレナとベルナールから通信が入った。

「先輩！　ＭＳ隊全小隊の出撃準備、完了しています！」
「こちら、ベルナールです。セナ隊からの通信で、我が隊が敵艦隊までの道を切り開くのを待つ、とのことです」
「両方とも了解した。ベルナールはすぐに、略式で出撃シークエンスを始めてくれ。……エルステッドの先発はリー小隊、ハンゼンはマクスウェル小隊だ」
「了解です。戦隊は出撃シークエンスを開始します」

さて、どうやって敵戦線に穴を開けるかだが……、ここはアロー（※注１）でいってみて、それで駄目なら、クラブ（※注２）に変化するのが無難か。

後は、敵の動きに応じて、いつもの如く、臨機応変に動いていくしかない。

「マクスウェル、リー、デファン、ＭＳ隊はアローで戦域に突入する。それで敵とぶつかってみて、突破が難しいか、全体の状況次第で、クラブへの変化で敵を崩すつもりだ。アローの両翼はマクスウェル小隊、リー小隊、ヘッドはデファン小隊に任せる」
「わかりました」
「了解」
「ううっ、アローからクラブへの変化って……、これだから先輩は人使いが荒いって……」
「ん、んん？　デファン君、何か言いたい事があるのなら……」
「い、いや、な、何にもないっすよ！　了解っすっ！」

俺の撫で声を聞いたデファンの慌てぶりに、隊の通信系から隊員達の笑い声が漏れる。待機が長かったから、これで少しは空気が変わって緊張が解れたらいいんだが……。

それにしても、こういう大事な場面では、デファンの奴には助けられる。

……まぁ、案外、素、かもしれんがな。

「フェスタとスタンフォードは戦隊周囲で奇襲の警戒に当たってくれ」

「はい！」

「了解しました」

「レナはいつも通り、俺の僚機だ」

「了解です」

指示はこんなものかな、と考えたところで、タイミングを計っていたかのようにベルナールが画面に現れた。

「隊長、いつでも出撃可能です！」

「了解、ベルナール。……ＭＳ隊各員へ、これから俺達が為すべきことは、敵戦線に穴を開けて、セナ隊を敵艦隊まで届けることだ！　このセナ隊の攻撃が成功すれば、この戦闘での形勢はこちらに大きく傾く！　各員、全力を尽くせ！」

「「「了解！」」」

「よし！　ＭＳ隊、出撃する！」

◇　◇　◇

俺がMS格納庫に移動して出撃準備をしている間に、ゴートン艦長が戦隊を味方艦隊の上方……、より地球から高度を取った座標に移動させて、重力ポテンシャルを稼いでくれていた。これで射出時に地球の引力も速度に上乗せできるから、戦域に突入するまでの時間が短くできる。

……もちろん、地球に足を掴まれて、引きずり込まれないように注意しないといけないけどな。

そんな訳で、射出されて前線に到着するまでの短い間に、隊の編隊を整え、前線状況の把握に努める。

……。

前線の戦況はラヴロフ隊に所属する十八機のMSが戦域突入した事によって、戦力比がザフト側に傾き、確実にこちらが有利になりつつある。

だが、劣勢となった敵機動部隊は、それでも一撃離脱に加えて対MS用小型ミサイルにより撹乱するメビウスと攻守にバランスが取れたストライクダガーの連携でもって、今までからは考えられない程の驚異的な粘りを見せている。

俺と同じく、その光景を見ていたらしいレナが小さく感想をこぼすのが耳に入る。

「これは……、今までにない粘りです」

「ああ、そうだな。……それに、こうも短期で決着がつかないとなると、MSのバッテリーや推進剤、兵装の残弾、パイロットのコン

ディションにも不安が出てくる」
「でも、それは向こうも同じじゃないんですか？」
「レナ、ここからが数の力を実感する所だ。……見ろよ、敵の増援というか、第二波が来るぞ」
「……あ」

かなりの打撃を受けて数を大幅に減らした先発隊と入れ替わる形で、敵艦隊からの新たな増援、ＭＳとＭＡ混成部隊が前線に立ち塞がりだした。

戦域の隅を敵艦隊に向って移動している俺達の前にも、こちらが新型ということで確実に対応する為なのか、敵艦隊周辺から艦隊護衛に当たっていたらしいストライクダガーの部隊……、総計十二機程が三機毎に小編隊を組んで向って来ている。ついでに付け加えれば、こちらの隊形に合わせてか、敵ＭＳ隊は横に広がる形で展開しているようだ。

……。

とりあえずは、予定通り、このまま突っ込もう。

「このまま行くぞ！　デファン、突進して敵の編隊を崩せ！　リー、マクスウェルはデファン達の突入支援、その後は両翼で敵小隊を拘束しろ！」
「了解っすよ！」
「「了解！」」
「各機、回避機動を怠るなよ！」

俺の指示を聞いてすぐにスラスターの推力を上げたらしいデファン小隊が左腕のシールドを前面に翳す事で被弾面積を少なくしつつ、

恐れを知らぬように敵部隊へと突進して行く。それをリー、マクスウェルの両小隊が援護すべく、ビームを敵部隊へと撃ち始めた。

そして、俺とレナもまた、掩護のビームが走る中、デファン達の後を追って加速を掛ける。

対するストライクダガーの部隊は迎撃のためか、横列のまま足を止めて、こちらのビームを防ぐために盾で身を隠しながら、先陣を切っているデファン達や後続の俺達へと次々にビームを撃ち放ってくる。

……おそらく、相手はこちらの鋭鋒を受け止めきって、包囲殲滅するのが狙いなのだろう。

となれば、こちらが中央部を突き破れば勝ちを拾えると言えるが……、どうだろうな。

デファン達は取りあえず、中央部に位置する二つの敵小隊のうちから一つに狙いを絞ったようだし、両翼も……、どうやらそれぞれ交戦に入ったようだ。残る敵小隊は、こちらを気にしつつ、デファン小隊と戦闘を開始した味方へと接近し始めている。

……このまま、突破を仕掛けるか？

瞬間、全小隊の状況を見通すが……、やはり、新任で今日の戦闘が初陣でもあるベルディーニの動きが拙く、回避機動も訓練時よりも鈍いし、正直言って頼りないというか、そこからリー小隊が崩される可能性が高いように思える。

ここは……、新人に負担を掛けるよりは、不利な状況に慣れてい

る俺とレナが危険を負う方が、確実な撃破が見込めるかもしれない。

「デファン、クラブに変更する！」

「ッ！　うっす、了解っす！」

……戦場での決断は迅速に、ってか？

それにしても、ストライクダガーの盾だが、こちらのビームが当たっても破壊されないところを見ると、やはりと言うべきか、ゲイツのシールドと同じく、対ビームコートが為されているようだ。

こうなれば、盾のない箇所を狙って直撃させるしか、撃破することはできないだろうなぁ。

近くの敵小隊から撃ち放たれる妨害射撃の中にあっても、小隊による見事な連携機動と牽制射撃で他の二機よりも動きが鈍かった一機のストライクダガーを追い詰めて、撃破してみせたデファン小隊に追い着き、大声で呼びかける。

「デファン、交代だっ！　俺達が中央を引っ掻き回して引きつける間にリー小隊と合流して、叩き潰せ！」

「うっす！　任せるっす！　モーリス、ジョンソン、行くっすよ！」

俺とレナと入れ替わる形でデファンが後方へと一旦引くと、それに釣られる形で二つの敵小隊が団子状になって、前へと進んでくる。

「レナ、訓練通りに行けるな？」

「はいっ！」

相手を一機でも減らしてくれたデファン小隊に感謝しつつ、二つ

の敵小隊を一箇所にまとめて拘束する為にも、盾がない面を狙って左側へ回り込むように、単機で機動し始める。

こうやって、ぐるぐると敵の外を回りながら、足止めも兼ねつつ隙を狙うのだ。

……いや、ずっと、ほぼ全力で動いているから、かなり、しんどいけど、今回の相手は足が止っているだけ、マシだろう。

目前で単機になって見せた為か、はたまた、悪目立ちしすぎる機体色の所為か、ストライクダガーはこちらを狙って大量のビームを撃って来るが、高機動と乱数回避及び気分的な手動回避によって、後追いになるか大きく外れている。

ちなみに、僚機であるレナも単機で右側へと回っていたりするのだが……、連合の連中はいつものように俺に夢中……、なんか嫌な表現だな……、んんっ、俺の首を狙っている為か、あんまりというか、ほぼ狙われてなかったりする。

ううむ、これを機体の色のお陰とするべきか、所為とするべきか、と悩むところだが……、ザラ議長に盛大に文句を言って、給料に機体色手当を新しく上乗せさせた手前もあるし、色のお陰としておこう。

って、そんなこと考えてる場合じゃないな。

「レナ、大丈夫か？」

「……っ、そこっ！」

って！　ちょっ！　えぇっ！

レナの奴……、機動しながら、俺を狙うのに夢中になって、不用意に突出した一機を撃ち抜きやがった！

ま、前から思ってたけど、こりゃもう、絶対に俺よりも腕がいいな。

なんてことを考えていたら、残りのストライクダガーに動きがあり……。

「あらら、背中合わせになったか、考えたな」

「どうします、先輩？」

「でも、ここが宇宙ってことを忘れているみたいだな。レナはこのまま隙を狙ってくれ」

「了解です」

レナの返事を受けて、レナの回転軸と角度を変えて回転するべく、少しずつに回転軸をずらして、いって……と、危ない。

たまに、切り返してみせないと、狙いがばれるか……、今後は、気をつけないとな。

「先輩、リー小隊に合流、畳み掛けてるっす！」

「わかった！　周辺からの横槍……、特にメビウスの一撃離脱に注意しろ！」

「うっす！　了解！」

デファンに注意を促した手前、視界の隅で周辺状況を確認するが……、うん、横槍に来そうな敵影はないし、主戦域はともかく、うちの隊に関してはリー小隊に戦力を集めたから、明らかにこちらが

優勢になってきているみたいだから、大丈夫だろう。

で、こちらも、そろそろ、角度を変えて４５度くらいにはっ！
なっ！　った！　っが！　どうっ！　対応っ！　するっ！　かっ！
なってっ！

……はぁふぅぅぅ。

どうやら、連中、俺に狙いを絞ったようだな。

四機のストライクダガーがレナからの攻撃に対処するためだろう、小刻みにスラスターやバーニアを噴射させて回避機動を取りつつ、こちらを本格的に狙い始めている。

けど、固まるばかりで積極的な動きを見せないのは、さっきレナに撃ち抜かれたからだろう。

「レナ、隙が絶対にできる！　頼むぞ！　だが、油断もするなよ！」
「はいっ！　任せてください！」

でも、俺も後輩任せではいられないので、隙を探る。

……。

……。

……むぐぅ、盾が邪魔って、いうか……、射線を避けるだけで大変だぁ、って！

「一機撃破ッ！」

……ほ、本当に凄いよね、レナ。

レナ機から立て続けに二機も落とされた影響か、今度はレナを警戒して、狙いに行くような動きを見せ始めた。

その動きの為に生まれた大きな隙をついて、こちらは下手な射撃は止めて、軌道を一気に変更しての一撃離脱でビームクローによる攻撃で勝負を仕掛けることにする。

「ッあっ！」

急激な軌道変更に、身体が軋むが……、我慢だっ！

速度を活かして、一気に相手の懐にっ！

……っあ！

むぐぐ、すれ違い様に、二機のストライクダガーへと攻撃を仕掛けたのだが……、寸前に回避されてしまい、一機の片足ともう一機の頭部を刈り取るくらいしかできなかった。

で、攻撃に失敗したとなれば、次は……。

「先輩！　後っ！」

レナから発せられた危急の声と己の勘に従って、咄嗟に下方に逃

げつつ、機体をロールさせて、回避機動を取らせる。

……機体上方や左側、それに回避した後を追うようにビームが連続して走っていく。

スーツ内の身体中から冷や汗が流れ出るのを感じながら、敵の攻撃を避けるために、更なる回避に全力を尽くす。

「援護しますから、合流してください！」
「わかった、頼むぞ、レナ！」
「任せてください！」
「こちらマクスウェル、敵一機撃破っ！」
「了解！　だが、油断するなよっ！」
「了解ですっ！」

マクスウェルの通信に応えつつ、レナの援護のお陰で少なくなったビームを回避しながら、レナ機との合流を目指していると、通信系からリーの声が聞こえてきた。

「こちらリー！　敵三機撃破しましたっ！　隊長、援護に入ります！」
「わかった！　デファンはマクスウェル小隊を援護しろ！」
「もう、動いてるッす！」
「いいぞ！　その調子で頼む！」

そうこう言っているうちに、敵部隊の下方……、地球側からビームが何本も立て続けに走り、次々と損傷したストライクダガーを貫き、無傷だった残り一機も回避した先に射線を置かれて爆散してい

った。

「先輩！　リー小隊が到着！　敵ＭＳ三機の撃破を確認しました！」
「こちら、マクスウェル！　デファン小隊と合流！」
「隙を作っ、今っすよっ！」
「っし！　……敵二機を撃破っ！」
「……ラインブルグ、了解」

な、なんていうか、俺、いらなくね？

最近のマイブームになりつつある、自身の存在意義について考えがいってしまいそうになるのを何とか押し止め、全隊の状態を把握するべく、各小隊に呼び掛ける。

「皆、よくやった。……各小隊、損害報告」
「マクスウェル小隊、ボッカ機のシールドに大きく負荷が掛かりましたが、戦闘行動に影響はなしです」
「デファン小隊、損害なしっす」
「リー小隊、損害なしですが、ベルディーニの推進剤及びライフル用バッテリーの残量が厳しいです」

あれまぁ、こりゃ、完勝と言って良い出来だね。

でも、これで敵の防衛網に穴が開いたというか、敵艦隊までの道が開いたはずだ。後はセナ隊を待つだけだが……、うん、どうやら、今の戦闘結果が信じられないのか、副産物的に前線の敵部隊にも動揺が広がっているみたいだ。

このまま前線を叩いた方がいいかな、と欲張りな考えが出てきた所で通信系からベルナールの声が聞こえてきた。

「こちら、エルステッド、隊長、聞こえますか？」
「ああ、聞こえてる、何かあったか？」
「はい、出撃したセナ隊がそちらを通過します。艦隊突入までの援護をお願いする、とのことです」
「了解した。……マクスウェル、セナ隊を艦隊までエスコートしろ、デファンはセナ隊の周囲で、周辺の敵、特にメビウスの一撃離脱を警戒、リーは俺達と、この宙域を確保して、セナ隊の退路を維持しろ」
「了解」
「うっす」
「了解です」

うん、こんなもんだろう。

「……あれ？」
「ん、なんだレナ、どうかしたのか？」

黙々と周囲の警戒をしていたレナが唐突に声をあげたので問い掛ける。

「いえ、今、地球、……光？」
「地球？」

地球がどうかしたのかと問いかけようとした所で、今度は、セナ隊の隊長……、俺よりも二歳ほど年嵩で金髪のイケメン、ラウル・セナから通信が届いた。

「流石に仕事が早いな、ラインブルグ」
「マグレ、とは言いません、隊の連中が優秀なだけです」

「ははっ、なら、うちも優秀だって見せてやるよ」
「ええ、期待してます。……ですが、ＭＳのあるなしに関わらず、敵が手強いのは事実ですから、油断は禁物ですよ？」
「ああ、今までの戦闘で嫌というほど肝に銘じている。……退路の確保を頼むぞ」
「了解」

セナとの通信が終わると共に、俺達が開けた穴をゲイツが六機に、無反動砲で対艦装したジンＭ型が六機で、都合十二機のセナ隊が、敵艦隊を目指して通過して行く。

「マクスウェル、デファン！　敵艦隊までの道中、セナ隊に敵を寄せ付けるなよ！」
「了解！」
「うっす！」

マクスウェル、デファンの両小隊がセナ隊の周囲に展開して、加速して行くのを見送った後、残ったリー小隊に念を押す。

「リー、さっきも言ったが、お前の小隊は退路の確保だからな？」
「ええ、わかってます」
「なら、……よろしく頼む」
「了解です」

……うん、今のリーなら、安心して背中を任せられるな。

リーの落ち着きぶりに安堵して、俺も退路維持の為に周辺の敵に睨みを効かせようと思ったら、また、エルステッドから連絡が届いた。今度は何かと思って出てみれば、ベルナールの焦り声が耳に入った。

「こちらエルステッド！　隊長！　地球の！　地球のビクトリア基地から連続して、打ち上げがっ！」
「……は？」
「ですから！　ビクトリアにあるマスドライバーからの打ち上げが連続して、確認されました！」

……えっと、この状況で？

……マジですか？

以下　注釈及び（適当にそれっぽく書いてみた）解説

※注１　アロー：ラインブルグ隊が使用する中隊陣形の一つ
前衛として中央及び両翼に弧を描く形で三個小隊を展開させ、その後方中央に後衛の一個小隊を配置する陣形で、前衛が拘束している敵部隊の間隙を後衛が抜け、敵前線の背後に回りこんで挟撃を仕掛ける突破陣。
前衛の三個小隊が矢を引き絞るような弓形を構成し、後衛が放たれた矢のように敵前線の突破を図ることから見立てられた。

※注２　クラブ：ラインブルグ隊が使用する中隊陣形の一つ
全四個小隊が横一列状態、或いはそれに近い状態において、片翼

に二個小隊を集中させる一種の斜線陣。
相手が同数の場合は、どこかで少ない戦力で倍の相手を拘束しなければならない、失敗したら形勢が大きく不利になるというデメリットがあるが、成功した時の見返りは大きい。
棍棒のような形と片翼にて相手を打撃することから見立てられた。

72　低軌道の嵐　3（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

73　低軌道の嵐　4

……嘘だろ？

何故、低軌道上で戦闘している段階で、打ち上げを強行するなんて無茶を……。

打ち上げぐらい、今の戦闘が終わって、双方が引き揚げてからでもいいと思うんだが……、まさか、救援なのか？　それとも別に何か意図でもあるからか？

……わからん。

「隊長！」

あっ、いかん、呆けてしまった。

「すまん、ベルナール。……それで、打ち上げられてくるアンノウンはどこに上がる？」

「推定では敵艦隊の後方域に上がってくるはずです」

……なら、救援に来るつもりなのか？

「では、艦隊司令部や他の独立戦隊は何と……、どう対応すると言っている？」

「はい、艦隊司令部はＭＳ隊や艦砲弾にも余裕がないことから、一部艦艇でのみ、打ち上げ軌道への砲撃を行うことで対処すると通達

がありました。他の独立戦隊も予定コースへと砲撃を仕掛ける予定です。……あ、それとモンテルラン隊は艦隊司令部からの要請で前線部隊を補給交代させる為にＭＳ隊を戦域に投入しており、予備の機動戦力は残っていません」

最後の予備機動戦力であるモンテルラン隊のＭＳ隊が投入済みか……。

「わかった。それでうちの戦隊は？　ゴートン艦長は何と？」
「我が戦隊も艦隊や他戦隊に倣い、予測砲撃でもって対処したいとのことです」
「了解した。……艦長に、もしかすると、打ち上げられた艦艇から、ＭＳやＭＡが出撃してくる場合も考えられるから、無理な接近はせず、十分に距離を取って、常に警戒だけは厳重にするよう伝えてくれ。後、複座の二人にもな」
「了解です」

一応、他の事も聞いておこう。

「他に何か、状況に変化はないか？」
「ええと……、アルテミス要塞の敵部隊ですが、どうやら再び要塞内に逃げ込んだようです。ムーア、シュタイナーの両隊は引き続き、警戒にあたっています」

……となると、アルテミスは戦力の釣り上げを目的にして、部隊を動かしたって所か。

実際、一度は動いた以上は警戒のための部隊が不可欠になるからな。

「了解、状況に変化があったら、また連絡してくれ」
「了解しました」

ベルナールとの通信を終えて、直に、前線の戦況を確認する。

……戦闘宙域に残っている双方のＭＳやＭＡの数とモンテルラン隊の投入でザフトＭＳ部隊に補給が行われる事、敵艦隊がこれからセナ隊に引っ掻き回される事をひっくるめて考えると、ザフトの優勢は揺るがないだろう。

だから、これはいい。

それよりも、地球からの打ち上げが気になる。

あの打ち上げの目的は救援……、連合軍の援軍なのか？

……。

しかし、この今の状況だと地球に落ちるデブリの量も多いし、通常よりも危険度が遥かに高い上に、上がってくる途中で絶対に狙い撃ちにされるだけだと思うんだが……、いや、今、その狙い撃ちに関しては、軌道上に展開している敵艦隊が防御することも考えられるだろうが……。

「先輩、デファン、マクスウェルの両小隊が敵艦隊の護衛部隊と交戦を開始、セナ隊は敵艦隊への攻撃に入りました」
「……あ、うん、わかった」
「先輩？」

例え、艦隊がこちらの攻撃を迎撃するにしても、基本的に完璧というものが現実に存在しないのと同じで、絶対に何らかの失敗が発生するはずなのに……、何か、攻撃を受けない方法が……、攻撃を受けない自信があるってことなのか？

もしも、仮にそんな自信があるというなら、少々の攻撃を受けても大丈夫だと確信できる、高い防御力を持つ対応能力に優れた艦があるということか？

「え、あ……れ？」

「……」

「せ、先輩！」

「ッ！　……どうした？」

「ち、地球から上がってくる艦の、先頭の艦だけ！　速度がかなり速いです！」

「なっ！」

なんだってっーーーーーー！

って、そんなリアクションしている場合じゃない！

急いで戦隊との情報リンクで確認すると、レナの言う通り、最初に打ち上げられた艦が尋常ではない速度で上がってきていた。

慌てて、エルステッドに呼びかける。

「エルステッド！　そちらは状況を把握しているか！？」

「あっ！　はい！　先頭で上がってくる敵艦の速度が予想よりも遥かに速く、こちらの迎撃が間に合いません！　このままだと、敵艦

隊との合流を許すじた……、えっ！」
「って、どうした！　ベルナール！」
「た、隊長、敵先頭艦の種類が、は、判明しました。……あ、足つきと同型のようです」
ちょっ！　ここで足つきの同型艦が登場とか、勘弁しろよっ！
「至急、デファンとマクスウェルに足つき型が接近中だと、注意して警戒するように伝えろ！」
「は、はいっ！」
「それと、まだ後続への迎撃は可能なはずだ！　早急に後続艦への攻撃を実施して欲しいとゴートン艦長に！」
「はいっ！　伝えます！」
まだ、今の状況なら、例え、足つきが迎撃に奮闘したとしても、かなりの敵を削れるはずだ、って、後続も足つきなら、それも無理だな。
……一応、確認しておこう。
「ベルナール」
「あっ、はい、聞こえてます」
「先頭の足つきに続くのは……、後方に続く艦は……、足つきと同型か？」
「……いえ、通常の双胴型輸送艦です」
「全部が？」
「はい、以後に打ち上げが確認されている艦は、全て、輸送艦です」
……足つき以外は、戦闘艦じゃない？

なら、上がってくるのは……、援軍じゃないのか？

いやいや、待て待て、輸送艦にだってＭＳやＭＡを載せることができる以上、この判断は早計だ。

でも、戦闘宙域に打ち上げるなら、普通、戦闘艦にするはずだが……、むむむ、わからんなぁ。

ますます、わざわざ危険な状況で艦艇を打ち上げた理由が見えなくなってしまい、悶々としていたら、ベルナールが再び通信画面に姿を現した。

「あっ！　た、隊長、低軌道上に到達した足つき型がＭＳを発進させています！」

「数は？」

「……六です！」

「わかった。……うちはいいとして、艦隊に攻撃中のセナ隊はそれを知っているのか？」

「情報リンクはしっかりと繋がっていますから、セナ隊の母艦から伝達されているはずです」

ベルナールの言葉を聞き、セナ隊が攻撃を仕掛けているであろう連合軍艦隊を見れば、既にかなりの艦艇が沈んだのだろう、残骸やデブリが赤く輝きながら地球へと大量に落ちて行くところだった。

「セナ隊の攻撃は順調のようだな」

「はい、こちらで確認しているだけで、２５０ｍ級六と１５０ｍ級三十一を沈めています」

「わかった」

ベルナールとの通信を終えて、どう動くか、考える。

……。

セナ隊の攻撃は順調のようだが、足つきからＭＳが出撃していることを換算すると……、何となく、前方の応援に行った方がいい気がしてきた。

「リー」
「はい」
「この場を任せるぞ」
「……了解です」

リーから、俺が思った以上にはっきりとした力のある返事が聞けた。

……もう、こいつは馬鹿を仕出かすことはないだろう。

「よし、レナ、行くぞ」
「はい！」

後は、足つき型から出てきたＭＳが新型じゃないことを祈るだけだ。

◇　◇　◇

ビクトリアから打ち上がって来る連合軍艦艇へのザフト艦隊からの攻撃は、セナ隊の攻撃を受けて大きな被害を受けている連合軍艦

隊と足つき型によって迎撃されている。特に、セナ隊に掻き回されている艦隊に関しては自艦の防衛すら置いて迎撃を行うという、一種、気違い染みた所業を見せる程だ。
だが、その我が身を犠牲にしてまで迎撃した成果だろう、大気圏突破中に落とされた輸送艦はこちらが予想していたよりも遥かに少なく、後続の輸送艦が一隻、また一隻と軌道上に展開しつつある。

もしも、これらの輸送艦から、ＭＳの大部隊が出現したら……。

そんな最悪な想定に危機感を抱きながら、味方の動きを把握する為、レナに指示を出す。

「レナ！　デファン達の座標位置を把握してくれ！」
「はいっ！」

もちろん、俺も周囲の警戒と共に友軍と敵の動きを把握すべく、視線をメインモニターに走らせる。

友軍のセナ隊は……、敵艦隊にかなり切り込んでいるな。時折、ビームが走って、大きな爆発光が見えることから、攻撃は成功しているんだろう。

……で、敵さんはっと……、げっ、何隻かの輸送艦から、ちらほら、ＭＳが出ようとしている。けれど、幸いにして、輸送艦にはカタパルトが搭載されていないようで、ここまで上がって展開するまで時間が掛かりそうだ。

……。

うん、ここは連中が大挙して上がってくるまでに、退いた方がいいよな。

自身の考えをまとめて、セナ隊に通信を繋げようとしたら、レナからの連絡が入った。

「先輩、デファン達は護衛機を落とした後、足つき型から出てきたMSと交戦中です」

「……速いな。こちらに被害は？」

「今のところは大丈夫みたいですけど、例の換装型派生機らしいので、かなり手強いみたいです」

「無理をするなって事と、何時でも退けるように心積もりはしておけって、伝えてくれ。俺はセナ隊に連絡を入れる」

「了解です」

早い所、連絡入れて、撤収の算段を取らんことには、数に飲み込まれる危険があるな。

そんなことを考えながら、通信系を先程、セナがこっちに繋いできた回線に合わせ、攻撃を仕掛けているであろう、セナに呼びかける。

「セナ隊長！　こちら、ラインブルグ隊のラインブルグだ！　敵の増援を多数確認した！」

「お、ラインブルグか、敵の増援なら、こちらも確認している」

「艦隊は敵輸送艦の迎撃に失敗した上、敵MSが展開しつつあります。数も多いですから、俺達だけじゃ、まず対応はできません。……ここは退きましょう、今なら、確実に退けます」

「……お前の言わんとすることはわかる。だが、この艦隊の旗艦だ

けは落としておきたい」

む、むぅ、それは時間的に厳しくないか？

そんな思いが表に出てしまったようで、セナは露骨に呆れた顔を見せた後、軽く首を竦めて見せた。

「なに、後少しだ。こいつを落とせば、撤収する。攻撃に集中するからな、通信終わり」

「ちょっ」

血気盛んなのは……、あの訓練校での訓練を受けた以上は仕方がないんだろうが、隊長なんだから、もっと冷静に状況を把握してくれ！

と、もう一回通信を繋げて叫びたい所だが、セナ隊が攻撃を仕掛けている為、これ以上の妨害をすることはできない。

それに、よくよく考えれば、客観的に見ても、俺の考え方が慎重すぎる面があるのは事実なのだ。

ちぐはぐな己の心境に眉間に皺を寄せながら、セナ機が攻撃を仕掛けているであろう３００ｍ級近くを確認すると、今まさに、艦体随所で小爆発が起きている３００ｍ級の、その艦橋に、隊長機の白いゲイツがビームライフルを向けた所らしかった。

まぁ、これで３００ｍ級が落ちるのは確実だし、セナ隊も退くだ

ろうと考えた。

……その時だった。

「ッぇっ！」

一条の強力なビームが、白いゲイツを貫いたのは……。

突然の事態に驚き、声が詰まるが、セナのゲイツは爆発する寸前に３００m級の艦橋と艦中央部を立て続けて撃ち抜いた。セナ機が爆散するのと同じく、艦内にあるＭＡ用の推進剤か弾薬に引火したのだろう、３００m級は艦中央部で大爆発を起こして、艦体をジャックナイフの如く真っ二つに折りながら、地球の重力に引き込まれていく。

俺もその光景に心奪われかけるが、セナ機を落としたビームの発射元がわからない以上、悠長なことはしていられない。

「レナ、警戒を厳にッ！」

「は、はいっ！」

自身もセナ機を屠った、狙撃にも似たビームが飛んできた角度と

方向から、撃った敵を探すべく、確認を急ぐ。見れば、セナ隊も隊長機が落とされて、動きが止るほど動揺を見せていたが、いつしか、一つの方向に向って、って、いたっ！

連合軍から鹵獲したＭＳ……、バスターに似たシルエットを持つＭＳが、バスターが持っているような両手持ちの大型ランチャーを反対側に構え直した所だった。

「おいおい、あれって、バスターの連結ランチャーじゃないだろうな？」

以前読んだ資料では、バスターの連結ランチャーは戦艦並みの威力がある上に、近距離での制圧用に散弾も撃てるなんて物騒な代物だった。

今、モニターに映っている、バスターの量産型らしきＭＳが持っているランチャーが俺の知るものと同じものならば、セナ隊が統率もなく、一直線に殺到して行く現状では、鴨が葱を背負って飛び込んで来るようなもの、いわば、一網打尽なんてことになり、非常に拙いことになる。

しかも、更に悪いことに、輸送艦から出てきたＭＳが……、三十機を越える大群が地味に距離を詰めてきている。

「レナ！　撤退の信号弾を上げると同時に、デファン達に撤退信号を送れ！」
「えっ？」
「早く！」
「は、はいっ！」

……うちの連中はこれでいい。

だが、セナ隊の連中は、隊長をやられて、頭に血が昇っているだろうから、言うことを聞かないだろうなぁ。

「あっ」

……バスター型が散弾を発射しやがった。

それをバスター型との距離を、回避機動込みで上手く詰めていた二機のジンM型がまともに喰らって、落ちた。

「……レナ、セナ隊の連中を退かせるぞ」

「えと、セナ隊は大人しく、退くでしょうか？」

「退きたくなかろうが退かせんわけにはいかんだろう。……とにかく、俺があいつを何とか抑えるから、連中の撤退援護を頼むぞ」

「わ、わかりました！」

でも、あのバスター型を相手に正面から行くと、絶対に狙い撃ちされそうだよなぁ。

……。

ここは何とか不意打ち狙いでって、この機体色じゃ無理か。

……はぁ、目立つ色付きの機体なんて、乗るもんじゃないなぁ。

73　低軌道の嵐　4（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

74　低軌道の嵐　5

「先輩、セナ隊がっ！」
「ああ、わかってる」

セナ隊の救援というか、撤退を援護する為に、例のバスター型に向って接近しているが……、見れば見るほど凶悪な武装だ。

バスター型の特徴である大火力だけでも怖いのに、遠距離での狙撃、中距離でのビームやレールガン、近距離でのミサイルや散弾といった具合に、どの距離にも対応できるなんて、支援型の癖に厄介なことこの上ない。

しかも、目前の敵はこれらの装備に振り回されず、上手く使い分けているだけに、ますます、手が付けられない。

現に、セナ隊は、僅かな間に半分まで減らされている。

たった一機に、部隊の支柱である隊長が落とされた影響で従来の力が出せないとはいえ、戦い慣れた部隊がここまでやられるということは……、あのバスター型が敵のエースである証左だろう。

拙い状況になったものだと溜息をつこうとしたら、デファン達から相次いで連絡が入った。

「先輩、こちら、デファン！　敵二機を撃破っ！　これより撤退支援体制にっ！」
「こちらマクスウェル！　隊長！　ボッカ機がシールドをっ！　腕をやられたっ！　至急、支援をっ！」
「デファン！」
「了解っす！　マクスウェル！　俺達が行くまで、もたせるっすよ！」
「わかった！　だが、早く頼む！」

うちの連中は緒戦から戦っているデファンやマックスウェルがいるし、他の連中だって、通商破壊任務で多くの実戦を経ているから、ベテランと言っても差し支えない領域に達しつつあるから、なんとかするだろう。
そもそも、こういう時の為に他隊以上に厳しい訓練を課して、少々のことでは諦めたり、屈しないように心身を鍛えてるんだからな。

「よし、俺はあいつに突っ込むから、レナ、お前は、何が何でも、セナ隊を退かせるんだ。後、情報面での支援も頼む」
「はい、わかりました！」

レナに応答に頷き返した後、一気に機体に加速を掛けて、敵のエース目掛けて吶喊する。

機体色が通常色だったらデブリに紛れて、接近して不意打ちを仕掛けるんだけどなぁ、との思いが胸に去来するが、これも給料分の仕事、給料分の仕事と言い聞かせて、小刻みな機動を繰り返しているバスター型をビームライフルで狙い撃ちする。

……やはり、俺の腕が悪いのか、当たらなかった上、こっちに気付かせるだけで終わってしまった。

己の射撃センスの無さを嘆いていると、バスター型は周囲のセナ隊を威嚇する為か、散弾を盛大にぶっ放して連中を怯ませた後、大型ランチャーの連結を解きつつ、こちらに向けて両肩からミサイルを相次いで発射してきた。

左右合わせて、都合、六発だが……、これぐらいなら、逃げ回る必要は、てっ！

うあっ、敵も機動戦を仕掛けてきやがった！

頭部機関砲でミサイルを迎撃しつつ、敵の機動について行く為に、軌道を一気に変更させる。地球に近い影響で、身体に圧し掛かってくるGが、予想以上に厳しいがっ、いつもと同じく、我慢だっ！

……変更前の予定軌道上をビームが走る。

生死の境に直面して、命綱無しのタイトロープをやってる時ってこんな心境なのかねぇなんて事を、状況に対応している己を外から眺めているような俯瞰した意識で考えながら、どこから湧いて来ると言いたくなる位に全身から冷や汗を流しつつ、相手の思い通りにさせない為に妨害を兼ねた牽制射撃をするが……、あまり効果がない。

……弾道の予測や咄嗟の判断が上手いのだろう。

そう考えた瞬間に、左側面のバーニアだけを噴射させて、機体を横滑りさせる。

……今度、通り過ぎたのは実弾だったな。

こちらも後を追いつつ、更にビームライフルで何発か撃ち返すが……、正直、手数がって！

っ！

っアッ！

……っぐっくっ！

はひぃ、……ビームとレールガンの連携なんて、正直、避けるだけで、精一杯だっての！

つか、遠距離砲撃支援に特化しているバスター型との距離のある撃ち合いは、明らかにこちらが不利だ。

これ以上、ビーム砲とレールガンの連携射撃をされないように、小刻みに回避機動を取りながら、接近を図ってみるが……、相手の機動も中々に堂に入ったもので、詰めきれない。

それどころか、厭らしい牽制射撃もあって、逆に距離を離されてるぐらいだ。

何とか、接近したいものだと考えた所に、地球に引かれて落ちつつある敵艦の残骸を見つけた。とりあえず、仕切り直す為、また、ついでに周辺状況も知る為にも隠れることにした。

色と形状から２５０ｍ級であったろうデブリの陰に隠れて、機体コンディションを確認しながら、レナ機と通信をつなぐ。

「レナ、聞こえてるか？」

メインバッテリーの残量が……７６％……。

「あっ、先輩！」

で、推進剤は……メインの残量が６２％か、予想以上に使ってるな。

「そっちはどういう状況だ？」

よし、ライフル用バッテリーは、７７％だな。

「はい、セナ隊の損傷機の撤退に手間取ってます！　うちの隊はマクスウェル小隊が護衛を兼ねて、セナ隊と共に撤退中！　デファン小隊が退路の確保、リー小隊が足つきから出撃して、先行していた残りの三機と交戦中です！　また、主戦域ですが、味方部隊が敵機動部隊の撃破に成功したようです」

……あれ、何か、俺いなくても、上手く機能してなくないか？

指導者として先達としては喜ぶべきことなんだが……、こう、指揮官としての自分の存在価値と言うか……って、そんなこと考えてる暇はないな。

「了解。それで艦隊の連中はこちらへの増援に来られそうか？」
「サリアから聞いた所、補給がなってないらしいので……」
「無理ってわけだな。……わかった、こっちから見たところ、敵MS隊も動き始めているみたいだし、まずは撤退を急がせてくれ」
「了解です。……ところで先輩、今、隠れてるみたいですけど、本当に大丈夫なんですか？」
「……正直、今日の奴は相手にしたくない」
「うあっ、先輩が弱気だ。……もしかして、そんなに？」
「ああ、手強い」

砲撃支援機の癖に、あの回避力というか、距離を上手く保てる機動力は反則だと思うぞ。

「その手強い奴さんはどう動いている？」
「……先輩が隠れた場所を見据えて、動きません。あの、先輩、私もそっちに行った方が……」
「いや、お前は下手に触らず、他の連中の撤退を監督しろ」
「でも、先輩は……」

「何、どうとでもするさ」

幸いなことに、セナ隊の活躍で敵艦隊はほぼ壊滅し、旗艦も落ちた事から組織的な迎撃能力が大幅に落ちている。その為、ザフト艦隊の砲撃を防ぐのに足つき型が忙殺されているし、こちらに上がってこようとしていたＭＳ隊も丁度、この壊滅した艦隊と上がってきた艦隊との真ん中あたりでザフト艦隊からの攻撃を迎撃しているようなのだ。

よって、一対一の状況がしばらくは続くと考えてもいいだろう。

それにだ……、俺だって、伊達や酔狂でＭＳに三年以上も乗っているわけではないし、格上であるエース・オブ・エースのラウや同期主席のユウキと模擬戦をしてきたわけではない。よほどの大群に囲まれない限りは逃げ出せる自信もあるし、一対一なら、相手がエースだろうと何とか対応してみせる。

流石に、無双なんてことは、無理だけどなっ！

……けど、ユウキはともかく、ラウだったら無双をやれそうな気がするのは、実績だよな、きっと。

こんな具合で思考が逸れ始めた所で、俄かに、デブリの端で爆発を起こり、衝撃が伝わってきた。

「っ！」

なんだっ、と思って見れば、残骸の一部が吹き飛んでいた。

ついでに、今、機体のすぐ脇を、ビームが通り過ぎもした。

……どうやら、相手が痺れを切らしたようだ。

「ったく、こっちが手が出せないからって、撃ち放題だな」

「……先輩」

「レナ、心配すんな、こんな所でくたばる気は更々ないから、ちゃんと戻るさ。とにかく、俺は勝負を掛けるから、お前は撤退を急がせてくれっ！　通信終了！」

まだ何か言いたそうなレナとの通信を切り、機体を動かそうとするが……、どうしようか。

……。

おっ？

ミサイルが爆発した影響でデブリが半分に割れた……って、これを盾代わりにして接近しよう。

貫通してくるビームだけが怖いが……、半分ぐらいまで接近して、飛び出すしかないか。

……運がよければ、生き残れるが……、正直、……怖いな。

……。

ええいっ、ままよっ！

自身の弱気な心を鼓舞し、デブリに機体の両手を押し付けて、全力加速を掛ける。

……左手はともかく、右手がライフルを持ったままなのだが、これも仕方がないだろう。

……。

あれ、おかしいな？

何か、時間が遅く感じるし、息も……いつも以上に、荒い。

……って、ビームがっ！

……ッ。

……後、もう少しっ！

……くっ、今度は、すぐ脇をビームが通り過ぎた！

……。

っし！　ここでっ！

両手でデブリを強く押し離して、機体の姿勢を制御しつつ、一息置いてから、左側面から一気に飛び出して突撃を掛ける。

モニターの片隅で、バスター型が撃った高出力ビームがデブリを貫くのが見えた。

「っし！　勝ったっ！」

薄氷を踏むような恐怖から開放された影響か、一種、高揚した状態で叫びつつ、慌てるかのように大型ランチャーを反対側に持ち替えようとしているバスター型をビームライフルの照準に捉え、引き金を引く。

……。

が、ビームが出ない。

「ックショウ！　こんな時に故障かよっ！」

思わず口から悪態が出るが……、ビームが出ない以上は仕方がない。持っていても邪魔になるだけのビームライフルをバスター型に投げつけて、少しでも動きを妨害する間に左手のビームクローを展開し、一気に接近して……。

っ！

避けられたっ！

こちらが発射した右腰部のＥＥＱ７Ｒ……ビームアンカーはバスター型の胴体を貫く事はなく、連結ランチャーで上手く防がれてしまった。もっとも、撃破には失敗したが、アンカーのビームはランチャー内部の弾薬に当たったらしく、ランチャーを吹き飛ばす事には成功した。

その爆発で先端のビームパイクも一緒に吹き飛んだので不必要になったアンカーを切り離しつつ、改めて、近接格闘戦を仕掛けるた

めに更に加速する。

「って、何でっ、バスターがっ、サーベル持ってんだよっ！」

だが、仕掛ける相手であるバスター型が、何故か、本来持っていないはずのビームサーベルを持っていた為に、瞬間、混乱してしまう。

その混乱した一瞬の隙を突かれて、相手からの先制を……、ビームサーベルでの振り下ろしを許してしまった。咄嗟に左腕のシールドでビームサーベルを一旦受けて、サーベルを形成する磁場を掻き乱している間に機体を交差させることで、再びビームサーベルが形成される前に回避する。

素早く機体を制御して、振り返ってぇッぁっ！

き、切り替えしが早いっ！

再度、先んじて振り下ろされてしまったビームサーベルにシールドを当てる事で身を守りつつ、バスター型と交錯する。

ビームサーベル同士での鍔迫り合いができればっ、って、くそっ、本当に早いっ！

右かっ！

「がぁっ！」

……反転中に相手と衝突した反動を利用して、一旦バスター型に頭部機関砲を撃ちながら距離を置く。

相手も機関砲の射線をかわしながら距離を取り、ビームサーベルを握り締めたまま、態勢を立て直しているようだ。

……俺が前世で見ていた某ＳＦロボットアニメのようには、ビームサーベル同士での鍔迫り合いはできない為、シールドでの防御に集中しないといけないのだ。

もちろん、こちらも攻撃のためにビームクローを展開させようとしてはいるのだが、攻防一体型であるから、相討ち覚悟の捨て身ならばとにかく、防御と攻撃の両立を実現しようとすると、これが中々に難しい。

しかも、相手がさっきみたいな衝突も辞さない激しい攻撃をし掛けてくるから、シールドでの防御と回避に全力を注がないと危険な為、難度がより高くなっている。

今もまた、機関砲の射線を通さないよう、デブリを利用して接近してきたバスター型の体当たりめいた突進と共に振り下ろされたサーベルを防ぎつつ、ビームクローを展開させて、ビームサーベルを持った腕を切るなり、胴体を貫いてやろうと思ったら、勘でも働いたのか、すぐさま離れていった。

なので、次の交錯では、残弾僅かになった頭部機関砲を撃ち尽くしてでも、何処でもいいから破壊してやろうと手ぐすね引いて待っていたら、急速に接近してきたバスター型の両肩に設えられているミサイルポッドカバーが開き……、彼我の距離がまったくないと言

っても過言でもないのに撃ちやがったっ！

「……の仇だっ！」

悲痛めいた女の叫びが聞こえた気がしたが、気にしてはいられない。

咄嗟に頭部機関砲の照準を右側のミサイル群に変え、左腕のビームクローを展開しつつ左側のミサイル群を薙ぎ払う、が……。

「アッゥ！」

何とか、全弾迎撃に成功するも至近距離での爆発、その衝撃で左手や盾先のビームクロー発生装置がいかれてしまったらしく、ビームクローが掻き消えた。

当然ながら、それ以外のダメージを把握する為、機体情報に意識が向くが、身体は何故か、メインスラスターを全力噴射していた。

……前面装甲を大きく破損させたバスター型が、さっきまで俺がいた場所をビームサーベルで横薙ぎに振り払っていた。

己の無意識的な危機回避能力に驚きと感謝を覚えつつ、残った左腰部のビームアンカーを咄嗟に発射するが、バスター型の胴体から外れてしまい、ビームサーベルを持った右腕を破壊するに止まった。

だが、バスター型は破壊された腕すら無視するかのように残った手でアンカーを握り、こちらを引き寄せようとしたので、慌てて切り離すが……、って、どうしよう、もう、頭部機関砲も撃ち尽くしたし、攻撃手段が殴り合いしかない。

さっきと同じように、距離を取って相手の様子を伺うが、どうやら向こうも攻撃手段を失ったようだった。

だが、そのバスター型の背後からは、どうやらザフト艦隊からの攻撃が止ってしまったようで、敵ＭＳが接近している事を示すスラスター光が見えるというか、そろそろマジで撤退したいんだが、連中の撤退はまだなのかっ！

そんな焦りに応えてくれるかのように、レナからの通信が入ってきたので、大急ぎで応答する。

「レナ、どうしたっ！」

「先輩！　急いで退避をっ！　艦隊がＬ４より高速で接近する多数の熱源、少なくとも半個艦隊規模の敵艦艇を探知したそうです！　また、残弾の関係で艦隊からの敵輸送艦への攻撃は打ち切られました！　敵ＭＳ隊の一部が急速接近中です！　援護しますから、至急、後退してください！」

「他の連中はっ！」

「リー小隊がデファン小隊と協同で先発していた残りの足つきＭＳ隊を全機撃墜して、宙域を制圧！　マクスウェル小隊及びセナ隊は全機、撤退に成功しています！」

……よ、良かった、ようやく、仕事が終わりのようだ。

「了解……、俺も退くから、援護を頼むわ」
「はいっ！」

レナとの通信を切り、意識を切り替えてモニターを見てみると、バスター型の背後に映る輸送艦から次々にスラスター光が浮かび上がるのが確認できた。

これは早い所、引き揚げた方がいいだろうな。

そう考えた後、ガッツ溢れる強敵への敬意……、というか、ある種の気まぐれ的に、バスター型に対して機体の手を振らせてから、全力で逃げ出すことにした。

……リアクションはないようだ。

まぁ、それが当然だよねぇ、なんてことを考えながら、じっとこちらを注視しているように動かないバスター型に背を向けて、迎えに来てくれたレナ機を目指して機体を加速させた。

◇　◇　◇

エルステッドに着艦し、最後の激しい戦闘で早くも一戦目から前面装甲がボロボロになってしまった機体の整備をシゲさん達に委ねた後、現状を把握する為にも、レナが気を利かせて渡してくれたＩＴＩＧＯオレとタオルを手に持って、艦橋に上がることにした。

全身汗塗れになったから非常に汗臭いはずだが、気密性と吸収性が高いパイロットスーツだから、外に臭いが漏れることはないだろう。

艦橋に入ると、真っ先にゴートン艦長が声を掛けてくれた。

「お疲れさんだったね、ラインブルグ君」

「ええ、凄腕とやりあう破目になるなんて……、まったく酷い目に会いました」

「でも、艦隊のＭＳが半数近く落ちた中でも、ちゃんと自分も含めて、全機を帰還させたんだから、誇っていいと思うよ」

「……はは、艦長にそう言ってもらえると自信になりますね」

隊長補佐としてではなく、私人として語りかけてくれたゴートン艦長の対応に、戦闘で張り詰めていた緊張が少し和らぐのを感じた。

やはり、ゴートン艦長のこういった気配りは、流石だと思う。

……でも、だからこそ、この人に支えてもらえるに足るよう、自らに与えられている責任を果たさないといけない。

そう自身に言い聞かせて、意識を一ＭＳパイロットから隊長へと切り替える。

「それで、艦長、連合軍に動きは？」

「地球軌道上に展開していた連合軍艦隊は、２５０ｍ級三を中心に残余を再編成中のようです。これを、地球から上がってきた部隊が五十機近いＭＳを展開させて、援護しています」

「艦隊司令部はどうすると？」

「二次攻撃は行わず、ボアズへの撤退を決定しました」

ボアズ艦隊及び独立戦隊群は、先の戦闘において、地球軌道上に展開した連合軍艦隊とその機動戦力の撃滅に成功していることから、勝利したと言えるだろう。

だが、連合軍が地球から新たな戦力を、それも大規模な戦力の打ち上げを成功させ、Ｌ４から増援の艦隊を半個規模とはいえ派遣しているのに対し、ボアズ艦隊は機動戦力の半数近くを喪失し、前もって行われていた砲撃戦の影響もあって、ミサイル等の艦砲弾の消耗も激しい上、月との睨み合いの関係でプラントやＬ１からの増援も期待できない為、これ以上の戦闘継続は難しい状況なのだ。

故に、ボアズ艦隊は、地球軌道の確保は困難だと判断して……。

「地球軌道を放棄、確保を断念する、ですか？」

「表面上は上手く取り繕っていましたけどね」

「……やれやれ、数で勝る連合が本領発揮、ということか」

「ええ、そういうことでしょう」

まったく、連合軍の奴等め、数の有利を活かした王道を行くなんて、ウラヤマシスギル。

「それで、俺達、独立戦隊群は？」

「余力のあるムーア隊とシュタイナー隊、モンテルラン隊及び我が隊に殿軍を務めて欲しいとの要請がボアズ艦隊司令部よりありました。今のところ、我が隊は隊長不在を理由に返答を保留しております」

「……では、要請を受諾するとの返答を送ってください」

「すぐに……、トライン班長、要請を受諾すると、司令部に連絡して」

「アイ、艦長！」

アーサーの威勢の良い返答を聞きながら、更に艦長に尋ねる。

「後、他に何かありますか？」

「……Ｌ４からの増援が到達するのは後四半日は掛かりそうですし、アルテミスも動く気配はないです。地球軌道の部隊も再編成中ですから、無事に逃げ切れると思います。ですので、一度、戦闘配置を解除し、一種警戒に落とすことを進言します」

「そうですね、一種警戒に落しましょう。その旨の伝達もお願いします」

「了解です」

……ふぅ、こんなもんかねぇ。

そう思った瞬間、一気に虚脱感が襲い掛かってきた。

……やはり、強敵との生死の境界線上での戦闘は、身体と精神に相応の負担を強いたようだ。

むぅ、まだまだ、鍛え方が足りないということか……、なんて、格好良い事を考えるが、断続的に誘惑してくる睡魔があまりにも魅力的で、目蓋が落ちそうになる。

「……ラインブルグ君、とても疲れてるのはわかるけど、もう少し、頑張ってちょうだいな」

「ええ、安全地帯までは何とかします」

「うん、頼むよ」

ゴートン艦長の生暖かい視線が痛い！

何とか、その視線から逃れるために、地球軌道を映し出すモニターに目をやる。

……地球の夜面に、以前よりも更に多くの光が見えた。

その光から、戦争をしながらも地球の復興も同時にしている地球連合の巨大な力を、つくづく、思い知らされる。

今日の戦闘でも実感したが、戦略の王道を行く地球連合から、戦争で勝利を得ることは絶対に不可能だろう。

……だからっ！

マジで頼みますね、カナーバ議員。

74　低軌道の嵐　5（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

75　一時の凪　1

8月15日。

うちの戦隊はラヴロフ隊、モンテルラン隊と共にボアズ駐留の任を解かれ、アプリリウスに駐留する三個独立戦隊と入れ替わる形で、アプリリウス軍事衛星港に戻ることになった。

国防事務局からの業務連絡では、今回、駐留任務を解かれた三つの独立戦隊は仮想敵及び戦闘教導任務を与えられることになるらしい。他にもビクトリア陥落以降、地上で過酷な戦闘を続けて、何とかプラントまで帰ってこれた連中も同様の任務に当たるとのことだった。

どうやら、ザフト上層部は連合軍ＭＳ部隊と実際に交戦した部隊に教導任務を与えることで、ヤキン・ドゥーエ要塞とアプリリウス軍事衛星港に駐留する艦隊やプラント防衛隊の錬度を向上させようと考えたらしい。

実際、連絡をくれた事務員に、この真っ当でかつ真面目な対策が決定した詳しい経緯を聞くと、ＦＡＩＴＨであるユウキを中心に、地球で連合軍相手に苦闘した指揮官達が一緒になって積極的に動き、連合軍というか、未だにナチュラルを侮っているザフト上層部連中相手に、一歩も退かずに議論を展開して押し通したそうだ。

どちらかといえば優等生気質で、お上に対して従順な部類に入るユウキが逆らったと聞いて驚いたが、あいつも連合軍によるＬ５への直接侵攻があることを覚悟しているから、少しでもプラント防衛隊や駐留艦隊の戦力を強化しようと努力しているということだろう。

この同期主席殿の活躍を切欠に、ザフトが少しは軍事組織ひいては党軍ではなく国軍として、まともになることを期待しつつ視線を艦橋内に戻すと、ゴートン艦長がアーサーに指示を出している所だった。

「トライン班長、入港はEブロック。……後、よろしくねぇ」

「アイ、艦長！　航法、入港はEブロックだ。皆、Eブロックはアプリリウス衛星港で一番古い箇所だから、誘導ビームはもちろん、気の利いた管制官もいなければ、タグボートなんてものもないからね、僕達の腕の見せ所だよ？」

「了解、班長」

「これぐらい、余裕ですよ、トライン班長」

「うん、そうだね。この程度、鼻で笑ってやってみせよう」

アプリリウス・ワン近くに存在する軍事衛星港への入港指揮は滞りなく進んでいる。いつもの如く、ゴートン艦長に任せておけば、何の問題もないだろう。

よって、俺は思索を続けることにする。

……。

現状、プラントを取巻く状況は、悪化する一方だ。

まずは、今月上旬に発生した、俺達も参加した地球軌道を巡る戦

闘だ。

あの戦いにおいて、ボアズ駐留艦隊は連合軍の一個艦隊を撃滅することに成功したが、ＭＳという新たな力を手に入れた連合軍艦隊の激しい抗戦によって、半数もの機動戦力を磨り減らされてしまった。この結果、連合軍の更なる増援に対抗するだけの余力はなくなり、ザフトは地球連合に地球軌道の支配権を奪われることになってしまったのだ。

簡単に言えば、先の戦闘は、戦術的に勝利したが、戦略的に負けた、とでも言えばいいのだろうか？

……とにかく、地球連合に地球軌道を奪われた以上、アルテミス要塞の駐留戦力は更に強化され、連合軍の地上からの宇宙への戦力移動は確実に行われるといえる。

そして、地球軌道の支配権が連合に移った影響で、地球でも新たな動きが発生した。

地球連合軍による大洋州連合への直接侵攻だ。

幾つかの伝手から手に入れた情報では、何でも大洋州連合内のエアーズロック付近に、地球軌道から連合軍ＭＳ部隊が大量の物資と共に強襲降下して、橋頭堡を確保したらしい。

で、この部隊降下に対して、大洋州連合とザフト地上軍が共同で動き、オーストラリア大陸中央部で連合軍の降下強襲部隊と激しくぶつかり合っているとのこと。

っていうか、これはカーペンタリア基地の防備を薄くする為の陽動作戦の類のような気がするんだが……、いや、アフリカで敵中突破を成し遂げた優秀な地上軍の事だ、ちゃんと気がついているに違いない。

それに、カーペンタリア基地は地上軍の一大策源地として兵器の生産・修理・補給と一通りの施設が揃っている上、各地から撤退してきた戦力が集結しているから、そう簡単に陥落することはないだろう。

ちなみに観測衛星と撤退中の監視からわかったことだが、エアーズロックへと強襲降下したＭＳ部隊はどうやら戦闘の最中、地球から上がってきた部隊のようで、先の戦闘の翌日、８日には、Ｌ４から到着した増援艦隊の援護の元、輸送船から大気圏降下用のカプセル……、ザフトが使用したモノを参考に、輸送船の規格に合わせて作られたらしいモノを降下させていた。

むぅ、あの戦闘中の打ち上げは、作戦計画をスケジュール通りに進行させるために強行したんだろうか？

……でも、やっぱり、戦闘中に上げなくていいような気がするんだけどなぁ。

それとも、それが出来るだけの力があるとでも、連合軍指導部は考えたんだろうか？

……わからない。

いくら考えても、専門教育を受けていない俺如きでは連合軍指導部の思惑はわからないが、もしも、足つきが上がってこずにＭＳ隊を展開させなかったとの仮定で考えてみると……、地球軌道上の艦

隊はセナ隊によって文字通りに殲滅されていただろうし、Ｌ４からの半個規模の増援艦隊が到着する前にボアズ艦隊の態勢を整えることもできたはずだ。

いや、そもそも、打ち上げがなかったと仮定するならば、Ｌ４から到来した連合軍の艦隊戦力は出動すらなかった可能性が高いのではないだろうか？

なんとなれば、Ｌ４自体の艦隊戦力が半個艦隊以上不在になって防備が薄くなったなら、Ｌ１の独立戦隊群がＬ４へとちょっかいを出した可能性が非常に高いからだ。

もちろん、その場合は月の連合軍艦隊だってＬ１やＬ４の確保に動くかもしれないが、その時はその時で、ヤキン・ドゥーエ駐留艦隊による援護の元、軌道爆撃艦隊を使って、プトレマイオスやマスドライバーに直接的な攻撃を仕掛けることも考えられるし、機動戦力の総予備的な位置付けにある本国艦隊を……、いや、これは駐留拠点のサイズ的に考えて無理だとしても、本国駐留の独立戦隊を全てＬ１へと戦力を移動させれば、以前、行っていた大々的な通商破壊を再展開できるだけの力が揃えられるはずだ。

もしも、仮にそうなれば、月やＬ４への直接的な圧力が増えるという事であり、連合軍側にとっては苦々しい時期であったろう、去年の秋以降から今年の春までの状況、つまりは月と地球との連絡線を脅かされる事と同義である以上、艦隊戦力は動かせないという事になる。

となれば、ザフトがもうしばらくの間は地球軌道を確保し続けられただろうし、地球連合も地上から宇宙への戦力移動や例の降下作戦も今のようには上手く進まなかった可能性もあるとも考えられるだろう。

……まぁ、あくまでも仮定や可能性に基づいた妄想に過ぎないけど、こうやって考えると、あの戦闘中での打ち上げは正しい賭けだったと言えなくもないような？

でも、他人の命が賭け金になる以上、俺にはとても決断できない賭けだな。

いやはや、流石に、本職の軍人は違うということか……。

職業軍人がいないザフトと地球連合軍とを比較しながら、意識を外界へと向けると、丁度、エルステッドがEブロック内の埠頭に接舷する所だった。

……我ながら、このタイミングの良さにはビックリだが、人間なんて無意識に都合を合わせるものだと結論付けて、下船許可をエルステッド、ハンゼンの両艦へと出した。

◇　◇　◇

機動艦隊司令部から与えられた二日間の休暇の後、戦隊は早速、教導任務に就くことになったのだが……、その前にまず、どのような教導内容を、どのように実施するかということで、戦闘関連部門の責任者と各ＭＳ小隊長とを集めての打ち合わせを行うことになった。

……もちろん、任務開始に間に合わせるために、休暇を返上してである。

仕方がないこととはいえ、極一部から盛大に文句が出たが、フォルシウス艦長のありがたい説得（鉄拳）による援護もあり、無事にまとめる事が出来た。

で、肝心の教導は、防衛隊と艦隊とでは基本的に同じものもあれば、それぞれに求められるモノが異なる場合もあるために、それぞれに合わせて、異なる内容を実施することになった。

その内容を簡潔に、今日から教導を行うプラント防衛隊から述べると……、基本的に、防衛隊はその名の通り、拠点防衛を第一にしている為に、拠点周辺での防衛作戦や治安維持、偵察といったことが主たる任務になっている。だから、教導内容も、受身的な戦術を中心に据えて、如何にして、敵の侵入を完全に阻止し、効果的な反撃を行うか、といったものに偏らせる必要がある。

一方、艦隊への教導内容はその任務の多様性から、護衛のＭＳ隊に護られた敵艦隊を想定した対艦戦、戦域の支配権を争奪する対ＭＳ・ＭＡ戦、敵ＭＳ部隊による味方艦隊への攻撃を阻止するための迎撃戦、艦艇と連携しての防衛戦といった具合に、多岐に渡り、施さなければならない。

とはいえ、それらの教導に入る前にも、やはり、やらなければならない事がある。

実は、ザフトのＭＳ隊というか、特に艦隊の連中は個人主義というか、〝俺が俺が〟の唯我独尊的な思想が強く、小隊や中隊での連携を考えない輩が矢鱈と多いのだ。

このあたり、プラント教育の根底に見え隠れする、コーディネイター選民思想の業が見える気がするなぁ、なんて俺の感慨は置いておいて、今後の戦いで連合軍が数で押してくるのが自明の論理である以上、こちらも個々人の力を掛け合わせて倍化させる為にも、小隊、中隊と戦闘集団としての纏まりがなければ、話にもならない。

よって、実機教導演習の前に、幾つかの段階を重ねることにしたのだ。

まず最初に、俺達が普段から訓練している小隊戦術及び中隊戦術を、また、連合軍側が使用していると思われる戦術も併せて講義して、戦術の有用性を説明する。

次に、ガンカメラの実際映像を見せながら、訓練や実戦では実際にどう動き、どう連携しているか等を、小隊長を筆頭に小隊の連中に解説させて、教導を受ける連中各々の理解を深めさせた後、シミュレーターを使用して連携を確認したり、模擬戦闘訓練を行う。

で、実機を使った戦闘演習……例えば、艦隊ＭＳ隊を相手にする場合は、うちのＭＳ隊は連合軍が多用している足を止めての高精度迎撃から半包囲殲滅、部隊を分割しての十字砲火等の戦術を使用して、仮想敵を務める……を行い、終了後はデブリーフィングでの評価と検討を行い、今後の訓練課題を提示するという流れになっている。

ちなみに、艦艇運用組は、艦艇を動かさない研修時は各科それぞれの技能研修や意見交換会に行って、それぞれの技能の磨きをかけてもらったり、俺達と同じく艦艇乗組員に戦術の講義やＭＳとの連携を解説してもらい、また、実機演習の際には、敵艦艇役を担うことになる。

まぁ、これまでの戦闘で、ナチュラルを見下していた一般的なザフト隊員の間でも、ようやくと言うべきか、連合軍ＭＳが足つきに艦載されていた試作機だけでなく、量産機も相応の強さを持っているとの認識が芽生え始めており、皆、真剣に講義を聴くだろう……といいなぁ、との希望も含めて、予測している。

だが、おそらく、今までの常識的な認識……、ナチュラルはコーディネイターよりも劣るという認識をひっくり返せることはできないだろう。

実際、生物的な単体として、コーディネイターがナチュラルよりも勝っているのが現実だからな。

しかし、それも所詮は個々人レベルの話に過ぎず、社会を形成する群体としては、コーディネイターはより洗練された社会や組織を有するナチュラルよりも劣っていると言わざるを得ない。

ここに、この時代に至るまでに綿々と続く人類の歴史を、ナチュラルの、旧種の歴史だからと、無闇に否定や無視したがるなんて不健全な風潮があるプラントでは、そうなるのも無理はないだろう。

……そもそも、プラントなんて、全人口で精々２０００万位しか居住していない、小さなお山に過ぎない。

そんな小国が全世界に喧嘩を売り、一年以上も優勢を保てた事自体が奇跡なのだ。

何か、考えが逸れた気がするので、元に戻して……、とにかく、

うちの戦隊の教導を受ける連中には、徹底的に、今現在、プラントが置かれている危機的状況や地球連合の国力比といったものも一緒にすり込むつもりだ。

……今後のプラントの為に、引いては不必要な戦争を起こさせない為にもね。

「先輩、プラント防衛隊所属のマイウス、セプテンベル、ディセンベル各防衛ＭＳ中隊、全隊員、揃いました」

「わかった、レナ。今、行くよ」

さて、仕事に取り掛かろう。

……でも、落ちこぼれと言われた俺が、並み居るコーディネイターを相手に講義というか、指導する立場になるなんて、昔からは絶対に考えられないよなぁ。

まぁ、これも人生、いい経験をさせてもらってると思うことにしよう。

75　一時の凪　1（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。

76　一時の凪　2

9月。

うちの戦隊はラブロフ隊やモンテルラン隊と同様に、先月から引き続き、L5の訓練宙域で、プラント防衛隊や機動艦隊に所属するMS隊への教導任務に当たっている。

最近になって、それなりに手応えを感じ始めているのだが、プラントを取巻く情勢は一段と緊迫の度合いを増しており、そろそろ時間切れが迫っているようだ。

先月からの情勢を見ていくと、地球における大洋州連合領を舞台にした地球連合軍と大洋州連合・ザフト共同軍との戦闘は、陸海で一進一退の状況が続いているらしい。

陸では、連合軍が地球軌道上からの強襲降下によって、オーストラリア大陸内陸部のエアーズロック周辺に橋頭堡を確保したものの、プラントから兵器を供与されていた大洋州連合軍の戦力を完全に読み誤っていたらしく、大洋州連合領内を荒らし回るどころかエアーズロック周辺に封じ込められているのだ。

また、海……、カーペンタリア方面でも、連合軍の太平洋艦隊がカーペンタリア基地へと攻撃を仕掛けているのだが、オーブ攻略戦での損耗が意外と大きかったようで攻め切ることができず、カーペンタリア基地を陥れるには至っていない。

そんな連合軍の頼みの綱であろう大西洋艦隊は、オペレーション・ブリッツブレイクで破壊されたパナマ運河の修復が完了していないことに加え、元ジブラルタル基地所属のザフト海洋部隊が連合構成

国の大西洋沿岸へと地味なゲリラ戦を展開させていることもあり、太平洋へと廻航できないことも影響しているだろう。

……まあ、逆に言えば、大西洋艦隊が到着した後が怖いということだ。

とにかく、地球に唯一残ったプラントの拠点、カーペンタリア基地はまだ、確保されている状況だ。

それよりも、プラントにとって拙い事が宇宙で起きている。

先月の戦闘で連合軍に地球軌道の支配権を奪われた影響で、地球－Ｌ５間の輸送路をほぼ封鎖されてしまい、資源及び食料の確保が非常に難しくなったのだ。

まだ今のところは、月－アメノミハシラ－プラントという中立系月面都市船籍の輸送船を利用するアメノミハシラ経由の通商ラインは生きているが、Ｌ１－地球間にあるデブリベルトで宇宙海賊の活動が活発になっている上、アメノミハシラや中立系月面都市へと為される地球連合からの有形無形の圧力により、いつ途切れるかわからない状況になっている。

もっとも、資源面に関してはプラントにも資源衛星が幾つかある為、もうしばらくは何とかなるだろう。

それ以上に拙いのが、食料面だ。

事実上、地球からの輸送路を絶たれ、食糧備蓄計画にも失敗している以上、大至急、食料の生産供給体制を整えなければならないの

だ。

そのため、農業生産を主に担当するユニウス市で農地確保の為の区画整理が行われており、急ピッチで増産体制が整備されつつある。

だが、それでも、配給体制にして、何とか間に合うか合わないかといった所だろう。

これも地球で飢餓が発生していた中でも、地球から収奪し、飽食してきた付けということになるが、どちらにしろ、地球でもプラントでも一番の被害を受けて死んでいくのは、社会的な弱者ばかりなんだろうな。

そして、俺も、その飯を食っている以上、加害者ということになる。

……。

ああもう、やめやめ、ただでさえ、先行きが真っ暗なのにこれ以上、暗くなっても損するだけだ。

だいたい、連合軍にしても地球から盛んに打ち上げを行っている所を見るに、兵糧攻めなんて気の長いことをするつもりはないみたいだから、今後の強攻に対応できるように、プラントを護れるだけの力を養うことを考えた方がいいだろう。

……現実逃避めいているが、俺は俺にできることを精一杯するしかないんだ。

◇　◇　◇

9月18日。

今日の相手は、ユウキが以前、隊長を務めていたアプリリウス防衛MS中隊だ。

このアプリリウス中隊は本格的な量産体制が整い、現場へと大々的に配備され始めたゲイツへの機種転換訓練も兼ねて教導を受けているのだが、流石に首都防衛隊に相当する存在だけあって、各々の錬度は非常に高く、間違いなくザフト最精鋭と呼ぶに値するといえるだろう。

しかしながら、小隊の連携は稚拙だし、中隊での戦術行動も実戦で使えるかどうか、微妙なレベルだった。一応、ユウキの話によれば、戦術に関しても色々と試行錯誤していたらしいが、転任した影響で中途で終わってしまったとの事らしい。

流石に中途半端での放置は駄目だろうというのが、俺の偽らざる感想だが、これもユウキから引き継いだ現隊長の怠慢と、個々の能力が高い為に今まで連携を必要とする状況が少なかった事に加えて、直接、連合軍と戦闘した経験の少なさ……、実戦経験の少なさ故だろうと思い直す。

なんというか、教導で実機戦闘演習に参加して感じたことなのだが……、防衛隊というかプラントに常駐している部隊には、演習や訓練に、どこか遊戯感覚が感じられるというか、”相手を圧倒する”為の気迫や”相手を確実に殺す”という鋭利な殺意というか、何

が何でも”絶対に生き残ろう”とする強い意志というか、人が己の全存在を賭ける時に生まれる重圧めいたもの或いはその片鱗……、そう、凄みが足りないのだ。

無論、実戦ではなく演習だから、という見方もあるし、士官学校を繰上げて卒業した者が多く配属されていることも影響しているんだろう。

だが、それでもやはり、地球からプラントへと引き揚げてきた指揮官やその部下達から感じ取れたものがないとしか言いようがない。

その地球からの引き揚げ組とは教導任務中に何度か会う機会があったのだが、何でも彼らは、第三次ビクトリア防衛戦からジブラルタルへの撤退を経て、ジブラルタル放棄に伴う敵中突破を敢行し、凄惨な撤退戦を潜り抜けてきた歴戦らしかった。

それだけの不利な状況で戦闘をし、潜り抜けてきた歴戦（ベテラン）の猛者だけあって、それぞれが纏っている空気が殺伐……ではないなぁ、……とにかく、こう、隙がないというか、周辺の空気が張りつめているというか、とにかく、独特の緊張感が漂っていて、他の連中とまったく異なっていた。

……うーん、やはり、潜り抜けてきた実戦経験の有無や大小でしか、あの凄みは生まれないということになるのかなぁ。

それに加えて、変な話かもしれないが、より直接的に命のやり取りをしてきた者の方が、ナチュラルを蔑視し見下す傾向が少ないようにも感じる。

いや、俺が見た引き揚げ組の連中がたまたま、ナチュラルへの侮蔑や憎悪を表に出す事もなく、純粋にナチュラルの実力を淡々と認めているだけであって、本当は、よりナチュラルを憎悪し蔑視する方が多くて、当たり前なのかもしれないが……、少なくとも、俺は

見ていなかったりする。

……うーん、歴戦の彼らは以前からナチュラルを蔑視したり見下したりせず、結果、戦場でも決して気を抜かなかったから生き残ったのか、それとも、厳しい戦場を生き残ることができたから、敵である連合軍やナチュラルを蔑視したり見下さないのか？

正直、興味を引かれる所なのだが……、調べる余裕はないなぁ。

まぁ、どちらにしても、敵を根拠もなく侮ることは避けた方がいいというのはわかるし、俺自身も常にそうあろうと考えている。

けれども、今現在の教導相手である実戦経験が少ない連中は、どうしてもナチュラルを、連合軍を、ただそれだけで、見下す傾向が強い。

この戦争で初期の有利を失い、確実にプラントが追い込まれつつあるのにも関わらずだ。

これも恐らくは、コーディネイター選民思想の弊害の一つだろうとの目処は付けているが……、それだけでは根拠としては弱い。

なんて具合に、俺が物思いに耽っている間に、実機戦闘演習が終了したようだった。

……。

今回のアプリリウス中隊を相手にした実機戦闘の内容なのだが、

簡単に言えば、アプリリウス中隊が後方のコロニー群を敵ＭＳ部隊から護る防衛戦だ。

この演習に俺は参加せず、仮想敵中隊の指揮をマクスウェルに執らせ、また、レナと防衛隊から借り受けた予備機のゲイツにそれぞれ乗せたフェスタとスタンフォードに小隊を組ませてみた。

これで十二対十二とお互いの機数も同じなら、使用するＭＳも同じで、一応は対等条件になるからな。

そんでもって、演習開始直前に向こうの隊長さんが、我々、首都防衛を担う栄誉を与えられたアプリリウス防衛隊が、”たかが”独立戦隊が務める仮想敵に負けるわけにはいかない、と隊員に檄を飛ばすというか、鼓舞というか、とにかく豪語していたのだが……、結果は、アプリリウス中隊が全機撃墜判定の壊滅状態でコロニー防衛任務は失敗、仮想敵に与えた損害はフェスタとスタンフォード、ベルディーニというまだまだ技量が足りてない面々のみを撃墜判定にできただけに止まっている。

言葉もなく、真っ白に燃え尽きた感のある向こうの隊長には悪いが、うちの部隊”如き”を止められないのでは、数に勝る連合軍なんて、止められるわけがない。

……ここはラインブルグ隊流の特別集中訓練を課すべきだろう。

とりあえずは向こうの隊長に、結果が全てだと伝えて、基地への帰還と予定しているデブリーフィングの時間を伝えておく。

アプリリウス中隊の今後の課題は、演習でのそれぞれの小隊や中隊としての動きを分析して、徹底的に短所を洗い出して、そこを潰すように朝晩関係なく、血反吐を吐くまで徹底して訓練する、なんてものでいいだろう。

うちの隊は……そうだな、帰還後にするデブリーフィングで、撃墜された機の所属小隊長であるレナとリーをＭＳ隊員全員の前で叱責するかな。

……まぁ、リーはともかく、レナに関しては、あくまでも演習時のみの臨時編成小隊であって、今の所は実戦で使用する気もなければ、艦載機数の関係で編成もできないから、特に厳しく言う必要はないのかもしれない。

けれど、今日の演習で実機に乗る機会を得たフェスタとスタンフォードは自身の撃墜も含めて、貴重な経験を色々と得ただろうし、自身の長所短所も把握することができたはずだ。更に言えば、自身の技量について明確に把握できている今こそが、確実に腕を伸ばせる好機とも捉える事ができるだろう。

だから、ここは一つレナには犠牲になってもらい、レナを慕う二人に自身の不甲斐なさを自覚させ、また、撃墜された自分達ではなく、自分達の隊長であるレナを叱責する俺の理不尽……実際はそうでもないが……な行動に不満や義憤を抱かせ、より一層、訓練に発奮して励むように仕向けたいと考えたのだ。

もちろん、デファンやマクスウェルには、レナとリーをフォローするようにしっかりと頼んでおくつもりだ。

ふふふ、ＭＳ隊訓練での憎まれ役は俺の責務というか特権だ、なんて事を内心で嘯きながら、エルステッドの艦橋で俺の隣に立ち、共に演習を観戦していたユウキに問い掛ける。

「ユウキ、アプリリウス中隊は集中訓練でいいな？」
「ああ、頼む。……しかし、私が隊長を勤めていた時に、口を酸っぱくして各々の役割と連携を考えろと言い続けながら、訓練してきたのだがな」
「いや、連携はまだ他よりも上手い方だったさ。……だが、自分達の能力に自信を持ち過ぎる余りに、周囲を下に見るというか、侮り過ぎている気配があるから、それが部隊連携でもマイナス方向に働いているんだと思う」
「む……、となれば、とことん追い詰めて、一度、どん底まで落とすべきか？」
「それはやめとけ。この隊のエリート連中じゃ、確実に心が折れて、使い物にならなくなる」
「そうか……、やはり難しいものだな」

無論、中にはエリートだろうが、精神が強靭な奴もいるにはいるだろうが、少なくとも、あの隊にはいなかったように見えた。

まぁ、それはそれとして……。

「しかし、ユウキ。お前さん、国防委員長付きで忙しいはずなのに、こんな所で油を売っていていいのか？」
「別に遊びに来ているわけではない。現在の戦力状況を報告書だけでなく、この目でしっかりと確認するのも必要不可欠なことだ」
「……確かにな」

ザフトと言う組織は、自身の能力不足が露呈するのを恐れるあまり、報告書に虚偽記載する奴も多いのだ。

「で、ＦＡＩＴＨであるお前の目から見て、今現在のプラントの戦

力評価はどうなんだ？」
「率直に言えば……」
と言いながらも、ユウキは管制官各々が粛々と己の職務をこなしている艦橋内を見回した。
「場所を変えるか？」
「……いや、構わない。現実を知っている者には今更の認識だろうからな」
おおぅ、何とも過激な言葉だ。
「はっきりと言えば、連合軍が予定しているであろう大規模攻勢を一度支えきれる位だろう」
「二度目はないってことか？」
「ああ、ＦＡＩＴＨではそう予想している」
「それでも、足掻く為の対策は考えているんだろう？」
「極めて遺憾だが……、来期の士官学校の候補生を繰上げ卒業させる予定だ」
「……そうか」
本当の意味で学徒動員と言えるそれは、まさに末期戦状態だと言えるが……、その割には、楽観的な空気がザフト内に流れているし、プラント内の空気も変に余裕がある。
俺の目から見たら、この内と外との認識の落差は、あまりにも不可思議過ぎる。
「なぁ、ユウキ。……正直に言わせてもらえば、ザフト隊員や市民、それぞれの現状認識と今のプラントが置かれている現実との落差が

激しすぎる気がするんだが？」
「ザフト上層部が広報局を通してマスコミに歪曲報道させて、事実を伝えていないからだ。そして、これがザフト内部にも影響を及ぼしているのだろう」
「ああ、なるほど。……大本営発表の影響ね」

外での任務が多かった上に家でもテレビを見ないから、そんな歪曲報道をしていたなんて気付かなかった。

「だが、流石に、今の状況では拙くないか？」
「わかってはいる。……だが、一度隠してしまうと、な」
「簡単には表に出せない、か」

もしも、下手に現在の追い詰められた状況が伝われば、情報を隠蔽してきた政党としてのザフトや戦争指導する最高評議会への不審につながり、そこから政権が崩れる可能性もあるということか。

「このままでは拙いということはわかっているので、少しずつ表に出すようにしようとしているのだが……、今度は広報局やマスコミが動かない」
「くく、自分達の信用や権威が崩れるのが怖いんだろうよ」
「ラインブルグ……、笑い事ではないぞ？」
「笑い事だろう。……権力を監視すべきマスコミが権力に媚を売って、尻尾を振っていたんだからな」

もっとも、そうさせたのはザフトであり、最高評議会なのだから、批判すべきはそれらであって、マスコミを批判するのはお門違いなのかもしれない。だが、それでもやはり、マスコミの存在意義を考えると、最早、今のマスコミに存在する意味がないと思ってしまうのだ。

「……手厳しいな」
「悪いな、ちょっと抑え切れなかった。確かに、全体を見るお前の立場を考えば、笑い事ではないな」
「いや、いい、お前の言う事も正しいからな。それにお前が率直な物言いをしない方が私には怖い」
そんなユウキの物言いに、俺も苦笑を浮かべてしまう。
「言ってくれるな、ユウキ」
「何、お前とも長い付き合いだからな」
これもまた同期の気兼ねのなさって所かな。
って、俺の中で結論が出たら、ゴートン艦長が余所行きの顔で報告を入れてきた。
「隊長、ＭＳ隊全機、帰還しました」
「わかりました、ＭＳ隊員全員はエルステッドのブリーフィングルームに集合するように伝えてください。それとアプリリウス中隊の基地があるアプリリウス・ワンに寄港しますので、そのようにお願いします」
「了解です」
「じゃあ、ユウキ、また後でな」
「ああ、隊長室で待たせてもらう」
さて、今日の一番大切なお仕事の時間だ、精々、気張るとしよう。

76　一時の凪　2（後書き）

11／02／06　サブタイトル表記を変更。
11／02／14　誤記及び表記修正。

77　一時の凪　3

中隊戦術や各小隊長の指揮、各隊員の戦闘機動といった事の評価と検討、それに今後の課題とを細かく取り上げたデブリーフィング後、俺から全ての事で重ね重ねの叱責を受けて半泣きになったレナと歯を食いしばったリー、それに赤、青、白と、それぞれに顔色を彩るＭＳ隊員達を残し、俺は隊長室に戻ってきた。

一応、出る直前に、明らかに澄ました顔をしていたデファンと平時と変わらぬ表のマクスウェルに目配せしておいたから、後は上手くやってくれるだろう。

……。

むぅ、良心の呵責を感じるなんて、俺もまだまだ修行が足りないな。

内心でそんな事を考えていたら、普段、レナが事務作業する際に使用している席に座っていたユウキが声をかけて来た。

「どうした、ラインブルグ」

「何、さっきのデブリーフィングで思う事があっただけで、大した事じゃないさ。……それよりも、ユウキ、カナーバ議員の外交交渉は上手くいっているのか？」

「私が聞く限りでは、例のアレの存在を仄めかしたのが効いているようで、上手くいっているようだ」

……それは重畳。

「なら、期待しておくとするよ」
「それは別に構わぬが、交渉の成否も私達が連合軍の侵攻を防ぎきれるか否かで大きく変わるのを忘れてくれるなよ？」
「わかってるさ。それで、ＦＡＩＴＨは連合軍がどう侵攻してくるか、予測できているのか？」
「一応はな。こっちが把握している現状と併せて、説明しよう。……スクリーンを借りるぞ？」
「ああ、使ってくれ」

ユウキが懐から記録媒体を取り出して、端末にセットしている間に、部屋を少し暗くして、スクリーンの映像が見えやすいようにする。

「よし、じゃあ、スクリーンを見てくれ」

ユウキに言われるままにスクリーンを見ると、そこに映されているのは地球圏の簡略図のようで、各ラグランジュポイントや月、地球、要塞に存在するザフトや地球連合軍に加えて、その他の中立国やジャンク屋組合といった戦力の配置が為されていた。
更に驚いたことに、それらの表記には艦隊ナンバー等の名称だけに止まらず、戦力の構成内容や予測進軍路らしき矢印まで描かれている。

「この宇宙状況図は今までこちらが掴んだ全ての情報を統合し、分析して作成したものだ」
「おいおい、そんなものを一介の指揮官に過ぎない俺に見せていいのか？」
「何、これもＦＡＩＴＨの権限で可能なことだから、気にする必要はない」

「はぁ、やっぱ凄いな、ＦＡＩＴＨは……」

伊達に、国防委員長直属というわけではないということか。

まぁ、そんな俺の感慨は置いておくとして、それぞれの戦力配置に目を通す。

……まずは巨大な敵手である連合軍の配置からいこうか。

ざっと見る限り、宇宙に存在している連合軍戦力は、艦隊戦力が七つと、それぞれの拠点防衛隊といった所だ。

それぞれの艦隊戦力を細かく見て行くと、月の一大拠点であるプトレマイオスに駐留しているのが、大西洋連邦系で、地球軌道を確保されたことで、順次、地球から上がってきた戦力を元に再建された第一、第三艦隊とずっと温存されてきた虎の子の第七艦隊、東アジア共和国系で今年の三月に起きたＬ１宙域での戦闘で撃破されたが、先の第一、第三と同じく、上がってきた戦力を元に急速に再建された第五艦隊、ユーラシア連邦系でこれも地上からの戦力移動で再建された第六艦隊の五つだ。

また、連合が押さえているＬ４の諸コロニー群には、通商破壊作戦に出ていた独立戦隊群と熾烈な戦闘を繰り広げてきた地球連合構成各国混成型の第四艦隊が駐留している。

そして、残る一つの艦隊戦力、ユーラシア連邦宇宙軍が独力で再建を果たしたと書かれているユーラシア連邦系の第二艦隊が、今月に入ってＬ１宙域外縁部に展開して、世界樹の種に駐留している艦隊戦力を牽制している。

ちなみに静止軌道上のアルテミス要塞には元々艦隊規模の艦艇を収容して支える事ができる規模ではない為に、短期的な駐留ならと

もかく、通常は、防衛隊に毛が生えた程度の艦隊戦力しか駐留できないようだ。よって、今の所は、無視しても構わないレベルといえるだろう。

「……連合の戦力が半端ねぇなぁ、おい」

「まったくだな。……今になって、ラインブルグが恐れていた事が肌身で実感できる」

「でもよ、俺達、結構、連合軍の艦隊、潰したよな？」

「ああ、戦争が始まった去年から今までで、だいたい八個艦隊規模の戦力は潰しているはずだ」

「こちらは確か、二個艦隊規模の戦力を損失しているはずだけど……、絶対に回復力の差がありすぎるよなぁ」

戦力の回復と整備が遅々として進まないザフトと比較してしまい、あまりの国力差に頭を押さえつけられそうになるが、必死に抵抗して連合軍艦隊の欠番ナンバーを見ると、第八、第九、第十が欠番となっていた。

注記によると、第八は二月の低軌道上での戦闘で全滅後、他艦隊の再建が優先されて放置状態、第九は戦争開始当初前のＬ５での戦闘で機動戦力が壊滅した後はプトレマイオスで再建中だったが、その後に続いた戦闘で艦艇を消耗した他艦隊に吸収されて消滅、第十は大西洋連邦宇宙軍が独力で新設した大西洋連邦系の艦隊だったらしいが、先月の地球軌道上の戦闘で壊滅して、残存は第七艦隊に吸収されたとある。

だが、三大国の膨大な国力を結集している地球連合がそれだけで終わるはずもなく、未確認ながらも、プトレマイオス基地では、更なる艦艇の生産と地球からの増援受け入れでもって、これら欠番艦隊の再建が進められている気配があるとも記載されていた。

本当に、誰が調べたかはわからないが……、凄い情報収集能力だ

な。

「なぁ、ユウキ、誰がこれだけの情報を集めたんだ？」

「国防事務局が各地に潜伏させている諜報員達だ。それぞれから見れば、意味がわからない、或いは、意味がなさそうな情報でも集約すれば、見えてくるものがあるということだ」

「……集約して分析した奴等も褒めとけよ？」

まぁ、それはそれとして……、今度は、こちら側、ザフトの戦力を見ていこう。

こちらも見る限り、艦隊戦力は艦艇二十隻で構成される正規艦隊が四つと艦艇八隻でなる分艦隊が二つ、二、三隻の艦艇で戦力化されている独立戦隊が十三程度、それに加えて、プラント防衛隊と各拠点の防衛隊といった所だ。

より細かく、各拠点に駐留する艦隊戦力をそれぞれ見ていくと、アプリリウス軍事衛星港には別名で”本国艦隊”とも呼ばれる一個艦隊が、月方面を主にカバーするヤキン・ドゥーエ要塞に迎撃を担当する二個艦隊と遊撃を担う一個分艦隊が、Ｌ５宙域地球方面外縁部……、つまりは最前線に位置するボアズ要塞に、先の戦闘で機動戦力を大幅に消耗した為、急遽、各艦隊からＭＳパイロットが引き抜かれて機動戦力が補充された一個艦隊が、Ｌ１を確保している世界樹の種には先の戦闘で消耗し、未だに回復しきれていない為、五隻でなる一個分艦隊が、存在している。

また、宇宙軍の孫の手、もとい、便利屋である独立戦隊は、ボアズに四個、世界樹の種に四個、アプリリウス軍事衛星港に五個、と各拠点に分散して駐留し、それぞれの任務にあたっている。この独立戦隊群も以前はもう少し数があったのだが、今年に入ってからセ

ナ隊のように隊長がやられて解隊されたり、任務中に全滅したりと、何気に消耗していたりする。

でもって、現状、一番の問題があるとすると、やはり……。

「戦力の補充……、特にＭＳパイロットの補充が厳しいぞ」

「パイロットの絶対数が少ない所に地上軍へと優先して補充していたからな、宇宙軍の補充パイロットが少ないのも止むを得ないだろう」

「それはわかってる。実際、そのお陰でカーペンタリアが落ちていないんだから、一概に悪いとは言わないって」

ちょっと一息入れて、語を繋ぐ。

「だが、八月の戦闘結果から考えると、一度、大規模な会戦が起きれば、お前がさっき言っていた通りにパイロット候補生を繰上げ卒業で青田刈りをしたとしても、パイロットの補充は追いつかなくなる」

「わかっているさ、ラインブルグ。だがな……、もう、これ以上……、ない袖は振れないのだ」

「……つまり、次の大規模会戦で大敗したら、ザフトの通常戦力は継戦能力を喪失……、詰みってわけだな」

「……ああ」

……厳しい現状と暗すぎる未来に声も出なくなるが、下を向いていても解決には繋がらない。

だから、唯一の希望に縋るべく、アレについて尋ねる事にする。

「話を変えるが、さっき言ってたアレ……、姿が見えないが、改装

は進んでいるのか？」
「ああ、皆には知らせていないが、秘匿の為にミラージュコロイドを使って、覆い隠しているんだ。アレの改装自体は進んでいる」
「……なら、Ｌ５での防衛戦までに間に合いそうか？」
「何とか間に合わせるが……、アレが核を使用する関係上、耐久性に問題が出てな、二射が限度だ」
「二回が限度？　……それはまた、使いどころが難しいな」
「その通りだ。それに加えて、アレが戦略級兵器である以上、政治的、外交的な判断も必要になる。そのことから、ザラ議長が直々に発射指揮を執られることになった」

あの、奥様の尻に敷かれつつも、夫として、男としての義務を果たし続けている、敬愛すべき”おっさん”の最近の様子を見るに、大量破壊兵器を使用する責任を全て自分が受け持つ為って面があるかもしれないなぁ。

「何、アレの本分は抑止力としての存在価値がメインであって、実際に使用するのは、核攻撃を受けた場合のみの選択肢であることは、再度、議長に確認しているから、安心しろ」
「それは心配していないさ。どちらかというと、心配なのは発射目標だ」
「……最初の一撃は月のプトレマイオスが目標だ」
「なるほど、今後の事も考えれば、妥当な選択だな。……それで、第二射は？」

地球を狙うのは余りにもリスクが……、それこそ、人類存亡に関わるだけにやめて欲しいが……。

「予定はしていない」
「……」

「とは言っても、お前は簡単には信じないだろうから言うが、実はな……」
「実は？」
「アレは一射だけで耐久性能の限界ギリギリだ」
「ちょっ、待て待て、……さっきは二回が限度だって言わなかったか？」
「公には、そういうことになっている。だが、実際には、一射後、大規模な改修なしには二射目を撃てないだろう。……これが使用時の予測データだ」

そう言ったユウキがスクリーンに、核爆発を起こすチェンバー部や一次、二次反射ミラーの許容限界エネルギーと使用時予測エネルギーを対比する表とグラフを出してくれたが……、……うわぁ、チェンバー部の耐久値がギリギリのラインだよ。

……さっきユウキが二射が限度と言ったのは、アレが一射しか確実に撃てないという欠陥を隠す為か。

「さっき言ったのは欺瞞情報ということか？」
「そういうことだ」
「まぁ、それはわかったが、これって、欠陥兵器じゃないか？」
「……私もしっかりと認識している。だから、それ以上は言わないでくれ」

ずーん、と背景効果音が聞こえてきそうなくらいに暗くなったユウキを見て、一瞬だけ、躊躇するが、原因は知っておいた方がいいだろう。

「いや、でも、なんで、こんなことに？　最初に読んだ資料よりも、アレの性能が劣化したのは何故だ？」

そう尋ねると、ユウキは陰を背負ったまま、ふっと口を歪ませた。

「そもそもの発端は主力機をゲイツへと早期更新する為に増産した結果、アレを建設する為の予算と資源が不足したことだった。……とはいえ、ゲイツの増産は今現在の劣勢において、前線を支える為には仕方がないことだし、私も納得したことだ。だからこそ、本来、アレの全外装に使用するはずだったＰＳ装甲をγ線をレーザー光に転換する装置やγ線レーザーを直接受け止める反射ミラー部分だけにして、他の部分は要求性能を満たす代替装甲に変更したのだ。だが……」

ちょ、何、その不吉な切り方っ！

「だが？」

「ああ、嘆かわしい事に……、人為的な問題が起きたのだ」

「人為的な問題とな？」

「まぁ、聞いてくれ」

「あ、ああ」

「……一月程前、未だに、アレの開発を担当する国防委員から、代替装甲が決まったとの連絡が来ていなかった。戦況が悪化していたから、そろそろアレが完成していないと拙いと考えたので、私は要求性能を満たす装甲を提示する為に、開発担当の国防委員に面会を求めたのだ。しかし、折りが悪く、時間が合わなかった」

「まま、あることだろう？」

「ああ、それが一度や二度ならわかるのだが、四度、五度と続くと、明らかにおかしいだろう？」

「……まぁな」

偶然の可能性も残るが、相手が避けているとも考えられるな。

「けれど、向こうの事情を探ろうにも、私は私で教導関係の仕事が忙しくて手が回らなかったし、他の者もそれぞれ忙しく、気になりつつも時間が過ぎていった。それで、一週間」

……。

「ようやく、受け持ちの教導関係の仕事が軌道に乗り始めて、時間に余裕が出てきたから、向こうの都合の良い日に合わせると言って、国防委員との面会の約束をこじつけたのだが、何故か、その調整に一週間」

……おい。

「面会が叶って、国防委員に代替装甲について聞いてみたら、既に装甲の選定は終わり、工事も進んでいると言われて驚かされる。いや、本来なら、ここで話は終わりになる所だが、面会に至るまでの時間が掛かり過ぎた経緯から、何となく嫌な感覚を持っていたから、念の為、使用されている代替装甲が性能を満たすかを、連合軍の戦力分析の合間に調査するので一週間」

……まさか。

「調べた結果、使われていた代替装甲がその国防委員の妻が経営する会社が生産していたものであり、まったく必要耐久値を満たさない代物であることが判明した。その事実に愕然としつつも、一縷の望みを持って、技術部にアレが使用できるかの検証を依頼する。その結果、使用されている代替装甲では、γ線を発生させる為の核爆発を支えきれなくて、チェンバー部が吹き飛んでアレそのものが破壊される事がわかった。ここまでで、一週間だ」

おいおいおいおい。

「まさか、今の状況で、そんな……」

「言っただろう、嘆かわしい人為的な問題だと」

「その馬鹿を仕出かした”阿呆”は？」

「一昨日、１６日にザラ議長に直訴して、その”阿呆”を国防委員から解任した上で、拘置衛星に放り込んでもらった」

「……ならいい。でも、どう対応するんだ？」

「”阿呆”の会社の資産を差し押さえして資金を回収しつつ、私が提示した代替装甲を大急ぎで調達している最中だ」

「いっそのこと、その会社の営業許可を取り消した上で整理してしまって、馬鹿を仕出かすと上層部でも容赦しないって意思表示……、一罰百戒にしたらどうだ？」

「……考えておこう」

黒い微笑を見せるユウキに、間違いなくやると確信を抱いてしまった。

……。

しかし、何故、チェンバー部みたいな重要部に、ＰＳ装甲を使わなかった？

「ユウキ、なんで、核爆発を受け止めるチェンバー部に、ＰＳ装甲を使わなかったんだ？」

「無論、当初は予定はしていたのだが、ＰＳ装甲以外では代替が利かない反射ミラー部分が広すぎて、チェンバー部にあてがうだけの量が確保できなかった。……単純な話、生産したくても、必要な希少資源が足りん」

凹(おう)、理由が末期だったっ！

「んんっ、とにかく、アレに関しては、現状のままでも何とか一回は撃てるようにする為、ザフト技術部が主導して、今ある資材でチェンバー部を補強する改修型を設計したから、開発陣は改修作業に忙殺されている最中だ」

「よって、一回なら撃つ事は可能ということか？」

「ああ、後二日程で可能になるだろう。ついでに言えば、私の方もここに来るまで、チェンバー部の新規生産に向けて、人員や資材、工場の確保、生産スケジュールの調整に追われていた」

「でも、ここに来たって事は、お前の方も目処が立った？」

「……不眠不休で、何とかな」

そ、そいつはお疲れさんでした。

「だが、生産の目処が立ったとしても、もしも、今月中に連合軍の侵攻が開始された場合は、チェンバー部の換装は絶対に間に合わないだろう。よって、この換装が終わるまでは、アレの使用は一回が限度だということになる」

「なんともはや……、正直、この後に及んで、人為的な問題で戦略に制限とか……、まさかとしか言いようが無い、泣いて喚き散らしたくなるような事態だが……、それって、チェック体制はなかったのか？」

「国防委員の権限が大きい事に加えて、ＦＡＩＴＨや事務局も来る侵攻に備える為に大童でな、入念なチェックに携われるような手隙の者がいなかった」

「それで、この件が表立った場合は、国防委員の権限《ザフトの権益》を守る為に、全ては人員不足が原因ってことで収めるのか？」

「私とて腹立たしいが、そうなるだろうな。実際に、人手が足りな

いのも事実だ」

「やれやれ、ザフトって、組織防衛だけは得意だから、困る」

「だが、ラインブルグ、ザフトが皆、そんな者達だけではない。今回の件だって、国防の根幹に関わるだけに、現場や後方の者達の多くが、何とか威力を落とさないで撃てるように、土壇場で足掻いて、必死に工夫を重ねているんだぞ？　私やアレの開発に関わっている技術者達は、アレの存在で独立が達成できると信じて、精一杯頑張っているんだぞ？　本当なら、一射もまともにできなくなる所だったんだぞ？　なのに……」

虚ろな目をして、ブツブツと上層部への怨み言を次々と呟くユウキを見るにつけ、権力の枢軸に関わると碌なことがないんだろうなぁ、と思わされる。

とりあえず、ストレスが溜まり過ぎているユウキは、それを解消させる為にもしばらく放って置くとして、画面を元に戻して、残るその他の勢力について見ていこう。

月面都市群は防衛戦力しか持っていないから純軍事的な影響力は限定的だと考えられる。もっとも、政治的、経済的に見れば、連合側に付かれると外交の伝手と通商相手を失うことにもなるプラントは確実に干されてしまうだろう。

……っと、今は軍事的な条件だけに止めておこう。

で、更に見ていくとして、本国が連合軍に蹂躙されたオーブのアメノミハシラだが、アメノミハシラ周辺の宙域確保に務めているようで、こちらから手を出さなければ動きはないだろう。

地球圏各地に散らばるジャンク屋を束ねるジャンク屋組合に関しても一貫して中立の立場を保っているから、これもアメノミハシラ同様、こちらから手を出さなければ何もしてこないはずだ。

それと火星の入植民だが、遠く離れた場所にある上に生存のための開拓に忙しくて、こちらを気にしている余裕もないだろうから、無視して構わないと考えられる。

後、問題になるというか、気になる勢力なのだが……、全てがＬ３に集中している。

Ｌ３にある、今年初めの騒動で大打撃を受けて運用休止というか崩壊してしまっているオーブのスペースコロニー、ヘリオポリスとその資源衛星の周辺に、ザフトや地球連合軍の脱走兵が海賊化して屯しているのに加えて、武装した素性や素行の悪いジャンク屋というか傭兵に近い奴等とか、例の連合軍を脱走した足つきとか、アメノミハシラとは別の指揮系統を持ったオーブ軍残党とか、プラントから逃げ出したクライン派の連中とか、様々な半端者というかアウトローが集結しているみたいなのだ。

先月、足つきとクライン派に強奪された新型艦追討任務を受けているラウも足つき捜索とクライン派討伐のためにＬ３へと向ったらしいのだが、ヘリオポリスに屯している連中がザフトだろうが連合軍だろうが関係なく、狂犬のように牙を剥いてくる為、侵入は危険だと判断して接近は断念したと言っていたからなぁ。

こいつらを排除するにしても、連合軍もＬ５への直接侵攻の準備で忙しい上、そもそもＬ３にはコロニー等の権益を持っていないから動かないだろうし、ヘリオポリス等の権益を有するオーブにしてもアメノミハシラに駐留している戦力はアメノミハシラ防衛で手一杯のようだし、地球から上がってきたらしいオーブ軍に関してはア

メノミハシラとの合流を嫌って、Ｌ３へ向った以上は海賊と何ら変わらない存在に過ぎないし、ザフトにしても攻める理由がクライン派の排除くらいしかないから、Ｌ５の防衛を最優先にしている現状では後回しになって、動くことはないだろう。

となると、放置する他ないということになるが……、これ、後々の災いの種にならないといいなぁ。

「おい、ユウキ」

「……ダのアンちくしょうめ、対案も出さずに追従しか出来ないのに大きい顔をして、行動もしないくせに……」

「ユウキッ！」

「ッ！　……む、ど、どうした、ラインブルグ？」

「いや、今後、予想される連合軍の動きについて、聞こうと思ったんだが……、お前、ストレス、溜まり過ぎじゃね？」

「……自覚があるから、何とか時間を作って萌える会に顔を出して発散している。だから、大丈夫だ」

「そ、そうか」

……本当に、こいつも変わったよなぁ。

「さて、今後の動きだったな。今現在、我々が侵攻が予想されているのは、矢印を見ての通り、ボアズだ」

「世界樹の種やヤキン・ドゥーエは狙われないと？」

「ああ、ボアズがＬ５宙域でも地球方面の外縁部に位置し、また、駐留艦隊が地球方面を担当している以上、先にこちらが狙われるだろうと予想している」

「連合軍が地球軌道の奪回を恐れているということか？」

「そういうことだ。いくら連合軍に戦力があるとはいえ、地球とのラインが切られたら、地球から宇宙への増援が難しい状況になる。

それに、もしも、連合軍が先にヤキン・ドゥーエを攻めたとしても、こちらには二個艦隊が駐留していることに加え、要塞の防衛隊もあるし、本国艦隊やプラント防衛隊からの援軍がすぐに届くことを考慮に入れると、よほどの戦力を集中させなければ、まず陥落させることはできない。では、仮に連合軍が戦力を集中させたならばどうなる？　当然、その他の場所が手薄になることに繋がるだろう？」

「ああ、そこをボアズ艦隊に突かれて、地球軌道を奪回されたら、連合軍は一転して、厳しい状況になるな」

「そうだ。それとＬ１に関しては、我々にデブリ暗礁という地の利がある上、連合軍も以前の戦闘で手痛い打撃を被っている経験もあるから、戦闘を嫌うだろう。加えて、今のＬ１の戦力では拠点防衛が限界なのは向こうも承知しているはずだ。まぁ、希望的観測も含まれているが、下手に手を出さずに今の状態を維持して、包囲するに止まると考えられるだろう」

「……つまり、”飛び石”ってわけか？」

「ああ、戦力が揃っているからこそできる贅沢だ」

「数を揃えることこそが、戦略の王道だって証拠だよなぁ」

「まったくだ。……んんっ、とにかく、これらの予測から、我々ＦＡＩＴＨは、戦力的にも劣っているボアズが先に狙われると判断した」

「そのボアズの備えや対応は？」

「防衛隊のＭＳをゲイツとジンＭ型へ更新させている。……無論、ある程度の増援部隊も送る予定だが、月への備えも考えると数を出すのも厳しいし、補充人員が払底している為、戦力の補強や補充は不可能だ」

「……そうか」

……なら、ボアズは落ちるな。

「ユウキ、ＦＡＩＴＨは、ボアズ陥落は既定の事と考えているのか

？」

「……他の者の考えは知らぬが、私はそう考えている。ボアズは、アレを真の意味で完成させる為の時間稼ぎと連合軍の戦力を少しでも削る為の……、捨石だとな」

「同期で、白服でもある俺に、わざわざ偽悪的に言う必要はないさ」

「ふっ、そうだったな。……なら、聞いてくれ、ラインブルグ。私はな……、私は今ほど……、仲間を切り捨てなければならない今ほど……、己の無力と己も認めた判断に罪悪を感じたことはないよ」

今、ユウキが感じているだろう、それは、戦争を指導する立場にある以上は甘受しなければならないものであり、自身の判断で死ぬことを定められた者達と遺される身内のことを思えば、当然の義務と言えるものだろう。

「……そうか」

だが、同じ白服という立場とはいえ、戦略の方針決定に参加していない俺には、今の悩み苦しむユウキを、不覚悟だと批判する資格もなければ、仕方がないことだと擁護する事もできない。加えて、未だに、そこで戦って死ね、と”部下”に命じたことがない以上、今の心情を汲み取ることも出来ない。

俺ができるとしたら、精々、ユウキの嘆きを聞いたり、沈黙に付き合う位だ。

その後、エルステッドがアプリリウス・ワンに到着するまで、俺達は、既に定められた犠牲者達を悼むかのように、沈黙の中で過ごした。

77　一時の凪　3（後書き）

11／02／14　表記修正。

78　終末を呼ぶ業火　1

9月20日。
多数の連合軍艦艇が月のプトレマイオス基地からＬ４方面へと打ち上げられたと、Ｌ１にある世界樹の種からプラントへの緊急報という形で伝えられた。
その情報によると、月より発した連合軍は二個艦隊以上の規模であり、一つ一つの艦隊自体も、機動戦力の基幹となる３００ｍ級を複数擁し、２５０ｍ級や１５０ｍ級の数もこれまで倍以上と、明らかに通常編成よりも増強されている事が判明している。
前もって、ユウキから提供された情報を元に考えると、これらの艦隊はＬ１外縁部を旋回する形でＬ５方面へ向かう航路を取るのだと予想された。
また、この動きに合わせるかのようにＬ１宙域を管轄している世界樹の種においても、Ｌ１を包囲する連合軍艦隊との間で小競り合い……、デブリ暗礁帯でのＭＳ隊同士の戦闘が頻発しており、暗礁地帯内部に存在するから狙われないだろう、だなんて楽観は許されない状況になっている。

9月21日。
Ｌ１近くで陣容を整えた連合軍の大艦隊はＬ５を目指して、侵攻を開始した。その航路はこちらでも予想した通り、地球方面のボアズを目指すものを取っている。
この連合軍艦隊の動きに対して、ザフト機動艦隊はヤキン・ドゥーエから一個艦隊をボアズに派遣することを決定したのだが、出撃直前になって、俄かに月のプトレマイオス基地より多数の熱源を探

知したため、そのプトレマイオス方面の動きを警戒する必要性から当初予定よりも大幅に少ない、分艦隊の派遣に止まることになってしまった。

……ない袖は振れないとはいえ、厳しい現実だ。

9月22日。

L1方面からL5宙域の”内側”、地球方面へと侵入してきた連合軍艦隊の先遣隊がボアズ要塞近くの宙域に到着し、後に続く本隊が展開できる宙域の確保の為か、部隊を展開させ始めた。

この連合軍艦隊先遣隊の動きに受けて、ボアズに駐留していた三個独立戦隊が進出してMS隊による攻撃を仕掛けるも、迎撃に出てきた連合軍MS隊が予想以上に強力だった為、先遣隊の艦艇に接近する事が出来ず、事実上、攻撃は失敗に終わっている。

もっとも、その戦闘の間に、ボアズ要塞の臨戦態勢は整い、駐留艦隊やヤキン・ドゥーエ要塞からの援軍である分艦隊が要塞後方宙域に展開することに成功しているから、意味のある攻撃だったといえるだろう。

そして、9月23日。

連合軍艦隊の先遣隊が確保していた宙域に連合軍艦隊本隊が到着し、遠距離での砲撃戦の中、順次、部隊を展開させ始めている。

◇　◇　◇

ボアズ要塞で戦闘が開始される中、プラントコロニー群とボアズ

要塞の中間宙域で、アプリリウス軍事衛星港を母港とする本国艦隊がＦＡＩＴＨからの命を受けて展開しており、ボアズ方面からの”飛び石”を警戒している。

同じく軍事衛星港に駐留している独立戦隊群もまた、本国艦隊よりも更に前に出てピケットラインを形成しており、うちの戦隊もこれに参加して、第一種警戒態勢下、ボアズ方面の監視と即応体制を維持している。

そんな中、いつもの如くパイロットスーツに身を包んだ俺は、エルステッドの艦橋内、艦長席の斜め後に席を設けてもらい、席に備え付けの小型モニターにボアズ要塞から随時プラントへと送信されている戦況情報を映し出して、目を通している。

そこから読み取れる現在の状況は……、数に勝る連合軍がＭＡ隊やＭＳ隊を使い、ボアズ要塞へと波状攻撃を仕掛けているのだが、ボアズ要塞司令部が指揮する要塞火砲群や駐留艦隊の艦砲による組織的な迎撃、担当宙域を決められたＭＳ隊による要撃が上手く機能しているらしく、一進一退の状況が続いている。付け加えれば、今の所は、戦闘に伴なうＭＳや艦艇、物資の消耗も許容範囲内に収まっているようだった。

……だが、恐ろしいまでの物量を誇る連合軍を前に、その抵抗がどこまで持つものか、前線は何時まで維持できるのか、と内心で暗然たる思いを抱いていしまう。

今日は何とかなるにしても明日には迎撃に当たる機動戦力が磨り減り切って、無力化されるかもしれない等と考えた所で、アーサーに何かの指示を出していたゴートン艦長がこちらに身を寄せると、小声で話し掛けてきた。

「ラインブルグ君、ボアズでの戦闘、どういう状況になってる？」
「見かけは互角ないし優勢に見えますが、正直、援軍が期待できない以上、徐々に厳しくなるでしょうね」
「そうかい。……なら、何時まで持つと思う？」
「今日はまだ、大丈夫だと思いますが……、明日、あるいは明後日には……」

ボアズの防衛戦力は物量に押し切られて、継戦能力を喪失し、内部に立て篭もるだけになるだろう。

そして、継戦能力が喪失するに至るまでの間にどれほどの連合軍の戦力を削ってくれるか、内部に篭る事でどれだけ時間を稼いでくれるかに、今後のプラント防衛に影響してくるのだ。

ボアズで死んでいく連中を思い、肩が重くなったように感じていたら、また、ゴートン艦長が口を開いた。

「月に残ってる連合軍艦隊がいなけりゃねぇ」
「……向こうはこちらが動くに動けないようにするのが狙いなんでしょう」
「戦わずしてこちらの行動を制限するとか……、ほんと、本職は違うよねぇ」
「まぁ、所詮、俺達は義勇兵だなんて大層な名前を名乗ってる民兵に過ぎませんしね」
「ふふ、違いない」

こんなアマチュアばかりの杜撰な組織で、よく二年近くも戦ってこれたものだと、思わざるを得ない。

「で、その月の連合軍はいつ動くと思う？」

「ボアズが落ちてからでしょう。そうなってしまえば、ヤキン・ドゥーエへの牽制は必要なくなりますから、大手を振って動くはずです」
「やれやれ、動いても動かなくても、結局は詰められてるってわけか……」
……本当に、憂鬱になる。
そんなことを考えていたら、不意にゴートン艦長が声音を重いものに変えた。
「ラインブルグ君、視野が広いっていうか、物が見え過ぎるのって、辛い事だよね」
「えっと、それは……」
「まぁ、年長者の助言だと思って聞いてよ」
「……はい」
「他人には見えないことが見えてしまったり、或いは他人が見ようとしないことを直視するなんてさ、ただ、それだけで、苦しい事だろうとは思う。……でも、それ以前に、君がこの隊の隊長であることを忘れちゃいけないよ？」
っ！
顔に……、出ていたのか？
「……うん、気が付いたみたいだね。ここ最近のラインブルグ君は暗い顔というか、重いものを背負っているみたいだったよ」
「そう、ですか？」
「まぁねぇ。……いや、さっきも言ったけど、先が見えるってことは、辛くて苦しいことだってわかってるよ。でもね……、本来、君

が責任を負うべきなのは、この戦隊、ここにいる、今まで共に戦ってきた仲間のはずだ。それ以上の責任を負う必要もなければ、背負う義務も権利もないんだ」

……艦長に指摘され、自身の思い上がりが恥ずかしくなった。

「だから、必要以上に気に病む事はしなくていいし、どうせ悩むなら、どうやって戦隊を生き残らせるかを考えた方がいいと思うんだ」

「……ええ、そうでした。俺はこの戦隊を第一に考えないといけないんでしたね」

「そういうことだよ」

……はぁ、俺もまだまだなんだなぁ。

そんなことを考えていたら、何食わぬ顔をしたゴートン艦長は顔を艦橋前部にあるメインスクリーンに戻しながら、言葉を付け加えた。

「後、まぁ、これは余計なお節介かなとも思うけど、ラインブルグ君」

「……はい？」

「この前、君が叱責した二人……、打たれ強いリー君は発奮して訓練しているからいいとして、ラヴィネン君が調子を落としているように感じられるんだけど？」

……気が付いていなかった。

自分の事というか、今後のことばかり考えていて、まったく周囲が見ていなかった。

これは……、本当に失態だ。

「すいません、艦長」

「いや、別に俺に謝る必要はないって。……それよりも、ちゃんとラヴィネン君のフォローをしておきなよ？」

「……了解です」

さて……。

……。

情報を見るに、ボアズの戦況は早々変化しないみたいだし、早い所、レナに会って話をしておこう。

「艦長、ちょっと、席を離れます」

「……ＭＳ格納庫ですね？」

「ええ、ＭＳ隊の様子や自機の状態を自分の目で見てきます」

「了解、何かあったすぐに連絡しますよ。……しっかりと、ご自身のパートナーもメンテナンスしてきてくださいねぇ」

そんな軽口と共に、ニヤリと厭らしく笑ったゴートン艦長は俺に被っていた帽子を手に取ると、ヒラヒラと振ってみせた。

……ほんと、この人には敵わないよ。

なんてことを思いつつ、艦長の道化めいた仕草と思いやりに心が軽くなるのを感じながら、遠く離れたＭＳ格納庫を目指すべく、艦橋を離れた。

◇　◇　◇

ＭＳ格納庫までの道中、艦内の様子もついでに観察して行くが…、これまで以上に緊張感が漂っているものの落ち着いてはいた。これも隊員各々が、今現在置かれた状況を意識し、仕事をしっかりとこなしている証なのだろう。

隊長という役職なのに、艦内のそんな様子にも気が付いていなかったこともあり、どれだけ自身の思考に埋没していたのかと情けなくなり、自身の余裕の無さに凹んでしまう。

とはいえ、これ以上は同じ失態を繰り返すわけにもいかず、ショボーンとした内心を表情に出さないよう、顔面の筋肉を意識して、通路を進んでいく。

その道中にも擦れ違った幾人かの隊員と挨拶と声を交わし、到着したＭＳ格納庫は、いつもと変わらない機械音と喧騒で満ちていた。

……変な話かもしれないが、この喧騒を聞く度に落ち着く。

エアーが確保されている証拠だからか、外の宇宙が無音で寂しいからなのかはわからないが、とにかく、落ち着くのだ。

格納庫内に入って、立ち並ぶゲイツを見上げていたら、こちらに向かって整備班の一人が近づいてきた。

「おう、アインちゃん！」
「……シゲさん」
「どうしたんだい？　こっちは出撃とは聞いていないけど？」
「いや、ちょっとね」
「……レナちゃんのこと？」

……シゲさんの言葉に、自身の不甲斐なさを再認識して、また、ダメージを受ける。

「あ、ああ」
「まぁ、アインちゃんも隊長だから忙しいんだろうけどさ、もう少し、レナちゃんを構ってあげなよ？」
「あ～、うん」

何となく気になるニュアンスだが、事実なので頷いておく。

「それで、レナは？」
「今は機体のコックピットで作業してるよ」
「ん、わかった。ちょっと話してくるよ」
「あいよ」

シゲさんに見送られながら、周りで作業している整備班員の迷惑にならないように気をつけつつ、左肩に部隊章と共にＩＳ１３０５とマークされたレナの機体を目指して跳ぶ。

……っと、ちょっと目測を誤ったな。

腕を動かして進路を修正し、コックピットハッチ近くに到達する。

「おーい、レナ、いるかぁ？　あんちゃんだぁ」

……あれ？

いつもなら、もう、何を馬鹿な事を言ってるんですか、先輩、だなんて突込みが来るのにな。

……。

でも、一応、中にいる気配はするんだが？

そんなことを考えながら、コックピットを覗き込むと……。

「……」

お嬢さんはこちらに短い青髪の尻尾を向けて、黙々と作業してました。

「あ、あー、レナ？」

「……何ですか？」

「もしかして、前の演習で、俺が言った事を気にしてるのか？」

「……」

むぅ、この無反応は……、気にしてると受け取ったらいいのかね？

「いや、レナ。あれはな、別に本心で言ったわけじゃなくてだな…」

「それ位はわかってます」

「……あ、そう」

なら、何故にそんな態度？

「……ただ、小隊の指揮がちゃんと出来なくて、先輩の期待に応えられなかった自分が情けないだけです」
「あ、あ～、レナ？」
「……はい」
「いきなり小隊指揮を執れって言われて即できたら、誰も苦労しないぞ？」
「それ以前にもシミュレーターで何度も訓練していてでもですか？」
「……お前な、幾らなんでもシミュレーター訓練だけで、万事上手く行くわけがないだろう？」

レナが沈黙したので、話を続ける。

「しかも、フェスタとスタンフォードの二人は初めての実機搭乗な上に、仮にも精強を謳われるアプリリウス中隊が相手だぞ？　何もかもが上手くいくなん「でもっ！」」

俺の声を遮ったレナの叫びは……、震えていた。

「それでも……、それでも、先輩の期待に応えたいって、思うのはいけないんですかっ！」
「……いや、大いに結構だ。でもな、ちょっと訓練で失敗した位でさ、今みたいに思い詰めて、深刻になる必要はないよ」
「……ちょっとした判断ミスが命を左右する戦闘に備えるための、大切な訓練なのに？」

間違いじゃないあたり、なんとも、頭が回ることで……。

「レナ、考え方が逆だ。訓練で失敗しても、よっぽどの事がない限り、命は落とさない。だからこそ、訓練で様々なことを試し、考え

られる可能性を検討し、幾度も失敗を重ねて反省し、今後に……、実戦に繋げるんだ」

「……」

「レナ」

「……はい」

「お前は”いい子”過ぎるな」

「えっ？」

はぁ、ようやくこっちを向いたか。

……あらら、目が少し赤いな。

まぁ、今は触れないでおこう。

「言い換えると言うか、レナの”いい子”振りを他の言い方で表現すればだな……、真面目過ぎる、期待に応えようとし過ぎる、色気がなさ過ぎる、余裕がなさ過ぎる、神経が張りつめ過ぎる、胸がなさ過ぎる、無理し過ぎる、遊びがなさ過ぎる、ボケがなさ過ぎる、食い気があり過ぎる、融通がきかな過ぎる、頭が固過ぎる、つっこみ過ぎる、気張り過ぎる、頑張り過ぎる、ってところかな？」

「ちょっ！　何か、まったく関係ない上に、女の子に言ったりするには致命的というか、私個人を中傷するようなものが多々入っていたような気がするんですがっ！」

「そうそう、そんな感じで喜怒哀楽をしっかり出して、オンとオフの切り替えを上手くしないとな」

「あ……」

ニヤニヤと意識して軽薄な感じの笑みを浮かべて、レナの額に軽くデコピンしてやる。

「あぅ」
「ま、今度、同じような事があったら、ちゃんと話も聞いてやるし、相手もしてやるから、安心しろ」
「……私、そんな子どもじゃないです」
とか言いながらも、両手で額を押さえたレナの口元が少し綻んでいるのはご愛嬌だろう。
もう少し、ガス抜きも兼ねて弄ってやろうかと思ったら、外からシゲさんの声が飛び込んできた。
「アインちゃんっ！　艦長から至急連絡！」
「ッ！　端末はっ！」
「アインちゃんの機体に回すからそっちでっ！」
「了解っ！」
急ぎなのでレナの頭を軽くポンと叩くだけで止めておき、コックピットから出て、一目でわかる自機を目指す。そして、コックピットハッチ手前で待っていたシゲさんに追い着き、艦長がどんな様子だったかを知るべく尋ねる。
「シゲさん、艦長、何か言ってた？」
「……他には何も言ってないけど、ちょっと慌てた感じがしたよ」
「そうか」
ということは、悪い情報だろうと当たりをつけ、心の準備をして、艦長との通信を開いた。
「艦長、ラインブルグです」
「……こちら、ゴートンです」

「……何か、ボアズで動きがありましたか？」

少しの間、艦長は口篭るも、はっきりとした声で、こう告げた。

「隊長、少し前に、ボアズ要塞との通信が途絶しました」

79　終末を呼ぶ業火　2

……ボアズ要塞との通信が途絶？

続く話が悪い方向に走り出しそうな予感に、自然と眉間に皺が寄るが、ここは大人しく聞くしかない。

「この通信途絶の直前、ボアズ方面において、強烈な閃光を目視及び大規模な熱源を相次いで多数観測、その後、ボアズ要塞管制宙域に大量のデブリが発生して、大規模なデブリ帯が発生しています。これらの条件を満たす答えは……」

「……核ミサイルによる飽和攻撃と、それを受けたボアズ要塞の崩壊、でしょうね」

「……はい」

ゴートン艦長が、何故、どうやって、と言わないところを見ると、原因に関しては一時的に棚上げして、現実だけを見据えているようだ。

俺の中でも、表に出ていない情報……、クライン親子というかクライン派による情報漏洩やフリーダムの強奪等を知っている関係上、ニュートロンジャマーキャンセラーの情報が地球連合に流出していると想定していたから、この核攻撃は”まさか”よりも”やはり”という思いの方が強い。

「ボアズ要塞所属の艦艇からの通信は？」

「幾つかの信号を捉えることは出来ましたが、複数の核爆発による

強力な電子パルスかデブリの影響でまともに通信が繋がらない状況です」
「なら、プラントからは何か、うちへ指示はありましたか？」
「ええ、ピケットラインを構成する部隊は、警戒を強化するようにとの指示がありました」
「……では、第二種戦闘配置を発令しましょう。また、ＭＳ隊から複座型をボアズ方面に進出させて情報収集に当たらせます」
「ボアズ方面はデブリで溢れていることに加え、連合軍も依然として存在すると思われることから、単機ではなく、護衛を付けた方がいいような気がしますが？」
「それもそうですね。……護衛にマクスウェル小隊を出しましょう」
「了解です」

さて……。

「艦長、連合軍の追撃、或いは、ボアズを落とした勢いに乗って、プラントへと侵攻してくる可能性はあると思いますか？」
「……先程も言いましたが、宙域にはデブリが大量に発生している状況です。いくら頑丈な軍艦だとしても航行するには非常に危険な状態でしょう。となれば、ボアズ方面からこちらへと撤退してくる味方部隊へのＭＳ等による追撃はあるでしょうが、連合軍艦隊による積極的な侵攻はないと考えられます」
「それでも、ＭＳによる追撃の可能性は残るってことですね？」
「はい」

なら、俺も偵察情報が来るまでこの場で待機して、何時でも出れるようにしておこう。

「艦長、俺は引き続きこちらで待機します」
「了解しました。何か情報があれば、すぐにそちらへ連絡します」

「頼みます」

さて、俺も早い所、準備しないと……。

「シゲさん、もうすぐ二種戦闘配置を発令して、複座型を出す予定だから、何時でも出られるように準備をよろしく」

「ん、わかったよ。……おぅいっ！　ヤスぅッ！　複座型を優先して準備しろぃっ！」

「わまりやぁしたぁっ！　班長ぉっ！」

その整備班らしい、大声でのやり取りに、少し気が抜けた。

「……それで、アインちゃん、何があったんだい？」

「……ボアズが落ちたようなんだ」

「へっ？」

俺の言葉が俄かには信じられないのか、シゲさんは目を丸くしている。

「嘘だろ、あの要塞がそう簡単に落ちるなんて……、それって本当なのかい？」

まぁ、小惑星を利用して造られた頑丈な要塞がいきなり陥落するなんて、普通は信じられないだろうな。

「未確認なんだけど、おそらく、連合軍から核の飽和攻撃を喰らって、ボアズ要塞自体が吹き飛んだみたいだ」

「ッ！」

シゲさんは核と言う言葉を聞き、眼鏡の奥の瞳を鋭くさせる。

「アインちゃん、それってつまり、ニュートロンジャマーが無効化されたってことかい？」
「ああ、確認できた情報だけで検討しても、核が使用されたとしか考えられない以上……、どんな方法かはわからないけど、無効化されたのは間違いない」
「むむ、そうだね、考えられるとしたら、ニュートロンジャマーキャンセラーあたりだろうけど……、連合も開発したんだなぁ」

……シゲさんも何気に情報通だね。

「シゲさんはニュートロンジャマーキャンセラーを知ってるの？」
「俺にも技術部に独自の伝手があるから、存在だけはそれとなくね。……つか、アインちゃんこそ、何で知ってるの？」
「俺も伝手だな」
「……アレの情報管理は結構、厳しいはずなのに、怖い伝手を持ってるね」
「いや、怖いっていっても、まぁ、ＦＡＩＴＨだから怖いか」
「ああ、この前に来たアインちゃんの同期だね？」
「そういうこと」

実際には、ザラ議長だったりするけど……、まぁ、いいか。

「それよりも、シゲさん、二種配置のアラートが鳴り出したよ？」
「おっと、いけねぇ。アインちゃん、ここのエアーも直に抜けるからね、気をつけなよ？」
「了解」

ハッチから離れたシゲさんがＭＳ格納庫の責任者らしく、大声で整備班に指示を出すのを聞きながら、俺は今後の行動目的について

考える。

……。

やはり、ここはボアズから撤退してくるかもしれない残存部隊の援護及び収容を第一に置くべきだな。当然、敵追撃部隊が存在するものと仮定して、その排除も含めて動けばいい。

でもって、第二として据えるのは、連合軍艦隊の動向を探ることだろう。このまま強引にでもプラントを目指して動くのか、ここの宙域が落ち着くまで待つのか、それとも、別のルートから侵攻するのか……、とにかく、敵の動きがわかれば、後方へと警告が出せるしな。

そして、最後に……、これは本当に余裕があればの話だが、近辺宙域での生存者の捜索と救助。正直、生存者がいる可能性は少ないが……、完全にゼロではないだろうから、実施できるようならしたいものだ。

……うん、こういう方針で動こう。

「アインちゃん、エアーを抜きはじめって、早くメット被って！」

「あ、いけね」

既にヘルメットを被っているシゲさんに注意され、俺も慌ててヘルメットを被る。

「まったく、艦内で窒息なんてことになったら、笑えない冗談だよ？」

「いや、ごめん、考え事してた」

「役目柄、考えに集中するのも仕方がないことなんだろうけど、程々にしとかないと」

「ははっ、気をつけるよ」
「ならいいんだけどね。……とにかく、今現在、エルステッドＭＳ隊はパイロットの搭乗に掛かっている最中だよ。後、もう一度確認するけど、複座型を偵察に出すんだね？」
「ああ、こちらが動くにしろ、まずは情報が欲しいからね」
「ん、了解」

シゲさんは頷くとその手でヘルメットのバイザーを落とし、自らの戦場へと去っていった。シゲさんを見送った俺も、今、ボアズ周辺はどんな状況になんだろうか、なんて考えながら、ヘルメットのバイザーを落した。

◇　◇　◇

護衛を伴なった複座型がボアズ方面に進出し、その豊富でかつ強力な観測機器を使い、邪魔をするデブリ群と格闘しながらも偵察を始めた。

そこから次々に入ってくる情報は、ボアズに駐留していた戦力……、いや、プラントにとって、非常に過酷な現実だった。

事前情報から推測した通り、ボアズ要塞が存在していた座標宙域には幾つかの大型デブリしか存在しておらず、連合軍の核攻撃によって、間違いなく崩壊したと考えられた。
この結果から、それまでＭＩＡ（Ｍｉｓｓｉｎｇ　ｉｎ　Ａｃｔｉｏｎ：戦闘中行方不明）認定にしていた、ボアズ司令部や駐留していた防衛戦力、後方支援部隊に関しては、状況が状況だけに、生存の可能性は限りなくゼロに近く……、ボアズ防衛隊は文字通りの

意味で全滅したと判断しておいた方が無難だろう。

また、ボアズ周辺に展開していた機動艦隊も少なくない数の艦艇が、ボアズ崩壊によって発生したデブリや原因になったであろう核攻撃に巻き込まれており、艦隊司令部が存在していた旗艦も含めて、大きな被害……具体的にいえば、大型デブリに当たって沈んだか、核攻撃で沈められたかの、どちらかのようだった。

こちらで生存が確認されている残存戦力は微かに通信が繋がった六隻……、予備戦力としてボアズ要塞の後方に位置していたヤキン・ドゥーエ所属の分艦隊のみであり、しかも、そのどれもがデブリによって大なり小なりの被害を受けていた。

まぁ、それでも、連合軍の切り札とも呼べる核攻撃を受けても尚、指揮系統が残っているだけ、まだマシな状況だと言えるだろう。

現に今も、分艦隊司令が連合軍の攻撃を凌ぎ切り、核攻撃やボアズ要塞崩壊に巻き込まれなかったＭＳ隊の指揮権を掌握して、連合軍の追撃部隊に組織的な撤退と抵抗を行っている。それに加えて、後方の俺達、ピケットライン構成部隊に撤退支援要請を出しているんだからな。

もしも、指揮系統が存在しなければ、撤退支援要請はもちろん、組織立った撤退どころか、艦艇やＭＳ隊はそれぞれに孤立させられて、各個撃破されたのは間違いないだろう。

仮定想定の話は一先ず置いて、撤退中の分艦隊から撤退支援要請を受けたピケットライン構成部隊……、独立戦隊群は隊長陣による簡単な協議の結果、一部のＭＳ隊を出撃させて、艦隊援護と撤退支援に回る事になり、うちの戦隊もそれに参加することになった。

そして、今、戦隊ＭＳ隊は、先行して偵察していたマクスウェル小隊と複座型に合流後、分艦隊の撤退コースに向う為に更なる前進を続けている。

できるだけ早く辿り着きたい所だが、これから俺達が向う先が、つい先程、新たに誕生したばかりのデブリ帯である以上、デブリの動きに多大な注意が必要な為、どうしても速度を制限されてしまう。

「直にデブリ群に入る！　各小隊、デブリの動きには十分に注意しろよ！」

「「「了解」」」

戦隊ＭＳ隊で使用している通信系から、各々返事が戻ってくる。もっとも、それは全員ではない。

「隊長、私達は？」

「フェスタ、スタンフォードの二人はもう少し進出したら待機して、撤退してきた部隊を独立戦隊群が展開している方向へ誘導してくれ。他には俺達への情報支援と周辺及び後方の警戒だな。……一応、二人が待機する座標近くにはロメロ隊が展開する予定だから、もしも、連合軍の攻撃があったら、そいつらを頼れ」

「わかりました！」

「了解です！」

「うん、それと……、ロメロ隊の連中に顔通しして、ちゃんと愛嬌を振り撒いておけよ？」

今回、ＭＳ隊が選抜されたのは、うちの隊以外に、独立戦隊組”筆頭”であるラブロフ隊とうちの次に結成されたロメロ隊だ。

その二隊の内、ロメロ隊の隊長である、ヴィットリオ・ロメロなんだが……、先程の協議の際に話した感じだと、健全な意味で女好きって感じがしたから、愛嬌なんて振り撒かなくても、顔さえ見せ

ておけば、しっかりとフォローを入れてくれそうな気がするんだが、念の為にという所だ。

……男なんてもんは、ちょっとした女の仕草や愛嬌に、簡単に、コロッと転がされるからなぁ。

「はいっ！」
「ん、いい返事だ、フェスタ。……で、スタンフォードは？」
「……えっ？　わ、私もですか？」
「当然だろう」
「……ど、努力はします」

バイザー越しでもわかる位に、普段は怜悧とも言えるスタンフォードの顔が赤くなったのがわかった。

これに上手く便乗したのが、目敏いと言うか、やはりと言うか、さすがと言うか、デファンだった。

「うひょー、俺もスタンフォードの愛嬌、見てみたいっす！」
「むぅ、あのクールな顔がこう……、はにかんだ顔に？」
「み、見てみたいなぁ」
「てめぇ、なんて事をいいやがるっ、もちろん、俺もだっ！」
「見、見たいなぁ、できれば、こう、二人だけしかいないシチュエーションでっ！」
「頼んだって、お前にゃ、見せてくれないだろ？」
「い、いいだろっ！　少しは夢見たって！」

うわぁ、核攻撃を受けた後の戦闘前だというのに……、この乗りの良さ……。

俺の隊には、馬鹿しかいないのか？

俺の密やかな嘆きを他所に、今度は小隊長連中がやりあっている。

「デファン、スタンフォードをからかうのも程々にしておけって」

「マクスウェル……、一人だけ、良い人ぶって得点を稼ごうとするのは、卑怯っすよ？」

「ば、馬鹿、地味にあの二人の点数を稼いでるのは、リーだって！」

「なっ、なんで、そこで、俺の名前が出てくるんだよっ！」

「し、信じられない。まさか、リー先輩の好みが女だったなんて……」

は、はい、何だか、聞いてはいけないような幾つかの秘事……特に最後のベルディーニの発言あたり……が暴露されたようだが、そろそろ終わりにして、気を引き締めないといけないだろう。

「はいはい、そこまでだ。各小隊長は小隊各機のコンディションを把握しろ」

「うっす」

「りょ、了解」

「わ、わかりました」

二人程、引き攣った声を出していたが、そこは小隊長としての力量を信頼しておこう。

「まったく、戦闘前だというのに……」

「まぁ、これもうちの隊らしいと言うか、先輩が育ててきただけあると言うか……」

「俺、あんな風に育てた覚えは無いんだが？」

「普段の先輩を見ていて、勝手に育ったんですよ」

そのレナの物言いには大いに異議があるが、とりあえずは、皆、軽口を叩けるくらいにはリラックスできていると考えておこう。

で、話題の種になった人物はというと……。

「うぅ、笑顔一つでここまで言われるなんて……」
「いいなぁ、ビアンカ、皆に愛されてる」
「嘘でしょう？　どう考えても、いじめられてるわ」
「違うよ、ビアンカ、皆はビアンカが大好きだから、ああいう反応をするの」
「……ロベルタ、それ、嬉しくない」

……スタンフォード、正直、すまんかった。

約一名の尊い犠牲によって、隊は不必要な緊張もなく、デブリ帯へと突入できたのだった。

80　終末を呼ぶ業火　3

新しく生まれたデブリ帯のデブリは、元はボアズ要塞の土台になった資源衛星のものらしき岩石の断片や欠片、高熱や衝撃にさらされ、形状が歪になってしまった要塞内部の構造体らしきものや機械類らしきもので構成されていた。

しかも、これらのデブリ、四散した際に発生した運動エネルギーは未だに健在なようで、稀に当たってしまう微小デブリでも装甲に傷が付いているようだった。

「小型以下のデブリはある程度仕方がないが、大型、中型には間違ってもぶつかるなよっ！」

「んなヘマしないっすよ！」

「デファン、お前には言ってない」

「ちょっ、扱いひどっ！」

まったく、どんな状況でも口が減らない奴だな。

「ほれ、デファン、さっさと前に出て索敵しろ」

「うぅ……、先輩は、絶対に人使いが荒いっす」

「褒め言葉だな」

「ち、ちくしょーー！　簡単に流されたっす！」

とか口で言いながらも、ＭＳのハンドサインでちゃんと小隊を動かしているのは大したモノだと思う。

「リー、デファン達の援護を」

「了解」
「マクスウェルは後方から宙域全体を出来るだけ把握して警戒にあたれ」
「了解です」

デブリに紛れ込んだ敵から待ち伏せ奇襲を受けるなんて笑えないし、それで二重遭難……とは少し違うが、救援する側がやられてしまったら、本末転倒過ぎて目も当てられない。
そもそも、自分達の命すら守れない力量なら、どこかで無理をして、自分達も死ぬだけであり、他人を助けるなんてことなんて到底不可能だ、って、……まぁ、それはそれとして、今は撤退中の部隊に連絡を取らないとな。

「レナ、撤退中の部隊と連絡は取れるか？」
「デブリが邪魔をしているか、飽和核攻撃で強力な電磁パルスを受けたか、どちらの影響かはわかりませんが、通信ラインが繋がり難くなっていて、現在の座標を捉えるので精一杯です」
「……居場所がわかるだけ、まだ良いか」

うん、マイナスではなく、プラス思考で行こう。

「複座型やエルステッドからの情報は？」
「こちらの通信ラインは安定してますから、ちゃんと情報が入ってます」
「……じゃあ、ラブロフ隊との通信は？」
「こちらは少し繋がりにくい程度で収まってます」

……後方や僚隊との連絡は付くが、現地の情報が手に入りにくいか。

ここはラブロフ隊と役割分担して動く方がいいか。

「今はとにかく、確実に前に進んで、撤退中の部隊との合流を目指す」

「そうですね」

「こちらデファン、前方に敵影なしっす」

「よし、更に前進してくれ。リーもさっきと同じくデファン達の援護だ」

「わかったっす」

「了解しました」

「マクスウェル、変化はないか？」

「ええ、今の所はありません」

「よし、デファン達を前進させた。俺達も進むぞ」

「了解」

レナを伴ない、デファン達が確保した経路を味方部隊を目指して進んで行く。

その途中、別に一つ一つのデブリを意識するなんてことはしていないのだが、何と言うか……このデブリ群に囲まれていると、目の前で崩壊したユニウス・セブンを……、その後の苦い捜索を思い出してしまう。

……辛うじて、人の形を止めた何かが、モニターの片隅に映った時なんて、特にだ。

「……先輩、崩壊したユニウス・セブンを捜索した時に似てますね」

「まぁな。……けど、レナ。今日は敵がいるだけ、ユニウスの時とは違うから、警戒は怠るなよ？」
「そう、ですね」

それに、今回はあの時と違って、救難艇が射出されたとは考えられない上に、もしも救難艇が射出されていたとしても、間違いなく核の飽和攻撃か、ボアズ崩壊に巻き込まれていると想定できるだけに、より一層、暗然たる思いを抱かざるを得ない。

「あっ」
「どうした？」
「撤退中の味方部隊との通信が取れそうです」
「……何とか連絡を取って、どういう状況か調べてくれ」
「了解」

とレナには言ったものの、デブリの合間にビーム光や爆発光らしきものが微かに見えたので、追撃を受けているだろうと予測はついたりする。

そんな予測があるのなら、一部隊の隊長として、先頭を行くデファンをもっと急かさないといけない所なのだろうが……、これ以上、デファンに無理を強いるつもりはない。

大体、デファンも状況を理解しているから、この危険な宙域で、常の宙域と変わらぬペースで動いているのだ。必死の撤退戦を繰り広げている部隊には悪いが、もしも、これ以上の無理を強いてしまえば、間違いなく戦闘前に心身の余裕を失ってしまうのは目に見えている。

……。

いや、戦闘前に余裕がなくなると困る、だなんて建前で誤魔化さずに言えば、部下を死なせたくない、その死に自分が悲しみたくない、共に時を過ごしてきた仲間の死なんて重い責任を背負いたくない、っていう、俺のエゴが今の判断の根本にあるんだろうな。

……。

はぁ……、どうして、こういう幾人もの生死が懸かってる時って、自身の汚い内面が浮かび上がってくるんだろう？

……鬱だ。

ドロドロと鬱屈した思いに沈み込み掛けるが、通信系から響いてきたレナのしっかりとした生気のある声が、そこから救い出してくれた。

「先輩！　通信、何とか繋がりました！　味方部隊は、連合軍ＭＳ部隊による追撃を受けているとの事です！　また、当初、こちらで把握していた六隻に加え、更に二隻のＦＦＭが撤退中です！」

「ッ！」

「……ぁぇ？　先輩、どうかしましたか？」

「いや、何でもない。……それで、殿は？」

「ローラシア級のガモフとセルシウスが比較的損傷の少なかったＭＳを指揮して、最後尾で分艦隊の撤退を支援しています」

なるほど、それが防波堤の役目を果たしているって事か。

だが……。

「……ＭＳのバッテリー残量が厳しいかもな」
「ええ、それを懸念しているとも言ってました」
「わかった。……レナ、うちの隊が敵追撃隊に強襲を仕掛けるとラブロフ隊に伝えてくれ」
「はい！」

さて、俺は他の小隊長連中に伝えるか。

「デファン、マクスウェル、リー、聞いていたな？」
「うっす、強襲っすね」
「ガツンと一撃食らわせましょう！」
「いや、待て、デファン、リー。……隊長、敵ＭＳに強襲を仕掛けるのはいいですが、ガモフやセルシウスの護衛はどうするんです？」
「こちらが強襲を掛ければ、敵の気もこちらに向くだろうという計算もあるし、今まで迎撃していたＭＳ隊やラブロフ隊がやってくれるだろう」
「そんな上手くい「先輩、ラブロフ隊は殿を務める二艦を援護するとのことです」……白服って、凄いですね」

……いや、やることを決めるのは、手を挙げた順だったりすることが多いんだが？

なんて言っても、白服は凄いっていうイメージが強いから、信じてくれないだろうなぁ。

まぁ、ザフト内に蔓延る白服幻想はともかくとして、やるべきことが決まったわけだ。

「レナ、判明している敵の数は？」
「今現在で、三十機以上は確認されてます」
「……多いな」

となればだ……、数のハンデを少しでも無くす為に、リーが言ったように初撃でガツンと喰らわせて、大いに動揺させないと不味いだろうな。

……できれば、アンブッシュ《待伏せ》が一番いいんだけど、状況だけになぁ。

……。

仕方がない、かなり危険だが少数で前に出て見せて、敵の油断を誘った所で全機で攻撃を仕掛けようか。

「……俺が突出して、敵の注意を引く。敵の注意が逸れた所を一気に叩け」
「ちょっ！　な、何言ってるんっすかっ！　先輩は隊長っすよ！？　そんな危ないことは、俺がするべきことっす！」
「馬鹿、この案はな、この機体の目立つ色があればこそ、成立するんだよ」
「でもっ！」
「デファン、お前な、少しは先輩のことを信じろって」

まったく、俺も信用がないもんだなぁ。

「いや、先輩の事は腕も含めて信じてるっすよ！　でも、指揮官が前に出て、どうするんっすか！」
「お前の言ってる事は、実に正論なんだが……、こればかりは俺が

前に出張らんことには、敵の注意が引けんのよ」
「なら、その先輩だと注意を引ける自信というか、根拠は何なんっすか？」
……よ、よりにもよって、なんて事に突っ込みやがる！
注意が引ける根拠を示せ、だと？
……あ、あの厨二ネームを晒せ、だと？
ぐぁっ、こ、心が切り刻まれたように……痛い。
「ほら、別に証拠なんて「……ほ、本当に！　絶対に！　できることなら死ぬまで！　言いたくなかったことなんだが！　……俺、連合軍に付けられた二つ名というか異名があるらしいんだわ」……へ？」
こ、こら、全員、無言になるな！
居た堪れなくなるだろうがっ！
「ま、また、先輩は嘘をついて、そんな法螺には騙されないっすよ？」
「本当に、法螺だと、どれだけ良かったものか……」
「……えっ、……マジっすか？」
「ああ、これがまた、マジめな話でな。外務を担当する偉い人に言われて知ったんだが……、連合軍では、黄狼って呼ばれてるらしい」
……ほ、本当に、胸の内で封印したまま、黙って墓まで持ってい

きたかった。

ああ、皆の無言が……俺の心を抉る。

「と、兎に角、これは隊長の俺が決めたことだから、わかったな！」

「……」

「へ、返事！」

「「「りょ、了解！」」」

……もう嫌。

早い所、自分の部屋に帰って、不貞寝したい気分だ。

皆に知られたくない秘密を暴かれてしまい、心中で涙目になりつつも、外面だけは何とか取り繕い、隊全体に作戦内容を伝える。

「作戦は単純化するぞ？　俺が真正面から突っ込んで暴れている間に、仰角にデファン小隊、俯角にマクスウェル小隊、正面にリー小隊が展開して、俺に集中した敵を、タマネギの皮を剥く様に、順次削り取っていけ。その後は、こちらから特に指示がない時は、各小隊長の指揮、判断に任せる」

「わかったっす」

「了解しました」

「了解です」

「えと……、あの……、先輩……、私は？」

あっ、単機で突っ込むつもりだったから、レナのこと、すっかり忘れてた。

……むぅ、どうするべきか？

……。

レナには無理をさせることになるが、いつもの様に僚機を務めてもらおう。やっぱり、僚機がいるのといないとのでは、様々な局面で大きく違うからな。

「レナはいつも通り、俺の僚機だ。俺の死角に入ろうとする奴を妨害するか、落とすかしてくれ」

「はいっ、任せてください！」

「うん、頼りにしている」

……できる限り、レナに注意が行かないよう、精々、派手に暴れることにしよう。

「よし、仕掛けるぞっ！」

「「「了解！」」」

全隊員からの了解を確認した後、かなり危険な行為だが、メインスラスターの推力を最大にして、一気に先頭に踊り出る。流石に、ＭＳでも脅威となる大きさのデブリが多い事もあってか、機体情報画面の各項目に注意が浮かび上がり、同時に、”衝突警戒”と”減速せよ”との警告表示がメインモニター脇に映し出される。

……が、無視である。

こういう時は、取っ掛かりの勢いが大切なのだ。

背部スラスターより強力な推力を得て、加速されていく機体。

進路及び周辺を映し出すメインモニターには、次々と障害となるデブリが現れる。

大小様々な岩石、破断したＭＳの腕、融解した鉄骨、裂けたＭＡのスラスター部、破裂している大型ボンベ、大穴が開いたＦＭの格納部ユニット、英数字でエリア表記が銘打たれた構造体の一部等々。

それらのデブリ群をＡＭＢＡＣも利用して、最小限の回避行動でパスしながら、交戦地帯を目指す。

「せ、先輩！　は、速過ぎです！」

「……レナ、無理するな。別に遅れても構わないぞ。それはそれで時間差での攻撃になるからな」

「ううぅ、な、何か、悔しいです」

「まっ、その辺は身体の鍛え方の差が出てるんだろうな」

「ま、ますます、悔しく感じるのは、なんでだろう？」

そら、自身の心底から湧き起こる恐怖を押し殺す為にも、あえて軽口風に、余裕があるように聞こえる言い方をしたからな。

っと、通信か？

「……ら、セルシウス！　ガモフ……傷が限界……した！　ガモ……乗組員……員退艦する！　繰り返……ガモフが総員……する！　また、敵ＭＳが……用ランチを狙……険があるっ！　……急、援護をっ！」

……急がんと、不味いな。

「レナ、悪いが先に行くぞ？」

「……うぅ、む、無理はしないで、下さいね？」

「考慮する」

まったく、こんな所でチキンレースというか、度胸試しする破目になるとは思わなかったぞ。

そんなことを考えながら、脚部スラスターの推力もＭＡＸへと持って行く。

……。

こう、絶え間なく行く手を遮るデブリがコワイわぁ。

……ッと！

……。

……。

……見えた！

とりあえず、手前の、ストライクダガー、三機！

……減速してる余裕はないっ！

全ての噴射を切って、ＡＭＢＡＣでもって姿勢を制御して、両足に前方に持って行き……。

「……ッッッァァァアアあああああああああああっ！！！」

真正面にいた、ストライクダガーの胸部に、蹴りをっ、入れるっ！

当然、全推力を、そのストライクダガーに叩きつけたことになるがっ、こちらにも両足の機構で吸収しきれなかった衝撃とＧがががあぁっ！

「ぐぅぁっッッッッっ！」

機体への多大な過負荷を知らせる赤色光が視界を彩る中、軋む身体を激しくシェイクされるのを歯を食いしばって我慢し……、接地面であるストライクダガーを蹴り飛ばす反動を利用して、左方向にいるもう一機にっ！

「ッッアアッッ！！」

左腕のビームクローを展開してっ、腹部に叩きつけるっ！

ビームクローで腹部を打ち抜いたストライクダガーが、”く”の字に折れ千切れつつ爆発するのを、反動と逆噴射でもって後方に下がりながらシールドでやり過ごし、再度、蹴飛ばした最初の一機を確認する。

……ターゲットにしていた残りのもう一機が、弾かれた最初の一機を助けようとしている所だった。

「……ッ！」

心に躊躇が生まれかけるが、意志の力でもって、ビームライフルの照準を合わせ、引き金を……、引く。

……狙いは外れず、俺が撃ったビームは射線上に重なった二機を貫き、爆散させた。

ふぅ……、これで、まずは、三機だ。

荒い息を収めるべく、大きく息を吐いて、周囲の状況を確認すると……、敵味方共に、ＭＳの動きが止っていた。

81　終末を呼ぶ業火　4

ちょっ！　敵はいいけど、何で味方まで動きを止めてんだっ！

急いでザフトで使用されている共通回線を開き、即座に行動させるべく、大声で叱咤する。

「何をボヤっとしているっ！！　ガモフが沈みかけているんだろうがっ！　ガモフの脱出艇とセルシウスを守って、さっさと後退しろっ！　これ以上、損害を広げるなっ！」

「えっ？」

「……は？」

……絶望的な状況が続いて、士気が落ちているのはわかるけど、突発的な出来事に弱すぎやしないか？

逆境でも最後まで諦めず、どんな些細な事をしてでも生き残ろうって思ってたら、もっとこのチャンスを生かして、貪欲に動いているはずだぞ。

血の巡りが悪くなっているらしい味方機……、確認できただけで、十五機程度のジンM型やシグー、それにゲイツに再度、大きな声で呼び掛ける。

「損傷した奴や脱出した味方を守って、さっさと逃げろって言ってるんだっ！　わかったら、早く行動に移れぇぇぇっ！！！」

「はっ、はいっ！」

「了解！」

ようやく俺の言葉の意味が頭の内部に浸透したのか、味方機が次々と後方のセルシウスを目指して離脱していく。

その間も何時かの如く、未だに固まっている敵ＭＳをモノアイの動きで牽制しながら、サブモニターで総員退艦命令が出されたらしいガモフを確認してみる。

「……駄目か」

自然、口から漏れ出た言葉が表す通り、ガモフの艦体は随所に弾痕を穿たれ、また、艦隊後部の推進部付近で断続的な爆発が発生しており、直に沈むのは確定的だった。

……。

一つ、頭を振り、頭の中を切り替える……って、もう、連合軍の連中が動き始めやがった！

うむむ、もう少し、フリーズ状態が続いて欲しかったなぁ。

……でもまぁ、突っ込んで行く途中で気付かれずに済んだし、奇襲が成功しただけでも運がいいか。

んで、敵の正確な数はっと、っと！　とと！　とととととっっ！

もう、撃ってきたところを見ると……、案外、味方よりも立ち直りが早いかもしれない。

とりあえずは複数のストライクダガーからの攻撃を回避する傍ら、横目で戦隊全体でリンクされている状況図を見てみる。そこには、敵が俺を半包囲するように動いている様子が、鮮明に映し出されていた。

どうやら、連合の指揮官は後退するＭＳやセルシウスを追撃するよりも、全力で俺を排除することを選んだようだ。

ううむ、もしも俺が指揮官ならば、一機に拘るよりもここには押さえを残して追撃を仕掛けるところだな。今後のことを考えたら、回復力のないザフトに打撃を与える為にも、少しでも数を減らす方が重要だからって、俺の考えは別にどうでもいいことか。

とにかく、敵を引き付ける役目はちゃんと出来たみたいだし、後は、自分が被弾せず、生き残れば言う事なしだ。

なんて、ちょっと気取って嘯いてみたが……、敵の数、さっき捕捉していたよりも多くないか？

さっきからざっと確認しただけでも、四十機以上いるような気がするんだが？

……これは早い所、うちの連中が展開してくれないと、不味いことになるかも知れんな。

そんな俺の考えを肯定するかのように俺一機には、絶対に過剰としか言いようがない程のビームの雨が四方八方から降り注ぎ始めた。

「うぇっ！」

高鳴る鼓動を友に、必死に感覚を研ぎ澄ませ、機体の制御に集中する。

その凶悪に光輝く雨の、僅か一滴にでも触れてしまえば、還って来れない死出の旅路へ一直線、なんて洒落にならない状況に置かれてしまい、多大な緊張と興奮から身体中の血潮が熱く滾り、押し殺した恐怖と焦燥から全身に冷や汗が流れ出る。

大型或いは中型デブリがあれば、その陰に入って敵の目を晦ませ、時には強引な針路変更や勘に従ってのランダム回避でビームを避け、使えそうな小型のデブリがあれば、それを敵に投げつけて驚かせ、射線を敵ＭＳとの同軸に位置させて撃つのを躊躇させたり、と、とにかく逃げ回り続ける。

傍から見れば情けない姿を晒しているかもしれないが……、当初は隙を見て、ビームライフルでもって牽制も含めて撃ち返していたのだ。

けれども、一発撃ったら、少なくとも十倍以上になってビームが返って来るという洒落にならない状態になったので、レナ達が仕掛けるまで、生き残りを……、回避だけに専念することにしたのだ。

……まぁ、あの場にいた味方の前で大見得を切った手前、逃げ回

るだけだなんて格好悪い気がしないでもないが、得てして現実なんてものは、こんなもんだ。

今も素早く……というよりも、連続するビームの雨に追い立てられて、ＭＳ一機が隠れられるデブリ……それもビームにも耐えられる岩石に身を隠す。

恐怖と興奮から、荒々しくなった呼吸と激しく波打つ鼓動を、まるで後から自分の動きを眺めるような感覚で感じつつ、リンクされている情報を確認する。

示されている情報が正しいならば、既にうちの連中の逆包囲が完成しているようだから、そろそろ動きがあっても良いはずなのだが……、と、俺が考えた瞬間、まるで出待ち……、俺が追い詰められるのを待っていたかの如く、俺を包囲する連合軍ＭＳ隊の更に外側から幾条ものビームが走ると、次々にストライクダガーを貫いていき、瞬く間にその数を減らしていく。

……どうやら、頼りになる連中が攻撃を開始したようだった。

「三機撃破ッ！　先輩っ！　大丈夫ですかっ！」
「デファン小隊、五機撃破っす！」
「マクスウェル小隊、四機撃破しましたっ！」
「リー小隊、五機撃破っ！」

次々に飛び込んで来る、何とも頼りがいのある声に、ようやく口元が綻んだ。

「ああ、レナ、大丈夫だ。……何とか、無傷で逃げ切れたよ」
「……よかった」

そう安堵の吐息と共に呟いたレナだが、まだ合流できたわけでもないので、安堵するには早いところだ、って、それよりも現状を確認しないと……。

「レナ、敵の数は？」
「はいっ！　確認できている数は二十三ですっ！」
「……今の流れなら、何とかなるか」

そう応えながらデブリから飛び出して、予め目星を付けて置いた最寄のストライクダガー目掛けて、機体を突進させる。

そのストライクダガーは外からの突然の攻撃で動揺していたらしく、こちらにビームライフルを向けるも、その反応は時機を失しており……、俺はシールドを持たない右肩部へとビームクローを振り下ろした。

……磁気で成形された凶悪なビーム粒子は、溶けかけたバターを切るように、ストライクダガーの装甲を易々と切り裂き、胸部のバイタルエリアに達した。

すぐさま左腕を引き、同時にストライクダガーのシールドに右足を当てて蹴り飛ばして、反動で自身も離れる。

閃光と爆発。

モニターで敵の撃墜を確認するが、それに酔っていられない。一時も止ることなく、機体各所のバーニアを吹かし、回避機動を取る。

……さっきまでいた場所を追うように、数本のビームが走る。

そのビームが撃たれた方向を確認すれば、二機のストライクダガーがシールドでほぼ全身を隠しながら、ビームライフルを乱射している所だった。それらのビームを回避、一部は左腕のシールドで受け流しながら、こちらもビームライフルで応戦する。

さて、どう対処しようかと思案していたら、唐突に、左側面方向から味方機のビームが走ると、狙い過たず、一機の胴体を貫き、もう一機の右腕を破壊して見せた。

「先輩！　お待たせしました！」

「お～、レナ、今のは助かったわ。……それにしても、このデブリの中、よく見つけられたな」

「いえ、先輩の機体色、目立ちますから、すぐにわかりましたよ？」

等とのたまって、俺に精神的ダメージを与えながらも、しっかりと自機を操縦しているようで、見れば今も、先程、右腕にダメージを与えたストライクダガーの胸部を撃ち抜いた所だった。

……やはりというか、レナの射撃の腕、凄いな。

「先輩？」

「ん？」
「さっきから、ずっとこっちを見ていたような気がするんですが、私、何かしましたか？」
でも、ここは戦場だ、褒めるのは後にしよう。
「いや、別に何もないぞ？　それよりも、仰角から新手が三機接近しているようだ。……俺が囮か勢子を務めるから、隙を見て落としてくれ」
「了解！」
レナの返事に頷いて返し、機体を新手へと向わせる。
「……動きが固いな」
どうやら敵さんは動揺から立ち直りきれていないらしく、まだ、数では優勢のはずなのに逃げ腰になっているみたいだ。
……うん、それならそれで、大いに付け込むべきだな。
そう判断して、三機の中から一番動きが鈍い一機を狙い、圧力を掛ける為にも一息に加速して、接近を図る。当然と言うべきか、向こうも編隊を組んだまま、ビームを断続的に撃ってくるが、左腕のシールドを前面にかざし、ビームライフルで反撃しながら、機体をロールさせて回避してみせる。
こちらが大加速で突っ込んでくるというプレッシャーに負けたのか、編隊の一機が俄かに隊形を崩し……、その機体の頭部に援護を担当しているレナの狙撃が入った。

このヘッドショット、普通の人間なら間違いなく即死判定だよなぁ、なんて感慨を抱いてしまうが、残念なことに、ＭＳではメインモニターやセンサー系がやられただけだ。

それでも、攻撃を受けた以上は平静でいられるはずもなく、その機体は更なる隙を見せてしまい、レナが放つビームがシールドでカバーし切れない箇所へと次々に吸い込まれていく。

右足、右手、左足、と連続して貫かれていき……、機体制御が効かなくなった機体は、シールドを維持できず、大きな隙が生まれ……、止めに胸部を貫かれて、爆散する。

「……俺、絶対に、レナだけは敵にしないようにしよう」

俺が接近しているのにも関わらず、目前で残った二機が後方のレナを警戒するようにシールドの向きを調整していた事実を見るに、あの二機も、俺と同様の結論に達したということだろう。

「先輩……、今、何か、言いましたか？」
「いや、レナが味方で心強いって言いたいの」
「むぅ、違うことを言っていたような気がするんですが？」
「いやいや、レナ君や、ちょっと呆けるのは早すぎないかい？」
「……私、絶対に、先輩よりも早く呆けない自信があります」
「むぐぅ、い、言ってくれるじゃないの」

……どうやら、俺も戦闘中に軽口を叩けるくらいには、心身が回復したようだ。

やはり、相棒がいるのといないのとでは、精神的な余裕が違うということだろう。

そんな思いを胸に、残った二機の中、前に出ていた一機へとビームクローを突き立てるべく交錯軌道に入る……寸前に、頭部機関砲の牽制を受けてしまい、進路の変更を余儀なくされてしまった。

なので、レナに注意を向けている後方のもう一機を標的とする為に、機体と身体に負担を強いつつ、軌道を修正し、擦れ違い様にその両足を刈り取る。

そして、メインスラスターをオフにするのと同時にＡＭＢＡＣでもって機体を回転させて、遠ざかりながら両足を失ったストライクダガーへと満遍なく頭部機関砲を撃ち込んだ。

そのストライクダガーの背部スラスターとプロペラントタンクが爆発するのを確認し、突進を回避したもう一機をビームライフルで狙う。

「一機撃破しました！」

……が、既に、俺のフォローに入っていたレナが撃ち落していたりする。

ここまで腕を魅せつけられると、レナに賞賛の雨を降らせたくなるが、今はとにかく、忙し過ぎて疎かになってしまった隊の現状把握だ。

「レナ、警戒を頼む」

「了解です」

情報リンクを確認しながら、各小隊に呼び掛ける。

「こちらラインブルグだ、各小隊、現状を報告しろ」

「こちら、リーです。今、マクスウェル小隊、と協同で、敵にあた

って、います」
「マクスウェル、リー小隊と、協同中」
「こちらデファン、撃ち合ってた敵が退却を始めたみたいっす」
……敵が退却するね。
「デファン、偽装退却の可能性もあるから、追撃の必要はなしだ。その敵の動きと周囲を十分に警戒して、こちらに合流しろ」
「了解っす」
「リー、マクスウェル、お前達が相手をしている連中は逃げ出しそうな雰囲気か？」
「俺にはちょっと弱腰に感じます。……お前はどうだ、マクスウェル？」
「……積極的に仕掛けてこない事を、弱腰といえば、弱腰に感じますね」
積極的に仕掛けてこない？
……案外、連合軍に増援が来るか、こちらを誘引するための餌……、というのは流石に考え過ぎか。
だが、増援の可能性は十分にあるから、ここは”もしも”に備えて、一度、合流して、戦力を集中させるべきだな。
「よし、わかった。俺達もそちらに合流するつもりだが、その前に殲滅するか、敵が逃げるかしたら、連絡を入れてくれ」
「了解です」
「了解」
リンクの情報では、セルシウスや生き残りのＭＳ、ガモフの脱出

ランチはラブロフ隊に合流して、後方に撤退できているようだし…、もう、無理に戦闘を継続したり、拡大させる必要はないだろう。

それに何となくなのだが、このまま調子に乗って追撃なんてしていたら、逆に、盛大に噛み付かれて、間違いなく酷い目に会うかもしれないと、戦闘時には非常に頼りになる、俺の勘が囁くのだ。

何故、その感覚が”噛み付かれる”なんてものなのかはわからないが、とにかく、必要以上の追撃は控えた方がいいのは確かだ。

「先輩、デファン小隊が合流します」

「あいよ、なら、こ「こちらマクスウェル！　敵が引きます！」…了解、なら、こちらへ合流しろ。訓練通り、相手の動きに息を合わせて、相互支援体制を維持ながら、上手く退け。このまま撤退する」

「了解！」

「デファン、お前達はマクスウェル達が来るまで、周辺の警戒だ」

「うっす！」

少し息を吐き、張り詰めていた神経を一度だけ弛緩させ、再度、張り直す。

疲れ切った脳と身体が糖分を要求してくるが、後少し、我慢だ。

……。

今日の戦闘でボアズが崩壊した今、想定よりも大幅に早く、プラントを守る防衛ラインが大きく一つ削り取られたことになる。今頃、プラントでは、ユウキ達が防衛体制の見直しを大急ぎで進めている

ことだろう。

……まぁ、どちらにしろ、ここまで連合軍に詰められた以上は、次の一戦でプラントの命運が決まるといっても過言ではない。

連合軍はコロニーにも核を撃ち込むつもりなんだろうか？

ザラ議長はいつ何時、ジェネシスを発射するんだろうか？

カナーバ議員の外交交渉は上手くいっているんだろうか？

相互確証破壊に基づく冷戦構造は、成立するんだろうか？

疑問や不安、それに若干の期待を胸の内でたゆたわせながら、リーやマクスウェル達と合流して、各小隊の被害状況を改めて確認した後、全員に戦隊へと帰還すること告げ、順次、退かせていく。

それを最後方で確認しながら、俺は自身が抱く最大の不安……、俺達は本当に、プラントを守りきる事ができるんだろうか、という思いを持て余す。

「先輩、私達の番ですが？」

「ん、ああ、退くか」

「はい」

いや、弱気は禁物だ、何とかなる、否、何とかするんだ、と心に刻み込む。

……だが、それでも、尚、漠然とした不安が頭をもたげて来るのだ。

それを押し殺す為にも、守りきる為にも全力を尽くすしかない……、ないんだと、エルステッドに帰還するまでの間、ずっと、俺は心中で自身に言い聞かせ続けた。

82　決戦前の小休止　1

ボアズ要塞を巡る攻防は、連合軍の切り札とも言える核攻撃によって、ザフトのボアズ駐留艦隊や防衛隊等が、文字そのままの意味で全滅してしまい、連合軍の勝利に終わった。

だが、ボアズ要塞が一日の戦闘で果たした役割は大きく、攻撃に参加した連合軍艦隊の艦艇の二割、機動戦力の六割を撃破して多大な出血を強いたし、核攻撃を受けて崩壊した後も、俺達が撤退支援戦闘を行った、あのデブリ帯を生み出している。

特に新しいデブリ帯は、ボアズ要塞があった座標位置から周辺宙域へと大きく広がった為、大所帯の連合軍がプラントに侵攻できる航路を塞ぎ、侵入を妨げているようだ。

もしも、このデブリ帯を越えて、プラントへの侵攻を図ったとしても、通り抜ける為にはデブリが少ない回廊のような箇所を選ぶ必要があり、連合軍の優越点である数の利を生かせない。

また、それらのデブリを排除しようにも、元が資源衛星を流用した要塞だっただけに、デブリには頑強な岩石が多くて、艦砲もそう頼りにならないし、デブリを簡単に排除できそうな強力な核だって、恐らくは貴重であろうニュートロンジャマーキャンセラーがなければ使えないはずだから、そう簡単に使うなんてことは流石に考えられない。

いや、そもそも、デブリ排除の動きがあれば、こちらだって、黙ってはいない。

独立戦隊のような小部隊を派遣して、作業を妨害するハラスメント攻撃を仕掛けている間に、本国艦隊でもヤキン・ドゥーエの艦隊でもいいから、連合軍艦隊の側面に回り込ませて、攻撃を仕掛けることだってできるのだ。

……でもまぁ、こんな素人考えなんて、向こうだって折込済みのはずだ。

現に、連合軍艦隊はボアズ戦で消耗した戦力を回復させるべく、Ｌ１方面へと一旦下がって、月からの補充を行っているみたいだからな。

本当に、嫌味に感じる位に、王道の如き堅実な攻めだとしか、言いようがない。

一方、プラントを防衛するザフトだが、ボアズ要塞が陥落した影響で手薄になった地球方面をカバーする為、プラントコロニー群一旧ボアズ要塞間の宙域で”飛び石”を警戒していた本国艦隊が展開したまま待機して、不測の事態に備えている。

また、ヤキン・ドゥーエ要塞やプラントコロニー群では、プラントへ核ミサイルが撃ち込まれる危険性を考慮し、少しでも迎撃対応できるように、去年のヤキン・ドゥーエ会戦で活躍した要塞砲台群や迎撃ランチ群が稼動し始めている。

特にヤキン・ドゥーエ要塞に関しては、先の要塞砲台群に加えて、要塞表面で機動砲台となる砲戦ＭＳ隊もあるし、防衛の主力となる要塞防衛ＭＳ隊も全機がゲイツへの機種転換を終えているから、ボアズ要塞以上に強力な防衛戦力を保有していると言えるだろう。

そんなヤキン・ドゥーエ要塞前面にはゲイツへの機種転換が所属ＭＳの三分の一まで進んだ駐留艦隊が、月方面に一個、Ｌ１方面に一個と展開しており、相互支援ができるように態勢の構築が急がれているそうだ。

そして、防衛の切り札となるジェネシスなのだが……、隠蔽の為にミラージュコロイドによって隠されているから、どこにあるのか知らなかったりする。

本当にどこにあるのかはわからないんだよなぁ、とか言いつつも、ヤキン・ドゥーエ要塞近く……月と地球から隠れる位置に、”ちょっとだけ”不自然な航行禁止エリアがあるから、大体の予想はついているけどね。

げふんげふん……、これがボアズ戦後の宇宙の状況だ。

◇　◇　◇

９月２４日。

戦隊はボアズからの撤退に成功した部隊と共に、アプリリウス軍事衛星港に帰港した。ここの主とも呼べる存在、本国艦隊が地球方面に展開して、万が一に備えている為か、港内は閑散とした感がある。

寂しくなった港内に入りエルステッド、ハンゼンの両艦を接舷さ

せ、前もって宇宙機動艦隊司令部から通達されていた通り、乗組員に半日ずつの半舷休暇を告げて、ほっとしたのも束の間、顔見知りの黒服さん数人が搭乗口近くで”おいでおいで”していた。

本当ならば、”ほいほい”付いていくなんてことはしたくないんだが、ザラ議長のお呼びならば仕方がない為、後のことはゴートン艦長にお任せして、政庁のあるアプリリウス・ワンへと向うことになった。

その途上、現状について少しでも知る為に黒服さんのリーダーと話をしたのだが……、プラント社会は未曾有の混乱状態にあるようだ。

……然もあらん。

昨日まで盛んに報道されていたプラント有利な戦況が、ボアズを呑み込んだ核の光を多数の市民に目撃される事によって、大嘘だとばれたのだ。

いやはや、如何に、市民の皆様がマスコミを通じて最高評議会やザフトから流されていた情報を疑いもせず、鵜呑みにしていたのかがわかる話だと言えるだろうし、逆を言えば、社会において、メディア・リテラシーってものが非常に大切なものだとよくわかる、反面教師的な話でもあるだろうな。

まぁ、それはともかくとして、現状、情報を発信しているマスコミのどれもが、”大本営発表”を繰り返してきた自分達と戦争を指導する最高評議会から、プラント市民の間で俄かに生じた不安と不審の念を逸らす為だろう、連合軍によるボアズ要塞への核攻撃を、”地球連合による再度の非道を許すな！”とか、”報復の鉄槌を！”とか、”血のバレンタインを忘れるな！”とか、とにかく盛んに

連合やナチュラルへの敵愾心を煽り立てている。

……追い詰められている現状や自分達が為した非道を知っていると、失笑モノの茶番にしか見えないけどな。

また、この虚偽報道に関する一連の不祥事への市民の不審を少しでも晴らす為だろう、ザフトの幹部で広報局の広報部長も兼任するフク某というお偉いさんが、マスコミの偏向報道を生み出した監督不行届きなんて理由で、最高評議会から解任された上、保安局に拘束されている。

何という、トカゲの尻尾切り或いはスケープゴート……に見せかけた権力闘争と思ったのは、ザフトの内部事情を詳しく知っている一握りだけだろう。

どういうことかと言うと……。

実は、ここ二年の間に、ザフト広報局はクライン派の影響力が非常に強くなっていたというか、クライン派の息がかかっていたというか、とにかく、クライン派の巣窟と言える部署になっていたんだよっ！

な、なんだってぇーー！！

という定番の冗談というか、黒服さんからこの逮捕劇の裏事情を聞かされた際の俺の反応は置いておいて……、クライン派の動向を

探っていた保安局の地道な調査で、クライン派の宣伝……ラクス・クライン主演の地下放送を作成し、プラント内で張り切って流していたのが、件の幹部だった事が判明したらしいのだ。

……。

しかし、広報局にクライン派の影響力が波及したのって、やっぱり、プラントの歌姫と呼ばれているラクス・クラインがよく出入りしていた影響なんだろうか？

……いや、流石にこれは、更に綿密な調査をしない事にはわからない事だし、予断は駄目だな。

んんっ、とにかく、保安局の調査報告書によると、その隠れクライン派とも呼べるフク某が広報局と懇意にしているツイン・ストリーム社を使って、現在の戦況を表に出そうとしたユウキ達や一部マスコミの行動を妨害したり、マスコミ業界全体に圧力を掛けたりして、事実を事実として伝えさせず、ザフト有利の偏向報道を続けさせる一方で、クライン派による地下放送では、表側の報道とは相反する事実に基づいた報道を流していたそうだ。

その両者を比較したプラント市民は、当然の如く、耳さわり良く、自らの優越感を刺激する表側の報道を真実だと考えるようになるのが普通の反応だと言えるだろう。

では、それがある日突然ひっくり返され、自分達が見聞きしていたものが虚構に過ぎず、現実と異なっていたら、どうなるだろうか？

プラント市民は、偽の情報に踊らされていた事実から自分達の自尊心を守る為にも、危険を冒してでも真実を伝えていた”正義”の

クライン派を信頼するようになり、支持するようになるはずだ。
逆を言えば、マスコミが流す表側の情報を統括してきたザフト広報局は槍玉に挙げられ、当然、その親玉であり、クライン派が排除されている現在の最高評議会は”悪玉”になる為、その権威も失墜するということだ。

そして、クライン派はプラント市民に”望まれて”、最高評議会に復権を果たす。

これがフク某が描いていたクライン派復権のシナリオだそうだ。

オペレーション・スピリットブレイク以来、不利になった戦況を市民に隠してきた最高評議会の失点を突き、また、群集の心理を上手く利用した、本当に、巧妙で恐ろしい手口だと思わざるを得ない。

もっとも、プラントを取り巻く現状を考えると、決して、褒められた事じゃないがな。

まったく……、権力闘争なんてことはっ、もっと余裕がある時にっ、好き放題っ、好き勝手やりやがれってんだっ、馬鹿野郎共めっ！

……なんて、いくら俺が怒り心頭で世界に対して怒鳴ったとしても、権力闘争というか派閥争いはなくならないだろうし、それこそ、この世の中にたった独りだけ生きている状況にでもならない限り、権力や主導権を巡る争いを無くすのは不可能だろう。

相も変わらず、儘ならない現実を前にして、盛大に気分を落しながら、政庁に到着した車から降り立った。

◇　◇　◇

「どうも、二ヶ月ぶりです。いや、今日もまた……、一段と男前な凛々しいお顔のようですね、ザラ議長」
「ふんっ、それだけ私生活が充実しているということだ、若造」
「へぇ、そんな風になるまで、毎晩、奥様に搾り取られているわりには、元気そうですね」
「ふっ、何とでも言え。だが……、今の貴様が見せているような男の嫉妬は見苦しいぞ？」
「いえ、嫉妬する以前に、干乾びる恐怖に足腰が砕けますよ」

いつもの巨乳な秘書様に国防委員長室へと案内された俺は、毎回の恒例の如く、挨拶を兼ねた言葉のやり取りをザラ議長と行う。

そんな俺達を、議長の背後に控えたユウキは呆れた顔で、ソファに座るカナーバ議員は微苦笑で、その向かいに座った、カナーバ議員と同じザフト文官の青服を着た新顔……短い銀髪の美人さんは眉間に皺を寄せ、どこか怒りを抑え込んだ様子で、見ていた。

その様子に気がついたらしいザラ議長は、少しばつの悪そうな顔をして咳払いを一つすると、話を真面目な内容に切り替えてきた。

「地球軌道上での会戦やボアズからの撤退支援、それに戦術教導任

務における、貴様の活躍は聞いている」
「ありがとうございます。ですが、それは私だけの力ではなく、頼りになる部下がいてこそ為せたことです」
「そうか。……ならば、戦隊員には、何らかの報奨を用意しておこう」
「……感謝します」

俺の心の篭った言葉に、議長は口元を軽く緩めて頷いて見せた後、再び、眼光を鋭くする。

「それで、貴様がこれまでの戦闘で体感した連合軍はどうだった？」
「戦争初期に数に劣る我々が勝利することで与えた精神的な衝撃……、敗北感から立ち直りつつあるように感じました」
「連合軍は立ち直りつつあるか」
「はい。長らく、ザフトのアドバンテージであったＭＳにおいて、対抗できるだけの装備……、ＭＳを開発、完成させた上に、量産機による実戦部隊運用も成し遂げ、また、地球でザフトに対して勝利を重ねて、カーペンタリアへと追い詰めた事から、自信を取り戻し始めているのでしょう」

一つ頷いたザラ議長は再び口を開くと、具体的な内容へと話を振ってきた。

「では、連合軍の量産ＭＳはどの程度の性能だ？」
「後発で開発されただけあって、ジンやシグー、ジンの改修機であるＭ型の性能を、武装面や防護面で凌駕しており、今挙げた三機種では、かなり厳しい戦闘を強いられるはずです」
「ゲイツならば？」
「機体性能ではゲイツが有利でしょうが、新型機となって操縦システムが変更されることもあり、ベテランでも機種転換訓練なしでは

十全に能力を発揮できませんし、新兵なら尚更です。熟練がなっていない現状では、物量で勝る連合軍に数で掛かられると不利は否めないでしょう」

「……そうか」

と言って、ザラ議長は目を閉ざして両手を組むと、いつものようにゲンドウポーズへと移行した。

議長の次の言葉を待つ間、その様子を執務机の前に立ったまま、のんびり眺めていると……。

「貴様っ！　精強なるザフトに籍を置きながら、そのような軟弱な物言いっ！　臆病風に吹かれたかっ！」

……突然、後から罵声を浴びせられた。

何事とばかりに驚いて振り返ると、立ち上がった銀髪の美人さんが顔を紅潮させて、俺を睨みつけていた。確かに、ザフトでは面罵されるであろうことは言ったが、初対面の者にいきなり咆えて掛かられるのは頂けない。

だから……。

はっ、あんたこそ何言ってんだよ！　ここまで追い詰められて、今更、精神論なんていらんよっ！

……と、反論しようとしたのだ。

だが、この女性が何処の何者なのかを知らないこともあり、大人な対応として口には出さず、代わりに助けを求めてカナーバ議員を見たのだが……、本当に申し訳なさそうな顔をして、首を横に振っていた。

凹(おう)！　そりゃぁないぜぇぃ、とっつぁ……じゃなくて、カナーバ議員！

仕方なく、プラント内の最高権力者であるザラ議長にお願いする。

「え、えーと、議長、この方は？」

「む……、彼女は最高評議会議員で、国防委員のエザリア・ジュールだ」

「そ、そうですか」

最高評議会議員で国防委員っていうことは、事実上、ザフトの上に立つ人間なんだろうが……、今の状況になっても、あんな精神論を振りかざしていて、大丈夫なのだろうか？

「き、貴様ぁーーー！　何だっ！　その人をおちょくったような腑抜けた顔はぁぁぁーーーっ！！！」

ちょっ、おまっっ！

確かに不安が表に出てしまったかもしれないが、人の顔にまでイチャモンつけんなよっ！

流石に、ここはガツンと言ってやろうと口を開いたら、ザラ議長

が先に注意を促していた。

「エザリア、言葉を慎め」

「し、しかしっ！　パッ……ザラ議長っ！」

「エザリア・ジュール。……私は言葉を慎めと言ったが？」

「くっ！」

議長に制止されても、ギリギリと、歯を食いしばる音が聞こえてきそうな位の震えが見て取れて、この人、オッカナイなぁ、できるだけ関わり合いたくないなぁ、って感想を抱いても良いと思うんだ。

第三者同士の喧嘩の最中、無関係なのに唐突に横っ面を引っ叩かれた気分でユウキを見やると……、そこには同情の視線があった。

同情とはつまり、俺の今の気持ちを汲めるということであり……、ユウキもこういった経験をしてきたということだろう。

こちらからも、お前も大変なんだな、との労わりを込めた視線を送ってやると、ユウキは急に目頭を押さえて俯いてしまった。

……本当に、ユウキって苦労してるんだなぁ、と思った一瞬だった。

83　決戦前の小休止　2

憤懣が収まらないのか、まだ俺を睨みつけてくるジュール議員をできるだけ意識しないように流しつつ、俺は議長に問い掛ける。

「議長、今日の用件は、さっき聞いたことで終わりですか？」

「無論、それもあったが、他にも貴様に聞いてみたい事があってな」

……何だろうか？

「ここに来る途中、迎えの者が話したと思うが、今のプラントは、ザフトの劣勢……、不利な戦況を隠していた最高評議会への不審から、不穏な……、いや、はっきりと言えば、混乱している状況だ」

「ええ、そのようですね。ここまで来る車内から見ただけでも、市民が集って立ち話をしている姿を何度か見ましたし、乗ってきた政庁（黒塗り）の車を見る市民の目も動揺しているように感じ取れました」

「うむ。それでだが……」

「……」

「この状況、貴様ならば、どのように収めれば良いと考える？」

……むぅ。

「議長。……義勇兵とはいえ白服を着て軍務に携わる以上、軍事や戦略に関わることならばともかく、純粋な政治には口出ししない方がいいと考えているんですが？」

前世の教育か、住んでいた国の影響なのかもしれないが、シビリアン・コントロールは重要だと思うんだよ。

っていうか、今の軍事組織ザフトなんて、義勇兵組織と政党組織ザフトの下部組織が混ざっている為、その辺が曖昧になっているから困る。

いや、プラント最高評議会に所属している国防委員会が人事権や命令権を持つってのはいいんだが、その最高評議会が事実上のザフトの一党独裁だし、実働部隊である軍事組織ザフトを仕切る面々も政党組織ザフトの面子であったり、また、その逆にもなることもあるから、文民統制（？）になってるんだよなぁ。

ん？

……考えてみれば、プラントは民主主義国家じゃなくて、一党独裁国家だったな、忘れてた。

でも、この一党独裁も含めて、プラントは政治と軍事制度をもう少し、上手く考えた方がいいとは思う。

まぁ、さっきの挙げたシビリアン・コントロールにしたって、上に立つ文民が狂ったらおしまいな仕組みだから、欠点がないとは言い切れない制度……、つか、欠点の無い制度なんてないだろうな、きっと。

って感じで、つらつらと脳内で自身の考えをまとめていると、不敵に笑った議長が再び口を開いた。

「そう考えることができる貴様だからこそ、考えを聞きたい」

「へ？」
「私は、権力におもねることのない意見が欲しいのだ」
「……それはあまりにも、俺を買い被りのような気がしますが？」
「ふん、この私と、後先考えずに、殴り合ってでも、自身の意見を主張した者が、何を言うか」
「うぐっ」

……い、いや、それは若気の至りでもあるような気がしないでもないのです。

だから、カナーバ議員、そんなに驚かないで下さいよ。

ユウキも、ああ、そんなこともあったなぁ、なんて頷かない。

それと、ジュール議員……今すぐお前を殺す、って形相で目を血走らせないで下さい。

つか、俺、そこまでジュール議員の気に触るような事、言ったかな？

……なんて現実逃避はそこそこにしておいて、話を進めよう。

「え、ええっと、今のプラント社会の不安や混乱を収める方法ですよね？」
「うむ、貴様が思う所を言え」

う、うーん、思う所を言えか……。

……。

やっぱり、一番、単純明快な解決方法はこれだよなぁ。

「ザラ議長が、プラント市民に対して、最高評議会の不始末や広報局での一連の騒動及びザフトの敗勢を謝罪し、責任を取る形で、議長職から身を退く事が一番手っ取り早いでしょうね」

言い切った後、不測の事態に備えて、身体の力を適度に抜いておく。

「きっ！　きしゃまぁぁぁぁあぁ嗚呼ぁーーーーーーーー！！！！」

……はい、予想通り、ジュール議員が本当に跳び掛かってきそうな勢いで獅子咆えしたので、ザラ議長に目配せする。

「……エザリア」

「ぱ、パトリックっ！　このようなことを言われて、黙ってなどっ！」

「私が忌憚なき意見を聞きたいと言ったのだ」

「くっ！」

あーー、もう、ほんの数分で、どれだけジュール議員の恨みを買ったのか、不安になるな。

「んんっ。……議長、話を続けていいですか？」

「ああ、続けたまえ」

「では……、この際、クライン派がプラントに対して行ってきた手

酷い裏切り……、特に、オペレーション・スピリットブレイクの情報漏洩やニュートロンジャマーキャンセラーの開発から漏洩までの経緯、防衛の主力となったはずの新型機や新型艦の強奪あたりを軸に、保安局の公式捜査資料と共に全て発表してしまいましょう。これを基にして、最高評議会は決して市民を蔑ろにしていたわけではなく、プラントの独立を勝ち取る為、プラントを守る為、市民生活の安寧を維持する為に、懸命に努力してきたのだということを堂々と主張します。クライン派と最高評議会、両者の主張を並べて見せれば、どちらの言い分に正当性があるのか、どちらが筋道を通しているのか、理性的であるならばわかりますので、一定の鎮静効果があると思います。……ですが」

「ですが？」

「はい。時に人は感情に引き摺られる生き物ですから……、それでも尚、クライン派を支持する者もいるはずです。これの対策として、俺はこういう手段を余り使いたくはないのですが……、アラスカ戦やボアズ戦で、戦死した者の遺族の声を公共の場に出しましょう」

「こちらも感情に訴えるというわけだな？」

「ええ。たとえ、クライン派が”正義”であったとしても、一連の情報漏洩でプラントが不利になった事は事実であることに変わりはなく、また、それによって、大量の犠牲者が出たことは間違いありませんからね。これで、クライン派を味方する声は抑え込めるはずです」

もっとも、一時的な鎮静化に過ぎず、不満は必ずどこかに残るだろうがな。

……。

とはいえ、いくら今の混乱した社会状況でも、少し見た限りだけど、今日明日に体制が崩壊するなんて所までは行っていないようだ

から、市民の不満の矢面に立っている皆さんには申し訳ないが、もう少し時間を稼いでおいてもらって、今は、目前にある危機への対応に集中するべきだと思う。

「しかしながら、今、俺が話したことは、今現在、すぐ傍にある危機を……、直近に起きる連合軍の侵攻を退け、プラントの防衛に成功しなければ、無駄になる話です」

「……だろうな」

なので、話を展開させる為にも、また、俺が聞きたいことでもあるし、ここは一つ……。

「議長、カナーバ議員への質問をよろしいでしょうか？」

「……カナーバ」

「私の方は、ザラ議長がよろしいと仰るのならば、構いません」

議長が頷いたので、カナーバ議員も頷いてくれた。

「では、カナーバ議員。地球連合との講和交渉は、上手くいきそうですか？」

「私の感触としては、後一押し、といった所でしょう」

「……ということは、地球連合内にも講和しても良いと考える勢力があるということですね？」

「ええ、地球連合と言っても一枚岩ではないわ。以前より続く構成国同士の軋轢もありますし、それを取り除いて、派閥だけで考えたとしても、戦争継続派や対プラント強硬派とは別に、ザフトを地球から追い出したのだから、これ以上、戦争で資源を浪費するのはやめて、復興や再建に充てようと考える勢力や、戦闘での被害も馬鹿にならないから、そろそろ話し合いで蹴りを付けるべきだと考える勢力もあります」

と、なれば……。

「その地球再建派や対プラント穏健派の立場を、地球連合内で強化する為には……、やはり？」

「はい、連合軍に大打撃を与えて、連合構成国の世論にも厭戦気分を盛り上げる必要がありますね」

「しかし、プラントは今までの所業から、地球市民の大きな恨みを買っているはずです。……そう上手くいくものなのですか？」

「確かに難しいかもしれませんが……、全ての市民が復讐を叫ぶ余裕を持つわけではありません」

……地球では、今日一日を生きて行くだけで精一杯な人も多いって事か。

「ですので、今現在の連合内主流派である対プラント強硬派を崩す為にも、彼らの力の源泉となり、主張の拠り所になる武力……地球連合軍に打撃を与える必要があります。それが成れば、間違いなく、連合内の勢力図は変わります。加えて、ザラ議長が推す相互確証破壊が成立すれば、独立を確保する以上の条件で、十分に講和は可能……、いえ、勝ち取って見せます」

真剣な表情で言い切ったカナーバ議員には、確かに国政の中枢にいるだけの事があると、納得させるだけの力と覚悟があった。

……。

だが、講和が成ったとしても、地球市民のプラント……、コーディネイターへの恨みは残り続けるだろうな。

……。

いや、今、そのことを考えるのはやめておこう。

……。

後は、自分達が見下すナチュラル相手に、決定的な勝利を得られなかったプラント市民を、どうなだめるかということになるが……。

「地球連合との講和で生まれると予測されるプラント市民の不満も、ザラ議長の引責辞任で、ある程度は逸らせると思うんですが、どうでしょう？」

「ええ、逸らせる事ができると思います」

……。

「議長。……やはり、今現在の混乱と、今後の講和によって、間違いなく発生するプラント社会の動揺を落ち着かせる為には、連合軍との停戦或いは地球連合との講和後、ザラ議長がこの戦争で起きたことの全ての責を背負う形で、全ての公職から退くのが妥当だと、俺は考えます」

「……そうか」

……そう応えたザラ議長が、何となく、満足そうに見えたのは気のせいだろうか？

「貴様の意見、参考になった。……礼を言う」

「いえ、お役に立てたなら、幸いですよ」

で、後一つ、俺が言いたいことは……。

「……議長、ジュール議員を何とか抑えてください怖いです」
「ふっ、貴様にも怖いものがあるのだな」
「い、いや、笑い事じゃないですって、今にも、こう、包丁を持ち出しそうなっ！」

まったく、こんなところで刺されるなんて、冗談じゃないぞ！

ということで、ジュール議員が落ち着くまで、しばしの冷却時間を設けた後、最初の議長とのやり取りは一種の形式美である事と、勇ましいことは結構だが、戦力の見極めは冷静に行う必要があるという事を、何とか納得していただくことに成功したので、引き揚げようと思ったのだが……。

「議長、クルーゼ隊長が参られました」
「わかった、通しなさい」
「はい」

というやり取りが議長とバカな男達に寛容な秘書さんの間であり、帰る機会を逸してしまった。

で、仕方なく、執務机の前に立ったまま、ラウが来るのを待っていると……。

「ラウ・ル・クルーゼ、参りました」

との言葉と共に、ラウが部屋に入ってきた。

そのラウは俺の姿を認めると、サングラス上部に見える眉根を片方だけ軽く上げ、口元を微かに弛めて見せたが、場所が場所だけに、それ以上の反応は見せず、俺の隣に立った。

「うむ、足つき及びクライン派追討任務ご苦労だったな」

「いえ、なんら結果が出せなかった事、面目次第もございません」

「いや、構わん。貴様をこの任務に当てたのは、奴等の行動を制限させる為でもあったからな」

……なるほど、ラウはＬ３に逃げた蠢動する連中（クライン一派）を封じ込めの為の蓋だったってわけか。

しかしながら、今の追い詰められた状況じゃ、クルーゼ隊のような強力なカードを遊ばせておくわけにはいかないって所かな？

「だが、今の状況において、対ＭＳ戦等の経験が豊富な貴様の隊に、足つきやクライン派の相手をさせておくには余りにも勿体無い。よって、貴様の隊に与えていた追討任務を解き、来るヤキン・ドゥーエ宙域の防衛戦において、遊撃戦力の要となってもらう」

「では、足つきやクライン派への対策はよろしいのですか？」

「奴等がどう言葉で取り繕おうが、所詮は何の正当性もない一勢力に過ぎん。……いや、確かに強力な戦力を持ち、政治的にも厄介な、忌々しい存在であることは認めるが、それよりも今は、正面に存在する強大な敵に対処する方が重要なのだ」

「……出過ぎたことを言いました」

「ふむ、気にするな。……それよりも貴様には任せたい事がある」

「何でしょうか？」
「連合軍の核攻撃を迎撃する、中核になる新型機を任せたい」
ほうほう、新型機とな？
「ユウキ君、資料を」
「はっ」
ラウと、何故か、ラウの隣に立ったままの俺にも渡される資料。
……何故に？
「若造、貴様にも渡すのは、話の最中でもクルーゼの資料を覗き込みそうだからだ」
「ちょっ……」
な、なんという、議長の先読みっ！
あまりの評価に口元が弛み、涙も出てこないまま、嬉々として、資料に目を通す。
ほうほう、型番は【ＺＧＭＦ－Ｘ１３Ａ】で、名前はプロヴィデンスか。
……。
ふーん、これもニュートロンジャマーキャンセラー搭載の核動力機で……、全周囲モニターとマルチロックオンシステムを採用？
へぇ、全周囲モニターって、あるんだなぁ。

……ん？

何か、ここだけ……？

『対ＭＳ戦を主眼に置き、近接格闘をメインに考えられてきた本機が、クラインの小娘が引き起こした想定外の事態で、不眠不休の開発環境を知らない、お上から無理難題を吹っ掛けられた結果、我々も予想外すぎる程に、遠近攻守においてバランスの良い機体になった最大の要因はこちらっ！　誰が何と言ってもっ！　量子通信と神経接続を利用した無線誘導式全周囲攻防システム【ドラグーン】だぁっ！！』

って、何で売り口上なんだよっ！？

くっ、い、いかん、つい、書類の文面に突っ込んでしまったが、なんだろう、このしてやられた気分は……。

……いや、落ち着け、俺。

これは多分、書いた奴が度重なる徹夜か飲んではいけない何かで、ハイになって、つい書いてしまった”触れては駄目よ俺泣くよ”的な黒歴史的文章なんだ。

うん、そうに違いないから、これ以上、触れないようにしよう。

……。

でも、このドラグーンって、連合軍が採用しているガンバレルが無線版になっただけじゃないのか？

別に……、変わったこ……攻撃面ではオールレンジ攻撃が、防御面ではビームシールドの形成が可能？

へぇへぇ、ビームシールドの形成ですかぁ。

ふむふむ、これは中々に強力な武そ……それを可能にするためには、非常に高い空間把握能力と情報処理能力が必要？

……。

な、なんていうか、使いこなすのに相当の条件が必要って、ぶっちゃけ、使えない兵器じゃないか、これ？

いや、確かに、使える人間が使ったら、強力な……。

……。

なるほど、人的資源が少ないザフトは、エースに一機当千（※誤字にあらず）を可能にする強力な機体か特殊機を与えて、戦域を支配するつもりなのか。

むむむ、ザフトのＭＳ開発は、質で量に対するってことを突き詰めたと考えればいいのか。

……でもまぁ、これもＭＳ運用の一つの答え、一つのドクトリン

ということなんだろうな。

そんな具合で結論付けた所で、外というか、ラウとザラ議長の話は終わったようだった。

「では、貴様の隊はイザーク・ジュールに任せると？」
「流石に隊長職を務めたままでは、次の戦闘までに機種転換を間に合わせる自信がありません」
「……わかった。イザーク・ジュールを隊長代理に任じ、隊を指揮させよう。貴様はその間に」
「はい、次の戦闘までに必ずや間に合わせましょう」
「よろしい、貴様の活躍を期待する」
「はっ、では、早速、行動に移りたいのですが？」

……ここはラウに便乗して、退散するか。

そう判断して、俺もユウキに資料を返しつつ、議長に告げる。

「議長、俺もこれでお暇させてもらいます」
「うむ、貴様もご苦労だった」

ザラ議長が頷いたので、ようやく俺も、執務室から退出することができたのだった。

……しかし、カナーバ議員はともかくとして、何で、ジュール議員がいたんだ？

むう、謎だ。

84　決戦前の小休止　3

ラウと共に国防委員長室から出た後、政庁の廊下を並んで歩きながら、ラウが乗り換えることになった新型機プロヴィデンスについて話を振ってみる。

「で、早速、新型を受領しに行くのか？」

「ああ、連合軍が次に仕掛けてくるまで、もう余り時間はなかろうからな」

「確かに、後二日といった所になるだろうけど……、間に合うのか？」

新型の性能、確かに高いのは認めるが……、使う人間を選ぶみたいだからなぁ。幾らエースであるラウでも、正直、一日、二日で機種転換はキツイと思うんだが……。

「ふっ、間に合わせて見せるさ」

「おおぅ、流石の自信だな、ラウ」

自信満々に言い切った言葉に、俺では絶対に出せない説得力があるわぁ。

……。

でも、ザフトの最新鋭機か……、正直、この目で見てみたいもんだな。

「なぁ、ラウ、新型の受領に俺も立ち合わせてもらってもいいか？」
「む……、アインならば大丈夫だろうが、ミーア嬢に会わなくてもいいのか？」
「いや、正直、家に帰ってもゆっくりできるような気分の余裕というか、何事もないように普段通りに過ごす自信がないからな、端末で連絡を取るだけにするつもりだ。ラウは、アルスターに会わないのか？」
「……私も機種転換に集中したいからな、君に倣うとするよ」

ラウの返事を聞いた所で、【エヴィデンス０１】が展示されているホールに差し掛かり、ここを警備する武装保安局員の敬礼に軽く答礼して、ふと、ここの名物とも言うべき宇宙鯨、もとい、”はねくじら”を見上げる。

……地球の生物と似ているようで似ていない、異なる生物の化石っては、いつ見ても奇妙なモノだ。

そんな感慨を抱いていると、不意に、ラウが呟いた。

「コレが発見されなければ……、人類の歴史はどう動いたものかな？」
「さて、な……。もし、こいつがジョージ・グレンに発見されていなかったとしても、コーディネイターは既に生まれていたから、今の状態と殆ど変わりはなかったかもしれないし、それとは逆に、世界や社会の倫理観が遺伝子コーディネイトに否定的のままで、結果、コーディネイト技術もある程度規制されて、コーディネイターは上手く人類社会に溶け込んでいたかもしれない」
「……かもしれないか」

「ああ。”かもしれない”って、仮の話はさ、あくまでも人間の想像の産物に過ぎないし、時を遡る事が出来ない俺達には、知る事ができない領域だよ。……まぁ、それを想像するのが楽しいと言うのは認めるがな」

人一人、事象一つが世界に与える影響力が、どの程度のモノなのか……。

いや、人が世界という大きな社会の中で生きている以上、他人との関わりは極自然に発生するし、様々な事象に巻き込まれている。加えて、刻々と変化して行く社会とそれを包み込む自然の中で生きている人間は、望む望まざるに関わらず、その時々に、連綿と、万物が相互に影響しあって生きているだろうから、人一人、事象一つの影響を厳密に測るなんて事はできないだろう。

「ふっ、すまぬな、つまらぬ事を言ってしまった」
「何、誰にだって、そんな風に考えてしまう時はあるよ」
「……そうか」
「ああ、人間である以上はな」

っと、白服が二人も並んで立っていたら、場所が場所だけに、周り……、特に警備の迷惑になるな。

「ラウ、そろそろ行こうぜ」
「ああ」

それに、ここ最近の不祥事や混乱で、ザフト隊員に対する市民の視線もあんまり良いもんじゃないこともある。

なんてことを思っていたところに、少し癖のありそうな栗毛をシ

ョートボブにした長身の女性が一人、俺達の元へ駆け寄ってきた。

「ＰＢＮです。少しお話を伺いたいのですが？」

ＰＢＮ……、プラント・ブロードキャスティング・ネットワークのジャーナリストみたいだけど……、柔らかく”伺いたいのですが”なんて言っていても、半分以上は強制取材だよねぇ。

保安局時代の経験から見ても、ジャーナリストってのは無視すると、市民には知る権利云々って、持ち出して来て、うるさいんだよなぁ。そんな風に市民の代弁者や社会正義の守護者を気取る割には、自分達の不義には目を瞑ったり、そこを突っ込んだりしたら逆ギレするし……って、いかんいかん、保安局時代の愚痴になってるし、そもそも、全てのジャーナリストがそんな連中だけとは限らないはずだ。

心底へとジャーナリストへの偏見を押し込めつつ、提示されたＰＢＮのジャーナリストであることを示す身分証明証が本物であることを確認しながら、ちらりと隣のラウを横目で伺うと、相手を頼むと言わんばかりに、素知らぬ顔でサングラスを押し上げていた。

こうなった以上は仕方がない為、俺が率先して受け答えすることにする。

「ＰＢＮの記し……ルルーさんだね。俺達も用事があるから、車が来るまで「車ならこちらにもありますが？」はいはい、お世話になりますよ。中央エレベータまで、もちろん、ルートは最短最速でよろしく」

「ええ、もちろんです。話が早くて助かりますわ」

最初から逃げ道を閉ざされていたことに些か面白くない気分でい

たら、微かにラウが含み笑いをしたようだ。

……どうやら憮然とした心情が表に出てしまったらしい。

まだまだ、泰然とした態度を取れない己の未熟を嘆きながら、先導する女性ジャーナリストに声を掛ける。

「それで、何が聞きたいんだい？」

「今回、広報局が暴走したことについて、何かコメントを頂きたいです」

「……いや、それに関しては、前線に出ている俺達よりも、君ら報道機関の人間の方が詳しいだろうよ」

……あ、何か、今、前の人の目が光ったような気がした。

「お二人は、前線に？」

「そりゃあ、白服なんて着ているからねぇ」

お、感心感心、早くも車が来たね。

俺達の前に到着したのは四人乗りの無人車で、後部座席に俺とラウが、助手席にＰＢＮの女性記者ベルナデット・ルルーが乗り込んだ。そのルルーは行き先を中央エレベータ前に設定した後、前部座席から身を乗り出して、早速、質問してくる。

「それでは、今、現在、前線の状況はどうなっているのか、お聞かせ頂けますか？」

「地球に関しては詳しく知らないが、宇宙じゃ、連合軍の大艦隊がプラント……、ここに攻撃を仕掛ける準備をせっせとしている所だよ」

「っ！」

俺の言葉を受けて、ルルーは驚いたように目を見開く。

……おや、スンナリ答えるとは思ってなかったのか？

そう読み取ってしまうと、何となく天邪鬼的な気持ちが湧いてくるあたり、人の心とは不思議なものだ。

「……次の連合軍の攻撃はいつ頃だと？」

「うーん、これは俺の予想だけど……、後、二日ないし三日程じゃないかな」

「で、では、連合軍のプラント侵攻に対するザフトの基本方針は？」

「ヤキン・ドゥーエ要塞を要に据えての、迎撃、防衛だな」

流石にアレに関しては、口を滑らさないように注意しておく。

「ボアズ要塞に対して、連合軍から核攻撃が為されたそうですが？」

「ああ、それは本当だよ」

「……プラントへの、核攻撃の可能性は？」

「まぁ、可能性はあるだろうねぇ」

あら？　あらあら？　動揺して顔を真っ青にしちゃったよ。

……案外、まだ凄惨な修羅場で取材を経験していない新米さんなのかもねぇ。

「そ、それの対策は？」

「ザフトは連合軍を全力で迎撃します」

「……なっ、それだけですかっ！？　もっと他に何かないのっ！」

「ええ、これ以上は俺から言えませんよ。全力で迎撃し、プラントへの如何なる攻撃をも完全に阻止します、って以上はね」

これ以上、現場の人間にどう言えと、なんてニュアンスを言外に匂わすべく、業と肩を竦めて見せる。

「……申し訳ありません、さっきのは失言でした」

「いや、気にしないでいいよ。……確かに、さっきの言葉だけじゃ、不安にもなるだろうから、ルルーさんが怒りたくなるのもわかるしね」

「そうなるとわかっていて、言われたんですか？」

「まぁ、ルルーさんの手際の良さへの賞賛と意趣返しも兼ねてね」

くっくっくっ、と、なるべく気に障るように厭らしく笑って見せると、自然、ルルーは不愉快そうな表情を見せた。

まだまだ、タヌキ或いはキツネになるのは遠いみたいだねぇ。

「それで……、ザフトはプラントをちゃんと護り切れるんでしょうね」

「さて、どうでしょうかね、クルーゼ隊長」

「さて、どうだろうな、ラインブルグ隊長」

おや、ちょっとラウにも振ってみたが……、中々の焦らし、もとい、はぐらかし様だ。

っと、どうやらルルーさんはお怒りになられ始めたようで、眉間に皺を寄せて、思いっきり睨まれてます。

うーむ、ちょっと、ジャーナリストにしては冷静さが足りてない

ように感じるなぁ。

やっぱり、これは経験不足かな？

「今のは冗談だから、そんな怖い顔で睨まないでよ。代わりに特ダネを一つ置いていってあげるからさ」

「……特ダネ？」

ああ、なんか露骨に不審の念が篭った声音が耳に沁みるなぁ。

「次の一戦で、戦争が終わる可能性がある」

「っ！　……本当に？」

「ふっ、あくまでも可能性に過ぎぬがな」

「そ、それって！」

「おっと、どうやら時間切れみたいだ」

「うがっ！」

何とも女性らしからぬ声がルルーの口から出てきたが、残念、宇宙港に繋がる中央エレベータ前に到着だ。入り口前で止った車の扉を開けて、外に足を踏み出しながら付け加えておく。

「まぁ、裏付けはそっちで頑張って頂戴な」

「もっとも、我々が話した内容自体、嘘か真かはわからぬがな」

おお、流石はラウ、最後の最後に不信感を煽ることを言うなんて、まったくもって、いぢわるだ。

「ちょ、ちょっと！　ちょっと待ってっ！　それはっ！　今のは本当なのっ！？」

「客観に基づいた、真実の探求こそ、ジャーナリストのお仕事だよ」

「ふむ、だが、手掛かり無しは厳しかろう。……先の真相が知りたいのならば、ＦＡＩＴＨのレイ・ユウキを訪ねるがいい。彼ならば、或いは……」
「っ！　レイ、レイ・ユウキねっ！」

あ、今、ラウの奴、ルルーから顔が見えないことをいいことに、ニヤリと笑いやがった。

「ああ、彼ならば、何かを知っているはずだ」
「あ、ありがとうございます、クルーゼ隊長」

そう言い残したルルーは、おそらく政庁に戻る為だろう、自ら車を運転して、猛スピードで去っていった。

「……いいのか、この忙しい時に？」
「何、ユウキならば、今の社会混乱を回復させる為の駒として上手く使うだろうさ。それに……」
「それに？」
「聞けば奴の職場は女気が少ないそうだからな、たまには花を愛でるのも良かろうよ」
「ああ、癒しって奴か」

とはいえ、何となく、ルルーに付きまとわれて辟易としたユウキの顔が浮かぶのは何でだろう？

「さて、アイン、早い所、行こうではないか」
「ああ、早い所、ここから立ち去るべきだな」

二人して、つい、ニヤニヤと笑みを浮かべてしまい、エレベータの係員に盛大に引かれたのは、消去すべき記憶である。

◇　◇　◇

で、新型機が置かれているアプリリウス軍事衛星港の機密区画にやってきたんだが……。

「むぅ、ＰＳ装甲だからか、色に味気がないなぁ」

なんてことを独語しながら、灰色の機体（プロヴィデンス）を見上げている。

そんな新型機、プロヴィデンスを一目見て思ったことは、何となく、某ＳＦアニメに出てくる主役級のＭＳに似ているなぁ、という事なのだが……、これって、以前、連合から強奪したＭＳを見た時も思ったんだけど、偶然なんだろうか？

むむぅ、謎だ。

とはいえ、もしも、この類似が偶然の一致ではないとしたら……、なんて事は別に考える必要はないだろう。目の前にあるＭＳが、前世で見た某ＳＦアニメに出ていた云々に似ていたとして、それがどうした、だからどうしたって話だ。

そもそも、俺……、前世の記憶を持っていた”俺”という存在自体が”えすえふ”なんだから、似たような存在があろうが、似たような名前が出てこようが、それこそ、ああ、そういう事もあるんだねぇ、とか、もしかしたら、俺以外にも前世持ち（笑）がいるのかもしれんなぁ、って位の考え方で、広い心を持って、受け入れていけばいいだろうさ。

だいたい、今、俺はここで血肉を持ち、意思を持って生きている以上、ここ以外に現実はないんだからな。

今はそんな馬鹿げた考察をするよりも、プロヴィデンスの観察する方が重要だ。

やはりと言うべきか、この新鋭機を見て、まず何よりも目を引くのは、背中に背負ったドラグーン・システムだろう。資料で設計図や概要を読んで亀の甲羅めいたものだと思っていたが、実物を見てみると、意外とそんな感じじゃないな。

ドラグーンの端末も、大型の三つと小型の二つを背中のドラグーン・プラットフォーム本体に、腰回りの両側部及び後部には小型のものが各二本ずつ、増設された小型プラットフォームに無理なく配置されてる。

当初設計段階では搭載される予定ではなったらしいドラグーン関連の装備品がこんなにも馴染んでいるなんて、本当に、元々の素体がシンプルで良い機体だったんだろう。

……それにしても、よく、この機体サイズに核分裂炉が入っているな。

俺の中で核分裂炉のイメージは、コンクリートの分厚い壁に覆われて、発電や貯蔵に大量の水を使う原子力発電所だから、ＭＳに合う小型の核分裂炉を作ったプラントの技術者はたいしたものだと思うよ。

まぁ、実際には、非常に効率の良い熱電発電システムあたりを使っているんだろうけど、それでも、ここまでの小型化はプラント脅威の技術力が為せる代物ってところかな。

……。

しかし、見れば見るほど、ラウが好みそうなマッシブな機体だな、おい。

これだけ重量感溢れる機体だったら、外見が華奢なストライクダガーなんて、蹴られただけでバラバラに分解しそうだぞ。

実際にありえそうな光景を想像し、我ながら何とも言えない表情でいたら、開発担当者と話をしていたラウがこちらにやって来た。

「アイン、どうかな、プロヴィデンスは？」

「見た感じ、とても頼り甲斐がありそうな、いい機体だと思うぞ」

「確かに、元になった機体自体が非常に出来が良いみたいだな。例え、ドラグーン・システムが無かったとしても、大いに活躍できるだろう」

ドラグーン・システムか……。

「そういえば、当たり前のようにラウがドラグーン・システムを使えるってことで話が進んでいるけど、何でそんなことがわかるんだ？」

「話によると、ザフトのＭＳパイロットは空間把握能力の高い者から選定されているらしいのだが、その中でも私の空間認識能力が平均よりも突出していたそうだ」

「んなもん、どうやっ……ああ、あれか、養成所に入った直後にやらされた、色んな検査か？」

「恐らくはな」

ふむふむ、なるほど、その検査で、俺はパイロットの資質があると判断されたってことか。

しかし……。

「空間認識能力ねぇ」

文字通りに考えたら、三次元に対する認識能力って事なんだけど……、ラウの場合は、ちょっと自分でも馬鹿な考えと思わないでもないのだが、例の某ＳＦアニメに出ていたような、宇宙に適応するべく進化した人類の概念……νタイプのように感じられるんだよなぁ。

「アイン、どうかしたかね？」

「ん、いや、ラウが前に血筋の話をした時に、離れていても相手の存在を感じ取れるって言ってただろ？」

「ふむ、言った覚えがあるな」

「その離れていても相手の存在を確かに感じ取れる事ってさ、案外、引き合う力が空間認識能力に作用して生み出された、宇宙に適応する為の人類進化の一つなのかもしれないな、って何となく思ったんだよ」

「……アイン、どこかで頭でも打ったのかね？」

ひ、ひどっ！

「い、いや、本当に何となくそう思ったんだよ。……まぁ、戯言として流してくれ」

「ふ、なら、そうしておこう。だが、あの感覚が人類進化の一つか……、相変わらず、君は面白いことを言うモノだ」

戯言にしてくれと言ったのに、何故か、ラウは人類の進化と言う言葉に惹かれるというか、気に入る何かがあったらしく、嬉しそうに口元を緩めている。

「そ、それよりもラウ、試運転はいつごろになるんだ？」
「……今から乗ってみるのだが？」
「って、すぐに乗れるのか？」
「ああ、核反応をいちいち止める必要はないそうだ」

……常に稼動しているって、機体の廃熱システムに過負荷が掛かるってことじゃないのか？

「そろそろ、冷却装置が外される所だろう」

ああっ、なるほど、普段は外付けの冷却装置で抑えているのか。

「なら、ドラグーン・システムがちゃんと起動して、ラウが使えるかも見て行くよ」
「ふっ、ならば、その期待に応えて、一度で使いこなして見せようではないか」
「……無理はしないでもいいぞ？」
「誰に物を言っているのかね？　不可能を可能にせずして、エースは名乗れんよ」

おうおう、乗る前から、凄い自信だこと。

「なら、管制室から見せてもらうよ」
「ああ」

でも、しっかりと頷いて見せたラウが見せた自信に溢れた表情を

見たら、確かに、結果はわかったようなものだ。

その後に行われたプロヴィデンスの初搭乗にて、ラウはドラグーン・システムを見事に起動させると、十一ある攻防端末全てを同時に操ってみせて、データを取っていた技術者達を狂喜乱舞させたのだった。

つか、余裕で有言実行してみせる辺り、半端ないよなぁ、ラウの奴。

……ほんとに、心強い味方だよ。

……。

さて、次が最後の一戦になるかは、まだ、わからないが……、とにかく、全力で自身の役目を果たすしかない。

……うん、気張っていこう。

８４　決戦前の小休止　３（後書き）

１１／０３／０７　誤字修正。

85　血戦、ヤキン・ドゥーエ　1

9月25日深夜。

L1宙域に一旦退いていた連合軍艦隊が、月からの補充と再編作業を終えたようで、L5宙域にあるプラント・コロニー群を目標に侵攻を再開した。

L1宙域内暗礁地帯において、連合軍の包囲艦隊と小競り合いを繰り広げている世界樹の種から、途切れ途切れに届いた情報によると、侵攻してくる連合軍の戦力は大凡三個増強艦隊規模で、機動戦力の基幹となる300m級だけでも九隻が確認されている。

九隻ある300m級に艦載されているのが、MAとMSのどちらなのかはわからないが、単純にそれぞれが半数の四隻ずつ艦載されていると見積もったとして、最低でもMAは二百四十機以上、MSは九十六機以上、存在していると推測される。それに加えて、三十隻以上は確認された主力艦250m級や百隻を軽く越えていると思われる150m級、MSプラットフォームになっているらしい三十隻以上の双胴型輸送艦等の艦載機が加わるとなると……、かなり恐ろしい強力な機動艦隊戦力だといえるだろう。

更には、連合軍の一大根拠地と呼べる月のプトレマイオス基地内部においても、未だに大きな熱源が偵察衛星によって観測されているという話だから、まったくもって、プラントにとっては洒落にならない状況だ。

この連合軍の動きに対して、ザフトは去年の四月にあったヤキン・ドゥーエ要塞前面宙域での防衛戦を参考にして、プラントまでの五重に渡る防衛ラインを構築している。

ヤキン・ドゥーエ要塞前面宙域に展開した機動艦隊の二個正規艦隊……ＦＭやＤＤＭＨ等の艦艇四十隻と艦載ＭＳ二百四十機が第一防衛ラインを、ここ二ヶ月で増強されたヤキン・ドゥーエ要塞防衛隊から十個ＭＳ中隊百二十機が第二防衛ラインを、以前の防衛戦で砲戦仕様に改造した作業用ＭＳが迎撃で大活躍した経緯から、地上用の砲戦ＭＳザウードをビーム兵装等に換装して火力面で強化させ、新たに放熱システムも付け加えて宇宙に対応させた【ＴＦＡ－４ＤＥ】ガズウートで構成される砲戦ＭＳ隊と大小の砲台やミライルランチャーから成る要塞防衛火砲群が第三防衛ラインを、ヤキン・ドゥーエ要塞後方宙域に遊弋する独立戦隊群やボアズ戦から生還した事でボアズを冠することになった分艦隊、プラント・コロニー群付近で別方面からの不意の襲撃に備えている本国艦隊からの分派隊が第四防衛ラインを、各市に駐屯するプラント防衛隊と迎撃ミサイルベースに改造されたランチ等が最終防衛ラインを、それぞれ構築しており、また、他方面宙域の防備を担う本国艦隊も最終防衛ラインの予備戦力として運用される予定である。

これらの部隊に配備されているＭＳだが、国防委員会主導によって為されたゲイツの早期増産の結果、半数以上がゲイツへと機種転換されている。

加えて、機種転換が間に合わなかった残り半数も、現場からの好評を受け入れたＦＡＩＴＨの判断でこれも急遽、大増産されていたジンＭ型が全体の四分の一を占め、ジンやシグーといった第一世代機は以前よりも目立たなくなっているから、ＭＳの機体性能といった質に関しては、ＭＡも併用している連合軍とほぼ互角だと言えなくもないだろう。

……だが、数の差が……きついなぁ。

艦艇の数だけでも差が大きいのに、機動戦力なんて数の差が大き過ぎである。

……なんとなれば、連合軍艦隊の後方に控えている双胴型輸送艦が曲者なのだ。

以前の任務で鹵獲したことがあるから知っているのだが、あの双胴型輸送艦だけでも一隻につき、補修・修理施設やその為の予備パーツといった本格的な整備環境を求めた場合で、最低でもＭＳを六機程度、そうでなければ、十二機は確実に載せられる。

この数字は、ＭＳ整備の専門家であるシゲさんに確認したから、まず間違いない。

で、この数字を元に簡単に計算すれば、六機艦載が三十隻以上なら百八十機以上、或いは、十二機艦載が三十隻以上なら三百六十機以上ってことになる。

はい、最低でも百八十機以上のＭＳが間違いなく存在するということですほんとうにありがとうございましたってんだ。

いや、最低でもＭＳが百八十機って、これだけでも普通に波状攻撃できるレベルだぞ、おい。

もしも、最悪の想定で考えた場合は二倍になって、三百六十機以上のＭＳがあるってことだぞ？

しかも、これで３００ｍ級や２５０ｍ級の艦載分を含めない輸送艦分だけなのだから、俺、もう涙目である。

いくら、ボアズ要塞へと核攻撃が再び為された影響で、ザフト内部……ザフト隊員の間で復讐に猛って叫び、戦意、気力共に満ち満ちているからといっても、ＭＳのバッテリーや推進剤、エアー、弾薬といったものは消耗するし、もちろん、自身では感じられない疲労等もあるのだから、戦場にずっと出たままで、全ての波状攻撃に対応できるわけがないのが現実だ。

この辺は、司令部あたりがが上手くローテーションでも作って、動かしてくれたらいいんだけど……、ザフトの隊員って、直情熱血型が多い影響か、暴走しやすいからなぁ。

付け加えると、例え、多大な犠牲を払って、今現在、侵攻してくる連合軍艦隊を退けたとしても、後方拠点のプトレマイオスに最低でも二個艦隊規模の戦力が控え、Ｌ１とＬ４にもそれぞれ一個艦隊が展開しているんだから、もう、通常戦闘では絶対に勝てない。

そこに駄目押しの核攻撃が入るとなると……、はぁ。

まぁ、だからこそのジェネシスなんだけど……、これも確実に撃てるのが、一射だけって制約がある以上、最も良いタイミングで撃ってもらわんと絶対にやばい。

ジェネシスでの攻撃判断を下すザラ議長やその補佐をしているユウキが上手いタイミングを見極めてくれる事を祈るしか……、いや、任せるしかない。

そんなジェネシス発射の一つの大きな基準となる連合軍の核攻撃だが、ボアズ戦に参加していた部隊から得た情報では、大量に投入されたストライクダガーとメビウスによって均等に均された前線を、

一部の強力なＭＳ部隊でもって強引にこじ開けて、その穿たれた穴から核ミサイルを搭載したＭＡが突入して、対象へ向けてぶっ放す、という過程を経ている事が判明している。

これの対策としては、穴が開いた部分を延々と塞ぎ続ければいいだけという、至極、単純な話なのだが、絶対的な機動戦力数の差から、実現は不可能だろう。

……ならば、そこを逆手にとって、前線に穴が開くことを前提に考えて、後方で待ち構えておけば、核ミサイルの迎撃は上手くいくかもしれない。

幸い、うちの戦隊は第四防衛ラインだから、プラントへの核攻撃を防げる位置にいるし、広範囲への対応が可能なラウの核動力型新鋭機（ニュンス）もある。

うん、これならプラント・コロニー群への核攻撃だけはなんとか……、いや、必ず阻止できる。

……去年の二の舞は御免だ。

◇　◇　◇

９月２６日未明。

ザフトはヤキン・ドゥーエ要塞前面宙域からプラント・コロニー群までの間に構築された五重にわたる防衛線の全てで部隊の展開を終え始めており、第一種警戒態勢の下、即応態勢も整いつつある。

制服からパイロットスーツに着替えた俺もエルステッドの艦橋で、自戦隊や同じ防衛ラインに所属する他部隊、この防衛戦で総合指揮を行うザラ議長と共にヤキン・ドゥーエ要塞に腰を据えた総司令部から入ってくる情報を、隊長席に設えられている端末を使って目を通している。

前日に通達されたのだが、今回の防衛戦では少ない戦力で効率的な迎撃を行う為に、戦域を細かくエリア分けしている。

具体的に言うと、ヤキン・ドゥーエ要塞から連合軍艦隊が展開すると予測される宙域までの間を、要塞側から一、二、三と番号を振って九つに、また、要塞から連合軍艦隊を結ぶ線の水平直交ラインも、左から1、2、3とナンバーが割り当てられ、要塞より左側が1から3、要塞前が4から6、要塞より右側が7から9と、それぞれ区割りされている。

同時に、垂直軸方向も要塞に面する幅をC（Ｃｅｎｔｒａｌ）フィールドとして、Cフィールドから見て上方……天頂側をN（Ｎｏｒｔｈ）フィールド、下方……天底側をS（Ｓｏｕｔｈ）フィールドと大きく三つに分けられており、これら三つの表記を組み合わせることでエリア表記とし、宙域の把握をよりわかりやすく行うって寸法だ。

それにしても……。

――ラインブルグ隊のＭＳ隊全機の整備が終了、即時出撃可能により、即応態勢に移行。

――クルーゼ隊、ラヴロフ隊が即応態勢中、チェニス隊、モンテ

ルラン隊、ロメロ隊が即応態勢へ移行中。

――ボアズ分艦隊は即応態勢中、本国艦隊分派隊は展開に若干の遅れ。

――Ｃ－２五及びＣ－７五に展開中の第一防衛ラインに第二種戦闘配置が発令。

――ヤキン・ドゥーエで待機中の第二防衛ラインは出撃態勢を完了済み。

――ヤキン・ドゥーエ表面に展開中の第三防衛ラインは起動済み。

――最終防衛ラインの各防衛ＭＳ中隊は即応態勢中、迎撃ミサイルベースは展開中。

――地球方面を警戒中の本国艦隊からは異常報告なし。

――敵予測展開宙域において、敵先遣隊と第一防衛ラインの阻止任務部隊が交戦中。

……さっきから、情報が更新される度に違和感を感じるのは何でだろう？

まぁ、困ることでもないし、いいことなんだけどね、という呟きを声に出さぬまま、喉奥で消化した後、得られた情報内容について考える。

……今のところ、防衛ラインの展開状況は、一部の部隊に若干の遅れがあるけど、許容範囲内だろう。

そう結論付けて、モニターに後方のプラント・コロニー群を映し出す。

現在、プラントでは最高評議会議長による非常事態宣言と共に全市、全コロニーで保安局や港湾局といった公職員を除いた全市民に対して、脱出艇を兼ねたシェルターへの避難命令が出されている。

この避難命令が発令された際に、最高評議会を批判する集団やクライン派を支持する一部市民が暴れたりしたそうだが、ボアズへの核攻撃も表に出ているから、一般市民の避難自体は進んでいるそうだ。

今頃はミーアもアルスターを連れて、近くの避難シェルターに避難していることだろう。

……いつも通り、兄さんが帰ってくるのを待ってるからね、か。

出撃前に時間を作ってミーアに連絡を取った際に、ミーアが端末越しに言った言葉だが……、あの時のミーアの顔、絶対に無理して、普段通りの顔を意識して作っていたよなぁ。

あんな顔をさせる位なら連絡取らない方が良かったかなぁ、なんてことを考えていたら、近くに座るゴートン艦長がこちらに目配せしているのに気が付いた。

「隊長、新しくヤキン・ドゥーエの総司令部から情報が送られてき

ましたよ」
「あっと、ありがとうございます、艦長」
呆けた状態をそれとなく止めてくれたゴートン艦長に感謝した後、端末表示を更新して、最新情報を映し出す。
――敵予測展開宙域における阻止戦闘は敵本隊の到来を持って終了。
――交戦敵先遣隊戦力、改装２５０ｍ級四隻、改装１５０ｍ級四隻、１５０ｍ級十二隻、ＭＳ三十六機。
――敵先遣隊への打撃、改装２５０ｍ級一隻、改装１５０ｍ級一隻、１５０ｍ級五隻を撃沈、ＭＳ十六機撃墜。
――阻止任務部隊戦力、ゲイツ十八機、シグー二機、ジンＭ型九機、ジン七機。
――阻止任務部隊損害、ゲイツ三機、ジンＭ型一機、ジン四機が被撃墜、ゲイツ二機、ジンＭ型二機が損傷。
――当阻止戦闘における撃墜及び被撃墜から分析された情報より、当初情報を以下に修正せよ。
――敵量産型ＭＳの主兵装に、実弾系武装が追加されており、注意が必要。
――敵艦艇の個別防衛能力及び小型ミサイルの脅威度を上方へ一段修正。

――敵量産型ＭＳの単体脅威度、集団脅威度を上方へそれぞれ一段修正。

――敵艦艇及びＭＳの連携の脅威度を上方へ一段修正。

……あっ、わかった。

さっきから何か違和感があるな、って思ってたら、総司令部から届く情報が以前よりかなり速い上にマトモなんだ。

今まで感じていた違和感の正体がわかり、スッキリした気分で頷いていたら、艦長が苦笑しながら話し掛けてきた。

「その顔を見るに、どうやら、気付いたみたいだね」

「え？　あ、ええ、恥ずかしながら、今、気付きました。以前より情報の伝達が速くて多いみたいですね」

「うん、そうなんだよ。……いや、俺もね、最初、総司令部から次々に最新情報が届いた時、困惑したよ」

昔の司令部、特に機動艦隊の司令部は、おし、皆、突撃だっ！はっ、敵の出方？　こちらの作戦？　はっ、んなもん、俺達コーディネイターならナチュラルの真似なんてしなくても、指先一つで余裕に決まってんだろ、つべこべ言わず、さっさと攻撃に行きやがれっ！　ってな感じだったからなぁ。

一年以上前の事を思い出して、感慨に耽っているとゴートン艦長もしみじみとした表情で不精髭が生えた顎をさすっていた。

やはり、血の巡りが良過ぎて暴走していた当時の司令部を相手にしていたこともあって、艦長も今の状況に思う事があるんだろう、っと、今はそんな事を考える時じゃないか。

「どうして、こんなに改善がいきなり進んだんですか？」

「さっき、横の繋がりで教えてもらったんだけどさ、君の同期のユウキ君がＦＡＩＴＨを動かして色々と頑張ったみたいだよ。これまで総司令部の大部分を構成していた機動艦隊司令部の連……要員を、各艦隊からの引き抜きで人員が不足した本国艦隊に放り込……回して、新しい人員を地球での実戦経験者や地球軌道を獲られて仕事がなくなった軌道爆撃艦隊司令部から引き込んだらしいんだ」

「へぇ、あいつも思い切ったことをするもんだなぁ」

「だよねぇ。まぁ、総司令部の仕事が速くて正確になったから、現場としてはありがたいことだって、艦長連中は皆喜んでいるけどさ、……彼、今回の事でかなりの敵を作ったみたいだよ」

……敵、か。

「わかりました。ユウキには注意を入れておきます」

「うん、頼むよ。彼みたいな改革者は今後のザフトには不可欠な存在だと思うからさ」

「……ええ」

俺も貴重な友人を失いたくないからな、保安局や黒服さんにも相談しておこう。

相談する面子を思い浮かべていると、艦長が顔を引き締め、改まった様子で口を開いた。

「隊長、話は変わりますが、戦隊の戦闘配置への移行はいつ頃にす

る予定ですか？」
「第一防衛ラインが戦闘を開始したあたりで、とは考えてますが？」
「……となると、二、三時間後位ですね」

偵察衛星で観測されている連合軍の展開状況を見た感じ……、確かにそれ位が目処かもしれない。

「ならば、一度、小休止を取られることをお勧めします」
「ですが、それだと気が抜けてしまいませんか？」
「いえ、ずっと気が張り詰めたままでは、隊員に余裕がなくなります。……いやね、ちょっと、横目でトライン君を見てやってよ」
「……あれ、まぁ」

班長所定位置に仁王立ちしたアーサーが、これからの戦闘を思って、自身で自身にプレッシャーを掛けてしまっているのか、顔を真っ青にしていた。確かに、普段の少し抜けた様子が欠片も見られないとなると、拙い状態なのかもしれない。

……いや、よくよく考えたら、国家存亡の危機に立っている瀬戸際だというのに、普段通り、飄々としているゴートン艦長や普通に受け答えしてる俺が異常なだけなのかもしれない。

艦橋を見回してみれば、俺の考えを肯定するかのように、いつもよりも管制官達の立ち居振る舞いがぎこちないように見える。

「そうですね。少し休憩を入れましょう」
「では、半舷で三十分ずつで取りたいと思います」
「それでお願いします。もちろん、ハンゼンにも」
「ええ、伝えておきます」

いや、そういった細かな事に気付けなかったとなると、俺が鈍感な事以外にも、これからの戦闘に気を取られ過ぎて周りへの注意度が落ちているのかもしれない。

艦長から休憩を通達され、フラフラと班長用スツールに腰掛けたアーサーを見ながら、出撃するＭＳ隊にも気をつけないと駄目だな、なんて考えも浮かび上がってきた。

これは後でアーサーに感謝しておくべきだな。

……。

戦闘まで後少しか……。

うん、プラントに被害がいかないように、そして、戦隊から犠牲者が出ないように、俺は俺のベストを尽くそう。

86　血戦、ヤキン・ドゥーエ　2

9月26日早朝。
L5宙域外縁部に、ザフト側のハラスメント攻撃を物ともせず、展開を終えた連合軍艦隊は、夜明けと共に艦艇による攻撃を開始した。
それからというもの、百隻を優に越える艦艇群から断続的に艦砲弾やビーム、大小の対艦ミサイル、対宙魚雷、爆雷等々が第一防衛ラインを構成する機動艦隊艦艇やヤキン・ドゥーエ要塞へと撃ち放たれ続けている。
これに対して、ザフト側もC－2五とC－7五……ヤキン・ドゥーエ要塞の左右前方宙域に、二手に分かれて展開している第一防衛ラインの艦艇が回避行動を取りながら、近接火砲やビームで火線網を構成することで、対艦ミサイルや対宙魚雷等の迎撃を行いつつ、艦砲や艦載ミサイルを撃ち返して、対艦攻撃を仕掛ける等、応戦を開始している。
加えて、第一防衛ラインのMS隊もまた出撃して、一連の迎撃に参加しており、以前、世界樹や新星で連合軍がして見せた十字砲火にも劣らぬ程に頑張っているのだが、悲しいかな、数量の絶対的な差から、撃ち漏らしが発生してしまっている。

まぁ、それも当然の事なのかもしれないが、こっちにはない数の力を見せ付けられるだけに、切ないもんだよ。

もっとも、撃ち漏らしに関しては、第三防衛ラインを担当するヤキン・ドゥーエ要塞が、要塞から離れた遠距離を要塞防衛火砲群が、要塞から程近い近距離をガズウート隊がそれぞれ担当して、順次、

撃ち落しているから、大きな被害は出ていない。

……要するに、今のところ、防衛線が上手く機能しているって事だ。

こんな具合に他人事のように現在の戦況を見ている俺はというと、第二種戦闘配置の下、乗機のコックピット内で、艦橋から順次送られてくる情報を確認しながら、連合軍の動きについて考えている。

……。

今、連合軍が艦載兵装による攻撃に終始しているのは、こちらの消耗を狙ってのことだろう。艦艇数と艦砲やミサイル等の投射数で勝っているのだから、当然の選択だとも言える。

だが、ザフトにもヤキン・ドゥーエ要塞という巨大な支援施設が……、強力な索敵能力や広範囲を統合して管轄できる指揮管制機能、展開した艦艇を支えられる物資等々がある為、ある程度は帳消しにできる部分でもある。

ならば、何故？

……。

やはり、迎撃に参加している第一防衛ラインのＭＳの消耗を待っていると考えた方がいいのだろうか？

もし、仮にＭＳの消耗を狙っているのだとすれば、確かにジェネレーターを持たないＭＳの消耗を考えると……、今現在、進行中の

事実として、本格的に戦端を開いて一時間以上が経過している事に、迎撃行動を取っていることを加味すると、ＭＳのメインバッテリー残量や推進剤は確実に半分以下になっているはずだから、非常に効果的だと言える。

でも、この戦法だと、必要になる兵器類に金が掛かる上に生産力や資源が必要に……いや、国力に優れる地球連合だったら、不可能ではないことだな、うん。

……うぅ、本当に、？もう泣くから、殴るのやめて？状態だよなぁ。

って、半分以上、本音な冗談はさておいて、そろそろ、連合軍が動き出してもおかしくはない。

「……ベルナール、ラインブルグだ」
「あ、はい、こちらベルナールです」
「そろそろ連合軍が動いてもおかしくはない。何か、動きに変化はないか？」
「少しだけ待ってください」

……採点中ですってか？

「……隊長、３００ｍ級や後方の輸送艦群に動きがあります」
「それは、ＭＳ……機動戦力が出てくる予兆って事かな？」
「ええ、そう読み取れます」
「ヤキン・ドゥーエの総司令部から何か情報は？」
「あ、少し待ってください。……今、届きました。これによる

と、第二防衛ラインのＭＳを出撃させるみたいです」
「第一防衛ラインのＭＳは補給に？」
「はい。ですが、迎撃中の母艦には帰艦させず、ヤキン・ドゥーエまで下がらせて補給させるみたいです。また、第一防衛ライン構成艦艇にもヤキン・ドゥーエ要塞近く……具体的にはＣ－２二とＣ－７二までの後退命令が出ているようです」

迎撃戦闘中の着艦は危険だから帰艦させないのは妥当だが……、第一防衛ラインを支える艦艇を下げるのは？

「隊長、他にも何か？」
「あ、いや、すまん、わかった。また、何かあったら、連絡してくれ」
「了解です」

最近、あどけなさが抜けてきたベルナールの顔がサブモニターから消えるのを見て、思考を再開させる。

……。

第一防衛ラインの艦艇も下げるってことは……連合軍の誘引を意図……ジェネシスの射線軸上に連合軍を誘き出すつもりなんだろうか？

……いや、以前聞いたユウキの話だと、ジェネシスの発射は核攻撃後って事だから、単に、これから始まる連合軍側のＭＳやＭＡでの攻撃に備えてのことかな。

まぁ、何にせよ、後退を図る以上は、少しでも支援が必要だな。

……複座型を狙撃支援に出すか？

「レナ、聞こえるか？」

「あ、はい、聞こえてます。先輩、何かありました？」

「昨日、国防事務局から複座型用に支給させた、エネルギー収束火線スナイパーライフルって、使えそうか？」

「うーん、あれですか？　……確かに、ゲイツのＭ２１より出力は強いんですが、その分だけエネルギー消費が激しくて、カートリッジ一つで三発分ですから、弾数が心許ないです。それに試作品ですから、予期せぬ事態も起こりえます」

ああ、あるある、俺も凄腕さんと戦闘した時に、ビームライフルが故障して、冷や汗かいたよ。

「複座型が携行できるカートリッジは？」

「三つ……元々ライフルに付いている分も合わせて四つですね」

……むぅ、補給なしで狙撃できるのは十二回か。

でも、これも仕方がないことだろう。複座型のベースはジン初期型だから機体からビーム兵装への電力供給システムを装備していない。付け加えれば、ビーム兵装を運用できたとしても、内部バッテリーがレーダーや他の観測機器の運用に使われているから、結局は割り振れる許容量が少ないからな。

まぁ、それでも何か、遠距離から攻撃ができるような、複座型に持たせる事ができる武装がないかと諦めずに探していたら、？こんな威力じゃミストラルすら破壊できない？だなんて、笑えない冗談と一緒に、複座型を運用する現場から大不評だった専用のスナイパーライフルの後継版……鹵獲ＭＳであるバスターとジンの特火重粒

子砲の技術を流用した、カートリッジ式エネルギー収束火線スナイパーライフルを、試作品とはいえ、見つけることができたのは僥倖だった。

「先輩、まさか複座型も一緒に出撃を？」

「いや、単独任務……、後方からの狙撃支援に出そうかと考えている」

「単独任務、ですか。……大丈夫でしょうか？」

「何、前に出すって言っても、積極的に仕掛けさせるつもりはないよ」

「でも、狙撃をするにしても、都合良く射線が通ると思いませんが？」

「いや、乱戦状態の中に撃つんじゃなくて、これから始まる後退の支援や戦線に穴が開いた所へ撃ち込ませたいんだよ。まぁ、言わば、穴埋めが来るまでの時間稼ぎというか、保険的な役割だな」

「……それだけなら、大丈夫だと思います」

……うん、レナの奴、子どもどころか恋人すらいないのに、お母さんしてるよねぇ。

「……先輩、今、何か、私に対して、非常に、失礼なことを、考えませんでしたか？」

「イエイエ、ソノヨウナコトハアリマセンコトヨ？」

おおぅ、恐るべき女の勘って奴か？

「もう、その顔にその声、絶対に何か考えてましたね」

「んんっ、いやぁ、今日も出撃日和だねぇ」

「……はいはい、誤魔化されますよ」

うぅ、レナも本当に、俺に手厳しくなって……っと、そろそろ、真面目にやるか。

「でだ……、レナ、ずっと、あの二人の面倒を見てきたお前が、一番、二人の能力を把握しているだろうから尋ねる。複座型の二人は狙撃任務に耐えられるだけの能力はあるか？」

「複座型による後方からの狙撃任務だけならば、確実にあります。……ですが、一人ずつを、ゲイツ等の単座型で出せるだけの技量はありません。出たとしても、無駄死にするだけです」

「……わかった。二人は複座型、狙撃任務のみで出す。レナ、このことを二人に伝えてくれ」

「了解です」

本当は、複座型みたいな偵察機には、自衛以外の武装なんてさせない方がいいのはわかっているが……、こんな正面からぶつかり合う戦闘になってしまったら、人手不足に悩む指揮側としては、偵察以外の仕事もしてもらいたいのが本音だ。

それに、他のＭＳよりも高精度センサー等を有する複座型ならば、後方からの情報収集支援や、ちょっとした管制任務に使えるとも思うのだ。

なんて言い訳染みたことをつらつら考えていたら、レナと複座型の二人がサブモニターに現れた。

「先輩、二人とも任務了解しました」

「隊長！　頑張ります！」

「ご期待にそえるように全力を尽くします」

「ああ、期待している。けれど……いや、スタンフォードの言う通り、全力を尽くしてくれ」

「「了解！」」

でも、予め、判断基準は言っておく方がいいな。

「ただし、敵が接近してきた場合はその限りではない、いつも通りに退避して、落ち着いたら、再度、任務を再開しろ」

おいおい、そんな拍子抜けした顔をするなよ。

「複座型本来の役目や性能的に中、近距離での戦闘は不向きだ。お前達の傍には、俺達や友軍がいるんだから、そいつらを頼れ。……適材適所って奴だ。二人ともわかったな？」

「はいっ！」

「わかりました」

……自分で言っていて、娘を心配する口煩い父親のような気がしてきたな。

「今、第一次防衛ラインが下がり始めて、代わって第二次防衛ラインが前方に出始める状況だ。二人には、これに合わせて出てもらうつもりだから、頼むぞっと、忘れるところだった。補給等のタイミングに関しても、お前達に任せる。その時はベルナールとの連絡を密にしろよ？」

「了解ですっ！」

「了解っ！」

うん、これでいいだろう……っと、まるで計ったかのようなタイミングで艦橋からの連絡が来たな。

「隊長、こちらベルナールです」

「こちら、ラインブルグだ、丁度いいタイミングだな」

「ふふ、こちらでも音声だけは繋げていますからね。実はＭＳ隊内での会話はほとんど筒抜けですよ？」
「おいおい、ＭＳ管制官はプライバシーと言う言葉を知らないのか？」
「秘匿回線を使わないと、こっちが聞きたくなくても筒抜けになりますから諦めてください。それよりも隊長、第二次防衛ラインを構成するヤキン・ドゥーエ所属ＭＳ隊の出撃が始まりました。また、連合軍もＭＡ隊及びＭＳ隊の出撃が確認されています」

俺が気になるは当然……。

「ＭＡに爆装型……核ミサイル搭載型は確認できるか？」
「……いえ、全てを確認したわけではありませんが、対艦ミサイル装備機を少数と対ＭＳ用小型ミサイル装備機を多数確認しています。……これは私見ですが、ボアズへの攻撃方法を考えると、ある程度まとまった数で運用されるはずです。当然、それらしき機影はすぐに捉える事ができるはずですので……」

……確かに、ベルナールの言う通りだな。

ＭＡ……メビウス以上に大きな核ミサイルを抱えているのだ、それだけで存在は明らかだ。

「了解した。ベルナールの意見が正しいだろう。もしも、その機影を捉えたら、最優先で連絡を入れて欲しい」
「わかりました。最優先で、核ミサイル搭載型を発見し次第、すぐに連絡します」
「うん、頼む。それと、複座型を発進させてくれ」
「了解です。出撃シークエンスを開始します」
「よろしく」

少し息を吐いて、メインモニターに映し出される周囲の様子を眺める。格納庫内を整備班員達が慌ただしく跳び回る中、六機あるＭＳの内、黒い塗装を施された複座型のモノアイに光が点り、不備がないことを点検するかのように左右に動き出した。

出撃シークエンスが進み始めたのだろう。

複座型の出撃に向けて、順次、物事が進められていく中、俺は再び、思考に埋没する。

……。

戦闘は未だ、序盤戦が終わったに過ぎず、ここからが正念場だ。

まずは、物量を誇る連合軍ＭＳ及びＭＡ部隊を、第二防衛ラインが食い止められるのかだが……、第一防衛ラインのＭＳが戦線復帰することも考慮に入れると食い止めることはできるだろう。

しかしながら、連合軍が数の利を活かし、波状攻撃を仕掛けてきた場合は、どこかで必ず穴が開くはずだ。第四防衛ラインの俺達が、そこを埋めることができる間はいいが、敵にも強力な新型機が存在することも換算すると、やはり、最終的には大穴が開くのは確実だ。

そこに核ミサイル搭載型が、突っ込んでくるのは間違いない。

……ん？

ボアズ戦の経緯で、核ミサイルの運用がメビウスによって為され

ているのはわかっているが、何故に、艦艇での運用は為されてないんだ？

……うーん。

ニュートロンジャマーキャンセラーを小型化できず、艦載ミサイルには付けられなかった？

……いや、それはどう考えても、理由にはならないよなぁ。

だったら、運用の柔軟性……艦艇と違って、メビウスは高速で好きな発射ポジションに運べるという利点があるから、そのあたりが理由か？

でも、それだと、核が搭載された艦載ミサイルがないという否定にはならない。となれば、艦載ミサイルに核が積まれている可能性もあるということだな。

……単純に、迎撃される危険を減らすだけなのかねぇ。

まぁ、とりあえず、核ミサイル搭載型に注意して、これらの迎撃に集中しておこう。

後は……ジェネシスの発射タイミングも考えておかないとって、俺、どの時点で、ジェネシスは発射が為されるのか知らないわ。

……うーん、ジェネシスが一射しか確実に撃てないという条件で使用する以上は、どうしても、できうる最大限の効果を望みたいよなぁ。

だとすれば、戦力的に相手を削り、精神的にも心を確実に折る為には……、その一撃で、戦闘の趨勢は決める為には……、いや、考え方を変えてみよう。

俺が連合軍ならば、どこで撃たれた時に心が折れる？

……やはり、核攻撃を成功したと思ったら、迎撃されて失敗に終わった直後だな。

精神的な打撃がもっとも大きいのは間違いない。

……まぁ、でも、これは俺の勝手な推測だし、ジェネシスの発射タイミングは実際にはどうなるかなんてわからないから、過度の期待はしないでおこう。

とりあえずは、核攻撃が為されるまで持ちこたえて、その攻撃を何とかしてしまえば、戦況がこちらに傾く可能性もあるとだけ、思っておこう。

現実に意識を戻してみると、複座型がカタパルトにロックされたところだった。

「隊長、複座型、出撃します」

「了解、ベルナール。……ロベルタ、スタンフォード、必ず無事に帰れ」

そんな俺の言葉に、ロベルタとスタンフォードはそれぞれに合っ

た笑みを返すと片方は元気良く、もう片方はしっかりと答えを返してくれた。

「了解です！　隊長、行って来ます！」

「了解！　……ＩＳ１３１２、ロベルタ、スタンフォード、ジンＬＲＲ、出ますっ！」

腕にエネルギー収束火線スナイパーライフルを両腕で抱えた複座型が勢い良く虚空へと射出されて行った。

……とにかく、二人が無事に帰ってくることを、神……いや、我が母に祈っておこう。

これからの戦闘も含めて、様々なことを考えながら、俺はしばらくの間、シートに身体を預けた。

87　血戦、ヤキン・ドゥーエ　3

補給の為、ヤキン・ドゥーエ要塞に退いた第一防衛ラインのＭＳ隊と入れ替わる形で、第二防衛ラインを担当する防衛ＭＳ隊がヤキン・ドゥーエ要塞から出撃して、後退しながらも引き続き迎撃戦闘を続けている第一防衛ライン艦艇の前方に展開した。

一方の連合軍艦隊もこれを付け入る好機と取ったのかはわからないが、機動戦力であるＭＡ、ＭＳの混成部隊を順次出撃させ始め、Ｃフィールドで行われている艦艇攻撃を上下から挟む形で進出させてきた。

この動きに応じる形で、防衛ＭＳ隊所属のゲイツ百二十機もまた、全体を半分に分けてヤキン・ドゥーエ要塞の南北、上下宙域……Ｎフィールド、Ｓフィールドに展開し、それぞれが3五から7五のラインで、突入してくるストライクダガーと小型ミサイルでもって支援するメビウスの両者を迎え撃っている。

この機動戦力同士の攻防は、正直に言って意外なことなのだが、数に勝る連合軍混成部隊をより少ないザフトＭＳ隊ががっちりと食い止めている。

観測情報を見て取るに、防衛隊のＭＳは緩やかな中隊指揮の中、小隊での緊密な連携を意識して動いているようで、ストライクダガーやメビウスに付け入る隙を与えず、逆に撃破するなんてことが多いようだ。

……以前、教導任務をしていた時、個人プレーを好む者が多いザフトでは、部隊連携は弱者やナチュラルがすることだからと受け入

れられない、或いは、知っていたとしてもプライドが邪魔をしてやらないとばかり思っていたが、数が劣勢であるにも関わらず、防衛ラインが崩れないまま、半時間近く、一進一退の迎撃戦闘が続いていることから、付け焼刃に過ぎないと思っていた連携訓練でも意味はあったようだ。

……。

だが、これで調子に乗ったり、？連合軍組み易し？だなんて油断して行動したりすると、絶対に痛い目を見るだろうな。

「た、隊長！　大変ですっ！　本国艦隊分派隊がＭＳ隊を出撃させ始めました！」

……考えた尻からこれかよ。

「……あいつら、自分達が何の為にいるのか、わかってんのか？」
「ひぅっ！　す、すいません！　隊長、私には、わかりません！」

っと、顔と声に出てしまったか。

「いや、すまん。ベルナールに言ったんじゃないよ」
「……うぅ、今、初めて、レナが言っていた隊長の怖さが分かった」
「ほほぅ、レナの奴がそんなことを？」
「って、しまっ、あっ！　た、隊長！　総司令部からの通達が入りました！　第四防衛ライン構成部隊は別命があるまで待機せよ、です！」

総司令部から？わざわざ？の通達が来るって事は、この動きは独断か。

なら……。

「連中はどうせ、無視するだろうさ」

……馬鹿共が前線に出張った影響で、防衛ラインに乱れがでなきゃいいけどなぁ。

本当に、こんなのが友軍だと思うと、頭が痛い。

「ベルナール、敵艦隊の動きに変化は？」

「え、えと……、特に動きは……？」

「どうした？」

「あ、はい、後方から、新たな輸送艦が多数進出してきており、同時に出撃光を確認しました。また、一部艦艇……どうやら１５０ｍ級みたいですね、これらがＭＳ隊が戦闘しているＮフィールド、Ｓフィールド、両宙域の後方に回り込み始めています」

むむ、輸送艦は更なる増援か、波状攻撃の前兆で、……１５０ｍ級は艦隊特攻の準備か、支援砲撃だな。

さて、総司令部はどうするんだ？

「他の戦隊や分艦隊に動きはあるか？」

「はい、分艦隊が二手に分かれてにＮＳ両エリアに移動しています。……これは総司令部からの命令のようです」

「そうか、わかった」

本当なら、本国艦隊組と分艦隊に、南北のフィールドをそれぞれ任せるのが最良だったのだが……、仕方がない。

そんなことを考えていると、ベルナールが小さく驚きの声を上げた。

「え、嘘っ？」

「どうした？」

「え、えーと、隊長、その……、先程、前線に突入した本国艦隊所属ＭＳ隊機が、Ｓフィールドの防衛ラインの一角を乱してしまいまして……、戦線に穴が開いちゃいました」

……な、に？

み、味方が防衛ラインに穴を開けるって、どんだけ……。

「はい、伝えます。……隊長、戦線の穴を埋める為、ラヴロフ隊に出撃命令が出たそうです」

「ラブロフ隊長、泣いてるぞ、きっと」

まさか、味方の悪い意味での？独断専行？で生じた失態をカバーしないといけないなんて……、普段から温厚で通ってるラブロフ隊長の顔も、絶対に、引き攣ってると思う。

「っ！　敵第一波が引きます！」

「はっ？」

まだ、第二波が到達していないのに？

「あっ、Ｓフィールドにおいて味方機の一部が突出！　防御ラインが大きく崩れます！　ッぇ！！！　て、敵第二波のＭＡ部隊の加速を確認っ！　隙間に向ってっ！　なに、これ、速いっ！」

あ、やば、下手したら、大穴が開くかもしれないぞ。

「総司令部よりチェニス隊、モンテルラン隊への出撃命令が出ました！　また、連合軍の輸送艦及び３００ｍ級より、第三波の出撃を確認っ！　今度は数がっ！　さっきよりも多いっ！」

おいおいおい、連合軍の展開が速いぞ。

……。

いや、これは、勝負に出たってことなのか？

つか、その前に……。

「ベルナール、少し、落ち着け」

「ぁっ！　……すいません」

「まぁ、コックピットに座ってる俺よりもベルナールの方が多く情報に触れているから、そうなるのもわかるよ」

一つの情報が戦況に影響し兼ねない上に、自分達が守るべきものがすぐ後にあるなんて、失敗を許されない状況でもあるから、情報や通信を扱う管制官のプレッシャーは並大抵のものではないだろう。

……ふむ、プレッシャーか。

「ところで、アーサーは大丈夫なのか？」

「え？　え、えーと、トライン班長は……、まだ、何とか立って指示を出してますね。……顔色がもの凄く蒼くなってますけど」

「そうか。……なら、アーサーに、ご愁傷様っ、良い胃薬なら紹介

するぞ、って言っておいて」
「えっ！　今は、そんなこと、とても言えませんよ！」
「って、何を真面目に受け取ってんだ？　冗談に決まってるだろ？」
真に受けたベルナールを小ばかにするように、にやにやと笑ってやる。すると、頬を膨らませて見せたベルナールが、急に表情を素に戻すと、ぼそりと呟いた。
「……隊長にいじわるされたって、パワハラされたって、ゴートン艦長に言いつけよう」
「ちょっ！　おまっ！　洒落にならない事を言うなってのっ！」
「何を真面目に受け取ってるんですか？　もちろん、冗談ですよ？」
うん、自身の状態を自覚して、少し、冷静に頭が回り始めたみたいだな。
落ち着きを取り戻して、悪戯っぽく笑みを見せるベルナールに合わせて、こちらも軽く笑ってみせる。
「ははっ、そうそう、そんな感じで、ベルナールはさ、心には余裕を持って、冷静でいてくれよ？」
「ええ、わかりました。……あ、隊長、敵第二波のＭＳ部隊が前線に到達したようです。Ｎ、Ｓ両フィールドとも圧力の増大で、両戦線で後退が始まっています。尚、Ｎフィールドにはチェニス隊が、Ｓフィールドにはモンテルラン隊が増援に向かってます」
「ＭＡ隊は？」
「穴を突破した所をスタンフォード達の複座型が狙撃で足止め、その間にラブロフ隊が捕捉して、迎撃を開始したようです」
「そうか、二人とも頑張ってるな」
「ええ、そうですね」

……さて、第三派がある以上、そろそろ、出番だと考えた方がいいかな。

「……はい、わかりました。総司令部からの通達で、第一防衛ラインのＭＳ部隊の補給が順次完了し始めているそうです。また、これより再展開を開始するとの事です」

「そうか、第一防衛ラインのＭＳが復帰するなら、ある程度、戦線は押し返せそうだな」

後は、第三波がどう動いて来るかであるが……、その前に、ＭＳの戦闘宙域後方へ回り込む動きを見せていた１５０ｍ級の動きはどうなっている？

「さっきの１５０ｍ級群は？」

「依然として、後方に待機中」

ふむ、艦隊特攻ではなくて……、何らかの意図を持った釣りか、ザフトの逆撃に備えたって所なのかも知れんな。

「これは……、隊長、敵第三波がＳフィールド方面に向って、動き始めています」

「二手に分かれないのか？」

「はい、今度は纏まって動いています」

……拙いな。

戦線が大きく二つに分けられた所為で前線に厚みがないし、一度に叩きつけられたら、間違いなく食い破られる。

と、そこへ再びベルナールの勢い込んだ声が聞こえてきた。

「隊長、総司令部よりラインブルグ戦隊にＭＳ隊の出撃命令が来ました！　これを受け、ゴートン艦長は戦隊の態勢を第一戦闘配置に移行したいとのことです！」

「承認する」

俺の言葉の直後、すぐにＭＳ格納庫のレッドアラートが点り、前扉が開かれて、リニアカタパルトが展開していく。

「それで、総司令部からの命令（オーダー）内容は？」

「前線を突破してきた敵第三波を抑えるように、とのことです！」

「共同部隊はあるか？」

「ロメロ隊です！」

「了解した！　すぐに出撃シークエンスを略式で開始させてくれ！　もちろん、ハンゼンにも伝達を頼む！」

「了解です！」

出撃までほんの僅かな時間だが……、目を閉ざし、俄かに生まれる緊張を解し、速まった自身の鼓動を落ち着かせる為に、何度か大きく息をする。

……。

よしっ！

「ＭＳ隊各機へ、略式シークエンスを開始します。ＩＳ１３０１、発進位置へ、続いてＩＳ１３０５、準備してください」

「了解」

「わかったわ」

ブラックＢＯｕＲＵの誘導の下、機を発進位置に持って行き、脚部をカタパルトにロックする。

「……ロック確認、進路クリア、ＩＳ１３０１、発進どうぞ！」

「了解！　ラインブルグ、ゲイツ、ＩＳ１３０１、出るぞ！」

圧し掛かってくるＧが最大に達する頃には、機体は既に宇宙へと飛び出していた。

◇　◇　◇

戦隊はヤキン・ドゥーエ要塞よりも少し後方の宙域に位置している為、要塞前面宙域に入るまで時間が掛かる。その時間を使い、俺は前線の状況をモニターで映し出し、自分の目で把握してみる。

要塞正面宙域には要塞や艦艇からの閃光が幾重にも走り続けており、その度に大きな火球が生まれている。また、機動戦力の主戦場であるＮ、Ｓ両フィールドでも、ビームが頻繁に行き交い、時折、爆光が瞬くのも確認できた。

「ベルナール、敵第三波の突入座標はわかるか？」

「今の状況で特定までは……、ですが、先程も伝えました通り、Ｓフィールドなのは確かです」

Ｓフィールドか……。

「先輩！　ＭＳ隊全機の出撃を確認しました！　各小隊とも、コン

ディション・グリーンです！」
「了解した。……ベルナール、複座型の位置は？」
「少し下がって、Ｓ－６二に確認しています」
Ｓ－６二ってことは……Ｓフィールドの中央右側寄りにいるって事か。
「よし、俺達もそこに向かう。二人にも一応、連絡を入れておいてくれ」
「了解です」
あの二人、本当の意味での実戦……戦場だけど、大丈夫かな、なんて心配をしていたら、通信受信を知らせるランプが点ったので出てみる。
通信相手としてサブモニターに映し出されたのは、共同するロメロ隊の隊長、今はヘルメットとバイザーでわからないが、浅黒い肌と光沢のある黒髪を持ち、渋くて甘いなんて言葉が似合いそうな、彫りが深いマスクの色男だった。
「こちら、ロメロだ」
「ラインブルグだ」
「おう、共同するんで一応の挨拶だ」
「ああ、よろしく頼むよ」
「用件の前に……、前に俺達の隊で面倒を見た、おまえん所の複座型……、嬢ちゃん達は元気か？」
「これから向うＳフィールドでお仕事中だよ」
「ほぅ、頑張ってるんだな。よしよし、けっこうけっこう。若いもんが頑張っているんだから、ここはうちの隊もハッスルせんとなぁ！」

もっとも、俺よりも若いくせに、非常に、おっさん臭いがな。

「で、ラインブルグ、何か作戦案はあるのか？」

「正直、これといっては思い浮かばんよ。精々、前線を抜けて来た敵を十字砲火（クロスファイア）で順次叩く位か？」

攻撃に二小隊、周辺警戒に一小隊、相手を崩す為の強襲に一小隊、といったイメージだな。

「だがよ、情報を見る限りじゃ、新手は纏まってくるようだし、そんな悠長な事をしていられんかもしれんぞ？」

「ああ、対応しきれない可能性の方が高いな」

「それを前提に踏まえてだ……、俺達だけで、全てを足止めできると思うか？」

「正直、難しいだろうな。おそらく、一部を拘束するのに手一杯で、突破を許すはずだ」

……常に思うことだが、数の差が厳しい。

「けど、第一防衛ラインの連中が増援に来るまでは、命令通り、少しでも多くの敵を引き付けて、足止めに務めるしかないさ」

「やっぱり、それしかないか。……んんっ、ところで、ラインブルグ、少し相談なんだが」

「何だ？」

「うちの隊がより前線寄り……Ｓ－四に近いＳ－三で動くから、お前の隊でよ、うちを抜いた連中の相手をしてくれねぇか？　……なんというか、うちの隊は神経細かい事が嫌いな連中ばかりでよ、前で暴れる方が性分に合っているみたいでな。まぁ、俺も後方で全体を見るのは肌にあわんというか……、ぶっちゃけると、面倒だ」

……こうも明け透けに？好み？を語られると、毒気も抜けるよ。

「了解、うちが後で抜けた連中を担当するよ」

「おう、頼むぜ！　通信終わり！」

やれやれ、何で、白服ってのは、こう、ちょっと変わった奴が多いんだろう？

ラブロフ隊長はメカ好きだし、モンテルラン隊長は古典アニメ好きだし、ロメロは極度の女好きだし、ラウは表面だけクールな隠れた熱血だし、ユウキはＢＯｕＲＵラブの上にむっつりだし……。

むぅ、こうやって考えてみると、案外、白服の最低条件は、変人であること、直情的ではないこと、だったりしてな。

「先輩、複座型とのコンタクトに成功しました。向こうが、Ｓ－６二まで誘導してくれます」

「おっ、こりゃ助かるな」

フェスタやスタンフォードもこっちに構う事ができるってことは、まだ、余裕があるって事かな？

「ベルナール」

「……はい、こちら、ベルナール」

「第三波の動きは？」

「さっきと変わらず、ＭＡ部隊を先頭に幾つかの群に分かれて、Ｓフィールドへ向っています。そろそろ、前線に到達するはずです」

……まさか、いきなり破られるなんてことは、流石にないよなぁ、っと、複座型からの通信か？

「通信はこのままで」
「はい」

複座型からの通信に応答すると、スタンフォードの声がすぐに耳に入る。

「ラインブルグだ」
「こちら、スタンフォードです、隊長、少しいいですか？」
「……何かあったのか？」
「ええ、実は、ロベルタの具「大丈夫、だよ！」……ロベルタッ！」

……ロベルタの様子が変だな、声が昂ぶり過ぎているように感じる。

「スタンフォード、何があった？」
「はい、狙撃任務中、フェスタの具合が急に悪くなって……」

急に調子が悪くなったか。

……。

狙撃担当はコパイロットだったなと思い出しながら、問題のフェスタに声を掛けてみる。

「フェスタ」
「隊長、私は大丈夫ですっ！　まだやれますっ！」

声には震えがあるし……、抑揚が利いていないな。

と、なれば……狂気溢れる大規模会戦という環境負荷と、戦闘で直接的に人を殺した呵責が合わさって起きた、ストレス反応かもしれん。

「モニターに顔を出してみろ」

「ッ！」

しぶしぶといった雰囲気でフェスタがモニターに顔を見せるが……、普段と比べて、明らかに血の気がなかった。

「スタンフォード、一旦下がれ」

「隊長ぅ！　私はッまだっ！　まだやれますっ！」

「……フェスタ、お前のやる気は十分にわかっているよ」

「だったらっ！」

「けれど、お前の今の状態だと、空回りするだけだから、出ていても十全な働きはできない。だから、一度艦に戻って、心を落ち着かせろ。……それから、また出てきて、俺達を助けてくれ」

俺の言葉を聞いて、静かに涙を流し始めたフェスタの姿に、複座型を戦場に出した自身の判断が間違っていたのかと迷うが……、その間違いも含めて、全ての責を背負うのが自身の役目なのだと思い直す。

「スタンフォード、誘導はもういいから、一度、補給に戻れ。……それと、エヴァ先生の所に顔を出すようにな」

「了解です。……二人で行きます」

「ああ」

複座型からの通信が切れるとすぐに、ベルナールに頼み事をする。

「ベルナール、今、二人に負担を掛けたくない。すまんが、誘導を頼む」
「了解しました。それと、敵第三波が前線部隊と会敵しました。突入場所は、S－74です」
「……やっぱり、少し、差し込まれてるな、うん、了解した。それと、敵の第三波がどう分かれたのか、詳細な情報が欲しい。これも頼めるか？」
「もちろんです。できる限り早く伝えます」
「ああ、よろしく」

ベルナールの姿がサブモニターから消えると、聞き慣れた声が入ってきた。

「先輩」
「っと、レナか。……もしかして、今のやり取りを？」
「ええ、聞いてました」
「……そうか。なら、今後は、二人の様子を十分に注意してくれ」
「……わかりました」

後悔や反省は後だと自身に言い聞かせ、意識を切り替えて、小隊長連中に通信を繋げる。

「デファン、リー」
「うっす」
「何でしょう」
「お前達の小隊を攻撃の主軸に据える。両翼に展開して、迎撃エリアに侵入した敵部隊の半包囲を目指せ」
「了解っすよ」
「了解です」
「マクスウェル、お前の小隊はやや後方に下がって、周辺警戒とデ

ファン、リー両小隊の援護だ」
「わかりました」
「レナ」
「はい」
「俺達は前面に突出して強襲を仕掛けて、敵の陣形を崩す。……付き合せて悪いが、よろしく頼む」
「そんなの今更ですよ、了解しました」

今更か……、確かに、レナには助けられてばかりだ。

「デファン、それと進路変更だ、Ｓ－７二への誘導を任せるぞ」
「了解っす」

デファン小隊が先導し、それに追随する形で隊は一斉にＳ－７二へと進路を変更した。

88　血戦、ヤキン・ドゥーエ　4

「隊長、敵第三波は全部で五群に分かれました。第一群はＭＡ六十で構成され、Ｓ－７四にて、第二防衛ライン所属機十一が迎撃中です」

ベルナールの呼び掛けを受けて、Ｓ－７四……、今いるＳ－７二よりも更に前方にある宙域へと意識を向けると、そこだけ他よりもビーム光が多いように感じられた。

それを裏付けるように、モニター脇の戦況図には二十機程の味方ＭＳが防衛線を形成して、敵の第二波に加えて新手の第三波第一群に対応している様子が映し出されている。

「了解した。全機、迎撃はＳ－三寄りで実施する。マクスウェル、レナ、敵の侵攻進路を予測して、最適な迎撃ポイントを割り出して誘導しろ」

「「了解！」」

「ベルナール、敵の第二群はどうなっている？」

「はい、第二群はＭＳ三十六で、つい先程、第一群と同じくＳ－７四において、増援に間に合った第一防衛ライン所属機二十五が横撃を仕掛け、足止めに成功しました。それと、クルーゼ隊に出撃命令が出ました」

歴戦のクルーゼ隊は心強い援軍だが、今日の指揮は隊長代理に委任している。隊長であるラウは艦内設備ではプロヴィデンスの整備が難しいからって、ヤキン・ドゥーエ要塞から直接出ると言っていたな。

っと、それよりも今は、敵の動き、……残り三群がどう動いているかだな。

「それで、残りの敵は、突破を図ってるのか？　それとも機動戦力の撃滅狙いか？」

「現在の所、残り三群の動きに変わりはなく、突破を目指しているようです」

つまり、今来ている連中は傷口を広げるよりも、深く食い込んでから、食い散らかすつもりなのか。

なら、こっちは食い散らされる前に叩くだけだ、と言いたい所だが……、第四防衛ラインの予備戦力って、もう、ないような？

何とも、悲劇的な現実に思い至っていたら、レナから通信が入った。

「先輩、大凡の進路を予測しました。マクスウェル小隊が先導して、隊を移動させます」

「了解」

既に動き始めている他の機に続きながら、予め、ベルナールに指示を出しておく。

「ベルナール、後方の動きに……新たに出撃してくる、速度がある敵が出てくるはずだ、それに注意してくれ」

「……核搭載機がそれだと？」

「ああ、そちらの観測なら判別できるはずだ。警戒の声一つで、対応も考えられるし、何かに利用できるかもしれない」

「わかりました、注意しておきます。それと、今、複座型が帰艦しました」
「そうか……、一安心だな」
「ええ。あ、増援の第一防衛ライン所属機二十三が間に合いました。Ｓ－７三に到着して、敵第三群、ＭＳ三十六に対して阻止戦闘を開始しています」

後、残りは二群だが……もう、増援は期待できないだろうなと考えながら、隊形が形成できているかを確かめる。

……よし、この配置と動きなら各小隊長に任せても、大丈夫だな。

「ベルナール、他に増援部隊の充ては？」
「Ｎフィールドでも圧力が増大している為、第一防衛ライン所属機からはもう手当てできそうにありませっ！　Ｓ－７三において、敵第四群、ＭＳ三十六機に対して、ロメロ隊が阻止戦闘を開始！　……敵の半数以上が止りません！」

そら、三十六対十二なら、間違いなく抜かれるよな。

「各機、気を引き締めろ！　すぐに来るぞっ！」

と言っている間に、ストライクダガーの一隊……二十機程をモニターで確認する。

「ラインブルグ隊、交戦開始！　ビーム以外も注意しろよっ！」
「了解！　リー小隊、迎撃開始！」
「うっす！　デファン小隊、迎撃を始めるッすよっ！」
「マクスウェル小隊、牽制を仕掛けます！」
「先輩！　私達も！」

「ああ、ラインブルグ小隊、強襲を掛けて敵隊形を崩した後、援護に回る！」

レナの声に応えて、機の全スラスターを噴射させ、デファン達の迎撃射撃で散開したストライクダガーの一部へ、背後から流れて行くビームと共に向って行くと、相手も俺とレナの動きに気付いたようでビームライフルを撃ち始めた。

徐々に大きくなる恐怖を奥歯で噛み殺し、アドレナリンの分泌からか、遅く見え始めた飛来するビームを左腕のシールドで防いだり、ロールで回避しながら接近を図っていると、ベルナールの声が耳を打つ。

「隊長、敵の第五群がＳ－７よりＳ－６に進路を変更した事を確認しました。構成はＭＳ五十一、うち、三機が新型の模様です。この第五群には、クルーゼ隊十七及び第一防衛ライン所属機十四がＳ－６二において、迎撃に当たります」

「わかった！」

「ッ！　訂正！　第五群の一部が更に進路変更！　ＭＳ十二機が進路を変更して、直上、ヤキン・ドゥーエ第一艦隊を突き上げます！」

「……おそらく、Ｃフィールドの迎撃陣に、穴を開けるつもりだ！　……以後の状況把握を頼むぞ！」

「了解！」

その答えを聞いた後は、他の戦域情報を頭の片隅へと追いやり、こちらのビームを遮る大型シールドを忌々しく思いながら、目前に迫った三機のストライクダガーに近接機動戦を仕掛ける。

っと、その中の一機が後方からの援護射撃に運悪く命中したようで、両足をもぎ取られて流されて行った。それに注意がいってしま

い、気が付いたら、ストライクダガーに激突しそうっ！

「ッ！」

……咄嗟に上方へと機位をずらして、激突と近接砲を回避。

ついでに、その機動を活かして、背面に……。

「っと！」

回り込もうとしたが、狙ったストライクダガーの僚機が牽制射撃を入れた為に更なる回避を強いられる。

よって、そのまま大回りで後方に入り込もうとしたら、二機目の敵がこちらを追跡するように機体を回転させ、ライフルを向けようとして……後方から俺を追随していたレナに脇腹を撃ち抜かれた。

仕方なく目標を衝突しそうになった一機目に変更し、相手がレナに気を取られている内に胴体を撃ち抜き、気ままに回避機動を取る。

……数本のビームが機体を追うように流れ去る。

「先輩！　仰角、敵、三機！」

「よし、次は、こいつらだ！」

狙わない相手にモノアイを合わせることで牽制を行いながら、別の機を狙い、回避先も予想して、四回立て続けにライフルの引き金を引く。

三発目が命中して、右腕から胴体を吹き飛ばしたようだがっっっ

！！

「先輩！」

……機体近くで発生した爆発の衝撃で姿勢が大きく崩れてしまった。

さっと機体情報に目を向け、アラートが出ていない事を確認した後、無理な制御はせず、ＡＭＢＡＣで徐々に立て直していき、……一気に、制御を取り戻す。

と、同時に、流されていた方向とは逆側に切り返す為、姿勢制御用の側面バーニアを右側だけ全て全力噴射させる。

……強烈な横Ｇを体感する中、流れていた軌道を見ると、予測通りにビームが四本程走っていった。

「大丈夫だっ！　それより、レナ、さっきの攻撃は確認したか！？」

「はい！　ライフルから実弾が発射されるのを確認しました！」

さっきのが今日、確認された兵装か、等と納得しながら再び敵へと注意を向けると、レナが牽制射撃を加えて、こっちに接近されないように足止めをしてくれていた。

「レナ、助かる」

「いえ、私は先輩の？パートナー？ですから、当然の事をしただけです」

……パートナー、相棒か……、確かにレナ以上に俺に合う相棒は、そういないだろうな。

「そうだな。……一度、隊の状況を把握したい。目の前の二機をさっさと潰してしまおう」
「了解です」
「よし、援護を頼む」

どう崩そうかと考えるが、まずは機体のスラスターを吹かせて接近を図り、二機のストライクダガーに圧力を掛けることにする。

その途中……、ふと、思い付き、モノアイをあらぬ方向を向けてから、左腕とモノアイの動きでもって二機のうちの一機を指し示してみる。
すると、左腕を向けた一機は慌ててたように回避行動を取り始め、もう一機も警戒するようにモノアイを向けた方向へと頭部を動かした。

「ッ！　そこっ！」

レナの声と共に、連続して射撃が入り、隙が出来た両機の右肩部を撃ち抜き、大破させて戦闘不能にする。

……むぅ、たとえ、どんな強力な兵器に乗っていようが、乗っているのが人である以上、人の反応や心理が大きく影響する、ということかな。

「先輩、どうかしましたか？」
「いや、何でもない。それよりも、少しの間、警戒を頼む」
「はい」

レナに周辺警戒を任せ、各小隊に通信を入れる。

「ラインブルグだ、各小隊、現状を報告しろ」

「こちらデファン！　四機撃破したっすけど、モーリス機がシールドに爆裂弾を喰らって、左腕をもぎ取られて、本人も軽傷を負ったっす！　それと、ジョンソンが右足に被弾、機動力が大きく低下しているっす！」

「こちらマクスウェル！　敵一機を撃破しました。全機健在のまま、現在はデファン小隊を援護して、敵五機と交戦中！」

「こちらリー！　三機を撃破しましたが、依然として、敵四機と交戦中！　小隊に被害なし！」

……良かった、まだ、被撃墜は出ていないようだ。

「了解した。リー、すまんが、しばらく耐えてくれ」

「わかりました！　こちらで何とか、落としますっ！」

「なら、期待させてもらうぞ。……デファン、二人を連れて、一旦後方へ下がれ。撤退の呼吸を意識させろ」

「うっす！」

「マクスウェルは、俺達が合流するまで、デファン達の後退支援に徹しろ」

「了解です！」

「レナ、行くぞ」

「はい」

マクスウェルに合流する為に位置を把握して、機体を動かし始めたら、俄かにエルステッドから通信が入った。

「こちら、エルステッドです。隊長、聞こえますか？」

「聞こえているぞ、何かあったのか？」
「はい、隊長達の交戦開始後、敵第四波の出撃を新たに確認しました」
「なん……だと……」

いや、数で劣勢なのはわかっていたとはいえ、こうも現実を突きつけられると、精神に来るものがあるなぁ。

……って、いかん、気をしっかり持て。

「第四波はどう動いている？」
「はい、第四波は三分の一がＮフィールドへ、三分の二がＳフィールドに向っています」
「こちらの予備戦力はもうないのか？」
「いえ、分艦隊のＭＳ隊を迎撃に充てるとのことです」

あれ？　まだ分艦隊のＭＳ隊は出撃してなかったのかって。

「けど、二手に分かれている分艦隊では全てをカバーしきれないはずだ」
「はい、前線が押し込まれると厳しい事になります」
「まったく、？阿呆ども？の所為で……」
「え、えーと」
「おっと、すまん。……それで、ヤキン・ドゥーエ第一艦隊はどうなってる？」
「Ｎフィールドからの割いた迎撃機が到着して、敵全機を退けましたが……、十二隻沈められました」
「……そうか」

二十隻中、十二隻も落されたか……。

そうなると、Cフィールドの迎撃態勢に大きな穴が出来た事になるから、ヤキン・ドゥーエ要塞の負担が大きくなるな。

「今後、増援があった場合、総司令部はどうすると？」

「そこまでは通達されませんでしたが、最終防衛ラインの本国艦隊がヤキン・ドゥーエ後方に向けて、移動を開始していますから、これで敵第四波に備えるのではないでしょうか」

「……そうか」

うーん、それだと、別方向に回りこまれたら、拙いような気がするんだが……、現実、主戦場が数の差が埋まらないでピンチなら、仕方がないか。

……となると、そろそろかもしれないな。

「ベルナール、さっきも言ったが、本命の核搭載機が出撃するかもしれないから、注意してくれ」

「了解です」

エルステッドとの通信を切ると、待っていたかのようにすぐにレナからの通信が入った。

「先輩、マクスウェル小隊及びストライクダガー五機をモニターで視認しました」

「……俺も確認した。横撃を仕掛けよう」

「了解」

たまに迎撃されたミサイルや艦砲弾の残滓、流れ弾ならぬ流れビームが飛んで来る為に、周囲への警戒を怠らず、マクスウェル達を

半包囲にしようとしている五機の側面に回り込む。

「マクスウェル、すぐに隙を作るから、上手くやれよ」

「了解！」

まずは、マクスウェル達への負担を軽減させるために、攻撃の中心になっていると思しき一機の胴体を狙って一射。

……ライフルを持った右腕に命中するも撃破はできず、五機が五機とも回避機動を開始する。

「……レナ、やっぱり俺の腕じゃ、攻撃しても無駄になりそうだから、後を頼むわ」

「はいっ！」

語気鋭く応えたレナは早くも一射し、回避機動で一番隙が大きかった一機のストライクダガーを撃ち抜いた。

こうやって、回避行動を取る敵にビームが吸い込まれるように命中するのを傍から目の当たりにすると、本当に、レナの腕と感覚の良さがわかる。

……おっ？

敵の動揺が大きくなったみたいだな、動きが急に荒くなった。

「マクスウェル、援護と警戒は俺達がするから、畳み込め」

「了解です！」

レナにマクスウェル達の援護を任せて、俺は引き続き、周囲を警

戒する。

周辺宙域で煌くビームは未だに衰えを知らず、宇宙は死の瞬きで満ちている。その爆発光が、ミサイルなのかＭＡやＭＳなのかと、瞬間、考えるも、今は必要ないことだと思い直して、戦闘宙域を全て見回した後、連合軍艦隊が展開している宙域へと意識を向ける。

……青白いスラスター光が多数、確認できた。

確認の為にエルステッドへ連絡を取ろうとしたら、向うから通信が入ってきた。

「隊長、よろしいですか？」

「ベルナールか。……出撃だな？」

「はい。二隻の３００ｍ級より六十程の出撃光を確認しました。おそらくはこれらが……」

「ああ、本命の核搭載機だろうな。……やはり、Ｓフィールドからか？」

「敵第三波が深く切り込んだ影響で、Ｓフィールド全体が大きく抉られている状況ですから、その可能性が非常に高いかと」

……連中は、プラント・コロニー群とヤキン・ドゥーエ要塞、どちらを狙うだろうか？

「総司令部からは、何か連絡はあったか？」

「はい、総司令部からは、これらの対応とＳフィールドの穴を埋める為、Ｎフィールドから一部部隊を何とか引き抜き、増援として送るとの連絡がありました。また、最終防衛ラインのプラント防衛隊

が所属ＭＳを全機出撃させて、コロニー群への核攻撃に備えています」

プラント防衛隊も大半が……八割が訓練兵とはいえ、ヤキン・ドゥーエ防衛隊と同じく、全百四十四機をゲイツに更新しているから、普通に考えて、プラント・コロニー群は守りきれるだろう。

油断さえ、しなければな……。

「あ、後それと、ユウキ隊長が『核攻撃への第一次迎撃は？天帝？で行う』と隊長宛てに伝言を残されました」

「そうか、了解した」

「……あの、隊長、？天帝？って？」

「何、直にわかるよ、通信終わり」

……核の対処を、他の奴ならばともかく、ザフト屈指のエースであるラウがプロヴィデンスで担当するのなら、後方へ抜けることはないだろう。

っと、レナか？

「先輩、マクスウェル、リーの両小隊が敵を全て撃破しました。こちらに合流するために、移動中です」

「……了解。損害は？」

「マクスウェル小隊全機のシールドに負荷が掛かっていますが、許容範囲内です。リー小隊には損害はありません」

……ほぼ無傷でほぼ倍の敵を退けるなんて、本当に、頼りになる奴等だよ。

「後、後退中のデファンからも通信が入りました。第五群に対応しているクルーゼ隊及び増援部隊が苦戦中とのことです。また、『新型機が三機、無駄に元気に暴れまわってるっす』とも言ってました」

まぁ、新型込みの三十九と三十一じゃ、流石のクルーゼ隊でも、隊の要でもあるトップエースのラウが不在である以上は、抑え切れないだろうし、仕方がないことだろう。

「……って、あいつらは無事なのか？」

「デブリの振りをして、戦域の隅っこを抜けたとのことです」

「度胸あるなぁ」

「ふふ、デファンは先輩から直接教えを受けた後輩ですからね」

それは君も同じなのですが、という突っ込みは、今は、止めておこう。

「前方は……、ロメロの奴に任せるか。よし、合流したら、後方に下がって、クルーゼ隊を援護し、敵第五群の撃滅を図る」

「了解です」

……。

本音を言えば、プラントの命運が掛かっているだけに、核攻撃の阻止に動きたいという気持ちがあるが……、現実的に考えても、十機に満たない程度のゲイツでは広範囲での攻撃に対応できない。

他力本願で申し訳ないが……、ここはラウに全てを委ねるしかない。

……頼むぞ、ラウ。

89　血戦、ヤキン・ドゥーエ　5

デファン小隊を除いた計八機で、クルーゼ隊や増援部隊と新型を含む敵第五群が戦闘している、後方のＳ－６二に引いて行くと、ゲイツやジンＭ型で構成された二十機程の部隊が三十前後のストライクダガーの他、青、緑、黒と、それぞれカラーリングされた新型機から成る連合軍部隊と交戦しているのが確認できた。

やはり、敵の新型機が突出した性能と、連携と言えそうで言えなさそうな微妙な相互支援で、味方機を圧倒しているようだ。

それでも、何とか均衡を保っていられるのは、一機のＭＳ……装備を追加していたから一瞬、わかりにくかったが、どうやら連合から鹵獲したＭＳで、確か、汎用タイプのデュエルだったかな、そのデュエルが新型機を全て担当して、他のＭＳに手を出させないようにしているからだろう。

実際、一機で新型三機と交戦して、撃墜されることなく拘束し続けているのだから、相当に腕のいいパイロット……エースなのだろう。もしも、パイロットが以前と交代していないのなら、本当に赤服を纏うだけのことはある腕だ。

……いや、そもそも、デュエルという機体自体も、流れ弾に中っても無事に大気圏を抜ける事が出来た強運（凶）を持っていたんだったな。

とにかく、そのエースの驚異的な頑張りと運もある殊勲機のお陰で、戦闘前に、新型三機それぞれの機体特性をざっと見て取る事が

できたのだから、本当に感謝しきれない。

で、俺が確認した限り、新型三機のうちで最も脅威なのは、？緑色？の機体だろう。

実弾を弾き返す装甲とビームを歪める両肩部のシールドなんて強力な防御力に加えて、バックパック両端に付いている可動砲に両腕の大型機関砲、果てはバックパックから撃つビームを曲げるなんてトリッキーな攻撃までしてくる。正直、撃破するのは機動戦で持って、相手の隙を見出して、胴体部を撃ち抜く以外の方法は考えられない。

それにしても……、？大鎌？みたいな謎な代物を装備しているけど、よく反作用で柄の部分が折れないよなぁ。

次に、ＭＡ形態に可変する？黒色？だが、頭部に装備された強力なビーム砲やシールドと一体化している二連装砲がメインの兵装みたいだけど、シールドとの一体型兵装は取り回しが悪い上に使用方法が難しいって事を現在進行的に経験しているから、それ程の脅威ではないだろう。

しかし、こいつも？鉄球？なんて、漢のロマンを体現させた恐ろしいモノを持っているが……、まぁ、あのワイヤー部分を切れば、何とかなるだろう。

もしも、こいつがＭＡ形態で一撃離脱的な戦闘に徹すると面倒なことになるが、頻繁に可変を繰り返しては狂的な攻撃を仕掛けてきているし、隙を見出せば落とせるはずだ。

後、？青色？に塗装されている大火力支援機は、両肩の大型ビー

ム砲にバズーカ、シールドに付いた可動砲に胸部の大出力ビーム砲なんて、砲撃大好き人間が見たら涎を垂らしそうな程に重武装をしているけれど、前に戦ったバスター型みたいにミサイルを装備していないみたいだから、距離を詰めていけば、確実に潰せるだろう。

幾ら大出力、高威力の武器を装備していても、遠距離だからこそ意味があるモノで、接近してしまえば、どうということはない場合が多いからな。

で、どうするかだが……、青の支援機にはマクスウェル小隊、黒の可変機にはリー小隊を充てるとしよう。

「先輩っ、指示を！」
「ああ。連中の相互支援を絶ち、それぞれを孤立化させる」
「隊長、担当は？」
「マクスウェル、お前の小隊は支援機を狙え。シールドを破壊すれば、楽になるはずだ」
「了解です」
「リーの小隊は可変機を担当しろ。無理に突っ掛かる必要はないからな」
「了解！」

で、残っているのは、例の？緑？である。

「……ということは、私達は、アレですか？」
「まぁ、単機にしてしまえば、なんとかなるさ」

連携さえ崩してしまえば、特化機は特色がないのが特色の汎用機に劣るはずなのだ。

……まぁ、？黒？と？緑？に関しては、汎用機に更に上積みしたような機体のような気もしないでもないがな。

「よし、攻撃を開始する」

「「了解！」」

にしても、たった一機で厄介そうな新型三機と渡り合える猛者は貴重だよなぁ、等と考えながら、ビームライフルを敵新型機に撃ち込んで、注意を引く。

「き、きさゃまらぁっ！　何をっっ！　これ位っ！　俺だけでっ！　十分だっ！　だからっ、下がれぇっ！」

「はいはい、お前さんが無駄な犠牲を出したくないのは、よくわかったよ」

「ッ！」

「こちらはラインブルグ隊のラインブルグだ。まぁ、援軍の押し売りって奴だから、拒否は受け付けない」

「……い、いえ、失礼しました。……援軍、助かります」

「そうかい？　まぁ、でも、大したもんだよ、お前さんはさ。……新型を一手に引き受けてくれていたおかげで、味方の損失が少ない」

レナと一緒に”緑”へと牽制射撃を入れながら、マクスウェル、リーの両小隊が新型機同士での連携を取れないように他の二機をそれぞれが誘導するのを待つ。

「……クルーゼ隊、隊長代理のイザーク・ジュールです」

「ああ、ラウからも聞いているよ。まずは隊長として、隊の状況を把握しろ」

「わかりました」

「リー」
「何でしょう？」
「言うのを忘れていたが、例の支援機からの砲撃は少々離れても届くから、気をつけろよ」
「……了解、マクスウェル小隊から引き離します」
っと、緑が両肩のシールドを前面に出してきたか。
「レナ、射撃中止、機動戦を仕掛けるぞ。……潜り込んで、チャンスを窺え」
「了解です」
まずは、一当たりしてみるか。
大事を取って、右回り……左手のシールドで攻撃を防御できるようにしながら側面に回り込む機動で接近を図る。
……。
おいおいおい、射撃しながら、レナを無視して、こちらに一直線かよっ！
つか、バックパックを頭に被んなっ！
って、突っ込んでる所じゃなかったっ！
「ッ！」
まさに死神が振るかの如く、？緑？が大鎌が振り上げられたので、機体ごと命を刈られてしまわないように、左側面のバーニアを吹か

して、回避機動を取る。そして、お返しに右腰部のＥＥＱ７Ｒを撃ち出す。

「なっ！」

？緑？はこちらのビームアンカーを左肩部シールドの端であえて受け止めると、左腕をこちらに向けて、大口径砲の穴が見えっ！

「先輩っ！」

レナの声と共に、真下からビームが俺の機体と？緑？の間を通り抜けて行く。？緑？が咄嗟に回避行動を取った為、引き摺られないようにアンカーを切り離し、牽制の頭部機関砲をぶっ放しながら、急いで距離を取る。

……一応、機関砲の弾はちゃんと胴体に中ったのだが、切なくも弾かれてしまった。

「おいおい、レナ、こいつはＰＳ持ちかもしれん。……強いぞ」

「見たいですね。さっき先輩の攻撃を受けた時の反応も半端じゃなかったです」

レナが撃つ牽制のビームを煩わしそうに？緑？が避けていると、件の忌々しい肩部シールドをレナの方向へと向けた。

よって、今度は俺が、？緑？を落とすべく、必殺の一撃を放つ。

もっとも、？緑？だって棒立ちでいるはずもなく、余裕で避けられてしまい、頭に乗せたバックパックからビーム砲を撃ってきた。

そのビームが歪曲する事を前提に、大きく機体位置を移動させて再び、側面に回り込むべく旋回し始める。

……おっ？

エルステッドからの通しっ、スラスター推力最大っ！

「ッぁあああっ！」

？緑？の腕から断続的に弾がっ、機体の後方を追ってっ！

いつものように、スーツ内で冷や汗が流れ出たのを感じると、また、レナが？緑？への射撃を入れてくれたので、向こうに興味が移ったらしく、機体の向きを変えたようだった。

……もう少し噴射するのが遅かったら、？緑？の大口径砲の餌食になる所だった、と強制的に冷まされた頭で考えながら、？緑？へとライフルを撃ってレナに集中できないように牽制しつつ、エルステッドとの通信を繋ぐ。

「どうしたっ！？」

「あ、隊長！　敵の第四波がSフィールドに一時的に大きく開けた穴を敵核搭載機が突破！　第一艦隊担当のエリアを抜け、大型ミサイルを発射しました！」

「ッ！　攻撃対象は！」

「ヤキン・ドゥーエがメインのようです！」

「了解！　……全機に告げるっ！　今から、何があっても、驚かずに戦闘を続行しろっ！」

まぁ、俺も含めて、無理だろうけどな。

――……ちろっ！

……って？　今、ラウの声が？

ッ！

強烈な光が……、かつて、ユニウス・セブンで見たあの光には及ばないものの、幾重にも重なり合い、擬似的な太陽がそこに生まれたかのような、強い閃光がCフィールドで断続的に広がって行く。

……未熟……不完全核爆発で、これかよ。

恐ろしい威力だな、おい、連合の核ってのはよ。

「っと」

俺達と同様、核爆発に気を取られていた?緑?に向けて、ビームライフルを撃つ。

……っし！　?緑?の右腕と大鎌をもぎ取った！

「……せ、先輩……今のは?」

「気にするな、ただ核攻撃を迎撃しただけだ」

「ちょっ！　核攻撃って！　気にしますよっ！」

ぎゃーぎゃー、とレナが喚いているが無視して、？緑？への攻撃を続けるが、相手も立ち直りが早いようで、いつものように例のシールドを……って、また通信か？

「こちら、ラインブルグだ」

「じゅ、ジュールです。……ら、ラインブルグ隊長、……今の迎撃は、誰が？」

「お前さんの所の隊長だよって、ほれ、噂をしていれば、来たぞ」

亀のこ……げふげふん……ドラグーンシステムを背負ったプロヴィデンスが、何事もなかったように、こちらに向かってくるのがわかった。

……むぅ、こうやって動いている姿もまた、迫力があるなぁ。

「クルーゼ隊長！」

「む、イザークか？　それにアインも？」

「よう、お疲れさん。……さっきの迎撃、流石だな」

「ふっ、あれ位、止った的と同じだ、どうということはない。……それよりも、苦戦しているようだな」

「ああ、ちょいとやっかいな奴等がいてな、梃子摺ってる」

「ふむ、そうか。……プロヴィデンスでの対ＭＳ戦闘も試したいのだが、アイン、私が相手をしてもかまわぬか？」

「もちろん、かまわないよ。というか、正直、楽ができて助かる。……早い所、家に帰りたいし、手っ取り早く終わらせてくれたら、ありがたいな」

俺の明け透けな言葉を聞くと、ラウは苦笑を浮かべ、ジュールは口を大きく開けて唖然としているようだ。

「そうか。……ならば、早々に終わらせるとしよう」

ラウのその言葉と共に、両腰部からドラグーンシステムの小型端末が飛び出して行く。

好い機会なので、ドラグーンを使った戦闘を周辺を警戒しながら観戦してみる。

プロヴィデンスが射出したドラグーンの数基の小型端末は、？緑？の周囲に展開したかと思うと、一時も止ることなく飛び廻り、次々にビームを撃ち出しては？緑？の装甲と武装を削り取っていく。

？緑？が小型端末へと対応に大童になっている間に、ラウ自身……プロヴィデンスが急速に接近すると、大型ビームライフルでもって胸部へと止めの一撃を加えて、落としまった。

……実に、三十秒にも満たない一方的な戦闘だった。

爆散した衝撃で飛んで来た？緑？の肩部シールドを、咄嗟にシールドの取っ手を離した左手で受け止めていると、ドラグーンの端末を呼び戻したプロヴィデンスが悠々とこちらに接近してくる。

その威容というか存在には、既に？天帝？の名に相応しい風格が……。

「ふむ、これだけでは物足りぬな」

「む、あれだけではお腹一杯にはなりませんか？　……でしたら、

後二杯程、活きの良いのがいますが、いかがします？」
「ふふっ、ここは乗せられて、？お代わり？と応えておこうか」
「よし。……マクスウェル、リー、そちらはどうだ？」
「こちらマクスウェル、支援機の癖に、中々の機動力で詰められません！」
「リーです！　こいつも動き回って、拘束するのがやっとです！」

……だとしたら、誘導は難しいな。

「アイン、こちらから動く。……乱入する故、連携を乱さぬように伝えてくれ」
「おっ、そうか？　なら、そう伝えるよ」
「では、行ってくるとしよう。イザーク、部隊は任せるぞ」
「りょ、了解です！」

力強い機動で颯爽と、大きな背中を見せて、プロヴィデンスが去って行く。

まったく、男でも惚れるんじゃないかって思わせる位の漢振りだよなぁ。

実際、声が裏返って、頬が高潮していたジュールなんて、？ほいほい？と付いて行きそうだった。

……っと、馬鹿なことを考えてないで、連絡しよう。

「マクスウェル、リー、強力な援軍が行くからな。……余りの強さに思わず見惚れて、連携を崩すなよ？」
「了解、気をつけますよ」
「わかりました。特にベルディーニにはよく注意して言い聞かせて

おきます」

さてと……、エルステッドに連絡を入れて、全体の戦況を聞いてみるか。

「レナ、警戒を頼むぞ」

「……むぅ、それ位、さっきからやってますよ」

あらら、さっき、ちゃんと相手をしなかった所為か、少し不機嫌だな。

「後で、ちゃんと構ってやるから」

「別に、拗ねてませんっ」

……はい、どう見ても拗ねてます。

レナが見せた年相応の？愛嬌？に、口元が思わず緩むのを自覚しながら、エルステッドに連絡を入れる。

「こちらラインブルグだ。エルステッド……ベルナール、聞こえるか？」

「はい、こちらエルステッドです。隊長、敵攻撃機による核ミサイル攻撃は、クルーゼ隊長のプロヴィデンスによって全弾撃墜に成功、完全に阻止できました」

「ああ、こちらでも確認している。……それで、プラント方面には、核ミサイルは向わなかったのか？」

「そちらに向いそうなものもありましたが、それらも含めて、全てをプロヴィデンスが落としています」

流石はラウ、やることにそつがない。

「了解。それで、今の戦況はどうなっている？」
「前線はこちらが盛り返しています。やはり、核ミサイルへの迎撃が成功した影響が大きいようで、敵機動戦力が動揺しているみたいです。後、それに関連してだと思うのですが、N、S両フィールドより、敵部隊が撤退を開始しています」
「わかった。他には何かないか？」
「あ……、少し待ってください。……はい、伝えます。隊長、総司令部より、今、通達が来ました。新兵器を投入するため、追撃は控えるように、とのことです」
「……了解した」

通信を切り、これから使用される新兵器……ジェネシスの恐ろしい威力を思い、また、それを使用する決断を下したザラ議長が被る責……大量殺戮という業を思う。

……最もその業は、四月馬鹿の件と同じように、俺も、間接的には背負わないといけないものだ。

だから、見届けないといけないだろう。

……。

キリっ、なんて擬態語が聞こえてきそうな事を考えてしまい、何となく気恥ずかしさを感じてしまった所へ、機嫌を直したらしいレナからの通信が入った。

「先輩」
「ん、どうした、レナ」
「はい、マクスウェルとリーから通信が入りまして、クルーゼ隊長

が、敵新型二機を立て続けに撃破したとの事です」
「はっ？」
「……驚くのも無理はないと思いますけど、クルーゼ隊長、敵の新型二機をまとめて撃破したそうです」
……は、早っ！
というか、早過ぎっ！
俺達があれだけ散々苦戦していたのに、本当に驚きの早さだっ！
「え、えーと、先輩？」
「あっと、すまん、あんまりに早かったんで驚いたんだ」
「ふふ、その気持ち、私もわかります」
ラウとプロヴィデンスという組み合わせの凶悪さ、もとい、突き抜け具合は俺の想像以上だ。
「それで小隊に損害は出ているのか？」
「幸いな事に無傷です。ですが、両小隊とも推進剤やライフル用バッテリーの余裕がないそうです」
「……そうか。なら、一度、補給の為に退いた方がいいかもしれんな」
「そうですね。敵も退却していきますし、今のうちに補給しに戻った方が良いと思います」
レナの肯定意見もあるので、マクスウェル達に引き揚げを伝えようとした、その時……。

ヤキン・ドゥーエ要塞の陰から、赤く輝く一筋の光が、まるで長大な槍が勢いよく突き出されたかのように虚空を穿ちつつ、射線上に存在した連合軍のＭＳや艦艇を吹き飛ばしながら、月へ向かって突き進んで行った。

90　血戦、ヤキン・ドゥーエ　6

高エネルギーによって星間物質やデブリ等が加熱されたのだろう、赤く可視化された光の帯……生物の遺伝子を破壊する？γの槍？は目標である月のプトレマイオス基地にしっかりと突き刺さったようで、大きな爆発と共にレゴリスや岩石らしきものが半球状に吹き上がったのが、ＭＳのモニターでも確認できた。

……これで、停戦へと至るシナリオがまた一歩進んだ事になる。

「せん、輩、い、今の、何、なん、ですか？」

「プラント防衛の切り札……、さっき総司令部が言っていた新兵器……、ジェネシスだ」

「じぇ、ジェネシス、ですか？」

「ああ、強力なレーザー砲とでも考えておけばいい」

「でも、すぐ傍の敵艦隊を狙わず、月……まさか、プトレマイオス基地ですか？」

「その通りだよ、レナ。今の攻撃で、連合軍の根拠地を叩いた」

これで……、今現在のプラントを脅かす存在は、目前の連合軍艦隊だけだ。

「……先輩」

「ん？」

「今の先輩の顔、少し、怖いです」

「……そうか？」

「はい」

まぁ、確かに、凄まじい威力を目の当たりにしてしまって、顔が強張っているのかもしれない。

それならばと、意識して顔全体の筋肉を動かして、強張りを解してみる。

「ぷっ、変な顔」
「ちょっ！　ひどっ！」

思わず出してしまった感じの、レナの噴き笑いと心無い一言に、全俺が泣いたっ！

「あ、雰囲気が普段の先輩に戻った」
「おまっ、……一度、レナから見た普段の俺というものが、どういうものなのかを聞かないといけないような気がしてきたんだが？」
「……駄目、言えません、絶対に内緒です」
「うぅ、初めて会った時は、あんなにも素直だったレナが、こんなにも……捻くれて……」
「先輩、マクスウェル達が戻ってきましたよ？」

そうですか、無視ですか。

「はいはい、合流しましょう」
「ですね」
「あっ、それとな、レナ……」
「はい？」
「ありがとさん」
「ッ！　な、何のことですか？」
「んー、何のことだろうなぁ？」

バイザー越しにでもわかるほどに、徐々に紅く染めて行くレナの顔色や不審な挙動にはあえて触れないで、肩を竦めて見せた後、合流する為に機体を操縦し始める。

「ほら、合流するぞ」

「～～っ！　あ、ま、待ってください！」

まったく、我ながら無様な姿を晒してしまったものだ。

……相棒とはいえ、後輩に気を使わせてしまうなんて、俺もまだまだ修行が足りないということだな。

っと、通信？　……Ｘ１３Ａってことはプロヴィデンス、ラウからだな。

「お疲れ、ラウ、助かったよ」

「何、気にするな、私も良い準備運動になった。それで、アイン、君達は引き揚げるのか？」

「ああ、連合軍の動揺している今こそが追撃のチャンスなんだろうけど、推進剤やバッテリーの残量が厳しいし、とても無理だ。だから、今のうちに、一度、補給に戻るつもりだ。そっちはどうするんだ？」

「……私も一度退いて、機体を万全の状態にしておこうと思っている」

「追撃に参加しないのか？　まだ機体には余裕があるんだろう？」

「ふっ、今、私が求めるものは、血が燃え滾り、魂が熱く震えるような強者との闘争だよ」

……おいおい、ラウの闘争心に火がついているぞ。

「その強者がここに来ると？」
「ああ、奴がここへ……、この戦域に、向って来ている。それが、わかるのだ」
「なるほどな」

ラウの特定個人限定の強力レーダーが好敵手を感知しているってことか。

しかし、その好敵手は地獄を見るな、きっと。

……でも、戦域に向ってきているってことは、連合軍に増援が来ているって事か？

「ラウ、連合軍が再侵攻してくる可能性……、高いと思うか？」
「ふむ、ユウキから聞いた話だと、ジェネシスは先の攻撃で使い物にならなくなっているはずだ。故に、その可能性、高いだろうな」
「……連合軍が、ジェネシスが撃てない事に気付くってことか？」
「連合軍とて無能ではないのだから、冷静に観察すれば、大規模な補修なしでは無理だと気付くだろうさ」
「確かに……」

職業軍人集団であり、洗練された組織を有する連合軍と、素人集団であるザフトとを比べるのもおこがましいか。

「なら、再侵攻があると考えて動くか」
「私も、個人としては、その方がありがたい」
「大手を振って、好敵手とやりあえるってか？」
「ふっ、そういうことだ」

おっと、マクスウェルやリー達、それにクルーゼ隊も集まって来たみたいだし、のんびり話すのも、時間切れかな。

「どうやら戻ってきたようだし、艦に戻って一息入れるよ」
「私も隊の状況を確認してから、ヤキン・ドゥーエに引き揚げるつもりだ」
「そうか、なら、また後でな」
「ああ」

プロヴィデンスへ向けて、ビームライフルを持った手を軽く振らせた後、両小隊の機体状況を視認してから、戦隊への帰路についた。

◇　◇　◇

エルステッドまで戻る途中、追撃に出る為か、猛烈な勢いで突き進んで行く友軍の艦艇群と擦れ違ったり、今更ながら?緑?のシールドを持って帰って来た事に気が付いたり、ラヴロフやロメロといった独立戦隊の隊長陣と情報交換したりしながら、ヤキン・ドゥーエ要塞後方宙域へと下がり、隊の連中がそれぞれの母艦に全て着艦した事を確認した後、俺もエルステッドに帰艦する。

ノーマルスーツ姿の整備班員の誘導の下、自機を所定位置につけて、ようやく一息だ。

格納庫内にエアーが充填するまでの時間を使って放心すると、心身の疲労からか、このまま眠ってしまいたい心地よさが全身を包み込んでくる。

でも、機体のチェックだけは済ませてと……。

「先輩っ！」

ッ！

「ッあ！　敵襲かっ！？」
「違いますよ！　エアーの充填が終わりましたから、出ても大丈夫ですよって、伝えたんです」
「あ、ああ……、そうか、わかった、ありがとう」

……一瞬、寝落ちしたみたいだな。

首を回したりしながら、身体の凝りを解していると、サブモニターに映るレナが心持、眉根を下げ、心配したような表情を見せたのがわかった。

「先輩、もしかして、具合が？」
「いや、ちょっと寝てたみたいだ」
「……歳、ですか？」
「へんっ、そりゃ、体力的に精力溢れる十代には敵いませんよ」

こんなことを言ってるからか、自分が年齢以上に年寄りになったような、気、が……。

……むぅ、よくよく考えたら、本来というか？以前？からも含めたら、かなりいい年齢になっているし、普段は精神が肉体に引っ張られているだけであって、別におかしいことじゃないかもしれない。

そう考えると、逆に肉体が精神に引っ張られてもおかしくはない？

……。

急に老け出したら洒落にならないから、あまり気にしない方向というか、年寄りめいた言動はしないでおこう。

「それよりも、レナ、整備作業が終わるまでパイロット連中を待機室に放り込んで、休ませておいてくれ。ついでに、ロベルタとスタンフォードの様子も見てきてくれると助かるんだが？」

「私、先輩の相棒で副官ですから、言われなくてもそれ位のことはしますよ？　先輩こそ、しっかりと、身体を休ませてくださいね？」

「了解」

いささか、年寄り扱いされることが不本意だが、その言葉には甘えておこう。

でも、俺自身が抱えている秘密というか、事情が事情だけに、こんな風に年寄り扱いされ始めたら、気付いたら、年齢以上に年寄りになっていた、なんてことが普通に起きそうだ。

……は、はは、まさかな。

別の次元でパイロットスーツ内に汗を掻き始めたので、その恐怖を振り払うべく、コックピットハッチを開け放ち、外へと抜け出る。

すると、ハッチが開くのを待ってくれていたらしい機付整備員が敬礼して出迎えてくれた。それに答礼を返して、機体状況を簡潔に伝え、機体整備を任せる。

整備が終わるまでの間に、一度、艦橋に上がって今現在の情報を聞いてみるかとも考えて、格納庫の出入り口に向うと、途中でチェックボードを手に整備作業を監督しているシゲさんに行き会った。

「おー、アインちゃん、お疲れー」
「いやいや、シゲさん、俺は若いから、まだまだ元気だよ？」
「またまた、疲れて寝落ちしてたんだろ？　俺にはそんなに無理して、取り繕わなくてもいいよぅ」

うぅ、シゲさんの優しさが、今は……痛い。

「整備は再出撃があると考えてやっているけど、それでいいよね？」
「あ、うん、その方向で頼むよ。……どうやら、艦内は一種警戒みたいだね」
「ああ、連合軍艦隊の撤退を確認しているからね、取り合えず、戦闘配置からは落としたみたい」

シゲさんがチェックシートにサインを入れると、どこからともなく整備班が跳んで来て、新しいチェックシートと交換して去って行った。

「それにしても、さっきの新兵器だけど……、月まで届くなんて、凄い威力だったね」
「ああ、戦略級の兵器だよ」
「……これで、戦争が終わってくれると、いいんだけどねぇ」
「そうだね」

まぁ、実情は、？熱い？ものが？冷たい？ものに替わるだけ何だけどな。

「そういえば、アインちゃんの機体が持って帰ってきたシールド、どうする？」

「拾いもんだし、シゲさんの好きにしていいよ」

「ん、わかった。俺も連合が使っている装甲材や技術には興味あったから、時間がある時に色々と調べてみるよ、って、アインちゃん、艦橋に上がるんだろ？　悪いね、引き止めちまって」

「いや、いい気分転換になったよ」

「そうかい？　まぁ、くれぐれも無理はしちゃ駄目だよ？」

「……ああ、そうするよ」

な、何気ない労わりが、今日は、痛いなぁ。

とりあえずは、俺はまだ若い俺はまだ若い俺はまだ若い、と心の中で念仏のように唱えながら、艦橋に向かう事にした。

◇　◇　◇

連合軍艦隊がＬ１方面へと素早く退いていく為か、艦橋は比較的に落ち着いていた。

そんな落ち着いた雰囲気を醸し出す中心、普段と変わりなく艦長席に座っているゴートン艦長に声を掛けようとしたら、先に向こうが口を開いた。

「お疲れ様です、隊長」
「いえ、艦長こそ、いつも指揮を任せてしまって、すいません」
「はは、それが仕事ですので、気にする必要はありませんよ」

核やジェネシスといった大量破壊兵器での攻撃も含め、大規模な戦闘があった後なのに、本当にいつもと変わらない調子で話すあたり、凄い人と思う。アーサーなんて、手を胃の部分にあてたまま、班長用スツールで固まってるからなぁ。

っと、ここに来た目的……現状を把握する為に、話を聞かないとな。

「艦長、追撃はどうなっていますか？」
「第一から第四までの防衛ラインを形成していた部隊が当初戦力の半数以下まで消耗している事から、総司令部は、最終防衛ラインから本国艦隊を抽出し、追撃に当てています。それと、総司令部より、第一種警戒態勢に移行するようにとの連絡も受けましたので、戦隊は戦闘配置を解除し、第一種警戒態勢を発令中です」
「そうですか」

本国艦隊を追撃にねぇ、……大丈夫かな。

「何か、懸念が？」
「あ、いえ、先の戦闘で本国艦隊所属部隊が命令を無視した上にラインを崩すなんて、バカな事をやらかしたでしょう？」
「ええ、しましたね。……それで不安だと？」
「どうも、本国艦隊の連中は堪え性がないみたいですから、抑えが効くのかなと」
「それは考え過ぎではないですか？　追撃戦ですし、勢いがある方が良い面もあります」

「まぁ、そうとも思うんですけどね、どうしても不安が生まれてきましてね」

艦隊行動に関して一日の長があるのは連合軍だから、何か仕掛けてくるんじゃないかって……？

突然の鳴り響いた通信を知らせる音に、アーサーが跳び起きて、天井に頭をぶつけたのは後の笑い話にするとして、艦橋内は俄かに慌ただしくなった。

艦長と互いに目配せしあった後、堅苦しい公モードを終了して、いつもの調子に戻す。

「さて、何があったのかねぇ」
「良い事なら歓迎しますけど？」
「ラインブルグ君……、悲しい事に、こういう時は大概、悪い事の方が多いから、心の準備をしておいた方がいいよ？」
「それは、艦長の経験から来る、長生きの秘訣ですか？」
「そういうこと」

なんて具合にゴートン艦長と俺がやり取りをしていると、頭を押さえて痛みにもがいていたはずのアーサーが、いつの間にか復帰しており、通信管制から通信内容を聞き取っていた。

おお、アーサーもやる時はやるもんだ、と感心していると……。

「えっ？　えええぇーーーっ！」

……何となく、台無しだった。

ついでに言えば、そのアーサーのリアクションで、入ってきた情報が悪い事だということも確信できたりする。

「……何とも、分りやすいですね」

「うん、慣れたら、ワンクッションになるから、こちらも助かるよ」

流石はゴートン艦長、あくどい事を平然と言ってのける。

「で、内容は何だと思う？」

「今の状況だと、追撃部隊が何らかの被害を受けた、あたりでしょう」

「うん、今の状況から考えると、それが確率的に高そうだねぇ」

こういう嫌な想定って、よく当たるから、嫌だなぁ、なんて考えていると、再び、ゴートン艦長が口を開いた。

「うーん、あのトライン君の顔の蒼さから見て……、どうやら、相当に酷い情報みたいだ」

「なるほど、アーサーの顔色は状況のバロメーターですか」

「本人にその気はなくても、一目で状況がわかるんだから、あれも一種の才能だよねぇ」

「ポーカーには致命的に向いてなさそうですけどね」

「くくっ、違いない」

戯言でもって心理的な余裕を作り、これから来る精神的な衝撃に備える。

……。

……来た。

「……艦長、それに隊長、今届いた情報を報告します」
「うん、お願いするよ、トライン班長」
「はい、連合軍艦隊の追撃に出ていた本国艦隊が壊滅的損害を受けました。これにより、連合軍艦隊への追撃は中止され、余力のある本国艦隊分派隊とボアズ分艦隊が本国艦隊の救助に回っています。また、追撃の中止を受けて、ヤキン・ドゥーエ防衛隊が偵察機によるピケットラインを構築しており、連合軍艦隊の動きを警戒してるとのことです」

ピケットラインが構築されたなら、まぁ、以後の不意打ちは防げるだろう。

……それにしても、追撃中に壊滅的損害か。

壊滅的な損害と言う以上、半数は沈んだかもしれん、なんて考えつつ、アーサーに尋ねてみる。

「アーサー、追撃に参加した本国艦隊の構成は？」
「ＤＤＭＨが四、ＦＦＭが八、ジンＭ型を中心としたＭＳが七十二機です」
「損害は？」
「撃沈がＤＤＭＨが三、ＦＦＭが四、ＭＳが二十七機です」

艦艇の被害が大きい？

そのことを不思議に思って首を捻っていると、ゴートン艦長が代わってアーサーに質問し始めた。

「トライン班長、本国艦隊が壊滅した原因はわかってるのかい？」

「今の所、不明ですが、追撃中の艦艇やＭＳが、敵の反撃もなければ、何の前触れもなく、突然、爆発したことは生存者の証言とヤキン・ドゥーエ要塞から観測によって判明しています」
「艦隊が損害を受けた後、敵の反撃は受けた？」
「連合軍艦隊は反撃に移ることなく、そのまま、Ｌ１方面に退いています」
「そうかい。……なら、爆発が起きた座標位置はどこだい？」
「……連合軍艦隊が展開していた座標のやや後方です」
「ふむ、やられた箇所は？」
「艦体前部及び左右舷の推進ユニット、それにＭＳ格納庫の被害が多いようです」
「後部に被害はない？」
「はい」

……船体前部方向に被害が集中しているか。

「うーん、追撃防止用に機雷でも敷設したのかねぇ」
「ですが、それらしき物は観測されていません」

機雷と予想されるも、敷設の観測はなし……、いや、或いは把握できなかったとか？

……あっ。

「まさか、ミラージュコロイドを使った？」
「……なるほど、それなら、もってこいだね」
「ミラージュコロイドを……、ということは、光学迷彩で隠した機雷を敷設していたということですか？」

アーサーの疑問に頷いて応える。

「まぁ、あくまでも俺の想像だけどね。……でも、もしも、仮にそうだとすれば？」
「もし、そんな機雷があるのなら、撤退の時ほど効果的に働くだろうね、今みたいに……」
ゴートン艦長は無精髭を撫でながら、話を続ける。
「それに、あの連合軍艦隊の撤退開始後の手際の良さを考えたら、予め、撤退に備えて準備していた可能性が高いと思うよ。いや、まったく、相互支援できる隊形を維持しながら、順次、弱い艦から後退させていくんだから、艦隊行動の見本として残しておきたいくらいだったよ」
むぅ、そこまで、見てなかったな。
ゴートン艦長がべた褒めするほどのものだったなんて……、見れなくて、残念だ。
そんな内心の無念さを隠して、口を開く。
「いつも思う事ですけど、何事も、一筋縄じゃいきませんね」
「まぁ、向こうだって必死なんだから、色々と考えてくるさ」
艦長と二人で頷きあっていたら、突然、アーサーが胃の辺りを押さえて呻く。
「ふぐっ。本当に、艦長も、隊長も、凄いですね。僕なんて……、もう、胃が……」
「あ～、まぁ、先が見えてきたからな」

「そうだねぇ、先はもう見え始めているからねぇ」
「……先、ですか？」

アーサー、あなた疲れているのよ、なんてネタは置いておいて……、真面目な話、普段のアーサーなら気付きそうなのに気付けないということは、疲労とプレッシャーで頭の回転が鈍っているのかもしれない。

ここは少しでも休ませた方がいいです、なんて思いを乗せてゴートン艦長を見てみると小さく頷いて見せた。

「トライン君、主計班に連絡して、艦橋の皆にドリンクをもらってくれないかい？　少し休憩を入れよう」
「あ、はい、了解です」

フラフラと自身の持ち場に戻るアーサーを見ていると、ふと、医務室に送り込んだフェスタのことを思い出してしまった。
今のアーサーを見て、医務室を連想してしまうあたりが悲しい事だが、まぁ、今現在の状況も知れたし、レナに任せっぱなしというのもなんなので、お暇させてもらう事にした。

「艦長、俺も少し、休ませてもらいます。医務室か格納庫にいますから、何かあったら連絡を下さい」
「了解。……ところで、ラインブルグ君」
「何でしょう」
「もう一戦、あると思うかい？」
「他の隊長連中とも話しましたけど……」
「うん」
「ほぼ間違いなく、あると考えられます」
「……わかったよ、そのつもりで戦隊を動かしておくよ」

「ええ、頼みます」

ゴートン艦長が戦隊運営の大部分を引き受けてくれているから、本当に助かる。

緑服時代をなんとなく思い出して丁寧に敬礼すると、艦長は苦笑しながら帽子をヒラヒラと振って応えてくれた。

９０　血戦、ヤキン・ドゥーエ　６（後書き）

１１／０３／２２　誤字脱字及び一部表現を修正。

91　血戦、ヤキン・ドゥーエ　7

医務室に到着して中を覗くと、相変わらず、小柄なエヴァ先生が這い蹲った整備班員と主計班員の背中の上に立って、堂々と踏ん反り返っていた。

「えーっと、どういう状況で？」

「何、時も弁えずに、仮病を装って医務室に来た馬鹿者共の躾だ」

「……その馬鹿共が、えらく恍惚とした顔をしてるんですが？」

「ッ！」

エヴァ先生は俄かに顔色を変えると、医務室の外へと両者を思いっきり蹴飛ばした。

飛んで来る馬鹿者に巻き込まれたらかなわんと通路を譲ったが、俺の横を通過する際に、あうんッ、とか、もっとぉっ　とか、野郎がキモチワルイ声でほざいていたのは、聞いていないったら聞いていない。

「……んんっ、見苦しいところを見せたな」

「大変ですね、エヴァ先生も」

「まったくだ。……で、貴様の用件はフェスタのことだな？」

「ええ、どういう状態なのか知りたいと思いましてね」

「ふむ、入れ」

とりあえずは、エヴァ先生の言う事を聞いて、お邪魔させてもらうが……、中にはフェスタはおらず、衛生班員がいるだけであり、

その彼女達もこちらに軽く会釈した後は自分達の作業に戻ったようだ。

「先生、フェスタは？」

「スタンフォードと共に待機室に戻した」

「……ということは、大事はなかった？」

「いや、私が見た限りでは、精神的な負荷は大きいものだった。とはいえ、一時的なものであったし、ここに隔離してしまうと、また、マイナス方向に思考が向くだろうから、安定剤を微量与えて戻したのだ」

「そうですか。……それで、出撃は？」

「……可能だが、少なくとも今回は、与える仕事を考えてやれ」

……だとしたら、戦域周辺での早期警戒任務かな。

そんな事を考えながら、疑問を口にする。

「それで、フェスタがああなった原因は、やはり、直接的に人を殺した事ですか？」

「そうだろうな。今までも間接的に殺人に関わっていたとしても、他人の手で殺すのと、自らの手で殺すのとでは、負担に差は出る。加えて、フェスタは、貴様やラヴィネンの指導で、ナチュラルも同じ人だとしっかりと認識している、ザフトでは珍しいタイプでもあるから、それが顕著に現れたのだろう」

「そう、ですか」

「それとな、スタンフォードも表面では見え辛かったが、相応の負担があったようだぞ？」

スタンフォードは大丈夫だと思っていた、自身の見立ての甘さに思わず、頭を抱えてしまう。

「……自身をあまり責めるな、ラインブルグ」
「ですが……、二人の出撃と任務を決めたのは俺ですよ？」
「だが、あの二人がＭＳパイロットを選び、任を果たす以上は何れ通る道でもあった。……貴様は忘れていないだろう、ラヴィネンが一時、不安定になっていたことを」
「ええ」
「そのラヴィネンは貴様や仲間達と過ごす中で、自身で答えを見い出し、パイロットを続けている。ならば、あの二人の答えも、周囲の者との係わり合いから生まれるのではないか？」

……係わり合いか。

人は人である以上、強い時もあれば脆い時もある。だからこそ、人は互いに支えあうのかもしれない。

俺が黙り込んでいると、エヴァ先生が背中に届く長い緋色の髪を一撫でし、鋭さを増した蒼色の瞳でこちらを見据えながら、再び口を開いた。

「なぁ、ラインブルグ」
「はい」
「人は、よほどの破綻者ではない限り、誰だって死にたくない……、生きていたいのだ。その命を奪ってまで生きる以上は、例え、他人から生者の傲慢だと非難されようが、死人やその遺族からどれほど深く怨まれようが、それらの負の想いを受けて、どれ程、自身が悔恨の念を抱こうが、死に至るその時、その寸前まで、どこまでも懸命に、どこまでも真摯に、生き抜かなければならん」
「……はい」
「そして、それができない存在は、他の命を奪ってまで生きるべき

ではないとも、私は常々、思うのだ」
「い、いや、それは……、なんというか、厳しいですね、エヴァ先生は……」
「ふん、貴様が弛んでいるだけだ」
……はい、確かに、弛んでました。
でも、エヴァ先生が言った事は、戦争で……、いや、戦争だけなく、日々の日常を生きる上でも、様々な命を奪っている以上、とても大切な事だよな。
「じゃあ、先生の厳しさにあやかって、さっきの奴等に関しては、適当に……、服務規程違反とか理由を付けて、減給処分にしときます」
「減給するなら、他の馬鹿者共のリストも渡すから、同様に処分しておけ。それと、罰則には、フォルシウスの説教部屋も込みにしろよ？」
「了解です。……さてと、先生に発破も掛けられましたし、俺も待機室に行きますよ」
「ああ、そうしろ」
いつもと変わらぬ、ドライな対応に乾いた笑いしか出てこない。もっとも、必要以上に長居して、馬鹿者共みたいに蹴り出されるのもかなわないから、早い所、退散しようとすると、エヴァ先生の小さな咳払いに呼び止められた。
「それと、ラインブルグ」
「はい？」
「貴様は貴重な研究対象だ、生きて帰って来るように」
「……了解」

遠まわしな激励に応える為に、おどけた敬礼をして見せると、フンとソッポを向かれてしまった。

……むぅ、これが噂に名高い、ツンデレって奴なんだろうか？

◇　◇　◇

照れ隠しのメスや注射器が飛んで来ない内に医務室を退散して、格納庫にある待機室を目指す。途上、数人の保安班員や主計班員と擦れ違ったが、どうやら普段とあまり変わりはないようだ。

他の艦やヤキン・ドゥーエ要塞はどうなっているかなぁ、敵を退けたって、馬鹿みたいにはしゃいでるのかなぁ、なんてことを考えていたら、いつの間にか格納庫に到着していた。

エアーが充填されているかを示すランプにグリーンが点っている事を確認してから中に入ると、様々な喧騒と共に、整備班員がＭＳの周囲を跳び回っている光景が目に飛び込んできた。

整備班の仕事をそれぞれ見ていくと、数人掛かりでゲイツの放熱板に冷却剤を散布していたり、ブラックＢＯｕＲＵが複座型のサブ・バッテリーに充電する為、電気ケーブルを接続していたり、備え付けのクレーンを使用したシールドの換装している傍らで、微小デブリで傷ついた装甲の修復や頭部近接砲の給弾、各部に推進剤の充填をしていたりと、実に多岐に渡って、様々な作業を休む間もなく、次々に進めている。

そんな整備班の責任者であるシゲさんは格納庫中央に浮かんで、

身振り手振りやハンドサイン、時には大声や奇声をあげて、班員に作業指示を出しているのだ……、いや、本当に、二十人近くはいる整備班を自身の手足の如く操るのは流石としか言いようがない。

……。

今後の事を考えると、作業の邪魔をするのは拙いから、声を掛けず、早い所、休憩待機室に向かう事にする。

フェスタとスタンフォードは大丈夫かなぁ、落ち着いているといいんだがなぁ、と胸中で呟きながら、待機室に通じる扉を開こうとしたら、向こうから勝手に開いて、真正面、特に腹部に衝撃がぁっ！

当たった感触から何者かに体当たりされたことには気付いたが、縺れ合っている為に身体の自由がはっ！

……痛たたっ、当たった勢いのまま、格納庫を横切って、物の見事に壁面へと叩きつけられた。

以前にも味わった事がある痛みに脱力し、ぷかぷかと中空に浮かんでいると、待機室の方からレナ達の慌てた声が……。

「待ちなさい、ロベルって、ええっ！　先輩っ！　何しているんですかっ！」
「ロベルタまでっ！　二人とも、大丈夫ですかっ！」
「隊長って、けっこう、運、悪いよなぁ」
「いや、リー先輩、隊長を捕まえたんだから、運が良かったんじゃ？」
「……女性となんて、不潔です」

最後の発言だけは意味不明だが……、どうやら、フェスタが何らかの理由で部屋を飛び出した瞬間に鉢合わせしてしまったようだ。

まったく、こんな古典的な衝突ネタを自らが体験しようとは、思いもよらなかった。

痛みを堪えて、全身に力を込めて身体のコントロールを取り戻してみると、俺の傍らで、頭を押さえたフェスタが、ふわふわと浮いていた。

「おい、フェスタ」
「……ふぁい」
「士官学校では、扉を開ける時の注意は習わなかったのか？」
「……ならいまひた」
「……俺に、何か言う事は？」
「ごめんなさい、隊長」

こちらを見たフェスタの顔は、額を打った痛みの所為か、半泣きだった。両手は額を押さえるのに忙しそうだったので、そっとスタンフォードの方へ押してやる。

「レナ、フェスタの額を見てやれ。俺のは一過性の痛みだから、大丈夫だ」
「ですが、先輩の方が衝撃を受けてますよ？」
「何、これ位なら本当に大丈夫だ。つか、以前、レナを受け止めた時よりも遥かにマシだぞ」
「……それは暗に、私が重い、って言いたいんですか？」

……何でそうなる？

「受けた衝撃の差に決まってるだろう」
「……なら、いいんですが」

少し機嫌が悪くなったレナが、自身のファーストエイドキットでフェスタの額を治療し始めたので、何となく、そのパイロットスーツに包まれた後姿を見る。

……。

むぅ、やはり、パイロットスーツってのは、一分の隙もなく身体にフィットしているから、しっかりとボディラインが浮き出て、実に雄の本能を刺激するというか、裸体とはまた違ったエロスを感じさ……じゃなくて、レナの身体はスレンダーだけど、十分に女性としてのメリハリはしっかりあるし、別に体重なんて、気にする程じゃないと思うんだがなぁ。

っと、整備班がこちらを気にして、作業効率が落ちているみたいだ。

同様に、こちらをチラチラと窺っているシゲさんに向って、謝罪の意があるハンドシグナルを送り、一先ず、ＭＳ隊員全員を待機室に移す事にする。

「ここにいると整備の邪魔になる。皆、待機室に戻るぞ」
「わかりました。ビアンカ、ロベルタをお願いね」
「はい」

フェスタがスタンフォードに引っ張られる形で待機室に向うのを見て、リーが自分の小隊の野郎共……ルッツとベルディーニを連れて行く。

前の五人との距離が喧騒に紛れて声が聞こえないまで離れたのを確認してから、レナに問い掛ける。

「それで、いったい何があったんだ？」

「えっと、ロベルタが自分達も出撃できると、先輩に直訴しようと部屋を飛び出そうとしたんです」

「……それだけ？」

「はい？　他に何かありますか？」

「いや、精神的な衝撃で落ち込んでいて、それを他の連中に責められたり、慰められたりして、居た堪れなくなって飛び出したとか？」

「……先輩、ドラマの見過ぎです。ロベルタもスタンフォードも、私よりも遥かに心が強い子達ですから、そんなこと位で駄目になったりしませんし、リー達だって、そんな酷いことしませんよ」

「まぁ、リー達に関しては同意するが、フェスタ達は本当に大丈夫なのか？　ただ単に、薬が効いているだけじゃないのか？」

「本当です。……いえ、確かに、薬も効いているかもしれませんが、あの核攻撃を見聞きして、割り切れたようです」

……ああ、あれか。

確かに、ジェネシスと同じで、核のような戦略級の攻撃を目の当たりにすると、色々と考え方が変わるわな。

「わかった。だが、精神的な打撃を受けた事には違いはない。レナも注意して見ていてくれ」

「はい、わかりました」

だが、残念な事に、二人を出撃させるかを考える間もなく待機室に到着してしまい、打撲治療剤たる湿布（無臭）をデコに貼り付け

たフェスタが待っていました云わんばかりに目の前に跳んで来た。

「隊長っ！　私はもう大丈夫ですからっ！　私も出撃しますっ！」

「わかったわかった。フェスタが大丈夫なのはわかったから、少し落ち着け」

「出撃許可をっ！」

駄目だ、興奮している小犬のように、こっちの言う事を聞かない。

むぅ、不本意だが……眉間に皺を寄せて、重々しく、訓練の時のような雰囲気を作って……。

「……フェスタ、もう一度、言うぞ？　落ち着け、話はそれからだ」

「は、はいぃっ！」

おや、硬直して、直立状態になった。

好い機会だから、少しお灸を据えて置こう。

「フェスタ、お前が出撃可能だとしても、あんな興奮状態を見せられるとな、責任者として出撃許可なんて、とても出せない」

「うっ」

「熱くなるのはいい、大いに結構。だが、出撃前には厳禁だ。これはレナから教わらなかったか？」

「こ、心得として、教えてもらいました」

「なら、それを実践しろ。それか、感情をコントロールできるようになれ」

「……はい」

どうやら出撃許可をもらえないと勘違いしたらしく、ガックリと

肩を落としたフェスタは一旦置いて、複座型のもう一人のパイロットに問い掛ける。

「スタンフォード、お前はどうなんだ？　出撃できるのか？」

「……できます」

「別にフェスタに付き合って、無理をする必要はないぞ？」

「私はロベルタに引き摺られて、判断を下したりはしません」

じっとスタンフォードの目を見てみるが……、切れ長の黒い瞳は逸らされなかった。

「わかった、複座型にも出てもらう。もちろん、二人ともだから、しっかりと準備をしておけよ」

顔を俯けていたフェスタがゆっくりと顔を上げると、泣き笑いの顔を見せた。

「……隊長、私、いらない子じゃないよね？　ここにいてもいいよね？」

「ッ！　……誰が、いつ、どこで、お前をいらない、なんて言ったっ！？」

「ひぅっ！」

「せ、先輩っ！」

「あ……、いや、すまん。……フェスタ、急に変な事を言うな」

頼むわ、もう。

……壊れかけていたミーアを思い出したじゃないか。

「お前はうちの戦隊員だ。戦隊にとって必要不可欠な、頼りになる

戦隊の目だ」
「はい」
「今日、狙撃を担当させたのも、お前に見るべきものがあったからだ」
「……はい」
「それに普段もな、お前がニコニコと笑ってくれているから、皆が元気付けられる。……特に整備班や主計班の無妻男連中には欠かす事が出来ない清涼剤と言っても良い存在だ」
「……ふぁい」

……何故、泣く？

もしかして、最後のは余計だったか？

「あ、あ～、レナ、悪い事というか……、最後のは余計だったか？」
「いえ、特に悪い事は何も言ってませんよ。そもそも、今のは嬉し涙っていう奴ですから。……ほら、ロベルタ」

レナがハンカチを取り出すとフェスタの顔を拭いてやれば、スタンフォードもまた、フェスタの傍で手を握っていたりする。

……何か、入り辛いというか、居辛い雰囲気だ。

仕方なく、三人の傍を離れて、リー達の所に赴くと、リーが苦笑を浮かべて話し掛けてきた。

「隊長、俺の時とは随分、対応が違いますね」
「はん、男なら、野郎と女、対応に差を作るのは当然だろう。違うか、リー」
「……言われてみれば？」

男なんて、基本、昔から変わることがない、バカで単純な生き物なのだ。

「後それと、男の場合は厳しく?叩いた?方が伸びやすい面もあるからな」

「……俺、隊長に?叩かれる?度に、折れそうになったような気がしますけど?」

「だが、お前は?折れてない?だろう?」

リー達に向けてニヤリと笑うと、三人が三人共、心持ち、後退ったようだ。

「大いに反発させて負けん気を引き出し、深く悩ませる事で色々と考えさせて、最後にはまた奮起できるくらいに、?折れてなければ?いいんだよ。……お前が一番、身に覚えがあるだろう?」

「……納得です」

俺が見た限りでは、ＭＳ隊の中で、ここ一年の間で、人間的に最も成長しているのは、目の前にいるリーだろう。落ち着き具合が当初とは比べ物にならないし、物事への思慮や周囲への配慮も深くなっている。

だから、これからの事も話す事ができるというものだ。

「リー、恐らくは次の戦闘で、この戦争は事実上、終わるだろう」

「……次の戦闘がある、ということは、あの新兵器は使えない?」

「ああ、残念な事に、あの新兵器は予算と開発期間の関係上、一回撃つと大規模な改修が必要な物だから、即、抑止力にはなりえない」

「では、改修が済むまで、あの新兵器が破壊されなければ良いとい

うことですね」
「そういうことだ」

今頃、ザラ議長やカナーバ議員が停戦交渉に向けて、動き始めているはずだしな。

「ですが、連合軍がやけっぱちになって、全員が死ぬ覚悟で攻撃を仕掛けてくる可能性もありませんか？」

……むむ、希望的な情報ばかりに目を向けていた所為で頭から抜けていたが、確かに、そういう可能性もあるかもしれないか。

「まぁ、そんな流れになったら、もう、どうしようもないから、精々、ザフトお得意の精神論を支えに、足掻いて足掻いて足掻きまくって、最後まで守りきって見せるしかないさ。……それにだ、現実、いくら、物量に勝る連合軍でも本拠地を失った以上、いつまでも攻勢を続けることは不可能だし、後、一日二日もすれば、？目に見える？換装作業が終わって、ジェネシスが再稼動しているように見えるはずだろうからな。そもそも、連合軍自体、地球にある本国が焼かれる可能性があるっていうのに、張り切って、攻撃を仕掛けてくるような連中とは思えないし、そこまで考え無しじゃないはずさ」

つか、どちらかと言えば、考えなしはザフトやプラントの方に多いと思うな。

……さっきの戦闘で、本国艦隊の連中が見せた独断専行なんて、イイ例だ。

それにしても、ザフトお得意の精神論をこんな所で口に出す破目になるなんて、まったく皮肉なもんだ、なんてことを思いながら、

肩を竦めて見せると、リーは神妙な顔を浮かべて、また、口を開いた。

「隊長は、どんなに悲観的な想定を出しても、本当に、取り乱さずに落ち着いてますね」

「はは、お前達の前だからこそ、そう見せているだけさ」

まぁ、実際、どうしようどうしようと、騒ぐのを許されるのは、緑だけだ。

「とにかく、次の戦いは、どちらが先に根をあげるかだなんて、一種の我慢比べって奴になるんだが……、まぁ、俺達は、訓練通りに自分達にやれることを全力でやって、普段通りに生きて帰ってくるだけの話さ。っと、そうそう、次の戦闘での俺達の目的だが、第一にプラントへの核攻撃を許さない事、第二に例の新兵器……ジェネシスを破壊されない事だ。だから、お前達もよろしく頼むぞ、リー、ルッツ、ベルディーニ」

「了解です」

「わかりました」

「りょ、了解しました」

三人揃って、律儀にも敬礼してきたので、こちらも応えることにする。

後、フェスタとスタンフォードだが……、もう、レナに丸投げもとい信頼して任せておこう。

ずっと面倒を見てきたんだ、その方がいいはずだ。

さて、本当に、後、一戦……のはずだから、気合を入れていこう。

92　激突する意志　1

明けて9月27日。
Ｌ1宙域内の暗礁地帯で依然として包囲艦隊との小競り合いを繰り広げている、世界樹の種から送られてきた観測情報で、Ｌ1方面へと退いていた連合軍艦隊が侵攻を再開した事が判明した。

今回の再侵攻は先の侵攻と異なり、連合軍は艦隊を、ヤキン・ドゥーエを目指す本隊と、月軌道の外側から回り込み始めた一群の艦艇……とはいえ、３００ｍ級二隻を含む一個艦隊に近い規模の戦力を有する別働隊に分けたようなのだ。
この動きに対して、ヤキン・ドゥーエの総司令部は大きな被害を受けたヤキン・ドゥーエ駐留第一艦隊と第四防衛ラインのボアズ分艦隊といった艦艇を合流させて一個艦隊規模に再編、これを月軌道の外側方面に展開させて、別働隊によるプラント・コロニー群への核攻撃といった不測の事態に備えさせた。
結果、ただでさえ減少している正面戦力が戦う前から削り取られる事になってしまい、ヤキン・ドゥーエ要塞とジェネシスを守るのは、艦砲やミサイル、デブリ等の被弾で減少した要塞火砲群と砲戦ＭＳ隊、戦線を支えた代償に半減したＭＳ隊が所属する要塞防衛隊と当初戦力を大幅に割り込む駐留艦隊、大打撃を受けた本国艦隊、そして、それらの艦載戦力だけだ。

いやはや、本当に、数の差を活した、賞賛に値する厭らしい動きとしか言いようがない。

ちなみに、うちの戦隊は他の独立戦隊と同じく、今までと変わら

ぬ座標……ヤキン・ドゥーエ要塞とプラント・コロニー群の間の宙域に待機して、月軌道外側とヤキン・ドゥーエ、双方の予備戦力として動く事になった。

……戦隊が連合軍からの攻撃の矢面に立たなくて済み、隊を預かる者として、有難いと思ったのは内緒だ。

◇　◇　◇

再度、Ｌ５宙域に侵入した連合軍本隊は、先日の戦闘と同じように、ヤキン・ドゥーエ要塞やジェネシスへと艦砲やミサイル等での攻撃を行いながら接近し始めた。

資源惑星を改造したヤキン・ドゥーエ要塞はともかく、ジェネシスは一部装甲にこそＰＳ装甲を装備しているが、それほど頑丈なものではない。その為に、艦載されている大型ミサイルでも十分に脅威だし、足つき級が運用しているらしい陽電子砲や、先のような核による飽和攻撃を喰らえば、一溜まりもない。

よって、これらの迎撃に要塞火砲群や砲戦ＭＳ隊、駐留艦隊や本国艦隊の艦艇による迎撃が盛んに行われることになるのだが、それでも手が足りず、両艦隊所属のＭＳ隊も出張って迎撃を行っている。

もっとも、要塞防衛隊所属のＭＳ隊に関しては、連合軍が艦載戦力を展開させてからの出番ということで、要塞内で待機している。

これまでの戦況を思い出しながら、自機のコックピット内で機体情報を確認したり、メイン、サブの両カメラが作動しているか等の

チェックをしたりしている。
戦隊はヤキン・ドゥーエ及びジェネシス前面宙域での迎撃が始まった直後に第二戦闘配置を発令して、即時出撃態勢を整えている為だ。

と、そこにベルナールからの連絡が入った。

「隊長、総司令部からの最新情報です」
「ああ、ありがとう」

……連合軍が機動戦力の展開を開始か。

「隊長、連合軍が機動戦力を展開し始めたみたいですね」
「その戦力もＭＳとＭＡ併せて、大凡五百機。……おそらく、連合軍も最初から全力出撃だな」
「ええ、そのようです。この動きに対して、防衛ＭＳ隊が迎撃のために出撃しています」
「連合軍の攻撃目標はやはり？」
「新兵器、ジェネシスを目指していますね」

向こうも宇宙での一大根拠地が潰された以上は継戦も難しいし、ここでジェネシスを破壊しない事には、後々の停戦交渉に響くと考えたんだろう。つまり、今の戦いは、プラント側の強力な札を連合側が奪えるか奪えないか、という条件闘争めいた話に近い。

俺が見た感じ、今現在、先の戦闘や別働隊の迂回進撃等で、戦域に投入できる彼我の戦力……数の差が大きくなっているから、一度に大戦力を投入して乱戦状態に持ち込んで、機動戦力を拘束するか、力押しでもって戦線を破るかして、核攻撃を仕掛ける、或いは、艦艇を突入させて破壊する、っとこんな感じの作戦だと思う。

「連合の別働隊には動きはなし、だな。……これなら、もう少し、防衛戦力をこちらに分けて欲しいな」
「ですが、相手に動きがないからと言って、警戒する防衛戦力を減らすわけにはいきません」
「わかってるよ。愚痴めいた戯言だ」

プラント・コロニー群を守る防衛隊が無傷で健在とはいえ、学徒兵が大半である事から、その練度は低い。
その事を踏まえて考えると、側面迂回攻撃からコロニー群を守る防衛ラインが防衛隊の一枚だけというのは、あまりにも不安過ぎる。逆に正面戦力を割いてでも、信頼できる一部部隊を連合軍の別働隊に当てる方が、こちらも目前の敵に集中できるというものだ。

「だが、やはり、数の差が苦しいな」
「そうですね。こちらは要塞防衛火砲群や砲戦ＭＳ隊の支援があるとはいえ、艦隊や防衛隊の実質稼動ＭＳは一部を別働隊に割いた為、二百機に満たないですし、独立戦隊にしても、うちの戦隊は一機も落とされていませんが、他の戦隊の戦力は落ちていますから、厳しい状況です」
「ああ、だから、今回は出番が早いかもな」

独立戦隊組で機動戦力をほぼ変わらずに維持できているのは、クルーゼ隊、ロメロ隊、それにうちの隊だ。

モンテルラン隊は隊長が戦死したから、別働隊に含められているし、ラブロフ、チェニスの両隊も戦域に長くいただけに消耗が激しい。

もしも、世界樹の種に駐留している四個戦隊がいれば、もう少し

戦闘を楽に進められたろうが、逆に世界樹の種が陥落しているかもしれないことを考えると……、難しいもんだ。

「複座型はどうしている？」

「隊長の指示通り、周辺宙域の警戒に当たっています。……特に変化はないみたいです」

「そうか」

複座型は大事を取って、狙撃には回さなかった。

その代わりに、要塞防衛隊の早期警戒隊と同じく、先の戦闘で発生したデブリが多い宙域に派遣して、ユニウスの時の様な隙が生まれないように、早期警戒に当たらせているのだ。

「……隊長、新兵器、ジェネシス前面に対する圧力が増大しており、総司令部から戦隊に対して、？その場で最善の対応をするように？との出撃命令が出されました。また、艦長が戦隊に第一戦闘配置を発令したいと」

「艦長に承認すると伝えてくれ。それとＭＳ隊の出撃も早さ重視、略式で頼む」

「了解です」

レッドアラートが点ると同時に、各ＭＳに接続されていた電源ケーブルがパージされ、ノーマルスーツ姿の整備班員が最終確認の為に動き回っている。それと並行する形で、艦内と宇宙を隔てていた射出口の扉が徐々に開け放たれていき、リニアカタパルトのレールが展開されていく。

実はこの発艦に関係する一連の動き、俺が最も気に入っている時間だったりする。

命のやり取りをする戦闘前には不謹慎かもしれないが……、そこに機能美や躍動感、そして、ロマンを感じてしまうのだから、仕方がない。

「隊長、略式シークエンス開始します。……ＩＳ１３０１、出撃位置へ」

「了解した」

「続いて、ＩＳ１３０５、待機して下さい」

「了解」

周囲へ危険が及ばないように目を配りながら、機体をカタパルトに接続する。

「ロック確認、進路クリア、ＩＳ１３０１、出撃どうぞ！」

「了解、ラインブルグ、ゲイツ、ＩＳ１３０１、出るぞ！」

エアーが循環しているコックピット内の振動音のみで、ゲイツはいつものように射ち出された。

……しかし、総司令部からの命令？その場で最善の対応をするように？だが、投げやりだよなぁ。

まぁ、これである程度上手く動いているあたり、ザフトらしいといえばらしいのだが……、現場の暴走を許す一因でもあるからなぁ、あんまり出して欲しくない命令だ。

っと、レナや他の連中も編隊位置に着いたか。

「デファン」

「うっす」

「モーリス、ジョンソンの調子はどうだ？」
「被弾して、ちょっと動揺してたっすけど、ゲイツがジンよりも遥かに頑丈だとわかって、機体を信頼できるようになったみたいっすから、トントンっすね」
「そうか、厳しい局面が続くだろうから、しっかりと面倒を見てやれ」
「了解っす」

後は……。

「マクスウェル」
「何か？」
「俺が何かに掛かりきりになった場合、全体の指揮を頼むぞ」
「……了解しました」

さて、見えてきた。

ここ最近で見慣れてしまった、ビーム光が行き交い、それに連動する形で火球が発生する、生と死が一瞬で分かたれる、戦場だ。

「ベルナール、状況は？」
「圧力の増大で、全戦隊に出撃命令が下されています」

圧力の増大との言葉を受けて、立てかけた皿状に広がる戦域をざっと見れば、集団でもってジリジリと前線への圧力を掛ける連合軍ＭＳ隊と時折、突破を図ったりする爆装したＭＡ部隊を、機動でもって正面圧力を逃しながらも、決定的な突破をさせないようにザフトＭＳ隊が奮闘しているようだった。

……ここは文字通り、横槍を入れる方がいいか。

「ベルナール、他の戦隊に、うちが穴を開けるから上手く活かしてくれ、と伝えてくれ」
「了解しました」
「各機、スピア（注）で敵前線部隊に横撃を仕掛けるぞ。前衛にデファン小隊、中衛はリー小隊、マクスウェル小隊の順だ。後衛は俺とレナが付く」
「「「了解！」」」

……そっと、息を吐き、腹に力を込める。

「デファン、行けっ！」
「うっす！　モーリス、ジョンソン、行くっすよっ！」
「リー小隊、デファン小隊に続け！」
「マクスウェル小隊、続くぞ！」

さて、行くとするか。

「レナ、俺達も行くぞ」
「了解です」

レナの了解を受けて、俺はメインスラスターの推力を押し上げた。

◇　◇　◇

戦域への突入は比較的に訓練通り、上手くいったと言えるだろう。
デファン達が側面からの攻撃を迎撃しようとしたＭＡ部隊を文字通りに蹴散らした後、敵ＭＳ隊の前線部隊と後続部隊の間隙に上手

く突入し、敵が同士討ちを恐れている間にリー小隊とマクスウェル小隊が次々と侵入、主に後続部隊への攻撃を開始する。

当然、俺とレナも乱戦宙域に侵入して、マクスウェル小隊を攻撃しようとするＭＳへ射撃を加えている。

「レナ、機動を止めるなよっ！」

「了解！」

ビームを避ける為に回避機動を伴ないながら、たまに飛んで来る小型ミサイルを頭部近接砲で迎撃し、隙を見せた相手を狙い撃つ。

「おい、ベルディーニっ！　動きが鈍いぞっ！」

「は、はいっ！」

「ボッカ、今だ！　落とせっ！」

「っし、とった！」

「ジョンソン、モーリスのカバーをするっすよ！」

「了解ですっ！」

各小隊長も健在で、それぞれの隊員に檄を飛ばしているようだ。

今現在、敵の前線部隊は、俺達が背面へと侵入したことで動揺している。そこを今まで前線を支えていた防衛ＭＳ隊が逆撃に移った事で形勢が逆転し始めたようだ。

ここから、少しずつ、前線に掛かる圧力を減らしていこうと考えていると、後続のロメロ隊とクルーゼ隊が突入してきた。通信信号が届いたので出てみると、ロメロだった。

「おう、ラインブルグ！　クルーゼ隊と艦艇狩りに行ってくるぞ！」

「ロメロか、奥に行くなら支援はないからな、十分に気を付けろよ。……まぁ、余裕があったら、撤退援護はしてやるよ」
「頼むぜっ！」

ロメロはさわやかにも白い歯を……どうやったのかは謎だが、光らせて、サムズアップして見せると、通信を切った。そして、ゲイツとジンM型で混成されたロメロ隊とジュールが乗っている追加装甲を施したデュエルや両肩に武装ユニットを装備をしたシグー、ゲイツから成るクルーゼ隊が連合軍艦隊を目指して、ストライクダガーで構成された部隊を切り裂いて行った。

「……突破力あるなぁ」
「ッ！　先輩っ！」
「っと」

レナの声に突き動かされて、機体に回避機動を取らせ、ビームが飛来した方向へと撃ち返す。

……おや、珍しく、当たったな。

右腰部を貫いたビームはストライクダガーに搭載されている推進剤にも火を付けたらしく、見慣れた火の玉へと変じていった。

「もう、先輩！　目立つんですから、ぼさっとしないで下さいっ！」
「はいはい、モテル男はつらいねぇ」

あえて気楽に聞こえるように軽い声を返し、部隊と周辺状況の把握に務める。

「何を言ってるんですか、先輩はイロモノですよ、Ｉ・ＲＯ・ＭＯ・

NO」

……俺、そろそろ、本気で泣いてもいいと思うんだ。

「まぁ、でも、そんな先輩が、わた「隊長！」」

「ッ！　何だっ！　何かあったのか、フェスタ！？」

「はいっ！　旧ボアズ方面に所属不明艦を三隻発見！　そちらの戦闘宙域に向っています！」

な、に？

「ＩＦＦ（敵味方識別装置）の表示は？」

「ザフトで使用しているものでも、連合軍で使用されているものでもないです！」

第三勢力……だと？

だが、いったい、どこの勢力が？

……。

宇宙軍を持っているとしたら……、アメノミハシラ……、オーブだろうか？

……いや、この場での予断は駄目だ、とりあえずは総司令部に報告させよう。

「了解した。総司令部の早期警戒担当とはリンクしているのか？」

「はい、しています！」

「なら、口頭での報告も入れるんだ。それと同時に戦隊にも連絡を

入れるようにな」
「了解です！」
「それと……、絶対に、無理はするなよ？」
「ぁ……、はいっ！」

複座型からの通信を切り、話の内容を考える。

……旧ボアズ方面って事は、デブリに紛れて接近してき「先輩、前っ！」ぁッ！

「っぉ！」

咄嗟に機体を横滑りさせて、体当たりを仕掛けてきた左推進部を損傷したメビウスをかわし、その際に左腕のビームクローを展開させて、機体を切り裂く。切り裂かれたメビウスは僅かの間、慣性で流れていったが、これもまた、爆散していった。

「……捨て身かよ」
「先輩っ！　今はこの場のことだけをっ！」
「わかっている。……確かに油断し過ぎた」

所属不明艦の事は総司令部に任せて、今は、レナの言う通り、目の前の脅威に集中しよう。

レナの注意後は、連合軍ＭＳ・ＭＡ混成部隊との交戦に集中したのだが、その頃から、戦闘宙域自体が敵味方双方複雑に入り乱れる乱戦になり始め、自らが戦っている相手の他にも、他機の戦闘で発生した流れ弾や機動中の衝突や接触等に、常に気を抜けない状態になってしまった。

今も、周辺状況の把握ができていないのか、はたまた、戦場で圧し掛かってくる恐怖と狂気で後先が考えられなくなった為か、俺の後背にも味方機が存在しているにも関わらず、ビームを乱射してきたストライクダガーをビームクローでもって、腰部をぶち抜き、血祭りに上げた所だ。

「……ふぅ」

「せ、先輩、敵機を落として、変な溜息をつかないで下さいよ！こっちまで力が抜けるじゃないですかっ！」

「レナ君や、今の疲れが大量に篭った溜息の何処が変だと？」

「うっ。……と、とにかく駄目なんですっ！　何か、一仕事を終えたような溜息は駄目っ！」

連携しているレナと減らず口を叩きあいながら、何とか疲労を誤魔化して、精神の余裕を確保していたら、エルステッドから通信が入った。

「レナ、警戒を頼む」

「はい！」

「どうした？　何かあったのか、ベルナール」

「はい、交戦宙域がヤキン・ドゥーエ前面に流れており、ジェネシス前面が開きつつあります」

「……他の独立戦隊は？」

「独立戦隊は既に全機が出撃しています」

はぁ、もう、予備戦力がないのか。

「なら、別働隊に対応している部隊をこちらに回せないのか？」

「そちらでも、計ったように戦闘が始まっています」
「総司令部はどうすると？」
「修理が完了した機を回すそうですが、元より数が少ないため、厳しいかと」
「……プロヴィデンスは？」
「後少し、整備に時間が掛かるとの事です」

プロヴィデンスが動けるなら放っておいても大丈夫だが、すぐに動けないのなら、このまま、ジェネシスまでの道を開かせるわけにはいかんよなぁ。

「了解した。何とか、ジェネシス前面に交戦宙域を戻すように動いてみる」
「お願いしま……っ！」
「……どうした？」

何だろう、この、中途で言葉が途切れるなんて、嫌な沈黙から来る不吉な予感は……。

「３００ｍ級からの出撃を確認しました。核搭載機と思われます！」
「……速い、……早いよ、連合さん」

幾らなんでも、即断即決過ぎるだろう。

……もう少し、臆病な位に、ゆっくりして欲しいもんだ、って、逃避はいかんな。

「レナ、全小隊に連絡を。何とか、核攻撃を阻止する」
「はいっ！」

はぁ、やれやれと一息を入れようとした時だった。

「あの、隊長？」

「ん、まだ、何かあるのか？」

「……敵艦隊の一部が複数の分団を構成し、ジェネシスに向って突入を開始しました」

……もぅ、勘弁してくれ。

以下　注釈及び（自己満足的に書いてみた）解説

注　スピア・ラインブルグ隊が使用する中隊陣形の一つ
全小隊を進行方向に対して縦一列に配置して、敵陣に向って断続的に突入していく事から、一点突破や敵を分断する為に使用される。
一番前の前衛は攻撃や突破等、粉砕力に優れた小隊が、二番目は前衛をカバーする為に援護や迎撃等、守備力に優れた小隊が、三番目は状況の変化に対応する為に、全てで一定水準の能力を持つ対処能力に優れた小隊が、後衛は、全体を把握する為に指揮官を含む小隊が担当することになっている。
陣形名称は、言わずもがな、槍のように全小隊が縦に並ぶ事から見立てられた。

92　激突する意志　1（後書き）

11／03／29　誤字脱字及び一部表現を修正。

93　激突する意志　2

艦艇群による突入攻撃……核だけに頼らず、多くの命を懸けて突入を図るという事は、それだけ、連合軍が本気だと……、断固たる意志でジェネシスを破壊しようとしていると言えるだろう。

だが、連合軍がそれだけの決意を示す以上、この攻撃を凌ぎきれば、この戦闘は……、いや、戦争自体を終結させる事もできるかもしれない。

「ベルナール、そちらで把握した分団数は？」
「はい、分団は全部四つです。一つの分団は２５０ｍ級四及び１５０ｍ級十六で構成されています」
「……エルステッド、ハンゼンをジェネシス付近へ移動させて、それらの艦艇の迎撃に当たるよう、艦長に伝えてくれ。後、できるだけ、他の戦隊も巻き込んで、戦力を確保するようにとも」
「了解です。……あっ、今、情報が入ったんですが、プロヴィデンスの整備が終了し、出撃するそうです。核への対処は、全てプロヴィデンスが行うとも来ていますね」
「そうか」

……なんか、今、これまでにない程、もの凄く、ほっとした。

「わかった。また、何かあったら、連絡を入れてくれ」
「了解しました」

とは言ったが、まぁ、これ以上、状況の変化は起きないだろう。

「先輩、全小隊に連絡を取りました。いつでも移動可能です」
「被害は？」
「出ていません」
「……皆、優秀だね、俺も鼻が高いよ」
「ふふ、訓練の質と量で、他の隊に絶対に負けない自信がありますから」

その根拠のある自信、自負こそが生き残る為の大きな支えなんだよ、とは言わないで、俺も各小隊長へと通信を入れる。

「ラインブルグだ。核への迎撃はプロヴィデンスが行うとの連絡があった。よって、俺達は予定を変更して、ジェネシスに突入してきている、艦艇を迎撃する」
「了解っす、クルーゼ隊長なら安心っすね」
「ああ、そうだな。もし、ユニウスの時に、プロヴィデンスがあったなら……」

リーの憂いを帯びた呟きに応える事ができないでいると、マックスウェルが話を強引に現実へと戻してくれた。

「隊長、敵の突入コースを塞いだり、制限したりする為に、戦域の敵部隊を、ジェネシス前面に誘引してはどうでしょう？」
「……いや、下手に連れて行って、突入してくる艦艇の援護に回られたら困る。逆に、この場に放置した方が無難だろうさ。……それに、前線の兵隊なんて、消耗品に等しいって考えている輩が連合軍の上層部にいた場合、極自然に、味方諸共、核で吹っ飛ばして、道を作る可能性もある」
「……恐ろしい話ですね」
「そういう事が普通に通るのが、戦争って奴なんだろうさ」

……例の如く、切り捨てられる側はたまったもんじゃないがな。

「とにかく、俺達は突入してくる艦艇を阻止する。各小隊、上手く抜け出ろ」

「わかったっす」

「了解です」

「了解しました」

マクスゥエルの返答を最後に通信を切ると、レナが声を掛けてきた。

「先輩」

「ん、どうした？」

「核への対処ですが、私達も備えておいた方がいいんじゃないですか？」

「いや、しなくていいさ。ラウが対処するんだから、任せておけばいい」

「……先輩って、クルーゼ隊長の事を、本当に、信じているんですね」

「まぁ、俺はラウ以上のパイロットを知らないし、実際、プロヴィデンスの凄さを目の当たりにしたからな」

核を全弾迎撃したことに加えて、俺達が束になっても撃破できなかった？緑？、？青？、？黒？といった連合の新型三機を歯牙にも掛けない無双ッぷりだしなっと、敵の密度が薄くなったか？

「っし、レナ、上手い事抜け出るぞ」

「了解！」

……と、そんな具合で、？そろそろ？と戦闘宙域を抜け出そうと思ったのだが、何故か、戦域を抜けようとした瞬間に、どこからともなくＭＳやＭＡが流れてきては、俺達の行く手に立ち塞がるなんて事が繰り返された為、隊の指揮を、先行してジェネシス方面へと抜け出たマクスウェルに委ねる破目になってしまった。

そして今も、ビームライフルを撃ちながら、シールドの大きさを生かして突進してくるストライクダガーの側面に回りこもうとして……、例の如く、その背後から撃たれるビームをかわす。

「ええいっ！　次から次へっ！　わらわらとっ！　邪魔だっ！」
「絶対に、その、先輩の、目立つ、機体色が、悪いんですっ！」

俺が敵の援護射撃を回避したり、突進機の背後に回りこもうとしたりして、意識をこちらに向けさせる間に、レナが突進機に攻撃を仕掛ける。

「仕方がないだろう！　その分の手当てを給料でもらってるんだから！」
「ええっ！　そんな手当てがあるなんてっ！　先輩！　ずるいですっ！」

レナの援護をする為に、射線が重ならない時と場所を選んで、突進機にライフルを撃ち込む。

「ずるくないっ！　その手当て分は全部、お前の腹の中に消えた！」
「なッ！　言うに事欠いてっ、そんな人の所為に！　酷いですっ！」

レナが怒りの篭った言葉と共に撃ち出したビームが突進機の機体中央部を貫き、俺も、援護していた機が他方向からの流れ弾に気を取られた隙を付いて、その右肩部を撃ち抜く。

「……ほほぅ、レナさんや、この件に関しては、少し時間を作って、お話をするべきだと思うんだが？」

「……奇遇ですね。私も、相互認識のすり合せのために、是非にも、ＯＨＡＮＡＳＩをするべきだと思います」

……あ、あれ、何か、レナが言う？お話？の語感が違うような？

「ま、まぁ、この場を切り抜けたら、じっくりと話し合おうじゃないか」

「ええ、じっくりと丁寧に、これでもかと言う位に、ＯＨＡＮＡＳＩしましょう」

うふふ、とサブモニター越しに怖い笑みを浮かべるレナを直視しないように注意しながら、ふと、考える。

肉体言語を駆使されるのは勘弁だが……、サブミッション系だと、ちょっとした役得のような、って、いかん、整備班に毒されてきてるぞ、俺。

「っし、今度こそ「こちらエルステッド！　隊長、敵ＭＡ隊による核攻撃を確認！　プロヴィデンスが迎撃しますっ！」わかった！」

「ぁ！　先輩、右っ！」

レナに言われるままに反応して、至近に迫り、ビームサーベルを振り上げていたストライクダガーらしきシルエットへビームアンカーを撃ち出し、左腕のシールドでコックピット部だけは守るべく構

えを取らせようとするが、間に合わない上、アンカーで敵を撃破しても、このままでは右腕を振り下ろされて死ぬ確立が高いと判断。

……僅かな一瞬が遅く過ぎるのを感じながら、咄嗟に頭部機関砲でサーベルを持った右腕への攻撃も加える。

ッ！

……間に合った。

相手の右腕が振り下ろされる前に、機関砲弾がズタズタに引き裂いて吹き飛ばし、同時に、こちらのアンカーも右腹部に到達して、機体に大穴が開き、爆発する。

至近での爆発の衝撃を受けて、機体情報に注意のイエローが幾つか点灯するが、それも直に消えた。

「すまん、レナ、助かった！」
「無事、なんですね？　……よかった」

レナの安堵の声に応えつつ、跳ね上った動悸を抑えこむ為に大きく息を吐いて、周囲を警戒する。

これだから……、予期せぬアクシデントが多いから、乱戦だけは嫌なんだ。

「レナ……、核攻撃が迎撃された瞬間を狙って、この乱戦から離脱する」
「了解です」
レナの機体と背中合わせの態勢をとって、周囲の敵を牽制しながら、その時を待つ。

……。

「隊長！　所属不明機が複数出現！　先の所属不明艦からのものだと思われます！」
「ッ！　後で聞くっ！　それよりも核の迎撃はっ！」
「もう、すぐです！」

そのベルナールの言葉の通り、これから俺達が向おうとする先……ジェネシス前面宙域で、再び、擬似太陽の如き巨大な閃光が次々に広がっていく。

俺達も、この場に居合わせた全ての者の注意を引き、無視し得ない眩い存在が消えてしまう前に、この宙域からの離脱を図る。
「行くぞ！」

「はいっ！」

離脱進路上にいた敵をなぎ払いながら……。

◇　◇　◇

乱戦宙域からの離脱に成功した後、最初に遭遇したのは、核を迎撃したプロヴィデンスだった。プロヴィデンスの左肩部には、月での戦いの後、ラウが付け始めたパーソナルマーク【王冠を抱く金獅子】が燦然と輝いている。

「よう、ラウ、お疲れ」

「アインか。……状況は聞いているかね？」

「状況？　連合軍艦隊が突っ込んできている事か？　それとも、所属不明の勢力か？」

「所属不明の勢力の方なのだが……、クライン派に強奪された【エターナル】が確認できた。どうやら、Ｌ３に逃げていた？お姫様？が出張って来たらしい」

凹（おう）！　ＭＡ、ＴＡ、ＫＡッ！

「しかも、足つきやオーブの残存勢力が使用している戦艦も共に確認できている」

「な、なんだ、そりゃ？」

「差し詰め、行き場を失った者同士が徒党でも組んだのだろう」

「……だが、それが、何故、今、ここに？」

「さて、私にもわからぬよ。……だが、？お姫様？あたりが、自身が信じる？正義？と？崇高な理念？でも吹き込んで、自身の都合に

巻き込んだのではないか？」

「……ありえそうで、怖いなぁ」

六月に起きた政庁でのテロの後、保安局が情報漏洩等の捜査で集めたクライン派に関わる情報を見せてもらったのだが……、？お姫様？は少々夢見がち、もとい、独善が過ぎるように感じられた。

いや、彼女が求める、コーディネイターとナチュラルの争いを食い止めて、平和を希求する姿勢は大いに結構な事で、実に素晴らしい考えだと思う。

……だが、自身の立場を理解していないようなのだ。

鎮魂の場において、プラント独立を高らかに宣言したのは誰だった？

地球にニュートロンジャマーを……、憎悪の種を撒き散らす事を主導したのは誰だった？

地球連合への情報漏洩の端緒となり、結果的に、戦争を終結させる為にザフトが行った一か八かの賭けを失敗させたのは誰だった？

……まぁ、これらは？お姫様？自身の直接的な責ではなく、あくまでもその親の責である事はわかっているが、事実として、それらに関わり、協力していたのだ。

だったら、最後まで……、いや、人は常に変化する生き物であり、

感情に生きる存在である以上、この際、主義主張の変化や肉親の情には目を瞑ろう。

しかしながら、はっきりと言える事もある。

主張から行動に至るまでの過程が短過ぎるというか、言ってることと行っている事の乖離が激し過ぎるというか、行動が過激過ぎて周囲への影響が大き過ぎるというか、要するに、何もかもが短慮短絡過ぎるし、その行動も周囲へと迷惑を掛け過ぎているっ！

本当に、あんたは歌だけを……、平和な歌だけを歌っていてくれ、って言いたくなる。

そんな？お姫様？への評価を思い出しながら、ラウに問い掛ける。

「で、その？お姫様？の勢力は、どう動いているんだ？」

「動きを見るに、連合の核戦力とこちらのジェネシスの破壊を目指しているようだ」

「……と、なると、抑止力の破壊が目的なのか？」

「平和な世界を希求する彼女に言わせれば、多くの死を生み出す大量破壊兵器の存在は許せない、といった所だろう」

「その当たりは、受け止め方の違いかなぁ」

「ふっ、だが、ボタン一つで事が成る以上は、一概に否定はできまい」

「……確かに」

世界を滅ぼしかねない物騒な代物がない世の中なら、どれだけいいものかと、内心で独語しながら、言葉を続ける。

「されど、人は……、世界が滅ぶ危険があったとしても、他者から身を守る為の確たる保障を求める、といった所かな？」

「ああ、それが、この人の世の真理であり、現実だ」

「俺、？お姫様？が掲げてみせる理想は嫌いじゃないんだけどなぁ」

「ふっ、私もそうさ。……だが、世の現実を見据えず、他者の思いや考えも汲み取れぬ？綺麗な？理想（独善）では、いつまでも到達できぬ絵空事に過ぎぬよ」

「……違いない」

さて、汚濁に塗れた現実を生きる身として、仕事をしようか。

「で、連合軍と？お姫様？、どっちの対応をするんだ？」

「……少し待ってくれ」

んん？

急にラウがプロヴィデンスからドラグーンの端末を放出したかと思うと、前面宙域に展開させて、何もない虚空に向けて、連続してビームを発射、ッって、何故に、核クラスの爆発が多数っ！？

「えぇーーーっ！」

レナの驚きに満ちた声が耳に入ってくるが……、無理はないと思う。

「ふむ、これだけのようだな」

「あ、まさか……、ミラージュコロイドを使った核攻撃？」

核攻撃や艦隊突入は……、囮か保険といった所か？

「今のが、連合軍の本命か？」

「ああ、おそらくはな」

「しかし、ラウ、よくわかったな」

「何、ちょっとした？悪意？が迫ってきているのを感じたのだよ」

ちょ、悪意を感じるって！

「はぁ～、ラウ、お前さんさ、もう、人類進化の段階を一つ昇ったんじゃないか？」

「ふふっ、本当に、君は面白い事を言う。……だが、今はこのようにのんびりと話している余裕はあるまい。アイン、私が？お姫様？の方を受け持とう」

「……ＭＳの数が多いけど、いいのか？」

「何、プロヴィデンスならば、数にも対応できる。それに、君の隊は、既に連合軍艦隊に対処しているのだろう？」

「まぁ、？お姫様？が機動戦力を出す前だったからな」

「ならば、予定通りに動けばいい。……私もそろそろ決着をつけたい」

「決着、って……、まさか、？お姫様？の方に、例の好敵手が？」

「……ああ、私の感覚がそのように訴えかけてくるのだ」

……決着か。

「わかった。頼むよ、ラウ」

「ああ、任せておけ。……では、私は行くとするよ」

「おうさ、早い所終わらせて、家に帰ろうぜ」

「ふっ、そうだな」

こちらが通信を切ると、プロヴィデンスは何かを見定めたように、スラスターを噴射させて、一直線に戦域へと消えて行った。

さて、俺もうちの連中に連絡を、と思ったら、ラウと話をしている間、ずっと警戒にあたってくれていたレナの重い吐息が聞こえてきた。

「レナ、どうしかしたのか？」
「あ……、いえ、別に、なんでもありません」
「ならいいんだが、気は緩めるなよ？」
「せ、先輩こそ、駄目ですからね？」
「ああ、もちろんだ」

互いに互いの気を引き締めあった後、先に戦域に赴いた各小隊長へと呼び掛ける。

「こちらラインブルグだ。マクスウェル、デファン、リー、状況はどうか？」
「こちら、マクスウェル、全機被弾なし。現状、少しずつ落して、何とか対応していますが、数が多いです」
「デファンっす、全機損傷なしっす。でも、こっちも友軍が少ないから、厳しいっす！」
「リーです。ベルディーニの消耗が激しいですが、まだフォローできる範囲です。後、隊長、今相手をしているのとは他に、足つきクラスが一、１５０m級四と一緒に出張ってきてるのを確認してます。けど、俺達では、流石に、そちらには手が回りません」

これまた、大物が来たね。

「了解、俺達が足つきを担当するから、お前達は引き続き、敵艦艇への攻撃を続行しろ」
「「「了解！」」」

さて、不沈と噂に名高い足つき級に攻撃を仕掛けることになったが……、どうしよう。

取り敢えずはレナを連れて、リーが送ってきた座標と予測侵攻コースを参考にして、迎撃ポイントへと機体を進ませる間に、対策を練ることにする。

「レナ、足つきって、確か、ビームに強いんだよな？」
「ええ、らしいですね」
「……どうしようか？」
「……どうしましょう？」

……むぅ、ゲイツの主兵装はビームなんだが、マジでどうしよう？

「ビームライフルはＣＩＷＳ（Ｃｌｏｓｅ ｉｎ Ｗｅａｐｏｎ Ｓｙｓｔｅｍ：近接防御火器システム）を削るのに使って、装甲にはビームクローによる近接攻撃を試すか？」
「ＣＩＷＳもビームに強い場合、破壊できませんし、そもそも、接近するのも難しいのでは？」

ビームが駄目なら、質量攻撃しかないわけだが……。

「なら、体当たり？」
「それは、自滅行為です」
「……一方が足つきの注意を引いて、もう一方がビームライフルを鈍器にして艦橋を叩く」

「な、何と言うか、野蛮ですね」
「でも、それ位しか、打撃を与えられる方法は思い浮かばんよ？」
ギブ・ミー・スコップッ！
と言うのは五割程の本気を含んだ冗談だが、現実、ゲイツの実弾兵器は頭部機関砲しかないからなぁ。
……うん？　実弾兵器か。
「他には、何か、ありませんかね？」
「エルステッドとハンゼンからの超長距離砲撃」
「……試しましょう。直に連絡をいれます」
「ああ、頼む」
レナがエルステッドに連絡を入れる間、周囲を警戒する。
目に入るのは主に、ＭＳやＭＡ、ミサイルだったデブリなのだが、その数が以前の会戦よりも段違いに増えている。
……。
「そこらへんに浮いている重突撃機銃か重斬刀を拝借するかなぁ」
「そう都合よく、使える物は浮いてませんよ」
確かに、とか応えながらも、目に入ったストライクダガーの腕部をシールドの取っ手を離した左手で拾っておく。
……まさにアームだな、って、つまらん洒落は恥ずかしいから、忘れよう。

「先輩、連絡を取りました。近くにいたロメロ隊と共に攻撃を仕掛けるとの事ですが、座標を調整するとも言ってました」
「わかった。……後は、足つき級が迎撃ミサイルを撃つ瞬間に、そのミサイルを狙撃する位かな」
「いえ、そんなこと、できませんよ」
「……いや、レナ、お前ならできるよ」
「はぇ？　……えと、せ、先輩、じょ、冗談ですよね？」

いいえ、真面目な話です。

「冗談じゃないさ。その時は俺が囮を引き受けるから、レナ、お前は狙撃を頼むぞ」
「ッ！　……わ、わかりました」

……さて、見つけたぞ。

黒い足つきと、それを守るように前後に位置している１５０m級が四、護衛機として両舷に一個小隊規模ずつ随伴しているストライクダガーが六機だ。

「レナ、まずは護衛機と１５０m級を排除する。足つきは、それからだ」
「了解！」

黒い足つきがジェネシスを射程圏内に収める前に叩かないとな。

93　激突する意志　2（後書き）

11／04／01　誤字修正及び一部加筆修正。

９４　激突する意志　３

元はジンＭ型やストライクダガーを構成していたデブリ群に紛れて、慣性でもって静かに足つき級へと接近して行く。

黒い足つきを中心とする小艦隊を改めてモニターで確認した所、足つき級を中央に、前後を１５０ｍ級で、両側面をストライクダガーの三機組で挟みこむ陣形を取っていた。

「レナ、斜め後方から仕掛ける。最初の一撃で、邪魔になるストライクダガーを減らすぞ」

「了解！」

レナの了解もあったので、早速、デブリの陰からビームを……撃つ、撃つ、撃つ！

「敵三機、撃破しましたッ！」

うぅ、俺が撃ったビーム、一発も当たらんかった。

い、いや、連合のＭＳが神憑り的に回避しただけであって、俺の腕が悪いわけではないと、思いたい。

しかし、レナの奴、三機も立て続けに撃破するなんて……、というか、ストライクダガーが回避する先を読んで、射線を置いてんだから、マジで凄いよなぁ。

って、折角の好機は活かさないと……。

「よし、俺が前方に出て、連中の注意を引くから、レナは後ろの二隻を落としてくれ」

「わかりました。……先輩、くれぐれも、気を付けてくださいね？」

「わかってるさ。お前も油断するなよ？」

「はい」

レナの機体へとビームライフルを持ったままの右手を一度だけ振り、お世話になったデブリに感謝の念を送った後、行動を開始する。

目立つように派手にメインスラスターを吹かしながら、前方の１５０ｍ級をぉぉぉぉっ！！！

……あぶねー。

足つき級が爆雷らしきものを艦付近で爆発させたかと思うと、側面砲をぶっ放してきやがった。

しかも、今、艦尾や艦橋後方からミサイルが多数って……、ちょ、ええっ！？

軽く六十を越えるって、連続して撃ち過ぎだろっ！

じょ、常識的に考えて、一機には多過ぎる数だぞ、おいっ！

どうしてここまで対処が過激なんだろうと、内心で困惑を抱えながら、１５０ｍ級を盾にしようとしたら、そちらからもミサイルの

嵐が……。

……どうしろと？

瞬間、悩むが、どこに行っても危地であるが故に、自身が信じた最善を取る。

「……こわっ」

後方から迫ってくるミサイル群には左腕に持っていた打撃武器をデコイ代わりに投げつけておき、正面から狙ってくるミサイル群に対して、バッテリー残量を気にしながらもビームライフルでもって一部のミサイルを狙撃、爆発させた後、開いた穴を目掛けて全力噴射で突き抜ける。

と、突き抜ける最中、こちらの接近を感知したらしいミサイルが次々にぃっ！

「うっぁっ！」

強力な衝撃と多数の破片を受けて機体情報の一部でイエローが点るのが分ったが、今は無視して、自機の近かった１５０ｍ級の懐に、近接火砲を掻い潜って潜り込み、ランチャー部と推進部にビームを撃ち込んだ。

推進部が吹き飛ぶと共に、艦体各所で連鎖的に小爆発を起こし始めた１５０ｍ級を、デコイで僅かに数を減らしたものの、依然とし

て背後から追尾してくるミサイル群への隠れ蓑にして、もう一隻の１５０ｍ級を目指す。

……背後で、俺を追ってきたミサイル群が、１５０ｍ級と共に盛大に華開いたようだ。

これで一安心と思い、軽く息を吐いた所、丁度、足つきの前方に差し掛かった為か、足つき級からのビームが飛来してくる。

「ッとっ！」

機動が直線的になりすぎていることを自覚して、少しだけ、機位をずらすように姿勢制御バーニアを噴射しておく。

……うぇ、主砲のビームがさっきまでの軌道上を走ったな。

黒い足つきのあまりの腕の良さに背筋が凍り、表情にも引き攣った笑いしか浮かんでこない。

それでも何とか、引き攣り笑いを不敵な笑みに作り変えて、１５０ｍ級が構成する近接火砲網の？穴？に入り込み、推進部へ向けて、再び、ライフルの引き金を引く。

先程と同じように、艦体に爆発が広がって行くのを確認しつつ、四つあるミサイルランチャーの一つ、それと艦体が繋がる部分をビームクローで引き裂き、嫌がらせがてら、ランチャー部を足つきの進路上に蹴り込む。

その際の反作用を利用して再加速し、今度は迎撃態勢も取らないまま、混乱して右往左往しているらしい、もう一方のストライクダガー隊を排除する為に接近していると、レナから通信が入ってきた。

「先輩！　後方の１５０ｍ級を一隻落しました！」

「了解、引き続き、頼むぞ！」

「了解です！」

しっかりしたレナの返事に安堵していると、再度、爆雷らしきものを爆発させていた黒い足つきが側面砲を……。

「もぅ、いい加減、勘弁して欲しいなぁ」

そう愚痴を口にすると、少しだけ、臓腑から重いモノが抜けたように感じられた。少しだけ気分が晴れたので、足つきに近付いた先程のランチャーを目掛けて、ビームを撃つ。

……が、何故か、途中でビームの威力が減退し、撃ち抜けなかった。

その原因が気になったが、今のチャンスを逃してしまっては意味がないので、とりあえずは究明を後回しにして、何とか破壊できるように頭部近接砲を許容できるぎりぎりまで撃っておく。

「ッし！」

まだ、運には見放されていないようで、見事に大爆発って、また、ミサイルがががぁっ！

再び解き放たれた大量のミサイルに追われながら、迎撃もせず、こちらを遠巻きにしていたストライクダガーを目指して突き進んで行くと、連中は攻撃を仕掛けてこないまま、それぞれが蜘蛛の子を散らすように、バラバラに逃げ始めた。

……あまりにも予想外の行動だった。

果敢だと思っていた連合軍にも、ああいう連中はいるんだなぁ、なんて思いが生まれてくるが、その逃亡行為に嫌悪感ではなく、ある種の親近感を抱いてしまうあたり、まだ、俺の思考が軍人的なモノに染まりきっていない証左かなとも思う。

とはいえ、逃げ出したのも偽装撤退のような一時的なものかもしれないし、逆に本当の敵前逃亡ならば、銃殺を恐れて戻ってこないとも限らない、っと、ミサイル群が飛来したビームに薙ぎ払われ？

「先輩、援護します！」

どうやら、レナが後方の１５０ｍ級を落として終えて、こちらに

合流するべく接近してきているらしい。

「ああ、助かる！　レナ、一当たりした感じ、黒い足つきは３００m級よりも手強いぞ」

「クルーゼ隊が落しきれなかっただけはありますね」

「まぁ、こいつは同型艦みたいだけどな」

こんなのが大量生産されていたら、恐ろしい事になっていただろうが……、俺が知る限りでは、三隻しか確認していない。

たぶん、従来の艦艇よりもコストが大幅に高いんだろうなぁ。

「あれ？　でも、足つきクラスの右舷艦尾から推進部まで、かなり破壊されていません？」

「オレオレ！　俺が超頑張った成果だ！」

「はいはい、こんな時に冗談はいいですから、どうやって攻めるんですか？」

ほ、本当なのに……。

これが今までの自身の軽率な言動が生み出しまった闇の部分なのか、と厨二めいた事を考えながら、簡略に方針を伝える。

「俺が接近して強襲行動を取るから、レナ、左舷艦尾にあるミサイル発射管付近を狙ってくれ」

「ミサイルが撃たれる瞬間を、ですよね？」

「ああ。っと、そういえば、艦体に当たる前にビームが減退したから、ライフルが使えないかもしれない」

「……なら、機関砲でミサイルを誘爆させろと？」

「いや、何か原因があるはずだし、それを何とかするよ。だから、

レナ、チャンスを逃さないでくれよ？」
「了解です」

こちらの推進剤やバッテリー、残弾といった諸々も厳しくなってきているから、取り敢えずは、残る左舷側を集中して攻める方がいいだろう。

左舷後方から再接近を図ると、再度、足つき級は艦体側面から発射した爆雷らしきものを爆発させって……あれか？

左舷艦尾から発射されたミサイルや近接防御火砲に追われながら、試しに、ビームを艦体へと撃ってみる。

……ビームは途中で目に見えて減退し、装甲に当たると掻き消えた。

「レナ、爆雷だ」
「ええ、さっき爆発させた奴が原因みたいですね」
「おそらく、爆雷の中にビームを防ぐ為の何かが含まれているんだろう。……そいつの発射装置を狙うか」
「でも、装甲内部に埋め込んでいるみたいです」
「……だよなぁ」

むぅ、打つ手なし、だな。

「……あ、先輩、エルステッド、ハンゼン、それにロメロ隊母艦が砲撃と対艦ミサイルの発射を開始したみたいです。足つきクラスから退避するようにと、サリアが言ってます」
「足つき……紛らわしいな、？黒いの？の座標情報が伝わってるのか？」

「ええ、複座型の二人が捕捉しています。それとロメロ隊の母艦も攻撃を開始しました」
「……なら、そいつに期待しよう」

うちの戦隊員と複座型の錬度なら、よっぽど神憑り的な操舵手が？黒いの？にいない限り、間違いなく中るという確信がある。

だから、戦隊からの砲撃が終わるまで、一端、？黒いの？から遠ざかり、質量兵器というか、打撃武器あるいは重斬刀を探す為に、デブリが多い宙域に紛れ込むことにする。

むぅ、万能鈍器であるシャベル、或いはスコップさえあれば、こんなことをしなくてもいいのに……。

もしも、頑丈な戦艦の装甲すら打倒できる程に気合の入ったＭＳ用のシャベルが、何物にも屈することも折れることもなく、ＰＳ装甲すら突き破れるスコップがあるのなら、今すぐ買いにっ、……いかん、俺、疲れてるみたいだな。

「先輩」
「っと、レナか。……？黒いの？はどうしている？」
「こちらが退くのを見て、迎撃行動を中止しました。……気になりますか？」
「ああ、後追いのミサイルとかがなかったから、気になってな」
「右舷後方部が中破といってもいい損傷具合でしたから、向こうも余裕がないのでは？」

中破規模って、あの攻撃、そんなに効いていたのか。

「やれやれ、そう期待したいもんだ。それで、お前の機体状況はど

うだ？」
「機体バッテリー残量と推進剤が半分を切ってます、ライフル用バッテリーも残り三分の一程度です」
「まだ、マシだな。俺なんて、間接部にはイエローが点ってるし、推進剤以外、バッテリー系全部が三分の一だぞ？」
「いえ、自慢になりませんよ？」
「くく、確かにな、っと、連中の様子も聞いておくか」

……危うく忘れるところだった。

「こちらラインブルグだ、マクスウェル、デファン、リー、状況は？」
「マクスウェルです！　コリン機が右腕に被弾、本人も負傷した為、後方に下げました！」
「デファンっす、こっちは何とか、やってるっす！」
「こちら、リー！　ベルディーニが限界でしたので下げました！」
「……コリンとベルディーニか」
「ええ！　リーと計って、ベルディーニに護衛させつつ、コリンを連れて帰らせました！　残った俺達は合流して、四機編成でやってます！」

今までにやってきた想定訓練が役に立っていると言った所かな。

「で、マクスウェル、そっちは押さえ込めているのか？」
「何とかですが、ね」
「了解した。こちらも何とかするから、引き続き、そっちも何とか頼むぞ」
「了解！」
「うっす！」
「了解しました！」

いやはや、死人が出ていないのは幸いだ。

「コリン達、無事に帰れるといいんですけど」

「そうだな。……お、こいつは使えそうだ」

上半身だけが奇跡的にも形を留めているシグー、その背部スラスター側面にマウントされれたままの重斬刀を発見した。

「……もらうぞ」

モノアイの光を失っているシグーに一声だけ掛けて、頂戴することにする。

「……先輩、そろそろ到達時間です」

「ああ、わかった」

さて、休憩ついでに高みの見物……は拙いか、とにかく、状況の変化を期待させて頂こう。

……おや？

？黒いの？が回避行動と迎撃の為にミサイルや火砲を発射し始めたが、右舷推進部をやられているせいか、動きが少し鈍いように感じるな。

「ミサイルは迎撃されているみたいですね」

「だが、その分だけ、レールガンの迎撃には回せない。……見ろよ、命中した」

レールガンによる砲撃は、初弾こそ回避されたが、避けた先を想定して放たれていた次弾が?黒いの?の左舷艦首に命中して、大爆発を起こしている。

だが、?黒いの?のも大したもので、それ以降は艦砲弾も対艦ミサイルと同じように、順次、迎撃ミサイルや側面砲、両舷上部に据えられた主砲のビームによって迎撃したり、宇宙港に入港する際に使用する側面スラスターを利用して回避しているようだ。

「先輩、ロメロ隊母艦及びエルステッド、ハンゼンによる攻撃が終了します」

……レールガン用のバッテリーが尽きたか。

だがっ！　お、おおっ？　迎撃し損ねたミサイルが命中して、左舷艦尾が吹き飛んだな。

「流石だな」
「皆、優秀ですからね」
「ああ、本当に良い仕事をしてくれたもんだ。こちらも頑張らんとな」
「ですね」

これで、?黒いの?の推進系に大打撃を与えたし、ミサイルベースも破壊した事になるから、後の攻撃が非常に楽になる。

レナに声を掛けて、更に?黒いの?に追い撃ちを掛けようとすると、エルステッドのベルナールから通信が届いた。

「隊長、新しい情報が入りました」

「……何かあったのか？」
「後方の連合軍艦隊へと浸透したクルーゼ隊及びロメロ隊のＭＳ隊が核攻撃機の母艦らしき３００ｍ級を捕捉、撃滅したとのことです」
「ッ！　そうか！」

おお、これでプラントへの核攻撃の脅威度が激減したぞ！

「これが原因なのかはわかりませんが、戦線に対する圧力が弱まっており、前線に若干の余裕が生まれています。また、月軌道外方面に展開していた連合軍別働艦隊の攻勢も下火になっており、分艦隊規模の戦力をこちらに回すとの事です」
「それは助かるな」
「そうですね。後、総司令部からの通達で、所属不明の勢力は、その動きからジェネシスの破壊を目指していると判断される為、敵性勢力として排除するように、とのことです」
「了解、それに関しては、そちらから他の連中にも伝えておいてくれ。これから、？ちょっと？忙しくなるんでな」
「了解です」
「あ、それと、ロメロ隊とうちの対艦攻撃は足つき級に甚大な打撃を与えたって、ロメロ隊と皆に伝えておいてくれ」
「わかりました、伝えておきます」

何となく、戦争が……少なくとも、今日の戦闘は終わる気配がしてきた。

「レナ、どうやら、後少しのようだ」
「ええ、頑張りましょう」

レナの返事に頷き返して、再度、？黒いの？を見るが……、本当に、足つき級は凄い艦だな。

普通の宇宙艦艇ならば、大破と判定されて後方に引き揚げるなり、退艦命令が出されるなりしてもおかしくはない程の損傷を受けているはずなのだが、ダメージコントロールがよほど優れているのか、或いは、バイタルパートが健在で機能を喪失していないか、はたまた、不屈を旨とする精鋭揃いの乗組員なのか、……とにかく、本体に据えられているスラスターを使用して、未だにジェネシスを目指すのを諦めていないようなのだ。

これ程の闘志を見せている以上、完全に沈めるのは大仕事になるだろう。

まぁ、何が言いたいかと言うと……。

「レナ、右舷艦首と主砲と破壊して、？黒いの？の無力化を目指す」
「無力化……接近戦で破壊するんですか？」
「ああ、それが一番手っ取り早い」

そのために拝借してきた重斬刀である。

「私はどうしましょう？」
「俺の援護と近接火砲に対する囮、加えて、装甲が破壊された部分ならビームも通るはずだから、例の爆雷が爆発していなかったら、狙ってみてくれ」
「わかりました」

では、？黒いの？との二回戦を始めよう。

95　激突する意志　4

再度、襲撃を仕掛けるべく?黒いの?へと接近して行くと、例の爆雷が投射され、爆発すると同時に、艦体後部にあるミサイル発射装置からは立て続けにミサイルが発射され、艦橋部付近にある近接火砲群と両舷の主砲も盛大に?火?を吹き始めるといった、熱烈な?歓迎?が始まった。

もっとも、エルステッド、ハンゼン及びロメロ隊母艦からの攻撃を受けた左舷は艦首、艦尾共に大きく損傷しているし、右舷も艦尾が抉られている為、当初に受けた迎撃攻撃よりは薄いと言えるだろう。

「レナ、後方に回り込んで推進系を狙え」
「了解です!」

飛来するミサイルの分断も兼ねて、レナを?黒いの?の後方に回り込ませたのだが……、何故か、いつもと同じように、こちらにしかミサイルが向かってこない。

思わず漏れ出そうになる溜息を抑えて、ビーム砲とＣＩＷＳの射線に乗らないように意識しながら、ビームライフルで撃ち落す事にした。

どうやら、ビームを減退させる爆雷の効果は艦体の傍でしか効果的ではないらしく、ライフルから放たれたビームは元気に飛び出していったので、調子よくミサイルを順調に撃つ……ライフル用のバッテリーが切れた。

普通ならパニックなって泣き喚きそうな事態だが、ここに来る以前の乱戦でかなり使用していたし、仕方がないというか、逆に良くここまでもったと褒めるべきだろう。

しかしながら、現実に接近してくるミサイルが残り六発あるし、今後も追加で撃ってこない保証はない。

飛び道具もなくなったし……、推進剤の残量も考えると機動でミサイルを振り切るよりも、？黒いの？の懐に潜り込む方がのが賢明だろう。

幸いにして、？黒いの？の左舷武装は崩壊しているといっても過言ではないし、ミサイルだって自艦に突っ込ませる様な事はしないだろうしな。

こんな具合に考えを纏めた後、ビームライフルを？黒いの？の艦橋目掛けて投げつけて、僅かでも注意が逸れるようにしつつ、一気に機体を加速させっとぉぉっ！

……危ないところだった。

迎撃に使われなかった上、動きもなかったから、てっきり？死んだ？と思っていた側面砲が生きてやがった。

まったく、この外連味溢れる一筋縄ではいかない動きを見るに、きっと、この？黒いの？の艦長はゴートン艦長やフォルシウス艦長みたいな渋さに満ち溢れ、経験豊富なベテランに違いない。

どんな顔をしているのか、是非、一度、拝んでみたいものだ、なんてことを考えながら、破壊された左舷艦首近く、ＣＩＷＳが届かない箇所に潜り込んで、ミサイルが自爆するのを……って、そのま

ま、こっち来たっ！

普段ならば、男なのに情けない声を出しやがって、なんて事を言いそうな悲鳴を上げて、大慌てで？黒いの？の股、もとい左右舷艦首の間に逃げ込んっぅふぁっぉおぉぅ！

「な、なんつー、無茶を……」

幾ら破壊されて、用を為さなくなった部分だからって、普通、自分の艦にミサイルをぶつけるか？

左舷艦首がまるまるなくなったのを見て、冷や汗が流れ出てくるが……、未だに？黒いの？は沈む気配を見せない。

本当に、頑丈だな、おい。

でもまぁ、ここらにはＣＩＷＳが配置されていないみたいだし、ちょっと、重斬刀の性能を試してみるか。

というわけで、右舷艦首にブス、リ、と？

……刺さらん。

どうやら勢いが足りないらしいと判断し、今度は勢いをつけてぶっ叩いてみる。

……ッ！

反作用が酷いが……おおっ、装甲に微々たる亀裂ができた！

なら、左腕のシールドをできた亀裂に押し込んで、っと。

……いけるかな？

「うあたっ！」

僅かな疑問と共にビームクローを発生させると、内部で大爆発が起きたらしく、艦首部分が吹き飛んだ！

で、当然、その爆発には俺も巻き込まれるわけで、間抜けにも？黒いの？の股、もとい、胴体に叩きつけられてしまった。しかも、両肩部のスラスターがレッド……破損したようだ。

幸い、推進剤は爆発の衝撃を受けた時に自動でカットされて大丈夫だったし、そもそも、ＣＩＷＳや主砲の前に弾き飛ばされなかっただけ、マシだと考えよう。

はぁ、やれやれと？黒いの？の胴体に張り付いたままでいると、後方で攻撃を仕掛けているだろうレナからの通信が入ってきた。

「せ、先輩！　どこにいるんですかっ！　返事をしてください！」

「レナ、俺は無事だ」

「あ、良かった。……爆発の後、急に通信ラインが切れたから、心臓が止るかと思いました」

「すまん、心配させたみたいだな」

「い、いえ、んんっ、それよりも、今、どこにいるんですか？」

「？黒いの？の股にへばり付いて、休んでる」

「ま〝ッ！　へ、変な言い方はしないでくださいよって、艦首が両方ともないっ！？」

「とりあえず、俺、頑張った、ということにしておいてくれ」

「……まさか、さっき言った事も、本当のこと？」
「それに関しましては、レナ君のご想像にお任せしますよ。で、そちらはどうだ？」
「あ、はい。例の爆雷に切れ目がなく、ビームが通りません。防御火砲も変わらず健在ですし」
「了解、なら、こっちで何とかするよ」

さて、レナとの戯言遊びで強張ってた気が抜けたし、もう一働きするかと、気合を入れて首を軽く回すと、骨はゴキゴキと、肉はギチギチと、嫌な音を奏でるのを身体を伝わる振動が教えてくれる。

幾ら表面では取り繕っていようが、身体は素直に緊張していたということだろう。

それでも尚、やらなければならない以上はやってのけるしかない。

「っし！」

自身を叱咤し、再び、重斬刀を振りかぶって……っと、なんだ、ザフトの共同通信にっ！

『私はプラント最高評議会議長のパトリック・ザラだ。……ザフト所属の全部隊に告げる』

「っとぉっ！」

『先程、地球連合軍艦隊司令部より停戦の申し出があり……、ザフ

ト総司令部はこれを受諾した。……ザフト所属の全部隊は、地球連合軍との、戦闘行動を、即時中止し、各所属隊は、指定する座標まで……、後退せよ』

おっさん！　そんなことを急に言われても、止められるかぁっ！

それでも、必死に操作して、重斬刀を握り込んでいたマニュピュレイターを開いて、僅かの間だが、世話になった相棒を手放した。

……その相棒が、危うく？黒いの？の艦橋に命中するところだったが、こればかりは、どうかお許し願いたい。

冷や汗を流しながら、繰り返して流されている通信に耳を傾けると、確かにザラ議長の声で、現状において、停戦が成った事を伝えていた。

「レナ、聞いたか？」
「ええ。確かに、停戦したと言ってますが……、本当でしょうか？」

命が懸かっている状況だけに、まずは欺瞞かどうかを疑うよなぁ。

「レナ、お前もザラ議長の声は聞いた事があるだろう？　それにザフトで使ってる共同通信だし、本当だろうさ」
「……そう、ですね」
「それよりも、？黒いの？の動きは？」
「さっきの通信が流れるのと同時に、迎撃行動を中止しました」

？黒いの？の動きを見るに、連合軍にも同様の通信が出されているみたいだし、本当の事だろう。

とはいえ、つい先程まで戦っていた同士が、仲間を殺された者同士が、すぐに、はい、そうですか、なんてことができるだろうか？

……そう簡単にはできないだろうなぁ。

それでも、それが可能なのが軍隊という組織でもあるから、本職で構成された連合軍に関しては、ある程度は信頼できるだろう。だが、悲しむべき事に、こちら側……ザフトに関しては、まったく信頼できない。

元より、義勇兵という名の民兵に近い存在である上、上層部が恣意的に運用するためなのかはわからないが、軍規・軍律なんてものがあやふやなのに加えて、プラントやザフトに蔓延っているような、行き過ぎた選民思想もある。

こいつに染まってしまうと、同じ主義信条、コミュニティに属さない者の存在を絶対に許せなくなるから、自分達以外のものへ、強烈な攻撃性を見せるからなぁ。その代表的な例というか、最も分りやすい蛮行は、ビクトリアやパナマであった捕虜の虐殺だろう。

……いや、今は、そんな事を考えている時じゃないな。

「レナ、小隊長連中に連絡を入れて、状況を把握してくれ」
「えっ？　先輩は？」
「今後について、ちょっと、？黒いの？の艦長と話したい」
「……以前みたいに、騙まし討ち、されませんか？」
「レナ、以前のあれは騙まし討ちじゃないし、今回は状況そのものが違う。だいたい、停戦命令の通信が来て直に迎撃行動をやめるよ

うな相手だし、話だって、通じる相手だろうさ」

まぁ、命令に従った振りをして、虎視眈々と隙を窺っている相手なら死ぬ可能性もあるだろうが、その時は、所詮、俺の運が悪いか、考えが甘いということになるんだろうが……、それでも、そういうリスクがあったとしても、俺は、疑心で暗鬼を生むよりも、人の理性と人類社会が培ってきた善性を信じたいのだ。

「……わかりました」
「通信は任せるぞ」

そんな訳で両手を挙げて、？黒いの？の艦橋の前に出て、通信を試みてみる。

……。

おっ、繋がった、か……？

モニターに出てきたのは、連合軍の白い軍服に身を包み、制帽をしっかりと被った、凛々しい顔立ちをした短い黒髪の女性だった。

俺が勝手に想像していた厳つい顔ではなかった事に、ちょっとした驚きを覚えてしまい、次の行動に移るのにしばらくの時間を要したが、礼儀としてこちらから敬礼し、言葉を口にする。

「ザフト宇宙機動艦隊のアイン・ラインブルグだ」
「地球連合軍第七宇宙機動艦隊所属、ナタル・バジルール少佐であります」

少佐という階級を聞き、一瞬、副長クラスかなと思ったのだが、

代表で通信に応えている上、誰かに変わる気配もない事から……、この女性がこの？黒いの？の艦長なのだと当りをつける。

「この戦闘での停戦が成った、っていう通信はそちらにも届いているかい？」

「はっ、こちらでも停戦を確認しております」

しかし、この人……、俺はあくまでも敵であって、上官でもないのに、妙に礼儀正しいな。

それとも、これが地球連合軍のスタンダードなんだろうか？

いや、俺の疑問は、今は置いておいて、と。

「では、これ以上の戦闘はなし、終了ということで、いいかい？」

「構いません」

「では、互いに退くということで、っと、その前に……」

後は……、もうちょっと、言葉を選びたいけど、仕方がないよな。

「一つ、率直に聞く。そちらは自力航行は可能か？」

「ッ！　……いえ、あなたに手酷くやられましたので、自力航行は難しいでしょう」

ああ、やっぱり、怒らせたな。

怒りの情念が篭った鋭い眼光が痛気持ち良い、ってのは大嘘だが、凛々しい美人さんだけに、怒りを滲ませる姿も格好いいよなぁ。

「では、うちの隊の連中を護衛に付ける」

「……それはどのような意味でしょう？　当艦は降伏した覚えはありませんが？」
「何、そちらの救援が到着するまでの間だ」
「その理由をお聞きしても？」

嘘を見逃さないと言わんばかりの強い意志が表情に出ている所を見るに、艦を預かる艦長としての責任感や自らの職務を果たそうとする義務感が透けて見えて、好感が持てる人物だと思う。

まぁ、ちょっと硬質過ぎる気がしないでもないが、誰かが柔らかくしてあげれば、間違いなく良い意味で化けるだろうな。

って、いかん、また考えが逸れたな、話を進めないと……。

「いや、所属している俺が言うのも情けない話だが、ザフトに停戦を守れない馬鹿が出る可能性がある。その時の為の保険だ」
「……保険、ですか」
「ああ、足つきの同型艦なんてビッグネームを見て、とち狂った輩が攻撃を仕掛けるのを抑えたいんだ。ここまで来て、停戦がご破算になるような事態は勘弁してもらいたいからな。……はっきり言うと、もう、戦争は懲り懲りなんだよ」

これが、偽りない俺の本音だ。

「……」
「……」

しばらくの間、バジルール少佐のアメジストのような瞳と見詰め合う。

「……あなたのお考えはわかりました。ご好意、お受け致します」
「……信じてくれて、ありがとうよ」
「いえ。……では、我が方の救援が到着するまでということで、よろしいか？」
「ああ。それと、救援部隊にはいきなり攻撃を仕掛けないようにだけ、伝えておいてくれ」
「わかりました」

そう応じてくれたバジルール少佐が、不意に硬かった表情を崩し、少々ぎこちないが微笑んで言葉を続ける。

「あなたとは、このような場ではなく、普通にお会いしたいかったものだ」

や、や、意外と、硬質の美人さんから、こんな表情を不意に見せられると、こう、ギャップから、破壊力があって印象に残るな。

「……バジルール少佐みたいに、若くして足つきクラスの艦長を任されるような、有能で優秀な美人さんにそう言われるとは、本当に光栄だね」

こちらも軽くおどけて応じると、率直な褒め言葉に慣れていないのか、バジルール少佐は照れた様に、少し頬を染まったように見受けられた。

が、そこは突っ込まず、通信を終える事にする。

「では、バジルール少佐、そちらの救援部隊が到着しそうになったら、通信を入れるか、信号弾を上げてくれ。それでこちらは引き揚げる」

「わかりました、それでは」

最後に、互いに敬礼し合って、通信を終了する。

……はぁ、緊張した。

でも、バジルール少佐が話のわかる相手で良かった。

それに釣られる形で、最後に不意打ち気味に見せられた初々しさがあるバジルール少佐の微笑を思い出して、頬と鼻の下を緩めていると、それを引き締めさせるかのようにレナから通信が入った。

「先輩、各小隊に連絡を入れました。戦域に残っていた機は全て健在で、後少しで、こちらに合流するそうです」

「わかった」

「……えと」

「どうした？」

「先輩、私も、少しだけ見ましたけど、この足つきクラスの艦長、美人でしたね」

「それだけじゃないぞ？　直前までの戦闘で殺しあっていた相手に、自身の感情を押し込めて、あれだけ冷静に対応できるんだから、尊敬できる人だとも思う。……まぁ、美人ということも印象にプラスしているんだろうけどな」

「……むぅ」

レナの奴、何やら、不満と思案が入り混じったような表情をしているが？

「で、バジルール少佐について、何かあったのか？」

「あ、いえ、な、何でもないですよ？」

露骨なまでに、何かありますという態度なんだが……。

「気になる事があるなら、ちゃんと言ってくれ」

「ほ、本当に何もないですから、周辺を警戒しますから、通信切りますね」

「おいっ、レナって、……切れたか」

本人がそう言うのならと……、いつもなら流す所だが、一応は停戦が成立しているらしいから、もう少し話を聞くだけの余裕くらいはあるだろう。

なので、再度、通信を試みて……と、いけね、別回線にって、……この声……ラウか？

「君達が止めたがっていた争い……、この戦争、いや、この戦闘は停戦したようだが、まだ、やるのかね？」

９５　激突する意志　４（後書き）

１１／０４／０８　誤字及び一部加筆修正

96　激突する意志　5

「まだです！　まだ、ジェネシスが残っています！」

ラウの声に応じるように、少々、線が細い感じがする少年のような声が聞こえてきた。

おそらく、この声の主がラウの通信相手なんだろうが、この言動……、流石に、停戦が成立した連合軍に所属しているとは考えられないし、今の言葉だとジェネシスに拘っているみたいだから、？お姫様？の勢力かもしれない。

「ふっ、ジェネシスがまだ残っているか」
「ええ、あれは存在していいものじゃない！　あんな、憎しみを多く生み出すような存在はっ！」
「なるほど、憎しみを生み出す存在か……、上手く言うモノだ」

……。

「だが、その憎しみを生み出す存在こそが、戦争を抑える為の抑止力なのだが？　……君達とて大量破壊兵器の本質ぐらいは知っているだろう？」
「知っています！　でも、ジェネシスは、まだっ、地球を狙ってい

るっ！」
「その動きはブラフだよ、……キラ・ヒビキ」
「……えっ？」
「ふふっ、君達が勘違いをしたらしいジェネシスの動きは連合軍と停戦する為、地球連合を講和交渉の席に座らせる為の一種の駆け引きに過ぎぬ。案外、今頃は、月のコペルニクスあたりで、講和に向けての交渉が始まっているやも知れぬな」

ラウの言う通り、カナーバ議員が何らかの形で動いているはずだ。

「まぁ、実際に一度、撃ってみせた敵の言う事など、俄かには信じられないだろうが、それが事実だ」
「そ、それでもっ！　僕達はッ！」

……こちらの言う事を信じられないか。

「では、あくまでも、ジェネシスを破壊するまで戦うと……、停戦が成立しているにも関わらず、争いを続けると言うのかね、君は？」
「ッ！　大き過ぎる力が存在する以上は、人は常に相手への疑心を抱き続けます！」
「ああ、その通りだろう。だが、それは、過去から続く、人という存在の在り方でもあるはずだ。……この世界は、？歌姫？が歌う平和な歌のようにはいかんよ」

……。

「そんなことないっ！　少なくとも、大き過ぎる力がなければ、疑心から争いを生み出す事はないはずです！」
「ふっ、争い等、人や人の集まりである国が、自らのエゴの為に、自らを正義と信じ、自らの意思を持って、自らの目的を達する為に、力を振う手段に過ぎぬさ」
「その手段に大き過ぎる力が振るわれると、より多くの悲しみと憎しみを生み出すはずですっ！　だから、僕達はっ！」
「……これ以上の悲劇と憎悪の連鎖を断つ為に、？正義を胸に？戦争を食い止め、？自らの手で？大量破壊兵器を破壊すべく起ったと言うわけか。くくっ、傲慢だな、君は……」

まぁ、傲慢といえば傲慢だが、奇麗事が信じられる世の穢れを知らぬ若者だからこその特権だとも思えるし、それだけ、この声の主は純真無垢なのかもしれない。

「えっ？」
「いや、それは、君の機体……、君の背後に絡み付く様に透けて見える？お姫様？かな？」
「お姫、様？」
「何、戯言だよ。……しかし、君は本当にわからぬのか？　それともわかっていて、目を逸らしているかね？」
「な、何をっ！」
「どうやら、わかっていて、目を逸らしているようだな、君は……」
「……ッ！？」
「ふぅ、まったく、このような人を導くような役目は私ではなく、アインやユウキに合いそうなものだが、仕方があるまい」

……ラウ、それは買い被りだ。

「な、にを？」

「君が今も言った言葉……、先程、私がムゥとの心躍る熱い戦いに興じていたのを、唐突に、妨害してくれた時にも、この戦争を止める為に、この場に出てきたと言っていたが……、何故、武器を手にしたのかな？」

「ッぅ！　僕達はっ、好きで戦っているんじゃないっ！　ただ、この戦争を！　今の争いが、これ以上、続くのを止めるためにっ！」

「ご苦労な事だ……。しかし、この戦場に武器を持って現れ、争いに参加した以上は、君達も我々と同じ穴の狢ではないのかね？」

「ち、ちがいますっ！」

「……大き過ぎる力は駄目だと言っている君が、今、使っている機体は大き過ぎる力ではないと？　それとも君達だけは特別で、我々とは違うと……、力を誤らずに振るう事ができるとでも言うつもりかな？」

「そ、それは……」

「真に平和を求めるのならば、無理に武器を手にする必要もなく、このような危険な場には出ずとも、安全な場所で大声で主張していればよいではないか。……いや、そもそも、君達は世界に向けて、そのように、？争いを止めるべきだ？と主張していたかね？　寡聞にも私は、君達が世界に向けて、己の思いを主張している姿を見聞きしたことはないが……、何故、事がここに至るまで、何の主張もしていない？」

確かに、プラント国内ではクライン派は色々とやってたけど、国

外に向けて、情報を発信したって話は、クライン派がＬ３に逃げてからの三ヶ月間、俺も見聞きした事はないな。

「ッ！　あなた達にっ！　僕達の言う事をまともに聞くつもりのない、あなた達には言われたくないっ！　それにっ、今、戦っているのだって、地球が滅ぶかもしれない、瀬戸際だったからっ！」

「だから、君達は、？仕方なく？武器を手に取り、力で持って、我々に言う事を聞かせようとしているのだろう？　自らの主張を世界に向けて発信するという、一手間すら惜しんでな」

「うっ！」

「……ふっ、真に？争いを止める？為ならば、武器を手にする前に、自らと異なる思想の持ち主と妥協してでも、どこまでも必死に和平の道を探り、仲裁者を捜し求めるのが普通だと思うのだが……、違うかな？」

いや、マジで、今言ってる思いが本物なら、今からでもカナーバ議員に協力して、仲裁者を見つけて紹介してください。

つか、現状が、世界滅亡の瀬戸際だって言うなら、まずは妄動（武力行使）を謹んで、手間を惜しまず、ちゃんとそれが事実なのかを確かめろよ、Ｌ３に逃亡してから、時間もあったんだからさ。

「くくっ、それとも、君達自身、この戦争にそれなりに関わっているというのに、今更、第三者面をして、喧嘩両成敗とでも言いだすのかね？」

「ち、違います、僕達は本当に？争いを止める？為に……」

争いを止める為、か……。

「ふむ、キラ・ヒビキ、君に聞きたい。？争いを止める？為にと、先程から君は繰り返しているが……、君達の行いと我々の行い、いったい、何処が違うと言うのだね？　？賢明にも争いを止める為に？武器を手にした君達と、？愚かにも剥き出しのエゴの為に？武器を手にする我々と何が違うと言うのかね？」

「そ、それは……」

「犠牲を容認する力を手段にする以上は、君達が言う？争いを止める？為と言う理由も、所詮は人が持つ一つのエゴに過ぎぬはずだ」

「ち、違うっ！　争いを止めようとする思いは、エゴなんかじゃない！」

「否ッ！　君達が争いを止める為に武器を……、自分達の主張を押し付ける道を選んだ以上は、君が言った？争いを止める？という理想だけは、エゴになるのだよっ！」

「僕達の思いは、エゴなんかじゃないっ！」

「……ならば、わかり易く言い換えよう。たとえ、君の思いが真実だとしても、少なくとも今、世界に意思を示す事もなく、力で持って、自分達の主張を押し付けている以上は……、これまで振るった力で生じた犠牲や憎しみと悲しみから目を背け、背負うべき責から逃避している以上は！　他の理想ならいざ知らず、？争いを止める？為という君達が掲げて見せた崇高な理想だけはっ、我々が持つエゴと同列のものに過ぎず、ただの名分でしかないのだっ！」

「ぁッ！」

「だというのに、さも自分達が正義だと……、最も正しいというような面で武力介入する等、厚顔無恥で、笑止千万な行いだと……、君は思わぬかな？」

結論や行動に至るまでの手順や道筋が間違っていたが為に、争いを止める為に争うという矛盾を前に、今、武力介入している連中の大義名分は地に落ちた、って所かね。

まぁ、だからと言って、世界滅亡の瀬戸際だからこその緊急避難的な行動だの、素直に自分達がやりたいからやっただの、俺達がこの世界における絶対の正義だの、戦争に関わった責任を取る為に全ての戦力を叩き潰しますだのと主張をされたりしたとしても、きっと、反応に困るだろうなぁ。

現実、この武力介入自体が、プラントにとっても、連合軍にとっても、迷惑この上ないし……。

「そ、それはっ！」

「キラ・ヒビキ、君は気付いているはずだ。悲しむべき事に、人が人である以上、人が生きる上で、エゴは何処までも付いて回るものであり、エゴがある以上、諍いや争いもまた、尽きる事がない事くらいはな」

「うぅ」

「この戦争は……、今更、君達が何かを為す必要もなく、終わるだろう。私にとっては些か不本意な所もあるが……、人は滅びの道を歩まぬようだ。……ははっ、喜びたまえ、キラ・ヒビキ！　現実的な滅びを前にして、人の理性が欲望と憎悪を抑えたのだよっ！」

……抑えたって言っても、一歩間違えたらどうなっていたかはわからないし、今回はと言うべきか、今回もと言うべきかは、迷うところだけどな。

「それにしても、く、……くくっ、あはははっ」
「な、何がおかしいんですか！」
「あーはっはっはっはっ！！　ああ、滑稽だよ！　まったくもって、この上なく滑稽過ぎる道化だよっ！　君もっ、この私もっ！」
「何をっ！」
「このような……、蒙昧にも、自らが信じた理想をただ一つの正義だと、世界で絶対の真理だと信じているような子どもが！　世の現実や人のエゴを直視せず、ただ自身が信じる奇麗事だけを語り、他者の想いや信条を排除してでも、押し付けようとするような子どもがっ！　力を振るう意志すら他人に委ね、自身で力を振るう意味を見出せぬような、ただ、力だけの子どもがッ！　全ての人類の夢だとッ！？　人類の飽くなき欲望の果てだとっ！？　……我ながら、そのように考えていた過去が、あまりにも無様だよっ！」
「なっ！　ぼ、僕は、力だけじゃない！」
「その通りだよ、キラ・ヒビキ！　人は力だけではならぬのだっ！　そこには……、力には、人の意思が！　燃え盛る熱い意志とっ、命の灯火を激しく燃やす魂がっ！　人と力には不可欠なのだよっ！！」

ちょ、ラウの奴、熱血が昂じてるんじゃっ！？

「そして、キラ・ヒビキ……、君には私に負うべき義務が一つある！」
「ぇ？　ぎ、義務？」
「私と闘う義務さっ！」
「な、に？」
「君自身に責はなかろうと、君には、この私と闘う義務があるのだ

よ！」

「……えっ？」

「君が生まれる為に犠牲になった！　私達のような存在に応えるだけの義務がっ！　君にはなっ！」

「僕が、生まれる、ために、犠牲、になった？」

「そうだっ！　君は業を背負わねばならんっ！　我々のッ！　ただ、人類の？最高傑作？としての君が、生み出される為に、生を弄ばれっ、死を踏み躙られっ、人の尊厳すら奪われて！　犠牲になった全ての者達のっ！　尽きぬ怒りとっ！　深い悲しみとッ！　消えぬ怨みを全てなぁっッ！！」

ラウ、お前……、っと、レナから通信が？

ラウ達の話の続きも気になるが、隊長としての職務がある以上は無視できないので、急いで、通信回線を戦隊用のものに切り替え、通信に応える。

「先輩、各小隊が到着しました。連合軍の救援部隊が到着するまで、足つきの周辺警戒に当たります」

「あ、ああ、何かあったら、連絡を頼む」

「わかりました」

レナに注文を付けておき、早い所、連合軍の救援が到着して欲しいものだなんてことを考えながら、再度、回線を先程のものに切り替えようとするが……、こういう時に限って、中々、見つからない。

ちゃんと数値を覚えて置けばよかったと悔やみつつ、格闘していると、何とか見つける事が出来た。

……聞こえてくる激しい息遣いから、どうやら、戦闘を繰り広げながら、会話をしているらしい。

「この程度かね！　……ふっ、ふふ、どうやら、想像していたように、君は情けない男のようだな」

「えっ！？」

「フレイ・アルスター、彼女は君を想って……泣いていたよ」

「ッぁぇッッっ！！！！！！？？　ふ、フレイがっ！　フレイが生きているのっ！？」

おや、この反応は……。

「……ああ、彼女は生きている」

「どこにっ！　どこでっ！」

「おっと、君のような骨のない輩には教えるつもりはないっ！　特に、君のような、軟弱者にはなっ！」

「う、うるさいっ！　あなたにっ！　あなたなんかに、そんなことを言われる筋合いはないっ！」

「くくっ、筋合いならあるさ。彼女をアラスカで保護したのは私だからな」

「ッ！」

「……まったく、君という存在が！」

「あぐっ！」

「女一人すら守れぬ！」
「うっ！」

「その涙の一滴すら、碌に止められぬ！」
「あっ！」

「矮小な存在に過ぎぬことを、自覚したまえっ！」
「うぐぁっ！」

「……やれやれ、本当に、それが、君の限界なのかね？」
「……うぅ」
「ふぅ、まったくもって、無様だな、キラ・ヒビキ。……ふむ、その機体、ムゥに譲った方が良かったのではないかね？　奴ならば、君の何倍も使いこなして魅せただろうに……」
「……ムゥさん」
「くくっ、それとも君は、所詮、人としての意志を持たぬ、あの？お姫様？の傀儡に過ぎぬということかね？」
「っっっぁあああああああっ！！！」
「おや、図星でも刺してしまったかな？」

「……れ、……黙れ黙れ、黙れっ！　僕は、誰かのっ！　傀儡なんかじゃないっ！」

「っと、まだ、やるのかね、キラ・ヒビキ？」
「それにっ！　僕はっ！　キラ・ヒビキなんて名前でもないっ！」

「ふっ、そうこなくてはなぁっ！」
「キラ、ヤマトだぁっっ！！」

「ははっ、口では何とでも言えるさっ！　君が、フレイ・アルスターを守れなかったようにっ！」
「うるさいっ！　黙れと言っているっ！　……僕だってっ！」

「ッ！　……はは、あははははっ！　いいぞっ！　その意気だっ！」
「フレイを守る為ならっ！」

「いいぞっ！　魅せてみろっ！　君の意志をっ！」
「どんなことでもっ！」

「君が操り人形ではない、人であるという証左をっ！」
「やってのけてみせるっ！」

「私に魅せて見ろっ！　君の、燃え盛る熱い魂をっ！」

「そして、フレイをっ、迎えに行くんだぁっっ！！！」

……なんだろう、この？娘が欲しくば、この私を倒してからだっ？的なのりは？

いや、それ以前に、ラウの奴、明らかに熱くなり過ぎだろう。

っと、また通信が、……今度はどうやら、バジルール少佐のようだな。

「ラインブルグ隊長、間もなく、こちらの救援部隊が到着します」
「そうか、なら、こちらも引き揚げるとするよ。……バジルール少佐、この停戦が、このまま講和に繋がることを願うよ」
「小官もそのように思っております。……それでは」
「ああ」

これで見納めとなるバジルール少佐の凛々しい姿を脳裏に焼き付けておき、本日、三回目となる敬礼を互いに施して、通信を切った。それ同時に戦隊用通信系に切り替えて、全機に帰艦するように告げると、こちらが特に指示を出さなくても、各小隊が相互支援できるように意識し、順次撤退して行くのがわかった。

「先輩、私達も」
「わかった」

レナに促され、？黒いの？の艦橋に向って機体に軽く手を振らせた後、撤収する事にする。

両肩部スラスターがレッドになっており、背部のメインと両脚のサブしか使えない為、少々、加速と機動に難があるが、仕方がない。

「レナ、俺の機の両肩部スラスター、どうなってる？」

「グシャリと逝ってます」

「そうか。……なら、推進剤が少なくて助かった、ってところかね」

各小隊が入れ替わり立ち替わり、警戒援護してくれる中を、ヤキン・ドゥーエ要塞……ジェネシス近くに遊弋しているであろう戦隊母艦を目指していく。

……。

正直に言えば、まだ、？お姫様？の勢力と戦闘を繰り広げているラウのことが気に掛かるのだが、機体の推進剤やバッテリーが切れ掛かっている為、行ったとしても足手まといになるだけだろう。

だが、ラウが相手に私闘と言い切った上、今までになく熱く感情的になっていたから、万が一という事態もあり得る。

これまで感じた事のない焦燥と不安に眉を顰めながら、エルステッドに連絡を入れて、戦域全体の状況を確認する。

「ベルナール、聞こえているか？」

「あ、はい、隊長、聞こえています。現状、戦隊はジェネシス前面で警戒待機中です。また、コリン、ベルディーニの両名は無事帰艦しており、複座型は戦隊周辺を巡回中です。後、エルステッド、ハンゼン共に、ＭＳ隊の受け入れ態勢は万全です」

「ああ、了解した。……それで、戦域の状況は？」

「停戦成立後、我が方と連合軍、共に後退を開始しています。……

艦隊の一部部隊で叛……暴走が起き掛けましたが、ラブロフ隊長とロメロ隊長が、間に入り、上手く食い止めているようです」

……あの二人も戦闘で消耗しているだろうに、頭が下がるな。

「じゃあ、例の第三勢力の動きは？」

「未だ、足つきがジェネシスへ攻撃を仕掛ける素振りを見せています。ですが、新たにプラント防衛隊より三個中隊が援軍として到着しており、ジェネシスの防衛態勢は先程よりも強化されていますので、危機的状況ではありません」

「足つきに対する攻撃は？」

「ＭＳ隊に関しましては、ほぼ全ての隊が先程まで迎撃に出ていた為、整備補給が済んでいない状況です。そのため、クルーゼ隊に所属するＤＤＭＨ三隻が、ジェネシスに接近してきている足つきに対艦戦を仕掛けています」

「……了解した。ゴートン艦長には、引き続き、ジェネシス防衛と、戦隊の全体指揮をお願いしたいと伝えてくれ」

「わかりました」

第三勢力に関してはＭＳ隊の補給が完了し次第、対応に移るだろう。特に、ジェネシスを狙う動きを見せている、強力な打撃力と防御力を誇る足つきを押さえ込めば、打つ手がなくなるはずだ。

……。

やはり、ラウが気に掛かるし、いい加減、神経がざわつく感じがうざくなってきた。職権を濫用してでも、早く補給を終わらせて、ラウがいる宙域に向うことにしよう。

◇　◇　◇

エルステッドに着艦した後、ハッチを開放して気分を入れ替えながら、通信でシゲさんに呼びかける。

「シゲさん、悪いが、俺の機を最優先で補給してくれっ！　スラスターの補修は推進剤がしっかりとカットされるようにしてくれるだけでいいから、できる限り、最速でっ！　直に出たいっ！」

「えっ？　お、おぅ、あいよぅっ！　てめぇら！　１３０１を最優先で補給する！　十分、いや、五分で終わらせるぞっ！　いいなっ！」

「「「うっす！！！」」」

「よぅしっ！　総員、掛かれーーーっ！」

シゲさんに無理をお願いした後、通信相手を切り替えて、艦橋に連絡を入れようとしたら……。

「えッぁ？」

……本当に不意に、自身でも理由がわからない、漠然とした喪失感に襲われてしまった。

ただ突然、失われた何かに、言葉や声にできない悲哀が湧き起こり、何の備えもしていない心に入り込んでくる。

「先輩っ！　直に出る……て……せん、ぱい？」

……おかしいな、眼が熱いぞ。

「……泣いて？」

ハッチから顔を覗かせたレナの呟くような声に我に返り、一つだけ頭を降って、目尻に溜まった涙を振り切り、虚脱にも似た感覚がある心に気を入れなおす。

「なんでもないよ、レナ」
「ですが……」
「……ああ、本当に、何でもないんだ」

……本当に、何でもないことなんだ。

俺は、ただ、心中でそう繰り返して呟き、喪失感を味わった瞬間に、一瞬だけ、脳裏を過ぎった最悪の想像を打ち消し続けた。

96　激突する意志　5（後書き）

11／04／12　誤字及び一部表現を修正。

97　終息の刻　1

簡易な補修と補給を終えた後、再出撃して、単機、ラウがいるであろう、ジェネシス前面宙域を目指している。

当初はゴートン艦長の苦言により、旧ラインブルグ小隊の面子…レナとデファンと共に一緒に出てくる予定だったのだが、あの喪失感の後、マイナス方向にばかり流れる思考が嫌になって、無理に押し切って、先に出た為だ。

……。

一応は出撃前に、戦域を統括指揮しているヤキン・ドゥーエの総司令部に連絡を入れて、ラウのプロヴィデンスが今現在、どこにいて、どのような状態になっているのか確認を取ろうとしたのだが…、他の部隊から本当に停戦したのかといった確認等の通信で飽和しているか、情報管制がそれらの対応で忙殺されている為なのか、後回しにされてしまった。無論、強敵である足つきと交戦状態にあって、忙しいであろうクルーゼ隊に連絡を取るなんて事もできない。

何よりも……、プロヴィデンスとの通信が繋がらない。

……今現在も通信が繋がらない事に、どこかに風穴が開いてしまったかのように、心胆が冷たくなってくるのを感じながら、激戦の残滓が残る宙域を進む。

その冷たくなった心に合わせるかのように頭も冷えていき、宙域のいたる所に存在しているデブリ……メビウスのスラスター部やジンの頭部、大穴が開いたストライクダガーの胴体、ゲイツの左脚部、対艦ミサイルの断片、ＦＭの物と思われる艦船の大型推進部、艦橋を破壊された２５０ｍ級、もはや元が何だったのかすらわからない剥き出しの部品、様々な形状を見せる微小な破片といった物が、形あるものが潰える悲哀と虚ろで遣る瀬無い倦怠と共に、脳裏に入り込んでくる。

……本当に、よくもまぁ、宙域がデブリで満ちる程に、ここまで殺しあったものだ。

何となく皮肉めいた笑みが浮かんでくるが、自らもその行為に加担している以上、このような態度や考えは傲慢以外の何物でもないが、そのように感じてしまうのは致し方がない。

しかし、この光景は、宇宙に進出して人が住めない空間に住む事が出来るようになっても、人は争いを捨てる事が出来ない現実を、ラウが言っていた、人が人である以上、争いはなくならないという言葉を、肯定しているかのようだ。

……争いか。

成り行き上、この戦争に大きく関わる事になったが、本当に、人を人と思わないという事がどれ程、残虐なのかを知らしめた、ジェ

ノサイドに通じる、狂った戦争だったと思う。

まぁ、狂気のない戦争なんてものはないが、それを抜きに考えても、プラントのコーディネイターが地球に対して為した行いは、この世界で嫌われ者の代名詞が、プラント生まれのコーディネイターになってもおかしくない程に、行き過ぎだった。

特に四月馬鹿……、プラント独立に直接、間接的に何の影響も関係もない者すら巻き込んだエイプリルフール・クライシスは、それを決定付けた致命傷だ。

あれの結果、発生したナチュラルとコーディネイターの間に生じた亀裂は、時間ですら容易には修復できない深いものだろう。

こんなことだと、宇宙に出て新たな考え、環境にあった思想を身につけた人類と、地球に住まう旧来の人類の架け橋になって欲しいと、恐らくはそう考えて、コーディネイター調整者と命名したであろう、ジョージ・グレンも草葉の陰で泣いているだろうな。

っと、いかん、いくら停戦が成ったとはいえ、警戒を緩めすぎだな。

まだ戦場にいると言う事を自身に言い聞かせて、計器類や通信系をチェックすると、救難信号を受信していた。

瞬間、ラウの事が気に掛かっていることもあるので、見て見ぬ振りをしようかと悩むが、気付いてしまった以上……、宇宙で孤立し、誰にも助けられないという事が、酸欠によって死に至るまで苦しみ抜くなんて悲惨な死を意味する以上は、人として、宇宙に住まう者として、絶対に無視する事はできない。

なので、信号の発進源を探すべく、モノアイをキョロキョロと動かして、周辺を探してみると、何故か、ＢＯｕＲＵの内殻に似た直径三ないし四ｍ程の球体が漂っていた。

そのことを不思議に思いながら機を近づけていくと信号が強くなったのがわかったので、モニターを対象に合わせてクローズアップしてみたのだが……、どう見ても見覚えのある、ＢＯｕＲＵの内殻にしか見えなかった。

しかしながら、ラインブルグ・グループでは、基本的に個人所有のＢＯｕＲＵには自衛目的以外の武装を施す事はないし、仮に軍やそれに準じる軍警察のような組織に売るとしても、自国というか、世話になっているアメノミハシラのオーブ軍以外には……、まさか、こいつはオーブ軍か？

……。

うん、今、戦闘が終わったばかりだし、ジャンク屋が来るには早すぎるから、おそらくはこの考えであっているはずだ。

……だが、何故、内殻だけなんだ？

例え、頑丈さに定評があるＢＯｕＲＵでもビームの直撃やジンの重突撃銃の銃弾を食らえば、流石に、一溜まりもないはずだし、そもそも内殻だけであること自体がおかしい。

不思議な物体に首を捻りながらも内殻に接近して行くと、通信系が緊急非常用回線から相手側の声を拾ったようで、微かにぐずついた年若そうな女の泣き声が聞こえてきた。だが、サブモニターには相手の姿は映っておらず、何らかの理由で映像の送受信はできない

ようだ。

「……っく、アサギ……ジュリ……母さん……死にたくないよ」

……。

「……聞こえるか？　こちらはザフト所属、アイン・ラインブルグだが、あんたは何者だ？」

「ぁ！　……お、オーブ連合、首長国、国防軍所属、ま、マユラ・ラバッツ、です」

やはり、オーブか。

おそらくは、？お姫様？の勢力に属して出てきた連中の一人なんだろうが、どうする？

……。

やっぱり、放置するってのは、宇宙に住む者として、絶対に無理な事だし……、ついでに言えば、さっきの泣き声を聞いてしまって、情が湧いてしまったしなぁ。

「質問がある」

「……は、い」

「ラバッツが戦闘した対象は、ザフトか、それとも、連合軍か？」

「……れ、連合、軍、です」

「……嘘は容易に死を招くことになるが、本当か？」

「ヒッ！　……ほ、本当ですっ！　嘘じゃないの！　ちゃ、ちゃんと、コックピットのレコーダーにも記録が残ってますっ！　……だ、だから、殺さないでっ！　お願いっ！　お願いしますっ！」

……む、これは、少々、脅しが過ぎたかな？

「わかった。わかったから、落ち着け」

「ぅぅううぁっ、あぁぅあーーー！　いやぁっ！　し、死にたくないっ！　母さんっ、死にたくないっ！」

あちゃー、失敗したな、相手が孤立無援で、かつ、死へのカウントダウンの最中だなんて極限状態だったことを軽視し過ぎていた。

……仕方がない。

「ラバッツッ！　今は黙ってっ、俺の話を聞けッ！」

「ッ！」

なんつーか、マッチポンプで弱った相手に信頼の刷り込みを仕掛けている悪党な気分だ。

「いいか、よく聞けよ？　もしも、お前さん、……ラバッツを殺すつもりなら、端から話し掛けたりしないで攻撃しているか、無視をして通り過ぎている。今さっき脅しを掛けたのは、嘘をついていないかを確かめる為のものだ」

「……ぅう」

「もう一度言うが、元より殺すつもりも、見殺しにするつもりもない。……まぁ、見ず知らずの相手、しかもザフトの人間からこんな事を言われても、安心できないだろうから安心しろなんて無理は言わない。けど、もう少し落ち着け」

「……は……い」

あー、嗚咽はまだ続いているが、さっきよりも弱くなっているし、

どうやら、ちょっとは落ち着いたようだな。

しかし、ラウの所へ行くつもりが……、いや、流石に、助ける事ができる遭難者を見逃す事はできないし、もう戦争が終わってるのに、これ以上、死人を出したくない思いも確かにあるから、これでいいんだろう。

そんな思いを胸に、ＢＯｕＲＵの内殻を自機に持たせて、ラバッツに声を掛ける。

「こっちも少々、行くところがあるんで移動しながらになるが、質問するぞ？」

「……はい」

「ラバッツの所属はオーブ連合首長国軍で間違いないな？」

「……はい」

「じゃあ、オーブ軍の指揮官は？」

「か、カガリ、ユラ、アスハ」

……確か、アスハって言ったら、オーブの元首をやってた奴だったし、そいつの関係者かな？

「この戦域に出てきた理由は？」

「せ、戦争を止めるため、と、聞いて、ます」

戦争を止めたいなら仲介役をしてくれと思うのは、変だろうか？

「なら、プラントでお尋ね者になっているクライン派……、エターナルの連中と組んだ理由は？」

「わ、私は、聞いてません」

まぁ、末端の人間が知ってたら、逆に俺は驚くよ。

「こちらで確認している、そちらの戦力は、エターナル、足つき、オーブの艦だが、それだけか？」

「い、え、も、ＭＳをはこ、ぶ、輸送艦が、さ、三隻」

となると、ざっと単純計算して……、三十機から五十機程度の機動戦力になるのかな？

「戦域での分担は？」

「あ、アークエンジェルと傭兵部隊が、ザフト。……私達、クサナギとオーブ軍が、連合軍。エターナルは、よ、予備です」

「……そうか」

足つきは連合軍から離脱したらしいとはいえ、元の所属である連合軍とはできる限り、事構えたくないだろうし、オーブは連合軍に本国を攻撃されて焼かれた恨みがあるから、丁度いい按排だな。

「っと、聞くのを忘れていたが、そっちの生命維持は後、どれだけ持つ？」

「……後、六時間、です」

「おお、流石はＢＯｕＲＵだ、優秀優秀」

実家で作っているモノの出来の良さに一人頷いていると、先程よりも更に嗚咽が収まってきたラバッツが、まさに、恐る恐るという言葉が似合う呼吸と雰囲気で、能動的に声を掛けてきた。

「あ、あの……」

「ん？」

「わ、私が乗っているのは、ＢＯｕＲＵじゃ、ないです」

「へっ？」

何それ？

「い、いえ、元々は、ＢＯｕＲＵで使われている内殻なんですけど、オーブで採用されているＭＳの脱出装置なんです」

……ラインブルグ・グループが、ちゃっかりと、オーブの軍需産業に食い込んでいる件について、親父と最低小一時間は、話し合いたい気がしてきたな。

「で、そ、れで、わ、私、連合軍の、攻撃を、受けて……撃破、されて……、脱出して……、皆、余裕なくて……、独りで……ずっと……死ぬ……ま……で……この、まま……だ、と……」

「そうか、……でも、ラバッツは運が良いな」

「……ぇっ？」

「本当に羨ましい限りだ」

今現在、ザフトと連合軍共に、主力ＭＳに脱出装置なんて気が利いた物は付いていないからな。

あ、何か、浮かんできたぞ？

『攻撃を　受けてしまうと　あの世逝き　コスト削減　命も安し』

……なんか、詠み人知らずで残りそうで嫌だな。

「話はわかった。ラバッツが話した内容……、ラバッツと言う名と

オーブ軍所属でこちらに攻撃を仕掛けていないという事をとりあえず信じるが、エターナルの連中と組んでいる以上は、武装勢力……、下手すりゃテロリスト扱いされる可能性がある」

プラント理事国から見れば、ザフトもテロリストに近い民兵だし、言えた義理じゃないが……、一応、宣戦布告しているし、目を瞑ろう。

「加えて、オーブがプラントに対して正式な宣戦布告をしない事もある。だから、状況が落ち着くまでは、遠くＬ１から流れてきたジャンク屋、その哀れな漂流者ということにしておく」

「……む、無理が、ありませんか？」

「無理を通せば、道理が引っ込む部分も、世の中にはあるんだよ」

幸い、うちの戦隊は俺が最上位者だし、補佐役の両艦長も話が通る人物だから、何とでも出来るだろう。

「とにかく、しばらくは……、オーブ側に連絡を入れて引き渡すまでは、俺がラバッツの身元引受人を務めるから、下手な事をせずに、大人しくしておいてくれよ？」

「……は、い」

さて、これで一段落といったところだな、と思ったら、ラバッツが更に言葉を紡いできた。

「あの……」

「何だ？」

「もう、一度……、名前を聞いて、いいですか？」

ああ、まぁ、生死が懸かっていて、緊張していたろうからなぁ。

「俺は、ザフトのアイン・ラインブルグだ」
「ッ！　ぉ……ぅの話って、本当だったんだ」
「んん、よく聞こえなかったが、何かあるのか？」
「……あ、いえ、その……、ラインブルグさん、助けてくれて……、私の事、信じてくれて……、ありがとう、ございます」
「いや、本当に、ラバッツの運が良かっただけだから、気にする必要はないさ」

さて、そろそろ、目的座標に着くはずだが……。

「ふぅ、やっと、追い着いたっすよ」
「先輩！　いくらなんでも、一人で出るなんて、危険な事をしないで下さい！」

その前に、デファンとレナに追い着かれたようだ。

「おお、丁度いいところに来たな、デファン、ちょっと周辺警戒を頼む」
「うっす、了解っす」
「後、レナ、哀れな漂流者を拾ったんだ、面倒を見てやってくれ」
「もうっ、先輩！　少しは真面目に話を……って、漂流者？」
「これだ」

レナにラバッツが乗った脱出装置を手渡しながら、話を続ける。

「どうやらジャンク屋らしいんだが、Ｌ１で戦闘に巻き込まれたそうでな、遥か遠く、流れに流れ、こんなところまで流されてきたらしい」
「……わかりました、そういうことにしておきます」

「はは、レナは話が早くて、助かるよ」
「いえ、それで漂流者の名前は？」
「ああ、ラバッツ……、マユラ・ラバッツで良かったよな？」
「は、はい、そうです、ラインブルグさん」

……あれ、何か、一瞬、レナの纏う雰囲気が強くなったような気がしたが？

「……取り合えず、預かっておきますね」
「ああ、頼むよ。俺は、ラウを……、プロヴィデンスを探す」
「了解です。でも、くれぐれも、気を抜いたりしないでくださいね」
「わかってるよ、通信終わり」

……って、また通信……エルステッドか？

「隊長、こちら、エルステッドです」
「どうした、ベルナール？」
「はい、クルーゼ隊が戦闘状態にあった足つきに大打撃を与えることに成功し、足つきが撤退を開始しました」
「そうか。……こちらの、クルーゼ隊に被害は出ているのか？」
「……はい。至近での撃ち合いを展開しつつ、足つきに体当たりを敢行して大破させた旗艦ヴェサリウスが沈み、他の所属艦、ヘルダーリン、ホイジンガーの二艦も大破して、総員退艦しています」

以前、少しだけ世話になった時に、世間話をした覚えがあるヴェサリウスの艦長の実直な顔を思い出し、また、散って逝ったクルーに対して、しばらくの間、黙祷を捧げる。

「……それで、足つきに対する追撃は？」
「それが、総司令部から現状を維持しろとの命令しか来ない為、余

力のあるプラント防衛隊も追撃は行っていない状況です」
「うーん……、防衛態勢の立て直しが優先事項だから、構っている余裕もないって所かな？」
「そうかもしれないです」
「うん、了解した。しばらくしたら戻るつもりだから、ゴートン艦長によろしく頼むと伝えておいてくれ」
「わかりました」

エルステッドとの通信が切れ、再び、モニターにデブリ群が映し出された。

……。

さて……、いい加減に、現実を直視するか。

往生際の悪い感情を、冷徹な思考で腹の底に圧し込めて、宙域を……デブリに満ち、明らかに、生者がいない宙域を見据えて、受け入れる。

ラウが、落ちたという事を……。

98　終息の刻　2

宙域に満ちているデブリ……先程までの戦闘で発生した残骸の中に、プロヴィデンスがないかどうかを確認して回っていると、徐々に頬に引き攣りが……乾いた笑みが浮かんでくる。

戦争が本格的になってから、ラウとユウキ、俺の三人の中で一番最初に撃墜されるのは、間違いなく俺だろうと、ずっと思っていたんだが……、どうしてこうなってしまったんだろうか？

不沈を誇る？足つき？に深く関わったからだろうか？

或いは、ラウの好敵手や強者への拘りが、僅かだが、致命的な隙を生んだのだろうか？

それとも、何か、別の要い……いや、今は感情が荒ぶっているし、思考回路も過激に走りそうだから、因果を探るのはやめよう。

それよりも、っと？

意識をメインモニターに目を向けると、明らかに他のＭＳとは機体色が異なる、灰色の機体があった。

一瞬、プロヴィデンスかと思ったが、頭部が吹き飛ばされている

上、右脚部や両腕を無くしているから、はっきりとは判別できない。

……。

うん、何となく、プロヴィデンスに似ている気がしないでもないが、パッと見て取った各パーツの印象が細く、全体的なシルエットも華奢だと言える事に加え、開放されているコックピット部もプロヴィデンスの位置とは違うし、何よりも、背中にドラグーン・システムが存在していないから、これじゃないだろう。

だが、機体の持つ雰囲気がプロヴィデンスに似ていることを考えると、先にロールアウトした系列機、クライン派に奪われたって言うフリーダムか、行方がはっきりとわかっていないジャスティスかもしれない。

「デファン」

「なんすか、先輩」

「回収したい機体があるから、来てくれ」

「……見つかったすっか？」

「いや、別の機体だ」

「えっ？　……なら、警戒はどうするっすか？」

「いや、さっき最大戦力の足つきが撤退したのに、しつこく戦域に残るような馬鹿はおらんだろうさ」

「……それもそうっすね、直に合流するッすよ」

「ああ、頼む」

デファンが到着するまでの間、更に詳しくフリーダム、或いは、ジャスティスらしき機体を観察して行くと、ビームで貫かれたと思われる胴体脇の穴や推進剤の爆発によってできたと思われる破断面、切断された背部スラスターから伸び出た放熱板らしきもの、ビーム

が至近を擦過したと思われる熔けかけた装甲といったものに加えて、ビームコーティングが為されていると思しきシールド部にも、かなり強力なビーム粒子による付加が相当に掛かっていたらしく、丸い弾痕や線状痕が幾つも残されていた。

本当に、見て取れただけの情報だけでも、この機体がかなりに激しい戦闘を経た事を教えてくれる。

そして、おそらくは、この機体こそが、あの通信を傍受した際に、ラウが戦っていたクライン派……、ラウと何らかの因縁があると思しき相手の可能性が高い。

一度、大きく息を吐いて、心を落ち着かせてから、機体をゆっくりと回転させて、左右上下３６０度に向けて、光学による捜索を行う。

何らかの弾みで強く流されていない限り、プロヴィデンスもこの近くにある可能性がある。

……そう思った瞬間、心の深奥に押し込めた感情が悲鳴をあげ、それに伴ない、悲痛に胸奥が捻じれ、身体が素直に悲嘆を表に出すように促してくるが、唇を噛み締めて、今は駄目だと、まだ我慢だと、再度、封じ込める。

全てを薙ぎ倒す大嵐の如き感情の奔流を、今にも決壊しそうにな

る意思でもって受け流していると、有難い事に、デファンからの通信が入った。

「先輩、そろそろ、着くっすけど、……どうっすか、見つかりそうっすか？」

「……さて、正直、こればかりは運の部分が大きいから、見つけられない可能性もある」

「……そっすね」

「ああ。……つき合わせて悪いが、もうしばらくは、よろしく頼む」

「んなことは、気にしなくてもいっすよ。……あ、でも、前に食った寿司は美味かったッすね？」

デファンは飄々とした話振りで、こちらが必要以上に気にしなくていいように、少しでも俺の気が紛れるように、空気を変えようとしてくれているようだ。

「了解。まぁ、俺は、野郎と二人きりで食う趣味はないから、前と同じで、折で手を打とう」

「俺も野郎と一緒に食うよりもそっちの方がいいっす」

「……減らず口を」

「誰かさんの影響が大きいっすからね」

やれやれ、初めて会った時はどこか言動に翳があったっていうのに、本当に、変わったものだ。

「ほい、到着っす。じゃ、こいつを確保していればいいってことっすね？」

「ああ、もしかしたら、そいつから、何か情報が手に入るかもしれないからな」

「了解っす」

デファンとの通信を切り、モニターに視線を戻して、チェックを始める。

……しかし、この辺りの残骸は、一風変わったというか、派手なカラーリングのジンが多いな。

ラバッツが言っていた傭兵かＬ３の海賊あたりが使用していたものだろうか？

その中でも特に痛々しい、ピンクに寄った赤で染められたジンを見て、げんなりとしていたら……、視界に、重厚なシルエット……プロヴィデンスらしき影が見えた。

「デファン、それらしきものを見つけた」

「うっす。……なら、俺はレナと合流するっすよ」

「ああ、わかった」

気を使ってくれたデファンに内心で感謝しつつ、一刻も早く確認したい理性と未だに認めたくない感情に振り回されながら、機をその影へと向わせる。

……。

……ッ！

間違いない……、プロヴィデンスだ。

ぱっと見ただけで確認できたのは、機体の右肩から右腕部と胸部の一部が切り取られ、そこに先程の機体の左腕らしきものが突き刺さっている事と、機体色が灰色になっている事から、ＰＳ装甲への電力供給が止っている事だった。

おそらくは、機体が損傷した時にでも、動力源、或いは、ニュートロンジャマーキャンセラーをやられたのだろう。

「……ラウ」

通信で呼び掛けてみるが……、やはり……、繋がらない。

その事実に寂寥と沈鬱とを感じるが、それを行動を滞らせる理由にはできない。

機体をゆっくりとプロヴィデンスに寄せて、コックピット部を詳しく観察する。

正面のハッチ部は無事のようだが、やはり、切り取られた右側面から例の腕が入り込んでいるようで、それがラウに、直接的な打撃を……致命傷を負わせたのだろう。

まずは、これを引き剥がそうかと考えたが、先にラウがどういう状況なのかを確認することが先だと思い直した。

それに、この損傷具合だと、もしかしたら、予備電源……バッテ

リーが生きているかもしれない。

その事に期待しながら、機体にプロヴィデンスをしっかりと固定させて確保し、ハッチを開放、ワイヤーガンをプロヴィデンスのコックピットハッチ付近に撃ち込み、虚空に飛び出す。

……。

無事にハッチ付近に取り付いた後、通常は隠されている緊急用パネルを開き、ザフトで各機種それぞれに割り振られて使用されている暗証コードと、白服に任官した時に強制的に暗記させられた組み合わせ表を思い出しながら、プロヴィデンスのコードを推測して打ち込んでみると、ハッチのロックが外れたようだ。

少々、簡単で杜撰過ぎる気もしないでもないが……、緊急用のコードである以上、ある程度は仕方がない。

そんな事を考えながら、最後の〆であるハッチ開放ボタンを押そうとして、知らず、指が震えていた事に気が付いた。

……身体は正直というべきかな。

自身の精神と身体が乖離している状況に、どういう表情をしていいか悩んだ末に、ただ、小さく苦笑いを浮かべて、ボタンを押し込んだ。

……ハッチが開いた。

「……ラウ」

再度の呼びかけに返事がなかった事に、身体が萎えそうになった為、改めて喝を入れるべく、意識して下腹部に力を込め、コックピット内に入り込む。

……ラウは、いた。

シートに座ったまま項垂れ、件のマニュピュレーターに胴体の右半身を覆われる形で……。

「ッ！」

……生を示す、身動きは見受けられなかった。

その事実によって、萎えてしまった全身を動かす為に満身の力を振るい、項垂れていたラウの頭に震える手を添え、そっと持ち上げて、バイザー越しに、その顔を確認する。

……そこには、どこか、満ち足りたような、微笑みがあった。

思ってもいなかった、その表情に……、感情を抑え付けていた理性の箍が弾けたのがわかった。

……最早、心を、……感情を、抑え付けるのは、……限界だった。

◆
◆
◆

誰も見ていない状況であったので、思いっきり溜め込んでいた感情を盛大に爆発させて、心身の統一を図った後、デファンやレナに合流すべく、機を進ませている。

もちろん、プロヴィデンスを保持してだ。

……。

友であるラウが逝ってしまったのは、俺個人としては非常に残念な事だが、あの満ち足りたような微笑を見た以上、もう、何も言う事はできない。

後はただ、静かに送ってやるだけだ。

……っと、通信か。

「こちら、ラインブルグだ」

「あ、先輩、よかった。通信に出ないから、なにかあったのかと……」

「いや、すまん、外に出て、プロヴィデンスの状態を確認していたんだ」

「ッ！　……先輩、クルーゼ隊長は？」

「……駄目だったよ」

レナが静かに息を呑んだのがわかった。

何と声を掛ければいいのか困っているのだろうが、俺自身がラウ

の死について、割り切っている以上、気を使わせるのは本意ではない。

「何、これも、軍人として戦場に立った以上、誰にでも起き得る、一種の？ならい？だ。……俺やレナ、デファンだって、ラウのようになっていた可能性もあったんだ」

「……そう、ですね」

いつもは姦しいデファンが口を出してこないところを見ると、こいつも気を使っているのだろう。

「先輩」

「ん、なんだ？」

「クルーゼ隊長を殺した相手が、憎くはないんですか？」

……さて、これは自分でも不思議なのだが、ラウを打倒した相手に、そういった負の感情が湧いて来ない。

おそらくは、偶然にも二人の間で交わされていた会話や想いを聞き、また、ラウが今際の時に浮かべていた、あの微笑を見たからだろうなぁ。

俺も死ぬ時には、こんな顔を浮かべて逝きたいと思わせるくらいに……、本当に、好い、笑みだった。

「たぶん、レナは嘘だと思うかもしれないが、憎いとは思ってない。どちらかと言えば、その場に居合わせなかった事……、看取ってやれなかった事への悔いがあるな」

まぁ、でも、これも仕方がない事だし、その身体を回収できただ

けでも、他の戦死者よりは遥かにマシだろう。

「とにかく、俺は大丈夫だよ」

「先輩は……、強いですね」

「まさか、レナが……、いや、人が知らない所で、盛大に、沢山泣いているだけさ」

「……ふふ、また、冗談を言って」

いや、これは別に冗談ではないんだが……、これくらいなら勘違いさせておいても、男の見栄っ張り的には丁度いいだろう。

「んんっ、とにかく、回収した二機をどうするか、ヤキン・ドゥーエの総司令部に問い合わせないとな」

「そうですね。……エルステッドに問い合わせしてもらうよう、私が連絡を入れましょうか？」

「……そうだな、頼む」

流石に、データレコーダーやボイスレコーダーといったものを触るつもりはないが、せめて、ラウの身体だけでも、挟まれたままじゃなくて、ゆっくりと、寝かせてやりたいし、収容したいな。

……。

うん、いいや、やっちまうか。

プロヴィデンスが撃破された状態は多角的に映像で記録しておいたら、それでいいだろう。

「先輩」

「お、どうだった？」

「あ、問い合わせの返事じゃなくて、サリアが、ゴートン艦長が総司令部の様子が変だと言っている事を、先輩に伝えてくれと言ってたので」
「……何？」

総司令部の様子が変、だと？

「艦長は、どう変だと言っているんだ？」
「私達が出撃した後、どこに動くか、どこで待機すればいいのか、より細かな指示を仰いでも、ずっと同じ内容しか返答してこないそうなんです」
「現状維持、って奴だな？」
「ええ」

……別に、おかしいとは思わなくもないが、ゴートン艦長が違和感を感じているとなると、何か、あるんだろうか？

「その返事は、別に、同じ内容の録音が流されているとかじゃないんだよな？」
「ええ、総司令部の情報管制が個別に返答しているそうです」
「なら、総司令部が機能していないって事は……」

ないはずだが……、停戦が成ってから、もう二時間は経っているし……、言われてみれば、おかしい、か？

「了解。取り合えず、俺達が帰艦するまでに、より多くの情報を集めておいて欲しいと言っておいてくれ」
「わかりました」

それでも総司令部そのものは動いているみたいだから、どちらか

と言えば、これから先の態勢をどうするのかを決める、意思決定が遅くなっているのかもしれない。

ということは、総司令部の上層に何か、トラブルでもあったんだろうか？

……。

うーん、下手に騒いだら、総司令部がおかしい事が知れ渡って、これ幸いと考えなしの馬鹿共が暴れだしたりして、何とか、成立した停戦が崩れるかもしれないし……、そんな破滅に向う引き金を引きかねない予断はしたくないな。

一旦、棚上げして、エルステッドで落ち着いてから、ゴートン艦長と相談して、方針を固めることにしよう。

そんな風に考えていた俺がエルステッドに帰艦した後、総司令部に詰めていたユウキから、秘匿通信でゴートン艦長だけを経由して、知らされた情報は、瞬間、自失するに値する、驚くべきものだった。

……それは、凶報。

ザラ議長が暗殺されたという、信じられない凶報だった。

９８　終息の刻　２（後書き）

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ、放送終了でございまする。

外　登場人物　３　（～９８）

確認の意味も込めて、これまでの登場人物一覧
（プラント独立戦争　４１～９８：Ｃ．Ｅ．７１年９月２７日現在）

以下、順適当で紹介（漏れがあるかもしれない）

☆アイン・ラインブルグ　（Ｃ）　男
転生（？）主人公。
ザフトの白服。
第１３独立戦隊規模艦隊、公称、ラインブルグ隊隊長兼艦載ＭＳ隊長。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊ラインブルグ小隊リーダー。
ザフトではあまり知られていないが、連合軍からは?黄狼?と呼ばれているエース。
ここに至っても、外見に関する描写が一つもないという哀れな人物。

☆オーリン・ゴートン　（Ｃ）　男
ザフトの黒服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦長兼隊長補佐。
戦隊艦艇の運用や隊長不在時の指揮を担う、戦隊を支える土台基礎。
確保している無煙タバコに手を出そうか出すまいか、迷う日々を

送っている。

☆ヘレーナ・ラヴィネン　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ＭＳ隊副官兼隊長秘書。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊ラインブルグ小隊隊員。
愛称はレナで、基本、アインと共に行動し、通常時は隊長事務の補助を、戦闘時は僚機を務める。

☆フィデル・デファン　（Ｈ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン艦載ＭＳ隊デファン小隊リーダー。
ハンゼンＭＳ隊の小隊長を務める機械フェチ。
現在は、自身のゲイツを如何に改良するかを考えている。

☆サリア・ベルナール　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッドのＭＳ管制官。
情報集めが趣味で好奇心が強い。
最近は、どんな状況でも常に明るいデファンが気になっており、それとなく様子を探っている。

☆シグルド・ティーバ　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ整備班長。
通称はシゲで、年中無休でツナギを着ている整備命、機械弄り命

の漢。
アインが持ち帰った連合の技術に興味津々で、早く弄りたいと考えている。

☆ウラディミル・フォルシウス　（Ｃ）　男
ザフトの黒服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン艦長。
緩い所があるラインブルグ隊を引き締める鋼鉄の規律を司り、戦隊を支える屋台骨。
剛毅な外見だが、何気に心配りができる人物であり、戦隊員からの信頼も篤い。

☆リュウ・ミンリン　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド副長。
ＣＩＣスタッフが女性で占められている為か、整備班等々の男連中に？ＣＩＣの女王？だなんて呼ばれている。
本人は不服だが、時に苛烈な一面を見せることから、その評価は間違ってはいないらしい。

☆ミハイル・ガンドルフィ　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン副長。
不心得者の一部を熱く説き伏せて転向させたことから、艦内で？熱血鬼？なんて呼ばれている。
そのために、自然と彼の周りには、熱い男達が集ってくるらしい。

☆ガイル・マクスウェル　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン艦載ＭＳ隊マ

クスウェル小隊リーダー。
ハンゼン艦載ＭＳ隊のまとめ役を担うＭＳ隊の副隊長。
アイン不在時には指揮を委ねられる事から、日々、自習を欠かしていない。

☆グエン・リー　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊リー小隊リーダー。
家族をユニウス・セブンへの核攻撃で亡くしている。
未だにその悲しみは癒えていないが、己の感情のコントロールには成功している。

☆エヴァ先生（エヴァンジェリン・ローズ）　（Ｃ）　女
ザフトの軍医。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッドの軍医兼衛生班長。
上記の人物表記は作中におけるアインの呼び方であり、括弧内が正式名である。
その腕は確かだが、仮病する連中（馬鹿共）が多くて、それらの扱いに困っている。

☆アーサー・トライン　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド航法通信管制班長。
最近では班員からもちゃんと頼られるしっかりとした班長に成長。
もっとも、不測の事態にはまだ弱く、ゴートン艦長から薫陶を受ける日々である。

☆ビアンカ・スタンフォード　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊強行偵察班班長。
レナの指導の下、操縦技能を伸ばしているが、ラインブルグ隊の基準では一線に立てるレベルではない。
機体制御技術だけは群を抜いている為、複座型のメイン・パイロットを務めている。

☆ロベルタ・フェスタ　（Ｃ）　女
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級１３番艦エルステッド艦載ＭＳ隊強行偵察班班員。
レナの指導の下、操縦技能を伸ばしているが、ラインブルグ隊の基準では一線に立てるレベルではない。
通信や偵察、観測、誘導等、情報面での支援に特化している為、複座型のコ・パイロットを務める。

☆ルイ・エンリケ　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン航法通信管制班長。
?戦隊一の伊達男?を自称するが、女性陣から相手にされていない。
フォルシウス艦長の目が光っている為、最近は大人しい。

☆アラン・ジェルマン　（Ｃ）　男
ザフトの緑服。
ラインブルグ隊所属ローラシア級６１番艦ハンゼン火器情報管制班長。

?戦隊一の色男?を気取るが、イイ男達にしか相手にされていない。
ガンドルフィ副長の目が光っているが、依然として懲りていない。

☆レイ・ユウキ　（C）　男
ザフトの白服。
プラント防衛隊所属アプリリウス防衛ＭＳ中隊隊長を経て、ＦＡＩＴＨに就任。
地味だが、着実に出世しているアインの同期主席。
ザフト中枢において、ザフトの内情と連合軍の侵攻への対応に苦慮し続けている苦労人。

☆イヴァン・ラヴロフ　（C）　男
ザフトの白服。
第１独立戦隊規模艦隊、公称、ラブロフ隊を率いる隊長で、ジンのテストパイロットを務めた。
アインとユウキが訓練校の最終試験で模擬戦を行った際に、割って入った人だったりする。
他の隊長陣よりも年齢的にも年嵩の為、独立戦隊群の取りまとめ役を務めている。

☆ラウル・セナ　（C）　男
ザフトの白服で故人。
第７独立戦隊規模艦隊、公称、セナ隊を率いる隊長。
ナチュラルに対して差別的で強硬的な考えだったが、通商破壊任務で鎬を削るうちに変化していた。
第二次低軌道会戦において、連合軍機より狙撃を受けるも、３００ｍ級を道連れにして戦死した。

☆ヴィットリオ・ロメロ　（C）　男

ザフトの白服。
第１４独立戦隊規模艦隊、公称、ロメロ隊を率いる隊長。
おっさん臭いが、アインよりも年下な人物で気の良い好漢。
プラント最終防衛戦において、連合軍艦隊本隊への突入を成功させ、これらに無視できない損害を与えた。

☆ラウ・ル・クルーゼ　（Ｃ？）　男
ザフトの白服で故人。
ザフト内で精鋭部隊、特務部隊的な扱いを受けるクルーゼ隊の隊長。
ネビュラ章を持つ、ザフトのエース・オブ・エースであり、異名は世界樹の英雄、金獅子等。
プラント最終防衛戦において、クライン派所属機と交戦し、還らぬ人となった。

☆ロベルト・リューベック　（Ｃ）　男
ザフトの白服。
世界樹の種防衛隊隊長兼務司令を務める。
ザフト黎明期から活動してきた人物で、パトリック・ザラとは同世代であるが、派閥に属していない。
巌の如き外見からは想像できない渾名を持つ、ザフト裏方の功労者。

☆スン・ウェイ　（Ｃ）　男
ザフトの白服で故人。
世界樹の種防衛隊所属ＭＳ中隊隊長。
典型的なザフト隊員で自尊心が強く、また、ナチュラルを蔑視していた。
Ｌ１暗礁宙域戦において、作戦を無視して暴走した結果、アインに囮として利用され、戦死した。

☆バーナード・ホワイト　（Ｃ）　男
ザフトの白服。
世界樹の種防衛隊所属ＭＳ中隊隊長。
同僚のスンを見ているうちに、ああなりたくないと考えるようになった。
司令のリューベックを支える右腕的存在。

☆ダグラス・ヴィレール　（Ｃ）　男
ザフトの白服。
世界樹の種防衛隊所属ＭＳ中隊隊長。
同僚のスンを見ているうちに、自分もあんな風だったら嫌だなと考えるようになった。
司令のリューベックを支える左腕的存在。

☆アイリーン・カナーバ　（Ｃ）　女
プラント最高評議会議員。
外交委員長を務める才女。
ザラ議長に信任され、地球連合の切り崩しと講和交渉を担当する。
頻繁に意見を交換するユウキとの仲が噂されているとかいないとか。

☆エザリア・ジュール　（Ｃ）　女
プラント最高評議会議員。
国防委員を務める烈女。
ザラ議長に信任され、主にプラント防衛隊の指揮と監督を担当する。
パトリック・ザラに対して女として好意を抱いているとかいないとか。

☆シーゲル・クライン　（C）　男
ザフトの指導者であり、対外穏健（？）的なクライン派の領袖でもあった故人。
C．E．７１年４月１日当時、プラント最高評議会議長として地球へのニュートロンジャマー無差別投下を主導。
泥沼化した戦争の出口を見出せず、最高評議会及びザフトでの主導権をパトリック・ザラに奪われた。
C．E．７２年６月２０日のプラント政庁自爆テロ事件『ブラディ・ジューン』で死亡する。

☆パトリック・ザラ　（C）　男
ザフトの指導者であり、対外強硬的なザラ派の領袖でもあった故人。
プラント最高評議会議長と国防委員長とを兼務。
独立を確保しつつ地球連合と講和する為、抑止力としてジェネシスを機能させるべく、使用に踏み切る。
プラント最終防衛戦の最中、何者かに暗殺された。

☆ラクス・クライン　（C）　女
プラントの歌姫。
ユニウス・セブンの犠牲者追悼式典で歌ってから、『プラントの歌姫』と呼ばれるようになった。
ザフトには正式に所属していないが、父であるシーゲル・クラインの手伝いをしていた。
現在は、クライン派の領袖として、現政権の打倒と戦争の終結を目指している。

☆レノア・ザラ　（C）　女
パトリック・ザラの妻。
当初、夫婦仲は冷えていたが、ユニウス・セブンで九死に一生を

得たことを経て、再燃した。
どうすればナチュラルとコーディネイターの融和ができるか、自分なりに考える日々を送っている。
夫であるパトリック・ザラが暗殺された事実を、まだ知らない。

☆ベルナデット・ルルー　（C）　女
プラント・ブロードキャスティング・ネットワークの記者。
ジャーナリストとしての正義感から、歪曲報道を強いるプラント広報局と距離を置いていた。
その為、不遇な日々を送っていたが、広報局の歪曲報道が明るみに出た以降は、表に。
プラント最終防衛戦前に、ユウキから提供された情報を自分なりに検証して報道し、一躍、時の人になる。

☆ミーア・キャンベル　（C）　女
アインの妹分的な少女。
家族とは不仲の為、アインに養ってもらいながら、ラインブルグ家に住み着いている。
とある頼りになる年上女性の指導で、身体的、精神的な成長が著しい。
アインの無事を祈りながら、？我が家？の管理に集中している。

☆フレイ・アルスター　（N）　女
ラウ・ル・クルーゼに保護された少女。
アラスカ基地にて、右往左往している所をラウ・ル・クルーゼに発見され、とある理由から拉致される。
その後、諸般の理由からラインブルグ家に預けられる事となった。
ミーアと共に生活しながら、自身の様々な認識を改めると共に、とある人物への想いを再確認している。

☆イザーク・ジュール　（C）　男
ザフトの赤服。
ラウ・ル・クルーゼから信任されているクルーゼ隊の副隊長。
プラント最終防衛戦では三機の新型を単機で拘束したり、核攻撃機隊母艦を撃沈する等の活躍を見せた。
自身の小隊に所属する後輩少女から、さり気ないアプローチを受けているとかいないとか。

☆ナタル・バジルール　（N）　女
地球連合軍第七宇宙機動艦隊少佐。
アークエンジェル級二番艦ドミニオンの艦長を務める。
ジェネシスを破壊する為、ゲストを最後方の核攻撃機隊母艦へと退避させた後、小艦隊での突入を図った。
だが、アインとの戦闘で手間取る間に、停戦が成立してしまい任務に失敗する事となる。

☆マユラ・ラバッツ（仮）　（N）　女
自称、オーブ連合首長国国防陸軍三尉。
クライン派等と連合したオーブ軍残党に所属するＭＳパイロット。
本人曰く、最終防衛戦において、連合軍機に乗機を撃破されるも脱出装置が作動し、脱出に成功。
孤立無援の状態で、ただ死を待つだけであった所をアインに救助され、保護される。

☆キラ・ヤマト　（C?）　男
正体不明の少年らしき人物。
プラント最終防衛戦で、ラウ・ル・クルーゼと機体がボロボロになる程の死闘を繰り広げ、撃墜したらしい。
その際、当初は?いい子?ぶっていたようだが、途中でキレてしまい、自らの本音を曝け出した。

要するに、とある人物とは両想いということである。

カッコ内のアルファベットの意味
（C）＝コーディネイター
（N）＝ナチュラル
（H）＝ハーフ・コーディネイター

以上、人物紹介は終わり。

・筆者の一言
俺、原作部分を書き終えたから、良識ある人や女の人から、こいつは最低なＳＳだなって、罵られるような事を好きなだけ書くんだ。

99　未来を照らすもの　1

参加した多くの者が何かを失った、第二次ヤキン・ドゥーエ防衛戦において、地球連合軍との停戦が成立してから早一週間。

新しい防衛線が再度、発射が可能になったジェネシスを中心に再構築された結果、プラント国内の非常事態宣言は解かれている。また同時に、先の防衛戦で消耗したザフトの再編も平行して行われているのだが……、この余裕は、本当に、ジェネシス様々としかいいようがない。

そんなジェネシスの攻略に失敗した上、一大根拠地である月のプトレマイオスまでも失った連合軍艦隊は、Ｌ５のヤキン・ドゥーエ要塞周辺宙域からジェネシスの射程圏外であるＬ４と月の裏側に分散して後退していったが、Ｌ１に関しては未だに包囲は解かれておらず、一触即発の空気は未だに残っている。

だが、地球連合軍との停戦は、早くも地球連合構成国とプラントとの講和交渉にまで至っており、そう簡単には今の停戦が崩れる事はないだろう。

現実、今現在も、講和交渉の席が設けられた、南アフリカ統一機構の首都ナイロビでは、丁丁発止とした激論が交わされている。

もっとも、その表立っての激論は大衆向けのデモンストレーション的なものであり、実質的な交渉は激論の裏で、それぞれの国の思惑や利害が絡み合った状況で、それぞれが利益を確保したり、権利を手に入れようと様々な駆け引きを行う中、それこそ一言一句を鬩

ぎ合うような舌鋒による静かな闘いを繰り広げながら、それぞれがある程度は納得しうる妥協点を探るだなんて、俺ならうんざりして気が遠くなるか、頭にきて放り出すような折衝を秘密裏に延々と行っているはずだ。

そんな伏魔殿と表現しても過言ではない会議場で、ザラ議長から？予め？全権委任状を渡されていたカナーバ議員がプラント全権委員として、獅子奮迅の働きをしていることだろう。

……。

あの日……、ラウが逝き、ザラ議長までもが不帰の人となった９月２７日。

ザラ議長が暗殺されたという情報は、その日一日の間、ごく一部の関係者を除いて秘匿され、よりソフトな姿へと形を変える事となった。

何しろ、停戦が成立したばかりの状況で一国の指導者が暗殺されるだなんて、想定外の非常事態が起きたのだ。総司令部は混乱状態に陥って機能不全になっていたし、同日中に、一国の最高指導者が暗殺だなんてことが連合軍に漏れた場合は、こちらの体制が固まらない隙を突き込まれて、停戦が崩れる可能性もあった為だ。

幸いな事に、その一日を使い、総司令部でザラ議長を補佐していたユウキがＦＡＩＴＨの権限を使って、ヤキン・ドゥーエ要塞近辺に展開していた全部隊の指揮権を掌握し、停戦状態の維持と防衛態勢の建て直しを図った事で連合軍に隙を見せなかったし、後方でも、アプリリウス・ワンのプラント政庁で来るべき講和交渉の準備をしていたカナーバ議員やアプリリウス軍事衛星港でプラント防衛隊を

指揮していたジュール議員が迅速に動いたお陰で、例えば、クライン派のクーデターのような大きな混乱は起きず、最高評議会が臨時招集され、タッド・エルスマンなる最高評議会議員が暫定的に最高評議会議長に選出され、就任する運びとなった。

なので、ザラ議長が暗殺されたという情報は表には漏れず、表面的、対外的には、停戦合意後、撤収指揮を取っていた際に突然倒れ、急逝したと発表し、急遽、暫定議長を立てた、という具合に取り繕う事ができた。

……。

とはいえ、実は俺も、ザラ議長が、誰に、どのように、暗殺されたかについては、何も知らなかったりする。

なにしろ、ザラ議長が暗殺された状況についてはユウキも口をつぐんでいるし、その場に居合わせた者達も不意に倒れられた、との公式発表を口にするだけだからだ。

まぁ、今日は、久しぶりに多忙を極めているユウキの奴とも直接会うので、できることならば、聞き出したい所なのだが……、以後の事を考えると、追求したり、聞いたりしない方がいいだろうなぁ。

そんな風にこれからの方針を固めていたら、耳に馴染んだ声とここ最近で耳慣れた声が聞こえてきた。

「あっ、見てよ、フレイ。兄さんがまた、悪い顔してるわ」

「確かに、ミーアの言う通り、あの表情は碌な事を考えてない男の顔ね」

何だか、最近、居候している二人に散々な事を言われることが多いような気がするこの頃である。

「君達ね、家主に対して、もう少し、言葉を選ぶと言う事を覚えた方が「あ、ユウキさんだ」……聞いてください、お願いだから」

くそっ、なんて世の中だっ！

年長者の話も碌に聞かないだなんて、最近の若者の態度はなってないっ！

本当に、嘆かわしい限りだっ！

……なんて、説教臭いことは、叩けば埃が塊で落ちる身なので言えそうにないが、もう少し位、未恋で無妻男な青年に優しさが欲しいとは思う。

そう考えた瞬間、何故か背筋に寒気が走ったので、悪寒を誤魔化すためにも、無人車から降り立ったユウキに声を掛ける事にする。

「よう、ユウキ」

「……ラインブルグか」

白服姿のユウキは未だに激務が続いているようで、あまり顔色が良くないようだ。

「その顔を見るに、忙しいみたいだな」

「ああ、正直、猫の手も……」

「おっと、先に言っておくが、俺は手を貸せないぞ？　解隊に向けて、色々と忙しいからな」

実は、プラントが本気で講和するという姿勢を地球連合ひいては全世界に示す為に、また、講和交渉において双方の戦力削減という流れを生み出す為に、ザフトの一部部隊を解隊する事が最高評議会で決められている。

戦争が終わったら除隊する事を考えていた俺にとっては、その決定はその渡りに船であった事もあり、ゴートン艦長やフォルシウス艦長とよくよく話し合った上で、うちの隊はそれに立候補したのだ。

「わかっている。だが、クルーゼが逝き、お前まで去るとなるとな……」

「一人残すお前には申し訳ないが、ここらで解放してくれよ。これでも最低限の義務は果たしたつもりだし、……元より俺は、望んでザフトに入ったわけじゃないんだ」

「ああ……、お前は、そうだったな」

疲れ切っている所為か、ユウキの思考がネガティブに流れているようなので、明るい話題を提供してやることにする。

「何、その分、人を残すさ」

「……人を？」

「ああ、うちの隊が解隊するって事は実戦経験が豊富な連中が……、今後、軍の中核になりうる連中が表に出るってことだ。俺が見た感じだと、今、ＭＳ小隊長を務めている三人は自信を持って白服候補に挙げられるし、艦内各班で班長している連中も黒服候補になれるだろう。平でも、小隊長や班長クラスになれるのは、……最低でも、三十人は固い、ってところかな」

「ッ！　な、なっ、おまっ、そ、それは本当かっ！」

「ああ、どいつもこいつもそれぞれの分野に精通した、使える奴等

だってことは保証しておくよ」

何気にうちの隊って、大小併せての実戦経験が多い上に、欠員がほぼ出ていないから、肝っ玉の太い、ベテランが非常に多いんだよねぇ。

「もっとも、そいつらが必ずしもザフトに残るとは限らないからな？」

「わかっている。だが、ザフトにとって朗報なのは間違いない」

「そこまで、人材不足なのか？」

「ああ、次の中核になれる者が少ない。あの防衛戦の損害が、あまりにも大きいのだ」

「……そうか」

それだけ、先の戦闘が酷いもの……、末期戦状態と言っても過言ではない状況だったということだろう。

ユウキと二人、静かに話し合っていると、気を利かせて、アルスターを連れて離れていたミーアが声を掛けてきた。

「兄さん、そろそろ」

「っと、時間らしい」

「そのようだな。……行こう」

今日は、ラウの葬儀がアプリリウス・ワンの共同墓地で行われるのだ。

ミーアとフレイは黒の喪服姿で、ユウキと俺はザフトにおける正装……まったく普段と変わらない制服で参列する事になっている。

……。

それにしても、こう言っては何だが、俺が予想していたよりも参列者が多い。

ザフト内では、エース・オブ・エースである、ラウ・ル・クルーゼは一種の高嶺に存在する、孤高の人物というイメージが強かったからなぁ。

……だというのに、式が始まる前から、おいおいと号泣と言っていい程に泣いている、恐らくは?燃える会?の者達だと思しき、喪服やザフトの緑や赤といった制服姿の?熱苦しい?男達が不思議な?色?を添えている。

「ぉうぅぅぉうぅぅっ！　ら、ラウの兄貴ぃ～～～！」
「クルーゼ隊長っ、あんたはどこまでもっ、熱い漢だったっ！」
「クルーゼ隊長、あなたは、いつまでも、俺の、隊長です」
「俺達、燃える会は忘れねぇ！」
「ああ、ＢＯｕＲＵだけではなく、何事にも熱くなれって、俺達を導いてくれた、あんたのことは、一生、忘れないっ！」
「おお、俺達は、燃える会の永代栄誉会長として、あんたの名は残すぞっ！」

友として、ラウが慕われていることを知る事ができたのは嬉しいのだが……、あまりの熱さに、少々、引いてしまうのは仕方がないことだと思う。

「ね、ねぇ、兄さん、本当に、私達も出ていいの?」
「な、なんか、私達、場違いのような気が……」
「いやいや、こんな湿っぽい場で女っ気がないのは寂しい」

「そうだな、君達が参加してくれた方が、クルーゼも喜ぶだろう」

燃える会の濃い面々を見て、微妙に引き攣った顔を見せていた、ミーアとアルスターにフォローを入れておく。

いくら熱血に傾いていたラウでも、女っ気がないのは勘弁して欲しいだろうからな。

……お、式が始まるな。

◇　◇　◇

白服……、部隊長クラスであるラウの葬儀は、通常の軍隊ならば、儀仗隊が出てもおかしくはないのだが、ザフトはそこまで制度が整っていないので、民間の葬儀と大差はない。

その葬儀も、ラウの親戚らしい、ミーアと同じ歳ぐらいの少年を主催者に、また、ラウの知り合いという黒い長髪の美形な男を司会として、参列者の黙祷と献花だけで恙無く進行していき、ラウが入れられた棺は無事に埋葬されることとなった。

そして、建てられた白い墓標の前で、参列者が次々に別れを告げて立ち去って行く中、ゆっくりと別れをしたい俺達は最後まで待つことにした。その間を使って、ユウキと小声で話をする。

「ラインブルグ、奴は満足して、逝ったんだろうか？」

「それは間違いないよ」

なんせ、死ぬ間際に、微笑んでいたんだからな。

「それよりも、例の話、上手くいきそうか？」
「大丈夫だ。実利的な面もあるからな、何が何でも通すつもりだ。……任せておけ」
「なら、いいんだ」

実はユウキと計って、ラウ・ル・クルーゼというザフト屈指のエースが、プラント・コロニー群を核攻撃から守り抜いた英雄がいたことを何らかの形で今後も残す為に、国防委員会や事務局、最高評議会に色々と運動している所だ。ラウが知ったら、気恥ずかしがるかもしれないが、それに値する存在だったのだから、遠慮するつもりはない。

っと、今は、それよりもっと。

「行こう」
「ああ」

墓前で、静かに涙を流したミーアと沈鬱な表情を見せるアルスターが改めて献花をした後、ユウキと二人で並んで立ち、しばらくの間、瞑目して、ラウが生きていた頃の思い出を懐かしみ、また、安らかに眠れるように、黙祷を捧げる。

……。

どれだけの時が過ぎたのか、自身でもわからなかったが、隣のユウキに一声掛ける。

「ユウキ、付き合え」
「……わかった」

持ってきていた紙袋から、ラウと賭けていたスコッチと、小さな携帯グラスを三つ取り出して、封を開け、少量ずつ、注ぐ。

一つをラウの墓標に、一つをユウキに手渡し、一つを俺が手に持つ。

そして、静かに杯を掲げて、ただ、一言だけを、最後に捧げる。

「……友に」

「……友に」

くっと杯を呷ると、喉が灼ける熱さに身体が反応したのか、少しだけ、涙が出た。

「さて、俺達が逝くまで、ゆっくりと休ませてやろう」

「ああ、私達が逝くまではな」

そう、互いに確認して振り返ったら、ラウが……、いや、主催者の少年が立っていて、ビックリした。

司会の紹介によると、レイ・ザ・バレルと言うラウの親類らしいが、髪や顔の造詣、それに瞳の色も何となく似ているため、間違えかけてしまった。

「ラインブルグさん、それに、ユウキさん、ですね」

「ああ。……ラウとは訓練校時代からの付き合いで、親しい友だった」

「私達は、本当に惜しい、掛替えのない友を亡くしたと思っているよ」

俺達の言葉を聞いた、バレル少年は微かに頬を緩ませて、しっかりと言葉を返してきた。

「お二人にそう言ってもらえると、ラウも喜んでいると思います」

「そう言ってもらえると、ありがたいな」

「ああ、光栄だ」

……うーむ。

「君は、ラウの親類と言っていたが、他の親族はいないのか？」

「ええ、ラウ以外に、血の繋がりがある者はいません」

「なら、こいつをもらってくれないか？　いつか、ラウと飲もうと思っていたものなんだよ」

ラウとの賭けは、ちょいと余人には漏らせない物騒なものでもあったし、ここは黙っておこう。

「実は、ラウから、自分に何かあったら、ラインブルグさんにこれを渡しておいて欲しいと言われていたんですが？」

バレル少年が手に抱えていた木箱から取り出したのは、見れば、賭けの対象にしていたブツだった。

ラウめ、意外と律儀……、いや、始めから負ける事を見越していたのか？

……。

まぁ、本音を言えば、そいつの味には少々興味があるんだが、ラ

ウが死んだ以上は賭け自体が不成立だしな。

「ラウの形見だし、そいつは受け取れない。俺としては、君が持っていてくれる方が嬉しい。……ついでに、こいつも、君に酒を酌み交わす友ができた時に……、飲んでやって欲しい」

改めて突き出すと、困惑しながらも、バレル少年は受け取ってくれた。

「……では、頂いておきます」

「飲み差しで悪いがな」

「いえ……、大切にします」

再度、微笑を浮かべたバレル少年に、改めてラウの面影を見出すが……、目前にいるのは、レイ・ザ・バレルという一個の人格を有する人であるから、口には出さないことにした。

「では、失礼するよ。……ユウキ、先に行くぞ?」

「ああ」

無言で頭を下げてきたバレル少年に敬礼を返して、俺がその場を辞すと、ユウキがバレル少年と話をしているようだった。

……案外、ザフトに勧誘していたりしてな。

そんな事を考えながら、司会の男と何かを話しているらしいミーアとアルスターの元に赴いた。

１００　未来を照らすもの　２

ミーア達に近づくにつれて状況が見え始めた。

どうやら、司会の男……ギルバート・デュランダルが、何やら熱心にミーアに話し掛けているのを、ミーアが余裕を持ってと言うか、極々普通に受け答えしているようだ。

だが、ミーアの傍らに立つアルスターはどことなく、我が家に来た当初に見せていたような、相手を見定める目を……、いや、デュランダル氏を警戒しているように見えるな。

「では、歌う気はないと？」

「はい。歌を歌うのは好きだけど、あくまでも趣味の範疇ですから」

「……残念だ。君の歌声ならば、多くの人を魅了できるだろうに」

「ふふ、お世辞でも嬉しいです」

「私は世辞でこのようなことは言わないよ」

「あはは、あまり、そういうことは軽々しく言わない方がいいですよ。……女の子は勘違いしやすいですから」

「偽りのない、本音なのだがな」

……歌？

よく状況が掴めないまま、とりあえずはデュランダル氏に声を掛ける。

「ミスタ・デュランダル、時間を掛けさせて、申し訳ない」

「あ、ああ、いや、ラウとの別れなのだから、そのような事は気に

しなくても構わない」
「それはありがたい」
なんて受け答えしながら、ミーアとアルスターを横目で観察する。
ミーアはラウとの別れの際に見せていた涙の後が微かに残る位で、後は普段と……、癒しの空気を醸し出すような、のほほんとした雰囲気とまでは言わないが、常とあまり変わらない。
一方のアルスターは、俺の到着で目に見えてほっとしているようなのだが、それでもどうやら、このデュランダル氏への警戒は解いていないようだ。
何故に、そこまで警戒するのかはわからないが、アルスターの精神衛生上、あまり良くなさそうだから、先に行ってもらって足を確保しておいてもらうことにしよう。
「ミーア、アルスター、悪いが、車の確保を頼む」
「あ、うん、わかった。それでは、デュランダルさん、御機嫌よう。これで失礼しますね」
「……失礼します」
「ああ、二人とも、今日は来てくれてありがとう。……それと、ミズ・キャンベル、もしも、気が変わるようなことがあったら、先程渡した名刺に連絡を入れて欲しい」
「ふふ、わかりました。憶えておきますね」
な、なんか、アルスターと共に、自然な立ち居振る舞いでデュランダル氏の元から立ち去るミーアの、男への対応と言うか、あしらい方が異様に上手な気がするんだが……、これも、日頃からミーアがお世話になっているザラ夫人の薫陶の賜物なんだろうか？

「この私が、この僅かな間に、ここまで惹きつけられてしまうとは……、本当に、残念だ」
「ええっと、あの……」
「む、何かな？」
「ミーアに歌って、どういうことですか？」

確かにミーアは歌うのが大好きだが、あくまでも素人であって、人前で聞かせられるとは思えないんだが……。

「実は、彼女と話している時に気が付いたのだが、彼女の声には、不思議と惹きつけられるものがあったのだ」
「そうなんですか？」

俺には、普通の、ありふれた声にしか、聞こえんけどなぁ。

「そうなのだよ。……あれは、実に、良い声だった」
「うーん、昔から聞いている所為か、俺は特に何も感じないんですが？」
「そうなのかね？　ふむ、あの声を聞いて、何も感じないとなると……、遺伝子の……、いや、違うか？」
「えと……」
「いや、すまない、職業柄、つい、考え込んでしまうのだよ」

あー、そういうのってあるよね、なんて考えつつ、相槌を打っていると、デュランダル氏は更に続ける。

「しかし、あの声を聞いておいて、極普通でいられるとは……、いや、流石に、ミズ・キャンベルを育てきたというヘイアンヒカルゲンジだけはある」
「ぶはっ、……な、何を急にっ！」

「む？　ラウからはラインブルグ君への一番の褒め言葉だと聞いていたのだが？」

おいおい、ラウさんよぅ！

こんな置き土産はいらんぞっ！

「そ、それは、褒め言葉では絶対にない、むしろ、貶めていますから、ぜ、絶対に、他では使わないで下さい」

「ふむ、どうやら、私はラウに担がれたようだな。知らぬ事だったとはいえ、申し訳ない」

「い、いえ、悪いのは嘘を教えていたラウですから」

な、なんか、ラウが遺していった俺限定への爆弾が見事に炸裂したお陰で、一気に堅苦しかった場の雰囲気が破壊されたよ。

「今、考えてみると、意外と、お茶目ですよね、ラウって」

「ああ、君達と出会った後、仮面を外し、サングラスを掛けるようになってからは、特にな」

「そうなんですか？」

「そうなのだよ。初めて出会った頃は……」

「……自身の血筋や自分を生み出した社会への復讐の念に囚われていた？」

俺の言葉に驚いたのか、微かにデュランダル氏の琥珀めいた色をした目が広がったように見えた。

「そこまで、話していたのか」

「まぁ、進んでと言うわけではないんですが、紆余曲折を経て、知るに至りました」

改めて知る切欠となった原因を思い出すと……、笑い話のネタにしかならんよなぁ。

「そうか。……では、ラウの妄念は晴れたと、君は思うかね？」
「ええ、晴れたでしょうね」
「む、そこまで断言できる理由は？」
「最期の相手が、全てをぶつけるに値する、良い相手だったからでしょう」

ラウはきっと、自らの思いの丈を……、自身の中でずっと巣食っていた負の感情と自身の生き様を、ぶつける事ができたんだろう。

「君は、その相手について、詳しく知っているのか？」
「いえ。……ただ、ラウはヒビキと、連呼していましたね」

流石に、アルスターの想い人を、しかも両想いっぽいだけに、本名を出すのは憚れるからなぁ。

一応、アルスターには知る義務と権利があると思い、下手な隠し立てはせず、ラウとキラ・ヤマトという名の人物が戦い、ラウが敗れたということを、俺が知り得た、ありのままを伝えておいたけどな。

「ヒビキと、ラウはそう言っていたのかね？」
「ええ」
「そうか。……ならば、納得も行く」

だが、デュランダル氏はその苗字を聞いて納得がいったらしく、頬りに頷いてみせた。そして、これまで纏っていた柔らかい雰囲気

から打って変わって、鋭い視線でこちらを見据えてきた。

「少し話を変わるが、君は、ＳＥＥＤという言葉を知っているかね？」

「ＳＥＥＤ……、Ｓｕｐｅｒｉｏｒ　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎａｒｙ　Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｄｅｓｔｉｎｅｄ－ｆａｃｔｏｒ（種の進化的要素を決定付ける因子）でしたっけ？」

「ほぉ、博識だね」

「いえ、暇つぶしの濫読で、流し読みをして知った程度ですがね」

人類が一つ進化する為のステージ、その可能性、って、俺が読んだ書物には書かれていたが、要するに、種族としての人が、新しい環境……、宇宙に適応するように進化するってことだろう？

……違うのかな？

「では、そのＳＥＥＤを持つ者が、特別だと言われている事も？」

「それは初耳ですね」

確かに、他者よりも一歩先に行く事になると特別といえば特別かもしれないが、最終的には皆が行き着くはずなんだから、そこまで取り立てて騒ぐ事でもないような気がしないでもない。

「ある者は、そのＳＥＥＤを持つ者が、新たに人類を導くだろうと、そう言っている」

「……形を変えた救世主思想ですか？」

「ああ、その通りだよ。……私は、そんな救世主を待望するような安易な方法を選ぼうとする今の社会を、些か、危惧している」

「まぁ、確かに、先導する者が誤ったら、それでお終いですからね」

理屈ではなく経験からだが、人がヒトという存在である以上、どこかで過ちを起こすのが普通だろうし、そもそも、この世には完璧を目指す人はいても、？完璧な人？などいない……はず。

「そういう事だよ。では、どのようにすれば……、大きく乱れた社会の中で、今を生きる我々は、何を標に、どう生きていけば良いのだろうか？」

……標、なぁ。

「そういう道標があったら、生きるのも楽でいいんでしょうが……、そういったものがあったとしても、先程、ミスタがＳＥＥＤを持つ者を救世主扱いする事を指摘されたように、それに縛られてしまう、……妄信してしまう場合もあるかもしれませんよ？」

「……かもしれないな」

「結局は、一部の天才に全てを頼るだけでなく、大多数の凡人が知恵を絞りあって、時に対立し、時に協和して、一歩ずつ、先の見えない闇夜に似た未来を、多くの苦悩を抱えながら、それでも世界が良き方向に進むと信じて、手探りで進むしかないんじゃないですか？　無論、その過程では、多くの過ちが繰り返されるだろうし、数え切れない屍が生み出されるかもしれない。でも、それを乗り越えて、今の人類があるんだから、これからだって可能なはずです」

「だが、皆が皆、君のように強いわけではないよ」

「いやいや、俺だって、強くなんてないし、所詮は一個の弱いヒトに過ぎませんよ。実際、今言ったことは飽くまでも、俺が考えている、俺が望んでいる理想であって、現実では実現が難しいだろうなぁって、自分でも思いますから」

でも、生き辛い現実だからこそ、理想を抱くというのは、大切な事だと思うんだ。

……まぁ、その思いが妄信に陥らないよう、それだけに固執しないように、時に自身の理想に懐疑的になることが必要だろうし、より良いモノを見つけるために、他者の言葉にも耳を傾けることができる位の余裕がなければならないだろうけどな。

「それでも、さっきの救世主思想が多くの人を魅了するのと……、人に光明を与えるのと一緒で、俺が言ったような理想でも、闇夜を照らす為の数ある灯火の一つにはなると思うんですよ。それに、未来という、どこまでも深い闇夜を照らす灯火は、少しでも多くあった方が見通しも良くなりますからね」

「なるほど、未来を照らすのは必ずしも一つの灯火だけである必要はない、というわけか」

ふむふむ、と何やら頷いているデュランダル氏は、俄かに微笑んで、鋭い雰囲気を拡散させた。

「……ふふっ」

「何か、変でした？」

「いや、すまない。君の理想を笑ったわけではないよ。ただ、ラウと君の馬が合った理由が、なんとなく、わかった気がしたのだよ」

「はぁ、そうですか」

こちらにはよくわからないが、デュランダル氏はラウを昔から知るだけに、得心ができたのだろう。俺がそんな感想を抱いていると、再び、デュランダル氏が口を開いた。

「ザフトの知り合いから君の隊が解隊すると聞いているのだが、今後はどうするのかね？」

「そのまま除隊して、オーブで会社を営んでいる親父の手伝いをし

ようと考えてます」
「そうか。……確か、君の父上が経営しているのは、ラインブルグ・グループだったね」
「おや、御存知でした？」
「プラント国内……、ザフトでも知っている者は少ないだろうが、知っている者は知っているよ」

知っている者は知っている、か……。

「なるほど、俺が知らないだけで、親父とグループの名に助けてもらっていたということですか」
「オーブを支えてきた雄であるモルゲンレーテと肩を並べる新興の一大企業グループであり、プラントとも食糧関係での取引話があっただけに、上層部が手心を加えることもあっただろうな」

あちゃー、これは、親父に、本格的に頭が上がらなくなってきた気がしてきたな。

「しかし、残念だ」
「何がです？」
「君のような人材がプラントから流出する事がだよ」
「それは褒めすぎですよ」

な、何か、背中がむず痒いっ！

「いや……、本当に、クライン派に暗殺されたザラ議長が、君を買っていた理由がわかったよ」
「そ、そうですか？　な、何か、照れますねぇ、……っと、ユウキの方も話が終わったみたいですんで、今日は、これでお暇したいと思います」

「もう、行くのかね？」
「すいません、今日は他にも、どうしても、外せない用事がありまして……」

……っ、早く来い、ユウキ。

「ふむ、私としては、もう少し、君と話をしたい所なのだが、そういう理由ならば、仕方がないな。……ラインブルグ君、今日は、ラウの葬儀に参加してくれて、ありがとう。ミーア君に私の名刺を渡してあるので、もしも、何か困った事があったら連絡して欲しい。私なりに協力できることは協力しよう」
「いや、初対面にも関わらず、何とも、過分なお気遣いを……、感謝します」
「何、君はラウの親友だったのだから、それ位のことはさせて欲しい」

……来たか。

「ユウキ、ちょっと長居をしすぎたみたいだ。次の予定まで時間がないぞ」
「何？　……確かに、少々、長居をし過ぎたようだな」
「まぁ、仕方がないさ。それよりも、先方を待たせるわけにもいかないからな、急いだ方がいい」
「そうだな。……では、バレル君、さっきの件については今後も相談に乗るから、また、話をしよう」
「ええ、ありがとうございます」

……。

「ミスタ・デュランダル、今日は司会をして頂き、ありがとうござ

いました」
「いや、気にしないでくれ、ユウキ君。私にとっても、ラウは家族といっても過言ではない存在だったのだから」
「こうやって、多くの者がクルーゼを送る事ができたことに、感謝します。……それでは、失礼します」
「……では」
「ラインブルグ君、再び、会える時を楽しみにしているよ」

……。

も、もう、デュランダル氏から、顔は見えていないよな？

……。

「ど、どうした、ラインブルグっ、今、急に顔色が悪くなったぞ？」
「……後で話す」

何とか、常と変わらぬ姿勢を維持したまま、ユウキと並んでミーア達が待っているであろう、車止めを目指す。その途上、墓地を管理するための建物の陰に……、デュランダル氏の視界から外れた瞬間に、足に来てしまい、ふらついてしまった。

「お、おい、本当にどうしたんだ？」
「ああ、もう少しだけ、待ってくれ。車に入るまでは……」
「だ、だが、ッ！　……お前、凄い汗じゃないか？」
「ちゃ、ちゃんと、理由は話すから、今は、早く、車まで行こう」

ま、まったく、冗談じゃないぞ！

なんなんだ、一瞬だけ見せた、あの、ザラ議長にも匹敵する、人を圧する強烈な存在感はっ！？

それに、なんで、一市民であるはずのデュランダル氏が、今現在において、ザフトでもトップシークレットに分類されるザラ議長暗殺を知っているんだよっ！？

しかも、犯人がクライン派だって、確信があるような口振りで話すだなんて、明らかにおかし過ぎるだろう！

……。

い、いや、突然、掛けられたプレッシャーと、思ってもない所から予想だにしなかった言葉を吹き込まれた所為で、動揺し過ぎているな。

……落ち着け、俺。

落ち着いて、頭を回すんだ。

……。

よし。

ザラ議長が暗殺されたことに関する諸々の情報は、あのザフトの

内情に詳しい口振りなら、上層部と強固な繋がりがあるか、広大な情報網を持っていて、そこから耳に挟んだのかもしれないし、クライン派が犯人であると確信しているのも、そこから聞いたのかもしれない。

……。

うん、やっぱり、デュランダル氏がザラ議長の暗殺に関わっているのではないか、だなんて、荒唐無稽な想像が脳裏を過ぎったのは、唐突に向けられたあの存在感の所為で感覚が狂ってしまい勘違いしてしまった、……つまりは、俺の早とちりだろう。

この一週間、ザラ議長暗殺の状況を知りたいと思い続けていた所に、急にそんな話題が出てきたが為に、勝手に関連づけたに違いない。

だが、最高評議会の議員とその場に居合わせた司令部要員、俺とゴートン艦長以外には、知らないはずの情報を知っているとなると、相当な癖者だな。

それに加えて、あの、人を圧倒できるだけの存在感を持つなんて……、傑物というか、化け物だぞ。

はぁ、ラウの奴め、本当に、とんでもない人物と知り合いだったんだな。

アレは間違いなく、付き合う際には、常に気を抜くことなく、言動に注意が必要なタイプだぞ?

……今日の会話で、変に目を付けられていないといいけどなぁ。

あっ、一応、アレがご執心だったミーアにも注意しておく方がいいかもしれない。

……。

無人車の前で待っているミーア達が見えてきたことに安堵して、二人に要らぬ心配をさせないよう、心身の状態を把握して調子を取り戻すべく、俺は深い深呼吸を繰り返した。

１００　未来を照らすもの　２（後書き）

１１／０４／２６　一部表現を修正。

１０１　未来を照らすもの　３

共同墓地から次の目的地に向う為、ユウキと俺が前席に、ミーアとアルスターの二人を後席に各々座って、車で移動しているのだが、先程、デュランダル氏とのやり取りで不審に思った事を、情報が情報だけに、後席に声が漏れないように間仕切りで仕切って防音を施した後、ユウキに話している。

「そうか、そのような事があっての、あの動揺か」
「まあな。……それで、まず聞きたいのは、ザラ議長暗殺を知るデュランダル氏は、ザフトの人間なのか？」
「私も詳しくは知らないのだが、確か、ここ最近……、この二、三年で、ザフトに所属した人物だったはずだ」

となれば、今現在における秘中の秘である、ザラ議長が暗殺された事を知っていてもおかしくはない、ということか。

……だが、どこから？

「どこから、情報が漏れたと思う？」
「正直、わからんな。いくら、ザラ議長が暗殺された場に居合わせた者達に口止めしたを厳命したとは言え……」
「……人の口に戸が立てられない以上、ちょっとした事で漏れている可能性は否定できないか」
「そういうことだ」
「なら、暗殺犯に関する情報は？　デュランダル氏はクライン派が暗殺したかのように、断言していたが、これは本当なのか？」

ユウキは眉間に皺を寄せると、静かに話し始めた。

「ザラ議長を暗殺した犯人については、捜査にあたっている保安局の特命捜査班もおそらくはクライン派だろうという予測しかできていない」

「……予測か？」

「ああ、なにせ、本人が、ザラ議長に銃を向けた際に発した言葉しか、証拠が残っていないからな」

「証拠が残っていないか……、逮捕しなかったのか？」

「あまりにも突発的過ぎて、射殺するだけで精一杯だった」

この物言い……、おそらく、ユウキ自らが手を下したんだろう。

「じゃあ、身元情報の照会やＤＮＡでの照合は？」

「プラントにある戸籍データには、暗殺者に関する情報は何も存在しなかった。特捜班の者は、何者かに全ての情報を抹消された可能性もあるし、別の場所からプラントに恨みがある者を引っ張り込んできたり、元より戸籍が存在しない遺棄児を暗殺者に仕立てた線も可能性が高い、……そんなことを言っていたよ」

見事と言える位に不自然過ぎる程、暗殺者の痕跡が消されており、その表層しか見せてもらえないとなると、これは、案外、根が深いのかもしれないな。

……ふむ。

今回の暗殺の背後にいてもおかしくないと考えられるのは……、今現在、疑われているクライン派や地球連合との講和の為に現実路線を歩み始めていたザラ議長と歩調が合わなくなっていたコーディ

ネイター至上主義者や対ナチュラル強硬派、強権を握ったザラ議長を疎ましく思ってるザフト内の有象無象な連中って所かねぇ、等と想像しながら、ユウキに問い掛ける。

「じゃあ、実行犯の背後にいると考えられる、黒幕の正体はまったくもって不明、ってことか？」

「……もしも、黒幕が存在するならば、な」

「はは、判断に必要なのは地道な捜査の結果であって、過剰な推理は予断を生むから厳禁か？」

「そういうことだ」

なら、真相究明は捜査陣に任せる事にするが……、その頃には、俺、プラントにはいないだろうなぁ。

「で、ユウキ。……重要機密を知るデュランダル氏に対して、何らかの対応をするのか？」

「基本は放置だな。公式発表で、ザラ議長は急病で倒れた事になっている以上、デュランダル氏に何処で聞いたのか等と表立って問い詰める事はできないだろう？　特に、表面的にはプラントは一致団結していると見せないといけない、今の状況だと、下手に騒ぎを起こしたくない」

地球連合との講和が終わるまでは、相手に付入る隙を見せない為にも、特に注意が必要ということか。

「なら、暗殺説が一般に広まって、誤魔化せなくなった時は？」

「現体制に不満があった個人か、戦闘でのストレスで発狂した者による凶行というのが、外に漏れた場合での公式見解になるな」

「……あくまでも、背後関係は存在せず、突発的な単独犯行にするって事か」

「ああ。お前達が紹介してくれた記者のお陰で、オペレーション・スピリットブレイクの失敗は、クライン派の裏切り行為が根本にあったと一般市民に浸透しつつあるからな。……これ以上、社会を動揺させるとプラントの政治体制そのものが崩れる事もありえる。よって、我々の身内には、その存在が目障りだからといって背中を刺す者など、どこにも存在していない、という建前で通す」

建前、か……。

やはり、コーディネイターも人ということだな。

……。

「そろそろ、着くな」

「……ラインブルグ、もう、聞かないのか？」

「まぁ、本音を言えば、その時の……、ザラ議長が暗殺された時の状況を聞きたい気持ちはある」

……ザラ議長の葬儀は、その死の真相を秘匿する必要性からザラ夫人と一部の要人だけが参加しての密葬だった為、直接的に遺体と対面したわけではないからなのか、あの議長が死んだという事を、未だに信じ切れていない。

「だが、俺は、ザフトを去る身だからな、これ以上の機密に触れると不味い事になる」

「……別に、残ってもいいんだぞ？」

「いや、勘弁してくれ。……ザラ議長みたいな、何気に理解のある上司がいなくなったんだ、胃と心がもたないよ」

客観的に見ると、俺の立ち位置はザラ議長に近いって、周囲から

思われているだろうから、クライン派はもちろん、コーディネイター至上主義者や対ナチュラル強硬派の連中、加えて、フク某みたいなザフト内部に潜む権力亡者共からの風当たりが強いだろうしなぁ。

「お前がいれば、これから始まる、抜本的な軍制改革も楽になるのだが……」

「何言ってるんだよ。所詮、俺なんて、数いる白服の一人に過ぎないんだぞ？」

「以前から思っていたのだが……、ラインブルグ、お前、自己評価が低くないか？」

「そうか？　連合軍の新型ＭＳを奪取したり、核攻撃を全弾阻止したりしたラウやザフトの中枢で辣腕を振るってきたお前に比べたら、俺なんて、特に目立った功績を挙げていないから、これくらいの評価が妥当だと思っているんだが？」

俺の答えを聞いたユウキは、天井を見上げた後、利き腕の人差し指で眉間を押さえながら、これ見よがしに溜息をついてみせると、改めた感で、口を開いた。

「ザラ議長に物申して、拳で語り合ったのは誰だった？」

「懐かしいな、おい。……本当に、あの時の議長は強かった」

「ザラ議長に通商破壊を提案したのは？」

「ああ、そんな事もあったな」

「Ｌ１に恒常拠点を設けて、宙域を押さえるように進言し、通商破壊を行うように提言したのは？」

「一応、意見書を送ったり、状況に対する対応策を出せって言われた覚えはある」

「地球軌道上で、クルーゼと共に、一個艦隊を叩き潰したのは？」

「あれは、ラウが主体で、俺は助攻」

「……情報漏洩の危惧を伝えて、対策を求めたのは？」

「知った情報を伝える機会があったから伝えただけだ」
「……オペレーション・スピリットブレイクの端緒を構築したのは？」
「元々、素体となるちゃんとした原案があったし、あくまでも、それに乗っかっただけさ」
「……Ｌ１に侵入してきた一個艦隊を始末したのは？」
「地の利を持ち、宙域を良く知る防衛隊との共同作戦だからこそ上手くいったんだ」
「……通商破壊で連合軍の輸送艦を損失なしに五十隻近くも沈めたのは？」
「戦隊の皆が頑張った成果だな」
「……私に外交部への積極的な情報提供を勧めたのは？」
「早く戦争を終わらす為の一助と思っての事」
「……第二次低軌道会戦で苦戦する他隊を他所に、一方的な展開で同数のＭＳ隊を撃滅したのは？」
「あれこそ、日頃の訓練の賜物って奴だ」
「……壊滅したボアズから撤退する残存部隊を救出したのは？」
「与えられた任務をただ果たしただけさ」
「……ザラ議長に辞任を決意させたのは？」
「えっ、確かに議長には辞めた方が今後に都合がいいとはいったけど、そうなのか？」

ん、なんだろうか、この、居心地の悪い沈黙は？

「ラインブルグ、お前はもう少し、自分が周囲に与えている影響を自覚しろ」
「いや、んな、大げさな。一人の人間が与える影響なんて、小さいもんだろう？　だいたいだな、もし仮に、俺が誰かに、何らかの影響を与えていたとしても、その誰かが受け手として、どう感じ、どう変化したかの方が重要だと思うぞ、俺は」

「だが、それも影響が与えられなければ変わらないはずだ」
「いやいや、俺からだけじゃなくてさ、人は常々、森羅万象から影響を受けているよ。物事に変化が起きるのはさ、受け手が自身を、心を動かして、自らを変革しようと思った時から始まるんだ」
むむむ、と互いの主張をぶつけ合い……、同時に肩の力を抜く。
「はぁ、平行線だな」
「というか、こんなどうでもいいことよりもだな、お前、今から、ザラ夫人に簡略にしか伝えていなかった、議長が暗殺された時の状況を詳しく説明するんだろう？　しっかりと心の準備をして、腹を据えて置けって」
「むぐっ。……い、胃が痛くなってきた」
「……すまんが、これぱかりは交代できんぞ？」
「わ、わかっている。だが……、今から、気が重過ぎる」
実は、これからユウキには、ザラ夫人の元に赴き、ザラ議長が亡くなった際の状況を……、その場で起きた子細全てを伝えるという、とてつもなく気の重い仕事が待っているのだ。
……。
ミーアから聞いた話だと……、ザラ家では、ザラ議長が亡くなる前に……、戦争で一粒種も失ったという話だったから……、大切に育ててきた息子と愛する夫を相次いで失った、夫人の悲しみは如何ほどのものだろう。
……はぁ、俺如きでは、到底、想像できない。

けど、たとえ、深い悲しみに沈んでいる状況にあったとしても、誰かが共に在るというだけで、そこに言葉がなくとも、人の心は支えられるという事だってあるだろうし、遺された者が逝った者の？死？を受け入れられるようにする為の一助にもなれるかもしれないから、こちらから無理を言って、ユウキに同行する事にしたのだ。

……正直、俺やミーアが一種の憧憬を抱いているザラ夫人の悲しむ姿は見たくはないがな。

◇　◇　◇

ザラ邸に到着すると、ザラ夫人は表面上は常と変わりなく俺達を迎えてくれた。だが、普段はしていない化粧をしているだけに、体調が思わしくない事や顔に出ている憔悴を隠す為にだろうという事は透けて見える。

それでも、気丈に背筋を伸ばして、毅然とした態度を貫こうとする姿は、痛々しいと同時、敬意を払うべき尊いものだとも思えた。

「では、ユウキ君、こちらへ」

「はい」

来訪の挨拶もそこそこに、ザラ夫人とユウキがザラ議長の書斎で話をする事になり、その間は、ザラ夫人の知り合いで、ここしばらくザラ邸に泊り込んでいるという人物、鮮やかな緑髪をウェーブにしたザラ夫人よりも少し若く見えるミズ・アマルフィが応接してくれた。

また、俄かには信じられなかった事だが、ミズ・アマルフィは既婚であり、また、息子さんもいたそうなのだが……、ザラ夫人と同じく、この戦争で亡くしているとの事だった。

「夫も、私も、二コルを……、息子を失ってから、心の中に大きな虚ができたように、埋め切れない損失感があります。……アスラン君やパトリックさんを失ったレノアさんも、きっと、同じような気持ちになっているのではと思って、夫と相談して、少しでも話し相手になれればと思って、泊らせてもらっているのです」

「そう、ですか」

……俺の立場が、敵味方問わず、アマルフィ夫人のような人を生み出す側であった以上、何も言えない。よって、その後は、俺以上に場慣れしているミーアに受け答えを任せ、ただただ、静かに黙して、耳を傾け、心中で頭を下げるだけに止めた。

主不在の居間で、アマルフィ夫人が耳さわりの良い声で語ったのは、一人息子を失った後のアマルフィ家の話だった。

アマルフィ家にとって、とても大切な存在が失われた後、自身が嘆き悲しむ間、旦那さんは何かに取り付かれたように仕事に没頭していた事、その仕事の成果を何者かに奪われてしまい、旦那さんが狂ったように憤激していた事、停戦と講和を良しとせず、最後まで、それこそ、連合を、ナチュラルを滅ぼすべきだと主張していた事、心労と過労で、心身のバランスを崩し、養生している事、そして、養生の中で狂態を晒していた我が身を振り返りつつ、より大きな悲劇に見舞われているザラ夫人を心配している事。

アマルフィ夫人の話を聞きながら、ふと、思う。

愛の反対は憎悪と言うが……、人は愛する者を失ったり、奪われた時、その愛情が深ければ深いほど、憎悪に身を焦がし、狂う可能性があるという事だろうか？

……一瞬、隣に座るミーアを失った場合、自分はどうなるだろうかということが頭を過ぎったが、馬鹿な事と一蹴する。

そのようなことを考えると際限がないし、それこそ、ミーアを籠の中の鳥にしてしまうような、一種の狂気に繋がるかもしれないからだ。

……愛って難しい、だなんて、普段なら鳥肌が立つようなことを考えていたら、ユウキが出てきた。

「話は、終わったのか？」
「ああ、話せる事は全て話した」

なら……。

「ミズ・アマルフィ、ミズ・ザラの付き添いをお願いできますか？」
「ええ、わかりました」
「兄さん、私も……」
「ああ、頼むよ、ミーア」
「うん」

ユウキと入れ替わる形で、二人が去り、残されたのは、ユウキ、アルスター、俺という、ザラ夫人との関係が比較的に薄い三人だ。

とりあえず、ミズ・アマルフィの話を聞いた後、ずっと顔を伏せて、沈黙しているアルスターは置いて、ユウキと話をする。

「お疲れさん」
「ああ、下手にＭＳに乗っていた時よりも疲れたよ」
「……だろうな」
「しかし、これで胸の痞えが取れたという気持ちもある」
「そうか」

確かに、ユウキの顔色は先程よりもマシになっていたから、それをネタに、少しガス抜き（からかい）をしてやろうとしたら、アルスターが顔を上げて、話しかけてきた。

「ねぇ、ラインブルグ、さん」
「ん？　どうしかしたか、アルスター？」
「前に言ってた、コーディネイターとナチュラル、この二つに、肉体的な差は大きいけど、精神的には何も変わらない、って言っていたけど、本当なのね。……さっきの話、まるで、私の事を言われているかと思ったわ」
「……そうか」

俺が応えた瞬間に、ユウキもアルスターがナチュラルだということを察したのだろう、こちらに何かを問い掛けようとしたが、目線で制する。

「その認識を世界に浸透させる事ができたら、コーディネイターとナチュラルの垣根は一段低くなるだろうな」
「……そうね」

もっとも、その垣根を意識して低くできる者は、コーディネイタ

ー、ナチュラル共に、極々少数であり、これがこの世界の現実である。

コーディネイターとナチュラルが対立しやすい今の社会を変革しようとしたら、地道に、今、アルスターが抱いた認識を、少しずつ浸透させていくか、両者の間に立つ存在、つまりは混血を増やしていって、両者の存在を混ぜ合わせて行くしかないという事だろうなぁ。

先程よりもほんの微かにだが、表情を明るくさせたミズ・ザラが、ミズ・アマルフィとミーアを伴なって出てくるまで、俺達は、ただ静かに、時を過ごしたのだった。

１０２　変転する関係　【Ｒ１５】（前書き）

※警告※

この話より【Ｒ１５】相当……【深夜の映画番組レベル＋α】程度の【性的な描写】が含まれますので、ご注意ください。

１０２　変転する関係　【Ｒ１５】

ザラ邸を辞した後、これから仕事を再開すると言うユウキと別れ、アプリリウス・ワンからセプテンベル・スリーへと移動して、途中でミーア馴染のマーケットで相変わらず高騰したままの食料品を買い込んでから、我が家へと帰ってきた。

当然の事ながら、我が家の食い扶持が多いお陰で、財布の中身はごっそりと……、いや、仕方がないとわかっているとはいえ、切ないものは切ないよなぁ、なんて風に順当に去って行った高額紙幣達との別れを名残惜しんでいると、止った車から降りたミーアが話しかけてきた。

「兄さん、おば様、今日の事が切欠になって、少しでも元気なるといいね」

「そうだな。まだ、引っ越しができるようになるまで、それなりに時間が掛かるだろうから、ちょくちょくと顔を出して、気を紛らわせてあげてくれ」

「うん、わかった」

我が妹分は本当にいい子に育ったと、内心で嬉しく思いながら、アルスターを含めた三人で荷物を降ろしていると、家の玄関から、留守番をしてくれていたレナが顔を覗かせた。

「あ、先輩、帰ってきたんですね。荷物、運ぶの手伝います」

「ああ、ただいま、レナ、助かるよ。それで、ラバッ……マユラの様子はどうだ？」

「少しは持ち直したみたいですけど、やっぱり、先輩がいないと、不安が大きいみたいですね」
「……そうか」

実は、先の戦闘で俺が保護したマユラ・ラバッツをオーブに送り届けるべく、軍事衛星港に帰港した直後に、外交部へと人物照会と帰国の調整を依頼していたのだが、一昨日になって、オーブ本国から、マユラ・ラバッツなる人物はオーブ国民にも国防軍にも存在していない、変な言い掛かりはやめて欲しい、との回答があったのだ。

外交部でオーブからの正式な回答書を受け取ってきたレナから、その非情な内容を簡潔に伝えられたマユラは、え……、うそ、でしょ、と小さく呟いていたが、手渡された公文書を読み終えた瞬間に、そのまま泣き崩れたのは言うまでもない。

そりゃ、信じていたモノというか、その国の為に命を懸けて戦っていたのに、その国から、自身の存在を全否定されるだなんて経験、誰もしたくないよ。

なので、マユラが受けた精神的な衝撃を少しでも和らげる為、また、錯乱してしまわないように気をしっかりともたせる為にも、いつか、ミーアにしたように、泣き崩れているマユラを強く抱き締めてやったのだが……、どうも、それで件の鬼畜な刷り込みが強化されてしまったらしく、涙ながらに、自身をマユラと呼んで、一人の人間としてここで生きている事を、存在している事を認めて欲しいと哀願されたのだ。

……どうしてこうなった？

と、思わなくはないが、一種、アイデンティティの崩壊と言えるようなことだけに、縋りつく対象が欲しかったんだろう。

というか、そもそも、停戦直後にオーブ本国へ正式な外交ルートを通じて問い合わせしまったのが失敗だったと、今ならわかる。

恐らくオーブ側は、地球連合に降伏した後になって、オーブの指導層に連なる人物達が？お姫様？の勢力に加担して、プラントと連合、双方に喧嘩を売った事実を隠したいのだろう。

なにしろ、オーブは本国が戦禍を被った事で荒廃している上、マスドライバーや一大企業であるモルゲンレーテを失った事もあって、経済もガタガタだから、復興させる為にも、どこからか、何がしかの支援が必要だろうしな。

そんな具合で、スキャンダラスな事実をひた隠す為に神経過敏になっている状況下に、俺が、そんなことにも思い至らず、のこのこと正式ルートで連絡を入れた事で過剰反応されてしまった、という感じだろう。

いや、その時は俺も、ラウを失った上にザラ議長が死んだって聞かされていたから、頭が回っていなかったんだ、と言い訳しても、最早取り返しがつかないことだよなぁ。

それでも一応は、身元確認の不手際について、俺の思慮が足りなかったという謝罪と共に、今度は俺の伝手……ラインブルグ・グループを通じて、アメノミハシラに問い合わせる事をマユラに説明したのだが、信頼が深かった反動なのか、もうあんな国、信じられないと言って、聞き分けのない状態に陥っている。

うぅ、まさか、こんなことになるとは……。

取り敢えずは落ち着くまで様子を見るしかないと考えているのだが、やはり、マユラに関わる一連の失敗があまりにも無様過ぎて、再度、内心で落ち込んでいると、三日前というか、帰還した翌日からマユラを心配して、我が家に泊まってくれているレナが俺を元気付けるように声を掛けてきた。

「先輩、マユラが今の状況に陥ったのも、ある意味、仕方がないことですよ」

「それは、まぁ、そうなんだがな……、なんというか、俺、冗談抜きに、人の弱みに付け込む鬼畜じゃないだろうか？」

「そんなのは、今更！　……なんですから、ちゃんと責任を持ってくださいね？」

「……はい」

笑顔であるはずのレナに、背筋が凍るような恐怖を感じるのは何故でしょう？

◇　◇　◇

今日もレナが泊まっていくことになり、食卓に見た目麗しい女の子が四人も集うだなんて華やかな夕食も終わった後、俺は我が家の自慢といえる代物であり、人が四人位は余裕で入れる日本式の風呂に入っている。これも生前の我が母が拘った逸品であり、仕事に勤め出してからは、心底から疲れを癒してくれる有難い物だ。

もっとも、今は、お年頃の娘さん達に優先権があり、今も四人が入り終わった後、わざわざ、お湯を換えて入っている状況である。

このお湯の張替えに関しては、経済的にも、資源的にも勿体無い為、別に同じお湯でもいいじゃんか、と俺は思うのだが、そこはそれ、女の子、特にアルスターとしては譲れない線なんだそうだ。

ちなみに娘さん方、特に、ミーア、レナ、マユラの三人は、三日前から昨日一昨日と、ミーアの部屋に集って、深夜遅くまで何やら色々とやっていたようで、こちらが驚くほどに急激に仲が良くなっている。

まぁ、同年代同士の仲が良いことはいいことだし、心弱って傷ついているマユラにも笑顔が見られるようになってきているのだから、大いに結構なことだろう。このままの調子でいけば、マユラも俺に依存しなくても大丈夫になるのも、そう遠くはないはずだ。

いや、正直に言えば、マユラも何気に女として魅力的なだけに、男としては、ちょっとだけ……、否、かなり惜しい気がしないでもないがな。

何しろ、救助後、エルステッドで初めてマユラと顔をあわせた際には、瞬間、見惚れてしまい、レナに背中を抓られたのは記憶に新しいからなぁって、……んんっ、とりあえず、マユラの事に関しては、ラインブルグ・グループからの連絡を待ってから、考えた方がいいだろう。

さて、頭を悩ますのはここまでにして、ゆったりと精神をリラックスできる貴重な場なんだから、刹那の一時を楽しもう。

そんな訳で、俺は今、洗い場でのんびりと、?きゃシャーが来る?なんて懐かしい歌を歌いながら身体を洗っている。

「ゆうひぃかがぁやくぅ、でんしんばしらにぃ、きゃぁつのかげぇ〜、きゃシャー、きゃシャー、きゃシャー、ちゃちゃっちゃちゃ、

きゃシャー、きゃシャー、きゃシャー、ちゃちゃっちゃちゃぁ～」

「あ、先輩、背中を流しますね」

「うん、頼むよ、レナ。……って、なんでここにっ！」

聞こえるはずのない声に驚嘆し、その驚きの余りに背後を振り返ると、脱衣所に繋がる扉を後手に閉めたレナが、生まれたままの姿で白磁の如き肌を余す所なく曝け出し、浴室の暖気或いは自身の緊張、それも多分の羞恥によってか、総身をほのかな桃色に染めていた。

普段は、制服やパイロットスーツで隠されていて、まずもって、直接、御目にかかる事ができない部分だけに、俺の視線がその全てを確認するように、舐め回すように動き回るのは仕方がないというか、男としての本能だろう。

いつも見ているレナの顔も湯気で霞んでいる所為か、香立つ女の色気が感じられるというか、こう、花の蜜に吸い寄せられる蜂のようにに引き寄せられるし、それより下の、本来ならまずは誰もお目にかかれない部分も、男を狂わせるような女の香気が漂ってきそうな鎖骨から顎に至る曲線やレナの身体に見合った滑らかな張りのある胸の膨らみ、胸と臀部を一層引き立たせる腰の括れ、引き締まっているものの筋肉が割れていることもない腹部、しっかりと上半身を支えている無駄のない腰から尻までのライン、女豹を連想してしまいそうな付け根から伸びる、しなやかでそれでいて肉感も有する脚線と、どれもこれも、俺の目を楽しませてくれる為か、吸い付いてしまって、離そうにも離れない。

付け加えれば、他よりも桜色に目立つ胸の頂点や、秘所を守る為のほのかな青い彩りも、ばっちりと見ています。

とりあえず、俺がまず言えることは……、我が息子が嬌声を上げながら、元気に跳び起きてきました。

「……」

「せ、先輩、そ、そんなにじろじろ見ないで下さいよ」

「い、いや、すまん。でも、ちょ、えっ？」

俺が混乱している間にも、レナの顔と全身が桃色から更に濃い朱色に染まって行くのがわかる。

「うぅ、タオルで隠せばよかった」

「いや、そんな、もったいない」

あぁ、自重していた本音が……。

「……本当、ですか？」

「ああ、本当……、じゃなくて！　レナ！　取り合えず、隠して！」

「え、えと、それなら、先輩が目を瞑るか、後ろを向いた方が早いような……」

「いやごめん！　それは男として無理っ！」

そんな俺の、男としての魂の叫びに、何か女として嬉しいものがあったのか、恥ずかしそうにしながらも、ニコリと人を魅惑する笑顔を見せた。

「よかった。……私、女として、見られていないのかと、ずっと、心配してましたから」

「い、いや、そんな心配は無用と言いますか、レナのことは、戦友でかつ相棒としての立場を優先して見ていただけであって、これまでも、十二分に女として意識して見ているからっ！」

「ふふ、そうだったんだ。……嬉しいな」

……あふぅ、だ、だから、そんな、男を蕩かす様な笑顔は駄目です！

思わず、手が出てしまいますっ！

ふらふらと、本当に何かの力で吸い寄せられるように、レナの身体に手が伸びて行こうとする。

……がっ！

今度は明らかに大きな音を立てて、浴室の扉が開いて……。

「はい、レナさん、そこまでっ！」

「お、お邪魔します」

そこから更なる衝撃ががががががっ！

「な、なななななななっ！」

「ふふん、兄さん、どう？　私も、ちゃんと兄さんが手が出したくなる位に、成長しているでしょ？」

「あ、アインさん。……えと、そ、そんなに見ないで下さい」

ミーアと、何故か、マユラまでもが、何も隠さず、裸で入ってきたっ！

「……うぅ、ミーアちゃん、予定よりも、かなりタイミングが早い」

「女の直感は信じなさいという、おば様の至言に従っただけよ」

レナ、ごめん。

お前の身体は本当に綺麗で、女としても十分過ぎるほどに魅力的だけど、男として、ミーアとマユラの身体にも引き寄せられるものがあるんだ。

……。

しかし、ミーアの裸を拝見するのは保安局に入る前あたりに、最後に一緒に風呂に入った時だったはずだから……、かれこれ、七年くらい前になるのか。

……。

な、七年の歳月って、大きいんだなぁ。

ザラ夫人の指導を受けてから、これまでも欠かしていなかった肌の手入れを更に入念にするようになった為か、そばかすもない顔に自信満々な笑みを浮かべ、両手を腰に当てて、えっへんとばかりに堂々と、身体を隠すことなく反り返っているミーアを見て、まず目が行ってしまうのは、十代という年齢を嘲笑うかのように、大いに存在を主張する双子山もとい二つの大きな隆起帯だ。

その大きいのに崩れることもなく、しっかりと屹立している姿は、

男として、最早、拝むことしかできない、なんてことはまずもって絶対にないが、とにかく、触れて、舐めて、捏ねて、吸って、揉んで、噛んで、摘んで、持ち上げてみたいです、エロい人っ！　……って、いかん、落ち着け、俺、興奮が過ぎているぞ。

だ、だが、視覚からの悦楽もとい情報を遮断する事など、できるはずもなく、瞬き一つすら惜しむ気持ちで、目が皿になったような感覚を覚えながら、更に視か……観察を行う。

日常では流しているパールグレイの髪をアップにまとめ、思わず吸い付き、痕を残すことで、これは自分のモノだと主張したくなる細い首筋や肉付きよく非常に柔らかそうな印象を受ける二の腕、そこから胸に至るまでなだらかに続くラインに鎖骨が窪みを作る事で、一層、大きな胸を引き立たせる凹凸を生み出し、更なる色気を感じさせてくる。

これもまた、ザラ夫人の細やかな指導により毎日の運動を行うようになった成果である、腰から尻に至る曲線は延々と撫で回したくなるというか、指先で弄びたくなるというか、舌を這わせたくなるというか、頬擦りしたくなるというか、とにかく、触りたいと思わせる肉感があり、さり気に手入れされていると思しき秘所帯は淡さが残っているが、それがまた、アンバランスな魅力が、男の欲望を刺激する威力がある。

そして、これまた素晴らしく、昔、肩車をしていた時からは想像できない、思わず自ら望んで挟まれたくなるような質感を持った脚線は、上半身との調和を見事に成り立たせている。

「……兄さん、私はまだ、妹、かな？」

「う、うぐ。……み、みーあは、り、立派な、女です、はい」

「むむむ、機会を逃さず、しっかりと先輩の認識を上書きするとは、流石はミーアちゃん、やりますね」

レナが何かを言っている気がしたが、正直、頭の中に入ってこない。

とりあえず言えることは……、我が息子が雄々しく立ち上がって、無言のまま、勢い良くピッチングして汗を流しながら、ファイティングポーズを決めております。

「うぅ、私が一番年上なのに……」

そんな嘆き声に導かれ、残った最後の一人、マユラに視線を移す。

「あっ、そ……、そんなに、じっとは……、見ないで、下さい」

ぐふっ、そ、その恥じらいが、また、ぐっと来るっ！

羞恥に悶える姿が、男心を擽ると言うか、初球で剛球な直球での熱球染みた死球を眼球に喰らったと言うか、とにかく、イイですっ！

そんな具合に内心で親指を天へと力一杯に突き上げて歓喜している俺の前で、全身を自身の髪の色に勝るとも劣らない紅色に染めて、諸手で身体を隠そうか隠すまいか迷っているマユラだが、身体全体がレナ以上のスレンダーさを誇っており、さり気にモデル体型といってもいいのではないだろうか？

そんな体型とショートの髪、どことなく勝気さを感じさせる顔立ちが相まって、マユラだけが持つ一種の魔性、レナやミーアにはな

い妖しい魅力を生み出している。

また、服を着ている状態では華奢に見えていたが、その実はＭＳパイロットらしく、しっかりと鍛えているようで、余計な贅肉は欠片も見当たらない。

そんな着痩せする身体つきや短い髪の所為で、他の同年代の女の子よりも?らしさ?と言うものが薄いかもしれないが、実はかなり我が侭な膨らみを持っている胸はこれでもかと言わんばかりに自己主張しているし、女としての肉付きだって十分に見て取れる。いや、むしろ、線の細さから、ミーアよりも大きく感じてしまいそうになる程だ。

更に加えて、きめ細やかな肌も、湯気や発汗の所為もあるだろうが、非常に健康的な色艶をしているし、全身の体毛が薄いというか、下の毛が存在していないのも、その、ちょっとだけ、俺的には、評価に値したりする。

むむぅ、本当に、こういうボーイッシュというか、マニッシュというか、とにかく、一種、中性的な魅力がある女の子も、しかも、恥じらいを見せる姿って、いいよねぇ。

「ほら、マユラさん、堂々とすれば、恥ずかしくないって」

「で、でも……」

「……なにも、そこまで無理しなくてもいいのに」

とりあえず言えることは、我が息子が、親父、もう、もう我慢の限界だっ！　頼む！　俺をっ！　俺をあの桃源へと征かせてくれっ！　って懇願している状態だ、って……、これは本当に、冗談ではなく、拙い状態だぞ。

下半身に存在する我が息子が熱く滾っている影響で大量に血流が回されている所為か、ちょっと、頭が冷えてきたような、スーとする状態なのだが、それでも、興奮は止まる事を知らないように、天井知らずで高まっていくようだ。

「ねぇ、マユラ。そんな身体を張らなくても、先輩は、ちゃんと今後の事を考えてくれるわよ？」

「でも、わ、私。……こんな短い間で、変かもしれないけど、今、感じている想いは、アインさんが好きっていう気持ちと、好かれたいっていう気持ちは、本当だから」

や、やはり、ここ半年の間、戦闘続きだった上、戦隊の仕事が多忙で時間や空間の制約等もあって、また、余裕ができたここ最近も、女性陣を泊めていただけに自重して、ずーーーーーーっと、己の性欲を処理していなかっただけに、真剣に、何か刺激を受けたら、非常に拙い事態に陥りそうだ。

「いいじゃない、レナさん。マユラさんの想いが？吊り橋？から……、極限から来た錯覚だとしても、そこから続いていくことだってあるかもしれないでしょ？　……人の想いを簡単に否定したら、駄目だよ」

「うっ、先輩のシェアを提案して、私の事も認めてくれただけに、反論できない」

「うふふ、私は独り占めをしない寛大な女なの、感謝してね。それよりも、レナさん、もっと、兄さんに私達が？女？である事をアピールしないと」

「そ、そうね」

あ、あれ、何だか、意識が……遠く……なってきた？

「って、先輩っ！　鼻血っ！」

「あ？」

ど、道理で……。

い、いや、待てよ？

これこそ……、この鼻血こそが、これを利用して、浴室から脱出し、一度、態勢を立て直せという、我が母のお導きに違いないっ！

「わ、悪いが、ちょ、ちょっと、鼻血の始末を……」

と言う事で、いきなり刺激が強すぎる素晴らしいものを魅せ付けられた影響で、腰が引けて、萎えている足腰に、何とか力を込めてっ、あ、あれ、倒れる？

「アインさん、危ないっ！」

「ッ！　ふぁぐうぼおぅぁぁっ！」

「えっ？　あ、つぃ？」

咄嗟にマユラが支えに入ってくれて、その柔肌というか、我が仮な膨らみというか、その頂にある硬くなった何かというか、とにかく、地肌と地肌が直接触れあった瞬間、常にない興奮から過敏になっていた神経を大いに刺激し、また、直接的にも、我が息子を張りがあり汗等で塗れたマユラの太腿に擦過され、自然、我が息子が強烈な咆哮をあげて、大噴火を起こしてしまった。

「ッぁ！」
「きゃっ！」

その何かを失う快感の為に、萎えていた足腰が急激に砕け、盛大に尻餅をつくと同時に、その勢いでマユラを巻き込みながら、仰向けに倒れ込む。

……俺の半身に圧し掛かるマユラの、自身が流す鼻血の鉄臭い臭いの中に混じる、男の獣欲を大いに刺激する女の汗と当人だけが持つ甘い匂いに翻弄され、汗か何かですべらかでいてしっとりしている肌や密着することで生まれる摩擦と、自身のものではない温もりというか熱さによって、全身の神経がおかしくなったかのように過剰反応させられて、電撃が走るような悦楽が続いているのに、まだ、更なる摩擦を求めるかのように無意識的に腰が反り返って、また刺激がっ！

あぐっ、打ちつけた、尻、と、背中の痛、み、に加え、だんだんと、の、脳髄が、焼かれて、凄まじい……虚脱感が、襲って来て、意識が……、だん、だん、遠のいて、いく。

「え、と、……いま、私の身……か……た、こ……いのって、もし……て、アインさんの……？」
「う……、は、初……、生で見た……、映像より、……り大き……
……う、勢……凄いし。……にまだ、止らな……」
「ねぇ、レ……ん。あ……い塊、……って、な……も、いい……？」

……もう、意識、手放して、も、いい、よね？

瞬間、悪戯、顔、で、微笑み、頷く、我、が母、の姿が、脳、裏を過、ぎったか、と思うと……、意識が……。

◇　凹　◇

そんなこんなで、三人に間に合わせの浴衣を着せられて、運び込まれたらしい居間のソファで仰向けに寝ながら、ずずーーーーーーーーん、と、長い人生で、これまでに経験した事がない程に重いモノに圧し掛かられて黄昏ていると、別のソファに座っていたアルスターが蔑みを込めた半目で……。

「……無様ね」

アルスターさん、今の言葉、何か、ドぐさぁっ、って、効果音が聞こえるくらいに心にクルよ?

「だいたい、何もしていないのに、手も出せないまま、暴発しただなんて、男として、恥ずかしくない?」

連続ヒット、アルスターが放った言葉の槍は、アインの急所を抉る。

おお、効果は抜群だっ！

「しかも、女の前なのに、興奮の余り、気まで失うだなんて、本当に……、醜態よね」

もう……、もう、やめておくれっ！

おいらのライフはもうゼロよっ！

「まぁ、冗談はここまでにして」

……じょ、冗談にしては、男の尊厳をガリガリとこそぎ取っていたような？

「三人から同時にアプローチされるなんて、ある意味、災難なのかもしれないけど……、果報者よねぇ」

「うぅ、その慰めも痛いです」

し、しばらくは放っておいてくれた方が回復できます。

「でも、暴発に関しては、キラも似たようなことになっていた覚えがあるし……、ねぇ、アレの暴発って、男の特徴なの？」

「む、むぅ、男の神経は極度の興奮というか快感に耐え切れないって聞いた事があるような気がするから、なんていうか、安全装置的に起きるんではなかろうか？」

さっきの俺の場合は、戦闘が続いて生命の危機というか、動物と

しての本能を刺激する環境が長かったというか、とにかく、性欲が増進するような状況が多かったのに半年も禁欲を続けていたから、ちょっとした刺激に過ぎないはずなのに、一溜まりもなかったよ。

なるほどなるほど、と頷きつつ、あの時はつい笑っちゃったけど、キラには悪いことしたわねぇ、なんて呟いているアルスターに問い掛ける。

「それより、三人は？」

「浴槽を洗うついでに、折角のお湯だから、もう一度入ってくるって、三人で入ってるわ。……案外、いかに自分をアピールすればいいかって、次に向けて、反省会でもしてるんじゃない？」

「……不安になるようなことを言わないで欲しいなぁ」

流石に、今度、似たようなことが起きたら、相当に耐えないと、自身の欲望を止める自信はないなぁ。

「ねぇ、それで、誰を選ぶつもりなの？」

「ノーコメントで」

ふ、ふふふ、俺は本来、意識して節制しなければ、相当に欲張りだからというか、アレだけの器量良しな子達から脳髄と本能を大いに刺激する見事な物を見せられた以上、誰も手放せるわけないだろうっ！

三人とも俺のもんだっ！

……だなんて、一匹の雄として、ほぼ全てが本音と言っても良い事を、カッコつけて主張してみたい気がしないでもないが、普通の反応だと、蔑まれるだけなので言わないでおこう。

「まさか、三人ともだなんて……、気が多い男ねぇ」

「え、何故にばれる？」

「え、嘘でしょ？　……あんた、それって、本気で言ってるの？」

なんという、見事な誘導尋問っ！

再び発せられる、さ、蔑みの視線が、俺を新たな世界へと導かんと、未開の地を切り開いて……。

「なんてことは、言わないから安心していいわよ」

よ、良かった。

「……えらく寛容だな。女性はこういう考えを嫌うと思っていたんだが？」

「そりゃ、何も知らなかったら、軽蔑してるわよ。でも、私も三人それぞれから、それなりに事情を聞いてるからね」

「事情？」

「あ……、んんっ、それは三人から直接聞きなさい」

「あ、ああ、しかし、事情って？」

「と、とにかく！　あんたは、三人から事情を聞いて、今後、どうするかを、しっかりと考えればいいのよ」

……むむ、なんだか、アルスターが年上の女性に見えてきたようなって、何故か、ギロリと睨まれ、げ、げふんげふん。

それはともかくとして、確かにアルスターの言う通り、三人が風呂から上がってきたら、先の風呂場の一件を実行した理由……その真意を聞く為にも、真面目に話し合う必要はあるだろうな。

なんて事を考えながら、ソファに再度身を預け、俺は三人の事を思い返した。

「……あんた、鼻の下、伸びてるわよ」

おっと、いかんいかん、キリっとな。

……しかし、さっき見たモノは、本当にいいものだったなぁ。

１０２　変転する関係　【Ｒ１５】（後書き）

※後書きの名を借りた言い訳※

今回の内容は、今後の話の展開上、一人の男の意識を不自然なく？盛大に転ばせる？為の描写が必要だったので、こういう仕様になってしまいました。

ですので、筆者としましては、表現や内容的に【Ｒ１５】に相当するだろうと考えているのですが、もしかすると【Ｒ１８】のガイドラインにある【性的描写】に引っ掛かるかもしれません。

よって、運営さんから？こいつは【Ｒ１８】だ？との警告が来た場合、にじファンから別の場所に移動する事になると思いますので、予めご了承ください。

それにしても、【Ｒ１５】と【Ｒ１８】の線引きって、具体的な例がないと難しいと思うのは、筆者だけでしょうか？

１０３　それぞれの行く先（前書き）

この話より先は、男にとって都合の良い、実に？けしからん話？となりますので、ご注意ください。

１０３　それぞれの行く先

Ｃ．Ｅ．７１年１１月１日。

今日、この日、対外的には講和交渉での駆け引きの一環として、内実的には戦力再編の為に、一年以上に渡って一つの部隊として活動してきた、ザフト宇宙機動艦隊所属第１３独立戦隊規模艦隊、公称、ラインブルグ隊が解隊された。

つい先程まで軍事衛星港内で行われていた解隊式では、国防委員会と機動艦隊から偉い人が出てきて、解隊にあたっての訓示を長々と行ったり、俺が隊長としての挨拶を時間合わせ的に短くしたりして、予定時間内で終了している。

で、今は衛星港内の食堂で送別会……戦隊最後の会食として、ちょっとした立食パーティをしている。

俺も戦隊の皆に挨拶して回った後は、例の如く、壁際でＩＴＩＧＯオレを飲みながら、ワイワイと馬鹿騒ぎをしたり、別れを惜しんで号泣したり、懲りずに踏まれて悦んでいたり、ここぞとばかりに食いに走ったり、機械談義で盛り上がったりと、それぞれが、それぞれのやり方で今の一時を楽しんみながら、一年に渡って共に過ごしてきた戦友との別れを惜しみ、また、再会を約束している戦隊員達を眺めている。

……本当に、戦隊から死者を出すこともなく、無事に、皆を解き放つことができることが、素直に嬉しい。

それに今日は、以前、戦隊に所属し、左腕を失ってザフトを除隊した、リベラも来てくれている。

もっとも、左腕に義手を身につけたリベラが挨拶に来た際に苦笑混じりに話した内容……、除隊時にプラント政府から与えられた義手の余りの不出来さを嘆き、慰労見舞金を使って自身の生活が少しでも便利になるようにと、色々と義手の研究をして製作していたら、それが今現在の悲しむべき需要と合致して、社会的に義手製作の第一人者として成功していまったという話には、どう反応して良いのか、困ったモノだった。

でも、一緒にリベラの話を聞いていたリーの奴が、涙目でうんうんと頷いていたから、きっと良かったんだろう。リーは、リベラにずっと負い目を感じていたみたいだしな。

……。

ラインブルグ隊に所属する隊員百四十九名の内、除隊する者は俺も含めて六十三名であり、残りの者達は、それぞれ、新しい部署に配属される事になっている。

ＭＳ隊に所属する十二名もほぼ全てが残留する事になっており、今後の軍の中核になるべく、役目を果たしていくことだろう。

ＭＳ隊の副隊長を務めていたガイル・マクスウェルは、ハンゼンを中心に新たに結成が予定されている戦隊の戦隊長、つまりは白服への昇格が決定している。

白服内定の話を受けた後、緊張してガチガチになりながら相談に来た時には、隊長は戦隊員の命を預かった上で、部隊行動の指針を

決め、有事の際には果断に決断を下す事とその責任を負う事が仕事だと諭しておいたが、自身の小隊に所属していた二人トマス・コリンとブルーノ・ボッカがＭＳ小隊長として付いて行くし、黒服に昇格して、ハンゼンの艦長と補佐役を兼ねる事になるガンドルフィ副長もいるから大丈夫だろう。

次にデファン……、フィデル・デファンだが、うちと同じく解隊することが決まったラヴロフ隊の隊長であり、現行主力機であるゲイツの改修を担当することになったイヴァン・ラヴロフが、機械関係に詳しく、また、基本的な操縦技能が高いということも評価して、テストパイロットとして引きこんだらしい。本人も機械関係に大きく関われる環境だけに喜びも一入のようだ。

また、デファン小隊に所属していた二人、アントン・モーリスとジュリアン・ジョンソンも、それぞれ、人不足が深刻化しているヤキン・ドゥーエ駐留艦隊と世界樹の種駐留艦隊に、小隊長として引っ張られることになっている。

そして、グエン・リーだが、ユウキから持ち込まれた戦隊長……、白服への昇格話を蹴り、自らＭＳ関係の教官になりたいと望んで、士官学校のＭＳ教導官に着任する事が決まっている。

そのリーの下、小隊に所属していた二人は、マクスウェルの元でヴォルター・ルッツが一つ残る小隊長席を、ディーノ・ベルディーニが様々な面で隊長を補助するＭＳ隊副官を務めることになっている。

……こうして考えてみると、マクスウェルの新設戦隊にラインブルグ隊のＭＳパイロットの半分が所属するから、ある意味、後継的な存在だな。

話を戻して、最後に女性陣だが、ビアンカ・スタンフォードとロ

ベルタ・フェスタは共に士官学校で、複座型の運用で培った経験を活かして、ＭＳ教導官となるリーの助教として赴任し、ＭＳ戦術論の構築や機体制御技術の指導、情報と通信関連の座学を担当することになったそうだ。

お互いに離されることがなくて良かったと、スタンフォードは照れながら、フェスタは嬉々と、俺に報告してくれたが、実は、二人が別々の部署に配属される事をユウキから聞き出したリーが……、って、まぁ、リー本人が知らぬ顔をしているし、ここは言わぬが華だろう。

で、会場の中、ラヴロフのゲイツ改修担当部隊のＭＳ管制官になるサリア・ベルナールと何やら話しているレナ……ヘレーナ・ラヴィネンだが、本国艦隊でＭＳ小隊長をという配属話を蹴ってザフトを除隊し、オーブに移住する俺に付いて来ることになった。

……。

例の風呂場の一件の後、リビングにおいてアルスターの立会いの下、飢えた狼《俺》が入っている風呂場に乱入するという、年頃の乙女として非常に大胆な事をした理由をそれぞれに問いただしたのだが、それがまた、三者三様で、俺としては納得できるものだった。

まずは、事の元凶というか、件の一件の発案者と名乗り出たミーアなのだが……、何でも、ザラ夫人が相次いで愛する人……夫と息子を亡くした事実を目の当たりにして、人がいつ死んでもおかしくないという事実を思い知らされたらしく、俺に自身の想いを明瞭に伝え、自分の事を妹ではなく、一人の女として認識させたいが為に行動に移したそうだ。

いや、確かに、ミーアが思い描いた絵図は物の見事に嵌り、俺はミーアが妹ではなく、女だという事を強烈に認識させられました。

本当に、あの大きく震えル山ハ、オモワズセイフクシタクナル、ミゴトナヤマダッタ、って、いかんいかん、我が息子が起き出してくる前に思考を切り替えないと危険だな。

んんっ、次にマユラだが……、これまで共に戦ってきた仲間がどのような状況あるかもわからない上、自身の存在を母国から公に否定されてしまった影響で、自覚できるほどに不安定な心理状態にあって、自分がマユラ・ラバッツとして存在しているという事を、また、存在してもいいんだと信じられる確固たるものが、自身の存在を支えてくれる寄る辺が、明確に見える形で欲しかったそうだ。

もちろん、女としてもアインさんに惹かれているし、好きであることも本当のことだっ、と、本人は断言していたが、マユラがそこまで追い詰められ、自身の身体を使ってまで寄る辺を求めているとは思いも至らず、俺としては猛省しなければならないと思った。

……が、その後に続いた証言から、ミーアの日常での言動、特に俺に対する信頼の上に成り立った自信に満ちた言動がその不安を煽り燻らせていたことに気付き、とりあえず、ミーアにはデコピンによる制裁を加えておいた。

まぁ、その力加減に関しては……、マユラをここまで追い込んだ一番の責任が俺自身にある事に加え、女として十分に魅力的なマユラをこのまま虜に、俺のモノにしてしまえばいいや、なんて正直な

己の欲望……、雄の根本にある雌を欲する獣欲が心底で目覚めているだけに、大いに差し引いて、形だけの弱いものだったけどな。

……フヒヒ、所詮、男なんて生き物の本性は、皆こんなもんさ、人の弱みに付け込む鬼畜でサーセンね、と、ここまで来た以上は開き直って、誰にも取られないように確保しながら、真に惚れてもらえるよう、男を磨こう、うん。

げふげふ、……そして、最後にレナなのだが、これがまた、本人にとっては非常に深刻な理由だった。

レナことヘレーナ・ラヴィネンは、第一世代コーディネイターを両親に持つ第二世代コーディネイターである。その為、プラント政府が成立した一昨年、少子化対策として正式に国策として採用した婚姻統制法と呼ばれる、トンドモ悪法が適応されているのだが……、まぁ、要するに、この婚姻統制法がらみの問題だ。

レナ本人から聞く所によると、本土防衛戦が終わって三日後、ラインブルグ隊に一週間の休養が与えられて、久しぶりに自宅に帰ったら、遺伝子が適合している相手がレナとの結婚を望んでいるから、結婚して子どもを産め、だなんて趣旨が書かれた通達をプラント資源管理局から受け取ったらしい。

……資源管理局が婚姻統制を管轄しているあたり、厭らしいと思うのは俺だけだろうか？

まぁ、プラント政府と婚姻統制に対する個人的な感想はまず置いておいて……、実際、暗い顔をしたレナから？きりきり結婚して子

どもを産めぃ？って内容が書かれた通達を見せられると共に、先輩……、私、婚姻統制で、もしかしたら、結婚しないといけないかもしれません、なんて事を駄目押し気味に付け加えられた瞬間、俺からレナを奪っていこうとする相手への明確な殺意というか、いらんことをした資源管理局とトンデモ悪法を潰す決意というか、とにかく、かなり強烈な負の類のものが俺から発せられたらしく、その場にいたレナ以外の三人を無用に怖がらせてしまったよ。

そんな空気の中、レナ本人は切り出した時の重い空気を一転させ、寧ろ嬉しそうに、相手は同じコロニーに住んでいるんですけど、人格的にも男性的にも、まったく好きではない、むしろ、大嫌いな部類に入る人なんです、だなんてことをのたまった。

うん、なら、ザフトの制服着せて、ヤキン・ドゥーエ宙域に放り出しておくから、相手の住所を教えてくれ、大丈夫だ、今ならまだ間に合うし、伝手もある、だなんてことを、極自然に口に出したのは、これまでの人生で初めての経験だったよ。

……ふっ、俺もまだまだ若いということだな。

その直後に、比較的冷静だったアルスターに拳骨でもって、思いっきり頭を叩かれて正気に戻らされただなんて俺の醜態は流しておき、要するに、レナは、法律に基づいて結婚して子どもを産めと、国から強制されたのだ。

もっとも、更に聞けば、この悪法にも良心的な誰かが付け加えた抜け道があって、他に遺伝子が適合している者がいる場合に限っては、選択する事が……、個人の意思を優先させることができるらしい。

そのことを知ったレナはエヴァ先生に連絡を入れて、俺の遺伝子と自分の遺伝子とが適合できるかを聞いた所、その答えは、俺の遺伝子がナチュラルと殆ど変わらない為、余裕で適合できるらしかった。

これこそが私と先輩を結ぶ運命の赤い糸なんですっ、と、レナは力説していたが、当初は俺に対して、自分の置かれている状況と遺伝子が適合する事実、そして、女としての想いをどうやって切り出して、変に誤解されないように伝えようかと思い悩んでいたそうだ。

そんな所に、俺からマユラ関連の用事を頼まれていた事を思い出し、また、自身も目に見えて不安定なマユラの事が心配だったこともあったから、こうなったら、俺の家に居着いて、その場の勢いで想いを伝えようと決意を固めていたらしい。

でもって、うちに泊まった最初の晩に、ミーアがマユラに囁いていた子悪魔の如き提案……、風呂場への乱入計画を耳にして、この計画こそが先輩の私に対する本心を知り、自分の想いを伝えられるチャンスだと考えて、自分も参加を表明して乗ることにしたとのこと。

そして、ミーアの主導の下、マユラの常識的な意見を参考に、レナが立案した、風呂場への乱入計画が一晩で計画され、速やかに実行される運びになり、結果、俺は多大な眼福と爆発するような興奮を得る代わりに、男の尊厳を大いに削り取られてしまったようだ。

……とりあえず、音頭を取ったミーアの頬を、あはは、こいつめぇ～、と、むぅむぅ、啼き出すまで突いておいた。

とはいえ、その時に至るまで、レナから向けられている明確な好

意に気付いていたのに、もし勘違いだったら、だなんて危惧を抱いてしまい、それまでの関係が崩れる事に恐怖して、気付かない振りをしてきた負い目があっただけに、それ以上は何もできなかったよ。

……普段、生を言っているくせに、いざという時に、ヘタレで、ごめんなさい。

げふげふん、……んでもって、話し合いの最後に、レナの口から、明確に、先輩の事が好きなんです、私もオーブに連れて行って下さい、と、はっきりとその口から告白されたのだ。

付け加えれば、マユラからは、私もずっとアインさんの傍にいたい、と、ミーアからも、私は昔からずっと言い続けているから、わかるよね、だなんて、同じような趣旨の言葉を頂きました。

いや、正直、風呂場と告白の順序が逆なのでは少しだけ思ったが……、普通の男ならまず経験できない、得難い経験をさせてもらっただけに、その思いもすぐに消えていったというか、それ以上に、オナゴから告白を受けたという事実に……、この二十数年以上もの間、ミーアがまだ妹的な存在だった時は別として、オナゴに好かれるなどという良縁が無かっただけに、天に羽ばたく程に嬉しかったのだ。

しかも、三人から同時に受けたもんだから、もう、今すぐ死んでもいいって思うくらいに、有頂天になってしまっていたんだよ。

だから、つい調子に乗ってしまって……。

「三人の気持ちは有難く思います。でも、正直、三人とも魅力的過ぎて、一人だけを選べないというか……、いや、もうっ、お前ら全員っ、俺の女だっ！」

……なんて自らの本音を堂々と宣言してしまった。

そんな現代社会的に最低な答えを出した後に、非常に拙いことを言ってしまったことに気付き……、せめて、もっとオブラートに包んだ表現で……、誰もが魅力過ぎて選べないから時間を置きたいと言うべきだったと、後悔しつつ、これで俺は生涯独身確定か……、等と真っ青になってしまったのだが、何故か、三人が三人とも怒り出すようなことはなく、一目でわかるほどに、物凄く、ほっとした表情を浮かべると、お互いによかったよかったと晴れやかな笑顔を向け合っていた。

その不可解な反応を不思議に思って、おそるおそる、俺、三人の中から一人を選ばなくてもいいのか、なんて、とてもデリカシーに欠ける事を口に出してしまった。

対する答えだが、三人揃って大きく頷きながらも口を揃えて曰く、元々、独り占めするつもりはなかった、それよりも、全員が想いを受け入れてもらえ、誰も俺を失わなかった事実が嬉しい、とのことだった。

な、なんて、男にとって都合がいい話だ、まったくもって、実に、

けしからんっ！

けしからん、けしからん、今の社会に喧嘩を売る、本当に、けしからん話だぞっ！

なんてことを心の中でお題目に唱えながらも、鼻の下を緩めたのは仕方がないだろう。

でもね、男というか雄って存在は、基本、みーーーんな、こんな生物だと思うんだ……。

誰かへと言うよりは、自らの良心と社会通念へと心中で、必死になって言い訳の言葉を紡いでいたら、遂に長きに渡る禁を破ったらしく、休憩室では許されている無煙タバコを咥えたゴートン艦長が声を掛けてきた。

「今日までお疲れさんだったね、ラインブルグ君」

「いえ、ゴートン艦長。こちらこそ、これまで本当にお世話になりました」

ゴートン艦長もザフトを除隊し、以前、務めていた商船会社の伝手で、火星往還貸客船の船長への就職が決まっている。きっと、飄々としながらも常に安全な航行を約束する、素晴らしい船長になることだろう。

「これで、皆とも、エルステッドとも、お別れだねぇ」
「まぁ、それぞれが新しい道を歩き始めると思えば、良い事だとも思います。それに、エルステッドも廃艦になる訳じゃないですから、また、見ることができますよ」
「うん、そうだね」

戦争開始当初からずっとお世話になってきた【ＦＦＭ－１１３】エルステッドは、前線から退き、士官学校の教習艦として、プラントを守る次代を育てるという大切な役目が待っている。これからも出戻る形となるフォルシウス艦長の元、多くの人材を輩出していくはずだ。

「リュウ副長は世界樹の種駐留艦隊で艦長を、トライン君は再編中の本国艦隊で副長を、アヤセ班長も防衛隊に移って、司令部の情報管制室で副室長をやることになったし……、うん、皆、それぞれの場所で頑張ってほしいねぇ」

ちなみに、ハンゼンの自称？男前？班長達は、エンリケがエルステッドで、ジェルマンがハンゼンで、それぞれ副長を務める事になっている。なんでも、こいつらは野放しにするのは危険だと、フォルシウス艦長とガンドルフィ副長が判断してのことらしい。

「ラインブルグ君、精神的には苦しい日々が続いたけど、本当に君に出会えて良かったよ」
「こちらこそ、ですよ。ゴートン艦長がいなかったら、俺は隊長なんて仕事、放り出していました」
「はは、そう言ってもらえると、嬉しいよ。……うん、また、会える日が来るのを楽しみにしているよ」
「ええ、俺も、その日が来るのを楽しみにさせてもらいます」

ある意味、最後の締めとなる敬礼を互いに施しあった後、しっかりと力強く握手して、ゴートン艦長はいつものように飄々と去っていった。

……俺も、あんな風になれたら、いいなぁ。

そんなことを思いながら、終わりの時間が来るまで、これから殆ど会う機会が無くなるであろう会場の皆の顔を目に焼き付けた。

１０４　混沌への序曲

戦隊が解隊しても、まだまだ残務処理が残っており、戦隊を立ち上げた時と同じく、アプリリウス軍事衛星港内で一部屋借り上げて、恋人の一人となったレナと共に書類と格闘する日々である。

いや、今月頭の解隊までは、ザフトに残る連中の異動希望と配属先とのすり合わせや除隊者の慰労金支払い手続き等で忙しかったから、他の諸事が後回しになっていたのだ。その為に、俺の補助を担うレナまで巻き込んで、除隊するのが少しだけ先に延びてしまった。

とはいえ、地球圏の状況は落ち着いているとはいえない為、まだ、民間人の出国が認められていない事もあり、特に問題はなかったりする。

加えて、ユウキからも、精々、給料泥棒をしていけばいい、なんて有難い言葉をもらっているので、現在の空白期間を戦争という一種の非日常から以前の日常生活に戻る為のリハビリ的な期間と考えて、未だに緊迫しているザフト内の空気を他所に、定時上がりでのんびりとさせてもらっている。

まぁ、だからといって、色呆け……、ミーア達とイチャイチャしている訳ではない。

家に残っているミーア、マユラ、アルスターの三人は引越しの準備……、アメノミハシラに持って行く物の選別や荷造り、家の清掃、ご近所や知り合いへの挨拶回り等で忙しいし、俺の専属秘書と化しているレナも言わずもがなである。

……要するに、人様に、特に未恋で無妻男共に自慢したいが表立ってはできるものではない、レナ達との関係だが、何かが大きく変わったというわけではないということだ。

例えば、レナと同じ部屋で仕事をしていたとしても、フィクションでありそうなオフィスラブに興じているなんてことは、これっぽちもなく、至極、真面目に仕事に取り組んでいる。

つか、そもそも、まだ、誰にも手を出していない。

いや、別に俺がヘタレている訳では……、何となく、そういうムードにならないってことは、ヘタレているのだろうか？

だが、実際、俺がやっていることといえば、レナが仕事をしている姿を眺めていて、極稀に、それに気がついたレナが、仕事をして下さいとの言葉と共に怒る前に、もう仕方がない人だなぁ、的に零す華やかな笑みに、精神的な充実感を得ている位かなぁ。

……。

うーむ、こう考えると、あの浴室での目も当てられない大興奮状態に陥っていたのは、俺の姿を借りた他人だったんじゃないかって、自分でも思うくらいだ。

本当に、こうも直接的に手が出ないのは、戦争が落ち着いて、生命の危機を感じなくなったから性欲が減退している為だろうか？

それとも、他人よりも老成してしまっているであろう精神が、共に在ることから来る精神的な充実感を得る方に重点を傾けているためだろうか？

……健全な男としては、今後の課題だな。

って、なんか今、急激に、練乳ワッフルみたいな甘いものが、食べたいような、食べたくないような……、そんな気がしたような気がしないでもなかったが……、別に、他にも甘いものがあるから、ワッフルに拘らなくていいや。

そんなわけで、地球連合軍による地球軌道の封鎖が一部緩和された為に、再び、市井の者も手に入れられるようになった一口チョコ……常日頃から、非常食として隠し持っている中の一つを、口に放り込んでっと、……うん、久しぶりに食べたけど、天然物は高いだけあって、美味いなぁ。

「もー、先輩、チョコなんて食べて、サボってないで仕事をして下さいよ」

「いやいや、俺、真面目に仕事しているよ？　ほら、解隊が終わって、後は除隊するだけなのに、何故か、ユウキの奴から送られてくる講和交渉や地球情勢に関する報告書」

「ッ！　そ、それって、特級の極秘じゃないですかっ！」

「だよなぁ。……まったく、いちいち焼却処分しないといけない、俺の身にもなれってんだ」

ちなみに、俺からも報告書を読んで抱いた自分なりの見解を書いて、一応はユウキに送り返しているが、まぁ、これからもザフトで頑張る同期への義理と給料分の仕事（笑）って奴かね。

「……先輩、本当に、ザフトを辞められるんですか？」

「心配するな、十二月の頭か、遅くても今年一杯で辞められる予定

だ」
「本当に、ですか？」
「ああ。……レナ、そんなこと言ってもさ、そもそも、アメノミハシラに移住しようにも民間用航路がまだ開放されていないんだからさ、焦っても仕方がないだろう？」
「確かに仕方がないかもしれませんが、何となく、このままだと、抜けられないような気がして……」
「大丈夫だって、つか、そんなカリカリしているのは、疲れて、糖分が欠乏しているからじゃないか？」
「べ、別にそんなこと、ないですよ？　ちょっと疲れている私も、久しぶりにチョコが欲しいだなんてこと、全然、思ってませんよ？」

とか言っているものの、俺が？魔法のポッケ？から新たに取り出したチョコ、白いからホワイトチョコだな、それに目が行っているあたり、わかりやすい。

レナも女として、カロリーを気にしているのかもしれんが……、あのスタイルなんだから、そんな心配、無用だと思うんだがなぁ。

「本当に、欲しくない？」
「ほしっ……くないです」
「なんか、無理してないか？」
「そ、そんなこと、ないですよ」
「久しぶりのチョコなんだろう？」
「……まぁ、せ、先輩がどうしても、って言うなら」
「いやいや、俺も流石に、そこまで無理強いはしないって」

チョコを巡って、ここまでやり取りをするのは馬鹿らしいかもしれないが、これも平和になった証左だし、当事者……、特に俺が楽しかったりするから構わないだろう。

「レナが素直に、先輩、チョコが欲しいです、って言えば、すぐにあげるって」
「ッ！」
「……ほれほれ、素直になれって、甘いぞ、美味いぞ、カロリー半分だぞ？」
「せんぱ……、異議有りっ！　非常食として持っているはずなのに、カロリー半分はおかしいですっ！」

ばばんと、効果音がなりそうなレナの糾弾は、まったくもって、その通りです。

「いや、レナが素直になれる魔法の言葉のつもりだったんだが？」
「む、むぅ、ちょっと当たってるだけに、悔しいなぁ」

後、一押しかな？

「ほら、今、素直になるなら、特典もつけるぞ」
「……特典？」

……どうやら、特典と言う言葉に興味が移った様子。

「どうする？」
「じゃ、じゃあ、……先輩、チョコが欲しいです」

どことなく恥ずかしげだったが、ちゃんと言ったので、特典をつけることにしましょう。

特典を提供する為、チョイチョイとレナを手招きすると、首を傾げながらも、可愛いワンコのような感で、素直に従って近づいてく

る。いつも以前より性格が悪くなったなどと揶揄しているが、本質は出会った頃から変わっていないようで、まだまだ素直で、可愛いと思う。

「先輩？」
「はいはい」

そんなわけで、チョコの包装を解いてっと。

「ほれ、口を開いて」
「え、えと……、これが特典なのかという、ガッカリ感が少しだけあるといいますか、何か、子どもみたいで恥ずかしいんですが？」

な、なんと！

この特典が気に入らないと！　子どもみたいで恥ずかしいと申しますかっ！

……むむ、ならばっ！

「いいから、ほれ、あーん、しろって」
「……あ、あーん」

……今、レナが薄目でこちらを窺いながらも、小さく口を開いたんだけど、何か、ぐっと来たわ。

とりあえず、指先に摘んだチョコをレナの口に……。

「はぐっ？」

……運ぶと見せかけて、自身の口に放り込む。

「う、うわ、先輩、ひどっぅむぅっ！」

そして、ちょっと強引に抱き寄せたレナの唇を己の唇で塞ぎ、半開きだった口内に舌先と共に速くも溶け始めたチョコを押し流し込む。

ついでに、驚きで固まっているレナをリラックスさせるためにも、レナの舌にご挨拶した後、チョコを間に挟んで、絡めるように舌を動かす。

……ああ、何か、レナの唾液とも絡まっている所為か、チョコが常に無く、甘く感じるなぁ。

そんな思いを抱いていると、瞬時に色白な肌を真っ赤に染め上げたレナが、拙い動きだが、それでも俺の動きに合わせるように、恐る恐る、舌で応え始めた。

それからしばらくの間、……具体的にはチョコが消えてなくなってからも、ちゅるくちゃ、にちゃくちゅ、ぴちゅくちゅと、いつの間にか俺の背中に手を回して身体を固定し、頑張って対抗しようとするレナの舌を弄びながら、歯茎や舌の裏等をじっくりねっとりと舐め回していると、突然、レナの身体がビクリと跳ね、こわばりが

解けると、こちらに全身を預けるような形で崩れてきた。

なので、レナの唇から己の唇を離してみると、……唇同士を繋ぐ若干白い粘性の糸が伸びて、俄かに途切れた。

一瞬、それに気を取られてしまったが、改めて、レナの様子を窺うと、顔中を紅く染めて、また、ぼんやりと熱に浮かされたように薄目を開いた状態のまま、唇の端から互いの唾液と溶けたホワイトチョコを零しながら、時折、痙攣染みたひきつけを起こしていた。

……むぅ、手ずから食べさせるのが子どもみたいで嫌だと言うから、大人風にアレンジしてやってみたんだけど、やりすぎたかなぁ。

あれ、そういえば、チョコを食べさせている間、レナの奴、呼吸をしていなかったような？

少しだけ焦り気味にレナの呼気を確かめると、ちゃんと呼吸している事が確認できて、ホッとする。

で、ぼんやりと虚ろに意識をどこかに飛ばしているレナなんだが、そのまま放り出して放置するのは酷すぎるから……、とりあえずは、部屋備え付けのティッシュで口周りを拭き取って綺麗にして、また、自身の口周りも拭いた後、ゆっくりとレナの身体を反転させ、後から抱きすくめる状態に移行して、自身の椅子に腰掛ける。

うん、レナの意識がはっきりするまで、この体勢でいこうかな。

胸の内に好きなオナゴを収め、存分にその柔らかさや香りを味わ

え、更には両手で男にはない膨らみを好きなだけ弄れるという自身の仕事に満足した後、頭の中を切り替えて、ユウキから送られてきた講和に関する情報を思い出す。

戦争の後始末……、プラントと地球連合の講和交渉は、ゆっくりとだが、確実に進んでいるようだ。

今の段階でも、プラントにとっては最大の目的であった独立を、ジェネシスの破棄と引き換える形で確保できているし、Ｌ５及びＬ１宙域をプラントの領域に……、管轄下に置く事にも成功している。

もっとも、その分だけ、地上における占領地と軍事基地の無条件放棄を飲ませられているし、プラントコロニー群割譲の代価を、旧プラント理事国への関税優遇措置でもって、充当していくことも取り決められている。

それらに加えて、双方が賠償請求権を放棄することや、一部戦争犯罪に関しては国際法廷を開く、といった基本的な合意が得られているとのことだ。

で、今は、残る最大の問題として、安全保障……、保有兵力に関する問題が焦点となっているらしい。

そして、この保有兵力を巡って、地球連合内で、対プラント最強硬派である大西洋連邦と比較的に穏健的な立場を取るユーラシア連邦や大幅な譲歩も視野に入れている東アジア共和国との間にごたごたが、不協和音が起きているそうだ。

……報告書の片隅にあった、ユウキが自ら書き添えたと思われる、

俺達同期、その一部のみが知る暗号文によると、カナーバ議員がユーラシア連邦と東アジア共和国相手に個別交渉を秘密裏に行っている、とのことだから、恐らくは、連合内というか、世界で一番の強国である大西洋連邦との離間を狙っているんだろう。

むぅ、これが上手く成功したら、カナーバ議員は地球連合と大西洋連邦にとって、災厄をもたらす？魔女？になるな。

……。

魔女ルックのカナーバ議員か、何か、似合ってるかも。

って、馬鹿なこと考えていたら、俺もカナーバ議員に？マジック？を掛けられてしまうかもしれないから、ここまでにしておこう。

んんっ、そんな交渉の席の外でも、地球連合内というか、旧プラント理事国である三大国では問題が多発している。

まず、大西洋連邦に焦点を当てると、今月に入ってから、一昨年、併合した旧南アメリカ合衆国に駐留している大西洋連邦軍が、ある一人の男の主導によって武装蜂起した旧南アメリカ合衆国軍と激戦を繰り広げているのだが、それの鎮圧に手間取っているらしい。

しかも、今週に入っての事なのだが、赤道連合に亡命していた旧南アメリカ合衆国の前大統領が帰国し、地元市民の熱狂的な支持と支援を受けて、ブエノスアイレスにおいて暫定政府を樹立。同時に国家再建の宣言と旧合衆国軍を国軍として正式に認定した為、旧……、いや、南アメリカ合衆国軍の勢いは増すばかりで、装備に勝る大西洋連邦軍を各地で打ち破っているそうだ。

また、国内でも、社会を支える基本インフラの一つである電力関連で、多様な発電所を建設する事でリスクの分散を推進していた大

西洋連邦経済界の雄であるアズラエル財閥が、何故かはわからないが、ヤキン・ドゥーエの最終戦でカリスマ的な総帥を失った為、俄かに後継者争いが発生したらしく、酷い混乱状態に陥っているらしい。その結果、発電所の新規建設計画が幾つも流れてしまっているらしく、経済状況にも重い暗雲を落しつつあるようだ。

次に、東アジア共和国だが、先のアラスカ戦において、ユーラシア連邦と共に守備隊を担っていた派遣軍が、ザフトの新兵器ではなく、地球連合軍上層部が秘密裏に仕掛けたサイクロプスによって壊滅させられたという事実と地球連合は大西洋連邦の傀儡に過ぎないとする風評が、ここ最近になって市民の間に急速に浸透し、戦闘が下火というか静まった影響か、反プラントよりも、反地球連合、反大西洋連邦の声の方が大きくなってきているらしい。

同時に、地球連合に所属していながら犠牲を出すばかりで何の権益も確保できなかった政府への不満も大きく高まってきており、その動きに併せるかのように、共和国内で分離独立を求める勢力が四月馬鹿からの復興が遅れている地域において活動を活発化させていて、市民社会に不穏な空気が広がっているそうだ。

最後は、ユーラシア連邦になるが、ここもまた、先の東アジア共和国と同じく、アラスカ戦の真相と地球連合の悪評が市民の間で広まって、反地球連合、反大西洋連邦の声が強くなっており、唯々諾々と地球連合と大西洋連邦に従うだけだった連邦政府に対して、離脱を希望する加盟国が出てきているらしい。

特にその動きは西ユーラシア地域において大きく、欧州に位置する諸国は俺の”前世”にあった欧州連合のような組織を立ち上げようとしていたり、中東各国は汎ムスリム会議（※注１）へと流れる動きを見せるなど、中央にあたる連邦政府を刺激して、大いにきな臭くなってきている。

また、その影響から、アフリカ共同体やスカンジナビア王国、旧

インドを中心とする赤道連合（※注2）といった周辺国は飛び火を警戒して、神経を大いに尖らせているそうだ。

……。

この三大国の混乱、？魔女？の影がうっすらと見えるような気がするなぁ。

おっと、？魔女？はどこで見聞きしているかわからないから？魔女？なんだし、静かにしていないと、俺も怖い目に合いそうだから、黙っておこう、……というのは冗談で、真面目な話、かなり取り扱い注意な話だから、レナ達には黙っておかないとな。

……おっ、レナが目を覚ましそうだ。

「……ん、せんぱい？　あ、んんっ！」

いかんいかん、手に力が入りすぎたか？

「っと、すまん。……で、大丈夫か、レナ？」

「……」

あれ、返事が無い所を見るに、無理をさせすぎた所為で、ちょっと調子が悪くなったのかな？

「すまん、レナ、ちょっとやりす「……ちょこ、もういっこ、たべたいです」……そうですか」

……どうやら大丈夫みたいだし、ここは呆けてあどけなく、それでいて色気を感じさせる顔を晒しているレナのご期待に応えることにしましょうかね。

以下は注釈と言う名の捏造

※注１　汎ムスリム会議の領域（現時点）について
原作と異なり、中央アジア南部地域＋パキスタン＋アフガニスタンとなっている。

※注２　赤道連合の領域（現時点）について
原作と異なり、東南アジア地域＋南アジア地域（インド以東＋セイロン島）となっている。

１０５　去る者、来る者

Ｃ．Ｅ．７２年１月３日。

プラントと地球連合との講和交渉は相変わらず断続的に続いているが、既に双方が合意して確定していている内容については、一部が施行されている。

これは講和を結ぶ為に必要な相互信頼関係を構築する一環として行われる、段階的な和平プロセスという奴で、先年十一月に行われた、地球軌道の一部封鎖解除も、ザフトが戦力を目に見える形で削減した結果、もたらされたものである。

これと同様に、十二月からは地球からプラントへの移住を希望する難民の受け入れが始まっており、連日、宇宙港には、何とも複雑で形容しがたい表情をしたコーディネイター難民が続々と到着している。

……まぁ、四月馬鹿で自分達の日常と生活環境を破壊し、ただ、コーディネイターということで、時に隣人や社会から陰日向に迫害を受けたり、命の危機を感じさせられたりするだなんて、自分達に多大な迷惑を掛ける原因を作った連中を頼らないといけない、彼らの心中を考えると、そういう顔になるのもわかる気がする。

この地球出身者とプラント出身者との温度差が、プラント社会に新しい軋轢を生み出すのは間違いないだろうな。

もっとも、それは今後、プラントに住まう者達が自分達で解決すべき問題なので、俺の中では棚に上げておくとして……、プラント

政府はこの難民の受け入れが始まったことに伴なって、航路に一定の安全が確保されたと判断し、民間人の中立国への渡航制限を解除し、併せて、民間船舶の航行制限も目的地が中立国に限り、解かれる事となった。

つまり、俺……、俺達は、プラントを離れ、オーブの宇宙ステーションであるアメノミハシラへと移住する日を迎えたということだ。

そんな訳で思い出深い品や愛着ある物全てを黒犬マークの運送業者に頼んで運んでもらい、最低限の生活用品しか残っていない我が家を眺めながら、何かと忙しかった先月の事を思い出している。

十二月中は、アメノミハシラにいる親父と連絡を取り合って、我が家と母の墓の管理をどうするかといった事の話し合いや六人分の入国手続き並び四人分の永住及び市民権の取得申請に関わる事で前もって進められる事の代行をお願いしたり、夜中、いつの間にか俺の寝床に侵入している、着古した俺のパジャマを身に着けたマユラを毎朝抱き枕にしていたり、出国及び移民申請手続きや戦隊に関わる残務処理やユウキから送られてくる軍制改革案に目を通して意見書を送り返す傍ら、ザフトを除隊する為の手続きを進めつつ、実は籍が残っていた保安局に退職届けを出したり、日中、仕事の合間に日常化してしまった、ちょこブレイクをレナと楽しんだり、ミーアとレナが家族に別れの挨拶をするのに同行して、キャンベル家の対応には怒りと悲しみを、ラヴィネン家の対応には気恥ずかしさと恐怖を味わったり、俺が風呂に入る度に乱入してくるのが癖になったミーアに毎晩背中を流してもらったり、逆に背中を流したり、髪を洗ったりしてやって、一緒に湯船に浸かったり、マユラを良く知る為の身上話で、幼少時にモルゲンレーテの技師だった父親をヘリオポリス建設中に起きた事故で、十代前半で片親で育ててくれた母親

も変異型Ｓ２インフルエンザで亡くしている事実を知ったり、例のレナを嫁にと望んでいた相手が我が家に乗り込んできたので懇切丁寧に対応していると、いきなり怒り狂ってＯＨＡＮＡＳＩを望んできたから存分にＯＨＡＮＡＳＩをしてやったり、その勘違い男がＯＨＡＮＡＳＩ前に家の窓ガラスを割りやがったので、器物破損で知り合いの保安局員を呼んで預けようとしたら、何故か、わらわらと集ってきた元同僚たるセプテンベル市の未恋染みた無妻保安局員達と肉体言語で会話する破目になったりと、そんな具合に忙しく過ごしていたのだが、いやはや、時の流れとは速いものだ。

……。

本当に、いつの間にか、俺がここで生まれ育って、二十五年にもなっていたんだから……、早いよなぁ。

最初に母と父と俺がいて、母が逝ってから父と二人になって、父も離れて俺独りになって、ミーアが居着いて二人になって、アルスターを預かって三人、マユラを保護して四人、レナが来て五人。

……ここ一年で加速度的に増えたのは御愛嬌かな？

「兄さん、もう、いいかな？」

「ん、ああ、いいよ」

俺がここまで育つ場を提供してくれた我が家は、父との話し合いの結果、父の知り合いである弁護士に家の諸権利を維持してもらいつつ、プラントに移住してきた難民が新しい生活を再建するまでの一時的な仮宿として、無償で貸し出す事に決まった。

その運用に関しては、その弁護士とセプテンベル市行政局に委ねることになるが、両者から定期的な報告を受ける事になっているから、大丈夫だろう。

まぁ、これも、先の戦争に関わった俺自身の贖いというか、一種の自己満足と言う奴だな。

……。

さて、自身に区切りを付けるためにも、世話になった我が家に、最後の挨拶をしていこうかな。

「今まで、ありがとう。……これからも、よろしく」

万感の感謝を込めて囁き、次に来る人を支える土台になるように祈る。

……って、ミーアがいたのを忘れてた。

何となく、子どもっぽい、恥ずかしい所を見られた気がして、誤魔化すように声を出す。

「さ、さて、ミーア、行こうか」

「……ん、ちょっと、待って。……今まで、私の帰る場所に、私が私でいられる場所になってくれて、ありがとう。これからも、私みたいな人達の支えになってください」

……。

「ミーア、行こう」

「うん」

……最後にもう一度だけ振り返り、その姿をしっかりと目に焼き付けた後、皆が待っているであろうアプリリウス中央国際衛星港へと足を向けた。

◇　◇　◇

「いやぁ、楽しみだねぇ。本当に、実に楽しみだっ！　俺ぁ、もう、昨日から、興奮しすぎて眠れなかったよ！　いったいどんな場所なのか、いったいどんな開発をさせてくれるのか、どんなものを触らせてもらえるのか、どんなものを弄らせてくれるのか、もう、色々と考えすぎちゃって、こう、めくるめく機械弄りと設計の日々を想像するだけで、全身がエレクトするような感覚におそわれっちゃってさぁ、もうっ！」

俺の前で興奮状態に陥っているのは、やはり、これまで常日頃から着用しているツナギを、本人曰く、降ろしたてのまっさらな新品を、今日も着ているシゲさんこと、シグルド・ティーバだ。

実は、ＭＳ以外にも機械技術関係に強く、コーディネイターを特別視する事もナチュラルを蔑視する事もせず、人格もこなれて信頼できる上、マッド的な技術者気質を備えつつも現場運用や実用性を重視するという、抜群なバランス感覚を持つシゲさんをラインブルグ技術研究所にスカウトしたのだ。

「おい、少しは落ち着かんか、馬鹿者」

「あふんっ」

また、そんなシゲさんの尻を蹴り飛ばしたのはエヴァ先生こと、エヴァンジェリン・ローズだ。

……何故、この人がここにいるのかと問われれば、少々、答えに困ると言うか、俺もわからなくて首を傾げている。隣に立っているレナも俺と同じような疑問を抱いたらしく、エヴァ先生に質問する為に口を開いた。

「エヴァ先生、ここってアメノミハシラ行きの待合ですけど、旅行にでも行くんですか？」

「いや、貴様らと同じく、オーブへの移住だ。古くからの友人がアメノミハシラの医者の手が足りんと言うから、雇われてやったのだ」

「へぇ、そうなんですかぁ」

等と、レナは素直に感心しているが、俺をチラリと見たエヴァ先生がニタリと笑ったのを、俺はちゃんと見ていたりする。

……まさかというか、自意識過剰だと思うが、いつか言っていた、俺を観察する云々なんだろうか？

そのうち、本当にモルモットにされそうでちょっとだけ怖くなったが、慣れぬ場所に新しく移り住む中で、見知った顔が一人でも多いのは有難いことだけに、心強いと思うことにした。

「それよりも、ラインブルグ、随分と大所帯じゃないか」

「はは、色々と訳有りでしてね」

「そうか、なら聞かないでやるから、換わりに私の所に定期健診に来るようにな。……これが連絡先だ」

「……解剖しないでくれるなら、行きますよ」

「何、解剖するのは最期にしてやるから、安心しろ」
「いやいや、全然、安心できませんって！」

本当に、有言実行の人でもあるエヴァ先生なら、マジでやりかねないから困る。

「ふん、男の癖に、肝っ玉が小さい奴だ」
「いやいやいや、生死が懸かっていたら、誰だって、そうなりますって」

エヴァ先生は俺の言葉を聞いて更に笑みを深くするが、それ以上の突っ込みはせず、身を翻した。

「まぁ、気が変わったら、いつでも連絡を入れろ。気持ち良く昇天させてやる」
「お、お断りしておきます」
「くくく、では、また後でな」

颯爽と去って行くエヴァ先生の小さな背中を見送っていると、軽い衝撃がって、アメノミハシラからの連絡船が接舷したみたいだな。
今、下手な接舷をした連絡船が折り返し、アメノミハシラに向かう事になっているから、そろそろ、搭乗する準備をしないとな。

「シゲさん、レナ、俺達も搭乗する用意しようか」
「ん、わかったよ」
「はい、じゃあ、ミーアちゃん達を呼んできますね」

ミーア達三人は港内の探検がてら、アメノミハシラへ向う連絡船内で飲食する軽食やお菓子、飲料の類を買出しに行っているのだ。

「ああ、搭乗ゲート前でシゲさんと待ってるよ」
「わかりました」

いつものように青い後髪を微かに揺らして、レナが三人を呼びに売店がある方向へ向って行くと、見計らったかのように、シゲさんがポツリと呟くように話しかけてきた。

「アインちゃん」
「ん、シゲさん、何？」
「いや、到着した人達の顔、少し眺めていたんだけどさ、……やっぱり、皆、暗いね」
「……だろうな」

シゲさんが神妙に眺める方向を見ると、接続ゲートから身体検査場までの人の流れができている。そして、彼らの顔色は、一様にどこか陰のある暗いものだった。

やはり、プラントに来たくて来たわけではない人が殆どだろうし、それ以外の人の中にも、諸般の理由で止むを得ず、って感じだろうからなぁ。

「これも、俺達が迷惑を掛けた所為なんだろうねぇ」
「……うん」
「アインちゃん、俺ぁさ、……今度こそ、自分の腕を少しでも世の中が良くなる方に使いたいよ」
「そうだね。……俺もそうなって欲しいと思うし、そうなるように努力するよ」

今も身体検査を終えた一人の少年が難民受付担当かそれに類する者に指示されたらしい方向へと、ゆっくりと動き始めたところだっ

た。

たった独り、手荷物だけを手に俯き加減で進む様子から、この戦争で家族や住む場所を失ったのかもしれない。

そんなことを思って、少年を見つめていると、その向かいから話しに夢中になっているミーア達がって。

「おぶっ！」

「わきゃ！」

……見事なまでに衝突して、少年はミーアの豊かな胸の狭間に顔を突っ込んだ。しかも、慌ててもがく段階で、ミーアの胸にまで触れているというおまけ付きだ。

けしからんっ！　何というラッキーすけべぇだっ！

羨ましいっ！　是非、今度、俺もやってみたいっ！

……じゃなくてだな、それなりの速度だったし、大丈夫だろうか？

「シゲさん、ちょっと行ってくるよ」

「あいよ、荷物を見ているよ」

思わずという感じで苦笑を浮かべているシゲさんに荷物を託して、歳相応に顔を真っ赤にした少年がミーアに平謝りしている現場を目指す。

「ここか、ラッキーな少年が衝突事故を起こした現場は？」
「ちょ、先輩、何を馬鹿な事を言ってるんですか」
馬鹿な言葉を俎上に出すと、案の定、レナからの突込みが入った。
「いやいや、ラッキーな少年の弁護に来ただけだ」
「えと、別にミーアちゃんは怒ってませんよ？」
「あのね、私達だって、今のが事故だって位、わかるわよ」
ついでに、マユラとアルスターからも横槍が入ってきた。
「はは、わかってるよ。で、ミーア、そこのラッキーな少年、怪我は無いか？」
「ん、私は大丈夫だよ」
「えと、あの、べ、別に、狙ってやったわけじゃなくてっ！　ただ、ちょっと、前を見ていなくてっ！　……その、すいませんでした」
「いやいや、気にしなくていいよ。……それより、柔らかかっただろ」
「なっ！　に、兄さんっ！　そんなこと聞かないでよっ！」
動揺しているらしい少年に、ニヤリと厭らしい笑みを浮かべて見せると、ミーアが怒って大声を出してきた。
「で、どうだった？」
「……うっ、……や、柔らかくて、その、暖かかったです」
「あなたも応えないっ！」
ビシッと、初対面の少年であっても、容赦なくチョップを食らわせる辺り、流石は我が妹ぶ……恋人の一人である。

その打撃を受けた少年がはっと、我を取り戻したように、再び、ミーアに頭を下げた。

「す、すいませんでしたっ！」

「いや、もう謝る必要はないさ。ミーア、今のチョップで全てチャラでいいよな？」

「……もう、最初から私は別に気にしてないよ」

「何、これも一種のけじめって奴だよ」

「えっ？　そういうものなの？」

「そういうものなんだよ」

っと、少年が紅い両目で、じっと、俺とミーアのやり取りを、何か、懐かしいものを見るような、哀しいことを思い出すような、そんな複雑な表情を浮かべて見つめていた。

……。

あえて、それには気がつかなかった振りをして、黒髪の少年に話しかける事にする。

「プラントへは、移民で？」

「あ、……ええ」

「……そうか」

これだけ騒いでも、少年の所に誰も来ないところをを見ると、やはり、家族を失っているんだろうな。

……。

こうやって知り合ったのも何かの縁だし、忙しいユウキには悪いが、ちょっと目を掛けてもらおうかな。

ジャケットの内ポケットに入れていた手帳から二枚程破り、一枚にユウキの名前と連絡先、それに住所を、もう一枚には、例の暗号を使い、家族なしで独りらしいから、面倒を見てやってくれ、と書いて、両方に、サインを入れる。

「俺達は今日でプラントを離れるから、……人を紹介しておくよ」
「えっ？」
「何か、困った事があったら、こいつに連絡すればいい。ラインブルグの紹介だって言ったら、話を聞いてくれるはずだ」
「別に、そこまでしてもらう……」
「何、袖振り合うも多少の縁って奴だよ。こっちが連絡先で、こっちはそいつに会った時に渡してくれ」

余計なお節介、所謂、親切の押し付けだが、まぁ、いいだろう、っと、搭乗開始みたいだな。

「少年……、辛い事も多いだろうけど、少なくとも、顔だけは上げておけよ？　じゃないと、さっきみたいなことになるからな」
「うっ」

暗い顔をするなとは言えないけど、これだけは言っておきたかった。

「じゃあ、……頑張ってな」
「……あ、ありがとう、ございい、ます」

ぎこちないが、それでも挨拶を返せるから、根は素直で、しっか

りした子なんだろう。

「ん、元気でね」

「あ、はい」

それに、ミーアに微笑みかけられて、少々頬を染めているんだから、暗い顔をしていたさっきよりかは、断然、顔つきがマシになっている。

そんな少年に見送られ、俺達はプラントから離れる連絡船に乗り込むべく、搭乗ゲートを目指す。

……本当に、これで、プラントともお別れだ。

……。

むぅ、いざって時に、特にこれといって言葉が浮かんでこないのはちょっと悲しいが……、うん、これでいいや。

バイバイ、プラント。

今度、来る時は、住みたくなるような、？いい国？になっていてくれよ。

なんてことを考えながら、俺は、長らく住んできたプラントを後

にした。

終　ユニウスの講和

C．E．７２年２月１６日。
アメノミハシラに渡った俺達が新生活に慣れ始め、それぞれがラインブルグ・グループ内で仕事に励みだした頃、二年に渡ったプラントと地球連合の戦争は、地球周回軌道を回るユニウス・セブンの残骸跡において、各国代表が講和条約に調印する事で正式に終結した。

その条文、とは言っても小難しい文章抜きの内容だけだが、以下の通りだ。

１　対プラント軍事同盟と化していた、地球連合及び地球連合軍を解体する。

――これは講和交渉中に、大西洋連邦とユーラシア連邦、それに東アジア共和国の外交代表に随行していた、それぞれの随員の間で些細な諍いから発生した、【ナイロビのＯＨＡＮＡＳＩ会議】だなんて、口は悪いが物事の本質を突くネット・ユーザー達に名付けられた、場外大乱闘事件に端を発する、一連の地球連合加盟国間のゴタゴタが一つの終着に至ったという奴だな。

２　プラントが旧地球連合加盟国の監視の下、ジェネシスを破棄するのと引き換える形で、旧地球連合加盟国はプラントの独立を認める。

――これでプラントは当初の目的を果たした事になるが、旧地球連合側から見れば、ジェネシスさえなければ、プラント位はどうとでもできる、という自信の表れでもあるんだろうな。

3　プラント及び旧地球連合加盟国共に、双方への賠償金はなし。

――地球連合にとってはプラントが強力な抑止力を保有した為、プラントは国力の限界、つまりは継戦限界に至った為いう、双方にとって明確な形での勝ち負けのない痛み分けだったという?建前?からだろう。

4　基本、戦犯は国家毎に独自に裁判にかけるが、捕虜虐殺等の一部重大な戦争犯罪は、国連が無くなっても存続している国際刑事裁判所において、人道に対する罪で裁判に掛ける。

――実際には実施されるかはわからないが、人として、例え、戦争下にあったとしてもやったら駄目なことを世界に周知させる、俺的には、かなり評価に値する決定だと思う。

5　プラント及び旧地球連合加盟国は、地球上における占領地を無条件で放棄し、軍事基地は撤去する。

――プラントは独立するんだから、地球に領土はいらないだろうということと、各地で占領地を確保していた大西洋連邦への嫌がらせ、所謂、他の加盟国による足の引っ張りだな。

６　旧地球連合加盟国はＬ１及びＬ５宙域をプラントの管轄下に置くことを認める。

――実効支配していることへの御墨付きって奴だ。

７　月面は中立地帯とするが、プラント及び旧地球連合加盟国は月面に新基地を一つずつ建設する事を互いに認める。

――巨大な資源庫である月での皆の権益を認めるけど、競争し過ぎると大変だから、程々にしておこうってことかな。

８　プラントは旧プラント理事国への関税優遇措置と復興支援資材の提供でもって、プラントコロニー群割譲の代価に当てる。

――ちょっとした補償というか、これはプラント側の譲歩だろう。

９　各国の軍事力保有比率を、プラントが１、大西洋連邦が３、ユーラシア連邦が３、東アジア共和国が２、大洋州連合が１、南アフリカ共同体が１、汎イスラム会議が１とする。

――今回の条約の目玉でもある軍事力の保有制限だが、過熱して新たな火種になりかねない軍拡を食い止める事と、一大強国である大西洋連邦の侵略と伸張を抑える為だろうな。

１０　ＭＳ等の兵器類、軍事利用へのニュートロンジャマーキャ

ンセラーの搭載を全面的に禁止する。

――平和利用ならともかく、軍事利用は論外って奴だ。

１１　ミラージュコロイド技術を一部を除き使用禁止にする。

――ミラージュコロイドって、かなり凶悪な技術だから、ビームサーベルとかの磁場形成技術とかを除いて禁止されるらしい。

１２　プラント側条約監視団常駐基地や在地球公館の所在地として、カーペンタリア基地の保有を認め、ジブラルタルを有償割譲する。

――外交官の派遣と相互監視の一環だが、有償とはいえ、ジブラルタルなんて要地を割譲させるとは、としか言いようがない。

１３　旧地球連合加盟国側の条約監視団常駐基地や在プラント公館として、ジブラルタル割譲の代価にＬ１とＬ５に衛星拠点を一つずつ提供する。

――これも外交官の派遣と相互監視の一環になる。

１４　地上の国境線および国家を戦前のＣ．Ｅ．７０年２月１０日の状態に復旧する。

――南アメリカ合衆国やオーブ連合首長国の再独立を認めて、大

西洋連邦の影響力を少しでも落とす為の、プラントと他の連合加盟国の方策だな。

１５　プラントは旧地球連合加盟国に在住し、プラントへの移住を希望するコーディネイター難民を受け入れる。

――住み分け政策の一つだが、コーディネイターの保護だとも言える。

１６　軍事保有比率については、今後、三年の間有効とし、以後の交渉でもって延長の可否を決めるとする。

――明確な期限付きにする事で、確実に条約を守らせるようとでも考えたのかもしれない。

と、まぁ、簡単なコメント付きで紹介したが、こんな条約が成立して、正式に戦争が……、一国の独立運動から始まり、全世界を巻き込んだ、地球圏規模の戦争が終わったのだ。

……本当に、良かったよ。

で、国際社会では、早くもこの戦争に名称が付けられるそうで、

四月馬鹿でニュートロンジャマーが地球に無差別投下されたり、大量破壊兵器であるサイクロプスや核ミサイル、ジェネシスといった恐ろしい兵器が相次いで使用されたり、スペースコロニーが数多く破壊されたり、多くの国でインフラに大打撃を受けたりと、戦域が地球のみならず、月や各ラグランジュポイントといった地球圏全体に及んで、影響を受けなかった場所がないことから、【地球圏二ヵ年戦争】或いは【二年戦争】と呼ばれる事になるそうだ。

まぁ、プラントだと、今後も独立戦争ってのが、正式名称になるんだろうけどな。

おっと、最後に、一言だけ。

色々と仕掛けていたのは知っていたけど、実際に、地球連合を解体させてしまうなんてさ、本当、?プラントの魔女?って、凄いよね。

第二部　二年戦争／プラント独立戦争　（C．E．７０年－C．E．７２年）　了

01　新生活の始まり　―アメノミハシラ　1（前書き）

※警告※

この話より先を読む者は、【主人公モゲロ的な意味で】一切の希望を捨てよ、です。

01　新生活の始まり　－アメノミハシラ　1

C．E．72年1月4日。

連絡船は海賊の襲撃を受けたり、デブリの衝突を受けたりするといった大きなトラブルも無く、定刻通りにオーブ連合首長国が静止軌道上に建設した宇宙ステーション【アメノミハシラ】が管轄している宙域へと入る事になった。

三ヶ月前までの戦闘によって、地球－月間の宙域ではかなりのデブリが発生している事もあったから、正直、到着は遅れるかもしれないなと思っていただけに、定刻通りの運航は予想外だった。

「あ、兄さん、あれかな？」

隣の席に座っていたミーアの声に誘われて、ミーアの身体越しに連絡船の多重構造窓から外を覗くと、アメノミハシラらしき巨大な建造物と周辺に展開されている太陽光発電や放熱用のパネル群が見えていた。

このアメノミハシラとは、国策として宇宙への進出を掲げたオーブが国家プロジェクトとして推進してきた軌道エレベータ、その宇宙側の基幹部分に相当するらしい。

そのアメノミハシラの構造を、俺が知っている限りで挙げていくと……、エレベータが開港した際は、宇宙船舶の整備点検施設を兼ねた大規模な宇宙港として機能する、球状体にかなりの圧力を掛けて楕円球にするというか、同じサイズの調理用ボウルを二つ、縁で向い合わせに引っ付けるというか……、あー、そうだな、一般的な？どら焼き？みたいな構造体と、それに突き刺さる形の将来はエレ

ベータシャフトになる長大な柱状の構造体、そして、柱状構造体に連結されている居住滞在者用の中規模の閉鎖シリンダー型コロニーが二基だったはずだ。

更には、親父が移住する時分に発行されていたパンフレットによると、Ｌ３にある資源衛星を、採掘が終わった段階で静止軌道まで運んできて、？どら焼き？の先にカウンターウェイトを兼ねた、デブリ排除を担う業者や防衛を担当する軍の基地として、取り付けるとか付けないとか。

むー、このアメノミハシラの外観をわかりやすく何かに例えるとしたら……、地球を地面にして、そこから生えたキノコを想像すればわかりやすいかもしれないな。

傘の部分にあたるのが？どら焼き？で、柄の部分に相当するのが柱状構造体とそれを覆う形の閉鎖シリンダー型コロニーって具合だ。

もっとも、マユラから聞いた話だと、先の戦争による社会の混乱やオーブ本国が戦禍を被った為、先の軌道エレベータ計画は中断状態にあり、その代わりといっては何だが、？どら焼き？内部にはまさに一大生産拠点とも呼べるような巨大な無重力ファクトリーが建設され、また、モルゲンレーテ社が開発したオーブの主力ＭＳ【ＭＢＦ－Ｍ１】アストレイ等の兵器工廠があるそうだ。

その無視できない規模の生産力と恵まれた立地条件の為に、戦争中には地球連合やザフトから、何度かちょっかいを掛けられる破目になったらしいが、その全てを精強な防衛隊によって退けているとのこと。

そして、それを率いる者は、ロンド・ミナ・サハクという人物であり、オーブでは有力な氏族であるサハク家の家長であり、アメノミハシラに司令部を持つオーブ国防宇宙軍の司令官を務め、また、軍政下に置かれているアメノミハシラに住まう者達が敬意を持つ市

長的な人物でもあると、先の通信で話した際、親父からは好意的な評価を聞いている。

もっとも、そのロンド・ミナ・サハクへの権力の集中振りには、前世由来の価値観が違和感を訴えてくるが……、オーブ連合首長国自体が君主制というか少数氏族による寡頭制を敷く国家であり、オーブの氏族が、極々簡単に言えば、政治や軍事を担う指導者……貴族みたいなものである以上、ロンド・ミナ・サハクが文武の指導者であってもおかしいことでもないのだ、と言い聞かせている。

「兄さん、どうかした？」
「あ、ああ、いや、こうやって見ると、変わった形だなと思ってな」
「んふふ、ほんとだね。……それに、何だか、兄さんのアレの形に似ているところもあるし」
「ちょ、おまっ！　下品な事を言わないの！」

思わず、吹きそうになっただろうがっ。

「ぷっ、た、確かに似ているかもしれないわね。マユラもそう思わない？」
「うん、大きて太い所が似てるよね」

レナはともかく、マユラまでもが……。

で、でもまぁ、マユラに関しては、アメノミハシラのデータからマユラがオーブ国民であることがちゃんと確認された事もあってか、以前の不安定な精神状態から、より一段と再建を果たしてきているからこそ、って、言えるのかもしれないな。

それに最近だと、恐らくは生来のものであると思われる勝気さというか、負けん気というか、闊達さが少しずつ見え始めていて、レ

ナやミーアに対して、色々と張り合おうとしているしな。

……でも、他にも人が居るっていうのに、堂々とシモ関連を発言しすぎだと、お兄さんは思うの。

いや、ほんとに、俺なんて、自然、羞恥で紅くなってきた位なのに……、普段通り過ぎるお嬢さん達はさ、ちょっと、そっち方面に耐性が付き過ぎでないか？

「あ、あー、こんな時、どうすればいいんだろうねぇ、俺ぁ」

「取り合えず、笑っておいたらいいんじゃない？」

身悶える俺を他所に、会った当初から、何故か、極自然に会話が成立している、シゲさんとアルスターからも、俺を突き放すような発言がっ！

「ほほぅ、そうなのか？　……ならば、切り取って剥製にして、愛でてやるのも面白そうだな」

更にその背後で、下に恐ろしき事を呟く、ちっこい女医さんまでっ！

「エヴァ先生、それは止めて下さいね」

「うん、困る」

しかも、それをレナとミーアが真面目な顔で注意するので、もう、本格的に居た堪れなくなってきた。

「……」

一人黙っていたマユラも、何気なさを装いつつ、ちらちらと俺の股間を見ては頬を染めているのも、地味に効いているし……。

も、もう、勘弁っ！　頼むから、早く着いてくれっ！

俺達以外の乗客からの視線もあって、一人、見せ物にされた気分で、俺はそう願うしかなかった。

◇　◇　◇

約一名グッタリとしていたが、意気揚々とアメノミハシラの宇宙港に降り立った俺達は、順調に身体検査をパスし、わざわざ迎えに来てくれていた懐かしい顔との再会を果たす事ができた。

「久しぶりね、アイン」

「おおっ！　お前……、ベティか？　……こ、これまた、本当に、スタイルが良い、美人になっちゃって、まぁ」

「はいはい、お世辞は程々にしときなさいよね。可愛いお連れさん達が剥れるわよ」

「いやいや、ほんとほんと、あの？つるぺた？でちょっとしたことで、直に手が出ぶッ！」

「……言っておくけど、今でも、結構、手は出るわよ？」

……無重力空間だというのに、見事なストレートを決めてくれた為、ロビーの端まで吹き飛んでしまったよ。

と、とにかく、場を取り直して……。

俺の目の前に立つ幼馴染二号もとい？勝気なベティ？こと、ベティーナ・ラ・トゥールが俺の額を人差し指でもって、穴が空きそうになる位に連続してつつきながら、怖い顔をして、俺を糾弾している。

「まったく、少しはいい男になっているかと思っていたのに！　会った瞬間からお世辞なんて、全然、昔と変わってないじゃないの！」

「なっ、人聞きの悪い事を言うなっ！　昔からお世辞なんて言わない、大人しくて素直で面倒見の良い？よい子？だったぞ、俺はっ！」

「どの口で、お世辞を言わない、大人しくて、素直だったなんて言うのよ！？　それこそ、嘘を付くなっ！　機会があったら、うちやパーシィの母親にしがみ付いて、歯が浮きそうになるような褒め言葉を並べ立てていたくせにっ！」

げぇっ！　ばーれーてーるぅぅっ！

「い、いや、それはな、小さい頃だっただけに、母性溢れる大人な女性に憧れを抱いていたからだよ」

……嘘です。

実は当時、まだ俺と？俺？が乖離していた状態だった為、御母堂達が？俺？の年齢的に釣り合う年頃ということもあり、遂、自然に、身体と口が動いてしまったんです。

「へぇ、なら、あんたって、年上好みだったんだ？」

「じ、実は……、程よい年上女性には常に憧れの心を、今でも抱いております」

「ふーん、そうなんだ。……まぁ、場所が場所だから、今の所、これ以上の追及をしないでいてあげるわ」

と、のたまうと、ベティはようやく指を引き上げた。

額に穴が開かなかった事に安堵しながら、改めてベティの姿形を観察してみる。

……本当に、幼い頃や引っ越した時からは想像できない位に、綺麗になったよなぁ。

改めて、ベティの見目形を見てみるが……、その顔立ちは、目鼻立ちが鋭くて、結構、硬質な感じがするんだけど、艶のあるブロンドの長髪を左サイドでまとめて縛っているから、それが和らいでいる。

無論、黒のパンツスーツ越しにも測れるロケットみたいな胸や腰の括れも実に素晴らしいし、綺麗な曲線を描く尻の丸みも大人って感じがして、また、歳相応の健全な色気を出している。

「あ、それと、アイン、後ろに気を付けなさいよ？」

「へっ、て、いたたたたっ！」

背中の三箇所から、同時に痛みがっ！

「はぁ～、あんたって、モテルのねぇ」

「は、はは、す、凄いだろう？」

俺の強がりな言葉に、皮肉か嫌味で返してくると思っていたら、意外にもベティは外からでもわかる純粋な笑みを軽く浮かべて見せた。

「ええ、流石は、私の初恋の人ね、ってことにしておいてあげる」
「はっ？　って、痛みが増したっ！」
ちょ、マジで怖いから、後が見れないっ！
だ、誰でもいいから、助けて～！
そんな俺の祈りが、珍しくも天に届いたらしく、助けの声が耳に入ってきた。
「アイン、何やってるの？」
「おおぅっ、パーシィっ！　久しぶりぃっ！　こ、これは、より良い男になる為の、し、試練って奴だなっ！」
「あはは、相変わらずの負けん気と減らず口だね」
「それ位じゃないと、プラントじゃ、心が折れるからなって、ほんとに、なんか、痛気持ちよくなってきたっ！」
「それは流石に拙いんじゃないかな？」
昔と変わらぬ、暢気で緩い受け答えを展開するのは、幼馴染一号と呼ばれる？暢気なパーシィ？じゃなくて、パーシィこと、パーシバル・ウィングフィールドだ。
こっちは昔の印象とあまり変わることなく、ブラウンの髪や大人しい少し丸みを帯びた顔かたち、タレ気味の目、気が良さそうに開いた眉毛、ニコニコと微笑んでいる口元に加えて、昔も今も、ベティの身長よりも若干低い上、ちょっと小太り気味なシルエットまでもがそのままだった。
「確かに拙いかも、……あ、あー、後で絶賛抗議行動中のお嬢さん

方、苦情の受付と不満の埋め合わせは後ほど、ちゃんとしますので、今は何卒、平に御容赦を」

との言葉をかけると、あら不思議、すぐさま、三つの痛みがなくなりました。

「……見事な条件闘争ね」

「ああ、アインちゃんも、ちょっと安請合いしすぎだよね」

もはや解説役と化している、アルスターとシゲさんの声が聞こえてくるが、この場を収める為には仕方がないことだと思うんだがなぁ。

「んんっ、と、とにかく、今日は、わざわざ迎えに来てくれて、ありがとう。また、以前と同じくというか、今後ともよろしく」

代表して、二人に声を掛けると、それぞれがそれぞれの声で、ベティとパーシィに対して挨拶をし始めた。

ちなみに、連絡船を降りるまで同道していたエヴァ先生だが、迎えの人が来ていたらしく、先に宇宙港を後にしていたりする。

一通りの挨拶と自己紹介が終わった後、再び、パーシィに問い掛ける事にする。

「で、これからの予定は？」

「うん、まずは居住区画に行って、住んでもらう家に案内するよ。確か、単身用が一つと世帯用の一つでいいんだよね？」

「ああ、そうだったはずだ」

世帯用は、俺、ミーア、レナ、マユラが、単身用は、シゲさんが使用する予定だ。

残るアルスターだが、もっと状況が落ち着いて、アルスターの親類と連絡が付いた時点で、実家がある大西洋連邦に帰す予定だから、以前と同じように俺達が住む世帯用住居に泊まってもらうことが決まっている。

もちろん、親父と住むことも考えたが、もう独立しているんだから、別々に住んだ方が互いに気楽だろうということで、前もっての通信連絡で話はついている。

その連絡の際には、一緒に住む恋人が三人できましたので、世帯用をお願いします、との希望を述べた瞬間に、アイン、お前、戦争で疲れているんだな、こちらで良い精神科医を紹介しよう、だなんて即答した辺り、流石は我が親父だと思ったものだ。

ならばと対抗して、三人を画面に出したら出したで、まさか、お前がここまで反社会的に育ってしまったとは、なんと言ってリナに詫びれば……、だなんて事をほざいたので、三人に耳打ちして、皆に？おとうさま？って呼ばせたら、一瞬でコロリと転んで、うむ、でかしたぞ、アイン、こちらでの彼女達とお前の関係についての説明やフォローはこの父に任せておけ、娘も欲しがっていたリナもきっと喜んでくれるはずだ、だからなぁ。

「案内した後だけど、夜にはおじさん主催の歓迎会を開く予定だから、それまで、自由にしてくれたらいいよ。……あっ、でも、悪いけど、アインだけ、おじさんが自分の所に来て欲しいって言ってたな」

「いいけど、皆の相手は？」

「大丈夫よ、私がするから安心しなさい」

ベティが歓待役となると、過去の悪事をばらされそうで、嫌な予感しかしないんだが……。

「ふふ、大丈夫よ、アイン。私からは絶対、変なことは吹き込まないから」

なら、安心……。

「でも、どうしても聞きたいだなんて請われた時は、歓待する役目上、？仕方なく？話してもいいわよね」

……できないっ！

って、ああ、お嬢さん達の目の色が危険な位に輝いて……。

「はは、アインも大変だね」

「ま、まぁ、な」

和やかに笑ってくれるパーシィだが……、俺としては、帰って来た時が今から怖いです。

そんな思いを胸に、俺は一人、今晩には到来するであろう黄昏の時を覚悟するしかなかった。

01　新生活の始まり　―アメノミハシラ　1（後書き）

とりあえず、前半が詰まってきたので、更新を再開します。
まずは週一の更新で進行したいと思いますので、今後とも、よろしくお願いします。

０２　新生活の始まり　－アメノミハシラ　２

パーシィとベティを案内役に宇宙港から居住区画を目指す間に、男性組と女性組に自然と分かれる事になった。

ベティが我が恋人達＋１に、俺の過去の悪事もとい懐かしき幼少時代のアレコレを吹き込みそうで少々怖いが……、身体への攻撃を受ける事がなくなったし、パーシィからアメノミハシラに関する情報もあれこれ聞けたから、まぁ、トントンだと思う事にしよう、うん。

で、パーシィの丁寧な説明によると、これから俺……俺達が新生活を営む事になる、このアメノミハシラには、当初、二つある外郭直径４？、長さ３？に及ぶ大規模な居住区画を建設する予定は無く、それこそ、施設を維持する管理従事者や軍属の宿舎、移動手段の連絡を待つ旅客等が短期滞在できるようにする為の小型トーラスコロニーを一基だけ建設する予定だったとか。

それが変更され、アメノミハシラ自体が大きく拡張されることになったのは、建設現場にＢＯｕＲＵが建機として大量投入された事と、僅か十年程の間で、元となる小さな建機製造会社から、アメノミハシラにおいては半官営企業であるモルゲンレーテ社と肩を並べる事ができる位にまで急成長した、ラインブルグ・グループの建設計画への本格参入の結果らしい。

要は、建設作業の効率が格段に高まった事と建設に投入できる資金や人員が増えた事で計画をより大規模にすることができたということだ。

その建設計画・改は比較的順調に進んでいき、先の戦争が始まる一年前には二つある居住区画と?どら焼き?……キノコの?傘?と内部の大型無重力ファクトリーが、戦争が始まった一昨年にはラインブルグ・グループがキノコの?石突き?……柱状構造体の地球側の端に建設していた中型無重力ファクトリーが、順次完成して、それぞれの運用が開始されていたそうだ。

そして、今では、旧地球連合のＭＳ開発に関わって起きた一連の戦闘に巻き込まれ、崩壊してしまったＬ３のスペースコロニー、ヘリオポリスに代わるオーブの一大宇宙拠点として機能しているらしい。

ちなみに、居住区画の運用が始まるまで建設用拠点として使用されていた簡易ステーションだが、ラインブルグ・グループが下取りして改装し、?石突き?部分の中型無重力ファクトリーの基礎となり、宇宙工業や宇宙造船、宇宙電気といった製造業の工場になっているって話だ。

……むぅ、それにしても、うちの実家というか、ラインブルグ・グループがそんなにもアメノミハシラに深く関わっていたとは思いもしなかった。

まぁ、話をそのラインブルグ・グループに転じて……、アメノミハシラの建設に大きく関われる程の一大企業グループに成長したラインブルグ・グループであるが、今現在において、同じ名を冠した一つの企業群としてグループを牽引し、グループの企業価値を高めているはラインブルグ宇宙食品（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ Ｓｐａｃｅ Ｆｏｏｄ）だそうだ。

というのも、宇宙食品が、二つある閉鎖シリンダー型コロニーの片方……ラインブルグ・グループが優先使用している擬似重力区画、その全区画の三分の一近くを占める大規模工場で水稲や葉物といった穀物野菜を休み無く生産して、四月馬鹿の影響を今も大きく受け続けている地球各国や月面都市群へと、全世界的な流通量から見れば少量らしいが、輸出している為である。

興味を持ったので更に突っ込んで聞いてみると、先の戦争中、インフラへの打撃から来る生産能力の低下や輸送コストの上昇、また、ザフト……プラントによる収奪等という、やむを得ぬ事情で国際市場での食糧価格が吊り上がっていく中、破格といっても良い程の値で穀物を、全体から見れば少量とはいえ、安定して市場に提供し続けていた事から、国際的な評価が自然と高くなり、戦争が実質終わった今でも、取引相手から色々と便宜を図ってもらっているそうだ。

その例を挙げれば、旧地球連合加盟国や赤道連合といった中立国から水や肥料、水質浄化装置に使用する原料を安く仕入れたり、仕入れた物を打ち上げていたオーブのマスドライバーが？一身上の都合で？自爆してしまって使えなくなってからは、ビクトリア基地のマスドライバーを使用する際の打ち上げ料金を割り引いてもらったり、また、月面都市群と行っている鉱物資源の取引でも、安定して食料品を提供している事から友好価格というか、他社より比較的安価で買い付けることができたりしている、等々といった事が上げられるとのこと。

後、取引相手として名前が挙がっていないプラントだが……、今まで住んでいて、かつ、その国が独立する為に戦った身だけに言いたくはないのだが、全部うちで買ってやるからもっと安値で提供しろ、といった具合に吹っ掛けてきたらしく、取引を断ったらしい。

……はぁ、今更ながら、悲しくなるな。

それはそれとして、いつかの俺がマユラにした如く、人が弱っている時に付け込む、もとい、人の好意を得られる機会を逃さないというか、戦争という非常時にあっても、損をして得を取れ的な行動を地で行う、親父というかグループの上層部が凄いな、おい。

まぁ、これらの経緯については改めて親父から話を聞けばいいので、内容をパーシィやベティの近況へと移して行くことにする。

「へぇ、ベティは今、うちの親父、……会長の秘書をやってるんだ」
「うん、今まで秘書を務めていた人達がさ、立て続けにお目出度が判明したり、結婚したりして、休職や退職しちゃって、信頼できる人がいなくなっちゃってね。それで、昔からの知り合いで、親が宇宙発電の社長を務めているって事で、ベティが秘書をやることになったんだ」
「募集はかけてないのか？」

俺がそう問い掛けると、パーシィは難しい顔をして唸り始めた。

「うーん、今の状況だと募集すれば、確かに能力があって？できる？人が集るんだろうけど……、扱う業務が業務だから、どうしても信頼と信用こそが第一になるからね。信頼できる人に紹介してもらうのが一番安心できるらしいんだ」
「ふーん、そうなのか」
「うん、そういうものらしいよ」

確かに実権のある会長職だから、常に側に控える秘書にも色々と条件を付けないといけない事があるんだろうな。

「なら、パーシィは今、何をやってるんだ？」

「僕はね、以前、アインが送ってくれたアイデアメモから、実現できそうなものを研究したり、量子コンピュータを使って検証していたりしたんだけど、これからは、それらを実用化する為に色々と試していこうと思ってるんだ」

「へぇ、パーシィさんよぅ、そらぁ、本当かい？」

「うん。それでね、シグル……シゲさんは機械工学への造詣が深いって聞いているから、僕の開発部に所属してもらって、その実用化を助けてもらうつもりをしているけど、いいかな？」

「おう、いいぜぃ。……そういう錯誤の中で色々と機械を弄ったり、試行結果を多角的に検証しながら、頭を絞れるだけ絞って創意工夫して、少しずつ改良して行く時ってのは、こう、言葉には言い表せない充実感があるからねぇ、うん、楽しみだよ」

「うん、その気持ちは、僕もわかるよっ！」

「おっ！　わかってくれるか、同士よっ！」

俄かに、パーシィとシゲさんが意気投合して、人類社会における機械のあり方に関する談義から始まって、科学技術に関わる者としての心得や心意気といった内容の討論を繰り広げ始めてしまい、独り取り残されてしまい、寂しく思うアインでした。

……いや、二人とも楽しそうにしているから、いいけどね。

◇　◇　◇

柱状構造体にあるエレベータで無重力区画から擬似重力区画……居住区画へと降りると、何となく、安心できる重みを感じる事ができた。まだまだ、人類は宇宙に適応しておらず、地球という揺り篭が必要なのだと思い知らされる一時だ。

「ここは1Gでの運用なのか？」

「うん、穀物とかを育てたり、地球から上がってきた人達が多かったりするから、できるだけ地球の環境に似せているんだ」

「なるほどね」

受け答えしてくれるパーシィに率いられる形でエレベータ施設から表に出ると、そこにはプラントの天秤型コロニーとはまた違った光景が広がっていた。

空が高い天秤型と違って、閉鎖型シリンダーという構造とサイズがサイズだけに、結構、低い位置に天井があるんだろうな、等と思いながら空を見上げたのだが、意外や意外、上手く光の加減を調節して青空に似せている上、？壁面？というかコロニーの内側壁に鏡のような材質が使われているらしく、視覚的には広い空が続いているように見えて、圧迫感はあまり感じなかった。

それよりも、やはり、地球や天秤型コロニーとは異なり、大地面が平面ではなくコロニーの内壁に沿う形で続いている為、ありえない位置にというか、壁にへばりついているように見えてしまう街並みの方が落ち着かなかった。

しかも、見た目、どちらを向いても常に坂道が、それも上り坂が、延々と視界が通る先まで続いているように見えるから、変な感覚が生まれてくる。

いや、実際に歩いたら、普通に道を歩いている感覚と変わらない

はずなんだろうが……、ちょっと気疲れしてくる光景だ。

もっとも、見上げた空の向こう側というか、直上に街が見えないだけ、あわわ、街が落ちてくるかも、だなんて杞憂めいた心配や心理的な恐怖感はないから、マシだろうけどな。

……実はこれら全て、世界樹の種で使われている居住区画と同じ仕組みなのだが、あちらはここまで大きくも広くもなかったし、遠くまで視線が通らなかった分、わからなかっただけだったんだろう。

まぁ、人は環境の変化に適応できる強い生命体だから、そのうち、慣れるはずだ。

そんなことを考えていたら、後にいたレナにそっと背中を突かれて、声を掛けられた。

「先輩、街があんな風に見えるなんて、なんだか、落ち着きませんね」

「ああ、プラントの生活に慣れていると、違和感があるな」

「でも、街並みは綺麗です」

「たぶん、一からの計画都市だけに、最初から綺麗に区割りして造ったんだろうさ」

誰が総合的な設計をしたのかは知らないが、街には緑が多い上、建物も石材に似た建築資材で建てられているらしく、洒落た雰囲気を持つアパートメントが通りに連なっている。

そんな街並みの中、人々がアパートメント一階にある商店のディスプレイを冷やかしながら歩いていたり、広場の一角にある屋台村で買い食いをしていたり、公共交通手段らしき？地下鉄？の駅に向っていたり、デパートらしき一際大きな建物や俺達が今いるエレベ

ータ施設に出入りしたりしているのだが……、なんか、俺が想像していたよりも、人が多いな。

「結構、賑やかだな」

「はい。……それに、暗い顔をしている人も少ないですし」

「だな」

それだけ住んでいる人が楽しんでいるというか、幸せというか、生活に不満を感じていないということであり、つまりは、ロンド・ミナ・サハクの統治が優れているっていうことだろう。

まぁ、だからといって、皆が皆、全ての人が明るいと言うか普通の顔をしている訳ではなく、暗い顔を、重い何かを背負ったような人の姿も、当然、見受けられる。

「……あの暗い顔をしている人達は、地球からの避難民なんでしょうか？」

「そうかもしれないが……、レナ」

「はい？」

「お前は真面目すぎるからな、あまり、思いつめるなよ？」

「……はい」

そう返事をしたものの、やはり簡単に割り切れないのか、レナの顔には翳が張り付いたままだ。

なので、元気付けるべく、綺麗にまとめられている髪が荒れる位に、ガシガシと乱暴に頭を撫で回すことにする。

「あっ！　ちょっ！　先輩、ひどいっ！」

「そうそう、それ位でいいんだよ」

「だ、だからって、やり方は考えてくださいよ、もう！」

とか言いつつも、顔は物凄く嬉しそうだよね、レナ。

むきゃー、と怒った振り（？）をしているレナの相手をしていると、早くもエレベータ施設用の車止めに到着してしまった。

「それじゃ、僕はアインを案内するよ。ベティ、皆の案内はお願いするね」

「ええ、わかったわ」

パーシィの言葉に頷いて見せたベティは、俺に向けて、ニヤリと人の不安を煽る厭らしくて、不吉でかつ不敵な笑みを浮かべて見せると、セミオート仕様らしい中型無人車に、他の皆を誘導し始めた。

その際に、ミーア達が三人揃って、笑顔でこちらに手を振ってきたので、それに応えて振り返していると、何んだか周囲の男どもから注目を浴びているような？

……。

悪戯心で、ふふん、だなんて軽く笑ってみせたんだが、男達の目や眉の角度がきついモノに変化したような気がした。

その事に、ちょっと、否、大いに優越感を感じてしまった俺は、悪い子です、ごめんなさい。

「アイン？」

「あ、すまん」

早くも小型無人車の運転席に乗り込んでいたパーシィに声を掛け

られて我に返った俺も、慌てて、その助手席へと滑り込む。俺が着座すると同時に、自動的にドアが閉まると、パーシィが苦笑交じりに再び口を開いた。

「あのね、さっきみたいな事は無用な恨みを買うだけなんだから、やめておいた方がいいと思うよ？」

「あ、あはは、うん、気をつけるよ」

パーシィにも釘を打たれたし、自分でもそう思うので、今後、二度としないように注意しておこう。

「じゃあ、僕達も行こうか」

「ああ、頼むよ」

俺の返事と共に電気自動車らしく静かに動き出した。プラントとは違って、走行車線が左側だったが、アメノミハシラというよりも、オーブという国が、今はなき日本の影響を色濃く受けているとのことなので、おかしくはないだろう。

「そういえば、親父の仕事場って、どこにあるんだ？」

「食糧生産プラントというか、ラインブルグ・グループが占有使用している区画内にあるビルだよ」

「家は？」

「ビル近くに従業員用の社宅地区があるから、そこの一画に住んでいるよ。もちろん、僕やベティも家族と一緒に住んでるし、アイン達もそこに住んでもらうことになってるからね」

「へぇ、そうなんだ」

なんてことを話しながら、車内からゆっくりと流れて行く車外の光景をできる限り注意深く観察する。

碁盤の目のように綺麗にブロック分けされている通りや、今、走っている基幹街路らしい道、と言うか道路脇には、プラントのコロニーと同じく、基本的なインフラ設備を？地下？……コロニーの内壁と外壁との間に収めている為だろう、電線や電話線を連ねる電柱等が雑然と並んでいることはなく、ただ街路灯と街路樹が整然と並んでいるだけだ。また、時折、清掃員が道に落ちているゴミや落ち葉等を回収しているのが見えたりする。

「清掃用ロボットって、うちで作ってなかったか？」

「うん、売り出しているけど、ここでは使ってないんだ」

「……失業対策か？」

「というよりも、オーブ本国から避難してきた人達や他の国から移民してきた人達が、ここで新しい生活を始められるようにする為の切欠というか、アメノミハシラがやっている移民自立支援策の一環なんだ。……でも、ここ最近は、戦争の影響で、かなりの人数になっているから、どうしても、給金がかなり安くなっちゃってるけどね」

「かなり安いって……、ちゃんと食っていけているのか？」

「それは大丈夫のはずだよ。最初の一年間だけだけど空気税を免税にして、住宅も無料で充当しているから、贅沢さえしなければ、ある程度はお金を貯められる筈だし、次の仕事も探せるだろうしね」

……なら、最低限の生活や就労の機会は確保されているってことか。

なんて考えていたら、パーシィが困った表情を浮かべて、後を続けた。

「それよりも問題なのは、まだ、オーブ本国や他の国からの移民が増え続けている事なんだ」

「つまり、今の方策にも限界があるってことか？」
「うん。さっきも言ったけど、アメノミハシラも色々と頑張っているけど、このままだと、支え切れないと思う」
「Ｌ３のコロニーがあれば、もう少し、マシだったんだろうなぁ」
「そうだろうね。……現実、アメノミハシラも余裕も少なくなってきているみたいで、うちのグループにも移民対策とかで協力して欲しいって、話が来ているみたいなんだ」
「対策に協力ってことは、雇用して欲しいってことだよな？」
「多分ね。まぁ、詳しい話はおじさんから聞いてよ」
「わかった、聞けそうなら聞いてみるよ」

……言えた義理じゃないんだろうが、戦争があって、社会が混乱しているとはいえ、世知辛い世の中だよなぁ。

03　新生活の始まり　－アメノミハシラ　3

パーシィに案内されて、ラインブルグ・グループに所属する企業群が入っている複合本社……、全長十二ｋｍになるコロニー内壁もとい？大地？を一周する縦貫道路に並行する方を幅として、幅が大体四百ｍ、奥行きも大凡四百ｍ程の地上十階建程度のビルに到着したんだが……、でけぇというか、今まで、このコロニー内で見て来た建物と違って、えらく頑丈そうな造りだな、おい。

いや、別に外観も打ち放しコンクリートで造られているわけではないし、採光用に填められている窓だって大きいと思うのだが、目に見える柱の一本一本が太いからか、ビル自体の高さが余り無い所為なのか、或いは、外壁色が落ち着いたグレー系なのが原因か、とにかく、非常にどっしりとした印象を受ける。

加えて、周囲を緑地帯に囲まれていることもあってか、あまり目立たないというか、何気に溶け込んでいるし、下手すりゃ軍事施設というか、要塞と間違えられそうな趣だ。

そのことを口に出してみると、然もあらんと頷いたパーシィがしみじみと呟いた。

「僕も、ここに来る度に、いつもそう思うよ。でも、このビルを建てる時に、アインのおじさんがさ、『昨今の流行が華美であるからといって、我々までもがそれに流される必要はない。質実と剛健こそが、我々の信条であり、グループの根幹である』って宣言して、うちの親やベティのおじさん達というか、グループ企業の社長連も、

そうだそうだ、って大いに賛同しちゃって、……こうなったんだ」
「ああ、なるほど……、なら、仕方がないな」
うちの親父も大概だが、パーシィやベティの親父達も？のり？がいいから、つい、勢いでやってしまったんだろうなぁ。
……まぁ、案外、素でやった可能性も否定できんがな。
母を失った俺を元気付ける為に、色々と相手をしてくれた懐かしい顔をいくつも思い出しながら、本社ビルとは反対側に目を向けると、ちょっとしたフェンスの向こう側に高さ二十階位の建物が軒を連ねていた。
「あれが食糧生産プラントなのか？」
「うん、宇宙食品の生産プラント群だよ」
「結構、広いんだな」
「……でも、世界の人達を支える事なんてできやしない、本当に微々たるものだよ」
微々たるものか……。
「あ、……ごめん、アイン」
「いや、それは……、あの戦争にザフトの一員として参加して、四月馬鹿にも加担した俺が、これからも、ずっと甘受しないといけないことだから、気にしないでいいよ」
「……うん、わかったよ」
しかし、四月馬鹿は、本当に、どこまでも祟ってくれるよなぁ。
「じゃあ、おじさんの所に案内するよ」

「ああ、頼むよ」

今も食糧を積んでいると思われる国際規格コンテナが貨物用エレベータがあるらしい?壁面?に向って、運ばれて行く所だった。

◇　◇　◇

「親父、久しぶり。……何とか、無事に生き抜けたよ」
「ああ、よく無事に帰ってきた」

ビルの奥まった位置にある会長室に案内され、久しぶりに、生の親父をこの目で見ることになった。微笑みながらこちらを見る親父を見て、自覚していなかった心の重みが、少しだけ軽くなったような気がした。

「……酷い、戦争だったな」
「……うん。本当に、たくさんの人が、死んだよ」

幼い頃の様に、身内が傍に居るという安堵感が胸の中で広がる中、じっと親父を観察する。

通信画面越しでは気付けなかったが、髪にも白いのが目立つようになったし、だいぶ皺が増えたように見えた。

……それだけ、俺が心配をかけたのかもしれないし、戦争という非常事態の中、グループの舵取りが大変だったのかもしれない。

そんな思いを抱きながら、前の通信で断りを入れるのを忘れてい

た事を口にする。

「例の、いつか二人で飲もうって言ってたスコッチなんだけどさ……、家族を亡くした人にあげたんだ。連絡の時、言うのを忘れていたけど、勝手をして、ごめん」

「……そうか。私は、お前が生きて帰ってきてくれたからな、別に構わないさ」

あ、いかん、ちょっと、涙腺が……。

「本当は、お前の仕事の話をするつもりだったが……、また、明日にしよう」

「あ、いや、大丈夫、だって」

「だが、アイン……、お前、今……、泣いているだろう？」

うぅ、何だが、最近、涙もろいなぁ。

「……ほ、本当に大丈夫だって、し、しばらくしたら止るから、それまで待ってくれたら、聞けるようになるさ」

「……わかった。そこにティッシュがあるから、使えばいい」

「ん、ありがとう」

……。

……ちーん、ってか。

……。

ふぅ、やっと落ち着いた。

ほんと、親の前だと、子どもはいつまでたっても子どもなんだなぁ。

「ごめん、待たせて」

「何、今日の仕事は、重要な物を既に終わらせているから、気にする必要はない」

その言葉に、一つの企業グループを率いる会長としての貫禄を感じてしまうよ。

「じゃあ、遠慮なく。俺の仕事の話なんだけど、一体、どんな仕事をすればいい？」

「ああ、その前に話しておきたいんだが……、実は、アメノミハシラとモルゲンレーテから、本格的に軍需へと……、兵器開発にも参入して欲しいとの要請があった」

マユラが乗っていた脱出ポットが、ＢＯｕＲＵの技術というか、そのものから作り出されていたから、そんなこともあるのではと考えないでもなかったが、そうか、軍需産業に本格参入か……。

「でも、オーブの軍需って、確か、モルゲンレーテが寡占状態のはずだろう？　それなのに何でうちに声を？」

「本国が戦火で焼かれた影響で、モルゲンレーテ支社だけではアメノミハシラの要望に対応しきれないという事実と、今のようにモル

ゲンレーテの機能が低下した場合でも、国内である程度フォローできる体制をアメノミハシラが欲している事……、つまり、リスク管理だな」

「それは理解できるけど……、モルゲンレーテはそれでいいのか？」

「モルゲンレーテは半官企業だ。あまりにも無茶な事を言わなければ、基本的にアメノミハシラの意向には従うそうだ。それに、スズキ支社長からも、互いに切磋琢磨できるような、良き競争相手が欲しいと言われたよ」

「……なるほどね。それで親父はどうするつもりなんだ？」

「……少々、迷っている」

「それは、何故？」

俺の重ねての質問に、親父は眉間に皺を寄せると、搾り出すように声を出した。

「私には、ＢＯｕＲＵを本格的に作り始める時に決めた、一つのモットーがある」

「……モットー？」

「ああ。……自身の仕事を通じて、人が少しでも幸せになる為の一助になりたいという、目標だ」

人が少しでも幸せになる為の一助、か……。

「だが、軍需産業に主体的に参加するということは、そのモットーに反して、人から幸せを奪う事に繋がるのではないか、そう考えてしまってな」

「確かに、その可能性はあるかもしれないけど……」

「わかっている。武器は人の幸せを奪うかもしれないが、反対に、人の幸せを守る為の力にもなることはな」

「……結局、武器や兵器は、使う人の意志次第でどちらにでも転ぶ

ということだよな」

俺の言葉に頷いた親父は、少し間を置くと更に続けた。

「それを踏まえた上で、今回の戦争を生き抜いたお前にも聞きたい。……お前は、人に武器が必要だと思うか？」

……一度、首を振った後、改めて、もう一度、首肯して、口を開く。

「理想としては、人を傷つける武器なんて物はない方がいいに決まっているけど……、現実、武器を持った誰かから、幸せを奪われるかもしれない以上、自らも武器を持って、幸せを守るしかないよ。武器の放棄は、それこそ、今の人類にはできない、高すぎて遠すぎる理想だから」

そこに至るのは、俺達よりずっとずっと後の世代になって、もっともっと、人類が賢明になってからか、逆に、人類が滅ぶことでしか、達成できないだろうな。

「そうか」

ほろ苦さを感じさせる笑みを浮かべると、親父は瞑目した後、静かに頷き、語を繋いだ。

「アイン……、ラインブルグ・グループはアメノミハシラの要請を受け入れ、軍需に本格参入することにする。そして、お前には、この軍需参入の足掛りを作ることと、参入に成功した場合にはその舵取りを任せたい。……戦争で得た経験と感じた思いを活かして、グループの持つ力から、人の幸せを守る力を生み出してくれ」

「わかった」

と答えて、ふと、思う。

「……でもさ、俺みたいな若造に、そんなグループの未来に関わるような大任を任せていいのか？」

「何、お前なら安心して任せる事ができるという思いとは別に、現実的な面……、私も他の連中も自身の仕事をこなすのに手一杯でな、誰も手を挙げて積極的にやろうとする奴が……、要するに、引き受け手がいない。……だから、まぁ、面倒事をお前に押し付けるという意味合いも、多分に、あるにはある」

「ちょ、ぶっちゃけすぎっ！　……実の息子にそんな仕事を押し付けるのも、ひどくない？」

「その辺りは、私の息子に生まれた事を呪っておくんだな」

「おお、俺を我が母に仕込んだ人に、そんな事を言われるとは、嘆かわしいことだ」

軽口めいた言葉とニヤリ笑いで、俺の懸念を払拭してみせた親父に対して、俺も軽口で応えて、わざとらしく天井を仰いで見せるしかなかったが……、親父が語った思いは、俺の思いにも重なるから、しっかりと構想を練って、考えていこうと思った。

そんな真面目な話の後は、夜の歓迎会までの時間を使って、アメノミハシラに来てからラインブルグ・グループが結成されるまでの歩みを聞かせてもらった。

今現在、グループ企業で重役を務めている仲間達とアメノミハシラにやって来た当初は、ＲＳＦ（Ｒｈｅｉｎｂｕｒｇ　Ｓｐａｃｅ

Ｆａｃｔｏｒｙ）でＢＯｕＲＵを生産する傍ら、アメノミハシラの建設作業に参加していたそうだ。その建設作業もＢＯｕＲＵの活躍もあってか、非常に捗り、良好だったらしい。

しかしながら、建設作業が進捗すると共に構造体の表面積が広まると、当然の如く、周辺宙域から飛来するデブリが構造体に衝突する事故が増え始めたそうだ。

そんな衝突事故が起きる度に構造体から新しいデブリが撒き散らされた結果、建設現場の危険度が高まり、また、作業自体も滞ることを憂慮した親父は、仕事仲間達やアメノミハシラ建設を主導するモルゲンレーテとも協議して、再び、デブリ回収に手を出し始めたとのこと。

仲間の半分近くを周辺宙域のデブリ回収に回したことで、安全に作業ができる環境が再び整い始めた矢先、今度は建設や清掃作業を支える為の小型母船が足りなくなる事態が起きたそうだ。

なので、アメノミハシラの建設に関わる中で一番の生産力を誇るモルゲンレーテに母船の生産を依頼しようとしたら、Ｌ３のヘリオポリスはアメノミハシラの構造体ユニットやそれに関わる品々の生産や補修で手一杯の状況で無理だったらしい。

ならば、この際、ＲＳＦで小型支援母船の生産をしようじゃないかという流れになったのだが、悲しい事に、ＲＳＦにはその需要に応えるだけの供給能力、具体的に言えば、造船所がなかった上、設備も貧弱だった為に、初っ端から行き詰ってしまう。

こうなれば他所から買うしかないか、という流れになり始めた時、親父とパーシィの親父が音頭をとって、建設作業に参加していた仲間達や同業者に呼びかけて、後の宇宙建設の土台となる建設者組合を組織すると共に、ＲＳＦが月面都市から仕入れた鋼材やジャンク屋から下取りしたジャンクで生産する資材を使用する事で、造船所

を造り上げたとのこと。

そうやって、他所様に頼ることなく、デブリ回収や建設作業用に使われる小型支援母船の供給体制が整い、再び、建造作業が捗り始め、また、数年に渡り、大きな事故も起きなかった事から、このペースなら当初予定よりも早く完成しそうだ、なんて楽観的な事を考えていたら、アメノミハシラ（未完）の周辺宙域で演習中だったオーブ国防宇宙軍のミストラル部隊が、簡易ステーションや建設用建機の電源として利用している太陽光発電パネル群に突っ込んでしまい、建造計画を支えていた発電システムを崩壊させるだなんて、前代未聞の不祥事を起こしてしまった。

この宇宙における致命的な大事故で、最も重要なインフラである電力の供給量が、初期よりも建設に関わる人口が増えて、大幅に増築されていた滞在用ステーションの生命維持に必要な最低需要量に達しないという非常事態に陥ってしまったそうだ。

加えて言えば、担当部署のミスで、非常用電源である燃料電池やバッテリーの拡充が為されておらず、発電量や充電量が不足していたとか……。

国防軍の余りにも余り過ぎる失態と非常用設備の不備が重なり、建設計画の中断どころか、建設用ステーション自体を放棄しないといけないような、予想外すぎる事態に、あのモルゲンレーテが悲鳴をあげ、建設を管理するサハク家も事態の収拾と滞在用ステーションに居住する人員を避難させることに奔走する中、親父達というか、現場組はＢＯｕＲＵに備えられている非常用発電パネルを展開すると共に、それぞれの技能を生かして、個々のバッテリーとステーションの生命維持施設とを連結して、何とか、必要最低限の電力を供給する事で、小型母船や宇宙軍輸送艦の動力源から電力を流用でき

る体制が整うまでの時間を稼ぎ、ヘリオポリスから新しい太陽光発電パネルが到着し、再展開が為されるまでを、何とか凌ぎ切ったとのこと。

でもって、この致命的な重大事故に遭遇した親父は、この宇宙が、いつ何時、人が死んでもおかしくはない危険な場所であることを再認識し、また、ほぼ同時期に、俺がザフトに参加した事もあって、自分達が住む場所の安定化と俺が帰れる場所を確保して維持する為にも、もっと積極的にアメノミハシラの建設や運営に関われるようになろうと決断したらしい。

そして、思いを共有した仲間達が建設用ステーションで起業、経営していた企業群も巻き込んで、関係する取引先や権力者からの要望と仲間達の望みとの兼合いを量りつつ、事業の見直しと分割及び再編成を図ってグループ化を行い、対外的な発言力を確保するに至ったそうだ。

……な、なんていうか、グループ化するまで、結構、大変というか、長い道のりだったんだな、おい。

とにかく、親父が会長を務めるラインブルグ・ホールディングスの下、傘下企業となる宇宙工業、宇宙造船、技術研究所、宇宙建設、宇宙清掃、宇宙食品、宇宙発電、宇宙電気、宇宙保険、宇宙商船といった各企業の重役にここに至るまで共に頑張ってきた仲間達を据えることで、外部からの干渉を最低限に押さえ込みながら、アメノミハシラにおいては、モルゲンレーテと並ぶ企業グループとして、ラインブルグ・グループが形成されるに至ったのだ。

「……まぁ、グループが形成されるまではこんな感じだな」
「はぁ、親父も大変だったんだな」
「なに、戦争中に比べれば、楽なものだったさ」

との言葉の後、時間はまだ少しだけあるなと続けた親父は、ラインブルグ・グループが形成されてから戦争前半に起きた四月馬鹿と、その後の混乱期に至るまでを話し始めた。

０４　新生活の始まり　－アメノミハシラ　４

ラインブルグ・グループが形成された直後から、親父はモルゲンレーテとアメノミハシラの責任者であるサハク家に対して、アメノミハシラの大規模化……居住区画の拡大を訴え始めたそうだ。

この声に即座に応えたのは、俺も過去に会った事があり、今も親父が懇意にしているスズキ氏が代表を務めているモルゲンレーテ・アメノミハシラ支社だったそうだ。なんでも、建機として割高なミストラルではなく、安くて運用効率が高いＢＯｕＲＵを投入できた結果、資金に余裕が生まれていた事と、静止軌道という立地から発展の望みもある判断して、居住区画の拡大に賛同したそうだ。

この二社の要請に対して、アメノミハシラの建造指揮と運営を担当するサハク家もまた、しばらくの協議の後、ラインブルグ・グループも資金を提供するならば、との条件を付けて、建設計画の拡大と居住区画となるコロニー建設を認めたとのこと。

その決定を受けた親父はモルゲンレーテと協同しつつ、建設に参画する全ての企業やグループの総力を結集させるべく、？居住用コロニー建設一ヵ年計画？なんてモノを盛大にぶち上げて、煽りに煽ったそうだ。

で、その結果、たった一年という短い期間で、二基の居住用コロニーが建設され、運用が開始されることになったらしい。

……一つの目標に向けて、一致団結した時に生まれてくる人間の力って、凄いなぁ、と思わされる話だ。

こんな具合で建設されたコロニーの運用が開始されると、安定した居住空間を得た影響か、アメノミハシラの建設だけでなく、その他全体の作業効率が格段にアップしたそうだ。

また、人が居住区画に集住するに連れて、経済活動もこれまでとは段違いに活発化し、結果、オーブ本国からの移住者や新たに職や富を求める他国からの移民も増え始める事になったらしい。

日々、居住人口が増加して行くにつれ、アメノミハシラがただの中継ステーションではなく、世界樹コロニーのような一つの国際都市と呼べるような賑やかな様相を見せ始め、それに伴なって、自然と寄港する商船の数も増えて始め、コロニーの内部経済も膨れて行くという、アメノミハシラやコロニー建設に携わってきた誰もがホクホク顔をしていたら……、あれよあれよと言う間にプラントと理事国との関係が悪化していき、世界規模の戦争が始まってしまったとのこと。

親父や件のスズキ氏も、まさか、プラントと理事国の両者が、共に少しも譲歩することも妥協することもなく、開戦に至るとは思ってもなかったらしく、開戦の報道が流れるのを、二人揃って、ぽかーんとしながら眺めるしかなかったらしい。

で、宇宙全体の状況が一気にきな臭くなって、アスハの中立宣言を受けたアメノミハシラでも厳戒態勢が引かれる中、ユニウスへの核攻撃や世界樹の崩壊といった、非常に恐ろしい事が立て続けに起きたのを知り、宇宙に住む者として、また、アメノミハシラの建設に携わった者として、深甚な怒りと悲しみを覚えたそうだ。

そして、四月馬鹿……、エイプリル・フール・クライシスが起き

た。

四月馬鹿が起きた際、地球の夜面から灯りが消えた事を知った親父は、地球で起きている事の情報収集をアメノミハシラやモルゲンレーテ社と共同で行いつつ、ラインブルグ・グループの重役連中を非常召集し、グループとしての対応を協議したとのこと。

とりあえずはと、灯りが消えた事から電力不足が起きている事を推測して、非常電源用に使える大容量バッテリーと太陽光発電パネルのセットを在庫分を用意すると共に、工業や電気、それに電力の各社に、太陽光発電パネルとバッテリーの増産、そのバッテリーへの充電を指示したらしい。

そして、オーブ本国からの連絡船によって、地球各地で原子力発電が停止して、電力不足が深刻化している事と電磁波を利用する通信設備が不全になった事が判明した後は、まずは、電力不足で一番困る事を想定し、用意しておいた電源セットを、アメノミハシラにも支部を置く国際医療組織等を通じて、地球の医療機関へと無償で送りこんだそうだ。

親父は、この無償援助が地球諸国から有形無形の好意を受ける切欠だっただろうと、語っているが……、うん、その可能性は大だろうな。

話を戻して……、即応の対処を終えた後は、今後の対応として、技術研究所に、往還船に頼らないでかつ安価で地球へと物資を投下できるシステムの構築と既存のバッテリーの蓄電容量や燃料電池システムの発電効率の改良、低消費電力でかつ高出力なレーザー通信機といった物の設計開発を行わせると共に、食品には食糧プラントでの増産体制の確立を、工業と電気には先の件に加えて、燃料電池

システムの追加生産を、また、造船にも、アメノミハシラから地球軌道まで物資を運ぶ小型コンテナ船の新規建造を、それぞれに推し進めさせる事にしたそうだ。

そして、それら以外の企業群……建設にそれらの生産活動を支える施設群の維持と拡張を行わせ、商船、清掃、保険には連携させて、アメノミハシラ一地球軌道航路の選定と確立、デブリ排除による航路の維持、それらのリスク算定を行う等といったことをさせたらしい。

でもって、太陽光発電システム等の供給体制が、パーシィが開発したバリュートシステム……巨大な断熱用兼着陸用エアクッションとパラシュート、簡易逆噴射装置を複合した大気圏突入システム……による投下実験が成功したことで、磐石なものと判断されたのが五月上旬あたりで、その頃には、地球各国政府機関や企業、団体、個人から、太陽光発電パネルやバッテリー等といった電源関連の発注が相次いでおり、注文が溜まっていたそうだ。

そして、中立国に対しても威圧的なザフトの目を盗みつつ、それらの注文品を上手く目的地へと落ちるように突入投下タイミングを計ったりしながら、せっせと輸送船を往還させていたらしいのだが、親父曰く、その期間中、本当に気が休まる時はなかったとのことだ。

……いや、ザフトに所属していた者として、ごめんと謝っておくわ。

そんな思いを抱いていたら、どうやら日が暮れてきたらしく、応接ソファから親父が立ち上がって、声を掛けてきた。

「よし、話はまた今度にして、歓迎会の会場に行くとするか」

「あ、そういえば、どこでやるんだ？」
「無論、お前の家だよ」
……歓迎会を自分の家で開くのも変な話のような気がしないでもないが、まぁ、住宅を提供してもらった手前、大人しくしておこう。

◇　◇　◇

空の色というか、天井の照明が徐々に落とされて、青から夕焼けの赤に、そして、藍色というか、変な言い方かもしれないが、明るさをある程度保たれた夜の世界に切り替わった頃、新しい我が家となる二階建ての家屋、その内部のリビングと結構広い庭にあるウッドデッキを使用して、歓迎会が行われる事になった。

「えー、この度は「あー坊との再会と新しい出会いを祝してっ！カンパーイっ！」挨拶ぐらいさせろよ」

それも再会の挨拶や感謝の言葉も満足に述べる事ができないまま、パーシィの親父が叫んだ乾杯の合図でだ。

いや、まぁ、これくらいは別にいいけどね。

「ほらほら、あー坊、飲め飲めっ！」
「ちょ、え、こぼれるこぼれるっ！」
「あはははっ、今日はいい日だっ！　あのあー坊が俺達の所に帰ってきたんだからなっ！」
「うんうん、俺達ぁ、ずーーーっとっ、心配してたんだぞぉっ！」
「それが、また、あのやんちゃだったあー坊がこんなに立派になっ

て……、いやはや……」
「本当だな。……それに、可愛い娘さん達を三人も囲むなんぞ、男の夢まで実現するたぁ、……ちくしょうっ！　羨ましいぞっ！　この野郎っ！」
「「そうだそうだっ！　そうだぁっ！」」

で、俺は、父の古くからの仲間であり、ラインブルグ・グループ傘下の会社群の社長を務め、ホールディングスでも重役を務めるおっさん連中に囲まれ、延々と酒を注がれ続けている。要するに、あ～ん、あいつの酒は飲めても、俺の酒が飲めねぇのかぁ、このやろうっ、って奴だな。

……ちなみに、親父はベティの親父と共に避難済みだ。

っと、ととと、ごきゅごきゅ、ごくん、ってかぁ！

「うぁ、先輩、あんなに風に飲んで、大丈夫かな？」
「で、でも、アインさんも楽しそうだから……、いいんじゃない？」
「兄さん、昔から、おじさん達に可愛がられてからなぁ」

そとでレナたちが何かを言っている気がしたが、きこえな～い！

「いいのいいの、アイン君なら、あの人たちに任せておいたら、大丈夫よ」
「それよりも、あなた達、それで本当にいいの？」
「そうよぉ、別に男に都合のいいこと、認める必要なんて、ないわよぉ？」
「まぁまぁ、そこらは人それぞれに都合があるのよ。……それよりも、男としてのアイン君って、どんな感じ？」
「あ、それは、私も興味あるわねぇ」

おっさん連中の奥さま達が、レナ、マユラ、ミーアを囲んで、なにやらはなしているのも、きこえな～い！

「へぇ、そいつぁ、ますます仕事が楽しみになる話だな」
「うん、僕もシゲさんにナナを紹介するのが楽しみだよ」

会じょうのかた隅で、パーシィとシゲさんが、はなししてるのも、きこえなぁ～い！

「そう、実家に帰ったら、行方がわからなくなっている彼氏を探すつもりなのね」
「はい、キラに会って、酷い事した事をちゃんと謝りたいし、……その、……やり直したいんです」
「……うん、そういうことなら、お姉さんも協力してあげるわ」
「えっ？」
「だって、ロマンチックじゃないのっ、じゃなかったわね。あ、えー、恋する子を応援するのって楽しい、じゃなくて……」

アルすたーとはなしをしていたべてぃがじばくしたのもきこえなっ……うっ、お、おぶっ！

「げっ、まずいっ！」
「ばけつばけつっ！」
「おい、いそげっ！」

……その後のことは覚えていないというか、憶えていないったら覚えていないのだ。

……。

俺一人だけが醜態を晒した歓迎会が終わってから一眠りしたのだが……、幸いにも酷い頭痛もなく、何とも気持ちよく目が覚めた。もっとも、普段起きる時間よりも、かなり早く目が覚めてしまった為、暇を持て余していたりする。

なので、自室になった二階の一室からベランダに出て、そこに置いてあったベンチに腰掛け、早朝の街並みを眺める事にしたのだが……、悪くない。

空というか、天井の光も上手く黎明に似るように調整されている中、発光による放熱が押さえられた影響か、ほのかに朝靄が発生していて、それが街並みに上手く調和し、一つの絵になる風景を生み出しているのだ。

……まぁ、ちょっと、寒い気がしないでもないがな。

何気に、放熱が行き過ぎてるんじゃないかなと首を捻っていたら、後から耳に馴染み始めている声が聞こえてきた。

「アインさん、どこ？」

「ん、マユラか？　……ベランダにいるよ。あ、悪いけど、シーツ持ってきてくれない？」

「……うん」

うーん、マユラって、まだ、ちょっと、言葉使いとかに、遠慮があるような気がするんだが……、どうなんだろう？

「アインさん、持ってきました」

「ん、ありがとう。……って、どうした？」

マユラが俺にシーツを渡すと共に、ぎゅと、背中に抱きついてきた。

「どうしかしたか？」

「……私って、おかしいんでしょうか？」

「……ごめん、ちょっと話が見えない」

いきなり、自分っておかしくない、だなんて聞かれても困る。

「まぁ、ちょいと姿勢を変えよう」

「あ、はい」

とりあえず、マユラを俺の横にって、……何故、懐に潜り込んで座ろうと？

「ここが一番安心できるから」
「……わかった」

取り合えずは深く座りなおして、マユラが座れるスペースを確保して、身体にシーツを巻き付けることにする。

……うん、これで少しは暖かいな。

「で、いきなり、どうしたんだ？」
「え、えと、実は昨日……」

訥々と話したマユラの話をまとめてみると、どうやら昨夜の歓迎会で、奥さま連中に今の俺達の関係について色々と言われた為、不安になってしまったそうだ。
それに加えて、常日頃から抱えている、一緒に戦った仲間の行方が未だにわからない状況なのに、こんな風に安定した生活をしていてもいいのだろうか、という自己嫌悪や罪悪感もあって、心が不安定に揺らいでいるとのこと。

「そうだな、マユラの仲間の行方については、これから本腰を入れて調べる事にして……、俺達の関係については、まぁ、今の社会通念上、良くないだろうな」
「そう、ですね」
「でも、だからと言って、それに憚るつもりはないぞ？　……そもそも、俺は本来、欲張りだからな、とっ捕まえた獲物を逃す趣味はない」
「え、獲物って」

俺の物言いにマユラは苦笑しているが、偽りのない本音なのだ。

本音なのだが……。

「けど、普段、強欲を押さえつける為に強烈に働いている自制心の所為か……」

「所為か？」

「まだ、マユラとの関係については、少々、迷いが残ってる」

「……迷い」

「ああ、本当に？食べて？いいのかなぁっていう迷い」

「っ！」

俺が言った？食べる？の意味合いを、正確に理解したらしい懐の？獲物？が身を硬くしたように感じられた。

「俺達の出会いは、かなり異常だっただろ？」

「……うん」

「あの異常な状況で……、人の危難に付け込んで、好意をすり込んだって自覚があるからな、……どうしても、もう一歩、後一歩というか踏み出せないというか、手が出せないんだよ」

あの風呂場の一件の時点では、マユラは俺を好きだと言う気持ちは本当だと言ってくれていたが、今はどうだろうか？

……いや、そんなことを気にする前に、もっと、マユラとの触れ合いを増やして、互いの事を知っていこう。

自身の目指すべき所を再確認しつつ、更に言葉を紡ぐ。

「それに、マユラ。……お前、俺に遠慮してないか？」

「……」

沈黙は肯定と受け取ります。

「何となく、話し方というか接し方に、そんな感じを受けるんだ」

「それはっ！　……それは、アインさんが、私に遠慮してるから」

あ、そういう面もあるか。

「そうか？」

「うん……、レナやミーアちゃんを相手にしている時と、ちょっと違うように感じる」

……あ～、確かに、それはあるかもしれんなぁ。

「はぁ、私もレナみたいに、もっと女の子らしかったら……」

「こらこら、レナはレナ、マユラはマユラだ。方向性が違うだけで、二人とも十分、魅力的さ。あ、いや、まぁ、言葉だけじゃ信じられないだろうけど……、んんっ、とにかく、これからは、お互い、少しずつ、遠慮を取り除いていけばいいさ」

「うん」

……むむ？

今、この時、当人の賛同も得られた状況って、実はチャンスのような？

俄かに、内心の獣が、せめて味見だけでもっ！　と大きく咆えたのが聞こえた気がした。

「では、早速……」

「えっ？　……えぇ？」

「言っただろ、俺は、ただ、我慢していただけだって」

ぐいっと、マユラの身体を手前に強く抱き寄せて、芳しい女の香が漂い、男とは明らかに異なる肌理細やかな肌、そのうなじに唇を落とし、甘く噛んでみた。

「あぅ！」

ビクリと跳ねた反応に気を良くして、さらに、別の場所を甘噛みする。

「ふぁんっ！」

先の話にもあったように、実の所、マユラに対して、無意識的な抱き枕以外では、自ら意識して抱き締めたり、行動を起こすのは初めてだったりする。

「……だ、だめ、痕がっ」

「いや、わかってて残すんだよ。……マユラが、俺のモノだって、周囲に明示する為の、マーキングだからな」

「ッ！」

ちょっと耳元で囁いてみたら、一瞬、マユラの総身が震えたようだが、もうそんなことは気にせず、再び首筋に唇をあて、今度は舌でマユラ自身の味を味わう。

「ぁ、んぁっ！」

その味と漏れ出る艶かしい声に、我が息子が元気に起きてきたのを自覚しつつ、また、柔肌を軽く噛みながら、抱き締める為に使っ

ていた手を、パジャマの内側に侵入させて、滑らかな腹部をサラリと撫でる。

「ッぁぅ！」

ちょっと、こっちが驚いてしまうくらいに、マユラの身体が跳ねた。

もっとも、それ位の反応では俺の手が止られる状態ではなく、更に首筋に甘く歯を立て、服では隠せない位置に吸い付きながら、あの風呂場で一度だけ生で拝見した、あの我侭な胸に、手を添え……。

「え、えーと、先輩にマユラ？　盛り上がっている所、悪いんだけど、そろそろトレーニングの時間ですよ？」

お、凹(おう)っ！　なんとっ！

じ・か・ん・ぎ・れ（は～と）、と申すかぁっ！

だなんて、荒々しく息を繰り返す内の獣と熱り立った我が息子が揃って上げた、雄々しくも嘆きに満ちた叫びを表に出さないように努力しつつ、呼びに来てくれたレナに返事をする。

「わかった、すぐに行くよ」

「先輩……、物凄く残念って、本当に、よくわかる位に、……声と顔に出てますよ？」

「……気をつけます」

しょぼーん、とした気分で、マユラを促して立とうとしたら、マユラがすがり付いてきて離れない。

「えーと、マユラ？」

「……こ、腰が抜けて、立てないの」

とのことなので、トレーニング前に抱っこを、所謂一つの、お姫様抱っこする事になりました。

結果、大層、羨ましがった、レナとミーアが我も我もと名乗り出て、それに応えていた為、トレーニングの開始が遅れに遅れてしまった。当然の帰結として、朝食時間の遅れにも繋がり、アルスターから盛大な文句と厭味を受ける事にもなりました。

いや、ごめん、アルスター。

でもさ……、私ですら、パパやキラにやってもらったことないのにっ！　っていう言葉は、絶対に、俺の所為じゃないぞ？

０４　新生活の始まり　―アメノミハシラ　４（後書き）

１１／０６／３０　誤字修正。

０５　穏やかな日々　－ユニウス体制発足　１

アメノミハシラに来て、早三週間。
最初の一週間は引越しの荷解き等で忙しい日々を送っていたが、それ以後は、移住組各々がそれぞれに仕事を得て、新しい生活に馴染み始めている。
また、ラウから預かっていたフレイ・アルスターも、大西洋連邦に住む親類と連絡が取れたので、オーブ本国経由での帰郷が叶っている。別れの際に、実家の住所や連絡先を教えてもらっているから、たまに連絡を取ってみるのもいいかもしれない。

みんな、新しい環境に負けずに頑張ってるよなぁ、なんてことを考えている俺だが、グループの軍需部門立上げ責任者になった事もあって、ラインブルグ・ホールディングスの専務取締役になってしまった。おいおい、俺みたいな若造がそんな役職についていいのか、と驚いたものだが、実はずっと以前から……、具体的に言えば、グループ結成以前のＲＳＦ時代から、名前だけは書いてあったらしい。
とはいえ、名前だけと言うように、俺自身にはグループに貢献してきた実績もなければ、親父と共に苦労してきたわけでもなく、ただの親の七光りで地位と職を得る事ができたに過ぎない。

そう、たとえラインブルグ・グループの重役って肩書きがあったとしても、俺本人が虚飾に塗れた張子の虎と変わらんモノだから、他所様に胸も張れないって訳だ。

だから、その肩書きに見合うような存在になれるように、取っ掛かりとなる初仕事を成功させるべく、今のアメノミハシラに必要と

なるモノの把握する為、ラインブルグ・グループを支える愛すべき？おっさん連中？もといグループの重役である先達の皆様から、関連あるなしに関わらず様々な話を聞いたり、最近の各企業の経営状況や保有技術をまとめた内部資料を拝見したり、幼き時に俺が教えて以来、パーシィが気に入っている文言……？こんなこともあろうかと？の判が押された第五開発部の研究開発資料を漁りながら、親父から委ねられた軍需関連進出基本計画を必死に練っていたりする。

今の所、グループとして開発に手を出そうと考えているのは、グループ自慢の逸品であるＢＯｕＲＵの軍事転用品と幼きオノコの憧憬と漢のロマンの体現であるＭＳ、それを運用する為の艦艇だ。

付け加えれば、この計画の根本というか基本思想は、前に親父が口に出した、人の幸せを守る力、に据えている。

そして、今日もまた、本社ビル内に用意してもらった一室にて、纏まりつつあるアイデアを更に具体化する為に、あーでもないこーでもない、あーしたいこーしたい、と頭を加熱させている最中だ。

そんな俺を補助してくれるのは、レナではなく……。

「アインさん、これ、言われていた資料」

「ああ、ありがとう、マユラ」

マユラだったりする。

いや、当初はレナに仕事を手伝ってもらっていたのだが、仕事を開始して僅か一週間で、レナの仕事振りに感心した親父とベティに秘書として取られてしまったのだ。

その際に、親父及びベティ曰く、会長の仕事が滞りすぎると、グループ内の調整や対外交渉が上手くいかなくなって、傘下企業も円

滑な運営ができなくなるし、軍需参入計画もスムーズに運べなくなるってことらしい。
ならば仕方がないという事で、一応、新しい秘書が見つかるまで、っていう条件で承諾してレナを送り出したんだが……、次の秘書は中々に見つからないようだ。

で、その結果、今度は俺の仕事というか作業に影響し始めた折、これまで所属していた国防陸軍からアメノミハシラに司令部を置く国防宇宙軍へと転籍する事で、オーブ国防軍への復隊を正式に認められたマユラが、先の漂流……俺に救助される切欠になった事情というか、関係者や事実を隠蔽する意味合いもあって、予備役に編入されることになった。
で、このマユラの予備役編入を、天の配剤或いは母のお導きだなんて考えた俺は、親父の許可を取って、秘書として引きこんだのだ。

……。

実は、マユラがオーブ軍に復帰するにあたり、懸念していた事があった。

その懸念というのは、マユラがオーブにとって不都合な真実に関わっていただけに、口封じの為に軍内で飼い殺されるか、下手すりゃ、死人に口無しという事で、事故に見せかけて殺されるかもしれないと危惧していたのだ。
だから、親父にそれとなく宇宙軍を牽制して、マユラを守ってもらえるように頼んでおいたんだが……、アメノミハシラの対応を見ると、俺の穿ちすぎだったんだろう。

まぁ、俺のちょっと的外れだった対応は置いておいて……、俺の秘書に収まったマユラだが、あの歓迎会の夜というよりは、その翌

朝のやり取りが契機だったのか、俺はもちろん、レナやミーアにも遠慮する事が無くなり、本当の意味で本来の自分を表に出し始めた。
レナを何かとライバル視して、様々な事で張り合っては犬と猫のじゃれ合いのような衝突をかなりの頻度でするようになったし、ミーアが時折見せる天然ボケに対しても容赦なく手と口による突っ込みをいれているし、俺に対しても話し方が砕けた上に、より率直に甘えてくるようになったのだ。

今も、椅子に座っている俺の後から抱きつくようにして、俺が目を通している、自身が宇宙工業からもらってきたＢＯｕＲＵの生産状況関連資料を覗き込んでいる。

「アインさん、ＭＳを作るんじゃなくて、ＢＯｕＲＵを使うつもりなの？」
「いや、ＭＳにも手を出したいとは思ってるけど、まずは信頼がある物を使って、先にできそうなものから、取り掛かった方がいい気がしてな」

やはり生死を左右する兵器においては、まず、運用側からの信用と信頼が大切なのだから、生産実績のある物を応用して、生み出した方が良い筈だ。

「ふーん。……あ、そういえば、今さっき聞いてきたんだけど、ＢＯｕＲＵって、アインさんとおと……会長が一緒に作ったんだよね？」
「ああ、開発という意味ではそうだけど、実際に作ったのは、最初の試作機から十機程度さ。今、生産している奴はパーシィが何度も改良を加えた奴だし、本人の話だと、今でも定期的に、現場から上がってきた意見や信頼できるようになった技術を組み込んで、より顧客のニーズに合うように改善しているらしい」

ちなみに、【Ｍ１アストレイ】……オーブの現行主力ＭＳの脱出装置として採用されていたＢＯｕＲＵの内殻部は、うちが開発生産したものではなく、モルゲンレーテがうちからライセンスを取って、コックピット兼脱出機構に改装したものであり、中身の操縦装置に関してもモルゲンレーテが独自に開発したものだったりする。

「へぇ、そうなんだ」

感心半分、納得半分といった語調の言葉と共に頷いたらしく、マユラの頬が微かに俺の頬をかすめる。その瑞々しさを感じさせる滑らかさや柔らかさ、更には人肌という程良い温もりに、俺の注意が向いている間に、マユラは更に続ける。

「でも、ＢＯｕＲＵがなかったら、撃墜された時に、きっと、私、死んでいたんだろうなぁ」

「……なぁ、マユラ。あまり、そういうことは考えない方がいいぞ？」

「わかってる。……でもね、現実、アインさんが作ったからＢＯｕＲＵがあって、そのＢＯｕＲＵが撃墜された私の命を守ってくれたの。それに加えて、アインさん本人が遭難していた私を助けてくれたんだからさ、……この出会いに運命を感じちゃうのよねぇ」

「は、はは、そういうものなのか？」

「ええ、そういうものなのっ！」

ＢＯｕＲＵに関しては、本当の意味での自身の発想ではないだけに、ちょっと後ろめたい気分だが……、ぎゅっと首に絡み付いている両腕や頬に掛かる甘い息遣いを思うと、まぁ、悪くないな、うん。

「さ、さて、マユラ、そろそろ、仕事をしようか」

「ふふ、もしかして、照れてる？」
「まぁ、ちょっとって、んんっ、とにかく、仕事、な？」
「はーい」

との言葉で、仕事に戻ったんだが……、何気に仕事ができるマユラの、さっぱりしたショートヘアとキビキビとした動作が、、重力区画に赴く事があることを踏まえて、ラインブルグ・グループが女性社員に供与している社服……黒のパンツスーツと相まって、レナとはまた違った方向で栄えるんだよなぁ。

マユラの何気ない仕草やキリッとした顔を盗み見で愛でつつ、軍事用ＢＯｕＲＵにどんな武装を施そうかなぁ、なんて事を考えていると、俄かに部屋の通信端末が着信音を奏で出した。即座に、秘書席というか机の一つに座っていたマユラが端末に向かい、対応を始める。

「はい、こちら十九番企画室です……って、レナじゃない、どうしたの？」

どうやらレナのようだった。

「あ、うん、わかったわ、今からアインさんとそっちに一緒に行くって、……えっ？　何だか機嫌が良さそう？　だ、誰にだって、そういう時もあ、る、……なっ！　そ、そんなことしてないわよっ！　は？　その動揺があやしいって？　そんなこと言ってるレナこそ、プラントにいた時は、毎日、いっつも機嫌よく帰って来てたじゃない！」

……長話になりそうだし、先に行く準備をしておこうかな。

◇　◇　◇

予定よりも若干遅れて俺とマユラが会長室に赴くと、親父とその秘書であるベティとレナが待っていた。

「お待たせ」

「おお、珍しく遅かったな。もしかして、今、忙しかったのか？」

「いや、ちょっとね」

その言葉と共に、ちらりとレナとマユラを見ると、二人揃って少しだけ恥ずかしそうにして、それぞれがソッポを向いた。それをベティが含み笑いで見ていることからも、原因を知っているようだ。

まぁ、これは後で二人を弄るネタにするとして……。

「それで、用事って？」

「うむ、ちょっと前にお前が頼んでいたことで大きな進展があってな。……まぁ、立ったままも何だから、二人とも座ってくれ」

親父に言われるままに応接ソファに腰掛けると、親父が早速切り出してきた。

「アイン、お前が頼んでいた、マユラ君の仲間……、例の戦闘に参加したオーブ軍の行方がわかったよ」

「っ！　ほ、本当ですかっ！」

俺が答える前に身を乗り出したマユラに、親父は相好を崩して頷いてみせるが、すぐに顔を引き締めて、厳かな口調で話し出す。

「だが、マユラ君も承知していると思うが、これは非常にデリケートな事だ。だから、絶対に、外での他言は無用だよ？」
「は、はい」
「うん。……では、先に結論から言おうか」
別に期待を引くわけではないだろうが、一旦、語を切った親父が少し間をおいてから、ゆっくりと言葉を続けた。
「マユラ君の仲間……、君の所属部隊は、今、オーブ本国にいることが確認されている」
親父の言葉にマユラの表情が一気に明るくなる。
「そして、これが伝手から融通してもらった、その部隊の今現在における所属者リストなんだが……、何分、軍機にあたるものだから、読了後、絶対に焼却処分をと念を押されている。よって、この場でしか見せられない。……いいね？」
「はいっ！」
マユラが期待に目を輝かせつつ、親父からベティを通じてリストを受け取るが……、その手が微かに震えているのがわかった。
……仲間の行方がわかったとしても、安否まではわかっていないのだから、無理はないだろう。
それでも、現実から決して目を逸らすことなく、気丈に向かい合う精神力は本当に大したものだと思う。
そんな思いを胸中に抱きつつ、真剣な表情を浮かべて、じっとリ

ストに目を通すマユラから目を逸らし、親父に礼を述べておく。

「悪いな、親父。今のリスト、入手が大変だったんだろう？」

「何、〝家長？である以上、困っている？家族？を助けるのは当然の事だ」

はは、それは何とも、頼りになる言葉だ。

「で、マユラの仲間っていうか、例のオーブ軍部隊は、今、オーブ本国にいるのか？」

「どうやら、そのようだ。融通してくれた人が付け加えた話だと、オーブ国防軍は先のヤキン・ドゥーエでの最終攻防戦に一切関わっておらず、全ての部隊が本国で復興任務に当たっていた、という事が公式になるそうだ」

「あー、やっぱり、一連の戦闘で部隊を率いていたのがオーブの前代表の娘……お姫さんだったから、隠蔽するんだな？」

「そう言い張る事でしか、連合や大西洋連邦から復興支援を引き出せないからな。……本当に、本土復興に加えて、この件の後始末をすることになったセイラン卿も大変だろう」

「セイラン卿？」

「ああ。オーブの宰相で、オーブ本国の復興を主導するセイラン家の家長、ウナト・エマ・セイラン卿だ」

「直接、見知っているのか？」

俺の質問に親父は頷いてみせると更に口を開く。

「セイラン卿はアメノミハシラへ何度も視察に来ているからな。スズキさんの紹介で引き合わせてもらってから、数回、話をする機会があった」

「へぇ、どんな人？」

「一言で言えば有能であり、より詳しく言えば、先の戦争で、オーブが戦火に巻き込まれないように裏で支えてきた現実主義者だな」
「そうなんだ」

親父の評価に頷きつつ、ちらりと、リストを見つめているマユラを窺うと……、少し、顔色が悪いな。

「マユラ、大丈夫か？」
「……あ、だい、じょうぶ」
「無理というか、我慢するなよ？」

言外に、ちゃんと慰めてやるぞ、って意味を含めて伝えると、マユラは少しだけはにかみ、また、リストに視線を落とした。

……多分、知り合いがＫＩＡ（Ｋｉｌｌｅｄ ｉｎ Ａｃｔｉｏｎ：戦死）かＭＩＡ（Ｍｉｓｓｉｎｇ ｉｎ Ａｃｔｉｏｎ：戦闘中行方不明）だったんだろう。

どうやってマユラを慰めようかと考えていると、視線をちょっと逸らしていた親父が咳払いでこちらの注意を引いてきた。

「んんっ。……それで、アイン、お前の仕事は進んでいるか？」
「ん～、まぁ、そこそこといった所かな？　……そういえば、聞いてなかったけど、期限ってある？」
「アメノミハシラにはもう本格参入する事を伝えてあるが……、今の所、向こうから、こういうものが欲しいという要望はないからな。後しばらく待ってみて何もなければ、四月頃に一度、こちらから提案を……、売り込みをしてみようかとは考えている」
「わかった。こちらから売り込めるような物は大体のイメージができてきているから、三月までに重役向けに説明できるよう、企画書

や計画書、仕様書とかの準備をしておくよ。っと、後、それに関連して、パーシィの開発部に試作とか頼みたいけど、いいかな？」

「ああ、構わない。こちらで関連企業に連絡を入れて、協力できる体制を構築するように調整しておく。……頼むぞ」

親父の言葉にしっかりと頷いて見せた後は、マユラが満足するまで、のんびりと待つことにした。

◇　◇　◇

で、再び、仕事部屋である十九番企画室に戻ってきたんだが……、リストに目を通してから、マユラの顔から笑みが消え、元気がなくなっている。やはり、リストに含まれていた情報は、精神的に打撃を受けるような内容だったと言う事だろう。

でも、独りで暗い顔をされるのはよろしくないな。

いや、もちろん、必ずしも、常にお日様のような笑顔でいて欲しい、だなんて難しい事を言うわけではないが、やはり、好んだオナゴに暗い顔をされるのは頂けない。

だから、俺が少しでも目の前の恋人を元気付けたいと思う事も、また、自然な事なのだ。

「マユラ」

「……あ、はい、何、ですか？」

ちょいちょいと、手招きして呼び寄せて、トントンと、自身の膝

を叩く。

「え、えと？」

「まぁ、座って座って」

マユラは若干の恥じらいを見せつつ、それでもこちらにやって来ると、大人しく膝の上に横座りに座ってみせた。しっかりと座ったのを確認してから、ぐいっと身体全体を抱き寄せる。

「あ……」

「マユラ、今日は、このまま定時まで、のんびりしようか」

「え、でも、仕事は？」

「何、明日で取り返せるように、頑張るさ」

うん、だから、こうして、明日、頑張る為にも、英気を養うのだ、って、いかんいかん、俺が充実、充電してどうするんだ。

……。

うん、そろそろ、真面目になろうか。

「それで……、知り合いは、無事だったのか？」

俺の質問に対して、マユラは少し俯くと、震える声で、それでも何とか、搾り出すように答えた。

「お、同じ、小隊の子が、ひ、ひとり、……え、ＭＩＡ、でし、た」

「……そうか」

どうやら俺の質問が悲しみを我慢する為の最後の堰を崩してしま

ったらしく、マユラは涙を堪える事ができなくなってしまったらしい。なので、左手を背中に回しつつ、右手でマユラの両膝を引き寄せる事で、より楽な態勢に変えてやる。

すると、マユラは両手を俺の背中に回したかと思うと、涙に濡れた顔を俺の胸に押し付け、本格的に泣き始めた。

二人だけしかいない静かな部屋の中、マユラの嗚咽だけが響く。

……その間、俺は、ただ、しっかりと抱き締めてやり、マユラが落ち着くのを待った。

……。

「落ち着いたか？」

マユラが胸に収まったままの顔を、小さく縦に動かしたのがわかった。

「マユラ、まだ、ＭＩＡなら可能性は残っている。……お前が助かったように、誰かがその子を助けているかもしれない」

正直に言えば、その可能性も、コックピット部がやられず、脱出ポットが正常作動していることが条件な上、宇宙という非情な環境

だけに相当に低いものなのだが……、マユラが助かったように、決して、絶対的なゼロではないのだ。

「だから、生存の可能性がある以上は、生きているって、信じるんだぞ？」

けれども、生きているかもしれないという希望をずっと抱き続けるのは、俺が口で言う程には簡単なものではないし、希望と絶望は紙一重の位置にある事を考えると、辛いことだ。

「けど、もしも、そう信じる事で、マユラが苦しくなったり、寂しくなったり、哀しくなったりしたら、俺が、いつだって、こうやって慰めてやるから、頼ってくれればいいからな？」

「……ん」

また、首が縦に動いたのがわかった。

形だけかもしれないが、こうやってマユラが応えてくれるのが、不謹慎だろうが、少々嬉しかったりする。そんな思いが知らず知らず身体の動きに出てしまい、更に強く抱き締めていると、マユラはごそごそとお尻の位置を調整し始めた。

何事かと思って腕の力を緩めると、マユラが急に顔を上げてって、もぐっ。

「……」

え、えー、今、私こと、アイン・ラインブルグは、マユラ・ラバッツにキスされています。

……ああ、唇から伝わる、ぷにぷにした感触がイイですなぁ、って、この姿勢だと、マユラがちょっと、しんどいだろうな。

なので、とんとん、とマユラの背中に合図を送り、一度、唇を離させる。

「マユラ、こっちを向いて、跨いで座って」

「ッ！」

充血した目に勝るとも劣らない顔色をしたマユラは耳や首筋まで紅く染めつつも、俺の言葉に従ってくれた。そんな具合で、より密着度が増した状態で、至近にあるマユラの顔を愛らしく感じながら、更に温もりを感じる為に抱き寄せる。

すると、マユラの熱い吐息が頬や首筋に当たり始め、自然、内の獣が熱く滾り始めてきて、背中に回した両手に力を込めると、マユラも両手を俺の背中に回し、しっかと抱き締めてきた。

……では、そろそろ、私の我慢も限界なので、美味しそうな唇を、イタダキマスデス。

という訳で、この日は、定時を知らせる終業ベルが鳴った後も、マユラが満足するまで、また、俺の？お腹？が一杯になるまで、その弾力に富む唇と滑る舌、湧き出る甘露を美味しく貪らせて頂きました。

うっし、明日の仕事っ、頑張るぞっ！

って、あれ、結局、俺が充電してる？

06　穏やかな日々　－ユニウス体制発足　2

C．E．72年2月16日。

今日、この日、約五ヶ月間に渡るプラントと地球連合との講和交渉が実り、地球周回軌道を巡るユニウス・セブン跡近くにおいて、講和条約が結ばれる事になった。

その条約内容については省略するが、とにかく、この講和によって、約二年間に及んだ地球圏規模の大戦争が終わる事になる。

で、その講和調印式典の様子をアメノミハシラのメディアが生放送すると知り、頼んでおいた作業の進捗を把握するついでに、ザフト時代の同僚であるシゲさんと戦争終結を祝うべく、ラインブルグ・グループが占有使用する中規模無重力ファクトリーにある宇宙技術研究所内は第五開発部を尋ねたという訳だ。

「はぁ～、やっと、終わったねぇ」

生中継が終わり、第五開発部の一室にて、俺と共に式典を一緒に見ていたシゲさんが重い吐息と共に、微かに表情を緩めた。

「ああ、これで、戦争は正式に終わった事になるな」

「だねぇ。……でも、地球連合が崩れるなんたぁ、戦争中は思いもしなかったよ」

「はは、そうだね」

確かに、大西洋連邦の首脳陣は、自分達が主導権を握っていた地球連合が、まさか崩壊するだなんてこと、予想だにしてなかっただ

ろう。
　式典の席上、たった一人、微妙に顔を引き攣らせていた大西洋連邦の代表者と、プラント代表として出席していたカナーバ議員の澄ました顔とが、本当に対照的で、実に印象に残っている。

　いやはや、先の戦争は一応、引き分けた形になっているけど、当時、プラントは既に詰んだ状態であり、実質的に敗北していた事を考えると、交渉の席でそれを巻き返した上、相手の組織まで崩してしまうんだから、カナーバ議員の交渉能力には敬服を通り越して、畏怖の念が生まれてきそうだ。

　ほんとに、今回の講和条約って、外交史に残るんじゃないかな？

……。

　しかし、地球連合崩壊が、世界に新たな緊張状態をもたらすかもしれない事を考えると、戦争終結を喜んでばかりもいられないよなぁ。

「このまま各国の緊張が緩和していけばいいんだけどねぇ」
「うーん、どうだろう。地球連合が崩れる原因って、戦争の勝敗とかじゃなくて、大西洋連邦が地球連合を隠れ蓑にして、戦後、自分達が有利になるように、戦力配置を弄って、他国に犠牲を強いて漁夫の利を狙おうとしたり、月やアラスカで味方を巻き込んで戦略兵器を使用したり、信義にもとるような事を好き勝手やった事だしなぁ。こういった事を考えると、大西洋連邦とユーラシア連邦や東アジア共和国との間には、かなり大きな感情的なしこりが残っているはずだから、緊張状態が続く可能性もあるんじゃないかな？」
「いや、でもさ、東アジアは復興が上手く行かなくて汲汲しているし、ユーラシアも加盟国の離脱がするかもしれないって話なんだか

らさ、そんな余裕はないんじゃないの？」
「そうなんだけど……、もしも、ユーラシアが割れたとしても、？弱体化した？ユーラシアが東アジアに接近したら、大西洋連邦に国力的に見ても対抗できるんだよ」

今現在、ユーラシア連邦内部では、連邦離脱を希望する加盟国が連邦内で組織内組織と言えそうな連携をし始めている。例を挙げると、西欧諸国による西ユーラシア国家連合や中東諸国の中東ムスリム同盟といったものだ。

そして、先にあげた？弱体化した？ユーラシアとは、ユーラシア連邦の領域からこれらの国の領域を引いたモノであり、前世で言えば、ロシア共和国と東欧の一部、中央アジアの一部にあたる。

……もっとも、ザフトに所属していた時とは違い、頼りになる伝手はないから、各国メディアが垂れ流す情報とほぼ復旧がなった全世界規模の情報ネットワークにある幾つかの掲示板を巡回して、そこで溢れかえっていた情報から、俺が勝手に推測したものなので、本当にそうなるかまではわからない。

「でも、東アジアもユーラシアも、それぞれの政府がそうそう権力を手放すとは思えないよ？」
「確かに、どっちかの政府が潰れるみたいな非常事態が起きない限りは、無理だとは思うけど……」
「何事も可能性は無きにしもあらず、だね。確かに、もしもを想定すると、中々の強国が生まれるって訳だ」
「うん。……でも、まぁ、シゲさんが言った通りさ、普通なら、そんなことは起きないとも思っているんだけど、一応、可能性はあるからさ」
「はぁ、アインちゃんらしい。しかし、嫌な話だねぇ、ようやく、戦争が終わったってのに……」

シゲさんのボヤキに肩を竦めて見せていると、部屋の扉が開いて、ミーアが顔を覗かせた。

「あれ？　兄さん、来てたの？」

「ん、例の頼んでおいた件がどういう状況になっているか、見に来たんだ」

「あ、あれね。……うーん、試作機ができるまで、後、ちょっとって所かな。だよね、ナナ」

と、ミーアが話しかけたのは、ミーアの傍らで浮いている一m程の球形……小型のＢＯｕＲＵだ。

『肯定。後少しで試作機の組上げが終了しますが、それから二日程、調整に入りますのでお待ちください』

との、メッセージが小型ＢＯｕＲＵの中央部にあるディスプレイに映し出された。

「おおっ！　ナナちゃん！　俺に会いに来てくれたのねっ！　早速、俺の熱いベーゼをっ！」

『#！　ＮＯ否定殺否定拒絶否定否定ＮＥＧＡＴＩＶＥ否肯定否定否定嫌否定否定ＮＯっ！』

で、その小型ＢＯｕＲＵ……ナナを見たシゲさんが？いつものように？暴走し始めて、ナナに飛び掛かり、それをナナが軽くバーニアを吹かすことで、素早く避けた。

「ぎゃんっ！」

いと哀れ、シゲさんはそのままの勢いで壁面に衝突してしまうと、ぷかぷかと？水死体？の如く中空に浮かび上がり、沈黙してしまった。

「シゲさんも、もっと落ち着いたら、そこまで嫌われないだろうに……」

『落ち着いても、嫌！』

「いや、ナナ。あれでも、シゲさんは機械をこよなく愛する、本当に、いい男だぞ？」

「うーん、でもね、ナナを愛しすぎるあまりの、今みたいな暴走は、私も怖いと思うよ？」

『肯定！』

ミーアの意見に画面一杯に自己主張するナナだが、パーシィが作った小型ＢＯｕＲＵの中に入っている、パーシィが懇意にしていたモルゲンレーテの老技師から形見分けで譲ってもらった、人工知能搭載コンピューターだったりする。

いや、形見分けと表現したが、別にその老技師は死んでしまった訳ではない。パーシィの話によると、その老技師は、モルゲンレーテ退職を機に、これまで培った技師としての経験を辺境社会で活かしたいと、骨を埋めるつもりで火星開拓に参加することを決めたらしい。そして、旅立つ前に、何かと気が合い、研究や開発といった仕事でも付き合いが深かったパーシィに何かを遺していきたいと考えたそうだ。

そんな経緯でパーシィの元にやってきたナナだが、実は老技師が作ったものではなく、ジャンク弄りを趣味とする老技師がジャンク屋から買い取ったジャンクの中に含まれていたものだったそうだ。ナナと言う名前にしても、当初、ナナが収まっていた外装の刻印で辛うじて読み取れた？７？という数字から、ナナと命名したとの事らしい。

「まぁ、長い目で見てやってよ。ナナも、絶対に、シゲさんの良い所に気付くからさ」
『……肯てっ、違う！　これは勘違い！　駄目！　でも、確かに……』
「あ、あはは、兄さん、それ以上は、ナナがフリーズするかもしれないから、やめてあげてね」

確かに、ディスプレイ上に循環ルーチンめいた言葉が延々と表示されている事からも、ナナが混乱しているのがわかる位だし、ここはミーアの言葉に従い、これ以上、ナナには触れない事にしよう。

「それでミーア、仕事には慣れたか？」
「うん。パーシィさんやシゲさんも優しいし、仕事も凄いし、ナナもいるから楽しい」
「そうか、良かったよ」

我がいも……恋人の一人であるミーア・キャンベルは、パーシィ率いる第五開発部の茶坊主兼研究員として所属する事になったのだ。ミーアの上司となる二人の評価によると、機械工学は不得手のようだが、電子工学に強く、特に、人工知能関連は抜群と評価している。

「まぁ、あんまり、無理はするなよ？」
「んふふ、毎晩、お風呂で、兄さんの両手で、身体の隅から隅まで、マッサージ込みで、しっかりと洗ってもらってるから絶好調だもん。……あっ、そうだ！　今日は、私も久しぶりに兄さんの身体を洗ったげるね！　特に……、ふふ、兄さんのおっきな「げふんげふん」を念入りに！」

ふぐっ、それをここで持ち出すか？

「そ、それはそれで、大いに、楽しみにしておくが……、それでも、絶対に無理をするな」
「む、むぅ、……わかった」

それでもあえて強い調子で言い含めると、口を尖らせつつもちゃんと頷いたので、ミーアの額に唇を落とす。

「あ、また唇じゃない」
「……いや、ミーアが、記憶に一生残るファーストキスがしたい！って言うから、しないだけなんだが？」
「あうぅー。し、失敗だわ。あんな贅沢なこと、言うんじゃなかった」

レナさんやマユラさんから、また自慢されるぅ、と項垂れて嘆くミーアを生暖かく見守る俺でした。

◇　◇　◇

進捗状況を自身の目で確認して、宇宙技術研究所を辞した後、本社ビルに帰る事にしたのだが、その途上、中央構造体の中央通路や無重力区画と居住区画とを結ぶエレベータ内、降り立った市街地区の街中といった場所を通過した際、それぞれの場所において、地球連合とプラントとの講和が成立した事や地球連合が崩壊した事、それにオーブ本国が大西洋連邦の保護、実質的な占領から解放されるという事が、人々の共通の話題として上がっているようだった。

皆が皆、酷い戦争が終わり、オーブも主権を回復したと喜び、こ

れで生活も安定するだなんて具合に安堵しているようだが……、俺は、これから世界がどうなるのか、不安だったりする。

今の講和が成った勢いで協調に向うのか、それとも、各国が睨み合う緊張状態に陥るのか。

……できれば、世界が協調する方向へと向って欲しいもんだ。

っと、そんなこと漠然とした不安で遊んでいる暇があったら、俺は親父から託され委ねられている、俺の仕事をしよう。

そう結論付けた俺は、自身の仕事部屋と化している十九番企画室内で、技術検証及び試作機製作を頼んでいる第五開発部から定期的に上がってくる報告書を呼んでいる。

今、進めている計画は、ラインブルグ・グループがアメノミハシラへと軍需関連での売り込みを行う為の第一歩として選んだ、ＢＯｕＲＵを軍事転用した代物、所謂、軍用ＢＯｕＲＵって奴だ。

今日、シゲさんやパーシィから聞いて、また、この目で見てきた限りだと、パーシィに丸投げ、もとい、こちらが提示したコンセプトと要求した通りの性能を満たす、試作機の開発作製と量産機設計が順調に進められているみたいだし、予定通り、後一月もすれば、親父に実物や実演をして見せる事ができそうだった。

でも、本来、ＢＯｕＲＵは……、建設の、創造の為に作ったんだけど……、これも時代の流れって事なんだろうなぁ。

矛盾する物言いだろうけど、もう、ここは割り切って、破壊から人を守る為の破壊者になってもらう事で、妥協するしかない。

そう結論付ける事で、ちょっと沈んでしまった気を取り直して……、この軍用ＢＯｕＲＵを作るに当たり、あるコンセプトを基にして、売り込む際に、一つのシステムとして成り立っている事を印象付ける為に、前世の中二時代を思い出しながら、計画名と軍事用ＢＯｕＲＵに名前を付けている。

その名は……っと、通信端末が鳴り始めたって、今日、マユラは予備役の召集訓練日で休みだったな。

何故、卓上に専用端末が無いのかと不思議に思いながらも、自分の席を立ち、通信端末まで急いで行き、通信に応える。

「はい、お待たせしました、十九番企画室です」
「あ、先輩ですか？」
「おー、レナか？」
「はい、レナですよ。……えーと、それでですね、今から、そっちに行ってもいいですか？」
「……何か、あったのか？」
「あ、いえ、実は、今日、予定より仕事が早く終わったんで、ベティさんから、最近、遅い日が続いていたから、上がっていいって言われたんです。だから、その……、ここ最近、先輩とゆっくり話をする余裕もなかったから、相手をして欲しいなぁ、って」
「あー、確かに、レナも俺も、忙しかったからな」
「ええ、それで……、行ってもいいですか？」

以前、ゴートン艦長に言われた、自身のパートナーのメンテナンスもしっかりと、という言葉が脳裏に過ぎった。

「ああ、いいぞ」
「あ、じゃ、今すぐ行きます！　今日、美味しいちょこをもらった

んで、楽しみにしていてくださいね！」
「お、おお、わかった」

チョコを持参するつもりとは……、すっかり、ちょこ好きになったよなぁ、レナの奴。

でもまぁ、ちょこを食べさせる時とその後に見せる顔が、色っぽくなってきて、イイんだよねぇ。

こう、惚けて半開きになった口とか、艶かしく光る唇とか……、って、あれ？

今さっき、俺、何か、考えていたような気がしたんだが、何だったかな？

……。

うーむ、なんだっけか？

……。

むぅ、まさか、欲望に負けて、考えていた内容を忘れるとは……って、逆に俺らしいかな。

……。

……むー。

あ、思い出した！

確か、軍事用ＢＯｕＲＵの名前だったな。

俺が軍事用ＢＯｕＲＵに付けた厨二ネームは、って、来客のチャイム？

レナが来るには、幾らなんでもはや過ぎる気がするから、別の誰かだろうが……誰だろう？

そんな事を考えつつ、再び端末をオンにする。

「はい、十九番企画室ですけど、どちら……様？」

「せ、せん……ぱい、……来、まし……た」

「ええっ！　ちょ！　レナ、はや過ぎ！」

会長室からここまで、かなり遠いのに無茶しすぎだ！

なんて具合に肩で息をしているレナを慌てて室内に招き入れた、その後だが……、せ、先輩、み、水を、喉が渇きました、とのたまったレナに、これは大変と、急いで口中の水分を提供したり、止ることなく流れ出る首筋の汗を舌で拭ってやったり、落ち着いた後も仲良くちょこを分け合って二人一緒に栄養補給をしたり、レナの身体に疲れが溜まっていないかと触感で探ったりと、決して、いちゃいちゃではなく、メンテナンスをしっかりと行ったのは、余談である。

07　穏やかな日々　－ユニウス体制発足　3

三月に入って、国際社会が戦争が終わったという事実を認識し、平和の有難みを実感し始めた頃、技術研究所内にある第五開発部所管の格納庫で、親父にラインブルグ・グループが軍需参入する為の試金石にもなる軍事用ＢＯｕＲＵの試作機……、というよりも、企画段階でも説明していた、これらを運用する為の【ノルズ（Ｎｏｒｎｓ）】、正式名をＮｅａｒｂｙ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎａｌ　Ｒｅａｃｔｉｏｎａｒｙ　Ｎｅｔｗｏｒｋ－Ｓｙｓｔｅｍ．（近接作戦用反応システム※注：適当訳）と呼ぶ近接防衛システムをメインに説明しつつ、運用される試作機を見せたのだが、どうやら親父は満足してくれたようだった。

「よし、アイン、これでいってみよう」

「ということは、押し売りできそうか？」

「それはわからんな。私としては、これらの出来に満足しているが、相手が必要としなければ、無用の長物に過ぎないからな」

「それは、確かにね」

需要がないのに供給しても、捨てられるのが落ちだ。

そんな事を考えていると、常日頃から企画室での留守番ばかりだった為、今日初めて自身の目で試作機を見る事になるマユラが、ミーアとナナから説明を受けているのが見えた。

「だが、ＢＯｕＲＵベースでの開発だけあって、コスト面では断然優れている事もあるから、耳を傾けてはくれるだろう」

「まぁ、フル装備のＭＳ一機分で、兵装込みで十二機確保できる計算だからな」
「うむ、それに無人機である事も売りにできる」

無人機を使用する事で、それまで防衛関連の部署にいた人員を減らし、浮いた分の人員を他の部署で有用に動かせる事ができるはずだから、親父はそこを突いて行くんだろう。

正直言って、現状、戦力が少ないアメノミハシラは周辺宙域の防衛だけで手一杯のはずだからな。

「親父、押し売りまで、まだ時間があるんだろ？」
「ああ、四月の中頃辺りを目処にして、話を聞いてもらえるように調整している」
「なら、その間に試作機を動かしたりして、システムや機体の欠陥の洗い出しや設計の見直しとかして、もう少し改良してみるよ。機体の方もシゲさんとパーシィがまだ色々と弄ってるみたいだし、ミーアとナナも無人機に載せる人工知能やノルズの効率化を頑張ってるしな」
「そうか。皆、優秀な子達だからな、期待しておくよ」
「いやいや、そういうのはさ、口だけでなく、目に見える形でもしてやってくれ」
「ふふっ、わかった。なんらかのボーナスを提供できるようにしよう」

うっし、皆のボーナスゲットぉ！

だなんて喜んでいたら、こっちはこっちで、パーシィから詳しい説明を受けていたベティがこちらの視野に入ってきて腕時計を指差した。

「む、どうやら、次の仕事に向かう時間らしい。……やれやれ、久しぶりに現場の空気を吸えたというのに」
「そういえば、親父って、会長になってからはＢＯｕＲＵに乗ってないんだよな？」
「ああ、乗っていない。……だが、皆の生活を支える為と思えば、仕方がない事だ」
「もしかして、ストレス溜まってる？」
「それはない。なんだかんだ言っても、昔からの仲間が共にいて支えてくれているし……、今はお前もいる」
「おっと、それ以上は恥ずかしいことは言わないでくれよ？　……また、泣きたくないからな」

そうやっておどけてみせると、親父も再び笑みを見せた。

「さて、少々、名残惜しいが……、次の仕事に、アメノミハシラ商工会との会合に行くことにするよ」
「商工会との会合とは、それはそれは、大変ですなぁ、会長殿」

ラインブルグ・グループやモルゲンレーテが街に降ろす仕事を適度に分散調整して、できるだけ多くの企業に振り分けるという、難しい仕事へと赴く親父を送る為に、ザフト式ではない、素人がするような敬礼をして見せると、親父は露骨に呆れた顔をして、こう言ってのけた。

「なんとも、下手な敬礼だな、アイン」
「ザフト式は、もう勘弁だからな」

そう切り返すと、親父は失笑を隠せないようだった。

◇　◇　◇

親父がベティと共に次の仕事に向かい、パーシィ達第五開発部の面々も開発部に戻った後も、俺とマユラは格納庫に残って、ノルズで使う為に開発された三機種の軍事用ＢＯｕＲＵ兄弟、いや、ここはノルズらしく、あえて、姉妹機と言っておこう……、それら姉妹機を観察しながら、話をしている。

「ウルド、ベルダンディ、スクルドでノルズ、……ノルン三姉妹かぁ、カッコいいね」

「ああ、どうせなら、遊び心も込みで名前をつけてやろうと思ってな」

「ふふ、私、アインさんのそういう所も好きだからね」

「それは光栄」

俺の内で復活を果たした厨二魂が、今のマユラの感想を聞いて、非常に満足し、充実のあまりに、

いいいいいぃぃぃぃっっっっやあぁっっっほぉっうぅぅぅぅぅぅぅーーーーー！

だなんて歓喜の雄叫びをあげたのは放っておいて……、わざわざ、足りない頭を絞りに絞って、無理無理に、それぞれの名前をノルン三姉妹に当てた甲斐があったってなもんだ。

で、このノルズで使用される軍事用ＢＯｕＲＵだが、早くも【Ｂ

Ｉ（Ｂａｔｔｌｅｆｒｏｎｔ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｏｒ）】という型番が定められており、気が早いというか、まだ、採用される所か売込すらしていないのに、宇宙工業では生産ラインに使用する空間の確保や効率的なライン構築の検討が始まっており、直にでも、生産に取り掛かれるように前準備が進んでいるらしい。

この先走った動きも俺への信頼から来るのかもしれないが、少々、プレッシャーを感じてしまうのは仕方がないことだと思う。もっとも、逆に、俺個人の気の持ち方、考え方次第でプラスにもなるのだから、そちらに傾くように考えておこうとも思う。

「で、どうだ、マユラ。現物を見て、どう思った？」

「それぞれの機体にしっかりとした特色と役割があって、いいと思うよ」

「そりゃよかった。Ｍ１のテストパイロットを務めた人に言ってもらえると自信になる」

「あはは、でも、テストパイロットって言っても、私は本当に動かしていただけだから」

「謙遜謙遜、それに選ばれる事自体が一つの資質だよ。それだけ、癖のない素直な操縦をするって、上層部や開発陣に思われていたってことだからな」

開発する機体に、最初から変な癖を付けたら駄目だからな。

そんなことを思って褒め言葉のつもりで言ったのだが、当のマユラは恥ずかしそうでいて、微妙な顔をしていたりする。

「……う、うーん、アインさんにそう言ってもらえるのは嬉しいけど、本当に、実際は違うと思う」

「えっ、違うのか？」

「うん、Ｍ１の開発主任がね、軍に入る前に通っていた学校の講師

で何かと面倒を見てもらったり、色々と助けてくれた人だったから、その関係で引っ張ってくれたんだと思う」
「へ、へぇ、そうなんだ」
……その開発主任って、男じゃないよね？
なんて嫉妬めいた思いが表に透けて出てしまったのか、マユラがちょっと面白そうで、若干、嬉しそうな顔で言葉を続ける。
「……アインさん、その人が気になる？」
「あ、いや、そ、そんなことは、ないったら、……ないよ？」
「そう？　……本当にぃ？」
「ほ、本当に」
でも、ちょっと、胸の中で、こう、ムヤムヤっていうか、モヤモヤっとした、ムズムズする感覚が次々に湧いて来るんだが……、嫉妬は独占欲の表れとはよく言ったモノだなぁ。
何気に動揺を隠せていないらしい俺の様子に満足したのか、マユラはニコリと曇りのない笑みを浮かべると、気になる答えを述べてくれた。
「あはは、その人は結婚して子どももいる女の人だから、安心してよね。……そ、それに、前の、あの時が、わ、私、ふぁ、ファーストキスだったし……」
「……あの時は、本当にご馳走様でした。マユラの唇は、弾力と甘味に満ちていて、すっごく、美味しかったです」
「ッ！　も、もうっ！　アインさん、そんな言い方はしないでよっ！」

なんとか形勢逆転ができたので、照れ隠しで怒って見せるマユラをあしらいつつ、ちょっと真面目に、それぞれの機体について考える事にする。

まずは、三姉妹の一番機となる【ＢＩ－０１：ウルド（ＵＲＤ）】。

ウルドは、Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｒａｐｉｄ　Ｄｅｆｅｎｄｅｒ（無人早期防衛ユニット※注：適当訳）の略称から命名しており、ノルズと共に、他の二機にも関連する名をこじつけようと考えた切欠でもある。

で、このウルドだが、ノルズの防衛圏において一番外側を担当する、警戒と索敵、初期迎撃、侵入妨害を目的とした機体だ。その為に、センサー系及び通信機能の強化が図られており、探索範囲を広める目的で小型プローブが一機搭載されている。

無論、迎撃行動に必要な兵装も備えられており、主兵装としては、技研第五開発部と宇宙電気、宇宙工業がモルゲンレーテ製の兵器を参考に共同開発した１２．５ｍｍ四連装ビームガン、正式に量産する際にはビームファランクスと名付ける代物を一門、また副兵装としては、アメノミハシラというか、国防宇宙軍が近接機関砲として採用する予定のモルゲンレーテ製１２．５ｍｍ近接防御機関砲を二門装備している。

その他にも、シゲさんが来た事で開発に成功した多目的吸着剤、所謂トリモチと俺が遊び心で発案書に混ぜておき、パーシィも楽しそうに作った、侵入者警告用の発光及び赤青信号機を装備している。

そんなウルドの外観を述べれば、ＢＯｕＲＵのオペレーターが乗り降りしているハッチを前面と考えて、機体の前面中央部分に主兵装となるビームファランクスを嵌め込み、天頂部に通信用ブレード、天底部に小型プローブを装備、また、左右舷にはそれぞれ一門ずつ、

１２．５ｍｍ機関砲が装着される形になる。
背面には、スラスター用ランドセルが取り付けられており、機体の推進力を強化したり、攻撃時の姿勢制御を安定させたりする役目を担っている。
無人仕様となった為、操縦席や生命維持関連装置を取り払って生まれた内部空間には、ＢＯｕＲＵ本体に使用する燃料電池とは別に、ビームファランクス用の冷却剤や大型バッテリーの他、機体を制御し、届いた命令を実行したり、平時は自身で判断を下して行動する為の人工知能、ミーアとナナが頑張って創り上げた簡略なＡＩが搭載されている。

次に、三姉妹の二番機になる【ＢＩ－０２：ベルダンディ（ＶＥＲＤＡＤＩ）】だな。
ベルダンディは少々長い名前だが、Ｖｏｌｕｎｔａｒｙ Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ Ｒｅａｃｔｉｖｅ Ｄｒｏｎｅ ｆｏｒ Ａｔｔａｃｋ ｉｎ Ｎｅａｒ Ｄｅｆｅｎｓｉｖｅ Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ．（無人防衛用機動攻撃ユニット※注：適当訳）の略称であり、ノルズの防衛圏において、機動迎撃と敵の排除を主目的とする、いわば主力に相当する機体だ。
その為、三姉妹の中では最も武装が施されており、主兵装として、これも第五開発部と宇宙電気、宇宙工業が共同開発した３０ｍｍ二連装ビーム砲を一門、副兵装として、ウルドと共通になる１２．５ｍｍ近接防御機関砲を二門、更には、ＭＳが登場して以来、ずっと第五開発部が研究し、宇宙工業と共同で開発してきた、？こんなこともあろうかと？印の対ＭＡ・ＭＳ用重散弾砲や装弾総数二十四発の対ＭＳ用六連装小型ミサイルポット、対艦用二連装中型ミサイルランチャーといった装備の中から、二つ装備できる仕様になっている。

このベルダンディの外観を述べれば、ウルドと同じく、機体前面中央部に主兵装となる３０ｍｍ連装ビーム砲を嵌め込み、左右舷には１２．５ｍｍ機関砲が各一門装備されている。そして、天頂、天底部には先の強力な重火力兵装を取り付ける事となる。

機体内部に関してはウルドとまったく同様の仕様というか、基本的に内部は、三姉妹機全てに共通している部分が多かったりする。

背面のスラスター用ランドセルに関しては、ウルドよりも大型化されて通信系を装備している他、推進力がかなり強化されており、管轄宙域を飛び回れるだけの機動力を与えている。

最後は、三姉妹の三番機となる【ＢＩ－０３：スクルド（ＳＫＵＬＤ）】だ。

これもまた、Ｓｈｉｅｌｄｅｒ　ｏｆ　Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｌａｓｔ　Ｄｅｆｅｎｓｅ．（無人防衛用防御ユニット※注：適当訳）の略称から命名したもので、ノルズの防衛圏では最終防衛を担っており、攻撃からの防御と援軍や迎撃機が到着するまでの時間稼ぎに特化した機体となっている。

スクルドの一番の特色としては、先の二種とは違って主兵装を持たず、電磁式の対ビームシールドを装備している所だろう。この第五開発部と宇宙電気が共に開発を進めてきて、シゲさんが来た事で実用化できた、電磁式対ビームシールドはシールド前面に機体サイズ以上に大きな磁場を形成し、磁場内に金属粒子を撒き散らして粒子層を構成、飛来するビームを磁場と金属粒子で大きく減退させて、防護対象の一撃死を防ぐのだ。また、本体シールドには非常に高価な対ビームコート塗料ではなく、スチール合金と水、セラミックで構成される複合材を二重に重ねた装甲で受け散らす仕組みになっている。

他には、微細な氷というか水粒子と磁気を帯びた金属粒子を利用するアンチ・ビーム爆雷が収まったポッドが二基装備されており、

これもまた、ビームに対する防御手段として使用される予定だ。直接的な攻撃及び防衛兵装としては、一応、他の二機同様に１２．５ｍｍ近接防御機関砲が二門装備されている。

　このスクルドの外観は先の二種とは異なり、機体前面に機体直径と同じ大きさの対ビームシールドをマニピュレーター等も使用して保持している為、前面はのっぺりとしている。もっとも、左右舷には例の如く１２．５ｍｍ機関砲が一門ずつ、天頂、天底部にはアンチ・ビーム爆雷ポッドがそれぞれ一基ずつ、装備されている事から、兄弟、もとい、姉妹機であることは見て取れるはずだ。

　また、内部に関しても若干異なり、先の二種では主兵装に使用されている冷却システムの換わりに、磁場式対ビームシールドに使用される金属粒子が詰まったタンクが二本載せられている。

　背部のランドセルにはスラスターの他に、センサー及び通信系が取り付けられており、その影響で、推進力に関しては先の二種よりも劣る物になっている。

　まったくもって、この短期間で、よくこれだけのものが出来たものだと思うが……、地道な研究の成果である？こんなこともあろうかと？のパーシィ印が捺された兵装設計図やＢＯｕＲＵの簡略な機構といったもののお陰で、搭載するＡＩの設計を除いて、兵装の試作はスムーズにいき、本体にしても既存のＢＯｕＲＵを僅かな改修しただけ済んだ為、あっ、という間に試作機を組上げることができたのだ。

　ちなみに、試作された兵装もそうなんだが、ＢＩで使用される装備品や兵装は、ほぼ全てがモジュール化されており、簡易に交換する事が可能になっている。その為、現場での改装でスクルドをウルドに仕様変更したりといった事が可能だったりするから、運用も楽なはずだ。

まぁ、これも一つの売りだなって、突然、マユラの顔が目の前にっ！

「んぐっ！」

マユラからの突然のキスに、何事だと混乱していると、唇を離したマユラが、ちょっと口を尖らせながら文句を言い出した。

「アインさん、目の前の？女神達？に気を取られるのも仕方がないかもしれないけど、それでも、ちゃんと、私の方を優先してよね」

「はは、女神様に嫉妬って奴か？」

「ッ！　そぅ……」

マユラに皆まで言わせず、その口をしっかりと塞ぎましたアインです。

……まぁ、女神様達が見ている前でなんですが、一時休憩ということですな。

０８　穏やかな日々　－ユニウス体制発足　４

４月１１日。
今日はモルゲンレーテ・アメノミハシラ支社の協力を得て、量産試作機によるノルズの最終運用実験……模擬戦闘を行う事になった。

今から試験用に確保した宙域において、モルゲンレーテのテストパイロットが駆るＭ１アストレイ三機……一個ＭＳ小隊による侵攻を、ＢＩ十二機……【ＢＩ－１】ウルドが三、【ＢＩ－２】ベルダンディが六、【ＢＩ－３】スクルドが三の基本編隊が迎撃している最中である。
もっと大規模に試験ができれば、より現実に近い結果が得られるのだが、流石に受注もできていない段階である為、そこまでの資金を動かすわけにはいかないのだ。

ちなみに、本日用意したＢＩ……ウルドとスクルドは基本兵装だけだが、ベルダンディに関しては基本兵装を最終決定する為に、汎用性が高い小型ミサイルポットのみを装備したタイプと広範囲に宙域を制圧できる重散弾砲と小型ミサイルポットを組み合わせたタイプの二つを用意していたりする。

まぁ、そんな訳で、中古で手に入れたという技術研究所所有の中型輸送船内に特別に設えたノルズの管制室から、ゲストと共に模擬戦闘の様子を見つめている。

「ＢＩ－１０１がＩＦＦ反応のないアンノウン（所属不明機）を三機発見しました」
「ノルズが航路プランとの照合した結果、アンノウンに該当するプ

ランがない事を確認」
「ノルズから管制官へのアラート及び注意喚起を確認。また、アンノウンに対して、国際共用通信によるコンタクトを行います」
「……ネガティブ」
「アンノウンは依然として接近中。ノルズは国際緊急用回線での通信及び発光信号による警告を発します」
「……ネガティブ」
「アンノウンの増速を確認しました。ノルズは規定により、スクランブルを発令。ＢＩ－１０１、アンノウンに信号弾及び発光信号による最終警告を発します」
「……ネガティブ」
「ノルズはアンノウンをバンディット（敵性体）と判断し、以後、各アンノウンにバンディット１、バンディット２、バンディット３のコールサインを割り振ります」
「管制官からの指示がないことから、ノルズは自動迎撃を開始」
「ノルズはＢＩ－１０１を基点に第一防衛線を形成します」
「哨戒中のＢＩ－１０２、１０３がＢＩ－１０１の支援の為、第一防衛線に急行中」
「警邏中のＢＩ－２０２、２０４が増援の為、第一防衛線に急行します」
「待機中のＢＩ－２０１、２０３、２０５、２０６が起動、出撃中」
「ＢＩ－１０２が第一防衛線に到着、迎撃を開始します」
「ＢＩ－２０５、２０６がバンディットの想定侵入路に進出中、第二防衛線を形成予定」
「ＢＩ－２０１、２０３は第二防衛線後方での待伏せの為、廃熱の抑制を開始します」
「ＢＩ－１０１の被撃墜を確認。……ＢＩ－１０３が第一防衛線に到着、迎撃を開始」
「休止中のＢＩ－３０１、３０２、３０３が起動、防衛対象付近への展開を開始します」

ノルズを管理するオペレーター……ではないのだが、一時的に親父から返してもらったレナと結構慣れた感のあるマユラがノルズの端末に映し出されている戦域情報や状況、こちらの対応といった事を、随時、読み上げてくれている。今回の模擬戦闘試験では全てをノルズによる自動迎撃に任せる為、こちらからの対応操作は行わないのだ。

そんな事を考えている間にも刻一刻と目まぐるしく変化していく状況は、あの戦場の張り詰めた緊迫感を思い出させてくれる。

「ＢＩ－１０３が被弾、撃墜されました。ＢＩ－２０５、２０６が第二防衛線を形成します」

「ＢＩ－２０２、２０４が第一防衛線に到着、迎撃を開始。……バンディット3を撃破」

マユラが伝えた情報……敵機撃破の声に、つい、口元が弛んでしまう。

なんとなれば、これだけでも元が取れた計算になる為だ。

「ＢＩ－２０２が被弾、撃墜されました。バンディット1、2、第一防衛線を突破します。ＢＩ－１０２はプローブを展開、周辺の索敵を開始します。ＢＩ－２０４は支援警戒を開始します」

「ＢＩ－２０５、２０６、第二防衛線で迎撃を開始。……回避、回避、バンディット二機の第二防衛線の突破を確認、ＢＩ－２０５、２０６は追跡を開始」

お、撃破に拘らず、迎撃を無視して、突破を図るとは考えたな。

「ＢＩ－２０１の管轄エリアにバンディットの侵入を確認、迎撃を開始します。……バンディット2を撃破しました」

まぁ、だからこその待伏せだけどな。

「ＢＩ－２０１の被撃墜を確認。バンディット一機、依然、侵攻中」
「ＢＩ－３０１、３０２は想定侵入方面に展開済、ＢＩ－３０３は防衛対象直近に待機中、第三防衛線は防衛態勢に入ってます」
「バンディット1、防衛対象への攻撃を開始。……ＢＩ－３０２及びＢＩ－３０３の電磁シールドで阻止に成功」
「ＢＩ－２０２、２０４が第三防衛線に到着、迎撃を開始します。……バンディット1を撃破しました」

う～ん、大体は想定通りだけど……、これは上手くいき過ぎだな。

あまりにも上手く事が運びすぎた事で浮かれそうになる心を戒めつつ、傍らでナナと共にノルズやＢＩのＡＩに不備が発生していないかを監視していたミーアに声を掛ける。

「ミーア、スクランブル発令からバンディット1が防衛対象への最初の攻撃まで、どれ位の時間が経ってる？」
「えーとね、五分弱だよ」
「……なら、普通だと、迎撃部隊のスクランブル発進はできているはずだな」

このシステムの本来の目的は単独での敵撃退ではなく、あくまでも迎撃ＭＳが発進するまで、本格的な迎撃態勢が立ち上がるまでの時間稼ぎだから、まぁ、及第点といったところだろう。

そんな事を頭の中で考えていたら、ラインブルグ・グループが本

格的に作った軍需関連製品の初披露ということもあって、ゲストとして招待していたモルゲンレーテ・アメノミハシラ支社長であるスズキ氏が感嘆が込められた声をあげた。

「これはまた……、あなたの父上からは聞いていましたが、よく短期間で、これだけのものを作りましたね」

「いや、全ては優秀なスタッフのお陰ですよ」

「また、ご謙遜を……。しかし、いやはや、アメノミハシラを守る強力な盾を手に入れることができると喜ぶべきか、我が社に強力なライバルが生まれた事を悲しむべきか、実に、悩ましいことです」

「何を言ってるんですか、スズキさん。モルゲンレーテがなければ、ラインブルグ・グループは存在してませんよ」

そう、モルゲンレーテ、いや、目の前のこの人がいたからこそ、ラインブルグ・グループは誕生したのだ。

「そう言ってもらえるのは嬉しいですが、いや、今日のこれを見ると、我が社も胡坐をかいてはいられないと実感させられましてね」

「はは、本気になったモルゲンレーテは怖い存在ですね。……ですが、ラインブルグ・グループは過去に受けた恩義を忘れませんし、スズキさんやモルゲンレーテの信用や信頼を裏切るようなこともしません。今後もモルゲンレーテとは親しく付き合って行きたいと考えています」

「ええ、わかっていますとも。……ラインブルグ・グループの力、確かに、見させて頂きましたよ」

すっかり頭頂の髪を無くしてしまったスズキ氏は、艶やかに輝く頭皮の下にある顔に、嬉しそうな笑みを浮かべて、そう応えてくれた。

◇　◇　◇

先の最終試験で五回行った模擬戦闘の結果は、二勝三敗。相手方のパイロット達の試行錯誤によって、ノルズの負け越しと相成ったのだが、無人機で構成された防衛ラインによって、一定の時間稼ぎが可能である事は証明できたので非常に有意なものだった。

そもそも、ノルズに使われているＢＩは一機当たりの値段は、ＭＳ一機当たりの値段の十二分の一程度なのだ。ＭＳ一機を撃破するのに、ＢＩ十二機をすり潰しても構わないというか、それで兵器に掛かるコストではイコールになるのだから、当然なのかもしれないが……、とにかく、今回の模擬戦闘の結果でもわかるように、十分に元が、否、それ以上のバックが帰ってきている。

そこに加えてソフト面での優位性……有人機と無人機の違いという事もある。ＢＩに使用しているＡＩも高価な量子コンピュータとかじゃなくて、従来のノイマン型を使ってるからかなり安く抑えられてるし、パイロットを育てるコストも考えれば、数を揃えるには明らかにＢＩは優れていると言えるだろう。また、恐れを知らない無人機を初期迎撃に当てる事で、敵のパイロットに消耗を強い、引いては敵に多大なリスクを負わせる事と同時に、こちらのパイロットの消耗を抑える事にも繋がるはずだ。

また、組織運営面でも、無人機であるＢＩを防衛圏の構築に使用する事で、これまで防衛圏を維持する為に費やされていた人的負担を大きく軽減させる事もできるだろう。自然、これまで防衛圏構築の為に使用されていた人材を別の部署に配置する事が可能に、つまりは、別の用途に使える人材が増えるという事だ。

後、防衛任務に当たるＭＳパイロットにしても、警邏任務中に行うような付属的な訓練ではなく、様々な想定を考えての本格的な訓

練ができるようになるだろうし、結果、パイロットの技量も当然上がるはずだから、実戦でも撃墜される可能性が大きく減じる事に繋がるはずだ。

これらの点を強調すれば、ノルズがアメノミハシラに採用される可能性は高い。

そんなことを考えながら、アメノミハシラの中型無重力ファクトリー内にある大型格納庫に帰還させたＢＩの一群に視線を目をやると、宇宙工業や宇宙電気、それに技術研究所から出張ってきた技術者や整備員達がそれぞれが開発や製作を担当した物に取り付いて、一つ一つのモジュールを取り外しては、欠陥や故障が起きてないかを調べているようだ。無論、パーシィやシゲさん、それにミーアとナナもそれらに混じって作業をしている。

「むぅ、暇だ」

「……ぶっちゃけすぎですよ、先輩」

「そうだよ、アインさん」

で、俺とレナ、マユラの三人はそれを眺めている状態だ。いや、本当に、ただ、何もせず見ているだけ……、立ち会っているだけってのは、本当に暇なのだ。

「……触ったら駄目か？」

「専門は専門に任せる方がいいって、先輩、いつも自分で言ってるじゃないですか」

「うん、下手に触るとね、本当に、こっぴどく怒られるよ」

「……何だか、実感が篭った言葉ね、マユラ」

「うっ、……ま、まぁ、私も、Ｍ１のテストパイロットをしてた事があるからね」

「つまり、いらない事をしたってことなんだ」

ああ、これは何だか、レナとマユラの間の雲行きが怪しくなってきた。

……ここは、ひなぐへっ。

「い、いいじゃない、だから、今のアインさんの気持ちがわかるんだからさ」

「だ、だからって、いちいち、先輩に抱きつかなくてもいいでしょ？」

「ふふーん、って、レナ、後にしよう。……皆がちらちら、見てる」

「そうしましょう。……で、いつまで、抱きついているの？」

「あ」

マユラの腕が温もりと共に俺の首から離れて行く。

男として贅沢な悩みだろうが、いや、大きな嵐になる前に収まって良かった。

「でも、先輩、今日の実験、上手くいきましたね」

「ああ、実機だと簡単に落とされるのかな、って思ってたんだが、意外と当たらないもんだな」

「うん、あの一時も止まらないスライド機動って、当てにくいもんねぇ」

事前に行ったＭ１アストレイのＭＳシミュレーターを応用したＢＩの回避機動実験には、俺やマユラ、それにレナも参加したのだが、姿勢制御バーニアによるランダム回避を行う機能が優秀で、連携攻撃でないと直撃させるのは意外と難しいものだった。もっとも、異

常なまでに勘がよく、射撃の腕がいいレナには、ほとんど通用しなかったけどな。

その結果、回避プログラムを担当していたミーアやシゲさんは、レナの攻撃からＢＩを回避させるべく、プログラムを組むのに燃えたこと燃えたこと。

……で、そんな風に二人が切磋琢磨して出来上がった現行版なのだが、結局はレナの攻撃を回避しきれず、見事なまでに撃破されてしまっており、二人揃って、二日程真っ白になっていたが、それでも今日の結果を見たらわかるように、現実には十分に通用する出来なのだ。

レナの類稀な射撃能力を思い出して、その横顔を見つめていると、レナがこちらを向いて首を傾げた。

「……何か、付いてますか？」

「いや」

「付いてないよ」

どうやら、マユラも同じ事を思っていたのか、ほぼ同時に答えた。だが、これが気に食わなかったのか、レナは口を尖らせる。

「何だか、最近、先輩とマユラって、息が合ってきて、仲がいいですよね」

「いや、俺、レナとも息が合ってるし、仲もいいと思うけど？」

「うん、何だかんだ言いつつも、レナもアインさんとピッタリ合ってるよね」

二人揃って真顔で答えた為か、レナは若干頬を染めつつも、再び

口を開いた。

「それは、その……、マユラが羨ましいって言うか、そろそろ、私も先輩の所に戻りたいなって思って、つい」

……う、嬉しい事、言ってくれるなぁ。

「わかったわかった。親父にも早く戻してくれるように言っておくよ」

「はいっ！」

レナも嬉しそうな顔をしているし、うん、早い所、戻してもらえるように、言っておこう。

◇　◇　◇

そんなこんなで今日の模擬戦闘、最終実機運用試験の予定を全て終えて、業務が終了したのだが、まだ、ミーアが残って作業をしていたりする。

別に今日じゃなくてもいいだろうと説得をしたのだが、今日中にやってしまった方がいいの、と言って頑として聞き入れない事もあって、今日まで毎日大変だったパーシィやシゲさんに迷惑を掛けない為にも二人を先に帰し、俺が監督上司として、それに付き合っている。

本来、上司命令は絶対ではあるが、まぁ、ミーアにとっては初めての大きな仕事ということもあるから、その情熱に付き合ってのことだ。

だから今も、今後、開発しようと考えているＭＳとそれの運用艦艇について考えながら、ミーアの作業終了を待っているのだが……。

「……くぅ、これは……こう」

ミーアは端末に向った姿勢のまま、半分、寝かかりながらも、手を動かしていたりする。

パーシィやシゲさんと同じペースで仕事をしていたのに、まだ頑張るだなんて無茶をした結果だ。

こんな風に自身のペース配分や体調管理ができないあたりが経験不足ということなんだろう、なんて風に思いながら、これ以上の作業は不可能と判断して、ミーアを揺り起こす。

「ミーア、ほら、起きろ。帰るぞ」

「ん～、まだ、がん、ば、る」

一緒に待っていると言ったレナやマユラを帰したのは正解だったなと考えつつ、再度、ミーアを促す。

「ほれ、もう無理だって」

「や～、まだ、い、ける」

……根性だけは一人前だな。

だが、それも場合によっての良し悪しだし、これは強制執行しないと駄目だろう。

「ほらっ」

ってな具合に、ラインブルグの社服の上に、白衣に着たミーアを抱えあげて、端末から引き離す。

「う～、まだ、がん、ばるの」

「もう十分だよ」

「だめ、にい、さん、を、たすけ、るの、たりない、の……、じゃないと、れなさ、んや、ま、ゆらさんに、まけ、ちゃう」

……まけちゃうか。

「馬鹿だな、ミーアは」

「む～」

ミーアが唸っているが無視して、ミーアの寝惚けた顔に顔を付き合わせ、額と額が触れ合う距離で接する。

「そんなこと気にしていたのか？」

「だって……」

「ミーア」

「ん～？」

「そんなこと気にしなくても、ミーアは俺の大切な女の子だよ」

「むぅ～～～！」

あれ？

「おんなのこには、なっとくいかない！」

「うーん、なら、どうすれば、納得するんだ？」

「……」

……ははっ。

「そ、ん？」

またミーアが口を開く前に、唇で塞ぐ。

「……ッ！」

あ、ミーアの目が限界まで開いた。

……折角だから、ミーアが常々に憧れている、大人な対応もしてみよう。

「ッ！　ぁっ！　ぅっ！　んぅ！」

れろれろれろん、ってのはあくまでも比喩だが、それに類する動きをミーアの口中でやってみると、ミーアは身体を激しく反応させてくれる。その反応に気を良くしてというか、段々と楽しくなってきて、更に激しく動かす。すると、ミーアが俺の舌に自分の舌を絡め始めて来たので……、ますます、こちらも舌の動きに熱を帯びさせて……、つい夢中になっていると……。

「あぅっぁ、んぁッ！」

俺の口内に吸い込まれた喘ぎと共に、ミーアの全身から力が抜けたって、……あれ？

ミーアの反応が無くなったのを受けて、我に返ったら、いつの間にか、ミーアの頭をしっかりとホールドして、更にはミーアの足の

間に己の足を差し込みながら、身体を壁に押し付けていた。

……。

俺、もしかして、欲求不満なのかな？

って、いかん、ミーアは大丈夫かって、……あ、だめだ、気持ち良さそうに意識を飛ばしてる。

以前、レナにやったように、ミーアの呼吸確認や口周りを拭浄をしていると、ミーアがぼんやりとだが、意識を取り戻したようだ。

「どうだった、ミーア」
「ん～？」
「一生の記憶に残りそうか？」
「ぶ～、今の質問で台無し～」
「おまっ、……なら、どう言えと？」
「兄さんが自分で考えてね。……テークツー、はい」

……。

「ミーア」
「ん～？」

面倒、もとい、気の利いた台詞が思い浮かばないから、とりあえず、もう一度、ミーアの唇を頂く事にした。

……以後、ミーアの反応も良かった事から、どうやら、合格点は頂けた様だった。

09　人を守る礎　－MARASAI　PLAN　1

【ＭＡＲＡＳＡＩ　ＰＬＡＮ】とは、ラインブルグ・グループが軍需参入する為の基本計画であり、参入するにあたっての指針……基本路線を提示した物であり、俺が軍事用に開発する一連の兵器群のコンセプトでもある。

そして、この【ＭＡＲＡＳＡＩ】とは、Ｍｕｌｔｉｐｕｒｐｏｓｅ　Ａｄａｐｔｉｖｅ　Ｒｏｌｅ　ｉｎ　Ａｄｖａｎｃｅｄ　Ｓｉｔｕａｔｉｏｎ　ｆｏｒ　Ａｃｈｉｅｖｉｎｇ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ．（高度な状況において、迎撃を達成する為、多目的に適応する役割※注：適当訳）の頭文字を連ねたものであり、決して、前世の某ＳＦアニメで出てきたＭＳの名前ではない、ないったらない、関係ないんだからねっ、だなんてことを思い浮かべて、元ネタをわかってくれる人がいない事実に肩を落とす。

……まぁ、今更なことだけど、寂しいモノだ。

んんっ、気を取りなおして、先のノルズとそれに使用する三姉妹機も、当然の事ながら、これに沿ったものということになる。

で、何が言いたいかというと……。

「この度は、皆様のごきょ「アメノミハシラでのノルズ採用決定を祝してっ！　カンパーイっ！」だから挨拶をさせろと」

まぁ、要するに、アメノミハシラにノルズが採用されたって事は、ラインブルグ・グループのＭＡＲＡＳＡＩ計画が顧客に理解、評価されたという事であり、また、グループ自体も軍需産業への足掛りを得たという事だ。

そんな訳で今日は、身内というかグループの重役連中がノルズ採用のお祝いを……、というよりも、自分達がただ単に集って、大手を振って飲む機会が欲しいが為に、再び、宴会を俺の家で開く事になったりしている。

「わははは、ほら、あー坊、飲め飲めっ！」

「ちょ、あっ、あふれるあふれるっ！」

「今日もいい日だっ！　なんてったって、あのあー坊が初仕事を成功させたんだからなっ！」

「うんうん、俺達ぁ、本当に大丈夫か、ずっと心配してたんだぞっ！」

「それが、まぁ、あの悪戯坊主がこんなにも立派な仕事をしちゃって……」

「本当だな。……それに、こっちにも付随して仕事ができたし、ありがたいこったなぁ」

「でも、早い所、工業や電気だけじゃなくて、早い所、造船の方にも、大きい仕事を回してくれよ？」

「そうそう、うちの商船や奴の保険なんか、海賊被害が増えてきて、このままだと赤字決算になっちまうから、何か考えてくれよ」

「あははははっ、あー坊！　つまりだな、このままずっと、可愛い嫁さん達を囲っていたかったら、もっと仕事を頑張れってことだことになるんだが……、ちくしょうっ！　本当にっ！　あの子達、それぞれが魅力的で、羨ましいぞっ！　このやろうっ！」

「「「そうだそうだっ！　そうだぁっ！」」」

そして、一応の主催者である俺はというと、前回と同じく、ラインブルグ・グループの重役を務めるおっさん連中に囲まれ、延々と酒を注がれ続けている。要するに、あ～ん、酒は注いでも、俺の返杯は受けねぇってのか、このやろうっ、って奴だな。

……ちなみに、今回もまた、親父はベティの親父と共に目立たない隅っこへ避難していたりする。

っと、ととと、んぎゅんぎゅんぎゅ、ぷはぁ、ってかぁ！

「もう、また、先輩、あんな無茶してる」
「いいじゃない、レナ、今日位はさ」
「なんて言ってるけど、実はマユラさん、また、前みたいな事、狙ってるでしょ？」
「な、何言ってるのよ、ミーアちゃん、そ、そそ、そんなこと、ないよ～？」
「……マユラ、動揺しすぎ」

きゃいきゃいと、レナ達が三人揃って、やりあっているのも聞こえな～い！

「へぇへぇ、マユラちゃん、おばさん、今、ミーアちゃんが言ったことに興味があるなぁ」
「そうねぇ、アイン君があなた達をどう扱ってるのか、知っておかないとね」
「ええ、もしも、性欲の捌け口にしかしてないようなら、とっちめてやるわ！」
「まぁまぁ、落ち着いて……。それよりも、ほら、今は聞き出しましょうよ」

「そうよ、私もアイン君があなた達にどんなことをしているか、興味を引かれるわぁ」

おくさま連が三人を取りかこんで、しつ問大会をしているのもきこえな～い！

「うぅ、パーシィさんにベティちゃんよぅ、どうやったら、ナナちゃんに振り向いてもらえるんだろう？」

「う、うーん、多分、落ち着いた雰囲気を見せたら、マシになる、と、思わないでもないような気がする」

「あは、シゲさん、そこはこれまで通り、押せ押せでいいのよっ！　女の私が言うんだから間違いなし！」

シゲさんがじんせいそうだんしているのもきこえながっ！　ま、まずいっ！　あがってきやがった！

「お、そろそろだな」

「おう、今日は、予め、バケツを用意済みだ」

「ついでに、音源も用意しているから、今回は、他所の迷惑にはならねぇから、安心しろ」

お、おおっ、さすが、にどめだと、じゅんびがいいねっ！

では、しつれいしてっと、うぶっ。

……なんて具合で、以前と異なり、夜遅くまで祝宴を楽しませてもらいました。

そのため、限界を超えて飲んでしまい、当然の帰結として、翌朝には……。

「う、う〜、マユラ、みず、水ちょうだい」

二日酔いになってしまった。

「はい、もう準備しているから、飲んでね」

「あ、ありがとう」

その二日酔いで痛む頭を楽にするためにも、十九番企画室から改めて軍需参入計画推進室へと名前と内装を新たにした仕事場で、水を頂いている最中だ。

今の醜態からもわかるように、昨晩は確かに、常になく、少々はしゃぎすぎてしまったのだが……、計画というか、ノルズの押し売りに成功して、ラインブルグ・グループに継続的な仕事をもたらしたり、アメノミハシラ全体に新しく雇用が創出できそうなのだから、これ位は容認してもらいたい。

そんな事を考えながら、水を飲みつつ、装いを新たにした部屋を見渡す。

うん、前と違って、個人個人の専用机や椅子、情報端末や通信機器も入ったから、オフィスらしくなった。

このように、ラインブルグ・ホールディングス内に一つの部署として正式に立ち上がった軍需参入計画推進室には、名義上だけ室長になった親父の下、実質的な代表責任者として計画主任の俺と？2になる開発主任のパーシィがいて、事務側にマユラと今はいないがレナが、開発側にシゲさんとミーア、員数外だがナナが所属している。

もっとも、今は事務側にいるマユラとレナだが、今後、開発を予定しているＭＳのテストパイロットを務めてもらうというか、俺の中では既に確定していたりする。

で、この計画推進室が行う仕事だが、ラインブルグ・グループが軍需に提供する製品を定めて参入計画を練ったり、また、今の所は計画期間中だけの権限なのだが、グループ内各所から上がってくる軍事関連の発案や顧客からの要望や要請等を集約し、開発を進めるか止めるか、発注を受けるか受けないかを決めて、進めたり受ける事になった案件に関してはパーシィに伝え、第五開発部が実用化できるか等の可能性を検証をする。

そして、それらの案件が実用化できると判断されたり、ある程度の叩き台が生まれてきたら、今度は関連企業や他の開発部から担当者を選出してもらい、案件専門のプロジェクトチームを作って、実際に売れるか、採算ベースに乗るかどうかの更なる検証を行うと共に、生産計画の立案や量産試作品の作製を行う。

このプロジェクトチームで正規量産品の策定を行った後、各関連企業に実際の生産ができ、また改良計画が立てられる体制まで整えてからチームを解散し、プロジェクトに参加していたメンバーを各々の所属企業で案件関連部門の責任者にする、という所まで持って行くというものだ。

要するに、軍需参入への足掛りを作る事と、短期間の権限だが、軍事関連限定の取捨選択と顧客からの要望対応、案件毎のプロジェ

クトチームの結成をするってところかな。んで、そのプロジェクトが終わって、良い結果が出た場合は、チームに参加していた連中は所属している企業に戻って、その案件の担当責任者になるって寸法だ。

ちなみに、計画推進室立ち上げ直後に、宇宙軍から早速、もしも、ＭＳを作る時はこっちも協力するから連絡してね（意訳）との言葉を頂いていたりする。おそらく、先のノルズが？使える？と評価されたから、ＭＳ開発も技術的に可能かもしれないと判断されたという事だろう。

っと、頭の痛みが引いたな。

ちょっとの間というか、自らの仕事について考えているうちに頭の痛みが消えている辺り、俺もコーディネイターなのだと実感する所だ。

二日酔いの苦しみをほんの僅かで済ませてくれるなんて、親父と天上に住まう母上、本当に、ありがとうございます。

そんな感謝を胸中で捧げていたら、マユラが俄かに声をあげて、俺に話しかけてきた。

「そう言えば……、アインさん、来週のスケジュールに宇宙軍側の責任者とノルズの納入時期についての協議が入る事になったからね」

「あれ、ノルズの納入関連は宇宙工業の担当者がするんじゃないの？」

「ううん、そちらはそちらでするって話だけど、元々の計画立案者であるアインさんにも、一度来て欲しいって、向うの担当者から連

絡があったって、こっちに連絡が来たの」
「でも、俺はあくまで企画の起案を担当しただけに過ぎないし、実際の生産や以後の改良に関しては、宇宙工業に一任しているはずなんだけどな？」
「そう言ったんだけど、向こうが、是非一度、お会いしたい、って熱心に請われたらしくて、断りきれなかったみたい」

……なら、仕方がないか。

「わかった、なら、そのつもりでいるよ」
「うん。……でも、アインさん」
「なんだ？」
「ノルズの軍向けプレゼンテーションから思っていたんだけど、普通、ああいう席って、計画立案者が説明したりするのが一般的なのに、どうして出席しなかったの？」
「いや、俺の前歴が前歴だからさ、今の所はできるだけ目立たない方がいいんだよ」
「あっ……、そういうことなんだ」

いや、親父からは堂々と出席すればいいって言われてはいたんだが、俺の前歴がザフト隊員だったことを理由に、今回というか、しばらくの間は勘弁してもらうことにしたのだ。

社会的……、国際社会的に考えると、ザフト隊員として先の戦争を戦ってことは、ザフトというかプラントが地球に対して為した無差別攻撃や戦争中に為した戦争犯罪とかもあるだけに、あまり良い目では見られない。だから、ザフト隊員であった俺が表に、しかも、戦争が終わった直後に出てしまうと、グループ全体に大きなマイナスイメージが付くなんて、デメリットしかないのだ。

とはいえ、結局は問題の先延ばしに過ぎないだろうし、会長の息子がザフト隊員でした、だなんて発覚した時には、スキャンダラスな事実を隠蔽していたとも受け取られるかもしれない。

……まぁ、その時はその時だというか、その先に延ばした時間を使って、地道にこつこつと働いて、迷惑を掛けた社会に貢献なり、会社での実績を残せていたら、マイナスベクトルも多少は緩むのではないか、とも考えた故の判断だ。

「もっとも、俺がザフトの隊員だったという話もあったが、ここ最近は講和交渉とかでごたごたしていたから、過去の事って言うか、既に忘れ去られているだろう、なんて事を思っていたら、マユラが不思議そうな顔を見せた。

「そうかな？　私、オーブ本国にいる時から、アインさんの事は知ってたよ？」

「はっ？」

「ザフトには黄色い機体を駆る、気高き黄狼って二つ名を持つ凄いエースがいるが、こんな軍人に、パイロットになれよって、ＭＳ隊でも言われてたみたいだし」

「ぶはっ！」

ちょっ、隠したいというか、忘れたい過去がわざわざ追い掛けて来たよ！

嘆きと羞恥の余り、机に倒れ込む。

つか、そもそも、どういう意味で、凄いんだ？

……恥ずかしい名前、っていう意味での凄いなら、認めてやるよ。

「……アインさん、大丈夫？」

「うぅ、封じたい過去が、俺を追い詰める」

「あ、あはは、……でもね、私、その名前を知っていたから、遭難していた時に、アインさんに身を委ねる事ができたんだよ？」

「へっ、そうなのか？」

「うん。アインさんならわかると思うけど、戦時に女が捕虜になると、碌な目にあわないでしょ？」

「あ、あー、まあ、なぁ」

……確かに、厳しい規律がある軍隊ですら、戦時においては、高い頻度で、女性捕虜に対して性的な虐待を主とした碌でもない事が起きる。

「あの時ね、死にたくなかったけど、身体を汚されるのも嫌だったから……、私、真面目に、自決すら考えていたの」

「……」

「本当に、あの時は……、誰にも助けられなくて、独りでこのまま苦しんで死ぬのか、誰かに助けられたとしても、相手を信じられなくて、嬲られる恐怖の前に自決するのか……、どっちにしろ、死がすぐ傍まで来ていて……、本当に、怖かった」

「……そうか」

身体を起こして、マユラを見ると、じっと俺の顔を見つめていた。

「だから、私を助けてくれた時、アインさんの名前を聞いて……、気高き黄狼だって気付いて、私、助かるかもしれないって、本当に安心したの」

「でも、噂は噂に過ぎなかったんだぞ？」
「そうかもしれないけど、何も知らないよりも、判断材料になるんだもの、断然、いいわ」
「そんなもんかな？」
「うん。それにね、実際のアインさんも噂に違わず、ずっと、私の監視をレナかローズ先生、女性隊員だけにしてくれたし、私をオーブに戻す為に……、見ず知らずの私の為に、動いてくれたわ。私が、オーブ本国から切り捨てられた後も見捨てないで、ずっと傍で抱き締めて、励ましてくれたしね」
「んなこと、当然のことをしただけさ」
「……うん、そうやって、普通に言えるアインさんだから、私は、好きになったの」

な、なんか、照れる。

「だから……、極限状態だった私にアインさんを信じさせてくれたから、私はアインさんの二つ名が好き」

俺にとって、軍隊での二つ名とは、結局は殺しの腕を褒めている事に過ぎないと思っていたから、少々、意外な評価だった。

「そうか、なら黄狼という二つ名も悪くない、か。……けど、中立国にいたマユラにまで、その名を知られているとはなぁ」
「あは、どこの軍でもＭＳパイロットなら、少なくとも、一度位は聞いた事があると思うわ」
「……となると、今後も、そう呼ばれる可能性もあるってことか」
「多分ね」

そうなると、これからもずっと、ザフト時代の事で、色々言われるんだろうなぁ。

「まぁ、それでも、さっきの二つ名はできるだけ、表で出さないでくれよ？　……俺は、恥ずかしがり屋さんだからな」
「ふふ、アインさんが本当に恥ずかしがり屋さんなら、小さい頃に、おばさん達が入っているお風呂場に嬌声を上げて突入したりしないはずよ」

あがっ！

お、俺の恥ずかしくも助平な過去の一端がっ、マユラに伝わってるっ！

「い、いや、小さい時特有の、羞恥心というものが足りなくての行動さ」
「ふーん、じゃあ、そういうことにしておいてあげるね」

うぅ、誰から伝わったんだろう？

……。

こういうのを漏らすのは、ベティ一択だよなぁ。

「んんっ、マユラ、そろそろ仕事に取り掛かろうか」
「はーい、今日も頑張りまーす」

マユラを促しつつ、ベティに何らかの報復を決意して、俺はＢＩ用主兵装の改良に関する書類を読み始める。

……よし、報復として、ベティ最後の寝小便の話を三人に吹き込んでおくとしよう。

10　人を守る礎　－MARASAI　PLAN　2

「我が名はロンド・ミナ・サハク。黄狼と呼ばれる男に会える今日という日を楽しみに待っていたぞ」
「……アメノミハシラのトップにそんなことを言われるなんて、実に光栄です。んんっ、初めまして、お……私は、アイン・ラインブルグです」
「ふっ、ラインブルグ、私の前で取り繕う必要はない故、普段通りに話せばよい」
「では、今以降、その言葉に甘えさせてもらいます」

俺の目の前に立つ女性……オーブ国防軍准将として国防宇宙軍の司令官を務め、また、オーブが保有している静止軌道ステーション『アメノミハシラ』の総責任者でもあるロンド・ミナ・サハクが、オレンジの瞳でもって、こちらを品定めするかのように見つめている。なので、こちらも遠慮なく見目形を観察させてもらう。

まず、この人……、とにかく、でかいな。

背は１９０？はありそうだし、服というかマントを羽織っていたり、長い黒髪がかかっているからあまり目立ってないが、身体付きや骨格も男性的なものに近いようだ。加えて、整った顔形にもまた、女性的な柔らかさの中に男性的な力強さを内包しているように見える。

そして、何よりも、その眼差しには惹きつけられるもの……、最後に会った時のザラ議長に勝るとも劣らない覇気と、全てを受容して包み込むような包容力が感じられる。

……いや、人って、いる所にはいるんだなぁ。

静止軌道っていう要衝の地にあって、アメノミハシラが何者にも屈せず、独立性を保っていられる理由が一目で納得できたよ。

で、こんな風に、俺がアメノミハシラで一番偉い人と差し向かって話をしている理由なのだが、まぁ、極々単純な話で……、先週に組み込まれたスケジュールに従い、ノルズ納入時期の打ち合わせをする宇宙工業の担当者と共に国防宇宙軍の司令部を訪れると、案内役から早速、技術部長が直にでも会いたいと言っている、だなんて言われた為、ほいほいと付いて行ったら、行き先が技術部ではなく、司令官室だったってことに過ぎない。

「それで、サハク准将、俺は技術部長と会いに来たはずなんですが、何故、この場に？」

「何、ちょっとしたサプライズだ」

「はは、なんともお茶目な事で……、でも残念、俺、こういうことには、悲しむべき事に、慣れてるんですよ」

「ほぅ、パトリック・ザラか？」

「ええ、あの人のお陰で、今みたいに、突然、一軍の将と差し向かっても、普通に話せるだけの度胸がつきましたよ」

今は亡きザラ議長も、あの強面から想像できないが、意外とお茶目な所があったからな。

「ふふっ、それは私にとってはありがたいことだな」

「というと？」

「軍やオーブ国民は、サハクと言う名を憚る者が多い故に」

「プラント育ちの俺には分りにくい事ですが、五大氏族の一つというネームバリューに恐れを抱くってことですか？」
「軍に関しては概ねその通りだが、国民に関しては少し違うな」
そう言葉を切ったサハク准将は、哀しさと、それをどうにか割り切ろうとする不敵さを混ぜ合わせた複雑な顔を見せると続ける。
「……嫌悪だ」
「嫌悪、ですか？」
「ああ、オーブ国民は、軍事を司り、現実を見据えて動く我らサハクよりも、施政を司り、理想の平和を希求するアスハを好む故にな」
おいおい、オーブの国民は、理想を描く為の土台を忘れてるって事かよ。
「ふ、ラインブルグ、呆れが顔に出ているぞ」
「おっと、失礼。……ですが、オーブ国民がそこまでの平和ボケになれたって事は、それだけオーブが平和だったという証左ですし、それをずっと支えてきたサハクは大したものですよ」
「嬉しい事を言ってくれる」
サハク准将は、瞬間、相好を崩すが、直に怜悧な表情に戻る。
「だが……、ウズミ・ナラ・アスハが己の理想を追い求める余りに、先の戦争で為してしまった、あの中立宣言はオーブにとって致命的だった」
「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない、でしたっけ？」
「そうだ。本来、オーブはあのような目立つ宣言をせず、他の中立国と連携して戦争に巻き込まれぬようにするか、じっと息を潜めな

がら戦争の先を見据え、勝ち馬に乗るだけで良かったのだ」
「でしょうね」
「だが、現実はどうだ？　大見得を切った中立は守りきれずに国土を焼かれ、戦火に飲まれた国民は生死を彷徨い、今では生活に困窮する始末だ」

そう言って、准将は自身を含めた全てのモノを嘲るような笑みを浮かべるが……、正直、この人には似合わないと思う。

俺がじっと黙って見ていることに気が付いたのか、サハク准将はばつが悪そうに再び口を開いた。

「すまぬ、少し、感情が抑え切れなかった」
「いえ、誰だって、そういう時はありますから、気にしませんよ」
「……ふふ、その言葉に甘んじよう」

仕切り直す形で、サハク准将が自身が立っている大パネルモニターの前に俺を招くと、そこに映し出されている地球を見つめながら、再び話し出した。

「オーブ本国が戦火に焼かれた今、復興が始まっているとはいえ、住むべき家や糧を得る術を失い、生活に困窮した国民がこのアメノミハシラを頼って避難や移住を始めている。幸い、モルゲンレーテやラインブルグ・グループの助けもあって、国民の受け入れが可能な状態ではあるが、これにも限界が来るだろう」
「……居住空間が足りなくなると？」
「そうだ。ラグランジュポイントではないこの静止軌道上において、これ以上の拡張……、コロニー建造は不可能だ。加えて、ここは周辺の脅威が多い」
「確かに、要衝にあって恒常基地としての機能を備え、港湾能力や

生産能力も充実しているってことは、戦略的価値が高いですからね」
「その通りだ。だが、このアメノミハシラが、どのような状態で、どのような環境下にあろうとも、私はオーブ氏族の、オーブを率いる首長の一人として、再度、国民に危難を味あわせる訳にはいかぬのだ」

何となく読めてきた気がするぞ。

「アメノミハシラは、ラインブルグ・グループに更なる支援を求めると？」
「無論、それもあるが……、私はアイン・ラインブルグ、お前個人に私の手助けをしてもらいたい」
「……はっ？　俺がサハク准将の手助けをする？」
「そうだ。かつて、お前がパトリック・ザラを支えたようにな」

うーん、ユウキといい、サハク准将といい、買い被りだと思うんだけどなぁ。

「正直、俺にそんな価値が……、サハク准将を支えるような力があるとは思えないんですけど？」
「ふふ、人の価値を決めるのは、自身ではなく他人だ。そして、私がお前にその価値が、私を支えるだけの力があると思う故に誘うのだ」

それにしても、さっきから、腹の底から込み上げて来る熱い感情は何だろう？

「……では、サハク准将、もしも、俺が准将を手助けすることで、人を、人の生活を、人の幸福を守ることに繋がりますか？」
「さて、それは私にもわからぬよ。だが、これだけは約束しよう。

少なくとも私は、例え、かつては私やサハク家を嫌っていた者であったとしても……、私を頼って来た者達を見放すつもりはない。人こそが国の……、世界の基本故にな」

あー、もしかして、准将の覇気に当てられてるかな？

「……」

「……」

内からあふれ出てくる熱を何とか抑え込みながら、今の言葉に偽りはないかと、ただじっと、サハク准将の瞳を見据えるが……、オレンジの瞳は逸らされる事はなく、また、含まれている色にも怯懦や傲慢もなく、ただ、静謐な光を湛えているだけだった。

当てられて生み出された熱を外に逃す為に、一度、深呼吸をしてから、自身の答えを口にする。

「わかりました、准将。俺のできる範囲に限られますが、協力したいと思います」

「アイン・ラインブルグよ……、感謝する」

「いえ、サハク准将が語った志は、指導者として不可欠な、尊崇すべきものだと思います。と言いますか、今の言葉を准将本人から聞けて、ここに、このアメノミハシラに住めた事を、本当に、嬉しく思いましたよ」

……あれ？

サハク准将、なんか、照れてないか？

なんて思いが顔に出ていたのか、サハク准将は俄かに言い訳する

かのように言葉を繋ぎだした。

「いや、我は、そのような率直な褒め言葉をあまり受けた事がない故に、な」

「なら、早い所から慣れとかないと大変ですよ？」

「な、に？」

「これから、多くの人に評価され、褒められるんですからね」

ザラ議長に対してやったように、ニヤリと笑い掛けながら言ってやると、サハク准将は、瞬間、思ってもみない事を聞いたかのように唖然とした表情を見せたが、直に我を取り戻して、取り繕うように咳払いをしてみせる。

「んんっ、そのことはもうよい。……しかし、奴の言った通りだな」

「はい？」

「お前の協力が得たければ、嘘偽りのない、ただ真心のみを語れと言われていたのだ」

へぇ、そうなんだって……。

「えと、誰がそんな事を言ったんですか？」

「貴様も知っているであろう、エヴァンジェリン・ローズだ」

「……いったい、どういう繋がりと聞いても？」

「奴はかつてオーブに留学していてな、それが縁で学友となった」

……うわぁ、凸凹コンビだな。

「お前が今、何を考えているか大凡わかるが、あえて突くまい。とにかく、ローズは、我にとって気兼ねなく話せる者の一人だ」

「そうですか。そういう存在は、大切ですよね」

サハク准将にとってのエヴァ先生は、俺にとっての、ラウやユウキにあたるんだろうな。

懐かしい顔を思い出していると、再び、サハク准将が話を始める。

「では、ラインブルグ、次の話……、アメノミハシラが今現在置かれている状況について話をしたいが、良いか？」

「ええ、構いません」

弛緩していた心身に再び活を入れ、話を聞く態勢に入る。

「今現在、アメノミハシラが置かれている状況は、一言で言えば、孤立無援だ」

「孤立無援、ですか」

「そうだ。オーブ本国は連合軍の攻撃と前代表の自爆によって、多くの社会基盤が破壊され、機能の大部分が麻痺している状況だ。そんな本国を頼るわけにはいかぬだろう？」

「そうですね。……他に支援をしてくれるような友好国はないんですか？」

「アメノミハシラに好意を寄せる国や組織もあるにはあるが、エイプリル・フール・クライシスや戦争で受けた被害から自国の復興が成っていない以上、そうそう、容易に援助や支援はできぬだろう」

「では、その援助や支援を引き出すか、或いは取引ができるだけの案が必要ですね」

俺の言葉を受けてか、サハク准将は微かに口元を緩める。

「俺、何か、変なこと言いましたか？」

「いや、打てば響く会話はやはり楽しいものだと思っただけだ」

……え、と。

「そんなにサハク准将って、皆から怖がられているんですか？」
「そういうことだ」
「なんとも、難儀な事で」
「何、これもまた、統治する為には必要なものだ」

確かに、それは認める。

「逸れたな、話を戻すぞ」
「ええ、進めてください」
「うむ、……では次に、アメノミハシラを頼り、今も増え続けている者達だが、幸い、居住用区画があるお陰で、今の所、居住空間には困ってはいない。だが、先にも話した通り、通常のコロニーよりは遥かに小さい規模である以上、限界も早いだろう。この宇宙においては、安定した居住空間は一朝一夕に解決できぬ問題故、我は、これに対する早急な対応が必要だと感じている」

新しい居住空間……スペースコロニーが必要だってことだな。

そんなことを思いながら頷くと、サハク准将は更に続ける。

「跋扈する海賊共もまた、憂慮すべき事案だ。今月だけで、アメノミハシラ所属の商船が三隻、被害を受けている」
「退治はできませんか？」
「人手が足りぬ、と言うつもりだったが、お前が考案したノルズが機能し始めれば、手透きの者が生まれる故、本格的に対処するつもりだ」
「ですが、対処では、抜本的な解決には繋がりません」

「そう、海賊の供給源か拠点を絶たねばならん。ならんのだが、アメノミハシラには海賊よりも厄介な存在があるだろう？」
「ユーラシアのアルテミス要塞ですね」
准将は、今度は獰猛な笑みを見せたが、直に消して、語を重ねて行く。
「ああ、ユーラシア連邦は、連邦そのものが崩れかけている今の状況で、それを押し止める為にも、何らかの示威行動か実績を出さねばならぬ。だとすれば、狙われるのはどこだ？　アルテミスより弱い存在だと思われている、このアメノミハシラに決まっている」
この断言ぶりだと、なんらかの情報を掴んでいるのかもしれないな。
「では、アルテミスの脅威を取り除く必要がありますね。……他の勢力もここに手を出すのに二の足を踏む位に、完膚なきまでに叩き潰す必要が」
「ふふ、ははは、いい、実にいいぞ、ラインブルグ！　お前は力の意味を理解している！」
「えっ？　いや、力の意味って、これは基本でしょう？」
「オーブ……、アスハやアスハが謳う理想の信奉者には、それが理解し切れておらぬのだよ。……力と暴力との違いがな」
「……サハク准将、本当に、大変だったんですね」
あ、サハク准将、天井を見上げてるよ。
……ここは視線を逸らしておくとしよう。

……。

「すまぬな」
「いや、こちらこそすいません。地球の光があまりにも綺麗だったので、見るのに夢中でした」
「ふ……、そうだろう。これは我のお気に入りだ」
「わかります」

さて、そろそろ、本題に入るか。

「では、准将、俺はこれら四つの懸念事項に対する策を考えればいいんですね？」
「いや、直近で起きるだろうアルテミスからの侵攻と新たな居住空間に関しては我が対応する。よって、お前には残る二つに対する何らかの策を考え、案を提示してもらいたい」
「わかりました。何か、考えてきます」
「ああ、楽しみにしている」

いや、明確な目標を設定してくれたんだから、こちらが感謝すべきだな、なんて考えていたら、サハク准将がとんでもない事を言いだした。

「それと、お前には我が軍……、国防宇宙軍の予備役に編入してもらいたい」
「へ？」
「正確にはお前達、アイン・ラインブルグとヘレーナ・ラヴィネンの二人だな」
「……レナ、……ヘレーナ・ラヴィネンに関しては免除できませんか？」

「それは構わぬが……、我には、故郷を捨て、お前に付いて来たというラヴィネンがそれを肯んずるとは思えんな」

確かに、レナなら、どこまでも着いてきてくれるだろうけど……。

「なら、せめて一度だけでも、意思を確認させてもらえませんか？」

「ああ、構わぬよ。だが、言わぬまでもないだろうが、これの利点は理解しているな？」

「ええ、ザフト隊員であった事を、相殺できるチャンスって奴でしょう？」

「そうだ。……人の疑いや憎悪を晴らすか薄めるには、命を懸けるのが一番効果的だ」

それは確かに、そうだが……。

「ですが、人には自分の命よりも大切なものってのもあるんですよ」

「ふふ、ラヴィネンは果報者だな」

「いや、俺が果報者なんですよ」

「かもしれぬな。……んんっ、予め伝えておくが、お前には三佐を、ラヴィネンには二尉を準備する予定だ」

マユラから教えてもらった事を思い出すと……、三佐は確か少佐相当で、二尉は中尉になるはずだ。

「いいんですか？　士官学校で専門教育も受けてないのに、そんなに高い階級で？」

「何、あの戦争を白服という隊長格として生き抜いたお前なら、士官学校を出た下級氏族よりも必要な物を備えているだろう。……そもそも、私としては、お前には最低でも二佐を与えたい所だったのだが、軍生え抜きとの兼合いもあって、今の位だ」

おおぅ、これはまた、何とも高い評価を頂きまして、あざーす！

「それと、マユラ・ラバッツについても、二尉へと昇進させておこう」

「えっ？　……もしかして、俺達の関係、知ってます？」

「ふふ、お前が性豪だと言うことなら、ローズに聞いている」

「ふぐっ！　ひ、人に言われると、結構、来ますね」

「……だが、否定はせぬのだな」

「しませんよ。むしろ、胸を張って、三人とも俺の女だって言ってやります」

「ふっ、豪儀なモノだ」

だが、それもまた、お前の一つの魅力なのだろうとの言葉を頂き、話は終了と相成った。

それにしても、いはやは、まさか、アメノミハシラの偉い人から助力を求められるとは思いもせんかった。

でも……、この人なら、ザフト指導層みたいに阿呆な事はしなさそうだし、オーブの前代表みたいに、現実よりも理想を優先する事もなさそうだし……、うん、誤って力を振るうような事はしないだろう。

もし仮に、権力の魔性に溺れて、人の幸せを破壊するような暴君になりそうなら、その時はその時で、盛大に噛み付……じゃなくて、面と向って意見すればいいしな。

さて、俺も頑張って、サハク准将からの宿題を解く事にしよう。

11　人を守る礎　－MARASAI　PLAN　3

今日は仕事場である計画推進室で情報端末を使い、過去三ヶ月間の各国主要メディアのニュースを見たり、メディア紙の電子版や幾つかの情報掲示板を読んだりして、適当に情報を漁っている。

なんとなれば、この所ノルズ関連で忙しい日々が続いていただけに、少々世界情勢に疎くなっていた事に加え、サハク准将からの？宿題？もあったので、現在の世界状況をしっかりと把握しようと考えた為だ。

もっともザフトにいた頃とは違って得られる情報にも限りがあり、どのような動きがあった、このような動きがあった、というような事しかわからなかったが……、まぁ、何も知らないよりは絶対にマシだろう。

そんな訳で、俺自身が住んでいる宇宙から……。

まずは俺の生まれ故郷でもあるプラントだが、先のユニウス講和によって、プラント理事国からの独立とＬ５及びＬ１を自らの管制宙域……領域になることが正式に決定して国家体制が成立した。この段階でザラ議長が倒れた直後から特例で運用されていた暫定評議会が戦争中の不手際等の責を負う形で解散し、二年に一度、四月に行われている最高評議員の選出が前倒しする形で行われたようだ。

で、新たに最高評議員が選出されて発足したプラント新政権であるが、その首班……最高評議会から最高評議会議長として選出されたのが、なんとラウの友人であった、あのギルバート・デュランダル氏だったというから驚きだ。

どういう過程で選出されたのかと思わなくもないが、元より選挙なるものが存在していないプラントだし、ザフトに所属している人物の中から、ザフト上層部の恣意的な意思、もとい、公正公平な遺伝解析の結果で選んだ結果だろう。

まぁ、それはともかくとして、デュランダル氏率いる新政権もこれからの国家運営が大変だろう。なぜなら、戦争中の不手際と講和を結んだ事に対する責は前暫定政権が引き受けた事で、市民の不信感も幾分は解消されているかもしれないが、それでも決して無くならずに燻り続けるはずだし、プラント市民にコーディネイター優越主義者が多い現実を考えるとナチュラルに対する蔑視は無くならないと思われるので、今回の十分すぎる程の講和内容に不満を抱き続ける者が多数存在すると考えられるからだ。加えて、地球からの難民とプラント市民の意識の相違から、感情的な対立が必ず噴出してくるだろうしな。

……ユウキの奴、心身を壊してないといいけどなぁ。

友の心身を案じつつも次に移って月だが、中立都市群は戦前戦中と同じく自治を維持しながら、世界各国との貿易を続けている。いや、天然資源庫だなんて立地にあるというのに、オーブ本国と違って、先の戦争で戦火を免れるように、戦禍が及ぶのを避けるように、舵を取りきった指導層には敬意を抱くよ。

そんな俺の感慨も置いておいて、この月には中立都市群とは別に、大西洋連邦が新しい月面基地を建設し始めている。というのも、先のユニウス講和で月面基地を建設できる条項がある為なのだが、他の旧地球連合加盟国やプラントを差し置いて基地建設を開始した辺り、流石は超大国と言うべきだろう。まぁ、他国よりも先んじて月で資源を確保し、Ｌ４の再開発や軍事力の再建を進める腹なのだと

は思う。ちなみに、基地の存在位置は先のジェネシスによる攻撃を喰らった事もあってか、Ｌ４側のようだ。

更にＬ５の反対側に位置するＬ４だが、一ヶ月に及んだ新星攻防戦で出た被害は結構大きいものだったようで、多くのコロニーで大規模な修復が必要らしく、宇宙工業の方にもＢＯｕＲＵの大口発注が入ってきているみたいだ。

ここでもまた、他の旧地球連合加盟国がまごついているのを尻目に、大西洋連邦がＬ４の再開発を押し進めている。おそらくは先の戦争での反省を生かしての、地球一月間のスペースレーン構築や宇宙艦隊の拠点確保という面が大きいのだろうが、電力が比較的容易に得られる宇宙で本国復興に使用する資材を生産しようと考えているのかもしれない。

最後にＬ３だが……、なんというか、ヒャッハー、●物は消毒だぁっ、なんて世界に近い一種の無法地帯になってしまっている。要するに、海賊やならず者、脱走兵に傭兵崩れ、不心得なジャンク屋、更には犯罪者といった連中が集う、力こそがジャスティスの、非常にフリーダムな宙域ということだ。

それらの数はメディアの報道や宇宙商船、宇宙保険から得た情報だけでもかなりの規模になっており、下手をすれば、一個艦隊ができるほどの数が存在しているかもしれない。いやはや、宇宙を行き来する商船の被害が増えるのも頷ける話だ。

これらが宇宙の状況なのだが、明らかに浮いているＬ３以外は、戦後再建……プラス方向に走り始めていると言えるだろう。

しかし、Ｌ３の現状……、戦争中に抱いた懸念が当たってしまうとは、本当に悲しい事だ。

……はぁ。

んんっ、気を取り直して、今度は地球についてなのだが……、どこから見ていけばいいものか？

うーん、まずは……、仮にも所属国だから、オーブ本国から入ろうかな。

オーブ連合首長国は俺が今住んでいるアメノミハシラの本国であり、南太平洋に浮かぶソロモン諸島に存在する小国である。先の戦争中、マスドライバーを欲する地球連合軍……大西洋連邦軍に攻撃された後、占領されていたのだが、ユニウス体制が成立した事を受けて、再独立を果たしている。で、今は大西洋連邦から援助を少しずつ引き出しつつ、戦後復興に当たっているようだ。

もっとも、戦火と偉い人の一身上の都合で、モルゲンレーテ本社や工場、マスドライバーが破壊された影響は非常に大きく、オーブ経済を下支えしていたモルゲンレーテが機能不全に陥っている事から景気は落ち目であり、波及して関連や取引企業の破綻も増えているようだ。また、復興支援にしても、社会基盤の修復に回されている為、直接的に市民にまでは行き渡らないようで、かなりの数の難民が発生しており、アメノミハシラや他国へと流れ始めている。加えて、これまで居住していたコーディネイターにしても、オーブを援助している大西洋連邦……というよりは、反コーディネイター勢力が強い連邦議会がオーブへの援助を認める際に圧力を掛けろと迫ったらしく、月に一度は必ず役所に出頭しないといけない等、行動を制限されており、住み難くなってきているようだ。その為、コーディネイターもまたオーブ本国を離れ、プラントや月面都市、アメノミハシラへと流出しているとのこと。

いや、戦中も思ったけど、前首脳というか代表首長だったウズミ・ナラ・アスハはさ、もっと、自身のホコリとか、リネンとかじゃなくて、国民や、その生活を一番に考えるべきだったんじゃないのかなぁ。

ホコリでは腹は膨らまぬでゴザル、リネンでは見栄えを飾るだけでゴザル、ってか？

げふげふ、まぁ、オーブ本国については自分達の力で何とかしてもらうしかない。アメノミハシラだって、流れてくる難民を受け入れるだけで精一杯だからな。

次にオーブの復興を支援している大西洋連邦だが、大西洋連邦経済界のドンであるアズラエル財閥の会長に、先々代の後見を得た先代の子が名目上の会長に就任した事で表立っての後継者争いが収まり、先代が残した新規発電事業開発の継続とニュートロンジャマーキャンセラーの民間転用で原子力発電の復活を図ることが決定されたようだ。また、軍需関連よりも復興資材等の民需生産が優先して行われるようになったらしく、国内経済も好転し始めているようだ。

一方、ユニウスの講和で手痛い敗北を喫した外交では巻き返しを図る為に、剛柔両方での攻勢を仕掛け始めている。目に見える例を挙げると、南アメリカ合衆国やユーラシア連邦、東アジア共和国へのＭＳ等の軍事関連物資やニュートロンジャマーキャンセラーの輸出制限や南アメリカ統一機構や汎イスラム会議、オーブ本国への復興支援、プラントを支援し続ける大洋州連合への経済制裁といった所だ。

無論、こういった経済力の回復に併せて、軍事力の増強だって行っているはずだろうが、流石にそれは表立っては見えてこないのが現状だ。

……ここばかりは、流石は超大国としか言えないよなぁ。

そんな大西洋連邦から再独立を果たしたものの、軍需関連物資の輸出制限で圧力を掛けられている南アメリカ合衆国だが、復興に関しては元より発電比重が原子力よりも水力や風力といった自然エネルギー系が大きかったお陰か、それなりの速度で進んでいるようだ。

それよりも頭が痛いのは、先にあったように、大西洋連邦が軍需関連で輸出制限で圧力を掛けてきている事だろう。流石に、自国の国防の根幹に関わるだけに、苦悩している状態だと思う。

……いや、本当に、自国で使用する兵器を対立国が生産するなんて笑えない冗談にしかならない。

また、同じく大西洋連邦から輸出制限を受けた東アジアは、原子力に代わる発電施設が少ない事で各地の復興が遅れている。これに加えて、全世界の五分の一の人口が集中することもあり、国民の生活水準が著しく低下している状態だ。とはいえ、四月馬鹿絡みで出た死者の半分は東アジア共和国で発生している現実を考えると、元から困窮していた国民も多かった面もあるだろう。

更には分離独立を求める勢力の活動が活発化している事もあり、ただでさえ遅れている復興が遅れに遅れ、それがまた、生活改善にも大きく影響が及ぼしている。結果、不満の矛先が弱者や政府に向けられている為、国内には殺伐とした空気と不穏な雰囲気が満ちているそうだ。

この不満の矛先を逸らす為だろうと俺は考えているが、最近では隣国である赤道連合に分離独立を求める勢力を支援しているだなんて、いちゃもんをつけ始めており、両国間の関係は悪化する一方だが……、案外、東アジアは赤道連合のエネルギープラントを狙っているのかもしれない。

……まぁ、これも昔からある、国内で発生した不満の矛先を外に向ける為の常套手段じゃないかとも思わなくもない。

同じく三大国の一つで大西洋連邦の一番のライバルに目されているユーラシア連邦は、元よりあった地熱発電プラントに加え、新規地熱発電プラントの建設でエネルギー事情は好転し始めている上に、先月にはプラントからニュートロンジャマーキャンセラーが数基供与されており、原子力発電も復活が期待されている。

とはいえ、何しろユーラシア連邦はその領域が大西洋から太平洋に至る程に広い為、そのエネルギー配分を巡って、内部で大きな対立が起き始めていたりもする。

特に、西ユーラシア連合や中東イスラム同盟のような組織内組織と、先の戦争中において、地熱エネルギープラントを確保していた事で連邦の主導権を握っていた旧ＣＩＳ（独立国家共同体）が、ニュートロンジャマーキャンセラーをどこの原子力発電所に取り付けるかで激しくぶつかっているようだ。今の所、プラントと渡りでもつけているのか、西ユーラシア連合や中東イスラム同盟が優勢らしい。

……むぅ、プラントもこれを見越して、ニュートロンジャマーキャンセラーを提供を申し出たのかもしれないな。

次は、アフリカ大陸に目を移すと、北アフリカにあるアフリカ共同体が非常に大変な状況のようだ。何しろ、先の戦争に巻き込まれた影響というか、実質、ほとんどの地上戦が国内で展開されたのだ、国土が荒れに荒れているのも無理はない。エネルギー事情も深刻な状態だろうから、復興までの道のりは遠く、一筋縄ではいかないだろう。

そんな北アフリカに対して、アフリカ大陸南部にある南アフリカ

統一機構は、大西洋連邦の支援を積極的に受け入れて、復興を進めると同時にその軍事力を増大させている。南アフリカ統一機構はその名称に統一と銘打つようにアフリカの統一を目指している為、相手が弱っている今が好機とばかりに、国境近くで軍事演習を行って、アフリカ共同体に圧力を掛けているようだ。

そんなアフリカ大陸から再度ユーラシア大陸に目を戻して、地球連合に途中参加していた汎イスラム会議だが、意外なことに復興は上手く進んでいるようだ。なんとなれば、ここもまた、大西洋連邦からの支援を大々的に受けているから、国内状態に余裕が生まれて為だ。よって、その余力を使って、頻繁に中東イスラム同盟に属する国家と会合を設けて、色々と話し合っているようだ。ここも中東及びイスラム国家をまとめるのが目標みたいだから、張り切っている状態だと言えるだろう。

……しかし、南アフリカと汎イスラムは、まさに北風と太……いや、何も言うまい。

で、汎イスラム会議の更に東隣に位置している赤道連合だが、先の戦争においても開始から終結に至るまで、プラントに組する事も侵攻を許す事もなく、また、地球連合の有形無形の圧力に抗い続けた中立国の雄である。国内の復興にしても、原子力よりも水力や地熱、太陽光といった発電施設が多かった為に、三大国程の酷い影響を受けることもなく、逆に経済が伸張しているようだ。

もっとも、何も問題がないわけではなく、国民の間では宗教絡みの対立もあるし、地域毎の経済格差だって生じている。しかも、それらの問題対応に忙殺されている状況の中で、東アジアからのいちゃもん、もとい、分離独立勢力への支援は我が国に対する謀略である、だなんて非難声明が行われたのだから、堪らないだろう。よって、今現在も、赤道連合と東アジア共和国の国境線には両国軍が展

開しており、睨み合いが展開されていたりする。

……二年に及ぶ戦争が終わっただけに、ドンパチはやめて欲しいものだがなぁ。

そして、最後に目を大洋州連合、プラント支援する唯一の地球国家に目を向けると、プラントに食糧や水資源等を提供する一方で、ニュートロンジャマーキャンセラーやＭＳの供与を受ける等、一層の関係強化に動いているようだ。しかしながら、国内にはこの関係強化に反対する動きもあり、反政府勢力が結成されたとの情報も入ってきているから、これからの政情不安や治安悪化が懸念される所である。

……この反政府勢力が結成される動きもまた、四月馬鹿が地球に刻んだ遺恨なのかもしれない。

うん、たぶん、これで漏れなく全ての世界の状況を網羅した気がするんだが……、あ、後、火星かな？

火星については、正直、現地でコロニーを築いて、開拓を頑張ってしていることしか知らない、以上。

さて、これで今現在の世界の状況を簡略に纏めたのだが……、やはり、戦争と四月馬鹿の影響が大きいと言えるだろう。本当に、各国が自国の戦後復興を果たす為に何とかしようとしているのがよくわかる。

……。

では、今のこんな状況で、アメノミハシラが本国以外で支援を求めるとするのならば、どこだろうか？

……過去、オーブやアメノミハシラを攻めた旧地球連合の加盟国やプラントを除くと、対象となるのは、アフリカ共同体と南アメリカ合衆国、赤道連合、大洋州連合、月面都市群の五つになる。

だが、この五カ国にしても、アフリカ共同体は自国ですら儘ならない状況である為、とても支援できるような余裕はないだろうし、大洋州連合はプラントとの繋がりを重視しているから、これも期待できそうにないと考えられる。また、余力がある月面都市群にしても、何処とも組まない事で自治を維持している以上は、今以上の関係を求めるのは難しいはずだ。

だとすれば、有力候補は南アメリカ合衆国と赤道連合となる。

けれども、今現在において、赤道連合と東アジアの両国が軍を国境線に展開させて睨み合うだなんて一色触発な空気に包まれている以上は、余計な口出しや手出しをするのはリスクが大きいと言えるだろう。

……要するに、戦争が終わったばかりなのに、また戦争を引き起こしてしまいそうな刺激を与える事は避けたいのだ。

だとすれば、大西洋連邦に距離を置こうとして、圧力を掛けられている南アメリカ合衆国に支援を要請する方がまだリスクが小さいはずだ。どちからといえば、アメノミハシラやオーブ本国が大西洋連邦からとやかく文句を言われる可能性の方が高いだろう。

今、支援や援助を引き出すとしたら、南アメリカ合衆国だな。

世界情勢の整理と確認のついでに、サハク准将からの？宿題？の一つを自分なりに解いた事で、閉じていた目を開き、意識を現実に戻すと……、企画室の仮眠ベッドも兼ねている応接ソファで、レナとマユラが互いに寄りかかって眠っていた。

そんな二人の、まだあどけなさの残る寝顔に頬を緩めながら時計を見てみると、もうすぐ日が変わる時刻だった。これは二人に悪い事をしたなと思って、揺すり起こそうとしたのだが……、中々起きてくれない。

いや、二人とも起きてはいるのだが……、何かを待っているようだった。

なので、その何かに応えるべく、二人に顔を寄せていき……、後のことは割愛するが、待たせたお詫びにはなったことは確かなようだった。

12　人を守る礎　－ＭＡＲＡＳＡＩ　ＰＬＡＮ　４

ラインブルグ・グループの軍需産業への進出はノルズがアメノミハシラに採用された事で上手くいき、グループ各社にもＢＩ三姉妹の生産関連で活気が出てきている。

ＢＩの組上げ生産を行う宇宙工業の担当者の話によると、今現在、受注しているのは百四十四機であり、最初の二ヶ月だけはアメノミハシラ防衛隊がある程度の数をまとめて運用できるようにする為、ラインをフル稼働させて月産三十六機、後は通常稼動で月産十二機で生産、納入を予定しているらしい。

また、アメノミハシラ防衛隊もＢＩが実戦を経て、兵器としての信頼性が高まれば、更なる追加発注を予定しているとのことらしいが……、このことで二律背反の悩みを抱える事になろうとは思いもよらなかったよ。

実戦……、要するにここが攻撃されるなんてことは起きて欲しくないのだが、実戦を経ないと兵器としての信頼性は証明されないのも確かだからなぁ。

まぁ、これに関しては、心身の健康の為にも、あまり深く考えず、時と状況の流れに委ねた方がいいだろう。

とにかく、これでラインブルグ・グループの軍需関連は軌道に乗れるはずだし、俺も初っ端の足掛りになる仕事を果たせて、一安心といった所だ。

でもって、最低限の役目を果たせて一安心している俺だが、先の？招待？でサハク准将から聞かされたアメノミハシラが抱えている懸念事項について、親父と会長室で話をしていたりする。

「なるほどな、サハク卿はそんなことを言っていたか」
「ああ、そうなんだ。海賊対策にしても、他所からの支援や援助を得る方法を考えるにしても、グループを率いる立場で大局的な考え方ができるだろう親父を巻き込んだ方が、より上手い考えが出そうな気がしてさ」
「確かに、他人の意見を聞けるというのは、貴重な事だな。……それで、それらの対策、お前はどう考えているんだ？」
「うん、海賊対策は宇宙軍が動きにくいのなら、傭兵……、民間軍事会社を立ち上げて、護衛業務を請け負う形にしたら良いかなって考えている」

戦争が終わった影響か、それ以前からなのかは詳しくないが、無くなる事がない不心得者の横流しやジャンク屋から流れた再生品等でＭＳを装備した宇宙海賊が増えている。もし、その一部でも傭兵として取り込めれば、こっちの戦力が増えて、海賊のなり手が減るはずだ。

「……傭兵を使うか。私はあまり好まないな」
「まぁ、傭兵って、イメージが悪いからなぁ」
「それもあるが、モラルが低くて信頼できない」

今の時代、生きる為に傭兵にならざるを得なかった者が多いと聞くし、モラルが低いのも無理はない。

「なら、信頼性を向上させればいいんだな？」
「ああ、護衛を委ねる以上、絶対的な信頼が必要だ」

だからこそ、軍かそれに順ずる組織が担当した方がいいんだが……、順ずる組織か……。

「設立する民間軍事会社には、オーブ軍にも一枚噛んでもらうのはどうだろう？」

「具体的には？」

「軍の予備役か退役軍人を役員に据える」

「それだけでは足りない。アメノミハシラが商船護衛の最終的な責任を負う事が、誰の目にも明確であることが重要だ」

「……なら民間軍事会社じゃなくて、軍の外郭団体として活動するとか？」

「その辺りが妥当だな」

確かに、外郭団体なら民間からの融資も期待できるし、軍との人事交流や連携もできるし、いけるかな？

いや、どうせなら……。

「なら、いっそのこと、その外郭団体に所属する者を全員予備役に組み込んでしまった方がいいかな？」

「流石にそれはアメノミハシラが支えるのが大変だろう。……というか、お前、それは軍と変わらんだろう」

「なら、実戦部隊だけでも？」

「……アイン、そのあたりはな、私ではなくサハク卿と相談しろ」

でも、予備役が増えるってことは、軍に厚みが出るってことだから、いけると思うんだけどなぁ。もしも、傭兵を予備役にして軍に組み込む事ができたら、後は？ザフトのためにっ？みたいな洗脳教育を施して、軍への忠誠をすり込める、って、結構、俺もやばい方

向に考えが進んでるな。

……まぁ、傭兵に拘らなくても、後方支援人員を民間から採用して、実行部隊に軍属を当てる事も可能かな？

ある程度の海賊対策についての骨子が浮かんだ所で話を転がす事にする。

「後は、これに使う装備品なんだけどさ」

「ふむ、何か問題があるのか？」

「あるある。オーブの宇宙艦隊が使ってるっていうか、モルゲンレーテって、イズモ級しか作ってないんだよ」

「……新しい艦艇が必要だと言うことか？」

「ああ、商船の護衛用に使用することを考えると、イズモ級は艦体的にも戦力的にもコスト的にも大き過ぎる。だから、小回りが利く上、ある程度の艦艇と渡り合えて汎用性もある、連合が使っていた１５０ｍ……、ドレイク級みたいなのが絶対に必要なんだ」

俺の言葉を受けた親父はしばらく考え込むように沈黙した後、口を開いた。

「うちで作るか？」

「あー、それも考えたんだけど、うちで作ろうにも、一からの設計すると時間が掛かりすぎる。これはできるだけ早くに必要な物だからさ」

「……なら、モルゲンレーテと共同開発を提案するか？」

「うん、向こうはイズモ級の開発した事で色んなデータを抱えているはずだから、一から作るよりも断然早いだろうし、さっきも言ったけど、護衛用だと数が必要だから、適度に分業すれば一社で対応するよりは早く揃えられると思う」

後、生産効率が高くて、建造期間が短い艦が望ましいが……、基本、単艦運用を考えない護衛用だし、一定水準の能力があれば、いけるはずだと思う。

「わかった。共同開発に関して、スズキさんに話をしてみよう。……艦艇だけでいいんだな？」

「機動戦力……、ＭＳに関しては既にＭ１アストレイがあるから、今の所はそれを使えばいいからな。……って、モルゲンレーテで思い出した」

いつか言おうと思っていて、ノルズ開発やサハク准将の話で吹き飛んでいたことがあった。

「親父、ＭＡＲＡＳＡＩ計画の一環で、ＭＳをうちのグループが持っている手持ちの技術でできるだけ作ってみるつもりなんだけど、そのことで……、ＭＳで使用する規格について聞いておきたいんだよ。現場での運用を考えると規格の共通化だけはしておかないと、整備担当の仕事が増えて迷惑を掛ける事になるからな。だから、そのことを話し合っておきたいんだ」

「わかった。そのことも伝えておこう」

「助かるよ」

さて、今日の目玉というか、一番重要な案件、オーブ本国以外からの支援の引き出しだが……。

「後、アメノミハシラの支援関連の話になるんだけど、迷惑ついでに、モルゲンレーテにＭＳを輸出できないか、聞いて欲しい」

「……何らかの支援を引き出す為の取引材料にしようと考えているのか？」

「どちらかと言えば、貿易に近いかもしれない。それに、今現在の状況、他国よりもオーブが有利な点は一番にこれだからさ」
「だが、買う国があるか？」
「ある。……今の世界状況、大国による連合状態が終わった今の状況なら、売り込めば絶対に買ってくれる。特に大西洋連邦の脅威を受けている南アメリカは喉から手が出るくらいにな」

今、南アメリカ合衆国が使用している主力ＭＳはストライクダガーらしいから、いざ、大西洋連邦と事を構えると、敵国のＭＳを使うことになるなんて冗談みたいな話になるから、飛びついてくるはずだ。

「しかし、復興で大変な南アメリカに支払う余裕があるか？」
「うん、ないだろうね。だから、現物支給や便宜を図ってもらう形で行こうと思う」

南アメリカから何を代価に受け取るのか？

それは宇宙で手に入りにくいもの……宇宙で生きる上で必要不可欠な水の優先供給と、土壌や植物といったものだ。

水に関しては、アメノミハシラを維持する為に恒常的に必要なので、市価よりもかなりの安値で提供してもらう算段を取る。ついでに言えば、先の戦中に大西洋連邦というか地球連合が、停戦までの四ヶ月なんて超短期間で、マスドライバーを再建してくれているし、打ち上げ費用も安上がりで済むだろうしな。

後者の土壌や植物といったものだが、これを求めるのは、今後、建造するであろうスペースコロニーで使用する為である。いや、オーブはＬ３に旧ヘリオポリスを保有しているのでモノがあるにはあ

るのだが……、例の戦闘で崩壊しており、内部の土壌や植物は宇宙に放出されてしまって回収するのが大変だし、使えない可能性が高いのだ。

なので、モルゲンレーテは代価として土壌や植物といった現物を受け取り、新規コロニーを建造する際には資材として提供して、コロニー内部での占有権及び一定区画の土地を得るって寸法だ。

実は今回の件で色々と調べて知った事なのだが……、オーブではプラントが独立に動いた切欠の一つであるコロニー所有権問題を踏まえて、基本的にコロニー内部の？土地？は購入できない仕組みになっており、コロニー管理機構から有料で貸与される形になっているのだ。要するに、住民がコロニー内部の土地を欲したとしても売ってくれず、年単位で賃貸料を管理機構に払って土地を使用しないといけないという所有権の制限である。

もっとも、この仕組みの中にも特例があり、一定の要件……オーブに多大な貢献をしたとアメノミハシラ上層部から認定される事で、一定区画の占有権を買う権利を与えられ、土地を保有する事ができるのだ。

今回はこの仕組みを利用しようという訳だ。

なんて具合に親父に説明してみると、ふむと一つ頷いて、話し始めた。

「モルゲンレーテに一時的な負担が掛かるが、基本的に損はないようだな。……だが、この貿易が成り立ったとして、大西洋連邦はいい顔をしないだろう」

「もちろん、大西洋連邦からは嫌な顔をされるだろうけど、南アメリカの好意は間違いなく得られる。……もう、今の状況だと中立なんて言ってられないし、全方位に良い顔はできない。これからは、

八方美人は信頼されないよ」
「だが、現状、オーブ本国は大西洋連邦から復興支援を引き出しているんだ。この動きで本国に迷惑を掛けることにならないか？」
「そこはそれ、本国が支援を寄こさないんだから、こっちが苦労してるんだし、向こうにも苦労してもらえばいいんだよ」
ニヤリと露悪的な顔を見せると、親父から修正用拳骨を、ガツンと一発、頭に喰らってしまった。
「……ぁたた」
「お前の気持ちはわからないでもないが、本国で対応に苦労する者がいることや、復興支援がなくなると、一番困るのが市民だと言う事を忘れるな」
「うぅ、わかりました」
でも、久しぶりの親父の拳骨が嬉しく感じる自分がいたりする。
「で、でもさ、俺は二枚舌でいけると思うんだよ。元々、本国とアメノミハシラって、反りが合ってないだろうから、アメノミハシラとモルゲンレーテが勝手に判断したことだって、向こうも言い抜けることはできるはずだしな」
「……気付いていたのか？」
「まぁ、ザフト時代に耳にしていた情報とサハク准将の話、耳を澄ませば聞こえてくる情報を合わせると、そう考える事はできるよ。……この俺ですら気が付いた事なんだからさ、当然、大西洋連邦だって知っているはずだ。だから、この状況を逆用すればいいんだ。……申し訳ない、何度も言い聞かせているんですが、本国がこんな状況なのをいいことに、好き勝手にやりやがるんです、ってな」
まぁ、これまでも、アメノミハシラは好き勝手しているようにも

感じなくもないが、それはそれである。

「けど、一応は本国にも話を……、双方の状態を理解していて、話が通じそうな人、……確か、宰相のセイラン卿だったっけ？　その人に話を通しといて、口裏を合わせておけば良い」

もっとも、アメノミハシラは大西洋連邦から何らか報復を受けるデメリットがあるが……、今更だな。

「それと併せて、ＭＳ関係で後発の東アジアかユーラシア連邦にＭＳ関連の技術を一部でいいから提供して、大西洋連邦に牽制を仕掛けてもらうと、黙認くらいで落ち着くんじゃないかな？　ついでに、技術提供料として資金も得られそうだし」

「そうなれば、大西洋連邦の恨みをますます買うだろうな」

「まぁ、ここも戦争中、大西洋連邦というか地球連合から攻められているらしいし、相応の反撃って考えたら、いいんじゃない？」

……相応の反撃か。

恐らく、この反撃で、大西洋連邦内では、不幸せになる人が出てくるんだろうなぁ。

「……親父、今の俺の考え、行き過ぎてるかな？」

「いや、私はそこまで感じない。……国家戦略においては、何を置いても自国とその利益こそを優先するべきだし、取引相手の利益も考えているお前の考えは、まだ優しい方だろう」

「……そうか」

それでも晴れない顔をしていた所為か、親父が苦笑を浮かべながら語りかけてきた。

「アイン」
「ん？」
「何事を為すにも、大前提がある事を忘れるなよ？」
「……そうだな。何よりも、まずは、己の身内からだな」
「そうだ、何事においても、一番に優先するのは家族や親しい人でいいんだ。……私も自身が抱えるモットーと家族や仲間を天秤にかければ、後者を選ぶ。かつて、お前にロジアッツを送ったようにな」

ロジアッツ……、今は、【ＲＳＳ－０２２Ｂ：パッツ（ＰＡＴＳ）】、Ｐａｔｒｏｌ　Ａｓｓｉｓｔａｎｃｅ　Ｔｈｒｕｓｔｅｒ　Ｓｙｓｔｅｍ（巡回支援推進システム※適当訳）と呼ばれているが、親父があれを送ってくれたのも、俺が生き残る為の一助としての事だった。

「うん、そうだな。もっと自分の腕と手が広く長く伸ばせるようになってから、偉そうな事を言う事にするよ」
「ああ、そうしておけ」

……さて、親父と話したら、ある程度の案がまとまったし、仕事に戻るかな。

「急に悪かったな、親父、仕事で忙しいだろうに」
「ふっ、お前の前で閉ざす扉はないよ」
「……今、俺、カッコいい事言ったって、思わなかったか？」
「……んんっ、若干はな。だが、これは偽りのない私の本音だ」

うぅ、泣かせてくれるよねぇ、なんて風に戯けながら、座っていた応接ソファから立ち上がる。

「モルゲンレーテとの話が進んだら連絡を入れてくれ。こっちでも艦艇に取り付けたいって考えているものがあるからさ」
「わかった」
「じゃ、戻るわ」
「ああ、頼むぞ」
「うぃ」

できるだけ軽く返事をしてから会長室を出て、前室……、秘書室で仕事をしていたベティとレナに挨拶をする。

「二人も悪かったな、急に無理を言って」
「本当よ、私もレナちゃんもスケジュールの調整で大変だったんだから、後で何か差し入れを持ってきなさいよね」
「ですよねぇ。だから、先輩、差し入れを楽しみにしてますね」

……レナもベティも遠慮がないなぁ。

「了解了解、何か甘いものでも差し入れるよ」
「そうしなさい。あっ、そうそう、レナちゃんに代わる新しい秘書が雇えそうよ」
「えっ、そうなのか？」
「でも、その子も準備で忙しいらしいから、後、一ヶ月後位になるけどね」
「そうか」

一応、確認の為に、ベティの隣に座っているレナを見ると、こくこくと嬉しそうに頷いている。

「なら、一ヵ月後に、こっちに復帰って事になるんだな？」
「はいっ！」

元気良く返事をしたレナだが、一昨日、俺と共にオーブ国防宇宙軍の予備役に編入されている。

また危険に付き合わせることになるかもしれないと思うと申し訳がない気がしたが、同時に、戦時という非常事態を共に潜り抜けた戦友が側にいることに安堵を憶えている自分もいたりする。

「そうか、……レナ、また、よろしく頼む」
「ええ、任せてください！」
「……へぇへぇ、いい雰囲気ですねぇ。独り身には痛い光景だわ」

って、ベティがやさぐれた表情で俺達を見ていたので、ガス抜きの為にも、ちょいと突く事にする。

「……ベティ」
「……なによ」
「僻みか？」
「なっ！」

もちろん、ニヤリ笑いも込みでだ。

「こっこっ、このっ！　誰がっ、誰の為にっ！　その秘書を探してきたとっ！」
「おぅ、ありがとうよぅ、ベティさんよぅ！　差し入れにはお前の好物のマカロンを持ってきてやるから勘弁なぁ」
「ッ！　……だ、だったら、三人分は持って来なさい！」
「はいはい、お前用に五人分、持ってきてやるって」

なんて具合で幼馴染を遠慮なく弄ってから、秘書室を後にする。

……むぅ、ああ言った手前、ベティ様の怒りを静める為にも、早いうちに差し入れた方が良いよなぁ。

と、そんな風に直感が働いたので、仕事に戻るのを一時中断し、マカロンを買う為にベティが贔屓にしている洋菓子店へと赴くべく、足を玄関へと向けた。

うん、気分が良いから、ベティ用には八人分買ってきてやるか。

なんか、こんなに買ってきて、あんたは私を肥えさせるつもりかっ、って怒る姿が目に浮かぶけど……、たまには良いよね、うん。

13　混沌の端緒　―アメノミハシラ防衛戦　1

六月も下旬に入った頃。
サハク准将に例の懸念案件に対する対策案を書類にまとめて送付し終わった後、日常的な仕事とは別に、新しい仕事……、ＭＳの開発に取り掛かるべく動き始めた。

いやはや、後発での開発って条件のお陰で、資料となる実物がザフト系のジンやシグーにゲイツ、連合系のストライクダガー、モルゲンレーテのＭ１アストレイと数が揃っているのには、本当に助けられる。

これらを参考にする事で開発期間が大きく短縮できそうだ。

という訳で、パーシィの？こんなこともあろうかと？印が入った第五開発部の開発資料の他にも、シゲさんが仕事柄暗記していたお陰で詳細に至るまで描き出されたジンやＭ型、シグーにゲイツといったザフト系ＭＳの設計図や技術研究所がジャンク屋から買い取り、技研技術者の欲望の赴くまま、ボルトの一本に至るまでに解体して構造を分析したＭ１アストレイやストライクダガーの詳細な分析設計図、グループ各社が今現在において生産している製品の一覧や保有技術等を網羅していき、ＭＳパイロットとして、ああいうものやこういうものが欲しいという視点から、是非とも導入したい物が作れそうか作れなさそうか、組み込めそうか組み込めなさそうか、なんて事を考えている最中だ。

「うーん、コックピット部には、コスト的にも性能的にも、脱出ポ

ットにもなるＢＯｕＲＵ内殻を使用するのは確定しているし、中身の操縦システムもＢＯｕＲＵで使ってるシステムを元にしてＭＳ用に組上げて、基本ＯＳに学習型統合ＡＩを組み込んで、中の人の負担を減らせるような、挙動をよりスムーズにより洗練させた上で操縦を安定させるするために、周囲モニターも落ち着かない全天型じゃなくて半天型を装備するつもりだから、座席後方に置き場所の確保ができるだろうし、姿勢制御だけを担当する補助ＡＩ用コンピュータも搭載して、基本制御技術のモービル・バイ・ライト（※注）は鉄板だけど、機体自体もより反応を良くするために、内部骨格の間接部には磁気コーティングを絶対に施したいけど、フレーム材として使用を予定しているのはチタン合金系だからちょっと割高だし、電波通信系が駄目な場合も考えると、融通がききにくい通信用レーザーを使わないといけなくなるから、絶対に機体のあちこちにパッシブセンサーに据えないといけないからコスト的には結構きついし、その分、基本装甲は宇宙工業が開発した硬度的にもコスト的にもグッドな超硬スチール合金とセラミックの複合化で少しでもコストを下げても、バイタルパートというか推進剤タンクにしても絶対にカーボンナノチューブのシートで補強が……」

思い浮かぶままにブツブツと呟きながら、ついでに、ぱちぱちぴちぱち、ってな感じで、頭の中でアナログな計算装置を動かして、大まかなコストも概算していると、急に影が差して、マユラが苦笑を浮かべながら覗き込んできた。

「アインさん、無理しちゃだめだよ」

「へっ？」

「何だか、頭から煙が上がりそうな顔してる」

……確かに、少々、熱っぽい気がする。

「たぶん、知恵熱かもなぁ」
「あはは、なら、クールダウンしたら？」
「そうだな」

あ～、やれやれと、背筋を伸ばしていると、マユラが湯飲みにお茶を入れて出してくれた。有難く思いながら、それをすする。

……あぁ、天然物のお茶が乾いた喉を癒してくれる。

うんうん、オフィス内での唯一の贅沢として、購入した甲斐があったもんだ。

なんて事を思っていると、マユラが俺の【俺が考えるカッコいいＭＳを生み出す為の落書き帳】なんて遊び心に満ちたメモ帳に目を落としていた。一昔前なら、きゃー、らめぇ、みないでぇ、って野太い悲鳴をあげていただろうが、ノルズ開発を経た事で厨二魂が復活を果たしている今ならば、平気なのだ。

「アインさん、バッテリー機にしないの？」
「ああ、マユラもＭＳに乗っているからわかるだろうけど、内部にジェネレーターがあるのとないのとじゃ、全然安心感が違うからな」
「……だから、ＢＯｕＲＵにも？」
「そういうこと」

実際にはジェネレーターだって燃料が尽きてしまえばお終いだし、バッテリーと変わらないのだが、やはり、宇宙という隔絶空間で感じる安心感が違うのだ。

ちなみに、開発するＭＳに使用するジェネレーターは、燃料電池に熱電発電システムを組み込んで、より電力を得られるように併用する事を考えている。

「とは言っても、非常用電源を兼ねて、瞬間的な出力を出す為の小型バッテリーを載せるつもりはしているけどな」
「アインさんって、堅実だよね」
「そら命を預ける機体だからな」
「……うん、その考えで生まれたＢＯｕＲＵに私も助けられたんだから、感謝してる」

いや、やめて！

そんな熱を帯びた目で見られると、照れてしまう！

「んんっ、……まぁ、俺はこういうものがいい、こういうもんが必要だ、って目処をつけて提案するだけでさ、実際の設計や開発はパーシィに全て任せるつもりだけどな」
「ふふ、アインさんらしいね」

ＭＳや科学技術関連で俺以上に、いや、軽く超越して、遥かな高みに存在してる？人財？がいるんだからさ、最低限の性能条件や絶対に組み込んで欲しい技術を出して、後は、自由に好き勝手やれる環境を整えて、任せてしまっていいんだよ。

「でも、それって、技術者が暴走しない？」
「だから、時々、差し入れを持って、見に行ってるんだよ。暴走していないかを見にな」
「あはは、ノルズの時によく顔を出していたけど、あれって、そういうことだったんだ」

面白そうに笑うマユラに、そういうことだったんだよって返そうとした時だった。

頑丈な建物内部にまで聞こえる、大きなサイレンが鳴り始めたのは……。

「避難警報!?　あ、アインさん!　アメノミハシラがどっかから攻撃を受けてる!」

「……マユラ、非常時における予備役の仕事は、確か、治安維持と避難誘導だったな?」

一般人だったら普通に避難を始めている所だが、オーブ国防宇宙軍の予備役には、サハク准将がいつ如何なる時も市民を守ることを義務付けている為、ここ居住区画にいる場合だと、治安維持と避難誘導の補助が課せられている、はずだ。

何でも今年に入ってから新たに定められた規定らしいが、その為に流石に銃器はないが、伸縮型のスタン棒とファーストエイド・キットが支給されていたりする。

「うん、保安官の補助!　って、こんな時に通信?」

「マユラ、俺が出るから、お前は必要なものの準備をしてくれ」

「あっ、うん、わかった!」

通信に出てみると、携帯端末からの通信らしく、声だけだった。

「……はい、こちらって親父？」
『ああ、私だ。アイン、私や社内は大丈夫だから、市街を見てきてくれ』
「市街を？」
『そうだ。昨日、地球からの定期船で避難民が多く到着している』
「……ここにまだ不慣れな人が多いって事だな？」
『アメノミハシラの治安組織は優秀だが、人手には限界がある』
「わかった。今から出てくるよ」
『頼む。……それとレナ君が車を玄関に回している』
「おっと、気が利くね。うん、わかった。こう見えても、前々歴はプラントの保安局員だったし、安心しろ」
『……そういえばそうだったな。では、切るぞ』
「はいよ」

……親父の奴、俺がプラントの保安局員だったって事、忘れてたな。

「マユラ、聞いていたと思うが、これから市街に向う」
「うん、準備はできてる！」

見れば、マユラはファーストエイド・キットの大型版であり、衛生兵が身に着けていそうなエイド・バックを手に持っていた。

「……んなもん、あったっけ？」
「普通に、部屋備え付けの備品だったよ？」

親父……、ここって、もしかして、本当に要塞なのか？

そんなことを一瞬考えてしまったが、サイレンが止む気配がない

ので、とりあえず、玄関を目指して走り出した。

◇　◇　◇

「先輩！」

玄関に到着するとレナが大声で呼んでくれた。で、そのレナが乗っていた車だが、普段から街中を走っている小型車タイプではなく、ワゴンタイプの大型多目的車だった。それの助手席に乗り込みながら問い掛ける。

「待たせたか？」
「ええ、ちょっと弛んでますね」
「それは悪ぅござんした」

後部にマユラが乗り込んだのを確認して、レナに告げる。

「なら、その分の時間を運転で取り戻してくれ。マユラ、市街で予備役が集まる場所は何処だ？」
「第一エレベータ前！」
「なら、まずはそこを目指す。……が、途中、迷子や避難できていない人を見つけたら、優先して保護する」
「はいっ！」
「わかった」
「じゃあ、レナ」
「はい、行きます！」

レナがアクセルを踏み込むと、通常のエレカーらしくない急加速

で車が走り出した。

「加速力あるけど、これってエレカーじゃないのか？」

「内部供給式の燃料電池車って言ってました。酸素供給装置も装備しているから、緊急用避難シェルター代わりにもなるそうでして、宇宙に放り出されても半日は持つそうです。非常用車両として、他のコロニーや地球にも輸出しているみたいですよ？」

……むぅ、輸出できる程の技術力と実績があるなら、案外、うちで作ってる燃料電池、ＭＳの動力源として、本当にいけるかもしれないな。

「先輩？」

「あ、すまん。安全運転で急げな」

「アインさん、矛盾してる」

「いやいや、別に矛盾してないって。それにレナなら両方できるから、な、レナ？」

「うぅ、マユラ、こうやって、ザフトにいた時から、いつもいつも、先輩に無理難題を……」

ちょ、人聞きが内容な上に、同情を誘うような悪い声を出すなっ！

「……アインさん、さいてー」

「はぅあっ！」

恋人の一人から、さいてー呼ばわりされて、深く傷ついたアインですって、冗談は程々にしてだな。

「それよりも、ここまで見た感じだと、避難は順調みたいだな」

「うん、そうだね」

「でも先輩、まだ市街部に入ってませんからわかりませんよ」
「確かになって、保安官が手を振ってる、レナ」
「はい！」

若い保安官……国防宇宙軍の憲兵であり、居住区画の治安を維持する軍警でもある……の誘導に従って、道路脇で何台か並んでいる車列の合間に停車させる。落ち着いてみれば周囲を見れば、信号機には赤が点り、直下の案内板にも『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ』との表示が出ていた。

「避難警報が出ています！　車を降りて、そこの地下鉄出入り口からシェルターへ退避してください！」
「いや、俺達、予備役」
「あ、それなら、第一エレベータ前に行って下さい。市街地区で避難遅れが出ていないかの確認作業が始まってますので、それに参加して下さい！」
「了解。……お疲れ様、頑張って」
「ありがとうございます。では、お願いします」

保安官の敬礼にオーブ軍式で返礼をすると、レナに声をかける前に、心得たように再び車が走り出した。一分も経たない内に市街地区に入ったが、道路脇に車が停車している他は、やはり人影は見られない。

「対応が早いというか、俺達、行く必要ないんじゃないか？」
「かもしれないけど、本国が攻撃を受けた時は避難誘導が遅れて、たくさんの民間人が戦闘に巻き込まれてるから……」
「……そうか」

そんなことをマユラと話していると、レナがポツリと呟いた。

「私、避難警報中の街中って初めてですけど……、こんなのだったんですね」
「みたいだな」

市街の電気等のインフラは生きている為、商店の明かりや音源等が動いているのだが、そこに店員や客の姿がなくなっただけで、寂しさ……、というよりも、不気味さを感じてしまう。

「あ、見えました」
「誘導に従ってくれ」
「わかりました！」

ここでもまた、中年の保安官によって、エレベータ前の車止めへと誘導されて停車すると、早速、浅黒い肌をした別の保安官が声をかけてきた。

「予備役か！？」
「ええ、俺達はどうすれば？」
「市内に逃げ遅れがいないかの確認に参加してくれ！　こいつが割り当てだ！」

という具合に、市街地を横断するルートが描かれた市街地図を渡される。

パッと見れば、行って帰って、約七？といった所だ。

「一枚って事は、このメンバーで動いていいってことか？」
「ああ、火事場泥棒といった不心得者も出るから、その方が安全だ」
「了解、一巡したら戻ってくる」

「なら車を……って、その車なら大丈夫だな。時間が惜しい、悪いがその自前を使ってくれ」
「わかった」
「では、頼む！」

その保安官に頷き返すと同時に、タイミングよく車が動き出すあたり、レナとの呼吸が合っていることだろう。そんなことを感じつつ、運転しているレナに見えるようにダッシュボードに地図を固定する。

「レナは低速運転を意識しろ。マユラ、右を担当してくれ、俺は左を見る。窓は全開にして、サイレンで煩いだろうが、意識して別の音を探せ。そして、声や物音、人影らしき動きを見たら、声を出せ、……いいな？」
「わかった！」
「はい！」

指示を出した後、直に巡回ルートに入って、車をゆっくりと走らせるが……、さっきのエレベータ前以外、人影は見えない。

まぁ、サイレンが鳴り始めてから、十分近くが経っているから、普通なら避難できているだろう。

……。

それにしても、どこが攻めてきたんだろうか？

事前に聞いていた情報から考えると……、やっぱり、ユーラシア、かなぁ。

内心でサイレンの原因について考えていると、俄かにマユラが声をあげた。

「どうした、マユラ」
「ちょっと待って、……声が、……うん、声が聞こえる」
「よし、レナは車で待機していてくれ、俺とマユラで見てくる」
「わかりました。……二人とも気をつけて」
「うん、わかってる」
「お前こそ、油断するなよ？」
「はい！」

一人残るレナにも注意を促しておいて、マユラに声が聞こえた方向を尋ねる。

「マユラ、どっちだ？」
「あっち！　あの公園あたりから！」
「よし、急ごう」

二人して駆け出すと　街中に煩く響くサイレンの中、確かに声が……、公園の方向から女の声が聞こえる。

「アインさん、こっち！」
「ああ！」

マユラを追いかけながらも、念の為に警棒を伸ばしておき、不測の事態に備えておく。

「……ちゃん！　どこにいるのっ！」

って、えっ？　あれ？

「フレイ！？」
「アルスター、どうしてここにっ！？」
「それは後で！　それよりも迷子がいるの！」

迷子ってことは、親もいるな。

「親はちゃんと避難出来ているのか！？」
「母親は怪我をしてるから、近くで別の人が看てくれている！」
「ッ！　何故、避難しない！」
「ばかっっ！！　子どもを見捨てて逃げる母親がっ！　いるわけないでしょっっ！！！」

ッ！　確かに！

「すまん！　なら、母親の怪我の具合は？　迷子はどこで見失った！　その子の名前はっ！」
「母親は足を挫いてる！　この公園近くらしいわ！　名前はエル！」
「わかった！　アルスターはこの辺りを！　俺は奥に行く！　マユラは母親の所に行って、怪我の治療と車まで誘導しろ！」
「ええっ！」
「うん、わかったっ！」

簡単な指示を出して、足を公園の奥へと走らせるが……、この公園は緑地が多いから、見通しが悪い。こうなると、普段は閉鎖空間での癒しを与えてくれる緑樹だが、今は煩わしいな。

……なら、音で聞き分けるしかないか。

……。

……。

……。

……ッ！　泣き声！

「エルちゃん！　どこだっ！」

反応は……、あった！

弱々しくも返事があったので、方向に見当をつけて、走り出す。

……いた！

蹲って耳を塞いで泣いている。

「エルちゃん！」

「うぁぅぅう、お、おじさん、だれ？」

おじっっ、……じゃないっ！

「お、お母さんに頼まれて、エルちゃんを探しに来たんだ」

「……ぅ、こ、このおと、また、怖いこと、おきるの？」

……戦災避難民か。

「はは、大丈夫だよ。ここはね、本当に、強い人が守ってくれているから、大丈夫」

膝を落し、できるかぎり同じ高さ、同じ目線で話しかける。

「う、うそだっ！　前の家に、いた時も、この前も！　みんな、そういってたもん！」

一度、家を焼かれているから、そう簡単には信頼できないってことか。

……この子の心の傷は、深いな。

「お兄さんの言うこと、信じられない？」

エルちゃんの首がコクリと縦に振られる。

……方針変更。

「なら、お母さんの所に帰ろうよ。エルちゃんがいなくなって、とっても心配してる」

「……おかあさん、ママ、……うん、ママのところに帰る」

「うん、なら、お兄さんの背中に乗って」

っし、説得成功！

エルちゃんを背負うと、すぐさま、アルスターと別れた場所に戻るべく走り出す。

「おじさん、ママ、どこ？」

うぅぅ、おじさんおじさんって……、おれ、まだ、二十代だし、わかいはずなのに……。

本当に、幼子の無自覚な言葉の暴力に涙が出そうだ。

「は、はは、今から連れて行くから、ちょっとだけ、待ってね」

「……ぅん」

……って、見えてきた！

「アルスター！」

「あっ！　見つかったのね！」

「ああ、母親の居場所は！　念の為に、経由してから車に戻る！」

「わかった！　こっち！」

アルスターは俺の言葉に即座に反応して、先導し始める。

……はぁー、アルスターって、俺が想像していたよりも遥かに非常時に強いみたいだ。

そんな事を考えていると進行方向に、マユラともう一人、アルスターが言っていた怪我を看てくれていた人がエルちゃんの母親らしき女性に肩を貸して、車に向っている姿が見えた。

「あ、ママ」

「うん、だから、大丈夫だよ。……マユラ！」

「あっ！　アインさん！　見つかったの！？」

「ああ、見つけた！　それよりも車に急ぐぞ！」

そんなやり取りをマユラとして、さり気なく、マユラの反対側で肩を貸していた人を見て、驚きの余り、目を見開いてしまった。

「え？　……えぇっ？　ば、バジルール少佐っ！？　どうしてここにっ！」

「お久しぶりですね、ラインブルグ隊長。ですが、今は非常時、話は後にしましょう」

「あ、そ、そうですね、こっちです！」

大西洋連邦の実家に帰ったはずのフレイ・アルスターがアメノミハシラにいるのと同様に、大西洋連邦軍に所属しているはずのバジルール少佐が何故にここにいるのか、本当に疑問は尽きないが、今は避難が優先と、車へと向って足を動かした。

※注　モービル・バイ・ライト（Ｍｏｂｉｌｅ－ｂｙ－ｌｉｇｈｔ：適当造語）
ＭＳが使用している操縦制御システムの事であり、ジンから組み込まれているＭＳの基幹技術、と思いねぃ。

１４　混沌の端緒　―アメノミハシラ防衛戦　２

今日、６月２２日に起きたアメノミハシラへの攻撃は、ユーラシア連邦軍に所属するアルテミス要塞駐留艦隊によるアメノミハシラ制圧を目指した軍事行動ということが判明している。

この軍事行動の結果なのだが、保安官達が市民の動揺を抑える為に情報を意図的に流したのだろう、シェルター内に避難していた市民の間にも、オーブ国防宇宙軍はアルテミス艦隊を一方的に撃滅して壊走させたという話が広がっていたりする。

……が、実際にはどうなんだろうか？

いや、アメノミハシラがアルテミス艦隊を退けたのは保安官達の雰囲気や余裕振りからわかるのだが、一方的な撃滅なのかはわからない。まぁ、その戦闘の細かな推移については、今現在、戦後処理をしている段階では誰もが忙しいだろうから入手できる状態ではないが、もうしばらく経てば、ノルズの実戦評価や改善要望もあるだろうから宇宙軍から回されるか、裏から手に入れる事ができるだろう。

とにかく、アルテミス艦隊が尻尾を巻いて退散した後、宇宙軍によってアメノミハシラ周辺宙域の安全が確認され、日付が変わる二時間ほど前に、ようやく非常事態が解除される運びとなった。もっとも、その頃には親父達や重役連中、無重力区画にある技術研究所にいたミーア達の無事が確認できていたので、本当に落ち着いたものだった。

そして、避難警報が解除され、避難シェルターから出た後なのだが、何度も礼を述べる避難民母子を避難民用アパートメントまで送り届け、アルスターとバジルール少佐については、何故、大西洋連邦ではなく、このアメノミハシラにいるのかを教えてもらう為に、我が家に招待したのだ。

でもって、少々疲れた様子で帰宅したミーアを大事をとって先に寝かせてから、レナには軽い夜食を、マユラには客間のベッドを準備をしてもらう間に、俺はリビングで二人から話を聞くことにした。

そんな訳で……。

まずは見知ったアルスター、白のパンツにピンクのブラウスという、無重力区画に行く事が多いアメノミハシラに住む女性と同じような極普通の装いをしたフレイ・アルスターから話を聞くことにしたのだが……。

「なるほど、アルスターはベティに誘われて、ここに来たのか」

「ええ、ベティさんに近況を報告したら、こっちに来たらいいじゃない、仕事もあるわよ、って誘ってくれたのよ」

「その仕事ってのは、きっと親父の秘書ってことになるんだろうなぁ。……しかし、アルスターはいいのか？　ようやく実家に帰って、まだ半年もなってないし、向こうに家とかあるんだろ？」

「いいのよ。……パパが死んで、私も行方不明になっていたのを良いことに、親族連中が好き放題に家の財産を持って行った上に、家まで取られていたわ」

「それはまた……、酷いな」

「ええ、酷い話よ。それに、この前、ここから家に戻る時に連絡が付いた連中にしても、私を取り込んで、少しでもパパの財産を分捕

ろうと考えていた、碌でもない奴等ばかりだったしね」

財貨は容易に人を狂わせるってことか、なんて事を考えつつ、ちょっと不機嫌そうな顔で自身の長い髪を弄っているアルスターに問いかける。

「でも、取り返す気はなかったのか？　大切な家だったりするんだろ？」

「まぁ、そうなんだけど……、家を取り戻す為に動いたり、下手に騒ぎ立てたりしていたら、本当に殺される可能性もあったのよ。実際、身の危険を感じたのも、一度や二度じゃなかったし……」

ちゃんちゃんちゃーっ、真実はいつも一つ……とは限らない、の世界ですねわかります。

「それはまた、資産家も大変だな」

「そう言うあんたも資産家のはずよ？」

「あ……、そういえば、俺もうちの会社の株を持ってたんだったな。いや、すっかり忘れてた」

「はぁ、ちゃんと管理しておきなさいよ？」

「いや、正直、さっぱりだから、全部、親父に任せてる」

「……私も、そうだったのよねぇ」

げっ、しまった、アルスターは戦争で親父さんを亡くしていたんだったな。

「んんっ、まぁ、理由はわかったが、円満解決で出てこれたのか？」

「ええ、地球連合軍というか大西洋連邦軍からも、行方不明になった後、しばらく記憶喪失だったみたいなのですが、記憶が戻ったので帰ってきました、って言ったら、簡単な聴取を受けただけで無事

に辞める事ができたし、親族連中には、ここまで来る為の旅費と当面を生活費を工面させて、もうあんた達とは縁を切るから、後はパパや私がいない間にしてきたように好きにすれば良いわよ、って、面と向って言ってきてやったわ」

「ははっ、それは何とも思いっきりが良いな」

「ふん、……今、私が求めているのは、ただ一人だけよ」

「……ひゅ～、かっこいい～」

「言いなさい。……でもね、女はこれくらいの度胸がないと、男を捕まえられないの」

そんな風に啖呵を切ったアルスターの様子を、若干、口元を緩めつつも見詰めていた妙齢の美人……軍服ではなく、黒のスラックスに白のジャケットという私服姿のナタル・バジルール少佐に話の矛先を移す。

「アルスターがここに来た理由はわかりましたが、バジルール少佐はどうしてここに？　って、その前に、お二人は親しそうに見えますが、お知り合いだったんですか？」

「ええ、細かな話は省かせてもらいますが、フレイとは先の戦争中に知り合いました。戦闘での混乱で、この子の行方がわからなくなってしまって、心配していたのですが、偶然、この子が除隊手続きに来ていた時に再会しまして……」

「へぇ、そうなんですか。……ちなみに、バジルール少佐がここに来られたのはご旅行ですか？」

「いえ、違います。それと、ラインブルグ隊ち……ラインブルグさん、私はもう、軍属ではありません」

「えっ？　軍属ではないというとは、除隊されたんですか？」

「いえ、不名誉除隊です」

「なっ！」

バジルール少佐から、あまりにも予想外すぎる言葉を聞いてしまい、動きが止まってしまう。

「う、嘘でしょう？　あなたのような立派な人に限って、そんなことは……」

「そう言って貰えるのは嬉しい限りですが、本当です。私は軍からは放り出され、家からも勘当されました」

「……何故、そのようなことにと聞いても？」

「それは……」

と、口を閉ざしたバジルールしょ……さんに代わって答えたのは、真剣な顔をしたアルスターだった。

「ナタルさん、この人、三人の女と同時に付き合ってる、どうしようもない助平な男だけど、ナタルさんに迷惑掛けたような陰湿な奴とは全然違うし、基本的にはおちゃらけているけど、プラントからここに来て帰国するまで、ちゃんと私の面倒を見てくれた良い人だから、話しても大丈夫と思う」

「あ、アルスター、お前は人に対する評価をぶっちゃけすぎだ」

「あら、助平を否定できるの？」

「……できねぇなぁ」

明後日の方向を向いて韜晦に務めていると、俄かに、バジルールさんが笑い声を上げた。

……何だか、以前、会った時と言うか、あの停戦の時の硬くキリッと雰囲気と違って、身に纏う強さというか、背負っていた責の重さが無くなった所為なのか、表情に柔らかさがあるな。

「失礼。……ラインブルグさん、私が不名誉除隊になった理由は、

上官……、将官を殴り飛ばしたからです」
「え、将官を殴った？　……マジですか？」
「ええ、将官からセクハラを受けて、反射的に手が出てしまい、総入歯にしてしまいました」
……砕いたってか？　つ、つえぇーな、おい。
「それに、こういったことも、二度目でしたから」
「は？　二度目？」
「ええ、一度目は少尉に初任官した時に、当時、上官だった大尉にセクハラを受けて、その時もまた、歯を砕きました」
ま、大口殺し（マウスクラッシャー）ナタル・バジルール、だなんて馬鹿げた言葉が、瞬間、頭に浮かんだ。
「……そ、そうですか」
「そうなのです。……しかし、それだけではなく、先の戦争中での優遇された人事配置で、ブルーコスモス派か、それに近いと見られたことも原因でしょう」
「ブルーコスモス派、ですか。……でも、バジルールさんは？近い？と表現したってことは、ブルーコスモスに所属している訳ではないんですよね？」
「ええ、所属はしていませんし、軍内にあるブルーコスモス派のように、コーディネイターを強制的に排除するべきとは考えていません。ですが、コーディネイターはナチュラルに溶け込み、回帰すべきだとは考えていますので……」
「あ、確かに、そういう考えだと、ブルーコスモス穏健派の考えになりますね」
「……よく、ご存知ですね」
「はは、前々職の名残ですよ。ですが、それが原因になるんですか

？」

「はい、あのヤキン・ドゥーエ宙域での最終決戦で、対プラント強硬派だったブルーコスモス派が幹部の多くを失い、結果、大勢を占めていたブルーコスモス派が縮小して、軍内のバランスが大きく変わりましたから」

なるほど、ブルーコスモス派にはぶられていた連中による報復人事って奴か。

「先の将官のセクハラも、自分が庇ってやるから愛人になれと言ってきたのが発端です。ずっと、明確に拒絶していたのですが、最終的には力尽くで来ましたので、それで反撃を……」

……バジルールさんって、ぐっと我慢して、ストレスを溜めそうなあたり、ユウキに似てるかもなぁ。で、今の話にあるように、爆発したら、それまでの反動もあって、物凄く怖いと……。

「当然、軍法会議に掛けられて、その将官の名誉の問題に加えて、ブルーコスモス派に近いと思われていた事もあって、不名誉除隊です」

「ですが、何が何でも、軍に残ろうとは思わなかったんですか？」

「……確かに、今となっては、何故、残ろうと思わなかったのかと思わなくもないです。ですが、当時、私も相当に頭に来ていたようでして……」

あ、恥ずかしそうに目を逸らした。

「そして、この不名誉除隊が原因で、実家からも勘当されてしまいました」

「その勘当ってのも、少々行き過ぎな気がしますね」

「私の家は、代々、軍人を務めてきましたから」
「……なるほど、名誉不名誉には煩いってことですか」
「ええ、そういうことです。軍から放り出され、家からも勘当された後、どうしようかと考えていた所に、連絡を取り合っていたフレイからアメノミハシラに移住する事を聞きました。もはや、大西洋連邦に身を置いておく理由もありませんでしたし、ならば、私も一度、環境を変えてみようかと……」
「……そうでしたか」

と納得してしまう所だが、ちょっと待って欲しい。

少々下世話な話になるのだが、不名誉除隊ってのは世間一般的に見ても、俺がザフトに所属していた事を世間様に隠すように、経歴的にはかなり痛いものであり、再就職をしようにも雇用する側が撥ねることも多かったりする。要するに、バジルールさんの生活再建は非常に大変だということだ。

「それでは、今後はどうするおつもりですか？」
「まずはアメノミハシラの自立支援プログラムを受けようと考えています」
「そうですか……、あ、今日はもしかして？」
「ええ、今日はその説明を受ける予定だったのですが、今回の戦闘の影響で流れてしまいました。ですから、混乱が落ち着くまで、少々、遅れるかもしれませんね」
「そうですね」

……。

うーん、俺、この人と命懸けで戦闘したから、その価値というか、強固な意思と果断な判断力、高い指揮能力を知っているだけに、勿

体無いよなぁ。

……お節介かもしれないけど、こちらでも何か考えてみてもいいかな？

と、内心で伝手を頼ってみるかなんてことを考えつつ、作業を終えたレナとマユラも交えて夜食を食べながら、今回のアメノミハシラへの攻撃は何の目的で行ったのかやアメノミハシラや大西洋連邦、オーブ本国といった国々の社会状況、アルスターの想い人の行方、俺とレナ達の仲がどこまで行っているか等々を語り合い、就寝したのだ。

そして、翌朝。

ミーアを含めた六人で朝食を共に食べた後、アルスターとバジルールさんを二人が泊まっている移民用宿泊施設に帰してから、仕事場に向うまでの時間を使い、少々、ぼんやりとした頭で昨日の戦闘に関する情報を流すミハシラ・ブロードキャストのモーニングニュースを眺めながら、今日の予定を考える。

自然と先の戦闘の事が思い浮かび、宇宙軍に余裕があれば、早い所、ノルズのデータが欲しいなぁ、等と考えていると、昨日の今日で、疲れが取れていないのか、かなり機嫌が悪そうなミーアが、社服に着替えながら声を掛けてきた。

「兄さん」

「ん、どうした、ミーア」

「フレイと一緒にいた人、バジルールさんって、綺麗だったよね」

「ああ、そうだな」

「……それに、兄さんよりも年上みたいだし」

……何となく、ピンと来るものがあったから、それ以上の問答はせず、着替え終わったミーアを無言のまま手招き、近づいてきた所を強引に抱き寄せて足の間に座らせる。その際に若干の抵抗……というよりもこちらにじゃれ付く様な甘えを見せたが、いつかやったように顎を頭の上に載せると大人しくなった。

「ミーア、嫉妬か？」
「む、むぅ、ストレートで来た」
「まあね。で、どうなんだ？」
「……そうかも」

でも、ミーアが今示したような、ちょっとした独占欲が嬉しかったりするのが人間だ。

「はは、その気持ちを素直に認められるってことは、ミーアも大人だな」
「そうなの？」
「ああ、だから、俺もこんなことする」

ミーアの頬に軽くキスをして、その頬に自身の頬を寄せつつ、両手の内に服と下着で守られた膨らみを収め、やわやわと動かす。

……くっ！　やはり、生でなくては、あの吸い付くような指を喜ばせる感覚がないっ！

むぐぐ、非常に、残念だっ！

「んぁっ、……に、兄さんって、やっぱり、エッチだよね」

「男ですから」
「お尻にも硬いのが当たってるし」
「男ですから」
「でも、まだ誰にも手を出してないよね？」
「ヘタレでごめんなさい」

いや、こう、雰囲気的にと言いますか、俺自身の気持ちをそこまで持って行けなくてねぇ。

「もしかして、遠慮してるの？」
「まさかぁ、肉体的な繋がりは今は？まだ？だけど、いずれはというか、雰囲気というか状況が整うというか、とにかく、機会と時が巡ってくれば、必ず、絶対に、容赦なく頂くさ。……でも、そういった繋がりがまだでもさ、俺は皆と一緒に居られる今の生活が楽しいし、幸せなんだよ」
「……ん、この声だと、嘘じゃないみたいだよ、レナさん、マユラさん」
「うん、そうみたいね」
「私も、なんとなく、そう感じる」

……三人とも、俺の声で嘘を付いているのかわかるのか、って、レナにマユラ？

声が聞こえた方向を振り返ると、こちらも社服姿のレナとマユラがニコニコと笑みを見せながら近づいてきて、俺の両サイド……、右にレナ、左にマユラと分かれるとストンと腰を落ち着け、甘えるように身を寄せてきた。なので、ミーアの胸から手を離し、二人の肩に手を回して抱き寄せる。

そうやって互いに温もりを分かち合いながら、しばらく穏やかな

時間を過ごしていると、マユラが緩い声をあげた。

「あ～、落ち着くなぁ」

「ふふ、マユラって、先輩に抱きつくのが好きだよね」

「うん、だって、この頼れる温もりと力強さはさぁ、癖になるもん」

「あ、私も昔から、兄さんに抱きついてたから、その気持ち、良くわかる」

「うー、ミーアちゃん、これ、昔から味わってたんだぁ、……いいなぁ」

「あはは、マユラ、これからもずっと、先輩に相手をしてもらえばいいじゃない」

「そう言うレナさんも、兄さんに、これからもずっと相手してもらう気満々のくせに」

「当然でしょ、ミーアちゃん」

俺の身体越しにレナとマユラ、それにミーアが言い合うのを聞きながら、男として、雄としての充実感と、好いた相手と共にいられる幸せを噛み締めていると、ミーアがテレビ画面に映る時計を見て、声をあげた。

「むぅ、残念、時間だ」

「みたいだな」

「ねぇ、アインさん、今日はこのまま休まない？」

「マユラ、本当に魅力的な考えだが、ずっとお前達に頼られて、包み込める存在でいたいから、できないな」

「ふふ、先輩って、そういう所だけは真面目ですよね」

じゃないと、グループを支えるおっさん共、もとい、重役連中が喜々としてネチネチとイビリに動くのが目に見えているからなぁ。

簡単な話、複数の女を囲っていたかったら、十二分に仕事しやがれっ、この野郎っ！　て奴だ。

「さて、そろそろ出ようか」

「「「はーい」」」

元気に応えてくれた三人に、それぞれ軽いキスを送った後、俺は仕事に赴く為に動き始めた。

15　混沌の端緒　―アメノミハシラ防衛戦　3

「なるほど、足つき……、アークエンジェル級の艦長を務められた人ですか」

例の戦闘から三日後、俺は親父に無理を言ってモルゲンレーテとの臨時会合を設定してもらい、バジルールさんのことをアメノミハシラ支社長であるスズキさんに話をしている。

「ええ、詰まらない事で不名誉除隊になってますけど、実力は指折りです。私も戦場で戦いましたけど、ほんと、手強い相手でしたよ」
「ほぅ、それはそれは……、なら、アインさんが【トツカ計画】に加えたがるのもわかりますね」

トツカ計画とは、モルゲンレーテとラインブルグ・グループが共同……というよりはモルゲンレーテ主体での開発が予定されているＭＳ艦載型宇宙戦闘艦開発計画で、もう少しで正式に立ち上げられそうな所まで来ていたりする。

「はい、ですから、艦艇運用者として意見を出してもらえれば、設計段階から色々と試行錯誤も可能かなと思いまして」
「確かに、オーブ宇宙軍は実戦運用経験が少ないですから、貴重な意見を頂けるでしょうな。……しかし、そのような優秀な人材を、自社で確保せず、我が社にスカウトして欲しいとは、何故なんです？」
「いや、それがバジルールさんは代々軍人家系だそうでして、私の勘も多分にあるんですが、良い意味でも悪い意味でも潔癖といいま

すか……、とにかく、同情や施しを嫌いそうに感じましてね。ここに至るまでの話を、簡単にとはいえ、聞いてしまった手前、少々憚られるんですよ」

「ふむ、下手を打てば、逃げられてしまうかもしれないと？」

「そういうことです」

まぁ、要するに、釣りの駆け引きよりも漁の確実性が重要だということだ。

「わかりました。そういうことならば、支援プログラムの方に手を回して、うまく我が社に引き込むように仕向けましょう」

「ええ、お願いします。っと、忘れていましたが、バジルールさんは中々に洞察力も鋭そうですから、違和感を感じさせないように、慎重に事を運んでください」

「ええ、ええ、もちろんですとも。……こう言っては何ですが、どうやって相手に悟られずに引きこむかを考えると、何だか楽しくなってきましてな」

「悪戯を仕掛けるみたいで？」

「ええ、なんとなく、童心に返った気分ですよ」

なんてことを話した後、ふふふ、と二人して悪商人っぽく笑いあうが、俄かにスズキさんは態度を改めて、思いもかけない事を尋ねてきた。

「ところで……、ラバッツさんは……、マユラ・ラバッツさんはお元気でしょうか？」

「え？　え、ええ、私も常々、彼女から元気を分けてもらう位に元気ですし、彼女が仕事を手伝ってくれなければ、私はこうして会合を設けて話をするのが困難になる程に、仕事が滞るでしょうね」

「おお、そうですか」

そう言うと、スズキさんは血色の良い自らの頭部を一撫でしてから、相好を崩した。その喜びようを疑問に感じたので、その答えを求めるべくマユラとの関係について尋ねてみる。

「ええと、ラバッツとはどのような？」

「ああ、これは失礼。実は、彼女の父上は、私がヘリオポリス建設に関わっていた時の部下でして」

「……ヘリオポリス建設中の事故で亡くなったという？」

「……ええ、あれは実に痛ましい事故でした。彼女の父上以外にも、将来有望な社員が多く犠牲になりましたからね」

「そうでしたか」

「彼女の父上が亡くなった後、遺された二人を気に掛けてはいたのですが、直にアメノミハシラ建設に携わる事になり、ほんの僅かしか、手を差し伸べる事はできなかったのです」

……ほんの僅かと言っているが、マユラから聞いた身の上話から換算すると、恐らくはスズキさんがモルゲンレーテ本社に働きかけて、遺された二人の為に職住を確保し、マユラが母を失った以降も独り立ちできるまで、モルゲンレーテが面倒を見るように、さり気なくバックアップしていたんじゃないかな？

「例の戦闘に参加して以来、行方がわからなくなって心配していたのですが、アインさんの所に身を寄せていると聞き、本当に安堵しましたよ」

「はは、なら、私は、スズキさんのその安堵がずっと続くように、努力していきたいと思います」

「……ええ、お願いします」

そういって頭を下げたスズキさんにこちらも頭を下げ返す。

当初の目的の他に、思いもよらなかった関係性を知ることにもなった臨時会合は、この話で終了する事になった。

◇　◇　◇

スズキさんへのお願いを終えて本社に戻った後は、第五開発部で開発が進められているトツカ計画で組み込みたい兵装の開発状況報告書やパーシィから上がってきたＭＳのアウトライン設計図等を読んでいたのだが、マユラが親父から受け取ってきた、先の防衛戦の詳報で全て吹き飛んでしまった。

「はぁ～、これは確かに一方的だわなぁ」
「だよねぇ」

何しろ、マユラと共にその詳報を読むに連れ、本当にそういう感想しかでなくなるような推移だったのだ。

その親父の伝手を使って得た情報によると、攻撃を仕掛けてきたアルテミス駐留艦隊は、艦艇戦力が３００ｍ級……アガメムノン級宇宙母艦一隻、２５０ｍ級……ネルソン級宇宙戦艦二隻、１５０ｍ級……ドレイク級宇宙護衛艦十六隻と双胴型輸送艦……コーネリアス級輸送艦六隻の計二十五隻と、機動戦力が艦艇群から出撃が確認された艦載機から推測しての大凡で、ＭＡ……メビウスが六十機で二個大隊弱、ＭＳ……ストライクダガーが三十六機で一個大隊規模だったそうだ。

で、迎え撃ったアメノミハシラの防衛隊、というよりも国防宇宙

軍の全戦力は、主力艦である【ＳＢＢ－１】イズモ級ＭＳ艦載型宇宙戦艦二隻と、それらに艦載されているＭ１アストレイが二十四機、アメノミハシラ防衛隊のＭ１アストレイ十二機とメビウス三十六機、そして、ノルズのＢＩ三個編隊で三十六機だったらしい。

この対比から見てわかるように、アメノミハシラは艦艇数の差で明らかに戦力的に負けていたのだが、艦艇から艦砲や対艦ミサイル等による攻撃を受ける事はなく、その代わりにメビウスやストライクダガーといった機動戦力やネルソン級一とドレイク級八といった艦艇に守られたコーネリアス級輸送艦三がアメノミハシラに向って突入してきたそうだ。

この動きからもわかるように、アルテミス駐留艦隊はこちらの構造体に強行接舷して制圧部隊を送り込み、アメノミハシラ自体を確保しようと考えていたのだろう。

まぁ、戦力対比やユーラシア側の目的はここまでにして、肝心の戦闘の推移なのだが……、防衛隊司令部に据えられたノルズがアメノミハシラの管制宙域にアルテミス艦隊が侵入した事を確認した時点から事は始まる。

このアルテミス艦隊の動きを受けたノルズは、宙域を行き来する商船等から予め提出されている航路プランと照合して該当がない事を把握すると共に、艦影と艦数、配置等の情報からアメノミハシラにとって脅威となる軍用艦による軍事行動であると判断し、防衛隊の管制官に注意喚起を発している。

この動きと同期する形で最初のコンタクトを行っているのだが、アメノミハシラを制圧する気満々のアルテミス艦隊は無視。次いで発せられた一度目の警告が無視された段階で、防衛隊にスクランブルが発令され、主任管制官の判断で司令部や宇宙艦隊にも連絡が回り、非常召集が掛けられたそうだ。

そして、ノルズにとっては最終警告である二度目の警告が無視された段階で、待機中だった全ＢＩに迎撃命令が下される事になったのだが、その頃には、露払いを担当するアルテミス艦隊のＭＡが急速接近していた為、ノルズの第一防衛線が形成される前に若干数の侵入を許してしまった。

本来、数をもって敵に対抗するのがノルズの基本運用法だけに、配備されている数が少ないと、どうしても隙が大きくなる欠点があるのだが、そこに嵌まってしまった形だ。

今回は幸いな事に、第一防衛線形成前に進入して来たＭＡ群は第二防衛線形成に向っていたベルダンディが想定進路に重散弾砲で放ったキャニスター弾の網に掛かり、連装ビーム砲の餌食になったから良かったものの、これを抜けられていたら防衛隊のスクランブル発進が間に合わなかったかもしれない。

売り手としては今回の件を元に、よりノルズの信頼性を高める為にも、敵の速度やＢＩの数に合わせて運用方法を考えるといった対策を考える必要があるだろう、っていうようなノルズ関連のお仕事に関しては、基本、生産母体の宇宙工業や技術研究所、グループ各社のノルズ担当に任せる事にして、話を戦闘の推移に戻す。

ノルズによる初期迎撃が始まった事で、先行していたアルテミス艦隊の機動部隊はアメノミハシラから遠く離れた宙域で断続的に迎撃に現れるＢＩの制圧火力網によって行動を大きく阻害され、侵攻の停滞を余儀なくされる事になった。

無論、アルテミス艦隊だって黙って見ていたわけではなく、ＭＳやＭＡによって、第一防衛線を形成したＢＩを撃ち落していき、ウルド五、ベルダンディ六の撃滅に成功している。

……が、この段階で、ＭＡが二十一機、ＭＳが二機撃破されるなんて損害が発生していたりする。

こんな具合にノルズが露払い役であるＭＡの鋭鋒を何とか受け止め、制圧部隊の突入を援護するＭＡやＭＳに無視できない損害を与えている間に、スクランブル待機中だった防衛隊のＭＳ三機とＭＡ十二機が出撃してアメノミハシラへの攻撃に備えると共に、他のＭＳやＭＡが起動されていき、宇宙艦隊の出航準備も進んで行ったそうだ。

そんな目に見えるアメノミハシラの動きに焦り始めたらしいアルテミス艦隊は、突入艦艇を更に増速させたのだが、対艦装備仕様のベルダンディが放った中型ミサイルの直撃を喰らったり、第一防衛線で撃破を免れていた一機のウルドによる艦艇への？バンザイアタック？を受けて、ドレイク級が二、コーネリアス級が一が撃沈される破目になった。

当然、艦艇を守る為のＭＡやＭＳだっていたのだが、第二防衛線を構成するベルダンディ十二による組織立った迎撃……重散弾砲で使用するもう一つの弾種、クラスター弾でのクロスファイアーや小型ミサイルによる飽和攻撃の対応に忙殺され、それどころではなかったみたいだ。

この第二防衛線での戦闘では、ベルダンディが全機撃破されるまでに、ＭＡを十九機、ＭＳを八機を撃墜していたりする。

戦場においては宙域を制圧する程の火力こそが正義だなんて嘯いて、キャニスター弾以上にデブリが生み出し、また、不発弾が発生する危険も承知の上で、重散弾砲にクラスター弾を導入したんだが……、どうやら正解だったようだ。

……はぁ、早い所、不発弾処理の方法も確立しないとなぁ。

っと、俺の個人的な感慨は置いておくとして、アルテミス艦隊が第二防衛線を突破した時点で、アメノミハシラの防衛体制は完全に立ち上がっており、防衛ＭＳ隊やＭＡ隊の残りが出撃して、第二防衛線とアメノミハシラの間の宙域に展開を終え、また、宇宙艦隊に属するイズモ級二隻もまた、出撃を終えている。

俺が指揮官だったら、敵の展開が終了している事に加え、ＭＡ四十、ＭＳ十、ドレイク級二、制圧部隊込みのコーネリアス級一を失うという大損害を受けているので、撤退を決断している所だが、多くの者にとって非常に残念な事に、アルテミス艦隊はそのような考えが浮かばなかったか、元より選択肢から削られていたのかはわからないが、突入を諦める事はなかった。

そして、一連の戦闘での最終局面として、人対人の戦闘が始まることになる。

防衛隊に所属するＭＳ隊が防衛線の維持を担う一方で、防衛隊の二個ＭＡ中隊二十四機とイズモ級から出撃したＭＳ二十四機がノルズとの戦闘で消耗していたアルテミス艦隊の突入部隊に襲い掛かり、それこそ、見ていて哀れに感じてしまう程に一方的な戦闘を展開したらしく、ほぼ同数だった戦力が見る見る磨り減っていったようだ。

中でもサハク准将が搭乗するＭ１アストレイの原型機であり、文字通りに宇宙軍のフラグシップ機でもある【ＭＢＦ－Ｐ０１－２】アストレイ、別名【アマツ・ミナ】は、Ｍ１アストレイ一個小隊を随伴させて大暴れし、その強さを存分に見せつけたそうだ。

……うむむ、状況が状況とはいえ、一軍の長であり、アメノミハシラの実質的な為政者でもあるサハク准将が前線に出張るのは頂けない。いや、俺もこれまでの事を考えると人の事を言えないのはわかっているが、流石に一部隊長とは比べ物にならない軍司令官であ

り、アメノミハシラを牛耳る為政者である以上は自重して欲しい。今度、会った時には諫言しておいた方がいいだろう。

話を戻して、この戦闘の結果、アメノミハシラに突入を図った艦艇群は一隻残らず殲滅され、機動戦力もアガメムノン級の近くで直掩に当たっていたＭＳ三、ＭＡ四を残して、全機を撃墜している。対して、受けた損害はＭＳが二、ＭＡが七だなんて、驚きの余りに引っくり返りそうな程に軽微で済んでいる。

……なんとも精強な物だと感心する他ないよ、ほんとにさ。

とにかく、俄かには信じられない結末に、アルテミス艦隊は算を乱すように撤退を開始し、そこにイズモ級が対艦ミサイルでもって追い撃ちを仕掛け、ネルソン級一隻を轟沈させて、全ての戦闘が終了している。

そして、戦闘後のアメノミハシラ側による救助活動で運良く助かったＭＳやＭＡのパイロット、それに艦艇の乗組員や制圧部隊員等から得られた証言で、正式にアルテミス要塞……、ユーラシア連邦軍からの攻撃だと認定されるに至ったのだ。

後、付け加えるならば、これらの外での戦闘に他にも、アメノミハシラ内部で事が……、ユーラシアによる攻撃が仕掛けられていたりする。

アメノミハシラ総司令部へのユーラシア軍特殊部隊による強襲（笑）作戦と居住コロニーでの工作員による陽動破壊活動だ。

まず特殊部隊による強襲（笑）からなのだが……、周辺宙域での戦闘が始まった為、流れ弾を恐れてアメノミハシラの宇宙港に避難してきた東アジア共和国船籍の貨物船があったらしい。でもって、

戦闘が開始されると、その船底ハッチから突如として武装した人員が降り立ち、総司令部を目指して侵入を始めたとのこと。

もっとも、この特殊部隊の動きは宇宙港や各通路に最低一つは必ず配置されている、モルゲンレーテがヘリオポリスが崩壊した事を教訓にラインブルグ宇宙工業と共同開発したガードセンサー網によって早くも感知される事になる。アメノミハシラ内部の治安維持や警備を担当するアメノミハシラ保安隊は、特殊部隊が存在する貨物用通路の隔壁を順次閉鎖、酸素供給系を通じて無力化ガスを投入した後、公表直後に宇宙軍に採用されたトリモチでもって確保してしまったそうだ。

……うん、これ絶対に、強襲（笑）だよなぁ。

また、この強襲（笑）に僅かながら先立って、アメノミハシラ第一居住コロニーではユーラシア連邦の工作員による陽動……、強襲支援の為にインフラ設備への破壊工作が行われ、市街に電力を送電する施設が破壊されるなんてことが起きた。

これの対応にあたった保安隊は設備への人の手による破壊を確認し、避難シェルターを全て閉鎖した後、虱潰しによる捜索を展開した事で、数人の火事場泥棒以外に、新たにモルゲンレーテの工場に爆破物を仕掛けていた三人の工作員を発見、銃撃戦が展開される事になった。そんな短くも激しい交戦の結果、工作員は全員死亡、保安隊にも十四名の死傷者が出ている。

……殉職者やその遺族、負傷者には悪いが、俺達が住んでいる第二居住コロニーで、そんな恐ろしい事が起きなくて良かったとホッとしたものだ。

まぁ、とにかく、軍属や治安部隊に若干の犠牲者が発生したものの、アメノミハシラは市民に犠牲を出すことなく、ユーラシア連邦

の侵攻を退ける事に成功したのだ。

……サハク准将というか、国防宇宙軍、つえぇーな、おい。

全てを読み終わった後、彼我の損失の差に乾いた笑いしか出てこなかったが、ここに住む身なれば、これ程、頼もしい存在はないだろう。そう思い直していると、マユラが思い出したように親父の言葉を伝えてきた。

「あ、そうそう、アインさん、おと……会長がね、防衛隊からＢＩの損失分と前回と同じだけの追加発注が来てる、って言ってたわ」

「……だろうなぁ」

確かに、ノルズの出来にはそれなりの自信はあったが、ここまでとは……、と強く思ってしまう程に、その役割を十全に果たしたのだから、追加発注も来るはずだよ。

先の戦闘に参加したＢＩ三十六機の内訳は、ウルドとスクルドがそれぞれ九機、ベルダンディが十八機で、その内、ウルド三機とスクルド九機以外が全て撃墜されている。

これに対して、撃破した戦力は、ＭＡが四十、ＭＳが十、１５０ｍ級が二、双胴型輸送艦が一だった。

いや、本当に、対費用効果が凄まじいことになっているが、このことをアルテミス艦隊の連中というか、ユーラシア連邦軍の経理や兵站の担当者が知ったら、精神崩壊するんじゃないか？

これは親父に、開発を担当したパーシィ達第五開発部やＢＩ担当グループに臨時報奨を絶対に出すように、進言しておかないといけないよなぁ。

俺は部屋備え付けの機密書類専用焼却装置を起動させて、焼却処分と判された書類を放り込み、親父にその事を一言伝えるべく、通信端末に向き合ったのだが、先に誰かからの連絡が届いた。

機先を制された形でつい指が滑ってしまったが、直に体勢を立て直して、それに応えようとすると、マユラが先に出てしまった。やろうとする事を次々に妨害されるあたり、これはまさか、我が母の悪戯では、なんて事を考えてしまい、何となく動きが鈍ってしまう。

それでも気を取り直して、再度、親父に連絡を入れようとしたら、早くも通信を終えたマユラがこちらを振り返り何事かを告げようと口を開いた。

……どうやら、我が母の悪戯で間違いなさそうだ。

そんな愚にも付かないことを考えていると、マユラの声が耳に届く。

「アインさん、国防宇宙軍からなんだけど、偉い人がアインさんにお礼を言いたいんだって」

「俺に？」

「うん、指名らしいよ」

……指名か。

「今からか？」

「そう、予定がなければだって」

「……俺、特に予定は入ってないよな？」

「うん、ないよ」
「よし、なら、ちょっと行って来るよ。遅くなるかもしれないから、定時で上がっておいてくれ」
「はーい、定時になったら、先に帰ってるね」
そんなマユラに返事に頷き返し、俺は宇宙軍総司令部を目指すべく、部屋を後にした。

16　混沌の端緒　―アメノミハシラ防衛戦　4

国防宇宙軍総司令部が使用している無重力区画……キノコの傘部の一区画に到着して、受付を兼ねる詰所に来訪を告げると、直に案内の者が来ますのでとの言葉を頂いた。

その言葉に頷き返した後は時間つぶしも兼ねてゲート前にある広大なホールを眺めていると、ある壁面の一画に人が集っているが目に入ってきた。その様子に何事かと思って見ていると、その背景である壁面自体に何かが刻み込まれていることにも気付く。

「あれは追悼碑だよ」

そう声を掛けられて振り向くと、俺よりは二十ぐらい年嵩のオーブ軍下士官が人が集っている一画を見つめていた。俺も視線を追悼碑に戻しつつ、その男の下士官に問い掛ける。

「追悼碑ということは、戦死者の？」

「ああ、国防宇宙軍で殉職した奴等の名前が刻んである」

「では、あれは……」

「まぁ、葬儀に近いものだな」

……そうか、先の戦闘で戦死した人の葬儀か。

しばらく瞑目して、戦死した者達の鎮魂を祈り、遺された者達の心を思うが……、俺も先の戦争で、今、視線の先にいる、ああいう人達を生み出してきたことを思うと、気が重くなってくる。

あの時は自分自身が生き残る為に必死だったし、今だって、殺した相手への責についてもほぼ割り切っているのだが、それでもやはり、背中や肩に重いものを感じてしまう。

「あんたは……、ラインブルグの人だな」
「ええ、そうです」
「なら、胸を張ってくれ。あんたらが作ってくれた物のお陰で、こっちの被害を大きく抑えられたんだからな」
「……ありがとうございます、上の者にも伝えておきます」

俺達が作った守る力にしても、結局は……、いや、これは俺達の責任じゃないと、俺達は自分の身を守っただけだと、こればかりはしっかりと割り切ろう。

そうじゃないと、いつか世界の何もかもを背負っているような傲慢な錯覚を抱いてしまって、潰れてしまうか、狂ってしまうだろうからな。

「あ、迎えの人が来ましたので、これで」
「ああ、現場の連中は、本当に、あんたらに感謝していると伝えておいてくれ」
「ええ、わかりました」

そう、親父が俺に言った通り、まずは身内、自らの周辺で平穏に暮らす人達を優先するのが当然なんだ。

◇　◇　◇

先と同じく司令官室に通されると、サハク准将は例の大パネルの前に立ち、そこに映し出された地球を眺めていた。こちらを振り向かないままなので自分から近づいて行くが、結局、准将は俺がパネル前に着いても口を開く事はなかった。

なので、准将の近くに立って、同様に地球を眺める事にする。

……昼面は青や緑、茶、黄に白といった色で彩られながら輝き、夜面には数多くの灯火が煌いて見えた。夜面の光の量が以前見た時よりも更に増えているのは、四月馬鹿や二年戦争で受けた打撃から復興が進んでいる証左といえるだろう。

そんな地球の光景を三分程眺めた頃、唐突に、サハク准将が口を開いた。

「ラインブルグ、かつての我がこれを……、世界を手に入れようと目論んでいたと言ったら、お前は笑うか？」

「そうですね。これだけ綺麗な眺めですから、そう考えるのも無理はないと、納得しそうですが……」

「……ですが？」

「だからと言って、わざわざ、好き好んで苦労を背負う必要はないだろう、とは笑いそうですね」

「ふっ、はっきりと言うな、お前は」

「俺の手はそんな稀有な事を考えられる程に大きくも長くもないです。実際、自分の周りを掌握するだけで精一杯ですからね」

「だが、その精一杯のお陰で宇宙軍は被害を抑えられた、礼を言うぞ」

「ありがたく頂戴しておきます。こちらも追加発注してもらいましたしね」

さて、挨拶はこれくらいにして……。

「それで、今日は何用ですか？」

「ああ、今後、ユーラシアがどう動くか、お前の意見を聞きたい」

……ユーラシア連邦がどう動くか、か。

「正直、准将が得ている情報と俺が持っている情報では、確度も量も違いますから、あくまでも推測になってしまいますけど、いいんですか？」

「ああ、思いつくままでも構わぬよ。我にとっては、他者の意見を聞けるだけでも益になるからな」

なるほど、参考程度にはなるって奴だな。

「では、……恐らく、ユーラシアは動けないでしょう」

「その理由は？」

「単純に考えて、先の戦闘で大きく戦力を磨り減りましたからね。再度、ここにちょっかいを出そうにも戦力を回復させなければなりませんし……、そもそも、そんなことをしている余裕がなくなるかもしれません」

俺の言葉を聞いた准将が、口元に不敵な笑みを浮かべるのがわかった。

「余裕がなくなるというのは？」

「今回の大敗で国際社会にユーラシア連邦軍の弱体化が印象付けられましたから、ユーラシア連邦の組織内組織……地域国家組織である西ユーラシア連合と中東イスラム同盟への抑えが効かなくなる筈です。……元々、ユーラシアの西と東、それに南は考え方が異なる

事に加えて、先の戦争での確執やエネルギー問題での対立もありますから、ユーラシア連邦からの離脱と新国家組織としての独立が高い確率で起きると考えられます」

「ふむ、だが、各国がそれを認めるか？」

「殆どの国が認めるはずです。大西洋連邦や東アジア共和国はライバルが自壊して凋落するのですから、大喜びで承認するでしょうし、プラントもまた、旧理事国という仮想敵国の一つが弱体化するんですから、承認に回るはずです。これに伴なって、両国に近い国も承認することになりますし、ユーラシア周辺国もまた、脅威が減るわけですから承認に傾くはずです。ここまで来れば、世界全体の空気が独立容認に傾きますから、それ以外の国も、余程の借りでもない限り、承認するでしょう」

「……ならば、我々はどう動く？」

「もしも、先の二国が独立するのならば、これを率先して支持することで、先の攻撃に対する報復にしては如何です？　で、その後はアルテミス要塞の動きにだけは注意しつつ、基本、ユーラシアの動きには関与しない方針で」

そうか、と頷いたサハク准将がそれなりに大きな胸の下で腕組みをすると、口元の笑みを軽いものに変えてから、口を開く。

「お前は欲がないな」

「さて……、何のことでしょう？」

「今ならば、ユーラシア内部の対立を煽り、事を起こさせることも可能なはずだが？」

「……俺は武器商人になることは覚悟していますが、死の商人にはなるつもりはありませんからね」

そう、容易に人を害する事ができる武器を扱うことになったのだから、最低限の倫理、人としての倫理は守らなければならない。

「だが、大西洋連邦はお前ほど優しくはないようだぞ」
「……何か情報が？」
「戦を誘発させようと考えているようだ。……ＭＳを中東イスラムに流し始めている」
「ということは、ユーラシア連邦や西ユーラシアにも？」
「ああ、ユーラシア連邦内にはヨーロッパ西部と極東に、大西洋連邦資本が建設したＭＳ生産工場がある。つまりは、そういうことだ」

ユーラシア地域が大西洋連邦の掌の上で踊らされるということだろうが、そう簡単に踊るようなものなのか？

この俺の考えを読んだかのように、准将が語を紡ぐ。

「無論、ユーラシア連邦もその思惑に気がついているだろうが……、今現在において、ＭＳを量産して提供できるのが、プラントと大西洋連邦、それにオーブだけである以上、踊らざるを得まい」
「確かに……、ＭＳを手に入れようにも、半年前まで戦争をしていたプラントは論外だし、オーブにしても本国を大西洋連邦が押さえている。残るは、大西洋連邦や本国から距離を置くアメノミハシラ……、先の制圧作戦には現実的な側面もあったということか」
「ふふ、気付いてなかったか？」
「ええ、侵攻が及ぼす影響にばかり目が向いてましたよ」

一所に意識が囚われるってことは、まだまだ修行が足りんと言うことだな。

「ならば、更なる精進を重ねる事だ」
「ええ、そうします」
「うむ。では、次の話に移るが……、お前も提案していた例の話、

南アメリカは乗ってきそうだ」

南アメリカ……、ＭＳの輸出か。

「本国との打ち合わせは？」

「既にウナトには話を通した。……我らは悪役になるぞ」

「お上の言う事を聞かない不心得者め、って奴ですか」

「我にとっては今更の話だがな」

「なら、本国から追求の通信が入る時には、大きな声で、堂々と、厭味、もとい、避難民の代弁をして下さいよ。お上が生活を守ってくれないから、自分達で身を守る為に、生活を再建する為にやったことだ、ってね」

「くくっ、ならば、カガリあたりが通信を入れてきた時には、そうすることにしよう。……何とも楽しい時間になりそうだ」

うわぁ、サハク准将、ニヤリと笑って、物凄く楽しそうな顔してるわ。

「では、南アメリカからは代価が得られると言うことですね？」

「南アメリカとモルゲンレーテ双方に、代金の一部を水や土壌資源で充当する事で話を進めている」

「……では、准将、Ｌ３の海賊を根絶やしにして、コロニーを建設し始めるのはいつからですか？」

「来年になるだろうな。……む、そういえば、我はお前にＬ３を制すると伝えていたか？」

「いえ、海賊の根絶を考えれば、それが一番可能性が高いと思いましてね。あそこには、オーブが所有する資源衛星や旧ヘリオポリスもありますから」

まぁ、ちょっと考えたらわかる程度のことだし、自慢にもならな

い。

「それよりも海賊対策ですが、上手くいってますか？」

「……ふむ、パッツを使った長距離パトロールで対応しているが、あまり状況は芳しくはないな」

「やはり時間制限ですか？」

「そうだ。加えて、海賊は待伏せての襲撃が多い故に、対応も後手に回る。……だからこそ、お前もモルゲンレーテに艦艇の共同開発を提案したのだろう？」

「そうなんですけどね……、今現在の対応にはなりません」

うむむ、トツカ計画の完成から数が揃うまで、後半年から一年位になるから、何らかの繋ぎが必要なんだよなぁ。

「宇宙軍は何か考えているんですか？」

「まだ、再編を開始していないが、連合軍が先の大戦でやったように、輸送艦の改装でＭＳを艦載できるようにしようとは考えている」

「艦艇による護衛は？」

「……イズモ級には合わぬ故、難しいな」

けど、護衛に艦艇が付くのと付かないのとでは、安心感が大きく違うからなぁ。

「いっその事、繋ぎとして、ドレイク級を導入してみては如何です？　ジャンク屋ギルド辺りから、中古で安く手に入りませんか？」

「ドレイク級は優秀な艦だったが、既に時代に合わぬだろう」

「だったら、別の船でも構いませんから、護衛に特化するように改造してみては？」

「……具体的には？」

「ハリネズミ艦？」

……なんか、滑ったような沈黙が痛い。

「ふふ、ハリネズミか、面白い。ラインブルグ、一つやってみろ」

「え？」

「繋ぎに使用する護衛艦だ。……いや、もしも、コストと性能で納得できるものなら、繋ぎと言わず、以後も発注してやろう」

うはっ、仕事ができてしまった！

「えと、仕事を貰えるのは嬉しいんですが……、モルゲンレーテには？」

「あちらはあちらで、トツカに加えて、ＭＳの生産で忙しかろう」

「それは確かに……、では、期限は？」

「一ヶ月以内……、いや、来月末までには実物を見てみたいな」

そら、繋ぎ用だからねぇ。

「なら、ちょっと考えて来ます」

「ああ、後で宇宙軍から正式に要請を出す」

「わかりました」

期待に応えられたらいいけど、期間が短いから、こればかりはどうかねぇ。

「その海賊で思い出しましたけど、前に提出した提案はどうでしたか？」

「ああ、悪くない提案だと感じている故、宇宙軍の規模拡張と併せて考えておく」

「そうですか、なら良かったです」

これで宿題に関する反応も聞けたし、後、何もないなら、引き揚げるとするかな。

そんなことを考えて更に口を開こうとしたら、サハク准将の執務机に備えられていた通信端末から機械的な着信音が響き渡った。准将はこちらを見やった後、優雅とも言える動きで端末に触れる。

「なにか？」

「お話中に失礼します。ユーラシアで動きがありました。情報と映像を回しますのでご覧下さい」

「わかった」

……どうやら、事が起きたようだ。

「ふっ、予想通りの展開だな」

「ええ、そうですね。……では、これから起きる混乱に合わせて？」

「そうだな。世界の注目がユーラシアに集っている間に、南アメリカとの話を進めよう」

大きな事件に動きを合わせれば、多少のことは注目されないということも、また、事実だからな。

「では、サハク准将もこれから忙しくなるでしょうし、俺も引き揚げる事にします」

「……そうか。んんっ、では、ラインブルグ、繋ぎの護衛艦を楽しみにしている」

「ご期待にそえるように頑張ります。……あ、言うのが最後になりましたけど、先の防衛線で思ったんですが、一軍の将が前線に立つのは頂けないですよ。特に准将はアメノミハシラの総責任者であり、

今の苦境にあって、寄る辺がないオーブ国民にとっての最後の支えなんですから」

「最後の支え……」

「ええ、准将こそが、オーブ最後の砦なんですから、前線に立つのは自重して、訓練で部下を鍛える位に止めておいて下さい」

「……わかった。今後は気を付けよう」

最後の支えと呟いた後、神妙な顔になったサハク准将に、一応、予備役の講習でオーブ式を習ったということもあるので、制帽はないけれど、オーブ式の敬礼を施して、司令官室を後にした。

C．E．７２年６月２５日。

西ヨーロッパ諸国の連合組織である西ユーラシア連合と中東諸国によって構成される中東イスラム同盟がユーラシア連邦離脱を正式に表明し、新国家組織の成立を宣言。ユーラシア連邦と東アジア共和国を除いた全国家が承認することになる。

17　蠢動する世界　―ユーラシア動乱　1

「幾つか候補を見てきたけど、やっぱり、ベースは６０ｍ級小型コンテナ船だな」
「ええ、今現在、与えられている条件で考えるなら、これがベストだと思います」
「他のだと大きく改装することになるから、コストと時間が掛かりすぎるもんね」

七月末までにとサハク准将から出された新しい？宿題？である、新規護衛用艦艇が開発されるまでの繋ぎとして使用する護衛艦を開発して製造するという無理難題を解く為に、フレイ・アルスターが会長秘書として雇われた事で正式に復帰したレナと今まで一人で俺を支えてくれていたマユラの三人で知恵を出し合って、初期ベース案を作り出している最中だ。

で、今も話していたように急造護衛艦のベースになるのは、宇宙造船が生産している【ＲＳＳ－０５Ｄ】と呼ばれる全長６０ｍの小型コンテナ船で、四月馬鹿が起きた後、地球軌道からバリュートを使用して物資を投下する為の運搬ベース船になった代物だ。

その船の構造を簡略に述べると、船体の中央軸として内部に通路を収めた長さ五十ｍ、幅四ｍ、高さ四ｍの竜骨があり、その一端である船首に直径十二ｍ、長さ六ｍの円柱型操船部が、反対側の船尾には直径十二ｍ、長さ十ｍの円柱型推進部があり、推進剤タンクと二基のスラスターが取り付けられている。
また、四十二ｍの竜骨露出部には、両舷方向に長さ十四ｍ、幅二

m、高さ二m、上下方向に長さ八m、幅二m、高さ二mの肋材……通称?梁?が大凡十m区間毎に一本の割合で四本備えられている。この?梁?の部分にコンテナ搭載部を保持する為の接続装置が両舷上下方向にそれぞれ取り付けられている他、外端部には姿勢制御用バーニアが備えられている。

この?梁?に装備されている接続装置によって、バリュート・システムを標準装備した全長四十m、全幅十四m、高さ八mのコンテナ搭載部を接続することで、左右舷上下で合わせて四つのコンテナ搭載部が運べるようになっている。

地球へと物資を投下する際は、地球軌道において、このコンテナ搭載部をベース船から丸々切り離して大気圏へと突入させ、バリュートでもって摩擦熱を遮断して突破を図るのだ。

もっとも、このコンテナ積載部の運用開始初期には、バリュート・システムの不具合でバリュートが展開できなかったり、冷却装置が働かなかったりして、突入中にコンテナ搭載部が燃え尽きたり、大気圏へと突破できたとしても、逆噴射装置の噴射タイミングの誤動作で予定落下地よりも大幅にずれた位置に落っこちたり、着陸時にエアクッションが効き過ぎて大きく飛び跳ねてしまい、運搬用トレーラを下敷きにしたりと、色々と大変だったようだが、パーシィによる度重なる改良の結果、非常に高い安全性と落下精度を確保するに至っているそうだ。

ちなみに、地球に投下されたコンテナ搭載部だが、ラインブルグ・グループが地球で買い付けた代物を運ぶ為にも使われており、地球からマスドライバーで宇宙商船の貨物船の貨物積載部として、或いは、コンテナ搭載部そのものだけが打ち上げられて、軌道上でマスキャッチャーの役割を果たすベース船が回収する等して、再利用されていたりする。

話を戻して……、俺は急造護衛艦のベースとして、この小型コン

テナ船……ＲＳＳ－０５Ｄを流用しようと考えているのだ。

そんな事を考えつつ、ディスプレイに表示されているＲＳＳ－０５Ｄの船体構造図を指し示しながら、二人に対して意見を述べる。

「丁度、十ｍ区切で一基は接続装置があるから、各部をモジュール化したいと考えているんだが……」

「先輩、その前に操船部が船首部にありますから、防御が厳しくないですか？」

「うん、それに護衛艦にするにはレーダーが貧弱すぎると思うよ？」

あ、確かに……。

「なら、船首部の操船部を別の場所に移して、代わりにレーダードームでも取り付けてみるか」

「レーダーはそれでいいと思いますけど、操船部はどこにするんですか？」

「それにＭＳの運用はどうするの？」

「操船部はこれから考えるとして、マユラ、こいつではＭＳ運用を考えてないから、考慮する必要はなしだ」

「えっ、いいの？」

「ああ、仮にＭＳ運用関連装備を考えるとしたら、ＭＳの継戦能力を高める為のバッテリーや推進剤、エアーの補給装置くらいだな」

今回の急造艦のベースとなる小型コンテナ船は、宇宙造船というかラインブルグ・グループが基本思想としているらしい？質実剛健？の方針によって、かなり頑強に設計されている。しかしながら、初めから軍用として設計されたものではない以上、通常の軍用艦よりも耐久性や生存性に劣るのが現実である。

だから、そんな性能で劣る急造艦に乗り込む人数はできる限り減

らしたいし、整備や管制、パイロットと乗組員数が増えるＭＳ運用も避けたい。そう、ＭＳの運用に関しては、最初からＭＳ運用を前提に設計されている新造艦やイズモ級、今後、開発するかもしれないＭＳ母艦に任せればいいのだ。

「後、付け加えていけば……、こいつの役割がＭＡやＭＳから商船を護衛するのをメインだとすると、対艦仕様に関しても……、まぁ、ＢＩにできるんだから、やってできなくもないだろうが、今のところ、考える必要はない」

「なら、兵装は近接防御火砲がメインということですね」

「そういうこと」

レナの言葉に頷き返す。

要するに、今、俺達が考えている護衛艦は、トツカ計画で開発が進められている新造艦が駆逐艦からフリゲートクラスだとすれば、小型フリゲートないしコルベットクラスに相当するという訳だ。

「じゃあ、話を進めるぞ、コンテナ搭載部の接続装置は船首から船尾までにある四本の？梁？にあり、左右舷上下の合計で十六箇所ある形だ。その十六ある接続装置それぞれに、規格を統一した兵装モジュールを接続する事で護衛艦としたい」

「モジュール化することで生産期間の短縮や換装等の運用面も楽になりますね」

「うん、ＢＩと同じ方法だよね」

「ああ、後、コスト削減の為にも、兵装もＢＩで使用している兵装をそのまま流用するつもりだ」

ビームファランクスを装備したモジュールを八つ位装備したら、ハリネズミになるはずだしな。

「操船部はどうします？」
「うーん、これもいっそのこと、モジュール化してしまうか」
「あ、あはは、凄い艦ね」

でも、操船部をモジュール化したら、脱出装置にもなるだろうしなぁ。

「よし、初期案はベースとなる船体は艦首部をレーダードームに交換する以外には基本的に弄らず、兵装モジュールを装着することにするな」
「ええ、そうですね」
「うん、短期間だし、それが良いと思う」

なら、後は正式な企画書類を作成して、パーシィ達に検証や兵装モジュール等々の試作を、宇宙造船や宇宙工業の方にも話を通して、船体や兵装を用意してもらわないとな。

「レナ、第五開発部に新しい案件ができたから検証をお願いしたいって、連絡を入れて日程を調整してくれ。時間がないから最優先でお願いしたいとも」
「わかりました」
「マユラは、宇宙造船と宇宙工業にＲＳＳ－０５とＢＩの各種兵装の在庫状況の確認を頼む」
「はーい」

さて、取り敢えず、今はこれ位かな。

あー、やれやれと肩を動かして、凝りを解した後、自身の椅子にもたれかかって、天井を見上げる。

後はパーシィに本当に実現可能かどうかの検証をしてもらって、いけそうなら、技研と造船、工業……、電気に商船、後、保険からも人を出してもらって、プロジェクト・チームを結成することにして、駄目な場合は、どうすれば可能になるかをパーシィやシゲさんと話し合うか、別の方法を……、中型貨物船を魔改造して、船体各所ににょきにょきとビームファランクスを突き出す形にして、ハリネズミ級と銘打ってしまうか、ジャンクのドレイク級にトツカ級に取り付ける予定の兵装を取り付けてみるか、数珠繋ぎにしたＢＩでもってスネーク級なんて受けを狙いに行くか、パッツの元になった上下両面使用型カーゴ付小型運搬船をベースに魚雷艇みたいな小型戦闘艇を作るかするしかないな。

次善案を考える為に思考を進めていると、それぞれ連絡を終えたらしい、レナとマユラがクスクスと笑う声が聞こえてきた。

「ん～、どうした？」
「先輩、さっき、音が聞こえてましたよ」
「うん、ゴリゴリって」
「そんなにか？」

おかしいな、そんな音は聞こえなかったんだが……。

「先輩って、何かに夢中になったり、考え込んだりすると、周りの事が見えなくなりますもんね」
「そうだよね。レナ、前なんてね、私が目の前にいるのに？女神様達？に夢中だったんだよ」
「あ、それは酷い。……先輩、私達三人がいるのに、浮気ですかぁ？」
「そう、酷いよねぇ。……今度、おば様たちに、ポロリとこぼしち

ゃおっか」
「ふふ、先輩が私達以外に？女？を作ったぁー、私達三人がいながら浮気したぁー、って？」
「そう、そんな感じ」
「おい、それは勘弁だぞ。下手に伝わったら、奥様連から吊るし上げられて、説教会を開かれちまうよ。……しかも、一人、最低で十分と考えても、二時間以上は確実に正座させられるからな」

俺が応じてみせると、レナとマユラがコロコロとまた笑っているが、正直、俺にとっては笑い事ではないので釘を刺しておく。

「後、おば様連の説教に時間をとられたら、それだけ、レナとマユラの相手をする時間が減るからな」
「うーん、それは嫌だなぁ」
「そうね。……でも、先輩、ミーアちゃんの相手をする時間が減らないのは、どうしてですか？」
「そりゃ、当然、レナやマユラと違って、ミーアは心優しいし、俺をいじめないからさ」

俺がそういうと、レナとマユラは口元にニヤニヤとした笑みを浮かべながら、口々に反論する。

「へぇ～、アインさん、そんなこと言ってもいいの？」
「そうです。毎朝、起こしに行ってあげている私達に、そんなことを言ってもいいんですか？」

……毎朝、起こしに、ねぇ。

「どちらかと言えば、毎朝、布団に潜り込みに、だろ？」
「うぐっ」

「むぐっ」

朝、目が覚めたら、必ず、レナかマユラかのどちらかが布団の中に潜り込んで、俺の腕を枕に寝ているか、俺を抱き枕にしているか、逆に俺の抱き枕になっているのだ。

いや、抱き枕はいいんだけど、腕は後々痺れるから、せめて肩辺りにして欲しいと思うのは贅沢だろうか？

「えと、その、アインさんの懐に潜り込むとね、身体がポカポカしてきて、安心できるから……」

「私もマユラがやっているのを見て、興味本位でやってみたら、病み付きになってしまって……」

「あー、あれはあれで、俺も目覚めがいいし、別に怒ってはいないけどさ。ミーアも混ぜてやれよ」

朝、俺達が布団の中で互いの温もりでホカホカしている頃、ミーアは朝食の準備をしていたりする。

「いえ、それが……」

「うん、ミーアちゃんが言うには、朝や昼、仕事中は譲るから、風呂だけは独占させろって」

な、なんと、そんな話が通っていたとは……。

「……そういえば、マユラ。最近、ミーアちゃんのお肌の艶、いいよね」

「……うん、肌に張りもあるし、胸も、前より絶対、大きくなっている」

……え、えーと、何故に二人とも自分の胸を見て、俺の手を見るんでしょうか？

「先輩が揉んだら？」

「胸大きくなるの？」

「ちょ、待て待て、二人とも落ち着けって、何故、そんな疑問が出る」

俺が反論すると、レナとマユラは極自然に言葉を繋いでくる。

「先輩なんだから、ミーアちゃんと一緒にお風呂に入っているのに……」

「うん、アインさんなら、ミーアちゃんの胸を揉まないわけがないわね」

「お前ら、俺をそんな目で……」

「先輩がエッチなのは、一目瞭然じゃないですか」

「うん、物凄くエッチなのは、当然の認識だよね」

「……否定できないのは、男として誇っていいことなんだろうか？」

ちょっとだけ悩んでしまうが……、三人と同時に付き合ってるんだから、確かに今更な事か。

「で、実際はどうなんですか？」

「いや、全身を洗う時に、マッサージの心算で揉んでやってるのは確かだな」

「マッサージ？」

「ああ、血行を良くする為のマッサージ。……ミーア曰く、冷え性らしいから、体質改善に協力してる」

……その過程で、自然、甘い声をあげさせているのも事実だけどね。

その時に微かに垣間見えるミーアの艶姿を思い出してしまい、内心でにやけていたら、じー、と俺の手を見つめていたレナとマユラが口々に話を切り出してきた。

「あの、先輩……、ちょっと試してみたいかなぁ、って、思ったりしてるんですけど」

「もちろん、私も同じく、結構、興味があったりするんだけど……」

「今日の仕事……、さっきの案を企画書に纏めたり、今後、プロジェクト・チームで必要になる人員選出の依頼書や予算計上する為の必要経費の概算とかができて、時間が余ればそういうこともしていいだろうけどさ」

実際には今日中には無理だろうし、明日に完成させるつもりでぼちぼちと……。

「先輩！　早く、企画書を書いてください！」

「あ、レナ、私が依頼書書くから、経費の算出よろしくね、これがＢＩ兵装とか装甲材の原価表で、あっちにあるのが細々とした各種部材の分よ」

「ええ、わかったわ」

えーっ、ちょ、動き、早っ！

「ほら！　先輩、早く早くっ！」

「アインさん！　気合が！　気合が足りてないわよっ！」

「……は、はい」

そんな訳でレナとマユラに追い立てられる形で仕事を頑張る事になり、見事なまでに今日中に終わる事ができました。

……まぁ、その後で、疲れきった手を更に疲れさせつつも、心身を癒す事ができたからいいんだけどね。

18　蠢動する世界　―ユーラシア動乱　2

七月に入り、地球……と言うよりは、ユーラシア大陸で再び戦火が広がり始めた。

先月下旬にユーラシア連邦から離脱して、独立した西ユーラシア連合と中東イスラム同盟がこれらの独立を認めないユーラシア連邦と戦闘状態に陥ったのだ。元々、ブリュッセルにあったユーラシア連邦政府機能が両国の独立宣言直後に、特に波立つ事もなく、モスクワへと移動していたので、もしかしたらすんなりと終息するかもしれないと期待していたのだが……、残念な事だ。

それで、この二つの新国家組織とユーラシア連邦の間で発生した戦闘だが、西ユーラシア連合とユーラシア連邦が銃火を交える事になった直接的な原因は、西ユーラシア連合が確保していたニュートロンジャマーキャンセラーを自国内の原子力発電所に取り付ける動きを見せた事のようだ。その結果、ユーラシア連邦が設置阻止と奪取に動いたことで、原子力発電所近くで……放射性物質満載なのに、マジで危ないよなぁ……発生した小規模な戦闘がそのまま拡大していって、最終的には近隣の市街地で、両国共にＭＳ隊が展開しての本格的な戦闘にまで発展し、そのまま開戦となったみたいだ。

もう一方の中東イスラム同盟とユーラシア連邦との戦闘は、中東イスラム同盟が連邦離脱直後に大西洋連邦からの大規模な支援を受け入れて、太陽光や太陽熱発電プラントの建設を始めた事が原因らしい。ユーラシア連邦から見れば、二年戦争を経て、大西洋連邦の後塵を拝する立場に転落しただけに、自らの威信を保つ為に自身の領域と自任する地域に大西洋連邦からちょっかいを出されたくないという感情や、国力回復の為にも安定的にエネルギーを供給できる

プラントを少しでも多く確保したい思惑が働いているのだろう。

正直、俺から言わせれば、ドンパチをしている暇があるのなら復興に集中すればいいのに、と思ってしまいそうになるが、俺が生まれる以前から存在する東西の経済格差や思想、考え方の違いから来る対立に加え、四月馬鹿以降のエネルギー配分を巡る内部抗争や以後の不信感、プラント独立を阻止できずに容認したり、唯々諾々と大西洋連邦に追従していただけの連邦政府に対する憤懣といったものがあったようだから、発火するだけの下地ができていたのかもしれない。

そもそも、復興を進めようにも十全なエネルギーがなければどうしようもないのは事実だし、ユーラシア連邦、西ユーラシア連合、中東イスラム同盟のそれぞれが自国を復興させる為、エネルギー確保に動いているということだろう。

ほんと、四月馬鹿さえ起きなければ、こんなことにならなかったのになぁ。

という俺の感慨は一先ず置いて……、今現在、各国マスメディアのニュース等から読み取れた情報だと、ユーラシア連邦は両国に派遣する戦力として、ユーラシア連邦軍中部方面軍と東部方面軍の一部を動員しているようだ。

中部方面軍はともかくとして、シベリアや極東地域を管轄する東部方面軍を動かすということは、隣接している東アジア共和国や大西洋連邦に大きな隙を見せるということになるのだが、件の両国は動く気配を見せていない。

まぁ、この二大国の静かな状態にしても、前にサハク准将から聞いた大西洋連邦の動きや東アジア共和国がユーラシア連邦から離脱、独立した二国を承認していない事を考えると、ユーラシア連邦との間に取引や暗黙の了解が成立しているのかもしれない。

このユーラシア連邦軍を迎え撃つのは、以前はユーラシア連邦軍西部方面軍だった西ユーラシア連合軍と南部方面軍だった中東イスラム同盟軍であり、つい先日までは友軍だったモノ同士が戦闘することになりそうだ。

昨日の味方は今日の敵という、なんとも？素敵？な事になってきているが、とにかく今現在のユーラシア大陸は、西ユーラシア……東部から中部ヨーロッパ地域と、中東……黒海南部沿岸からペルシャ湾に至る地域で様子見的な小規模衝突が発生する一方で、ユーラシア大陸の東南部……東アジア共和国と赤道連合が隣接する国境線でも、睨み合うように展開していた両国軍による小競り合いが起きている状態であり、更なる戦闘の拡大が懸念される所である。

こんな具合につらつらと鉄火によってまた熱くなり始めた地球の状況を思い出し、静かに憂いている俺はと言うと……、パーシィが初期ベース案を検証した結果、案外、いけるんじゃないかな、との言葉を頂いた事で、親父や重役連に開発許可と予算をもらう為の説明を行い、関連企業から人を選出してもらって、護衛フリゲート建造計画【ハガネ】のプロジェクトチームを立ち上げ終わった所だ。

納期まで極僅かの期間しかないという非常に無理難題な計画なのだが、参集したメンバーの士気は驚くほどに高く、こちらが困惑を覚えてしまう程だった。

何故にそんなにも燃えているのかと思って、幾人かのメンバーに尋ねてみた所、曰く、先のＢＩ関連の召集メンバーには臨時ボーナスが出た事に加え、各企業においてＢＩ関連部門のリーダーになっている事に大いに刺激を受けたそうだ。

……そのやる気に水を差さない為にも、これから作る物が繋ぎの急造艦だということを黙っておいた俺は悪い奴ですごめんなさい。

気炎を上げているプロジェクトメンバーの様子にちょっと良心の呵責を覚えたものの、これもまた仕事と割り切り、一艦当たりの容認コストや予定価格といった必要な伝達事項を伝えて、後のことを任せたのだ。

で、今はハガネ計画が失敗した時の為の次善案、別名をお茶濁しとも呼ぶ代物の作成に取り掛かっている次第だ。

とはいえ……。

「……ＭＳ関連が進まんなぁ」
「仕方ないですよ、仕事が優先ですから」
「そうそう、これが終わったら、余裕ができるんだから頑張ろうよ」
「うぃ、そうだな。……頑張りましょう」

なんて具合に、レナとマユラに慰められつつ、パッツの原型機でもある【ＲＳＳ－０２Ｅ】上下両面使用型小型運搬船から迎撃艇を作り出すべく……、とでも言えば、カッコいいかもしれないが、実際の所、小型コンテナ運搬船をベースに、今現在におけるラインブルグ系ビーム兵装の代表といえるビームファランクスと中近距離制圧兵装である小型ミサイルポットを二基取り付けただけの代物を作ってみようと動いている。

まぁ、保険的な次善案だけに、流石にプロジェクトチームを立ち上げるわけにいかず、自分で動いているのだ。

「それで、ＲＳＳ－０２ＥとＢＩの素体を確保できたのか？」

「ええ、他にＢＩ用のビームファランクス一基と小型ミサイルポット二基……、先輩が言っていたものも全部確保しておきました」
「後、確保ついでに第五開発部の格納庫に運んでおいてもらったから、いつでも始められるよ」
「おお、二人とも、ありがと。……うっし、なら行ってくるわ」
「あれ、私達は？」
「もしかして、置いてけぼり？」

いや、そんな口を尖らせんなよ、思わず愛でたくなるだろ。

「いや、別に置いてけぼりってわけじゃなくてだな」
「ふふ、分ってますよ、留守番と日常業務ですよね？」
「うん、ここは私達に任せて、アインさんは頑張ってきて」
「ああ、頼むよ。それと、ハガネのプロジェクトチームから何か連絡があったら、第五開発部に回してくれ」
「わかりました」

レナの返事に頷き返して、部屋を出ようとしたら、ちょっと待ってとマユラが声をあげたので振り返る。

「アインさん、直帰するの？」
「いや、一度戻ってきて、今日上がってきた書類の決裁をするよ」
「なら、アインさんが帰ってきて、仕事が終わるまで待つことにした健気な私達に、ラ・ラルーのお菓子をお願いしてもいい？」
「……了解」

やった、と喜ぶマユラとレナの様子に苦笑しながら、技研のある無重力区画へと向かう事にした。

◇　◇　◇

先の戦闘でアメノミハシラを守る宇宙軍の精強さを知った影響か、市街地は活気と明るさに満ちている。そんな街中の雰囲気を肌で感じつつ、途上、ベティが贔屓にしている洋菓子店で第五開発部やハガネ計画のメンバーへの差し入れとレナ達に献上する分のお菓子を買ってから、ハガネ計画で使っている区画に顔を出して、差し入れすると同時に計画の進捗状況を確認してみる。その結果は、俺が想定していた以上に作業が進んでいた為、うんうん、やはり餅は餅屋だと納得した次第である。

なので、今後もこの調子でよろしくとプロジェクトメンバーに声をかけてから第五開発部にやって来たのだが……、早くも格納庫にて、作業台というか、固定用アームで中空に懸架された小型運搬船とＢＩを見上げつつ、一連の魔改造を手伝ってくれるシゲさんと二人、装着品の安全確認をしていたりする。

「……断熱絶縁服良し、遮光ヘルメットおっけー。アインちゃん、始めよっか」

「ああ、始めよう。……でも、悪いね、シゲさん、つき合わせちゃって」

「いいってことよ。俺も最近、現場に出る機会が減っていたから、身体を動かすのに丁度良かったからさ」

「勘が鈍る？」

「そういうこと。たぶん、アインちゃんだって、ＭＳ操縦の勘、鈍ってるはずだよ」

「……確かに鈍ってるだろうな」

身体に関しては日々のトレーニングで維持しているからいいけど、搭乗して、実際に動かす時の感覚はなぁ。

そんな事を考えながら、回転銃座として応用するＢＩを取り付ける為、カーゴカバーの上面を切断するべく、第五開発部が誇る多目的作業用アームの制御コンピュータにデータを入力する。

「これであってる？」
「ええっと、……うん、あってるね」
「じゃあ、ぽちっとな」

作業用アームが作業を始めたのを眺めながら、シゲさんがあっという間に作成してくれた手順書で次の手順を確認していると、作業用アームの稼動データをチェックしているシゲさんが先程の続きを話し出した。

「前のＢＩ回避試験の時、Ｍ１の操縦で、アインちゃん、汲々してたもんねぇ」
「いや、シミュレーターとはいえ、あれはほんとに大変だったよ」
「しかも、ザフト系とオーブ系だと、操縦感覚が違う所が多かったんだろ？」
「そうなんだよ。それでも、半日頑張ったら、ほぼ、まともに動かせるようになったから、俺って、凄い奴だったんだ、って思ったもんだよ」

まぁ、半日で順応していたレナに関しては、目をつぶることにしてだな……。

「でもさ、シゲさん、蓄積データって、やっぱり重要だよね」
「そりゃあ、個々人の癖がたぷっり詰まってるからねって、それで思い出した」
「何を？」

「ＭＳに使うＡＩがもうすぐできそうだから、ＭＳの操縦系を組み始めてみるよ」
「ＡＩはミーアが担当しているだよね？」
「そうだよって、終わりそうだな」

あっ、ほんとだ、切断が終わったみたいだ。

「切り終わったパーツは？」
「うーん、そいつはジャンク行きでいいや、……うん、そのボタン」

シゲさんの言う通りに、通常のキーボードとは別に、大きな字で？ジャンク？と書かれているボタンを押すと、自動的に作業用アームが切断部分を確保すると、壁面に、こちらも大きく？進入禁止？や？ジャンク？と書かれているゲートへ運んで行った。

「あのゲートは？」
「ああ、あそこからリサイクル施設にジャンクを送るラインが伸びているんだよ」
「へぇ」

確かに、作業用アームがゲートから伸びてきた別のアームにジャンクを引き渡しているよ。

「次は、カバーを開放して……」
「燃料電池の設置だね」
「じゃあ、俺はカバーを開放してくるから」
「うん、燃料電池を持ってくるよ。……あ、手動で開けるんだから、気をつけなよ？」
「わかった」

シゲさんの注意に頷いた後、一足で操船台脇まで跳んで取り付き、外部パネルの中にある非常用開放レバーを引き落とす。

「っし、カバーの開放を確認」

「こっちも確認したよ。今からアームを使って開けるから下がってちょうだい」

「了解」

船体を蹴って距離を取ると、早速アームがカバーを確保して開け始めた。その間にシゲさんが燃料電池のスタックを持ってきたようだ。

「んじゃ、俺が設置位置の調整と固定をするからさ、アインちゃんは次の燃料タンクと冷却装置の準備を頼むよ。それと、挟まれると拙いからゆっくりね」

「わかった」

シゲさんがビームファランクス用の燃料電池を内部に設置する間に、格納庫隅に固定されていた燃料電池用の燃料タンクとこれまたビームファランクス用の冷却装置を、ゆっくりと、自分でコントロールできるように速度に注意しつつ、ＢＩの側で固定されているビームファランクスを視野に収める。

ウルドにも装備されている【ＲＳＩ－ＢＦ１００】ビームファランクスは、対艦ミサイルや小型ミサイル、宇宙爆雷や魚雷、ＭＳやＭＡの突入阻止を主目標に設定している為、ビームライフルのようなＭＳを一撃で破壊できる程の威力はない。

とはいえ、対ＭＳに使用しても、対ビームコートが為されていない部分なら、それなりのダメージを与えることができるし、連続射撃が上手く嵌れば、蜂の巣にして破壊できるだけの威力はある兵装

だ。
　しかしながら、こいつには連続射撃をする影響もあって、どうしても熱が溜まりやすいという事と大量のエネルギーを消費するという欠点がある。その為、内部空間の制約上、冷却系やエネルギー源が弱いウルドでは連続射撃が一分程しかできない。
　そこで、今作ってる迎撃艇には空間的な余裕もあるので、その時間制限という弱点を解消してみようと考えたのだ。

　冷却装置に包まれた四つの銃身が突き出ているビームファランクスからシゲさんに視線を移せば、早くも燃料電池の設置位置調整と仮止めを終えたようで、今は作業用アームで固定し始めているようだった。

「アインちゃん、次は接続ケーブルをお願い」
「了解」

……なんか、実質的な作業は全部、シゲさんがしてくれてるよ。

　そんなことを考えながらも、シゲさんの助手に専念する。

「よし、三つとも固定が完了したし、ケーブルを接続するわ」
「その後は、開けた穴の補強だったっけ？」
「いや、その前に、ＢＩの中を弄って主兵装の可動域を増やすのと、銃座として回転させる為の電磁レールが先……」
「あ、そうだったね。なら、レールを取ってくるよ」
「ついでに、加工しておいて」
「はいはい」

　こんな感じで作業を進めていると……、本当に、あっ、という間

に定時も過ぎてしまい、作業を止めて、引き揚げることにした。

「んじゃ、明日は朝からだね」

「ああ、後三日もあれば、形だけはできるだろうし、よろしく頼むよ」

「りょうかナナちゃん！　その素晴らしいボディに、情熱に溢れる俺の熱い口付けをっ！」

あぁ、シゲさんの持病が……。

「……おお、ナナちゃん！　ついに俺の抱擁を受け入れてくれっ！って、……そのシールどぎゃぶ！」

……どうやら、ナナは自衛手段を手に入れたようだ。

いったいどうなっているものかと不安を感じつつ振り返ってみると、ナナがマニピュレーターで展開したらしい円形シールドの前面でぷかぷかとシゲさんが浮いていた。で、ナナの意思表示画面に映されている文字はと言うと……。

『……懲りない人、このまま永眠すれば良いのに』

「あ、あはは、ナナ、そんな事言っちゃ駄目だよ。ほら、シゲさんをいつもの場所、仮眠室に寝かせておいて」

『……消極的肯定。……本当に、手間掛けさせる、駄目な人』

なんてことを表示しながらも、ナナはシゲさんの足を起用に掴むと仮眠室に向ったようだ。

その様子を見た感じだと、何だか、以前よりもシゲさんに対する

ナナの態度がマシのような気がしないでもないが……、シゲさんの熱い想いが報われるのはいつの日だろう。

俺がそんな感慨を抱きつつ、一人と一機の後姿を眺めているとミーアが背中に跳び付いて、頬に頬を摺り寄せてきた。

「あ、こら、ミーア」

「いいでしょ、昼の間、私は兄さんと会えないんだから」

「……わかった。けど、胸を押し付けるのは止めてくれ」

「むぅ、本当は嬉しいくせに」

「それは認めるけど、外は外、内は内だぞ、ミーア」

そう、時と場所を……、時と場所を考えれば……、今は別に良いのか？

胸奥の獣さん大喜びの結論が出たところで、獲物、もとい、ミーアの温もりが離れて行ってしまった。

……似合わないことは言うべきではないなぁ。

逃した獲物は胸も大きいだなんて、馬鹿げた事を考えながら顔に出さずに嘆いていると、ミーアがこちらを上目遣いで見上げつつ、話しかけてきた。

「兄さん、それで、今日の作業は終わり？」

「ああ、終わり、続きはまた明日だ」

「じゃあ、このまま家に帰るの？」

「いや、本社に戻って、仕事を終わらせてから帰るよ、レナ達も待ってくれてるしな」

「……うーん、なら、帰っても家に独りだと寂しいだけだし、私も

一緒に行っても良い？」
「相手をしてる暇はないぞ？」
「あは、別にいいよ。兄さんの仕事振りを見ながら、早く終われ～終われ～、って念じてるから」
「ちょ、変なプレッシャーを掛けるなって」
「あはは、なら、思わず惚れ直して、時間を忘れるような横顔でお願いね」

ま、また、無理難題を……。

「了解しましたよ。ほら、お嬢さん、お手を」
「ふふ、お姫様じゃないんだ？」
「いや、あんまり、？お姫様？って言葉に良い思い出がないからな」
「ん～、そうなの？」
「そうなんだよ。ほら、行こう」
「ん」

……そういえば、？お姫様？って、今、何処にいて、何してるんだろうねぇ。

そんな他愛もない事を考えながら、新たなる戦場もとい仕事場に向うべく、ミーアの手を引っ張りながら進みだした。

19　蠢動する世界　―ユーラシア動乱　3

ノルズ計画に続くＭＡＲＡＳＡＩ計画の新プロジェクトとして結成されたハガネ計画は、少しでも関わりを持ったり、見聞きした者ならば誰しもが目を見張る程の驚異的な進捗を見せている。

なにしろ、二週間ちょっとしか経っていないのに……。

「おいおい、マジかよ」

……実物が出来上がっていたりする。

俺より若干年上になるプロジェクトリーダーのマラウが満面の笑みで案内してくれているのだが……、さっきから開いた口がマジで塞がらん。

「どうですか！　この出来っ！」

「あ、ああ、うん、凄い。……もう、この一言しか、言えないよ」

確かに報告書で組み立てを始めているとは読んでいたんだが、【ＲＳＳ－０５１Ｙ】ハガネの完成度を生で目の当たりにすると、口が勝手に開いてしまうよ。

いや、実際には、まだまだ至る所で作業が進められているだが、出来上がりが近いと言っても良い姿なのだ。

そんなハガネの概略を述べると、艦体を横から見て、艦首には艦

体中心軸を中心に直径六ｍ、長さ六ｍのレーダードームがあり、そこから艦尾方向に長さ十ｍ程の間で高さ二十ｍに至る流線が描かれ、後は直線が艦尾部の推進剤が詰まった推進部手前まで続き、そこからは露出している直径十二ｍ、長さ二ｍになるスラスター部手前までを包むような形になっている。

また、角度を変えて上から見た姿だが、艦首には先に挙げたレーダードームがあり、そこから艦尾方向に長さ十ｍ程の間で両舷方向にそれぞれ十四ｍに至るまで広がる形で膨らみ、後は直せ……横から見たのと同じ内容なので省略する。

ハガネの艦体シルエットを手っ取り早く何かに例えるとしたら、よくある潜水艦に似て見えなくもないのだが、水平方向……両舷方向に長い為、ヒラメやカレイとまではいかないのが、つぶれ気味の楕円柱というか……、あ、全体的に上部から圧迫された中身が詰まった１．５？サイズのペットボトル……、いや、２？サイズのペットボトルと言った方があっているだろうな。

……でも、本当に、よく、この短期間でここまで出来上がったもんだ。

「ほんと、よくもまぁ、ここまで出来たもんだ。……馬鹿な事を聞くけど、プロジェクトに参加しているメンバーの一日って、四十八時間じゃなくて、二十四時間だよね？」

「あははっ、ええ、もちろん、俺達も二十四時間で生活してますよ。あ、そういえば、いつもリ・バイパーとかの差し入れ、ありがとうございます」

リ・バイパーとは宇宙食品が作ってる栄養ドリンクで、古き良き時代のジャパニーズ・ビジネスマン達を支えた黄色と黒のドリンク剤を真似た代物らしい。

「いやいや、気にしないで、それ位は当然のことなんだからさ。それよりも、こんなにスムーズに事を進めるなんてさ、みんな、凄いね」

「実は計画を開始して最初の一歩が上手く嵌ったら、何故か、次々に上手いこと回りだしまして……、あの時はチーム全員には、間違いなく、神が降りてましたよ」

「は、はは、それ、今、目の前に実物があるから、もの凄く納得できるよ」

その神は、絶対、俺には手を差し伸べてくれない、機械仕掛けの神だ、間違いない。

「後、艦上部に艦橋の設置したり、内部設備の調節や機能チェック、兵装等の外部艤装だけですから、来週には外宙に出て、機動実験や強度チェックをやって見るつもりです」

「うん、わかった。……完成まで後一息だろうけど、今後も事故がないように頼むよ」

「ええ、もちろんですよ」

嬉々とした顔がすぐさま引き締まったのを見て、これなら大丈夫だろうと俺も頷き返した。

◇　◇　◇

ラインブルク宇宙造船の活気に満ち満ちた造船ドックから本社に帰って、今日見てきた内容をレナとマユラに伝えると、二人揃って、目を丸くしている。

「そんなに凄いんですか？」
「ああ、もう、ほんとに驚いたぞ」
「なら、私達も見に行こうかなぁ」
「そう言うだろうと思って、資料用に記録してきた。ほら、見てみろよ」

マユラに記録媒体を手渡すと、早速、自分の情報端末に読み込ませ、二人してモニターを覗き込み始めた。

で、モニターに映し出されているハガネだが、報告書で読んだり、ついさっき実物を見てきた限りだと、艦の構成は大きく六つの区画に分けられているようだ。

艦首から艦尾に向う形でその六区画を順番に挙げて行くと、艦首にあるのがレーダー区画で、その名の通りにレーダーが納まっているエリア、第一区画と呼ばれる非換装固定部でレーダー区画から次の区画まで傾斜があり逆噴射装置などがあるエリア、第二区画と呼ばれるモジュール換装が容易なエリア、艦橋区画と呼ばれる操船と指揮、通信機能、生命維持、動力といったものが集中している固定バイタルエリア、第三区画と呼ばれる第二区画と同じくモジュール換装が可能なエリア、そして、最後に艦尾になる推進剤タンクとスラスターで構成される推進区画という案配だ。

当初計画ではレーダー区画と推進区画を除いた全四区画十六箇所のモジュール換装を可能にするという事だったが、艦体強度、コスト、見栄え、バランス、性能等々の様々な要素を換算及び考慮して、二区画八箇所に削減されたのだ。

もっとも、固定区画と銘打っているものの、換装区画より竜骨との接続能力やロック機能を強化したり、隣接するモジュール同士の

噛み合せ部や連結部を増やしたり、連結に使用する固定ボルトを厳重に溶接する等して、特に頑丈に固定しているだけであり、基本的な仕組みは変わらなかったりするので、その製法というか取り付け方自体は変わらなかったりする。

「う、うわ～」
「ほんとにできてますね」
「な、驚くだろ」
「ええ、報告書を読んで、どれ位進んでいるのかは知ってましたけど……」
「……うん、こうやって見ると、凄いねぇ」
「ああ、あれが二週間で出来たもんとは、絶対に思えない出来だよ」

あれなら、サハク准将に自信を持って見せられる。

「でも、最初にこちらが提示した仕様書とは違うけど、アインさんはそれでいいの？」
「んな細かいことは気にする必要はないんだよ。俺達が用意した案を叩き台にして、元より良い物ができるんなら、大いに結構な事さ」

マユラが言ったように、当初、想定していたものとは異なる仕様になっているのは事実なのだが、納得がいく出来なら、文句なんて言う必要はまったくない。

「ふふ、過程よりも結果ですか？」
「いやいや、もちろん、俺は過程も重視してるよ？　今から、こうやって二人をっ」
「わ、わわっ！」
「ちょ、先輩！」

端末を覗き込んでいた二人を背後からまとめて抱き寄せて、そのままソファがある場所まで行って一緒に沈み込む。

「抱き締めながら、可愛がったりとかするしな」
「も、もう、アインさん！　いきなりはなし！」
「そ、そうですよ、先輩！　ビックリするじゃないですか！」
「いいだろ～、ちょっと位、はっちゃけてもさぁ。……次善として作っていた迎撃艇も昨日になって、ようやく完成したし、ハガネの建造も順調に進んでいるのもこの目で確かめたんだから、今日はもう、のんびりしようざ」

撫で撫でとレナとマユラの艶やかな髪を撫で触りながら、皆が頑張ってくれてるけど、俺も頑張ったよ、なんて主張すると、二人は互いの顔を見合わせた後、ほぼ同じタイミングで頷き、素直に身を寄せて来る。

左手に座っているマユラは擦り擦りと自身の匂いを染み込ませるように顔を俺の胸にこすり付けた後、胴体に両手で我が侭な両胸を押し付けて抱きつき、右手のレナは肩から胸の前、もとい、胸に至ってさわさわと胸を撫でていた俺の手を自身の手に取り、指と指を絡ませて頭を肩に預けてきた。

……あ～、この温もり、この香り、この感触、幸せだぁ。

「悪かったな、ここ最近、あんまり相手をしてやれなくてさ」
「ん～、アインさんが一生懸命に頑張ってるはこの目で見て知ってるからいいよ」
「ええ、こうやって、時間がある時に甘えさせてくれたら、我慢できます」
「いや、レナもマユラも、別に我慢はしなくていいぞ？　むしろ、ウェルカム？」

「ふふ、そんなこと言ってもいいんですか？」
「そうだよねぇ。アインさん、私達、甘える時はとことん甘えるわよ？」
「時と場所さえ意識してくれたら、いつでも受け付けますよ」
そしたら、俺もまた、頑張れるからなっ！
「そうなの？　……じゃあ、早速」
「って、むぐっ」
「あっ、マユラ、ずるいっ！」
素早く身を起こしたマユラが腕で俺の頭をがっちりとホールドすると、でぃーぷな接吻を……。
しかも、こっちの口内に舌先が侵入までしてきている。
このまま好きに暴れ回らせるのを許すのは、男、否、俺の沽券に関わる以上、……この？ホームでの戦い？は絶対に負けられない！
だから、過去のＭＳ戦術訓練を思い出しながら、牽制、囮、誘引、逆撃強襲、ってな感じで、攻め入ってきた？熱い軍勢？に反撃を加えていると、ホールドしていた腕の力が徐々に弱まっていき、遂には糸を引きながら唇が離れて行った。
「ぅう、……まけた」
そう呟いたマユラの、色気に満ちた、ぽや～とした表情に目を奪われていたら、急にムッとしたレナの顔がアップに現れて……。
「んむっ！」

れ、？連戦？となっ！

なんて嬉しい！　……じゃなくて、かつて、このような過酷な？戦い？が過去にあっただろうか、いや、あろうはずがない！

なので、侵入してきたレナの？尖兵？を懇切丁寧に迎撃するべく、半包囲からの蹂躙殲滅戦を仕掛けてみる。

「んぁっ！　んっむっ！」

お、おおっ！　レナも反撃に出るとは、以前よりもやるではないかっ！

なので、開放されていた両手を使ってレナの身体をホールドし、？戦闘？場所をアウェーに移動させる。

「ぁん、ぁぁあぅっ！」

あ、陥落した。

……ちょっと、早くないか？

……。

れろん。

「ンぁっ！」

むぅ、……少々名残惜しいが、これ以上は？戦闘？ではなくなる

ので、唇を離すしかないな。

これだとちょっと暴れたりないなぁ、ってな具合に、内心でぶーぶーと文句を垂れていると、レナが可愛い敗北宣言を出した。

「ぅ……ま、まら、まけら」

「ふふん、そりゃ、先輩だからな、負けませんとも」

「ぅぅ～」

呂律が回っていない口調に加え、普段はお目にかかれない、拗ねた顔を見せる幼さと女の色気が絶妙にブレンドされた表情が愛くるしくて、さっきまでの不満も忘れて口元を緩めていると……。

「アインさん！　今度は負けないからねっ！」

俺の左太ももを跨いで座り、十全に戦闘態勢を整えたマユラが再挑戦をっ！

「ははっ、また返り討ちだな」

「むっ、まだこれからよっ！」

強気に出ているマユラだが、その口元が緩んでいたりする。

そんな訳で、気合が入ったマユラとの二回戦を始めたのだが……。

「ぁんぅ！」

再挑戦での奮闘も虚しく、マユラは、へろん、と俺の肩にもたれて、呆けております。

だから、激しく鼓動を波打たせながらも女の表情を曝け出すマユラがますます愛しく感じて、思わず左腕で抱き締めてしまうのは仕方がないだろう。

マユラの我が侭な胸の感触に鼻の下を緩めていると、復活がなったらしいレナも俺の右太ももに跨いで座り、両の腕を俺の首に絡めてきた。

「せんぱい、わたしも、もういっかい、ちょうせんします」

まだ、ちょっと呂律が妖しいが……、今日はもう自重しないことにする。

「激しさはどれくらいだ？」

「……めいっぱいで」

なら、意識が飛ぶくらいに……。

「……ふぅ」

満足のあまり、溜息を漏らしてしまったアインです。

俺の右肩を枕に気持ち良さそうにお眠状態なレナを右腕で抱き締めていると、俄かに、我が息子が、親父、いい加減、俺は腹が減ったと語りかけてきた。

その切実な訴えに、我が心中に住まう獣君も我が意を得たりと大きく頷いていたのだが、レナとマユラが見せている満足げな表情を窺った後は急速に大人しくなってしまった。なので、我が息子にも、もうしばらく辛抱だと言い聞かせて、本日もお預けということになりました。

……要するに、これ以上の事は、今のような仕事の合間、仕事場ではなく、もっとゆっくりとした時に、もっとリラックスできる場所で、ということだな。

そんなことを考えている癖に、俺の手が勝手に二人のお尻を撫でたり、感触を楽しんだりしているのはご愛嬌と言うことで……。

・夜書いて、朝読んだ、筆者的疑問
……俺、何を思って、後半部分を書いてたんだろう？　ｏｒｚ

20　蠢動する世界　―ユーラシア動乱　4

青く輝く地球には似合わない西ユーラシアにおける紛争は何とか局地的な戦闘で止まっているものの、各々の勢力がＭＳを繰り出し、激しい戦闘が展開されている。ネットの情報掲示板から得られた情報だと、全ての勢力で使用されているＭＳが大西洋連邦が供給しているストライクダガーだけに、純粋なＭＳ戦術や戦車や歩兵、砲兵、工兵、武装ヘリ、更には航空戦力といった諸兵科との連携、後方支援体制の充実度が勝敗を分けているようだ。

とはいえ、今の所、戦況は一進一退であり、不謹慎な連中の賭けの対象になりそうな状態なので、兵器を供給している大西洋連邦の高笑いが聞こえてきそうな状況だと言えるだろう。

一方、ユーラシア東南部で起きていた東アジア共和国と赤道連合の小競り合いは収束に向っているようだ。オーブ本国の主要マスメディアの一つであるオノゴロ通信によると、オーブ在住のマルキオなる人物が両国の争いを食い止める為に奔走した結果、事態が収まり始めたそうだ。

俺、このマルキオって人の名前、初めて聞いたんだが……、国家間の争いを収める事ができるなんて、有名な人なんだろうか？

まぁ、何にしろ、身一つ口一つで争いを収めるなんてさ、今は無き地球連合からプラントの外交的勝利を?ぎ取ったカナーバ議員位、凄い人だと思うよ。実際、マルキオを世界を平和へと導く?導師？と称える声も多いみたいだしね。

次に人の生存を拒む荒野、もとい、宇宙なのだが……、ここしばらく活発に動き回っていたＬ３の海賊が、更に過激化し始めている。

具体的に言えば、物資引き渡しを拒否した船に対して、じわじわと甚振るように少しずつ攻撃を加えて沈めたり、貨客船の乗員や乗客に対して悪逆非道を働いた後、生身のままで宇宙に放り出したり、逃げ惑う船を弄ぶように追い回して大気圏に落としたりと、とにかく、外道を働いている。

この海賊の動きに対する各国の反応なのだが、鈍いの一言だ。

いや、アメノミハシラはパッツを使ってＭＳによるパトロールを大幅に増やすなどして、比較的頑張っている方なのだが、月の中立都市群は都市警備隊を持っているものの航路防衛を担えるだけの艦艇を有していないし、Ｌ４に駐留している旧連合加盟国……三大国の宇宙軍は互いを牽制しあって動けない状態に陥っており、プラントもまた、一応の活動はしているようだが、戦争が終結したことでザフトの動員が解かれた結果、構成員の絶対数が減っているらしく、穴がありすぎる状態だ。

このまま事態が推移していくと海賊被害を恐れて、地球圏内航路を行き来する商船の動きが鈍り、地球圏全体の物流が滞る事態になってしまいそうで、宇宙に住む者にとって、非常に憂慮すべき状況と言えるだろう。

後はアメノミハシラ内部の様子だが、オーブからの避難民や戦災や貧困から逃れるべく一念発起してやってきた他国から移民と建設

当初から居住していたり、ここで新しい生活を再建できた元避難民や移民であるアメノミハシラの住民との間、それに、ナチュラルやコーディネイターとの間、それぞれに、特にこれといった軋轢もなく、基本的に平穏だ。

まぁ、アメノミハシラ自体にまだ居住区画に人を受け入れる余裕もあれば、雇用関係もアメノミハシラが管理要員を、宇宙軍が人員を募集していたり、モルゲンレーテやうちのグループが雇用を少しずつ増やしていたり、居住区画にある様々なサービス業も伸張しているからだろう。

特にここ最近は天頂部にあるモルゲンレーテのファクトリーが活気に満ちているようだ。

この前も宇宙商船の方に、南アメリカ向けの積荷を一週間に一回のペースで三ヶ月間、ハガネのベースとなった例の小型コンテナ船を使い、バリュート投下して欲しいとの依頼が入ったそうで、なんと、宇宙軍が臨時パトロールをするなんて、支援までも約束されているって話だ。

……つまり、投下する積荷は、場所が南アメリカであり、厳重な警戒も行われる事からわかるように、例のアレであるということだろう。

◇　◇　◇

「それじゃ、明日はよろしく頼むよ」

「ええ、任せてください」

ハガネのプロジェクトリーダーであるマラウとがっちりと握手して、宇宙造船が所有している造船所、その内部にある部屋の一室から見送ったのだが……、つい先程まで、明日、サハク准将やオーブ国防宇宙軍のお歴々を招待して行われる予定である、【ＲＳＳ－０５１Ｙ】ハガネの初披露会の打ち合わせをしていたのだ。

その間中、披露会の全てを取り仕切る事になるリーダーの様子を注意して伺っていたのだが、話し方や態度、顔付きのそれぞれに、チームが生み出した物に対する自信と誇り、愛情が見て取れたので、招待客へ素晴らしい応対を行ってくれると確信できた。

という訳で、後は明日を待つばかりなのだが……、折角なので、艤装も成ったハガネを最終確認をして回っているプロジェクトメンバーの邪魔にならない範囲で見て回る事にした。

打ち合わせに参加していたリーダーと数人のプロジェクトメンバーに挨拶をしてから部屋を出て、明日の披露会を静かに待っているハガネの元に向う。途上、先程まで顔を合わせていたプロジェクトメンバー達の生き生きと輝いていた顔を思い出し、是非にも採用されて欲しいよなぁ、なんて考えていると、ハガネがある造船エリアのゲートが見えてきた。

そのゲートを通り抜けると、全艤装が終わったハガネの２?ペットボトルのような姿が視界に入ってくる。

ハガネは当初計画通り、船団護衛を目的とする近接防衛に特化した艦艇だ。目前にあるハガネも護衛を務める際の一般的な兵装……ビームファランクスを八基、３０?連装ビーム砲を四基、１２．５?近接防御機関砲を三基を装備した通常護衛艦タイプとなる。

第一区画である固定傾斜エリアに装備されているのは、回転砲座

に装備されたビームファランクスだ。これが両舷上下に一基ずつで計四基あり、主に前面から左右両舷及び上下面方向をカバーする事になる。

ここで使用されている回転砲座なのだが、実は俺とシゲさんが迎撃艇を作る際にＢＩを流用して作っていた回転砲座だったりする。たまたま、俺に用事があって尋ねてきたプロジェクトメンバーの目に止った結果、建造にかかる時間を短縮させる為にも即決で採用されたのだ。

世の中、何が幸いするか分らないものだが……、ハガネでも採用された事だし、折角だからということで、トツカ級の開発を進めているモルゲンレーテにも近接防衛用砲座の候補として回しておいた。

次に第二区画の換装エリアだが、オーソドックス……とは言わないかもしれないが、少し口径が大きめで威力もある３０ｍｍ連装ビーム砲をこれまた両舷上下で計四基装備した。

このベルダンディの主兵装でもある３０?連装ビーム砲は四連装式であるビームファランクス程の速射性はないが、それを補うだけの威力……ビームライフルの三分の一程度の威力を持つ為、対ビームコートがされていない部位に命中すれば、ＭＳと言えども大破ないし撃墜させることが可能だ。

要するに、ビームファランクスが脅威を接近させない、或いは迎撃する為の兵装なら、この３０ｍｍ連装ビーム砲は脅威を積極的に排除する為の兵装と言えるだろう。

更にこれも換装エリアとなる第三区画には、第一区画と同じく両舷上下に一基ずつで計四基のビームファランクスを装備しており、艦艇の大きな弱点である推進部がある、後方面から左右両舷及び上下面方向を主にカバーする事になる。

残る１２．５?近接防御機関砲ＣＩＷＳは、元々のコンテナ船で使われていた船橋を流用、補強して、艦体上部に設置した艦橋と潜り込まれ易い艦底を守る為、艦上両舷と艦底に一基ずつ設置されている。

後、これは兵装というわけではないが、艦橋があるバイタルエリアと推進部には、対ビーム及び実弾への防備に、スクルドで使用されている電磁式対ビームシールドが左右両舷及び上下面に装備されている。

先の戦争では艦橋や推進部を狙って、１５０m級……ドレイク級を沈めてきた経験から取り付けたのだ。

試験でもＭ１アストレイで使用しているビームライフルをぶっ放しても受け散らす事に成功しているから、これが稼動してさえいれば、不意にビーム攻撃を受けての一撃死、なんてことは免れることができるはずだ。もっとも、最大出力で稼動させた場合はこちらのビームも使えなったりするので、運用前に注意を促す必要があるだろう。

この通常護衛艦タイプは今まで見てきたように、武装をビーム兵装に頼りすぎている面があるのだが、ハガネが宇宙軍に正規採用された場合には、第二、第三区画用モジュールとして、ＢＩで使用している六連装ミサイルポッドを装備した対ＭＳ制圧タイプや回転砲座に重散弾砲を装備した実弾タイプ、ＶＬＳ（Ｖｅｒｔｉｃａｌ Ｌａｕｎｃｈｉｎｇ Ｓｙｓｔｅｍ：垂直発射システム）仕様のミサイルセル搭載し、対艦ミサイル或いは航宙魚雷を装備した対艦タイプの開発が予定されているから、これらの組み合わせによっては、よりバランスの良い武装をしたタイプができるだろうと考えている。

ついでに付け加えるならば、遭難救助用のランチや医療施設を装

備させた救急救命タイプや前線や非常時にＭＳへと推進剤やバッテリー、エアー等が補給できるＭＳ支援タイプの開発も検討されていたりするが、まぁ、このあたりは実際に使う側の要望に合わせて、作っていったら良いんじゃないかなとも思っている。

後、艦内部なのだが、各区画を貫通している竜骨内部にある内部通路に戦闘隔壁を設けて、戦闘が始まった際には全てを閉ざし、人が存在しない場合はエアーを抜くなどして、被弾の影響を少なくできるように考えられている。

また、各兵装に使用するエネルギーに関してだが、基本、兵装モジュール部にはバッテリーしか設置せず、バイタルエリアに設置している動力源、燃料電池と艦体の一部に付けられている太陽光発電パネルで常時充電を行うことになっている。簡単な話、燃料電池で使う液体水素や液体酸素といった危険物を一番安全とされている箇所で一括管理しているってことだな。

ちなみに、これで使用する燃料電池は、今後、開発するＭＳで使用するものと同じものだったりする。技術開発の神秘もとい進歩は凄いと言うことだな。

でも、何で、ＭＳの動力源に燃料電池使わないんだろう？

……うーん、初代のジンがバッテリーを使用していたから、それを元に開発した影響だろうか？

案外、設計の制約というか、スタイリッシュでエレガンスでスマートな？ふとましくない？機体を作ろうと考えているからだったりしてな、って、幾らなんでも、それはないよなぁ、あはは。

……。

パーシィなら、そんなコンセプトで開発しないよな？

「……先輩、いきなりどうしたんですか、そんな引き攣った顔をして」

「いや、今、パーシィが設計を詰めているＭＳに関して、ちょっとな」

「何か、不具合でもあったの？」

「いやいや、まさか、パーシィに任せておいたら、安心安全で信頼に満ちた機体ができあがるさ」

……と言うよりも、本社で留守番をしていたはずのレナとマユラが何故ここに？

中空に浮かんで、ハガネを見下ろしていた俺の近くに、こちらも上手く浮かんでいる社服姿のレナとマユラに問い掛ける。

「で、二人とも留守番はどうしたんだ？」

「はい、余りにも暇なんで、？目安箱？を設置して出てきました」

「え？　ちょ、レナ、おまっ」

「あはは、嘘だよ、う・そ。ほら、時間を見てよ、アインさん」

ありゃ、ハガネを見て回ってるうちに、定時を過ぎてたみたいだな。

「定時、過ぎてたんだな、ハガネに夢中で気付いてなかったよ」

「レナ、予想通りだったわね」

「ふふ、確かに予想通りね」

「いや、お前ら、人の行動を読むなって」

なら、今後は予想外の行動をしてみようと、天邪鬼な決意しつつ、話を続ける。

「それで、わざわざ迎えに来てくれたのか？」
「ええ、先輩が予定時間を過ぎても帰ってこないから」
「うん、連絡もないから心配して見に来たのよね」
「……あ、それは悪かった。それで、今日は書類が回ってきたり、他所からの連絡は入らなかったか？」
「今日は特にこれといったものはなかったです」
「うん、こっちで対応できるものばかりだったから、安心してね」

なら、今日は戻らず、直帰するか。

「……なら、今日はこのまま帰るか」
「もちろん、ミーアちゃんの所に顔を出してからですよね？」
「当然だろ。……じゃないと拗ねるからな」
「あ～、ミーアちゃんに言ってやろうっと」
「マユラ、それは勘弁だ。ミーアの奴、本格的にへそを曲げると元に戻るまでが長いからな」

もっとも、長かったのは昔の話で、最近はお風呂場で念入りな応対をすると関係修復もあっという間だったりする。

「なら、明日も早いし、引き揚げるとするか」
「は～い、わかりました」
「ええ、そうですね」

二人を出入り口方向に押してやった後、俺も四肢を使って進行方向を調整し、出入り口を目指す。その途上、首だけ振り向いてハガ

ネを見る。

……本当に、短期間で開発したとは思えない程に、良い出来だ。

このハガネが採用されれば、少しは俺も……、いや、まだまだ、これでは足りてないな。

……んんっ、とにかく、それなりに買ってもらえたら良いんだけど、これればかりは先方の都合だからなぁ。

「あ！」
「せんぱっ！」

っッぅーーーっ！

か、壁に衝突した！

「……先輩、大丈夫ですか？」
「……アインさん、前見てないからだよ？」

うぅ、これはハガネが何らかの障害にぶつかるという暗示か？

……。

い、いや！　これはハガネがヒットするという暗示だ、そうに違いないっ！

そうプラス方向に考え直して、涙目のまま、レナとマユラに引っ

張ってもらいながら、造船所を後にした。

21　動き出す時　―宇宙航路維持機構　1

暦も八月に入り、ラインブルグ・グループは熱く盛り上がるように動いている。

なんとなれば、先だって披露されたハガネがサハク准将や宇宙軍のお歴々から高く評価され、その場で【ＳＦＥ－１】ハガネ級と艦級が与えられると同時に、十二隻の受注を得ることに成功した為だ。

これに伴なって、ハガネ級の建造を担当する宇宙造船を始め、宇宙工業の冶金部門や宇宙電気の兵装関連部門が活況を呈しており、宇宙商船や宇宙保険もまた、ハガネ級が運用される事で宇宙航路の安定を期待している。

披露会が終わった後、喜色を浮かべてプロジェクトメンバーと喜びを分かち合っていたプロジェクトリーダーから聞いた話だと、ハガネが採用された理由は一隻当たりの値段がドレイク級よりもかなり安い上、建造期間も短い事に加え、用途に応じてモジュール換装が可能な事、運用人員が十数名で済む事も評価されてのことらしい。

また、実際に搭乗して内部を見て回り、操船や兵装関連装置も触ってみたお偉いさんもいるらしくて、これは兵の錬成と尉官の能力向上やステップアップに丁度良いな、とも漏らしたそうだ。

うん、任務内容や運用方法を考えて、艦の運用人数をできるだけ減らそうと努力した甲斐があったものだが……、本職って、ザフトでは考えられない程、しっかりと色々な事を考えてるんだねぇ。

後、ハガネの納期については、できる限り早く欲しいとのことだが、このあたりは生産を担当する宇宙造船から担当者が出て、話を

詰めているとのことだそうだ。
　また、俺がシゲさんと一緒になって進めていた予備計画（笑）で作っていた魔改造ランチも、更に改造して軍に売り込ませて欲しいと、造船から出ていたプロジェクトリーダーから強い要望があったので、取り合えずはハガネ計画メンバーから有志を募って、進めてみようということになっていたりする。

　とにかく、今回のハガネプロジェクトもハガネが完成して、見事に受注を得られた事から表向きは解散することになり、プロジェクトに参加していたメンバーも各々が所属している企業に帰った後、ハガネ関連の仕事でリーダーを担う事になるだろう。

　あ、もちろん、特別ボーナスの支給も親父を通して、重役連中に伝えてある。

　そんなこんなで、俺にとっては二つ目となる大きな仕事が終わった事になり、ほっと息をついている所なのだが……、長らく忙しい日々が続いて構ってやれなかった反動なのか、この所、レナやマユラ、それにミーアの甘えっぷりが凄い。

　簡単な例を挙げると、朝、雄の本能を刺激する柔らかな感触と香りで目が覚めたら、ブラなしシャツにショーツという刺激的な姿のレナ或いはマユラ、もしく両者共に、俺の懐に潜り込んで素足を身体に絡めていたり、俺の首筋に顔を寄せて吸い付いていたり、さり気なく胸に手を誘導して揉もといマッサージをさせたり、朝の健康診断という訳ではないだろうが、寝間着やインナー越しに我が息子を手で擦って見たり、？硬さ？等の状態を直接触診していたり、起き出す為に二人を起こそうとしてもキスするまで絶対に起きなかったりするし、昼は昼で、レナがお昼休みというか一息入れる時にちょこを持ち出してくるようになったし、マユラも対抗して、マシュ

マロを持ち出してくるようになったりしている。
　また、ミーアはミーアで独占しているらしい入浴タイムで、一緒に浴槽につかってイチャイチャするのはスタンダードになった上、身体全体への念入りなマッサージを要求したり、自身の目の届かない所に汚れがないかを入念にチェックさせたり、俺の身体を洗う際にも業とらしく胸を背中に押し当てて動かしたりする。で、つい、その感触に気を取られていたら、いつの間にか、ドヤ顔をしたミーアによって、我が息子までもが、懇切丁寧に……。

　このあたり、知り合ってから二年近くもの間、ミーアを色々と指導してくれていたザラ夫人の存在が透けて見えたりするんだが、これはやはり、流石は一国を率いた男を射止めた女(ひと)だと言うべきなんだろうか？

　お陰で我が息子が、親父、俺の存在価値を無視するなどっ、あんたはヘタレが過ぎる！　だなんて、いきり立つ事いきり立つ事……。とはいえ、その息子もまた、ミーアの手によって？……ふぅ？だなんて具合に強制的に息抜きをさせられて、俺共々？賢者？になっているあたり、哀しいところだ。

　これだけ刺激的な状況が続くと、俺も健全なオノコである以上、そろそろ、本格的に？食べたい？なぁ、という思いも生まれ始めているのだが……、何故か、本格的には手が出ない不思議。

　そんな訳で、欲しているのに手が出ない原因を改めて考えてみたんだが……、どうも、肉欲以上に三人もの綺麗所を囲っている精神的な充実感が大きい事や会社に与えられた仕事……軍事参入計画が完了してもいないのに、三人と？やってしまって？サルの如く快楽に溺れるのは如何なのものかという忌避感、それに最大の理由というか、まぁ、個人的な……って、やめやめ、これは自分の内にだけ、

しまっておくべきものだよな、うん。

とにかく、こんな感じで、比較的にまったりとした、爛れる三歩程手前な日々を送っているが、別に仕事をしていないわけじゃなくて、主にＭＳ関連で計画を形にすべく、やるべきことはやっていたりする。

今も第五開発部のオフィスでパーシィやシゲさんとＭＳで使用する動力源について話し合っている最中だ。

「なるほど、熱電発電はやめておいた方が良いか」

「うん、今のところは、まだ、装備しないで、補助バッテリーを増やした方がいいと思う」

「そうだねぇ、他の開発部や電気、発電と協力して開発は進めているけど、まだまだ信頼が置けない代物だからなぁ」

「だよね。前だって、試験で部品が融解していたし……」

……うん、動力部、つまりは液体水素と液体酸素のすぐ傍でそんなことになったら、危なすぎるから、やめといた方がいいな、うん。

「そうだな、今回は見送ろう。俺だって、いきなりあの世まで吹き飛びたくないからな」

「あ、でも、別に今後も採用しないってことじゃないから、ただ、もっと信頼が置けるようにならないと、僕は乗せたくないんだ」

「わかってるって、パーシィ」

こんな風に、信頼が置ける技術しか導入しないパーシィだからこそ、俺も全面的に開発を委ねる事ができるのだ。

「あ、それとね、ＭＳの主兵装になる予定のビーム兵器だけど、前

の戦闘で、ビームファランクスと連装砲のデータがたくさん取れたから、上手くいきそうなんだ」
「そうか、なら、ユーラシアの連中には感謝しておこう」
「……まぁ、奴さん達は別に感謝されたくもないだろうけどねぇ」
「シゲさん、連中の犠牲にはプラスの意味もあった事にしてやらないとさ、ユーラシア連邦を崩壊させて、故郷にまた戦争を巻き起こしただなんてマイナス要因しか残したことにしかならないじゃないか」

露悪的に応えて見せるが、結構、本音だったりする。

「そう考えると皮肉な話だよね」
「確かに、自分達の国を何とかしようと思って、逆に……、崩壊、分裂に流れたんだからねぇ」
「でも、だからといって、俺達が連中の犠牲になっていいって話にもならないさ。……そもそも、先の侵攻が自らの威を示したり、この生産力を欲したのが理由だとして……、まぁ、前者はともかく、後者に関しては、ＭＳを輸出をしてくれって頼めば、こっちも輸出していたかもしれないって話なんだからな。簡単な話、ユーラシアの連中は得られる利益にばかり目を向けすぎて、リスク計算を甘くしすぎたんだから、自業自得だろうさ」

パーシィとシゲさんが頷いたのを見て、俺は自身の中にある思いを確認しながら、更に語を紡ぐ。

「俺達は、自らと自らの家に降りかかる火の粉は払う。もしも、他所に付いた火があるなら、こっちに何とかできる余裕があるなら、消すように努力する。でも、俺達の家にわざわざ火を付けに来る連中には、慈悲なんてものはいらない。二度と手を出してこないように、徹底的に排除する。……俺達が作るのは、その為の武器だ」

「……それが僕達の思いの落し所なんだろうね」
「余計な手を出してきたら噛み付く為の力ってわけだね」
「ああ、痛みを知らない奴には賢くなる為に相応の痛みを与えよ、って奴だよ」

……本来、人は霊長を名乗っている以上は、霊長らしく、言葉や文字という素晴らしいコミュニケーションツールを使って、肉体言語による争いを起こさず、事を進めるのが理想だが、悲しむべき事に、現実はそう理想通りに行く程、生易しい世界じゃない。
人が人である以上、決して切り離せない様々な感情、特に、誰かに対する嫉妬や憎悪、怨恨といった負の感情が爆発することだってあるだろうし、自身や大切な者達が死なさずに生かそうとする為にも、より良い生活を求める為にも、他者から奪おうとすることだってあるだろう。
だからこそ、法や武器という抑止力でもってリスクを発生させる事で、互いが手出しできないようにして、少しでも暴走を食い止めるのだ。

……もっとも、それも今の俺みたいに、?普通?の日常を?当たり前?に過ごしていて、切羽詰っていないからこそ、言える言葉なんだろう。
けど、それでも最終手段に訴えるのは……、本当に、プライドや見栄といった虚栄心といった何もかもを捨てて、できることを全てやり尽くして、それでもってならない限り、最後にしなければならないと思う。

まぁ、結局は、これもまた、一つの理想なんだろうな。

そんなことを考えていたら、シゲさんが、静かに口を開いた。

「アインちゃんよう、結局、俺達は、何でもできる神様でもなければ、全てを捨てて世界に尽くす聖者でもない、ただの人間である以上は……、何事にも一線を設けて、降りかかる万難を排して、割り切って生きていくしかないってことなんだろうねぇ」

「……そうだね」

そう、一介の人は、今、この時を、自身と周囲を守った上で、それ以上のことができる力がない限り……、どれだけの犠牲の上に立っていたとしても、割り切って生きるしかないんだ。

……。

……でも、何でもできる神様か。

捻くれた考え方だけど、仮に何でもできる神がいたとしても、その神が？人間が生み出した存在？でない限り、必ずしも人間の事を特別だと考えてくれるとは思えない。なんとなれば、人を特別視しないで別のものを特別視しているかもしれないし、全てのものが等価値だと考えるかもしれないからだ。

となれば、人を世界を乱す害虫として排除しようとしているかもしれないし、芥よりも価値のない存在としてまったく眼中に入れてないかもしれないし、全てのものに試練を与え続け、悶え苦しむ様を楽しむような存在かもしれない、だなんて考える事ができるからな。

って、考えが凄く逸れてしまったな。

「でも、余力があれば、四月馬鹿の時に、親父や重役……、グループがしたように、僅かとはいえ、困っている人を助ける事もできるはずだ」

「そうだね。僕達も、困っている人を少しでもいいから、助けられるようになりたいね」
「うん、そうだねぇ」

男三人、話がまとまった所で俄かに部屋の扉が開いて……。

「おっ！　おおっ！　その愛くるしいボディはまさしくナナちゃん！　アイッ！　ラブッ、ユゥーーーッ！」
『Ｎｏ！　Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ！』
「ぎゃんっ！」

ノーサンキューの意味を考えると……、どうやら、ナナのガードは確実に下がっている、のだろうか？

そんな事を考えながら、見事なまでにナナのマニピュレーターで投げ飛ばされたシゲさんを見やると、いつものように気絶して中空を漂っていた。
そんなシゲさんを器用にも投げ飛ばしたナナはというと、例の如く、意思表示画面に罵詈雑言を並び立てているが、シゲさんを確保に動いていたりする。

……むぅ、この光景を見ていると、さっきの反応や罵詈雑言が照れ隠しのように感じてしまうのは、俺の目がおかしいんだろうか？

なんてことを考えながら、ミーアに用件を問い掛ける。

「何かあったのか？」
「あ、別に用はないんだけどね、喉が渇いたかもしれないと思って、ドリンクを持ってきたんだけど……」
『この人だけは、機械油を飲ませた方が良い』

こわっ！

ど、どうやら、さっきのは俺の勘違いだったようだ。

「え、えとね、ナナ？　シゲさんにそんなこと言ったら、絶対に飲んじゃうから、絶対に言っちゃ駄目だからね？」

『……肯定』

確かに、シゲさんなら、それでナナちゃんへの俺の愛が証明されるのならばっ！　なんて言って、やりかねんのが怖いところだ。

「ほら、ナナ、シゲさんを仮眠室に運んで、風邪をひいたりしない様に見ておいてね」

『……マスターの言う通りに』

パーシィに促されたナナがシゲさんの足を掴んで、仮眠室がある方向に向い始めた。

「パーシィ、シゲさんの熱い想いは届くんだろうか？」

「う、うーん、そういうことは僕にはわからないよ」

ミーアからＩＴＩＧＯオレを受け取りながら、一人の熱い漢の情熱に満ちた愛が、人間と機械と言う厚すぎる壁を打ち砕く事を祈るしかなかった。

22　動き出す時　―宇宙航路維持機構　2

八月中旬に入り、早くも二隻目のハガネ級が宇宙軍に納品された頃、地球ではブルーコスモスによるコーディネイター排斥運動が全世界規模で展開され始めた。

先の戦争の停戦後というか、ユニウスの講和以後は表立っての動きを見せていなかっただけに、ブルーコスモスという組織が未だに、こんなにも影響力があるのかと驚かされる程の盛り上がりを見せている。

特に大きく盛り上がっているのが、大西洋連邦と南アフリカ統一機構、汎イスラム会議、中東イスラム同盟、ユーラシア連邦、東アジア共和国といった国々で、それらの国内に残っていたコーディネイター達が、比較的に盛り上がりを見せなかった南アメリカ合衆国や西ユーラシア連合、赤道連合、大洋州連合、スカンジナビア王国といった国々へと避難し始めている。

また、大西洋連邦やオーブ本国、南アメリカ合衆国のメディアが流した情報によると、ブルーコスモスは大西洋連邦で？コーディネイターの脅威からナチュラルを守ります？なんて謳い文句を掲げた【ファントムペイン】という民間軍事組織を結成し、旧地球連合に所属していた各国軍のブルーコスモス派から特に反コーディネイター思想が強い人物を引き抜いたり、四月馬鹿の被害が大きかった地域で募集を掛ける等をして、構成員を増やしているようだ。

更に、俺が仕事をサボって、欺瞞に満ちたネットの海を泳いで調べた内容とラインブルグ宇宙商船の所属商船がＬ４や月で観測した商船の数やサイズ、目的地を照らし合わせた結果から見えてきたモノを付け加えるならば、今までブルーコスモスを後援してきた大西

洋連邦やユーラシア連邦、東アジア共和国等の各国資本がファントムペインに対しても強力な支援を行っているのは確かなようで、表立ってメディアに公表されている自動小銃や装甲車等の軽装備だけではなく、歩兵用パワードスーツやＭＳ等の重装備を配備している可能性が高いように考えられる。

……。

これはおそらくの話だが、このようにブルーコスモスが直接的な動きに出たのは、地球連合が崩壊し、ユニウス体制が発足した現在では対コーディネイター、対プラントの役割を各国軍に期待できないと踏んでのことだろう。

だからこそ、この民間軍事組織を使って、表立ってはナチュラルの保護を謳いながら、裏でコーディネイターを直接的に弾圧でもするつもりなんだろうが……、大西洋連邦が国内に自国軍以外の強力な武装集団の存在を容認したとなると、両者の間に何らかの取引が、たとえば、軍の暗部を担わせるとか、仮想敵国であるプラントや大洋州連合等への非正規戦を仕掛けさせるとか、そのような密約があるはずだと……、いや、なければおかしいと思う。

何にせよ、この動きによって、再び、ナチュラルとコーディネイターの間の溝が深まらないことを……、きっと、色んな事件が起きて、深まるんだろうなぁ。

そんな俺の思いや願いを余所に、世界にはナチュラルとコーディネイター間の新たな争いの火種になるかもしれない存在が生まれているが……、一国や一軍の指導者でもなければ、影響力を行使できるような存在でもない以上、今はただ、決定的な破局が訪れることなく、平和が続く事を祈るしかない。

◇　◇　◇

今まで俺が得手勝手に構想を練り、その構想を実際の形にすべくパーシィ達が奮戦して作ってくれていた設計図も出来上がったことで、ようやく正式な形になったＭＳ開発計画案を？我が親父と愉快で愛すべきおっさん連中？、別名をラインブルグ・グループ上層部に提出した後、モルゲンレーテの大規模無重力ファクトリーにお呼ばれして、共同開発中で建造も進んでいるトツカや設計が開始されるＭＳ母艦の開発状況を見聞きさせてもらっている。

「なるほど、トツカのＭＳの発着は艦尾からにしたんですか」
「ええ、護衛で使う事を想定するなら、別に前から出すことにこだわる必要はないと考えましてね」
「……でも、護衛で使うと言っている割りには、対艦兵装が結構、重武装のような？」
「あ、あはは、艦首から艦尾に格納庫を移した結果、艦首に使えるスペースが大きく増えたので、つい、技術者魂に唆されてしまって、あれもこれもと載せていたら、対艦攻撃能力が大きく伸びてしまいまして、護衛艦と言うよりも汎用艦になってしまいました」

そう俺に語ってくれたのはデコの広い丸眼鏡をかけた俺よりも十歳ほど年嵩の人物……モルゲンレーテ造船部門の開発トップであり、トツカ計画及びＭＳ母艦計画の開発計画責任者でもあるサトウ氏なのだが、その顔にはどこか引き攣った笑みが浮かんでいたりする。

まぁ、確かに、商船や主力艦の護衛用艦艇を作るつもりで頑張っていたら、いつの間にか、多目的で使える汎用艦になっていたとなると、本来の趣旨からは離れることになるからなぁ。

「本当に、ラインブルグさんの方で護衛艦を作ってもらえたお陰で、本当に、助かりました」
「はは、どちらかといえば、トツカの存在価値をなくすような事をして、怒っているかと思ってましたよ」
「いえいえ、とんでもない！　……お陰で首の皮一枚で繋がったので、トツカの開発に参加した連中は皆、本当に、ラインブルグさんには感謝してます」

そんな過程を経て、当初より存在価値が変化してしまったトツカだが、決して悪い艦ではないことを注意しておきたい。実際、今、俺の目の前で建造が進められているトツカの試作艦を見る限り、汎用艦と言っただけあって、各能力のバランスは良いと思う。

そのトツカだが、イズモ級を構成する三つのモジュール、艦体艦橋部、両舷側部、艦首カタパルト部の中の艦体艦橋部……艦を構成するための中心艦体をベースに開発が行われており、その全長は１８０ｍ程となるから……、旧地球連合が使用していた１５０ｍ級……ドレイク級や２５０ｍ級……ネルソン級の中間クラスになるはずだし、駆逐艦と表現したらいいだろう。

この艦の兵装や構成を艦首から艦尾へと簡単に説明して行くと、これまではＭＳやＭＡの射出口だった艦首部には先端部から流線を描く形で新たな区画が新設され、そこにうちのグループが提供する電磁式対ビームシールドを装備した装甲が取り付けられ、また、内部にはシールドに使用する為の金属粒子タンクや燃料電池、使用する燃料、バッテリー等の補助動力源が積まれている。

次の旧ＭＳ格納区画は、その外装部に艦橋がある艦上面に主兵装としてゴットフリートＭｋ．７２……イズモ級に装備されている強力なビーム砲であるゴットフリートＭｋ．７１が先の戦争で起きた技術革新で大幅に改良され、口径が三分の二になった代物が前後に

並んで二門、両側舷には足つき……アークエンジェル級で使用されていたバリアントなる兵装を参考に、新規開発された７５?単装リニアカノンがそれぞれ一門ずつ、艦底にはミサイル発射管が十二セル装備されている。更には、これらの兵装群を守るべくビームファランクスを装備した例のＢＩを流用した回転砲座が上下面及び左右舷に二基ずつ、更にはＣＩＷＳが一基、艦橋前に設えられている。

また、旧ＭＳ格納庫内部は分厚い二重隔壁で前後に分けられており、前方に艦載兵装で使用されるミサイルや砲弾等が、後方に主動力源の大型燃料電池やそれらの燃料、主兵装用の小型ＭＨＤ（Ｍａｇｎｅｔｏ－Ｈｙｄｒｏ－Ｄｙｎａｍｉｃｓ：電磁流体力学）発電機や予備の大型バッテリーが搭載されている。

対艦兵装区画や主動力区画となった旧ＭＳ格納区画の後方には、脱出装置も兼ねるように改造された艦橋が旧格納庫から旧艦橋に至る窪み部分に移設されて、上部にはレーダーアンテナやレーザー通信等の関連装置が設置されている。

そんな艦橋の直下には、ＣＩＣや乗組員の居住空間等の有人区画や生命維持関連装置や非常用バッテリーといったものが集約されており、先の主動力区画と併せてバイタルパートに位置づけられるだろう。

その為、対ビームコートされた装甲が二重になっており、他の区画よりも防備が厚くなっている他、最終迎撃用のＣＩＷＳが両舷と艦底部に一基ずつ配置されていたりする。

そして、旧艦橋部から艦尾である本体推進部に至る部分には、サトウ氏の話にもあったように、ＭＳ四機とパッツ二機を艦載して整備できる格納庫が新たに設けられたのだが、ＭＳの発着が艦尾で行われることになった為、ＭＳの発着が行えるように本体推進部が取り外されることになった。

ちなみに、ＭＳ格納庫と宇宙とを隔てる二重扉の外扉は射出用の

簡易型電磁カタパルトが装備された観音開き型になっており、ＭＳの速やかな発艦と上下空間や後方への射出が可能になっていたりする。

この格納庫区画の上下外面に、３０?連装ビーム砲装備の回転砲座が一基、ビームファランクス装備の回転砲座が二基、それぞれに設置され、後方から攻撃への備えになっている。

後、ＭＳ格納庫が艦尾に移った影響で艦本体から無くなってしまった推進部だが、イズモ級で使用されている両舷側推進部に手を加え、改良されたものが両舷に装備されることになった。この改良によって従来型推進部よりも一割程度は推力がアップしているらしいが、全力を出したイズモ級に追随できない可能性もあり、このまま改良を続けるか、別の方法を探すかで、今後の課題になっているそうだ。

で、この両舷側推進部には、うちの技研や宇宙工業が開発してきた【ＲＩＮＧ】……Ｒｏｔａｔｉｎｇ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｏｒ　ｆｏｒ　Ｎｅａｒ　Ｇｕａｒｄ（近接防御用回転式迎撃装置※注：適当訳）という近接防衛兵装が備えられている。

これはリングとの名前が示す通り、この兵装は両舷側推進部と連結された基部より艦艇を一周するリング状レールを展開させ、そのレールにウルドやベルダンディといったＢＩを二機から六機程度を接続して、通常時は周辺警戒に、戦闘時には迎撃に使用するのだ。

要するに、艦艇から離れた場所にレールを設置して、そこにＢＩをグルグルと回らせることで艦周辺から死角を無くし、また、ＭＳや対艦ミサイル等の接近を阻止、或いは、阻止できずに懐に潜り込まれたり、推進部後方に回り込まれた際の迎撃手段にするって奴だな。

ちなみに、このレールは折り畳んで収容できるし、ＢＩも両舷側推進部に装着できるので、宇宙港にゲートにつっかえて入港できな

いなんて冗談は生まれないことも付け加えておく。

なんて具合に、つらつらとトツカの事を考えていると、ＣＩＷＳが取り付けられているトツカの近くに作業員達に混じって見知った顔……モルゲンレーテのツナギを着たバジルールさんの姿を見つけた。

……何というか、殆ど男しか居ない職場環境の所為なのか、砂漠の中のオアシスめいて、凄く目立つわぁ。

周りで作業している男連中の動きも、非常に機敏で、明らかにバジルールさんの目を意識しているようだしな。

でも、まぁ、今の所は知らん振りをして……。

「……ところで、あの人は？」

「えっ？　……ああ、バジルールさんですね」

「バジルールさん？」

「ええ、ナタル・バジルールさん。元は地球連合軍……大西洋連邦軍で宇宙艦の艦長をしていた方でしてね、先の防衛戦があった後、うちも資金援助して協力している避難民や移民向けの自立支援プログラムに混乱や不具合が出ていないかと視察したスズキ支社長が、偶然見つけ出して、是非にと頼み込んで参加してもらったそうです」

「へぇ、そうなんですか。……でも、そんな人、どうやって見つけたんです？」

「なんでも、自立支援プログラムに参加している人達にプログラムを受けた感想や意見、本国の状況やアメノミハシラについてとか、色々と聞いていたそうなんですけどね、その中に、バジルールさんが乗っていた艦に助けてもらった人がいたそうでして、そこから存

在を知ったみたいです」
「ほうほう」
「更にその人から、先の戦闘で自分が怪我をした上、子どもが迷子になって困っていた所を助けてもらったとも聞いた支社長は、バジルールさんの行動に非常に感心したそうでして、そこからバジルールさんに興味を持ったらしいです」
おおっ、必然が偶然を、偶然が必然を呼ぶ形を利用している！
極々自然に近づくあたり、やるますなぁ、スズキさんっ！
「なるほど、それが縁で、モルゲンレーテに？」
「そうなんです。バジルールさんは元軍人にありがちな、上から目線や頑迷さは……、まぁ、少しはありますが、それ以上にハキハキとした性格をされてますから、皆、好意的にお付き合いをさせてもらってますよ」
「そうなんですかぁ。……ここでの主な仕事は？」
「主に運用側からの意見を出してもらったり、今みたいに現場の監督をしてもらってます」
見れば確かに、バジルールさんが監督している場所は、男連中の張り切り具合を差し引いたとしても、他よりも遥かに作業ペースが早いというか、効率的に動き回っているのが良くわかる。
「本当に、バジルールさんに参加してもらって良かったですよ。私達、設計側も実戦経験者の生の意見を聞けて大変参考になりましたし、今、宇宙軍からの依頼を受けて、設計中のＭＳ母艦の方にも、オブザーバーとして参加してもらってます」
「確かに、仕事もできるみたいですね」
「ええ、安心して任せられます」

「加えて、スタイルの良い美人ですから、今、見ていてもわかりましたけど、男は皆、バジルールさんの気を引こうと頑張ってますもんねぇ」
「……ええ、私も妻がいるんですけど、たまにバジルールさんが魅せる笑顔には、ちょっと惹かれてしまいますよ、って、ラインブルグさん、今のは内密でお願いします」
「はは、もちろんですよ。同じ男として、その気持ちはわかりますから」

うん、バジルールさん、職場に馴染んでるみたいだし、よかった。

「んんっ、だから、ラインブルグさん、今度はバジルールさんも運用者側として監視してくれますし、ＭＳ母艦に関しては、トツカでしたような失敗は……、絶対に暴走なんてしませんから、安心してください」
「あはは、それはスズキさんに言ってあげてください」
「あ、あ～、実は昨日、支社長には発破を掛けられて、釘を打たれたばかりなんですよ」

スズキさんも内と外とは使う顔が違うって奴だな。

「なら、俺からは、次のＭＳ母艦も楽しみにしていますとだけ、言っておきますね」
「……ありがとうございます。今後とも、是非、ご協力をお願いします」
「ええ、こちらこそ、よろしくお願いします」

また新しい艦の設計に取り掛かるというサトウ氏と固い握手を交わした後、俺もＭＳの開発計画が認められ、予算が下りたら、負けずに頑張ろうと、そう思った。

……もしも、ＭＳ開発計画が承認されなかった場合は、第五開発部の面々と一緒に、一週間程は不貞寝、もとい、有給を取ってリフレッシュする予定だ。

23　動き出す時　―宇宙航路維持機構　3

C．E．72年8月20日。

オーブ連合首長国国防宇宙軍は外郭団体【宇宙航路維持機構（Space－Lane　Keeping　Organization）】をアメノミハシラに設立した。

この宇宙航路維持機構、略してSKOは、宇宙海賊等の脅威から宇宙航路を行き来する商船を護衛することで、アメノミハシラを基点や中継点とする通商ルートを安定化させ、アメノミハシラひいては地球圏の物流を維持することを目的とした通商護衛専門の準軍事組織と位置づけられており、国防宇宙軍からSKO全体の三分の一の人員、特に実戦部隊員と使用する艦艇戦力が供出されることが既に決まっている。

残り人員の三分の二は民間からの新たに採用されることになっているのだが、殆どが根拠地となるアメノミハシラでの関係事務や所属艦艇への補給、整備を行う等の後方支援業務に偏っており、実際に護衛艦に乗り込んで勤務するのは極一部に止まる予定だそうだ。

SKOを維持運営する為の資金は、国防宇宙軍からの補助金とSKO自体の稼ぎで大部分を充当する予定だそうだが、直接的に経営に関係する商船や保険会社の同業者組合、資材調達等で間接的に影響するアメノミハシラ管理機構やモルゲンレーテ、ラインブルグ・グループ、ミハシラ銀行、アメノミハシラ内部の商工会等からも一定額を供出する事で合意しており、宇宙軍の負担は護衛専属部隊を丸抱えするよりも遥かにマシになっているそうだ。

で、ＳＫＯが担う肝心の業務内容だが、一定期間毎にＳＫＯの護衛隊が商船を募集して護送船団を形成し、航行中に何事もなければ、目的地まで同行して護衛、急なトラブルに対処する等、安全を保障することが通常時の仕事になる。

また、非常時、例えば、海賊の襲撃のあった場合だが、海賊の攻撃から商船を守りながら脅威を排除するか、商船が逃げる時間やオーブ宇宙軍やその宙域を管轄している他国軍が来るまで時間を稼ぐ等、商船の盾になる事が役目になる。

これらの業務をもって、ＳＫＯは料金を……、現実的に運営するには資金が必要な為、護送船団に参加する商船から一回毎に料金を取る事になるのだが、運営資金を供出している企業やアメノミハシラの商船組合に所属している商船は通常料金の七割引きという大幅な割引が受けられる上、仮に護送船団に参加した商船が沈められたり、損傷を負った場合は商船に対して一定限度額で補償がされる事も決められている。

また、商船が積み込んでいる中身に関しては基本的に保障の対象外になっているが、ここでも運営資金を供出している商工会等に所属している企業の積荷だった場合は、一定限度額で補償されることになっている。

要するに、昨今の海賊被害から身を守る為にちょっとした保障付きの安全を買いませんか、って奴だな。

そして、宇宙海賊が撲滅……こういうＧめいた存在が根絶できるのかは謎だが、とにかく、通商航路を脅かす存在が大きく減り、宇宙航路が安定して明確な脅威がなくなったと客観的に判断された場合、規模を縮小していき、最終的には戦力を宇宙軍に編入させて航路の安定維持業務を引き継いだ後、組織は解散することになるそうだ。

まぁ、ＳＫＯの規模が大きくなったら地球圏の状況はマイナスへ、世情は不安定と混乱に傾き、逆にＳＫＯの規模が小さくなったら地球圏の状況はプラスへ、世間は安定と秩序に傾いていると考えれば良いっていうか、世界の状況、人の不安度がわかる一種のバロメーターみたいな存在でもあるな。

とにかく、商船護衛を行う存在ができたことで、デブリ帯で活発に活動している宇宙海賊への牽制になってくれたらいいんだが……、まだ、組織自体ができたばかりで肝心の護衛隊も編成中ということもあるから、効果が出始めるのはまだ先のことだろう。

◇　◇　◇

宇宙航路維持機構の設立発足式にラインブルグ・グループの代表である親父の随員として参加した後、その足で宇宙港のロビーに一人赴き、来客が乗る連絡船が来るのを待っている所だ。

実は三日程前にＭＳ開発計画【Ｍａｒｉｎｅ：Ｍｕｌｔｉｐｕｒｐｏｓｅ Ａｄａｐｔｉｖｅ Ｒｏｌｅ Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｏｒ ｔｏ Ｎｅａｒ Ｅｎｅｍｙ（多目的適応型迎撃戦闘機※適当意訳）】がグループ重役会で正式に承認されたので、本格的に計画を始動させるべく、試作機や主兵装を製造する為の装甲材や資材、部品等の発注や製造施設の確保、グループ各企業への計画参加人員の派遣要請、発注部品納期のずれに伴なう開発スケジュールの調整、宇宙軍の助力を得る為にもテストパイロットや技師を派遣してもらえるように正式に依頼したりと色々と忙しかった為、少々、眠たかったりする。

なにしろ、今回のＭＳ開発計画で俺が提示したＭＡＲＡＳＡＩ計画……、軍需参入計画が終了することになるってことで、開発計画責任者を務めるようにって、親父やおっさん連中から直々に申し伝えられたから、いつも以上に手が抜けないのだ。

そんな訳で、俺やレナやマユラ、更には第五開発部の面々が始動の前準備に奮起して動き回っているのだが、ラインブルグ・グループ自体も、ＳＫＯでも使用するとの事でハガネ級の追加発注が入った宇宙造船を始め、忙しい日々が続いているらしい。

もっとも、比較的に無聊な日々を送っているのが一社だけあって、そこのおっさん、もとい、社長から、なーなー、あー坊、うち、これといって大きな仕事がなくて暇だから何か考えてくれよぅ、だなんて言われたので、この先も一定の需要が見込めそうな、スペースコロニーを丸々作れるようなものでも開発したらどう、一社で無理ならモルゲンレーテや他の建設会社、技研なんかも巻き込んでさ、なんてことを伝えておいた。

そんな俺の意見を聞いた瞬間、おっさん……パーシィの親父は何かを閃いたみたいで、こちらが驚く程に目が輝きだし、物凄くやる気になっていたのが、若干、不安なのだが……、俺以上に経験を重ねているんだから、うん、心配なんておこがましいし、うん、大丈夫だろう。

んんっ、とはいえ、忙しいのはうちのグループだけではなく、アメノミハシラ自体も人や物の行き来が活発化しているのが、俺が今いる宇宙港の待合ロビーからでもよくわかる。

なんとなれば、以前、俺達がアメノミハシラにやってきた当初と比べて、ロビーには比較にならない程の人がいることに加えて、宇宙船と宇宙港との連結区画にも多くの商船や貨物船が停泊しているのが見えるからだ。

でも、この状況も故無き事ではない。

そもそも、アメノミハシラ自体が静止軌道という要衝にあるから地球との往還連絡は計算しやすいし、Ｌ１程ではないが、タイミング良く動けば各ラグランジュポイントへも移動しやすい為、一種のハブ宇宙港と言っても良い存在なのだ。

そのことに加えて、例のアルテミス要塞から侵攻を余裕を持って退けた事が市民や旅行者、商船乗りには大きく影響しているらしく、ここにいれば、或いは、ここに逃げ込めば、宇宙海賊から絶対に守られるだなんて信頼が、特に商船乗りには信仰に近い程の確信が広がっているなんて理由もある。

だから、アメノミハシラが地球圏内を行き来する商船にとっての憩いの場になり、中継地になることは極自然なことだと言えよう。

ちなみに、以前、この役目を担っていたのは先の戦争で崩壊したＬ１の世界樹コロニーだったりする、っと、どうやら、来客が乗った連絡船が到着したようだが……、何だか船の様子が？

じー、と展望窓から外の様子……連結区画手前で一旦停船した連絡船を見てみると、どうやら何者かに……、恐らくは宇宙海賊からの攻撃を受けたようで、船体底部にある貨物区画に被弾痕らしきものが見受けられた。

早くも連絡船の周囲には、二ヶ月前にデビューした応急補修材にもなるトリモチを装備した応急修理型ＢＯｕＲＵが三機、四機と集ってきて、被弾痕を調べたり、スパークしている場所をトリモチで絶縁したり、他に損傷箇所がないか、特に推進関連での亀裂がないかとチェックしているようだ。

海賊に襲われたのは不幸だが、推進剤が詰まった推進部や旅客区画ではなく、貨物区画だけの被弾で済んだ上に、逃げ切れたんだから良かったというべきだろうな。

……けど、あいつら、あの船に乗っているはずだけど、大丈夫なのか？

そんな感想を持って見ていたら、俄かに応急修理型ＢＯｕＲＵ群が離れて、連絡船は直近の接舷ゲートに近づき始めた。ロビーにいる人々が見守る中、ほんの微かなバーニア噴射で船の位置を調整しながら、ゆるりゆるりと接近してきたかと思うと、こちらへの衝撃もなく綺麗に接舷して魅せた。

うむむ、海賊に襲われた後だってのに、肝っ玉が据わってるとしか言いようがないわな。

実際、俺の近くにいた商船乗りと思しき連中からも感嘆の溜息が上がっている位だ。

「おい、見たかよ今の」
「もちろんだ、応急修理型のＢＯｕＲＵさんだな」
「ちくしょう、あのトリモチでＢＯｕＲＵさんに引っ付きたい」

……俺の感性が変なのか、連中の感性が変なのか、いったいどちらなんだろう？

『コペルニクス・スペース・トランスポーター１５９便の接舷が完了しました。航路上でのアクシデントにより十分遅れでの到着です。到着ゲートは１１番になります』

って、ええっ、案内、それだけかよっ！？

……。

でも、よくよく考えたら、海賊に襲われたー、被害にあいましたー、なんて知らせても、乗客の不安を煽るだけだろうし……、宇宙軍の方にだって連絡が行っているはずだから、航路警戒を行っているのは間違いない。そもそも、飛行機と違って折り返しするにしても直の出発じゃなくて、明日か修理が終わってからになるだろうから、今ので、普通、なんだろうか？

むぅ、よくわからんが……って、周りを見たら、やっぱり、皆が皆、不安そうにしているから、周知の事実として、あえて詳細な情報は伝えてないのかもしれないな。

……しかし、人の心に影を落とすとなると、早い所、海賊の討伐はって。

「いよぅっ！　久しぶりだなっ！　ラインブルグっ！　どうしたどうした、怖い顔をしてたら、可愛いねーちゃん達がよって来ねーぞぅ！」

うへぇ、暗い雰囲気が一気に吹き飛んだぞ。

「ああ、久しぶりだな、ロメロ。お前さんは相変わらず好調のようだな」

「当たり前だっての、ようやく戦争が終わって、大きい顔して可愛い女の子の尻を追いかけられるんだ。お前、これ程、幸せな事はないだろう？」

「確かに、その程、健全で幸せなことはないよなぁ」
「うんうん、さすが、三人も女を囲う色男はわかってるね。どこぞのムッツリとは大違いだ」
「……誰が、ムッツリだ、誰が」
「お前だっての、このムッツリめ」

ザフト時代の元同僚であるヴィットリオ・ロメロの言葉に、同じく元同僚で同期でもあるレイ・ユウキが非常に不本意そうな顔をしながら、こちらに近づいてくる。そんな二人は共にビジネススーツ姿で中々の男振りを魅せており、ロビー内にいた女性陣もちらちらと二人を窺っているようだ。

「よう、ムッツリ大将、久しぶり」
「ああ、久しぶりだな、ヘイアンヒカルゲンジ」

ぐぁっ、見事な切り返しっ！

って、いうか、どこまで広がってんだよ、その厭味は……。

「……ユウキ、お前、口が悪くなってないか？」
「何、四六時中、ロメロと顔を付き合わせて、仕事をしていたからな」
「ああ、何か、もの凄く納得がって、……ロメロは？」
「……あそこだ」

……はぁ、見れば、ロメロの奴、歯を輝かせながら、宇宙連絡船の女性客室乗務員を口説いてるよ。

「奴は放って置くとして、海賊に襲われたんだろ？　災難だったな」
「いや、今日程度の襲撃くらいなら、死を覚悟する程ではなかった

さ」
「はは、流石は同期主席殿だ。まぁ、細かい話はうちの会社で、落ち着いてしよう」

ロメロとユウキ、ザフトに所属しているはずの二人が、何故に、わざわざ、アメノミハシラまで出向いてきたかというと、単純な話で商談だ。

いや、商談なら、こっちから出向くのが筋だと思って、連絡があった時にそう言ったのだが、何故か、向こうから出向くと言って聞かず、その頑なさに、俺もユウキが職場で受けるストレスから解放されたいのだろうとも考え至って、今日のようなことになってしまったのだ。

そんな訳で二人をうちの会社に案内することに……。

「おい、ロメロ、住所と連絡先だけ聞いて、本格的に口説くのは仕事が終わってからにしろ」
「おう、わかった。んじゃ、時間が押しているらしいんで、二人の連絡先を……」

……ユウキ、相変わらず、苦労しているんだなぁ。

苦労人気質だけはまったく変わらないユウキの姿には涙するしかなかった。

◇　◇　◇

ロメロを女性客室乗務員から引き離す為に若干の時間が掛かって

しまったが、とにかく、宇宙港から本社がある第二居住コロニーに案内することにした。その道中の話題として、ユウキやロメロに昨今のプラントについて尋ねてみたのだが、どうも、プラント内の空気が荒んでいるようだ。

「そうか、地球から上がってきた移民と元から居住していた市民との対立が酷いか」

「ああ、両者の間で起きた些細なトラブルから大きな騒動になるケースが頻繁に起きている」

「まー、でも、これに関しては、移民の感情を逆撫でするプラント市民の無神経さが悪いんだわ」

確かにロメロが言った通り、プラントの蛮行が元で住処を追われてきた移民から見れば、のうのうと生活している市民には我慢ならんというか反感を持っているだろうから、軋轢も生じやすいだろうなぁ。

「ユウキ、対策はしていないのか？」

「最近になって目処が立ったところだ」

「……そうか。それにしても、些細なトラブルが大きな騒動になるって、そこまで世情が悪いのか？」

「ああ、先の講和への不満……、優良種のコーディネイターが何故、劣等種のナチュラルに妥協しなければならないのか、と主張する市民が多数派を占めているからな。それに加えて、その市民感情を煽るマスコミが……、ザフト内の対ナチュラル強硬派と繋がっているマスコミがコーディネイター選民思想や優越論を盛り上がるように動いている」

「でよ、そいつらの所為で……、市民の皆様がナチュラルとの講和はコーディネイターの？しょうもない？プライドを傷つけたって、考え始めた所に、戦時借款の返済に充てる為の大規模な増税が始ま

ったからな。精神的、経済的に鬱屈した感情を吐き出す為の捌け口に、自分達よりも弱い移民を貶めてるんだよ。普段、同胞同胞って言ってる割に地球上がりというだけで、移民をナチュラルに尻尾を振っていた裏切り者扱いする輩が多いんだからな、これが人類の新種を謳う連中の正体なのかって、情けなくなるぜ、まったくよ」

ナチュラルだろうとコーディネイターだろうと関係なく女を口説きに行く際に、常々、愛はナチュラルもコーディネイターも関係なく生まれるものだと、堂々と主張しているロメロの容赦のない言葉に思わず苦笑してしまう。

その苦笑ついでに、ユウキに苦言を呈しておく。

「前も言ったが、情報統制の弊害だぞ」

「……私が懇意にしている記者からも厳しく指摘されている」

「懇意って……、もしかして、リリーさんか？」

「誰かさん達の紹介で、強制的に、知り合わされたお陰で、時々、取材に来る」

「んな事言ってる割には、あの嬢ちゃんが来る日には身嗜みをすっごく気にしてるんだからよ。こいつって、ムッツリだと思うだろう？」

「ああ、ムッツリだな」

「おまえら……」

おっと、ユウキが本格的に怒り出す前にっと。

「でもよ、最高評議会だって、手を打っていない訳じゃないんだろう？」

「さっきも言ったが、目処は立った。今回の商談はその事を受けての話でもある」

「……なら、後は会社に着いてから話をするか」
「ああ、そうしてくれ。……しかし、ここは賑やかだな」
ユウキがそう応えた所で、ロメロの奴が……、また、いない。
「……大変だな、ユウキ」
「……うんざりするほどにな」
見れば、ロメロは中央回廊を進んでいたモルゲンレーテの女性社員……、偶然にもバジルールさんだった、に声を掛けている所だった。
……ロメロの嵐の如き褒め言葉を受けて、大いに照れていたバジルールさんの初々しい反応に、ユウキと共に萌えてしまったのは、レナ達三人には絶対に内緒な話である。

24　動き出す時　―宇宙航路維持機構　4

宇宙港から本社までユウキとロメロを案内しながら来たのだが、道中において、ロメロの奴がふらふらと女の尻を追いかける為に、度々脱線する破目になってしまった。具体的な内容を言えば、ユウキと二人掛かりでロメロとターゲットとなった女性を引き離すこと三回、ロメロを回収しようとしたユウキが逆ナンパされること二回、ロメロの言葉にその気になった女が街中に消えるのを阻止するのが一回ってな感じだ。

……ふ、ふふっ、どうせ俺はメインを引き立てて彩る為の？つま？ですよー、俺を好いてくれるミーアやレナ、それにマユラが蓼食いなだけなんですよねー、じゃなくてだな、んんっ、とにかく、ようやくの事で本社に辿り着く事が出来た。

「なんか、どっと疲れたな」
「……だろう？」
「んん～、お前ら、いくら俺よりも年上だからって、もう疲れているだなんて、だらしない奴らだな」
「「お前の所為だ、お前の」」

二人して思わず突っ込んでいる尻から、また、ロメロの奴が通りがかったうちの女性社員に……、しかも、今度はベティに声を掛けていたりする。

ロメロの女に向かう興味は病気の一歩手前ではないかと思わないでもないが、現実として、ロメロが道中で声をかけた女性方……見た目で可憐と言うよりは麗しい女性が多かった事を思い返すと、ま

ぁ、美人に対する嗅覚だけは評価してもいいかなって思う。

「あ～、ベティ、そいつ、一応は客だから、悪いがそのまま第二特別応接室に誘導してくれないか？」

「アインが言ってたお客様なのね、わかったわ。では、お客様、こちらに着いて来て下さいね」

「ほ～い、いやぁ、本当にお姉ちゃん、綺麗だねぇ」

「ふふ、お客様はお世辞が上手ですのね」

「いやいや、ほんとほんと、ここの男連中が放っておくなんて信じられないぜ」

……フラフラとベティに釣られていくロメロを見て、やはり、ザフトで白服になる為の条件は常人ならざる変人でなければならないのだと認識せざるを得ない。ただし、俺は除く。

そんな事を考えながら前を行く二人の後を追っていると、隣のユウキがボソリと呟く。

「正直、アレが同僚だという事に疲れることがある」

「いや、でも、女に向う愛が多い事以外は、かなりマトモな奴だと思うぞ」

「確かに、それは認めるが……」

「それにあのザフト訓練校での狂った、もとい、偏った教育を受けても、ナチュラルに変な偏見を持ってないんだから、大したもんだよ」

「……辛口だな、ラインブルグ」

「ああ、訓練所で受けた教育は当時から異常に思っていたからな、辛口にもなるさ」

本当に自身の価値観が崩れそうで、ラウがいなかったら発狂する

所だった。

「って、お前もあの教育がおかしかった事は否定はしないんだな」
「そうだな、当時の教育……特に一期生の教育が行き過ぎていた事は否定できない」
「はは、今になっては疑問に思うって奴か？」
「……ああ、思い返すと、あの時の私はザフトが示す価値観を絶対と信じていた。もしも、お前がザラ議長と殴り合い込みの討論をした場に居合わせなければ、あの狂熱に浮かされたままだったろうな」
「なら、その狂熱のお陰で、いらん苦労を背負わされていた俺の身にもなれ。本当に、どんだけストレスを感じていたか」
「わかってる。私もあの茶会以後から戦中戦後を通じて、お前の言っている苦労をこの身で体感してきたつもりだ」

……あー、そういや、ユウキも中央で大変な軋轢の中にいたんだったな。

「悪い、過ぎた事だったな。……でも、頼むから悪いところは直してくれ」
「わかってはいるが、な……」

……上手くはいかないって所か。

後に続くであろう言葉を察した所で、第二特別応接室に到着だ。

◇　◇　◇

二人を応接ソファに座らせた後、レナかマユラに連絡してお茶等

を頼むか、自身で淹れるかしようとしたら、一緒に入室していたベティが買って出てやってくれることになった。買って出てくれただけあって、ベティは手早く部屋備え付けの応接セットでお茶を準備すると、手馴れた手つきで俺達が座る席にお茶を置いて行く。

「ベティ、親父の方はいいのか？」
「うん、大丈夫よ。今、会長は大切なお客様と内密のお話をしている最中だし、フレイも控え室に付いてるからね」
「ふーん、そうか」

納得半分、興味半分で頷きながらも、ユウキとロメロに視線を戻すと興味を持って、俺とベティを交互に見やっていた。どうやらベティとの関係が気になる様子というか、特にロメロの食い付きが良いみたいだし、一応紹介しておくか。

「ベティは俺の幼馴染で、親父……、グループ会長の秘書をしてるんだよ」
「初めまして、ベティーナ・ラ・トゥールです」
「ああ、どうも、レイ・ユウキです。ラインブルグとはザフト時代の同りょ……」
「んな細けぇこたぁいいんだよ、俺の名前はヴィットリオ・ロメロだ、よろしくな、ベティーナさん」
「ふふ、ご丁寧にどうも、私のことはベティで構いませんよ」

おお、ロメロの目がハートマークにっ、てのは冗談だが、軽くあしらってみせるベティにますます興味を持ったのは間違いなさそうだ。

「んんっ、ラインブルグ、そろそろ、話をしたいんだが、いいか？」
「ああ、わかった。ベティ、ありがとう」

「ええ、レナちゃん達にも連絡しておくわ」
「悪いけど、頼むよ」

ベティが頷いて見せると、ユウキ達に営業用の笑顔を見せると部屋から去って行った。

「いいねぇいいねぇ、俺もプラントから、ここに移住しようかねぇ」
「ロメロ、お前のそういう冗談は冗談に聞こえないから止めてくれ。それで、ラインブルグ」
「ん？」
「早速だが、今日、ここまで来た用件を単刀直入に言うとだな」
「ああ」

……ゴクリ。

「ＢＯｕＲＵが大量に欲しい」
「……わざわざ、ここまで来て、注文する必要はなかったんじゃないか？」

いや、それ位なら、通信で注文してくれたら、お届けしますよ？

「何を言うか！　ＢＯｕＲＵはここでしか生産されていないんだぞっ！　生産工場でラインに並んでいるＢＯｕＲＵが見てみたいから、来たに決まってるだろう！」
「……なあ、ユウキ、……お前さ、……疲れてるんだろ？　今日は難しい話はやめて、明日、ゆっくり話をしようぜ、な？」
「そうなんだよ、ラインブルグ。ちょっと、こいつさ、例の軍制改革でストレスを溜め込み過ぎちまってよぅ。で、今回は、一応、それの決着もついたし、少しでもストレスを発散させる為にも連れてきたんだわ。お前に会わせたら、少しはマシになるかと思ったけど、

上手い具合に壊れてくれて良かったぜ」

ああ、今のロメロの言葉で、ここに来た理由が漸く納得いった。

「つまり、今日ここに来たのは、商談を名目にしたユウキの強制休暇か？」

「いや、真面目な話もあるさ。ユウキはこんな状態だから、話は俺がするから、まぁ、聞いてくれや」

ブツブツと、身体全体に闇を背負ったユウキがＢＯｕＲＵの素晴らしさを、どこに萌えるのかを訴え続けているのは見聞きしなかったことにして、真面目モードになったロメロの話に耳を傾ける。

その話を要約するとこういうことだった。

先の戦争で停戦が成った後……、俺がザフトを除隊し、アメノミハシラへと移住した後も、ユウキはプラントの防衛体制の見直しや戦力の再編成に勤しむ傍ら、ＦＡＩＴＨの権限を使って、プラントというかザフトの軍制改革を……、具体的に言えば、政軍分離というか、ザフトの党軍からプラントの国軍への脱皮を推し進めていたそうだ。

だが、当初から想定していた通り、ザフト内部に巣食う旧来派閥は既得権益と権力維持の源泉になる武力放棄を容認する事はなく、ユニウスの講和が成り、暫定最高評議会が解散する段になっても、改革は一定の前進……、新たな制服色として、副長や各科班長、ＭＳ小隊長格の藍色やＭＳパイロットの最高勲章としてラウ・ル・クルーゼ勲章が生まれた他は、遅々として進まないまま、膠着した状況が続いていたらしい。

その状況に変化が生まれたのは、四月になって、ユニウスの講和を成し遂げた暫定最高評議会が解散し、新たな最高評議会議員が選出された事で指導層が刷新された事が切欠だ。というのも、最高評議会の議員となって新議長に選出された、ラウの葬儀で話をしたギルバート・デュランダル氏がプラント国軍の創設と銘打って、重要議題との一つとして大きく取り上げたからだ。

このプラント国軍創設という議題に対し、最高評議会に議席を持つ旧ザラ派、旧クライン派、中道派といった各派閥は、その主義信条に関係なく、新しく常備軍としての国軍を設立し、プロの軍人を養育する方が良いとする立場と今の義勇兵組織である党軍で充分であり、不都合はないとする立場に割れて、大きな論争が巻き起こったらしい。

こうして国軍創設の有無について、最高評議会での喧々諤々の大論争や裏方のザフトでの様々な駆け引きが約四ヶ月に渡って続いた結果、遂に妥協点が見出されて、ザフトから分離させる形で新たにプラント国防軍（ＰＮＤＦ：Ｐ．Ｌ．Ａ．Ｎ．Ｔ．　Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｄｅｆｅｎｓｅ　Ｆｏｒｃｅｓ）が創設されることになったそうだ。

何でも、この国防軍に属する者はザフトに所属してはならない事、国防軍は最高評議会議長と国防委員長の指揮監督下に置かれ、他の最高評議会議員や国防委員、ＦＡＩＴＨやザフト党員、義勇兵の干渉を一切受けない事、国防軍の管轄範囲はＬ１宙域のみに限定する事、という具合で話が纏まったらしい。

……ザフト旧来派から見て、自分達に不利益を与える目障りで煩い連中はザフトを首にして、プラントの中心であるＬ５から追い出してＬ１に放り込んでしまえ的な考えが透けて見えなくもないが、

創設される国防軍にしても、Ｌ１だけの管轄とはいえ組織が成立した訳だし、ザフトからの干渉を最小限に押し止めるようにした事を考えると、落し所といえば落し所だと言えるだろう。

そんな訳で、軍事組織ザフト内で新規創設される国防軍への志願者を募った所……、地球帰りの歴戦達や第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦を裏で支えた総司令部の面々、元よりＬ１に駐留する防衛隊や分艦隊の半数に加え、ロメロ……この段階で参加した口らしい……の独立戦隊、凄惨な負け戦を経験しているボアズ分艦隊が丸ごと、最終的に定数の四分の一まで磨り減ったヤキン・ドゥーエ防衛隊の一部、ザフトの古参組であるリューベック司令、独立戦隊のまとめ役だったラブロフといった面々が参加を表明したそうで、大凡で一個艦隊強規模の戦力がザフトを離脱して、国防軍へと移籍したそうだ。

また、この国防軍の分離独立に伴なって、教育機関であるザフト士官学校からも国防軍士官学校設立の為に人員を放出することになり、ロメロが何気に連絡を取っていたりするフェスタからの情報では、フェスタ本人やスタンフォード、リーにフォルシウス艦長達も移籍するとの事だ。

そして、一連の軍制改革のそもそもの言いだしっぺであるユウキだが、こいつもＦＡＩＴＨを辞任すると同時にザフトからも離党、国防軍に移籍することを決意したらしい。

……正直、軍事組織としてのザフトが思いっきり空洞化したような気がするのは、俺の気の所為だろうか？

まぁ、俺の感慨はこれ位にしておいてだな……、今月に入って、正式にプラント国防軍が設立され、軍司令官にロベルト・リューベック、Ｌ１宙域防衛総隊長にイヴァン・ラヴロフが就任して、Ｌ１を管轄下に置いたとのこと。

で、ここからが先程のＢＯｕＲＵが欲しいと言う理由になるのだが、この国防軍創設と言う新たな動きに、野に下っていた停戦と講和の立役者であるカナーバ女史が反応し、昨今のプラント内部で起きている悩ましい問題、地球からの移民と元よりの市民との対立を解消する為、Ｌ１に新しく……というよりも世界樹コロニーを再建して、移民を引き受ける計画をデュランダル議長に陳情し、Ｌ１の再開発局長と行政局長に任命される事になったらしい。

その結果、国防軍……というよりは、軍後方支援の総責任者になっていたユウキが再開発責任者であるカナーバ女史から？お願い？される形で、宇宙用建機としてミストラルよりもメジャーになりつつあるＢＯｕＲＵを調達する事になったそうだ。

「でもさ、それって、再開発の予算で買えば良い話じゃないか？」
「その予算にしても、例の借款返済の影響で潤沢とは到底言えないからな、カナーバ女史も少しでも抑えたいと言っていたよ」
「お、ユウキ、復活か？」
「ああ、見苦しいところを見せたな」
「いや、お前がそうなるのは、俺、見慣れてるし、気にしないさ。で、軍で調達して、行政に貸与するのか？」
「ああ、再開発局自体も調達を予定しているそうだが、建造資材や水、土壌といった他に調達を必要とするものが数多い。だから、こちらで負担し、半分は貸与して、コロニーの建設作業に、もう半分は周辺の掃宙活動に当てる予定だ。いい加減、Ｌ１のデブリを何としないと駄目だからな」

ついでに言えば、それらのデブリもリサイクルしてコロニー資材に充てる事が可能だもんなぁ。

「でも、そんなに多くのＢＯｕＲＵがあって、使い道はあるのか？」
「整備の方で使用できることは、ラインブルグ、お前の隊が実証しているだろう？」
「あ、なるほどな」
「それに、当面の間は、デブリ除去も軍の重要な仕事になるだろうからな、多くあっても困らないのだ」

……ふむ。

「数は？」
「少なく見積もって、最低でも五百だな」
「……大口の仕事だな。後で、宇宙工業のＢＯｕＲＵ関連の担当者を紹介するよ。もちろん、何らかのサービスを付けたり、値段を勉強するようにも言い含めてな」
「助かる。後……、できれば、生産工場も見てみたいのだが……」
「ああ、もちろん伝えておくよ」

とはいえ……、流石にこれだけで終わりだとは考えられないと、稀に外れる勘も囁いているし、少しカマを掛けてみようかな。

「で、他に用件は……、本命はないのか？」
「……ある」

……やっぱり。

「それはなんだ？」
「ここの責任者であるロンド・ミナ・サハク卿に連なる人物に引き合わせて欲しい」
「おまっ、そういうことはな、前もって、アメノミハシラにアポイントメント取れって……、もしかして、内密の用件なのか？」

「そうだな、内密といえば内密になるが……、どちらかと言えば、緊急の用件だな」

緊急という言葉もあるので、とりあえずは頷いて、ユウキに先を促してみる。

「プラント国防軍及びＬ１行政局は宇宙海賊への対策について、アメノミハシラと早急に協議がしたい」

「つまりは、海賊対策で協力体制を？」

「ああ、我々にとっても、航路が脅かされるのは死活問題だからな」

「確かにな」

……でも、協議ねぇ。

「そんな事、勝手に進めていいのか？」

「この件については、カバーナ女史とデュランダル議長の間でＬ１行政局に委任する事で話が付いている。……デュランダル議長は確かに有能だが、多くの問題を抱えているだけに簡単には動けないのだ」

「なら、正式要請は？」

「無論、行う。だが、さっきも言ったが、そもそもが危急の問題だけに、正式なアポイントメントを取っていては、その間にも被害が広がる可能性が高いだろう？」

「そうだな」

「だから、アメノミハシラで影響力を持つラインブルグ・グループの重役になったお前の力を借りた方が話が早いと思ったのだ」

「わかった、そういうことなら協力するよ。……ちょっと待っててくれ」

二人に断ってから席を立ち、応接室の控え室に顔を覗かせるが…

…、誰もいない。

あれ、レナ達は着てないのかと首を傾げつつ、さらに外の廊下へと顔を出すと、レナ達はいたのだが……。

「む、ラインブルグか？」
「あれ、サハク准将？」

どうやら、サハク准将のお見送りに参加していたようだって、そもそも、何故に准将がここにって、それも後でいいや。

「サハク准将、唐突で申し訳ないのですが、今からお時間を頂けますか？」
「ほう、まさか、ラインブルグから誘いを受けるとは……、我も中々に捨てたものではないな」

はぅあっ、サハク准将が悪戯染みた邪笑を浮かべて、意味ありげにレナ達に流し目をおくるから、レナとマユラの俺を見る目がキツイことキツイこと！

「あ、あはは、ちょいと真面目な話でしてね」
「……そうなのか？　では、しばし待て」

そう応えるとサハク准将は随員の一人に予定を確認しているようだ。

……えー、誰かさん達から向けられる視線が痛いですので早くしてください、なんて事を内心で祈っていると、准将が再びこちらに顔を向ける。

「ふむ、猶予はあるようだが、どのような用件だ？」
「いえ、実はですね。プラント時代の友人が客としてやって来てまして、うちとの商談とは別に、海賊対策について宇宙軍と話がしたいから、誰かと引き合わせてくれと」
「……よし、我が会おう」
おお、流石の即断即決だと言えるが……。
「いいんですか、間に人を介さなくても？」
「我がこの場にいて構わぬと言うのだ、気にする必要はない。お前もそのつもりで話したのだろう？」
……こういうのが、王者の貫禄って言うんだろうなぁ。
「まぁ、その方が効率的だろうなって、気持ちがあった事は認めます」
「ならば、構わぬことではないか。それに、お前が友と言うならば、それなりの者であろう？」
「ええ、それなりの奴等です。……それじゃ、サハク准将、随員の皆さんも、こちらにどうぞ」
俺が先導して、また、第二特別応接室に入って行き……、茶を飲んでいたユウキとロメロは、俺の背後に立つ人物を認めて、茶を噴いた。
「げほっげほっ」
「ちょ、ごほっ」
「ああ、もう、汚いなぁ、レナ、台拭きを」
「あ、はい、わかりました」

俄かに取り乱した二人が俺へと盛大に文句を言う等して、多少、場が混乱していまったが、サハク准将は咽る二人の醜態に気を悪くする事もなく、むしろ、面白そうに見ていた。その際、やはり、サプライズの反応はこうでなくてはな、だなんて、呟きも聞こえたのは気の所為だと思うことにした。

その後の真面目な話に関しては面倒なので割愛するが、Ｌ１とアメノミハシラ間の航路について、カナーバ再開発局長及びリューベック国防軍司令官とサハク准将との間で正式な協議が行われることが決定したから、海賊対策がより早く、より充実したものになるのは間違いないだろう。

また、その翌朝、例の如く、寝床に侵入してきたレナとマユラによって、俺の身体のあちらこちらに盛大な噛み痕が刻み込まれ、とばっちりを喰らった我が息子までも?絞首刑?にかけられたのは余談である。

25　混迷と再会　－Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍａｒｉｎｅ　1

九月に入り、ＭＳ製造に使用する各資材や部品が揃い始め、宇宙軍から招いた技師やテストパイロットを含めた、グループ横断のプロジェクトチームも結成し、本格的に実機……、試作機の製造に乗り出すことになった。

海兵計画のプロジェクトチームは、シゲさんが率いる機体や兵装関連の製造と整備補給設備の考案設計を行うハードウェア組と、パーシィが名義上率い、ミーアとナナが実質的に取り仕切る操縦及び機体制御システムといった基礎ＯＳ関連と操縦用インターフェースの作成を行うソフトウェア組の二つに大きく分けられ、全体的な開発スケジュールの調整や指揮、両者の擦り合せ、実機製造責任者を設計主任でもあるパーシィが行うことで同時並行で計画が進められている。

でもって、俺やレナ、マユラと軍から派遣されてきたテストパイロットの四人は、ただひたすらに、操縦システムの検査と操作感やコックピット内仕様に対する意見出し、機体制御に使うモーション取り等々に駆り出されている状態なのだが、テストパイロット以外の三人は他にも仕事があるので、ローテーションで回していたりする。

今もテストパイロットとマユラ、俺の三人で、マリーネで使用される事が確定しているＢＯｕＲＵ内殻を応用した試作緊急脱出装置兼操縦席を第五開発部の量子コンピュータを使ったシミュレーターに組み込み、ミーア達に指示されるままに様々に切り替わる状況の

下、機体の腕や足を動かしたり、気の向くままに機体を歩かせたり走らせたり、スラスターや姿勢制御バーニアを吹かせたりと色々操っている最中だ。

これらは機体動作の基礎データになるだけに、一つ一つの動作を丁寧に気を使ってやらないといけないのだが、こういう細々とした地味な作業はザフト時代、訓練校やＭＳ隊、宇宙艦隊や独立戦隊に所属していた時にも随時やってきたことだけに直に慣れてしまい、頭と身体が分離して動いている状態だったりする。

まぁ、要するに身体が無意識的、反射的に、最良や最適を探って、勝手に機体を動かしているという奴で、これまでの弛まない努力で地道に培ってきた経験と戦場での生死を賭けた戦闘体験、更には俺と？俺？が別個のモノであると認識していた幼児期の名残とが組み合わさって、見事に昇華した、分割思考めいた技能と言えなくもないと思う。

そんな訳で、基礎データ取りをしているミーアに指示されるまま、操縦をこなす傍ら、昨今の状況を整理してみる。

……。

先月、Ｌ１からやって来た珍客二人はＢＯｕＲＵの発注と海賊対策についてのＬ１の政及び軍の両トップとサハク准将との正式協議の下準備という予定をこなした後、片方はＢＯｕＲＵの生産工場を見学し、無重力環境で製造されている宇宙食品の代表的なお菓子で、研究員時代のベティが開発を担当したＢＯｕＲＵクッキーを大量に買い込んで、もう片方は非常に多くの麗しき女性方にお近づきになれたと艶やかなキスマークと真っ赤な紅葉を両頬に貼り付けて、両者共に満足して帰っていった。

こんな休暇半分の連中に関しては置いておいて、真面目な話、こ

のままプラントとの交渉が、最低でもＬ１の国防軍と航路維持に関して協力関係の構築が上手くいけば、アメノミハシラとＬ１間の通商航路……、多数の海賊が活発に活動しているデブリ帯が複数ある航路も、今の危険な状態からの脱却が期待できるはずだ。

もっとも、周りで起きていることは必ずしも良いことばかりと言うわけではない。

実は、アメノミハシラから南アメリカ合衆国へのＭ１アストレイの輸出が公のものになってしまったのだ。

……なんて表現するとシリアスめいた言い回しになるが、簡単な話、南アメリカ合衆国軍がＭ１アストレイの実機運用を開始したのを、大西洋連邦に察知されただけなんだけどな。

この動きに対して、国防関連を押えることで南アメリカ合衆国を兵糧攻めじゃなくて、言う事を聴かせる気満々だった大西洋連邦は、当然の如く、アメノミハシラの上役であるオーブ本国政府へと圧力を掛けたらしく、本国政府からＭ１アストレイの輸出停止を求める通信が相次いで入っているそうだ。

特に、先月、新代表になったカガリ・ユラ・アスハからはサハク准将へと経緯説明と即時輸出停止を求める通信が、サハク准将に取り次がれるまで、連日連夜、通信回線が使えなくなる程に？入っていた？とのこと。

……何故に、アスハ新代表からの通信が過去形なのかと言うと、ＭＳの輸出はオーブの理念云々に反するというアスハ新代表に対して、サハク准将が、今、全世界へと離散しかけているオーブ国民が置かれている状況と、何故、このような苦境に立たされることになったのかを半日近く、懇切丁寧に、感情的になることもなく、淡々

と講義した影響だそうだ。

人間が生きていくには食う必要があるし、食う為には糧を得るために働く必要がある。加えて、働く場所にしても安全な住処が確保されないと能力が発揮できないのは当然の理のはず。

そもそも、生命や財産が脅かされるような場所で、誰が安心して住んで生きていける？

理念云々をお題目に掲げても、実が伴なわなければ、ただの法螺吹きか、考えなしの阿呆だ。だいたい、ご立派な理念云々を掲げたいなら、困窮している国民を腹一杯にして、安心して生活できる環境を保障して、他国からも攻められない状態にしてからにしろ、このバげふんげふん、放蕩娘がっ、って具合に、サハク准将が散々に遣り込めたらしい。

で、その結果、半泣きになったアスハ新代表は首長府にお篭りになってしまったそうだ。

……歳若いから仕方がないのかもしれないが、おいおい、一国の代表がそれでいいのか、と思わなくもない。まぁ、実際に国政を動かしているのは、例のウナト・エマ・セイラン卿らしいから、特に影響がないのが救いだな。

とにかく、アスハ新代表については、サハク准将の忠言を良い切欠にして、一国の代表に足る人物になるように成長して欲しいもんだ。

一方、ＭＳを実際に輸出しているモルゲンレーテだが、モルゲンレーテ本社はアメノミハシラ支社に対して、特にこれといった圧力

を掛けてきたり、説明を求めたりはしていないようだ。なんとなれば、モルゲンレーテ本社は本社施設や工場群を自爆によって失った影響で支社の資金支援がなければ、工場の再建や操業もままならない状態だからだ。

世の中、金が全てではないが、金で何とかできる部分も多いってことの証明だよねぇ。

次に視点を変えて世界に目を向けてみると、地球ではユーラシア連邦と西ユーラシア連合、中東イスラム同盟が最初の一ヶ月だけで各国が百機以上のＭＳをを失う程の激戦を繰り広げている。ここまで短期間に戦闘が頻発しているとなると、これは手前勝手な想像だが、大西洋連邦が裏で暗躍しているのは間違いないだろう。

また、ユーラシア以外の別の場所、アフリカ大陸でも新たな戦端が開かれている。南アフリカ……アフリカ南部及び東部を領域にする南アフリカ統一機構による、北アフリカ……アフリカ北部及び西部を領域とするアフリカ共同体への電撃的な侵攻だ。

この動きは大西洋連邦の支援を受けた南アフリカ統一機構が悲願として掲げているアフリカ統一を果たす為、戦後復興が思うように進まないアフリカ共同体を併合しようと考えてのことだろうが……、短期的には達成できるかもしれないが、長期的に見たら、間違いなく失敗するだろうなぁ。

つか、西ユーラシア連合系のマスメディアが世界に流している情報だと、開戦初期の電撃戦で共同体の首都であるダカールを攻めきれず、陥落させることができなかったらしいし、別のメディア……、確か、大西洋連邦系だったかな、そこが伝えている情報だと、中央アフリカの戦線が膠着化して、ＭＳ同士の戦闘が戦場の添物になる

程に泥沼化していたり、ジブラルタルからビクトリアに逃げる途中で落伍した、それなりの数のザフト敗残兵がアフリカ共同体軍に、どういう理由でなのかまではわからないが、参加しているって話だし、短期的な予想ですら怪しい状況だ。

そもそも、南アフリカ統一機構を支援している大西洋連邦が子分である南アフリカ統一機構の国力が倍増するような事を容認するとは思えない。

いや、武力による統一ではなく、経済的な支援を表の餌にして、武力侵攻を裏でちらつかせながら統一へと事を運ぶなら、案外、上手くいったかもしれないんだけど……、時に、こういう短絡的な事をしてしまうのが、きっと人類という種なんだろうなぁ。

……まぁ、これも部外者だからこそ、言える言葉なんだろう。

っと、ミーアの顔が補助モニターに映ったから、どうやら、今日のお仕事は終わりかな？

「兄さん、お疲れ様～、今日のデータ取りはこれで終わるから、上がってもいいよ」
「おぅ、了解」
「後ね、えーと……」
「どうした？」
「……コードウェル三尉がね」
「あ～、また、マユラに噛み付いているのか？　マユラさん、あんな男の何処がいいんですかっ！　そんなふしだらな人とは思ってませんでしたっ、ってな感じで」
「……うん。この所、毎日だから、今日はマユラさんも爆発しそう」
「やれやれ、なら、俺が憎まれ役を引き受けるわ」

ミーアが何か言いたげな顔を見せたが、微笑んで見せて発言を封じ、コックピットのハッチをオープンさせる。

「いい加減、目を覚ましてください！　マユラさん！」
「……目なんて、とっくに覚めてるわよ。それでも、私はアインさんが好きなの、話はお終い」
「あの男のっ！　あの、三人と同時に付き合うような不誠実な男の何処がいいんですかっ！」

あ～、やばいな、マユラから怒気が感じられるわぁ。

「あっ、あん「ほいほい、君の言う不誠実な男の登場だよ、ってか」
……アインさん」
「ッ！」

今にも射殺さんばかりに睨みつけてくる軍からの派遣パイロット、ユカリ・コードウェルだが、正直、俺が脅威に感じる程の威圧感はなく、精々、ザラ議長の二十分の一程度といった所だ。

そんな具合に俺を威嚇してくるユカリ・コードウェルの見目形は、その金髪をベリーショートと呼べる程に、マユラ以上に短くしているが、若干、タレ目がちな上、顔形も柔らかな線だから、女であることを十分に判別できるだろう。

しかしながら、身体つきに関しては、恐らくは軍の入隊制限ぎりぎりといった位というか、本当に用件を満たしているのかって思うほどに華奢で、特に絶壁と表現するしかない胸のため、一目見ただけでは思春期直前の少年にも見えるというか、二次性徴前の女の子って感じが強い。

俺から発せられるある種、邪な気配を感じ取ったのかはわからないが、そのコードウェル三尉が俺に食って掛かってきた。

「いい加減、マユラさんを解放しなさい！　このスケコマシ！」

「ん～、君には残念な事に、俺は、一度、手に入れた者を手放すようなお人好しじゃないんでねぇ」

なんてことを言いながら、マユラの傍まで跳んで、コードウェルにも良く見えるように、俺のやる事を察したらしく、首に両手を回してきたマユラを抱き寄せつつ、深いキスをしてみせる。

……視界の隅で、顔を真っ赤にしたコードウェルがこちらを凝視しているのが確認できた。

コードウェルが逃げ出す時間を作る為にも、タップリと時間を掛けて、熱が篭った口付けを交わしているのだが、一向に去る気配を見せない。なので、これ幸い、もとい、止むを得ず、マユラとの情熱に満ちた時間を続けていたのだが、そろそろ、マユラの身体から力が抜けてきたようなので、仕方なく、唇を離す。

その際、コードウェルから見えるように、唇同士がしっかりと唾液の糸を繋がっている演出も忘れない。

「ほらほら、お子様には刺激が強いだろうから、行った行った」

「なっ！　だ、誰がお子様ですかっ！」

「ん～？　そろそろ、小便して寝る時間じゃないのか？」

「ッ！　失礼しますっ！」

湯気が出るような顔色で、ユカリ・コードウェルはシミュレーターを飛び出して行った。

「やれやれ……、大丈夫か、マユラ？」
「ふぁぃ？」

おぅ、何とも、雄の本能を刺激する顔と声だこと……。

……。

折角だし、もう一回……。

「はい、兄さん、マユラさん、タオル持ってきたよ」

……ミーアさん、仕事が早すぎますぅ。

「はいはい、ありがとう」
「……ぁ、み、ミーアちゃん、ありがとう」

二人してミーアからタオルを受け取って、口周りや汗を拭き取りながら、マユラの様子を窺う。

「マユラ、大丈夫か？」
「うん。……今のが偶にあるなら、ユカリに文句を言われ続けるのも、刺激的で良いかも」
「むぅ、あんなに情熱的に……、マユラさんが羨ましいかも」

よ、余裕だな、二人とも……。

「んんっ、真面目な話、ミーア、コードウェル三尉は調子を落としてないか？」
「……ん～、確かに落としてる」

「それは計画に支障を来たしそうか？」
「今の所は許容範囲内で収まっているから大丈夫だけど、この調子が続くとそうなるかもしれない」

……うーん。

「俺がデータ取りから抜けてみるか？」
「駄目駄目、兄さんの機体制御技術は群を抜いているんだから、絶対に外せない」
「でも、ナチュラル用ＯＳでの操縦と実戦経験があるマユラを外すわけにはいかないしなぁ」
「あの……、アインさん、できれば、ユカリも外さないで欲しいの」
「わかってるよ。ここで外されるって事は任務の失敗と同義だろうし、経歴にも傷がつくだろうしな」

だからこそ、問題になるんだよなぁ。

消えて行ったシミュレータールームの扉を眺めながら、問題の人物について考える。

宇宙軍からテストパイロットとして派遣されてきたユカリ・コードウェル三尉だが、マユラの友人で例の戦闘でも同じ小隊で小隊長をしていたアサギ・コードウェルなる人物の妹だそうで、以前というか、オーブ本国でＭ１アストレイのテストパイロットをしていた時に紹介されていたそうだ。
そんな訳で、マユラとも面識があったらしく、ここに派遣されてきた当初は、両者共に大いに驚きつつも仲良くやっていたのだが、それも俺がマユラを含めて三人を囲っている事実が判明するまでのことで、その後は先程のように、マユラの目を覚まそうと色々との努力してくれているのだ。

「アインさん、先に言っておくけど、私は、絶対に、アインさんから離れないからね！」
「当然だろう、マユラは俺の女だ」
「ぁ、……うんっ！」

……だが、こっちも仕事である以上、私情から調子を崩されるのは困る。

「だが、マユラ、お前には悪いが、計画に大きな支障が出そうになったら、俺はコードウェル三尉を切る」
「……はい」
「だから、そうなる前に、ミーアやレナと一緒に、色々とパイロットしての心得やトレーニング方法を伝授したり、計画の進捗状況を伝えたりとかして、交流を深めて、俺達の仲を認めさせるのは難しいかもしれないが、不干渉状態にまで持っていって、これ以上、調子を落とさないようにして欲しい」
「……うん、わかったわ」
「……兄さんは参加しないの？」
「下手に俺が出て行ったら、また、意地を張るかもしれんから、不参加だ。……悪いな、マユラ、結局はお前任せでさ」
「いいの、アインさんだって、計画責任者だから、一つの事に集中している余裕はない事は知ってるから、私が何とかするわ」

……うん、マユラから頼りになる返事も聞けたし、ロッカールームに引き揚げるかって、ミーアさん、何故に、俺の背中に張り付いて？

「ぶー、マユラさんとの熱いキスを見せ付けておいて、頑張って働いている私へのご褒美はぁ？」

「ミーアには毎晩、お風呂場でしっかりと？ご褒美？してあげてるから、別にいいかなぁ、って、俺は思うんだが？」
「むぅ、今日はもう、仕事、ボイコットしようかなぁ」
……はいはい。
「そんな社会人にあるまじきことを言う奴は」
「言う奴は？」
「こうだっ！」
古来より伝わる、見た目にはまったく痕を残さない厭らしい拷問を喰らえぃ！
「っ！　あはははははははっ、に、兄さん！　ごめん！　やめて！　あはははは、うきゃはははははっ！」
お、おおっ、ぷるんぷるんとなっ！
「ま、まゆ、まうはははっ、まゆらさん！　と、うはきゃぁううはははははっ、とめってぇ！」
「あ、あ～、アインさんって、あ、んはっ、な、何で私までっ！？」
「ん～、仲間外れは悪いと思って」
「べ、べつにぃんっ！　うはははははっ！　って、ちょ、み、ミーアちゃん！　や、やめっ！　あんっ！　そ、そこは駄目だって！　あ、ぁあっんっぁっ！」
おお、俺がマユラの動きを止めた所にミーアがマユラの身体に絡み付いてっ、あちらこちらを刺激して、マユラから扇情的な表情を引き出しているぞっ！

なんてことだ、ミーア、もっとやれ！

……って？

「さ、ささっさ、三人でなんてっ！　ふ、ふふふふ、不潔ですっ！」

いつの間にか開いていた扉から、何らかの理由で戻ってきたらしいコードウェル三尉が先程以上に顔を赤くして、逃げて行った。

「うぅ、もうっ！　アインさんとミーアちゃんが変なことするからっ！」

「……すんません」

「……ごめんなさい」

……不干渉状態への道のりは厳しいようだった。

26　混迷と再会　－Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍａｒｉｎｅ　2

マリーネの試験機【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｘ】の組み立てが本格的に始まった十月。俺の身の回りもそれなりに忙しいが、世界もまた相変わらず、話題に事欠かない状況が続いている。

まずは身の回りの事からだが……、マユラというよりは俺とレナ達三人との関係について、盛大に噛み付いていたテストパイロットのユカリ・コードウェルは表面的には落ち着き始めた。その為、先に危惧していたような計画への大きな乱れはなく、順調な開発が進められている。

これもマユラが忍耐強く対話を続けたり、ミーアが開発計画に遅れが出ないようにフォローしてくれたり、レナが旧ラインブルグ隊風のパイロット特別訓練を実施してくれているお陰だな。

中でも特に、レナの訓練が他の事に気を取られるような余裕を奪ってくれたのが良かった。流石にフェスタとスタンフォードを育てただけあって、訓練術に磨きがかかったというか、容赦がなくなったというか、相手の限界を見切れるようになったんだろう。コードウェル三尉と一緒に訓練を受けているマユラが俺に半泣き状態で縋りついて、あれは絶対に拷問の耐久訓練だよぅ、って、切々と訴えてきた位だしな。

とはいえ、俺が小隊長時代にレナとデファンに実施していた頃に比べると、まだまだ温いというか……、まぁ、あの時はエヴァ先生のしっかりとしたフォローもあったから、潰れるギリギリのラインで訓練できたんだろうなぁ。

ちなみに、そのエヴァ先生にはレナ達共々、アメノミハシラに着てからも月に一度のペースで定期検査をしてもらっており、健康管理をしてもらっていたりする。その際にはいつも人を解剖したがるから困った人だ。

話が若干逸れてしまったが……、Ｍ１のテストパイロットをしたり、実戦に参加したりして、それなりに経験を積んで来たマユラはともかく、士官学校のＭＳパイロット養成課程を出たばかりというユカリ・コードウェルはレナが課す訓練と職務であるデータ取りをこなすので精一杯らしく、作業や訓練の合間の休憩時間には中空にぷかぷかと浮かびながら、ぐーすかと寝ている姿を俺もよく見ていたりする。

仮にもＭＳパイロット養成を受けてきた割にはちょっとばかり貧弱だとも思えなくもないので、一度、サハク准将に士官学校や訓練校でのＭＳパイロットの訓練をもっと厳しくした方がいいと言っておいた方がいいかもしれない。

訓練の厳しさの程度は、戦場での生存率に直接的に影響してくるからなぁ。

次に視線を外に向けて、宇宙に関する事だが、先だって予定が組まれていたＬ１との海賊対策への協議がアメノミハシラ－Ｌ１間の航路上にて行われ、無事、相互協力を約する正式な協定が結ばれる事になった。具体的な内容を挙げれば、航路上で護送船団や商船が海賊に襲われた場合、両軍が相互に連絡を取り合って対処する事と、Ｌ１から物資を調達する事と国防軍による定期的な査察の受け入れを条件として、Ｌ１外縁部にＳＫＯ用の小規模な補給衛星港の建設が認められたという事だ。

特に後者に関しての合意が得られた事で護衛隊の補給拠点に目処

が立ち、護衛戦闘での推進剤やエネルギーの使用制限が大幅に改善されたことになるから、現場の厳しい条件が緩和されたと言えるだろう。

で、そのＳＫＯだが、早くも宇宙海賊との激しい戦闘を繰り広げていたりする。

なにしろ、運用当初に護衛隊の戦力として宇宙軍から供給されたハガネ級四隻の内、既に二隻が沈み、一隻が中破して、モジュール交換している位だからな。

だが、その尊い犠牲によって、国防宇宙軍のパトロールＭＳ小隊が間に合ったり、商船団が無事に逃げ延びたりと、結果的に守り通していることから、ＳＫＯ及びオーブ国防宇宙軍への信頼が高まっているのが現実で、ＳＫＯが募集する護送船団に参加する商船が増え始めている。

その実情を考慮した宇宙軍は自分達で運用を予定していた残り八隻のハガネ級全てをＳＫＯに投入することを決定した為、ＳＫＯは何とか、三日に一度の運用ペースを維持できている状態だ。この影響で宇宙造船にも失われた分の補充や追加発注が入ってきており、造船所はフル稼働状態である。

経営者の視点から見れば、仕事が入ったと喜ぶべきことなのかもしれないけど……、一個人としてみれば、今後しばらくの間はＳＫＯの規模が大きくなっていくのは間違いないという事、つまりは、それだけ世界が乱れていて、犠牲者が出ているという事だから、素直に喜べない為、非常に複雑な心境だ。

まぁ、俺の感慨はともかくとして、ハガネ級が実戦の洗礼を経た結果、現場からの声が概ね好評だった事で、ＳＫＯ引いては？親？である宇宙軍から宇宙造船に対して、ハガネ級の更なる改良と、い

つの間にか宇宙軍の主力艦と収まっていたトツカとは別に、本格的な補助艦艇というか艦隊護衛用艦艇の建造依頼が入っていたりする。

そんな訳で、俺は俺で海兵計画で忙しいというのに、新たな護衛用艦艇のプロジェクトチームを大至急に組めと、おっさん連中もといグループの重役から厳命される破目になっており、涙目になりながらも、旧ハガネプロジェクトのメンバーから人員を推薦してもらい、休む間もなく選考をしたり、面接をしていたりする。

凹（おう）、これでは三人とイチャイチャする時間がなくなるではないかっ、なんて嘆きを、重役会議で思わず口にした際のおっさん連の物凄く嬉しそうな顔ときたら……、ぎぎぎぃ、チクセウッ、奥様連にウッタエテヤルッ、って言いたくなる位に腹立たしいものだった。

最後に地球での戦乱についてだが、ユーラシア西部で発生しているユーラシア連邦と西ユーラシア連合及び中東イスラム同盟との戦闘において、戦いの趨勢に影響しそうな節目が訪れたようだ。

ユーラシア連邦の独立系メディアが伝えた所によると、六日夜に汎イスラム会議の義勇軍を受け入れた中東イスラム同盟が一大攻勢を仕掛けて、中東の一都市であるモスル近郊においてユーラシア連邦軍の主力部隊を打ち破り、また翌七日には西ユーラシア連合が中央ヨーロッパの都市ライプツィヒ近郊での戦闘で新型ＭＳ……パーシィとシゲさんから聞いた話だと、アクタイオン・インダストリ社製の【ハイペリオン】ってＭＳらしい……を投入したらしく、ユーラシア連邦軍のＭＳ部隊を壊滅させたそうなのだ。

ここ最近の戦闘では、物量に勝るユーラシア連邦が比較的有利な戦況が続いていただけに、これからの戦いがどうなるかが注目されるところだ。

ＭＳ開発に関わる俺としては、西ユーラシア連合が出してきたと

いうハイペリオンなるＭＳも気になるのだが、詳細な情報が入るのは先のことだろうから……、大人しく自分の仕事してよう。

ってことで、本日もまた、マリーネで使用するモーションのデータ取りをしている。今日は俺とレナが二人で担当している攻撃モーションのデータ取りなので、マユラは本社で新規艦隊護衛用艦艇開発プロジェクトの下準備をしていたり、コードウェル三尉は宇宙軍の施設でレナから与えられたトレーニングをこなしていたりする。

「はーい、兄さん、レナさん、今日の予定は全て終了です。お疲れ様でした」

「ああ、お疲れ、ミーアもこの後が大変だろうけど、よろしく頼むな」

「うん、任せておいてね！」

パーシィから一つの仕事を任せられた影響か、この所のミーアは自分に自信を持ってきたというか、より一層、元気溌剌と日々を過ごしている。

うんうん、いいことだと考えながら、コックピットから出てみると、先に出ていたのだろうレナが待っていてくれた。

「お疲れ、レナ」

「あ、はい、お疲れ様です、先輩」

「どうした、疲れたのか？」

「いえ、私は大丈夫です。どちらかといえば、先輩の方が顔色が悪いように見えますけど、大丈夫なんですか？」

「ん～、自覚的にはまだ大丈夫なんだが……、レナ、俺、そんなに顔色悪いか？」

「ええ、目の下の隈がいつもよりも目立ってます」

尚も心配そうな表情を見せるレナの頬をそっと撫でると、少しだけ和らいだので希望的観測を述べてみる。

「なら今日の仕事は程々にして、早く帰るように努力するよ」

「あ、は、早く帰ってこれるなら、私達の相手もしてくれますよね？」

と健気な事を言うので、しっかりと抱き締めて、雄を誘惑する芳香が強く香るレナの首筋にキスして痕を残してみる。

「これじゃ、不満か？」

「……ぁぅ、こ、これだけじゃ、その、不満です」

「そうか？　だったらって……、あ～、もう時間がないから、後は家に帰ってからだわ」

「えぇっ！　も、もう少し……」

「すまん、マジで次の予定まで時間が押してきてる」

先輩はいけずです、と口を尖らせて抗議の意を見せるレナに軽い口付けして、断腸の思いで、テストパイロット用に設置した簡易な小型ロッカールームへと向う。

その道筋で、色ボケした頭を一旦切り替える為にも、今後のマリーネの開発スケジュールを思い出す。

ミーアから聞いている予定だと、今日のデータ取りで機体制御システムというか、基礎ＯＳのα版ができるはずだし、機体の方の組立ても順調だから、来週にも機体に組み込んで実機での運用テストも可能なはずだ。

そのテストで得られた【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｘ】の問題点……機体やＯＳの不具合や欠陥を洗い出して、機体設計に修正を加えたり、ＯＳの改良を進めて改修する。また、これに後追いする形で修正設計図から新しい試験機【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｙ】を二機作って、更なる不具合と欠陥の洗い出しを行い、試験機の問題点を改修して、量産化に向けての設計見直しを行って、最終的に完成した量産機を宇宙軍に披露するんだったな。

……むぅ、一つの節目とはいえ、まだまだ、道、半ばだなぁ。

っと、ロッカールームを過ぎるところだった。

手足の動きや壁面を利用して方向転換し、目的のロッカールームの扉にしがみ付くと、別れ際にレナが見せた拗ね顔が浮かんできた。俺もレナ達の相手がしたい、していたい、むしろ、それを本業にしたい、って、常々思ってるんだが、仕事がある以上はどうしようもない所があるんだよなぁ。

いやはや、いつの世も現実は厳しい。

そんなことを考えながら、パイロットスーツを専用のクリーニング装置にセットした後、タップリと汗を吸っているインナーを脱いで、使用しているロッカー内に置いてある自分のカバンの要洗濯なんて書いた袋に放り込み、バスタオル片手にシャワールームへと向う。

水や霧状になった水分を吸引する排水排気装置のスイッチを入れ、シャワーヘッドをこちらに向けて、弁の開放スイッチを押すが、一瞬、空気の流れが変わったような？

……どうやら俺の気のせいか、機械の調子みたいだな。

とりあえずは、温水を浴び……はぅぁ～、温かいお湯が汗を落し、瞬間的に過ぎないだろうが、疲れを癒してくれるわぁ。

あふぅ、本当に、ええ気分やわぁって、音？

……。

まさか、いつかのようにレナ達が入り込んできたんじゃないだろうなって、流石にここは家じゃないし、ミーアならともかく、レナに限って、そんなことはあるわけがないよなぁ。

それよりもボディソープはっと。

「はい、先輩、石鹸、忘れてましたよ？」

「おお、サンキューですって、ちょ、レナ、おまっ、またっ！」

「……あぁ、先輩の匂いだぁ」

いや、そんな蕩けた声出すなっ、背中に顔を押し付けて口付けするなっ、密着してぐいぐい胸を押し付けるなっ、両手で腹筋を撫でまわすなっ！

「れ、レナさんや、ちょーーーとばかり、場所を考えような？」

「でも、ほら、そんな事言ってる先輩も、やんちゃな？息子さん？が、こんなに元気になってますよ？」

「そ、そりゃ、お前、俺も男だし、好いたオナゴにこんなことされたおふぅ」

ら、らめぇ！　今日、我が息子は大人しくさせておく予定なんだ

からって、冗談じゃなくでだなっ！

「な、なぁ、レナ」

「はい？」

「俺、こんな忙しい時じゃなくて、もっと、ゆっくりとした時にお前を抱きたい」

「……先輩、女にも性欲があるって、わかってますか？」

うぅ、レナの不安そうな声に申し訳なさを感じる。

「もちろん、それがわかった上で言ってる」

「なら、教えてください。……どうして、私達を抱いてくれないんですか？　……もしかして、私達が皆、初めてだから遠慮してるんですか？　それとも、私達、女としての魅力、ない、ですか？」

「あ、あのな、お前達に魅力がないなら、今、お前が握ってるモノがこんな状態になるわけないだろう？」

「なら、どうして、なんですか？　私、皆には、言いませんけど、本当は、去年から、ずっと、先輩に、抱いてもらえる日を、ずっと、待ってるんですよ？」

そ、そんなに前から？

「……すまん。けど、この仕事が、俺が立ち上げた計画が、今の海兵計画が終わらないと……、俺は男として、胸を張れないというか……、お前達三人とずっと一緒に生きていく為にも、現代社会倫理に喧嘩を売れるだけの自信が……、違うな……、お前達と共に居るに相応しいって言われるだけの……、いや、もっと単純に、何かを為したって自信が……、うん、男としてのプライドが欲しいんだ。……まぁ、お前達から見れば、きっと、ちっぽけな事に過ぎないんだろうけどさ、どうか、もう少しだけ、待って欲しい」

ちょっとした沈黙が訪れるが、それも少しの時間で、背中に張り付いているレナの頭が首を縦に振ったのが感触でわかった。

「先輩の想いは……、わかりました」

……だが、流石にこのままだと男の沽券にも関わるので、一つ、宣言をしておくことにする。

「……レナ」

「なん、ですか？」

「宇宙軍やＳＫＯ向けの披露会が終わった夜……、いや、それだとゆっくりできないから、海兵計画が何らかの結果を出して終わる日まで……、それまで待ってくれ」

「ッ！　……し、信じて、いいですか？」

「ああ、こういうことには嘘はつかないよ」

「なら、他の二人にも、そう言っちゃいますよ？」

「えっ？」

まさか、全員、同じ日に？する？のか？

「先輩？」

「あ、ああ、二人にも、そう言っておいてくれ」

「はい！」

どうやら、レナには納得して頂けたようだが……、今度は、俺の中の獣が猛っていて、納得していないからなぁ。なので、レナの方へと振り向いて……って、あー、もしかして、泣いていたのか？

「って、せん、ぱい？」

「結局、俺は社会人として失格なんだろうなぁ」
「え？　ぅんむっ！　ぁっんっぁっ！」

そんな訳でちょいと気合を入れて、レナをあくまでも？本番はなし？で攻め落とすのに時間を使った為、前もって遅れる旨の連絡を入れる事ができたとはいえ、次の仕事に五分ほど遅刻することになってしまい、お待たせしてしまった新規護衛艦開発計画のプロジェクトメンバーには本当に申し訳ないことをしてしまった。

でも、短期的にはレナの足腰が立たない位には満足させる事が出来たから、男としては後悔なんてしていないっ！　……なんてね。

とりあえず、後もう少しで一段落だし、頑張ろう！

27　混迷と再会　－Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍａｒｉｎｅ　3

Ｃ．Ｅ．７２年１０月２０日。
遂に、マリーネの試作機【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｘ】が主兵装も併せて完成した。

「……おぉ、想像通りの出来だ」
「ゲイツより軽いはずなのに、何だか、見た目が大きく見えます」
「うん、Ｍ１やストライクダガーにはない、力強さがあるよね」

そうなのだよっ、レナにマユラっ！

既存のＭＳにはない、このスタイリッシュをどこかに置き忘れたような、戦う為の無骨さがいいのだよっ！

って、主張するのは最終の披露会で大いにすることにして、マリーネの輪郭は基本的に直線ではなく曲線でデザインしている為、見た感じ、東洋の鎧武者というか、西洋の甲冑騎士というか、……むぅ、その中間と表現すればいいのだろうか、とにかく、和洋折衷のようなシルエットに仕上がっている。

そして、このシルエットに重厚感を与える源となっているのは、ＭＳのビームの直撃を受けた場合でも、脱出ポットが作動できる時間を耐えられる事から採用した、超硬スチール合金セラミック複合装甲だ。
当初は、超硬スチール合金セラミック複合装甲の他に、強力な防護性を誇るＰＳ装甲あたりも候補に考えていたのだが、うちの会社

にはそれを生産できる設備もなければノウハウもない上、もしも仮に生産できたとしても生産コストが高騰するだろうから、断念せざるを得なかった。

まぁ、それでも、パーシィとシゲさんがモルゲンレーテ本社から技研に流れてきた技術者達と一緒になって、ＰＳ装甲で使われている相転移の解明を進めているみたいだし、いつかはＰＳ装甲か似たような代物を安く生産できるようになるはずだ。

先の展望はこれまでにして、更により細かく機体を見て行くと、機体頭部は、サーリット……、えーっと、某宇宙戦争に出てくる黒いアンチヒーローや白い騎兵さん達が被っているような、後ろ首まで保護している兜を被って、内部のあるメインセンサー系機器を保護し、また、顔……前面も特に気をてらうことなく、強制廃熱用の小さな排気口を備えた某仮面超人のようなフェイスマスク状にして、経費節減も兼ねて採用したＭ１で使用されているモルゲンレーテ社製のツインアイ・カメラシステムを保護している。

加えて、サーリットの前面には機体の中心線上にレーザー通信及び通常電波通信用のアンテナブレードを一本装備することで、？何となく強そうな？印象を見た目で与えると共に、その両側面というか、米神部分にモルゲンレーテ社製の１２．５？機関砲を二門装備して、ＣＩＷＳ……近接防御火器として運用することになっている。

計画途中では、より多くの近接防御火器を、具体的に言えば機関砲をもっと装備した方がいいんじゃないかって意見も出たのだが、一度の投射量よりも携行弾数を優先した為、こうなった次第である。

次に胴体だが、胸部にＢＯｕＲＵ内殻を応用して作られた脱出装置を兼ねたコックピット……、コックピットポッドを収め、機体側の制御システムや胴部の燃料電池システム、コックピット用予備バッテリーや生命維持装置と連結されている。

当然ながら、中の人じゃなくて、パイロットが存在するここが一

番のバイタルパートになる為、前面装甲を他の部位よりも厚目に取ってあるので前面に大きく膨らむ形になっており、俺がＭＳを想起する際に前世を思い出して参考にした、ゼ……くしゅんっ、んんっ、ケンプふぁ……、ふぁ……、ふぁっくしょんっ、……あ、ありがとう、レナ、……ちーん、ってかぁ、……んんっ、とにかく、参考モデルよりも更に胸厚になっているはずだ。

この胸部前面装甲は機体に致命的な損傷を負った場合やパイロットがイジェクションレバーを引いた時に、背面というかフレームとの連結部位が爆砕されて、前に大きく外れて、コックピットポッドが射出される仕組みになっている。また、このコックピットポッドには実際に漂流を経験したマユラの意見により、簡易型制御バーニアが取り付けられていたりする。

んで、胸部の直下である胴部だが、ここも重要区画というか、動力源となる燃料電池システムとそれの燃料タンク等が四つほど収められている他、発電した電気を垂れ流すのは勿体無いということで、機体動力用の小型予備バッテリーが二つ配置されていたりする。というか、燃料電池システムで発電した電気は機体制御に使ったりする他、格闘戦で瞬間的な出力が必要な時の為に、機体の各所に配した通常タイプよりも遥かに小型のバッテリー群と連結されていて、随時蓄電される仕組みだ。

そして、胴下部からは脚部というか大腿上部までをカバーする形で、放熱板も兼ねた装甲スカートが前面に二枚、両側面に各一枚、背面に大きなのが一枚、取り付けられている他、主兵装用バッテリーカートリッジの充電器も幾つか取り付けられている。

でもって、背面には上部にフレアー射出装置付きのスラスターシステムが、下部……、腰部には予備主兵装用のマウントが一つ取り付けられており、予備兵装を携帯する事も可能になっている。また、燃料電池で使用する二種の燃料を補給する為のバルブ等もここに隠されていたりする。

最後に四肢なのだが、基本的に姿勢制御用バーニアや補助スラスター、それらの推進剤を積んでいる事に加えて、腕部にはビームサーベル用のバッテリーを、脚部には補助スラスターを乗せた為に、間接部以外は実にマッシブな輪郭を描くというか、とにかく、そう、マッシブなのだって、同じ事しか言ってないが、まぁ、肉厚があると表現できるだろう。

ついでに言えば、ちょっとした戦術に使えるように、指先のマニピュレーターには例のトリモチやバリュートの技術を応用したダミーバルーンの素なんかが詰められていたり、脚部にも対ミサイル用にフレアー放出装置が装備されている。

あっと、忘れるところだったが、背面上部のスラスターシステムは？Ｙ？型の大型スラスターシステムを採用している。こいつはシステム中心部にメインスラスターとして大型のモノを二基、そこから上部には二股に分かれる形で補助スラスター用の？枝？が伸びて、それぞれに各二基で計四基、下部には少し太めで？幹？のような補助スラスターが一本伸び出て、四基のスラスターを装備している。これらのスラスター群の内、補助スラスターに関してはある程度の範囲で可動する為、姿勢制御用バーニアとしても使用できる仕様だ。

で、これらのスラスターで使用する推進剤を蓄えているプロペラント・タンクは、中央部メインスラスターシステムの左右と上部に配置されているのだが、それらを守る為の外殻装甲板として非常発電用の太陽光発電パネルが装着されていたりする。

……まぁ、特にこれといった技術的な目新しさや物理系に絶対的な防御力を誇るＰＳ装甲みたいな特殊さはないが、設計そのものには余裕を持たせてあるので拡張性に関しては結構あるから、現場の声に応じて専用機化したり、新規技術投入もある程度はできる、息の長い機体になるとは思う。

ちなみに、機体重量的には６０ｔに収めており、推進剤や各種兵装込みでも７５ｔ以内に収まる計算だ。

ついで各種兵装についてだが、主兵装には宇宙工業と宇宙電気、技研第五開発部が共同開発した【ＲＳＩ－ＢＭ１０２】カートリッジ式ビームライフルと【ＲＳＩ－ＢＳ１０３】カートリッジ式狙撃用ビームライフル、先にＢＩに搭載してしまっていたが【ＲＳＩ－ＨＳ２０２】対ＭＳ・ＭＡ用重散弾砲、ジンの無反動砲を参考に宇宙工業が開発していた【ＲＳＩ－ＡＳ２０１】対艦用無反動砲の四種類を用意しており、腕に持つ分と腰部マウントで二つか三つを携行することができる。

ビーム兵装である【ＲＳＩ－ＢＭ１０２】カートリッジ式ビームライフル【ビームアサルト】は第五開発部が各陣営の主兵装……ザフトのＭＡ－Ｍ２１Ｇ、連合のＭ７０３、モルゲンレーテの７１式の実物をジャンク屋や伝手を通じて収集し、これらを分解して構造解析し、そこから得た情報とそれを参考に作製されたビームファランクスや３０?連装ビーム砲の運用情報を元に、パーシィが一から設計した代物である。

特徴としては、銃身を太く縦長にすることで関連部品を収容し、長さを抑えて取り回しを良くしている他、セレクターにより、通常の単射以外に、ビームの威力は弱くなるが速射が可能になっている。

また、銃口の下にビームサーベルや高硬度ナイフを取り付けられるようにもなっており、銃剣や打撃武器としても使用できたりもする、……予定なのだが、打撃に耐えうる強度は持つと言うパーシィの保証はあるものの、実戦で打撃武器として使うかはわからない為、今の所は保証外とし、本当に必要なのかも検証中だったりする。

同じく主兵装とされるビーム兵装の【ＲＳＩ－ＢＳ１０３】カー

トリッジ式狙撃用ビームライフル【ビームスナイプ】は、先の戦争での経験……複座型が行った狙撃というものが戦域において効果的であった事を踏まえて作製した物だ。

当然ながら、一撃必殺を根底においている為、エネルギーの消費量が激しい事やビーム威力を高める機構を組み込んだ為に銃身が長くなってしまい、取り回しは最悪としか言えないが、それに見合うだけの威力、電磁式対ビームシールドを貫けるだけの艦載ビーム砲並の威力は確保できているから、戦域で上手く運用すれば、敵の動きを大いに制限できる事は間違いないだろう。

でもって、これらカートリッジ式を使用するビーム兵装だが、内部にジェネレーターがあるなら別にビームサーベルと同じ機体電力供給方式でも良いんじゃないか、って考えもしたのだが、燃料電池の発電能力と機体全体への配分を考えると、交換して使用できるカートリッジ方式の方がジェネレーターに負担がかからないし、継戦能力の向上にもつながるだろうと思い切ったのだ。

当然、デメリットとしてバッテリーの換装作業なんてことをしないといけないが、調子に乗って撃ちまくっていたら機体全体がパワーダウンしてしまい、咄嗟の回避行動が取れませんでした、なんてことになるよりはマシだろう。それにエネルギー源がカートリッジ依存だから僚機との兵装のやり取りも可能になるし、敵味方認証システムを使ったロック機構も組み込んでいるので、敵に使われる心配もないようにしている。

後の対ＭＳ・ＭＡ用重散弾砲と対艦用無反動砲に関しては、ＢＩでも使ったり、特に目新しいものでもなかったりするので割愛する。

次に副兵装に目を向けると、肩部には、ＢＩでも使用している【ＲＳＩ－ＡＳＭ１２】対艦用二連装中型ミサイルランチャーや装弾総数二十四発の【ＲＳＩ－ＡＭＭ１１】対ＭＳ用六連装小型ミサイ

ルポットといった攻撃兵装、【ＲＳＩ－ＡＢＳ０３】電磁式対ビームシールドや可動式追加スラスターといった補助兵装、偵察用レーダーや狙撃用高精度センサーなんて支援兵装があり、これらの中から、左右にそれぞれに一つずつ装備できる仕様になっている。

また、脚部でも、大腿部にはビームサーベル・ラックや高硬度ナイフ・ラック、重散弾砲や無反動砲のカートリッジ、【ＲＳＩ－ＡＭＧ１０】対物破砕榴弾パックが、脹脛部にも大腿部と同じく対物破砕榴弾パックか可動式追加スラスターが、これも左右それぞれで一つずつ装備可能になっている。

この内で最も特徴的なのは【ＲＳＩ－ＡＢＳ０３】電磁式対ビームシールドだろう。これはＢＩのスクルドが運用しているシールドをアタッチメント部に可動部を設けて、ある程度シールド面を指向させる事を可能にしたモノだ。流石にゴッドフリートクラスの艦砲ビームには耐えられないが、通常のビームライフルのビームならば防ぎきれるし、小型ミサイルの直撃でも一撃なら耐えられるので、突撃を仕掛ける時や距離を置いた撃ち合い等々、様々な局面で利用できると俺は考えている。

この防御力を維持する為にも、シールド裏に装着時に自動的に機体動力源と接続されるシールド専用バッテリーと金属粒子タンクを備えており、戦闘で使用した場合、無補給で二時間程度は持つだろうと予測されている。

脚部の【ＲＳＩ－ＡＭＧ１０】対物破砕榴弾パックだが、ゲイツのビームパイクを参考にして開発した射出も可能なＭＳ用の手榴弾であり、一つのパックに三発装備されている。これは艦艇などの大物やビームが通用しない相手への攻撃、一時的な戦域の制圧が必要になった際の火力として、使用できるようになっている。

腕部にはゲイツの攻防盾を参考に盾の先端で打突も出来るように

鋭くした上、内側にもビームサーベルを収納したラックを装備する事で、近接から格闘への速やかな移行が可能にした【ＲＳＩ－ＡＢＳ０１】対ビームコートシールドと、主兵装を運用しつつも、ビームサーベルの脅威から身を守れるように、また、内側にビームサーベル・ラックも収めた【ＲＳＩ－ＡＢＳ０２】対ビームコート篭手を準備しており、好みに合わせて、マリーネの両腕に取り付ける事が可能だ。

ちなみに、マリーネで使用するビームサーベルは経費削減の為にもモルゲンレーテの７０式ビームサーベルを採用しており、モルゲンレーテ側の許可が出た場合は、パーシィがエネルギー効率を高める改造を施す予定だ。

あっ、忘れていたが、マリーネで使用される射撃兵装は統一された射撃管制システム……視線で対象をロックオンする、グランスタイプ・ロックオンシステムで運用される事になっており、いちいち手動で照準を合わせるといった面倒な事をしなく良い仕様になっている。

？ぐふふ？とばかりに俺がマリーネの姿形を眺めながら、機体や兵装に関する情報を思い出して、独り悦に浸っていると、レナがポツリと呟いた。

「ようやく、ここまで来ましたね」

「うん、確か、アインさんが私案の作成に入ったのが、二月だったから、八ヶ月ぐらい？」

「俺的には、後発とは言え、凄く短い開発期間だと思うんだけどな。……それにこいつはまだ、完成機とは言えないし、今日から始める不具合や欠陥の洗い出しは大きな事故だって起きうる。レナ、マユラ、一層、気を引き締めて行くから、そのつもりでな」

「はい、わかりました」
「うん、わかった」

とはいえ、この二人に関しては信頼しているからいいけど……、コードウェル三尉に関しては、まだ未熟な部分が多いし、よく注意しておかないといけないだろうな。

「で、コードウェル三尉は？」
「宇宙軍に融通してもらったＭ１を取りに行ってもらってます」

……記録用兼事故救助用って奴だな。

「了解。じゃあ、コードウェル三尉が戻ったら、今日の打ち合わせを始めるから、パーシィやシゲさん達に、そのことの連絡を頼めるか？」
「わかりました」
「レナ、私はシゲさんの方に」
「ええ、なら、私はパーシィさんの方に行くわね」

二人が機敏な動きで動き出したのを見送り、再びマリーネを……空或いは海を想起させる群青に塗装された機体を見上げる。

これから二週間の予定で実機運用を行って、機体の動作やＯＳ、使用兵装の不具合や欠陥の洗い出しを行い、次の試験機【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｙ】でそれらを修正していくことになるだろう。

……けど、まぁ、計画も順調に消化できているし、パーシィが事前に行っている過酷な条件下でのシミュレーションでも、これといった欠陥は見つかっていないから、俺達パイロットが余程の馬鹿をやらない限りは大丈夫のはずだ。

それよりも、これが宇宙軍かＳＫＯに採用されるかどうかなんだよなぁ。

昨日、モルゲンレーテで開発が続いていたトツカがロールアウトして、正式に【ＳＤＭ－１】トツカ級って艦級が与えられている事を考えると、そろそろ、アメノミハシラも本格的に海賊根絶に動き出してもおかしくはないだろうし、この動きで少数でも採用されたら、嬉しいんだけどなぁ。

まぁ、軽戦闘機とも呼べなくもないＭ１アストレイには継戦能力や防御力とかで勝っている部分の方が多いとは思うから、見所がないわけじゃないとは思うんだけど、こればっかりは現場で運用する人達の声が一番だしねぇ。

……。

うーん、もし、あんまり売れそうじゃなかったら、拠点防衛用って銘打って、月の中立都市群か地球でＭＳを持っていない国にでも売り込んでみるかな？

いや、その時はその時だし、今はアメノミハシラが採用してくれるような、否、採用したくなるような機体に仕上げるべく、やれる事をやっていくべきだろう。

そんな風に考えをプラス方向へと改めつつ、打ち合わせが行われる格納庫脇の多目的室へと向うべく、俺は軽く床を蹴って、マリーネがある格納庫を後にした。

28　混迷と再会　－Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｍａｒｉｎｅ　4

暦が一月進んで十一月になっても日々是試験ってな具合で、マリーネの不具合や欠陥の洗い出しを行いながら量産機へ向けての改修案件を総ざらいしている。

とはいえ、試験機での初期洗い出しは既に終わって段階は一つ進んで、β版とも呼べる最終試験機【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｙ】を使用して、より使い勝手の良い機体にするべく、訓練宙域を飛び回って激しい模擬戦闘を展開したり、それぞれの装備が正常に働いているかのチェックをしている所だ。

以前のα版に位置する試作機【ＲＳＩ－ＭＳ７２Ｘ】は現在、連続全力稼動耐用試験に回されており、この試験が無事に終われば、最終的には実際に致命的なダメージを負った際に脱出機能が働くか調べる為に、標的機として最期を迎える予定なのだが……、こいつには本当に怖い思いをさせてもらったものだ。

なんとなれば、テストパイロットとして俺が搭乗する際には必ず不具合が……、姿勢制御バーニアの耐用試験では制御系のバグから、とあるバーニアを吹かしたら別のバーニアが全力噴射したり、戦闘行動中における燃料電池の全力稼動試験時に燃料供給が上手く働かないなと思っていたら、燃料供給管に皹が入っていて爆発の一歩手前の危険な状況だったり、全力機動試験を終えて試験船に帰還しようとしたら、センサー系にバグが発生して若干機位がずれていて頭部をハッチにぶつけたり、主兵装の耐用試験で調子よくぶっ放していたら、ビームアサルト本体とカートリッジとの接続が不完全で突然に爆発したり、他にも多々諸々といった感じで怖い思いをさせられたり、冷や汗を流させてくれたのだ。

俺としては、致命的な事故に至りそうだった不具合が俺が乗っている時だけしか起きなかったから良かったと思っているのだが、その度にレナ達には大変怖い思いをさせたようで、そういった事があった日は三人が三人とも俺の寝床に潜り込んでしがみ付いて来たのは余談である。

……まぁ、何にしろ、危険な試験を全て俺に回して欲しいっていう俺の無理を聞いてくれたパーシィとシゲさんには感謝しておこう。

それはそれとして、宇宙は、先月の二十五日に、オーブ、……というよりは、サハク准将がアメノミハシラがＬ３の再開発を行う事を世界に向けて大々的に宣言した事で、新たな状況へと歩みを進めることになった。

この再開発宣言に対して、オーブ本国は沈黙を保った状態、つまりは黙認しているようで、干渉をしてくる様子は見られず、本国のバックにいる大西洋連邦も表面上は横槍を入れていないようだ。

また、他のユーラシア連邦や東アジア共和国といった大国は特にこれといった反応は示さなかったが、その他の国に関しては、南アメリカ合衆国や赤道連合、西ユーラシア連合、アフリカ共同体、月の中立都市群が好意的な声明……、再び厳しい環境に立ち向かい、人類が住まう空間が増える事を歓迎する、といった声明を出したから、それなりに反応があったと言えるだろう。

それ以上に大きな反応があったのは、Ｌ３に根拠地を置いている連中というか、主に宇宙海賊だろう。

マリーネ開発計画に参加してくれている宇宙軍の技師から聞いた話だと、Ｌ３宙域に面白い動きが見られるそうで、Ｌ３から慌てて逃げ出すように宇宙船が月や地球を目指して退去して行ったり、逆

に、Ｌ３を目指して、ゴテゴテに魔改造された宇宙船が集ってきたりと、お祭り騒ぎのようになっているらしい。

要するに、死に花を咲かせようと考えたり、Ｌ３で一旗挙げようとでも考えた山師辺りが集ってきているってことだろう。

……情報通なら、ザラ議長に劣らぬ傑物と言える、サハク准将の怖さを知っているはずだろうになぁ。

後、宇宙での根拠地であったジェネシスαをＤ．Ｓ．Ｓ．Ｄ……Ｄｅｅｐ Ｓｐａｃｅ Ｓｕｒｖｅｙ ａｎｄ Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ（深宇宙探査開発機構）と言う国連時代の名残的な国際機関に引渡し、Ｌ１の世界樹の種に本部を移しているジャンク屋ギルドだが、この件に関しては、自分達の仕事場というか、漁り場を奪われることでもあるので、あまり歓迎していないようだ。

……このジャンク屋ギルドもなぁ、先の戦争中もあのリューベック司令が距離感と関係については色々と苦慮していた位に影響力があるんだけど、所属するジャンク屋がピンからキリで、ジャンク屋である事に誇りを持っている奴もいれば、強盗や海賊と変わらない連中がいるから、対処に困らせられるんだよなぁ。

まぁ、こういう問題は偉い人に悩んでもらう事にしよう。

ちなみに、Ｄ．Ｓ．Ｓ．Ｄに引き渡されたジェネシスαだが、各国軍の相互監視と護衛の下、月の裏側に位置するラグランジュポイント、Ｌ２に運搬されており、運用開始に向けて動いているようだ。本来の目的意味で使用されるのだから文句はないが、危険な代物である事には違いはないので、厳重に管理してもらいたいものだ。

◇　◇　◇

１１月１９日。

今日の実機試験では、戦闘出力状態にした燃料電池がカタログ・スペック通りに運用できるか、様々なモーションがスムーズに組み合わさっているかのチェックの為に、無補給のままで、パイロットを交代しながら一対一での模擬戦闘を総計して三時間以上は行っていたのだが、燃料電池に関してはちゃんとパーシィの計算通りに目標数値に到達できていたし、機体のモーションもミーアが想定していた通りに、人間でいうと小脳や脳幹の役割を果たしす補助ＡＩがしっかりと機能していたお陰で実にスムーズに動き、計画責任者としてはほっと一息といった所だ。

ついでに述べれば、今日の模擬戦闘では思い通りの機動ができたり、自身が想定していた細々としたギミックが上手く働いたこともあって、一パイロットの俺としても大満足と行った所だったりもする。

もっとも、俺が大満足になった裏では、大きく不満を抱える破目になる人物が生まれていたりもするが、まぁ、勝負は時の運とも言うし、その人物の更なる精進を期待することにしよう。

「くっ、きょ、今日も一度も勝てなかった！」

「あはは、ユカリ、あんたの腕じゃ、まだまだ、アインさんやレナには勝てないわよ」

「ですが、マユラさん！　このまま！　ＭＳパイロットとして、負けたままで悔しくないんですかっ！」

「当然、悔しいから、仕事の合間に時間があったらシミュレーター

で訓練しているわ」

ぎゃーぎゃー、と今日の模擬戦闘で他の三人、レナ、マユラ、俺に対する勝率ゼロという記録を連続十日に延ばしたユカリ・コードウェルが半泣きで騒いでいるのをマユラが窘めているようだが……、そりゃあねぇ、伊達に先の戦争を最初から最後まで生き抜いた訳じゃないよ？

「ふふ、ユカリちゃんは今日も元気ですね」

「まぁ、しょぼーんとされるよりは煩い位の方がいいわなぁ」

あっ、マユラにしがみ付いて、うわーん、あのスケコマシに負け続けるのが悔しいですっ、あの模擬戦が終わった後に、わざわざ通信を入れてきて見せるドヤ顔やニヤリ笑いがっ！　本当に、腹立たしくて腹立たしくてっ！　もう、悔しい悔しい、悔しすぎるぅっ、って、泣き始めた。

「なんとも、凄い負けん気だな」

「そういう風に仕向けている先輩がそう言いますか……」

「いや、コードウェルの筋が良いというか、中々、戦闘時の嗅覚が鋭いというか、案外、化けるかもしれないって感じているから、つい、挑発をしてしまうんだよ」

「ふふ、？可愛い？子にはちょっかいを出したがる先輩の悪い癖ですね」

……事実なだけに反論せずに肩を竦めて見せると、レナは本当にしょうがない人的な微苦笑を続けるが、それも俄かに止り、また口を開いた。

「ですけど、ユカリちゃんは、確かに、パイロットしては有望だと

思います」
「だろ？　この短期間でかなり成長してるし、次の模擬戦位で、マユラに勝てそうだしな」
「そのマユラも凄く伸びてるはずなんですけどね」
「まぁ、マユラは他に仕事もある兼業だし、これ位が普通だとは思うぞ？」

マユラの伸びも凄いが、絶対的な訓練量が違うからなぁ。

そんな事を考えていると、レナが今日の模擬戦を視察に来ていた親父達と案内しているパーシィとミーアを見つめながら、俺に話しかけてきた。

「……でも、ミーアちゃんが作った補助ＡＩは、個人個人の操作の癖や好みを把握して、それに合わせて機体制御するんですから、凄いですよね」
「ああ、まさに乗れば乗るほどって奴で、乗る度に操縦での負担が減っていくのが良くわかるよ」
「それに、個人データを記録媒体で保存しておけるから、機体を換えても使用できますし」
「けど、パーソナル・データの換装に十分程掛かるんだよなぁ」
「その辺りは、今後の課題かもしれませんけど、運用側でフォローできる範囲ですよ」
「まぁな」
「それと、ミーアちゃんがここまで頑張っているのは、全て、先輩の為なんですから、忘れないであげてくださいね？」
「もちろんさ。それと、ミーアだけじゃなくて、レナやマユラの頑張りも忘れてないからな？」
「うふふ、そうですか？　……なら、記念すべき最初の夜は、三人で目一杯、夜が明けるまで、タップリと甘えるつもりですから、覚

悟しておいてくださいね」
「……りょ、了解」

ふ、普通、男が女に言うような台詞のような気がしないでもないが、まぁ、こ、これも俺達の関係なのかもしれないな、うん。

……ちゃんと、身体の調子だけは整えておこう。

「あ、話が終わったみたいですね、こっちに来ます」
「だな。……どうだった、親父」
「ああ、アインか。……いや、ＭＳがあれ程、スムーズに動くものなのかと驚いていた所だ」
「全てはパーシィや、シゲさん、ミーア達、技術者のお陰だよ」
「そうだな。本当に、今日の視察はうちのグループが？人財？を多く抱えているのがよくわかった、有意義なものだったよ」

……うん、会長でもある親父に褒められて、プロジェクトメンバーは皆、嬉しそうだな。

「まぁ、言葉だけじゃなくてだな……」
「ふっ、わかっている。総務や財務担当に話を通しておく」
「流石親父、話がわかる」

なんてことを話していると、会長の第二秘書となっているアルスターが、時計を気にし始めていた。

「親父、そろそろ、時間みたいだぞ」
「ああ、そのようだな。……いやはや、今日は久しぶりに、お前とＢＯｕＲＵを作っていた日々を思い出してしまった」
「あ～、あの時の事を……、宇宙港の片隅にある倉庫でジャンクか

らＢＯｕＲＵを作っていたことを考えると、ＭＳなんて作っている今が嘘みたいだな」
「まったくだ。……しかし、アイン、アレは良い経験だったな」
「そうだなぁ。俺も、アレで謙虚さと人の手を借りる事、人付き合いの大切さを学んだ気がするよ」
「うむ、常々、初心を忘れないようにしないとな」
「うん、そうだな」

そんな事を話しながら親父を見送る為に、主要な計画メンバー皆でぞろぞろと第五開発部の格納庫を出て、アメノミハシラの基幹部である中央回廊に到達する。

「んじゃ、親父、今の試験機を改修しながら、量産機の設計図や一機当たりの生産コストとか書いた現行最終量産化案を上げるから、重役会議で進めるか止めるかどうかの検討を頼むよ」
「わかった。……まぁ、今日の出来でも十分に納得が行くものだったからな、私が後押ししよう」
「はは、それは心強い。……後は、売れるかどうかだなぁ」
「む？　珍しいな、お前が弱音を吐くとは」
「まー、こいつに関しては、自分の経験を元に考案したとはいえ、趣味が多分に入ってるからさ、大丈夫かなぁ、って思ってしまうんだよ」
「アイン、自信を持て。マリーネはお前が先の戦争を経て、抱いた思いから生まれたのだからな」

……はぁ、流石はグループを率いている？家長？だけあって、まだまだ、俺は親父には勝てそうにないな。

「わかった、胸を張ってるよ」
「ああ、お前はそれ位でいいんだ」

む、何か、パーシィを除いた周囲の目が……、驚きで目を見開いて？

「皆、どうかしたか？」
「ま、まぁ、アインちゃんが素直に弱音を吐くからさ」
「ええ、普段が普段だけに、驚いたわ」
「で、でも、先輩とお父様は、やっぱり親子なんだなぁって」
「……ほんと、アインさんのお父様も素敵だよねぇ」
「兄さんって、もしかして、ファザコン？」

……ミーアは後でちょいと説教って言うか、親父もレナやマユラのお父様って言葉を聞いて、デレデレするなっ！

なんだか、場がグダグダになり始めてしまったが、それを立て直すべく、会長秘書のアルスターが口を開いたようだ。

「んんっ、会長、そろそろ、つ「フレイッッ！！」……え？」

え、誰、今、アルスターを読んだの？

皆で揃って、キョロキョロと、辺りを見回すと……、とおーーーーく、離れた、中央回廊の端にあるラインブルグのファクトリー出入り口から三？離れた地点にある休憩エリアから猛スピードで接近してくる人影を認める事ができた。

……というか、ここまで届くほどの大声が放たれた所為で、中央回廊に居た人達がほぼ全員、悶絶して中空に浮かんでいたりする。

「……アルスター、あれは誰だ？」

「……ら？」
「……フレイ？」

俺に代わる形で再度レナが問い掛けるが、どうやら聞こえていないようだ、って、アルスターが弾かれたように、その人物に向って、一直線に跳び立って行った。

「あ」
「ん、どうした、パーシィ」
「もしかしたら、アルスターさんが探している人じゃないかな？」
「あ、あ～、そう言えば、アルスターの奴、必ずとっ捕まえてやるって、鼻息荒かったもんなぁ」

……。

「レナ」
「ええ、わかりました。お父様……、いえ、会長、今日から……、先輩、何日程にしましょうか？」
「取り合えず、三日位でいいんじゃないか？」
「三日間、フレイに代わって、秘書を務めますので、フレイには……」
「ふふ、わかった、アルスター君も普段から頑張ってくれているからね、彼女には有給を出しておくよ。では、レナ君、三日間、よろしく頼むよ」
「はい。まずは次の予定だけ、教えていただけますか？　その予定が終了するまでに、ベティさんに連絡して、スケジュールを把握しますので」

さて、フレイの代役はレナに任せればいいとして……。

「ひゅ〜、ドラマの撮影か？」
「もう、兄さんッたら」
「そうよ、アインさん、それは言い過ぎ」

いや、だって、アルスターと相手の茶髪男、中央回廊のど真ん中で、周辺に一杯人がいるのに、お互いを絶対に離さないかのように固く抱き合って、熱い熱いベーゼをずっとしてるんだぜ？

「あ、あはは、あれは独身者には目の毒だね」
「うぅ、俺も、俺も……、ナナちゃーーーん！」
「な、なんて、うらやま……は、破廉恥ですっ！」

まぁ、取り敢えず……。

「パーシィ、カメラか何かないか？」
「えーと……、あ、あったあった、はい」
「お、何故に、本格的なカメラ？」
「うん、マリーネの記録用で使ってるんだ」
「へぇ、そうなのか。……なら、あの二人の様子を」
「あはは、うん、記念に一枚だね」

……うんうん、アルスターもきっと喜んでくれるだろう。

周囲の惨状がまったく目に入らない様子で中空に浮かび上がって盛り上がっている二人を、パーシィのカメラがしっかりと捉え、カシャリと合成音が響き渡った。

29　軍神の舞踏会　－コンペティション　1

72年も最後の月に入ったのだが、先月と変わらず、俺というかマリーネ計画のメンバーはマリーネの開発に勤しんでおり、それなりに忙しい日々を送っている。とはいえ、パーシィもシゲさんと共に洗い出した改修点を見直しながら量産機の設計を詰めているし、ミーアはミーアでナナと共に、補助ＡＩの改良に務めている日々だ。

俺もまた、新規開発計画というか、新しい護衛艦建造プロジェクトの方もメンバーの選出を終えて、面ど……げふげふ、ハガネ計画を参考にして、【クロガネ計画】と名付けたプロジェクトを発足させて、始動させているのだが、今回も基本的にはノータッチでプロジェクトのメンバーにお任せする方針だ。

まぁ、なんにしろ、マリーネの開発は非常に順調なに進んでいる状態だし、クリスマスまでには軍向けに量産機の披露会が行えるはずだ。

もっとも、オーブ本国では友好企業であり、ライバルでもあるモルゲンレーテの本社がＭ１アストレイを元にした新型機【ムラサメ】を発表しているし、ここの支社でも宇宙用の奴が開発されてるって話だからなぁ。

聞く所によると、ムラサメはＭＡ形態に変形が可能な、所謂、可変機らしいが……、むぅ、防御面や機体剛性的にはこちらの方に分があると信じておこう。

とまで考えた所で、新たに入った……、と言うよりは、第五開発

部に引き入れたニューフェイスが休憩室に顔を出した。

「主任、ここにいたんですか？　探しましたよ」

「ん、何かあったのか？」

「その、ユカリさんが……」

「はは、今度こそ、あのスケコマシにキャン言わしたる、ってか？」

最近、マユラに勝てるようになった上に、自分の姉であるアサギ・コードウェルが国防陸軍から宇宙軍に転籍してきた影響なのかはわからないが、妙にハイテンションで突っ掛かってくるんだよなぁ。

「い、いや、そこまでは言ってませんけど……、似たようなことを言ってるんで、相手をしてあげて下さい」

「なら、俺が行くまで話し相手をしておいてくれ、もう一仕事あるんだわ」

「ええっ！　いや、その、それは……」

「いいじゃないの、可愛い女の子に、あれほど露骨なまでに積極的にアプローチされてるんだからさ」

俺の言葉を聞いた瞬間に、第五開発部の期待の新人、サイ・アーガイルは項垂れて呟いた。

「いや、その、好かれるのは嬉しい事は嬉しいんですが、俺はどちらかと言うと、アサギさんの方が……」

「へぇ、そうなのか？」

「あ、いや、今のは、内緒ということで」

「了解了解、マユラにそれとなく、コードウェル二尉の好みや休みの日を探っておいてもらうよ」

「い、いや、そうじゃなくてですね」

マユラの紹介で引き合わせてもらった、アサギ・コードウェル二尉の姿を思い出しながら、頷いてみせると、顔を赤くしたアーガイルは項垂れた勢いでずれてしまった色眼鏡を元に戻すべく、フレームを押し上げて言葉を続ける。

「その、ユカリさんの元気の良さも十分に魅力的なんですけど、今は、どちらかというと、アサギさんの包み込むような温かさに惹かれるというか」

「な、なんと、姉妹一緒じゃないと嫌だと？」

「そんなこと、誰も言ってませんよ！」

いやはや、アーガイルは反応が良いから、ついつい、からかってしまうんだよなぁ。

「わははは、冗談だよ。でも、まぁ、仕事があるのは本当だから、コードウェルのトレーニング代わりに二人でオフィスラブに興じていてもいいぞ？」

「いや、だから、しませんって！　そもそも、俺にも仕事がありますっ！」

「えっ、そうだったのか？」

「ええ、制御系の調整をシゲ班長とするんですよ」

「なんだ、それならそう言ってくれれば良いのに」

「いや、主任が話を逸らしたんですよ」

「おっと、仕事の時間だ。まぁ、コードウェル三尉には大人しくトレーニングしてろって言っておいてくれ」

「……最初から、そう言ってください」

疲れた様子で去って行くアーガイルを見送った後、俺も次の仕事、パーシィとのコスト面での話し合いをするべく第五開発部のオフィスへと向うことにする。

その途上、時折、擦れ違う技研の社員達と会釈しあったり、顔見知りなら軽く言葉を交わしながら、サイ・アーガイルが第五開発部に所属することになった経緯について思い返す。

先月の十九日、フレイ・アルスターとその意中の男であるキラ・ヤマト……なのだが、諸般の理由でキラ・ヒビキと名乗っている少年が公衆の面前で行った熱烈な抱擁と深い深い接吻は、俺から三日間の有給休暇が与えられたと聴かされた瞬間に、長い別離の時を経ていた影響もあったのだろう、お互いの情熱に火をつけたらしく、そのままアルスターが住まう家へと直行することに相成った。

その若い恋人達が見せる何とも微笑ましい行動に、耳を押えながらも事の推移を見守っていた観衆達は、女性陣が大興奮しつつも、あの男の子、格好良さと可愛さが同居していて、いいなぁ、等との合唱を行う一方で、男性陣は、ひゅーひゅー、いいぞぅ、小僧ぅ、と囃し立てる連中と、モゲロ、モゲロ、とにかくモゲロッ、と呪詛を吐く連中に別れる事態となり、中央回廊を警邏する保安隊までもがニヤニヤしつつも人垣を整理する始末だった。

で、そんな馬鹿騒ぎの中、ただ一人だけ参加せず、寂しそうでいて嬉しそうな表情で二人を見送っていたのが、サイ・アーガイルだったのだ。

どうやら二人とは知り合いらしいと、元プラント保安局員としての勘が働いたので声を掛けた所、案の定、二人とは共通の友人であることが判明したのだ。でもって、その事実を知った女性陣からの無言無形の圧力によって、これは是非にも話を聞かねばならんだろうということになり、第五開発部に招待して、彼らの二人の素性と、アルスターと別れてからここに至るまでに辿ってきた道筋について、聞くに至る。

その話は割愛する……わけにもいかんだろうから簡略に纏めるが、アーガイル達は今は無きヘリオポリスで学生をしていたらしい。で、ラウ率いるクルーゼ隊と地球連合軍が起こした戦闘でコロニーが崩壊してしまった際、紆余曲折を経て連合軍に所属して、足つきに乗組んだそうだ。

その後、ザフト地上軍に追われながら辿り着いたアラスカでアルスターと別れた後、アラスカ攻防戦を戦っていた所、サイクロプスが仕掛けられている事を知り、それに巻き込まれそうになったから連合軍から脱走したとのこと。そして、指揮官の判断でオーブに亡命……になっているかはわからないが、とにかく、逃げ込んだそうだ。そんな最中、一時、行方知れずになっていた、キラ・ヤマ……ヒビキが乗ったＭＳ、フリーダムが合流したらしい。

聞いた瞬間、奴がフリーダム強奪の犯人だったのか……、と思わなくもなかったが、主犯がラクス・クラインであることは間違いないし、今更の事だと判断し、先に話を聞くべきだと黙っておいた。

んで、オーブ本国に連合軍が攻め込んだことで発生した防衛戦に参加して戦闘を繰り広げていると、フリーダムを追ってきたジャスティスが出現し、何故か共闘する事になったと思ったら、連合軍の物量に負けそうになったから、マスドライバー使って宇宙に逃げ出してＬ３に隠れる事になったらしい。

……なんというか、転落人生と表現できなくもないなと思ってしまった。

ちなみに、オーブ本国防衛戦後はマユラも同じコースを辿っていたりするので、マユラ本人にあの二人を知っているかと確認した所、フリーダムに乗っていたヒビキの事はＭ１アストレイのＯＳ開発に

関わっていた為に覚えていたらしいが、アーガイルの事は覚えていなかったらしく、えっ、いたっけ、との言葉を述べていたりする。

そんなマユラの無情な言葉に、どうせ俺は影が薄いです、だなんてショボーンと凹んでいたアーガイルに、さぁさ、続きをキリキリ話せと強いた俺は悪い奴ですごめんなさい。

まぁ、それはともかくとして、後に合流してきたラクス・クラインの考え……、これ以上の戦争は食い止めるべきだとする考えに共感した足つきの指揮官やカガリ・ユラ・アスハの意向もあって、先の戦争における最大の激戦となったプラント最終防衛戦に介入すべく……、ここで何故に武力介入なのかを、最終防衛戦までの三ヶ月間もいったい何をしていたのだと、その首脳陣に問い質したい気分だが、アーガイルにはわからないだろうから我慢しておいて……、とにかく、クライン派がＬ３にいた傭兵や海賊を懐柔して戦力を整えて、Ｌ３からＬ５を目指したらしい。

だが、Ｌ３からＬ５まで距離があった影響で二日目の大規模戦闘にしか間に合わず、しかも、自分達が戦闘に介入し始めて、しばらくしたら停戦になってしまった上、足つきが大損害を受けたり、最大戦力であったフリーダムも撃破されたりしたので、Ｌ３に逃げ出したそうだ。

ちなみに、ジャスティスは戦闘に直接参加せずにザフトのＩＦＦを利用して、ヤキン・ドゥーエ要塞に入り込んで何やらしていたそうだが、直に引き揚げてきたそうだ。

うーむ、実に謎な動きというか、まさか、ザラ議長の暗殺犯じゃないだろうな？

……。

まぁ、所詮は邪推にすぎないから本当の所はわからないけど、直接的には関わってなくても間接的には関わりがあったのかもしれない。だが、これも過去の話だし、ザラ議長が死に至った真相が隠されている以上は黙っておく方が賢明だろうな。

話を戻して……、Ｌ３に大慌てで引き揚げた後、プラントと地球連合軍の双方から敵扱い……テロリスト扱いされている事を踏まえ、これからどうするかという話し合いが持たれたそうだ。

その結果、装備していた多くの兵装に関してはクライン派やオーブ軍が伝手を使用して隠蔽し、参加人員もオーブ軍は本国のアスハ派を使って、何事もなかったように原隊復帰させる一方で、足つき組もオーブ本国で偽名で持って市民権を得て隠遁、クライン派だけは世界各地に散らばって潜伏することが決まったらしい。

……おいおい、危険ブツが世界に拡散している、って思ってしまったのは誰にも内緒だ。

で、そんな中で唯一人だけ、別の道を選んだのがキラ・ヒビキだったらしく、激闘を繰り広げたラウから伝えられたという自身の出生の謎を探り出し、また、どこかで生存しているというフレイ・アルスターを見つけ出して再会する事を望んだらしい。この決意表明の際には、ラクス・クラインをはじめ、多くの者が翻意を促したそうだが、ヒビキの決心は非常に固く、決意を翻す事はなかったそうだ。

そのヒビキの並々ならぬ決意に心打たれたのがサイ・アーガイルであり、ヒビキのアルスター……何とも驚いた事に、元はアーガイルの婚約者だったとのことだ……捜索の旅路に同行する事を申し出たらしい。

そして、二人はＬ３を離れて、世界を巡る事になったらしいが…

…、ヒビキのアルスターを求める余りの、？最短の道がなければ自分で作ればいいじゃない？的な積極論と、アーガイルの冷静に状況を見据えた、？道は幾らでもあるんだから無理に最短を行かなくてもいいじゃない？的な慎重論という、水と油的な意見の相違で大いに対立し、時には肉体言語での衝突……当初はアーガイルが余裕で負け越していたらしいが、Ｌ３にいた頃に？拳神？と呼ばれる人物から受けた教えを思い出しながら、諦めることなく抗っていたら、遂には、勝てないまでも五分の勝負にまで持ち込めるようになったそうだ……を繰り返しながらも、アルスターの足取りを一歩一歩地道に探っていったり、Ｌ４のとあるコロニーでヒビキが自身の出生の秘密を知って壊れかけた際にはアーガイルが拳で持って発破を掛けたり、路銀獲得の為にジャンク屋にバイトとして雇ってもらってデブリの海でジャンク拾いをしたり、アーガイルがイイ漢に迫られた際にはヒビキが機転を利かせて耽美な関係を演出してみせたり、乗っていた連絡船が海賊に襲われた際にはアーガイルが悪知恵を働かせ、ヒビキが逆襲して海賊の身包みを剥いでみたり、行く先々でナチュラルを虐げるコーディネイターやその逆のケースに遭遇した時にはそれを正す為に二人で協力してＯＨＡＮＡＳＩでもってＳＥＫＫＹＯＵをしてやったり、コーディネイター難民キャンプを通じて大西洋連邦に密入国してアルスターの実家を訪ねてみたり、路銀が尽きたので多くのＭＳが沈むアラスカ周辺の海域でジャンク屋の一攫千金を手伝ったり、密入国をする際に世話になった難民キャンプをファントムペインの構成員が襲撃するという情報を掴んだので計画を事前に潰してみたり、等々と三本位は？フ○イトぉぉおぅ！　イッ○ぁあああツっぅぅ！？な友情活劇映画が作れそうな過程を経て、ここまで辿り着いたそうだ。

……つか、お前ら色々と冒険し過ぎだろう、って俺が突っ込みかけたのは仕方がないと思うんだ。

とにかく、アーガイルは、ただ、ヒビキとの友情と元婚約者の安否確認の為だけに、数多くの危険地帯を渡り歩いてきたという、実に稀有な？お人好し？というか、良い意味での？馬鹿な男？と言えるだろう。

実際、ユカリ・コードウェルなどはアーガイルの突き抜けた？馬鹿さ？と？お人好し？な在り方に大いに感動し、まるで自身の理想を見出したように、目を白黒させているアーガイルの両手を握り締め、あなたはどこかのスケコマシも見習うべき、素晴らしい男の人ですっ、もっと自信を持って胸を張ってくださいと、目をキラキラさせて興奮していたからな。

でも、まぁ、俺自身もアーガイルの？馬鹿さ？で？お人好し？な人格が気にいった事もあったから、今後の生活の世話を焼こうと考えて経歴を聞いた所、ヘリオポリスの工科カレッジで構造工学や制御システム関係を学んでいた事を知り、一旦、連絡先を聞いて別れた後、パーシィやシゲさんと相談して、第五開発部に研究員として引き入れたのだ。

ちなみに、キラ・ヒビキはアルスターとの蜜月な三日間が終わった後、難民向けの自立支援プログラムを受けて、今はアメノミハシラの保守点検員になっている。

三日間の休み明けにお肌を輝かんばかりに艶々にして復帰したアルスターがベティやレナに言う所によると、今日もこのまま一緒にいようよ、だなんて甘えた事を抜かしたので、せっせと稼いで来いっ、と尻を蹴り飛ばした結果だそうだが……、その際に見せていた表情から、あれは絶対に嘘で照れ隠しだというのが、砂を吐きつつも俺に教えてくれた二人の共通見解だ。

それにしても、ラウを退けるほどの猛者が地味に保守点検員をし

ているとは、非常にもったいないような気がするけど、流石に当人の意思を無視するわけにもいかないし……。

うーむ。

……サハク准将と相談して、アメノミハシラが危難にあった際の保険的な意味合いで、軍に引き込める様にしておいてもいいかもしれない。

つか、アーガイルとは違って、ヒビキとはまだゆっくりと話をしていないから、時間がある時にラウの最期を聞いてみたいんだが……、今は忙しいからなぁ。

この計画が落ち着いたらアルスターに頼んで、場でも設けてもらうか等と考えつつ、考え事をしている内に間違えてしまった道を戻る俺でした。

30　軍神の舞踏会　―コンペティション　2

「ふむ、報告書や映像では知っていたが、実際に見るのとでは大違いだな」
「はは、百聞は一見に如かず、ですか？」
「偽りなく言えば、初めて作るＭＳ故に思い入れもあって、多少の誇張が入っているのだろうと思っていてな、まさか、ここまでの出来だとは思っていなかったのだ」
「いや、当然、誇張もなくはないですよ？　でも、まぁ、何もない一からの開発じゃなくて、参考資料がある後発ですけど、俺自身も経験から色々と考えていた事を導入できましたから、俺的には満足のいく仕上がりです」

俺がサハク准将に応対している間にも、画面の中では、マユラとユカリ・コードウェルが搭乗するマリーネ量産型が標的を撃破している所だった。

「すごい……」

そんな光景を目の当たりにして、サハク准将の斜め後ろに控えていたアサギ・コードウェルが熱を帯びた吐息めいた呟きを漏らしたようだ。

「ふふっ、お前の妹も中々やるな、アサギ」
「は、はい、私も驚いています」

アサギ・コードウェルは宇宙軍への転籍直後、サハク准将直々の

差配により准将付第二秘書官に抜擢された事で二尉から一尉に昇進している。

ユカリ・コードウェル……コードウェル妹やマユラから伝え聞いた話だと、着任当初はサハク准将に話し掛けられたり、指示を与えられる都度、蛇に睨まれた蛙の様にガチガチに緊張してしまうと話していたらしいのだが、いやはや、人は慣れると言うことだよねぇ。

そのコードウェル一尉が俺の視線に気付いたらしく、肩口辺りまで伸ばしている強くウェーブが掛かった金髪を揺らして、こちらに顔を向けると、何故か頬を桜色に染めながら、口を開いた。

「ら、ラインブルグさん、あの……、今、動いている二機には、本当に、ユカリとマユラが？」

「ええ、そうですよ」

「で、でも、あんなにスムーズに……」

「ＭＳは表に出てからまだ数年の新しい兵器ですからね。ＯＳが改良されていけば、動きも良くなっていきますよ」

そう、これからナチュラルだろうがコーディネイターだろうが関係なく、個々人の実力が発揮できるＯＳが生まれていくのだ。

「……私達がテストパイロットをしていた時からは、考えられません」

「まぁ、開発初期から関わった人から見れば、そう思うかもしれませんね」

「ええ、どれだけ頑張っても、あんな動きはできませんでした」

「でも、マユラやコードウェル一尉達が何度も試行錯誤を繰り返して、基礎を作ってきたことにはちゃんと意味があることです。だから、胸を張っていればいいんですよ」

「ふふ、ありがとうございます」

さて、ある程度はコードウェル一尉のフォローもできたろうから、准将への対応に戻るか。

「准将、何か、ご質問はありますか？」

「そうだな……、今、ラバッツが乗っている機体が、マリーネのノーマル仕様になるのか？」

「はい、基本的に両肩に電磁式対ビームシールドを装備するタイプがノーマル仕様になります」

「では、コードウェルが乗っているのは？」

「あれは両肩に六連小型ミサイルポッドと重散弾砲を装備してますから、制圧支援仕様ですね」

マリーネの追加兵装関連は、ザフト開発陣が強奪したデュエルに追加装甲を施していたのを参考にして、開発を進めたものだ。

「ふむ、計画書にある通り、一部の兵装を換装する事で状況に対応するというわけだな？」

「ええ、マリーネは特徴がないのが特徴である汎用機として設計して作ってますから、予め、それに付加価値をつけられるように考えておいたんです。後、従来のバッテリー機だと、兵装に使用するバッテリーの兼合いでランドセル側にアタッチメントを装備するかもしれませんが、マリーネは機体内部にジェネレーターを搭載したのでランドセルの換装は想定せず、機体各所にアタッチメント装着部を装備しました」

ちなみに、Ｍ１というか、旧地球連合系の流れを組むバッテリー機は継戦能力の向上の為にランドセルにもバッテリーを積んでいたりするから、もしも、今後、発展機が生まれるとしたらランドセル換装で状況に対応するタイプだろうとは、パーシィとシゲさんが示

した見解だ。

「でもまぁ、開発側がこんなことを言うのもなんですが、性能的に見れば、一点を突き詰めた専用機や特化機には負けると思います。ですが、こいつの強みは、それだけしかできないのではなくて、簡易な換装でどれもある程度できるということですので、現場での運用は楽になるはずでしょう」

「確かに、お前の言う通り、部下の感触は良いようだぞ？」

准将の視線を辿れば、宇宙軍のお歴々がスペック表とアタッチメント兵装を確認しつつも身を乗り出して、画面で動き回るマリーネを食い入るように見つめていた。

「何だか、思ってた以上に、えらく食いつきがいいですね」

「何、Ｍ１も良い機体だが華奢な面があってな、連中もピンと来るものがなかったようなのだ」

「そこに見た目が厳ついマリーネが来たから、つい、惹かれているって感じですか」

「そうだ。それに加えて、あの機動をナチュラルがしているということも大きいだろう。しかし、あの機動……、実に見事なＯＳだな。名はあるのか？」

「単純に統合オペレーティングシステム（Ｉｎｔｅｇｒａｔｅｄ Ｏｐｅｒａｔｉｎｇ Ｓｙｓｔｅｍ）を略してＩＯＳって呼んでます」

「ふっ、今回は命名に頭を捻らなかったのか？」

「あはは、今回ばかりはそんな余裕はなくて、完成に持って行くだけで一杯一杯ですよ」

……そう、考えるのが面倒臭くなったのではなく、俺の厨二魂が役目を終えて、再び眠りに落ちたのだ、ということにしておこう。

「しかし、本当に、動きが洗練されているな」
「補助ＡＩがパイロットの操作に応じて、訓練等で蓄積したパーソナルデータから次に来るであろう動きをある程度予想して、最適な動きを選択するようにしていますからね」
「乗れば乗るほど、更に動きが洗練されるというわけか。上手く考えたものだな」
「いやいや、これ位は、うちのグループができるんですから、どこでもできるはずですよ」
「そのように真顔で言えるお前が……、否、お前達のグループがアメノミハシラに存在する事に、我は安堵させられるよ」

んな、大げさな。

「おっと、次はアタッチメントの換装作業にどれ位の時間が掛かるかの実演ですから、そろそろ格納庫の方にお願いします」
「うむ」
「レナは皆さんの案内を頼む」
「はい、わかりました」

案内をする前に、やいのやいのと今見ていた内容について闊達に議論している宇宙軍のお歴々がぞろぞろと廊下に出て行くのを慌てて追いかけるレナの後姿を見届けて一つ思う。

……普通は偉い人というか、サハク准将に先を譲りそうなものなんだがなぁ。

そんな訳で、宇宙軍のお歴々が我先に出て行った後を追う形で、苦笑を浮かべた准将と表情を隠したコードウェル一尉と共にゲストルームを出る事になった。

「それでラインブルグ、パイロットがマリーネの操縦に慣れるまで如何ほど掛かる？」
「ＭＳに慣れた奴なら二日から一週間まで、基礎ができている新兵なら二週間程、一から始めるなら一ヶ月でしょうかね？」
「従来の半分以下だな」
「まぁ、あくまでも期待予想数値ですから、実際にやってみないことにはわかりません」
「何、ナチュラルでもあれだけの操縦ができるとなると、多くの者が奮い立つだろう」
「だといいんですがね」

俺の言葉を受けた准将は、微かに口元を歪めると大いに期待させてくれる事を言い出した。

「ふむ、あれ程の性能に加えて、操縦性も良いとなると、導入を考えてもよいかもしれぬ」

お……、おおっ、これはっ、もしかしてっ！？

と内心で導入してくれるとの言質を期待しながら続きを待っているが……、サハク准将はそれ以上は続けず、更に笑みを深めると別の話を切り出してきた。

「……ふむ、次期主力機を定めるとでも銘打って、コンペティションでも開いてみるか」
「え……、コンペティション、ですか？」
「そうだ。まぁ、本来の意味でのコンペティションとは若干異なるが、汎用タイプとして現行使用しているＭ１とマリーネ、可変タイプとしてムラサメと直に仕上がるムラサメの宇宙仕様とで、性能評

価を行う」
「パイロットは？」
「無論、ナチュラルが良かろうが……、アサギ、軍からラインブルグとモルゲンレーテに派遣したテストパイロットはナチュラルだったか？」
「……はい、二社に派遣したパイロットはナチュラルになります」
「ならば、その者達を使うとして、アストレイは……、そうだな、イズモの艦載ＭＳ隊から選抜しよう」

……うちは、ユカリ・コードウェルになるってわけか。

「では、その結果によっては、軍に採用される可能性も？」
「ああ、コンペティションでの成績が良く、コストパフォーマンスでも優れていれば、採用しよう」
「開催時期は？」
「そうだな……、ムラサメの宇宙仕様は来月には完成するとのことだから、二月辺りだな」

……二月か。

「ラインブルグ、何か、不都合があるのか？」
「あ、いえ、実は、ＳＫＯにトツカ級が二隻配属されると聞いていたので、マリーネの実戦評価というか、実戦証明をしてもらおうと思ってたんですよ」
「機に敏だな。……それで、何機だ？」
「マリーネにトラブルが発生した時にＭＳが使えないと現場に迷惑を掛けるので、予備機枠にそれぞれに一機ずつで、整備補給関連設備と交換用パーツ、兵装一式込みで、計二機入れさせてもらえたらと考えています」
「わかった。こちらからも計らっておこう」

「ええ、お願いします」

っと、実戦云々で思い出した。

「そうそう、准将、それとは別に相談したい事が」
「む、何だ？」
「いえ、最近、アメノミハシラに来た奴で一人、興味深いのがいるんですよ」
「……ほう、興味深い？」
「ええ、簡単に言えば……、テロリスト？」
「早速、保安隊を差し向けよう」
「いやいや、今のは冗談です……、ってわけでもないのか？」
「なんだ、それは？」

ああ、准将が珍しい表情というか、呆れた顔でこっちを見てるよ。

「あ～、実は先の戦争の最終戦……、第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦で戦闘に介入してきた連中がいたのは知ってますよね？」
「ああ、我やオーブ本国も、バカガ……放蕩娘がいらんことをしたお陰で、隠蔽で大変だった」

再度、サハク准将は眉間に皺を寄せるという珍しい姿を見せ、背後のコードウェル一尉は少しだけ表情に暗い影を落としているのがわかった。

だが、二人とも直ぐに表情を消して、准将は更に口を開いた。

「それに属していた者か？」
「ええ、それもザフトの金獅子……、エース・オブ・エースを打ち倒した奴ですよ」

「ラウ・ル・クルーゼか……、その者の名は？」
「キラ・ヒビキ」

一瞬、准将のオレンジの瞳が煌いた気がした。

「……どこか聞き覚えのある名だな」
「本人はヒビキ姓を名乗ってますが、本来はヤマトのはずです」
「ふむ……、それで？」

サハク准将のこの反応は……、キラ・ヒビキについて、何らかの情報を持っているのかも知れんな。

「ええ、それ程の腕があるのなら、保険的な意味で引き込んでおいたら、アメノミハシラの防衛に役立つかと思いましてね」
「だが、本人の意思を無視して、戦いに引き込むのか？」
「まさか、積極的に戦いに引き込む気なんて、更々ありませんよ。ただ、自分の住む場所を守る手伝い位はしてもらいたいなぁ、とは思ってます」

上手い足運びで立ち止まった准将はマントの下で腕組みをすると思案し始めたようだが、それも僅かで終わり、こちらを真剣な表情で見据えてきた。

「……ラインブルグ、引き込めると思うか？」
「予備役程度でなら、説得できる可能性はあるでしょう」
「む、その口調だと、お前が説得すると？」
「ええ、俺もヒビキとは話をじっくりとしてみたいとは考えていましたから、丁度いいと思いまして」

間に立ってもらうアルスターにはその事を伝えてあるので、都合

が合った時にでも場を設けるつもりだ。
「ふむ、応じない場合は？」
「はは、いざとなれば、俺やレナと同じような理由で突きますよ」
「……お前もあくどいな」
「いいじゃないですか、それ位なら。まぁ、先の戦争に少しでも関わった事を……、？お姫様？の口車に乗せられた事を恨むが良い、とでも嘯いて見せますよ」

んんっ、？お姫様？って確か……。

「そういえば、ミーアの声は？お姫様？に似ているし……、ミーアの奴に口真似させて、アルスターと離れている間、さり気に親密な関係を築いてましたというか、如何に？いちゃいちゃ？していたかってことをアピールしつつ、ヒビキが自分を捨てて他の女に走った事を恨む言葉を録音しておいて、言うこと聞かないとこれをアルスターに聞かせるぞ、なんて、脅すのもいいかも……」
「……加えて、意地も悪いか」

何を仰るウサギさん、決して負けられない交渉事に臨む時は、切り札の一つや二つを用意しておかないと駄目でしょうよ。

「……お前が何を考えているのかは大体解るが、程々にしておけよ？」
「いえいえ、あくまでも奥の手と言う名のジョークですから、大丈夫ですよ」
「なんとも、逆に不安にさせられる言葉だな」
「あはは、まぁ、刺激し過ぎない程度で収めますよ」

これでもザラ議長を相手に色々としてきたからな。

「ならば、任せるぞ」
「ええ、アメノミハシラに悪印象を抱かせないようにしながら、引き込みを仕掛けてみますよ」

さて、そろそろ、格納庫に着くかなってところで、サハク准将がさらりとこう言った。

「ラインブルグ、そろそろ、動く準備を始める予定だ」
「……わかりました、レナやマユラ共々、身体を本格的に作っておきます」
「詳細は追って伝えるが……、その時はお前の働きを期待している」
「はは、それに応えられたらいいんですけどね」

ザフト時代に、四月馬鹿のような戦争犯罪の一端を担った俺自身が背負った業の……、禊って言ったら、犠牲者に改めて祟られそうだが、とにかく、それに似たものでもあるというか……、まぁ、負わねばならない責任が消える事は無いだろうが、一時だけでも軽くなるような気分になれるからな。

その後は、サハク准将も俺も特に語らず、マユラやコードウェル妹が帰ってきているであろう格納庫を目指して通路を進み続けた。

31　軍神の舞踏会　―コンペティション　3

年新しくなり、C．E．73年。
当初の予定では年末年始なのだから、皆でまとまった休みを取ろうと考えていたのだが、宇宙軍にマリーネが採用されるか否かを決めるコンペティションが2月13日に行われる事、また、SKOへマリーネを納品したり、機種転換をするMSパイロットへの講習を行ったり、トツカ級のMS格納庫にM1アストレイ用整備施設を邪魔しないように整備補給設備を設置する等の兼合いもあって、休むことなく仕事を続けていたりする。

もっとも、そんな皆の頑張りのお陰で、コンペティション前にマリーネの現場運用をしてもらえた上に、宇宙海賊相手に実戦を経る事ができたのだから、悪くはないと思う。

いや、どこの軍にも採用されていないのに、実戦を経ると言うのも変な話かもしれないが、ラインブルグ・グループからSKOへの支援と言う形だから実現できた事だ。
ちなみに、モルゲンレーテの方でもムラサメの宇宙仕様である【オオツキガタ】をロールアウトしており、こちらもSKOに何機か支援供出して、実戦評価を依頼したようだった。

でもって、マリーネを実際に運用してみた現場からの声というか、パイロットや整備担当者、指揮運用者のそれぞれから評価や意見を聞いたのだが、好意的な意見と改善要求があがって来ている。

まず、実際に搭乗するパイロットに関してだが、肯定的な意見と

して、ＭＳに乗っての操縦時間が長くなってきたら自身の思い描く機動が実現できるようになったという意見を始め、半天周囲モニターのお陰で死角が少なくなったことが有難い、Ｍ１と違って重装甲に守られている安心感がいい、Ｍ１以上に自分の好みで副兵装を選べるのがグッド、なんて事が挙げられている。

逆に、否定的意見としては、高機動タイプを使うとＧがきつくてしんどいという意見を筆頭に、ビームアサルトのカートリッジ交換が面倒、いちいち副兵装を選ぶのが面倒、対ビームシールドのシールド面をもっと大きく取って欲しい、なにか隠し武器が欲しい、という意見が述べられている。

これらの対案としては、新規耐Ｇスーツの開発、カートリッジを使わない機体依存型ビームアサルトの検討、任務に合わせた副兵装パックの考案、シールド面を広くしたシールドの再設計、ニードルガンを開発して篭手に装備する、という事が決められている。

次に整備担当者の声だが、肯定的意見としては、面倒臭いと思っていた副兵装の換装作業が実は容易だったとか、部品のモジュール化が進められている為、交換した後、ゆっくりと不具合を直せるのがありがたい、補助ＡＩの機体不具合の自己診断システムには助けられる、ＢＯｕＲＵを現場に導入して欲しい、なんて内容が上がってきている。

その逆の否定的意見だが、副兵装が多すぎて管理が大変、部品の数によっては置き場に困るかもしれない、補助ＡＩの自己診断システムは整備の腕を落しかねないから考え物、副兵装の換装作業に時間が掛かるという声があがっている。

これらの声に対する改善案として、副兵装用収納コンテナの開発、適切な部品数の割り出し、補助ＡＩの信頼性向上、整備補給設備の効率化、なんて事が出されている。

最後は指揮運用者の声になるが、肯定的意見として、状況に応じ

て、副兵装を換装できるから便利、稼動時間が長いから運用しやすい、との回答が寄せられている。
　一方の否定的意見だが、副兵装の換装作業に時間が掛かる、使わない副兵装も出てくるかもしれない、との事だった。
　で、対案だが、先にも挙げた整備補給設備の効率化、搭載する副兵装の適切な数値の割り出しが考えられている。

　……まぁ、改善点に関しては、正直、運用側で何とかして欲しい点も幾つかあるのだが、こちらが売り手である以上、ある程度は応えていかないといけないだろう。

　なんてことを自身の中で改めて確認した所で、第五開発部の一室に設けた臨時オフィス、その情報端末上に視線を戻す。

　実は、グループ上層部との追加予算を巡る交渉で一定の成果……、シールドの再設計及びニードルガンと副兵装用収納コンテナの開発用予算を引き出した御褒美的に、ちょっと休憩をとっていたのだ。
　でもって、その休憩ついでに、マリーネ関連で忙しかった為に疎くなっていた世相を再確認しておこうと思い、去年の十二月分のニュースペーパーを読み返したり、ネットで情報を漁るなどして振り返っていたのだ。

　俺が見た限りでは、今の所、世界は安定へと向う兆しが見受けられるように感じられる。

　その理由の一つは、？プラントの魔女？ことアイリーン・カナーバ再開発局長が、Ｌ１を源とするデブリベルト及び宙域内部暗礁帯の除去と世界樹コロニーの再建を宣言したことだ。
　この宣言に対して、世界各国は広報を通じて、賛同や支持を示し

ており、対プラントで最も敵対的な大西洋連邦ですら、歓迎の意を表明している位だ。
　でも、その各国が好意的な姿勢を表した影響は大きく、プラントに対して、戦時程ではないものの、強硬的だった地球市民の間にも融和的な空気が流れ始めている。

　まぁ、世を斜めから見ている俺から見れば、世界各国が揃って歓迎や賛意を示した事の方が不気味に感じてしまうというか……、まさかとは思うのだが、？魔女？を恐れたなんてことはないよな？

　いや、口一つで地球連合を崩壊させたんだから、？魔女？が怖いのはわからなくもぉっ！

　い、今、誰かに見られていたようなっ！

　……。

　だ、誰もいないよな？

　……。

　うん、このＬ１の動きに関しては、歓迎しますです、はい。

　……げふげふん、さて、理由の二つ目だが、地球はユーラシア大陸西方域で起きていた戦乱がユーラシア連邦の敗北……、ユーラシア連邦と東アジア共和国が西ユーラシア連合と中東イスラム同盟を国家として承認する形で終了したのだ。
　この結果、先のユニウス条約での戦力比率事項も各国の承諾を得て改定され、元はユーラシア連邦が３だった所を、ユーラシア連邦が２、西ユーラシア連合が１、中東イスラム同盟が１という形で治

まっている。

まぁ、大西洋連邦から見れば、ライバルであるユーラシア連邦が弱体化することになるし、プラントから見ても、潜在敵国の戦力が増えたとはいえ、旧理事国である一つの大国が三つに割れて、その隙を突き易くなったのだから、歓迎したというあたりだろう。

そういった事に加えて、サハク准将の話だと、オーブ宇宙軍はＬ３に巣食う宇宙海賊掃討の準備に入るみたいだし、このまま世界が安定に向えばいいんだけどなぁ。

っと、そろそろ、パーシィやシゲさんに追加予算が降りた事を伝えに行かないとな。

◇　◇　◇

２月１３日。

アメノミハシラが管轄する宙域の一部……、アメノミハシラを支える太陽光発電パネル群から最も離れた座標にある訓練宙域を使用して、オーブ国防宇宙軍が主催するコンペティションが開かれる事となった。

今回のコンペティションに参加するのは、現行主力機であるＭ１アストレイ、俺達が出すマリーネ、モルゲンレーテが送り出したムラサメ及びオオツキガタであり、それぞれを艦載した部隊や自企業の母艦が訓練宙域に展開している。

俺も整備スタッフと共に、技研が所有している中古の輸送艦に乗り込んでいるのだが、コンペティション開始まで時間がある為、展

望休憩室で、一人で会場となる訓練宙域を眺めていたりする。

……実は、いよいよ、この時が来たって感じで、自分が搭乗して操縦するわけでもないのに、酷く緊張してしまっている。

その気持ちを抑えるか沈める為にも、現場から一旦離れさせてもらったのだ。

内向きに沈みそうになる思考を落ち着かせる為にも、意識的に訓練宙域を観察していると、そこには早くもＭＳの性能を客観的に評価する目的で使用される多くの観測用衛星が漂っていたり、射撃目標に使われる標的やドローンが配置されていたり、至近で対象の観測を行うチェイサーを務めるらしい数機のＭ１アストレイが、自身の機動を確認する目的かはわからないが、飛び回っていたりしているようだ。

……んんっ？

出てくる時はわからなかったが、訓練宙域の向こう側というか、アメノミハシラの傍に、妙に大きな代物があるんだがって、待て待て、今は関係ない事だ。

俄かに見知らぬ物に興味を惹かれてしまったが、今現在、やるべき自身の仕事を思い出し、もう一度、意識をコンペティションに引き戻す為、訓練宙域に視線を戻す。

今回のコンペティションにはサハク准将が旗艦イズモに座乗して立会う為、宇宙軍でも運用が開始されたトツカ級二隻とハガネ級八隻の他、防衛隊のＭＳ隊も周辺に展開しており、ちょっとした緊張感が付加されていたりする。

……あまり落ち着いていないが、ここだと更に緊張しそうなので、そろそろ戻ることにする。

ぐっと心胆に力を込めてから、マリーネが収まっている整備格納区画に向う途中、そのマリーネについて考える。

今回、コンペティションで使用するのは、全ての状況に対応できる基本兵装……主兵装としてビームアサルトを装備し、両肩に電磁式対ビームシールド、右腕に対ビームコート篭手、左腕に対ビームコートシールド、両大腿部に高硬度ナイフラック、両脹脛部に対物破砕榴弾パック、腰部マウントに装備なし……を装着したノーマル仕様であり、最も使いやすいと思われるタイプなのだが、装備しているシールドをＳＫＯでの現場運用で出た意見を反映させるべく再設計した物が間に合った為、以前の【ＲＳＩ－ＡＢＳ０１】ではなく、シールド面を広く取った【ＲＳＩ－ＡＢＳ０１Ａ】が装備されており、更に防御力が上がったと言えるだろう。

……まぁ、改修に使える時間が僅かだったので、ニードルガンの装備は見合わせたが、現段階でやれる事はやったので、後は結果を見届けるというか、パイロットを務めるユカリ・コードウェルの腕次第である。

そのコードウェル三尉の腕だが、攻撃距離の遠近に関わらずというか、主要な攻撃手段である射撃と格闘、双方でほぼ同じ位の力量であり、得手不得手がない実に汎用的なパイロットに成長を遂げていたりする。これは恐らく、射撃を得意とするレナと格闘を好むマユラの双方から師事したことが、上手く絡み合って成長に繋がったんだろう。

加えて、生来のものらしき負けん気によって、鉄の心臓、あるいは、毛が生えているのでは、って思ってしまうほどに度胸があったりするから、末恐ろしい。

なんというか、、あの三尉の負けん気というか気概は、初めて配属された時のレナに通じるものがあったと言っても過言ではないだろう。

そんな感慨を胸に、格納庫の扉を潜り抜けると……。

群青（マリーネ）の海兵が屹立して、出番の時を待っていた。

「シゲさん」
「おう、お帰り、アインちゃん」
「ああ、ただいま」

例の如く、ラインブルグ技術研究所の略称が入ったツナギを着込んだシゲさんが、ハード側を担当してきたプロジェクトメンバーを動かして、最終チェックをしている所だった。

今日はハード面が主体であることに加え、何らかのアクシデントで重大事故が起きる危険もある事から、計画？2のパーシィとソフトウェアの責任者であるミーア、テストパイロットや事務を担当するレナは第五開発部で留守番をしていたりする。

「調子はどう？」
「良好の一言だね」
「それは自己診断プログラムの結果？」
「もちろん、それも使ってるけど、ちゃんと自分の目と耳と手で確

認しているから、安心してよ」
「はは、それは間違いなく安心だ」

全ては俺やレナといったエルステッドＭＳ隊を支えてきた実績と信頼だ。

「で、パイロットの調子は？」
「ああ、ユカリ嬢ちゃんなら、ほら、ハッチの所」

おやおやぁ。

「アーガイルが捕食される寸前？」
「ぷはっ、い、言い得て妙だね」

パイロットスーツ姿のユカリ・コードウェルが引き攣った顔のサイ・アーガイルに何事かを迫っているようで、傍らで浮かんでいるマユラはそれをニヤニヤして見ているって感じだな。

そんな具合で、コードウェル妹の猛アタックへの対応に苦慮しているアーガイルだが、何気にソフト、ハード共に扱えるという不得手のないパーシィと同じタイプだから、色々と使えて、助かるんだわ。

「しかし、なんとまぁ、余裕だこと」
「でも、緊張し過ぎるよりも健全だし、いいでないかい？　それにしても、ユカリ嬢ちゃんは、本当に、アーガイルの事が好きなんだねぇ」
「まぁ、アーガイル本人は、姉の方が好みかも、って言っていたりするけどな」
「それはそれだよ」

確かに、人の好みは人それぞれだ。

「さて、そろそろ、開始時間が迫ってきているし……、ちょっと、コードウェル三尉を焚き付けにじゃなかった、激励にいくとするかな」

「……アインちゃん、程々にしておいてよ？」

「わかってるって、やる気を刺激するだけだから」

「ならいいけどさ。んじゃ、アインちゃん、俺も、チェックに見落としがないか、もう一回見てまわるよ」

「あ、うん、よろしく頼むよ」

再度、床面を強く蹴って、マユラ達がいるマリーネのコックピットハッチを目指すことにしたら、早くもマユラがこっちに気付いたようで手を振ってきた。なので、こっちも軽く手を振り返しているうちに、ハッチに到着することになった。

「アインさん、休憩はもういいの？」

「ああ、ちょっと、リラックスできたよ。……それで、アーガイル、準備はできているのか？」

「ええ、ユカリさんが乗り込めば、いつでも起動できます」

「わかった。……コードウェル三尉、調子はどうだ？」

「はい、調子はいいです」

……そういえば、ここ最近、コードウェル妹は、負けん気はよく見せるが、以前のような敵愾心を剥き出しにするような事はなくなってるな。

「なぁ、コードウェル三尉、少し聞きたい事があるんだが……」

「なんでしょう？」

「お前さんが、今、一番、何が欲しいのは何だ？」
「……アーガイル君が欲しいです」
「ちょっ！」

ほほぅ、ストレートだねぇ。

「うーん、流石の俺もアーガイルをやる権利はないから、それは自分で口説き落としてくれ」
「もちろん、欲しい物は自分で手に入れます」
「うん、それがいいと俺も思う。んんっ、それで本題なんだが……、今回のコンペティションで傍目でもわかる程の良い成績が残せたら、景品として、アーガイルの有給休暇と、俺のポケットマネーから丸一日分のデート用資金を供出しようかと考えているんだが、どうだろう？」
「しゅ、主任っ！」
「乗りましたっ！」
「ええぇっ！」
「よろしい、実に覇気のある、よろしい返事だ。……では、三尉、期待している」
「ええ、その期待に応えて見せましょう！」

しかし、コードウェル妹も初めて会った時には堅物ぽかったのに、この変わり様……、いやはや、時に、恋という物は人を変えるということだな。

「よし、マユラ、俺達は先に管制室に引き上げよう」
「うん、わかった。……ユカリ、あんたならできるから、自信を持ってやりなさい」
「はいっ！」

元気一杯に返事をしたコードウェル妹が綺麗な敬礼をして見せたので、こちらも答礼を返し、場を後にする事にした。

「しゅ、しゅにいいいいーーーーーーんっ！」

背後で、アーガイルが何か抗議するような叫びをあげていたが、野郎なので当然の如く、無視である。

さて、コンペティション、良い成績を残せるといいなぁ。

32　軍神の舞踏会　―コンペティション　4

今回のコンペティションで評価される項目は多岐に渡るのだが、その中でも最も代表的な物を挙げるとなると、主にスラスターの速力や加速性、推力重力比といったものが影響する機動力、主兵装を始めとする運用兵装や火器管制システムを見る攻撃力、敵からの攻撃に対応する防御力の三点だろう。

また、その他の項目としては、どれだけジェネレーターやエアー、推進剤が持つかといった継戦能力やレーダーやセンサー、通信機器等の探知通信能力、ＭＳならではの細やかな運動性、最も重要な操縦性、どんな操縦にも安全に応える安定性、敵から身を隠す隠蔽性、貴重なパイロットを保護する生存性、今後の発展素地を考える拡張性、生産に掛かる資材や時間というコスト面である生産性、現場での運用に重要な整備性、その機体にしかない特色を見る特異性、数を揃える上で重要な一機当たりのお値段、等々が列挙される。

これらにおいて、総合的な評価が高ければ、より良い機体と判断される事になる。

でもって、うちのマリーネなのだが、俺としては、防御力と継戦能力、運動性、操縦性、安定性、生存性、拡張性、整備性には自信があるのだが……、宇宙軍の皆様からはどのような評価が得られるか、楽しみでもあり、不安でもある。

そんな思いを胸に、艦内部に即席で設けられた管制室で、マリーネの管制を務めるアーガイルが指示や情報を送って支援したり、シゲさんを筆頭とするプロジェクトメンバー達がマリーネや他の？ラ

イバル?達のデータを収集したりしているのを、形式上だけは監督しつつ、スクリーンの中で四機種のＭＳが機動しながら、ドローンを次々に撃破してるのを、何かあった時に走り回ってもらうマユラと共に見ている。

……その四機の内、やはりというか、現行機種であるＭ１アストレイの動きが固くて遅いようだ。

「はぁ、Ｍ１も良い機体だし、改良もされているはずなんだけど、新しい技術が導入された機体を比べると、見劣りしちゃうなぁ」

「やっぱり、マユラはアストレイに愛着があるか?」

「うん、もちろん」

Ｍ１アストレイか……、機体素性的には、発展形としてムラサメが開発された事を考えると、悪くはないと思うし、それぞれ独自の開発ドクトリンがあるのは判っている。マユラから聞いた、そもそもの発想である、機動力を持って攻撃を回避するって考え方自体も間違ってはいないのだが、装甲をあまりにも軽視しすぎている嫌いがあるんだよなぁ。

本当に、パーシィやシゲさんから、アストレイの装甲は近接防御用の機関砲にも耐えられないかもしれないだなんて事を、簡単な説明付きで聞かされた時には唖然としたからな。

つか、オーブみたいな島国が防護力の弱い機体を運用するなんて、おかしいんじゃないか?

普通なら、本土に上陸される前に迎撃する為にも、グーンやゾノみたいな水中戦用ＭＳか、水陸両用のＭＳを作った方が理にかなっていると思うんだが……、まさかとは思うが、必要や需要を無視して、スタイリッシュな機体をデザインしたかったとかだったら、家

を焼け出された市民から見たら、笑い話にもならんだろうなぁ。

しかし、このアストレイってのも、俺が前世で見ていた某ＳＦアニメの主役機に似てる気がするんだが……、話を聞く限り、ヘリオポリスでクルーゼ達が奪取した試作ＭＳとこいつのプロトタイプが、同じ場所で同時期に開発されていたらしいから、似ていてもおかしいことじゃないだろう。

話を戻して、俺達が作ったマリーネは宇宙での運用を前提に作っている影響で、重すぎて地上では使いにくいはずだ。もしも、仮に運用を考えるなら、内部に収まっている強力な冷却システムを簡易な物に取り替えたり、スラスター及びバーニア、プロペラントタンクの配置を考え直したり、数を減らすだなんて、大幅な改修が必要になるだろう。

けど、まぁ、地上みたいな重力環境下だと、基本的に戦車とかバクゥみたいなのを使った方が無難だし、おそらく需要はないはずだ。

ふっ、所詮、ＭＳ等、この時代の徒花なのだ、なんて気取ったフレーズが脳裏に浮かんでしまい、それを相殺する為にも、ひゅー、俺、なんかカッコいいぜっ、みたいな事を考えていると、俄かにマユラが声をかけてきた。

「アインさん、最近、マリーネに乗り慣れすぎて忘れてたけど、マリーネの反応って、速いね」

「反応速度か？　……あー、そういえば、間接部に磁気コートをしていたんだったな、すっかり忘れてた」

「……計画責任者がそれだと、拙いんじゃない？」

「いや、他の事がなんやかんやあったから、それらに気を取られすぎて、忘れてたわ」

本当に冗談ではなく、割と真面目な話で忘れてました。

「でも、ほら、一機だけ、図抜けて見えない？」

「うーん、贔屓目じゃないか？」

「贔屓目なしに動きが良いと思うんだけどなぁ」

……言われてみれば、そんな気がしないでもないかも？

「それに、ムラサメは姿勢制御に苦労しているし、オオツキガタは機動力に振り回されている感じがするもん」

「……確かに」

ムラサメは地上での運用がメインとして考えられたから、バーニアの配置があまりに宇宙には合っていないのようだ。一方のオオツキガタは有り余る推力を上手く利用できていないようで、動きに荒さが感じられるな。

「なら、運動性や安定性が評価されるといいなぁ」

「もぅ、アインさん。……不安な気持ちはわかるけど、いつものように自信を持って、でんと構えていてよ」

「……了解です」

うぅ、ヘタレでごめんなさい。

しかし、マユラの苦言の意味もわかるので、再度、下腹部に力を入れて、自分的には、キリッ、とした顔でスクリーンを見据えると、丁度、マリーネが破砕榴弾を放ったようで、ドローンを爆砕したところだった。

「ねぇ、アインさん」

「ん、なんだ？」
「ビーム兵装があるのに、何で、ＭＳ用の榴弾を作ったの？」
「……モルゲンレーテのバジルールさん、いるだろ？」
「うん」
「最終攻防戦で、あの人が艦長を務めていたアークエンジェル級とやりあってな、装甲がビームを通さなくて苦労したんだよ」
って、そんなに驚くなよ。
「アークエンジェル級って、浮沈艦って言われてるのに、やりあったの？」
「その時は、それが仕事だったからな。やらなければならないなら、やってみせるしかないさ」
おっと、今度は擦れ違い様にドローンをビームサーベルで切り裂いたか。
「はぁ……、一人でアー……ンジ……級を……詰め……って、アサギか……いたけ……本当だ……んだ。そり……アサ……って興……持つは……わ」
「んっ？　マユラ、何か言ったか？」
「あ、こっちの話」
「ならいいけど……、やっぱり、最大のライバルは、オオツキガタだよなぁ」
まず、機動力は間違いなく上だし、攻撃力もレールガンを一門にビーム兵装を二門なんて備えているし、何よりも、ＭＡに可変できるのが強いな。
ＭＡに可変する事で全推力を無駄なく使えるから、スクランブル

かなんかの時はいち早く駆けつけて、相手の出鼻を挫く事ができるし、即応部隊から見たら、使い勝手が良さそうだ。

……でも、あの可変の仕方って、どっかで見た事があるような、気がするんだが？

どこでだったかなぁ？

……。

むぅ、思い出せ……あ、あれだ、あれも某ＳＦアニメの続編で出ていたＭＳだ！

なら、大気圏の突破もやろうと思えばできるんじゃないかって、アニメと現実を一緒にしたら駄目って……、マリーネだって大いに影響を受けているんだから、別にいいか。

「アインちゃん、ちょっと」

っと、シゲさんが呼んでるな。

「どうかしたかい？」

「ああ、オオツキガタのちょっとしたデータが取れたから、見せておこうと思ってね」

「ほうほう、そりゃ是非にって、マユラ？」

「うーん、皆……が納得して……ら、別に……っても構……て言って……ど、肝……ンさん……う反……るの……ないし」

こりゃ、駄目だな。

「おい、マユラっ」
「ッ！　はいっ！」
「何か考えてたみたいだけど、問題でもあったか？」
「あ、いや、べ、別に、なにもないよ」
「……ならいいけど、今はこのコンペティションに集中してくれよ？」
「……ごめんなさい」

小さくなって謝ったマユラの頭をポンと軽く叩いてから一撫でした後、シゲさんの所に一跳びする。

「何かあったかい？」
「いや、何か別の事を考えてたみたいだったから、注意してたんだ」
「ん、そうかい。なら、話というか、これがマリーネとオオツキガタ、ムラサメ、アストレイとの比較データね」

……ふむ、一目見た感じ。

「アストレイには総合的に勝ってるって感じかな？」
「まぁ、後発だから、それ位は達成しないと、採用なんて夢のまた夢だよ」
「はは、確かに」

よって、アストレイを除いた三機を対象に個別項目を見ていくと……、攻撃力はオオツキガタがトップで、マリーネとムラサメがほぼ同等と出ている。次の機動力もオオツキガタがトップで、次いでムラサメ、マリーネの順だ。

「攻撃力と機動力は、やっぱり向こうだね」

「ＭＡ可変機はそれが一番の売りだしね」

次の防御力は、実際に攻撃を受ける事になっている為、テストの一番終わりに回されているから、生存性と併せて最後になるだろう。

更に細かな項目に入って、継戦能力だが、これはマリーネがトップで、オオツキガタとムラサメが同等になっている。

「やっぱりジェネレーター積んでると強いな」

「アインちゃん、そりゃそうだよ。バッテリー機は機種によってはビーム兵装の動力源として、メインバッテリーを使っているのもあるし、多用しすぎると継戦限界が早くなるさ」

「パイロットから言わせれば、メインバッテリーがなくなるなんて事は滅多にないと思いたいね」

第二次ヤキン・ドゥーエ防衛戦でビームライフル用のバッテリーを切らした事はあったが、メインはちゃんと残っていたからな。

なんて事を内心で嘯きつつ、探知通信能力に目を通すと、オオツキガタがトップで、次いでムラサメ、マリーネになっている。

「このセンサー系が強い辺りは、ＭＡでの運用をメインに考えているってことかねぇ」

「一撃離脱かな、シゲさん？」

「うーん、どちからと言えば、機動砲撃戦じゃないかな？」

シゲさんの言葉になるほどと頷きながら、次の項目に目を向けようとすると、運動性、操縦性、安定性の全てでマリーネが断トツでトップ、次いでオオツキガタ、ムラサメのようだ。

「これは補助ＡＩが機能してるってことだね」
「ああ、ミーアちゃんとナナちゃんのお陰だよ」
「いやはや、あのミーアがこんな大仕事を為し遂げたんだから、ほんと、昔からは想像できないよ」

まぁ、口ではそんな悪態めいた事を言っているが、本当は嬉しかったりする。

……んんっ、次の隠蔽性だが、これは三機共に廃熱を抑えるといった事がメインの為、それほどの大差はないようだったので、次の拡張性に目を移す。
これは、ジェネレーターの存在とマッシブな機体デザインからマリーネがトップで、オオツキガタとムラサメはほぼ同等らしい。

更に生産性と整備性、一機当たりの値段というかコストだが、俺達にはわからないので排除して、特異性になるのだが、これはオオツキガタとムラサメの両機に軍配が上がっているだろう。

「しかし、ＭＡへの可変機とは思い切った事を考えたよねぇ」
「たぶん、本国を焼かれた結果から導き出したんだよ」
「……確かに、その経験から考えたら、国土から離れた地点で迎撃するのが一番だろうね」

そう、島国は国土に上陸される前にこそ、頑張らないとな。

「だね。だから、モルゲンレーテ本社も、その内、水中戦か水陸両用のＭＳを開発するかもしれない」
「はは、アインちゃん、うちも海兵（マリーネ）なんて名前を付けてるんだから、考えてみるかい？」
「いや、もし考えるとしても、先にＢＩの水中戦仕様を開発して、

技術力を積んだ方がいいと思う」
「ありゃ、考えていたんだ」
「もちろんさ。……まぁ、需要があればの話になるけど、開発原案は考えておいてもいいとは思ってる」
「なら、海兵計画が終わって手が空いたら、第五開発部で色々と考えてみるよ」
「ああ、頼むよ、シゲさん」

シゲさんにそんなお願いをしてから、再度、コンペティションの話に内容を戻す事にする。

「それで、シゲさんはこのコンペティションの結果、どう見る？」
「そうだねぇ、テスト内容の成績自体はかなり良い方だし、アストレイよりも全ての面で上回っているはずだから、通常タイプとして採用される可能性は高いと思うよ」
「……だといいけどなぁ」
「不安かい？」
「いや、アストレイって、オーブが一から開発したようなものだからさ。それを捨てて、マリーネを採用するかなって思ってしまったりもするんだよ」
「ああ、なるほど。確かに、心情的な面って奴も無視できないよね」

まぁ、賄賂みたいな癒着はないみたいだから、裏取引めいたことはないだろうけどな。

「でも、ほら、その辺は俺達にはどうしようもないことなんだしさ、採用される事を信じて、結果を待つしかないさ」
「確かに。……じゃあ、シゲさん、テストはまだ続くけど、以後もよろしく」
「おう、任せときなって」

シゲさんの返事を聞いた後、元の位置というか、普段の勝気さがどこかに行ったかのように萎みつつもマリーネの動きを注視しているマユラの隣に移動して、スクリーンに目をやる。

ランダムに動き回っているドローンをビームアサルトの速射モードで削っていき、機動力が大きく落ちた所を通常のライフルモードで撃破していた。

「上手いな」
「うん、レナの指導が上手だったからね」

あらら、声にも張りがない。

「……マユラ、さっきの注意だけど、そこまで深刻になる必要なんてないぞ？」
「……わかってるけど、ああやって、アインさんに注意されたの、初めてだったから」
「あれ、そうだったか？」
「そうなの。本当に、普段、滅多に怒らない人から怒られるのって……、しかも、それが好きな人からだと……、こたえるね」
「そんなもんかねぇ」
「うん、心がね、キュッと縮んじゃったもん」

……普段の勝気さとは裏腹に、弱々しい言葉を吐く姿を見る限り、マユラって、精神面が打たれ弱いのかもしれない。

マユラの迷い子に似た弱々しい姿に心底から庇護欲が湧き出てきて、思わず抱き締めてしまいそうになるが、誰もいない状態ならともかく、流石に今の状況ではできない。

「……あ」

なので、シゲさん達からは見えないように、自分の身体で隠して、マユラと手を繋いでみる。

……まぁ、これ位なら許されるだろうさ。

その後もテスト項目は順調に消化されていき、防御力を測るテストでも大きな事故も起きることなく、無事にコンペティションは終了と相成った。

……うーん、サハク准将の事だから、我が模擬戦の相手をしてやろう、だなんて言って、出てくるかもしれないと身構えていたんだけど、結局、出てこなかったな。

いや、それが普通といえば普通なのだが……、何気に、そういうことをしかねない人という印象があったから、ちょっと意外だった。

まぁ、それはともかくとして、結果が通達されるまで、マリーネが宇宙軍に採用されるよう、我が母に祈りを捧げておくとしようかね。

33　変化する日常　―予備役召集　1

2月13日に行われたコンペティションの結果は一週間後に通達されることになっていたのだが、その通達が来るまでの間に、世界でとんでもないことが起きた。

コンペティションの翌日、即ち2月14日に、旧地球連合に加盟していた各国で同時多発的にテロが発生し、総計で数百人単位での死傷者が発生したのだ。

しかも、ユニウス・セブンへの核攻撃に対する報復であるだなんて声明が報道や政府機関に送り込まれるオマケ付きだから、もう、テロの実行犯や背後の組織には、ふざけるなっ、としか言えない。

だいたい、この手の問題を起こす輩はユニウス・セブンへの核攻撃が非道だと……、まぁ、確かに民間人への攻撃は非道だとは思うけど、とにかく、ユニウス・セブンへの核攻撃を錦の御旗に掲げているが、それの報復として行ったニュートロンジャマーの無差別散布の方が、それ以上に遥かに、民間人への犠牲を強いた非人道的な行為であり、局外にいた中立国までも巻き込んだのだから非倫理的だろうに、自分達の都合の悪い部分には目を瞑るから困る。

そもそも、核攻撃の報復はニュートロンジャマーの無差別散布で晴らされてた上に、それ以上の怨みを買っているというのに、まだ、復讐を叫ぶか、という呆れた感情しか浮かんでこないし、いい加減、止めてくれと言いたい。

いや、それは家族や親しい人の命を唐突に奪われた悲しみはそう簡単に癒えることなんて……、癒える事はないだろうけど、その復讐の為にテロを起こすってのも極端過ぎるとしか言いようがない。

これも所詮は、身内に犠牲者が出ていないから言える言葉なんだろうけど……、いつかのゴートン艦長の言葉を借りれば、たとえ、張り倒されようが、それでも誰かが声を出して言わなきゃならないだろうってことだし、どこかで歯止めを……、理性で歯止めを掛ける必要があるはずだ。

でも、人って、その理性を簡単に振り切る事が多いし……、俺自身の少なく狭い経験上でしかないけど、ナチュラルよりもコーディネイター、特にプラント生まれに、その傾向が強いような気がする。

これは俺の想像でしかないのだが、コーディネイターという存在が歪であるというよりも、プラントの教育が能力主義を優先し過ぎて、精神面での成長を疎かにしている所為なのかもしれない。

はぁ、カナーバ女史が動いたお陰で世界に融和的な空気が流れ始めて、ようやく、世界状況が安定へと進み始めたと思っていたのに……、本当に、嫌になる。

とにかく、この連続多発テロで関与を疑われたプラントは、各国に特使を派遣したり、保安局に各国への情報提供を命じたり、在外プラント市民に相手を刺激するような事を言わないように釘を刺したりする等、テロへの関与を否定し、事態の収拾を図る為に奔走しているようだ。

また、ここアメノミハシラでも宇宙港や周辺宙域で厳戒態勢が布かれ、出入港審査も厳しくなっているお陰で、宇宙港は人で溢れているし、貨物ターミナル港も検査を待つ貨物コンテナが増えてきている。ラインブルグ・グループでも原材料や資材の遅配が多くなって操業が滞ったりして困っているから、本当に迷惑千万な話だ。

◇　◇　◇

２月２０日。
連続多発テロから波及した混乱による遅滞もなく、コンペティションの結果が宇宙軍より通達された。

その結果は……。

「「マリーネの、宇宙軍での採用を祝して、カンパーイッ！」……一言も話させないのもどうかと思うの」

……と、喜ぶべきことに、マリーネは国防宇宙軍とＳＫＯに主力機として採用される事になった。

その通知を通信ではなく、わざわざ技研内の第五開発部まで通達文書を持ってきてくれた、アサギ・コードウェル一尉……コードウェル姉の話によれば、当初における宇宙軍の予定では、モルゲンレーテが開発したオオツキガタとＭ１アストレイによる役割分担と連携が考えられていたらしい。
だが、アメノミハシラにおいてはモルゲンレーテと肩を並べるラインブルグ・グループが本格的にＭＳの開発に乗り出し、Ｍ１アストレイよりも継戦能力が高く、防御力に優れ、操縦性や生存性も良好なマリーネが登場した事で話が変わったそうだ。

軍内でも、コンペティションが行われるまで、機体性能的に上回り、何気に整備性も優れているマリーネを採用しようとする派と現場での互換性や新規調達に掛かるコスト的に、また、実績があるモルゲンレーテが作るアストレイのままで良いとする派に分れて、喧々諤々の討論が繰り広げられていたらしい。

その流れを一気に変えたのが、コンペティションで如何なく性能を発揮して魅せたマリーネの雄姿と、テストパイロットを務めていたとはいえ、士官学校を卒業して一年程度のナチュラルがそれを為したという事実だったそうで、あの一日で、殆どのアストレイ派が転んだとのこと。

曰く、整備で問題があるならオオツキガタと住み分けたらいいんだ、Ｍ１も今運用しているノーマル型は輸出している南アメリカへ安く売ればいいし、宇宙用のＡ型はオオツキガタとの共用パーツもあるから部品取りに使うか、ジャンク屋辺りに、武装解除して建機として売れば良いじゃないか、うん、とのことらしい。

こんな対案が直ぐに出るなんて、何となく、心情的に反た……、いや、買ってくれるなら、もう別にいいや。

とにかく、マリーネの生産母体となるラインブルグ宇宙工業は、国防宇宙軍及びＳＫＯから防衛隊や艦隊護衛用に百八機の大型受注を得ることになり、関連企業はお祭り騒ぎで対応を進めているとの事だ。

ちなみに、ＭＡ可変機としてはモルゲンレーテ支社のオオツキガタが採用されたそうで、旗艦や今後運用される予定のＭＳ母艦で使用されるとのことらしい。

まぁ、何にしろ、この大成功で終わったと言える海兵計画が終わった事で、これで俺が立てた一連の軍需参入計画が終了する事になるが……、しっかりとした足掛りが……、結果が残せて良かったとしか言いようがない。

そんな訳で本社近くにある研修施設にて、これまで頑張ってくれたプロジェクトメンバーを集めて慰労会を兼ねた祝宴を開いたのだが、どこから聞きつけてきたのか、愉快なおっさん連中もといグループの重役連中が差し入れを大量に持って押しかけてきて、いつもの如く、混沌の宴となってしまった。

プロジェクトメンバーからみらば、一つの大きな仕事が終わって、ようやく息を抜けるという所に、自分が所属している会社の親玉が出張ってきたんだから、気を休めることなんてできないだろうが、直接的に顔と名前を憶えてもらえるチャンスだと思ってもらう事で諦めてもらおうかね。

まぁ、とにかく、今回の計画で責任者を務めた俺は、プロジェクトメンバーの一人一人に世話になった礼を言う為にお酒を注いで回っているので、いつものように、おっさん連と馬鹿騒ぎはしていない。

「おうおうおう、兄ちゃんよぅ、俺らの酒が飲めんのかぁ？」
「いや、その……」
「あ、あのっ！」
「んーーーー？　なんだい、嬢ちゃん」
「ちょっと待って下さい！　お酒なら私が「おい、彼女にそんなこと言われてどうすんだっ！」」

「や、やだ、彼女だなんて、そんな……」
「んなっ！　ゆ、ユカリさんは、その彼女じゃ……」
「似合いじゃねぇか。ほれ、……目と目があう、……手と手があう、って、やってられっかぁっ！」
「がぎぎぎ、若造の癖に見せ付けてくれちゃってぇ！」
「最後にあんな事をしたのは……、う、ううう」
「んーーーー、皆、どうする？」
「存分に飲んでもらえば、俺達の心も晴れるんじゃないか？」
「「そうだそうだっ、そうだぁっ！」」
「しゅ、しゅにーーーーーーーんっ！」

これも全ては希少な身代わり（サイ・アーガイル）のお陰だ、感謝しよう。

……なんて事を考えているが、実はもう、メンバー全員の所に回り終わっており、今は会場の片隅で腹を膨らませるべく、レナ達が取り皿に奪取してくれていたソーセージやポテトガレット、ピザ、サモサ、酢豚、から揚げ等々を口に運んでいる所だ。

「先輩、今日は、絶対に、飲みすぎたら駄目ですからね？」
「レナの言う通りよ。私も？初めての経験？がお酒臭いなんてのは嫌だから、ちゃんと控えておいてね」
「うんうん、今日のメインはこの後なんだからね、兄さん」
「わ、わかってるって」

慰労会が始まる前から、レナ達から何度も念を押されているのだが、だからこそ、尊い犠牲をおっさん連に差し出してきたのだ。

「まぁ、お前達も、お疲れさんだったな」
「ふふ、先輩の為……、と言うよりも、今後の私達の為ですから」
「うん、レナから、私達との関係を真面目に考えているの聞いて、本当に嬉しかったわぁ」
「通りであれだけお風呂場で誘惑していたのに、兄さんが手を出さなかった訳だって、納得したもん」
「……ミーアの攻めはかなり的確だったので、今後は自重するように」

まったく、どうして、ここまでエロい子に育ってしまったのか……。

「んんっ、とにかく、今日は後片付けしなくていいから、先に帰って良いぞ」
「えっ、いいんですか？」
「ああ、今日は、おっさん連を引き取りに来てくれる奥さま連がやってくれるそうだ」
「アインさん、本当にいいの？」
「いいさ。……女の方が準備に時間が掛かるんだろう？」
「うーん、なら、今日は、先に帰るね」
「はいはい、風呂でゆっくりとお肌を玉の様に磨いてくださいな」
「ふふ、なら、先輩、色々と準備しておきますから、楽しみにしていて下さいね」

そんな返事をレナから貰った後、パーシィが呼んでいることに気付いたのでそちらに向かう事にする。

「ああ、楽しみにしている」

◇　◇　◇

「……なぁ、俺の部屋のベッドって、こんなにでかかったか？」

酔い潰れたアーガイルを送ると名乗りを上げた、ギラギラと目を光らせているコードウェル妹に約束のデート資金を渡し、また、パーシィ達二次会に行く連中にも軍資金を渡してから見送り、おっさん連を引き取りに来た奥さま連の手伝いで会場の後片付けも終わらせてから家に帰ってきたのだが、自室のベッドが……、今朝まではシングルだったはずのベッドが……、何故か、ダブルが二つ並びそうな程の、キングサイズになっていたりする。

「あは、アインさんを驚かそうと思って、私達のベッドを運んできたの」

「ええ、先輩が帰ってくる前に、みんなで協力して運び込みました」

「シーツも特注品で大きいのを、みんなでお金を出し合って買ったんだから、感謝してよね、兄さん」

いや、感謝する前に、クローゼット部分を開けられるように……って、開いたわ。

「ちゃんと開くから大丈夫ですって、先輩」

「うん、前もって計算しておいたから大丈夫だよ」

「あ、それとね、兄さん、お風呂もちゃんと用意してるから、いつでも入れるからね」
「わかった、って……、しまったな、避妊具を買ってくるの忘れてたわ」

……俺も、浮かれすぎてたって所かなぁ。

「ふふ、先輩のことだから、そんなこともあろうかと、買っておきました。それと、皆、エヴァ先生から身体に合った経口避妊薬を処方してもらって、飲んでますから、安心してください」
「わ、私もアインさんとの子どもは欲しいけど、まだ、早い気がするからね」
「うふふ、後、兄さんも避妊具をつけない方が嬉しいでしょ？」
「そ、それは何とも至れり尽くせりで……、参りました」

ミーアの言葉が俺の本音を見事に言い当てていた事から全面降伏して、とりあえず、風呂に入ってくるわ、だなんて言っている間に、更に夜も深くなり、本日のメインイベントに突入する事になる。

……。

これから始まる快楽を伴なう一時への期待感、はたまた、長きに渡って獲物を前に耐え続けてきた反動からか、非常に猛っている内の獣と今にも噴火しそうな我が息子を何とかコントロールする為にも冷水を浴びてから風呂を上り、いつもの寝間着姿で自室に入ったら、薄着で素足を晒したお嬢さん方が大幅に広くなったベッドの上で俺が帰ってくるのを待っていたようだ。

あ、息子が、また、元気に……。

「待たせたか？」
「ええ、本当に、長く、待ちましたよ」
「うん、こっちが焦れちゃう位にね」
「わ、私も……」

んん？

「マユラ、もしかして、緊張してるのか？」
「そ、そりゃ、初めての事だし……、わ、私が、その……、今日、一番、最初だから……」
「……あ～、もしかして、順番か？」
「ええ、先輩がお風呂に入っている間に決めました」
「一番目がマユラさんで、二番目がレナさん、……で、最後が私ね」

ミーアの言葉に頷き返しつつ、一番最初の相手となるマユラの隣に腰掛けると、ぎこちない動きながらもマユラが身を寄せてきた。

「え～、最初にマユラで」

隣に座って俺の肩に頭を預けながらも、どうやら、寝間着の下で普段以上に猛って屹立している我が息子を目撃してしまったのか、顔から肩口までを赤く染めたマユラがちょっと固い動きで頷いてみせる。

「次にレナ」

俺の言葉に応えて、だぶだぶのTシャツ……以前、ミーアが俺にと買ってきた十枚組の一枚で、何の因果か最も色物だった？助平心

?だった……を着て、ベッドの端で女の子座りをしているレナはニコリと微笑を見せるが……、いつもいちゃいちゃする時に見せる笑顔より、更に扇情的だったりする。

「んで、最後にミーアだな?」

うんうんと頷いたミーアが俺のお気に入りのTシャツ?大和心?を着て、ベッドの真ん中というか俺の前で仁王立ちして、例の如く大きな胸を張っているんだが、期待感で目がキラキラしているのはどうかと思う。

つか、これでいいのか?

「……何か、ムードがなくないか?」
「ふふ、なら、先輩が作ってくださいよ」
「まぁ、兄さんにできるならねぇ」

レナとミーアから発せられた手厳しいお言葉に何かお返してやりたい所だが……、内の獣もナイフとフォークをチンチンと打ち合わせながら荒々しく呼吸しているし、我が息子も元気一杯に即応臨戦態勢に入ってるから、後でタップリと?なかす?ことでお返しするというか、ほんとうに、そろそろ、俺の方が限界だ。

なので、じーっと、好奇と期待に溢れているレナとミーアの視線に晒されながらも、本格的に始動すべく、マユラの肩をあえて力強く抱き寄せる。

「マユラ」
「あ、ぇ、その」

ぎこちない動きのマユラの緊張を解す為にも軽いキスを、唇を除いた頬や首筋、時に肩や二の腕、鎖骨にまで、何度も何度も繰り返しながら、ベッドにそっと身体を押し倒します。そして、マユラの足の間に片足を差し込む事で、目的地への侵入路を確保する為にも、割って入りながら覆い被さり、残しておいた弾力のある艶やかな唇への深いキスに移行する。

ついでに言えば、キスの間にも俺の両手はマユラの身体を這うように走らせており、？無用心？と達筆で書かれたTシャツを捲し上げて、その下にある我が侭な膨らみを柔らかく揉んでみたり、その頂を軽く弄ったり、お尻や太ももの肉付きを確かめるように撫で上げたり、秘所を守る最後の砦であるショーツを取り除くべく動かしていたりする。

「ん、ぁっ！　アイン、さん……、んん……」

喘ぎに近いマユラの声が聞こえるが、最早っ、ここまできた以上はっ、問答は無用であぁーーーーーるっ！

……というわけで、本日のフルコース、美味しく頂かせていただきますです。

３４　変化する日常　－予備役召集　２

三月。

マリーネが採用されたあの日の夜、あの内の獣が激しく猛り狂い欲望の赴くまま、我が息子が大活躍した事で、レナ達の総身を色んなモノで？ドロドロ？にする程に非常に熱くも甘い時を共に過ごし、関係を一歩進めた俺達四人は、その後の夜も、その互いを想う情熱と溢れんばかりのパトスの赴くままに身体を貪るという肉欲に爛れ切った悦楽の日々を……、非常に残念な事に送ることは出来ず、新しい状況に置かれる事になってしまった。

……Ｌ３の制圧を目指すオーブ国防宇宙軍が予備役の一部を召集し、準戦時体制に入ったのだ。

この影響で、俺とレナ、マユラの三人は現役に復帰（？）することになり、サハク准将の直属というか、総司令部付という形で、【ＭＢＦ－Ｍ２】との型番を与えられ、配備が急がれているマリーネへの現役パイロット達の機種転換訓練や新人パイロット達の基礎訓練の教官役を担う事になってしまった。

その為、俺達はラインブルグ・グループの仕事から離れることになってしまったのだが、グループ内でこれまで俺が担当していた軍需関連部門は俺の権限……親父が掌握した開発の可否判断以外の全てをパーシィに委譲させたから、ある意味、俺が関わっていた頃よりも一層機能的になるだろうし、研究開発以外の仕事で忙しくなる

パーシィを補佐すべく、第五開発部の取りまとめをシゲさんが務める事になっているから、何の心配もしていないし、する必要もないだろう。

っと、その第五開発部の話で思い出したが、三月中旬頃に、宇宙工業というかラインブルグ・グループの軍需関連部門は、赤道連合政府及び軍部からマリーネを元にした陸戦用主力ＭＳの開発を依頼されるなんて、驚きの事態に遭遇していたりする。

その話が持ち込まれた頃、既に俺は宇宙軍のＭＳパイロット相手に鬼訓練を実施する日々を送っていて、その事実をリアルタイムで知らされることはなかったから、休日に会う機会があったパーシィとの世間話で、マリーネの陸戦型を開発することになっちゃったよ、と聞かされた時は、非常に驚いたものだ。

で、パーシィからの詳しい話を聞いた所、なんでも、諸般の事情でアメノミハシラを訪れていた赤道連合の国防次官や軍将官クラスが例のコンペティションに招待されていたらしく、その時にマリーネが魅せた力強さに惚れ込んでしまい、是非、我が国であのＭＳを導入したいという流れになったそうだ。

……つか、その招待って、サハク准将がＬ３再建と軍備拡張資金を調達すべく外貨獲得の為に仕組んだとしか思えないのだが？

もちろん、それを准将に聞くのは野暮ってものだから聞くことはしないが、とにかく、親父は昔からの盟友であるスズキ氏と相談し、客観的に見たグループのキャパシティとアメノミハシラや世界の状況を慮った上で、この案件を赤道連合に籍を置く企業との共同開発という形にして受ける事にしたらしく、パーシィに陸戦型マリーネの開発設計を始めるようにと指示を出したそうだ。

うーむ、トントン拍子に進んで行く、冗談のようで本当の話だから反応に困る。

でもまぁ、このように俺がいなくても以前のように会社は回っているので、……これはこれで切ないと言えば切ないが、安心して、日々、シミュレータールームで機種転換を行う連中の相手をしている所だ。

今も……。

「サイハッ！　さっきまでの威勢はどうしたっ！　もう反応が遅くなっているぞっ！」
「くっ、了解っ！」
「ワンッ！　お前の仕事は何だっ！」
「さ、サイハ二尉のフォローですっ！」
「なら早く動けっ！　フォローが遅いッ！」
「す、すいませんっ！」
「キタガワッ！　経験を持って若年の足りない部分を補うのがっ、ベテランであるお前の仕事のはずだっ！　サイハにもっと積極的に助言をしろっ！」
「はっ！　了解でありますっ！」

……なんて具合に檄を飛ばしている。

ちなみに俺以外の二人だが、レナは座学講習でマリーネの機体特性を教える事を、マユラは自身の訓練も兼ねて、別のシミュレーターで行われている一対一での対ＭＳ模擬戦闘での仮想敵を、それぞれ担当している。

まぁ、要するに、昨今、女性の力が強くなってきているとはいえ、軍隊では？なめられる？ケースが多い故の役割分担だ。

「おい、サイハっ！　俯角への警戒が薄いっ！　直に敵が来るぞっ！」

「ッあっ！　しまっ！」

……なーむー、リュウト・ライ・サイハ二尉は仮想敵であるストライクダガーの射撃を受けて、撃墜されました。

その後、新任である為、不慣れなワン・フゥイミン三尉への指揮継承が上手くいかず、部隊としての連携が欠けてしまった所、更に敵に詰められてしまい、ワン三尉を庇ったタスケ・キタガワ准尉が落とされた後、そのワン三尉も落とされるに至った。

それでも、キタガワ准尉を除く二人が実戦を経験していない事を考慮に入れて考えたら、昨日、訓練を始めたばかり段階では及第点だと判断できるだろう。

「三人ともシミュレーター訓練は一旦終了だ。別室で戦闘データを受け取り、撃墜された要因の究明と小隊連携の確認を行った後、戦術指導官に対策案を提出して、評価を受けろ。その後、第一重力区画《第一居住コロニー》で？回し車？を一周走った後、また戻って来い、いいな？」

「……了解です」

サイハ二尉が疲れ切った声での返事をした後、三人は敬礼し、まだ余裕があるらしいキタガワ准尉以外はフラフラと怪しい動きで、シミュレータールームを出て行った。

然もあらん、?回し車?とは第一居住コロニーの?地下?に設けられている幅二十m、高さ五m程の軍専用ランニングコース……、体力養成訓練施設で、一周は約十二?に及ぶからなぁ。

これも生き残る為の鍛錬だと、心中で手を合わせつつ見送った後、次の組がやってくるまでの時間を使って、L3に巣食う海賊の根絶と宙域制圧を目指すオーブ国防宇宙軍について、自身が把握した事を思い返すことにする。

オーブ国防宇宙軍はオーブ連合首長国が有する陸、海、空、宇宙、本土防衛軍の五軍の中の一つであり、総司令官であるロンド・ミナ・サハク准将の下、アメノミハシラに総司令部及び参謀本部を置いて、総務部、情報部、作戦部、兵站部、通信部、衛生部、教育部、技術部、監察部といった部局を指揮監督し、作戦部隊として二つの宇宙艦隊と一つの防衛隊、それらを支える後方支援部隊を抱えて運用している。

総司令部や各部局に関して言えば、宇宙軍全体の指揮統括を行うのが総司令部、各部局の長で構成され、総司令官であるサハク准将を多面的に補佐する参謀本部、宇宙軍の人事や保安、アメノミハシラの民政や軍内の庶務といった事を行う総務部、本国等から様々な情報を収集したり、防諜を担当する情報部、サハク准将を助けて作戦計画を立案したり、それを行う為に必要な訓練を計画したりする作戦部、作戦部隊が動く為のロジスティックを担う兵站部、ニュートロンジャマーによって著しく制限された通信手段や方法を効率化する通信部、軍内部の防疫や衛生管理を行い、軍医や衛生兵を掌握する衛生部、宇宙軍に配属された士官、下士官、兵卒に宇宙において必須な技能や知識を教育する教育部、宇宙軍で使用する技術の開発や採用された兵器が実用に耐えうるか、一定水準を保っているか

の検査を行う技術部、宇宙軍全体を律し、憲兵や軍法を司る監察部という具合だ。でもって、これら部局の長は、最高位である総司令官が准将であることから、基本的に一佐が充てられているらしい。

まぁ、とにかく、軍隊とは、一種華やかな（？）作戦部隊や地味だが存在感がある（？）後方支援部隊だけで成り立っているのではなく、先に挙げた様々な部局組織が複雑に絡み合いつつ、それぞれ専門とする所で力を発揮して協力し合って、部隊の人員を確保して給料払ったり、部隊に必要な情報を届けたり、部隊の作戦目標を設定したり、部隊に軍需品や日用消耗品、食料を送り届けたり、部隊の衛生環境を整えたり、部隊に配属される将兵を教育したり、部隊で使用する兵器や物品を揃えたり、軍人として逸脱した行為をしないように律したり、と作戦部隊や後方支援部隊が効率的に動けるように支えているというわけだ。

……本当に、以前所属していたザフトと比較して考えたら、比べもんにするのが申し訳ない気分にさせられる。

次に作戦部隊だが、宇宙軍の艦隊戦力……、二つに増えた艦隊はそれぞれ、第一、第二とナンバーを振られており、共にアメノミハシラを母港にしている。

第一宇宙艦隊は、イズモ級のネームシップであり、サハク准将が主に座乗するイズモを旗艦とし、宇宙軍の主力艦に位置づけられたトツカ級ＭＳ艦載型護衛艦が四隻、艦隊護衛艦艇としては少々力不足だがハガネ級護衛艦が八隻で構成されている。

この第一宇宙艦隊には、更にトツカ級四隻とモルゲンレーテが中心になって開発を進めているＭＳ母艦一隻が配属される予定であり、ラインブルグ宇宙造船が艦隊用護衛艦艇として開発しているクロガネが必要性能を満たすならば、ハガネ級と更新する可能性もあるそ

うだ。

また、もう一つの艦隊戦力である第二宇宙艦隊だが、これまでイズモとオーブ唯一の宇宙艦隊を構成していたイズモ級三番艦であるイナバを旗艦に据え、ハガネ級四隻で構成されている。

正直、艦隊と言うには脆弱としか言いようがないが、第二宇宙艦隊自体が以前の宇宙艦隊から分離して誕生したばかりの上、配属される予定だったトツカ級二隻をＳＫＯに獲られてしまった為、このような状態だとか。

この艦隊にも、トツカ級八隻とハガネ級四隻、更にＭＳ母艦配備する予定らしいが……、駐留拠点がＬ３になる為、本格的に戦力が整うのはＬ３制圧後になるかもしれない。

で、この艦隊整備について、気を許せるマユラがいる為だろう、二日に一度は必ず顔を見せるコードウェル一尉との世間話で知った事なのだが、当初、オーブ国防軍で採択されていた宇宙艦隊整備計画では、イズモ級を量産しての整備が予定されていたそうだ。

だが、絶大な攻撃力を誇るがコストがべら棒に高い陽電子砲を二門も装備し、旧連合軍が使用していた３００ｍ級……アガメムノン級が運用している物に匹敵する電磁カタパルトを新規開発して装備した影響で調達価格が高騰しており、早期整備はとても不可能だと判断されていたらしい。

しかしながら、アメノミハシラを取巻く世界は、流石に弱肉強食とまでは言わないが、以前起きたユーラシア連邦による侵攻が起きた様に安定しているわけではない為、敵戦力を迎撃する艦隊の整備は急務だったそうだ。

宇宙軍上層部が頭を悩ませる日々を送っていた所に、艦隊護衛用補助艦艇として想定していたトツカ級が護衛タイプから汎用タイプに変化している事を部下から知らされた技術部長が、参謀長主催の定期会議で、オーブ本国が焼かれた影響で、アスハ派が多数派を占

めるお上も沈黙している今こそ、先の艦隊整備計画を破棄し、新規艦隊整備計画の立案する事をサハク准将に提言する事を提案したらしい。

この提案は、信条的に相容れないアスハ派への反発に加え、トツカ級が調達価格がイズモ級の十分の一、運用人員も四分の一程度でありながら、艦隊戦を担えるだけの攻撃力と対ＭＳ戦闘も考慮した防御力、ＭＳ小隊を艦載できる等、小回りの利く運用性を備えている事もあって、参謀会議では珍しくスンナリと満場一致で通り、サハク准将に提言が為される事になったとのこと。

この参謀本部からの提言を受けたサハク准将は熟考の末、イズモ級を運用しないことで不足する艦載機を補填する母艦と艦隊護衛用艦艇の調達を含めた新規艦隊整備計画を立案するように指示し、結果、宇宙軍はモルゲンレーテにＭＳ母艦を、ラインブルグ・グループには護衛艦艇の開発依頼を出すことになり、これの対応に、当時の俺が忙殺されたという訳だ。

ちなみに、これらの艦隊及び機動戦力を整備する為に絶対に必要になる財源はどうやって確保したかというと、簡単な話、先の戦争でプラントと地球連合が相手方の通商破壊を回避する為に、それぞれが行っていた中立国を経由する中継貿易で荒稼ぎして、プールしておいた資金の半分程を使用したとの事らしい。

……こういう話を聞くと、戦争ってものが、当事者達ではなく、第三者が儲かるって事がよくわかるし、だからこそ、大西洋連邦が前年に起きたユーラシア動乱で暗躍したのだろうと、納得してしまうよ。

さて、お題を戻して、宇宙軍に一つだけある防衛隊だが、これはアメノミハシラを守備を担当する部隊であり、当然ながら、アメノミハシラに部隊拠点を置いている。

以前はもう一つ、Ｌ３のヘリオポリスを守る防衛隊もあったらしいが、ラウ……、クルーゼ隊の連合製ＭＳ奪取に伴なう戦闘で壊滅してしまった事に加え、ヘリオポリス自体が崩壊してしまう事態に陥った結果、今年の組織改編で正式に解隊されたそうだ。

そんな訳で宇宙軍唯一の拠点防衛隊であるアメノミハシラ防衛隊は、アメノミハシラ？内部？の治安維持は軍警察的な存在でもある保安隊が担当している為、アメノミハシラ？外部？での防衛を担当しており、一個ＭＳ大隊三十六機を基幹戦力として、早期警戒を担うノルズ及び十二個ＢＩ編隊百四十四機、アメノミハシラに備えられた近接防御火砲群、機動戦力の整備支援部隊で構成されている。

これらの戦力に艦隊整備に伴なって、余剰のハガネ級が発生した場合、沿岸警備ならぬ管制宙域警備用艦艇として配属される可能性も無きにしも非ずとのことだ。

更に今後予定されている所ではＬ３宙域の制圧が成功して、スペースコロニーの建設が始まった場合は、Ｌ３宙域防衛を担う防衛隊が新規に組織されるらしい。

いやはや、宇宙軍の組織形態や詳しい内情に疎かった俺に、短期間で理解できるよう、解りやすく語ってくれたコードウェル一尉には、本当に感謝しないといけないな。

今度、時間がある時でいいからって、断りをつけて、マユラ達と一緒に昼飯を奢るのもありかもしれない、なんて事を考えた所で、次の組がやってきたようだ。

……よし、頭を切り替えて、お仕事、頑張りますかね。

35　変化する日常　－予備役召集　3

時は流れて、早くも四月。
先月は、西ユーラシア連合とアフリカ共同体が相互支援を約する同盟を締結して、【地中海同盟】が成立したり、汎イスラム会議が中東イスラム同盟を吸収する形で【汎イスラム同盟】が誕生したり、プラントはＬ５でアーモリーワンなるコロニーが完成したりと再編と再建の動きが見受けられる月だったので、比較的落ち着いた日々だった。

だが、今月は頭から、いきなり、Ｌ４に駐留していた大西洋連邦軍艦隊がＬ１宙域近くで大規模演習を行った影響で緊張のスタートとなってしまった。
もっとも、その緊張状態は幸いな事に大西洋連邦軍が三日間の演習を終えた事で終了したのだが、その演習を観察していた宇宙軍に波及した影響は大きく、上層部は訓練計画を前倒しして、極限までパイロットを追い詰める長時間実機搭乗訓練のようなハードなものが実施されることになってしまった。
これにより、訓練を担当している俺、レナ、マユラの三人も忙しくなってしまい、落ち着いた？むふふ？な時間を取る事が難しくなるなんて事態に……。
それを埋め合わせる為にも、休日というか、休みの前日の夜から翌日の朝まで、四人揃って家に篭り、？むふふ？な時間を過ごしていたのだが……、今日は重要な事案がある為、猛りながら抗議の声を上げた我が息子には必ず悦楽の時間を提供することで、盛大に口を尖らせたミーア達三人にはそれぞれに指輪を送る約束をする事で、何とか宥めて、第二居住コロニー内部にある緑地公園に出向いてき

た。

まぁ、要するに……。

「お待たせしました。僕が、キラ・ヒビキです」

……以前からアルスターにお願いしていた、キラ・ヒビキとの会合だ。

「多分、アルスターから聞いていると思うが、改めて自己紹介しておくよ。俺はアイン・ラインブルグだ」

俺が差し出した手を、キラ・ヒビキはしっかりとした力で握り返してきた。

「ラインブルグさんと呼んでも？」

「ああ、構わない、君は……」

「ヒビキと呼び捨てで構いません」

「なら、遠慮なく、そうさせてもらうよ」

……さて、何から話せば良いものかと考えながら、手振りでベンチの隣に腰掛けるように促す。

「……」

「……」

むぅ、それなりに知っていても、こうやって面と向って話すのは初めての相手だから、話の糸口が見つかり難いなぁ。そんな話の切欠を探している俺を見兼ねたのかはわからないが、ヒビキから声を掛けてきてくれた。

「あの……」

「ん？」

「フレイから聞きました。あの戦争中からある程度落ち着くまでフレイを保護してくれた上に、帰国の段取りまでしてくれたって……、本当に、フレイを助けてくれて、ありがとうございました」

「いや、気にする必要はないさ。俺は、ラウから頼まれただけの事をしただけだからな」

「でも……」

「本当に気にする必要はないんだ。もし、感謝するなら、自爆寸前のアラスカからアルスターを連れ出した、ラウに感謝してくれ」

俺の言葉に、ヒビキは神妙な顔で頷いて見せた。

「さて、早速だが、今日、こうやって話をする理由……、話の本題に入っていいか？」

「あ、はい」

「なら、まず、一つ目なんだが、ヒビキ、このアメノミハシラを守る為に力を貸して欲しい」

「……具体的には？」

「国防宇宙軍の予備役になって欲しい」

俺の言葉を耳にしたヒビキは、沈んだ表情を見せた。

「僕は……、もう、僕は……、戦争は……、人殺しは……、嫌です」

まぁ、普通の感性を持っていたら、それが普通だろうなぁ。

「だろうなぁ」

「……戦えと、強制はしないんですか？」

「あ～、正直に言えば、強制はしたくないし、宇宙軍の一番偉い人からも、本人の意思を無視するなと言われている」

あれ、何か、微妙な顔をしてるな。

「てっきり、強制されるかと思いました」

「あ、いや、はっきりと言ってしまえばさ、無理にでもお前さんが自分から所属するようにしようと思えば、できるよ？」

「えっ？」

「要するに、アメノミハシラはお前さんをテロリスト扱いできるってことさ」

「……僕が、国家の後ろ盾もなく、戦闘をしたり、戦場に出たから、ですか？」

それはわかっていたのか。

「それもあるが、お前さんの場合は、プラントからはフリーダムを強奪した段階で追われる身だし、アラスカ戦で派手な立ち回りをした所為で地球連合軍……、それに加盟していた国からも犯罪者扱いされるだろう。連合軍に所属していた事実があるなら、脱走と裏切りによる利敵行為で銃殺さ。……オーブでの防衛戦以降に関しては、オーブ政府が自国軍に所属していたと認めれば、特に問題はないんだが、今の状況……、オーブ本国が大西洋連邦の支援を受けて、復興を図っている以上、オーブ軍がヤキン・ドゥーエでの最後の戦闘に介入した事実を隠したいだろうから、それも期待できないだろうな」

「やっぱり、そうなるんですね」

ほほぅ、自分がやった事は正しいんだっ、って強弁に主張するかなと思っていたけど、自分が置かれている状況を冷静に把握できているみたいだ。うん、時間が経って、省みていたのかもしれないな。

「まぁ、簡単な話、これを取引材料にして、問答無用で引きこむ事もできる」

「……ええ、そうですね」

……追い詰めすぎるのもアレだし、ちょっと、場を和ませてみるかな。

「後、それに加えて、ほら」

「……記録、媒体？」

「ああ、これも、ヒビキを更に追い……げふげふ、自ら、予備役に志願させる為の材料だ」

「えっ？」

おや、まぁ、男の顔をしているかと思えば、まだまだ、幼い顔を見せるじゃないか、なんて事を思いながら、記録媒体を携帯音楽プレーヤーにセットする。

「聞いてみるか？」

「え、ええ」

どうやら、嫌な予感しかしていないらしく、ヒビキは恐る恐るという素振りで、頷いてみせる。

では、ポチッとな！

『あぁ、キラ……、私という者がありながら、昔の女に走ってしまうなんて、あまりにも酷すぎますわ』

『……あの夜の、あの時の、あの情熱的な口付けは、いったい、なんだったのでしょう』

『キラ……、私を置いて、本当に、去ってしまったのですね。あぁ、キラ、独りで寝るのが寂しいです』

『何故、昔の女の元に……、キラ、あなたは、私の傍以外に居場所はないというのに……」

『キラ、待っていてくださいね。今すぐ、あのような昔の女から私の元に連れ戻して見せますわ』

主演女優ミーア、脚本マユラ、録音レナ、監修アーガイル、監督は俺でお届け致しました。

……って、ヒビキの顔が真っ青だ。

「どどどどど、どこで、こここここれををををっ！」
「いやいや、落ち着けって」
「ぼ、ぼぼぼぼぼくは、こここここんななな、おおおおお、おどどどどどどしににに……」
いや、そんなにガタガタと震えられると、こっちが焦るぞ？
「いや、落ち着けって、これは捏造品だ」
「え、えええええっっっ！」
あ、顔色が土気色から少しだけマシになった。
「でも、お前さん、今の反応っていうか、すぐに？脅し？と受け取るなんてさ、絶対に？お姫様？……、ラクス・クラインに何かやっただろう？」
「な、なにも、僕は、ラクスには、決して、なにも、やってませんよ？」
「いや、何故に疑問系な発音なんだ？」
「あ、そ、それは、と、特に意味はありません」
ふふ、残念な事に、君が？お姫様？と非常に親密だった事は、アーガイルの証言で割れている、とは言わず、とぼけた顔で話を進める。
「まぁ、これで、例の戦闘介入を主導した首謀者とされて、国際テロリストの認定を受けている？お姫様？と親しい仲だったと謀ることもできる」
「い、いえ、ぼ、僕は、そんな、ラクスとは、そ、そそ、そこまで親しくはないです」
「そうか。なら、別に脅しにもならんだろうし、これはジョーク・

グッズとして、アルスターに……」
「やややや、やめてくださいよっ！　フレイって、かなり嫉妬深いんですからっ！」
「なに、その身が潔白なら堂々としてればいいじゃないか。恋人の嫉妬くらい、受け入れる度量を見せろって」
「う、受け入れられませんよ。も、もし浮気したら、包丁でブスリか鋏でチョン、好きな方を選べって、フレイから言われてるんですよ？」

……ニヤリと、思わず笑う程に、面白い事を聞いた。

「そうなのか」
「ええ、そうなんです。だから……」
「あ～、さっきの録音はさ、別に根拠がないものではなくてな、お前さんの内情に詳しい奴の監修が入っていたりするんだわ。その証言込みでアルスターに渡すと、どうなるんだろうなぁ」
「ッ！」

あっ、また、青くなってきた。

「どうだ？　自分から予備役になりたくなったろう？」
「……うぅ、はい、僕は、国防宇宙軍の、予備役に、なります」
「おお、それはありがたい、って、言いたい所なんだが、こういうのはさ、自分の意思ってのも大切だと思うんだよ」

ああ、顔色が青から赤に一気に変わった！

ついでに、ヒビキの俺を見る目が厳しい！

「な、なら、最初からそう言ってください！　それと、あんなのを

作って、聞かせないで下さいっ！」
「わははっ、お前さんがどれだけアルスターに惚れているか、知りたかったんだよ。ほれ、媒体はやるよ。処分するなり、アルスターに平身低頭で聞かせるなり、好きにしなよ」
「……聞かせません、絶対に処分します」
しっかりと記録媒体を受け取りつつ、ヒビキは憮然とした表情を見せている。

「さて、そろそろ真面目な話をするとだな……、お前さんがその時に何を思い感じて、何を胸に行動を起こしていたとしても、国家の後ろ盾のないまま戦闘を行い、戦場に介入して敵対した事実は残る。そして、それは今の社会においては自らの主張を押し通す為の集団テロリズムに当たり、世間一般に犯罪とされる行為だ」
「……そうですね」
「だが、現実ではな、ケース・バイ・ケースという言葉があるように、なんとでもできることでもある」
「それは？」
「フリーダムを強奪した時、お前はまだ、連合軍に所属していたことになるだろう？」
「……おそらくですが」
「なら、敵本拠地から逃げ出す為にフリーダムを強奪したってことにすれば、何の問題もなくなる」

捕虜が逃げ出す努力をするのは、命懸けですが、ある種の義務です。

「アラスカの戦闘介入も、誰の指揮下にもなかった上、味方から攻撃されたが故の自衛とでもすればいい」
「そ、それは無理なんじゃ……」

「無理でもそれで押し通すんだよ」

いや、撃たれたから撃ち返すってのも、混乱した状況なら、ありえることだしね。

「んで、それ以降は、原隊に復帰したら、指揮官の判断で起こった脱走に巻き込まれてしまって、逃げ出す隙もないまま、止むを得ず、以後の戦闘に参加する破目になってしまったとすればいい」

「ただ、命令されて、やっただけだと？」

「その通り。……まぁ、実際は違うかもしれないが、そう言い張れる余地はある。そもそも、指揮官ってのは責任を取る為にいるんだから、全てを押し付けてしまえばいいさ」

だから、ザフト時代は本当に、しんどかった。

「プラントの最新鋭機だったフリーダムを奪取して、無視できない損害を与えた功もあるし、脱走の責任を指揮官に取らすことができたら、銃殺まではいかないはずだ」

「……そうすれば、ここでなくても、追われることなく普通に生きて行ける可能性があるということですね」

「ああ、そういうことさ。それに、地球連合が崩壊している現状なら、ＭＩＡ認定されているはずのお前さんが在籍していた事自体の記録が残っていない可能性も……、いや、流石にこれは期待できないかな？」

「いえ、ですが、ＭＩＡ認定を受けたままなら……、以後の行動は何とでも誤魔化せる」

「ははっ、そうだな。そもそも、世界各地で武勇伝を残してきたお前なら、生きていこうとする意志さえあれば、どこであっても生きていけるだろうさ」

さて、逃げ道は作ってやったし、説得にかかるか。

「ヒビキ、俺もお前と同じで、戦争は嫌だし、人殺しも嫌だ。……戦争も人殺しも嫌だと言ったお前さんなら、わかってくれると思うが、戦争とはいえ、人を殺した時、苦しかっただろう？」

「……ええ。僕は、自分と友達を守る為に、人を殺しました。けれど、周りはその事をよくやったと褒めて称えるだけで、人を殺した時に感じた思いを……、人を殺す苦しみを誰もわかってくれなくて……、本当に、苦しかったです」

「……それでいいんだ。……人は、人を殺した事に、いや、どんな生物であれ、生命を奪う事には、呵責を覚える位でちょうどいいんだよ」

ヒビキは静かに話を聞いてくれているようだ。

「だが、どんな理由であれ、生命を奪った以上、その生命の重みを背負って生きていかないといけない」

「……それは、絶対に負わないといけないんでしょうか？」

「ああ、負わないといけない義務、命尽きる時まで背負わないといけない重たい重たい義務だよ。……もっとも、今の世の中じゃ、それを蔑ろにしている奴の方が多いのが現実だけどな」

「じゃあ、ラインブルグさんは？」

「俺か……」

植樹されてからも、一年二年ほどだろうに、それでもしっかりと根を張っているらしい緑樹を眺めながら、続ける。

「俺は前の戦争で、お前以上に多くの人を……、恐らく、自分の手だけでも、軽く千人以上は殺しているし、部隊長として部隊を動かしてきた責も含めれば、直接的に関わったのは万に届くかもしれん」

「ッ！」
「ははっ、そんなに驚くなよ」
「あ、その、……すいません」
「いや、別に謝る必要もないけどな。まぁ、でも、それだけ多くの命を背負ってるからこそ、俺は今後の人生で、人の生活を、人の幸福を守りたいと思っているし、そうあるように努力していきたいと思っている。例え、自己満足だろうと、偽善だろうと、殺した連中やその遺族に怨まれようがな」
「……なのに、何故、軍にいるんですか？　軍にいなくても、人の生活や幸せを守れるはずです。それに？力？は持つだけで、人に不幸を、憎悪をもたらす可能性があります」
「軍にいる理由に関しては、俺もお前みたいな理由があって予備役になっていたからさ。今回の動員が終わったら、自分の会社に戻る」
……その時まで、会社に席が残ってればいいけどねぇ。
「後、？力？は必ずしも不幸だけを呼び込まないさ」
「ですが、それが理不尽に振るわれた時は……」
「ああ、被害が出るだろうし、それに伴なって憎悪も生まれてもくるだろうから、本来は存在しない方が良いものさ」
「なら……」
「でも、そんな理不尽な？力？を振るわれないようにする為の？力？でもある。お前さんも、アルスターを探す過程で、世界を巡って、力で解決しなければならかった事を何度か体験してきたはずだ。……世の中は奇麗事だけで通じるものではない、って、感じた事はなかったか？」
ヒビキは、小さく、頷いた。
「そう、奇麗事って名の理想は常に素晴らしい輝きを見せているが、

現実はもっと泥臭くて汚泥にも満ちているもんだ」
「……そうかもしれません」
「だったら、どうすればいい？　自分の愛する人を守るには、奪われない為には、どうすればいい？　悲しむべき事に、？力？を放棄する事ができない今の俺達は自衛の為の？力？を持つしかないんだよ。そして、？力？を持つ以上、それが存在する意味を知り、振るうべき時を見極めなければけれればならない」
「……存在する意味」
「ああ、今のお前さんならわかってると思うが、？力？ってのは、人の意志が加わる事で、初めて、プラスにもマイナスにも傾く物だ」
「……人の意志次第で存在する意味が変わる、ということですね」
「そうさ。人の意志、？力？を振るう意味を知っていて、自制を常に効かせていれば、立派な抑止力になるし、逆に？力？の持つ魔性に魅入られて、欲望のままに溺れてしまえば、ただの暴力に堕ちる、そんな存在なのさ」

ラウが遺してくれた言葉を使わせていただきました。

「人の、意志、次第」
「ああ。そして、少なくとも、今のアメノミハシラなら、理不尽な？力？を使うことはないはずだ。今回のＬ３制圧も地球圏全体の宇宙航路を脅かしている海賊の根絶が第一の目的だし、元々、あそこにあったコロニーや資源衛星はオーブのものでもあるから、自衛の範囲と解釈できるしな」
「……確かに、そうですね」
「それに、もしも、お前が予備役として参加してくれた後でも、アメノミハシラの？力？の振るい方に納得いかなければ、その時はアメノミハシラから逃げ出すなり、俺に噛み付くなりすればいい。まぁ、その時は、おそらく、俺もお上に噛み付いているだろうがな」

……そろそろ、もう一度、切り出してみるかな。

「ヒビキ、改めて聞くが、予備役として、非常の際、このアメノミハシラを守る事に、手を貸してもらえるか？」

「……少し時間を貰って、考えさせてもらっても、いいですか？」

おっ、ちょっと前進？

「ああ、もちろんだ。っと、念の為に言っておくが、この話を受けなかったとして、お前の罪を追及するような事もしないから、安心しろ」

「はい、それは、先程の話を聞いて、わかってます」

微かに笑みを見せたヒビキを見るに、先に見せた誠意（笑）は通じているようだった。

……さて、次を聞いておこうか。

「それと二つ目なんだが……、ヒビキ」

「あ、はい」

「ラウは……、お前さんがあの戦争で最後に戦った、ラウ・ル・クルーゼは強かったか？」

「……何故、そのことを？」

「あの時、お前さん達二人の会話を偶然にも聞いていたからさ」

「……そう、ですか」

「それで、どうなんだ？」

「ええ、あの人は今まで出会った誰よりも？強い人？でしたし、僕がこれから生きていく上で乗り越えるべき人です」

「……そうか、お前さんに、そう言ってもらえるなら、ラウの奴もきっと喜んでいるだろうさ」

ふっ、まだまだ熱さが足りぬな、って言ってるラウの姿が目に浮かびそうなのは、ご愛嬌。

「ラインブルグさんは、僕が憎くないんですか？」

「はは、お前さんがうじうじとした奴だったら、間違いなく罵声を浴びせて尻を蹴り飛ばした上で、尻の穴に手を突っ込んで奥歯ガタガタいわせるかアフンアフンさせていただろうが……、今の、一人前の男の顔をしているお前なら、納得できるさ」

「……それって」

「ああ、ヒビキ、お前はラウの死をしっかりと背負っているよ」

……ヒビキは、何か、許しを得たかのように、少し明るい微笑みを見せた。

「っと、これで最後になるんだが、何故、姓はヤマトじゃないんだ？　あの最後の戦いの時に、自分はヤマトだって咆えてた気がするんだが？」

「それは……、あの人が言っていた僕の業を……、知らなかった僕の業を背負う為の、覚悟です」

「……そうか」

こいつも色々と背負ってるんだな。

「……さて、話はこれで終わりだが、何か、そっちから聞きたいことはあるか？」

「えと……」

「ん？」

「そ、その、しょ、初対面の人に、こ、こんな事を聞くのも不躾すぎて、ちょっと、アレかもしれませんが、ほ、他に相談する人がい

なくて、その……」

なんだろう？

「じょ、女性を満足させるには……、どうすれば？」

「……それはもしかして、夜の営みの話か？」

「……はい」

むぅ。

「そればかりはな～、十人十色というか、それぞれにあった形で、自学自習で頑張れとしか……」

「ええっ！　三人も同時に満足させているラインブルグさんならっ！」

「ちょっ、なにそれっ！」

「あ、その、フレイが、ラインブルグさんと付き合ってる三人から、とにかく？獣みたいに凄くて、毎回、先にダウンする？って聞いたって、言ってました」

お、おぅ、女同士のネットワークって、明け透け過ぎて、怖いっ！

「だ、だから、お願いしますっ！　教えてください！　も、もぅ、フレイからキラハヤイワッテイワレルノハ……」

「うー、あー、わ、わかった。わかったから、そんな悲壮な顔を見せないでくれ。こっちまで心が抉られる」

女にハヤイって言われて、男が目を虚ろにしたら、余りにも儚すぎるだろう。

「んっ、んんっ！　い、いいか、ヒビキ。どれだけハヤイって言わ

れても、常識的に考えて、常人の三倍ハヤイわけじゃないんだろうし、あまり気にし過ぎるな。そもそも、必ずしも遅いのがいいわけじゃないんだからな？」

「え、そ、そうなんですか？」

「ああ、そうなんだよ。まぁ、今は取り敢えずはそれで納得しておけ。で、今から俺が教える事なんだが……、簡単な対処法、いや、男としての心得えだな」

「心得え？」

「ああ、心得えだ。……いいか？　男ならな、まずもって、自分が気持ち良くなる事よりも、相手に気持ち良くなってもらう事を全ての基本として考えるんだ」

「相手に、気持ち良く……」

「そう、相手を気持ち良く昇り詰めてもらうまでは……、もちろん、男として辛抱堪らん気持ちもわかるが、どこまでも？我慢？の二文字だ」

「……我慢する。確かに、僕には足りていなかったかも」

「うん、心当たりがあるようだな。じゃあ、次に直接的に手を出す時の話だけどな、相手が意識して出す事ができる表面的な反応……特に声音や言葉に捉われずに、身体の反応……肌の色や発汗の量、ちょっとした反応を見て……」

　ってな具合に、悩める少年の夜のセイ活相談に乗ることになってしまい、個人的な友誼を結ぶ事になったのは予期せぬ事であった。

　でも、この会話でキラ・ヒビキが好感を持てる奴だってのがわかったし、本人以外からの情報も聞く限り、一日一日をアルスターと一緒に自分の足でしっかりと立って生きているんだから、アルスターの？お父さん？役だったラウの奴も及第点を出すだろう、うん。

36　変化する日常　－予備役召集　4

ＭＳパイロットへ訓練を実施する日々を続ける内に、五月になった。

世界は戦後一年以上を経過して、インフラの復旧も進んでいるようで、地球上にある各国メディアも集光型太陽熱発電所といったエネルギープラントの新規建設や衛生環境、食料生産の改善といった明るいニュースを提供してくれている。

また、アフリカで起きていた南アフリカ統一機構と地中海同盟の衝突が、地中海同盟軍の反攻、特にハイペリオンで構成されたマッドドック隊なるＭＳ隊が縦横に活躍した影響で、南アフリカが撤退する形……実質的な敗北で収束して、緊張状態にはあるものの、一応の落ち着きを見せ始めている。

この話の中で興味を引かれたのは、地中海同盟に採用されて大活躍をしているアクタイオン・インダストリ社製のハイペリオンが少数配備で止まっている所だろう。

これはパーシィ独自の伝手からの又聞きなのだが、どうやらハイペリオンの調達価格が非常に高いらしく、少数配備で止まっているようなのだ。なんでも、使われているバッテリーや機体制御関連に、ユーラシア連邦系企業の技術が使われているらしく、独立後にパテント料を大幅に引き上げられたからだとか……。

要するに、戦火を交えた仮想敵国家同士だし、ユーラシア連邦政府から地中海同盟へ嫌がらせをする為、それらの企業群へ圧力を掛けたって所だろう。

まぁ、それはそれとして、そんな風に表面的に落ち着き始めた世界とは対照的に、アメノミハシラにおいて、急ピッチで推し進められていた宇宙軍の戦力増強も、第一宇宙艦隊に既定数のトツカ級及びハガネ級が配備されたり、Ｍ１アストレイからマリーネ及びオオツキガタへの更新が進められており、組織拡張は順調にいっているようだ。

今日も、第一宇宙艦隊が慣熟航海として、アルテミス要塞を仮想敵拠点に据える事で、ユーラシア連邦から先の侵攻を受けたことへの仕返し、もとい、牽制を兼ねた演習で艦隊の練度を上げているらしい。

こうやって訓練段階が一段上がったお陰で、俺、レナ、マユラの三人が担当していた機種転換指導や新人講習も大幅に減る一方で、サハク准将の計らいもあり、重力区画の？回し車？やトレーニングルームで戦闘に耐えられるだけの身体作りに励んだり、自分達の勘を取り戻すべくシミュレーターで操縦訓練をしたり、連携の確認等をする余裕ができたのには助かった。

この訓練のお陰で、レナの射撃はますます冴えてきているみたいだし、マユラも中距離から近接戦での反応の良さは目を見張るものがある。ついさっきも、マユラ相手にシミュレーターでの模擬戦闘を繰り返していたんだが……、もう、俺とほぼ互角と言っても良い腕になってる位だからな。

「よし、マユラの咄嗟判断や機動も最初見た時とは比べ物にならないし、実戦に出ても敵のエースに出くわすか、アンラッキーショットでも喰らわない限り、落とされる確立は低いだろう」

「ほんとっ！」

「ああ、間違いなく、ザフト時代に率いていた連中並の腕になってるよ」

「あは、昔は下手で酷い操縦だなんて言われてたのに、今じゃ、疾走する狼（ラング・ウルブス）と同じ位なんて、なんか嬉しいな」
「でも、慢心はするなよ？　増長は容易に身を滅ぼすから、臆病ぐらいが丁度良いって、常に意識して、気を引き締めろ」
「あ……、うん、わかったわ」

ま、ちょっとした釘を刺しておいたら、被撃墜経験を持っているマユラなら大丈夫だろう。

「でも、マユラ、本当に頑張ったわね」
「そりゃそうよ、アインさんから、一定の技量レベルに達したと俺が納得しない限り、絶対に戦場には連れていかない、って、真面目な顔で断言されたんだからね」
「……俺としては、二人とも戦場に出したくないんだがなぁ」
「そんな事を言ったら、私達だって、先輩を戦場なんかに立たせたくないですよ？」
「そうよ。でも、そんな事を言っても、現実じゃ通らないから、どこまでも付いて行く事にしたの」
「……ありがとう、二人とも」

俺、マジで、果報者だわ。

本当に、今、物凄く二人を抱き締めて無茶苦茶に愛したく、って、いかんいかん、キス程度ならともかく、それ以上となると、流石にこの場所じゃできん。
いきなり暴走しかねない感情の手綱を引き締める為にも、ここは表情を意識して真面目なものに作っておこう。

「ねぇ、レナ。今、アインさんが厳しい顔してるのってさ」
「ええ、かなり色々と我慢してるみたい」

「……なら、今夜が楽しみかも」
「先輩の事だから、朝方まで寝かせてくれないかもしれないわね」
第三者がいないからいいものの、もしも、男連中がいたら闇討ちされかねない発言だよなぁ。
「あ、聞こえない振りしてる」
「マユラ、先輩はちゃんと意を汲んでくれるから、大丈夫よ」
「そうね、アインさんなら私達の想いを汲み取ってくれるはずよねぇ」
……ザラ議長、毎日毎晩のオツトメを欠かす事無く為されていた、あなたの偉大さ、今ならわかります。何度もからかって、すいませんでした。
「んんっ、話を元に戻してだな、今回の制圧作戦で俺達が動員される可能性はあると思うか？」
「うーん、私達は予備役動員ですし、通常は現役を優先すると思いますから、可能性は低いと思います」
「でも、レナ、私達って、総司令部付になってるし、コーネリアス級を拠点制圧部隊用以外にも準備してるって、アサギが言ってたじゃない。その事を考えると、可能性はそれなりなんじゃない？」
第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦で大活躍したコーネリアス級双胴型輸送艦を旧連合構成国から買い取っているとしたら……、動員される可能性も高くなってくるか。
「となると、出撃する可能性は高いと考えていた方がいいか？」
「ですね、そう考えて訓練しておいた方が、参加することが決まった後、慌てずにすみます」

「うん、私も今のうちに徹底して、落ちない戦い方を覚えたいわ」
「なら、マユラ、もう一戦するかって、コードウェル一尉？」

シミュレータールームの出入り口でアサギ・コードウェル一尉が所在無げにこちらを伺っていた。

「あ、ほんと、アサギさんだ」
「アサギ、どうしたの？　遠慮なんかしなくていいのに」
「あ、いや、その……、話に入り辛かったから、終わるまで待とうかなって」
「マユラの言う通り、別に遠慮なんてしなくていいぞ」
「ええ、アサギさんには、軍に関する事で色々とお世話になってますしね」
「そういうことだ」
「えー、何で、そこになんで私の名前がでないのかなぁ？」
「マユラは私達と一緒で馴染めてなかったからよ」

はて、コードウェル一尉はさっきから、じっと、俺とマユラやレナとのやり取りを見ているが、この表情は……、うーん、何か、思いつめてるのかな？

「コードウェル一尉、もしかして、具合でも悪いのか？」
「あっ、いえ、その、大丈夫です」
「本当に？」
「はい」
「なら、いいんだけど……、それで、今日は？」
「はい、サハク准将から言付を預かってきました。それと、これもお渡しするようにと」

コードウェル一尉が差し出したメモ用紙と変わらない紙を受け取

り、目を通す。

『キラ・ヒビキが職場を通じて予備役に志願した。説得、ご苦労だった』

そうか、ヒビキは決断したのか。

しかし……。

「前から言ってる気がするけど、これ位は別に通信でいいと思うんだけどなぁ」

「その、ミナ様は常々、軍内の雰囲気や些細な噂話を把握してこいと仰りますので」

「まぁ、それも道理と言えば道理か……、それで、言付の方は？」

「はい、お伝えします。Ｌ３掃討制圧作戦は今月末より開始する、この際、ラインブルグ三佐及びラヴィネン二尉、ラバッツ二尉は総司令部直轄の予備ＭＳ隊に所属してもらう、詳しい内容は正式辞令で知らせる、との事です」

「了解、Ｌ３掃討制圧作戦において、ラインブルグ及びラヴィネン、ラバッツは総司令部直轄の予備ＭＳ隊に所属するが、正式辞令に関しては追って通達する、だな」

「はい」

ふむ、予備ＭＳ隊ってことは、予期せぬ非常の際の備え、所謂、戦術予備って役所かな。

この際、折角だから、ちょっと色々と聞いてみるか。

「コードウェル一尉、この後の予定は？」
「ッ！　と、特に急ぎの用事はありません」
「そうか、ならコードウェル一尉が知っている範囲でいいから、俺達が乗る船や部隊に関することを教えてくれないか？」
「……わかりました。今回の作戦でラインブルグ三佐達が乗艦するのは、【ＳＣＭ－１１】ワダツミ級ＭＳ母艦の一番艦ワダツミになります。三佐とレナさん、マユラはＭ２マリーネで小隊を構成し、このワダツミの艦載ＭＳ隊に配属される予定です」
「わかった。それで、そのワダツミ……、いや、ワダツミ級ってのは？」
「はい、このワダツミ級はコーネリアス級をＭＳを運用できるようにＭＳ母艦として改装したものです。先の大戦後、旧地球連合軍が解体される際に余剰として放出されたコーネリアス級を八隻、ジャンク屋組合を通して買い取り、その内の四隻を宇宙軍技術部が改装していたのですが、先月、全艦の改装が終了しました」
「じゃあ、今回の作戦で初投入することになると？」
「そうなります。ですが、商船よりも頑強な輸送艦とはいえ、戦闘艦と比べれば防護性が脆弱ですし、積載スペースの関係でカタパルトを取りつけることも難しい為、実質的には戦域にＭＳを運ぶプラットフォーム程度の能力しか有していません」
「だろうなぁ。それで一隻当たり、ＭＳを何機艦載できるんだ？」
「簡易な補給設備のみでしたら、両舷に六機ずつで十二機、本格的な整備設備を有している場合は、半数の三機ずつになって六機です」
「……となると、改装された四隻は、本格的な整備設備を付けたタイプが一隻で、他の三隻は簡易タイプになるって所かな？」
「はい、一番艦ワダツミ以外の三隻、ウワツ、ナカツ、ソコツは簡易タイプです」
「それだと六機と三十六機の計算になるから、おおよそ三個中隊で一個大隊規模になるのか……、この部隊の指揮系統は？」
「ミナ様のお話では、ウワツ、ナカツ、ソコツの艦載ＭＳで一個大

隊を形成し、総合的な指揮は総司令部で、戦術的な指揮はそれぞれの中隊長に任せると言っておられました」
「なるほど、そこから外れた、員数外の俺達はどういう扱いに？」
「三佐達の小隊は、ソキウス小隊と同じく、総司令部直轄の独立小隊となります」
「……ソキウスか」

ソキウス……、ラテン語で戦友という名を持つ彼らは、地球連合……、いや、大西洋連邦の手によって生み出された、戦闘用コーディネイターらしい。
俺も初めて彼らに会った時、自発的な精神が死んでいるとしか言えない、生体機械のような在り方には大いに衝撃を受けて、サハク准将に詳しい話を聞きだしたが、本当に哀しい存在だとしかいいようがない。

彼らは元々、戦闘に適したコーディネイターを作る計画で生み出された存在なのだが、戦場で使えるようになるまでに掛かる時間やコストの問題で、計画は途中で打ち切られ、薬物による強化に切り替わった結果、他国から違法性を突かれないように隠す為、廃棄処分……、簡単な話、存在を抹消される運命にあったそうだ。

だが、その運命も紆余曲折を経て、地球連合軍からサハク准将の双子の弟で、先の戦争中に起きた事故で亡くなったというロンド・ギナ・サハクの元に引き取られ、彼の死後は、准将が彼らの身柄を引き受けたらしい。

本来、俺に説明する義務もないにも関わらず、ソキウス達の話をしてくれたサハク准将が、ただ静かに、あの者達の存在は禁断の果実に手を出した人類が背負うべき業の一つであり、我もあの者達を利用している以上は彼らを生み出した者達と同じく業を背負わねば

ならぬだろうと、淡々と話した事は今でも記憶に残っている。

……本当に、人の業というものの深さを思い知らされる話だった。

「ラインブルグ三佐、何か、不明な点でもありましたか？」

「あ、いや、それはないよ。それよりも、コードウェル一尉は何でも知ってるみたいに、即座に答えが返って来るから……、凄いと思ってね」

「ふふ、サハク准将付になってから、仕事に付いて行けるよう、寝る間も惜しんで宇宙軍に関する情報を集めて勉強しましたし、今も努力しますからね」

金髪を揺らして、嬉しげに微笑みを見せるコードウェル一尉だが、マユラから以前の小隊でリーダーを務めていたと聞いていたけど、この真面目さと優秀さを考えたら、納得できるわ。

「後、興味本位なんだけどさ」

「何でしょうか？」

「今回の作戦で動員される戦力については？」

「……ラインブルグ三佐だから言いますけど、絶対に、他では言わないで下さいね？」

「もちろん、コードウェル一尉には迷惑を掛けないよ。レナ、マユラもいいな？」

「……はい」

「……わかった」

んんっ、何だか、二人の反応が鈍い上に声音から拗ねたような感じがしたが？

その、ちょっとした違和感の正体を把握する為にも、二人を視野

に収めてみるが……、常と変わらないように見えるな。

「二人とも、どうかしたか？」

「いえ、別に何もありませんよ？」

「そうそう、気の所為じゃない？」

……うーん、聞き間違えだったのかな。

「まぁ、いいか。それで、教えてもらえるかな」

「はい、今回動員される戦力は、第一、第二の両艦隊と先程言いましたＭＳ母艦で構成される機動部隊、Ｌ３での拠点制圧活動に当たる？陸戦隊？を運ぶ揚陸部隊、補給物資を搭載した支援部隊で構成されます」

「艦隊は根こそぎ動員になるが、アメノミハシラの防備は大丈夫なのか？」

「防衛隊には、ラインブルグ三佐が開発指揮されたノルズがありますから早期警戒態勢も整っていますし、主力となるＭＳ大隊も一個あります。余程の事が無い限り、大丈夫だと思います」

「予備戦力は？」

「今は編成中ですが、オオツキガタで構成される即応中隊と慣熟訓練中のハガネ級が四隻あります」

「作戦開始時には戦力化が成っているってことか」

なら、艦隊が引き返してくるまでは、なんとかなるか。

「三佐は、アメノミハシラが攻められる可能性があると？」

「いや、そこまでは考えてはいないけど、ここには一般市民も多数住んでるし、何事も備えは必要さ。前のユーラシア連邦みたいな連中が出てこないとも限らないからな」

「そうですね、確かに考慮するべき事だと思います」

「ああ、だから、ノルズの観測防衛網にだけ頼らないで、より早く侵攻の兆候を見つけることができれば、上等だと思う。そうだな、コードウェル一尉は、何か対策案を考えたりしているか？」
「わ、私ですか？」
「ああ」
「……宇宙航路に出ているＳＫＯから各地の観測情報を送ってもらうのはどうでしょう？」
「うん、それだと得られる情報の信頼性は高いだろうね。他にも信頼性は低くなるけど、アメノミハシラに籍を置く商船組合から情報を集めたり、宇宙での物の流れを良く知っている商船乗りにそれとなく聞くのも手だと思う。まぁ、これくらいなら、既に情報部が収集に動いていそうだけどな」
「……どうでしょうか？」

あっれぇ～、どうして疑問系？

そんな俺の疑問を表情から見て取ったのか、コードウェル一尉は顎に人差し指を当てつつ、思い出すように話し始めた。

「アメノミハシラが民間にも開放されている関係上、うちの情報部は防諜に力を入れていますから、そこまで情報を集めているのかなと思いまして」
「……いや、それなら大丈夫だと思うよ」
「えっ、どうしてですか？」
「防諜に力を入れるって事は、物理的に外からの様々な人の動きを把握する面もある訳だから、自然と情報も把握しているはずだしな」

つまり、アメノミハシラという閉鎖環境上、入ってくる際に必ず一度は通る宇宙港に、情報部が常に監視の目と耳を置いていると考えてもおかしくはないってことだ。となると、多くの人が俎上に乗

せる、様々な情報を仕入れていると考えるのが普通だろう。
　いや、これも人手があって、かつ、上が細やかな情報も欲していればって前提が付く話だけど……、サハク准将が、コードウェル一尉を軍内のあちこちに動き回らせて、軍内の情報を把握している事を考えると、その辺の心配はいらないだろう。

「まぁ、コードウェル一尉は、これから宇宙軍でキャリアアップして行くかもしれないから、今の立場なら、色んな情報に触れる機会もあるんだし、自分なりに色んな問題の対策を考えたり、今後の世界情況を見通して、予算との兼合いを見ながら、軍備や訓練計画を立ててみるとか、色々と思考を働かせてみたらどうかな？」
「……私にできるでしょうか？」
「自分の中で収めるなら、誰の迷惑になるわけでもないんだし、やってみたらいいさ。その代わり、准将に上げる情報にバイアスを掛ける可能性も出てくるから、その辺りはよく意識して、ありのままを報告できるようにしないといけないけどな」
「……わかりました、やってみます」
「うん、頑張れ」

　サハク准将がコードウェル一尉をあちこちに送り込むのは、そういう期待を持ってのことかもしれない。また、特にそんな考えを持ってなかったとしても、コードウェル一尉の意識次第で、サハク准将を補助できる位に、大きく成長する可能性もあるからな。

「あの、それで……」
「ん？」
「私なりの考えを作った時は、聞いていただけますか？」
「ああ、でも、所詮、専門教育を受けていない、生言ってる素人だから、感想位しか出せないけどね」
「いえ、そんな……。では、その時はお願いします」

キリっとした顔のコードウェル一尉に頷き返すと、俄かにその顔が柔らかく崩れる。

「では三佐、今日はこのへんで……」
「ああ、サハク准将には連携訓練を主眼に置いて、鍛えておくって言っておいて」
「わかりました。それでは……、レナさん、マユラも頑張ってね」
「ええ、もちろんです」
「うん、わかったわ」

レナとマユラから返事を聞いた後、もう一度、こっちを振り返って微笑みを見せるとコードウェル一尉はどこか機嫌良く、部屋から出て行った。

「さて、二人と……も？」
「むー」
「ぶー」

訓練を再開する為に声を掛けようと思ったら、こっちを向いて、口を尖らせる乙女（偽）が二人。

「……何か、お前ら、さっきからおかしいぞ？」
「これは先輩に関わる事でもあるんですが……」
「うん、まずはミーアちゃんを含めて、こっちの意見を統一する事が必要だよね」
「何を訳わからん事を……、ほれ、そんな暇があるなら、訓練するぞ」
「……わかりました」
「……はい」

二人をシミュレーターに追い立てつつ、戦場に出る可能性が高い以上、三人の誰もが命を落とさない為にも、より一層の厳しい訓練が必要だなと、決意を新たにして、俺もシミュレーターに向かった。

もっとも、そのシミュレーター訓練で厳しく当たった反動からか、予定になかった?むふふ?が行われる事になり、テンションがずっと上がりっぱなしのレナとマユラを相手にした為、次の日、腰がちょっとだけ痛かったのは誰にも内緒だ。

37　安住の地へ　－Ｌ３掃討制圧戦　1

５月２９日。

宇宙軍の臨戦態勢が整った事を受けて、サハク准将はＬ３掃討制圧作戦を十日後の６月９日の実施することを世界に向けて大々的に宣言した。この宣言の中で、准将は掃討制圧作戦中、歯向かう者は容赦なく殲滅するとも述べており、公においては最後の警告となりそうだった。

もっとも、各国メディアは殲滅するという部分をただの脅しと受け取って伝えているようだが……、サハク准将の為人と宣言の際に見せていた苛烈な覇気と目力を考えれば、間違いなく本気だろう。

そもそも、今更逃げ出そうとしても、既に第二艦隊とウワツ、ナカツ、ソコツのワダツミ級ＭＳ母艦及び？陸戦隊？の一部が先行して、Ｌ３から地球、Ｌ４、Ｌ５に繋がる航路を封鎖しており、Ｌ３から逃げ出してくる連中を臨検し、武装していた場合は一時的に拘束して取り調べる為に、手薬煉を引いて待っていたりする。

この臨検でも停船命令を無視して強行突破を図ろうとした場合は二度の警告後、撃沈する方針を打ち出しており、既に二隻ほど沈められているとも伝え聞いている。

何事もそうだが、お天道様に恥ずることなく、疚しい事が無いのなら、堂々としていればいいだけの話だし、今の状況において逃げ出そうとするってことは、それだけで後ろ暗い事に関わっていた証左と言えるはずだ。

そういった後ろ暗い連中……、特にＬ３に巣食った海賊連中はここ一年、あちこちで欲望の赴くまま非道を為してきたんだし、それ

相応の因果応報という理を身をもって体感させるのは、欲望が暴走しやすい世の中に掣肘を加える為……、暴力には?力?でもって対応するという、一種の?正義?を示す為にも、必要なことだろう。

そんな思いを胸に、当直小隊に当たっている為、ワダツミの右舷MS格納庫脇にあるパイロット待機室にて、スクランブル待機しつつ、サハク准将の宣言を繰り返しているテレビニュースを眺めている所だ。

この当直任務は、ソキウス達で構成される【ソキウス小隊】と俺が小隊長を務める【ウルブス小隊】が交互で行っており、共に小隊を構成しているレナとマユラも一緒である。

ちなみに、俺が使う機体の色なのだが……、マリーネの通常カラーである群青ではなく、以前と同じく、派手な黄色であった事には、もしかしたら、こうなるかもしれないと予測はしていたけれども、気落ちさせられたものだ。

「本当に、何度見ても思いますが、サハク准将って、凄い存在感を持ってますよね」

「う、うん、そうだよね」

「……マユラって、サハク准将の話になると、時々、挙動不審になるけど、怖い人なの?」

「ま、まぁ、普段はそんなことは感じさせないけど、今回の宣言を見聞きしたら、ああ、やっぱり、サハク家の人だ、怖い存在だ、って思っちゃうわ」

ふむ、マユラにとって、サハク家ってのは、畏怖や敬遠の対象って所かな。

「レナ、マユラが言ってるが、サハク家ってのは、代々、オーブで

軍事を担当していたらしいんだが……、オーブ国民ってのが、ちょっと、平和ボケ的な気質を持ってるみたいで、敬遠される存在だったらしい」

「なるほど、平和ボケですか……、なら、マユラの反応も納得できます」

「ぶー、幾らなんでも、平和ボケはないよぅ」

「おっと、それは失敬」

おどけてみせると、マユラは尖らせていた口を元に戻しつつ、頷いてみせる。

「でも、アインさんの言う通り、国民に国防に対する理解があんまりなくて、軍なんて不必要だ、平和を希求するのに軍なんていらない、っていう空気はあったと思う」

「ああ、その通り。アスハが掲げた理想という綺麗な部分ばかりを見過ぎて、自分達の平和がどうやってもたらされているか、どうやって平和な空気が醸成されているのかを、サハクが固めていた現実の礎を忘れてしまっていたからこそ、オーブは世界の流れを読み誤って、本土を焼かれたんだよ」

「うぅ、アインさん、厳しい」

「っと、悪い悪い。別にマユラを責めたんじゃないよ」

どちらかと言えば、国を焼いて、国民に苦難の道を歩ませる事になった前指導層を責めている。その時に至るまで、どれだけ偉大だったとしても、国を焼いた時点で指導者としては失格だしな。

「もしかして、アインさんって、アスハ家の事、好きじゃないの？」

「うーん、ナチュラルとコーディネイターの共存っていう平和的な理想は嫌いじゃないんだけど、ちょっと奇麗事が多すぎる気がするなぁ。……少なくとも、他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他

国の争いに介入しない、なんて宣言はするべきじゃなかったと思う」
「でもさ、あの宣言をしなかったら、緒戦でザフトから攻められていたんじゃないかな？」
「いや、当時、プラントは理事国相手のような利害対立をオーブとは持ってなかったし、オーブ自体もコーディネイターを表立って虐待や差別する事もなく普通に受け入れていたから、侵攻する大義名分もない。だから、侵攻を受ける可能性は低かったはずだ。……まぁ、当時のザフト指導層も大概、頭がコーディ至上主義に毒されていたから、絶対なんて言葉は使えないし、攻められる可能性もあったろうけどな」

実際、ザフトが中立国だった北アフリカに侵攻した事を考えると、オーブに侵攻していた可能性もあるにはある。

「それでも、自分達の行動を……、選択肢を狭めるような宣言はするべきじゃなかった。小国らしく、地味に息を潜めて、外交によって地位の安定を図りつつ、勝ち馬に乗るか自国に戦火が及ばないようにすることだけに集中していれば良かったんだ」

これって、口でいうのは簡単だけど、古くは第二次世界大戦時のスペインや先の戦争において中立を守り通した赤道連合のようには、中々、運べないってことだな。

「そもそも、為政者ってのは、特に国家を指導する立場になると、自国民を守る事、富ます事を最優先に考えないといけないんだから、奇麗事だけを好む聖人君子じゃ、本来なら務まらない」
「……でも、前元首であるウズミ・ナラ・アスハには務まっていた。じゃあ、先輩、怖がられているサハク家って、もしかして」
「ああ、指導者が呑むべき清濁の？濁？を、人からは忌み嫌われる汚濁を、サハク家が一手に引き受けていたってことさ。まぁ、これ

もトップ以外が泥を被るっていう一つの施政方法なんだけどさ、だからこそ、俺は、その汚れ役を代々果たし続けていたサハク家に好感と敬意を持つんだよ」

俺も含めて、人って生き物は、他者に奇麗事を求める割に、自身の欲は満たそうとする歪な存在である事を考えると、サハク家もいい加減辞めたくなるような、色々と大変な思いをしてきただろうと想像できるから、余計にそう思う。

「もちろん、俺は元からオーブに住んでいたわけじゃないから、これまでのサハク家の姿を見てきたわけじゃないし、今、この時だけしか見ていないから、そういう風に捉えているだけかもしれない。それに、俺個人が持っている、空ばかり見上げて動く為政者よりも、地に足をつけて動いている為政者の方が好みだというバイアスも掛かっているだろう。でも、事実として、前代表が自身が掲げた理想に殉じて死んだ結果、国を焼かれた国民は混迷の中で困窮しているから、どうしてもサハク贔屓になるよ」

更に加えて言えば、本国において、新しく立った現代表が表立って、未だに活動を見せて……、いやいや、待て待て、現代表の詳しい近況も手に入れていないのに、予断は禁物だ。

それに今日、この日に至るまで、表立っての活動を聞かないのも、よくよく考えたら変な話だしな。

……もしかすると、復興を取り仕切っているセイラン家は、現代表を神輿程度に捉えていて、実権を与えていないのかもしれない。

つか、良く考えたら、俺、現代表のカガリ・ユラ・アスハの事、前代表の娘である、女である、ナチュラルである、ティーンエイジ

である、先の戦争の最終局面で軍事介入なんて無謀をしている、サハク准将が苦手である、位しか知らんわぁ。

むぅ、人物像を把握する為にも、一度、しっかりと調べてみないといかんなぁ。

「……んんっ、とにかく、これまでの政治体制が破綻したんだから、今までの役割分担も見直すなり、お仕舞いにするなりしてもいいだろうさ」

そう自論を展開し終わったところで、再び、レナが口を挟んできた。

「先輩、そう考えると、今回の作戦って、サハク准将にとっても重要ということですか？」

「だろうな。今回の作戦は、オーブという国家が地球圏で跳梁する海賊を根絶やしにして、居住コロニーを造る目的以外にも、准将個人として、オーブ国民や世界に新しいサハクの姿を示す意味でも重要だと思う」

今現在の、戦争の惨禍で地球自体が混乱に陥り、ユニウスの講和で地球連合も崩壊した結果、新しい秩序を形成すべく国家勢力の枠組みが再編成されている状況だけに、ザラ議長に劣らぬ覇気を持つサハク准将なら、道さえ誤らなければ、一勢力の指導者位になれるかもしれない。

「だから、艦隊を総動員したんですね」

「ああ、失敗する要因を極力減らす為にな。戦いってのは基本的に数の世界だからなぁ」

「……今から考えると、ザフトって、よくあの戦争を最後まで戦い

抜けましたよねぇ」

遠い目をするレナの言葉に頷き返し、シミジミしたレナの様子に引いているマユラに苦笑しながら、今回の作戦で動員された戦力を脳裏に浮かべてみる。

作戦に参加している部隊は、以前、コードウェル一尉から聞いた通り、Ｌ３宙域制圧の主戦力となる第一艦隊と第二艦隊及び不足している艦載機を補う為にＭＳ母艦で構成された機動部隊、Ｌ３の宙域拠点となっている旧ヘリオポリスと資源衛星の制圧を担当する？陸戦隊？の揚陸部隊、作戦を支えるという重要な裏方の支援部隊で構成されている。

これらの戦力を細かく見て行くと、第一艦隊……、オーブ国防宇宙軍第一宇宙艦隊は、サハク准将が座乗し、艦隊司令部に加えて今回の作戦を取り仕切る作戦司令部も置かれる事となった【ＳＢＭ－１１】イズモ級ＭＳ艦載型宇宙戦艦一番艦イズモを旗艦とし、【ＳＤＭ－１】トツカ級ＭＳ艦載型宇宙護衛艦が八隻、【ＳＦＥ－１】ハガネ級宇宙護衛艦も八隻で構成されている。

これらの艦艇に艦載されているＭＳは、イズモに【ＭＶＦ－Ｍ１２Ａ】オオツキガタが十二機、トツカ級に【ＭＢＦ－Ｍ２】マリーネが一小隊三機ずつで二十四機となり、計三十六機となる。

次にオーブ国防宇宙軍第二宇宙艦隊だが、旗艦に【ＳＢＭ－１３】イズモ級三番艦イナバを据え、主力艦艇となるトツカ級が四隻、補助艦艇のハガネ級が八隻で構成され、艦載ＭＳはイナバにオオツキガタが十二機、トツカ級に十二機のマリーネで計二十四機である。

また、本格的なＭＳ母艦が完成していない影響で、不足している運用艦載機を補填する目的で【ＳＣＭ－１】ワダツミ級ＭＳ母艦が

四隻で機動部隊が特別編成されているが、基本的に正規艦隊と行動を共にする為、護衛艦艇は配備されていない。現状も、ウワツ、ナカツ、ソコツは先の通り第二艦隊に随伴しているし、俺達が搭乗しているワダツミも第一艦隊と一緒にＬ３に向っている所だ。

機動部隊に配備されているＭＳだが、俺達が乗組んでいる一番艦のワダツミにマリーネが六機の他、ウワツ、ナカツ、ソコツの三艦に、全配備ＭＳをマリーネに更新したアメノミハシラ防衛隊から回された【ＭＢＦ－Ｍ１Ａ】アストレイが十二機ずつで計三十六機であり、総計で四十二機となっている。

これらの艦隊と機動部隊がＬ３掃討制圧作戦において、Ｌ３宙域の制圧と確保を行う主戦力といえるだろう。

そして、これらの艦隊戦力で宙域に巣食った宇宙海賊の艦船や機動戦力を掃討制圧した後、旧ヘリオポリスや資源衛星といった拠点を制圧する？陸戦隊？の出番になる。

イズモ級の直ぐ傍らでハガネ級によって厳重に守られている、？陸戦隊？を運ぶ揚陸部隊はワダツミに改装しなかった残りのコーネリアス級四隻で構成されており、モルゲンレーテ社製のパワードスーツ【タジカラ】を運用する重装甲歩兵中隊一個と空間機動歩兵中隊一個、装甲擲弾兵中隊二個、その他に独立戦闘工兵小隊等々が搭乗待機し、これらを拠点に送り込む為の装甲ランチと共に出番を待っている。

拠点制圧のメインとなる？陸戦隊？だが、？宇宙歩兵？というべき存在であり、クルーゼ隊によりヘリオポリスが襲撃された際、為すすべもなく翻弄され、最終的にコロニー崩壊という最悪の事態に至った事の反省から、サハク准将が参謀本部に対策を講ずるようにと指示を出した結果、従来あった？空間歩兵連隊？が大きく増強さ

れ、新たな名称を与えられたそうだ。

その?陸戦隊?に所属する各兵種の役割なのだが、重装甲歩兵はパワードスーツを着込み、ＭＳが入れないような場所で前線面に出て、防壁と重火器による攻撃役を担う?戦車的な?重装歩兵で、敵の攻撃から味方を守るべく矢面に立つなんて、多大な勇気と献身が必要になるポジションな為、?陸戦隊?でも花形になっているらしい。

また、空間機動歩兵は、陸軍の空挺部隊に相当する精鋭部隊であり、宇宙空間や無重量空間での作戦活動に長けている。要するに、空間を活用して敵の後方に浸透し、撹乱したり、破壊工作をしたり、重要拠点を制圧したりする存在だ。

後の装甲擲弾兵だが、陸の機械化歩兵と海兵隊を合わせた様な存在で、艦船から装甲ランチによって宇宙空間を移動し?陸?まで運ばれた後は何でもござれの多種多様な任務に当たる歩兵だ。その為、真空での活動も考慮して、宇宙服に銃撃に耐えうる装甲を施しているらしい。

ちなみに、?陸戦隊?で使われている装甲ランチ【オロチ】なのだが、俺とシゲさんがハガネの予備計画（笑）で作った魔改造ランチを更にハガネプロジェクトに参集していた有志達が、プロジェクト成功という乗りに乗った状態で熱く滾った血が導くまま、ラインブルグ・グループの根幹である?質実と剛健?を顕現すべく更なる改造を施して、売り込んだ物だったりする。

で、?陸戦隊?の熱い男達は、当初のコンテナ運搬ランチだった時の面影が無いというか、パッツと同じベースだと信じられないというか、とにかく、ジンの重突撃機銃弾が貫けない位に、爆発反応装甲や多層空間多重装甲を施した事で、?凄く分厚くて大きいです?としか言えなくなった骨太な逸品に、野太い嬌声をあげたり、頬擦りしたり、全身で縋りつく位に惚れ込んでしまい、ハガネ級の三

分の二程度の値段になったにも関わらず、二十隻以上も導入したそうだ。

……しかし、採用が決定した時の？陸戦隊？の様子を想像するだけで暑苦しくなる話だな、おい。

むさ苦しい上にむせる話から次に進めて、先の作戦部隊を動かす為に必要となる各種軍需物資や食糧、日用品等を前線とアメノミハシラを往還して補給し続ける支援部隊だが、宇宙軍が全部で十二隻保有している、Ｃ．Ｅ．５０年代の？ザ・ベストセラー？であるコペルニクス・エスパス・インダストリ社製のマルセイユ三世級輸送船（※注）と護衛に当たるハガネ級四隻で構成されている。

兵站を担う重要な部隊なのに護衛戦力が少ないのは、今回の作戦が組織立った国家間戦争ではなく、海賊掃討戦であることに加えて、防衛隊と艦隊からＭＳを出してＣＯＳＰ（Ｃｏｍｂａｔ　Ｓｐａｃｅ　Ｐａｔｒｏｌ：戦闘宇宙哨戒※適当造語）を行い、航路を確保する為らしい。

俺としては、通商破壊をやったことがあるだけに、例え海賊相手でも、もう少し護衛が欲しい所なんだが……、動員戦力自体がギリギリだろうしなぁ。

この辺は航路の確保と連絡線を維持する連中の頑張りに期待するしかないか。

「二人には今更だろうけど、作戦を開始する来月の九日までだって何があるかはわからないから、当直中だけは心構えだけはしておこう」

「そうですね」

「うん、わかった」

と二人には言ったものの、できれば出番が無い事を祈りたいのが、俺の偽りない思いだ。まぁ、二人の覚悟を知っているだけに、表には出さないけどな。

そんな事を考えつつ、機密性の高いパイロットスーツによって、よりスタイルが強調され、裸体とはまた違ったエロスが感じられるレナとマユラの姿を愛でる俺でした。

※注：マルセイユ三世級が架空の会社？コペルニクス・エスパス・インダストリ社？製というのは、捏造設定ですのでご注意ください。

38　安住の地へ　－Ｌ３掃討制圧戦　2

６月９日。
作戦開始までの一週間程、軽い体力維持トレーニングをする他は、ほぼずっと、待機室でレナ達と他愛も無い事を話す日々が続いていたのだが、ついに、サハク准将が行った先の宣言にあった通り、オーブ国防宇宙軍によるＬ３の掃討制圧が行われる日を迎える事になった。

しかしながら、宇宙海賊の力というか……、Ｌ３に巣食っていたアウトローの数が半端なかった。

「世の中、どうなってるんだ？　なんで、こんなに海賊がいるんだよ」
「まさか、五十隻を越えるなんて……、驚きです」
「しかも、武装している船が三十近くもあるなんて、絶対におかしいぞ」
「そうですね、先輩。それに、あの数なら、ＭＳかＭＡの数は……、大凡で二百近いんじゃないでしょうか？」
「そうだな。それ位、あってもおかしくは無い数だよ。しかし、今のＬ３を見ると、世の中が乱れると？ろくでもない？連中ばかり増えるって証拠だよなぁ」
「ですね、国家権力の力が及ばないＬ３は、犯罪者や脱走兵が逃げ込むのに最適でしょうしね」

作戦開始まで残り半日を切った中、待機室のモニターに映し出されているＬ３宙域の様子を見て、俺とレナが口々に世の乱れを嘆き

つつ呆れていると、一人、なにやら落ち込んでいたマユラが口を開いた。

「……うぅ、私もあそこにいた事があるだけに、アインさんとレナの言葉が胸に痛い」

ほほぅ、どれ、痛い所をお兄さんが確かめてって、違う違う。

「そう言えば、マユラ達もオーブで負けた後、三ヶ月位、Ｌ３に逃げ込んでいたんだったな」

「……マユラ、あなた、その間に、悪い事はしてないでしょうね」

「し、失礼な事言わないでよっ、レナっ！　だいたい、私がいた時は、普通のジャンク屋だって、極普通にジャンクを漁りに来ていて、もっと宙域自体がマトモだったし、絶対に、ここまで酷くなかったわよ！」

揶揄したレナを、ふしゃー、と猫のように威嚇するマユラだが……、こういう顔も可愛いもんだ。そんな具合に内心でにやけつつ、今日に至るまでの流れを思い返す。

５月２９日から先日の６月８日まで、第二宇宙艦隊が広げていた航路封鎖網には、連日、Ｌ３からの逃亡を図った宇宙海賊や違法ジャンク屋、傭兵等が引っ掛かっていたのだが、初日に強行突破を図った船を三隻程沈めた影響か、以後は特にこれといった大きな抵抗もなかった為、粛々と行われていた。

この封鎖艦隊によって拿捕された船に搭乗していた連中の取り扱いは、船舶に武装が施されているか否かで分けられている。

まず、非武装船に乗っていた者達だが、非武装とはいえ、先の戦

争後、Ｌ３が宇宙海賊やアウトローの巣窟となっていた事実があるだけに、何らかの犯罪に関与した嫌疑があるとされ、身元を確認された後、作戦終了後に世界各国に配布される、ブラックリスト（要注意人物表）に顔写真や指紋等を登録した上で、解放されている。

一方の武装船に乗っていた者達だが、こちらは直接的にアメノミハシラ船籍の商船を襲ったという嫌疑がある為、？陸戦隊？に拘束された後、海賊行為を行っていないか、犯罪に関与していないかを入念に取り調べる為に、アメノミハシラに引き揚げる支援部隊の艦艇に放り込まれて後送されている。

ここまで強硬な姿勢だと人権云々と言い出す輩が出てきそうなものだが、コードウェル一尉が教えてくれた所によると、Ｌ３にあるヘリオポリスと資源衛星はオーブなのだから、不法占拠の嫌疑があるのは事実だし、しばらくはこれで押さえ込めるだろうと、宇宙軍の主席法務官が話していたそうだ。

自身の経歴上、そういう話にも興味はなくはないが、今は目の前の問題に目を向けるとして……、第一宇宙艦隊がＬ３宇域外縁部に到着して展開した後、今度は第二宇宙艦隊がＬ３に向けて、ゆっくりと進み始め、徐々に封鎖網を狭めていき、先日、無事に第一宇宙艦隊と合流を果たして、予定通り、サハク准将の指揮下に組み込まれたのだ。

いやはや、作戦当初は戦力を小分けしたら、各個に狙われるかもしれないと思ったりもしたんだが、相手は指揮命令系統が統一された軍隊じゃなく、一国一城めいた独立事業主とも呼べる海賊だったから、いらない心配だったらしい。

そんな俺の杞憂はともかくとして、宇宙軍が行動を開始してからＬ３宙域外縁部に展開する昨日まで、合計して三十隻近い数の船を臨検、拿捕してきたのだが、今現在、宙域内に展開しているアウト

ローの集団……、便宜上、海賊連合とでも呼ぶとして、その海賊連合の艦船が五十隻を越える所から、どうやら、Ｌ３に巣食っていた連中の半分にも満たなかったようだ。

そりゃ、航路の安全も脅かされるはずだわなぁ、と納得して、視線をレナとマユラに戻すと、小さな声で何事か言い合っているようだった。

経験上、そろそろ止めた方がいいなと思って、二人に声を掛けようとしたら、部屋備え付けの端末から呼び出し音が響き始めた。

「っと、艦橋から連絡かな？」
「あ、先輩、私、出ますね」
「あっ、ちょ、レナ、聞きなさいよっ！」
「マユラ、ほら、落ち着けって」
「わーん、アインさん、レナがいじめるぅ」

レナが率先して端末に向ったのを見て、マユラが明らかに嘘泣きをしながら、俺の腕に縋り付いて来た。当然ながら、マユラはパイロットスーツ姿である為、日々、俺と我が息子に癒しや充足を提供してくれる等、非常にお世話になっている、ミーアに劣らぬ我が侭な胸の膨らみが身体に押し当てられるわけでして、はい。

「お～、よしよし」
「レナッたら酷いんだよ、アインさん。私の事、女海賊になっても違和感ないって……」
「もぅ、マユラっ、誰もそんなことは言ってないでしょう。それと、先輩は鼻の下が伸び過ぎです」
「むー、帰ってくるの早すぎ」
「おっと、いかんいかん」

きりっ、とな。

「で、レナ、連絡は何だった？」
「はい、コガ艦長が先輩に一度、艦橋に上がって欲しいそうです」
「ん、了解。ちょっと行ってくるわ」
「わかりました」
「むー」

口を尖らせてレナを軽く睨んでいるマユラの頭を一撫でして宥め、身体を離させた後、二人を置いて、艦橋に向かう事にした。

「まったく、マユラったら、すぐに先輩に抱きついて、本当に、抜け目無いんだから」
「へへん、悔しかったら、レナもしたらいいじゃない」
「わ、私は、普段からちゃんと構ってもらってるから、そんな事する必要ないもの」
「そーぉ？　その割には、随分、羨ましそうな顔をしてたじゃない」
「しーてーまーせーん！　だいたい、私は、誰かと違って、時と場所を弁えて甘えるから、そんな恥知らずなことはしません」
「む……、誰が恥知らずなのかなぁ？　あっ、いっつもアインさんのを？食べさせてもらう前？に堕ちちゃって、突き出したお尻を振りながら、惚けた顔で？食べさせて欲しい？ってお願いする誰かさんのこと？」
「むむっ……、毎回、先輩に？お腹を一杯？にしてもらった後でも、涎を垂らして、まだ足りないもっと欲しいって、両足を絡めながら、膝の上に居座って？おかわりをねだってる？誰かさんのことよ」

うー、わんわんっ、にゃにゃっ、しゃー、といっても通用しそうな、レナとマユラの、別の意味で緊張感のある言い争いに巻き込まれないようにすべく、急ぎ足で……。

◇　◇　◇

艦隊全体が既に一種警戒態勢に入っている為、人気が無くなっている通路を移動して、ワダツミの中枢部とも言える艦橋に入ると、老境に入りかけた艦長が管制官に指示を出していた。

「コガ艦長、お呼びとの事で」
「む……、ラインブルグ三佐か」

オーブ軍で統一採用されている白い制服姿のワダツミ艦長……、タカシ・コガ一佐がこちらを振り仰ぐと、赤銅色の肌に深い皺を刻み込んだ顔、その口元を微かに綻ばせた。

「早いな」
「一種警戒に入ってますから、規程を無視して飛ばしてきましたからね」
「……そういう柔軟な部分を、うちのひよっこ連中にも見習って欲しいモノだ」

コガ艦長は、平時においては練習艦隊で艦隊司令を務めている故の感想だろう。

「ですが、規程は守らないより、守る方が大切だと思いますが？」
「それも時によりけりだ。士官には、自分の裁量において、時に独断専行も必要になることもあるからな」
「なるほど」

勉強になります。

「それで、艦長、ご用件は？」

「ああ、敵……、海賊の戦力と今後の動きについて、君の意見を聞きたい」

「えっと、参謀さん達の意見は？」

「それは既に聞いている。だが、私としては、実戦経験者の意見を聞いておきたくてな」

「そういうことでしたら」

さて、できるだけ客観的に、言えたらいいけどなぁ。

「先程まで、待機室のモニターを見ていた限りの意見ですが、当初、想定していたよりも艦船数が多いように感じます」

「そうだな。我々も海賊の実態を十分に把握しきれていなかった面があるとはいえ、あの数には驚いた」

「もしかしたら、Ｌ３には兵器や横流し品の市場でもあるのかもしれません」

「ありえないと言い切れない話だな。……続けてくれ」

「はい。現在、展開している数を勘定すると、大凡で五十から六十。その半数が何らかの対艦兵器を武装している事を考えると、それなりの脅威だと言えます」

「ふむ、かもしれぬな」

「ええ、それに加えて、ジンやストライクダガー、様々なジャンクを寄せ集めて作った改造ＭＳ、ミストラルやメビウスといったＭＳやＭＡも、二百程存在していてもおかしくはないです。もしも、これらが迎撃に出てきたり、対艦攻撃を仕掛けてくると、それなりに厄介でしょう」

「だろうな」

「……とはいえ、私としては、それら各種兵器の数よりも、まず、

海賊に統一された指揮系統が存在しているか否かが気になっています」

その俺の言葉を聞いたコガ艦長は、黒目がちな瞳を細めて、不敵に笑った。

「では、連中の数は恐ろしくはないと？」

「いえ、数が脅威であることは……、考えなしの飽和攻撃も十分に怖いことは確かです。ですが、波状攻撃のように効率的に運用された時こそ、真に数は恐ろしさを発揮します」

「それは君の経験からかね？」

「はい、ヤキン・ドゥーエでの最終攻防戦で、両方とも経験した感想です」

次々に繰り出された波状攻撃には、心が折られるかと思った。

「羊に率いられた獅子……、烏合の衆なら罠に嵌めて殲滅できますが、獅子に率いられた羊ならば、逆もありえます」

「だが、第二艦隊が拿捕してきた連中を見ると、それはないとは考えられないだろうか？」

「それでも予断は禁物だと思います。もしかしたら、海賊が団結して、指揮系統の統一などを図った過程で、考えや反りが合わなかった連中が反発して出て行っただけかもしれません」

「……ふふ、意外と慎重だな。伝え聞いた、戦場での果敢な君の姿とは異なる」

「多分、前の戦争で仲間の命を預かった事で悩んできた影響でしょう。戦闘前は、常に最悪を想定して、これでもかと思いつく限りの対策案を考えておいて、戦場に出た後は、果断であれと意識して動いていたんですよ。……どう動くかを迷い、決断が遅くなると、仲間が死ぬと思ってましたから」

コガ艦長は、静かに頷いてくれた。

「納得がいった。……では、敵はどう出てくると思う？」

「前の戦争で通常に行われていた迎撃作戦……、艦艇による砲戦を経て、機動戦力による宙域争奪戦が一般的でしょう。危惧する可能性としては、今回の作戦、歯向かう者は容赦せずの方針が出てますから、破れかぶれになって、？バンザイアタック？を仕掛けてくるかもしれません」

「或いは、？バンザイアタック？まではいかずとも、前戦争の新星争奪戦で起きた艦隊特攻のように？」

「そうですね、死中に活を求めるなら、選択肢の一つとしてありえると思います。……一度、艦隊特攻を体験した身から言わせてもらえば、あれは本当に怖いですよ」

って、なんで、呆れた顔？

「ヤキン・ドゥーエでの攻防戦に加えて、ボアズ戦後の撤退支援や二度の地球軌道での会戦、それに通商破壊作戦……。これらは私が知る君の戦歴だが……、君は宇宙での戦闘を、大概、経験をしているのだな」

「……そう言われてみれば、そうなります」

初戦から関わっていた事を考えると……、俺、本当に、良く生き残れたよなぁ。

「だが、君のその経験は、実戦経験が乏しい我が軍には有難いものだ。これから発生する戦闘では、前線のフォローに回ってもらいたい」

「ええ、元よりそのつもりですし、ソキウス小隊もそのように動く

はずです」
「私はあまり彼らとは話す事が無いのだが……、彼らがそう言っていたのかね？」
「いえ……、ですが、彼ら自身が持つ？誇り？から考えると、そのように動くだろうと思います」
「ソキウス（戦友）である事の？誇り？か……」

コガ艦長が艦橋から遠望できる旧ヘリオポリスをしばし見つめた後、こちらを向いた時には、どこか悲しみを含んだ表情になっていた。

「……君は、彼ら三人の精神が壊されている事を？」
「……ええ、知っています。だからこそ、他人から見れば、刷り込まれた存在意義だろうが、ナチュラルを守る事が本人達の中で残って、絶対的な信条として成立している以上、それを彼らの？誇り？と受け取る方がいいと思いましてね」
「まさしく、詭弁だな」
「ええ、詭弁です」
「だが、下手な同情よりは余程、上等だ」
「彼らへの同情は、ただの可哀想に止まるということで？」
「そうだ。同情は、所詮、優越の裏返しだ」

コガ艦長の明け透けな言葉に、目が点になるのがわかった。

「艦長は手厳しいですね」
「人が抱える苦悩をわかってやれると考える等、傲慢に過ぎんし、行動を示さない同情には哀れみ以上の意味は無い」
「それはなんとも……、いや、我が身を振り返ると、身が竦む思いです」
「……ふっ、君は合いの手が上手いから、つい、こちらも話し過ぎ

て困るな」

え、そうかな、等と内心で首を傾げていると、コガ艦長は更に言葉を続けた。

「だが、誰もがそういうわけではない」

「……というと？」

「軍内には、サハク司令官にも一目置かれている君を疎ましく思う輩もいるということだ」

あ～、確かに生え抜きから見たら、ぽっと出の人間は忌々しいだろうなぁ。

「私から見れば、君がサハク司令官に信任されるのも納得がいくのだが……、君を疎ましく思う連中から見れば、贔屓されているように映るだろう」

「ですが、私が佐官として編入された事を考えると、贔屓されているのは事実です」

「否、贔屓と重用は異なるよ」

「そういうものでしょうか？」

「ああ」

再び、贔屓と重用に違いについて、内心で首を傾げるが、コガ艦長は構わずに話を続ける。

「君を疎ましく思う輩、はっきりと言えば、下級氏族出身の士官達なのだが……、彼らは気位は高い割には、実力が伴なわない者が多い。その肥大した自尊心を抑える事が出来ず、今までも、氏族と非氏族との間で諍いが絶えず起きている」

……ザフトも似たようなケースがあったけど、これって、どこにでもあることなんだろうか？

「しかも、君の場合は、ラヴィネン二尉にラバッツ二尉と、極自然に綺麗所を囲っている事もあるからな、余計に目立つ」

「あ、あ～、まさか、それの嫉妬も？」

「男ならば、当然、抱く感情だと思うが？」

「……そうですね」

確かに、逆の立場なら、俺だって、お、おのれぃ、無妻男である俺への当てつけか、って、なると思う。

「とにかく、軍内に、君を疎ましく思っている輩がいることを忘れるな」

「……ご忠告、感謝します」

中々、こういう風に忠告してくれる人はいないから、しっかりと頭を下げておくことにする。

「よろしい。……ラインブルグ三佐、中々、有意義な時間だった。これから始まる作戦での、君達の活躍を期待する」

「ありがとうございます、コガ艦長」

そう返事をした後、軽く敬礼を捧げて、艦橋を退出する事にする。

そして、後から撃たれないように、気をつけた方がいいかなぁ、なんて、正直、泣きたくなるような洒落にならない思いを胸に、待機室へと戻る事にした。

39　安住の地へ　－Ｌ３掃討制圧戦　3

６月９日午後。

Ｌ３外縁部宙域において、別段の妨害攻撃を受ける事もなく、地球を背景に旧ヘリオポリスへと艦首を向けた旗艦イズモを中心に整然と布陣を終えたオーブ軍艦隊から、明らかに改造によって武装しているマルセイユ三世級やコーネリアス級、果てはサルベージされて修復されたらしいドレイク級等々、多種多様な艦種で構成されている上、？群れ？としか適切な表現が見つからない程に、それぞれ気侭な位置で展開している海賊連合の艦船に向けて、攻撃が開始された。

最初の一撃は、イズモから見て左右舷と艦底方向に四隻ずつの戦隊単位で展開しているトツカ級から断続的に放たれた、７３式艦対艦航宙ミサイル【ライデン】だ。

このライデンなるミサイルはうちのグループ会社であるラインブルグ宇宙工業がＢＩ用に開発し、マリーネにも副兵装【ＲＳＩ－ＡＳＭ１２】として装備可能な対艦ミサイル、通称【タチカゼ】をベースに、モルゲンレーテと宇宙軍技術部と共に更なる改良を加えて生み出されたもので、元からあった光学誘導と熱源追尾にトツカ級からのレーザー誘導ができる装置を組み合わせており、以前までの電波誘導に勝るとも劣らない代物だったりする。

これら百発近いミサイル群が海賊連合の艦船に向けて加速して行く間に、今回の攻撃で主軸となるワダツミ級ＭＳ母艦群、ウワツ、ナカツ、ソコツのＭＳ隊で編成された機動ＭＳ大隊三十六機が、予め、支援部隊によって放出されて準備されていたパッツに乗り込ん

でいき、迎撃に出てくるであろうＭＳ・ＭＡを排除し、対艦攻撃を仕掛けるべく、次々に進出して行く。
　また、イズモの艦上方向に展開している第一戦隊のイナバからはＭＡ形態のオオツキガタ十二機が順次発進して、海賊艦船或いはＭＳ・ＭＡに対して、側面からの横撃や仰角……上方からの？逆落とし？、俯角……下方からの？突き上げ？なりを行う為に、迂回軌道へと進路を取ったようだった。

　それら一連の動き……ワダツミより提供されている光景を、ザフトと同じく臨戦待機態勢にあたる第二種戦闘配置の為、俺は乗り込んでいる自機の操縦席から見入っている。
　遠方でミサイル群が時々放つ青白いスラスター光が小さくなっていくのとは対照的に、艦隊前面で機動ＭＳ大隊がパッツでの加速を段階的に行っているのだろう、時折、大きな噴射光が確認できた。

　一方の海賊連合もモニターで確認できる限りだと、こちらの攻撃や出撃を確認したのだろう、艦船に取り付けられたレールガンらしき代物で反撃の砲撃を始めたり、どこで調達したのか大型ミサイルを撃ち出したり、ＭＳ隊を迎撃する為に統一性のない雑多な機動戦力を出撃させたりしているようだ。

　……うーん。

　こうして見てみると海賊の動きに統一された？意思？は見えないし、数こそ多いけど、想定していたよりもＭＳの数が少なくて、ＭＡ、それも改造ミストラルの数が多いようだ。

「海賊の戦力を過大評価しすぎたかな？」
「そうかもしれませんね」

俺の独り言めいた呟きにもレナがしっかりと応じてくれたので、折角だからと戦力についての見解を尋ねてみることにする。

「並んでいる艦船の数と比較すると、機動戦力が少ないと思うんだが、レナはどう思う？」

「希望的な観測をするなら、単純にそれだけの数がなかったということでしょうが、慎重に考えると、どこかに潜んでチャンスを窺っているのかもしれません」

そのレナの意見から更に思考を進めようとしたら、マユラも話に参加してきた。

「もしも、どこかに潜むとなると……、デブリの陰に隠れるか、廃熱を抑えて待伏せしているかも」

「それか、予め、艦隊正面以外の方向に一部艦船を回しておいて、機動兵器と一緒に突入を図ってくるか、かな？」

「ええ、マユラや先輩が言った事辺りが妥当だと思います。……でも、観測は熱源だけじゃなくて、光学でもやってますから、その可能性は低いと思いますよ」

「だが、ゼロじゃない以上は……」

「そういう事もありえると想定しておいた方が、いざという時に慌てないで済む、でしたね」

「そういうこと」

流石に、ずっと俺の僚機を務めてきただけあって、こっちの言いたい事がわかっているよなぁ。

なんて具合に、レナとの確かな絆を感じてしまい、内心に充足感が広がって行くのがわかる。

「むー、私を除け者にして、二人だけで通じ合わないでよ、もう」
「おっと、すまん」
「あ、ごめんね、マユラ」

もっとも、その分だけ、マユラの機嫌を損ねてしまったようだ。

「二人がずっとコンビを組んできたから、自然とそうなるんだろうけどさ、これからは私もいるんだから、今度からはちゃんと混ぜてよね」
「了解」
「ええ、気をつけるわね」

口を尖らせて不満の意を示しているマユラに、若干の罪悪感と普段と違う甘えられ方というか、別の意味で魅力的な素顔が見れる男は俺だけなんだよねぇ、なんて雄としての独占欲が満たされるのがわかる。

っと、ミサイルの第二派が発射されたな。

この時間差をつけた攻撃は撃沈狙いの他にも、迎撃対応に忙殺させる事で前線への支援砲撃を少しでも妨害する意味合いの他、迎撃に出てきている海賊の機動戦力……、パイロットの意識を逸らす面もあるだろう。

宇宙ってのは、生身の人の生存を許さない冷たい世界だから、どうしても母艦が……、帰れる場所が必要になる。つまり、母艦への攻撃は、ただそれだけでパイロットへの大きな心理的な負担になるのだ。もちろん、これは逆にも言えることであり、こっちのパイロットにも精神的な負担が掛かっているはずだ。

普段の生活でこそ余り意識していないが、そもそも宇宙という場所は地球と違って、居住空間のすぐ外側に即座に死に繋がる冷たい空間が広がっている現実がある。自然、帰れる場所……住む場所を無くすという事は、宇宙に住む者達が誰しもが持つ根源的な恐怖と言えるだろう。

だからこそ、宇宙に住む者は、例え、所属する国が違ったとしても、コロニーへの攻撃は許せない。

だというのに、先の戦争では、ユニウス・セブンや世界樹、ヘリオポリスといったコロニーが相次いで破壊されている。

この事実に関わった事でさえ悩ましいのに、もしも仮に、戦中の新星争奪戦でゴートン艦長達の頑張りがなく、Ｌ４のコロニー群がザフトの手によって、？意図的に？破壊されていたら、それを為した勢力に属する俺は、一生、苦しみ続けたはずだ。

眉間に皺を寄せてのシリアスな思考を遮ったのはレナの声だった。

「あ、先輩、トツカ級が主砲を撃ち始めました」

「……なんか爆発してるし、向こうからの攻撃を迎撃してるんじゃない？」

「そうだろうな。ビームファランクスも撃ち始めているし、間違いない。……ちょっと、管制官を呼び出して、状況を聞いてみるか？」

「ええ、ちゃんとした情報が欲しいですね」

「アインさん、ワラル三尉は新任君だから、お手柔らかにね？」

「俺は不条理な事なんて言わないさ」

いや、ほんと、セプテンベル行政局では苦情対応に散々に苦労させられてきたからなぁ、と在りし日々を思い出しながら艦橋へと通信を繋げる。

「こちらウルブス1、聞こえるか、ワラル三尉」
「はい、こちらウワツ。ウルブス1、聞こえています」

ウルブス小隊の隊長ということで、俺には【ウルブス1】とのコールサインが割り振られている。当然のことながら、同じ小隊に属する二人にも振られており、レナが【ウルブス2】、マユラが【ウルブス3】となっている。

「何か、問題でも起きましたか？」
「いや、こっちには問題なんて起きてないよ。ただ、少し状況が知りたくてな」
「状況ですね。……どの辺りからお教えすれば？」
「海賊の動きから頼む」
「了解です。現在、艦隊は海賊側からの艦砲射撃を受けており、第二、第三、第四の各戦隊が前面に展開して、迎撃に当たっています。これまでの所、攻撃は各戦隊の対応能力を上回っておらず、順次、対応中です」
「わかった。じゃあ、前線の様子は？」
「つい先程、交戦が開始されたのですが、相手の数が多い影響で、二十機ほどのＭＡが前線を突破し、艦隊に急速接近中です」
「……やるな。これの対応は？」
「これも各戦隊から迎撃機を出して阻止を図るとの事です」

その言葉を受けてモニターを見ると、確かに、各戦隊のトツカ級からマリーネが次々に出撃していた。

「なら、仮に、これらが突破された場合は？」
「突破された場合は各戦隊……？コンバットボックス？による艦隊迎撃及び個別迎撃となります」
「ん、了解した」

あ、今、ワラル三尉が微かにホッと息をついたのがわかった。

「それでは、今の所、総司令部から特に指示は来ていないってことだな？」
「あ、はい、特に通達は来ておりません」

特に指示がないってことは、今の所、総司令部が想定している範囲で動いているって事だろう。

……このまま戦況が推移したら、待機状態のままで終わるかな？

「なら、総司令部から通達なり、前線の動きに変化がでてきたら教えてくれ」
「了解しました」

さて、一旦、通信を切ってっと……。

「このまま、戦闘が終わってくれたら、いいんだけどなぁ」
「でも、アインさん、相手だって必死のはずだし、どんな動きをしてくるかわからないから、気は抜かない方がいいと思う」
「……確かに、マユラの言う通りだな」
「ええ、出なくていいなら、それに越した事はないですけど、何が起きるかわかりませんからね」
「ああ、突然、なんじゃこりゃ、って言いたくなるようなもんが出てきてもおかしくはないからな」

とはいえ、そんなことは多々あるわけじゃない、し……？

「なんだ……、あれ？」

……なんか、海賊側に、通常のＭＳの三倍はある、えらい、ごっつい機影が三機ほど、見えるんだが？

「……え、えーと」

「な、なんだろうね？」

流石に、レナとマユラも困惑しているようだ。

「見た感じ、防護用の外骨格装甲か？」

「どちらかと言えば、作業用のパワーローダーに似てますね」

「そういえば、似ているな」

「でも、あれって、取りまわしが大変そうだよね。……あ、一機落ちた」

「そりゃあ、特に強力な武装もしてないみたいだし、ただ大きいだけじゃ、普通、良い的に過ぎないからなぁ」

でも、見た瞬間は、何時、何処で、誰が、何から、どういう目的で作ったんだと突っ込みたくなるような、とんでも兵器が出てきたかと思ったよ。

しかし、ＭＳが更に外に外骨格を着込……む？

……。

「でも、海賊って、面白い事を考えますね」

「あ、ああ、まぁ、脱走兵や傭兵といった連中だけじゃなくて、ジャンク屋崩れも中にはいるはずだし、ああいうのも出してきてもおかしくはないはずだ、うん」
「あれ、アインさん、何か、動揺してない？」
「ん、そんなことないぞ？」

……いや、ＭＳが外骨格を着込む事から、俺は直接にはお目にかかってないが、エターナルに装備されていたというミーティアなる強襲補助兵装や前世の某アニメで出てきた？我が侭な美女？を連想してしまった。

特に、後者なんて……、考えるだけで恐ろしい。

まぁ、流石に、アレに類するだけの代物を作るのは、海賊には不可能だろう。

……。

む、むぅ、あの絶対的に戦場を支配する存在、？我が侭な美女？という名に恥じぬ、圧倒的な火力の権化とも言うべき尊大な女王様を思い出してしまったら、こう、ムラムラと作ってみたくなるのは、オノコの性だろうか？

「……ねぇ、マユラ、今の先輩の顔、何か不穏な感じがしてこない？」
「うん、私達を疎かにするような、碌でもない事を考えてるよ、絶対」
「ハハハ、ナニヲイッテイルノダネキミタチハ、コノオレガオマエタチヲナイガシロニスルハズガナイダロウ？」
「何だか、ますます胡散臭くなったよね」

「そうね。……アメノミハシラに帰ったら、ミーアちゃんにも手伝ってもらって、何を考えていたのか、自発的に言うように仕向けましょう」

……最近、レナが黒い事を憂慮するアインです。

と、こんな具合に三人で待機中の無聊を慰めていると、イズモから相次いでＭＡ形態のオオツキガタが発進して言った。

「イズモからＭＳ隊が出撃しているな」

「ええ、でも、こっちに向っていたＭＡ部隊は各戦隊のＭＳ隊に殲滅されていますし……、前線へのてこ入れでしょうか？」

「どっちかと言えば、勝負を決める為じゃないかな？　ついさっき、イナバのＭＳ隊が前線の側面からの突入して、海賊を掻き乱したみたいだし」

「多分、マユラの言った事が正しいだろうな。見ろよ、海賊が引き始めている」

「なら、追撃戦を仕掛けつつ、対艦攻撃か掛けるって所ですか？」

「おそらくな」

さて、もしも罠を仕掛けるとしたら、ここからのはずだが……、と思ったところで、通信系からワラル三尉の声が聞こえてきた。

「ウルブス１、応答願います」

「こちらウルブス１、出撃か？」

「はい、総司令部からワダツミ所属機への出撃命令が下りました」

「具体的な命令は？」

「ソキウス小隊が前線での支援、ウルブス小隊が艦隊周辺での索敵警戒です」

「出撃は何時？」

「パッツを放出してからになりますので、少しだけ、お待ちください」
「了解した。こっちはいつでも出られるから、そっちの準備が整い次第、頼む」
「了解しました」

ワラル三尉からの通信が切れた後、空いた時間を使って、機体のチェックをしておくことにする。無論、これまでも何度もチェックしているが、命を預けるだけにこればかりは何度でもチェックした方がいいだろう。

「レナ、マユラ、聞いての通りだから、機体の再チェックと武装の確認をしておくぞ」
「はい」
「わかったわ」

二人に言った手前、自身も機体情報を確認する。

……何があってもおかしくないのが戦場だけに、懇切丁寧に、ワラル三尉からの通信が入るまで、しっかりと目を通し続けた。

４０　安住の地へ　－Ｌ３掃討制圧戦　４

ワダツミの前方宙域に四機のパッツが放出されたので、前方のハッチから内部を荒らさないように制御バーニアの軽い噴射でゆっくりと出撃する。

整備班員達に軽く手を振ってから外に出て右舷前方を見てみると、既にソキウス小隊はパッツへの搭乗を始めており、？戦友？の名に恥じず、直ぐにでも未だに絶え間ない銃火の応酬が続いている前線へと赴くつもりなのだろう。

「よし、それぞれの役割についてだが、前もっての手はず通り、レナは基本的に俺達の後方で戦域を俯瞰して、支援を担当してくれ。もしも、余裕があれば、敵の攻撃基点かリーダー格を狙撃して、勢いを削いでくれたらありがたい」

「わかりました」

「マユラは、前面に出る俺のカバーと、俺への攻撃に気を取られすぎた間抜けを落としてくれ」

「了解」

今回、俺達が機体に装備している兵装は個々人の好き勝手で選んだ物ではなく、目的別に六種類ある兵装パック……主兵装と副兵装を一纏めにした物の中から、それぞれの役割に応じて選択装備している。

実はマリーネが採用された後、宇宙軍技術部とラインブルグ宇宙工業及び技研第五開発部が整備現場の効率化と任務目的に沿った柔軟なＭＳ運用を行えるようにする為、対策や必要な設備を検討して

いたらしい。
その結果、目的に沿って主兵装と副兵装を換装できるようにするパッケージ化と、パッケージの換装がより簡易により短時間で行えるよう、ＳＫＯで実戦評価をしてもらう際に持ち込んだ整備設備の改良が決定されたそうだ。

で、そのパッケージや整備設備の実戦評価を俺達が乗っているワダツミでやっているというわけだ。

俺の前でパッツに搭乗しているマユラが装備しているのは、ビームアサルトを主兵装とし、防護に対ビームコートシールド（注：これ以下はＡｎｔｉ　Ｂｅａｍ　Ｃｏａｔを略してＡＢＣシールド）、副兵装として両肩部に電磁式対ビームシールド、大腿部に高硬度ナイフラック、脹脛部に破砕榴弾パックを装備する標準兵装に相当するＳパック（Ｓｔａｎｄａｒｄ　Ｐａｃｋａｇｅ）だ。

これがマリーネの最も基本的な兵装ということになる。

んで、俺が乗る機体に装備しているのが、主兵装にビームアサルト、防護にＡＢＣシールド、副兵装には両肩、両脹脛部に可動式追加スラスターと、大腿部に破砕榴弾パックを装備する高機動兵装、ＨＭパック（Ｈｉｇｈ　Ｍｏｂｉｌｉｔｙ　Ｐａｃｋａｇｅ）となる。

これは標準兵装から防護性を落として、その分だけ機動性を上げた兵装って所だ。

そして、支援担当のレナなのだが、機体の半分の長さはある長大な狙撃用ビームライフル【ＲＳＩ－ＢＳ１０３】ビームスナイプを主兵装に、腰部マウントに予備兵装のビームアサルト、副兵装には、

右肩部にモノアイ仕様の光学照準装置、左肩部に多目的観測用センサー、大腿部に高硬度ナイフラック、脹脛部に破砕榴弾パックを装備する狙撃・偵察兵装、Ｓ／Ｓパック（Ｓｎｉｐｅ／Ｓｃｏｕｔ Ｐａｃｋａｇｅ）だ。

この兵装は標準兵装からＡＢＣシールドと電磁式対ビームシールドを外し、両腕に対ビームコート篭手を装備するだけと、防護性を大幅に落としている代わりに、強力なセンサーにより高精度の情報収集を可能にした上、高威力長距離射程を持っているから、探知性と攻撃性を大幅に引き上げた兵装と言えるだろう。

後、他の三種だが、既に前線へ向けて出発して行ったソキウス小隊が選択装備していったもので、標準兵装をベースに、主兵装のビームアサルトを予備兵装に回して対ＭＳ・ＭＡ用重散弾砲を装備、大腿部副兵装を高硬度ナイフから破砕榴弾パックに換装して、火力重視に偏らせた強襲兵装、Ａパック（Ａｓｓａｕｌｔ Ｐａｃｋａｇｅ）、主兵装に重散弾砲と予備のビームアサルト、防護にＡＢＣシールド、副兵装に両肩に対ＭＳ・ＭＡ用六連装小型ミサイルパック、大腿部に重散弾砲のカートリッジ、脹脛部に破砕榴弾パックを装備して、防護性を弱めた代わりに中距離からの制圧火力を高めた制圧支援兵装、ＦＳパック（Ｆｉｒｅ Ｓｕｐｐｏｒｔ Ｐａｃｋａｇｅ）、主兵装に対艦用無反動砲、腰部マウントのビームアサルト、防護にＡＢＣシールド、副兵装として左肩部に対艦用二連装中型ミサイルランチャー、大腿部に無反動砲弾カートリッジ、脹脛部に破砕榴弾パックを装備して、対艦用兵装をメインに切り替えた重攻撃兵装、ＨＡパック（Ｈｅａｖｙ Ａｔｔａｃｋ Ｐａｃｋａｇｅ）となる。

まぁ、わかりやすく言えば、作戦目的に沿った兵装の規格化って奴だな。

ちなみに、これらの兵装パックは運用に必要になるエネルギー量の関係から、内部にジェネレーターを有するマリーネでの運用が前提なので、バッテリー仕様であるアストレイでの運用は不可能になっている。

「アインさ……ウルブス1、こちらウルブス3、搭乗終了。……コントロールも掌握したよ」
「了解、搭乗を開始するから揺らさないでくれよ、ウルブス3」
「わかってる」

パッツは二機の内、一機には前面で迎撃を担当する俺とマユラが、もう一機には観測情報と狙撃による援護を行うレナが一人で使用する形だ。

っし、接舷終了っと。

「こちらウルブス2、搭乗終了しました」
「了解。……ワダツミ、ウルブス1だ。ウルブス小隊の行動準備が完了した。そちらからのリクエストはあるか？」
「こちらワダツミ、リクエストは特に無しでっ、総司令部より通達！　艦隊左舷方向より高速で接近する物体……、あ、いえ、ＭＡとＭＳの混成部隊があります！」

海賊の迂回攻撃か？

「何機だ？」
「確認されている数は二十程です」
「俺達もその対応に？」
「あ、だ、第二戦隊のＭＳ隊が迎撃に入るそうです」

「なら、後詰か……」

もしかしたら半包囲……、右舷からも攻撃……、いや、分進合撃か？

「ワダツミ、念の為に、ウルブス小隊は艦隊後方に下がるぞ」

「えっ？」

「迂回してきたって事は後方からの攻撃だって、あるかもしれないって事さ」

右舷方向は第三戦隊の連中がいるし、予備戦力は艦底部にいる第四戦隊の連中を当てれば良い。まぁ、俺達が後ろに下がる分、両天極方向からの攻撃に脆くなるかもしれないが、そこはハガネ級に時間を稼いでもらうしかない。

だいたい、艦載機の絶対数が足りてない以上は取捨選択するしかないのだ。

「まさか、後方まで浸と……、あ、はい、コガ艦長が了解したとの事です」

「ああ、……ワラル三尉」

「え、はい」

「海賊だからっていう予断は禁物だぞ。連中は俺達以上に宇宙に慣れているんだからな」

そう、そのことだけは忘れてはならない。ならばこそ、艦隊にとってより危険性が高い方向……艦艇の防備が弱い後方を警戒する方が理に適ってる。

「ッ！　りょ、了解です」

「よし、ウルブス小隊は後方で敵の攻撃を警戒する。行くぞ」
「「了解」」

とはいえ、この行動はあくまでも最悪の事態に備えるべきだとする俺の信条から来ているものであり、当然、見当違いって事もあるだろう。けれど、何事にも備えておいた方が安心できるのは事実だし、何事も起きなければ、それはそれでいいことだ。

そもそも、生粋の軍人でもない俺にとっては、作戦において活躍したとか功績があったとかは、別にどうでもいいことだしな。

そんな事を考えている内に、艦隊後方宙域に到達する。

「さて、もしもの想定が外れたら、それこそ、安心できるんだがなぁ」
「ですね。左舷方向で迎撃が始まったみたいです」
「……あ、右舷方向からも何かが接近してる」

さて、これで海賊は挟み撃ちを仕掛けた事になったけど、後方はどうかねぇ？

「ッ！　こちらワダツミっ！　後方より機影を確認っ！　数は十！　総司令部はＩＦＦ表示無しから敵性体と判定！　全てＭＳですっ！」
「了解した。後詰はあるか？」
「ありません。右舷よりの敵の数がＭＡとＭＳが合わせて四十機近くある為、第二及び第三戦隊所属機はそちらに向わせるとの事です！」
「そうか」

しかし、後方への浸透ができるなら、何故に補給線を狙わなかったんだろう？

むー、差し詰め、補給線を潰す前にＬ３が制圧されてしまうから一発勝負で、って所かな。

……。

うぅ、それにしても、十機に三機で対応しろって、普通なら虐めでしかないんだが……、これ位なら対応できるだろうっていう、サハク准将の信頼と受け取ってもいいんだろうか？

まぁ、なんであれ、俺は……、いや、俺達はやるべき事をやるだけだ。

「レナ……ウルブス２、先制を頼む」

「ええ、わかりました」

見た感じ、十機の機影はある程度固まって行動しているようだ。

もしも、ばらばらに距離を置かれたり、時間差を持って来られたりしていたら、かなり面倒な事になっていたが、戦力の集中を第一としたみたいだから、逆に助かったな。

お、レナが一撃目を放った……って、流石だな、初撃で墜したよ。

どれ……、連中はと……、む、更に加速しているな。

「ウルブス２、敵の機種は？」

「ジンが五、ストライクダガーが三、シグーが一です」

「なんとまぁ、堅気から外れたら、昨日の敵は今日の友ってか？まったく、仲が良いこって」

つい、ブラックな事を吐いてしまうのは仕方がないだろう。

「マユ……ウルブス3、左側にダミーバルーンを三つ放出」

「了解！」

さて……、連中はどう動くかな？

「ッ！　そこっ！　……よしっ！」

「……お見事」

突如として出現した複数の？シルエット？に気を取られて隙を見せたらしい、ジンとストライクダガーが相次いで、レナの放ったビームに貫かれて爆散したようだ。

「ウルブス2、少し下がって、引き続き狙撃を頼む。優先目標は突破を図る連中だ」

「了解です」

「ウルブス3、俺達も阻止戦闘を開始するぞっ！」

「了解！」

パッツをこちらにビームや重突撃機銃を撃ち始めた海賊機に向って加速させていると、ふと、閃く事があった。

「パッツから離脱する！　カウントは任せるぞっ！」

「わかったわっ！　カウント！　……2、1、ッ！」

マユラとタイミングを合わせて、パッツから離脱すると同時に、

シールドでバイタルエリアを守りつつ、未だに敵に突進しているパッツ自体を撃ち抜いて、爆裂弾代わりに利用してみる。

おっ？

即席で考えた割には上手く言ったみたいで、連中はパッツから生まれたデブリシャワーを諸に喰らってるようだ。そこを逃さず、マユラがビームアサルトの速射モードでビームを霰の如く撃ち込み、四機程に少なくないダメージを与えているようだ。

「ウルブス1！　仰角にシグー！」

とマユラが叫んだ瞬間、残っていた七機の内、もっとも立ち直りが早く件のシグーが攻撃行動に移ったが……、後方のレナから放たれたビームを右肩に喰らって内部の推進剤に引火したのだろう爆発を起こしていた。その爆発光に照らされていると、レナからの報告が入る。

「一機撃破しました！」

「……絶対に、腕の良い狙撃兵は、戦場に欠かせないよな」

「……ほんとだよね」

戦闘中とはいえ、マユラ共々、俺が少し乾いた笑いを浮かべたのは仕方がないだろう。

「だが、このバックアップは心強いぞ」

「うん、背中は安心できるね」

要するに、思いっきりやれるってことだ。

「だけど……」
「……油断は禁物、でしょ？」
「ああ、口で言うのは容易いけどな」

そんな事を述べながら、重突撃機銃での攻撃を仕掛けてきたジンの周囲に向けて、ダミーバルーンの？種？を撃ち出す。

……機体のすぐ傍で、一気に膨らんで展開したダミーに戸惑っている隙をついて、全力加速でもって、接近しっ！

「っし！」

シールドの取っ手から左手を離して、右腕の篭手、その内側からビームサーベルを引き抜き、ビーム粒子を展開させつつ振り上げる！

形成されたビームの刃はジンの右腹部に入ると易々と構造体を切り裂いていく。経験から致命的な損傷を与えたと判断したところで、ＡＭＢＡＣでもって両足をジンの胴体に当てて、これを足場に蹴り放す。

「一機撃破っ、っと！」

……ある意味海賊らしく、味方の生死を気にすることなく、俯角右方向にいた一機のストライクダガーがついさっきまで俺が交錯していた座標に向けて、ビームライフルを撃ち込んで来た。

こちらもビームアサルトで撃ち返しながら回避機動を取るが……、飛来するビームは周囲に浮かんでいたダミーバルーンを次々に破裂させていく。更には、撃ち放たれたビームは大破していたジンをも貫き、推進剤の爆発を引き起こしてデブリへと変じてさせた。

そのあまりにも無情な行動に少し思う事があり、そのストライクダガーに対しては特別製（推進剤入り）のダミーバルーンの種を撃ち込む。そのダミーバルーンがストライクダガーのすぐ傍で展開すると同時に、その陰に隠れるように機位を移動させてみる。

先程の事もあってか、ストライクダガーは特に気にすることなくダミー越しにこちらへとビームライフルを向けて……。

「うん、推進剤入りのダミーバルーンは使えるな」

……ビームをぶっ放してダミーバルーンを破裂させた瞬間、ダミーバルーンが引き起こした爆発に巻き込まれて、一緒に吹き飛んだ。

爆発で弱まったビームを回避していると、今度は俺の機体の仰角左方向で立て続けに爆発光が発生していた。

「こちらウルブス3、二機撃破っ！」
「了解、助かるよ」
「ふふん、当然よ」

どうやらマユラがずっと俺のフォローしてくれていたらしい。その事に感謝しつつ、周囲を警戒しながらビームサーベルを所定位置に戻していると、レナの声がコックピット内に響く。

「ウルブス2、敵二機を撃破しましたっ！」
「了解って……、もしかして、これで全機か？」
「はい、全機みたいです」
「うん、こっちからも確認しているけど、もう敵はいないみたい」

えっ、ちょ、早くね？

この思いは俺だけではなかったようで、ワダツミからの通信……、ワラルの声が震えていたりする。

「こ、こちら、ワダツミ。う、ウルブス１へ、敵全機の制圧を確認、しました。しゅ、周辺宙域に敵影はありません」

「了解した。この後は？」

「こ、後方にて、両天極及び後方からの敵の攻撃を警戒するように、との、ことです」

「わかった。それで、戦況はどうなってる？」

「は、はい、前線はソキウス小隊とイズモ及びイナバ艦載ＭＳ隊の戦域突入により、撃滅に成功。これより対艦攻撃を実施する予定だそうです」

「なら、左右舷方向の迎撃は……、どうやら機能しているみたいだな」

「い、今の所、順調に機能しています」

「うん、結構な事だ。なら、ウルブス小隊は後方で警戒に当たるから、何かある時は、連絡を入れてくれ」

「了解しました」

さて、機動戦力の撃滅に成功したし、これで宙域争奪戦の趨勢は決まったと言ってもいいかな？

なんて思ったところに、同じ感想を抱いたらしいマユラが声をかけてきた。

「ウルブス１、戦闘はこれで終わりかな？」

「実質的には終わったと言いたい所が、まだ海賊艦船が残っている。追い詰められてから、やけっぱちになって艦隊に突入して、強行突破を図るかもしれないから、もう一度、気を引き締めておいてくれ」

「うん、わかったわ」
「ウルブス2、周辺宙域の様子はどうだ？」
「特にこれといって、変化はないですね」
「よし、このまま引き続き、警戒を頼む」
「了解です」

レナに更なる警戒を頼むついでに、遥か彼方の前線を遠望してみると……、時折、ビームの直線的な輝きや大きな爆発光が確認できる事から、海賊艦船への攻撃は始まっているようだった。

6月10日。

迎撃に出てきた海賊の宇宙戦力を撃滅し、その全てを容赦なく一掃したオーブ国防宇宙軍は、続けて旧ヘリオポリス及び資源衛星の制圧作戦を開始。MS隊の支援を受けた？陸戦隊？は、内部に立て篭もる海賊やならず者達の激しい抵抗を物ともせず、僅か半日で抵抗勢力を掃討、全与圧ブロックを制圧してみせた。

その結果、この日より、L3宙域はオーブ国防宇宙軍の管理下に置かれ、アメノミハシラによって統治される事になる。

41　蓄えられる力　―L3再開発　1

六月中旬の掃討制圧作戦が上々の結果で終わり、L3がアメノミハシラの管理下に置かれると、宙域と旧ヘリオポリスや資源衛星の維持を第二艦隊と?陸戦隊?の分派隊に委ね、第一艦隊と機動部隊、?陸戦隊?本隊はアメノミハシラへと帰還している。もっとも、これで一安心と息を付く事はできず、何かと忙しい状態が続いている。

まず、拠点制圧戦で大量に発生した捕縛者の取り扱いだ。

拠点制圧で捕縛した海賊に対する処罰は身柄を押さえたオーブが行う事になっているのだが、その捕縛した数が余りにも……拠点に立て篭もっていた連中だけでも、三千人近くに及ぶほどに多い為、監視に人を取られ過ぎているのだ。

当然、その連中に必要となる飯や水、空気と言ったものも準備しなければならない為、これもまた、大きな負担になっている。

以前と同じく二日に一度、顔を出しては話をして行くコードウェル一尉から聞いた所によると、もう面倒だから、オーブ出身者以外は国外追放処分って銘打って、出身国の治安機関に連絡して引き取ってもらおう、という方向で各国と調整が始まっているそうだ。

まぁ、これらの仕事は総務部や保安隊のお仕事であって、直接的には関わってこないから、精々、頑張ってちょうだいとしか言いようが無い。

次に、先の作戦で実戦を経た作戦部隊だが、戦死者や負傷者が出たことで生じた穴を埋める為の補充や消耗した兵器や物資の補給といった事の他に、戦闘で得た経験を深化させる為にも作戦行動の評

価や反省、今後の課題の検討、実機による猛訓練等々が実施されている。

その影響で、サハク准将から教導隊的な任務を与えられた、ウルブス小隊……つまりは、俺、レナ、マユラの三人も大忙しに動き回っているのだ。

……とはいえ、忙しいなりにも、ちゃんとプライベートな時間を確保して、ミーア達と恋人らしく？むふふ？な事をしていたりする。

特に、アメノミハシラに帰ってきた直後の？むふふ？は、生命を賭ける戦闘に参加しただけあって、我が息子が普段以上に猛って猛って……、あ、いや、でも、まぁ……、その時は、基本的に第一ラウンドで前後不覚になる程に堕ちるレナと、一頻り甘えて満足すると抱きついたまま寝てしまうマユラがいつも以上に燃えていて、粘り強かったから丁度良かったのかな？

ちなみに、ミーアはいつもと変わらぬ持続力を見せ付け、第三ラウンドで堕ちるまで俺の上から降りることがなく相変わらず手強かった、って、これもどうでもいい話だな。

んんっ、話を戻して……。

Ｌ３を制したことで、アメノミハシラは新規コロニーの建設……いや、この場合はコロニー再建かな、とにかく、Ｌ３再開発の開始を宣言し、本格的な動きを見せ始めた。

まず、アメノミハシラにおいて、アメノミハシラ・スペースコロニー開発運営機構という、スペースコロニーを建造する為の資金を管理運用したり、スペースコロニー建造を施行したり、建造されたコロニーを管理運営したりする、半官半民の事業会社が設立された。

このスペースコロニー開発運営機構の主たる出資者は、アメノミハシラ及びサハク家が資金の半分以上を出資して筆頭株主となり、次いでモルゲンレーテ・アメノミハシラ支社、ラインブルグ・ホールディングス、ミハシラ銀行、アメノミハシラ商工会、商船組合等々になっている。

でもって、今回、Ｌ３においてコロニー建設を実際に施工するのは三大国の大資本が運営する建設メジャーではなく、俺の知らない間に出来ていた、アメノミハシラ協同建設組合なるアメノミハシラに本店支店を置く建設会社で構成され、ラインブルグ宇宙建設……パーシィの親父が世話役を務める建設会社の同業者組合だ。なんでも、これまで以上に安全にコロニーを建造できるというコロニー建造用建機を開発したことが評価され、白羽の矢が立ったそうだ。

そのコロニー建造用建機とはなんぞやと思って調べてみた所、以前、ＭＳ選定のコンペティションの際にアメノミハシラ近くに係留されているのを目撃した、長大な板みたいな怪しげな建造物らしく、ラインブルグ宇宙建設が主導して建設したものだそうだ。

いやはや、最近、パーシィの親父が静かだなぁと思っていたら、そんな事をしていたとは、まったくもって、流石としか言いようが無い、？できる？おっさんだよ。

まぁ、それはともかく、このコロニー建造用建機をＬ３に運んで、居住用コロニーの建設に取りかかるそうなのだが、今現在はそれの前準備……、中古のマルセイユ三世級を五隻程連ねて改装した滞在用ステーションを開設したり、主エネルギー源を確保する為に太陽光発電パネルを設営しているとのこと。

また、この居住用コロニーの建設を進めるのと同時並行する形で、無重力で運用される工業用ブロック部の建設も行われるそうだ。これが完成した暁には、アメノミハシラから資材を運ぶ手間を少しで

も減らすべく、資源衛星や旧ヘリオポリスから得られた資源やジャンクを運び込みコロニー建設用資材に加工するらしい。

加えて言えば、Ｌ３に根を張っていた海賊が一掃された事を受け、地球圏の航路が飛躍的に安全になった事もあって、ＳＫＯの規模が縮小される事が既に決まっており、削減される事になる人員……軍属はともかく、後方支援に当たっていた民間出身者は希望すれば、優先的にＬ３宙域での建設作業関連等の仕事で雇用されるとの事らしい。

以上が、門外漢の俺が知る限りの、Ｌ３コロニー建設に関わるあれこれだ。

……要するに、Ｌ３制圧戦後のアメノミハシラは、これまで以上に闊達に動いているという事だな。

◇　◇　◇

七月。

先の制圧戦で行われた、マリーネの兵装パックに関する実戦評価の結果、六種類あるパックが全て採用される事になり、マリーネを運用しているトツカ級や防衛隊のＭＳ格納庫には専用の換装設備が順次、据え付けられ始めた。

この事を受けて、俺達、ウルブス小隊はマリーネを運用する部隊に、それぞれのパックの特徴と弱点を講義しつつ、三人寄れば文殊の知恵という言葉があるように、様々な状況に応じた最適なパック

の組み合わせ……、例えば小隊なら、Ｓ（標準兵装）パック三機で成る基本小隊やＳパック二機とＦＳ（制圧支援兵装）パック一機の迎撃小隊、Ｓパック一機とＨＡ（重攻撃兵装）パック二機を組み合わせた対艦攻撃小隊、Ａ（強襲兵装）パック二機とＦＳ（制圧支援兵装）パック一機の強襲小隊、ＨＭ（高機動兵装）パック二機とＳ／Ｓ（狙撃・偵察兵装）パック一機で構成されるＣＯＳＰ（戦闘宇宙哨戒）小隊等々といった編成を考案したり、これら小隊の一段上の部隊となる中隊においても、二個基本小隊と一個迎撃小隊、一個ＣＯＳＰ小隊で構成される迎撃中隊、二個基本小隊と二個強襲小隊でなる宙域制圧中隊、二個基本小隊と二個対艦攻撃小隊で構成される対艦攻撃中隊等々といった具合に、目的に沿った装備編成を見出すべく、検討会や机上演習を重ねている。

これが上手く進めば、最終的には更に大きく大隊毎での最適を見出す事になるはずだ。

また、この任務毎の最適な組み合わせを見出す事に付随して、兵装各々の運用方法を換算した小隊や中隊のＭＳ戦術を系統理論化したり、各艦や防衛隊に通常において備える兵装数を割り出したりすべく、議論も行っていたりする。

そんな訳で、今日も今日とて、アメノミハシラ防衛隊で迎撃の主力となる防衛ＭＳ大隊で大隊長を務めるハロルド・ラッセル三佐を筆頭とするＭＳ大隊の作戦部隊と支援部隊の幹部連と会合を開いて、色々と話をしている所だ。

「ラインブルグ三佐、大隊で必要となる兵装の最適数を割り出すのは難しいものだな」

「ええ、小隊なら構成数が少ないから比較的簡単に見出せますが、中隊、大隊と規模が大きくなると、戦術や予算との兼合いもありまして、どうしても難しくなるんですよ」

「……潤沢な予算があるのなら、全機分揃えれば良い話になるが、

そういう訳にもいかないからな」
「はい、基本的に兵装は消耗品ですからね」

眉間に皺を寄せた三十台後半のラッセル三佐が睨むように向けている視線の先を見れば、二十代前半と思しき歳若い尉官達が資料を手に話をしているようだ。

「重散弾砲は対ＭＳ・ＭＡ戦に有効なんだから、これだけでも全機分を揃えたらいいんじゃないか？　っていうか、今の強襲兵装を標準にしてしまえば、かなり強力な部隊になるはずだ」
「何を言ってるんですか、ゲンタ二尉！　重散弾砲は爆発物やデブリを撒き散らしている面がある事を忘れたら駄目ですっ！　それに、ビームアサルトなら重金属粒子とエネルギーの補充だけ済みますが、重散弾砲は散弾カートリッジを消費するんです！　十全に運用しようと思えば、カートリッジを補充するだけで大隊の予算なんて簡単に食いつぶされますよっ！」
「むぐ、カウラ、世知辛い事を言うなよ」
「あんたが考えなさ過ぎなんだっ！」

何とも元気な事だなぁ、なんて感想を抱いた所で、ラッセル三佐が口を開いた。

「ラインブルグ三佐、艦隊はトツカ級一隻にどれぐらい乗せる事になりそうだ？」
「ええと、今の所、有力案なのは確か……、主兵装関連で、ビームアサルトが四から八、重散弾砲が二、無反動砲が二、ビームスナイプが一、ＡＢＣシールドが四、ＡＢＣ篭手が六です。副兵装関係は、肩部シールドが四機分、小型ミサイルパックが二機分、対艦ミサイルランチャーが二機分、センサーセットが一機分、追加スラスターセットが四機分、高硬度ナイフラックが四機分、破砕榴弾パックが

十機分って所ですね」
「そうなると、大凡で一機分位が予備になるのか？」
「ええ、一応はそうなるんですが、今、参謀本部で話が進んでいるＭＳ小隊の強化計画……、二機分隊四機小隊構想が実現した場合は、また変わってきそうですけどね」

ちなみに、この二機分隊四機小隊構想に、俺はなんら関与していないは……ず？

……そう言えば、この前、マユラが、アサギがＭＳ運用の資料集めで困ってるらしいから、アインさんが前に見せてくれた、昔の研究資料を貸してもいいよね、って言っていたような？

……。

いや、まさかなぁ、うん、落ち着け俺、これは絶対に自意識過剰だ、あはは。

「まったく、本来、戦力が増える事は喜ばしいはずなのに、逆に悩ましく感じさせられるとは……、これは上からの嫌がらせか？」
「ま、まぁ、それでも、現場で最適な兵装数を割り出せと言ってくれただけ、マシなのでは？」
「それは確かなのだがな……」

基本的に、用意した装備はこれだけだから、上手くやりくりして使ってくれ、って言うのが普通のはずだからな。

「現場からベースとなる数を出せるんですから、少し多めで申告したらどうです？」
「当然、そうするつもりだが……、同時に、根拠となる数字や仮定

状況も出せと言われているからな、上乗せした分は上手く削られるだろう」
「ははっ、お手盛りは許しまへんでぇ、って奴ですか？」
「ああ、兵站部の連中、削る事に関しては、忌々しい程に有能だからな」
「いやいや、際限なく、雪達磨式に増えて行くよりは健全でしょう」
「くっ、確かに、雪達磨式に軍備を拡張させていく本国の馬鹿共を考えると、それは違いないな」
「へっ、本国の……、馬鹿共？」

んん、どういうことだろうか？

「あ、そうか、ラインブルグ三佐はサハク准将に引きこまれた口だからわからないか。……いや、あまりにも馴染んでいるから、つい普通に話してしまったよ」
「そ、そうですか？」

自分ではわからないが、俺、そこまで馴染んでいるんだろうか？

「ああ、極自然に馴染んでいるな。……んんっ、それで本国の馬鹿共の話だったな」
「はい、さっきの雪達磨式に増えて行くって事に関係するんですか？」
「本国の軍事予算だが、本土防衛軍や海軍の予算要求が膨れすぎて、前年より五割り増しになっっている」
「え？　……戦後の復興でお金が必要な時に、ですか？」
「ああ、当然、セイラン宰相は渋ったらしいが、アスハ代表が要求を認めて押し通したそうだ」

まさかとは思うが、前にサハク准将からやり込められたことが影

響してるんじゃないか、なんて事を思いながら口を開く。

「セイラン宰相の苦労が透けて見える話ですね」

「軍備を整えるのも大切なのは言うまでもない。だが、国内の状況も考慮して動くのが普通のはずなんだがね」

そう言ってから溜め息をついたラッセル三佐は改めた感で話し出す。

「オーブ国防軍には、大きく分けて二つの派閥がある」

「それは、サハク派とアスハ派って所ですか？」

「ああ、中央……国防総省はアスハ派が主流だし、五軍の内、国防海軍と本土防衛軍もアスハ派が主流になっている」

「では、残る国防空軍と国防陸軍、国防宇宙軍の主流がサハク派ということで？」

「いや、空軍に関しては基本的に中道で、それ以外がサハク派となる。サハク家が以前から軍部で重役を担っていたとはいえ、五大氏族に昇格したのは極々最近の事だからな。真に影響力があるのは、サハク家が台頭する地盤となった陸軍と建軍から面倒を見てきた宇宙軍だけだ」

「なんだか、想像していたよりもサハク家の力が弱いような？」

「何、オーブ国民の大多数が？アスハ大好き？って事を考えれば、別に可笑しい事ではないさ」

「確かに……」

むぅ、オーブ軍の内情をまだまだ知らない現実を見るに、俺もまだまだ勉強不足だな、って思いは心中に秘めておいて……。

「となると、アスハ派が中央を押えているって事は国防予算関連も牛耳っている、って事ですよね？」

「その通りだ。今でこそ、先の本土防衛戦での敗戦でアスハ派の影響力が大幅に落ちているからサハク派も入り込んでいるが、以前はアスハ派が独占していたんだ」
「その事に関しては聞いています。何でも、国防予算部門に人員を送り込んで宇宙軍の軍需調達計画を変更させたと聞いています」
「ああ。以前の計画では、宇宙に関して門外漢で、宇宙艦艇は大きければ大きい程良いだろうって、単純な大艦主義が一般的だったアスハ派が立てただけあってな……、かなり無理がある調達計画だった」
「宇宙軍が調達する戦闘用艦艇はイズモ級のみって奴ですか？」
「そう、イズモ級のみで十六隻」
「ご、豪儀過ぎますね」
「だろう？　……あ、いや、別にイズモ級が悪いって言うわけじゃないぞ？　イズモ級みたいな強力な艦艇の存在は仮想敵国の動きを牽制する抑止力になりうるからな」

その意義を認める為にも一つ頷いて応えると、ラッセル三佐も頷いて、更に言葉を続けた。

「しかし、イズモ級はあくまでも正面戦力……、艦隊決戦の中心となる戦艦である以上、そればかりを揃えたとしても意味が無い。実際、先の海賊が跋扈した状況ではそれほど役立っていなかっただろう？」
「そうですね。それを何とかする為に、実家も急ぎ仕事を頂きました」
「そう言えば、ハガネ級やトツカ級の開発にはラインブルグ三佐も関わっていたんだな」
「ええ、ご縁がありました」
「ふむ、ならば言うまでもないだろうが……、やはり、多種多様な用途での運用を考えると、駆逐艦ないしフリゲートクラスが最も使

い勝手がいい。加えて言えば、イズモ級は運用面以外にも維持経費……人員や調達価格も問題だ」

「単純に計算して、イズモ級一艦を動かす人員で、トツカ級なら三隻程度、ハガネ級なら二十隻以上は賄えるらしいですね」

「ああ、それに調達価格がトツカ級の十倍……、幾ら量産化で頑張っても七倍が精一杯だろうな」

はい、人員と価格を踏まえて考えると、イズモ級一隻と引き換える形で、トツカ級三隻……一個戦隊弱の戦力ができた上、四隻分のお釣りが帰ってきました。つか、イズモ級を三隻ないし四隻分で、トツカ級の艦隊が作れるような？

「そもそも、戦力を揃えるにしても、オーブが人口一千万を何とか超える小国である以上、身の丈にあった戦力が望ましいし、安全保障に掛かる人員やコストもできる限りは抑えたい。特に今は本国の復興に予算も必要だからな」

「けれども、ここアメノミハシラが位置する場所が場所だけに油断は出来ないし、今後、Ｌ３での再開発を行う事を考えるとこれを守りきるだけの戦力が必要となる」

「そう、だからこそ、宇宙軍は最小限の戦力で最大限の効果を求める必要があるし、これは当然、オーブ軍全体にも当てはまる事でもある。だというのに、海軍は堅実な方法……防衛に有効な潜水艦の導入や水中戦用ＭＳの開発をせずに、運用実績を持たない空母の導入を推し進めたり、本土防衛軍はイズモ級の建造に着手したり、ＭＳ……Ｍ１に飛行能力を持たせようとしてみたり、一体、何を考えているのか」

な、なんというか、外征の準備をしているようにしか思えんな。

……。

ううむぅ、軍部っていうか、アスハ派内部に、偉大なアスハ様の元で動いているんだから我々の為す事は全て上手く行くだなんて、大アスハ主義（笑）とか、我がオーブは他の三大国に劣らぬ大国ぞ、我らの前に互する敵はおらぬ、みたいな大オーブ主義（笑）でも蔓延っているんじゃないか？

何というか、それ位は突拍子もない事をじゃないと説明できん。

「すまない、ラインブルグ三佐、愚痴になった」

「あ、いえ、気にしないでください。こちらも勉強になりますので」

「……ふ、そうか」

苦笑をもらしたラッセル三佐はクルーカットしている金髪を一撫でして、表情を引き締めた。

「では、そろそろ話を締めるか。ラインブルグ少佐、艦隊とは、海も宇宙も関係なく、役目の異なるものを組み合わせて、多様な状況に対応できるようになってこそ、強力な戦力と言えるはずだ。それこそ、今、やってるＭＳ兵装の組み合わせの如くな」

「ええ、そうですね」

「……さて、諸君、議論を開始して、それなりの時間が経ったわけだが、各々の意見や考えを聞かせてもらっても良いだろうか？」

いつの間にか静かになっていた幹部連中が、ラッセル三佐の言葉を聞いて、ある者は自信ありげに、ある者は少々悩ましげな曇り顔で、また、ある者は顔面を蒼白にして、頷き返している。

「ふむ、よろしい。では……、ゲンタ二尉から始めてもらおうか」

その後に関しては、出てくる意見を今後の参考にする為にも、唯ひたすらにメモを取るだけだったので割愛するが、俺は拠点防衛を本分とする部隊の様々な視点からの意見が聞けたし、ラッセル三佐も兵装数に関して、ある程度の目処が立てられたみたいだった。

いやはや、人が集えば、大抵の事は何とかなるって思わされる……、それこそ、例え、二機分隊四機小隊編成に切り替わったとしても、割と早く数字が割り出せそうだと思える程に、有意義な時間だった。

42　蓄えられる力　―Ｌ３再開発　２

八月。

Ｌ３において、新規コロニーの建造作業が本格的に始動した影響で、アメノミハシラとＬ３を往還する商船の数が大幅に増えた。云わずもがな、コロニー建造に使用される各種資材に加えて、工事関係者や彼らを支える各種サービス業に携わる人達、そして、人が生活する為に必要な水や食料、生活物資を運ぶ船だ。

当然の事ながら、日々送り込まれる工事用資材や生活必需品に関係する企業には次々に仕事が舞い込み、アメノミハシラ経済にも活況を呼んでいるようだ。付け加えれば、オーブ本国で、【カグヤ】の二代目と言う事で【カグヤ？】と命名されたマスドライバーの再建が終了した事も人と物の流れを活発化させていると思われる。

また、混乱するかと思われていたＳＫＯの縮小も、軍属は新設される予定のＬ３防衛隊や増強される第二艦隊、民間人はＬ３コロニー建造関連や事業規模を拡大しようとしている商船会社といった具合に、次の雇用先が確保されている事もあって粛々と進んでおり、特に大きな問題は発生していないそうだ。

ちなみに、利用料金の引き下げと共に護衛隊が削減されて、規模が縮小されつつあるＳＫＯだが、組織上層部はＳＫＯの生き残りを図るべく有用性を示す為に平時でも一定の需要があると考えられる、宇宙航路上での事故・災害救助や救命救急関連に手を出そうと考えているとのこと。

要するに、宇宙の消防署（？）みたいなものになろうって考えているみたいだ。

宇宙での物流やそれを支える商船を守る事を第一義とするＳＫＯのあり方を考えると、妥当だと言える方針だろう。

◇　◇　◇

先の制圧戦で仕事をしたからかはわからないが、アメノミハシラ内部にある宇宙軍総司令部、その一画にウルブス小隊専用のオフィス……というよりも控え室と言った方が近いかもしれないが、とにかく、腰を落ち着ける事ができる場所を設けてもらえた。

それまではアメノミハシラ防衛隊の好意で場所を借りていただけに非常にありがたいことだ、なんて事を考えながら、新しい仕事を携えてきたゲスト……毎度お馴染のコードウェル姉の話に耳を傾ける。

「なるほど、俺達が試金石……テストケースになるって訳だな？」
「はい、参謀本部は導入の可否を判断する為にも、実機運用で四機小隊編成のメリットとデメリットを明確にする必要があると判断しました。それで、こういう言い方もなんですが、現状、手が空き始めているラインブルグ小隊に任せようと言う事になりまして……」
「ははっ、俺達は予備役……、一種、臨時雇い的な存在だから、別段に気を使う必要はないさ。それに参謀本部が言う通り、机上だけで話を進めて、大上段で導入するよりは余程いいからな、うん、了解したよ」

俺の言葉に安堵するようにホッと肩の力を抜いて見せたコードウェル一尉だが、今日はいつもと違い、髪を後で纏めて縛っている為、

普段はあまり見えない首筋のラインが見えたりするから、いつも以上に女の色気を感じてしまい、ちょっとドキッとさせられてしまう。

「三佐？」

「あ、いや、なんでもないよ。それで、今の小隊にもう一人が加入する形になるのか？」

「私の妹、ユカリ・コードウェルが加入することになります」

「んっ？　三尉は技術部でテストパイロットをしてたはずだが？」

「ええ、当初は艦隊か防衛隊から人員を派遣する予定だったのですが、Ｌ３防衛隊が前倒しで新設されるのと第二艦隊が再編される事になりましたので、再配置に伴なう異動が行われていまして」

「ああ、そうか、先の戦闘に参加した連中から新設部隊に抽出されるだろうし、幹部の立場で考えたら、できる限り実戦経験者を放出したくないわな」

「はい、それ以外の新任だと、マリーネに慣れておりませんし、そもそも、三佐達に付いて行ける者がいません」

「そうか」

確かに、コードウェル妹なら腕も含めて見知っているし、背中を預ける事も……、まぁ、できるだろう。

「了解。で、三尉はいつ着任するんだ？」

「今、引継ぎ中なので、明後日位には着任する予定です」

「わかった。マリーネの兵装関連の仕事はほぼ終わっているから、四機小隊の戦術検討とかを始めておくよ」

「はい、よろしくお願いします」

さてと……。

「真面目な話はここまでにして、ちょっと茶飲み話でもしていくか

？」
「えっ、よろしいのですか？」
「まぁ、一尉が忙しくないならだけど」
「なら、少しだけ……」
「助かるよ。マユラは一日仕事に出ているし、レナにも用事に出てもらっているから、話し相手に飢えていた所なんだ」

マユラは腕を向上させる意味合いも兼ねて、部隊連携の講義と仮想敵を務める為に、今日一日、シミュレーターを使ってやっている防衛隊の模擬戦闘訓練に参加させているし、レナには総司令部に兵装関連の報告書を届けてもらう為のお使いを頼んだのだ。

「飲料パックは、ＮＩＰＰＯＮ茶が好きなんだっけ？」
「はい、そうですが……、あの、三佐、私が……」
「気にしない気にしない。ここでのホストは俺だよ」

なんて風に自分的には気取った事を言いながら、部屋の片隅に固定されている冷蔵庫からＮＩＰＰＯＮ茶と今日は気分を変えてレナ愛飲のＭＡＴＴＹＡオレを取り出す。

「ほい」
「ありがとうございます」
「そういえば、コードウェル一尉」
「はい？」
「今日は髪の毛を纏めているんだな。……うん、中々、似合ってるよ」
「あ……、え、えと……、あ、ありがとうございます」

あら可愛い、コードウェル一尉は頬を朱色に染めております事よ。

その後、アメノミハシラで流行しているファッションや料理店、居住区画の日常的な様子、隙がないと思っていたサハク准将の意外な寝坊癖（朝）な実態等々を話したり聞いたりしていたのだが、自然と共有している話題……制圧戦後のアメノミハシラの様子や最近の世界情勢、先月にロールアウトした艦隊型護衛艦クロガネ級の評価といった？味気ない話？に傾いてしまうのは仕方がないだろう。

「へぇ、アメノミハシラに寄港する商船が増えているのか」
「海賊の根絶を図った事と、実力を示した事で各国の商船会社から信用を得たみたいです。それに、元々、アメノミハシラは地球と宇宙の連絡には、非常に便利な場所にありますから」
「確かにな」

これぞ静止軌道の醍醐味よ、って奴だな。

「話を変えるけど、大西洋連邦で新型ＭＳがロールアウトしたことは聞いているか？」
「ええ、名前は【ウィンダム】と聞いています」
「なら、詳細なスペックを聞いてないか？」
「そこまではわかりませんが、公開された映像を分析した内容を伝え聞く限りでは、アークエンジェルに乗せられていた【ストライク】に匹敵するそうですよ」
「ストライクか……」

ストライク……、ヘリオポリス襲撃を仕掛けたクルーゼ隊が唯一奪取に失敗し、以後、数多のザフト部隊を退けて撃破してきた、キラ・ヤマトの愛機だったな。

「手強いな」
「ええ、これもストライカーパック運用機ですから、運用に柔軟性を持っていますから、手強いでしょうね」
「聞いている限り、そのバックパックシステムを運用する為には専用設備が必要みたいだけどな」
「ストライカーパックは実戦を考慮してあって、設備が無くても前線での換装が可能だと聞いたのですが？」
「宇宙ならやってできなくはないかもしれないが、現実的ではないわな。実戦経験者として言わせて貰えば、マリーネで使ってるビームアサルトのカートリッジ交換でもタイミングが難しいのに、いつ何時、攻撃されるかわからない戦場のど真ん中でのバックパックの換装なんて悪夢だよ。付け加えれば、後方に下がったとしても細かなデブリが流れくるわ、いきなり流れ弾が飛んでくるわで、まぁ、これは無理だとは言わないが、やりたくないよ」
「確かに……、そもそも後方に下がるのなら、素直に母艦に戻って推進剤も含めた補給を受ける方が良いですね」
「そういうこと」

要するに、バックパック換装式運用機とアタッチメント式のマリーネは運用方法ではあまり大差はないのだ。

「それで、現行の主力機【ダガーＬ】から切り替わるのに、どれ位掛かると思う？」
「そうですね……、一部に先行配備して、運用面の問題を解決してから本格配備を始めるでしょうから、最低でも一年は掛かるはずです」
「親大西洋連邦国……、いや、【新地球連合】への配備は？」

新地球連合とは、今年六月、俺達がＬ３掃討制圧戦で忙しい間に、さり気に結成されていた新しい国家連合体で、大西洋連邦と南アフ

リカ統一機構、汎イスラム同盟で構成されている。
　この動きは大西洋連邦が再び覇権を握る為の最初の一手であると同時に、アメノミハシラからＭ１アストレイを導入して、力を蓄えつつある南アメリカ合衆国や、西ユーラシア連合とアフリカ共同体が地中海同盟を結成したことに対抗する意味もあるんだろう。

「今、南アフリカと反イスラムが使っているのはストライクダガーですから、ダガーＬを流すのでは？」
「やっぱり、その辺りが現実的か」
「……アメノミハシラも似たような事をしてますからね」
「マリーネに更新したから、余ったＭ１を南アメリカ合衆国に、補修用パーツ取りとして安く流しているからな」
「一部は【レイスタ】にも流れてます」

　レイスタとはジャンク屋ギルドがＭ１をベースに開発した民生用モビルスーツであり、非武装が前提の作業用モビルスーツに位置づけられている。

……まぁ、実際、どう使われているのかまではわからないけどな。

「アメノミハシラにとっても、今はコロニー建造で金が必要な時だから、せっせと稼ぎたい所だな」
「ふふ、そうですね。今も在庫になる予定のＭ１Ａには、月面都市群から照会が来ています」
「あれまぁ、やっぱり欲しがる所はあるんだな」

　でも、これだけＭＳを外に出せるのって、最大勢力だった地球連合が潰れて、各々の勢力が睨みあっている状態だからこそだよなぁ。うんうん、実家で作った戦闘用艦艇やマリーネが売れたり、共同開発でマリーネの陸戦型が開発されていたりする事を考えると、ほん

と、カナーバさんには感謝しないと……。

「月面都市群も前の戦争ではかなり危ない綱渡りをしていましたから、ある程度の自衛戦力が欲しいと考えているんでしょうね。それに、ハガネ級にも興味を持っているみたいです」

「ハガネ級か……、送り出した身から言うのもなんだけど、本来は拠点防衛型の艦艇に近いから、もしも艦隊同士での砲戦なんて起きたら、酷い目にあうだろうな」

「だからこそのクロガネ級ですよね？」

「ああ」

クロガネ級はラインブルグ宇宙造船がハガネ級に続き、艦隊護衛用艦艇として送り出した宇宙戦闘艦であり、二週間の公試後、【ＳＦＥ－２】の艦級が与えられて採用されている。

このクロガネ級の大きさはトツカ級の三分の二程度であり、形状はハガネ級を踏襲して潰れたペットボトルのようなのだが、艦首に電磁式対ビームコートを備えたり、推進部を後部両舷に装備したりと、トツカ級にも似ていたりする。

「来月にはハガネ級との切り替えが始まるみたいです」

「ラッセル三佐から聞いているよ。お役御免のハガネ級も防衛隊に回すらしいな」

「ええ、近接防衛ラインを構成できますし、改装すればＭＳの補給支援艦や宙雷艇になりますから」

「ま、無駄にならなくて良かったよ」

勿体無いの精神は大切だよね。

ジャンク屋を除いた現代人が忘れつつある精神を思い出していると、部屋のスライドドアが開き、もう見慣れたオーブの白い制服を着たレナが入ってきた。

「先輩、戻りました」
「おー、おかえり、レナ。お使い、ありがとう」
「いえ、これくらいは当然ですよ。……あ、アサギさん、こんにちは」
「こんにちは、レナさん、少しお邪魔させてもらってます」
「いえ、アサギさんが来ると、何かと構って欲しがる先輩の相手をしなくて済みますから、とても助かります」

ちょ！　なにそれ、扱いひどくないっ？

「そうなんですか？」
「ええ、それはもう、今日だって、じーとこっちを見ているから用事かなって思って先輩を見ると、ふいと知らない顔をするんですから、反応に困るんです」
「ふふ、三佐は寂しがり屋みたいですね」

うぅ、何か、立て続けに脇腹を連打されてる気分。

「でも、ザフトにいた時と違って、そういう甘えたがりな部分も見せてくれるようになったから、嬉しかったりもするんです」
「……それって、何だが、羨ましいです」

……お、俺は物凄く、恥ずかしいです。

「はぁ、私にも、どこかに良い人が居ればいいんですけど……」
「えっ？　アサギさんなら、引き手数多じゃ？」

「そう言ってもらえると嬉しい事は嬉しいんですが、現実、中々、良い人がいなくて……」
「そうなんですか？」
「ええ、だから、本当に、マユラやレナさんが羨ましいです」

……ううむ、コードウェル一尉は俺達の関係に嫌悪感を抱かないんだろうか、なんて事を考えていると、以心伝心なのかはわからないが、レナが俺の知りたい事を聞いてくれた。

「ねぇ、アサギさん。私達の関係って、どう思います？」
「……マユラから初めて四人の関係を聞いた時は、三佐に何か弱みでも握られて、関係を強要されているんじゃないかって訝しんだ覚えがあります」

けしからん三股男で、サーセン。

「でも、定期的にマユラの話を聞いていると、特に洗脳とかされている訳じゃないし、本当に大切にしているんだってわかってきて、それなら……、マユラ達が納得しているならいいのかなって、思うようになったんです」
「と言うことは、私達が焦れてくる程、先輩が？最後の一線？を超えなかった事も？」
「ええ、聞きましたよ。一緒に生きていけるだけの甲斐性を磨くまではって……」

凹（おう）、俺がヘタレである事が一尉にばれてたっ！

「それまで、男の人は我慢が効かない人が多いって思い込んでいましたから、新鮮でした」
「確かに、先輩って、凄くエッチな癖に、結局、自分の意志を貫徹

しましたからね。本当に、あの夜に至る一年、長かったです」
「……ごちそうさまです」

おふぅ、こちらに向けられたコードウェル一尉の生暖かい視線が羞恥を煽るっ！

「はぁ、私も、ラインブルグ三佐みたいな恋人がいたら、良かったんですけど」
「は、ははは、何とも過分な評価を頂きまして……」
「そんなことないですよ。自信を持ってください」
「……ありがとうございます」
「あ、なんだか、出過ぎた事を言ったみたいで……」
「気にしなくてもいいですよ、アサギさん、先輩、喜んでますから」

うへぇ、レナに内心を読まれたっ！

「……あ、すいません、ちょっと長居し過ぎましたね。そろそろ、お暇させていただきます」
「いやいや、いいリフレッシュができたから、気にしないでいいし、また来てよ」
「ええ、先輩の相手をしてもらうだけで、こっちの負担が減りますから、助かります」

レナ君、まだ、それを引き摺りますか……。

「それでは、三佐、レナさん、これで」
「あ、先輩、私、近くまで送ってきます」

え、なんで、と思ったら、それが顔に出てしまったんだろう、レナが苦笑しながら付け加えてきた。

「男の人抜きで、女の子同士でちょっと話したい事もあるってことですよ」
「あ、そういうことか」
「はい、だから、ちょっと行って来ます」
「ん、了解」

綺麗に敬礼して見せたコードウェル一尉に、こちらも敬礼を返し、二人が部屋を出て行くのを見送った。

いったい何を話すのか知らないけど……、まぁ、レナも一尉と馴染んで来てるってことだな。

さて、良い感じに肩の力も抜けたし、四機小隊編成の有用性を検討する計画のアウトラインでも立ててみるか、なんて事を考えながら、俺は自身の机に据えられた情報端末を立ち上げた。

もっとも、この後、?ちょっと?と言って席を外したレナが、いったい何処で何を話しているんだと、こっちが首を傾げる程に長時間帰ってこず、上司として雷を落さざるを得なくなったのは予想だにしていなかった。

ガールズトークも程々に……。

43　蓄えられる力　－L3再開発　3

九月。

四機小隊編成の基本戦術を構築すべく、日々是検討しつつ、実機やシミュレーターでの確認を行っているのだが、MSだろうが戦闘機だろうが、やる事は一緒なんだから、先人が生み出した旧世紀より伝わる戦闘機の運用方法……二機で分隊（ロッテ）を組み、この分隊を二個揃えて小隊（シュヴァルム）を構成して運用する方法が良いのではないかと、個人的には判断している。

要するに、分隊では二機一組で連携を行い、二個の分隊で構成される小隊では分隊同士で相互支援を行うという形態だ。

これのメリットは三機よりも二機の方が呼吸を合わせ易いから緊密な相互連携が期待できるし、熟練に必要な訓練時間も短縮できる。また、分隊での二機連携に慣れてきたら、同じ相互連携システムである小隊連携自体のイメージを掴みやすくなるので、小隊での熟練が更に早まるって事もあるだろう。

いやはや、やはり、積み重ねられてきた先人の知恵ってのは偉大なものだし、大切にしたいものだ。

そんな事を考えた所で、マユラが小隊オフィス備え付けの液晶パネルに実物映像を映し出して、凛々しくもどこか甘さを感じさせる声で特徴を説明してくれている、ハガネ級とトツカ級の合いの子のようなクロガネ級へと意識を向ける。

実は明日、実際の艦艇とＭＳシミュレーターとを宇宙軍総司令部の大型コンピュータを介して繋ぎ、仮想空間上で模擬戦闘訓練を行うという初めての試みで、うちの小隊が第一艦隊第一宇宙戦闘群第三戦隊……クロガネ級四隻と対戦するのだ。

「ここに映して出されている通り、クロガネ級は対艦兵装こそ、艦首艦上部のゴットフリートＭｋ．７２一基と艦首艦底部の７５?単装リニアカノン一基だけだから、トツカ級よりも見劣りするけど、ＢＩで使用されている対ＭＳ・ＭＡ制圧用小型ミサイル【ヤカゼ】を運用する六連小型ミサイル発射管が二基ずつ両舷に埋め込み装備されているし、近接防衛火力の要であるビームファランクスが艦首側の艦上艦底部に各四基、両側舷に各二基、艦尾の艦上艦底部にも各二基で合計十六基、艦尾主兵装として艦上艦底に３０?連装ビーム砲が一基ずつ、相互支援……十字砲火が形成できる位置に備えられているわ」

後、付け加えれば、艦橋部付近には１２．５ｍｍ近接防御機関砲（ＣＩＷＳ）が三基据えられているし、艦底部のバイタルエリアを保護する為に電磁式対ビームシールドとＣＩＷＳを一基装備している。更には艦首にも電磁式対ビームシールドを装備しているから、ハガネ級と違って、艦隊戦でもお荷物にならない程度に追随して、対艦攻撃を仕掛ける事もできたりもする。

「それにトツカ級と同じく、近接防衛システム……リングを運用していることから、懐における死角はほぼ存在していないと言っていいでしょうね」

まぁ、要するに、全ての面でバランスの取れたトツカ級と比べれば、クロガネ級は接近してくる敵機や脅威を迎撃して排除する事に重点を置いている近接護衛艦って奴だな。実際、シミュレーターで

コンピュータが操るクロガネ級と対戦してみたんだが、ＭＳにとってはかなり厄介な相手だった。

「このクロガネ級をマリーネ単機で落す事ができるかをシミュレーション等で検討した所、Ｓ（狙撃・偵察兵装）／Ｓパックでの艦体側部への長距離狙撃か、Ａ（強襲兵装）パックで可能な限り接近して、破砕榴弾を大量に撃ち込むのが最も有効であるとの結果が出ているの」

お、流石にニューフェイスとはもう呼べない、【ウルブス４】…

…ユカリ・コードウェルが手を挙げたぞ。

「はい、ユカリ、関係する事ならどんなことでもいいから、遠慮なく言ってね」

「あ、はい。……えと、マユラさん、なんで単機での対艦攻撃を検討したんですか？」

「ビーム兵装を装備したＭＳが単機でも艦艇を落す事ができるっていう事を戦訓で得ているから、基本データとして、マリーネが単機でクロガネ級を落とせるかどうかを調べたのよ」

「そういうことでしたか。……でも、Ａパックでの強襲はともかく、Ｓ／Ｓパックでの長距離攻撃だと、外れる可能性が高いと思うんです」

「うん、それで？」

「はい、ですから、ＨＡ（重攻撃兵装）パックで攻撃を仕掛ける方が有効なんじゃないですか？」

「そうね、ユカリの言うことは堅実だと思うし、本来なら、それが一番なんだけど……、単機の場合、ＨＡパックで攻撃を仕掛けると、こっちが落ちる可能性の方が高いのよねぇ」

「……ＨＡパックは防護性が弱いから？」

「ええ、そういうこと。アインさん、じゃなかった、三佐でも落されるわ」

「ラインブルグ三佐でも、ですか？」

驚きで目を見開いたコードウェル妹は、確認するようにこちらを見たので首肯してやる。

「ああ、相手が単艦でも、リングを有効に利用されたら、俺も簡単に落ちる、っていうか、実際、一対一のシミュレーター訓練でポンポン落された」

ＨＡパック装備では、クロガネ級に接近を図ろうにもは防護面が弱い上、大きい爆発物を肩に乗せている事からビームファランクスの弾幕だけでも脅威になって、容易には近づけなかった。ならばと、機動力と運動力でもってビームの雨を避けながら、何とか隙を見つけて、対艦ミサイルや無反動砲弾を弾切れになるまで発射したのだ。けど、無反動砲弾は弾速が遅く、ミサイルは可燃物満載ということもあってか、その全てがビームの雨やＣＩＷＳの迎撃で破壊されてしまうという悲しい結果に終わってしまったよ。

こんな具合に対艦攻撃が失敗してガックリと来ている所に、追い討ちを掛けるように、これからは俺のターンとばかりに大量の小型ミサイル……ヤカゼが撃ち出された時には、思わず顔が引き攣った程だ。

それでも諦めずに、追尾してくるミサイル群をビームアサルトや頭部機関砲で迎撃したり、フレアーで誤誘導させたりして対応しつつ、まずは、こちらの行動を制限する原因となっているビームファランクス群を一画だけでも破壊しようと、少し接近して破砕榴弾を撃ち込もうとしたら……、いつの間にか、リング上を回る四機のベルダンディが装備する重散弾砲の十字砲火帯……キルゾーンに嵌り込んでしまっていて、こちらが攻撃を仕掛ける前に、クラスター弾の暴風雨を浴びたのには泣いた。

マリーネのシミュレーターで撃墜判定を受けた後、メインモニターがブラックアウトしてから赤字で出てくる、【ｍ９（＾Д＾）撃墜されてやんのっ！】を見たのは本当に久しぶりで、これ程腹立たしく負けた人間を奮起させるものはないと思い出させてくれたよ。

うん、その後、レナとマユラに、いい加減にして下さい、周りに迷惑だよ、って羽交い絞めにされて止められるまで、三佐って権限を使ってまで八時間以上もシミュレーターを占拠して、ぶっ続けで訓練を続行したくらいだからなぁ、いやはや、本当に、あの挑発文の導入を主導した甲斐があったものだ。

いや、そんな俺の訓練（醜態）はともかくとしてだな……。

「まぁ、あくまでも単機での話だ。セオリー通り、複数機での連携で対応能力を飽和させたり、片舷だけでも近接火砲を潰したりしてから、攻撃を仕掛ければ、ＨＡパックは十分に通用するよ。……相手が単艦ならな」

「そうですね、分隊なら高い勝率で、小隊だったら確実に勝てる相手です。……相手が単艦ならですが」

俺の所感とレナの肯定意見を聞いた三尉は、小さく小首を傾げて、口を開いた。

「相手が複数なら、無理なんですか？」

「無理ね」

「無理だな」

「無理ですね」

俺達三人が声を揃えて、肯定するとコードウェル妹は幼さの残る顔を引き攣らせた。

「そんなに、ですか？」
「ええ、クロガネ級って、統一された指揮を受けて、複数艦で連携してきたら、物凄く手強いわ」
「こっちが四機小隊で攻撃を仕掛けると考えて、相手が二隻なら勝率が大きく悪くなって、ほぼ互角になるだろうし、三隻に増えたら、こちらが不利だ」
「戦隊規模……四隻になったら、突破を図る道中、ビームの霧雨の中を行くような状態になりますから、小隊だけでは絶対に攻撃したくないですね。ビーム兵装のマリーネですら、そう思うくらいですから……、もし、ジンやシグーみたいな実弾兵装が主兵装のＭＳなら、中隊規模でも一隻も落とせないかもしれません」
「ああ、それに加えて言えば、リングがあるから、ＭＳの対艦基本戦術……、運動性でもって相手の懐……死角に潜り込んで攻撃を仕掛ける事も難しい」
「そのリングを攻撃しようにも、相互連携で反撃してきますし……」
「そうよねぇ。それこそ、クロガネ級を無傷で撃破したかったら、ＭＳじゃなくて、ＭＡ……メビウスや可変機のオオツキガタで一撃離脱での交差攻撃をした方が確率は高いかもしれないわ」

あ、三尉の顔から血の気が引いた。

「な、なら、明日はどうするんですか？」
「作戦のベース案としては、レナに長距離から狙撃をさせて、一隻を沈めてから、本格的な対艦攻撃を仕掛ける事が決まってるわ」
「ああ、マユラの言う通り、レナ以外は狙撃が成功するまで、第三戦隊が撃って来るはずのヤカゼを撃ち落したり、相手の注意を引く囮役になる。んで、この狙撃で、一隻でも撃沈するか大破に追い込んで、戦闘から離脱させてから、本腰を入れて対艦攻撃を図るって所だ」

本来なら、小隊だけでクロガネで構成された戦隊に攻撃を仕掛けるなんて、狂気に満ちたことはしないけど、今回は仕事だからな、なんて事を考えていると、顔色が悪いままのコードウェル三尉が恐る恐る尋ねてきた。

「あの……、明日、それぞれの役割は？」

「今、考えているのは、俺とマユラの第一分隊（前衛）は両機共にＡパック装備で防御火砲を削る強襲役や囮役を担当。第二分隊（後衛）はレナが狙撃で対艦攻撃するからＳ／Ｓパックで、三尉は狙撃機を周辺の脅威から守るＳパック（標準兵装）って所だな」

「では、ＨＡパックは使用しないと言うことですか？」

「ああ、小隊だけで攻撃を行う場合は、不適当だな」

俺がそう言うと、血色が少しずつ元に戻りつつあるコードウェル三尉は、なにやら難しい顔をしたと思ったら、俄かに口を開いた。

「三佐、聞いた情報を元に考えると、第三戦隊を正面から叩こうと考えるなら、最低でもマリーネの一個中隊は必要になると思うんです」

「うん、まぁ、妥当な数だとは思う。それで？」

「はい、マリーネの中隊……十二機編成での攻撃を仕掛ける場合の、兵装の組み合わせを聞いてもいいですか？」

「その中隊は、四機小隊が三個って事か？」

「はい」

ふむ……。

「そうだな、マリーネの一個中隊で攻撃を仕掛ける場合、俺なら……、対艦攻撃の主軸となるＨＡパック装備の対艦攻撃小隊が一つ、

囮役と近接火砲の削り役を担うＡパック装備の強襲小隊が一つ、強襲を支援するＳパック装備三機と対艦攻撃や前衛の援護をするＳ／Ｓパック装備一機でなる支援小隊が一つかな。けど、こういうのは正解がないものでもあるので、組み合わせは指揮官の好みでどうぞって奴だ」

「な、なるほど……」

本当に効率的な数字が割り出されて、対艦攻撃のドクトリンが確立されるのは、いつの日になることやら……。

「しかし、クロガネ級……いや、オーブの宇宙艦隊に対艦攻撃を仕掛ける相手がいたら、俺は同情するよ」

「ええ、ＭＳ隊の迎撃を潜り抜けた後、ビームでの弾幕とクラスター弾と小型ミサイルの火線網ですからね」

「……それ、明日、私達が体感することになるんだけどね」

マユラの無情な一言に、俺とレナ、更には三尉までも、ガクリと肩を落してしまった。

「え、えーと、アインさん、そんなに落ち込まないでよ」

「いや、わかってはいるんだが、サンドバックにされるかもしれないとなると、なぁ」

「明日の模擬戦で対艦攻撃に関する問題点やクロガネ級の弱点が色々と見えてくるかもしれないし、私達が頑張る事で犠牲が減るかもしれないんだし、気合入れていこうよ」

うぅ、マユラ……、あんたはええ子やなぁ。

なんて、一部地域の小母ちゃんめいたことを考えてしまうが、実際の話、ここ最近のマユラは、以前よりも一層、公私の別がしっか

りとできているから、プライベートで甘えてくる時と違って、公の場では、非常にキリッとしており、凛々しくて頼もしい。

以前、お世話になっていた防衛隊で小耳に挟んだ所によると、マユラは男女を問わずに人気があるそうで、宇宙軍の？裏？酒保で取引されている、華やいだ笑顔や真剣な表情の隠し撮り写真が高値で流通しているらしい。また、そんなマユラとよく一緒に行動しているレナに関しても、先のＬ３掃討制圧戦で大活躍した影響で、人気が急上昇中だとか。

更に言えば、俺の写真もそこそこ売れているそうなのだが、こちらは呪詛の類に使用されているとの事……。

道理で、最近、部屋に貼ってある魔除けのお札や身に付けているお守りの類が黒くなるはずだ、ってのは、あくまでも冗談だが……、現実、人ってのは時に道理から外れて狂う事もあるから、突然、背後から刺されるなんてことも起きるかもしれない。

まぁ、現代の道理から外れている俺が言える事ではないような気がしないでもないが……、精々、用心する事にしよう。

……ちなみに、その？裏？酒保で販売されている隠し撮り写真の一番人気は、サハク准将の微笑だったりする。

「確かに、マユラの言う通り、もう明日に迫っている事なんだから、くよくよしていても仕方がない。精々、派手に散ってやろう」
「先輩……、散ってどうするんですか」
「言葉の綾だ」

いや、真面目な話、そうなってもおかしくないからな。

「うぅ、三佐でも散るのを覚悟するなんて……」
「ほら、アインさんがそんな事を言うから、ユカリにプレッシャーが」
「あらら、別に負けても気にするなって意味合いでも言ったつもりなんだがな」
「ユカリちゃんは真面目なんですから、真に受けてしまいますよ」

そんなもんかねぇ。

「なら、言い換えよう。三尉、明日の模擬戦闘でな、実戦前に落される恐怖を味わえたり、弾幕に飛び込む勇気を得られる事を幸せに思え」
「……先輩、あんまり、変わらないです」
「そうよ。ほら、ユカリがまた蒼くなったじゃない」

えー。

「げふげふ、と、とにかく、そんな訳だから、今日は今やってる打ち合わせを終えたら、万全の体調で明日の模擬戦闘を迎えられるようにする為にも、今日の業務はこれで終わりにするから、自主訓練もなし。各々そのつもりでな」
「わかったわ」
「わかりました」
「……了解です」

むぅ、コードウェル妹が元気ないままだな。

このままだと明日にも響きそうなので、一計を案じ、レナとマユラに慰めさせている間に部屋の端末に向かい、馴染の番号を押す。

……直ぐに繋がった。

「おっ、パーシィか？　アインだ。って、えっ？　ああ、別に急ぎの用事でも問題が起きたわけでもないよ。……うん、そう、明日の模擬戦に関してなんだけど、ちょっと、コードウェル三尉の調子が悪く……、おおっ、いいのか？　いや、流石、よく分かってるな、パーシィ、うん、うん……、了解了解、大丈夫だ。……オーケー、なら、それで頼む」

はい、話がわかる男、パーシィと話が通りました。

「コードウェル三尉」

「……はい？」

「最近、アーガイルの奴がマリーネの陸戦型関連で忙しくて、休みなしの日が続いてただろう？」

「ええ、サイ君、忙しくて……」

「今日、これから休ませるってさ」

「ッ！」

おっ、おおっ、目の色が変わったっ！

いやぁ、恋する乙女（？）は違うねぇ。

「三佐……、私、俄かにやる気がメラメラと出てきました」

「そうか、なら、明日もその調子を保てるか？」

「もちろん、クロガネ級なんて、へっちゃらです！」

……ニヤリ。

「うんうん、非常によろしい。明日は、大いに頼りにするぞ？」
「ええ、私に任せてくださいっ！」

ふっ、計画通りだ。

「先輩……、恋する乙女の気持ちを利用するなんて、悪党です」
「ほんと、アインさんって、こういう時って、悪い顔するよね」

あーあー、レナとマユラが何か言ってるけど、きこえな～い。

「よし、なら、さっさと打ち合わせを終わらせるとしよう」
「はいっ！」

そんな訳で、当初予定より大幅に早く、充実した打ち合わせができたのでした。

これは余談になるが……、第三戦隊との模擬戦闘訓練、レナを防護するコードウェル三尉が大いに活躍してくれたので、三勝二敗でなんとか勝ち越すことができました。

いやはや、三尉がレナに向って撃ちだされた百発近いヤカゼを全弾迎撃するとは、思いもしなかったよ。

……恋する乙女って、強いよねぇ。

４４　蓄えられる力　－Ｌ３再開発　４

九月も終わりに近づき、俺達、予備役召集組の任務期間も残すところ後半分程度となった。

今現在、宇宙軍の訓練施設では本国からの移住者や他国からの移民者の中から新たに募った志願兵へと訓練や教育を施しており、後半年もすれば、予備役で賄っている宇宙軍の人員も確保できるだろうとは、宇宙軍の内情に詳しい、コードウェル姉こと、アサギ・コードウェル一尉の話だ。

別に宇宙軍が嫌いという訳ではないのだが、やはり、軍務に関わっているとなると、いつ何時、戦場に出て死に直面するかわからない以上、早い所、兵役期間が終わって欲しいものだと思う。

……ぶっちゃけると、もっと、ミーア達とイチャイチャネチャネチャさせてくれっ、てことだな、うん。

まぁ、未恋に満ちた無妻男共に刺されそうな事は一先ず置いて、静止軌道を回るアメノミハシラには、今日も世界各国からナチュラル、コーディネイターを問わず、貧困や迫害から逃れる為に、アメノミハシラやＬ３で建造中のコロニーへの居住を希望してやってくる移民達や、宇宙での生存に不可欠な水、建造中のコロニー内部で使われる土壌、月や資源衛星から産出される鉱物資源、アメノミハシラ内部で生産された食料品や工業製品、ＭＳのパーツのような軍需品を乗せた商船が頻繁に行き来している。

何が言いたいかと言うと、それだけ地球圏全体が先の戦争からの復興に向けた動きが活発になっているって事と、軍需関連産業以外でも大々的に資金が回るようになってきたって事だ。当然、先の掃討戦でならず者の拠点だったＬ３が制圧された事で、宇宙海賊による被害が戦争前のレベルまで大幅に低下し、商船が安全に航行できるようになっていた事も大きいはずだ。

もっとも、先の掃討制圧戦を経ても海賊被害が完全になくならない辺り、海賊というものが、Ｇ並にしぶといという事を知らしめてくれる。

そんな海賊に抗する組織として立ち上げられた、オーブ宇宙軍の外郭団体である宇宙航路維持機構（ＳＫＯ）だが、宇宙海賊が活発だった時期から比べれば、トツカ級一とハガネ級四で構成される護衛隊がＬ３制圧前の四個から二個へと規模を半減させたものの、主任務を従来任務である商船護衛を兼ねた商船航路の巡回へと変えたり、デブリの衝突や船内火災等で航行に影響を及ぼすような大きな事故が起きて、遭難してしまった商船の救難救助やサルベージも任務に含まれる事になったから、これからも存続して行くことが決定している。

この動きを受けて、アメノミハシラ以外……世界各国に拠点を置く保険会社の中にも、宇宙商船が損害保険に加入する条件として、ＳＫＯと救難救助及びサルベージの契約を結ぶって条項を新たに加えた所もある位に、国際的にも認知されてきているから、以後も安定して存続して行く可能性が高いと言えるだろう。

いや、このまま順調に成長していけば、警察と消防を足したような組織になりそうだから、ある意味、各国軍以上に、商船乗りや宇宙市民に親しまれ、頼りにされる組織になるかもしれない。

こんな具合に状況が落ち着き始めている宇宙から地球へと視線を向けると、相変わらず、エネルギー開発や分配を巡る意見対立や、反コーディネイター系民間軍事組織ファントムペインによるコーディネイターへの、各国から非難声明が出される程に組織的で苛烈な弾圧や、ファントムペインの弾圧に反発したコーディネイターによる大西洋連邦やユーラシア連邦での連続テロといった問題は数あれど、地球上で交わされていた銃火はほぼ収まり、国家間の戦争や紛争へと発展しそうな程の大きな問題は見受けられないから、ある意味、世界は常態に戻ったと言えるだろう。

もっとも、ファントムペインによる弾圧やコーディネイターによるテロからわかるように、あくまでも、表面上に過ぎないだろうけどな。

……。

もしも、四月馬鹿が為されなければ、もう少しは……、いや、虚しいから止めておこう。

◇　◇　◇

９月１５日。

オーブ国防宇宙軍は他国軍と対峙して宙域の安定を担う正規艦隊や拠点防衛の要である防衛隊とは別に、有事の際、即座に動かせる戦力として、総司令部直轄の即応部隊（Ｏｐｅｒａｔｉｏｎａｌ　Ｒａｐｉｄ　Ｆｏｒｃｅ）を立ち上げた。

この即応部隊の戦力の内訳は、ワダツミ級ＭＳ母艦ウワツ、ナカツ、ソコツの三隻から成る機動戦力群とそれなりの砲戦打撃力を有するトツカ級と近接防衛に優れたクロガネ級がそれぞれ二隻ずつで、計七隻の艦艇と艦載ＭＳ部隊で構成されている。ザフトでいえば、戦隊と分艦隊の中間程度の戦力を持っていると言えるだろう。

そして、総司令部付だった俺達ウルブス小隊も、来月の頭……十月一日付けで、正式にこの部隊……、正確に言えば、ウワツの艦載ＭＳ隊として所属する事になっていたりする。

その為、レナとマユラ、それにユカリ・コードウェルは、ウワツへの引越しに向けて、各種書類や報告書、各人のパイロットスーツ等の装備品、着替えやちょこにマシュマロといったお菓子類等の私物を纏めて、準備を進めている。

ちなみに、俺なのだが……、先日の配属通達に引き続き、今日も今後のスケジュールをわざわざ持ってきて説明してくれたアサギ・コードウェルの相手をしていろと、レナとマユラから言われたので、部屋の片隅で梱包作業を眺めながら、掃討制圧戦でお世話になったワダツミや所属する事になる部隊について、情報を仕入れるべく話をしている。

「なるほど、ワダツミは即応部隊じゃなくて、練習艦隊行きか」
「はい、宇宙軍の増強には欠かせないとコガ一佐から具申がありまして、准将がそれならばと……」
「うーん、あのコガ一佐のことだし、案外、ワダツミに愛着が湧いたから、手放したくなくなったからだったりしてな」
「ふふ、現場主義のコガ一佐なら、その可能性も捨て切れませんね」

最近、コードウェル一尉と話をしてると思うこと何だが……、俺よりも年下のはずなのに、時に年上女性を思わせる包容力があるというか、うーむ、一緒にいても肩肘を張らなくていいというか、うん、レナ達とは別方向で、リラックスできるんだよなぁ。

まぁ、妹の三尉やマユラから言わせると、自宅でのプライベートや戦闘時と比べたら、それなりに猫を被ってるらしいが、猫かぶりは誰だってやってることだし、傍から見て、不愉快に感じるほどに大きな落差がなければ、それでいいと思ったりする。

加えて言えば、ミーアやレナ、それにマユラとは、また違った愛嬌があるからなぁ、と思ったところで、最近のマイブームなのか、髪を後で束ねた一尉が頬を若干染めつつ、小首を傾げて見せた。

「えと……、三佐、ずっと、私を見られてますけど……、何か、変な所ありますか？」

「あ、いや、ごめん、変なところなんてないよ。ただ、髪を束ねているのが、何気に似合っているなぁって思ってた」

「ッ！　え、えと、その、お世辞はいいですよ？」

「いやいや、本当本当」

わー、なんか、恥ずかしげに顔を染めるのもいいわぁ。

って、いかんいかん、これでは口説いてるのと同じではないか。

「んんっ、は、話を戻すけど、即応部隊に配備される他のワダツミ級も、当然、ワダツミみたいにＭＳを効率的に運用できるように改装されているんだよな？」

「え、あ、は、はい」

ここで一尉が大きく一呼吸を置いたので、自然、呼気以外でも膨

らんだ胸に視線が走ってしまう。

うむ、やはり、女性の胸ってのは、形や大小だけじゃなくて均整……身体とのバランスが大切だよなぁ、って、これ、明らかにセクハラだっ、俺自重っ！

咄嗟に視線を作業をしている三人に移すと、マユラが悪戯猫のような顔でニヤニヤと笑って、こちらを見ている事に気付いてしまった。

……他の二人に伝わらないように、後でマユラのご機嫌取りに務めよう。

「えと、ワダツミ級ですが、今回の改装で、トツカ級で採用されている簡易型電磁カタパルトとＭＳ用の整備設備を装備しましたので、艦載機数を十二から八に減らしています」

「となると、片舷で四機になるのか」

「はい、それで、即応部隊の旗艦になるウワツにはマリーネを、ナカツとソコツにはオオツキガタを艦載して、運用する予定です」

……ふむ、ワダツミ級三隻で、マリーネが八機、オオツキガタが十六機か。

「トツカ級には？」

「こちらも四機ずつマリーネが配属されます」

……何となく見えてきたな。

「あれか？　この即応部隊は四機小隊編成を基本にしたＭＳ部隊の運用テストも兼ねているのか？」

「ええ、三佐が言われた通り、四機小隊編成を艦隊へ導入するか否かの判断材料として、トツカ級で四機運用する際の問題点の洗い出しや評価と、四ー四編成……四個の四機小隊からなる中隊運用を試してみる事も任務に含まれています」

はー、宇宙軍のお偉いさんも色々と頑張ってるなぁ。

「それで、ＭＳの指揮系統はどうなるんだ？」

「ナカツとソコツが運用する十六機のオオツキガタで機動ＭＳ中隊を構成して、部隊行動することになっています。二隻のトツカ級に艦載されている二個小隊に関しては、迎撃や艦隊防衛が主任務の護衛ＭＳ隊となります」

「で、俺達は？」

「ウワツ……三佐達の【ウルブス】と新しく結成された【パンサー】は独立ＭＳ小隊として、部隊司令の指揮下に置かれます。どちらかといえば、予備戦力的な存在ですね」

「へぇ、パンサーかぁ、小隊長はなんて名前で、どんな人？」

「パンサーの小隊長はタワラ・ジロウ一尉です。通信部で働いている奥様を大切にしている優しい方ですよ」

「へー、奥さんが通信部にいるって事は、職場結婚？」

「ええ、士官学校の同期という話ですよ」

「そういうのって、あるんだなぁ。って、肝心な部隊司令を先に聞かないといけない所か？」

「ふふ、どうでしょうね」

うん、やっぱり、コードウェル一尉の笑顔には、おいたをした男の子を包み込む力があるわぁ。

……むっ、何やら、視線を感じるような？

再び、顔を部屋の中央に向けると、レナが、寒気を感じる位に、綺麗過ぎる笑顔でこちらを見ていた。

こ、ここはご機嫌を取る為にも、今晩は堕ちてなき出した後も手加減せず、入念に相手することでご容赦頂こう。

「……げふげふ、それで、部隊司令は？」

「え、ええと、ウワツの艦長も兼ねるソウマ・ドラ・トウラン一佐です。この方はミナ様と同じく、氏族の方なんですが……」

「方ですが？」

「はい、結婚して、婿養子に入られた方ですので、元からの氏族出身じゃないんです」

「ほうほう」

「ですから、氏族出身者によく見られる、傲然とした所はありませんので、付き合いやすいと思いますよ」

「そりゃ助かるな」

いやはや、オーブの氏族って、政治と軍事を独占している貴族のような存在……一種の特権階級みたいなもんだから、結構、勘違いしたのがいるからなぁ。

実際、Ｌ３掃討制圧作戦前に、俺がレナとマユラを囲ってるって話が表に出た時に、こっちの業務に支障が出る程に、ねちっこく、粘着質的に、しつこく絡んできた氏族出身の中年二佐がいたんだよなぁ。

その時は自身の立場……新参者という事もあって、色々と我慢していたが、流石に業務……その質が実戦での生死を左右する訓練に影響を及ぼし始めただけに、これはどうしたものかと思い悩まされたものだ。

まぁ、俺にとっては本当に幸いな事に、件の二佐が公金横領と職

務怠慢の罪で軍内部を取り締まる監察部に捕り、軍事法廷での審議の結果、不名誉除隊になった上で本国の刑務所に収監されたから良かったものの、もしも、それがなかったら、いい加減にぶち切れて、例の肥満体な二佐をダストシュートに放り込んで、俺がお縄になって軍事法廷の場に立っていたかもしれない。

……いやはや、本当に、幸いだったなぁ。

「なら、真面目に職務をこなしていたら、特に問題はないって事かな」

「あ、でも……」

「え、もしかして、何か、いるの」

「その……、あくまでも小耳に挟んだ事なんですけど……」

「小さな事でもいいから教えて欲しい」

「では……、パンサー小隊にキリオ・ラン・サマリア一尉という人がいるんですが、そのサマリア一尉が、三佐の事を何かとライバル視しているみたいでして」

「……何故に？」

「流石にそこまではわかりませんけど、サマリア一尉は確か、三佐と同じ歳だった気がしますから……」

「ああ、なるほど、急に横から入ってきたくせに自分より上の階級なのが気に食わないって所かな」

俺の物言いに一尉は頷きつつ、さり気に付け加えてきた。

「後、マユラやレナさんを囲っている事も影響しているはずです」

「それに加えて、男の嫉妬か。……これに関しては、甘んじて受けないといかんよなぁ」

でも刺されるのだけは勘弁な、って思った所で、コードウェル一

尉が若干躊躇する様子を見せながら、口を開いた。

「……あの」

「ん？」

「三佐は、三人の内の誰か一人を選ぶ事を考えていないんですか？」

「んー、付き合い始めてから、一度も考えた事もないな。……俺自身、自覚できる程に独占欲が強いし、一度、懐に入れた女を手放すようなお人好しでもない。それに、三人ともちょっとした意地の張り合いはするけど陰湿な事はしないし、互いの全てをさらけ出してるから遠慮もしていない。加えて、社会通念には喧嘩を売ってるけど、それ以上の迷惑を掛けない様に、みんなで意識して生活しているしな」

「そう……ですか」

「ああ、女から見れば、最低な男だろうけど……、まぁ、なんとか、お目こぼしをお願いしますよ」

「……私は、三佐くらいに、全員の面倒を見れるだけの甲斐性と愛情があれば、いいとも思いますよ？」

「あはは、フォロー、ありがとう」

……さてと、引越しの準備もほとんど終わったみたいだし、飯でも食いに行くか。

「コードウェル一尉は、これからどうする？」

「えっ？」

「引越し蕎麦……って、言ってもわからんだろうけど、今日はこれくらいにして、居住区画の方に食べに行こうと思ってな」

「……それなら、ご一緒しても？」

「よし、決まり」

オーブの食文化って、今は亡き、心の故郷の料理が多いから嬉し

いんだよねぇ。

　という訳で、作業が終わった後、五人でサハク准将が贔屓にしているという第一居住区画にある蕎麦屋に行く事になったのだが、そこで頼んだ天麩羅蕎麦……、遥か過去……前世で食して以来、ずーーーーっと、食べていなかった天麩羅蕎麦の、そのあまりの美味さ……、揚げたて天麩羅のサクサク感と蕎麦の風味や喉越し、更には舌に染み渡る蕎麦つゆの美味さに、思わず滂沱の涙を流しながら、?ううぅぅまぁぁあぁいぃぃぞぉぉおーーーーっ?と雄叫びを上げてしまい、レナやマユラ、それにコードウェル姉妹だけでなく、その時に店にいた人達、皆から笑われてしまったのは良い思い出である。

外　登場人物　４　（～４４）

新章という事で、これまでの登場人物一覧
（導なき世界の中で……　０１～４４：Ｃ．Ｅ．７３年９月１５日現在）

以下、登場順で紹介（前後したり抜けがあるかもしれない）

☆アイン・ラインブルグ　（Ｃ）　男
転生（？）主人公で、モゲロ、モゲロッ、モゲロッ！　の三股エロ野郎。
オーブ国防宇宙軍三佐であり、総司令部付の独立ＭＳ小隊【ウルブス】の隊長、コードは【ウルブス１】。
本来はラインブルグ・ホールディングスの専務取締役なのだが、現在はオーブ国防宇宙軍に召集されている。
余りの充実振りに、最早、外見に関する描写なんて、どうでもよくなってきた人物。

☆ミーア・キャンベル　（Ｃ）　女
アインの恋人の一人で、普段からナチュラルにエロイ人。
ラインブルグ宇宙技術研究所第五開発部研究員。
マリーネ開発の際、主にソフト面を担当した。
レナとマユラを巻き込んで積年の想いを叶え、見事に恋人の座を手に入れた？ポンポコ？である。

☆ヘレーナ・ラヴィネン　（Ｃ）　女
レナの愛称を持つアインの恋人の一人で、スイッチが入ると一番

エロイ人。
オーブ国防宇宙軍二尉であり、総司令部付の独立ＭＳ小隊【ウルブス】の隊員、コードは【ウルブス２】。
本来はラインブルグ・ホールディングスの社員なのだが、現在はオーブ国防宇宙軍に召集されている。
ミーアの策に便乗して、自身の想いを遂げた？ワンコ？である。

☆マユラ・ラバッツ　（Ｎ）　女
アインの恋人の一人で、身内だけになると結構エロイ人。
オーブ国防宇宙軍二尉であり、総司令部付の独立ＭＳ小隊【ウルブス】の隊員、コードは【ウルブス３】。
本来はラインブルグ・ホールディングスの社員なのだが、現在はオーブ国防宇宙軍に召集されている。
ミーアの策に便乗して、自身の帰る場所を手に入れた？ニャンコ？である。

☆シグルド・ティーバ　（Ｃ）　男
ラインブルグ宇宙技術研究所第五開発部開発主任。
マリーネ開発の際、主にハード面を担当した。
愛しのナナに振り向いてもらうべく、必死の努力を重ねている。

☆フレイ・アルスター　（Ｎ）　女
ラインブルグ・グループ会長第二秘書。
大西洋連邦の自宅や財産を親類に奪われ、アメノミハシラに移住してきた。
現在、同棲中のキラ・ヒビキの尻を蹴り飛ばして、結婚指輪等の資金を稼がせている。

☆エヴァ先生（エヴァンジェリン・ローズ）　（Ｃ）　女
オーブ国防宇宙軍二佐相当医官。

旧友であるロンド・ミナ・サハクに招かれて、アメノミハシラに移住してきた。
仕事の傍ら、ＳＥＥＤについて、考察を重ねる日々を続けている。

☆ベティーナ・ラ・トゥール　（Ｎ）　女
ラインブルグ・グループ会長第一秘書で、愛称はベティ。
アインの幼馴染で、父親は宇宙発電の社長である。
初恋の人であるアインが帰ってきたことで、以前の勝気さを取り戻しつつある。

☆パーシバル・ウィングフィールド　（Ｎ）　男
ラインブルグ宇宙技術研究所第五開発部部長で、愛称はパーシィ。
アインの幼馴染で、父親は宇宙建設の社長である。
アインが帰ってきたことで、？勝気なベティ？が戻ってきた事を嬉しく思う日々である。

☆アインの親父　（Ｎ）　男
アインの父で、ラインブルグ・ホールディングス社長兼ラインブルグ・グループ会長。
アメノミハシラにおいて、商工会の世話役になる等、内外に結構な影響力を持っている。
また、アインの描写無しの煽りを受けて、名前が無い人だったりする。

☆おっさん連中　（Ｎ）　男
ラインブルグ・グループ役員兼傘下企業社長を務めるおっさん連中。
古くからアインの父と仕事をしてきた仲間達であり、ラインブルグ・グループを支える重鎮達。
最近、アインに代わる弄り甲斐のある青年を見つけて、とても喜

んでいる。

☆奥様連　（N）　女
おっさん連中の奥様方。
おっさん連中が破目を外し過ぎないように常に監視の目を光らせている女傑連合。
最近、ミーア達三人から伝わってくる夜のセイ活話を肴に盛り上がっていたりする。

☆ナナ　（A）　女?
ラインブルグ宇宙技術研究所第五開発部特別研究員。
パーシィが譲り受けた素性不明の人工知能で、ミーアとコンビを組んで仕事をしている。
最近、シゲさんに対する態度に若干の軟化が見られる。

☆スズキ氏　（N）　男
モルゲンレーテ・アメノミハシラ支社支社長。
本社が爆破された現在、最もモルゲンレーテで影響力を持つ存在となっている。
昔、縁があるマユラが孤児になった際、自立するまで裏で援助をしていたりする立派な人。（足長おじさん）

☆ロンド・ミナ・サハク　（C）　女
サハク家当主兼オーブ国防宇宙軍司令官。
オーブ氏族として、本土を焼かれて困窮したオーブ国民に安定した居住空間を提供する為、L3にコロニーを建設している。
プラントの戦中指導者であったパトリック・ザラに匹敵する覇気を持つ傑物である。

☆エルちゃん　（N）　女

安住の地を求める女の子。
親子で住んでいたヘリオポリスが崩壊した後、苦難を乗り越えて、たどり着いた本国でも焼け出された。
その為に、サイレンの音がトラウマになっているが、最近は回復傾向にある。

☆ナタル・バジルール　（Ｎ）　女
モルゲンレーテ・アメノミハシラ支社開発部オブザーバー。
大西洋連邦軍から諸般の理由で不名誉除隊処分を受け、フレイと共にアメノミハシラに移り住んだ。
凛々しさと柔らかさを併せ持つ事から、モルゲンレーテの独身男達の間では一番人気である。

☆マラウ　（Ｈ）　男
ラインブルグ宇宙造船軍需部門担当リーダー。
南アメリカ合衆国からの移民してきたハーフコーディネイター。
ハーフコーディネイターであるからと、差別を受ける事が無いアメノミハシラを気にいっている。

☆サトウ氏　（Ｎ）　男
モルゲンレーテ・アメノミハシラ支社開発部開発主任。
トツカ開発計画で暴走してしまったが、何とか首の皮一枚で繋がった人。
しかしながら、その人望から次期支社長候補だったりするあたり、世の中わからないものである。

☆レイ・ユウキ　（Ｃ）　男
プラント国防軍首席後方支援担当官。
ザフトから国防軍に移籍した為、当然、ＦＡＩＴＨではなくなっている。

先を見据えて、国防軍を充実させる傍ら、現在は再開発局と連動して動いている。

☆ヴィットリオ・ロメロ　（C）　男
プラント国防軍首席教導担当官。
ザフトから国防軍に移籍してからは、新兵の訓練を担当している。
女を口説く事が三度の飯よりも大好きな、健全なる女好きである。

☆ユカリ・コードウェル　（N）　女
オーブ国防宇宙軍三尉であり、総司令部付の独立ＭＳ小隊【ウルブス】の隊員、コードは【ウルブス４】。
軍から派遣され、マリーネのテストパイロットを務めた。
サイ・アーガイルを狙っており、打ち上げの際はお持ち帰りする等、せっせと既成事実を積み上げている。

☆キラ・ヒビキ（ヤマト）　（C?）　男
アメノミハシラ管理公社の維持管理員。
手掛かりなしでフレイ・アルスターを捜し求めるという苦難を乗り越えた?熱い男?。
現在はフレイ・アルスターの尻に敷かれる日々を送っているが、非常に満足している。

☆サイ・アーガイル　（N）　男
ラインブルグ宇宙技術研究所第五開発部研究員。
キラ・ヤマトの親友であり、彼がフレイ・アルスターに辿り着くまでの苦難に満ちた道を助け続けた。
現在、一夜を共にした（らしい）ユカリ・コードウェルに半分攻略されてしまっている。

☆アサギ・コードウェル　（N）　女

オーブ国防宇宙軍一尉。
国防陸軍から国防宇宙軍に転籍後、司令官付第二秘書を務めている。
マユラから夜の事も含めて、様々な事を色々と聞かされているらしく、アインに興味津々。

☆リュウト・ライ・サイハ　（Ｎ）　男
オーブ国防宇宙軍二尉。
下級氏族出身で、国防宇宙軍第一艦隊に所属しているＭＳパイロット。
自称？オーブの龍？だが、未だに腕が追いついておらず、Ｌ３制圧掃討戦では負傷している。

☆ワン・フゥイミン　（Ｎ）　男
オーブ国防宇宙軍三尉。
国防宇宙軍第一艦隊に所属しているＭＳパイロット。
新任で配属されたばかりだが、初陣のＬ３制圧掃討戦を潜り抜けた。

☆タスケ・キタガワ　（Ｎ）　男
オーブ国防宇宙軍准尉。
国防宇宙軍第一艦隊に所属しているＭＳパイロットで、アメノミハシラ防衛戦にも参加している。
Ｌ３制圧掃討戦では、負傷したリュウト・ライ・サイハを堅実な動きで救出している。

☆タカシ・コガ　（Ｎ）　男
オーブ国防宇宙軍一佐。
平時はオーブ国防宇宙軍練習艦隊の司令を務めている大ベテラン。
前サハク家当主コトー・サハクの盟友であり、軍において、ロン

ド・ミナ・サハクの教育係を務めた。

☆ワラル　（N）　男
オーブ国防宇宙軍三尉。
本国から家族と共に移住してきたのだが、弟妹が多い為、父母に負担を掛けないように軍に入隊した。
L3制圧戦でウルブス小隊が見せ付けた精強さに戦慄すると同時に憧憬を抱いたりしている。

☆ハロルド・ラッセル　（N）　男
オーブ国防宇宙軍三佐。
アメノミハシラ防衛隊において、主力防衛戦力となる防衛MS大隊の大隊長。
軍人になるまではアスハを信奉してきたが、世界の現実を見据える内にサハク寄りになった人物。

カッコ内のアルファベットの意味
（C）＝コーディネイター
（N）＝ナチュラル
（H）＝ハーフ・コーディネイター
（A）＝人工知能

以上、人物紹介は終わり。

以下、誰得なおまけ。

※C．E．７３年９月現在の国家勢力

○地球国家

・大西洋連邦（新地球連合／旧プラント理事国）
三大国の一つで、経済面、軍事面で世界をリードする最強国家。

・ユーラシア連邦（旧プラント理事国）
三大国の一つで、西ユーラシアに中東と、領域を相次いで失った斜陽の大国。

・東アジア共和国（旧プラント理事国）
三大国の一つで、大人口がネックとなり、三大国の中で最も復興が遅れている。

・南アフリカ統一機構（新地球連合）
地中海同盟に敗北した影響で、政情不安に陥っている。

・汎イスラム会議（新地球連合／汎イスラム同盟に統合）
中東イスラム同盟を加える事で領域を拡大する一方、大西洋連邦の支援を受け、復興が進んでいる。

・中東イスラム同盟（新地球連合／汎イスラム同盟に統合／元ユーラシア連邦）
汎イスラム会議に参加する事で、国力を回復させつつある。

・西ユーラシア連合（地中海同盟に統合／元ユーラシア連邦）
独自ＭＳを開発して配備し、アフリカ共同体領でエネルギー開発を行う等、国力を増大させている。

・アフリカ共同体（地中海同盟に統合）
南アフリカ統一機構を退けた後、西ユーラシア連合の支援を受け、復興が急ピッチで進んでいる。

・南アメリカ合衆国
アメノミハシラから主力ＭＳを導入した事もあり、大西洋連邦の影響力が排除されつつある。

・大洋州連合（親プラント国家）
プラントと他国を繋ぐ中継貿易と太陽光エネルギーの開発で、経済が立ち直りつつある。

・赤道連合
自力復興を成し遂げ、国力と影響力を強めているが、東アジア共和国の動向に神経を尖らせている。

・オーブ連合首長国（アスハ政権：本国諸島）
大西洋連邦の支援を受けて、マスドライバーを再建する等、復興を進めている。

・スカンジナビア王国（親プラント国家？）
プラントから援助を受けて復興を進めているが、存在感は薄い。

○宇宙国家

・プラント（Ｌ５＋Ｌ１）
独立戦争時に発行された戦時国債の返済等々で掛けられた重税に喘いでおり、市民の間で不満が高まっている。

・オーブ連合首長国（サハク政権：アメノミハシラ＋Ｌ３）

戦時貿易で稼いだ資金を元手に、Ｌ３の独占開発を目論む。

・月面都市群（中心都市：コペルニクス）
資源貿易で地道に都市を発展させつつ、争乱に巻き込まれないように努力している。

※ユニウス条約加盟国の軍事比率

・3
大西洋連邦

・2
ユーラシア連邦、東アジア共和国、地中海同盟

・1
南アフリカ統一機構、汎イスラム同盟、南アメリカ合衆国、大洋州連合、オーブ（アスハ）、プラント

・非加盟国
赤道連合、スカンジナビア王国、オーブ（サハク）、月面都市群

※登場させたオリジナルな機体（ラインブルグ系）に関連する覚書

○ＭＡＲＡＳＡＩ計画
ラインブルグ・グループが軍事参入するにあたって、コンセプトとした標語であり、計画。
この標語は、Ｍｕｌｔｉｐｕｒｐｏｓｅ　Ａｄａｐｔｉｖｅ　Ｒｏｌｅ　ｉｎ　Ａｄｖａｎｃｅｄ　Ｓｉｔｕａｔｉｏｎ　ｆｏｒ

Ａｃｈｉｅｖｉｎｇ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ．（高度な状況において、迎撃を達成するため、多目的に適応する役割。※適当訳）であって、決して、某ロボットアニメに出ていた赤い量産型ＭＳではない、ないったらない、ないんだからね！

○ノルズ／ＮＯＲＮＳ：Ｎｅａｒｂｙ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎａｌ　Ｒｅａｃｔｉｏｎａｒｙ　Ｎｅｔｗｏｒｋ－Ｓｙｓｔｅｍ．（近接作戦用反応システム※適当訳）
　無人機を使った早期警戒と防衛隊がスクランブルを行うまでの迎撃を行う防衛管制システム。
　ノルズとそれに属する三機種は、アインの厨二魂から命名されている。

・【ＢＩ（Ｂａｔｔｌｅｆｒｏｎｔ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｏｒ）】前線迎撃機との訳語にある通り、軍事転用されたＢＯｕＲＵ。

・【ＢＩ－０１】ウルド／ＵＲＤ：Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｒａｐｉｄ　Ｄｅｆｅｎｄｅｒ（無人早期防衛ユニット※適当訳）
　ノルズにおいて、周辺探査と初期迎撃を担当する。

・【ＢＩ－０２】ベルダンディ／ＶＥＲＤＡＤＩ：Ｖｏｌｕｎｔａｒｙ　Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　Ｒｅａｃｔｉｖｅ　Ｄｒｏｎｅ　ｆｏｒ　Ａｔｔａｃｋ　ｉｎ　Ｎｅａｒ　Ｄｅｆｅｎｓｉｖｅ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ（無人防衛用機動攻撃ユニット※適当訳）
　ノルズにおける主力であり、重武装と優れた機動力で、積極的な迎撃を担当する。

・【ＢＩ－０３】：スクルド／ＳＫＵＬＤ：Ｓｈｉｅｌｄｅｒ　ｏｆ　Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｌａｓｔ　Ｄｅｆｅｎｓｅ（無人防衛用防御ユニット※適当訳）

ノルズにおいて、時間稼ぎの盾となり、無人機での最終防衛線を担当する。

○【ＳＦＥ－１】ハガネ級宇宙護衛艦（フリゲート）
軍からの依頼で、急遽、ＭＡＲＡＳＡＩプランに組み込まれた急造護衛艦計画で生み出されたもの。
モジュールを組み替える事で様々な役割を担える多目的艦だが、元が元だけに艦体が小さい上、構造的な面からも耐久性が低く、艦隊戦では足手まといに……。

○【ＳＦＥ－２】クロガネ級宇宙護衛艦（フリゲート）
ハガネ級の実戦データとトツカ級の設計を参考に作り出された、ラインブルグ初の本格的な護衛艦。
強力な近接防衛力に加えて、艦隊戦にも追随できるだけの対艦攻撃力と機動力が備わっている。
ハガネ級のようなモジュール換装機能はなくなったが、その分だけ、耐久性が大きく向上している。

・リング／ＲＩＮＧ：Ｒｏｔａｔｉｎｇ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｏｒ　ｆｏｒ　Ｎｅａｒ　Ｇｕａｒｄ（近接防御用回転式迎撃装置※適当訳）
ＢＩを応用した艦艇用近接防衛システムで、艦艇の懐にある死角を減らす。
オーブ国防宇宙軍の主力艦トツカ級と護衛艦クロガネ級に装備されている。

○【ＭＢＦ－Ｍ２】マリーネ／Ｍａｒｉｎｅ：Ｍｕｌｔｉｐｕｒｐｏｓｅ　Ａｄａｐｔｉｖｅ　Ｒｏｌｅ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔｏｒ　ｔｏ　Ｎｅａｒ　Ｅｎｅｍｙ（多目的適応型迎撃戦闘機※適当訳）
アインが前世の記憶を参考にデザインしたＭＳで、某連邦軍教導

団の汎用ＭＳや某公国軍の強襲用ＭＳに似ている。
詳細や武装については、面倒もとい色々と多いので、別の機会があればという事で……。

・統合オペレーティングシステム／ＩＯＳ：Ｉｎｔｅｇｒａｔｅｄ　Ｏｐｅｒａｔｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ
パーシィとシゲさんの監修の下、ＢＯｕＲＵのＯＳをベースに、ミーアとナナが組上げたＭＳ用のＯＳ。
反射的反応をする他、乗れば乗るほど搭乗者の癖や好みに適応し、操縦を容易にするという特色を持つ。
実はマリーネがオーブ宇宙軍に採用された一番の理由であったりする。

○【ＳＬＣＡ－１】オロチ級装甲ランチ
アインとシゲさんがハガネ級予備計画（笑）で作成した小型迎撃艇を、ハガネ・プロジェクトチームがラインブルグ・グループの精神である？質実剛健？を実現するという名分の元、欲望の赴くままに魔改造を施した結果、生み出された強襲揚陸艇。
乗員を保護する為に多重に施された？すごくあつくておおきいです？な重装甲もあって、？陸戦隊？の熱い男達が野太い嬌声を上げて頬擦りし、全身でもって縋りついた為、前倒しでの導入が決定された程の逸品。

※オーブ国防宇宙軍使用艦艇（筆者が艦隊っぽいものを描きたいが為に作り出されたモノ達も含む）

・【ＳＢＭ－１】イズモ級ＭＳ艦載型宇宙戦艦
旗艦級である同艦には、ネームシップのイズモの他、クサナギ、イナバ等がある。

・【ＳＤＭ－１】トツカ級ＭＳ艦載型宇宙護衛艦（駆逐艦）
宇宙軍の主力艦で、全ての面でバランスが取れている。

・【ＳＦＥ－１】ハガネ級宇宙護衛艦（フリゲート）
モジュール換装機能によって汎用性に優れているが、艦隊戦では力不足。

・【ＳＦＥ－２】クロガネ級宇宙護衛艦（フリゲート）
宇宙軍の護衛艦で、近接防衛に要を置いている。

・【ＳＣＭ－１】ワダツミ級ＭＳ母艦（改装コーネリアス級輸送艦）
艦隊に必要となる艦載機を補う目的で改装された輸送艦。

・【ＳＡＯＥ－２】マルセイユ三世級輸送艦
艦隊の後方支援を担う、縁の下の力持ち的な輸送艦。

・【ＳＬＰＡ－１】コーネリアス級輸送艦
後方支援や陸戦隊を運ぶ役目を担う、新しい輸送艦。

45　繰り返される過ち　－ユニウス・セブン　1

九月下旬。
即応部隊司令部や各艦の首脳陣、各ＭＳ部隊に加えて、常に世話になるウワツのＭＳ整備科への挨拶回りを終えた後、引越しの荷解きも程々にして、今現在、各国で採用している主力ＭＳについて、小隊の四人でメディアに露出したり、情報部が観測したり収集したりした情報を調べてみた。

なんとなれば、新しい部隊に所属したのも良い契機だったというのもあるが、それ以上に後半年の兵役期間とはいえ、所属する部隊の性質上、任務で戦闘を行う可能性もあるだけに、少しでも相手の武装や特徴といった情報を把握しておきたかったからだ。

もっとも、情報収集の際に興に乗ってしまい、地球でしか運用されていないものまで調べたのはご愛嬌だ。

まぁ、そんな訳で宇宙……、アメノミハシラにとって直接的に脅威となる戦力を有する勢力から見ていくとして……、まずは世界で唯一の宇宙国家であるプラントからいこうか。

プラントは今年八月に新型機【ザク・ウォーリア】をロールアウトさせ、これまで一線を守ってきたゲイツの改修機【ゲイツＲ】やジンＭ型の後継機【ジンＭ２型】からの切り替えが凄まじい勢いで始まっているようだ。
けれども、新型機に切り替えられているのはあくまでもＬ５を縄

張りにするザフト軍事部門だけであり、Ｌ１を守るプラント国防軍はゲイツＲのままだったりするあたり、分裂に際してのゴタゴタが尾を引いているというか、ザフトからの嫌がらせを受けていると思えなくもない。

いやはや、後方兵站担当をしているユウキの奴も、今頃はきっと苦労しているんだろうなぁ。

……。

しかし、このザフトの新型量産機、前世のＳＦアニメに出ていた超有名量産機にソックリな外観な上、尚且つ、名前までザクとは……、いや、こいつはあくまでも、【Ｚａｆｔ　Ａｒｍｅｄ　Ｋｅｐｅｒ　ｏｆ　Ｕｎｉｔｙ】の略称だから、偶然だとは思う。……思うんだが、ちょっと一致しすぎている気もしないでもないので、真面目な話、ザフトの中に俺みたいな前世持ちがいるかもしれない。だから、時間なり機会ができたら、何らかの方法で調べてみたいもんだ。

次に世界最大の大国である大西洋連邦だが、ストライクダガーを源泉とするダガーシリーズで現行主力機であるダガーＬから新型機ウィンダムへと更新が進められているようだ。これはコードウェル一尉からの話だが、Ｌ４の大西洋連邦拠点にもそれなりの数が観測されているらしいから、地球でも配備が進んでいると考えた方がいいだろうな。

ついでにいえば、このウィンダムは前戦争中に、ザフト機を多数撃破する等して大活躍したストライクに匹敵する機体性能を持っているらしいから、手強い相手であるのは間違いなさそうだ。

続けて、領域を多数失って斜陽の大国とも呼べそうなユーラシア

連邦だが、ストライクダガーとダガーＬを大西洋連邦系の企業から購入して、何とかやっているみたいだ。

もっとも、最近になってアメノミハシラで発行されているマスメディア紙に掲載されたフリージャーナリストの与太話めいた記事によると、ＭＳというかＭＡというか、分類が難しいとしか表現できないような大型の機体を開発中らしいし、未だにそれなりの力を持っていると考えた方が無難だろう。

ちなみに、アメノミハシラのご近所にあるアルテミス要塞だが、オーブ軍に動きがあると直ぐに閉じこもる癖が付いたみたいで、静止軌道上は安定している状態だ。

話を戻して、エネルギー分野を軸にして、ユーラシア連邦と急速接近中である東アジア共和国だが、ここも大西洋連邦系企業からストライクダガーとダガーＬを購入しているそうだ。けど、今年の夏に、国内にあるフジヤマって会社が【ライゴウ】ってＭＳの開発に成功したらしいから、この流れももうすぐに終わるだろう。

大西洋連邦系の軍事ジャーナルに書かれていた情報だと、これも機体素性の良いストライクをベースに開発されたものらしく、量産化も検討されているとのことだから、もしも、本当に量産化が成ったら、周辺国……特に赤道連合あたりは十分な警戒が必要だろうな。

そして、ゆっくりとマイペースに発展している月面都市群だが、宇宙海賊の数を大きく減退させたアメノミハシラに対して好感を持ったみたいで、Ｍ１Ａアストレイを導入するとの打診があり、四十機程を共同で購入して海賊等の襲撃から都市群を守る共同警備隊に配備している。鉱物資源を安定して産出してくれる有難い存在だけに、今後とも良い付き合いをしていきたいもんだ。

では、所を宇宙から地球に移して……、三大国は挙げたから略し

ておいて、アメノミハシラと付き合いが深くなっている南アメリカ合衆国から見ていこうか。

南アメリカ合衆国は、アメノミハシラからＭ１アストレイを主力機として導入している他、少数だがＭＡ可変機のムラサメも購入しており、中々に侮れない戦力を保有しつつある。とはいえ、大西洋連邦みたいに他国に侵攻できるだけの戦力とはとても言えないから、自国の防衛だけで手一杯だろう。

そんな南アメリカ合衆国から大西洋を越えた東へと目を向けて南アフリカ統一機構だが、ここは大西洋連邦が盟主となっている新地球連合に所属していることもあって、ストライクダガーからダガーＬへの更新が行われているみたいだ。先の南北アフリカ紛争での敗北で国内が政情不安になっていることもあるし、新しいおもちゃを手に入れたから得意になって、負けた相手に手を出さないといいんだけどねぇ。

ちょっと今後の動きが心配な南アフリカ統一機構と対峙している地中海同盟……アフリカ共同体と西ユーラシア連合の同盟は、以前の南北アフリカ紛争でマッドドック隊なるＭＳ隊に運用されて活躍した、アクタイオン・インダストリー社のハイペリオン、その陸戦型量産機である【ハイペリオンＧ】が主力ＭＳとして正式に採用されたようだ。

こいつの一番の特徴としては、アルテミス要塞が使用している光波防御帯の技術を応用して生み出されたという、ビームシールドを装備していることだろうな。聞くところによると、そのビームシールドは実弾だけ出なくビームすら防ぐって話だから、その防御力がどれ程の代物なのか、一度、生で見てみたいもんだ。

何気に強力な機体を手に入れた地中海同盟から更に東に行って汎

イスラム同盟になるが、ここもまた、新地球連合に所属している事もあって、ストライクダガーからダガーＬへの更新が行われているみたいだから、戦力が底上げされていると考えた方がいいだろう。

その汎イスラム同盟からまたまた東へと目を向けて赤道連合だが、ラインブルグ・グループと共同開発にあたっていたタンタ・インディア社がマリーネの陸戦型である【ドゥルガー】……ラインブルグ・グループが製造する際の名称は【マリーネＧ】……を完成させており、正式に採用されている。

パーシィから聞いた話だが、このドゥルガーはマリーネに装備されている宇宙用廃熱システムを全て取っ払って簡易な給排気式廃熱システムに切り替えた事に加え、燃料電池に使用する酸素を空気中から取り入れる外部供給式にした事で燃料タンクを減らし、更にはプロペラントタンクの容量削減や背部スラスターもＹ字からＶ字に変更して縮小した事で、かなりの軽量化が実現できたそうだ。

付け加えていえば、タンタ・インディア社とは今後も協力体制を維持したまま、ＢＩの水中戦仕様を開発し、ゆくゆくはその名に偽りのない水陸両用型マリーネの開発を目指しているらしい。

ちなみに、俺がＭＳを地上で使うなら絶対に導入すべきだと、常々、主張していたＭＳ用のスコップだが……、パーシィがドゥルガーの標準装備品の中に混ぜて、ＭＳ用ククリと一緒に開発したらしく、背部スラスターの下、二つ設置された腰部マウントの一つに普通に取り付けられている。

……。

前線において、陸の王者である戦車が乗り越えられない程に深くて広い塹壕をスコップで掘るドゥルガー。

掘った塹壕の底に潜り込み、スコップを頭上に被せて、砲撃や空爆をやり過ごすドゥルガー。

スコップを傍らに置いて、前進してくる敵ＭＳを塹壕からの射撃で迎え撃つドゥルガー。

弾幕を突破して肉薄してきた敵ＭＳを、咄嗟に傍らのスコップでぶん殴って大破させるドゥルガー。

ひゃっはー、この戦争、スコップがなければ地獄だぜぃって、叫ぶドゥルガー。

……。

……いい。

……実にいい。

最高に泥臭くて、燃える絵になる戦闘になりそうだって、いかんいかん、不謹慎だぞ、俺自重！

でも……、これだけは言いたい。

装備品の中にスコップを混ぜてくれて、ありがとう、パーシィ！

……しかし、こんなにパーシィが頑張ってたら、俺、帰っても席がなくなってるかもしれない。

って、そんな俺の歓喜と危惧は置いておいて、未だに復興途上のオーブ本国だが、ここではＭ１アストレイとＭＡ可変機のムラサメが配備されている。特にムラサメに関しては二年戦争中から計画されていて、今年の夏に何とか完成させたという【タケミカズチ】なる大型空母や空軍で運用しているらしい。

つか、そんな空母を作ってるなら、もっと、国土の復興に……って、いや、その国土を焼かれない為にも、外洋で迎撃するって意味合いで建造したのかもしれないか。

まぁ、本国の国防戦略については、暇と機会があれば、軍について何でも知ってるコードウェル一尉に詳しく聞いてみるのもいいだろう。

正直、他国としか思えないオーブ本国より南に位置する大洋州連合へと目を移す。ここはカーペンタリアにあるザフトのＭＳ工廠から、バクゥやディン、グーン等を購入して、軍に導入しているようだ。購入されている機体の種類を見るに、おそらくだが、様々に汎用性のある機体ではなく、それぞれの分野に特化したＭＳを複合的に運用しようとでも考えたって所だろう。

……ふむ。

これで、大西洋連邦、ユーラシア連邦、東アジア共和国、南アメリカ合衆国、南アフリカ統一機構、地中海同盟、汎イスラム同盟、赤道連合、オーブ、大洋州連合って見てきたから……、地球上の国家はこんなもんかね。

……しかし、こうして調べてみると、ＭＳも各国に普及していた

り、次の世代に交代しているって印象だ。

とりあえず、当面の目標は地球では環境的な制約があるからともかくとして、宇宙じゃ、ビーム兵装が通常兵装になってきているから、機動と回避に防護を上手く寄り合わせて、小隊や中隊戦術に組み込んでいけたらいいなぁ。

◇　◇　◇

１０月１０日。

アメノミハシラ近隣にある訓練宙域での慣熟訓練を終えて帰港すると、非常に珍しい事に、サハク准将から部隊司令のトウラン一佐を通した正式な命令系統で呼び出しがかかった。

特にこれといった問題も聞いていないので、いったい何事かと首を捻りつつ、ちょっと疲れ気味で元気のないコードウェル姉に案内されて司令官室へ行くと、かなり不機嫌そうに、眉間に皺を寄せた准将が執務机に座って待ち構えていた。

「お呼びと聞き、参上しましたが……、准将、何か、業腹な事でもありましたか？」

「ッ！」

おおぅ、ギロリと言う言葉が一番似合いそうな程の視線で、こちらを見据えてくる。

案内をしてきたコードウェル一尉にまで視線がいかないように身

体で遮りつつ、ゆっくりと執務机の前まで進んでから両足で床面を踏みしめて立つ。そして、ワザとらしく首を傾げて見せながら、あえて軽口めいた口調で話し出す。

「それとも、司令官室に呼び出されてまで叱責される程の問題を、俺、起こしてしまいましたかね？」

「……いや」

「では、言わせて貰いますが、いくら職責があるとはいえ、こーーんな風に眉間に皺を寄せ続けるのは、准将みたいな妙齢の女性には似合いませんよ？」

厳つい男ならそれもまたありだから放っておくけど、美人さんがすると周りまでピリピリさせてしまって、本当に怖いからねぇ。

お？　少し、表情が緩んだか？

「……ふっ、すまぬな、少し気が荒らんでいた」

「人間、誰だって、そういう時はありますよ。……それで、何が原因ですか？」

「ああ、本国の放蕩娘……アスハ代表首長が、護衛一人だけを連れて、プラント本国に乗り込んだらしい」

「……はっ？」

国家代表なのに、たった二人で他国に乗り込むなんて、なにそれこわいって……、マジですか？

「えと……、先程の様子から察するに、冗談……、ではないみたいですね」

「ああ、冗談でも程々にしろと怒鳴りたい所だが、今回は事実なだけに殴りたい」

「……その辺は耐えて頂くしかありませんが、でも、いきなり、どうして、そんな事に？」
「先月末に、Ｌ３でコロニーが……【タカノアマハラ】の一部が稼動した事は知っているな？」
「無重力工業区画の事ですね」
「では、今日、プラントの軍事工廠で新造艦の進宙式と新型ＭＳの披露会が行われている事は？」
「ええ、それも知ってます。先月中旬に、何故か家に、招待状が届きましたからね」

まぁ、白服だった俺はともかくとして、何故か、レナとミーアの分までな。

「何？　そうなのか？」
「ええ、ですが、民間にいる時ならともかく、今はオーブの軍属ですし、軍務もありましたから、勝手はいかんだろうと思いまして、正式に断りましたけど？」
「……そうか」

はぁ、と盛大な溜息をついた准将は頬杖を付いて、うんざりとした表情で話し出す。

「そのコロニー稼動と新造艦の進宙式を知った放蕩娘は、ザフトの新造艦や新型ＭＳの開発に元モルゲンレーテの技術者が関わっている事も知ったらしくてな。オーブの技術を軍事に使うなと獅子吠して、プラントに移住した元オーブ国民をタカノアマハラに連れ戻すと書き残し、代表としての執務を放り出した上に、その進宙式に乗り込んで、プラントの最高評議会議長に……、ギルバート・デュランダルに直談判するつもりらしい」

え、えと……。

「……あの、どこから突っ込んだらいいんでしょうか？」
「……突っ込む必要はないぞ、既に我が、ウナトを相手に、散々、喚き散らしたからな」

な、何か、重力ないのに、肩が重いわぁ。

「それで、どう対応するんですか？」
「ウナトと協議した結果、在プラント公使館とプラント側……ギルバート・デュランダルに予め、大馬鹿娘が馬鹿を言いに行く事を伝えて、あしらってもらう事にした」
「……その見返りの要求は？」
「今年度後期分の債権利子の放棄だ」
「はぁ、何とも、高い授業料で……」
「……まったくだ」

まったく、代表首長の子女で、しかも継承権を持ってるんなら、マユラやコードウェル一尉、サイ・アーガイル、それにキラ・ヒビキから伝え聞いたような、ゲリラ活動や下手なＭＳ操縦を覚えさせるんじゃなくてだな、一国の元首に必要な帝王学を学ばせておけよ。

つか、傅役や教育係は、いったい、何をやってたんだ？

それとも、象徴として祭り上げる為に、お飾り程度の扱いをしてきたのか？

「准将」
「なんだ？」
「今の代表首長ってのは、お飾りなんですか？」

あ、准将の背後に控えたコードウェル一尉が息を呑んだ。

「……お前は、普通なら聞けぬ事を、はっきりと聞くものだな」

「まぁ、生粋のオーブ人じゃありませんからね。醒めた目で見ると、今の代表首長は、統一の象徴としても、現実の為政者としても、中途半端に感じまして」

俺の言葉を聞いて、口元を僅かに歪ませた准将は、静かに話し出す。

「さて……、我も前代表が何を思って、どのような教育をあの放蕩娘への施したのかは知らぬが、我から見ると、今の現代表は象徴程度の存在である方が……、憚らずに言えば、都合が良いと考えている」

ふむ、今回の件を考えると、為政者としての自覚と感覚が欠如している事に加えて、もう何度も見た事もあるから知っているが、容姿に関しては良い方だし、国民の人気だってそれなりにあるみたいだし、うん、それが無難だろうな。

「だが、そうは考えぬ者もいる」

「と言いますと？」

「そもそも、今回の落し所にしても、ウナトの意向が大きいのだ」

「セイラン卿の？」

「ああ、奴は表面では何だかんだと言いつつも、前代表を敬愛していたからな。今回の一件にしても、残された忘れ形見をなんとか盛り立てたいと考えているが故に、多少の損が発生しても現代表が少しでも為政者として成長すれば、プラスになると踏んだのだろう」

なるほど、将来への投資って奴だな。

「もっとも、ようやく板につき始めた日常執務を放り出した上に、護衛一人だけを連れて他国に乗り込んだ事には、流石に気落ちして嘆いていたよ。……代表首長としての最低限の自覚は欲しいとな」

「確かに……、って、まさか、今回の用件って、その二人を迎えに行けと？」

「それも考えぬ事もなかったが……、それ以上に気になる報告があってな」

……代表首長の問題より、気になる報告って、何だろう？

46　繰り返される過ち　―ユニウス・セブン　2

「アサギ、映像を」
「わかりました」

サハク准将の機嫌が少し回復した影響もあるのだろう、コードウェル一尉はこちらにわかる程度に微笑んで軽く頭を下げた後、准将の指示した通りに端末を弄り、司令官席背後の大モニターに見覚えのある映像を映し出した。

星光に彩られる虚空に浮かぶ島のように、或いは、大地から掘り起こされた木の根のようにも、宇宙に浮かぶクラゲのようにも見えるそれは……。

「これは、地球周回上のユニウス・セブンですか？」
「そうだ」
「何時、誰が、どこで、ですか？」
「先月末、ＳＫＯの定期便が、アメノミハシラ―Ｌ１航路を航行中にだ」

准将の肯定と説明を聴きつつも、更に詳細な情報を仕入れるべく、かつて守りきれず、目前で破壊されてしまった一つの世界を見つめ続ける。

……。

……。

……んんっ、光った？

「スラスター光、みたいですね」

「ああ」

「……墓場荒らしをする、不心得なジャンク屋ですか？」

「かもしれぬな」

でも、最低でも、十以上の光が見えるとなると……、個人経営が大半のジャンク屋だと、あまり考えられないんだよなぁ。もちろん、見知った仲間で集って動く事もあるだろうから、ないこともないだろうけど、この場合、考えられるのは……。

「ジャンク屋にしては数が多いようにも感じますし、Ｌ３を逃れた海賊連中ですかね？」

「やはり、お前もそう思うか」

「ええ、参謀や情報分析官の皆さんはなんと？」

「海賊あたりが妥当だと考えている」

……でも、自分で言っておいてなんだけど、ユニウス・セブンで海賊はなぁ。

「ですが、それも奇妙なんですよね」

「理由は？」

「はい、ユニウス・セブンってのは、プラントでは多くの同胞を失った？悲劇の地？……大きな墓標ですから、一種の聖域です。当然、管轄しているプラント……、ザフトが常時観測をしたり、巡回を出したりしているはずなんですけど」

「……その具体的な回数はわかるか？」

「俺がザフトを辞める寸前に回ってきた計画案では、観測は二十四

時間体制で、巡回は一週間に二度でした」

再び整った眉間に皺を寄せると、サハク准将は瞑目して、口を開く。

「巡回は一週間に二度行い、加えて、常時観測している以上、海賊が拠点とするには難しかろうな」

「ええ、もしも、海賊が現れようものなら、必ず排除に動くはずですよ。巡回だって、不心得なジャンク屋が?墓荒らし?をしないようにする為の牽制ですし」

「だろうな」

……むぅ。

「ザフトが、ユニウス・セブンで何らかの作戦を計画しているんでしょうか?」

「お前が今言った、プラントの聖域でか?」

「正直、あまり考えたくはないですが、常に考えうる最悪を想定しておいた方が、心理的に余裕ができますからね。そういう可能性がある以上、都合よく見て見ぬ振りをして、無視する事はできませんよ」

「……確かに、国防に携わる者は、それ位の心持でいた方が良いだろうな」

ゴートン艦長だって、現実は往々に想定の斜め上を行く、って言ってたからな。

「それに、准将も、この映像を俺に見せるということは、何か、思う事があるのでしょう?」

「ああ。本来は海賊が活性化したり、拠点化するかもしれないとい

う危惧から、参謀本部から上がってきた情報だったのだが……、お前が言うように、ユニウス・セブンで動きがある事、プラントが見逃すだろうかとも思えてな。以前、ザフトに属していたお前からも意見を聞きたいと考えたのだ」

「なるほど……、それでは、デュランダル議長にアスハ代表の教育を？お願い？した時に、この事も？」

「ああ、ウナトにそれとなく尋ねさせてみたが、ユニウス・セブン関連の報告……異常は上がっていないとの事だ」

……上がっていないか。

「一国のトップにまで情報が届かない事、おかしいとも言えるし、おかしくないとも言えますね」

「上に上がる情報も取捨選択される以上、一国のトップまで届くとは限らんからな。……もっとも、議長は情報を得ているが、なんらかの思惑を持って、韜晦している可能性もある」

もちろん、その可能性はあるだろうけど、ザフトの場合だとなぁ……。

「下手すると、議長が知っていて韜晦している可能性よりも、上に上がる途中で情報そのものが握り潰されたり、怠慢で放置されている可能性の方が高いと思いますよ」

「何？」

「……そういう組織でもあるんですよ、ザフトは」

あぁっ、綺麗な眉間にますます縦皺が深く刻まれていく、だなんて本人の代わりに嘆いていると、准将は皺を何となく妖しさが漂う指先で揉み解し始めた。

「……実は、これ以外にも、他の情報源から気になる情報が入っていてな」
「それはどのような？」
「プラントで現体制……ユニウス体制に不満を抱く者達が、事を起こすかも知れぬという話だ」
「クーデター……、ですか？」
「いや、そこまではわからぬ」

眉間から長い指を離して、目を開いた准将は右手を顎にやりつつ、語を続ける。

「だが、現状におけるプラントの政治体制が、ギルバート・デュランダルの手によって巧く調整され、旧ザラ派、旧クライン派、中道派、どれもが主流派と呼べない状態である以上、その可能性もあるだろうな」
「へぇ、デュランダル議長は主流派を持たずに君臨ですか。それは何とも凄い事ですが……、納得できます」
「ほぅ、奴と面識が？」
「一度きりですがね。……では、そのどれかが政権奪取に動くと？」
「ああ、何らかの方法でデュランダル政権に打撃を与え、奴を追い落とすつもりなのだろう」

ユニウス体制に不満を抱いている奴らが、何らかの方法で、体制を支持する現政権に打撃を与えて、デュランダル議長を追い落とそうとしているってことか……。

「准将は、どうすれば、どのような事が起きれば、今のユニウス体制が崩れると思いますか？」
「誰もが条約を守る気を無くす程に……、再び、武器を手にするべきだと世論が傾くような、或いは、条約の破棄を決断せざるを得な

いような大きな出来事が起きれば、後は坂道を転がるように、容易に崩れるだろう」

条約を守る気を無くし、武器を手にするべきだと世論が傾き、破棄の決断をせざるを得ない、大きな出来事、ねぇ……。

……。

キーワードをフワフワと脳裏に浮かべて考え込みながら、あるがままに、大モニターの青白い光の群れを見ていると、天秤型コロニーの大地面ではなく、大きな採光窓や構造体となる外壁を補強する巨大ワイヤー部分……クラゲの足の部分に集っている事に気が付いた。

「スラスター光、ワイヤー部に集中していますね」
「むっ、ユニウス・セブンか？」
「ええ、これって、最大倍率ですか？」
「ああ、これが最大だ」

もう少し、細かく見れたら、詳細がわかるんだけど……。

「今現在、観測してるものはないんですか？」
「丁度、地球の陰に隠れていて、今、ここからでは観測できぬ。もしも、できたとしても、これと同じ位の解像度だろう」
「そうですか」

しかし、あのスラスター光の動き、どこかで見たような動きなんだよなぁ。

……。

まるで何か、作業をしているよな、あの動き……、いつだったかなぁ。

……。

でも、宇宙での作業を見るような時って、戦中し……かッ！

「……思い出した」

「どうした？」

「いえ、先の戦中、ザフトがＬ４で東アジアの新星を奪取したでしょう？」

「うむ、その後、ＬからＬ５まで運んで、ボアズに改名したのだな」

「はい。で、その新星を運ぶ時に推進機を……、フレアモーター（※注）を付ける作業を遠方から見た感じに……、Ｌ４から引き上げる時に見た光景に似てます」

「……な、に？」

「准将には今更でしょうけど、無重力で物をまっすぐ目的地まで運ぶ為には重心バランスが大切になりますから、微妙な調整が必要になるでしょう？　当然、フレアモーターを取り付ける時も、計画モデルと実物とが微妙に違う方が多いそうですから、そうそう当初計画通りには上手くいきません。なので、どうしても設置場所の調整に飛び回る必要があります。……この映像の光は、その時の動きに似てるように感じます」

交代部隊と入れ替わって、Ｌ４からプラントに帰るまで待機休憩室で寝泊りしてた時、暇つぶしにＬ４の映像をモニターに映し出して見ていて、あの光の動きはなんだろうと首を傾げていたら、シゲさんが教えてくれたんだよな。

「……アサギ、映像を最初まで戻せ」
「は、はいっ！」

しかし、もしも、今、俺が口に出した？似ている光景？が現実だと考えると、自然、何者かがユニウス・セブンを動かそうとしていることになる。

まぁ、ひとまず、作業をしている者達が何者であるかは置くとして、何故、ユニウス・セブンを動かす？

……。

正直、結び付ける理由もないし、根拠や証拠もない、自分の想像と勘でしかがないのだが……、それでも、このユニウス・セブンでの不審な動きと今まで准将から聞いた内容とが癒着してしまったかのように、引っ付いてしまって離れない。

ユニウス・セブンを動かす目的って……。

「ラインブルグ、今、お前が想像した最悪を話してみろ」
「正直、口に出したくないですが……、おそらくは……、ユニウス・セブンを使った……、大質量攻撃でしょう」
「その対象は？」
「先程聞いた、ユニウス体制を崩す事を目的とするプラントの一派が実行犯ならば、地球が最も確率が高いでしょうね。それ以外が実行犯なら、プラントのコロニー群も有力候補になります」

プラントも地球市民から大きな怨み買ってるから、そんな可能性もなきにしもあらず、って奴だ。

「……聞くが、その大質量攻撃、ザフトで検討した事はあるか？」
「そこまではわかりませんが……、戦中、ザラ議長と月のプトレマイオスの無力化を図る方法について話をした時に、無力化する手段として、大質量攻撃を俎上に乗せたことはあります」
「月攻略に失敗した後だな？」
「ええ。ですが、その時は、政治面や環境面でのデメリットが大き過ぎるから止めた方が無難だろうって、結論を出しておきました」

俺の言葉に一つ頷いたサハク准将は、背後の大モニターに椅子ごと振り返り、映像を見つめ始める。

「……だが、パトリック・ザラは質量攻撃について、研究をさせていただろうな」
「その確信の源は？」
「我が当時のパトリック・ザラならば、そうするからだ」
「……納得です」

うん、映像が最初に戻って、また動き始めたな。

……しかし、この最悪の想像、本当だったら、非常に拙いんじゃないか？

プラントの天秤型コロニーに使用されている大地は、小惑星を利用した直径約十？の代物だから、恐竜が滅びた要因を作ったって言われている、大昔の隕石とほぼ同じ大きさだ。

無論、衝突時の速度も大きく関係してくるから、一概には同じと

は言えないが……。

「……下手をすると、地球に壊滅的な被害が出るな」

「ええ」

「これへの対抗策は……、やはり、地球の重力圏に捕らわれる前に、フレアモーターの一部を破壊することで重心バランスを崩し、突入軌道から逸らしてしまうことか」

「それが一番確実で安全なはずです。それ以外で軌道を変える手段としては、大量のミサイルやイズモ級の陽電子砲みたいな強力な砲を断続的に当てるか……、或いは、何らかの方法で一点に断続的に集光し、構造体か基部になってる小惑星の一部を加熱、蒸発させ、その際に発生する反動を利用するか、ですね」

「ふむ、最後のが最も経済的だな。……工業区で使ってる太陽炉を応用できれば可能かもしれんが、現状では間に合わぬかも知れぬ」

「……これが極々最近の動きである以上、最悪の場合、遠からず事が起きる可能性が高いはずですしね」

あ～、幾らパーシィでも、？こんなこともあろうかと？は、都合よくできないからなぁ。

「いっそのこと、かつての連合軍がボアズを崩壊させたように、核の飽和攻撃を仕掛ければ、楽なのだがな」

「その分、ザフトやプラントの反発がえらい事になりそうですけどね」

「何、その時はその時で、管理が不十分であった事を突いてやれば良い事だ」

「確かに……って、……いやいや、それ以前に、オーブって、今すぐ使える核を持ってるんですか？」

「……お前はどう思う？」

「……あー、国防の大根幹に関わりそうな機密には触れたくないの

で、先の発言はなかった事にしてください」

俺、半年後に退役したら、一週間はミーア達とイチャイチャネチャネチャするんだ。

「ふっ、用心深いものだ。だが、真面目な話、事が起きて、ユニウス・セブンが地球の重力圏に捕らわれた後は、何らかの方法で破壊せねばならんだろう」

「そうですね。大質量のままでは地球に壊滅的な被害を与えると考えられるので、少しでも質量を小さくして、大気圏突入時に磨耗させる為にも、破砕に務めるのがベターだと思います」

「……だが、それだと、世界各地に被害が散らばるな」

「本当に、嫌な話ですが……、下手をすれば地球の地軸が傾いたり、自転速度が増減したりするような、局地的な大破壊……、いえ、全世界規模の破壊と長期間に渡って続くであろう天候不良を容認するか、世界各地に被害を分散させて、異常気象と混乱を短期間に収めるか、の択一です」

これ、どちらかを決断する指導者、辛すぎるわ。

「……まったく、頭が痛く、悩ましい事ばかりだ」

「ええ、ようやく、世界が安定を取り戻しつつあるというのに……」

……何で、それを破壊しようとするんだよ。

外面には出さず、内心で悄然としていると、スラスター光の動きを確認したのだろう、サハク准将が声を出した。

「……お前が言った通り、確かに、スラスターの動きがワイヤー部に偏りすぎているな」

「はい。それで……、宇宙軍はどう動きますか？」
「知った事か、と声を大にして言いたい所だが……、事がオーブ本国にも大きな影響を及ぼす可能性があるだけに、座して見ているわけにもいくまい。まずは、世界各国にユニウス・セブンの落下があるかもしれぬとの警戒情報を発しよう。無論、プラントにも、ユニウス・セブンでの動きが何なのか、関与しているのかを再度問い合わせる必要もあるだろうな」
「……直接的には？」
「参謀本部に段階別の落下阻止案を立案させる間に、艦隊に召集を掛けて即応態勢に持っていこう。当然、ユニウス・セブンへも部隊を送り、真相を確かめる一手を打つ」

となると……。

「即応部隊を出すと？」
「その為に作ったからな」
「……残り半年は、給料泥棒するつもり満々だったんですけどねぇ」
「ふふっ、世の中、そう上手くいくものではない」
「ええ、今、実感しているところですよ」

まったく、どうしてこうなった？

「では、今日中にでも、即応部隊を出す故に……」

んんっ？　通信端末がって、コードウェル一尉が慌てて取り付いて対応しているよ。

……。

でも、今、このタイミングって……。

「……准将、何だか、嫌な予感、しませんか？」
「……奇遇だな、我も、碌な事ではないと、勘が訴えてくる」
准将と見解が合致したということは、間違いなく、困った事が起きたに違いない。
っと、通信相手から情報を聞き取ったコードウェル一尉が、普段は血色の良い顔から血の気を無くして、一言。
「准将、在プラント公使館からの速報で、つい先程、新型艦の進宙式が何者かに襲撃された模様です。……また、居合わせたアスハ代表の所在も確認できないそうです」

※注　フレアモーター
太陽フレアで発生した荷電粒子とモーターの磁場を作用させて、推力を得るシステム、と思いねぃ。

４６　繰り返される過ち　－ユニウス・セブン　２（後書き）

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ、放送開始でございます。

47　繰り返される過ち　－ユニウス・セブン　3

１０月１０日夜。
在プラント公使館から進宙式襲撃とアスハ代表行方不明の報を受けた宇宙軍総司令部は、本国政府やプラント駐在公使を通してプラント政府と連絡を取り合って、アスハ代表の安否確認や状況の把握に務める一方で、ユニウス・セブンに関わる警戒情報をプラントを含めた世界各国に送ったり、最悪の想定……ユニウス・セブンが地球に向って動き始めた場合における、段階的な対応策の立案や第一艦隊の召集や出撃準備、破砕用の爆発物等々の準備に走り回る事になり、蜂の巣をつついたような騒ぎになっている。当然の事ながら、サハク准将もその渦中のど真ん中にあって、報告を受けては指示や命令を飛ばすという司令塔を務めている。

一方、俺はというと混乱の坩堝になっている宇宙軍総司令部を尻目に、即応部隊の一員としてユニウス・セブンへと向っている所であり、つい先程まで席を設けてもらえた即応部隊幹部会議からＭＳ格納庫の直ぐ脇にあるウルブス小隊の詰所に戻ったところだ。

そんな訳で小隊の三人からの質問を受け付けながら、会議で仕入れた情報を元に現状説明を行っており、今もコードウェル三尉の質問……アスハ代表の安否について答えている。

「では、三佐、カガリ様……アスハ代表の安否は、まだ確認できていないと？」
「ああ、プラント政府も追撃態勢の構築やらコロニーへの攻撃を警戒やらでドタバタしている上に、進宙式に参加していた政府やザフ

トの偉い人達にも犠牲者が出ているらしくて、色々と混乱しているようでな、駐在公使は確定情報を中々得られないそうだ」

……とはいえ、事件発生からそろそろ四時間は経つはずだし、確定情報があってもいいんだけどなぁ、と思ったら、レナが律儀にも手を挙げて質問してきた。

「じゃあ、先輩、デュランダル議長に関しては？」

「こっちは難を逃れて、例の新造艦に避難していたらしい」

「それは不幸中の幸いでしたね」

「そうだな、不幸中の幸いだと言えるんだが……、その新造艦は、襲撃を仕掛けてきた連中の母艦を追っている最中らしい」

「へっ？」

おや可愛い、レナの目が点になった。

「え、えーと、一国の元首を乗せたまま、ですか？」

「ああ」

「もしかしたら、戦闘で撃沈される可能性もあるかもしれないのに？」

「あー、まー、そういう危険もあるにはあるが、大々的に執り行なった進宙式を壊された手前もあるしな、議長としては潰された面子を回復させる為にも、新造艦の優秀さを……、自身の命を預けられる程に信頼できるモノだとアピールしたいって思惑もあるかもしれん」

「でもさ、聞いた限りだと、どちらかと言えば、出来上がった焼き魚を？ドラ猫？に取られて、慌てて裸足で追い掛けたって感じじゃない？」

アスハ代表が行方不明だというのに、あまり常と変わらぬマユラ

が述べた、どこかで聞いた事があるようなフレーズに、言い得て妙だと思いながら頷いて応える。

「その可能性の方が高いかもな。まぁ、とにかく、デュランダル議長が追撃に出て、不在になっている影響もあって、プラントというかＬ５は非常に混乱している状況なんで、ユニウス・セブンに関する情報も引き出せていない」

「なら、Ｌ１からはどうなの？」

「そっちもユニウス・セブンに関する動きは初耳らしくてな、アメノミハシラからの要請を受けて入れて、別ルートからプラントへ確認作業を行ってるそうだ」

「あれ？　先輩、Ｌ１はユニウス・セブンを監視してなかったんですか？」

「ああ、そうなんだよ、レナ。プラント国防軍は創設の経緯から、ザフトの軍事部門と仲が悪い状態だからな。無用の軋轢を避ける為にも、ザフトが噛み付いてきそうな事には手出ししなかったらしい」

なんとも、国防軍司令官になってるリューベック司令の苦労が透けて見える話だった。

「そもそもの話、プラント国防軍自体が防衛隊ならともかく、機動戦力はオーブ軍の一個艦隊程度しか持っていないからな、精々、？ドラ猫？を見つけ出す為の目を構築するのが精一杯だろう」

「あ、あの三佐」

「ん、なんだ、コードウェル三尉」

「Ｌ１って地球圏の要衝ですよね？」

「ああ、そうだな」

「もっと戦力を置いた方が、周辺に睨みを効かせる事ができると思うんですけど、何でそんなに少ないんですか？」

「三尉の言う通り、それが一番正しい事なんだけどさ、現実っての

は純軍事的には正しくても、政治的な理由で最良を潰されることが往々にして起きるんだよ。今のＬ１の場合は、周辺への遠慮とかじゃなくて、ザフトにとっての不都合を避けたいから……、プラント国防軍に自分達が持っている武力に匹敵するような戦力を持たせたくない事ってのが、一番の理由だな」

「な、なるほど……」

もっとも、世界各国政府が絶対に敵に回したくないと考えているに違いない、？プラントの魔女？ことカナーバさんがＬ１の再開発局長兼行政局長を務めているから、不足している戦力分の代わりにはなっている為、周囲への牽制はできているみたいだけどな。

？魔女？に関わる事だけに口に出すことなく、内心で収めていると、再びレナが口を開いた。

「プラントとアスハ代表に関してはわかりました。なら、私達は今後、どう動くんですか？」

「まずはオオツキガタの活動半径に入り次第、機動ＭＳ中隊から偵察機を先行させて詳細な情報を収集する事になった。それ以後は、アメノミハシラとの情報リンクやユニウス・セブンの観測態勢を維持しつつ、参謀本部が立案中の作戦計画に従って動く。だから、偵察機の出撃後は、俺達も何があっても即応できるように、スクランブル待機する」

「わかりました」

頷いて見せたレナに代わって、今度はマユラが質問してくる。

「小隊の分隊編成と武装パックは？」

「俺とマユラで第一（前衛）、レナとコードウェル三尉で第二（後衛）だな。兵装に関しては、第一は両機共にＡパック、第二は、レナがＳ／Ｓパック、

三尉がＦＳパックだ」
「了解、強襲が二、狙撃・偵察が一、制圧支援が一ね。強襲が装備する重散弾砲のカートリッジは？」
「……俺がキャニスター、マユラがクラスターで行こうか」
「ええ、フルカワ整備班長に伝えておくわね」
「頼む」

そして、最後にコードウェル三尉が手を挙げたので、頷く事で意見を促してみる。

「三佐、仮にですが……、計画案ができる前に、ユニウス・セブンに推進装置が取り付けられていた事が判明した場合は？」
「その時は、アメノミハシラと連絡を取り合って、サハク准将の指示を仰いで、対処する事になっている」
「じゃあ、その……、動き出した場合は？」
「こいつもサハク准将の指示を仰ぐ事になっているが、事態の進行が早くて、アメノミハシラから命令が来る前に動く必要がある場合はトウラン司令が独断専行して命令を出す。……まぁ、この辺はさ、まだ三尉が気にする所じゃないから、俺の命令に従ってくれたらいい」
「……はい、わかりました」

これで終わりかなと思い、三人の顔を見渡す。

……うん、ないようだな。

「第二種戦闘配置か出撃になるまで、まだ時間がかかるだろうから、皆、入れ込み過ぎない程度に緊張は持っていてくれ。……以上だ」
「「「了解」」」

との言葉と共に、三人が敬礼するので俺も答礼する。

アットホームな雰囲気漂う身内だけの小隊とはいえ、一応のけじめって奴だな。

◇　◇　◇

日付が変わって、１１日。

偵察機を先行出撃させた後のスクランブル待機の中、実は初陣だったコードウェル妹の緊張を解す為に、レナやマユラと一緒に戦中の苦労話や戦闘時の心境を語る等して、時間つぶしをしていると、アメノミハシラから？微妙な表情を浮かべてしまう朗報？と？眉間に皺を寄せてしまう朗報？が飛び込んできた。

まずは前者だが、ザフトの新造艦【ミネルバ】に乗り込んで、？ドラ猫？を追跡しているデュランダル議長と連絡が取れた際に、アスハ代表もミネルバに乗っている事がわかり、生存が確認されたのだ。

俺が羨む男前なトウラン司令から聞いた話によると、襲撃に巻き込まれた時に護衛官が咄嗟に判断して、緊急避難的にミネルバに逃げ込んだそうで、現在は？お客さん？として迷惑を掛けているとか……。

いやはや、普通に考えたら、一国の元首を乗せているだけでも大変なプレッシャーなのに、他国の元首まで乗せ、しかも、正体不明（アンノウン）の敵と戦闘行動を取る事になってしまったミネルバの艦長さんには心からご同情申し上げたい。

次に後者になるが、ユニウス・セブンの不審な動きに関して、デュランダル議長がプラント政府の公式な見解として、プラントはユニウス・セブンで何の作戦も予定していなければ、そのような情報があった事も把握していない、と述べたと言うものだった。

この情報もまた、非常にダンディなトウラン司令から教えてもらったのだが、プラントはああ言っているが、正直怪しい所なので、戦闘があると考えておいてくれ、とかなり難しい顔で付け加えられてしまった。

その懸念は正しいというか、はっきり言って、巡回や常時観測を行っているというのに、情報を把握していないと言われたら、関与しているのではないかと、疑わざるを得ないだろう。

まぁ、それでも、サハク准将とデュランダル議長の直接会談によって、オーブ軍のユニウス・セブンへの接近と進入、有事の際の作戦行動を認められたし、ユニウス・セブンには作戦行動中のプラント所属機はいないとの言質も取ったから、その場で？なんらかの？工作をしている連中がいたら、容赦なく排除できるというものだ。

というか、地球に落下した場合、最も困るのがプラントであり、自身である事をデュランダル議長も承知しているらしく、軌道変更に失敗した場合に備えて、念の為に、信頼できる部隊にメテオブレイカー（砕装置）（隕石破）を運ばせて設置させるとのことだった。

うんうん、助かるわぁって、元々、ユニウス・セブンをしっかりと管理していなかったプラントの不始末が疑惑を呼んでいるんだから、それ位はしてもらわないとねぇ。

……しかし、サハク准将とデュランダル議長の直接会談かぁ。

好奇心猫を殺すというが……、ちょっと見てみたい気がしないでもない。

尻尾を股の間に挟みたくなるような冷笑を浮かべるサハク准将が鋭い舌鋒で切り込み、煮ても焼いても絶対に食えない微笑を湛えるデュランダル議長が柔らかなオブラート表現でいなす。

逆に、デュランダル議長が常の余裕を無くすことなく、一つの言葉に二重三重の意味合いを含ませて、プラントにとって何らかの利益を引き出そうとするのに対し、サハク准将は慇懃無礼な言葉を使って、相手を挑発しつつも、オーブの不利益なるような言質を決して与えずにかわす。

……うん、居合わせただけで、胃がやばい事になりそうだから、やめとこう。

自分の中で結論が出たところで意識を現実に戻し、偵察小隊が送ってくるものとは別物なのだが、モニターに映されているユニウス・セブンを見てみる。

これを地球に落す、か……。

はっきり言って、常人がやろうとする事とは思えないというか、少しでも他者の痛みを自分の痛みに置き換える事ができるだけの感受性があったり、様々な立場から自らの行いの結果を想像できるな

らば、到底できない所業だ。

いや、俺が以前、月へと質量攻撃を俎上に乗せた事を知っている者がいたら、何を今更、良い子ぶって言ってやがると思われるかもしれないが、やはり、？想定する？のと？実行する？のとでは、天と地の開きがあると思うのだ。

もしも、本当に実行に移す連中がいるのなら、エイプリルフール・クライシスを引き起こした連中のように、自分達のコミュニティ外の人を人と思ってないか、根本的に人としての想像力が欠如しているか、或いは、自らの信念や正義、復讐や憎悪といったモノが過ぎてしまい、本人的には極普通だと思っていたとしても、他者……世間一般的な見解から見れば、狂人と言われる部類と化しているかだろう。

しかし、誰が……って、こんな条件に当てはまるのって、ファントムペインみたいなブルーコスモスでも行き過ぎた急進派か、ザフトやプラントに蔓延るコーディ至上主義者しか、考えられないよなぁ。

加えて言えば、攻撃対象として地球を選んでいたり、世界に及ぼす影響が大きさを考えると、コーディ至上主義者あたりの可能性が高そうだ。

……はぁ、もう、いっその事、そういった連中を十把一絡げにして、太陽あたりにフリーフォールさせた方が、世の為人の為にいいんじゃないか？

徐々に腹の底からわき出してきた怒りを、どう解消したものかと考えていると、レナ達と話をしていたマユラが、すいと横にやって

きて、上目遣いに見上げてきた。

「アインさん」

「ん、どうした？」

「今回の件、最悪の想定が本当だとして……、いったい、誰が、どうして、こんな事をするんだろうね？」

「丁度、その事を考えてた所だったんだが……、マユラって、もしかして、俺の心を読めるのか？」

「あはは、そんなこと、できるわけないよ」

……だよねぇ。

我ながら馬鹿な反応したモノだと思いながら、自身の考えを述べてみる。

「はっきりと言って、わからん」

「えー、もうちょっと、真面目に考えてよ」

「いや、もうね、正直、考えたくないのよ。たとえ、どんな理由があろうとさ、世界に大破壊をもたらそうとする連中の事なんてさ」

偽りのない本音を使って韜晦してみせたが、この部屋の中で一番付き合いが長いレナには通じなかったらしく、こちらもコードウェル三尉との話を切り上げて、口を挟んできた。

「マユラ、先輩のことだから、本当は犯人について、推測できてるんだと思うわ」

「でも、言わないって事は？」

「ふふ、実は、ハラワタがグツグツと煮えたぎっていて、爆発寸前なのよ。もしも口に出したら、怒りが止らなくなるから我慢してるだけ」

あってるだけに反論できないわぁ、と言ってしまいたいが、一応、抗議だけはしておこう。

「……お前ら、人を何だと思ってるんだ？」

「そうですね、イメージ的には、表面はジョークグッズなのに、中身は本物の爆発物って所でしょうか？」

「うーん、客観的に見ると、牧羊犬の振りをして、羊を柵に追い込んで囲った後、ゆっくりと食べちゃう狼？」

……可愛い恋人達に心折られそうなアインです。

しょぼーんと落ち込む俺を他所に、顔をつき合わせたレナとマユラがやいのやいのと俺に関することで色々と述べ始めると、残った三尉も近くに寄ってきて、何とも言えない表情で話しかけてきた。

「……三佐、男の人が多人数の女の人と同時に付き合う事って、私が想像していたような、男だけに都合の良いモノじゃなくて、実は、とても大変なモノだったんですね」

「プラスだけに目を向けがちだけど、マイナスだって通常の三倍か、下手すりゃそれ以上になるからな。……でも、まぁ、三尉、最初からその辺も覚悟していたさ、はは、あはは……はぁ」

なんか、そこでヘドロの様にわいていた怒りがどっかに飛んで言った気分だわぁ。

でもまぁ、このお陰で、肩に入っていた余計な力が抜けたのは確かだから、感謝しておこう。

「確かに、マユラが言う通り、昼はせっせと真面目に仕事してるのに、夜になったら、本当に豹変するものね」
「うんうん、表面だけ見て、優しいと思ったら大間違い、私達だけじゃ、絶対に、アインさんの？爆発？に耐えられないもん」
「……そう考えると、ミーアちゃん様々よね」
「……そうね、大部分を引き受けてくれるミーアちゃんがいなかったら、私達、ベッドの上で死んでるかも」

……コードウェル三尉の生暖かい目が痛かったけどな。

48　繰り返される過ち　－ユニウス・セブン　4

ユニウス・セブンに関する不穏な疑惑は、先行していた偵察機から送られてきた観測情報によって、最悪の想定が現実の物である事が証明されてしまった。

アメノミハシラで観測情報を精査した所、不審なＭＳや艦艇を発見する事はできなかったのだが、ユニウス・セブンのワイヤー部に電卓のような代物……フレアモーターが多数設置されている事が確認された上に、既に起動済みである事も判明したのだ。

更には、折りが悪いとしか言いようがない事に、太陽で大規模なフレアが観測されており、フレアモーターは少しずつだが、確実に推力を得ているようで、ユニウス・セブンの軌道が地球に向って徐々に変わりつつあるという切迫した状況に陥りつつある。

事ここに至り、アメノミハシラは地球各国政府に対して、以前発した警告により一層の信憑性を与えるべく、ユニウス・セブンが安定軌道を外れ、地球に落下する可能性が非常に高い事を、観測情報や予測落下コースと共に連絡している。

そして、参謀本部で急遽立案された作戦計画に基に、ユニウス・セブンに接近している即応部隊のＭＳ隊をユニウス・セブンに派遣して、フレアモーターの除去を行わせる一方で、即応部隊がユニウス・セブンを地球落下軌道から逸らす事に失敗した場合に備え、地球突入前に少しでも質量を削り取るべく攻撃を仕掛ける為に、駐留している第一艦隊を地球軌道に向けて動かしているそうだ。

このように自分達にできる限りでだが、対応に動いているアメノ

ミハシラに比べて、ユニウス・セブンの所有管理責任者であり、真の当事者であるプラントなのだが……、なんとも動きが鈍いというか、危機感がないというか、とにかく、当初、派遣された部隊以後は、更なる援軍が派遣される様子もなければ、大急ぎで対応している訳でもないらしい。

というか、デュランダル議長が乗っているミネルバが？ドラ猫？への追撃を中断して、こちらに向かっている以外、増援が来ない。

ブリーフィングの際、普段の余裕ある男振りを若干減らしたトウラン司令がこのプラントの動きについて話した時に、非常に困惑した表情を浮かべていたのも無理はないというものだ。

本当に今のプラントの鈍い動き……、現在進行中の危機を知る者達全てが、いったい、何をしているんだ、と首を大きく傾げるような動きの鈍さは、他国の疑惑を招くだけで、百害だけしかないのだが……、それとも、本当は動く為に精一杯努力しているんだけど、各所で、コーディ至上主義者や反ユニウス体制派によるサボタージュや妨害でも起きているんだろうか？

あるいは、今回の件に、プラント政府が組織的に関与しているという疑惑は本当の事であり、全て仕組まれた事、自作自演なんだろうか？

……。

どちらにしても、愉快な事ではないのは確かだって、いかんいかん、落ち着け、俺。

……。

けれど、どうしても……、今の鈍すぎるプラントの動きを見ていると、これこそがプラントが有している意識の表れ……地球の危機は自らに関わりのない事だと、他所事だとの認識を表しているように思えてしまい、物悲しさを覚えてしまうのだ。

そんな鬱屈した思いを内心に抱えながら、自機のコックピット内で出撃前のステータスチェックをしていると、レナから連絡が入った。

「先輩、ウルブス2、ウルブス3、ウルブス4、全機の起動シークエンスが終了。各機ともコンディション・グリーンです」
「わかった。俺の機も……、コンディション・グリーンだ」

これでウルブス小隊全機の出撃準備が完了した事になるので、教育艦となったワダツミからウワツヘと異動してきたMS管制官のワラル三尉に声を掛ける。

「ワラル、ウルブス小隊の出撃準備が完了した」
「了解です。出撃まで後……三分程ですので、もうしばらくお待ちください」
「わかった。ユニウス・セブンに動きは？」
「地球へと軌道を変えつつある事以外、特に異常は観測されていません。あっ、ですが、ザフトの任務部隊から、破砕装置の設置を担当するMS隊を出撃させるとの連絡がありました」
「その任務部隊の隊長は、ジュールだったな？」
「はい、そのように聞いています」
「了解した」

さて、僅かな時間だが、少しでも溜まってしまった負の感情を吐き出さないとな、と思ったところで、何気に通信が繋ぎっぱなしだ

ったらしく、レナが話かけてきた。

「……先輩」

「ん、ああ、なんだ、レナ？」

「先輩にはこんな事は今更ですしょうけど……、出撃前です。不要な感情は置いていくか、しっかりとコントロールして下さいね」

「……顔に出てたか？」

「いえ……、でも、何となく、雰囲気でわかるんです」

……雰囲気か。

「……確かに、今日は、コントロールし切れていない」

「先輩でも、そんな時があるんですね」

「まぁな。……大の男がさ、格好悪いだろう？」

「ふふ、別に格好悪くなんてないですよ。どっちかというと、先輩が今みたいな姿を見せてくれるのは、私への信頼の証だと思えて、嬉しく感じちゃいますから」

「……レナって、良い女だよなぁ」

「今頃、気付「ぶーぶー、アインさんがいつもより元気ないこと位、私だって気付いてたわよ。ほんと、レナったら、普段、抜け駆け駄目絶対駄目って言ってる癖に自分は抜け駆けするんだから、抜け駆け禁止～」ちょ、マユラ！」

「三佐、その、何というか……、ご馳走様でした」

俄かに、マユラとコードウェル三尉が通信に入り込んで、闊達な風を送り込んできたので、レナとの間に醸成されつつあった？むふふ？の時に似た甘い空気が一気に霧散していく。

でも、それは同時に、胸の内で淀んでいた、このような事態を引き起こした連中や理不尽な世界への、怒りや悲しみ、悔しさといった想いも一緒に吹き飛ばしてくれたようで、口元に自然と笑みが浮

かぶ。

「あ、アインさん、やっと笑った」
「ほんとだ、取り繕ったり、引き攣ったりしてない、いつもの先輩の笑顔だ」
「うんうん、さっきみたいに弱みを見せてくれるのも嬉しいけど、やっぱり、アインさんは明るい顔が一番似合ってるわよね」
「そうね。……あ、でも、マユラ。先輩が極稀に魅せる真剣な表情もドキッとさせられて、いいのよ？」
「あ、もしかしたら、見た時あるかも」
「うふふ、だったらわかると思うけど、それをね、じっくり見てたら、あれ、先輩って、意外と格好良いって、胸が高鳴って来るのよ」
「むー、いいなー、私もじっくり見たいなぁ」
「……三佐、私、もう、お腹一杯なんですが？」
「……いや、悪いな、三尉。おい、レナ、マユラ、そういう話は作戦が終わって、帰って来てから、他所様の耳目のない所で、ゆっくりとしてくれ」
「「は～い」」

華やいだ二人の返事に、なんとなく気恥ずかしさを感じてしまうが、腹に力を込めて、意識を切り替え、思いを言葉にのせる。

「後少しで出撃することになるわけなんだが……、今の状況やこれまでの経緯から考えて、ユニウス・セブンで、俺達の行動を阻止しようとする敵性体が出現してもおかしくない。各員、一層、気を引き締めるようにな」
「了解です」
「了解」
「了解しました」

三者三様の返事に頷き返していると、ワラルの声が通信系に入り込んできた。

「出撃一分前です。先行出撃はウルブス1、ウルブス2。パッツ履きのウルブス3とウルブス4は後になります。……それと、ご馳走様でした」

「了解。ま、まぁ、ワラルもそう言われるようになれよ？」

「全整備科員の退避及び格納庫前面ハッチのオープンを確認、カタパルト展開……、展開終了。……カタパルトシステム・オールグリーン。……いや、流石に、三佐みたいな事はやれる自信はありませんよ」

ワラルの物言いに肩を竦めつつ、メインモニターを見れば、整備班の退避が完了したのだろう、前面のハッチが開け放たれ、普段は艦上と艦底で防護壁代わりとなっている電磁カタパルトが宙に迫り出し始めていた。

「出撃三十秒前、ウルブス1、発進位置へ」

その指示に従い、ゆっくりと発進位置に機体を進ませる。

「カタパルト起動」

ワラルのその言葉と共に、俄かに機体を外に放り出そうとする力が掛かるが、背面に取り付けられた係留索によって、その場に止まり続ける。

「トウラン司令がオペレーション・トラクターの発動を宣言しました。出撃十秒前……、五、四、三、二、一、ウルブス1、発進どうぞ！」

「ウルブス1、マリーネ、出るぞっ！」

俺の言葉と共に機体の係留索が解かれ、一瞬だけ圧し掛かったGを耐えると、そこは既に馴染んだ虚空……宇宙だった。

軽く頭部のメインカメラを動かして周辺を見回すと、ナカツ、ソコツの両艦からも、イーグルと名付けられた機動ＭＳ中隊のオオツキガタが次々に飛び出してはＭＡ形態に変形して、編隊を組みつつ、その強力な推進力から早くも先行し始めていれば、ウワツの右舷からもパンサー小隊のマリーネが出撃しているのがわかった。

「ウルブス2よりウルブス1へ、小隊全機の発進を確認しました。パッツ組が増速して、こちらとの同期を開始しているので、上手く乗ってください」

「ウルブス1、了解」

さてと、マユラ機はと……って、もう、すぐ後に居るわ。

「速力同期完了、ウルブス1、いつでも合体可能よ！」

「……ウルブス3、なんとなく、卑猥に聞こえるのは気の所為か？」

「えー、私は、そういう風に受け取る人の方が卑猥だと思うの」

なんとも、初めて会った時とは大違いというか、これだけ遠慮もなく赤裸々にやり取りできるって事は、それだけ心近く、気を許してくれているって事なんだろうなぁ、なんて風に考えつつ、マユラが操るパッツに接地し、取っ手を掴んで固定する。

「ウルブス1の接地を確認」

「ウルブス3、パッツのコントロールはそちらに任せる。頼むぞ」

「了解、任せて」

さて、パッツの操縦はマユラに任せて……。

「ウルブス2、そっちはどうか？」
「こちらウルブス2、搭乗完了。そちらに追随しています」
「わかった。航路に誤りがないかのチェックを頼むぞ」
「了解です」

次は、ウワツに連絡をと。

「こちら、ウルブス1、ウワツ、聞こえるか？」
「はい、こちらウワツです」
「ウルブス小隊全機に異常なし。今の所、順調に動いている。……なにか状況に変化はあるか？」
「いえ、プラントの任務部隊が破砕装置の運搬に手間取っている以外は特にありません」

あー、確かに、資料を見た限り、メテオブレイカーはＭＳ以上のサイズだったし、運搬に手間取るな。

「了解、ユニウス・セブン付近に敵性体の姿は？」
「ザフトが敵性体ではないのなら、存在しません」
「おっと、手厳しいな、ワラル。……だが、今の懸念、抱くななんて事は言うつもりはないが、表に出す時は、しっかりと、時と相手、状況を選ぶようにな？」
「……あ、はい、すいませんでした」
「何、謝る必要なんてないよ。お前さんが持っている不信感は、この場にいる誰もが抱いているモノでもあるからな。まぁ、とりあえず、現状は了解した。何か、動きがあった場合は連絡を入れてくれ」

「了解しました」

……やっぱり、プラントやザフトに対する不信感が高まっているな。

現場で混乱が起きないといいんだけど、なんて危惧を抱いていると、マユラが小さな声で話しかけてきた。

「ウルブス３よりウルブス１へ、今回のプラントの対応を見て、色々と思う所があるのはわかるけど……、今はやるべき事に集中するべき時だと思うわ」

「……ああ、そうだな」

マユラの言葉に頷き返し、ユニウス・セブンが突き進む先……地球をサブモニターに映し出す。

今頃、地球では各国政府が最悪の事態……ユニウス・セブン落着に備え、少しでも被害を減らす為に、迎撃態勢の構築や市民の避難を行っているはずだ。

……はず、だよな？

若干、不安を感じなくもないが……、いや、余程の馬鹿か無能でない限り、無為無策のままでいるはずがなく、必ず、対策を行っているに違いない。

自分の精神衛生の為にも断定的にそう結論付けて、再び、ユニウ

ス・セブンへと視線を戻すと、手前に、徐々に小さくなっていく味方部隊のスラスター光が見えた。

「こうして見ると、オオツキガタって、かなり速いよなぁ」

「そうね、パッツを履いている私達も結構速いのに、段々離されてる事を考えると、速いよね」

航続力ではパッツの方が上なんだが、加速力に関しては変形によってＭＡ形態になり、推進軸を一点に集約できるオオツキガタの方が上なのだ。

「まぁ、それでこそ、即応部隊の主力機動戦力って言えるけどな」

「むー、私達が頑張って作ったマリーネだって、主力を張れる良い機体よ？」

「はは、言いたいのは役割の差だって」

表面上は和やかに会話をして、心に余裕を作りつつ、頭や手は咄嗟の時の判断材料にする為、少しでも情報を仕入れ続ける。

ユニウス・セブンに向うオーブＭＳ部隊、その先頭に位置するオオツキガタ中隊は後少しで、推進部と化しているワイヤー部に到達できる位置に居る。

また、ザフトの任務部隊も巨大な破砕装置を抱えたゲイツＲがユニウス・セブンに取り付き始めているようで、その周辺に新型主力機であるザク・ウォーリアが展開して、支援しているようだ。

後、ザフト任務部隊母艦の後方に、見た事のない艦艇が接近してきているが？

「ワラル」

「はい、何でしょう、ウルブス１」
「ザフト艦の後方に見えるのは？」
「さっき入った情報では、例のザフト新造艦、ミネルバですね」

新造艦と言えば……。

「ミネルバは唯一残ったっていう新型機を出すだろうか？」
「流石にわかりませんが、ミノがミネルバの情報収集を兼ねて、監視しています」

ミノ……即応部隊に配属されているトツカ級で、確か、二十二番艦だったっけ？

「了解、そろそろ、俺達もユニウス・セブン近くッ！　くそっ、先行部隊が攻撃を受けたぞっ！」
「っ！　ユニウス・セブンからの攻撃でイーグル５、９、１３が被弾！　イーグル５と９の撃墜が確認されましたっ！　また、ユニウス・セブン表面に取り付いたザフト部隊もアンノウン（所属不明機）から攻撃を受けていますっ！」

……どうやら、ユニウス・セブンの内部にじっと潜んでいたみたいだな。

「ワラル、アンノウンの把握と、ユニウス・セブンにこいつらの母艦があるかもしれんから、そいつも探してくれ」
「了解！」
「ウルブス２、第二分隊はユニウス・セブンから、ある程度距離を置いて、周辺からの奇襲警戒と狙撃での援護を頼むぞ」
「了解です」
「ウルブス３、パッツを脱ぐ。カウントをっ！」

ッ！　緊急非常用回線にっ！？

「我らの思いっ！　貴様ら如きっ、日和った軟弱者共にっ！　やらせはせんわぁーーーっ！」

49　復讐者の慟哭　―ユニウス・セブン落下阻止戦　1

遭難時等に使用される緊急非常回線から聞こえてきた、その男の叫びは……、苛烈な熱を帯び、気迫に満ちたようでありながら、どこか虚ろなモノを感じさせた。

その事に、瞬間、気を取られてしまった事に気付き、改めて意識を引き締める。

「ウルブス2、余裕があれば、連中の情報収集も頼む」
「了解し「……こちらウワツ！　アンノウン（所属不明機）が使用しているＭＳはジンＭ２型と判明！　ザフトへの問い合わせ結果、該当部隊はないとのことです！　これにより、総司令部はアンノウンをバンディッツ（敵性体）と断定！　トウラン司令より交戦許可が出ています！」……どうします？」
「なら、警戒と索敵をしてくれ」
「了解です」

次は初陣のコードウェル三尉に声を掛けておくかと思った所で、向こうから話しかけてきた。

「ウルブス1、い、今の叫び声は？」
「ウルブス４、今は無視しろ。それよりもパッツのコントロールと周辺警戒に務めるんだ。それに場合によっては制圧火力が必要になる場合もあるからな、他に気を取られている余裕はないはずだぞ？」
「あ……、はいっ、了解しました！」
「……ウルブス2、ウルブス４の事も頼むぞ」

「ええ、わかりました」

さて、レナに任せておけば、三尉の事は大丈夫だろう。

ユニウス・セブンの大地部……居住区画でザフトの任務部隊とバンディッツとの戦闘が始まっているのを見下ろしつつ、また、複雑に入り組んだワイヤー部に敵が潜んでいないかを警戒しながら、マユラに声を掛ける。

「ウルブス3、パッツを脱ぐから、カウントを頼む」
「あれ、みせる相手は？」
「残念な事に、相手が見当たらない。どうも、今日は手早く脱ぐ必要があるらしい」
「色気のない話ね」
「まったくだな」

……ふむ。

「なんなら、手近なワイヤー部にあるフレアモーターにぶつけてくれてもいいぞ？」
「わかったわ。あ、でも、ウルブス1」
「なんだ？」
「そのまま流れて、ワイヤーにぶつかる様な事はしないでね？」
「おまっ、……人の心配する前に、自分の心配をしろっての」
「あは、了解」

なんというか、ここ最近のマユラって、本当に精神的な余裕を持つようになったなぁっと、そろそろ、ユニウス・セブンに取り付けそうだな。

「ウルブス3、離脱する。カウントを」
「了解、カウント、3、2、1」

マユラの声にタイミングを合わせて、パッツから離脱すると、周辺を警戒しながらって、ビーム！

「気を付けろよっ！」
「わかってるっ！」

回避行動を取りながら、直ぐに両肩部の電磁式シールドをビームが飛来した方向へと右手に装備した主兵装……重散弾砲を指向させつつ注意深く観察する。

「ウルブス1へ、敵を発見しました！　俯角一時、水平三時方向に六機！　ワイヤーの裏に隠れています！」

レナの声に導かれてメインカメラでクローズアップしてみると、各部を紫と黒で染色されているMS……直立したトサカが特徴的なジンM2型が六機ほど、ワイヤー部の後方からその姿を覗かせていた。

「ウルブス1からウワツへ、これよりウルブス小隊は交戦を開始する！」

そう宣した後、更に重散弾砲で撃ち返し始めると、さっきまで搭乗していたパッツがフレアモーターの一つに命中して爆発し、瞬間、戦域を照らし出した。

「ウルブス2、まずは取り付くぞ！」
「了解！」

それで生じた閃光と陰影に紛れて、マユラ共々ワイヤー部に取り付き、一旦、敵からのビームが届かない場所に入る。そして、マユラに簡単な作戦を伝える。

「ウルブス3、あの六機を排除する。俺が連中の側面に回りこむから、相手を釘付けにしてくれ」

「わかったわ！」

マユラが相手を窺いつつ、射線が通る場所を探して慎重に機体を動かしている間に、一度、ウワツに声を掛けてみる。

「ウワツ、状況は！？」

「ウワツよりウルブス1へ！　イーグルがフレアモーターの除去を開始！」

「ここ以外に敵はいなかったのかっ？」

「いえ！　ワイヤー部には他に六機ほど、別の敵を確認しましたが、そちらはパンサーが抑えています！」

「ウルブス1、了解っ」

……十二機となると単純に考えて、中隊規模になるなっと、色々と考えるのは後にしておこうか。

「射線確保！　いつでもいけるわ！」

「わかった。カウント、2、1、開始！」

ワイヤー部から距離を置いているレナが牽制射撃を入れる事もあって、行動範囲が制限されているジンM2型に対して、更にマユラがワイヤーの陰からクラスター弾を撃ち始めた。敵であるジンM2型が潜むあたりで小爆発が起き始めたのを確認したのと同時に、素

早く、ワイヤーの陰から陰へと伝いながら、左方向に回り込みつつ接近して行く。
当然ながら、こっちの動きに気がついた数機がビームを発射してくるが、三枚のシールドで遮断している為、それ程の脅威ではない。
ないが……、やはり、攻撃を受け続けるのは精神衛生上、悪いものがある。

「……ウルブス４」
「あ、は、はい！」
「一時的な制圧を頼む。敵の行動を瞬間的に押さえたい」
「りょ、了解です！」

さて、ウルブス４は緊張に飲まれず、上手くやるかな？

「う、ウルブス４よりウルブス１へ、攻撃を開始します！」

さっとモニター上で視線を走らせると、レナ達がいる辺りで小規模な閃光が断続的に確認できた。

その攻撃の最初の一発目が到達するまで、深呼吸を何度か繰り返して、気持ちを落ち着かせて、腹の底に力を溜めていく。そして、最後に一度、大きく息を吸い、初弾が着弾したのに合わせて、ジンＭ２型が隠れている場所に向けて、機体を加速させる。

降り注ぐ小型ミサイルやマユラからの牽制射撃によって、敵の動きを大きく制限して釘付けにしてくれているお陰で、敵が撃ち出してくるビームは極僅かだ。
また、こちらに撃ちだされたビームにしても威力が弱い所為か、

機体前面に指向した電磁式シールドに当たってはメインモニターを極彩色に彩るだけで済んでおり、二度三度とキャニスター弾を撃ち返しながら、強襲を仕掛ける。

「ッ！」

至近で小型ミサイルが着弾した衝撃を受けて、一瞬だけ、息が漏れ出てしまうが……、相手の動きが鈍い内にっ、とっぉ！

ジンＭ２型を操る連中も中々に場慣れしているらしく、降り注ぐ小型ミサイルにも直ぐに慣れたようで、必要以上に気にすることなく、相互連携で十字砲火を形成しようとし始めていた。

その為、再度、傍のワイヤーの陰に隠れ、爆薬入りバルーンを、後退するかのように相手の目に映るように、放出する。

「ぐっ！」

バルーンは陰から飛び出した途端にビームを喰らって爆発を起こすがはぁって、そ、その爆発の衝撃も利用して、ワイヤーの陰から飛び出し、一気に加速を掛けてっ、一番手近の一機にっ、っし、喰らえっ！

……ジンＭ２型の至近でカートリッジの弾が半分になるまで連続して発射し、その手足や頭部をズタズタに引き裂き、胴体にも無数

の穴を開ける。

「こちらウルブス1、敵一機撃破っと！」

慌てたように敵二機がビームを断続的に発射しながら、こちらに向かって接近してきたので、素早く撃破したジンM2型の陰に入り込む。

とはいえ、相手がビーム兵装である以上、撃ち抜かれるのも時間の問題なので、最寄のワイヤーの陰に逃げ込もうとしたら、上方からビームが二本走り、その中の一本が敵一機を見事に貫いた。

その結果、生じた爆発によって、もう一機の敵も大きく弾かれると、側面部からマユラが放ったクラスター弾の網に嵌り込んだのだろう、小爆発に巻き込まれて爆散していった。

「こちらウルブス2、敵一機撃破しましたっ！　残りの三機は大地面方向へと後退中です！」

「ウルブス3、敵一機撃破！　ウルブス1、一度、合流しましょう！」

「ああ、わかった！」

頼りになる戦女神達に感謝の念を送りながら、大きく息を吐き出し、機体をこちらに向かってくるマユラ機がに向わせる。

「ウルブス2、他に敵は確認できるか？」

「こちらからは観測できません」

「作戦の進捗状況は？」

「イーグルの除去作業が順調に進んでいますから、予定通りと言えそうです」

「パンサーはどうなってる？」
「パンサー2が右脚に被弾して、機動力を低下させていますが、小隊自体の戦闘能力は機能しており、そちらも敵を退けたようです」
「……そうか」

……だが、気の所為か、相手の抵抗が弱いというか、スンナリと引きすぎた気がするんだよな。

「ザフトの任務部隊は？」
「今の所、五分の状況ですが、破砕装置の据え付け作業自体はそれなりに進んでいるみたいです」
「わかった。引き続き、警戒を頼む」
「了解です」

さてと、フレアモーターの除去が進んでいるみたいだし、目に見える成果はあがっているかな？

「ウルブス1よりウワツへ、ユニウス・セブンの軌道はどうなってる？」
「こちらウワツ。軌道が逸れ始めてっ！」

な、なんだっ、今の爆光はっ！

「せ、先輩！　ユニウス・セブンの大地面で大規模な爆発を確認！　また、大地面中央にあるエレベータ付近で大規模な推進炎を四つ確認しました！」
「なっ！」

しまった、二段重ねかっ！

「ウワツ！　状況はどうなってる！」

……あれ？

「ウワツ、聞こえているか！　こちら、ウルブス１！」

パンサーと連絡を取っているのかっと、繋がったか？

「ウワツ！　状況は！」

「は、はい！　確認した所、ユニウス・セブンが急速に加速しており、このままでは突入軌道から逸れません！」

「ッ！　……どうすればいい？　このまま、ワイヤー部でフレアモーターの除去を続けた方がいいのか？」

「そ、それは……「ウルブス１、トウランだ」」

っと、この渋いバリトンボイスは、トウラン司令か。

「司令、どう動きます？」

「作戦計画を一部変更する事にした。イーグルとパンサーには引き続き、フレアモーターの除去を担当させる。君達、ウルブスは大地面でザフトの任務部隊を？援護？と急加速の原因を排除してくれ」

「向こうの状況、悪いんですか？」

「いや、それはわからんのだが……」

言葉を濁したトウラン司令の意図を考えてみると……、指揮官の立場として、今のプラントやザフトは信頼できないから、行動の監視と拙い事態が起きそうな時は阻止に動けって所かな。

「いえ、了解です。急加速の原因排除を第一にして、？状況の全てを観測しながら、変化に応じて適切に？行動します」

「……ああ、頼む」

その言葉と共に、ウワツとの通信が切れた。

「ウルブス2」

「はい」

「第二分隊はパッツ搭乗のまま、大地面の上方で情報収集」

「了解です」

「ウルブス3は、俺と一緒に大地面に降りるぞ」

「わかったわ」

マユラの言葉に頷き返した後、地球が接近してきている事に一抹の不安を覚えながら、ビームの閃光が時折走っている、直径約十？にも及ぶ大地面へと推進軸を合わせ、機体を跳び立たせた。

◇　◇　◇

大地面に到達するまでの僅かな時間で戦域を俯瞰してみると、暗色に彩られたジンM2型で統一された敵性部隊とザク・ウォーリアとゲイツRという新旧の主力機で構成されたザフトMS隊との戦闘は、不謹慎な物言いだが、中々に見応えのある展開を見せている。

両者ともに重要物……ザフトは各所に据え付けられたメテオブレイカーを、敵性部隊は中央エレベータ付近にある四基の大型推進装置を守りながら、それぞれが相手を出し抜き、目標を破壊しようとしているようだ。

……まぁ、とりあえずは、と。

「ウルブス2、4、俺達が大地面に降下するまでは援護を、以後は、全力で推進装置を狙え」
「了解！」
「は、はい！」
「ウルブス3は俺と推進装置付近の敵を制圧する」
「わかったわ」

後は、一応、ザフト側に挨拶しておくか。

そう考えて、機体前面にシールドを展開して、大地面に向いつつ、作戦前にオーブ宇宙軍とザフトの間で定められた共同回線を使って、ザフト側に呼びかける。

「……あーあー、ザフト任務部隊の指揮官、聞こえるか？　こちらはオーブ軍のアイン・ラインブルグ三佐だ」
「ッ！　忙しい時に、なにも……オーブのラインブルグっ！？　もしかして、ザフトで白服だった、ラインブルグ隊長ですかっ！？」

この声は……、やはり、名前を聞いた時から予想していた通り、ラウの部隊にいた、イザーク・ジュールみたいだな。

「ああ、そいつで間違いないよ、イザーク・ジュール。お前さんも赤から白に昇格したんだなぁ、おめでとう」
「あ、ありがとうございます……、って、今はそれ所じゃないですっ！　そっちは、オーブ軍の作戦は、どうなっているんです！？」
「順調に行き過ぎているから、お払い箱になったんだよ」
「はっ？」
「イザークっ！　こっちの状況を把握しに来たに決まっているだろうっ！　だから、前から、少し位、冗談をわかるようになれって言

ってるだろうがっ！」
「な、ディアッカっ！「とにかく、話は俺がするから、お前は指揮を取ってろっ！」くっ」

おっと、選手交代か？

「俺はジュール隊副官のディアッカ・エルスマンだ。あんた、ラインブルグ三佐って言ったな」
「ああ」
「うちの隊長は生真面目すぎるんで、冗談が通じにくいんだ、程々にしてくれ」
「ああ、悪かった、気をつける。……で、戦況は？」
「良くない。ミネルバからも増援が来たが、こちらは守る場所が多すぎて、後手に回ってる。もし、手が空いているなら、推進装置を破壊してもらいたい」

ふむ、確かに見た限りだと、中央にある推進装置を取り囲む形で、戦闘の輪が出来ているな。

「自分達の力不足を認めるか……、ザフト隊員にしては冷静で率直だな」
「ははっ、機会があって、一度、ザフト……、いや、プラントの外に出て、色々と見聞きしてきたからな。他の連中と一緒にしないでくれ」
「おおぅ、言うねぇ。だが、その冷静さと率直さ、視野の広さに諧謔（ジョーク）がわかる心があれば、白位にはなれるだろうさ」
「グゥレイトォ！　元白服のお墨付きってか！」
「中央には絶対に入れない、不良品だけどな」
「はっ、不良品上等！　俺もどうせ、不良品さ！」

エルスマンの物言いに、自然、口元が緩んでくる。

……ザフトにも、まだ面白い奴がいるもんだ。

「とりあえず、推進装置の破壊は了解した。元々、そのつもりだったしな」

「ッ！　……それは、地球突入コースから逸れていないってことか？」

「あっと、まだ、情報を把握していないのか？」

「ついさっきまで連中とやり合っていてね」

「そりゃ大変だったな。まぁ、後で確認してもらえばわかると思うが、オーブ軍は引き続き、フレアモーターを破壊して、重心バランスを崩している。だが、例の推進装置で加速しているから、地球突入軌道から逸らせるか微妙な所だ」

「ッ！　くそっ、わかった！　こっちはメテオブレイカーを死守する！　推進装置付近には、ミネルバ隊の連中が排除に動いているから、余裕があったら、元白服って縁で、そいつらの？面倒？も頼みたい」

「まぁ、余裕があればな。じゃあ、エルスマン、そっちは任せたぞ」

「ああ、あんたも頼むぜ」

ザフト側との通信を切り、周囲というか流れ弾に気を付けながら、機体の姿勢を制御し、両足を大地面へと接地させた。

……目指すは、推進装置の破壊だ。

50　復讐者の慟哭　―ユニウス・セブン落下阻止戦　2

ユニウス・セブンの大地、その中央にあるエレベータ基部の周りに埋め込まれ、ノズルを覗かせた四基の推進装置から、光の帯が断続的に噴出している。

これらの影響で更にユニウス・セブンが加速させられて、状況が切迫し始めているが……、逆に考えれば、あの四基の内一基でも破壊できれば、推進軸が狂って、地球への突入コースから逸れる可能性が出てくるはずだ。

「ウルブス3、時間がないようだ、前進を開始する。流れ弾には気を付けろよ？」

「了解」

流石のマユラも声音が固くなっているようだ。

「何、訓練通りにやればいいんだ。マユラ、お前はそれだけの訓練をしてきているんだから、自信を持て」

「……うん、でも、過信はするな、でしょ？」

「そういうこった。……行くぞ？」

「ええ！」

マユラからの返事を聞いた後、機体を滑らせるように、かつては人が生活を営んでいた小さな世界を突き進んでいくが……、核による大破壊を受け、宇宙と言う厳しい環境に晒された上、今もまた、戦場と化している所為か、往時の姿を想像する事ができない。

そんな感慨を抱きつつ、ゲイツRやザク・ウォーリアを使用するザフト任務部隊とジンM2型を操る敵性部隊とが激戦を繰り広げる中を縫うように進んでいると、通信系からレナの声が響いてきた。

「こちら、ウルブス2、ウルブス1、聞こえますか？」

「聞こえてる、どうした？」

「大地面内部に推進装置本体がある事に加えて、ノズルから噴出しているプラズマの影響で、上方からの攻撃が通りません」

……ということは、下、或いは、側面からノズル部の破壊を目指すしかないって事か。

「わかった。なら、俺達の上方で援護して、敵の頭を押さえてくれ。そろそろっと！」

大破壊を耐え抜き、姿形を残していた建物の陰から、実体剣……というよりは刀に似た長大な近接武器で素早く切り込んできたジンM2型を、機位を少しずらす事で回避し、右斜め後方で追随しているマユラに対処を任せる。

そのマユラだが、振りぬいた姿勢で流れたジンM2型に急接近し、すり抜け様に右手の篭手から引き抜いたビームサーベルで胴体を切り裂いたようだ。

……むぅ、マユラも俺以上にセンスあるよなぁ。

「敵一機撃破っ！」

「ウルブス3、確認したっと、ウルブス2、すまんな、話の途中で」

「いえ、危険の排除を優先してください。……では、私達は、上方から第一分隊を援護しますね？」

「ああ、頼む。だが、上方は遮蔽物がないから、狙われやすいはずだ。十分に気を付けろよ？」
「ええ、了解です」

さて、見えてきた……な？

「なぁ、ウルブス3……、ザフト機と敵性機以外にも、別の機体があるように見えるんだが？」
「……ほんとだ、ウィンダム以外は見た事がない機体だけど、いるね」

ザフト機らしき、紅ザクと白ザク、それにフリーダムに似た感がある、鮮やかなトリコロールカラーのＭＳが五機程のジンＭ２型と戦闘を繰り広げる向こうで、黒、緑、青と、どこかで見た事があるようなカラーリングをした所属不明の三機とピンクというか赤紫で彩られたウィンダムの姿があり、これまたジンＭ２型八機と戦闘状態にあった。

「どうして、こう、不測の事態ってのは立て続けに起きるんだろうなぁ」
「でも、今って非常時なんだから、逆にそれが普通なんじゃない？」
「言われてみれば、確かにそうだな」

って、いかん、真面目な話、時間が限られている以上、即決しないと。

「ウルブス1よりウワツ！　ザフト以外の機体を四機確認した！　そちらに何か情報は入っているか！？」
「あっ、はい！　ミネルバから届いた情報だと、ミネルバ隊が追跡していたアンノウン（正体不明機）のようです！」

おいおい。

「……その？ドラ猫？が、何故ここに？」

「それはわかりませんが……、先程、ザフトからの通信で、ユニウス・セブンにいた敵性機に攻撃を仕掛けているとの連絡を受けていますので、一時的な休戦状態にあるのでは？」

「なら、？ドラ猫？がまともだったって事にしておこう。……それで、ユニウス・セブンのコースは逸れ始めているか？」

「僅かずつ、逸れ始めていますが……」

「了解、頑張るよ」

さて、？ドラ猫？にどう対処するかだが……、まぁ、目的は同じみたいだし、一度、非常用回線で？ドラ猫？に呼びかけてみるか。

「あーあー、どっかのおばちゃんが好みそうなカラーリングのウィンダム、聞こえるか？」

「なっ！　俺の好みの色にけちをつける奴はどいつだぁっ！」

なんか、柔らかそうでいて、芯の強そうな男の声で突っ込みが返ってきた。

むぅ、あくまでも勘なのだが……、こいつとは、いい友達になれそうだ。

「いや、表現が悪かったな。それで、こちらはオーブ宇宙軍所属のアイン・ラインブルグなんだが……、できれば、名前、聞かせてもらえるか？」

「たくっ、ああ、俺はム……、いや、ネオ・ロアノークだ。その黄色い派手な機体色に、その名前ってことは、あんたが黄狼さんかい

？」

「ははっ、その異名を知ってるって事は、プラントやザフト以外の出身の可能性大ってか？」

「ッ！　あんたにゃ、下手な事、話せんな」

「いやいや、ペラペラと話してくれた方が、こっちは色々と探れて、楽になるんだが？」

「言ってろっての。……で、用件は？」

「お前さん達が、ユニウス・セブンの落下阻止に動いているなら攻撃しないから、そっちも攻撃しないでくれ」

「了解了解、俺達もこんなもんを地球に落されたら堪らんからな、ちょっと出張って、落下阻止に動いているんだよ。まぁ、連携しての協力は、流石に無理だろうが……、結果的に協力できるようにする」

「あんた、話が早くて助かるわぁ」

「……えらく、実感が篭った言葉だな」

「……ザフトで散々、苦労したからさ」

「ははっ、そいつは大変だ「ネオっ！　時間がないよっ！」っと、はぁ、何もこんな時に……」

ネオ・ロアノークは偽名である可能性が大で、？ドラ猫？一味の一人は女っと。

「さてと、こっちも行動を始めるが、流れ弾に中るなよ？」

「そっちこそな！」

通信が切れたが……、偽名だろうけど素直に名前を教えるなんて、面白い奴だったなぁって、時間が押してるみたいだし、次はザフト側にっと。

「ミネルバ隊所属機へ、こちら、オーブ宇宙軍所属のアイン・ライ

ンブルグだ。これから推進機の破壊に動くが……、間違っても攻撃しないでくれよ？」
「ッ！　オーブのラインブルグ？　ラウの友人だった、ラインブルグさんですかっ？」

およ？　この声は、確か……。

「もしかして、バレル君か？」
「ええ、レイ・ザ・バレルです」
「なら、こっちも話が早そうだな。俺達が突入して、推進装置を何基か破壊するから、一時的に敵を抑えてくれないか？」
「わかりました。一時的に制圧しますので、突入をお願いします」
「ああ、頼む」

……むー、不思議な事に、何故か、ラウに背中を預けていた時のような感覚を覚えてしまうなぁ。

「ウルブス３、突入準備」
「ええ、いつでもいけるわ！」

一時的に前線維持を紅ザクとトリコロールカラーのＭＳに任せたらしい白ザクが後方に下がると、背部スラスター上部を前方に折り、内部から小型ミサイルを次々に発射し始めた。

白ザクから発射された小型ミサイルは推進装置までの戦域に降り注ぎ、そこにいたジンＭ２型に回避行動を強いて、大きく突入路が開いた。

「っし、突入！」
「了解！」

両肩部のシールドをそれぞれ斜め前に展開させる事で、胸部バイタルパートを守りつつ、盛んにプラズマを噴出し続けている推進装置を目指す。

途中、ミネルバ隊の三機と行き会うが、敵の拘束で忙しそうなので声を掛けず、そのままパスしていき……。

「っ！　まだいるのかよっ！」

……後少しで、推進装置を破砕榴弾の射程に収めようとした所で、二機のジンＭ２型に行く手を遮られた。

次々に撃ち出してくるビームの雨を回避と三枚のシールドで防護しつつ、突破する為の隙を窺うが……、どうも排除した方が早そうだ。

「マユラ！」
「わかったわ！」

その言葉と共にマユラが発射したクラスター弾が敵二機へと凶暴な爆裂の網を投げかけるが、やはり、ベテランめいた動きで制圧範囲から回避して、ビームで反撃してきた。

「ッ！　敵一機撃破しましたっ！」

もっとも、回避した所で、一機は俺が時間差で撃っていたキャニスター弾の餌食になり、もう一機は上方で支援しているレナの狙撃されて、撃墜される事になったがな。

だが……、本当に、敵はこれだけなんだろうか？

「ウルブス２、他の敵は見えるかっ！」

「今、観そっ！　ウルブス４、回避っ！」

むむっ、向こうも忙しそうだな。

情報がない事に不安を覚えていると、俄かに、？ドラ猫？リーダーの声が通信系から飛び込んできた。

「すまんっ！　黄狼！　さっき、そっちに三機行った！」

原因と思しき内容だけに、素早く非常用回線も開き、大きな声で文句を言う。

「おまっ！　ちゃんと抑えろって！」

「無茶言うなっての！　こっちには手強いのが、まだ五機も残ってるんだぞ！」

「それでもだっ！　どこの犯罪組織の所属かは知らんが、給料貰ってるなら、仕事しやがれっ！」

「ッ！　くそったれっ！　俺だって、好きでこんな組織に所属してるんじゃねーよっ！」

ふむ、？ドラ猫？リーダーは、所属組織に不満と……、って、俺、なんで、こんな冷静なんだろう？

「わかったわかった。とにかく、仕事してくれ」

「くそっ！　わかったよっ！」

……熱いねぇ。

「……ウルブス1、人間、色々とあるんだね」
「みたいだな。しかし、真面目な話、敵さん、一体、何機いるん」
ウルブス1！　上っ！」ッぁっ！」

上方から落下してきたジンM2型が振り下ろした刀を回避できないと咄嗟に判断し、左肩部のアタッチメントからシールドを脱離させ、刀にぶつけることで僅かな時間を稼ぐ間に、反射行動を後押しするべく左側面のバーニアを全開にして、右方向に回避する。

「アインさんっ！」
「大丈夫だっ！」

マユラに応えていると、通信系から、先程、聞いた声が大音声で響いてきた。

「貴様ら如きにっ、やらさせはせんわーーーっ！」

ッ！

突進してきたジンM2型が振り上げた白刃を、機体を右斜め後方に下げることで回避する。

「ウルブス3、俺がこいつを抑える！　先に行って、破砕を優先しろ！」
「ぅくっ！　りょ、了解！」
「やらせは「俺の女の尻を追うんじゃねぇよ！」ぬうっ！」

マユラの後を追おうとしたジンM2型に向けて、頭部機関砲を発射し、足止めを図る。

「貴様っ！　この戦場で、ふざけた事をっ！」
「はっ、それはこっちの台詞だ！」

反撃の狼煙代わりに重散弾砲をぶっ放すが……、回避が上手いっ！

「ようやく戦争が終わって、世界が落ち着きつつあるってのにっ！　こんなふざけた事、するんじゃねぇよっ！」
「黙れッ、ラインブルグっ！」

……俺の名前を知っている？

「ザフトの一員として、白服としてっ、先の戦争を戦いっ！　我らと同じく、親しい朋友を亡くしてるにもかかわらずっ！　仇を取る事すら考えずにっ、ザフトを去った貴様のような軟弱者にっ！　邪魔などさせんっ！」

その言葉と共に、回避行動をとっていたジンM2型が、鋭角による軌道変更と急加速でもって、接きっ速いっ！

再度、下段から振り上げられた刀で重散弾砲の銃身を切り裂かれたので、次の切り返しが来る前に頭部機関砲を撃ちながら、役立たずになった残骸も投げつけて、バーニア噴射で後方に下がりながら距離を取る。

「馬鹿野郎っ！　軟弱なのは、てめぇらだっ！！　戦争で戦場に立つ以上……、殺し殺される場に立つ以上、誰だって死ぬ事が、敵を殺すように、仲間や自身が殺される事だってありえるのは当たり前だろうがっ！　それに、忘れるなよ？　てめぇらも前の戦争で生き残る為に、敵であった連合軍の兵士を、誰かにとって大切な誰かを

殺している事をっ！」
「ふんッ！　ナチュラルを殺して、何が悪いっ！」

その言葉、コーディネイター至上主義者の定番だよなぁ、なんて事を内心で覚えつつ、更なる時間稼ぎの為に、ダミーバルーンを放出して目晦ましを仕掛けた後、腰部マウントのビームアサルトを右手に装備する。

「ナチュラルだろうと、コーディネイターだろうと、人である事に違いはないんだよっ！　ついでに言えばなっ、戦争での人殺しは戦争って非常事態だからこそ、国家が許しているだけであって、本来はっ、人の可能性を奪う以上っ、悪い事にっ、違いはないっ！」
「何を戯言をっ！　所詮、新種たるコーディネイターと旧種であるナチュラルは相容れぬ存在っ！　先の戦争はっ、種としての生存競争でもあったはずだっ！」
「で、その人類の新種様が……、地球に大破壊を引き起こすような、こんな馬鹿な事をするのが新種様ってかっ！　進化した人類がこんな野蛮な事をするわけないだろうがっ！　賢しそうに御託を並べるんじゃねぇ、この似非新人類っ！」

機体周辺に漂う全てのバルーンを一息に切り裂いたジンＭ２型へと、ビームアサルトの速射モードで射撃を開始するが……、目前のジンＭ２型は曲芸の如き動きで射線からの逃れてみせ、初弾だけが僅かに左腕装甲を削っただけで残りは全て回避されてしまった。

「ぐっ！　我らの思いを侮辱するかっ！」
「人類の新種旧種云々を持ち出した時点で、どうせ碌なものでもないだろうさっ！」
「ほざいたなっ！　……ここでっ！　この小さき世界への非道な攻撃でっ、無残に散っていった命の嘆きを忘れっ！　何故、核を放っ

た者等と共存しっ、この偽りの平和を謳う世界で、のうのうと生きて笑うっ！　そのような仇や軟弱な輩をっ！　そのような欺瞞の世界をっ、容認せよと言うかっ、貴様はっ！　答えろっ！　ラインブルグっ！」

「はっ、その痛み、ザフトに所属していたなら、甘んじて受け入れんと駄目だろうよっ！　忘れたのかよっ！　先の戦争、先に手を出したのはザフトっ、相手を見縊って、ここにっ、このユニウス・セブンに核攻撃を許してしまったのもっ、あの時、戦闘に参加していた俺達！　そう、ザフトだったはずだぞっ！　自分達が守りきれず、引き起こした失態も反省しないで、てめぇこそ、何をほざいてやがるっ！　今、やってることだって、ただ単にっ、てめぇらの内に溜まった憎悪をっ、吐き出したいだけだろうがっ！」

ッ！

……推進装置が連続して爆発したってことは、マユラがやったのか？

「ウルブス３よりウルブス１へ、推進装置三基の破壊に成功っ！」

「こちらウルブス２！　ウワツからの報告で、ユニウス・セブンは地球への衝突コースから逸れ始めているとのことです！」

その言葉を聞き、若干の安堵を抱いた瞬間だった。

「今更っ！　やらさせはせんわぁーーーー！」

これまでにない気迫に満ちた言葉と共に、足元の小さな世界が大きく震えた。

51　復讐者の慟哭　―ユニウス・セブン落下阻止戦　3

ユニウス・セブンの大地が激しく振動し始めたかと思うと、中央エレベータから四方向へと亀裂が広がっていき、そこから爆炎が吹き上がった。

「なっ！」

「元より、我らは決死いっ！　貴様らの思い通りにはさせんっ！」

「先輩！　大変です！　ユニウス・セブンが大きく……、大きく四つにっ！　わ、割れていきます！　ッぁ！　こ、このままだと、最低でも三つが、落下軌道コースに乗っきゃぁあ！」

「レナっ！」

「……だ、大丈夫ですっ！　でも、ウルブス４とパッツがっ！　飛んできた破片で損傷！　あ……、ユカリちゃんも怪我をっ！」

「ッ！　援護はもうしなくていい！　回避に集中してろっ！」

「は、はい！」

……やられたっ！

推進機の破壊で突入コースを逸らされそうな時に備えて、ユニウス・セブンの内部に爆薬を仕掛けていやがったのかっ！

「三段重ねかっ！」

「ふふ、ふはははははっ、たとえ全てが無理だとしても、これで少なくとも三つの断片は地球に落ちるっ！　貴様らの頑張り過ぎのお陰でなっ！」

「あ……、わ、私……の、所為？」

ぁッ！　まずい、マユラが動揺してる。

目前のジンM2型を警戒しつつ、マユラに大声で呼びかける。

「馬鹿っ！　ウルブス3！　相手の戯言に耳を貸すなっ！」

「で、でもっ！」

「気をしっかり持て！　こんな事、誰も予測できていないし、当然、お前の責任でもないっ！　マユラ！　お前の所為じゃないんだっ！」

「でも！　でもっ！　わ、私がっ！　わたしがっ！」

くそっ、作戦が成功したと安心した所を思い切り衝かれた所為で、まともに思考が働かなくなっているのかっ！

「ウルブス2！　……レナ！」

「あ、はい！」

「マユラが精神的なショックを受けて、自失しているっ！」

「えぇっ！　だ、大丈夫なんですかっ！」

「わからんっ！　だが、今のマユラじゃ、戦闘行動を取る所か、回避行動すら怪しい！　下手すりゃ、破片の直撃を受けるか、落下に巻き込まれる危険があるっ！」

「わ、わかりました！　何とか、回収します！」

「すまんが、頼むっ！」

「了解です！」

レナに任せれば、何とか……、いや、俺と一番長く苦楽を共にしてきた戦友なんだ、万難があったとしても、絶対にマユラを回収してくれるだろう。

そんな頼りになる戦友の相棒である以上、俺も、レナがマユラの

回収を終えるか、ザフトが破砕作業を始めるまでの時間稼ぎをして、かつ、落下コースに乗ったままのこの破片をなんとかしないと、顔向けできないな。

それにしても……。

「こんな馬鹿げた事を決死の覚悟でするなんて……、狂ったか？」

「この場所で、家族を……、大切な者達を失った我らの悲しみ……、貴様らには、いや、他の者達にはわかりはせぬ」

「大切な者達を失った我らの悲しみ、か……」

こちらの動きを警戒するように対峙したまま、静かに語った一人の男の言葉を反芻して、思う。

大切な者を失った悲しみは……、特に他者によって唐突に奪われた時の悲しみは、簡単に癒える事はないというか……、癒える事があるのかと思う程に、想像を絶するものなんだろう。

いや、俺だって、レナやマユラ、ミーアや親父といった家族、パーシィやベティ、シゲさんやおっさん連中みたいな仲間の命を、突然に、理不尽な事で、誰かに奪われていたら、目の前の復讐鬼のようになっていてもおかしくはない。

……だが、しかしだ。

「あの戦争で、大切な者を理不尽に失ったのはさ、お前らだけじゃないんだけどなぁ」

ユニウス・セブンへの核攻撃に対する報復と被害者遺族達の憎悪を晴らす為の手段として実行された、エイプリル・フールの愚行……地球へのニュートロンジャマー無差別散布は地球上のインフラに

深刻な被害をもたらし、地域や国によってその数はまちまちだが、結果的に十億以上の人命を奪う事になった。

当然の如く、生み出された十億以上の怒りと悲しみ、それに怨みは既にプラントという国家とコーディネイターという存在に向けられているというのに、更にユニウス・セブンなんて物を落されたら、間違いなく、その膨大なエネルギーは目に見える形で噴出するだろう。

「なぁ、ようやく落ち着き始めた世界に、また戦争を引き起こして、いったい何になる？　結局は、誰もが何かを失って、お前達みたいな存在を新しく生み出すだけなのに……」

「……ぁあ、ああっ！　わかっているとも！　我らがしている事が、ただ我らの憎悪を晴らす為の手段に過ぎぬこともっ、我らの憎悪が消えたとしても、新たな憎悪が生み出される事くらいっ！」

「だったらっ！　何故っ！」

「我らが人だからだっ！」

「ッ！」

……ラウよ、お前が言ってた通り、人って、悲しい生き物だよなぁ。

「……もう、今更って事か」

「貴様のような者と今少し早く話をしていたら、我らも考え方を変えた可能性もあったかもしれん。しかしっ、最早、遅い！　遅いのだっ！　我らは……、ここで憎悪を晴らしっ、我らが愛する者達の墓標と共に潰えるっ！」

「なら、俺は……、それを力尽くで止めるまでだっ！」

「笑止っ！　我らの思いっ！　その程度の意志で砕けると思うなっ！」

遮蔽物に隠れていたジンM2型が刀を構えつつ、高機動で動き始めたので、それに合わせて、速射モードでの射撃を加えながら、こちらも動き始める。

射線から僅かに逸れながら、急速に距離を詰めてくる機動は……、相手の名前は知らないがが、ザフトでも有数の腕を持つ、ベテランだったのは間違いない動きって、不味いな、機動に翻弄されて、もう、彼我の距離がほとんどっ！

「ッ！」

まったく……、見事なまでに機体を操って、得物の差をものともせずに攻撃を仕掛けてくるから、本当に溜まったものではない。

今度は距離を詰められないようにする為、慎重に距離を維持し、こちらが一方的に攻撃しやすいポジションを取るべく位置取りに努めている最中、ふと、ジンM2型の背後を見ると、ユニウス・セブンという一つの小さな世界から四つの巨大な岩塊と化した中の一つが、地球に向かう軌道から大きく逸れて行くのがわかった。

「ウルブス2、ウルブス3は！」

「ウルブス3の回収に成功しました！　ですが、ウルブス4が損傷している影響もあり、ウルブス1の援護を行える状態ではありません！」

「それは構わない！　後、ウワツから何らかの命令か、今現在の作戦状況についての情報は入ったか？」

「はい！　ウワツからの情報では、宇宙軍総司令部はオペレーション・トラクターが失敗したと判断、オペレーション・クラッシャーを発動しています！」

オペレーション・クラッシャー……地球軌道上に展開している第一艦隊での全力攻撃かっと！

ジンM2型が擦れ違い様に振りぬいた刀が右肩部の電磁シールドを掠ってしまったようだ。

「ザフトはっ？」

「ザフト任務部隊は破砕準備を進めていますが、未だにバンディッツの妨害があり、一部でメテオブレイカーが破壊されているみたいです！」

「連中は決死……一種の死兵である以上、そうなるのも当然だろうな」

「ザフト側に、その事、伝えますか？」

「いや、向こうだって気付いているはずだ。それよりも、レナ」

「はい」

「マユラ達を連れて、帰艦しろ」

「ッ！　先輩一人を残して「お前は小隊？2なんだからさ、まず、戦闘継続が難しい二人を無事に帰還させるんだ」でも……」

……ジンM2型の動きや時折、断続的に続いている振動の影響で弾け跳んでくる岩石の断片に気を配りながら、度重なる射撃でエネルギー残量が少なくなったビームアサルトのカートリッジを交換する。

「何、俺もこいつを何とかしたら、いつも通りに帰艦するさ」

「……わかり、ました」

「ああ、二人を頼むぞ」

「……了解です」

不承不承といった感があるレナと通信を切ると、続けて、？ドラ猫？リーダーのネオなんとかから通信が届いたので、こちらも非常用回線をオンにする。

「黄狼さんよ、悪いが俺達は引き揚げる」

「ああ、お疲れさん」

「……責めないのか？」

「いや、何でよ？　お前さん達がどこの所属で、何者かは知らんが、訳のわからん状況の中で、危機回避の為に動いたんだ。その思いが本物だったって証拠だろうし、実際、助かってる。だから、感謝こそしても、罵倒することはないさ」

「……すまんな。だが、引き揚げた後からでも、何かで支援する」

「おお、助かるよ」

「……生き残れよ」

「当たり前だろう！　可愛い恋人達を遺して死ねるかってんだ！」

あれ、なに、この沈黙。

「……お前、今、恋人？達？って言わなかったか？」

「ああ、言ったぞ」

「それは惚れた女と連絡が取れない上、周りにもちょっかいを出せない俺に対する厭味かっ！　やっぱ、お前、ここで死んどけっ！」

「おうおう、男の嫉妬は心地良いのぅっ！」

「はっ、それだけの憎まれ口を叩けるなら、こんな所では、絶対に死なんだろうさ！」

「そっちこそ、我慢しきれず、他の女に手を出して、後で本命に刺されんようにな！」

「言ってろっての！　じゃあな！」

「ああ！」

……そう、湿っぽい別れの挨拶なんて、いい歳した男同士では似合わんさ。

そんな思いを胸に、何とか大地面にしがみ付いている建築物の残滓を遮蔽物として利用しつつ、モノアイでこちらを捕らえ続けているジンM2型の側面へと回り込むべく、機体を操っていると、相対している敵手から通信が入ってきた。

「ラインブルグ、貴様に問いたい」

「……何だ」

「この欺瞞に満ち、偽りの平和を謳う世界に価値はあるのか？」

「……あるだろうさ。たとえ世界に欺瞞に満ちてようが、それは人が人である以上……、本音と建前がなければ、人の社会がスムーズに回らない以上、必ずついて回るモノだし、当然とも言えることだ。それに、偽りの平和を謳っていても、現実、そこに争いがないだけで、今を生きる人の不幸が減るのもまた、事実だしな」

「ならば、その欺瞞と偽りの平和の陰で、嘆き悲しむ者達はどうすればいいのだっ！　同胞の死を忘れ、過去のものとして扱う陰でっ、失ったモノの大きさに嘆く者達はどうすればいいのだっ！　ただ、忍従せよと!?　ただ、「あんたっ！　いったいっ！　なんなんだーーーーーっ!!!」ぬぐぉぅっ！」

猛烈なスピードで突如として現れたミネルバ隊所属のトリコロールカラーのMSが、件のジンM2型に、何故かビームサーベルでの攻撃ではなく、体当たりを伴なったシールドでの打突を喰らわせた。

見事なまでにもつれ合いつつ、吹き飛んで行くジンM2型とトリコロールカラーのMS……って、いかん、一瞬、呆けた。

何とか、頭を再起動させて、その後を追う間も、通信系から声が

響いてくる。

「ふざけんなよっ！　前の戦争で、家族を失ったのは、あんただけじゃないっ！　俺だって！　いや、もっと多くの人がっ！　大切な人を、突然、亡くしてるんだよっ！」

「っ！　小童っ！」

「でも、その悲しみを乗り越えてっ！　何とか、前を向いてっ、生きようとしてるのにっ！　あんたっ！　あの、心にポッカリと穴が開いた苦しみを経験しておいてっ！　まだ、俺達みたいなのを生み出そうとしてるのかよっ！　そんなことっ！　絶対にさせねぇーーっ！」

……いや、今の機会に、破砕作業を指揮しているジュールに連絡を入れてみるか。

「こちら、オーブのラインブルグ。ジュール隊長、聞こえるか？」

む、忙しいのか？

「こちら、ラインブルグ、ジュール隊長、聞こえるか？　破砕作業の進捗状況を教えてもらいたい」

「……こちら、ジュール！　作業は進行してますがっ、活動限界が近い！　推力が弱い一部の機を後退させました！」

「ッ！」

活動限界が近いって……、いつの間にか、そんなに時間が過ぎていたのか。

「破砕開始は？」

「……今です！」

そのジュールの言葉を裏付けるように、俺が立っている岩塊と隣の岩塊に閃光が走り、亀裂が広がって行くって、おい。

「もう一つはどうなってるっ！？」

「……申し訳ありません、メテオブレイカーどころか、部隊自体が全滅させられました」

……なんてこった。

「そいつへの対処は、どうするんだ？」

「ミネルバが共に大気圏突入し、陽電子砲を断続的に発射して、破砕に務めます。また、オーブ艦隊もぎりぎりまで攻撃を仕掛けるとの連絡が入ってます」

「その分、残り二つに対する攻撃が弱くなる可能性が高いか。……わかった。これ以上、ここにいても、攻撃の邪魔になるばかりで、俺達の力は尽きたってことだな」

「……はい」

「いや、悪い、愚痴になった。では、ジュール隊長、時間を取らせて悪かった。お前さんはお前さんの責務を果たしてくれ」

「ええ、わかってます」

その返事を聞いて通信を切ったが……、どうする？

俺が接地していた岩塊はあまり破砕が上手くいったとは言えないというか、今現在、乗っかっている場所も含めて、周辺には下手をすれば戦艦並み……、いや、それ以上の大きさの物が三、四個は存在しているようだ。

……だが、このまま、この場にいても、もう何も出来ない上、活

動限界も近いし、引き揚げた方が無難だろう。

そんな事を考えていたら、先程、横槍を入れてくれたトリコローカラーのＭＳのパイロットと思しき若い声が通信系に飛び込んできた。

「どうしてだよっ！　どうして、そう簡単にっ、戦争なんて引き起こせるんだっ！　こんな風に勝手に戦争を引き起こしてっ！　俺は、俺達は、ただ普通に暮らしていただけなのにっ！　いきなり、戦争に巻き込まれてっ！　父さんも、母さんもっ、マユもっ！　突然、戦争に巻き込まれて死んだっ！　どうしてっ！　……どうして、俺はっ！　俺は……、守る事が……できないんだよ……」

その悲嘆に満ちた言葉を聞き……、かつて、エイプリルフール・クライシスを引き起こした後、胸の内で誓った事を思い出した。

……。

やはり、現在進行中で、馬鹿げた事が進んでいる以上は……、持てる力を振り絞り、最後まで努力しないといけないだろう。

もちろん、下手をすれば、死ぬかも……、いや、死ぬ可能性の方が高いかもしれないけど……。

……。

……死にたくないなぁ。

……。

でも、あの日に見た光景とあの時に感じた思い、何より、自分で心に決めた決意から背を向けて、ここで逃げるわけには……、いかないよな。

52　復讐者の慟哭　―ユニウス・セブン落下阻止戦　4

先行しているユニウス・セブンの断片群が徐々に赤く染まりながら尾を引き始めた。その事が地球大気圏への突入と摩擦熱が発生し始めている事を教えてくれる。

そんな現在の状況を頭の片隅に放り込んだ後、視線を走らせて、ジンＭ２型とトリコロールカラーのＭＳを探す。

……いた。

亀裂が走るも砕け切っていない大きな断片……周囲四百メートルは軽く越える岩塊の上で、二機共に激しい機動戦を繰り広げているようだ。また、その戦場の向こうからはミネルバ隊のＭＳ……、白ザクと紅ザクが接近してきている。

それらを把握しながら、トリコロールカラーのＭＳに呼びかける。

「ザフトのっ！　引けっ！　活動限界だっ！」

「うるさいっ！　オーブ軍は「いいから引けってんだっ、坊主っ！　てめぇを心配して、仲間が迎えに来てるんだぞっ！」ッぁ！　…　…レイ、……それに、ルナまで」

一瞬、動きが鈍くなったトリコロールカラーのＭＳ……いい加減、面倒だから、?トリコロール?と入れ替わる形で、件のジンＭ２型へとビームアサルトで攻撃を仕掛ける。

そして、ジンＭ２型もまた、こちらの意図を汲んだのか、まるで

殺陣を示し合わせていたかのように、明らかに動きが鈍った？トリコロール？へは攻撃を加えず、素早く距離を取って、別の場所へと誘いをかけてきた。

「悪いな、お前の相手は俺だ」

「ふはっ、道連れにするのが小童では不足していた所だっ、貴様で丁度良いっ！」

「ッ！　あんたらっ！」

「ほれ、坊主はさっさと行け。ここからは大人の時間だ」

「運が良かったな、小童！」

？トリコロール？が再び俺達の後を追おうとした所を、バレルの白ザクと同僚の紅ザクが押さえ、全力噴射で、落ち行く大地から離れて行くのがモニターの隅に映っていた。

「……お前、さっきの、あの坊主の言葉に、心を動かされただろう」

「……ふんっ、ただの気紛れに過ぎん」

だんだんと身体に重圧が……というよりは、自分の存在そのものが巨大な存在に吸い寄せられているような錯覚を覚えつつ、本格的な攻撃を……、ジンＭ２型の進路を塞ぐように、ビームを速射する。

だが、その全てをこれまで以上の神憑った動きで回避され、それどころか、あっという間に距離を詰められてしまい、手に持った刀で袈裟懸けに切り付けてくる。

こちらも咄嗟に回避行動を取るには取ったのだが、斬撃範囲を少し読み誤ったようで、さっきの重散弾砲のように、ビームアサルトを銃身の中程で断ち切られてしまった。

「おまっ！　さっきもやってくれたが、ＭＳの武器って、高いんだ

ぞっ！」
「ほざけっ！　我が必殺を何度もかわしておいて、よくも抜け抜けとっ！」

とにかく、刀を何とかしようと、半ばで断たれたビームアサルトを投げつけつつ、頭部機関砲で射撃を加えるが……、シールドで防がれてしまった上、更に攻撃をぉぉぉっとっ！

「ぬぅっ！　伊達に白服を纏った訳ではないかっ！？」
「お前こそ、なんで無名のままだったんだよっ！？」

得意技らしき下段からの振り上げ斬撃をかわして直に噴射を掛け、右肩部シールドを打撃面にして、ジンM2型の側面へと体当たりを喰らわせる。

「ぬぉっ！」

繋ぎっぱなしの非常回線から相手の呻きが聞こえてきたが無視し、姿勢が崩れた相手の頭部……モノアイ部へと右腕部の篭手からニードルを撃ち込んで、メインカメラや各種センサーを破壊する。

「貴様ッ！」

それでもまだ、相手が攻撃態勢に移ろうとするので、今度は右手指からトリモチを射出して、刀を持った右腕部の間接を固着させ、同時に左手にビームサーベルを装備して、下半身と右腕を刈り取る。

「くっ、嬲るつもりかっ！」
「んな、趣味の悪い事するかっ！」

そんな答えを返しつつ、更にトリモチを射出して、左腕や残った右腕部の主要な間接部、ついでに、爆発されては叶わないから、切断面にも固着させていく。そして、逃げられないように大地面にも接着させる。

「何故！　一思いに殺さんっ！」

「お前は捕らえて、裁きの場に引き渡すんだよ」

「ふっ、ふはははっ！　まさか、大気圏を無事に抜けられるとでも？」

「……通常なら抜けられんだろうが、足元にこれだけ大きな遮蔽物があるんだ、抜けられるさ」

……もっとも、途中で、この岩塊が摩擦熱によって分解したり、岩塊全部が火の玉になったり、周辺に発生するプラズマに機体が持たなかったりしたら燃え尽きて終わりだし、例え、無事に抜けたとしても、推進剤が足りなくて減速に失敗したり、姿勢を崩したりしたら、地上六十階建てのビルからノーロープ・バンジーを試みたカエルのようになるけどな。

「くく、生かして裁く等、甘いな」

「馬鹿言うな、そんな甘い考えじゃない。お前を裁きの場に引き出す事で、今回の件で発生する新しい怨念を、世界から溢れ出る憎悪を、少しでもお前に集約させる為だ。そうする事で、世界からガス抜きして、全世界規模での全面戦争にならないように回避に努めるのさ。お前は、お前が言うこの欺瞞に満ちた世界から新しく汲み出された憎悪の中で……、お前と同じ思いを抱いた人々から裁きを受けるんだ」

「ッ！」

「そして、自分達が為した罪業と今から犠牲になる人達の怨念と被害にあう人達の憎悪を一身に背負って、死ね」

……そう、こんな非道を為した以上、安易な死は、絶対に許さない。

「……くく、くははははっ！　それが貴様の本音か！」
「ああ、この場に二人しかいないからな、特別に教えてやったんだよ」
「あのパトリック・ザラが、何故、貴様を重用していたのか、今、理由がわかったぞ」
「んなこと、どうでもいいさ。……さて、少しでも、この塊を削ってくるから、大人しくしてろ」
「貴様は、俺が自殺すると考えぬのか？」
「したいならすればいい。その時はその時で、精々、お前の死体を利用してやるさ」

そう、死体が残っていれば、身元確認することもできれば、そこから背後関係を洗える可能性もある。それが無理だったとしても、こいつらが、代替が進みつつあるとはいえ、ザフトの主力機であるジンM2型を？部隊単位？で運用していた以上、ザフト或いはプラントに関係がある事は間違いない。
いや、関係がなかったとしても、ユニウス・セブンの管理責任があるんだし、罪状をでっちあげてもいいって……、あー、命の危機の所為か、ちょっと黒くなってるな、俺。

「どちらにしろ、この世界を復興させる為に、ザフトとプラントからは、それこそ、尻から毛がなくなるまで毟り取ってやる」
「くく、くくく、ふはははははははっ！」
「って、笑うなよ、冗談を言ってるつもりはないんだぞ」
「俺にとっては、それも一つの復讐になるからな」
「それはなんとも、ポジティブシンキングなこった……」

そんな事を口にしながら周囲を見回すと、足元の大地、その一画に深い亀裂が大きく走っている事に気が付いた。

おそらくはメテオブレイカーが破砕し切れなかった後なんだろうと当たりをつけつつ、武装を確認する。

……使えるとしたら、四セットある破砕榴弾だろう。

つか、突破中に熱に負けて爆発されるのも困るし、始末する為にも早く……っと、破砕できなかった一番大きな岩塊で大量の爆発が起き始めたってことは、どうやら、第一艦隊やザフトのミネルバからの攻撃が始まったみたいだな。

この攻撃で岩塊を大気圏外に弾くなり、少しでも削れたり、砕けるなりしてくれたら最高なんだけどなぁって、俺も自分にできることをしよう。

破砕しなければならない大地から離れてしまわないよう、慎重に機体を動かしながら、見つけた亀裂に近づいて行く。

……しかし、時限式じゃないからなぁ、一斉にタイミング良くはできないし、端の方から順番に爆発させて行くしかないか。

そんなことを考えつつ、機体を一方の端へと向けて進めていると、嫌が応でも、周りの光景が目に飛び込んで来る。

ユニウス・セブンの破片群は大気との摩擦で発生する赤い輝きが増していれば、機体外温度もまた、凄まじい速度で上昇していくのがわかる。つか、コックピット内の温度も普段よりかなり高くなっ

てきている。大気圏突破までの僅かな間だが、機体も身体も持って欲しいもんだと思いながら、全ての冷却系の最大出力にしておく。

「っお？」

直近にある、今、立っているモノよりは少し小さいサイズの岩塊で次々に爆発が発生し始めた。よくよく見れば、どこからともなく、ミサイルが飛んで来ては着弾しているようなのだが……、飛んでくる方向はオーブ艦隊やザフトのミネルバがいる座標からではない。

……もしかしたら、？ドラ猫？がやってくれているのかねぇ、等と思いながら、一発目の破砕榴弾を射出するべく、照準を慎重に合わせ……、亀裂の一つに向って撃ち出す。

……ッ！

むむ、流石に、ＭＳ一機は確実に爆砕できる代物だけに、迫力があって……、おっ、おおっ、やった！

端から亀裂までの二十ｍ程に過ぎないが、亀裂から先の部分が剥離したかと思うと、そのまま分解していって、徐々に小さくなっていく。

うっし、この調子でやっていこう。

そんなこんなで地道な爆砕作業を続ける事、合計十一発分……、亀裂より先の部分を全て剥離させる事に成功した。ついでに言えば、？ドラ猫？が攻撃してくれた隣の岩塊も当初の半分以下のサイズにまで分割されている。

だが……、まだ、俺の足元の大地は一部を剥離させる事に成功したとはいえ、大半が残っている。

人一人ができるのは……、一人の力は所詮こんなモノなのだと冷徹な理性が脳裏で囁き、僅かな力でも何かの足しになると信じていた感情は嘆息する。

……ただ、無念だ。

何とも言えない無力感が圧し掛かる中、プラズマが発生しているのだろう、眩い光で彩られた周囲を見渡すと……、オーブ艦隊からの攻撃は終わり、ミネルバらしき艦影がまだ半分以上、原型を止めている一番巨大な大岩塊へと攻撃を続けていた。

そして、その向こう側も、地球の大気層や地表部が太陽光を反射

して、発している光で明るくなり始めている。

……つまり、大気圏突破も直に終わるということだ。

地上の人達に降り注ぐ災禍を思いながらも、今からは自身と?世界への生贄?を生き残らせる事を第一に考えよう、そう、考えた時だった。

「ッおぉぉっ！」

俄かに大きな衝撃が二度三度と起きたかと、足元の大地が揺れ始める。

「な、何だっ?」

「……ら、南アメリカ合衆国軍のエドワード・ハレルソンだ！　突入前から爆発を観測していたが、まだ、ここらで誰か遊んでいるのかっ！?」

南アメリカ合衆国軍っ！?

「こちら、オーブ国防宇宙軍所属、アイン・ラインブルグ。流石にもう遊んではいないが……、今、初めての地球にドキドキしている所だ」

「ッ！　ひゅ～、こいつは驚きだ。あんた、前の大戦で、教官と引き分けたっていう、黄狼かい?」

「その教官が誰かは知らんが、黄狼ってのは、確かに言われているな。そういうお前さんは、【南米の英雄】とか【切り裂きエド】って、人から呼ばれてないか?」

「ああ、そう呼ばれる事もあるな。……はー、どうやら、あんたも本物みたいだな。いやはや、あの教官と引き分けたって聞いた時は、眉唾な話だと思っていたが、今みたいな無茶をしている所を見ると納得できる」
「そりゃどうも。で、用件は？」
「何、物騒なモノが落ちて来るって、あんたの所の大将から連絡を受けていたからな、マスドライバーを使って迎撃に上がってきてたんだよ。後少ししたら、他の連中……ムラサメ隊や地上の連中がミサイル攻撃を仕掛ける予定だ」

……その攻撃が命中して、足元の岩が、少しでも砕けたらいいんだけどなぁ。

「で、あんたは、無事に降りれそうなのか？」
「何分、宇宙からのノーロープ・バンジーは初めての事でね。できれば、誰かに助けてもらいたいもんだ」
「……よし、なら、俺が助けてやろう」
「……は？　いいのかって、それ以前に、できるのか？」
「ミサイルは全弾撃ち尽くして後は引き揚げるだけだし、今日は使ってるのは【レイダー】ならＭＳ一機くらいは乗せてやれるから、構わないさ。……ついでに言えば、あんたよりはマシな条件だったが、俺も宇宙からのノーロープ・バンジーを経験した事がある。その不安な気持ち、少しはわかるんだよ」
「それは何とも心強い」

確か、レイダーってと……、連合が開発したＭＡ可変機……、ヤキン・ドゥーエで戦った？黒？だったはずだし、ＭＳを載せる事もできるかもしれないか。

「なら、頼んでいいか？」

「ああ、こっちがわかるように、目立つように飛び降りろ。上手く潜り込んでやるよ」
「わかった、そうさせてもらうっと、忘れる所だった。実は今回の事態を引き起こした犯人を確保しているんだが、そいつの機体を持っても乗せられるか？」
「ッ！　げほっ……、何だって？」
「いや、だから、今回の事件を引き起こした犯人を確保しているんだよ」
「……そりゃ、なんとしてでも、連れて帰らんといかんな。よしっ、多少、バランスが崩れても、俺が何とかしてやる！」
「言うほど楽じゃないだろうが……、よろしく頼む」
「ははっ、元戦闘機パイロットに任せな！」

軽やかでいて頼りになりそうな声を信じ、機体をジンＭ２型の元に向わせると、通信系から僅かの間で聞き馴染んだ声が響いた。

「ふんっ、貴様も、運が、良いな」
「阿呆、こんなことに巻き込まれている時点で、運が悪いっての」

未だに憎まれ口を叩く……。

「そういえば、お前、名前、なんてんだ？」
「……サトー、だ」
「じゃあ、サトー、これから回収してもらうから、大人しくしてろよ」
「ここまで、固められたら、動けはせんっ」

機体の冷却系が弱いのか、先程よりも弱くなったサトーの毒づきに、まぁ、確かにねぇ、等と口元を歪めながら、トリモチ塗れのジンＭ２型を岩塊から引き剥がして持ち上げる。

「サトー、死ぬまでの短い間、混乱する世界を見て、精々、喜べばいいさ」
「貴様に、言われるまでも、ないわっ」

それでも、まだまだ元気なサトーの声に肩を竦めつつ、落下し続けている岩塊から機体を空へと投げ出す。そして、南アメリカ合衆国軍が攻撃を仕掛けるという岩塊群から離れるべく、他の破片群に当たらないように注意しながら、スラスターを噴射させた。

……おー、環境破壊云々って言われていても、やっぱり地球ってのは綺麗なもんだねぇ。

等と、未だに落下している恐怖を少しでも押し殺す為にも、青や白といった色が目立つ地球を一時眺めた後、一緒に地球に落ちてきた岩塊群を見渡す。

……大小、様々な岩塊の分解する兆しは見せず、下部は真っ赤な輝きを保ったままだった。

その事実に、再び、心中に無念さが滲み出てくるが……、機体の下方に飛行機めいたブルーのシルエットが見えたので、頭を振って意識を切り替える。と、ハレルソンから連絡が入ってきた。

「とりあえず、うちの司令部を通じて、オーブ……アメノミハシラに、あんたが生きている事を連絡しておいたぜ」

「ああ、ありがとう、助かるよ」
「何、アメノミハシラにはうちも色々と世話になってるからな、これくらい気にするな。それよりも、地球へようこそ！　物騒な落下物はともかく、あんたは歓迎するぜ」
「どうせなら、こんな非常時じゃない時に、ゆっくりと歓迎されたかったもんだよ」
「ははっ、確かにな」

さて、足場がほとんどないから、慎重にっと……。

「おっと、意外と着地が上手いな、バランスがほとんど崩れなかったぜ」
「まぁ、似たような奴を宇宙で運用しているからな」
「……よし、後は俺に任せな。あんたは大人しくして、バランスを崩さないように頼むぜ」
「そうさせてもらうよ」

……あー、今回は本当に、色々と疲れた。

間違いなく、レナ達に心配させているだろうから、早い所、無事だって自分で連絡を入れないとなぁ。

岩塊群に飛来したミサイルが着弾している様子をサブモニターで眺めながら、少しでも破砕が上手く行く事を祈りつつも、そんな事を考えた。

５３　悲嘆する蒼き星　－ブレイク・ザ・ワールド　１（前書き）

フィクションとはいえ、今回の話を読む事で先の東日本大震災を思い出してしまい、不快に感じられる方がおられるかもしれません。ですが、ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹを描く以上は避けて通ることができない部分です。何卒、ご理解の程をよろしくお願いいたします。

53　悲嘆する蒼き星　―ブレイク・ザ・ワールド　1

まずは、先の顛末……、C．E．73年10月11日から翌日にかけて起きた出来事を簡単に整理しようと思う。

10月11日、地球安定周回軌道を回っていたユニウス・セブンが、テロリスト……と言うよりは、アヴェンジャー或いはリベンジャーと言った方がしっくりくる連中の手によって、地球落下コースへと軌道を変えられてしまった。

この非常事態を受けて、俺が所属するオーブ国防宇宙軍や管理責任者であるプラントが地球への落下回避の為に動いていたのだが、先の連中の妨害と手際の良さによって、突入軌道から逸らす作戦は失敗に終わってしまう。

その為、最悪のケース……大質量状態での地球への落着だけは回避するべく、ユニウス・セブン自体が破砕されることになり、地球軌道に展開していたオーブの第一宇宙艦隊やザフトの新鋭艦ミネルバによって全力攻撃で質量を削り取る作戦へと移行する事になった。

宇宙での最終防衛策となる艦隊による迎撃では、大気圏によって破砕断片を?跳ね石?の如く圏外へと弾かせることも期待されていたのだが、それが叶ったのは極一部に過ぎず、非常に残念な事に、全質量の三分の二が重力に引かれるまま、地球各地へと落着する事になってしまった。

はぁ、ただただ……、無念だ。

気を取り直して……、これらユニウス・セブンの断片群が落着することによって、世界各地で被害が発生する事になってしまったのだが……、被害状況が伝わってきたのは、南米の英雄ことエドワード・ハレルソンの助けと南アメリカ合衆国政府の特別な好意から、一時的な入国許可を受けて、旧アルゼンチン南部に着陸して、一日経ってからのことだった。

伝え聞いた被害状況は……、世界各地で大規模な災害が同時多発的に起きている状況は、酷いの一言に尽きた。

ハレルソンから聞く所によると、ここまで被害が拡大してしまったのは、ニュートロンジャマーの副次作用である電波妨害で従来の迎撃システムが効果的に使えなかった為、各国軍による迎撃が効率的に行えなかった事も要因の一つだろう、との事だった。

無論、ニュートロンジャマー影響下でも国防を担えるように、新たな装備へと更新しつつあった大西洋連邦のような国もあるにはあったのだが、まずもって、戦後復興が優先されていた事もあり、必要最低限に止まっていた為、焼け石に水程度にしかならず、被害を防げなったらしい。

逆を言えば、国力に劣り、限られた装備しか有していない南アメリカ合衆国は……、いや、まぁ、破砕断片群の落着範囲も影響しているから一概には言い切れないけれど、実際、アマゾンに落ちる所だった中型破片の迎撃というか、落下コースを大西洋沖に逸らせる事に成功している事を考えると、被害を防ぐ為に手を尽くした方だと言えるだろう。

とにかく、各国の対空迎撃網をすり抜けたユニウス・セブンの断片群は、大気圏突入中に発生したプラズマの影響で空に白夜の如き

明るさを連日もたらした他、海洋に落ちたモノは断続的な津波を引き起こし、陸地に落ちたモノは地表に大きなクレーターを穿つと共に、周辺にあった様々な代物を衝撃波で吹き飛ばした上、大地から吹き上げた砕石や有毒高温の噴出物等が広範な地域に火災等の災禍をもたらしたのだ。

そして、それらが引き起こした被害を最も大きく受けたのは、未だ戦後復興の半ばだった、東アジア共和国だった。

なんとなれば、首府がある北京近郊に落下物の中でも最大の物が落着した事で、北京一帯が文字通りに全てが吹き飛んでしまい、中央政府機関そのものが物理的に消滅した上、北太平洋に落ちた多数の岩塊群が引き起こした津波によって、復興の下支えをしていた、経済的に発展している太平洋沿岸地域が壊滅的な打撃を被った為だ。

これをボクシングを例にして簡潔に表現すれば、激しいパンチの応酬があってフラフラになったラウンドが終わり、インターバルに入ったことでグロッキー状態からなんとか立ち直りつつあった所を、観客の中に紛れ込んだ暴漢に、レフリーやセコンドの制止も虚しく、突然、背後から襲われて、ノックアウトパンチを喰らってダウンした後も、しつこく、ボディブローを打たれ続けていると言えばいいだろうか？

……いや、逆にわかりにくいかもしれないか。

まぁ、それは置くとして、太平洋にはユニウス・セブンの断片が半分近くが落下した為、東アジア共和国に止まらず、その沿岸地域全域……、大西洋連邦、南アメリカ合衆国、大洋州連合、オーブ本

国、赤道連合といった国々は津波によって、大きな被害を受けているようだ。

また、速報で入ってきた情報によると、大西洋連邦では五大湖地方に小規模な破片群が落着した影響で、一帯が壊滅的な被害を受けている上、北部大西洋に落ちた破片群の影響で発生した津波で、ニューヨークやボストン、ハリファックス、マイアミ、それにノーフォークといった都市に代表される大西洋沿岸が被害を受けているとのこと。

このことを考えると、南アメリカ沿岸や対岸のユーラシア西部やアフリカ大陸もまた、津波の被害を受けている事になるのだが……、メディアの情報で比較すれば、太平洋沿岸地域に比べると、こちらの被害は復旧の目処が立てられるレベルみたいだ。

この他にも、破砕によって生じた小さな断片が世界各地に降り注いだ事もあり、地球上で被害を受けていない地域はない、と言えそうな状況になりつつある。

とはいえ、一日前に行われたアメノミハシラの警告が少しは生きたのだろう、各国政府が津波の恐れが高かった沿海地域に対して、早めの避難を実施していたお陰で、人的な被害が比較的に抑えられているのが救いだ。

……まぁ、あくまでも、当初、参謀本部が算出した想定被害よりも？比較的？に抑えられただけだけどな。

本当に溜息しか出てこないが、これが今の段階……１３日現在でわかっている状況だ。

◇　◇　◇

南アメリカ合衆国の南部地域にある軍基地で世話になり始めて、早三日……、流石に基地の外へ出る事は出来ないが、基地の格納庫内に収められた自機……機体に関する情報は取られても仕方がないが、使われているＯＳに関しては、データを抜き取れないよう、三重にロックしておいた……の面倒を見たり、監視員付だが、外で日課の運動をさせてもらえたり、食事や寝場所を提供してもらえたり、アメノミハシラに連絡を取らせてもらえたりと、不法入国者としては破格の扱いを……、基地内では非常に自由にさせてもらっている。

特に、アメノミハシラへと直接連絡させてもらえたのは、大変にありがたかった。

最初に通信に出てくれたコードウェル一尉からは、心配させないで下さい、という趣旨の言葉とレナ達小隊メンバー全員が無事である事を聞く事ができたし、多忙なはずのサハク准将も直々に通信に出てくれた上、ねぎらいの言葉と共に、南アメリカ合衆国の治安当局に身柄を拘束されたサトーの取扱はアメノミハシラと南アメリカ合衆国とが折衝して決定する事、更には俺と機体の回収の為に、人と運搬機を派遣するとの言葉を頂けたのには、大いに肩の荷がおりたというか、我が身の保障をしてもらって、安堵させてもらったものだ。

まぁ、本音を言えば、レナ達と直接話す事は叶わなかったのが残念なのだが、この辺りは仕方がない事だし、互いの無事を確認できただけでも有難い事だ。

そんな事を思いながら、大気圏突入時の熱の影響の為か、一部の塗装が焦げ剥げて、豹柄みたいに斑模様になっていた自機の状態を知る為に、？監視員？の立会いの下、自己診断機能を使って、ステータス・チェックを行っている。

……あー、冷却系に負荷が掛かりすぎて、駄目になってるわぁ。

無理をさせたからなぁ、と申し訳ない気分で機体を見上げていると、綺麗に撫で上げられた、溶けたチョコレートのような艶のある茶髪と浅黒い肌とがよくマッチしている？監視員？が声を掛けてきた。

「こうやって見てると、便利なもんだな、それ」
「まぁ、便利は便利なんだが……、整備畑じゃ、こいつの導入するかしないかに関しては賛否両論だったよ」
「整備の腕が落ちるってか？」
「それもあるが、チェックを鵜呑みにしすぎて、見落としが発生するかもしれないって、心配だそうだ」
「あー、確かに、その心配はあるよなぁ」
「ああ、だから、整備マニュアルに、必ず、ベテランを含めた複数人の目で、最終確認する事にしたんだよ」
「ほうほう、その結果、今は受け入れられたのか？」
「半々っていうか、整備効率の観点から見ると改善されたのは事実だし、それでできた時間をベテランによる整備技術の伝授や色んな研修に当てているらしいから、今の所、結論は保留だそうだ」
「新しい技術の導入ってのは、中々、難しいもんなんだな」
「だな。……所で、今更かもしれんが、何で、俺の監視員なんてやってんだ、南米の英雄殿？」
「いやぁ～、俺ぁ、元々がしがない戦闘機パイロットだった所為か、

管理ってのが苦手でよ。信頼できる？相棒？にそっち方面の仕事を任せてんだよ。後、他の連中が被害実態の把握や救援活動で忙しいって事もある」

「ちょ、おまっ、さ、流石に、精鋭ＭＳ隊を率いる身としては、問題じゃないか？」

「いいんだよ。？相棒？……、ジェーンからも、エドは実情はどうあれ、英雄である事には間違いないんだから、常に胸を張って、英雄として、皆の心の支えになりなさい、って言われてるからな」

「は～、それはまた……、お前さんも大変だろうが、そうやって支えてくれる？相棒？の人も立派だな」

「だろだろっ！　いやー、ほんと、ジェーンはいい女なんだぜっ！」

その言葉と共に、エドワード・ハレルソンはニヤリと自分の女を自慢するように笑って見せるが……、それも長くは続かない。

「いや、本音を言えばな、俺も、今すぐにでも被災地に飛んで行って救難救命や捜索活動に加わりたいんだが……、現場で重建機が不足しているらしくてな。あんたを迎えに来る輸送機に乗せられているＭＳ用スコップやツルハシが届くのを待ってるんだ。んで、それを受け取った後、南米全ての被災地に送り届けながら、隈無く被災者を慰問する予定なのさ」

「……そうか」

本当に大変だな、英雄ってのは……。

……しかし、ＭＳ用のスコップはともかく、ツルハシまであったとはなぁ、なんて事を考えていると、ハレルソンも同じ事を考えていたみたいで、俎上に乗せてきた。

「……そういえば、あのＭＳ用のスコップやツルハシってよ、あん

たの実家で開発したんだって？」
「あ～、赤道連合の会社と一緒にな。色々開発しているってのは聞いていたが、ツルハシはしらなんだ」
「まぁ、こういう状況だと、色々と役に立ちそうだからな、感謝するぜ」
「はは、生暖かい周囲の目に負けず、実際に開発した奴に言ってやってくれ」

っと、基地が何だが、騒がしくなった？

「どうやら、あんたの迎えが来たようだな」
「みたいだな」

大きく背伸びをしてから格納庫の外を窺うと、オーブ軍が使用しているＶＴＯＬ輸送機……通称ペリカンが丁度、基地の滑走路に着陸した所だった。

「ところで」
「ん？」
「……戦争、起きると思うか？」
「正直に言って、微妙な所だな」

脳内に様々な仮定を巡らしながら、一番可能性が高そうなモノを口に乗せてみる。

「この全地球規模の大災害を引き起こした、ユニウス・セブン落下の責任をプラントが認めて、賠償や補償に応じるかどうかで、大きく変わって来るはずだ。まぁ、今回の事件に限っては、犯人とそいつが使用していたＭＳを物的証拠として押えているし、そこからプラントやザフトの関与を引き出せる可能性は高い事を考えると、応

じないわけにはいかないはずだ」
「……プラントの連中が応じるかねぇ」
「考える力があるなら、もしも応じなかった場合、地球国家が一致団結して、地球連合が再来する可能性が高いんだし、応じるしかないよ。それでも拒むなら、実際、戦争になるだけの被害を地球に与えている以上は、また戦争になるのは仕方がない事さ」

そして、その結果……、今度こそ、プラントは国家としての命運を絶たれ、解体されるだろう。

「元ザフトにしてはドライだな」
「あー、俺、ザフトに所属する前っていうか、元々は保安局……治安機関に所属していたんだよ。それが、いつの間にか、保安局がザフトに組み込まれた影響で、俺も取り込まれただけであって、好きで所属したわけでもないからな」

俺がそう応じると、ハレルソンは天井を振り仰いだ。

「はー、なるほどねぇ。……みんな、色々としがらみや理由を持ってるもんだなぁ」
「まぁな」

もっとも、本音を言わせてもらえれば、あれだけ多くの犠牲を出して、プラントの独立を達成した以上は、馬鹿な方向にだけは行って欲しくない所だ。

「いやだいやだ、軍人の俺が言えた義理じゃないが、殺し合いが不毛な事くらい、気付いても欲しいもんだよ」
「ああ、俺も言える立場じゃないのはわかってるが、まったくその通りだよなぁ」

一度でも殴り合いの喧嘩をした事があるならわかるだろうが、血が滾っていても、殴られたら痛い事には変わりはない。まぁ、行き過ぎると気持ち良くなる可能性もなきにしもあらずだが……。

「どうやら、タクシングが終わったみたいだな。どうだ、行ってみるか？」

「いいのか？」

「別にいいさ」

ハレルソンの了解もあったので、機体脚部にあるケーブルジャックから連結ケーブルを外し、コックピットに備えられているパイロット用簡易コンソールを閉ざす。

「……うーん、その診断機能、うちで使ってるＭ１にも付けられないのか？」

「知り合いの話だと次の改修で組み込まれる可能性が高いらしいぞ」

「なら、その改修に期待しておくか」

そんな事を話をしながら、春の暖かな日差しが差し込む外へと出てみると、滑走路脇にある、ここに一番近いのエプロンに静止して、エンジンが切られた所だった。

「やれやれ、これでやっと俺も動けるな」

「すまんね、むさ苦しい男の相手をさせて」

「まったくだ。せめて、今、降りてきた女の子位だったら、こっちもやり甲斐があったんだがな」

その言葉を受けて、輸送機脇にある乗員乗降口から降りてきた人物を見る……って、もしかして、マユラか？

「……知り合いか？」
「ああ、たぶん、恋人の一人だ」
「へぇ、恋人の一人か……、んんっ？」

ハレルソンが俺の言葉に不審を抱いたのか、首を捻っているを無視して、輸送機へと近づきながら声を張り上げて呼びかける。

「おーい！　マユラ！　来てくれたのか！？」

って、あれ？

何も答えないまま、こちらに向かって全力で走ってくるとっおッ★☆★ぁッ！

い、今、星が見えたぞって、げはっむぐっ！

「ひゅ～、恋人の一人って、黄狼さんは色男だねぇって……、感動の再会にしては、アグレッシブだったけど、大丈夫か？」

今更ながら、ハレルソンのからかいと心配の言葉が聞こえてくるが……、マユラの体重に加速力まで加わった全力びんたを頬に食らって、胸に飛び込まれて思いっきり尻持ちをついた上、熱烈な口付けをされている為、反論できないっていうか、マジで頬と尻と背中が、痛いです。

あ、顔に……。

……。

色々な感情が飽和しているらしいマユラを慰め、宥める為にも、しっかりと抱き締めて、その背中を軽く叩いてやった。

……後、ハレルソンよ。

わざわざ、こっちの視野に入ってまで、ニヤニヤして見せっむぐれろんっ！

54　悲嘆する蒼き星　―ブレイク・ザ・ワールド　2

いかにマユラを心配させてしまったのかを、我が身を持って味わう事になった事以外、恙無く、物資の引渡しやＭＳの積載作業が進んでいったかと思うと、マユラが持ってきたオーブ軍の制服に着替えた俺もＶＴＯＬ輸送機ことペリカンの大きな嘴の中に収まる事になり、南アメリカ合衆国を離れて、オーブ本国に引き揚げる事になった。

「ハレルソン、今回は色々と世話になった。ノーロープ・バンジーの時は、本当に助かったよ」

「何、気にするな、ラインブルグ、当然の事をしたまでさ。それよりも、恋人には何事があっても全てを打ち明けて、理解とご機嫌をとっておけよ。じゃないと、後で、絶対に、怖くて大変な目に……、それこそ、ＭＳで刺されることになるからな」

「……何だか、実感の篭った言葉というか、えらく具体的な例だな」

「こいつも経験者語るって奴さ、わははははっ」

そんな会話を最後に、南米の英雄ことエドワード・ハレルソンは、大量のＭＳ用スコップやツルハシを積んだコンテナをレイダーに担がせると、被災地へ向かって飛び去っていった。

……いやはや、英雄って言われるだけあって、自然と惹きつけられるような魅力のある男だった。

本当に、俺にも、あの十分の一でもいいから、人を惹きつける魅力が欲しいもんだなんて、生真面目な顔で考えているつもりなのだ

が……。

「あー、マユラさん、そろそろ、離れてもいいんでないか？」
「駄目、このフライトの間は、絶対に離さないからね」

……ペリカン内部にあるキャビン、そこに設けられている席に座った後、隣に陣取ったマユラが脇腹に両手をしっかりと回して抱きついた為、制服越しに感じる我が侭な感触と温もりが、死線を乗り越えた事で昂ぶっている本能を刺激する所為で、つい相好を崩したり、ムラムラと我が息子が反応しそうになる。

「いや、そうは言ってもだな。その……コードウェル一尉だっているんだし」
「あ、私の事は気になさらなくてもいいですよ」

向かい合って座っている、宇宙軍と空軍という所属違いにもかかわらず、何故か、一連の輸送指揮を仕切っていたコードウェル一尉はそう言って微笑んでみせた。

「ほらほら、アサギもいいって言ってるんだから」
「それでも、時と場所をだな」
「アサギだって、ほとんど身内なんだから、いいじゃない」
「む、むぅ、確かに、一尉も身内と呼べる人だけど、公私の別はしっ「うちの小隊なんて思いっきり、私編成なんだから、今更だと思うんだけど？」むぐっ」

それ言われると反論できないから、言っちゃらめぇって、もう、いいやっ！

「わかったわかった。だけど、このフライトの間だけだからな」

「わかってる」
「……ご馳走様です」

いや、こちらこそ、すまんですっていうか、こういう反応を見ると、コードウェル三尉と姉妹なんだなって思わされるな。

「んんっ、しかし、コードウェル一尉、この忙しい時に、よく輸送機を借りられたな」
「いえ、南アメリカ合衆国に支援物資を運ぶという任務もありましたから、それ程、無理を言っていません。それに国防省でもサハク派が台頭してますし、Ｌ３の海賊を制圧して、宙域を確保した事や今回の事件で宇宙軍が見せた対応で、中道だった空軍にもサハク派に好意を示す人が増えている事もありますから」
「……なるほどな」

そりゃ、現代表であるカガリ・ユラ・アスハが今回の対応で大きな働きを見せる事が出来なかったのに比べて、サハク准将は事態阻止の為に大活躍と言っても過言ではない働きを見せたんだから、評価も大きく変わってくるよなぁ。

……。

さて、そろそろ、オーブ本国の被害を聞いておくか。

「それで、オーブ本国の被害は、どれ位のモノになってるんだ？」
「はい、オノゴロ島とカグヤ島の被害は港湾部のみに止まって比較的軽微でした。ですが、ヤラファス……オーブ本島とアカツキ島に関しては沿岸地域で建築物に大きな被害が出ています」
「……やはり、津波で？」
「はい。後、国防陸軍の知り合いに聞いた所によると、六時間前に

は避難命令を出していたそうなのですが……、それを無視した一部の人達が行方不明になるか、亡くなっているみたいです」
「どれくらいの人が？」
「私達が出発する段階で把握できただけで、千人を超えるそうです」
「……多いな」
「ええ」

……突発的な大地震で、引き起こされた津波ではないのになぁ。

「被災地の復旧や救援活動は？」
「代表が不在だった為、宰相……セイラン卿が代行して指示を出して、本土防衛軍を中心に、陸海軍が共同で当たっています」
「空軍は？」
「赤道連合や大洋州連合、大西洋連邦、東アジア共和国、それに南アメリカ合衆国と、互いに余っている物と不足している物を相互融通する為に、各国空軍と連携して動いています」

なるほど、さっき言ってた通り、俺の迎えはそれの一環に含めてもらえたってわけだな。

「じゃあ、アメノミハシラからの支援は？」
「救援物資をオーブ近海に順次投下していますし、他国からも要請があれば、できる限りで応えています」
「さすがはサハク准将、仕事が早いな。それで、今後のスケジュールはどうなってるんだ？」
「カグヤ島の空軍基地に着陸した後、機体に関してはラインブルグ商船のコンテナ運搬船に載せて、打ち上げる予定です」
「俺達は？」
「定期連絡船を使用して、アメノミハシラに帰還する事になっています」

「そうか。……復旧に関与できないのって、何だか、申し訳ない気がするなぁ」
「その思いはわかりますが……、あまり宇宙軍が表に出てしまうと、陸海軍や本土防衛軍の面子を潰してしまうのも事実です」
「組織内にいる以上、そう簡単に、面子なんて知るもんか、って訳にもいかんわなぁ」
「ええ。それに、事実として、宇宙に関しては宇宙軍が一番慣れているように、陸海軍や本土防衛軍もそれぞれの分野に慣れていますからね」

いつものように、餅は餅屋ってわけだって、こらこら、マユラ、胸をぎゅっと押し当てるな。

「どうしたんだ、マユラ」
「むー、私もアサギみたいに構って欲しいなぁ」
「あ、あのな、一尉とは真面目な話をしているんだからな？」
「……いいじゃない。ねぇ、アインさん、このフライトの間だけでも、もっとベタベタさせてよ」
「駄目、そこまでは妥協しません」

ビシッと言い切ると、コードウェル一尉が軽く笑い声を上げた。

「三佐、本当に、私の事は気にしなくてもいいですよ？」
「駄目駄目、今の状態が最大の譲歩だって」
「むむぅ、アインさん、堅い～」
「俺は公の時は堅いの。本当に気を抜くのは、家に帰ってからだ」

ちぇー、とマユラは口を尖らせながら呟いているが、実際はそこまで気を悪くしていないようなので、更に頭を撫でて宥めておくって……、これって、実はベタベタのような？

……まぁ、それには気付かなかった振りをしてっと。

「コードウェル一尉」

「……あ、はい？」

「プラントは何らかの声明なりを出しているのか？」

「私が知る限り、遺憾の意を表明していますが……、今の所、責任の所在については口を噤んでいます」

「サトー……犯人の取調べに進展は？」

「これも私が聞いている限りですが……、南アメリカの捜査当局の取調べに対して、フレアモーターや爆薬等の資材やＭＳの調達方法については話したそうです」

「資金提供者や協力者の存在の有無は？」

「そこまではわかりません」

「そうか。……まぁ、何にしろ、でたらめを言ってる場合もあるし、裏だけはしっかり取って欲しいもんだな」

「そうですね」

後、聞きたい事は……。

「各国政府の反応はどうだ？」

「大西洋連邦と東アジア共和国、ユーラシア連邦が被災地への救難目的以外で軍を動かしている事が地球と宇宙共に観測されています。その三国以外の国ですが、大西洋連邦と新地球連合を構成している南アフリカ統一機構と汎イスラム同盟は大西洋連邦に追随する事は間違いなさそうです」

「地中海同盟と赤道連合、南アメリカ合衆国は？」

「その三国はプラントの出方を待っているみたいです。後、親プラントの大洋州連合ですが、自国沿岸部の被害が大きかった事もあり、今回はプラントを擁護せずに静観するようです」

「……今後のプラント側の出方次第では、他の三国も動く可能性があるって事は、一触即発の状態って所かね」
「はい」

できれば、戦争は回避して欲しい所だがなぁ。

「それで、オーブの対応は？」
「アメノミハシラは基本的に静観する考えですが、本国は……方針が決まっていない状態です」
「決まっていない？」
「はい、セイラン卿とアスハ代表との意見が噛み合っていないみたいなんです」
「……どんな具合に？」
「セイラン卿は、復興支援を受けている大西洋連邦への配慮から、追随する形で動くべきだとしていますが、アスハ代表は、今の状況で戦争を起こすべきではないとの考えから、積極的に仲介に動くべきだとの考えを示しているそうでして……」

これも現実論と理想論のぶつかり合いになるが……、うん、このぶつかり合いなら互いに妥協点を見出せるし、そう悪いものでもないというか、案外、セイラン卿がアスハ代表の成長の為に仕組んだ事なのかもしれない。

「三佐？」
「ん？」
「何だか、嬉しそうでしたが？」
「あ、いや、アスハ代表が、今の二つの考えを上手く擦り合わせる事が出来たら、国家元首として、少しは成長できるかもしれないって思ったんだよ」

うんうん、これで少しは成長できるはずだ。

「あっと、すっかり忘れていたけど、ユニウスの断片と一緒に大気圏に突入したミネルバはどうなったんだ？」

「オーブ近海に着水した後、アスハ代表をオーブ海軍に引き渡して、カーペンタリアに向かいました」

「えっ？　アスハ代表って、ミネルバに乗ったままだったのか？」

「はい、当初予定ではデュランダル議長と共に乗艦を乗り換える予定だったのですが、全てを見届けると頑強に言い張って残ったそうです」

えー、うそん。

「せ、説得は？」

「……時間的な制約があった為、断念したそうです。何しろ、ミネルバ自体が作戦に組み込まれていた事もありましたし、唯一、アスハ代表を説得できるミナ様も作戦の全体指揮でお忙しかったので……」

えと、あまり成長を期待できそうにない、芳ばしい臭いを感じたので、前言撤回してもいいかな？

というか、その行動はあまりにも迷惑掛けすぎだろう、常識的に考えて……。

本当に誰でもいいから、アスハ代表に常識というものを教えて欲しいというか、先のプラントへの単身突撃といい、自分の都合しか考えていない無茶な要請といい、自分の立場……国家代表がどういう立場なのか、わかってるのかね？

……わかってたら、そんなことはしないわなぁ。

まったく、後始末をしなければならないサハク准将やセイラン卿も大変だし、我侭に付き合わされたネルバの艦長はもっと大変だったろうなぁ。

「はぁ、アスハ代表の行状に関してはノーコメントで。それで、ミネルバはオーブに入港させなかったんだな？」

「アスハ代表は入港させるつもりだったそうですが、セイラン卿の判断で公海上でのやり取りに止めたようです」

「ユニウスの落下にプラントの関与が疑われている現状じゃ、はい、どうぞって、ザフト艦を入港させるわけにはいかんさ」

「ええ、そうですね。……アスハ代表には、もう少し、どういう状況なのかを考えて欲しいです」

そう言った一尉の困った表情に微苦笑を浮かべていると、マユラが再びって、おぅい、そこは際どい所……って？

「寝たのか？」

「そうみたいですね。マユラ……、三佐がＭＩＡになった時から、ずっと寝てませんでしたから」

「ッ！　……そうか」

「はい、自分が自失してしまって、最後まで追随できなかった所為だって、泣いてもいました。マユラを連れてきた名目は私の補助でしたけど、本当は、不安定になっていた精神を落ち着かせる為なんです」

その一尉の言葉に含まれた、非難の意と怒りを感じ取りつつ、マユラの髪を撫で上げ、その顔を窺う。

……流された涙で薄くなった化粧の下、目の縁に、濃い隈が見て取れた。

「今回、三佐が為された事……、テロの主犯を捕らえた事は、人としては正しいと思いますが、男としては間違ってると思います」

「男としては間違ってる、か……、手厳しいな、一尉」

「私も女ですから……、三佐が、ＭＩＡになった時、私も、目の前が暗くなって……、マユラや、レナさんの、気持ちが、嫌ほど、わかって……、憔悴していく姿を、見ていて……、苦し、かった」

唐突に一尉の声音に入り混じった、嗚咽と私人としての感情……、俺の勘違いでなければ、滲み出てきた想いを、あえて見ないようにする為、マユラの顔を見つめ続ける事、数分……。

コードウェル一尉の嗚咽が収まった所で顔を上げると、そこには多分に拗ねた色と若干の後悔の色を含んだ、少しだけ赤くなった瞳が出迎えた。

「お、女にここまで言わせておいて、見ない振りだなんて……、さ、三佐は、ズルイ人ですね」

「あー、結局の所、男ってのは、女の涙には勝てないからな、マトモな勝負をしないのさ」

「……本当に、ズルイ人です」

これで話が終わると思って安堵したら、ずずいと、一尉が身を乗り出してきた。その分だけ、つい、身体を引きそうになるが、よくよく考えたら引く理由もない為、そのままの姿勢で対応する。

「三佐、私って、魅力ないですか？」

「いや、お世辞抜きに、マユラ達に劣らない位に、コードウェル一

尉は、十分に魅力的」

「……なら、どうして、手を出してくれないんです？」

「あ、あー、いや、そりゃ社会通念に喧嘩を売ってる俺でも、三人も囲ってる時点で自重するし、ちょっかいを出せたとしても、出世コースに乗っている一尉に迷惑を掛けたくない」

あれ、何か、今、コードウェル一尉の目が、飲み会の席で妹の三尉がアーガイルを確保した時に見せたような、ギラリとした輝きを放ったような気がしたが？

「三佐、オーブは一夫一婦制ですが……、中級以上の氏族男性は、妾を持っている人が多い事（※注）、知ってました？」

突然、なに……、だと……？

オーブの野郎共は……、中級以上の氏族の野郎共はっ、そんな凄……？けしからん？事をしているだとっ！

「な、何故にそんな事が認められる？」

「あ、いえ、社会的に認められているのではなく、あくまでも黙認です」

ちょっと、頭が冷えた。

「……あー、もしかして、自分達の血統を絶やさない為か？」

「氏族は姓を残すことも責務ですから、そういう面もあるにはありますが、どちらかというと古来からの風習に由来しています」

「風習？」

「はい、どこからは入って来たのかまでは知りませんが、オーブには、富める者は何らかの方法で人を養えって風習があるんです。そ

れの一つに、富める男は妾を持ってもいいような風習が……」

一尉の答えに、ぽぽぽぽぽーん、って、目が飛んで行きそうになった。

「前代表の更に前代辺りで、養子縁組が認められるようになってきたのですが、実際には、妾を囲う氏族が減らないのが現状です。あ、ちなみに、一部の女性の間では、氏族に妾として見初められて、玉の輿に乗る事も人気だったりしますね。時には、その氏族をパトロンに社会的に成功する人もいますから」

「あれー、なんか、俺が持ってる常識の方がおかしいように感じてきたようなって、違う違う、俺、そもそも氏族じゃないって！」

「古くからオーブの居を構える豪商も、普通に妾を囲っていますが？」

……な、何か、逃げ道を塞がれた。

「い、いや、その、な、確かに、俺も親父達のお陰で資産家って言える立場だけどさ、一仕事を終えて、ようやく、三人との事が認められた段階であってだなって、いや、もちろん、一尉の事が嫌いって事ではないんだが……」

「なら、私を抱きたいと思いますか？」

「そりゃもちろん、って、あ……いや、今のは不意打ち気味での、えー、質問に対する答えと致しましては、えー、まことに不適切な表現と申しますか、えー、先程の発言に関しましては、えー、あくまでもホンネガーなる、えー、妖怪に無理矢理、言わされた事でありましてですね、えー……」

だが、コードウェル一尉は俺の見苦しい言い訳を華麗に聞き流して、強い光を宿す瞳で俺の目を見据えながら、更に距離を詰めてき

た。

「アインさん、本音で話してください」
「……俺が知る、アサギ・コードウェルという人は、普段から頼りになる上に、細やかな気配りも上手で、男を上手く甘えさせてくれるというか、包み込む優しさを持っている、本当に魅力的な女性で……」
「もっと簡潔にお願いします」
「ぶっちゃけると、男を甘やかす事ができる位にイイ女だから手を出したいし、一匹の雄として、自分のモノにしてしまいたいです」

この男としての本音を聞いて、女としての自尊心を満たしたのか、コードウェル姉……アサギは乗り出していた身を元の姿勢に戻した。

「ふふ、今日は、これ位で勘弁してあげます」
「は、はは、こっちは何だか、外堀を埋められた気分だよ」
「あら、今のは内堀ですよ？」
「えっ？」

え、俺って、いつの間にか、そんなに攻略されてるの？

そんな思いが顔に出たのが面白かったのか、今までお目にかかった事がない悪戯顔でクスクスと笑って見せた後、韜晦するように話を転じてきた。

「でも、三佐って、やっぱり、好色ですね」
「ふぐっ、そ、それは、俺だけに限らず、男は皆、基本的に好色だと答えておくよ」
「その中でも実際にやっている所を見ると、三佐は、特に？強い？方だと思います」

むぐぐ、反論できない。

「あ、そうそう」

「ん、今度は何だ？」

「ここまで双方が本音を出した以上、私の事も、名前で呼んでくれますよね？」

「……わかったよ、公の場所じゃなかったら、アサギと呼ばせてもらう」

「ええ、私も公の場所以外では、アインさんって、呼ばせてもらいますね？」

「あ、ああ」

その後は、普段のキリっとした様子からは想像できない程に、艶やかな視線を時々送ってくるアサギに獣欲と本能を刺激されつつも、何とか理性で抑え付けるという、生殺しの拷問を思わせるフライトとなってしまった。

……おれ、よくにまみれたムスコやどんよくなケモノにまけないように、ほんとうに、がんばったよ？

後、俺の膝で熟睡快眠中のマユラさん……、俺がアサギの何気ない仕草や視線にドキリとさせられる度に、察知しているのかは知りませんが、無意識のまま、男の急所に顔を寄せて行って、歯並びのいい口をガチンガチンと音が出る程に開閉させるのは、勘弁してください。

※注　中級以上の氏族男性は妾を持っている人が多い
オーブの氏族が貴族的な存在なら、妾が存在してもおかしくはないと思えるし、そんな前時代的な風習を無くす為にも、氏族の養子縁組が広く認められるようになった、等と妄想を膨らませて捏造してみました。
当然の事ですが、原作にはこんな設定は微塵もありませんので、あくまでも本作内のご都合設定とご了承ください。

55　悲嘆する蒼き星　―ブレイク・ザ・ワールド　3

ほぼ一日かけてオーブ本国に到着した後、空軍の施設を拝借して、一応の任務報告書をアメノミハシラに帰還している即応部隊司令部宛に書き送ってから、サハク家が経営しているホテルでマユラと？熱い？一夜を過ごす事になったのだが、空が白むまで、互いに激しく求め合った為、流石に少々眠い。

そんな訳で動きが鈍い俺とマユラを他所に、テキパキと動いたコードウェル一尉……アサギの手配で、早くもオーブ本国からアメノミハシラに帰還する事になり、再建されたマスドライバー【カグヤ？】があるカグヤ宇宙港で出発を待っている。

「流石だな、コードウェル一尉」

「ありがとうございます、三佐。ですが、誰かさんが手伝ってくれたら、もう少し段取りよくできたのですが……」

「あ、あー、ちょっと、軽食を買ってきまーす」

アサギの追求から逃れる為だろう、マユラは席を立つと、素早い動きで近くの売店に向ったようだ。

「いや、すまん。マユラが使いモノにならなかったのは、俺の所為だ」

「ふふ、わかってます。そもそも、さっきのは冗談ですから、気にしないで下さい」

……いやはや、全てはアサギ様の掌の上って奴か？

「それに、私が三佐とそうなった時は、マユラに頑張ってもらいますから」

えと、アサギって、こんなにも明け透けな性格だったっけ？

「んんっ、は、話を変えるが、本国の被害、結構、酷いな」

「……ええ、復旧には、時間が掛かりそうです」

この宇宙港に来るまでの僅かな間に垣間見た、オーブ本国の被害は、やはり酷いものだった。

あえて詳しくは述べないが、首府があるヤラファス島やアカツキ島の沿岸部では防波堤の一部が津波に抗し切れずに破壊された結果、臨海する都市部では避難が遅れていた車や一部の建物、それに伴なって市民が多数流された為、今現在も、アスハ代表首長の命でオーブ国防陸海軍及び本土防衛隊による捜索や救難活動、仮設避難所の設置やインフラの復旧活動が行われている状況だ。

被災した人達に、一日でも早く、日常が帰ってくる事を祈ろう。

そんな事を考えながら、アメノミハシラへの定期便が出発するまでの時間を有効利用すべく、中央ロビー、そこに設置されている大型ディスプレイで流されているオーブ国営放送の報道特番を、待合ソファに据わったまま、顎に手をやって眺めている。

番組内容は本国被災地の情報や各国の被害状況といった事を伝えるもので、今は、今回の災害の原因について、身元不明のテロリストによって引き起こされた凶行であると、アナウンサーと解説員による対話形式で解説しているようだ。

だが、つい先程まで読んでいたオノゴロ・ジャーナルやライジング・オーブ、オロファト・タイムスといった本国の主要なマスメディア紙では、本国の被害状況や全世界規模で起きている災害について、大々的な特集を組んで挙って伝えている。その中で、本国を襲った津波等の災害がプラントが管理するユニウス・セブンがテロリストの手で落下させられた事が原因である事を明記すると共に、このようなテロリストの動きに気付けず、凶行を許してしまったという事はプラント政府の管理が十分に行き届いていなかったのではないか、とも報道しているから、おそらく、これらを読んだオーブ市民の対プラント感情は悪くなってきているはずだ。

とはいえ、幸いな事に今の所、俺が見知っている限りだが、その対プラント感情の悪化が即コーディネイター排斥には直結してはいないようだ。けれども、もしも、ブルーコスモスみたいな反コーディネイター系組織がここぞとばかりにネガティブ・キャンペーンを実施した場合は、そんな動きも出てくるかもしれないから、十分な注意が必要だろう。

後、ブルーコスモスの私兵組織というか、過激派の実行部隊であるファントムペインがナチュラルとコーディネイターの対立を煽るような、きな臭い動きをしないように、何らかの牽制をしておいた方がいいんだが、この辺りはどうなっているのかねぇ。

一人難しい顔をしていると、俺の隣……以前より距離を詰めて座っているアサギが俄かに声を出した。

「三佐」

「ん、どうかしたか、一尉」

「これからの世界状況はどうなると思われますか？」

「これからか……」

アサギの言葉を受け、ディスプレイから近くの売店で三人分の軽食を買い求めているマユラへと視線を移しながら、胸の内の予想をまとめて、口に出してみる。

「プラントが責任回避に動いた場合は、また、戦争だろう」
「……では、責任を認めて、謝罪したり、賠償に応じた場合は？」
「その場合、それなりの確率で戦争は回避されるだろうが、被災国というか、プラントと距離を置く国は？いやがらせ？めいた経済制裁を発動する可能性が高いとも考えられる」
「スペースコロニーに必須な、水や食糧等の輸出制限？」
「まぁ、表立ってはそれと見えない形になるだろうけどな」

もっとも、そんな感情的な側面を抜きにして、現実的に考えても、自国が大規模な被害を受けてる状況で、他所に回す物資はないはずだから、これが丁度いい言い訳になるって寸法だ。

「親プラントを国是にしている大洋州連合は支援しないと？」
「俺だったら、逆に支援を寄こせって怒鳴る被害だ。今回はそう簡単には味方しないさ」

親プラントを標榜しているとはいえ、大洋州連合内にも反プラント派が少しずつ台頭してきているみたいだし、今の流れのままだと、政権が引っくり返る可能性だって考えられる。

「結局の所、プラントがどう……、ニュース速報みたいだな」
「ええ、そのようですね」

さて、ディスプレイの上部分に速報を知らせる文字が躍っているが、何が出てくるか。

「……プラント最高評議会議長、ユニウス・セブンの管理が不十分であったと正式に認め、公式に謝罪すると共に、今回の落下テロで被害を受けた被災地に対して、復興支援を表明。また、テロリストとプラント政府及びザフトの組織的な関与は否定するも、国際刑事機構の立会いの下、全面的な内部調査を約束、か」

「三佐、これは……」

「あー、これはちょっと荒れそうだなぁ」

復興支援や他国の目を入れた全面的な調査はいいが、肝心の賠償が抜けているとなると、各国から反発が起きてもおかしくはない。

「まぁ、被害が全世界規模に広がっているだけに、賠償しきれるとは考えられないのは確かだが……」

「今回のテロで被害を受けた側の感情は許さないでしょうね」

「ああ、それに……」

っと、流石にここじゃ、これ以上の話はまずいな。

アサギに目配せして見せると、向こうの同様の結論に至っていたようで、小さく頷き返してきた。

そんな俺達に影が落ちてきたのに気付き、顔を上げてみると、マユラが可愛く口を尖らせていた。

「むー、アサギ、私が寝てる間に、もしかして、アインさんの内堀埋めた?」

「えっ、何の事?」

「とぼけても駄目だからね。女の勘って、自分の男に関してはもの凄く働くんだから」

そんな見も蓋もない事を言いつつ、アサギと俺に軽食……、サンドイッチや旧日本の影響を大きく受けているオーブらしく、おにぎりやお茶を手渡すと、俺の隣……アサギとは反対側に陣取って、甘えるように腕に縋り付いて来た。

当然の如く、昨晩もお世話になった、我が侭な胸の膨らみから温かみと鼓動が伝わってくる。

「チッ、狙ってたのに」
「くそっ、なんだってんだ、あいつ。軍人の癖に、二股だと？　あいつより俺の方が、絶対、顔は上だってのに、この世の中、絶対に狂ってやがる」
「リア充モゲロ！　モゲテシマエッ！」
「お姉さん、この売店に、金槌とか、釘とか、人形とか、売ってないの？」

周辺で、ちょっとした声が聞こえてきたが……、まぁ、無視しておこう。

「ま、マユラ、流石に、制服姿でそういう事は、止めた方がいいんじゃない？」
「ふふーん、私、軍での栄達なんて、もう興味ないから、いいもーん」
「いや、だ、だから、マユラじゃなくて、三佐に迷惑が掛かるって言いたいの」
「あー、マユラ、嬉しい事は嬉しいんだが、一尉の言う通り、ＴＰＯは弁えて欲しいな」
「ちぇー、アインさんって、昨日の夜の息子さんと一緒で固いなぁ」

ちょっ、おまっ！

また、周辺の気配が一瞬だけ強くなると、ざわ、ざわ、と主に男の囁き声が……。

「さて、どうやって、始末するべきか」
「シンプルイズベストだ、山に埋めよう」
「いやいや、足に鉄球を繋いで、海に沈める方がいい」
「だめだめ、ああいう野郎は、ジュニアをもいで収穫してしまうのが一番効果的だ」

うぅ、流石に、周辺を見回す勇気はありませぬ。

「ま、マユラっ！」
「にしし、これが経験者の余裕って奴よ、アサギと違ってね」
「ッ！」

ああ、今度は、アサギの顔色が羞恥と怒りで真っ赤にって、そろそろ、止めないとマズイな。

「おい、マユラ」
「なにっぅっ！　い……、いたい」

空いている手で、デコピンをして、これ以上のマユラの暴走を止める。

「ちょっと、はしゃぎすぎだ」
「……うん。……ごめん、アサギ」
「……はぁ、もう、いいわよ。マユラが調子に乗りやすいのは昔からだし」

「むぐぅ」
「でもね、今に見てなさい、マユラ。今にその余裕をなくしてやるから」

あわわ、アサギがコードウェル妹が俺との模擬戦で負けた後に、よく見せていたような表情をっ！

「の、望むところよっ」
「本当にいいの？　私、三佐、取っちゃうわよ？」
「絶対に負けないわ！」

な、なんて事だ、マユラにまで火が……って、さり気に男連中の包囲網がジリジリと狭まってるっ！

「んんっ、コードウェル一尉、そ、そろそろ、と、とと、搭乗時間に、な、なるんじゃないかな？」
「……あ、あら、本当ですね」
「ほ、ほれ、マユラも、一尉を睨んでないで、い、移動する準備を」
「むー、わかったわ」

再び、聞こえてくる男達の舌打ちと密やかな罵り声を耳で拾って思う。

やれやれ、本当に、ここは落下するユニウス・セブン以上の危地だわ。

◇　◇　◇

俺達三人が乗ったアメノミハシラ行きの連絡船は、特に何事もなく、マスドライバーによって打ち上げられたのだが……、うん、初めて体感したけど、マスドライバーって、中々、経済的で便利だと思うわぁ。

仕組みとしては、第一段階加速として、海に向ってせり出しているマスドライバーで身体に過負荷にならない程度で等速加速する事で音速越えまで持って行く。そのレール上で音速を超えた段階で、第二段階加速として連絡船備え付けの補助推進機……スクラムジェットを始動、一層の加速を開始して、空に投射。後は大気圏を出るまでスクラムジェットで加速して、宇宙空間に離脱するって形だ。

そんでもって、空気がほとんどなくなる宇宙空間まで到達したら、燃料満タンの連絡船本体のスラスターを使って、加速や軌道の微調整をして、目的地への航路に乗るらしい。

ちなみに、無人の貨物のみだと、地球軌道上に直接投入できる位に加速させるらしいが……、そこまでいくと、よくぞまぁ、その貨物を入れているカーゴが空気抵抗で燃え尽きないモノだと感心せざるをえないって、そういえば、宇宙商船で使ってる例の往還型コンテナ搭載部もそうなんだよなぁ。

いやはや、前世からは想像できない程に、凄い技術ってなもんだ。

そんな具合に、一人頷いていたら、窓際に座っていたマユラが、小さくと驚嘆の声を出した。

「どうした、マユラ」
「ほら見て、アインさん」
「おっと、これは……」

マユラの言葉を受けて、小さな窓を覗くと、地球の影から姿を現した太陽、その光を受けて、地球の夜面が昼面に変わる所、いわゆる、明暗境界線がくっきりと見えた。

「あー、そういえば、こんな風にゆっくりと地球を間近で見たことなかったな」

地球軌道上に来たのって、戦争時ばかりで、四月馬鹿が起きたり、戦闘したり、仕事に追われてたりしたからなぁ。

……。

でも、なんか、いいな、こういうのって。

「三佐、綺麗ですね」

「ああ、先の落下テロで大規模な被害を受けたとは思えないほどにな」

「もう、アインさん、ちょっと位、純粋に楽しむって事ができないの？」

「ははっ、そうだな」

確かに、マユラの言うように、一時位は忘れる事ができたらいいんだが……、また、戦争の引き金が引かれるかもしれない状況だと、そう簡単に忘れる事はできない。

……今回の一連の騒動、やっぱり、戦争になるんだろうか。

「アインさん？」

何とか、戦争を回避する方向に時流が流れてくれればいいが……、

事が事だけに難しいかもしれないな。

「……三佐？」

今回の事で、一番の責任があるプラントからは毟り取る気満々だったけど、戦争はノーサンキューだ。

なにせ戦争という非常事態が、ヒトの理性を容易に振り切る事は先の戦争で実証されているんだ。事が起きたとしても、せめて限定戦争に止めて、全世界規模の全面戦争だけは回避して欲しい。

「むー、言った途端に考え込んでる」

「よくあるの？」

「頻繁じゃないけど、たまにね」

でも、サトー達、テロリストとデュランダル議長に代表されるプラント政府やザフトとが繋がっているかどうかで、話が大きく変わってくるだろうなぁ。

はぁ、せめて、プラントが形だけでもいいから、賠償に応じる態を取っていたら、ここまでヤキモキすることはなかったのに……って、いたたっ！

気付いたら、悪戯顔をしたマユラが俺の脇腹を思いっきり、抓っていた。

「ま、マユラ？」

「いい女を放って、一人の世界に入り込んで、考え込んでいる悪い男に制裁中でーす」

「じゃあ、無視された私にも制裁する権利があるわね」

「ちょ、いちいちちっ！」

どこか拗ねた感があるアサギにまで抓られた事で、両脇ががが
っ！

「三佐、いえ、アインさん、思いつめるのも毒ですよ？」
「そうそう、ＴＰＯが大切なのはわかってるけど、リラックスでき
る時はリラックスしようよ」

あうあうあう、痛みが、なんだか、快感にって、ちがうっ！

「わ、わかったから、そろそろ、離してくれ。危ない性癖に目覚め
そうだ」

俺の物言いに両者共に、クスクスと笑うと、マユラは素直に、ア
サギはもう一度力を込めて抓ってから、手を離した。

なので、ちょっとした意趣返しを試みる事にする。

「なぁ、マユラ、アサギって、あれだな。人をいぢめて、喜ぶタイ
プじゃなかったか？」
「なっ、さ、三佐っ！」
「うん、確かに、？いぢめっ子？の気があった気がする」
「ま、マユラまでっ！」

思わぬ逆撃にアサギが頬を朱に染めて、抗議の声を上げようとし
ているが、マユラと目配せしあって、アサギからの意見を封じるよ
うに畳み掛ける事にする。

「わた「でも、どうしてわかるの？」いてっ！」

「いやさ、さっき、抓ってる手を離す時にさ、駄目押しにもう一抓りされたんだよ」
「い、今の「あ、だから、わかったんだ、アサギの本性」マユラっ！」
「ああ、今まで以上に力を込めてたからさ、もしかしてって思ってな」
「だか「なるほどねぇ」二人とも、聞いて！」

ようやく、話を遮ったアサギは、今度は興奮と羞恥の所為だろう、先程のように顔を赤く染めた上、両手で口元を覆いながら、涙目で切々と訴えてくる。

「二人とも、酷い。私、そんな人をいぢめて喜ぶような事はしないわ」
「ははっ、わかってるさ。今のは、ただの冗談だよ」
「……冗談にしても、酷過ぎます」

あ、あぅぁー、やりすぎたか？

「あー、いや、悪か「待って、アインさん」マユラ？」

何故か、ジト目をアサギに向けたマユラは、少々強引に、アサギの両手を口元から引き剥がすと……、隠されていた口元には笑みががっ。

「もう、せっかく、アインさんから一晩一緒に過ごす約束を取ろうとしたのに、マユラ、邪魔しないでよ」
「邪魔するわよ。ねぇ、わかったでしょ、アインさん。アサギって、私達っていうか、アストレイのテストパイロットを務めていた三人の中で、一番頭が回るんだから、油断しちゃ駄目」

「……今度から、気をつけるわ」

しかし、アサギと一晩一緒に過ごす約束か……。

「……アインさん、まさかとは思うけど、残念だとか、思ってない？」

「いやいや、そんなことはこれっぽっちも」

「え、あのフライト中、私に言った事は嘘だったんですか？」

「あ、あー、その、実は、結構、思いましたですはい」

「もー、アインさんたらっ、昨日の夜、私とあれだけしておいて……、まだ、足りてないの？」

「いや、ま、マユラ、その、これはだなっ」

「言い訳無用。……アインさん、ユニウス・セブンで無茶した件と今回の件について、レナとミーアちゃんと一緒に、タップリと搾るつもりだから、覚悟しておいてね」

「……はい」

うぅ、これは奥様連から伝えられたっていう、伝説の説教部屋行きって事か？

これから先に待ち受ける、三日三晩の説教地獄を思いつつ、連絡船内部のモニターに映るアメノミハシラを眺めながら、お、女って怖いと、改めて実感すると共に、密やかに心中で涙した。

56　悲嘆する蒼き星　―ブレイク・ザ・ワールド　4

約一週間ぶりに帰ってきたアメノミハシラだが、流石に家に直行と言うわけにはいかず、任務に失敗した旨を報告するのを兼ねた帰還報告をする為、宇宙軍総司令部に赴く事になった。

そんな訳で、直属の上司に位置づけられる、即応部隊司令のトウラン一佐の元へと報告に行くと、

「ラヴィネン二尉からオペレーション・トラクターでの作戦行動に関する報告書は既に受け取っているし、以後の行動についても先に報告書を受け取っているので、ラインブルグ三佐が特に付け加えたい事がなければ、これらを正式な報告とする。……先の任務については残念な結果に終わったが、君が、いや、君達が全力を尽くした事は十分に把握している。よって私からは言うべき事はないし、君が過度の責任を感じる必要もない。それよりも、よく生きて戻ってきてくれた。ラインブルグ三佐、私は君の生還を嬉しく思う」

だなんて、とっても有難い言葉を頂いた。

うぅ、ザフトでは、まず考えられないよっていうか、あの戦争の二年間、こんな温かみのある言葉をザラ議長以外の上役からほとんど聞いた事ないぞ、おい。

かつて所属していた組織の悲しい現実を思い返しつつ、帰還報告も終わって、三日間の休暇ももらえたし、今日は家に帰ってミーア達に心配を掛けたと平謝りするかぁだなんて事を考えながら、トウ

ラン一佐のオフィスを辞すると、つい先程、司令部の出入り口で別れたばかりのアサギが通路で待ち受けていて、捕まってしまった。ちなみに、この場にいないマユラだが、エヴァ先生の所に精神状態の診断を受けに行っている。

「三佐、サハク准将がお呼びです」
「……呼び出し？」
「はい」

任務報告は終わったんだけど、いったいなんだろうか等と考えるも、上位者からの命に服さない理由はなく、いつもの如く、アサギに案内されて司令官室に赴く事になった。

その道々、少しでも情報を仕入れる為にアサギに問い掛ける。

「准将、忙しいのか？」
「ええ、先程、帰還報告に行きましたけど、第一秘書……首席副官を務めているフルヤ三佐が、准将のスケジュール調整や参謀本部との連絡に追われていましたから、お忙しいでしょうね」
「コードウェル一尉はいいのか？」
「私の主な役割は見聞きした現場の生の声を司令に届ける事ですから、基本的にそこまでは忙しくありません。副官部には他のメンバーもいますしね」

なるほど、サハク准将らしい人の使い方だなと納得しつつ、話を転がす。

「じゃあ、その一尉が見聞きしたアメノミハシラや司令部内の空気はどうだ？」
「今、帰ってきたばかりなので、把握できているのは司令部内の極

一部だけですが、それ程、荒んではいないようです」
「先の作戦でテロリストに出し抜かれて、地球にユニウス・セブンの落下を許した影響はあまり出ていないと？」
「はい」

……ふむ。

「あの時に、できる限りの事をしたからかね？」
「恐らくですが、他国軍……三大国軍が対処に動けなかった中で、対処に動けた事が大きいかと」
「普段、世界に対して大きい顔をしている連中が動けなかった状況で、落下阻止の為に動けただけでも遥かにマシだろう、って奴か？」
「ふふ。ええ、言い方は悪いですけど、そのような感じです」

まぁ、立地に助けられたとはいえ、僅かな間に即応できたんだから、その評価は正しいわなぁ。

……なら、サハク准将の機嫌、そこまで悪くはないかもしれない。

◇　◇　◇

アサギの先導で司令官室に入室すると、サハク准将は執務机で書類と睨めっこしながら、様々な案件の決裁をしていたようだ。

いやはや、この刻一刻と変化していく世界で舵を……自陣営の方針を決める司令官って、重責だし、本当に大変だよなぁ。

そんな思いを内心で抱いていると、書類から目を離してこちらを

見た准将は、いつものように、口元に不敵な笑みを浮かべ、普段と変わらぬ声音で話し掛けてきた。

「先の任務、ご苦労だったな、ラインブルグ」

「いえ、任務を満足に果たせず、申し訳ありませんでした」

「ふっ、それを言うならば、みすみすテロリストの攻撃を許してしまった我とて同じ事だ。既に終わってしまった事である以上、必要以上に気にする事はない」

そう応じてくれたサハク准将に軽く頭を下げる事で感謝の意を示し、次の言葉を待つ。

「さて、今日、ここに呼んだのは、お前の意見を聞く為だ」

「意見、ですか？」

「ああ、より多くの意見を聞く事で、今後の方針決定の参考にしたいと思ってな」

多くの意見を聞きすぎた結果、多種多様な意見に翻弄されるって事もあるけど……、サハク准将みたいに芯の通った人だったら、本当に参考にするだけで、自らの意思で方針を決定するだろうから、まず、大丈夫だろう。

だから、別に意見を言う事に関しては構わないんだけど、なんというか、ザフトのような組織体系が適当でいい加減もとい未完成だった組織ならともかく、ちゃんとした組織の中にいる以上はねぇ。

「あの、参謀本部や他のお偉いさん方には？」

「既に諮っている故、気にする必要はない」

「そういうことでしたら……、それで、何に関する事でしょう？」

「今回のテロ事件を受けて、アメノミハシラはどのように動くか、

また、戦争が起きた場合、どのような立場を取るか、だな」

ふむ、どのように動き、どのような立場を取るか、か。

……。

「今の状況においては、プラントと被災各国間の積極的な仲介はオーブ本国に任せて、以前のように、馬鹿なジャンク屋と言いますか、宇宙海賊が好き勝手に暴れ回らないように、各所に睨みを効かせて、宇宙の治安を維持するのが良いのでは？」

「理由は？」

「オーブ本国がやる気を出して、自ら苦労を買って出ようとしているんですから、その見せ場を奪うのも如何なものかって事と、被災各国が復旧、あるいは復興に向けて動くにしろ、安定して物資を供給できなければ話にならないって事ですかね」

今の社会、宇宙と地球が相互に関わりあって成り立っている事を踏まえて考えてみると、一方の乱れだけなら何とか支える事はできるが、両方が乱れた場合、先の戦争の時のような凄惨な状況を招きかねないからな。

「ついでに言えば、アメノミハシラで生産した物資を供給する事で、他所様から感謝されつつ、利益を得られるだなんて、漁夫の利的な面もあります」

「……では、戦争が起きた場合は？」

「その場合も、基本、火の粉が降りかかったり、どこかの陣営から圧力や脅しを受けない限り、関わらない事が一番ですよ。争いという名の舞踏会に参加しても、敵手（パートナー）に合わせた結果、ただ無様に踊り狂って疲れたり、多少の満足感を得られたとしても、大いに腹を空かせたりするだけで、酷い目にあうのは間違いないですからね。そ

ういった事は、やりたい人にやらせるのが一番です」
「ふふっ、お前は相変わらず、身も蓋もない物言いをするな」
「まぁ、今は軍属ですけど、一応、企業グループに属していますから……、戦争に巻き込まれると、軍需はいいですけど、民需に関しては経済活動が大きく停滞してしまって、碌な事がなさそうです。まぁ、ちょっとだけ毒を吐けば、実家から見ると、緊張状態だけど戦争のない平和な状態が最も儲かります」

自分、武器商人でもありますから……。

「ですので、俺の意見としましては中立的な立場で復旧と復興を支援して、戦争になった場合は自身の領域を守りつつ基本的には関わらず、戦後の復興期に備えて力と金を溜めるって所です」
「戦争には関わらず、自身の領域を守り、力を溜める、か……。ふむ、お前の意見、参考になった」
「いえ、微力ですが、お役に立てれば幸いです」

これで終わりかなと思いながら、次の言葉を待っていると、准将は俄かに頬杖をつき、卓上に置いてある書類をトントンと指で叩きながら、再度、口を開いた。

「もう一つ聞いておこう。お前も知っていると思うが、プラントはユニウス・セブン管理の不手際……責任を認め、復興支援を行うと共に、外からの目を招き入れての全面的な捜査を約束したが……、以後、どうなると思う？」
「……親プラントの大洋州連合はそれで矛を収めると思われますが、その他の国に関しては、サトーの取調べや実施されるであろうプラントでの捜査の結果待ちという所でしょうか？」
「被災国が自制して、プラントとの衝突は起きないと？」
「あ、いえ、三大国に関してはわかりませんね。三大国の内、ユー

ラシア連邦と東アジア共和国の国力は、紆余曲折を経て、落ち目になってますが、それでも単独でプラントを攻撃できるだけの軍事力を持っていますから、それを使って、何らかの報復を……、武力制裁を起こす可能性も高いでしょう。なにせ、三国共に、内部に大規模な反プラント・反コーディネイター勢力を抱えてる事もありますし、各国軍部もユニウス・セブンの落下に際して、これといった対処ができず、地球への落下を許しただなんて失態もあります。加えて、ここまで世界を牛耳り、リードしてきたという誇り……面子もありますしね」

「……ふむ、では、三大国が武力制裁を発動させるとして、どれくらいの規模と見る？」

「先の戦後復興の半ばでの被災という事もありますし、三大国としても全面戦争は避けたい所だと思います。よって、起きるとしたら、睨み合いから小競り合い程度ではないでしょうか？　……若干、俺個人の願望が入ってますから、ちょっと甘めの予測かもしれないですけど」

「……確かに、お前にしては甘い予測だな」

あー、やっぱり願望を抜きにしないと駄目か。

「と言う事は、既に三大国に動きがあると？」

「ああ」

「……帰ってくる途中に、コードウェル一尉から、地上と宇宙、それぞれに動きがあるとは聞いていましたが、そうですか、既に動き始めていますか」

「もっとも、地上に関しては、ユーラシアと東アジアは国内の分離独立派に対する牽制、大西洋連邦はカーペンタリア及びジブラルタルへの圧力が目的だろう」

「……宇宙では？」

「宇宙でもだ。三大国、それぞれの思惑は異なれど、三者ともに、

こちらが本命だろう」
「プラントに対する航路封鎖でも始めていますか？」
「いや、今の所、各国それぞれが、独自にＬ４に駐留していた艦隊を動員し、Ｌ１方面に動かして、Ｌ１に圧力を掛け始めている状況だ」
「あれ、三国は連携していないんですか？」
「言っただろう、それぞれの思惑は異なると」

確かにって、でも、地球圏の要衝……航路の重要経由地であるＬ１がそれだと、嬉しくない話だな。

「基本的には、プラントから譲歩を……賠償を引き出す為の駆け引きだろう」
「砲艦外交って奴ですか」
「……それだけで済めば良いがな」

えー、サハク准将ぅ、そんな不安を煽る物言いは止めてくださいよぅ、と、物騒な言葉に血迷って、カワイ子ぶってみたくなるが、盛大に引かれるか、汚物を見るような目で見られるだけだから止めておこう。

「それだけでは済まない可能性があると？」
「ああ、現状、プラントと三大国、使用している兵器の格差が実質的になくなり、抑止力であるジェネシスもなくなった今ならば、数の力を使って、前戦争期のベテランが多く存在するＬ１を封鎖できれば、プラント本国があるＬ５まではヤキン・ドゥーエ要塞位しか遮るものはない。強大な戦力を有する三大国、特に大西洋連邦ならば、単独でも要塞を抜き、プラントを制圧する位は容易かろう」
「つまり、これを良い機会と見た連中が、報復と銘打って、プラント本国に攻撃を仕掛ける可能性もあるということですか？」

「そういう事だ」
「……えと、准将は、プラント本国に存在する艦隊は脅威ではないとお考えで？」
「先の一件で易々と防衛圏内……本土に敵の侵入を許した上、新型機を強奪された事を考えると、その実力が知れていると思わんか？」
なるほど、そうとも受け取れるのか、だなんて思いが顔に出てしまったのか、准将は訝しげな表情を見せると、更に口を開くと質してきた。
「ふむ、何か、思うところでもあるのか？」
「いえ、先の一件ですけど、俺はてっきり、？ドラ猫？……プラントから新型機を奪取して見せた連中が、ザフトを上手く出し抜いたとばかり思ってましたよ」
「……む」
あ、准将も自分の侮り……ザフトの実力について、過小評価していた事に気付いたみたいだな、ちょっと、それは思いつかんかったわぁ、って顔をしたかと思うと、苦笑を浮かべている。
「相手を侮る等、我も少々、自惚れや相手への過小評価が過ぎているようだな」
「いえ、相手の実力を推し測る機会は少ないですからね、今回の件を受けて、准将がそう考えるのもわかる気がします」
「ラインブルグ、我に慰めは不要だ。だが、以後は、気を付ける事にしよう」
そうサハク准将が応じてみせるが……、こういう正すべき所は正すという姿勢が、准将に一つの勢力を率いるだけの力量を与えているのかもしれないな。

内心で上司を評価するだなんて、ある種の不遜な事を考えていると、准将は一つ咳払いして、改めた口調で話し出した。

「ラインブルグ、今日はご苦労だった。ウルブス小隊のメンバーには三日程、休暇を与えるように、トウランに伝えてある。しばしの間だが、心身の疲れを癒せ」

「ありがとうございます。そうさせてもらいます」

その言葉を最後に、俺は身体に染み付いてきたオーブ軍式の敬礼をサハク准将に施し、サハク准将がそれに頷いて応えた後、司令官室から退出した。

三日間の休暇は、心配を掛けたミーアやレナ、マユラのご機嫌取りと、知り合いへの謝罪で潰れるだろうなぁ、等と、内心でショボーンとしながら……。

57　揺れ動く世界　－新地球連合　VS.　プラント　1

時流れて、早くも十一月。
ユニウス・セブンの落下によって生じた被害の全容が地球各地で明らかになり、各国政府や民間有志による被災地への救援活動と復旧支援が本格的になっている。宇宙軍に属していることもあり、地球圏内宇宙航路の治安を維持するという間接的な支援しか出来ない事もあり、中途半端なもやもやとした感覚があるが……、これもまた致し方がない。
だから、俺は俺に出来る事を、低軌道のデブリ排除や航路維持を行う他、通常任務である仮想敵任務をいつものように行っている状況だ。

と、こんな風に以前の四月馬鹿の時と違い、自分達がユニウス・セブンの落下阻止に失敗し、あれだけの大災害を許してしまったという一面の事実を前に、あまり引き摺らず、これまで通りとほぼ変わらない状態でいられるのは、周囲に思いを同じくする仲間……、任務に失敗した事を悔いている小隊メンバーや任務部隊の同僚達がいる事もあるが、やはり、三日間の休暇で上手くリフレッシュができた事が効いているみたいだな。

そう、宇宙軍司令部への任務報告後、与えられた三日間の休暇は、初日から終日まで、俺がＭＩＡになってから、ずっと身を案じてくれていたミーアやレナ、マユラの三人から、冗談抜きで四六時中、散々に、物凄く激しく、それこそ身体から水分がなくなる位に搾られたり、親父や愛すべきおっさん連中からは難しい顔で、立場と思いはわかるが無茶はするなと窘められたり、シゲさんとパーシィか

らはやんわりと厳しい忠告を受けたり、ベティには一瞬意識が飛んだ程の強烈な拳骨を喰らったり、奥様連には包囲網の中で正座しての説教を四半日受けたりしてと、大いに反省する日々だった。

まぁ、それに伴なって、三人もの麗しい女から愛されているという充実感を心身に得ると共に、我が身を純粋に心配してくれている肉親や友、頼りになる？小父や小母？の存在に大いに感動させられたものだ。

ちなみに、三人からの？罰？だが、最終日には、流石に身体が持たなくなってきて、これまでの日常生活に戻して下さいと懇願していたりする。いやはや、あの？厳罰？もとい？愛欲？に満ちた三日間を送った事もあり、心中で一人の男への賞賛の念を新たにしたモノだ。

ザラ議長、公の激務をこなしながら、その身がヤツレテ行こうとも、毎晩、夫としての役目を果たし続けていた、あなたは、我々、全ての男の鑑です。

って、どうでもいい自身の話は置いておくとして……、先月、ユニウス・セブンの管理責任を認め、復興を支援するとしたプラント最高評議会議長ギルバート・デュランダルの声明により、一部、矛を収める国が出たものの、やはり、収まりがつかない国というよりは市民の方が多く、それに伴なって、宇宙ではきな臭さが強くなってきている。

今月に入ってから、Ｌ４コロニー群に駐留している大西洋連邦軍や東アジア共和国軍が、港湾及び艦艇駐留機能を拡張させつつある静止軌道上のアルテミス要塞からはユーラシア連邦軍が、それぞれ、

プラント領であるＬ１に対して圧力を掛けるように、Ｌ１宙域近くに艦隊を展開させ始めたのだ。
当然の事ながら、この三大国軍の動きに対して、Ｌ１を管轄しているプラント国防軍は持てる全兵力を動かして、Ｌ１外縁部で対峙するように動いている為、膠着というか緊張状態に陥っている。

このＬ１宙域で発生している睨み合いの影響は非常に大きく、ようやく落ち着いてきていた地球圏の人の流れや物流が徐々に悪くなり始めているし、下手をすれば、地球の復興作業に大きな遅延を生み出しそうな気配だ。

まぁ、幸いな事に、今の所、プラントと被災各国との仲介に奔走しているオーブ本国から要請を受けたサハク准将が積極的に動いて、緊張の糸が切れて、突発的な戦闘が発生しないよう、両軍に対して、挑発的な行動を控えるように自重を求めているが……、向こうにはこちらの意見に従う義務はないし、軍自体、政治サイドや上級司令部から命令が下れば、動かなければいけないもの、動いて当然のものなのだから、いつ何時、戦端が開かれてもおかしくはない。

ようやく人の暮らしと経済が立ち直りつつある状況であるだけに、何とか、戦争回避の方向で、各国政府が動いて欲しいものだ。

◇　◇　◇

１１月８日。
アメノミハシラは地球圏内航路の要であるＬ１が緊張状態にある影響で、航路の様子を窺ったり、ＳＫＯの定期便を待つ商船が増えたりした事で、常よりも人が増えて、非常に賑やかになっている。

通常なら滞在者の増加は？天下の回りもの？がアメノミハシラに多く落ちる事に繋がる為に喜ばしく、また居住している市民にも活気が生まれてくる所なのだが、それが戦争になるかもしれないから、だなんて理由だと素直に喜べないようだ。

即応部隊に属している俺、というかウルブス小隊の面々も、いつ何時、事が起きても即座に対応できるようにするべく、仮想敵任務以外の時は、通常よりも身体を動かしての訓練時間を半分程度に抑えている状態だ。

そんな訳で、オーブ宇宙軍が使用する三つの軍港の中の一つ、第二軍港の一画に係留されているウワツの中、各独立小隊に与えられている専用オフィスで、仮想敵となるプラントや三大国軍が使用しているＭＳやＭＡ、艦艇について勉強会を開いたり、これらに対応する戦術の検討をしたり、戦術の訓練計画を立てたりと、できる事をしている。

今も、つい先程まで話し合っていた、対艦攻撃を仕掛けてくるＭＳへの小隊での迎撃方法という案件で、ある程度の結論が出た事もあり、自主訓練時間という名の休憩に入った所なのだが……。

「もー、ユカリの奴、少しくらい、休んだらいいのに」

「ふふ、マユラ、それだけ、ユカリちゃんの気合が入ってるのよ」

既にというか、早速というか、コードウェル三尉は、先の実戦で得たモノを少しでも血肉にする為にだろう、シミュレータールームに向かったようだ。

いや、若いというか、元気あるよなぁ。

「まぁ、それだけ自分の能力を自覚して、経験の足りない部分を補おうとしているんだろう」
「でも、アインさん、いざ、事が起きた時に使い物にならなかったら、意味がないと思うの」
「確かに、マユラの言う事は一理あるなぁ」

等と応えながら、休憩という事で弛緩した思考回路のまま、何となく、マユラの姿を……、特に、男の目には毒になる程に、我が侭に、パイロットスーツを押し上げている部分を視線で愛でていると、サービス精神が旺盛なマユラは気でも利かせたのか、その部分を強調するように、我が侭な膨らみの下に腕を入れて……、拝んでもいいかなぁ。

等と、鼻の下を大いに伸ばしていると、それを見咎めるかのように、レナの声が耳を打った。

「……先輩、一応、言っておきますけど、今は勤務中ですからね？」
「ん、ああ、わかってるよ？」

声の方向へと目を移すと、マユラには及ばぬものの、最近、押し上げる膨らみが大きくなってきた部分にぶつかった。

むむむ、こっちもまた、綺麗な形が見事に浮かび上がっていて、中々に、乙なモノだよなぁ。

「ちょっ、ほ、本当にわかってます？」
「あは、レナッたら、アインさんがこうなのは、今更じゃない」
「そ、それはそうだけど、時と場合を考えないと駄目でしょう」

レナの言うこともっともだと、意識を引き締めなおして、最初

にマユラが示した懸念に答えを出す。

「んんっ！　コードウェル三尉に関してだけど……、マユラ」
「何？」
「ある程度の時間になったら、三尉の様子を見てきてくれ。そして、マユラの判断で、オーバーワークだったり、明らかに無理をしているように見えたら、休ませてほしい」
「え？　……レナじゃなくて、私でいいの？」
「マユラだって、もう、自分の管理をしっかりとできるようになってるし、そろそろ、世話をされる側から世話をする側に回ってもらう」
「えと……、それって？」
「簡単に言えば、小隊長位の仕事を任せられるって事さ」
「……ま、まぁ、そういうことなら、見てくるわ」

おんや、マユラの奴、照れてるのか？

俺が気付くくらいだから、当然、レナも気付いたようで、微笑ましそうに笑みを見せているが、何も言わない。

「む、むー、なによ、レナ、その笑いは……、た、確かに、今までは自分の事だけで精一杯だったけど、私だって」
「ふふ、わかってるわ。今のは、マユラの成長を喜んでいたのよ」
「～～ッ！」

あらら、レナからの純粋な祝福だってわかって、マユラの顔が真っ赤になったわ。

「わ、私、ユカリの所に行ってくるわ」
「ああ、任せるよ、マユラ」

「あ……、うん！　私に任せて！」
「あ、マユラ、張り切りすぎたら駄目よ」
「うん、わかってる」

俺とレナの言葉を背に、マユラは機敏な動きでオフィスから出て行った。

「ふふ、マユラ、先輩に評価されて、嬉しそうでしたね」
「まぁ、実際、それだけの力が備わっているからな」
「それも、本人に言ってあげてくださいね」
「了解」

首肯する事で応えつつ、昨日、アサギが持ってきてくれた、先月末に新しくオーブ宇宙軍に加わった艦艇……【ＳＣＭ－２１】ムラクモ級ＭＳ母艦ムラクモに関する資料に目を通す。

「先輩、それって、ムラクモの資料ですか？」
「ああ、どういう艦なのか、具体的に知っておきたいと思ったから、コードウェル一尉に頼んでおいたんだよ」
「へー、そうですかぁ。……そういえば、最近のアサギさんって、色っぽくないですか？」
「んー、言われてみれば、確かに、色っぽいと言えば、色っぽいな」

特に、細くて白い首筋に……、うなじに目が行くっていうか、惹かれるんだよなぁ。

「先輩」
「ん？」
「ちゃんと、責任を、取ってくださいね？」
「……いや、俺は確かにスケベだけど、一尉には手は出してないよ

？」

いや、ほんとに、キスどころか、手も握ってません！

ほ、本当に、マジですよ？

「それは三人で監視してますから、わかってます。私が言いたいのは、アサギさんが先輩に対して、その気になっているんだから、ちゃんと最後まで面倒を見てくださいって意味です」

「……えと、何故にその事を知っているのかというか、レナはさ、それでいいのか？」

「はい、随分前から気が付いていた事といいますか、本人からしっかりと聞きだしてますからね」

「えっ、いつの間に？」

「内緒です。まぁ、とにかく、そういう訳で、一応は、先輩がその気になったらという条件で見守ってきましたが……、ふふ、先輩」

「な、なんでしょう」

「元々、今更な話ですから、とっくに覚悟はしてましたけど……、私も女ですから、本当は、物凄くっ、……嫉妬してますよ？」

おおぅっ、うつむき加減で目が見えないレナから発せられる不可視の冷気で、凄まじい怖気が全身にっ！！

「た、多情な男で、すまんです」

「でも……、私を……、私達を大切に……、絶対に離さないって、約束してくれるなら、我慢します」

「い、いや、それは絶対にないっていうか……、どっちかっていうと、俺の方が見放されてもおかしくはないんだが？」

「うふふふふ、そうですか？　なら、ここは？先輩みたいな優良物件は中々いませんから、骨の髄までしゃぶり尽くすまで、絶対に

離れません？って、言っておきますね」

口元に浮かんだ薄笑いもあって、べ、別の意味で、怖さが更に倍ッ！

「ふふっ、冗談ですってば、先輩、そんなに蒼くならないで下さいよ」

「い、いや、そう言われてもな」

我が息子が縮み上がって震えている上、胸奥の獣も尻尾を股に挟んで、お腹を見せているよ。

「もぅ、先輩は……、仕方がない人だなぁ」

と、のたまったかと思えば、静かに近づいてきたレナは、素早く俺の唇を奪って見せた。

「……私が先輩から離れるわけがないって、これで信じられますか？」

「……もう一回してくれたら、信じるよ」

そんな俺の甘えた言葉に、レナは艶やかに微笑むと深く口付けてきた。

◇　◇　◇

精神的な充実を得た甘い一時の後、レナが鼻歌を歌い出しそうな程に機嫌よくマユラ達の様子を見に行ったので、俺も改めてムラク

モの資料に目を向ける。

ムラクモはモルゲンレーテ・アメノミハシラ支社がトツカ級を世に送り出した後、開発が始められたＭＳ母艦で、オーブ国防宇宙軍の宇宙艦隊構想の要になる重要な艦艇だ。

資料に描かれている艦構成を見てみると、三胴艦と呼べそうな形状をしており、三つの胴体は推進軸に対して平行に並んでいるようだ。

そして、三つの胴体の内、艦の上方からムラクモを見下ろす形で見たら場合、ちょうど中央に位置する胴体はイズモ級の中央構造体……格納庫等が設置されている艦体部分を流用した中央胴体の後部には、大型の艦橋が据えられている。

また、残り二つの胴体……これらも先と同じくイズモ級の中央艦体を流用した物を、中央胴体から見て両舷側……左右舷側に、中央胴体を軸線とした線対称に配置されており、その外側舷にイズモ級のモノに似た側舷スラスターが装備されているようだ。付け加えれば、その左舷胴体と右舷胴体は、艦体を横から見ると、一直線には並んではおらず、中央胴体よりも下部に位置している。

むー、かなり無理に見れば、ナスカ級に似てなくもないが……、あれと違って、こいつは中央胴体よりも左右舷胴体が前方に長い上に太いし、側舷スラスターもあるから、やっぱり似てないかねぇ。

むむぅ……、やはり、艦首の電磁カタパルトを取り払ったイズモ級を三つ並べたって素直に言った方がいいかもしれないかな。

まぁ、外観は一先ず置いて……、【ＳＣＭ－２１】ムラクモに艦載できるＭＳ数は、全高２５ｍまでのモノという制限があるが、中央胴体の艦橋の下部に存在する、三つの胴体……中央胴体と左右舷

胴体を繋ぐ連結ブロックという、非常に重要なエリアに設けられた中央格納庫に十六機、左右舷胴体内部の格納庫に各二十二機、総計六十機を艦載できるようだ。また、その他にも、左右舷胴体艦底部にパッツを十二機収納スペースを確保しているとも書かれているな。

ＭＳを六十機艦載できるとなると……、三機一四個小隊の十二機で一個中隊編成だったら、予備機なしの五個中隊か、四機一四個小隊編成の十六機で一個中隊編成なら三個中隊……一個大隊に、偵察機や予備機が十二機って所かな？

まぁ、ＭＳ運用に関しては、宇宙軍の偉い人達が決めるだろう。

そんなＭＳを迅速に発艦させる為のカタパルトは合計で五基あり、中央格納庫から出撃させるのが、左右舷胴体の内側舷に装備された、イズモ級で使われているモノを改良した電磁カタパルトで、左右舷格納庫から出撃させるのは、着艦デッキも兼ねた左右舷胴体艦上部に、推進軸と平行にそれぞれ二本ずつ走ってる、リニアカタパルトのようだ。

付け加えれば、中央格納庫と左右舷格納庫は艦内部で繋がっており、不調なカタパルトがあった場合、別のカタパルトで発艦できる仕組みになっているみたいだ。

ちなみに、戦闘時には、中央格納庫と左右舷格納庫とを繋ぐ連絡路は三重の隔壁で閉ざされる他、広大な格納庫も幾つかの区画に分けて、隔壁を閉ざすらしく、ダメージコントロールもそれなりに良いように思われる。

次に、装備している兵装だが……、対艦攻撃兵装の類は一切装備せず、ビームファランクスやＣＩＷＳ、アンチビーム爆雷投射管といった近接防御火器や艦首に電磁式対ビームシールドしか装備していない。この事を踏まえて考えると、ムラクモは複数艦での行動が

大前提であり、単独行動は端から考えていないみたいだっていうか、単独行動ならイズモ級の方が向いているだろう。

それらを動かす為の動力については、主動力源に熱電発電システムを組み込んだ大型燃料電池と大容量バッテリーを装備し、カタパルト用に小型ＭＨＤ（Ｍａｇｎｅｔｏ－Ｈｙｄｒｏ－Ｄｙｎａｍｉｃｓ：電磁流体力学）発電機を三つ、予備動力源に太陽光発電システムに加え、少々非効率的でもあるが、燃料電池と複数のバッテリーをダメージコントロールの為、各所に分散配置しているみたいだ。

動力に関しては、対艦攻撃兵装を装備していない事から、一見して、余裕がありそうだが、ＭＳの整備や充電に電気を使うから、丁度いいくらいなのかもしれない。

最後に推進系だが、幾つかの推進剤タンクを収納した各胴体後部、その最後方にそれぞれがスラスター群をもち、また、両側舷部には、各胴体との連結基部内に大容量の推進剤タンクを収めた大型スラスターが一つずつって具合だから、意外と機動性も高いかもしれない。

うーむ……、簡単にムラクモの特徴を挙げてみたけど、艦そのものの対艦攻撃力を削ぎ落とした代わりに、発着艦機能を強化して艦載できるＭＳを増やしている事から、攻撃能力を全て艦載機に委ねた本格的なＭＳ母艦と言えるだろう。

うんうん、オーブの宇宙艦隊が欲していたＭＳ艦載能力を充填するのに十分な性能だな。

これが艦隊に配属されて戦力化が成ったら、プラントや大西洋連邦の宇宙艦隊と同程度か、若干落ちる程度の戦闘能力を有する事になるはずだ。

そんな事を考えていると俄かに出入り口が開き、華やいだ女声と共に、レナ、マユラ、コードウェル三尉の三人が入ってきた。

「マユラさん、シミュレーターで撃墜された時に出てくる、例のとってもムカツク一文って、三佐が入れたんですか？」

「そうなのよ、ね、レナ」

「ええ、嘘みたいだけど、本当なの、ユカリちゃん。先輩が、これで、皆、一層、励むだろうだなんて、ニヤニヤ笑いながら、導入したの」

「確かに、ヤル気が、メラメラと湧いてきますね、あれは……」

「まぁ、でも、自分もシミュレーターで撃墜された時に、あれを見て、剥きになっちゃった事もあるから、自業自得よねぇ」

「さ、三佐って……」

「ふふ、でもね、そうやって、形振りかまわず、子どもみたいに負けん気を見せる辺りが、先輩の可愛い所なのよ」

「うんうん、極稀に見せる、ヤンチャな子どもがそのまま大人になった感じが、母性本能を擽られたりするのよねぇ」

「……ご馳走様です」

いや、コードウェル三尉、すまんかった。

等と、心中で呟きながら、レナ達が声を掛けてくるまで、俺は資料に集中して、聞こえない振りをし続けた。

……こんな日が毎日、続くならいんだけどなぁ。

58　揺れ動く世界　－新地球連合　VS.　プラント　2

１１月９日になって、南アメリカ合衆国で行われていたサトーに対する取調べが一段落した。
サハク准将からアサギを通じて内々に教えてもらったが、その取調べでサトーから引き出された供述内容は、まだ裏付けが為されていない状態だが、ユニウス・セブンを落下させたテロリストとザフト内の一派と繋がっていたという事だった。
まぁ、サトーの供述内容がなくても、ジンＭ２型を部隊単位で運用したり、管理地での動きが隠蔽されていた事を考えると、テロリストとザフトとの繋がりがあった事は予測できた事であるのだが、それが一気に現実味を帯びた形である。

後、少しだけ詳しく述べておくと、サトー率いるテロリストグループと繋がりがあったのはコーディネイター至上主義者で構成される対ナチュラル過激派だそうで、元々はザラ派に組していたらしい。
だが、二年戦争後期になって、ザラ派が戦争終結を目指すザラ議長によって、対ナチュラル強硬路線から中道派や一部のクライン派を取り込んでの現実路線へと舵を切ったのを受けて離脱したそうだ。
そして、プラントが追い詰められる中、自分達の力を伸長させる為に、ジンＭ２型の生産工場へと人員を送り込み、密かに生産数を過少申告して、一部を秘匿していたとのこと。

……。

当時、Ｌ５コロニー群の手前まで追い詰められた苦しい状況の中、ザフトの一員として前線で戦った一人として、ジンやシグーからＭ

Sの更新を出来なかった連中の代わりに言いたい。

こいつら、ヤキン・ドゥーエ宙域に生身で放り出して、死ぬまで詫びさせるべきだ、……って、いかん、落ち着け、俺、それが言えるのは、まだ、ザフトに残ってる連中か、プラント国防軍の連中だけだ。

……。

んんっ、でもって、このサトーの供述内容を国際刑事機構を通じて伝えられた各国首脳が、さて、ザフトとテロリストが繋がっていたが、どのように動けば国益に適うだろうか、と考え始めたであろう矢先に、どこからというか、高い確率でブルーコスモス強硬派か過激派の構成員から世間に供述内容が漏れてしまった。

結果、当然の如く、世界というか、被災した地球市民を中心に、プラントに対して何らかの制裁を求める動きが見受けられ始めた。

この地球市民の動きを追い風とでも考えたのか、11日には、新地球連合を主導している大西洋連邦が世界各国に対して、世界安全保障条約を提案して締結を呼び掛けたのだが……、他の二大国は大西洋連邦が地球連合時代や戦後世界で見せた振る舞いから不信と不審の念を抱いているのだろう、無視して応じず、また、ユニウス・セブン落下による被害が比較的に少なかった地中海同盟や赤道連合、南アメリカ合衆国は国内で審議してから決定するとの返答に止めたり、親大西洋連邦のオーブ本国も各国とプラントとの仲介役という立場から回答を保留したり、親プラントの立場を取る大洋州連合やスカンジナビア王国が丁重に断ったりした結果、新地球連合構成国だけに止まるという非常に寂しい結果に終わってしまった。

つか、いくら地球市民が怒りに沸いているからって、国際条約は、しかも安全保障条約なら尚更に、そう簡単には締結できないと思うの……。

だなんて、俺の感想はさておき、大西洋連邦は己の目論見……対プラント脅威論を元にした世界安全保障条約によって、対プラント包囲を敷いた後は、これを足掛りに他国を取りこんで、行く行くは、自国が主導していた地球連合よ、もう一度！　的な考え……まぁ、これはあくまでも俺の推測である……が、寒い結果に終わった事で、自身と子分だけで動く事に方針を転換したらしく、新地球連合を構成している各国がプラントに対して宣戦を布告すると共に、月裏側にある大西洋連邦の基地アルザッヘルからＬ５のプラントに向けて、宇宙艦隊を発進させている。

この事を受けて、地球圏は緊迫の度を増しており、アメノミハシラにおいても、ムラクモが加入した第一艦隊がＬ５方面に展開して、有事に備えている他、三大国軍艦隊による包囲が続いているＬ１方面に対しても、アメノミハシラ防衛隊の防衛戦隊……正規艦隊から回されたハガネ級で構成された小艦艇群が、パトロールを行っている状況だ。

無論の事ながら、俺が属している即応部隊も他人事ではなく、双方に対する予備戦力として、二十四時間の待機状態に入っている。

◇　◇　◇

１１月１３日。

ノルズを応用した常時観測網やＬ５方面に展開している第一艦隊

からの通報で、Ｌ５のヤキン・ドゥーエ要塞の月方面宙域で、大西洋連邦軍艦隊とプラント……Ｌ５のザフト艦隊が衝突した事が確認された。

実際の戦闘が始まったことから、即応部隊も停泊していたアメノミハシラから出港し、第一艦隊の後詰になると共に、Ｌ１の大西洋連邦艦隊の動きも気に掛けるという任務についている。

「今の所、一進一退って所だな」

当直の為、レナ達小隊メンバーと一緒に、ウワツ内部のパイロット待機室で第一艦隊から送られてくるリアルタイム映像を眺めているのだが……、むむぅ、【エグザス】っていう最近になって公表された新型ＭＡやメビウス部隊に援護された、ダガーＬを主力とした大西洋連邦軍ＭＳ隊とザク・ウォーリアが主体のザフトＭＳ隊が前線で激しく争っている。

その前線の戦況はというと、ＭＡ隊の援護を受け、数の利も生かしたダガーＬが質で勝っているザク・ウォーリアを拘束しているという感じだ。

あの戦争から二年しか経ってないけど、ナチュラルが操縦するＭＳとコーディネイターが操縦するＭＳとがほぼ互角に戦っているのを見ると、ＭＳ関連の技術が著しい発展を遂げたって事がよくわかるよなぁ。

本当に開発初期からは考えられないと内心で独語していると、じっとモニターを見つめていたマユラが話しかけてきた。

「でも、アインさん、大西洋連邦軍にウィンダムの姿が見えないのって、おかしくない？」

「ええ、マユラさんが言った通り、多数配備されているはずのウィンダムが見えないのは、ちょっと変です」
「……おそらく、予備戦力か、決戦戦力って所かな」
「そのあたりでしょうね。あ、先輩、ダガーＬに動きが……」

どこか浮かない顔をしたレナが言った通り、ダガーＬの一部が、まるで戦域から逃げ出すかのように、後方へと退き始めている。

……けど、退いている方向は各々がバラバラのように見えるが、今のように俯瞰して見ていると、ある程度、統一された意思で退いているようだ。

「三佐、これは崩れているんでしょうか？」
「崩れているように見えなくもないが……、これは誘引みたいだな」
「誘引？」
「ああ、そのまま崩れかねないから、難しい業だけどな」

……さて、どうなるのかなっと。

「ザフト部隊が追撃を仕掛けてますね」
「ああ。でも、レナ、これって、どこかで見覚えがないか？」
「……はい、新星攻防戦やヤキン・ドゥーエでの最終防衛戦で似たような光景を見ました」

ということは……、コーディネイターの、いや、理由もなくナチュラルを格下に見るザフト隊員の特徴を上手く利用した罠って所だな。

「あっ、十字砲火帯が三重にできました」

コードウェル妹の言葉通り、戦域の後方に控えていた大西洋連邦軍の艦隊が、電磁カタパルトを上手く両舷に装備した２５０ｍ級……ネルソン級やミサイルの射出方向を９０。外側に……側舷へと向けたランチャーを装備する近接防衛用らしき１５０ｍ級……ドレイク級で構成されている、幾つかの艦艇グループが連携して、瞬時に、火力による三重の壁を作り上げた。先の後退が罠である事に気付けずに、突出してしまったザフト機が火線網に次々と絡め取られて、爆散していく。

「せ、先輩、凄いですね」

「ああ、以前よりも更にグレードアップしてるぞ」

いやはや、過去の戦訓からしっかりと学んでいるってことだよなぁ。

「うーん、やっぱり強いね、大西洋連邦軍って」

「そりゃ、マユラ。連中は？世界最強？を自任している位だからなぁ」

それでも、あまりにも見事なまでにしてやられているザフト側がちょっと異常のような気がしないでもないが……、やっぱりこれって、今、前線に出ている連中が経験不足っていうか、前戦争時のベテランが大挙してプラント国防軍に移った事が原因なのかねぇ。

「あ、ザフト艦隊がヤキン・ドゥーエに退いて行きます。……あれ？」

「どうした、レナ」

「あ、いえ、んんっ？　大西洋艦隊の別働隊かな？」

別働隊？

「ほら、ここです」

レナが指差した方向……、天頂極方面、以前のヤキン・ドゥーエ攻防戦で発生したデブリが溜まっている、一種の暗礁域近くに、大型の艦艇を中心とした小艦隊が見て取れたが、俯角方向で展開されている戦闘やヤキン・ドゥーエ要塞には目もくれず、多数のＭＳらしきモノを放出しながら、一直線にプラントのコロニー群に……って、まさかっ！

「おいおいおい、まさか、プラント本国に……、コロニー群に攻撃を仕掛けるんじゃ、ないだろうな」

「ええっ！」

って、しまった！

レナの家族は、プラントに住んでいたんだった。

道理で、さっきから落ち着きがないと思ったら……、いや、今のは明らかに、俺の失態だよなぁ。

考えなしに呟いてしまった俺の不用意な言葉が切欠になって、心の内に隠されていた懸念が噴出してしまったのだろう、レナは著しく動揺して、顔から血の気をなくしてしまっている。

「どどど、どどうしましょう、先輩！」

「お、落ち着け、レナ」

「で、でも、あそこには、りょ、両親や、い、妹が……」

自分の中で最悪の想定に思い至ってしまったのか、常の冷静さを

失ってしまっているので、後からレナを抱き締めて、耳元でゆっくりと言い聞かせる。

「落ち着け、レナ」
「で、ですがっ！」
「いいから、深呼吸をするんだ」
「……は、い」

俺の言葉に従って、レナは大きく呼吸を繰り返す。

それが三度目に至ってから、レナを諭すようにゆっくりと話しかける。

「レナ、プラントの防衛体制が以前と同じままなら、各市には、必ず、プラント防衛隊が駐屯しているはずだ」
「……あ」
「そうでなくても、プラントがあの動きに気が付かないとは思えないし、コロニーは、絶対に防衛しないといけないモノなんだから、何らかの対処をしないわけがないよ」
「そ、そうですよね」

その声音から、ちょっと落ち着いたかな、等と思いながら腕を解くと、コードウェル三尉が少々遠慮がちに問い掛けてきた。

「あ、あのー、三佐」
「ん？」
「今、レナさんにした対処方法って、男の人や他の女の人にも、するんですか？」
「まさかぁ。これはレナとマユラ、それにミーア限定さ。他の女性なら、他の同性に任せるし、男なら正気に戻す為に拳を一発って所

だな」

俺の正直な答えに、三尉は失笑を抑えられないようだ。

少しだけ、空気が軽くなったところで、マユラが茶化すようにレナに声をかける。

「はいはい、レナも落ち着いたんなら、アインさんから離れたら？」
「ま、マユラ、わ、私、そこまでは、落ち着いていないわ」
「……あー、そうみたいねって！」

……ッ！

「う、嘘でしょ？」
「ま、マユラさん、あ、あの光って……」

マユラとコードウェル三尉が漏らす言葉を耳にしながら、過去に見た光景を思い出す。

「せん、ぱい、今の……」
「ああ、今のは、明らかに、核爆発の閃光だが……」

あまりにも爆発が……、爆発が巨大すぎるぞ？

「うぅ……」

っと、いかん、レナがまた……。

慌てて、涙目になってしまったレナを抱き寄せて、しっかりと胸の内で抱き締めてやるが……、今の爆発って、ちょっと変じゃなか

ったか？

胸の内で震えているレナの背を軽く撫でながら、そんな事を考えていると、マユラが小声で問うてきた。

「……アインさん、今の爆発って、核爆発なのよね？」

「ああ、今まで何度か見たからな、まず、間違いないはずなんだが……」

「で、でもさ、ちょっと、爆発の規模が、大きすぎなかった？」

「そうなんだよ。あまりにも、爆発の規模が大き過ぎるんだよ。ついでに言えば、爆発した場所が、先のデブリ帯近くで起きていて、プラントのコロニー群には被害が出ていないようだしな」

そう、モニターを見る限り、コロニー群は健在だ。

その事自体は歓迎してもいいんだが、さっきの核爆発の連鎖は……、連鎖？

自分の中で自然に生まれてきた言葉に首を捻っていると、今度はコードウェル三尉が自身の見解をおそるおそるといった感じで述べた。

「三佐、今の爆発がおかしいという事は、ザフト側がなにらかの攻撃を仕掛けたんじゃないでしょうか？」

「……かもしれないな」

もし仮に、核が連鎖して爆発したとなると……、対核兵器用の指向性兵器の類だろうか、等と考えながら、眉根に皺を寄せつつ、更なる情報を得る為に映像を見据えていると、俄かに胸元で動きがあった。

「せんぱい、コロニー、大丈夫、なんですか？」
「ああ、レナ、無事だよ」
「ほ、本当に？」
「他人の命に関しては、嘘は付かないさ」
「……確かに、先輩は、そういう人ですよね」

こちらを見上げるレナの不安げな顔にも、ようやく微かな笑みが口元に浮かんだので、レナの身体を１８０。転回させる。

「……あ、よ、よかった、コロニー、無事だ」

その目で見て、ようやく安堵したのだろう、レナは詰めていた息を大きくを吐いた。

「レナ、落ち着いたか？」
「……はい、取り乱してしまって、すいませんでした」
「はは、レナの置かれている状況なら、そうなるのもわかるよ」

目の前で肉親が住んでいる故郷が焼かれようとしていた状況の中で、ついさっきまで、気取られないようにしていた事自体、凄いことだ。

「それにしても、レナって、強いよなぁ」
「……先輩がいてくれるからですよ？」
「おっと、それは光栄」

おどけた笑みを浮かべながらレナを解放すると、それを見計らったかのようにマユラが声を掛けてきた。

「アインさん、大西洋連邦が退くみたい」
「……さっきの本命攻撃が失敗したからでしょうか？」
「ああ、コードウェル三尉の見立てが正しいだろうな」

戦争っていうか、大なり小なり、争いごとってのは、相手の戦意を喪失させる事が最も重要になるが、今の大西洋連邦軍の場合、当初の予定とは逆な状況に……、コロニーに対する攻撃に失敗した事で、自軍の士気が下がり、反対に敵であるザフトの戦意が際限なく昂ぶっている状況だろうから、速やかに退くのが無難だろう。

……。

それにしても、核を使うか……。

「あの、先輩」
「どうした、レナ？」
「さっきの攻撃が核だとしたら……、大西洋連邦はユニウス条約に違反しているんじゃ？」
「ニュートロンジャマーを無効化するのに、キャンセラーを使っていた場合はそうなるだろうな」

先の条約においては核自体の使用禁止事項はなかったから、核の使用自体は違反ではない。ないのだが、その核を使用できるようにする為の唯一の手段である、ニュートロンジャマーキャンセラーについては軍事利用を禁止すると明文化されているから、無効化するのにキャンセラーを使っていた場合は違反になる。

「アインさん、大西洋連邦がユニウス条約に違反していたら？」
「当然、ユニウス条約加盟国からは、違反行為だと咎められるだろうし、国際的な信用も失墜する。……付け加えると、？あいつが破

ったんなら、俺も破ってもいいだろう？って具合に、各国がユニウス条約を遵守しなくなって、事実上、条約が破棄される事もあるだろうな」

「今の国際的な秩序が崩壊するということですか？」

「あー、三尉の例はちょっと極端な話だけど、そういうことだ」

でもまぁ、自国の都合での国際条約の一方的な破棄なんて、昔からある事なのは確かだし、内々に条約違反な事を隠れて研究したりするのは、ある意味、国家としては健全なんだろうけどさ、流石に、表沙汰にするのが早過ぎるというか……、たった三年の有効期限も守れないって、国家として如何なものか、って思う俺は変だろうか？

「とにかく、これからの世界状況は流動的なものになりそうだから、気を引き締めていくしかないだろう」

三人に対して、そんな事を述べながら、俺はモニターに映るＬ５の様子を眺める。

……はぁ、どうして、こう、皆が皆、好戦的なんだろうなぁ。

59　揺れ動く世界　―新地球連合　VS.　プラント　3

新地球連合によるL5……プラント本国への侵攻と、それに伴なう一連の戦闘……第三次ヤキン・ドゥーエ攻防戦が、新地球連合とプラントとの戦争の行方を大きく左右しそうな展開になっている。

というのも、第三次ヤキン・ドゥーエ攻防戦の二日後、プラント最高評議会議長ギルバート・デュランダルが発した一連の非難声明が、厳しいモノになっていた世界の、特に地球市民の対プラント姿勢を軟化させたのだ。

プラントに対する激しい逆風を凪に近い状態まで落した、奇跡のような非難声明は三つの柱から成っていた。

デュランダル声明を最初から順番に並べて行くと……、先の第三次ヤキン・ドゥーエ攻防戦において、大西洋連邦軍がユニウス条約違反であるニュートロンジャマーキャンセラーを使い、核兵器でプラント・コロニー群を狙った事を非難しつつ、ユニウス条約を簡単に破って見せた大西洋連邦が国家として信頼できない存在である事を指摘。

この指摘から話を展開させて、何故、条約締結時では考えられないような国家に、このように容易く条約を破るような国になったのかという事を、三大国、特に大西洋連邦内部に蔓延っているブルーコスモス過激派と実行組織であるファントムペイン、これらを支援する企業群が、政権や軍内部に入り込んで、圧力を掛けて、コーディネイターを排斥し、それらが保有する権益を手にする為、或いは自企業の利益の為、世界の緊張と対立を煽っているからだ、と、あ

る意味、説得力のある理由を述べる。
　更に漆黒に塗装されたダガーＬから俄かに攻撃を受けてゲイツＲが撃破された後、何もない空間から宇宙戦艦が出現し、アーモリーワンに接近するまでの一部始終が映った、撃破されたＭＳから取り出したと思しき臨場感溢れる映像を公開しつつ、ユニウス・セブン落下テロの前日に起こった、アーモリーワンの襲撃がファントムペインの手によるものであると言い放つ。
　こうしてファントムペインのテロ行為と共に、さり気にファントムペインがユニウス条約違反であるミラージュコロイドを使用していた事を視聴者に印象付けた後、ユニウス・セブンに関わる対応の不手際を謝罪しながらも、先の襲撃がなければ、ユニウス・セブン落下テロへの対応も速やかに行えただろうし、みすみすユニウス・セブンを落下軌道に乗せることもなく軌道より逸らすか、落下しても無害な程に完全な破砕に成功できただろう、とする見解で締めくくっているのだ。

　そ、そうだったのかと、思わず言いたくなるが……、だが、ちょっと待って欲しい。

　サトーの供述で、先のテロリストとザフトの一部が繋がっているって、証言があるんだけど、それに対する見解はどうなってるの？

　ってな、真っ当な疑問は、マスメディアが好む、大きなインパクト……戦争が始まった事や核兵器の使用、更には大西洋連邦のユニウス条約違反によって、扱いが小さくなっているか、そもそも置き去りに……、いや、もっと簡単に言ってしまえば、マスコミから忘れられてしまっている。

おいおい、本当に？権力の監視者？を自任している連中がこれでいいのか、と眉間に皺がよってしまうが……、これもまた、権力者や不祥事を出した企業が自分達の不都合を小さくする為の、過去から変わらないマスコミを上手く利用した一種の詐術である以上、精々、誤魔化されたり、だまされたりしないよう、情報を得る側が眉に唾を塗っておくしかないよなぁ。

で、このデュランダル議長の声明もあって、大西洋連邦が先の戦闘で核を使用する為に、ユニウス条約違反であるニュートロンジャマーキャンセラーを使用したと条約加盟各国が目したことで、先の世界安全保障条約は締結される見込みがなくなってしまった。

しかしなぁ、先の世界安全保障条約や戦争の開始時期にしろ、今回のユニウス条約違反にしろ、戦後世界における一連の舵取りが適切だった事を考えると、老練な大西洋連邦らしくない、実に稚拙な行いというか失策を立て続けたとしか言いようがない。

そう考えると、デュランダル議長が非難声明で述べた事は虚構でもなんでもなく、実は本当の事であり、ブルーコスモスや名指しされた企業群なのかはわからないにしても、どこからか、なんらかの圧力が政府や軍にでも掛かったのかもしれないな。

でなければ、現政権のリーダー……大西洋連邦の大統領であるジョゼフ・コープランドが俄かに狂って、考えなしの？阿呆？になったとしか言いようがないというか……、要するに、これまでの動きとは一線を画する行いを説明する為には、それくらいの……、大西洋連邦政権の背後には黒幕がいるんだよ、なんだってー、みたいなフィクションめいた事を考えないと、不自然すぎるのだ。

いやはや、大西洋連邦が見せている動き……戦後の見事なまでの舵取りとユニウス・セブン落下テロ前後の反応の落差に気づいていしまうと、デュランダル議長の非難声明の信憑性が高まるという罠

……、うむむぅ、流石はデュランダル議長、何かと気位が高いプラントを率いるだけはある傑物っていうことだな。

まぁ、それはともかくとして、これ以上の戦争を望まなかったり、復興を優先したい地球市民の間では、デュランダル議長が名指しで指名したファントムペインを支援している企業群に対する不買運動が広がっていたりする。

そんな不買運動の対象にされたのは、有名所を上げていけば、大西洋連邦経済界では新興のジブリール財閥系企業、北米の老舗であるモッケルバーグ銀行系列、旧英国にあるマクウィリアムズ化学系列、食料品最大手のグロード食品系列といった所だろう。

はぁ、デュランダル議長の話した情報が本当なのか確証が得られていないし、プラントに対する追求も中途半端だというのに、市民の皆様は踊られす……、いや、それだけ、落ち着いて思考するだけの余裕がないのかもしれない。

何しろ、大きな被害を被った先の戦争から、たった二年で、物騒な物が落ちて来るわ、また戦争になるわ、だからなぁ。

◇　◇　◇

１１月２５日。

今日のアメノミハシラは朝から騒がしい事になっている。

Ｌ１宙域で大西洋連邦軍艦隊とプラント国防軍の間で小競り合いが発生し、付近の航路を単独で航行していた地中海同盟船籍の商船が流れ弾に被弾した為だ。

その商船から救難信号を受け取ったＳＫＯが救難救助隊として、Ｌ１外縁部にある補給衛星港から通常兵装と遭難救助用のハガネを一隻ずつ、アメノミハシラからオオツキガタを艦載したトツカ級六番艦ナカを現場に向わせている。またこれに合わせて、即応部隊からもナカツとクロガネ級二隻が出て、アメノミハシラからＬ１までの航路を維持するなど、後方支援に当たっている状態だ。

ウワツもまた、ソコツや残り二隻のトツカ級と共にアメノミハシラ近くに遊弋して、事態の急変に備えているのだが……、同時に、Ｌ１のプラント国防軍に必要以上の刺激を与えない為にも、出張ったＳＫＯからの救援要請がない限りは動けない。

その為、じりじりとした待機時間を送っている……事になっているのだが、当直はレナ達に任せて、ウワツに艦載されているもう一つの独立小隊【パンサー】の待機室を尋ねて、隊長であるタワラ・ジロウ三佐と情報交換や世間話をしていたりする。ちなみに、他のパンサー小隊員は整備に顔を出して機体状況を確認したり、シミュレーターで軽い訓練をしているようだ。

「やー、それにしても、ラインブルグ三佐って、うちのサマリアと同じ歳なのに、落ち着いてるよねぇ」

「そういうタワラ三佐こそ、落ち着いてませんか？」

「あー、なんていうかさ、先の戦争で思う事があって、ちょっと自分的に達観してるんだよね」

「思う事、ですか？」

「うん、そう。ラインブルグ三佐ももう知っているだろうけど、オーブ軍って専守防衛を基本とするタイプだからさ、基本的に受け身的な行動が是になるんだよね」

少しふっくらとした容姿に非常に穏当な表情を浮かべるタワラ・

ジロウ三佐だが、訓練の時は鬼のような形相で苛烈さ溢れる戦闘機動と渋く堅実な戦闘指揮を見せたりする三十代前半の人で、人手不足の宇宙軍が引っ張ってくるまでは本土防衛軍に所属していたそうだ。

「まぁ、その事自体……国防軍の在り方には、別に文句はないんだけどさ。指揮する側までが宣戦布告された状況でも攻撃を受けてから反撃だー、だなんて？馬鹿な事？に拘っちゃってたから、後手に回っちゃったよ。ついでに言えば、トップの見通しが甘かったお陰で、国民が逃げ惑う状態で本土決戦なんて事をしちゃったしね」

……ついでに言えば、結構、毒も吐く。

「本当に、あの日はさ……、酷かったよ。僕もＭ１に乗って迎撃に出たんだけど、戦闘している足元でさ、まだ市民が必死で逃げているんだ」

「ッ！」

「……当然、彼らを守ろうとしたんだけど、僕がいることで逆に攻撃を受けちゃって……ね。つい、さっきまで必死に逃げていた人達がさ、攻撃された後……、爆風が去った次の瞬間にはさ……、動かなくなっていたよ」

巻き添え、か……。

凄惨な地上戦を経験する事も、保安局時代にも民間人が巻き添えになるような銃撃戦もした事がない俺にとっては、想像を絶する、非常に重い話だ。

そんな俺の感慨を他所に、程よい中背の身体を、その背筋を伸ばしながら、タワラ三佐は話を続ける。

「まぁ、そんな風にたくさんの犠牲者を出した本土決戦は、前代表首長が本人にとっての？最後の意地？を見せて、色々と巻き添えにして散った後、オーブが地球連合に降伏することで終わったんだけど……、武装解除させられた僕達は地球連合軍の監督下で、戦闘で滅茶苦茶になった市街を片付ける事になったんだ。……で、その最中に、市民の誰かがさ、僕に言ったんだよ。……私達がこんな目にあったのは、あんた達の所為だ、ってね」

「……それは」

「はは、痛かったよ、あの言葉はさ……。自分達の弱さと己の無力さを、心に、存分に、焼き付けてくれた」

……。

「でも、それと同時に思ったよ。どうして、命を掛けて戦った自分を、感情のままに詰る奴らを守る為に、あんな凄惨な光景を目にしてまで、心を抉られるような思いをしてまで、命を張らないといけないんだろうってね」

……人である以上、誰にだって感情があり、そこから滲み出てくる思いがある、ってことか。

「そう思った直後、愕然としたよ。模範的な士官だろうと思ってた自分が、そんな事を……、軍人として、国と国民を守りきれなかった自分達が悪いのに、市民にちょっと文句を言われた位で反発心を抱くなんて事、信じられなかった。だから、僕は、一度、現役から身を引いてたんだ。軍人として、どうあるべきかを落ち着いて考えたかったから」

「その……、答えは、出たんですか？」

「……僕はさ、ただ、与えられた任務だけを淡々とこなすだけの、

生きている機械になればいいと思ったよ」

……生きている、機械、か。

瞬間、ソキウス達の姿が脳裏を過ぎった。

「心がなければ、人を殺す事から来る呵責も起きなければ、尊厳を奪われて死んで行く人達を見ても、苦しむ事もない。死に恐怖を感じる事もなければ、殺しに愉悦を得る事もない」

心がなければ、感じる為のモノがなければ、か……。

けど、それは、人として、あまりにも寂しすぎる考えだ。

「はは、そんな顔はしないでくれ、ラインブルグ三佐。今現在、命を預かってる部下がいる以上、そんな空ろな事を言っている余裕はないし、ソキウス達の姿を見て、僕の考えが如何に甘かったかはわかってるんだからさ」

ちょっと気恥ずかしげに笑みを浮かべたタワラ三佐の表情には、虚ろなものは見えない。

「それにさ、あの戦争で、人があまりにも簡単に死んで行く事実を見て、思い知らされたよ。人は簡単に死ぬ。ついでに言えば、それは非日常時に限った事じゃなくて、ただ、日頃は鈍感になっているだけで、日常でも死は身近にあるってね」

確かに、タワラ三佐の言う通り、戦争みたいな非日常だけに限らず、日常でも唐突な死は訪れるものだよな。

「そう……、人は、生きている以上、必ず死ぬ。それこそ、貴賤を問わず、何人たりとも、生きているモノは、その運命からは逃れる事はできないんだ。その理由が何であれ、命尽きるのが早いか遅いか、死に至るまで長いか短いか、ただ、それだけの差だけに過ぎなくて、行き着くところは、皆、一緒……」

「……確かに」

「まぁ、そんな訳でさ、その皆が行き着く最期の瞬間までは、自分の思い通りに生きればいいんじゃないかなぁ、って、思うようになったんだよ」

自分の思い通りに生きる、か……。

「……現実は、しがらみが多くて、難しそうですけどね」

「わはは、そうだよね。後、社会との兼ね合いも忘れたら駄目だよね」

タワラ三佐はしばらくの間、相好を崩していたが、俄かに表情を引き締める。

「話を変えるけど、ラインブルグ三佐は本国の動き……、プラントと新地球連合の仲介に関する事は聞いているかな？」

「仲介に関する事ですか？　やっているって事は聞いてますが、進捗については聞いていません」

「うん、なら、教えておくけど、どうも仲介は不調らしい」

……仲介が不調、か。

「その理由は聞いてますか？」

「一応はね。どうも、理念優先のアスハ代表首長がまったく役に立ってない、ってのは、言いすぎなんだけど……、現実、感情優先で、

奇麗事で済ませようとするアスハ代表には、荷が重いみたいなんだよ」

「……宰相のセイラン卿は？」

「裏で動いてるって話だったけど、例の戦闘とデュランダル演説で微妙な事になってるからね、落し所が見つけにくいみたいだ」

「偉い人も大変ですね」

「うん、それはそうなんだけど、これに関しては自分が望んだ事なんだから、頑張ってもらわないと、ねぇ」

うーん、この突き放した言い方を聞くに、タワラ三佐は現代表……アスハ代表首長にも思う所があるのかもしれないなぁ。

その後、件の遭難船がＳＫＯの救難救助隊に助けられたという情報が入るまで、俺はタワラ三佐と、オーブ本国の観光名所やお土産、擬似重力区画……シリンダー部の建設が進んでいるＬ３のタカノアマハラ、試作機が出来たと聞くＢＯｕＲＵの水中型や最近になって第一居住区に開店したという美味しいと噂の和食店について、駄弁り続けたのだった。

60　揺れ動く世界　－新地球連合　VS.　プラント　4

年の瀬の十二月。

ユニウス・セブンの落下から端を発した世界の混乱は、実質的には大西洋連邦と呼べる新地球連合とプラントとの戦争という一つの破局をもたらしたのだが……、いやはや、まったくもって、迷惑な事この上ない。

インド洋では両軍が海軍を繰り出しての断続的な小競り合いが続いているし、ザフトが汎イスラム同盟領内にも人員を送り込んで地熱発電所があるガナルハンって地域で反乱を起こさせて制圧したかと思ったら、大西洋連邦が大洋州連合内の反プラント勢力に武器を供給し、カーペンタリア基地近くや主要都市で頻繁にテロを起こさせて政情不安を引き起こしたりする。

まぁ、でも、これら地球での動きはそこまで迷惑じゃないからいいんだけど、宇宙が、ねぇ。

Ｌ１宙域で三大国軍とプラント国防軍との睨み合いが継続する中、Ｌ４やＬ５近くの宙域でも大西洋連邦とザフトの両軍が互いに小部隊を浸透させて、相手国船籍への通商破壊を行い始めた為、戦闘に巻き込まれるリスクを嫌った中立国船籍の商船が様子見を始めたのだ。

当然の事ながら、地球圏内の航路を行き来する商船が減少した影響は大きく、巨大な資源庫である月からの資源……鉱石や製錬された金属の輸送量は大きく減ってしまい、被災地の建築物やインフラの再建に必要な資材が入手しにくい状況に陥っており、地球各地の

復興を妨げる事に繋がってしまっている。

幸いな事に、こういった世が乱れた状況に強いジャンク屋ギルドが、正規ギルド員であるジャンク屋をデブリベルトに大量に送り込んで資源ごみを回収して、リサイクルしたり、Ｌ３の資源衛星で資源産出が行われている為、必要最低限の供給は行えている状態ではある。

けれども、復興が遅れることによって新たに不満が発生して、結果、世界が更に乱れる可能性があるだけに、早期の解決……戦争の停戦か休戦を望みたいものだ。

◇　◇　◇

１２月１９日。

久しぶりにサハク准将に呼び出された俺は、さり気なく?色?を含んだ流し目を送ってくるアサギの案内で司令官室を訪ねると、准将は執務椅子に座って、大型モニターに映し出されている地球の映像を眺めていた。

「ミナ様、ラインブルグ三佐をお連れしました」

「……ああ、ご苦労だった」

アサギの言葉を受けて、サハク准将はこちらに椅子の向きを変えたのだが……、どうにも、顔色が悪い。

……おそらく、三日前に電撃的に公表された重要案件に関連して、様々な対応に忙殺されていたのだろう。

「お疲れのようですね」
「ふっ、そう見えるか？」
「ええ。妙齢の美女が見せてくれるとしても、伝え聞く、締め切り前の修羅場を何とか乗りきった漫画家やアニメーターのような顔は、一人の健全な男としては、微妙に嬉しくないです」
「くくっ、お前も大概に口が悪いな」
「まぁ、プラント社会で身に付けた後天的なモノですけどねぇ。ですが、真面目な話、流石の准将も、東アジア共和国がユーラシア連邦に加入するとは想定していなかったみたいですね」

そう、重要案件とは、東アジア共和国がユーラシア連邦に参加して、ユーラシア共和連邦と名実ともに変化したということだ。

「落下テロ以前から両国が急速に接近しているのは……、エネルギー分野や食料や労働力の融通、外交分野での協調路線、軍事作戦での相互協力といった事でわかってはいたがな」
「まさか、大国と呼ばれる存在……一大国の権力を政治家が放棄するとは、普通は誰も想像できませんよ」
「ふふ、放棄するというよりも、強制的に放棄させられたと言った方がしっくりくるだろうがな」

皮肉な笑みを浮かべたサハク准将が述べたように、先のテロ被害で東アジアの政治中枢が破壊された時に、権力を握っていた連中の大部分が一掃されたのが、東アジア共和国がユーラシア連邦に参加した最大の要因ってことだろうなぁ。

「しかし、東アジアのお偉いさん達、どうして退避してなかったんですかね？」
「いや、頑丈な地下シェルター位には避難していただろうさ」

「つまり、地下シェルターが耐え切れず、一緒に吹き飛んだって事ですか」
「おそらくはな」

肩を竦めて見せた准将は、表情を引き締めると、更に続ける。

「先の落下テロからしばらくの間、幸運にも難を逃れた中央政府や軍幹部と、各地方を治める地方政府が権力を継承する為に暗闘していたが……、どちらかがユーラシア連邦に今回の話を持ちかけていたのだろう」
「しかし、自分達の権力をある程度は維持する為に、自分の国を潰しますか……」
「さて、当事者ではない我には、そのようにした意図まではわからぬさ。……だが、僅か二ヶ月で、ユーラシア共和連邦という一つの形で結実したということは、ユーラシア連邦もまた、この動きを歓迎したのだろう」
「ユーラシア連邦も、西ユーラシアに中東と、相次いで領域を失って、落ち目でしたからねぇ」

仲間に去られた落ち目な男（ユーラシア連邦）と殴られすぎてグロッキーな男（東アジア共和国）とが、互いに手と手を取り合って、共に頑張って生きていこうと決意する、腐尽くしいじゃない、美しい話だよなぁ、うんうん。

内心で馬鹿な事を考えつつ、サハク准将が疲労している理由と思われる事を俎上に乗せてみる。

「それで、アメノミハシラはどのような対応を？」
「参謀本部の者達に加えて、各艦隊の幹部も交えて話し合いを持ったが、Ｌ１を包囲させていた両国の艦隊をＬ４に引き揚げさせた事もあるし、基本、承認する以外に特にリアクションは起こさぬ事に

した。それに、我から言わせれば、鬱陶しい大国が一つに減ったお陰で、今後の対外対応が楽になったのだからな」

「……なら、何故にそんな疲労を？」

「昨日、東アジア……いや、ユーラシア共和連邦が、自国の主力ＭＳに【ライゴウ】を正式に採用しただろう？」

「ええ、以前、フジヤマ社が開発したライゴウと、その陸戦型でしたよね？」

「ああ、そうだ。もっとも、我が得ている情報だと、現場への実戦配備は今しばらくの時間が掛かりそうなのだが……、赤道連合はこの動きを脅威に感じている」

「……つまり、その対応について、赤道連合の偉いさんと話し合いを持っていたと？」

「そういう事だ。ついでに、新地球連合とプラントとの戦争の影響についても、意見や情報を交換していた」

はぁー、一勢力のトップってのは、本当に、大変だよなぁ。

「准将、無理しないで下さいね？」

「ふふっ、それは余計な心配というものだぞ、ラインブルグ。我がこの職に付き、執務を取っているのは、オーブ氏族であり、五大氏族の一つとしてオーブを率いる首長の一人でもある、我が望んだ事であり、義務であり、誇りでもあるのだからな」

「……先程の言葉は失言でした」

「よい、気にするな」

ううむぅ、サハク准将って、有能な上に、誇り高くて、美人とくる、カッコいい女だよねぇ。

……だというのに、男の影が見えたり、噂が聞こえたりしないの

は、これ如何に？

サハク准将に関わる最大の謎を胸中で弄んでいたら、その本人がこちらをじっと見据えながら、話し始めた。

「さて、今日の本題に入るが……、ラインブルグ、今、何か、不埒な事を考えておらんか？」

「え、何も考えてませんよ？」

ピコピコと、首の代わりに手を口の前で横に振ってみせるが、准将は疑わしげに見つめてくる。

その所為で、司令官室内には、ちょっとした緊迫感が生まれてくるが……、准将が次の言葉を発した事で、ゆっくりと霧散していった。

「んんっ、既にトウランには話を通したのだが……、来月の17日から五日程、オーブ本国に降りる事になったので、お前にも、その随員として参加してもらう」

随員？

俺、事務方っていうか参謀ではないし、警護担当の保安隊や荒事得意な陸戦隊でもない、現役復帰しているとはいえ、予備役の一ＭＳパイロットよ？

「命令とあらば、ですが……、一ＭＳパイロットの俺が随員に選ばれた理由をお聞きしても？」

「何、佐官クラスは基本的にそれぞれの職務で忙しいが、ＭＳ小隊

長しか務めていないお前は他の者よりも手が空いている。付け加えれば、ウルブス小隊もラヴィネンに指揮させれば、通常小隊として機能するという計算もある」

「み、見も蓋もない、理由ですね」

「ふっ、冗談だ、……とも言い切れぬ所もあるが、実際は、総務部と副官部が予備随員を選定した際に、プラント時代に軍務以外の職歴がある、お前が引っ掛かってな」

「あ、あー、確かに、ザフトに組み込まれる前には、行政局や保安局にいましたけど、それが理由に？」

「そうだ。つまりは、それなりの事務能力と警護経験を持つお前が、事務方と警護方、双方の予備人員……便利屋として選ばれたという訳だ」

うへぇ、それって、下手すりゃこき使われるって事だから、あんまり嬉しくない。

「で、でも、こういうのって、普通、それぞれの専門家に任せるもんじゃ？」

「付け加えれば、プラントで白服を務め、戦争を生き抜いた実績から、危急の際の対応や現場指揮も任せられる」

……な、なんか、逃げ口が塞がれた気分。

「最後に最も重要な事だが……」

「事だが？」

「公式行事の際に、蝿避け(男)として、我のパートナーとして使える」

カクーンって、顎が落ちそうになった。

俺が思ってもない言葉に動揺してしまったのが伝わったのだろう、

サハク准将は悪戯っぽい笑みを見せる。

「ほぅ、我のパートナーを務めるのが不満か？」

「い、いえ、そ、それは、光栄なんですが……、准将はいいんですか？」

「何、本音を言えば、我は誰でも良いのだ。……だが、パートナーとして、共に時間を過ごす以上、話をしやすい方が良いのは確かだな」

「あー、そういえば、オーブ生まれはサハクの名に嫌悪するか、萎縮するって言ってましたね」

「ふふ、そういうことだ。残念な事に、宇宙軍内で我相手に萎縮しない相手など、それこそ、我よりもかなり年嵩な幹部連中位しかおらぬ」

確かに、俺が知るコガ艦長だったら、氏族云々があったとしても、サハク准将に大いに噛み付いて、意見しそうな感はある。

「まぁ、当初は我も伝手を使うつもりでいたのだが、生憎と、叢く……先方の都合がつかなくなってな」

「なるほど、それで……」

「ああ、付け加えるなら、お前が黄狼の二つ名を持ち、新鋭のラインブルグ・グループの跡取りという事も加味されている」

「はぁ、いやはや、パートナー一人を選ぶだけでも、氏族ってのは色々と大変ですねぇ」

「何、これも慣れだ」

普通なら悩みそうな事を、何でもない事のように返してくる辺り、サハク准将って、女傑だよなぁ。

まぁ、随員に選ばれた理由はわかったが、公式行事ってなんだろ

う？

「ちなみに、先程、公式行事と言ってましたけど、それって、何ですか？」

「オーブ代表首長であるカガリ・ユラ・アスハと、五大氏族の一つ、セイラン家の後取り息子、ユウナ・ロマ・セイランの結婚式だ」

「えっ、初耳ですが？」

「元より両者は婚約者なのだが……、いや、お前は移住組だったか」

「ええ、知りませんでした」

「ふむ、アメノミハシラに拠点を置くマスメディアやジャーナリストはアスハ家に含む所を持つ者が多いからな、結婚に関する事も落下テロの復旧報道や戦争報道に紛れ込ませたのだろう。……だが、情報に敏なお前が見落としをするとは、珍しいな」

おおぅ、ま、まさか見落としてしまうとは……、芸能人の結婚とでも勘違いしたのかなぁ。

でも、幾ら含む所があるとはいえ、一国のトップの結婚の扱いがそれでいいんだろうか、等と考えが逸れ始めたのが自覚できたので、一旦思考を巻き戻し、改めて、その結婚について考える。

……。

ふむ、ユウナ・ロマ・セイランが宰相であるウナト・エマ・セイランの息子である事を考えると……。

「えと、これってセイラン家が政権奪取する為の……、代表首長を身内に取り込む為の政略結婚ですか？」

「直にそう考えたお前には俄かに信じられない事だろうが……、放蕩娘に惚れ抜いているユウナ・ロマ・セイランが、ウナトの目を掻

い潜って、入念な根回しと下準備をした結果だ」
「あれ、宰相は反対なんですか？」
「ああ、ユウナ・ロマは内政家としては優れているが、軟弱な所がある上、ウナト以上に大西洋連邦との繋がりが太いからな……。少なくとも、反大西洋連邦感情が強く残っている現状においては、アスハ派に限らず、軍や国民から間違いなく反発が生まれてくると予想できるだけに、後、三年は待つべきだと、公人としては反対している。とはいえ、一私人としては嬉しかろう」

だが……、それでいいんだろうか？

「この結婚が為されたら、権力が集中しすぎませんか？」
「ふっ、そのような事、オーブでは今更の話であり、アメノミハシラも似たようなモノだぞ？」
「……そういえば、そうでしたね」

居心地良過ぎて忘れてたけど、アメノミハシラって、サハク准将の独裁であり、軍事政権でもあるんだよなぁ。

でも、前世の独裁とはえらくイメージが違うとはいえ……、結局は、サハク准将っていう個人次第でどうとでも転ぶんだよなぁ。

つい、礼を失して、サハク准将の顔をまじまじと見ていると、准将の顔に怪訝な表情が浮かんできた。

「どうした？」
「あ、いえ、准将って、美人だなぁ、と」
「……何か、悪いものでも食ったか、ラインブルグ」

取り繕う為とはいえ賞賛したのに、奇異の目で見られている事に

ちょっとショックを受けつつ、咳払いをして話を修正する。

「で、では、本国に降りるのは、その結婚式に出席する為ですね」

「オーブの五大氏族である以上、代表主張の婚姻に出席せぬ訳にはいかぬからな。だが、それだけではわざわざ地球に降りるというのも行く甲斐が少ない故に、他にも予定を組んでいる」

「……予定、ですか？」

「ああ、ついでに、赤道連合や南アメリカ合衆国とちょっとした交渉を行うつもりだ」

「俺も、それに同道を？」

「無論だ」

おおぅ、サハク准将と同じペースで仕事するだなんて……、絶対に疲れること、間違いなしだぞ。

ひ、必要以上には働きたくないでござる！

なんて、誰もが望むが辿り着けない理想の日々と、酷使されるであろう現実の五日間を思い、いつものように、心中で密やかに涙する。

「話は以上だが、何か質問はあるか？」

「いえ、特にはありません」

「そうか。では、ラインブルグ、公式行事でのパートナー役、期待しているぞ」

「ご期待に応えられるよう、今から、勉強しておきます」

そんな答えを返して、アサギの先導で部屋を退出しようとしたのだが、追い討ちを掛けるような言葉が……。

「ふっ、式典では、我に、あまり恥をかかさないでくれよ？」
「その時は、成り上がりの息子である俺をパートナーに選んだ事をお恨みください、と言っておきますね」
「くくっ、言ってくれる」

面白そうに笑う准将の姿が、通路と司令官室を繋ぐ扉がスライドして閉ざされた事で見えなくなり、前を行くアサギがポツリと一言。

「……御愁傷様です」

なんだか、チーンって鈴（りん）の音が聞こえてきそうな言葉だった。

……うぅ、給料泥棒の日々はいつになったら、やってくるんだろう。

６０　揺れ動く世界　－新地球連合　ＶＳ．　プラント　４（後書き）

１１／１０／０６　表記修正。

61　愚者の夢想　―オーブ代表首長婚礼　1

C．E．73年が去って、C．E．74年を迎えた。
去年は残り三ヶ月になってから酷い事になっただけに、今年こそは良い年でありますようにと、我が母やオーブ群島で広く信仰されているという火と豊穣の地母神ハウメアに祈っていたのだが……、その祈りも虚しく、年劈頭から新地球連合とプラントとの間で大きな戦闘が起きた。

カーペンタリアに駐留していたザフト地上軍がプラント本国からミネルバ隊等の増援を得て、アイスランド北西部、その地下に存在する新地球連合軍の最高司令部、通称【ヘブンズベース】を制圧すべく、大規模な部隊を侵攻させたのだ。

その一連の戦闘についてだが、傍から見ても十二分に気力が漲っているトウラン司令から回されてきた、観測衛星やノルズからの映像と偵察衛星の画像付きの情報部からの報告書を読むに、新地球連合とザフト、双方共に大きな損害を出す激戦だったようだ。

戦闘の流れを簡潔にまとめると……。

1月3日深夜。
カーペンタリアから南アメリカ大陸南端にあるドレーク海峡を経て大西洋に入っていた二十隻以上のボズゴロフ級と、ジブラルタル基地からザフトの新鋭艦ミネルバに十機程のヴァルファウ……オーブの？ペリカン？と同じような役目をこなす、ＭＳの運搬が可能な

大型輸送機、ザフトの空戦用ＭＳディンの後継機でＭＡ可変型ＭＳ【バビ】の編隊がアイスランドを目指して行動を開始。

それと同時に、Ｌ１宙域でプラント国防軍と大西洋連邦軍との間で断続的な小競り合いが発生する中、地球軌道上に、ザフト艦隊の援護を受けた四隻の降下カプセル輸送艦……この厳重な警戒振りからカプセルの中は降下部隊と思われた……が展開して、カプセル降下に備え始める。

対する新地球連合側も、この段階で、アイスランド近海に防衛艦隊らしい水上艦……ダニロフ級イージス艦十六を展開させ、また、ＭＳ用バックパックを装備できる戦闘機【スカイグラスパー】やジェットストライカーなるバックパックを装備した空戦仕様のウィンダムを迎撃に上げ始めている。

４日早朝。

緒戦として、制海権を巡っての海戦がアイスランドの沖合いで始まったと思われるのだが、海中での戦闘だけに観測衛星や偵察衛星では詳細を観測できず、ただ、十隻のダニロフ級が撃沈された他、ボズゴロフ級が撃沈された証拠と思しき大規模な気泡が二つ程で確認されている。

不確かだが、激しい戦闘が行われた海と同様に、空でもアイスランド上空の制空権を巡って、ザフトのバビ編隊と新地球連合軍の空戦仕様ウィンダム及びスカイグラスパー編隊との空戦が始まる。ここではバビが優速を生かして一撃離脱するのに対して、スカイグラスパーが追随して攻撃を仕掛けたり、ウィンダムが連携射撃で迎撃するという、熾烈な空中戦が繰り広げられたようだ。

そんな空戦と同期させるように、ヴァルファウが対空防備が為されていない海岸線から内陸部へと低空で侵入し、新型ＭＳ……バクゥに似た四足型ＭＳとザク・ウォーリアに似た二足型ＭＳを空挺降下させている。

４日午前。
空挺降下したザフト新型ＭＳ部隊が迎撃に出てきたダガーＬ部隊を蹴散らし、内陸部や沿岸部の防衛施設群を沈黙させて橋頭堡を得ると、ボズゴロフ級が六隻程浮上して、そこから新たなバビ部隊が放出された。
この増援でバビ編隊が一時的な航空優勢を勝ち取って、沿岸防衛に残っていたダニロフ級をも蹴散らすと、更に十隻以上のボズゴロフ級が浮上し、そこからグゥルに搭乗したザク・ウォーリア部隊が発進し始めた。
このザフトの動きに対して、海と空を抑えられた新地球連合は手出しできなかったようで、ザフトの主力部隊が火と氷と風が織り成す大地に上陸する事になる。

そんな主戦場であるアイスランドからちょっと顔を退いて大局的に見ると、新地球連合の大西洋艦隊がグリーンランド沖からアイスランドに向けて動き始めていたり、太平洋艦隊がハワイから出港してカーペンタリアに向けて舵を切っていたり、宇宙でも月のアルザッヘル基地から宇宙艦隊がＬ５方面へと出動していたりする。

４日午後。
ザク・ウォーリア部隊が先に降下して上陸を支援していた空挺ＭＳ部隊と合流し、ヘブンズベースの出入り口があると思われる地点へ向けて、進撃を開始。
これに対して、新地球連合側も各所に据えられたトーチカや隠蔽された砲兵陣地からの砲撃の他、塹壕に隠れたリニアガンタンク部隊やパワードスーツ【グティ】を装備した装甲歩兵部隊の支援を得た、ウィンダムやダガーＬの部隊を展開させて、本格的な応戦を開始する。
結果、実弾やミサイル、更にはビームといった凶悪なモノが戦場

を飛び交う中、ＭＳ同士の激しい機動戦が展開され、一進一退という言葉がしっくりと来るような戦闘が行われたようだ。

この辺りは、脚部を破壊されて擱座したダガーＬの影からザク・ウォーリアに向けて携帯小型ミサイルを撃ち出すグティや随所をレールガンで穿たれつつもリニアガンタンクを蹂躙する新型四足ＭＳ、墜落してきたスカイグラスパーに突っ込まれて吹き飛ぶ砲兵陣地、沈黙したと思われていた海岸砲台が火を吹いて撃沈されるボズゴロフ級、空中衝突で相打つ形となり共に墜落するバビとウィンダムといった姿が、アメノミハシラ系マスメディアで放送されたり、メディア紙の一面に写真が掲載されたりしていたから、本当にどれだけの激戦だったかがよくわかったよ。

しかし、あの過密な火線溢れた戦場に出向いて、あれだけの臨場感溢れる映像や写真を撮るなんてなぁ。確か……、撮影したのは、ジェス何とかってフリージャーナリストだったと思うけど、いやはや、世の中、命知らずがいるもんだ。

っと、ちょっとだけ脱線してしまったが、この膠着した状況に業を煮やしたのか、ザフトは最精鋭部隊であるミネルバ隊を投入する。

このエース部隊の参入は大きく、例の？トリコロール？……インパルスという名のＭＳを中心に、赤色の新型ＭＳと鮮やかな紅色のザクに似た、先だって空挺降下した例の新型ＭＳ……、こいつが鮮明に映し出されていたので気付いたのだが、これがまた、前世の某ＳＦアニメで見た覚えのある？グフ？にとてもよく似ていたので、とりあえずはグフ（仮）として……、とにかく、瞬く間に、ミネルバ隊がウィンダムやダガーＬで構成されていた前線をズタズタに引き裂いた事で、形勢はザフト側に大きく傾いた。

これを押し込むチャンスとみたのだろう、ザフトは更に地球軌道

上から降下カプセルを投下させており、これで勝敗が決まるかと思われたのだが……、ヘブンズベースから発射された、空を焼く強烈な光線が降下カプセルの大部分を吹き飛ばした事で、再び、流れが変わってしまった。

しかも、一気に引き戻された流れを後押しするように、例の？ドラ猫？部隊が出現してミネルバ隊を抑えたり、これもまた、さっきのグフ（仮）と同じく、？やれせはせん？の某中将が乗っていたような、漢のロマン臭溢れる巨大なＭＡ可変型ＭＳが出現し、？破壊の王？の如く、前線のザク・ウォーリアを駆逐したのだ。

４日夕方。

再び戦闘が泥沼に陥るかに思われたが、ザフト側が新地球連合の大西洋艦隊が増援に向っている事を察知したらしく、ミサイルによる後退支援攻撃を開始したボズゴロフ級へと順次撤退を開始する。

この際、殿軍として居残ったミネルバ隊が、？破壊の王？や？ドラ猫？隊に打撃を与えて撤退に追い込んだり、インパルスがウィンダム相手に無双してみせたり、赤の新型ＭＳが追撃を仕掛けた空戦仕様ウィンダムを多数落したり、紅グフ（仮）がウィンダムの一群を鞭打って痺れさせて動けなくしたりと大活躍した事で、ザフト側は大きな損害を受ける事なく速やかな撤退に成功しており、また、そのミネルバ隊自体も損失機を出すことなく帰還している。

……しかし、最後の戦闘だけ見ると、なんだか、ウィンダムがひ弱そうなＭの人みたいに感じるのは気の所為かって、げふんげふん、いやいや、これまでの内容を見ると、ミネルバ隊が強すぎただけだよね、うん。

そんな訳で、ザフト地上軍による新地球連合軍最高司令部への直接侵攻は失敗に終わり、戦争の行方は未だに見通せない情勢だ。

◇　◇　◇

1月17日。

サハク准将の随員として、地球はオーブ本国へと降りる事になり、レナに小隊を委ねて、サハク家が所有する専用往還機でアメノミハシラを出発した。

アメノミハシラという一勢力のトップが動くだけに、オーブ国防宇宙軍第一宇宙艦隊第一宇宙戦闘群第一戦隊……まぁ、要するに第一艦隊のトツカ級四隻が護衛に付く中、静止軌道から地球軌道に、地球軌道から大気圏突入を経て、オーブ近海……カグヤ島沖の指定着水海域へと順調に降りていき、無事着水と相成った。

その後、海域近くに待機していたオーブ国防海軍に属するタグボートに曳航されて、国防総省のあるオノゴロ島の軍港へ入港し、俺はオーブ本国の土を再び踏む事になる。

保安隊と陸戦隊から選抜された護衛担当がしっかりと警護する中、国防総省が手配したエレカーに分乗して、移動すること半時間、門衛が敬礼する大きな石造りの門を抜け、大きなアンテナ塔がある頑丈そうな建物に入った。

これまた実家の本社ビルに雰囲気が似ている、コンクリートで頑丈に作られている建物、その正面玄関で止められた車から降りて、職員や士官の出迎えを受ける中、サハク准将に続く形でぞろぞろと他の随員達と共に玄関入り口を抜けると、エントランスホールの中央で、飾緒が付いた白のオーブ軍服を来た、紺色の髪を右から左に撫でつけるという、如何にも軽薄と言う言葉が非常に似合いそうな男が、幾人かの士官と共に待ち受けていた。

その自然と気障な感を受ける男とサハク准将とが話し始めたので、

道中、座席が隣になったのが縁で言葉を交わすようになり、今も隣を歩いている情報部のイシカワ三佐……どこにでもいそうな、極々普通の容姿に、極々普通の中肉中背という体格をした三十路男に小声で問い掛ける。

「……イシカワ三佐、あれ、誰です？」

「あれが今回のセレモニーで主演男優を務める、ユウナ・ロマ・セイランさ」

そのちょっとした毒を含んだ言葉を受けて、なんていうか、三文役者かホスト崩れ、場末でプレイボーイを気取っている成金の兄ちゃんみたいに、大仰なアクションでサハク准将の長い髪を褒め称えているユウナ・ロマ・セイランを改めて見つめるが……、どこにでもいるチャライ男にしか見えない。

「なるほど、？アレ？が、未来の宰相候補、ですか」

「そう、？アレ？がさ」

二人して？アレ？呼ばわりするように、内政家として父である宰相を補佐してきたという事実を知らないと、侮ってしまいそうになるな。

「気を付けろよ、ラインブルグ三佐。奴はその見かけによらず、中々に狡猾な男だ」

「つまり、政治家として有能って事ですね」

「……そういうことさ」

イシカワ三佐はふっと微かな笑みを見せるが、直に顔を引き締めると、周囲にいる者達に気取られないようにするだろう、まるで独り言を呟くように、極自然に、考えさせられる言葉を吐いた。

「だが、人って奴が、存在の表面や仕草に気を取られるのもまた、事実だ。……今更かもしれんが、今回のセレモニーを歓迎している者は少ない」

逆に言えば、歓迎していない者が多いとも受け取れる言葉だけに、セレモニーの際に不穏な動きをする者が出てきても何らおかしい事ではない、って事を言いたいんだろう。つまりは、事が起きた場合を想定して、腹を据えておけって忠告か、色々と対策を立てておけって助言ってところか。

微かに顎を引くことで、言葉の中に込められた意を汲み取った事を示しつつ、口では表面的な言葉を返す。

「確かに、先の被害からの復旧や経済の立て直しもあまり進んでいないみたいですからねぇ」

「まぁ、そういうことなんだが……、このセレモニーで景気に弾みが付くって事もありえるさ」

イシカワ三佐はプラント時代保安局に世話になったベテラン局員や元課長が仕事の折に稀に見せていた、ニヤリ笑いを浮かべて見せると、今度は軽薄な様を装い、声音を大きくして、更に続けた。

「そう、今回の結婚で、アスハ代表首長はユウナ・ロマ・セイランっていう強力な駒を得る事になるんだからな。アスハ代表は、元より素晴らしかった施政を、更に素晴らしいものに進化させて、今回の被災からの復興を成し遂げ、このオーブをその名の通りに、更に輝かせてくれる事は間違いないだろうさ。うんうん、これでオーブも国民の皆様も安泰だよなぁ」

おおぅ、やり方はあざといが……、確かにイシカワ三佐が言っていたように、出迎えに来ていた職員や士官の中に、目を険しくした連中がいるな、って、本当に、かなり数が多いな。

あー、こりゃ、早急に対策を……、サハク准将の安全を確保する為にも、事が起きた際の担当と手順とを警護担当と話し合う必要があるなぁ。

「お、ラインブルグ三佐、移動するようだぞ」
「ええ、俺達も急ぎましょう。……俺も、警護担当と早急に打ち合わせが必要になりましたしね」
「ほほ～、付いたばかりだというのに、早くも仕事か？　こりゃ、俺も見習わないといかんなぁ」

飄々と言ってのけるイシカワ三佐の、ユウナ・ロマ・セイランよりも遥かに洗練された役者振りに、つい失笑してしまう。

「ええ、どうせなら、俺の仕事も手伝ってください」
「ああ、本島……オロファト市内を巡って、色々と？土産？を買った後だったら、大いに手伝うよ」
「なら、？観光？ついでに、俺の分のお土産も買ってきてくださいよ。ハウメアの護り石を三人分」
「……はぁ、色男だよねぇ。羨ましいっていうか、そんな？けしからんこと？していたら、ハウメア様から天罰が落ちるよ？」
「あはは、豊穣を司る大地の女神様だけに、産めよ増やせよで、そんな事をしませんよ」
「いやいや、火を司っている事も忘れたら駄目さ。情熱と嫉妬の炎で焼き尽くされかねないよ？」
「じゃ、その分は知り合いに譲っておきます」

アーガイルにヒビキ、悪いがそれらの成分に関しては俺の分も犠牲になってくれ等と、実に自分に都合の良いことを考えながら、周囲からの視線が厳しいエントランスホールを後にした。

やれやれ、セレモニーで何事も起きなかったらいいんだけどなぁ。

62　愚者の夢想　―オーブ代表首長婚礼　2

1月19日。

今日、執り行なわれる一つのセレモニーを前に、首都オロファトがあるオーブ本島……ヤラファス島は、いや、オーブ連合首長国を構成する群島は、密やかなざわめきに満ちている。

とはいえ、そのざわめきというのも、お祭り騒ぎ的な物は極々一部だけで、大部分は、こんな大変な時期に結婚式するなんてとか、ああ、俺のカガリ様が汚されるとか、これで景気が上向くのかなとか、ユウナ・ロマ禿げろとか、大西洋連邦に尻尾を振るセイランの薄汚い陰謀だとか、カガリたんにビンタされたいよはぁはぁとか、これってセイラン家が代表首長を簒奪する為の第一歩じゃないのとか、あのお転婆姫が私より先に結婚するなんて、嘘よ、夢に決まってるわよねとか、とにかく、マイナス的な意見が大勢を占めている結果のようだ。

これも、一昨日、昨日、今日と三日続けてオーブ各地を？観光巡り？してきたらしいイシカワ三佐が話したことだから、まず、間違いない。

ちゃんとハウメアの護り石を三つ……それも、御丁寧に、赤、青、白だった……買ってきてくれたイシカワ三佐が他に話した事を付け加えれば……、カグヤ島のとある街の広場で大規模な結婚反対の集会が開かれていたり、オロファト市街で色んな宗教家が辻説法をしていたり、一部の軍部隊が警護任務をサボタージュしそうな気配があったり、国家元首の結婚式という一大セレモニーがあるという事

で、操業が停止されているはずのモルゲンレーテ本社工場に、いつものように大量の資材が運び込まれたり、同じくモルゲンレーテの、先の侵攻での反省を踏まえ、アカツキ島にも新しく建設された工場でも業者の出入りが多かったり、警備する治安機関の人手が足りておらず、

一国の元首の祝い事にしては警護が甘かったりと、とにかく、今日は常日頃のオーブとは違う状態である事を示す出来事が多いようだ。

……ううむぅ、これは、本当に、何かが起きても、おかしくはないような気がしてきた。

本当に、早いうちに警護担当責任者と事が起きた際の対応……一番すぐ近くにいる俺が？肉の盾？を務めている間に、警護班がサハク准将の回りを固め、危機対応班が脱出手段と脱出ルートを確保して、安全な場所まで連れ出すって、打ち合わせっていうか、手順の確認をしておいて正解だったなぁ。

そんな事を結婚式が行われるハウメア教の古神殿へと移動する車内で考えていると、本日は公式行事という事もあって、オーブの正式軍装である白い制服を身につけてはいるものの、常の黒いマントは身に纏っているサハク准将が話しかけてきた。

「既にイシカワから聞いていると思うが、やはり市井の者は此度の結婚を喜んではおらぬようだな」

「どうやらそのようですね。まさか当日に結婚反対の大規模集会まで開かれるとは思ってもいませんでした」

「それだけ、放蕩娘……カガリが国民に愛されているという事であり、ユウナ・ロマが好かれていないという事でもある」

「まぁ、ユウナ・ロマ・セイランが有能なのは実績が物語ってますけど、確かにウザイですよね、あの人」

「ふっ、正直な奴だ」

准将は軽やかに笑っているが、あの人、傍らで見ているだけでも本当にウザイんだわ。

「でも、あれだと、人気が無いのもわかります」

「本来はそこまで悪い奴ではないのだがな。……奴も焦っているのだろう」

「焦っている？」

いったい、何に？

「ああ、奴とカガリは婚約者であるとはいえ、それは親が決めた事に過ぎぬ。代表首長の絶対的な権限を持ってすれば、話をないものとできなくもないのだ」

「へぇ、そうなんですか？」

「うむ、それだけ代表首長の権限は強いということだ。……もっとも今回の場合だと、カガリにユウナ・ロマやウナト・エマの協力なしで、国を動かせるだけの力量があれば、あるいは、それに成り代われるだけの存在がいればの話になるがな」

あ、あー、今の代表首長には無理かもしれんなぁ、って、なら、何故に焦るんだ？

「なら、何故、焦る必要があるんですか？」

「……む、そういえば、カガリの内情については話していなかったな」

「ええ、聞いてません」

「ふむ。……まぁ、お前なら構わぬだろう」

何が構わないんだろうと、首を捻っていると、更にサハク准将は話を続ける。

「……実はな、カガリにはユウナ・ロマではなく、別に相愛の男がいるのだ」

「ちょっ！　ええぇっ！　い、今から結婚式なのに！　す、凄く、スキャンダラス臭がプンプンとっ！」

「何、そこまでドロドロとしたものではない」

その一言で、ちょっと頭が冷えたが……、ドロドロとしたものではないとすると？

「あー、では、どのような？」

「先の戦争の際、カガリが連れ帰った男でな。互いに好きあってはいるが、立場上、踏み込んではいないようだ」

「プラトニックって奴ですか……。それで、アスハ代表が連れ帰ったって事は、例の一味？」

「そういう事だ。だが、中々に面白く、悪くない男を拾って帰ってきたのだぞ？　本当に、その点だけは評価しても良い」

「悪くない男？　……詳しく聞いても？」

「……ふふっ、お前もその男と多少の縁があるな」

縁？

「その男の名はアレックス・ディノ。現在、カガリの警護官を務める男だ」

「……あ、ああ、覚えてます。アスハ代表の警護官だったコードウェル一尉と交代して、結果的に一尉が宇宙軍に移る切欠になった男ですよね」

「そうだ。……そして、本来の名をアスラン・ザラともいう」

……吹いた。

「ふふ、中々のサプライズだったようだな」

「げほっ、ごほっ」

「……しかし、その様子だと、ザラの一人息子の生存を知らなかったのか？　ザフト中枢に近かったのなら、知っていてもおかしくはない情報のはずだが？」

「いえ、初耳です。……停戦後は、ザフトを円満に除隊する為にも、できる限り、得る情報を制限してましたからね」

「ふむ、そういうことか」

なるほどなるほどと、納得したように何度も頷いているが……、なんとまぁ、ザラ家の一人息子は生きていたのか。

……でも、ザラ夫人は知っているんだろうか？

むむむっ、ザラ夫人に知らせるべきか知らせないべきかと内心で悩んでいると、話を続ける為だろう、准将が更に口を開いた。

「それで、そのアスラン・ザラだが、先のプラントでの一件でも常にカガリの傍を離れず、その身に怪我一つ負わせずに守りきってカガリとオーブへの忠誠を示した事もあって、素性と事情を知る者の間では、これは悪くないと組み合わせだと囁かれ始めているのだ」

「……プラントの最高評議会議長として一大戦争を指導し、負けるギリギリの所で踏み止まって停戦に持ち込み、講和までの道筋を切り開いて独立を勝ち取った男の息子だけに、ですか？」

「そうだ。……どのような分野でも遺伝というものが影響する故にな」

「努力や教育……経験でカバーできる事でもありますけど、確かに

それも一面の事実ですね」

まぁ、どれだけ才能があったとしても、本人の努力が足りなかったり、周辺の環境が悪かったりしたら伸びないし、逆に言えば、才能がなかったとしても、本人の努力が十全で、周辺の環境が整っていたら伸びるはずだ。

っていうか、人は様々に経験を重ねながら成長していくと、自然、その身体と記憶に年輪の如く、経験が蓄積されていくのだから、才能がなかったとしてもある分野で大成できることだってあるはずなのだ。

そして、身体と記憶が蓄積した経験から、その何かに適した存在を生み出す為に、あるいは対応できるようにする為に、遺伝という形で次代に引き継がれていく事が、本来、人が……生命が数え切れぬほどに繰り返してきた、進化の歴史でもあるはずだ。

「ふっ、やはり、才があろうと、磨かねばいつまでもくすんだままであり、才がなくとも、磨き続ければ輝きを得る事もある、ということだな」

「ええ。磨かれる過程で様々な価値が付加されていって、ただ、それだけにしかないような、唯一ってものが得られるんでしょうね」

……あれ、なんでこんな話に？

「……意外とロマンティストだな、ラインブルグ」

「そ、そういう准将こそ」

なんとなく気恥ずかしさを感じて黙ってしまうと、准将もなんとなく顔が赤くなっているような？

車内に微妙な沈黙が訪れたので、それ以上のアスラン・ザラについて聞く事ができず、乗っていた車もまた、本日のメイン会場であるハウメア教の古神殿に到着したのだった。

◇　◇　◇

ハウメアの古神殿はハウメア火山の山腹に傾斜を利用して造られているらしく、山から流れ出た水が流れ落ちている滝の手前に、神殿の中心というべき本殿が据えられ、そこに至るまでの参道が麓から段々に続いている。

また、古神殿自体もそうなのだが、参道にしても一定の大きさの石を器用に組み合わせたものであり、これを造った昔の人は頑張ったんだなぁと思わされる逸品だ。

でも、誰なんだ、いったい……、一種、世界遺産にでもなりそうな古神殿にＭＳ……Ｍ１アストレイを並べるなんて事を決めた奴は？

こんなもん、ＭＳなんて使わずに、儀仗兵を出せば良いだけの話だろうに、それともあれか、見栄え重視なのか？

何ともいえない顔で、神殿の中程で屹立する数機のＭ１アストレイを眺めていると、それに気付いたサハク准将が声を掛けてきた。

「ラインブルグ、露骨に呆れた顔を見せるな」

「これは失礼しました。……しかし、神殿にＭＳを並べるだなんて、この演出を考えた奴は、あれですね。自分の権力を誇示したいか、スタイリッシュを追い求めたか、どちらかですね」

「強力な戦力を有している事を国民や他国に誇示する事も、国事行事には重要な事なのだが？」
「いや、やり方って言うより、見せ方の問題ですよ」

少なくとも、ＭＳは隠しておくか、気の利く人間なら気付くような場所にそれとなく置いておく位の方がいいと思うんだけどなぁ、等と考えつつも、必要ないだろうが、一応はサハク准将をエスコートしながら、神殿の本殿に向う。

サハク准将の後方や周囲を警護班がそれとなく固める中、長い階段を上って行くが……、広大な神殿の各所には、警備担当らしき治安当局の職員や軍属が持ち場のチェックをしていたり、テレビ局の中継スタッフらしき人間が走り回っていたり、Ｍ１アストレイの足元に整備員とパイロットが立ち話をしていたりと、中々に賑やかだ。

危険な存在がないかと、周囲へと視線を配りながら、准将に一つ疑問に思っていた事を聞いてみる。

「そういえば、官邸での祝賀披露会には出席しなくてもいいんですか？」
「ふっ、我が行けば、周囲が花嫁以上に気を使う故にな」
「……あー、なるほど、それでですか」
「ああ、主役より目立っては、カガリやユウナ・ロマの面子を潰す」
「なんとも、難儀な事ですね」
「構わんさ、見せ掛けだけのパレードに参加するというのも、性に合わん」

はー、やっぱカッコいいわぁ、この人。

そう感じたところで、最上段である神殿の本殿がある場所に到達した。

「……ふむ、ここまで見た限りだと、警護も形だけは整っているようだな」
「みたいですね。……かなり、やる気がなさそうに見えるのが問題ですけど」
「？我らの姫様？が？ぼんぼん息子？に奪われるのだからな、そうなるだろう」

准将の的を射た発言に苦笑していると、本殿から白い貫頭衣を身にまとい、赤いストールを首に掛けた老境の司祭が姿を現した。そして、その老司祭はサハク准将の姿を認めると、ほぼ白くなった髭に隠れてはいるが、口元に笑みを浮かべたようだ。

「おお、これは、ミナ様ではございませんか、お久しゅうございます」
「ああ、久しいな、長老。此度はカガリが世話になる」
「いえ、喜ばしい事です。ハウメア様もお喜びでしょう」

儀礼的なやり取りから会話が始まる中、内容に耳を傾けつつも、念の為に警護班に倣って周辺を警戒する。

「それに亡きウズミ様も、今日というカガリ様の晴れの日を、お喜びのはずです」
「……そうかもしれぬな」

あー、アスハ代表の内情を知ってると、そういう反応になるわなぁ。

「時にミナ様」
「む、何だ？」

「ミナ様には御良縁がございますかな？」
「ふふっ、今の所、我はそういった事を考えておらぬよ。サハクの名を守るのも、養子を取って継がせるという手もあるのでな」
「なるほど、それもまた一つの道でしょう。……ですが、人生は長い。時に、ハウメア様のお導きがあるやもしれませぬ」
「その時はその時だな。我も長老の世話になろう。……故に、身体をいとえよ」
「……勿体無いお言葉です」

心底から嬉しそうに言葉を返すと、その老司祭はサハク准将に頭を下げ、神殿の中に戻っていったが……、厭味を感じない、中々できた人だったな。

「ふむ、折り良く、長老への挨拶も済んだな。後は主役の二人が着くのを待つだけだが……」
「……まだ、時間もありますし、警備本部で休みますか？」
「いや、それでは警備の者達が仕事になるまい。……たまに、本物の自然の中で構想を巡らす事も一興か」

サハク准将のその言葉を受け、警護班のリーダーである陸戦隊のオーバ三佐……その厳つい顔を持つ中年の偉丈夫と視線を交わすと、准将から見えない事を良い事に、少々呆れた顔で？似合わんよ？的に肩を竦めてみせた。

くぅっ、保安局時代に鍛えられた顔面制御術が、こんな所でまた役に立つとはっ！

「ふむ、オーバ」
「何でしょう、司令官」
「警護班が安全を把握した範囲はどれくらいだ」

「このハウメア神殿全域をクリアーしております」
「そうか。……では、近場を散策をする。お前達には負担を掛けるが、よろしく頼むぞ」
「了解です」

そのオーバ三佐の返事と共に、サハク准将が歩き始めたので、俺も随行して、話し相手になるか、身辺警護に務める事にする。

……それにしても、情報部のイシカワ三佐といい、陸戦隊のオーバ三佐といい、アメノミハシラっていうか、オーブ宇宙軍って、結構、変な奴が多いよなぁ。

むー、あれかな、他の四軍だと上手くいかなかった連中……規格外な連中ばかりが放り込まれた結果なのかねぇ。

興味深い事だよなぁ、だなんて考えを深めつつ、主役が到着するまでの時間を神殿内や流れ落ちる滝近くの散策で過ごしたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9850j/

えっ、その種って……おいしいの？

2011年10月10日09時29分発行